

Re. ドキドキ&サイエ
ンス

yu—ki.S

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「てえんさい科学者の卵、桐ヶ谷晴夜が来たこの町に正義のヒーローが現れた。

その名は仮面ライダー！」

「自分の事を天才の卵と言うけど、ただの科学バカだろ」

「うるさいよ！そう言うこいつはトランプ王国でボコボコにやられた上城龍牙！」

「俺はボコボコにやられてねえよ！」

「そう言っつてワンワン泣いていたから、そんな奴を心優しくい俺は拾ってしまったのだった」

「泣いてねえし!!」

「ツツコミ遅いんだよ」

「——この話はキュアハートこと 相田マナ 率いるプリキュア達と！」

「——俺たち仮面ライダーが織り成す、愛と平和（ラブ&ピース）の物語！」

前書き

原作者のユート氏に感謝！

原作『ドキドキ&サイエンス』もよろしくお願いします。：<https://www.pixiv.net/novel/series/1055265>

続編『last science!』もよろしくお願いします。：<https://www.pixiv.net/novel/series/1327510>

目次

設定	1
第1章『ハート&ビルド編』	
プロローグ	10
第1話 ベストマッチな奴とハートの誕生!	18
第2話 バレちゃった!? 仮面ライ	
ダーとプリキュア	40
第3話 誕生!ダイヤモンドなプリ	
キュア	76
第4話 ポカポカ!キュアロゼッタ登	
場!!?	101
第5話 うそ!あの子がキュアソード	
!?	132
第6話 真琴の正体とオムライスと料	
理の特訓?	160
第7話 ギリギリの戦い!そして、現	
れるもう一人のライダー	188
第8話 バースデイ!不思議な赤ちゃ	
ん	220
第9話 アイちゃん、学校に行く	
256	
第10話 ドッキリ注意報!二人の転	
校生	289
第11話 プリキュアの新たな力!そ	

して、スタークの正体：――	319	第17話 レジーナの迷惑な一日	
第12話 偽りのヒーロー、ビルドの進化！――	358	第18話 三人の幼馴染への帰還、現れる黄金のライダー！――	538
第2章『ロイヤルクリスタル&レジーナ編』		第18・5話 超バトルSS・兄貴への恩返し！誕生クマテレビ！――	559
第13話 唐突！マナ、弟子を取ります――	384	第19話 狙われたクリスタル	606
第14話 ロイヤルな発見!? 王女の手がかり――	415	第20話 最後のクリスタル――	637
第15話 シャウトせよ！六花の秘密	442	第21話 ジョチューゲーム、そして語られる真実！――	663
第16話 アイドルの日々。そして、クローズ覚醒！――	468	第22話 クリスタルを追って雪山へ	699

第23話	突入！トランプ王国と禁断 のアイテム！	729	第29話	ジャッジせよ！六花の気持 ち	912
第24話	起動するアイテム、その名 をハザードトリガー！	758	第30話	新たな敵と新たなライダー ！	938
第25話	ハザードは止まらない！現 れる新たなプリキュア！	791	第31話	タイムリミットとの勝負！	
第3章『エース&ハザードトリガー編』			第32話	サマーエンジョイ！お祭り で大騒ぎ	995
第26話	新たな誓い！ビルドとハ ト！	816	第33話	パートナーとしての役割	
第27話	プロとしての覚悟！		1029		
847			第34話	最後の試練、逆襲のラビッ ト!!?	1056
第28話	登場!!? ジコチューヒロ イン！	880	第35話	最大の危機！逆転を呼ぶの	

は、奇跡のパッドとタンク！ — 1110

第4章『エボルト&もう一人のビルド編』

第36話 文化祭で大パニック！

1153

第37話 明かされる真実…燃えろク

ローズ！ — 1186

第38話 お泊り会でグリスの心火

1221

第39話 最凶のライダーが現れる

1252

第40話 ほとぼしるマグマ！命懸け

の变身 — 1278

第41話 危ういアイデンティティ！

自分の存在する理由… — 1304

第42話 エボルトの野望!!? 計画

の真相 — 1345

第43話 最恐のフェーズ！ — 1375

第44話 兄と弟…ジーニアスは止ま

らない！ — 1405

第45話 アイちゃんがジコチューに

！ — 1445

第46話 再会と槍…変化するボトル

— 1485

第47話 プログラムせよ！真琴の新

たな歌…決意の時 — 1532

第48話 夢を守るため、ゼロ度の約

	束！	1578			
	第49話 祝おう！プライムで特別な				
	誕生日	1623			
	第50話 四大ライダー対エボルト：				
	最期	1660			
	最終章『LOVE&PEACE編』				
	第51話 新たなるメモリー？涙の授				
	業参観	1699			
	第52話 クリスマスの二人	1730			
	第53話 悲しき決着！エース対マツ				
	ドローグ、明かされる全ての過去				
1781					
第54話	明日へのビルド、運命を賭				
	けた最終決戦！	1835			
	第55話 王様を救え！ハザードの真				
	の力	1868			
	第56話 光と闇を統べる二本のボト				
	ル！そして：	1908			
	第57話 二人が明日を創る最後の決				
	戦！BE THE ONE！	1955			
	最終話 ベストマッチのコンビは永遠				
	に！	1986			
	ドキドキ&サイエンス劇場版				
	ビルド&NEWSTAGE 2				
	thレジェンドライダー	2009			
	未来へと繋ぐ結婚式	2103			

ドキドキ&サイエンス!last science編

- | | | |
|------|---------------------|----|
| 第0話 | ビルド&NEWS TAGES | 3 |
| 第1話 | 動き出した陰謀 | 22 |
| 第2話 | 壊された平和 | 27 |
| 第3話 | 追われるビルド | 32 |
| 第4話 | クローズへの卑劣なパルロの | 37 |
| 第5話 | 破滅を呼ぶライダー降臨 | 42 |
| 第6話 | もう一人のビルドの世界 | 47 |
| 第7話 | 受け継ぎしビルドの意思 | 52 |
| 第8話 | 帰還の天才少年 | 57 |
| 第9話 | 決戦前夜…それぞれの覚悟 | 62 |
| 第10話 | 引き裂かれるコンビ…ビルドVSクローズ | 67 |
| 第11話 | お前じゃなきやダメなんだ | 72 |
| 第12話 | 想いを込める…輝け、ク | 77 |

ローズの光！

2696

第13話 安っぽい救世主…最後の決

戦へ

2729

第14話 二人の最後の変身！二人は

BE THE ONE！

2762

最終回 訪問者…未来へ

2798

特別編 仮面ライダークローズ&春の

カーニバル！前半戦

2828

特別編 仮面ライダークローズ&春の

カーニバル！後半戦

2893

特別編2 仮面ライダークローズ&みん

なで歌う♪奇跡の魔法！前半唱

2988

特別編2 仮面ライダークローズ&みん

なで歌う♪奇跡の魔法！後半唱

3082

ドキドキ&サイエンス！After s

tory編

仮面ライダークローズ&キュアソード

！最高と最凶のタッグ！ その1

3220

仮面ライダークローズ&キュアソード

！最高と最凶のタッグ！ その2

3246

仮面ライダークローズ&キュアソード

！最高と最凶のタッグ！ その3

3282

仮面ライダークローズ&キュアソード

！最高と最凶のタッグ！ その4

3365

仮面ライダークロース&キュアソード

！最高と最凶のタッグ！ その5

3400

仮面ライダーグリス&キュアロゼッタ

！不滅の心火！ その1

——

3418

仮面ライダーグリス&キュアロゼッタ

！不滅の心火！ その2

——

3449

仮面ライダーグリス&キュアロゼッタ

！不滅の心火！ その3

——

3492

仮面ライダーグリス&キュアロゼッタ

！不滅の心火！ その4

——

3525

設定

概要

『仮面ライダービルド』と『ドキドキ！プリキュア』によるクロスオーバー作品。

仮面ライダービルドに変身する少年・桐ヶ谷晴夜と、キュアハートに変身する相田マナが仲間達と織り成す、悪の組織と戦う勇姿を書いた物語。

本作は主に『ドキドキ！プリキュア』本編をベースとしているが、所々『仮面ライダービルド』の物語が盛り込んである。他にもTVシリーズやオールスターズなどの劇場版が入っている。

本作品は仮面ライダーシリーズで言う所の『リ・イマジネーション』の様な世界となっているためか、仮面ライダービルドが原作主人公の桐生戦兎でなくなっている。

登場人物

● 桐ヶ谷晴夜（14）
きりがやせいや

仮面ライダービルド

元ネタのキャラ：桐生戦兎（仮面ライダービルド）

(イメージ)CV. 内山昂輝)

天才科学者の卵を名乗る、驚異的な頭脳を備えた本作品の主人公。

その正体は「仮面ライダービルド」であり、フルボットの力と自ら開発した武器やアイテムを駆使して怪人「スマッシュ」との戦いを繰り返していった。しかし、転校先で出会った相田マナとの出会いを境に、謎の怪物「ジコチュー」とも戦うことになった。

四年前に父親が行方不明に、母親が海外へ研究者として行ったため祖父母と叔父の家に引き取られた。ある日偶然、地下室に一つのケースが見つけた。その中であつたビルドドライバーとボトルを使い、仮面ライダーになった。科学や数学の知識や技術は父親譲りでかなり高い。

●相田マナ(14)

キュアハート

(CV. 生天目仁美)

本作のもう一人の主人公(ドキドキ!プリキュアの主人公)。大貝第一中学校の生徒会長を務めているが、ひよんな事からトランプ王国から地球にやってきた妖精シャルルと出会い、キュアハートに変身して戦うことに。

●菱川六花(14)

キュアダイヤモンド

(CV・寿美奈子)

清廉で知性あふれる女の子で、マナの幼馴染の一人。キュアダイヤモンドに変身する。

●四葉ありす(14)

キュアロゼッタ

(CV・渕上舞)

四葉財閥のお嬢様で、マナの幼馴染の一人。キュアロゼッタに変身する。

●剣崎真琴(14)

キュアソード

(CV・宮本佳那子)

「まこぴー」の愛称で親しまれる人気アイドルで、トランプ王国の戦士「キュアソード」に変身する。

●上城龍牙(14)

かみじょう
りゅうが

仮面ライダークロース

元ネタのキャラ：万丈龍我(仮面ライダービルド)

(イメーჯCV・増田俊樹)

桐ヶ谷晴夜の相棒として戦う、トランプ王国の戦士。

真つ直ぐな心を持った熱血漢であり、鋭い勘と鍛え上げた大胸筋が自慢。

新人のプリキュアのサポートのために仮面ライダーの力を手に入れた。だが、トランプ王国の悲劇の中でのスタークとの戦いで行方不明になる。トランプ王国ではキュアソードの幼馴染でもある。

●沢田和也さわだかずや（14）

仮面ライダーグリス

元ネタのキャラ：猿渡一海

（イメージCV：細谷佳正）

野菜・花の農家の後継ぎであり、仮面ライダーグリスに変身する青年。

スクラッシュドライバーが入っていたケースを偶然見つけ、試しに使ったら仮面ライダーとなった。晴夜が確認したところ、このドライバーは晴夜の父：拓人が作った物だと判明した。

マナと六花、ありすとは小学校の時から幼馴染同士で、2年くらい前に家の農家の事情で引越したが、第18話で祖父達とこれから一緒に仕事する事になった為、大貝町に戻る事になった。

マナ同様、まこびーの大ファンの一人である。

●円亜久里（10）

キュアエース

(CV・釘宮理恵)

キュアエースに変身する女子小学生。歳上に対しても全く物怖じせず意見を堂々と述べる。自信家であると同時に、厳しい性格なのがうかがえる。

●柴崎幻冬(しほきげんと)(10)

仮面ライダーローグ

元ネタのキャラ：氷室幻徳

(イメージCV・河西健吾)

亜久里の同級生で、仮面ライダーローグに変身する男子小学生。

第30話で晴夜達がエンジンブロスとリモコンブロスに苦戦していた所に仮面ライダーローグとして颯爽と現れ、ピンチを救う。(しかしローグのスペックに頼りきりだった為か、ヘルブロスに対しては 그리스 との共闘でも苦戦していた。(それでも結構強い))

その正体はプリキュアの一人である円亜久里の同級生であり、総一郎からスクラツシユドライバーとクロコダイルクラックボトルを渡された事で仮面ライダーになった。

友達を守ると言う大義のために戦う。

●レジーナ

仮面ライダーマッドローグ

キュアジョーカー

(C.V. 渡辺久美子)

「キングジコチューの娘」を名乗る少女で、性格は非常に我が儘。

後に晴夜とマナとは本当の友達になるが、その直後にレジーナはキングジコチューに洗脳された。

その後、晴夜達と再会するも、ハザードフォームの暴走で自身を倒しかけた晴夜を恨む様になっており、彼女が『仮面ライダーマッドローグ』になるきっかけを与えてしま

う。
しかし最終決戦では、晴夜とマナの覚悟と気持ちを聞いたレジーナの前に、亜久里がプリキュアになる時に使うラブアイズパレットが出現。そして彼女は遂に、愛に狂った悪党ではなく、愛の為に戦う運命の切り札『キュアジョーカー』に変身した。

●ブラッドスターク

(C.V. 金尾哲夫)

ジコチューの仲間であるような存在。であり、キングジコチューの側近でもある。

晴夜の成長を謳いながら暗躍している。

●桐ヶ谷拓人
きりがやたくと

(イメージCV・藤原啓治)

晴夜の父親。ビルドドライバの開発者であるが、現在は行方不明。

●桐ヶ谷きりがや巧たくみ

(イメージCV・浪川大輔)

晴夜の兄で、その頭脳は父の拓人と引けを取らない、若き天才であった。

一年前、エボルトにエボルトドライバの修理を任されたが途中で反抗、それがキッカで自身の住む家の火事によって故人になったのだが…？

●門矢士

仮面ライダーディケイド

(CV・井上正大)

自分の存在意義について悩んでいた晴夜の前に現れ、彼が仮面ライダーになった本当の理由を思い出させた。『last science!編』でも仮面ライダーブラッド達にやられていたところに現れて、晴夜を救出した。

●伊能いのう賢けん也や

仮面ライダーブラッド

(イメージCV・中田譲治)

ビルド殲滅計画の実行者として行動するブラッド帝国の一人。

仮面ライダーの変身者以外の人間の心の闇を増幅させ、操ることが可能。本編ではプリキュア達の奥底にあつた「圧倒的な力を持つ仮面ライダーへの恐怖心」を増幅させた。

● ファレノ・ユウヤ

仮面ライダーパルロ

(イメージCV・平川大輔)

ビルド殲滅計画の為に伊能賢也の下で行動する青年。

彼の行動には上城龍牙への嫉妬と憎悪が関係しており、彼を絶望させた上で完膚無きまで倒す為、伊能によって洗脳された剣崎真琴ことキュアソードを侍らせて戦う。

● ガイ

リモコンブロス

(イメージCV・下野紘)

ブロス兄弟の兄の方。

丁寧な口調で落ち着いた雰囲気だが、実際は慥懃無礼そのものな態度で他人を見下している。

● ライ

エンジンブロス

(イメージＣＶ・柿原徹也)

ブロス兄弟の弟の方。

寡黙な兄とは逆によく喋り、挑発も積極的に行うなど好戦的。

●斗賀野光臣

ゼブラロストスマッシュ

(イメージＣＶ・堀川りょう)

トランプ王国で議員をやっている、ブラッド帝国の一人。何故か関西弁で喋る。

●岸波涼香

シザーズロストスマッシュ

(イメージＣＶ・林原めぐみ)

拓人の研究室の研究員の一人で、ブラッド帝国の一人。多分クールビューティ。

主題歌

OP「Be The One」

ED「この空の向こう」

ED2「ラブリック」《第三章》

第1章『ハート&ビルド編』

プロローグ

そこは、地獄だった。

本来ならば青い空が広がっているはずが、今は赤くなっており。地上には人が住んでいる町だったものが、瓦礫としてあたり一面に広がっていた。

もし、それだけだったのならまだどれほど良かったものだろうか。

空には巨大なコンドルやカラスの様な怪物が飛んでおり、地上にはこれはまた巨大なクモやゴリラ、イカ等といった怪物がうじゃうじゃいた。

しかし、奴らの周りには、人一人居なかった。

……いや、訂正しよう。二人だけいた。

そこにいた一人は紫色のコスチュームを着た少女で、もう一人は仮面の人物であり。そこで彼らは、一緒に巨大な怪物達に囲まれて戦っていた。

「はあああ!!」

「オラア!!」

「ジコオ!?!」

紫色のコスチュームを着た少女、『キュアソード』は『ジコチュー』と呼ばれている怪物に向かってキックを食らわせており、

仮面の人物、『クローズ』はジコチューに向かってパンチを繰り出していた。

「どけえ！邪魔だあ!!」

敵のあまりの多さに苛立ったのか、クローズは腰に付けていたドライバーのレバーを回した。

『Ready go!』

『ドラゴニック ファイニッシュ!』

するとクローズの背後に蒼い龍のエネルギー体が現れ、そのままクローズに向けて火炎を吐くと、それに乗ったクローズはジコチューに向けてキックを叩き込んだ。

「オ~~~~マイ~~~~ガ~~~~!!?」

それによってクローズの周りにいたジコチュー達は浄化され、そこから羽根の付いた小さいハートのようなものが出てきて、そのまま何処かへ飛んで行った。

一方、キュアソードも「コミュニケーション」と呼ばれるものにキュアラビーズをセットする。

「閃け！ホーリーソード！」

キュアソードが光の剣を無数に放ち、それがジコチュー達に直撃すると、ジコチュー

は次々に浄化されていく。

そして、ジコチュー達の目はハートに変わった。

「ラブ！ラブ！ラブ！」

そう言つて、ジコチューの姿は小さいハートへと変わり、そのまま飛んで行つた。

——しかし、それでも敵は全く減らない。

「くっ!!」

「クソツ！キリがねえ！何匹いんだよ!？」

二人は顔を歪ませながら、そう愚痴っていると…

『よっ!!? 張り切つてるじゃねーか「キュアソード」……そして「クローズ」?』

「!?!」

突如、キュアソードとクローズの背後から、頭から煙突のようなものが突き出ていて、血の様に赤いワインレッドのコブラがモチーフの怪人が現れ、二人に話し掛けた。

「あ…あなたは一体……」

『俺か？俺の名は「ブラッドスターク」、以後お見知り置きを……』

ソードは突然現れた怪人に驚いていた。そして同時に警戒心を高めた彼女へ、怪人は自らをその様に自称した。

それを見ていたクローズは、直感的に相手が只者でない事を悟つた。

「……ソード、先に宮殿に行つててくれ」

「!? 何言つてるの!!こんなところにあなたを置いていけないわ!」

先に宮殿という所に行くように促すクローズに、ソードはクローズとまだ一緒にいると言うが……

「ダメだ!」

「!?」

そんなソードにクローズはダメだと言った。

「あつちには王女様もいる、お前は王女様を助けに行くんだ!!」

「ツ………わかつたわ」

ソードはクローズの言う通り、王女と言われた人物の所へ行くことにした。

「………必ず戻つて来てね」

「当たり前だ!」

彼女はそれだけ呟くと、王女の下へと行くべく、その場をクローズに任せて離れていった。

その様子を、ワインレッドの怪人『ブラッドスターク』は感心しながら見ていた。

『ほう、お前一人でここに残ることになったか』

「……お前は一体なんなんだ」

『おっと！そんな怖い顔するなよお、ちよつとお話をしようと思っただけじゃねえか』

……それとも、こんなダンディーな声をした俺が怪しいって思ってたのか？』

スタークはそう言うが、怪物がうじやうじやいる所を平然と歩いている時点で怪しき満点である。

「うるせえ！なにもんだお前は!!」

クローズは怪人が何者なのかもう一度問い正した。

『……俺が何者なのか？そうだな〜…』

そう言うスタークは、手に持っていたライフルのような武器をクローズに向けた。

『スチームショット！コブラ!』

ライフルから音声が鳴ると、そのままクローズに向かってエネルギー弾を撃ち出した。

クローズはそれを避けようとしたが、弾は不規則に動いてクローズを翻弄しているため避けることが出来ず、そのまま当たってしまった。

「ぐああ!!？」

『「キングジコチュー」の側近……と言った所だなあ』

ずっと怪物達と戦い、疲労が溜まっていた影響もあつてか、スタークの攻撃によつて

クローズはそのまま変身が解除され、少年の姿に戻ってしまった。

「ぐっ……………うう……」

『悪いなくこんなことして。』

……………だが、これも俺の計画に必要なことなんだ』

「くっ……………そお……」

『だが安心しろ』

そう言ううと怪人は少年の近くまで近づいてこう言った。

『お前の相手には手を出さないでいてやる……………今はなあ』

それを聞いた少年は怪人に攻撃しようとしたが、ダメージが大きかったのか動くことができなかった。

「くっ……………ま……………」

最後にそう言い残した少年は、次の瞬間から目の前が真っ暗になった。

——そしてその日、一つの国が滅びた。

……………それから数日後、横浜某所のとある工場跡地。

ここに一人の少年が一体の怪物に立ち向かっていた。

「……こんな奴、本当に倒せるのかよ？」

目の前にいる怪物を倒せるのか不安だった少年は、2本のボトルを取り、振り出した。すると、少年の周りからいくつもの化学式と数式が現れた。

「さあ、実験を始めようか……」

突如現れた化学式と数式に驚きながらも、少年はボトルを腰に付けていたドライバーに差し込む。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

音声が鳴り終わるとベルトのレバーを回した。それに対応するかのように歯車が回り、前から赤いプラモデル部分のようなものが出てきて、さらに青い同型が後ろから出てきた。

そして、再び音声が流れた。

——まるで、その少年に問いかけるかの様に……

『Are you ready?』

「えっ？ えっと……変身！」

二つのアーマーが合体し、少年の体に装着された。
その瞬間、音声が鳴り響く。

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイー！』

「えっ！すげえ……」

この初めての変身が今後の彼の人生を大きく変える出来事だった。

——それから、1カ月の時が経った。

次回！R e . ドキドキ&サイエンス！

第1話 ベストマッチな奴とハートの誕生！

第1話 ベストマッチな奴とハートの誕生!

……あれから1カ月、この俺、桐ヶ谷晴夜はこの大貝町に引越してきて、今日が転校初日。

いつものように地下室にいた俺は……と、説明する前に地下室の巨大な装置から音が鳴り。いつも通りその中には1本のボトルが置かれていて、俺はそれを掴む。

「おお!最高だ!」

新しいボトルを手を取って見て嬉しがりながら、「流石、俺の発明品!でかしたぞ!」と、巨大な装置に触る。

そう言った後、俺は大貝第一中学校の制服に着替えて地下室の扉を開ける。

「ボンジュール!晴夜君!」

するといきなり、叔父である『石動総一郎』が俺の目の前に現れた。

「うおっ!?ビックリした!」

俺がそう言って、突然現れた叔父に驚いていると…

「それより、お前いつまでもものんびりしていると転校初日に遅刻するぞ!」

叔父にそう言われた俺は時計を見た。

「えっ！あああああああ!!? 転校して初日遅刻だああー！ー！ー！！！」

既に学校に行かなければならない時間になっていたことに気付いた俺は急いで準備して焦りだすと、急に叔父の方に向けて開き直ったような口調で話し始める。

「——と、お急ぎのあなたに……これ!!?」

テレビショッピングの人の様にそう言つて、俺はポケットからスマートフォンと黄色のボトルを見せるように取り出す。

「なに? 仮病の連絡か?」

「そうそう!! もしもし……なわけねえだろ!! 俺の最新の! 発・明・品♪」

『ビルドチェンジ!!』

俺は叔父にそうツツコミを入れ、スマートフォンにボトルを差し込み入れるとライオンのシルエットが浮かび、スマホを上に投げると、スマホが巨大化しバイクに変形した。

「おおおお!!」

「なっ♪すごいでしょ!! 最高でしょ!!? 天才でしょ!!?」

俺はテンション高くそう言つて、スマホが変形したバイク——マシンビルダーの真ん中のモニターのヘルメットの絵を押すとヘルメットが出現し、それを被りバイクのハンドルを握る。

「さあーいざ学校へ……レッツ……」

「GO！するなよ。ここ家の中だから」

「あつ……すつかり忘れてた」

結局、外に出しバイクを運転したが、学校には間に合わず、俺はそのまま今日の見学先であるクローバータワーへと向かったのだった。

そこは昨年完成したばかりの世界で一番の電波塔であり、そこには多くの学校の生徒が見学に来ていた。

晴夜は大貝第一中学校の生徒を見つけて到着した時、そこで少し問題が発生していた。

「会長！二階堂君が他校の生徒と揉めています！」

（おいおい、こんな所で揉め事か？しようがない……！）

すると、ひとりの生徒が会長と呼ばれている少女に言う、少女はすぐさま、もめている生徒に声をかけた。

「二階堂くん、喧嘩の原因はなに？」

少女が二階堂と呼ばれた少年に、喧嘩の理由を問いかけた。

「こ、こいつらがぶつかって来たんだよ！」

「何だどど？ そっちが先にぶつかって来たんだろ！」

二人はまた口論をなりかけたが、会長と呼ばれた生徒が二人の間に入ったちようどその時……

「ストップ！（はい、ストップ！）」

少女と一緒に、晴夜も二人の間に入って口論を止めた。

「貴方達、そんな小さいことしていたらクローバータワーに笑われるよ！」

「そうそう、ここはみんなが楽しんでいるんだ！ここはケンカではなく、一緒に楽しみたいと！」

二人がそう言うと、晴夜と少女がそこにいた生徒達とクローバータワーを見上げたが、他校生はすぐに我に返り、仲裁に入った少女の方を見る。

「お、お前等は誰なんだよ!!?」

他校生が誰なのだと言うと、濃いめのピンクでセミロングとピンクのリボンで短めのハーフアップの髪を整えている少女は自己紹介した。

「始めまして！相田マナです!!?」

その少女、相田マナは自己紹介をし、他校生の一人に握手してその場を丸く収めた。それを見た晴夜は興味深そうに感心する。

「すごい！一度の握手でもう友達になっっている!!?」

「……ところで、お前は誰なんだよ?うちの生徒にしては知らない顔だな」

さつきから晴夜のこと気がなつていた二階堂は、彼に誰なのかと声をかけた。そして、晴夜は自己紹介をした。

「俺か？知らなくても無理ないよ！俺は『桐ヶ谷晴夜』、今日から大貝第一中学校の生徒として転校してきたので、以後お見知り置きを！」

自己紹介をしたら、ちようど仲裁を終えたマナが晴夜に問いかけた。

「もしかして、あなたが転校生の桐ヶ谷君？」

「ああ！でも、今日は転校早々遅刻しちゃて今来たんだ。」

えつゝと確か、相田さんだったよね？今日から同じ学校の生徒として、よろしく！」

晴夜はマナと握手するため、右手を差し出した。

「うん、よろしくね♪桐ヶ谷君！」

そして、マナは笑顔でよろしくと言うと、二人は握手をした。

「ああ!!？よろしく！あと俺の事は『晴夜』って呼んでもいいから」

「そうなんだ！じゃああたしのことも『マナ』って呼んで！晴夜君」

「ああ！よろしくな、マナ！」

——しかしこの出会いが運命だと言う事は、その時の二人はまだ知るよしもなかった。

そしてしばらくして、晴夜はマナと彼女の幼馴染である『菱川六花』と一緒にクロイバータワーのエスカレーターで最階上へ向かっていた。

その間、六花は青いロングヘアと三つ編み部分を揺らしながらマナに説教していた。

「全く……どうしてあなたいつもトラブルを背負い込むの?」

「エへへ」

しかし、その様子を見ていた晴夜はふと呟いた。

「誰かのトラブルを一生懸命解決しようとするなんて……最高の生徒会長だよ!!?」

「そこは褒めない!!?」

おもわず六花は、マナの行動に感心している様子の晴夜に突っ込んでしまった。

「何で?こんな最高の生徒会長、そこから中探してもいないと思うけど……ってあれ?」

そう言いかけっていると晴夜は何かに気づき、六花もそれに気づくと、晴夜にどうしたのか聞いた。

「どうしたの?」

「マナが消えた!」

「ええー!!?」

二人で急いで何処かへと行ってしまったマナを探し始めた。

そして晴夜は上の階にいる生徒にマナがどこに居るのかと聞いた。

「あ!ちよつと、マナが何処にいったか知ってる?」

「会長なら、そこで迷子の面倒見てるよ」

「ありがとう!」

すぐに上の階にいた生徒に軽く礼を言いながら、マナの所に向かった。

晴夜が着くと、ちよつとマナが迷子の子に優しく接しており、そこへ母親が来て、彼

女に礼を言つて迷子の子と一緒に何処かに行った。

それを見ていた晴夜は笑顔でマナに話し掛ける。

「学校の生徒だけじゃなく、いろんな人を助けてるんだな!」

「だって困っている人がいたらほっとけないもん!」

晴夜の言葉にマナはそう答えた。

「それ、わかるよ!!誰かの為に何かをして、感謝してもらえると心から嬉しくなるような

気持ちになるんだよな!」

ちよつとその時、二人のそんな会話を聞いていた六花は溜め息を吐きながら呟く。

「はあ……」にマナと同じ考え持つ人が出てくるなんて……」

六花は、晴夜とマナが似過ぎるところに気が重くなっていた。

二人が仲良く話していると、晴夜は向こうの人が集まっているのに気づいた。

「あれ?なんかあつちのほう人多くないか?」

かなりの大人数のほうを見てみると、マナはその行列の中心にいる人物に気づいた。

「ああー……!!?」

「うわあ!!? どうしたの?」

「あれ、『まごぴー』じゃない!!?」

晴夜と六花が行列をよく見ると、行列にいる人にはサインやカメラを持っていた事に気付く。

「誰?芸能人?」

六花はそう言いながら眼鏡を掛けた。

「知らないの? 剣崎真琴だよ」

その名前を聞いた晴夜はすぐに理解した。

「ああ!!?あの最近人気の売れっ子アイドルか!」

晴夜は彼女が売れっ子のアイドルだと言うと、マナは真琴を見て興奮していた。

「うわー!あだし、芸能人を生で見るの初めてだよ!ヒャクカワイイ〜!顔小さ〜い!」

マナははしやぎながら下の方を見ると、何か落ちているのに気付き、それを拾った。

「マナ、何だそれ？お前のか？」

晴夜が彼女の手にあるの見て、マナの物なのかどうか聞き、「ううん、これまこぴーが落としたの」と答えながらマナが晴夜に見せたのは、ブローチに似たアクセサリーだった。

それを見て、真琴の方を見た。確かに真琴のあの頭の部分が足りなかったように感じた。

「よし！届けにいこうか！」

「うん！」

それを見た晴夜は、届けに行こうとマナに言った。

晴夜とマナは真琴のアクセサリーを届ける為に人ごみのなかに入り、真琴の後を追いかけて、彼女の近くについた。そんな二人に気付いたマネージャーが彼らを止めた。

「ちよつと貴方達？サインなら……」

「これ落としたよ？」

「！」

マナが見せたアクセサリーを見た真琴は驚きながらも、少しずつ手を伸ばし、それを受け取ると二人に礼を言った。

「ありがとう……」

「どういたしまして!!? 次は落とすなよ!」

晴夜がそう言うのと、ちょうどエレベーターのドアが閉まった。

そしてマナは真琴のお礼の言葉を聞き、とても喜んでいた。

「うわ〜!まこぴーから『ありがとう』って言われちゃった!こんなにドキドキしたの初めてだよ!」

「確かに!芸能人に言われると、最高だよなー!!?」

二人が真琴のことで話している、その時だった:

「その人、ちよつと覗いて行かないかい?」

突然二人は声掛けられ、声の場所を向くと、そこにあつたのはアクセサリーなどを売っている露店だった。そしてそこには、白と水色のチューリップハットをかぶった金髪の若い男性がいた。

「何だろ〜、こんにちは!」

二人はショップのお兄さんの店においてある品を見てまわった。

「へえ、色んなものがあるんですね!……ん?」

晴夜は色んなアクセサリーを見てみると、マナがあるアクセサリーを手に取った。

それは、さつき真琴が着けていたものと同じものだった。

「それって確か、さつきあの子が着けていた……」

「うん、まこぴーが持っていたものと同じ物だよ」

それを聞いていた青年は、何か思い付いた様な表情を浮かべる

「気に入ってもらえたようだね、良かったらもらってくれないかな?」

そのアクセサリーを貰ってくれないかと青年に言われ、マナは驚く。

「ええ?! いいですよ! こんなのだダで貰えるなんて!!? それにタダより高い価値なんて

ないっておじいちゃんが言っていましたし!!?」

「物の価値なんて、つける人次第で変わる物さ」

しかし青年がそう言うと、彼女が持っていたアクセサリーをつけて鏡を見せた。それを見たマナは笑顔を浮かべて喜んだ。

「うわ〜! 可愛い!!?」

「よかったじゃん!」

二人が言っているとちようどその時:

「マナ! 晴夜君!」

「六花 (菱川さん) !」

「もう何やってるの?!? 急がないと展望台の見る時間がなくなるわよ!!?」

六花はそう言いながら、マナの腕を掴んで展望台へと引つ張って行き、晴夜も一緒に着いて行きながら青年に礼を言った。

「そうだね！ありがとうございます！」

「お世話になりました！」

マナも青年に礼を言い、二人は六花と一緒に展望台へと向かった。そんな二人を青年は見届けながら呟く。

「……よろしく、マイスイートハート。…そして、天才科学者の息子君」

そして、展望台に着いた三人はかなりの行列に並んでいた。

「ほお〜！これはまた凄惨な行列だな！そんなに人気なのこのタワーは？」

「アンタ達が寄り道ばかりしたからよ」

六花の言葉に、マナは苦笑で謝る。

「アハハハハ……すみません」

「まあでも、それだけ楽しみが倍になるからね」

晴夜がそう言っていると、他の生徒達も晴夜達の後ろに並んで、順番を待ち、あと少いでエレベーターに着くであろう、その時だった。

突然、近くにいた男性が倒れたのだ。それを見たマナは振り向き、晴夜が問い掛けた。

「マナ？どうしたの？」

「誰かが、倒れたみたい……」

マナがそう答え、倒れている男性に声を掛けた。

「大丈夫ですか？」

マナが声を掛けていると、男性の近くにいた少年が手の上に黒いハートを浮かべていた。

「いいね、これなら極上の『ジコチュー』が生まれそうだ!!？」

「え？」

少年の言った後、ちょうど晴夜がマナの方へ来ていた。

「マナ、どうだその人は………ってなんだ？」

晴夜は少年が持っていた黒いハートを見て、それが何なのか疑問に思った。

「暴れる！お前の心の闇を解き放て!!？」

少年が叫ぶと、少年が待っていた黒いハートが割れ、そこからカニの怪物が現れた。

『ジコチュー!!』

「ええー……!!？」

「うわ?!なんだよ……!!？」

突然のジコチューの登場でマナと晴夜は驚き、周りの人たちは呆然と見ていた。それにジコチューは少し怒って暴れ出した。

「行列！横入り！……！！？」

ジコチューは横走りをしながら人ごみの中へ突っ込んだ。でかい図体の割にやっていることが横入りとは、なんとも小さい奴である。

しかし、そんなことをされた側はあまりの事にパニックになっている。それを見ていた晴夜はすぐ周りの人達に言った。

「皆さん、早く逃げてください！」

晴夜が避難するように誘導すると、皆晴夜の言った通りに逃げ始めた。みんなが逃げていると、マナだけが非常階段へ向かって行った。晴夜はそれに気付き、マナの後を追った。

「おい、待ってよマナ！」

晴夜はマナの後を追いかける為に、その階段を登り始めた。

一方その頃、別の位置からクローバータワーの混乱を見ていた者がいた。

『今日も暴れてるな！！？さあて、今回は現れるかな。トランプ王国最後のプリキュア、そして……ビルド！！？』

その姿は全身血の様な赤いワインレッドのスーツで、胸部装甲と仮面にはコブラの意

匠が施されており、頭に煙突の様な棒が突き出ていた。

所変わってクローバータワーでは。晴夜はマナを追い、非常階段をまだ走っていた。
「よし、あと少しだ!」

懐から取り出した一本の赤いボトルを振りながらペースを上げ、展望台に到着した晴夜が見たのは、マナと紫色の衣装を着ていた少女だった。

……マナの手にウサギ?のキャラクターの顔が付いているピンクのスマホ的なやつを持っていることが気になったが、今はスルーしておこう。

「マナ、無事だったか!よかった!」

「晴夜君!」

晴夜はマナが無事なのにホツとし、今度は紫の衣装の少女を見た。

しかし、晴夜はその少女を見て、声を掛けた。

「ん?君どこかで会わなかった?」

「……………知らないわ」

晴夜の言ったことに少女は知らないと答えると、少女は何かを感じ、マナを押し退けた。

すると、天井から巨大なハサミが現れ、少女を捕まえた。少女を捕まえたのはさつき暴れていたジコチューとは違い、少し茶色のジコチューだった。

「色が違う……?まさかもう一匹いたのかよ!?!…ってことは、あいつも仲間か!?!」

その様子を見ていた晴夜がそう言っていると、穴から一人の女性が現れた。

「あなたはいつも仕事が雑なのよ、『イーラ』」

『『マーモ』!』

イーラと呼ばれた少年はマーモと呼ぶ女性を睨むが、マーモはそれを無視し少女を見た。

「でも、お陰でプリキュアの最後の一人を燻り出せのだからよしとするかしら」

マーモが呟くと、イーラは宙を浮きながらマーモに文句を言った。

「さては僕のジコチューが倒されるまで隠れて見てたな!自己中な奴!」

イーラに文句を言われたマーモは「フン」と答え、マーモは少女を近づきながら「あの質問」を問いかけた。

「さあて、『キュアソード』。教えて?プリンセスはどこかしら」

「ウツ……!」

ソードは質問に答えなかったが、マーモは懲りずに問いかける。

「さあ!」

「くう……！貴方達に、教える事なんて……ない！」

「滅びた王国に義理立て、とんだお馬鹿さんね……あなたの親友なら……死んだのにね……」

マーモがそう言うと、ソードはすぐに否定した。

「あいつは……死んでないわ!!？」

二人が言い合っていると、ちょうど晴夜とマナが穴から登ってきて、今の状況を見ていた。

「悪い子ね……良いわジコチュー、やっておしまい!!？」

「ジコチュー！」

マーモがジコチューに指示すると、ジコチューはソードに締め付け始め、ソードは苦しむ。

「ウツ……！アア……!!？」

ソードが苦しむ姿を見たマナは駆け出し、それを見た晴夜は叫んだ。

「マナ！」

「止めて！その子を放してー！」

マナはジコチューの足を掴み引つ張るが、ビクともしなかった。マーモもその様子を見ていた。

「なに?」

「……バカ」

マナに掴まれたジコチューは軽く投げ飛ばした。

「キヤー!」

マナが吹き飛ばされたのを見た晴夜はすぐに動き、彼女をキャッチした。

「大丈夫か?」

「うん……」

「見事な受けね。でもただの人間は引つ込んでな」

マナが吹き飛ばされたのを見たマーモがそう言うと、再びソードを苦しめさせた。

その様子を見ていたマナは焦り始めた。

「どうしよう……あたしも戦えたら……」

どうかお願い!あたしに戦う力を!!?」

その時、不思議なことが起こった。

さっきの露店のお兄さんからもらったラビーズが、強く輝き始めたのだ。

それを見たマナと晴夜は驚く。

「えっ?コレは?」

マナ達はラビーズが輝いていることに疑問を抱いていると、さっきまでマナが持つて

いたスマホのようなもの……妖精のシャルルが叫んだ。

「変身用のキュアラビース!!? そうだ思い出したシャル! 変身する時は『プリキュア・ラブリンク』って叫ぶシャル!」

シャルルの言ったことにマナに頷いた。

彼女は立ち上がり、キュアラビースをラブリーコミュニケーションにはめ込み、叫んだ。

「プリキュア・ラブリンク!」

掛け声と同時にラブリーコミュニケーションへ〔L・O・V・E〕と描く。

『L・O・V・E!』

すると、マナの髪が長くなり、頭頂部でハート型に結び金色に変色。次に衣装がピンク色のコスチュームになり、アームバンドとブーツそして腰のリボンが着いて、最後にキヤリーにシャルルが入り、マナは決めポーズをしながら名乗り上げた。

「みなぎる愛! キュアハート!!?」

ハートが名乗りを上げると、晴夜達は驚く。

「マナが変身した!?!」

「キュア……ハート?」

「何?!?!」

晴夜達が驚くとハートはジコチューに向かって言った。

「愛を無くした悲しいカニさん!このキュアハートが貴方のドキドキ、取り戻してみせる!」

そんな中、ハートの様子を見ていたお兄さんが帽子を取りながら呟く。

「目覚めたようだね、マイスイートハート」

そして、ハートを見ていた晴夜も立ち上がった。

「マナ、お前がああのプリキュアに変身するとは……どうやら都市伝説じゃないみたいだな!」

晴夜は驚きながら、持っていたカバンからレバーが付いたドライバーを取り出した。

「何それ?」

「まあ、見てなよ!」

ハートの疑問に晴夜がそう答えると、晴夜は『ビルドドライバー』を腰に装着し、ポケットから2本の赤と青のボトルを出し、それを振り始めた。

すると、後ろからいくつかの数式や化学式が現れた。

「わあ、何これ?」

「なんなんだよそれ!」

驚くハートやイーラ達の前で、晴夜は笑顔になって言った。

「さあ、実験を始めようか！」

そして、晴夜は2本のボトルの栓を開き、ビルドドライバーの『ツインボトルスロット』と呼ばれているスロットに差し込む。するとそこから音声が流れてきた。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

兎と戦車のシルエットが浮かび、『R/T』と表示された。

そしてレバーを回すと、前と後からプラモデルのランナーのような物——『スナツプライドビルダー』が出て来て、ファクトリアパイプラインと呼ばれる透明なパイプから流れてきた『トランジエルソリット』が流し込まれ、赤と青のアーマーが形成された。

そして、再び音声が流れた。

『Are you ready?』

「変身!!？」

晴夜は一度構えた後、両手を一度交差させてバツと広げるとアーマーが中央の晴夜に重なるように装着される。

赤くピンと伸びた兎の耳のような形状の複眼を持つアーマー、青い戦車のような形状をした複眼を持つアーマー……それが一つとなり、体から煙が吹き上がった。

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イーイー！』

「何よ、あれ?」

「だ、誰だお前は!」

イーラの質問に、晴夜は意気揚々と答えた。

「仮面ライダービルド!作る、形成するって意味のビルドだ、以後お見知り置きを!」

ビルドは自己紹介し、人差し指をジコチュー達に向けながら言った。

「ビ、ビルド……」

「勝利の法則は、決まった!」

右のアンテナをなぞり上げながら右手を広げて、決め台詞を言った。

——こうして、仮面ライダービルドとキュアハートの戦いが始まった。

次回!Re・ドキドキ&サイエンス!

第2話 バレちゃった!? 仮面ライダーとプリキュア

第2話 バレちやつた!? 仮面ライダーとプリキュア

ジコチューの仲間であるイーラとマーモは、突如プリキュアが誕生した事と、謎の戦士・仮面ライダーが現れた事で混乱していた。

「二人目のプリキュアだと!?? しかも、仮面ライダーってなんだよ!??」

「でもプリキュアの方はまだ生まれただよ!」

「くそ!また面倒臭くなるな……! だったらここで倒してやる!!?」

そう言つてイーラはハートに向かつていくが、ハートはイーラの攻撃を全て避けた。

しかし、イーラはまぐれだと懲りずに再びハートを攻撃するが、ハートはまた躲した。

(こいつ……!)

一方、ハートは自分がいつも以上に動いていることに驚いていた。

(軽い!)

「何やってんのさ!」

それを見ていたマーモは何をしているのだと呆れ、ハートに攻撃を仕掛けようとする。

だがハートはそれも軽く躲し、ビルドが更に追撃しようとしたマーモの前に立った。

「お前の相手は俺だよ!」

「くっ! 邪魔だよ!」

彼女はビルドに攻撃をしてきたが、ビルドは左足に力を込め、高くジャンプした。

「ハッ!!?」

「何!?!」

マーモの後ろを取り、ドライバーからドリルのような形状をした武器、『ドリルクラッシュャー』が形成されると、1本のボトルを差し込んだ。

『ハリネズミ!』

『Ready go!』

するとドリル状の刃『ドリスパイラルブレード』が回り始め、再び音声が出てきた。

『ボルテック ブレイク!』

ビルドはドリルクラッシュャーから多くの針を飛ばし、マーモに攻撃した。

「きゃあー!!?」

「どう! おれの発明品の威力は!」

「おのれ」

マーモはビルドの武器の威力に驚いていると、ビルドは何かを思いついた。

「そうだ! ついでに新しいボトルの実験に付き合ってもらおうよ!」

ドライバーに差し込んであるボトルを外し、先まで使っていたのとは違うボトルを2本出した。

それを振り始めると、その2本のボトルをドライバーに差し込んだ。

『ゴリラ！ ダイヤモンド！ ベストマッチ！』

すると今度はゴリラとダイヤらしき宝石のシルエットが出現。

ラビットタンクフォームに変身した時と同じ様に「ベストマッチ」と言う音が鳴ると、二つのシルエットが合わさり『G/D』というシルエットに変化する。

「おおう、ベストマッチきつた!!?」

そして、レバーを回し始めた。

すると変身した時と同じように前と後からランナーが出てきて、今度は茶色と水色のアーマーが作られ、また音声が流れてきた。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!!?」

二つのアーマーが装着されると、体から蒸気を出しながら音声が流れた。

『輝きのデストロイヤー！ ゴリラモンド！ イェーイ!』

その姿は左側の複眼と右腕はゴリラがモチーフ、右側の複眼と左手はダイヤモンドがモチーフの姿に変わっていた。

「変わった!」

「ゴリラ? ダイヤモンド?」

ハート達が驚いている中、ビルドはゴリラモンドフォームの特性を解析し始め、全てを理解した。

「なるほど、このフォームの使い方がよくわかった」

するとビルドの左手から大きなダイヤモンドが現れ、それを右手の大きな手——『サドンデストロイヤー』でダイヤモンドを砕き、砕いたダイヤモンドが飛び散り、それがマーモに直撃し吹き飛ばされた。

「うわぁー!!?」

「おお!!? なかなかの威力だ!」

ビルドは自分を関心して言っていると…

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」

ハートの悲鳴に気付き、彼女の方を向くとなんとハートが空から降ってきたのだ。

ビルドは先に彼女の落下地点に到着し、ハートをキヤッチした。

「大丈夫か? ハート」

「うん! ありがとう!」

ハートがビルドに礼を言うと、ビルドはイーラとマーモの方を向いた。

「どう？俺とハートの実力は！」

イーラとマーモへ自慢げにそう言うのと、マーモは悔しがった。

「こうなったら……！ジコチュー!!？」

「ジコチュー！」

するとジコチューはソードを捕らえている方のハサミを展望台の外へ突き出し、ビルド達に脅し文句を言う。

「ちよつとでも動いたら、あなた達のお友達が地面に真つ逆さまよ」

「ちよ……そんなのアリ？」

「ちよつと……卑怯だろ！お前ら恥ずかしくないの！」

敵の卑怯なやり方に、二人は思わず叫んだ。しかし…

「わかってねえな……」

「この世界の全て、キングジコチュー様を中心に回ってるいる！どんな汚いやり方もアリなのよ!!？」

と、二人は全く恥ずかしがらず、堂々と言い放った。すると…

「……わかってないのは、あなた達よ……」

ソードが言ったことを耳にした二人は彼女の方を向いた。そこにはソードが鋭い眼で二人を睨み付けていた。

「私とその子達は、友達でもなんでもない……私のためにその子の命を投げ出すと思ったら大間違いよ!」

「何ですって!?!」

自身を人質にとつても無駄だとマーマ達に言うと、ソードは掴まれている腕を振り、掴まれているハサミに蹴って離して強引に開かせ、手すりに足を掛けると、ジコチューに背負い投げをした。

しかし、投げ飛ばされたジコチューはもう片方のハサミでソードの足を掴み、道ずれにしようとした。

それを見た二人は驚き、ハートが急いで走り出して落ちたソードの元に向かった。

ビルドも後に続こうとしたが、イーラ達がビルドの前に立ちふさがった。

「行かせないわ!」

「お前の相手は僕達だ!」

「邪魔するな!!?!」

ビルドはゴリラモンドの右手に力を入れ、マーマとイーラの二人に強烈な一撃を見事直撃させた。

「ぎゃあああああ!!?!?!?!」

攻撃を食らったイーラ達はそのまま飛ばされ、その隙にハート達のところへ向かっ

た。

するとハート達はロープに掴まって、ぶら下がっていたのが見えた。どうやらソードを救出した後にゴンドラのロープを掴んで落下を防いだようだ。

「大丈夫か!? ハート!」

「う、うん……なんとか……!」

ハートはそう言っているが、掴んでいるゴンドラのロープは今にも切れそうな状態だった。

「待ってろ!」

ビルドは新たな2本のボトルを出し、振り出すと、それをドライバーに差し込んだ。

『タカ! タンク!』

ドライバーのレバーを回すと、前後から橙色と青色のプラモの様なランナーが現れた。

『Are you ready?』

『ビルドアップ!』

今度は左側がタンクで右側がタカのような姿になった。

そしてビルドは羽を広げ、そのまま飛び立つとハート達の方へ向かい、落ちそうなハートの手を掴み、地面に着地した。

「大丈夫か?」

「うん!ありがとう、晴夜君!」

ハートは笑顔でビルドに礼を言った。

一方のソードは…

「……どうして私を助けたの?」

と、鋭い眼で見ながら問う。それに対してビルドは…

「助けるのに理由なんてないよ!それに俺は目の前を人を放っておけないタチでね!!」

ビルドがソードとハートにそう言い放った。

その時だった…

『……助けて!』

「え?今、声が……」

ビルドが呟くと、ハートは少し驚いた様子で彼に聞いた。

「晴夜君も聞こえたの?」

「ああ、聞こえた!あの声間違はなく、ジコチューからの声だ!本当はこんなことしたないんだよ!」

「だったら、助けないと!」と、ハートが言ったと同時に、彼女の左胸につけてあるハー

ト型の宝石から、金色の光が輝いた。

「これは……!」

ハートは宝石を手を持って行くと、彼女の手につき変身する時に使ったキュアラビーズとは違う、別のキュアラビーズが出てきた。

「よし…ハート!俺があいつの動きを止めるから、同時に止めを刺すんだ!!?」

「分かった!」

それを見たビルドはハートにそう言い、最初に使ったラビットボトルを取り出し、タカボトルと入れ替え差し込んだ。

『ラビット!タンク!ベストマッチ!』

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

『ラビットタンク!イェーイ!』

再びラビットタンクフォームに戻った。

「勝利の法則は決まった!」

決め台詞を言ったビルドはレバーを急速回転させる。

するとドライバーが赤と青に光り、軽快な騒動を響かせる。

『Ready go!』

「ちよつと待つてて」

「?」

ハートはビルドの言ったことに一瞬だけ疑問に思ったが、ビルドはそのまま後ろへ走り、地面を踏みしめる度に衝撃波が生まれ、青い右足を勢いよく踏み砕くと地面へと潜る。

すると化学式や数字の式に使われる図表の放物線のようなものが出現し、ジコチューを挟む。

それと同時にハートはシャルルを呼んだ。

「シャルル!」

「シャルル!行くよ!」

ハートはさっき出てきたキュアラビーズをセットすると、ラプリーコミュニケーションの中心のハートが点滅した。

そして左胸のハートの宝石からエネルギーを放った。

「貴方に届け!マイスイートハート!!?」

ハートがエネルギーを放ったと同時に、ビルドが地面から出てきた。

そしてジャンプし、図表に飛び乗るとジコチューに向かって滑り降りてくる。

『ボルテックファイニッシュ!イエーイー!』

「はあああああゝ!!? はあッ!」

ビルドがジコチューにキックを当てて動きを封じた。

そして、ハートが放った必殺技にジコチューはそのまま直撃し：

「ラブラブラブ!」

ジコチューはハートが放ったエネルギーに包まれ。そのまま浄化されると、白煙の中からジコチューを呼び出すときに出たはずの羽根の着いたハート型の物が、黒からピンクに変色して現れた。

イーラとマーモはいつの間にかいなくなっていた。

——仮にこのまま戦うとしても、ビルドにボコボコにされたダメージがあるので全力で戦うのは難しいだろう。

「やったな!」

「うん!」

ビルドはそのまま着地した後、ハートに労いの言葉を言った。

「やったケル（ランス）!!」

突如出てきたシャルルと同じ妖精であるラケル・ランスも、ビルド達と一緒に喜んでいた。

その様子を見ていたソードは：

「この子……ジコチューを浄化した。」

……それと、あのビルドって？」

と、ジコチューを浄化したハートとビルドを見ていた。

——特にビルドの方は腰に付けているドライバーの方に目を向けて…

そんな中、さつきジコチューから出てきた羽根の着いたハート型の物が、ハートの周りを飛び、そのままどこかへ飛んで行ってしまった。

「あ、行っちゃった……」

「あれは？」

晴夜はシャルルにさつきのハートの様なものについて問いかけた。

「あれは『プシユケー』。人間の心なんだシャル」

「心？」

ハートとビルドが首を傾げながら言うと、シャルルは説明を始めた。

「誰にでも、自分勝手なわがまま気持ちが芽生えてしまう事があるシャル。」

みんなその気持ちに負けないように生きているけど、ジコチューはそんな気持ちを膨れ上がらせて怪物にしてしまうのシャル！」

シャルルが説明をして、ビルドとハートは頷きながら聞いていた。

そんな中、ソードは何処かへ去ろうする。

「あ、待って！」

ハートはそれに気付いき、ソードを呼び止めた。

「初めまして！あたし、キュアハート！よろしくお願ひします!!？」

「俺は仮面ライダービルド、ビルドとは、作る・形成するという意味のビルドだ。

以後お見知り置きを！」

と、二人が自己紹介をし、ハートは右手を差し出したが…

「…助けてくれたのは感謝するわ。

だけど、いい気にならないで!!？」

ソードから厳しい言葉を言われたハートは動揺し、ソードはまた話した。

「言ったはずよ。私達は友達でも何でもないって……」

「まあまあ、一緒に闘う者同士、仲良くしよう！」

ビルドはソードを宥めようとするが、今度はビルドの方にも睨み付ける。

「奴らが本気で攻めてきたとき、貴方達は本当に大切なものを守れるの？」

ソードはキツク言っていたが、その目には怒りと悲しみが混ざっている眼だった。

しかしビルドは気にせず、自身の信念を語る。

「わからないけど、少なくとも俺は誰かを守るためにこの力があるんだ。

だから俺は大切な物はかならず守る。そのためにこの力を使う!!？」

ビルドが最後に意志を強く話す。ソードはそれを聞いて去って行く。

「あつー！待ってー！まだ聞きたいことがあるのだけどもー！あのくこれ、どうやって戻るのが!?」

しかし、ソードはハートの呼びかけに答えず、行ってしまった。

ビルド達と別れたソードは階段を下りていると、パートナーのダビィが声を掛けた。

「……どうして仲間にならなかつたダビィ?」

それを聞いたソードは立ち止まるが、ダビィは言い続ける。

「仲間なれば、私達が探している『うるさいわよダビィ!!?』ああ……」

「わたしは仲間なんて……いらない!」

そう言つてソードは再び歩き出した。

その時、彼女の脳裏には一人の少年の姿が映し出されていた。

「わたしの仲間は……あいつだけなんだから……」

そんな彼女の眩きを聞いた者は、ダビィ以外誰も居なかつた……

場面が変わり、クローバータワー。

晴夜達は変身を解除し、エレベーターに乗って下の階に降りていた。

そして下の階に着いた二人がエレベーターから出てくると、六花がこつちに振り向いた。

「マナ！晴夜君!!？」

六花が二人を呼ぶと、他の生徒や先生達も二人の所へ来た。

「無事だったか、二人とも！」

「マナ、怪我はない!!？」

「えっ？あゝ……うん……」

「大丈夫だよ！」

六花達の質問にマナと晴夜が答えた。

「そうだ！マナ！あのカニの化け物は!!？」

六花はジコチューの事をマナに聞いたが、彼女は疲れた状態で答えた。

「えーと……ごめんよくわからない……」

「ええ!!？」

「一日動きっぱなしでしたから疲れたかも……」

「……お前そんなに動いていたのか？」

マナが言った事に流石に驚いた晴夜。そして、晴夜達はそのままバスに戻った。

その帰り、晴夜はマナ達と一緒に家へと帰っていた。

「はあく……疲れたら、今日は流石に色々ありすぎー!」

「確かに、転校初日に色々ありすぎだー!」

マナと晴夜は疲れながら色々あったと言った。

「左様でございませわね、幸せの王子」

「……幸せの王子?」

「何それ?」

晴夜とマナは六花を見ていると、彼女は『幸せの王子』について語り出した。

「むかしむかし町角に瞳はサファイア、服のボタンはルビー、金箔で彩られた王子の像が建っていました。」

ある日、王子はツバメに頼みます。ツバメよ、町の恵まれない人々に私の体の一部を分け与えおくれよ……」

……と童話は語り終え、最後にポーズを決めた。

「童話?」

「そう、マナは昔からその王子さまにそっくり。他人の幸せばかり考えて、自分をすり減らしちゃうんだから」

六花は呆れながらマナに言った。

「べ、別にすり減ってなんかないよ？」

マナは髪を弄りながらそう答える。

「まだ言っていないことがあるでしょう？」

「え?!? どうしてわかるの?!?」

「伊達に10年マナの友達やっているわけだからね。それに晴夜君も何か隠しているよ
うね」

「……何のこと？」

「誤魔化さなくても、あなたはマナと似過ぎるから」

六花の言ったことに晴夜は黙ってしまい、晴夜はマナの方を見て、お互い頷いた。

「うん、じゃあ……驚かないで聞いてね、実は……」

「うんうん」

六花はマナの話を真剣に聞き、マナは自身達の秘密を語ろうとする。

「あたしと晴夜君……プリキュアと仮面ライダーに変身したの！」

マナが自分達が変わ身したことを話すと、六花はしばらく黙っていた。

「……はい？」

そして、マナの言ったことに我にかえった彼女は、意味が理解できずにいた。しかし

マナは説明を続けた。

「トランプ王国から来た妖精が私に不思議な力を与えてくれたのよ。

アタシはその力で変身して自己中人達と闘ったの。それと晴夜君は2本のボトルをベルトに差し込んで変身して……」

「だったら私は白いウサギの後を追いかけて世界の真実を暴きに行くわ」

（うわあ、これは絶対に信じてない!!?）

苦笑いをしながら、晴夜は心の中でそう思っている……

「マナ〜!」

三人の背後から呼び声が聞こえ、三人は背後を振り向くと、そこに二人の男女が一軒家から出ていた。マナの父親の健太郎、そして母親のあゆみだった。

「ただいま〜!」

マナはそんな二人に明るく答え、六花は言った。

「それじゃあ、また明日学校でね!」

「えっ……ちよつと!」

マナにそう言った後、階段を降りていく六花。

「今日は晩御飯を食べていかなくていいのかい?」

健太郎は六花にそう訊くが……

「大丈夫ですー！さよならー！」

そう言つて六花は自宅に帰つていった。

「……晴夜君、あたしどうすれば？」

「さあ……どうすればいいのかな……」

じゃあ、俺もうちこつちだから」

「晴夜君、この辺りに引越してきたの？」

「まあね。じゃあ、また明日!!？」

「じゃあね!!？」

そう言つて晴夜も自分の家の方へ帰つていく。

それを見ていたあゆみはマナに問いかけた。

「マナ、あの子つて？」

「今日、うちの学校に転校してきた桐ヶ谷晴夜君!!？」

「ふうくん……」

「どうしたの？」

何か考えている様子の妻に健太郎は聞き出した。

「あの桐ヶ谷君つて子……もしかして、将来マナの恋人なるかも？」

「えええええ!!？」

しばらくして、晴夜は自分がお世話なっている祖父母の家と帰宅した。

「ただいま〜」

「お帰り〜! 晴夜君!」

晴夜が帰宅すると、ハットを被った晴夜の叔父・右動総一郎がテンション高く現れた。

「どうだった。転校初日は?」

「うん、楽しかったよ。まあ……ちよつとゴタゴタに巻き込まれたけど……」

「ゴタゴタって、お前なんかまた、誰彼構わず人助けしたのか?」

総一郎が彼が何をしていたのかを察すると一息入れて、晴夜を見る。

「まあ、それがお前らしいけどな」

笑顔で晴夜に言うとき、晴夜も笑顔で返しそのまま歩いていく。

晴夜はそのまま目の前にある。冷蔵庫の扉を開ける。

すると、中は冷蔵庫ではなくどこかへ続く階段になっていた。

中に入り階段を降りると、中は思ったより広く。部屋の中は、無数の数学の計算式に作業するための道具や機材が置かれていた。

そして、何より特徴的なのは巨大な電子レンジのような機械が置かれていることだっ

た。

すると突然、レンジから爆発音とともにレンジの扉が開いた。

「出来たー！」

晴夜は勢いよく装置に向かっていき、中に置かれていたボトルを掴む。

「ガトリングか！今度はどんな技が使えるんだろ〜？」

晴夜がテンション高く自分の髪をかきながら呟くと、机に座って何かを作り始める。

翌日、晴夜は一人で学校へと登校していた。そして、鞆から小さな機関銃の形の銃を出した。

（昨日はこいつを完成させるのに時間掛けたな。今日もまた奴ら出たらこれを使うか！）

普通の人が聞いたら物騒だと思われる様なことを考えながら、晴夜は銃を鞆に入れる。校門の前に止まると、校門の前では生徒会が挨拶をしていた。

「お、生徒会の挨拶か！マナと六花は朝から大変だなあ、よし！俺も挨拶するか！！？」

晴夜はマナ達のところへ行き、晴夜は挨拶した。

「おはよう！」

「おはよう、晴夜君！」

晴夜が六花に挨拶すると、晴夜はチラツとマナの方を見た。だがマナは元気がないのか、昨日の明るさが出ていなかった。

「……まさか、昨日の事で悩んでるのか？」と晴夜が思っていると、マナは近くの木に向い、途中で晴夜も一緒に連れて行き、彼女のポケットからシャルルが出てきた。

「どうしたシャルル？」

「やっぱり話す!!？」

「ええ!!？」

マナの言った事に驚くシャルル。

「六花に隠し事なんて出来ないよ!」

「でも、もし六花が巻き込まれたらどうするんだよ?」

「そうシャルル! 友達が戦いに巻き込まれても良いシャルルか?」

晴夜達の言ったことにマナは黙ってしまった。

…そんな二人を、六花は不安そうに見ていた。

同じ頃、大貝中学の通学路。そこに一人の男子生徒が急ぎで登校していたが、信号が赤になってしまう。

「あくもう! また引つ掛かっちゃった! これじゃあ間に合わねえ!」

男子生徒は慌てながら言った。

「信号が好き勝手に変えられたら……遅刻しないで済むのにな……」

そう呟くと、男子生徒の心が黒くなり出したが、次に「でも、寝坊した俺が悪いからな……」と冷静になると、男子生徒のプシユケーの黒い部分が小さくなった。

「変えちゃいなよ……信号」

「だ、誰だ!?」

突然の囁き声に驚く男子生徒は上を向いた。そこに電柱に立っているイーラがいた。
……なぜそこにいるのかって？俺に質問するな！

「お前の望むの望み、叶えてやるよ！」

イーラはそう言うのと、指を「パチン！」と鳴らした。

すると男子生徒の胸から真つ黒に染まったプシユケーが出てきた。

「暴れる！お前の心の闇を解き放て!!？」

イーラが叫ぶと、黒く染まったプシユケーは信号機の姿をしたジコチューに変わった。
「ストップ！」

ジコチューが叫ぶながら顔の赤い信号から赤い光線を放つと、車や人が止まってしまった。

それを見たイーラは笑いながら「いいぞ！その調子だ!!？」と言いながら、ジコチューと共にそのまま大貝中学へ向かった。

…そしてイーラ達がいなくなると、倒れている男子生徒の近くに血のように赤いワイレットがイメージカラーの姿を纏った者が立っており、バルブが装備された小型な剣を男子生徒に向けて、そこからガスが発射された。

すると男子生徒が立ち上がり、その姿が怪物に変貌した。

『さあ！存分に暴れてビルドを倒せ!!』

そう命じられた怪物は頷きながらイーラ達の後を追い、怪物にさせた奴は姿を消した。

一方、晴夜達の話はまだ続いていた。

「相手の為に思つてのウソだつてあるシャル！」

「でも……」

六花にプリキュアの事を話すべきなのか、話さないべきなのか悩むマナを晴夜は見ているしかなかった。

その時、突然悲鳴が聞こえた。そこには信号機のジコチューが生徒達の動きを止めていた。晴夜達はすぐ外に出て駆けつけて来た。

「あれは……！」

「ジコチュー！また出てきたのかよ!!?」

ジコチューが現れた事に驚く晴夜とマナ。

そして晴夜達の様子を見ていた六花も一緒に外へ出てきた。

「マナ……!!」

「ジコチューシヤル……」

晴夜とマナはジコチューを見て、お互い頷きあつた。

「大丈夫だよみんな。私と晴夜君がなんとかする。六花！安全な場所に避難させて！」

近くにいた六花にマナはそう言った。

「マナ達は どうするの!!?」

「あの信号を止める！」

六花の疑問に、マナと晴夜はジコチューを見ながら答える。

「この幸せ王子達！」

「え？」

突然、マナは六花にそう叫ばれると振り向いた。

「広場に建っている王子の銅像には困っている人達に金箔を配るツバメが必要なのよ！」

私はあなた達のツバメにはなれない!!?」

六花は昨日話した童話の事を言いながら二人に叫んだ。

「六花……」

真剣な表情で六花を見るマナ。それを見ている晴夜は髪をかき、そして二人に言った。

「はあく……最悪だ。じゃあ三人で力を合わせよう!!?」

マナと六花は頷き、三人は体育倉庫に向かい、体育倉庫の扉を開けた。

そしてマナと六花は大量のバスケットボールを出し、ジコチューへと転がした。

大量のバスケットボールはジコチューへと転がり、それを踏んだジコチューはそのまま転び、後ろに運ばれた。

「みんな！今のうちに逃げて！」

マナは生徒達に避難するように言い、生徒達は避難をした。

そして立ち上がったジコチューはまた光線を放ち、ボールの動きを止めた。

「俺様の道にボールを転がした奴は誰だ!?!?」

「はい！あたしです！」

「あと、俺ね！」

晴夜とマナは同時に手を上げながら、自分達がボールを転がしたと馬鹿正直に言った。

「マナ!!? 晴夜君!!?」

「許さ〜ん!」

ジコチューは二人へと走り出し、近づき始める。そこへちようどイーラも到着していた。

「行くよ、シャルル!」

マナはラブリーコミュニケーションを出し、シャルルに言った。

「ま、まさか……友達の前に変身するシャル?」

「うん、変身する!」

「ええ〜〜〜!!?」

マナの言ったことにシャルルは驚きを隠せず、思わず叫んでしまった。

そんな中、晴夜はビルドドライバーを出しながらシャルルに言った。

「シャルル、今は正体の問題じゃない!!? あいつを止めることだ!」

「そうだよ!それに、今まで散々巻き込まれたんだもん……そうだよね? 六花」

「どうなつても知らないシャル〜!」

「行くよ!晴夜君!!?」

「ああ!」

マナは晴夜に言い、まず最初にマナがキュアラビーズをラブリーコミュニケーションにセット

して叫んだ。

「プリキュアラブリンク!」

マナは掛け声と同時にラブリコミュニケーションを「L・O・V・E」と描く。

『L・O・V・E!』

すると、マナの髪は長くなり、頭頂部でハート型に結び金色に変色し、次に衣装がピンク色のコスチュームになり。アームバンドとブーツそして腰にリボンが着いて、最後にキャリーにシャルルが入り、決めポーズをしながら名乗りを上げた。

「みなぎる愛! キュアハート!!?」

「愛を無くした悲しい信号機さん! このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻してみせる!」

決めポーズを決めたハートが胸の所に手でハートマークを作りながら、ジコチューに言い終えると:

「さあ、実験を始めようか!!?」

晴夜はビルドドライバーを装着し、2本のボトルを出し、振り出すといくつかの数式が出現した。振り終わるとドライバーに2本のボトルを差し込む。

『ラビット! タンク! ベストマッチ!』

ベルトから音声が鳴るとドライバーのレバーを回し、前後のパイプ線からランナーが

出現されると、再度音声が流れた。

『Are you ready?』

「変身!!?」

腕を構え、一度交差した後に体を広げると、前後のランナーが合体し、体から蒸気が出た。

『鋼のムーンサルト! ラビットタンク! イェーイ!』

二人が変身したのを見た六花はかなり驚いていた。

「嘘……マナと晴夜君が、変身した……?」

そしてビルドとハートはジコチューの攻撃をかわして、二人の息の合った動きでジコチューにカウンター攻撃でジコチューを吹っ飛ばした。そんな二人を見ていた六花は唖然としながら見ていた。

『あたしと晴夜君……プリキュアと仮面ライダーに変身したの!』

その時、六花は昨日の夕方、マナが言ったことを思い出した。

「いくら友達だからって……こんなの信じられないじゃない……」

あんたって本当にあり得ないんだから!!?」

ハートはジコチューを右腕で殴り吹っ飛ばした。

だが吹っ飛んだジコチューはハートに『ストツプ!』と光線を浴びせ動きを止めると、彼女はそのまま動けなくなってしまった。

「マナー!」

「ハート!」

ハートを助けに行こうとしたその時、突然誰かがビルドに攻撃してきた。

「うわあつ!?? 誰だ!??」

ビルドはすぐに立ち上がり、自分を攻撃してきた者を見た。

攻撃してきたのは先程ワインレッドの怪人が作った怪物『スマツシユ』だった。

「スマツシユ!!? 何でここにいるんだ!??」

だがスマツシユは全く答えず、ビルドに攻撃を仕掛けてきた。ビルドはスマツシユの両腕から生えた剣による攻撃をかわしながらハートを見ていた。

「くそ!これじゃあ、ハートを助けに行けない!!?」

彼女を助けようとするも、スマツシユがそれを妨害してくるため、助けに行けなかった。

再びハートの方を見るとなんと、後ろからジコチューに近づこうとしている六花の姿があった。そして、何かのボタンを押した後、光線を浴びてしまった。

「六花!!?」

光線で止まったハートを踏み潰そうしているジコチューの姿を見たビルドはスマッシュを払いのけ、ドライバーからドリルクラッシュャーを形成。モードをガンモードに切り替えるとジコチューに向けて発射し、ジコチューの態勢を崩した。

すると、ジコチューの信号の色は青に変わり、この隙に戻ったハートは間一髪で回避し、六花も自由になった。

「ありがとう晴夜君!!? それに六花!!?」

「一気に決める!!? 俺はスマッシュを、ハートはジコチューを頼む」

「わかった!」

ビルドはスマッシュの戦闘に戻るが、スマッシュもとい『ミラージスマッシュ』の分身攻撃に苦戦する。

しかし新しいボトルを2本取り出して振り、ボトルの上にある栓を回すと、ドライバーに差し込む。

『タカ!ガトリング!ベストマッチ!』

ベストマッチである事を確認するとレバーを回し、前後から現れたパイプ線から橙色と銀色のアーマーが形成される。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

二つのランナーが合体し、体から蒸気が流れ、音声が出た。

『天空の暴れん坊! ホークガトリング! イエーイ!』

背中にタカのような翼——『ソレスタルウイング』が出現、体はタカとガトリングのシルエットの姿になり、ドライバーから小さなガトリングの銃が形成された。

『ホークガトリング!』

「勝利の法則は、決まった!!?」

決めゼリフを言うと、翼を広げ空中を飛び回るタカのような動きでスマッシュは翻弄する。

それから逃げるためスマッシュは高く飛んで分身し攻撃をするつもりだったが、ビルドも後に続き高く飛び、ホークガトリングのシリンドラーを回した。

『テン! トウエンティ! サーティ! フォーティ! ファイティ!』

「まだまだ!」

シックスティ! セブティ! エイティ! ナインティ! ワンハンドレッド!』

『フルバレット!』

空中に球体のフィールドが形成され、スマッシュをその中におびき寄せ、フィールド内でスマッシュに全弾命中させる。

全弾撃ち終わるとフィールドは消え、スマッシュは地面へと落下していた。

そして無事に着地したビルドは、色のないボトルのキャップを開いてスマッシュに向けた。

するとスマッシュから粒子が放出されて、それが全てボトルに吸収されると、スマッシュは人の姿に戻った。

一方、ハートの方も決着が付く感じだった。

「行くよ、シャルル！」

「シャルル〜！」

キュアラビーズを取り出し、それをラブリーコミュニケーションにつけ、画面にハートを描くようになぞった。

「貴方に届け！　マイスイートハート！」

ハートが放った必殺技を喰らったジコチューはそのまま浄化された。

「ラブラブラ〜ブ！」

ジコチューが浄化された事でプシケーに戻ると、スマッシュになった男子生徒の所へ飛び、元に戻った。

そしてそれを見たイーラは「ちつくしよく！覚えてろよプリキュア！仮面ライダービルド!!？」と言い、そのままどこかへ逃げて行った。一方のビルドは、倒れている男子

生徒のところへ歩いて来た。

「あのプシユケー、こいつのだったのか!でも、なんでこいつがあのスマツシユに……」
成分を吸収したボトルを見て、何故彼がスマツシユになったのだと呟く。

「晴夜君、それって何?」

「これは、あのスマツシユから採取した成分。こうする事で元に戻す事が出来るんだ。

とりあえず、一件落着したな!」

「そうだね、とにかくやったね!」

「ああ!」

ビルドとハートはお互い顔を見て、二人でハイタッチをし、丁度六花が二人に駆け寄って来た。それを見て、二人は変身を解除し、元の姿へと戻った。

「マナ!晴夜君!大丈夫?」

「大丈夫だよ六花!」

「問題なし!」

そして、しばらくして帰り道。

「マナってば、どうして厄介事にばかり抱え込むのかしら?生徒会に立候補した時だつてさ……」

「悪かったって、謝るからさ……」

「本当に反省してる？」

「してるしてる！」

マナが反省している様子を見た六花は納得した。

「ならよろしい♪話も本当の事を伝えてくれて嬉しかったよ、ありがとう」

「六花……」

「よかったなマナ！信じてもらえて!!？」

「うん♪」

晴夜がマナに言うと、マナは満面な笑みを浮かんだ。そして晴夜は六花に話しかける。

「六花」

「ん？なに？」

六花に言うと、晴夜は右手を差し出し、それを見た六花は理解し、握手した。

「よろしく!!？」

「(こちらこそ、よろしく!!?)」

一方、シャルルは「結局巻き込んだじゃったシャル、ラケル達に怒られるシャル……」と、言っていたそうなの。

次回! Re. ドキドキ&サイエンス!
第3話 誕生! ダイヤモンドなプリキュア

第3話 誕生！ダイヤモンドなプリキュア

大貝第一中学校の理科室。

そこでは六花が顕微鏡で、マナのキュアラビーズと晴夜のボトルを調べていた。そこには晴夜もおり、マナも理科室に入ってきて来た。

「お待たせ、何か解った？」

マナが六花に聞くと六花は答える。

「詳しいことはわからないけど、このキュアラビーズってのは、地球上の物質には存在しない物だとわかったわ」

「何ですと!?？」

(……やっぱりか)

マナは驚き、晴夜は自身の想像通りだと思っていると、六花はボトルを手を持ちながら話を続ける。

「それと晴夜君、このボトルって生き物と機械モチーフなの？」

「有機物と無機物な！実際の所よくわかんないんだ。家の地下室のケースに入っていたんだ」

「地下室!晴夜君の家に地下室なんてあるの?」

「まあな、そのケースにドライバーとボトルが入っていたんだ」

晴夜はその時、ケースに入っていたドライバーと二本の赤と青のボトル、そして沢山ある白いボトルと”とある資料”が入って合ったことを思い出しながら、マナにそう語る。

「そうなんだ……後、あたしの変身時に出たのともう一つはクローバータワーの露店のお兄さんに貰ったの」

「ふうくん……あなた達は何か知ってるの?」

六花はシャルル達に問いかけたが…

「さあ?」

「僕達は生まれてすぐにこっちに来たら、よく知らないケル」

「え?お前たちって子供なのか?」

「うん」

シャルル達が答えると、六花が晴夜に聞いて来た。

「ねえ、晴夜君」

「ん?なに?」

「このボトルってどうやって作るの?」

「あ、それあたしも気になってた!」

マナと六花がボトルについて知りたいと聞くと、晴夜は黒板に文字の他、スマツシユやボトルの絵を書き、説明を始めた。

「とりあえず、これ読んで!!?」

「えつくと、ボトルの作成。」

まずスマツシユになった人間を元に戻す、倒してエンプティボトルでその成分を抜きとる、成分を採取したボトルを浄化すれば、仮面ライダーのボトルとして使える。更にビルドの戦闘データからでもボトルは精製できる!」

「あの、スマツシユって怪物から抜き取ればこのボトルが作れるんだ。で、晴夜君は今いくつボトルを持っているの?」

「ボトルの数は……あれ、いくつだっけ?」

「ちよつと、晴夜君しつかりしてよ!」

「ごめん」

そんな感じで晴夜達が話していると、理科室のドアが開き先生が入ってきた。

「ん?何だまだ残っていたのか?」

「あつ、はい!ちよつと調べたい物がありました!」

マナはすぐに先生を誤魔化し、シャルル達は慌てて晴夜の後ろに隠れた。

「……早く片付けないと、校門閉めるぞ?」

先生がそう言うのと晴夜達は急いで器具を片付け、シャルル達を鞆の中に入れ、すぐに校舎に出た。

帰り道、晴夜達はさっきの話を続きをした。

「それにしても、マナに渡したキュアラビーズをくれたお兄さんが気になるわね」

「確かに。一体誰なんだろうな? 昨日は会うことなかったから……ってあれ? マナは?」

マナがいない事に気付いた二人はマナを探すと、マナは真琴のポスターに見惚れていた。

「わあくまこぴーだ〜!」

そんなマナを六花は呆れながら見て、マナは二人の方を向きながら真琴について話した。

「ねえねえ知ってる? 今度、四葉スタジアムでやるまこぴーのコンサート! 6万枚のチケットがたった3分で売り切れたらしいよ! あく私も行きたかったな〜!」

「3分で!?? すごい人気だな」

「二人共、浮かれている場合じゃないでしょ?」

「そうだけれ!」

「マナを助けたプリキュアの正体も分かっていないシャル!」
「そういえば、キュアソードは何者なんだろうな?」

シャルル達と晴夜が言うと、マナはソードの事を考える。

「マナ?」

六花がマナを呼ぶと、彼女のお腹からぐうぐうと鳴った。

「よーし! お腹も減って来た事ですし、家で晩御飯でも食べながら対策を練るとしましようか!」

「異議なし!」

「おー!」

「じゃあお言葉に甘えて!」

晴夜達もマナの意見に賛成し、六花は「それじゃあ、今連絡しないとね」と言って、鞆から携帯を取り出し、電話をし始めた。

「何をしているケル?」

「六花のお母さんはお医者さんで夜お家にいない事が多いのよ、だからああやって連絡しているの」

「そうなの? 大変だな。まあ、俺の母さんもだけど」

「え? 晴夜君のお母さんも医者なの?」

「いや、俺の母さんは研究者なんだ。今アメリカいる!」

「アメリカ!?」

マナは晴夜のセリフに驚愕した。

場所が変わりマナの家『ぶたのしっぽ亭』では、マナの父特製のオムライスが用意されていた。

「どうぞ、召し上がれ!」

「いただきます!」

マナと六花は前にあるオムライスを食べ始め、二人は喜びながら「おいしく!」と頬を触れる。

「やっぱりお父さんの料理は美味し〜!」

「やっぱりマナのお父さんの料理は最高です!」

「それはよかった」

「流石はあたしのお父さんだよ!」

マナ達が言っていると、「うほん!」と咳き込む声が聞こえて横を見ると、マナの祖父の宗吉が健太郎の料理を食べながら口を開いた。

「ワシに比べたら半人前だな」

「なら勝負してみますか？お義父さん」

「望む所だ！」

「いつまでも昔の私と思つたら大間違いですよ！」

「何のまだまだ！」

鬪争心を向き出す二人。そんな中ドアが開き、そこに晴夜が入つて来た。

「よ！遅くなつてごめん！」

「いらつしやい晴夜君、何やつてたの？」

マナがそう聞くと、晴夜はポケットから黄色と紫、2本のボトルを出した。

「これって、新しいボトル？」

「ああ！次はどんな技使えるのか楽しみだ！」

それから晴夜もマナの家で御馳走になり、マナは晴夜と六花を見送るために外に出て、晴夜達はお礼を言つた。

「御馳走さまでした!!？」

「お粗末さまでした」

そのまま二人は家に帰ろうとすると、ラケルがキュアソードとラビーズの話进行し、六花に自身のアイディアを伝える。

「いつそのこと、六花もプリキュアになったらいいケル!!？」

「えっ!? 私かプリキュアに?」

それを聞いた六花はおもわず驚いてしまう。

「僕は六花ならいいと思ってるケル!」

「それいい!!? 六花がいれば百人力だよ!!?」

「いいんじゃないか! それに同じ秘密を持つ者同士なんだし」

マナ達はそう言うが、六花は乗り気でないようだった。

「あたしには、無理だよ。マナみたいにスポーツ万能じゃないし、人前にも出るのも苦手。

あんなヒラヒラの服、私には似合わない!」

そう言っつて六花は自宅へ帰っていった。

そして場所が変わり、どこかのクラブのような雰囲気醸し出すボウリング場。そこでボウリングをしているイーラを、マーモは飲み物を飲みながら見ていた。

「随分荒れてるわね〜」

「あつたり前だろう!? 僕のジコチューを2回もやられて……ぐぬぬぬ!」

イーラは2回もやられたことにとてもイラ立っていた。すると、

「熱くなつたらゲームに勝てないぞ? イーラ」

カウンター席に座っていたグラサンをかけている男がイーラに言った。

「『ベール』？？」

「あゝら、あなたも来ていたの？」

「上からの命令でね？様子を見に来た。お前達、小娘一人に何手こずっているんだ？」

「一人じゃない！」

「増えたのよ！プリキュアは二人に……それに仮面ライダービルドというのが現れたのよ！」

マーモがベールにビルドの名を言うと、聞き覚えのある名だと思い、記憶を探る。

「ビルド？……ああ、『スターク』が言っていた奴か」

「あら、知ってたの？」

「名前だけだな。とにかく厄介になる前に潰すか？」

「フン、ビルドもプリキュアなんか僕が倒してやるさ！」

イーラはそう言いながらボールを投げ、ストライクを取ると、そのまま出て行った。

翌日、六花は手紙をポストの中に入れていた。

「らぶれちや〜？」

「マナ!??それに晴夜君も!??」

そんな六花の背後に二人が現れ、話しかけてきた。

「ラブレターなの!??青春してるな六花!」

「お父さんです!返事を書かないと拗ねるんだもの……」

「手紙を貰ったら誰だつて嬉しいもんですよ。ましてや実の娘からともなれば!」

「だったらマナや晴夜君も書いてあげれば?」

「ウチのパパは六花のお父さんのように海外に行かないし……家の中でやり取りをして
も意味ないしね」

「俺も母さんとは、ビデオ電話でやり取りしているから問題ないよ」

「ほら、マナのお父さんは料理で人を感動させられる素敵な人じゃない?晴夜君のお母
さんも研究者として頑張っているし、そういうパパとママは素敵つて所を手紙にしたら
?」

「写真のコンクールで賞を取っちゃう六花のパパほどじゃありませんよ」

とマナ達は笑いながら話していると、シャルル達は三人に早くしてと言った。

「三人共早く行くシャル!」

「ラビーズをくれたお兄さんに話を聞きに行くケルよ!」

「はいはい、今行きます」と、マナは言いながら歩くと、途中誰かとぶつかり尻餅をつい

た。

「いったーい！」

「ごめんね、怪我はないかい？」

そう言いながら青年はマナに手を差し伸べる。

「あ、どうもすいません……」

マナを青年の手を取り、立ち上がって青年の顔を見て、驚いた。

「あつ、こんにちは！」

「知り合い？」

「さっき言ってたマナにキュアラビーズをくれたお兄さんだよ」

そう、彼こそがマナ達を探していた、マナにラビーズを渡したお兄さんだった。

「やあ、また会ったね、レディ、そして少年君。こんな所で再会するなんて運命が呼んだかの様だよ。」

そう言えば自己紹介がまだだったね？僕はジョー岡田、好きに呼んでいいよ」

「今日はどうしたんですか？また何処かに露店をしてるんですか？」

「違うよ。僕はここで新しい店を開店したんだよ」

「へえ、店をやるんだ！」

「かわいい〜！」

マナは呑気に言っていると、六花がジョーに聞く。

「あなたに聞きたい事が山程あるんですけど、いいですか?」

その頃、別の場所。二人の少女がポストの前で話をしていた。

「早く出しなよ!ラブレター!」

「で、でも……返事をもらえなかつたらどうしよう……」

そう会話をする二人の少女を、一人の青年が見ていた。

「ちっ、なにがラブレターだ?俺なんて女子から年賀状さえ貰ったことねえぞ?」

ラブレターを貰うであろう相手への嫉妬心からそう呟く青年。すると青年のプシユケーが少し黒く染まった。

「手紙なんて届かなければいいんだ!」

吐き捨てるようようにそう答える青年は、ふと視線を感じ振り返ると二人の少女が青年の方をジト目で見ており、「いこいこ」と言つてその場から去つて行つた。

「いかんいかん!そんな事ばつか言っているから俺はモテないんだよな」

反省する青年、プシユケーに染まっていた黒く部分も小さくなつていた。

「お前は悪くないよ?」

「誰だ?」

突然、声が聞こえ青年が振り返ると、ポストに少年が立っていた。その少年はイーラだった。

「お前の望み！叶えてやるよ」

イーラはそう呟いた後、指をパチンと鳴らす。それと同時に青年のプシユケーは全て黒く染まった。

「うわああああああく!!」

青年の胸からプシユケーが出てきた。

「暴れる!!? お前の心を解き放て!」

イーラがそう叫ぶとジコチューが生まれた。それは体がポストで顔がヤギのジコチューだった。

「手紙なんて届かなければいいー!」

そう叫んでポストを破壊するジコチュー。そして、イーラの後ろからワインレッドの姿の人物が現れた。

『よっ!イーラ、なかなか頑張ってるな!!?』

「スターク!!? 何しに来た!」

『おいおいそんな冷たいことを言うなよ? 一応仲間なんだしな!!? それに今日は手伝い来たんだ』

スタークはジコチューの青年に短剣のようなものを向けガスを発射させた、すると青年はスマツシユへと変わった。

『んじゃ!頑張れよ!』

そう言うのと煙を纏って、スタークは消えていった。

「まあいい、利用させて貰う。さあ!出てこいプリキュア!ビルド!今度こそお前らを墓場に……!」

そう叫ぶイーラだったがジコチューは「手紙うめーや」と言って手紙を食べ始め、スマツシユもその場から動かなかった。

「つて!何やってんだ!もつと暴れろよ!」

ジコチューとスマツシユにキレるイーラ、しかしジコチューは「ハガキもうめー!」と言ふ事を聞かなかった。

「……」

スマツシユもジコチューの横で突っ立てるだけで何もしない。

「つたく自己中な奴だなお前ら!」

その頃、シャルルとラケルが何かを感じた。

「大変シャル!」

「どうしたの？」

「まさか！」

二匹の妖精を見る晴夜とマナ、六花はジョーと話していた。

「ジコチューの鼓動が聞こえるケル！」

ラケルからそう聞いて、晴夜とマナは驚く。

「やっぱりか！」

「六花！」

そしてマナは六花の名前を呼び、名前を呼ばれた本人は振り返る。

「お友達が呼んでいるよ」

そう言うジョーの事を、六花はかなり怪しんでいた。

ちなみにラビーズの事を聞き出そうとしたがはぐらかされ、その過程でラビーズを受

け取っていた。

「すぐ戻ってきます！行こう！」

「うん！」

「それじゃ行くか！」

三人はジコチューがいる場所に向かい、それをジョーは微笑みながら見送るのであった。

そして三人は現場に到着する。

「よう!ジコチューさん!」

「手紙を食べている!?」

と六花らがそう言っていると、ジコチューを止めるために晴夜はマナを見て口を開いた。

「行くぞ!!? マナ!」

「うん!行くよ、シャルル!」

「わかったシャルル!」

そう言っただけで晴夜はドライバーを装着し、マナは構え、そしてシャルルはラブリーコミュニケーションに変化し、ラブリーコミュニケーションにキュアラビーズをはめ込んだ。

「プリキュア、ラブリンク!」

マナの掛け声とともにラブリーコミュニケーションの画面に指で「L・O・V・E」と描く。

『L・O・V・E!』

すると髪が長くなり、頭頂部でハート型に結われ、金色になる。次に衣服がピンク色のコスチュームになり、アームバンドとブーツ、そして腰の横にリボンがついて、キャリーにシャルルが入り、彼女はポーズを決めながら叫ぶ。

「みなぎる愛！キュアハート！」

「愛をなくした悲しいヤギさん！このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻してあげる！」

手でハートマークを作り、ヤギのジコチューに叫ぶ。

そして晴夜は2本のボトルを数回振り、上の栓を開けた。

「さあ、実験を始めようか！」

そのまま2本のボトルをドライバーに差し込む。

『ラビット！ タンク！ ベストマッチ！』

レバーを回し、前後からプラモのランナーの様なビルダーが形成され、赤と青のアーマーができる的叫んだ。

『Are you ready?』

「変身!!」

二つのアーマーが合体して、体から蒸気が流れると、音声 flowed。

『鋼のムーンサルト！ ラビットタンク！ イエーイー！』

そして晴夜は、科学の力の戦士『ビルド』へと姿が変わった。

「よし！行き…うわあ!!?」

しかし突然、横から何者かが攻撃してきてビルドとハートはそれを避ける。

「なに!?」

ハートは戸惑いの言葉を言い、ビルドも言葉をこぼす。

そこには積層模型の様な身体とプレス機を彷彿とさせる大きな両手、黄緑色のタレ目
が特徴的な怪人・プレススマッシュがいた。

「スマッシュ!なんでこんな時に!!?...ハート、お前はジコチューを頼む!」
「わかった!」

ハートはビルドの言うとおりにジコチューと、ビルドはスマッシュと闘い始めた。

「来るか!ジコチュー!あいつを片付けろ!」

イーラがジコチューに指示するが、ジコチューは今でも手紙を食べていた。

「少しは僕の言う事を聞け!」

イーラが怒鳴っているとハートは落ちてある手紙に気付く。

「これって、街の人達の手紙!??六花のエアメールも!!?」

落ちている手紙を急いで拾うが、ジコチューはその隙に彼女へ攻撃してきた。

「きゃああああ!」

「ちよつと!どうして闘わないの!??」

「みんなが書いた手紙を食べられる訳にはいかないもん!」

一方、ビルドはプレススマッシュから放たれる巨大な手による攻撃に苦しめられてい

た。

「くそ！ だったらこれでどうだ!!?」

ビルドはボトルを抜き、紫色と黄色のボトルを取り出し、振り出してボトルの栓を開け、ドライバーに差し込む。

『忍者！ コミック！ ベストマッチ！』

「ベストマッチか!!? よし、いける！」

レバーを回し、前後から紫と黄色のアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!!?」

二つのアーマーが合体した。その姿は複眼に十字手裏剣と漫画のページとペンを用いており、アンテナは刃の一つとペンとなり、忍者衣装と手足にはペン先型のアーマー、肩部はコミックス型のアーマーが装着され、音声 flowed。

『忍びのエンターテイナー！ ニンニンコミック！ イェーイ！』

そして、ドライバーから刀のようなものが形成された。

『四コマ忍法刀！』

「勝利の法則は、決まった!!?」

一方六花はハートの光景を見て、自分とマナが始めて会った事を思い出した。

(私はずっとマナがいてくれたから毎日が楽しかった……輝いていた)

六花は今までマナと過ごした事を思い出していると、さっきジヨーから貰ったキュアラビーズを見た。

『その力をどう使うか……それを決めるのは君自身だよ』

ジヨーから言われた事を思い出した六花は強く想う。

(私の力!)

その時。突然六花が持っていたキュアラビーズが強く光り出した。

「えっ!!?」

「この光は!!?」

「ハートの時と同じだ!」

六花を見ていたハートとビルドは驚き、ラケルはラブリーコミュニケーションに姿を変えた。

「六花!その光を僕に渡すケル!」

「うん!」

「ラケル!」

六花はラブリーコミュニケーションにキュアラビーズをセットし、掛け声を出す。

「プリキュア・ラブリンク！」

掛け声とともに六花はラブリーコミュニケーションに【L・O・V・E】と描く。

『L・O・V・E！』

すると、六花は光に包まれる。髪は伸び、頭頂部に髪飾りが結ばれ、色は青色がメインとなっており、服装も青色のコスチュームに。髪飾りと耳飾りはダイアの形になり、そして変身が完了した時、彼女は名乗りを上げる。

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

名乗りを上げたダイヤモンドは、ジコチューとイーラに決め台詞を言う。

「人の思い踏みにじるなんて許さない！このキュアダイヤモンドがあなたの頭を冷やしてあげる！」

ダイヤモンドはそう言いながら手でダイヤモンドの形を作った。

「キュアダイヤモンド！」

「新たなプリキュアの誕生か……なら俺も決めますか！」

それを見た後、ビルドはスマッシュへ四コマ忍法刀で攻撃しながら、刀のトリガーを押し、そこから音声 flowed。

『分身の術！』

すると、ビルドが分身し、四方からの攻撃でスマッシュを翻弄し、ビルドはさらに刀

のトリガーを2回押した。

『火遁の術!』

ビルドの分身が一つとなり、刀に炎を纏った。

「はあああああ!!?」

スマツシユを一刀両断するような攻撃が直撃し、スマツシユは倒れた。ビルドは白いボトルの栓を開け、スマツシユから成分を抜き取り、スマツシユは元の青年へと戻った。

そしてキユアダイヤモンドの方も戦いを終えようとしていた。

(私もマナと一緒に飛べる!どこまでも高く!)

そしてダイヤモンドはラビーズを出すと、それをラブリーコミュニケーションに装着し画面を指でなぞった。

「煌めきなさい!トウインクルダイヤモンド!」

ダイヤモンドの掛け声と共に右手の人差し指から無数のひし形のエネルギーをジコチューに向けて発射する。トウインクルダイヤモンドはジコチューに命中し『ラブラブ、ラ〜ブ!』と叫び消滅する。プシケューはスマツシユから元に戻った青年の元に戻り、破壊されたポストも修復された。

「くそ!覚えてろよ!」

イーラはそう言つてその場から去つていく。

「晴夜君！キュアハート！」

「何？」

「ん？」

ダイヤモンドを見る二人、するとダイヤモンドは親指を立てた。それを見た二人も親指を立て応えるのであった。

その後晴夜達は変身を解き、公園でマナは六花がプリキュアに変身した事を喜んで
た。

「でも良かったよ！六花だったら絶対に変身できるって信じていたから！」

マナがそう六花に言うと、彼女はラビーズを見る。

「六花！これからよろしくケル！」

そう六花に言うラケル。

「うん！」

六花もそうラケルに返事を返す。

「ラケルのパートナーも見つかったし、後はランスだけシャルね」

「……あれ、そういえばランスは？」

ふと何かに気付く晴夜達、晴夜は頭を抱え込みながら思い出す。

「ランス!?!?」

「どこに行ったケル!?!?」

ランスがいないうちに気付く一同、そこで晴夜はランスがいなかった事を思い出し、思わず髪をかく。

「最悪だ! そういえばあいつが居なかった!」

「「大変! ランスがいないうち!?!?」」

そう叫んで慌てる一同。

そこへ、公園に停まる一台の車が現れ、その車から一人の少女が降りてきた。

「お困りのようですね?」

茶髪で左右に二段のお団子を作り、クローバーのアクセサリーをいくつか付けたその少女の言葉を聞いて、晴夜達は振り返る。

「誰?」

晴夜は突如現れた少女に何者なのか問いかけたが、マナと六花が少女の代わりに名をあげた。

「「ありす!!?」」

そこに立っていた一人の少女、それはマナと六花の友達であり幼馴染の『四葉ありす』であったのだった。

「ごきげんよう、マナちゃん、六花ちゃん、それと初めまして、桐ヶ谷晴夜さん」
そう笑顔で挨拶するありす。

「誰……………シヤル？」

ありすを見てシヤルルもそう眩くのだった。

次回！Re. ドキドキ&サイエンス！

第4話 ポカポカ！キュアロゼツタ登場!!？

第4話 ポカポカ!キュアロゼッタ登場!!?

ありすが小学生だった頃、お嬢様である事で少しだけからかわれる事があった。

「返して下さ〜い!」

「うるせえ!お嬢様だからって七十二色の色鉛筆なんて生意気なんだよ!」

「そんな〜!」

そして今、ありすは色鉛筆を持った男子生徒に返すよう頼み込むが、男子生徒の一人から五月蠅えと叫ばれ、涙眼になったその時だった。

「止めなさい!」

男子生徒が振り向くと、そこにはマナと六花がおり、マナは男子生徒に向かって怒鳴る。

「寄って集まって女子をからかうなんて、最低よ!!?」

彼女の説教に男子生徒は言葉に詰まり、ありすの顔には助けが来たことに対する喜びの笑顔が浮かび出る。

「マナちゃん……!」

——それは、ありすが小学生の思い出のことであり、彼女の中では良い思い出のひ

とつであつた。

時は戻り、晴夜達はありすの豪邸にお邪魔していた。

そこへセバスチャンが彼らの前に置かれたカップに紅茶を入れてくれた。

「本日の紅茶はダージリンのファーストフラッシュです。お好みでサクラのジャムと一緒に召し上がり下さい」

マナと六花、晴夜は差し出された紅茶を飲み、三人はその美味しさに笑みがこぼれる。

「はあ……あつ!??美味い!」

「あつ美味しい!」

「なんか春って感じね」

そう言葉がこぼれたことにありすは笑みを浮かべる、そんな中で晴夜は彼女に問う。

「あのく話って何ですか?」

「桐ヶ谷さん、そんなにかしこまらないでください。自然で大丈夫です」

「はあ……」

「確かお茶会は来週だったよね?」

六花は何故今、自分達と紅茶を飲んでいるのか疑問に思っていた。

それに対しありすは一口、紅茶を口にしてから話し出す。

「はい、それは……『プリキュア』と『仮面ライダー』の事です」

それに対して晴夜は目を大きく開き、マナと六花は飲んでいた紅茶を思わず吐き出そうとしてしまう。

「ブツ！ゲホゲホ！」

「な……なんでそれを？」

晴夜は何故ビルドとプリキュアの事をありすが知っているのかを聞いて、ありすは答える。

「それは、セバスチャン」

「はい」

セバスチャンは服からリモコンを取り出して操作し、空いている椅子が浮き上がって、それを晴夜達は思わず『えっ?』と言葉がこぼれる。

そしてそこにはミニサイズのソファーに寝そべって、ポップコーンとオレンジジュースを飲んでいるランスが居たのだった。

「あつ?どうもでランス〜!?」

「ラ……ランス〜!?」

驚きを隠せない晴夜達、シャルル達らはランスに事情を聞いていた。

「ランス、これは一体どう言うことシャル？」

「それは……」

ランスが説明すると、あの日晴夜達がシャルル達を連れて帰ったのであったが、どうもランスだけが置いてきぼりになっていて、起きた時にはもう誰もいなかったのだ。

そして外に出て皆を探しに行っていた際に車に引かれそうになった時、その車の持ち主であるありすに拾われたらしい。

「と言う訳ランス」

「なるほどね」

「プリキュアの秘密を喋っちゃ駄目でケル！」

ラケルに怒られたランスはとっさにありすの後ろに隠れる。

「ス、怒られたランス」

「この子を責めるのはお門違いですわ、セバスチャン」

「はい」

そうセバスチャンは再びリモコンを操作して、窓のシャッターが閉まって暗くなる
と、天井からシアタースクリーンが出て来てそこから映像が出て来る。

その映し出される映像にマナ達は思わず呆然としてしまう。

『変身!!?』

『プリキュアー!ラブリンク!』

それは晴夜がビルドに変身するシーンとマナがキュアハートに変身するシーンだった。

「俺ってなかなかいけてるな?」

驚きのあまり目を丸くするマナ達とは別に、晴夜は自分が映っている映像に感心する。六花は「自画自賛してる場合かー!?!」と心中で突っ込んだ。

「(……)これは……?」

マナは動揺しながら聞き、ありすは平然と答える。

「クローバータワーの防犯カメラの映像です。わたくしが気付いてクシャポイしたからよかったものの、危うくビルドとプリキュアの正体が世界中に知れ渡る所でしたわ」

「それは困るシャル!」

「お願いあります、この事は秘密にして!」

「俺からもビルドの事は、目をつぶって下さい!」

マナと晴夜はありすにそう頼みこむが、ありすの代わりにセバスチャンが答えた。

「ご安心を。この件はわたしとお嬢様以外誰も知りません」

それにマナと晴夜は一息つくが、ありすが「ですが油断はできません」と彼らに釘を刺す。

「そこでご提案があります」

「提案？」

六花はありすから渡された提示を聞いて、それについての説明を聞こうとする。

「わたくしに、マナちゃん達をプロデュースさせてくださいな」

そしてありすはそう、笑顔で語った。

一方、本来ならば誰もいないはずのボウリング場で、イーラはマーモ達にキュアダイヤモンドの事を話していた。

「三人目？本当なの？イーラ」

「ああ、また新しい奴さ、こう青くてフワツとして、キラキラしてやがってさ」

それ聞いたマーモは少しからかった。

「あらく、惚れたの？」

「ちがうよ！『じゃあ何だ？』!!」

イーラはソファに座っているベールの方を見て、ベールは言い続ける。

「新しいプリキュアに恐れをなして逃げて帰ってきたのか？」

「へ……へっ！あんなの何人来ようが怖いもんか……『でも負けたんだろ？』うるさいな!!」

「？」

「それにしてもビルドってのはともかく、プリキュアってまだ増えるのかしら、ああ〜ヤダヤダ」

マーモはその言葉にいやいやと言い、ベールは天井を見ながら話を続ける。

「早めに滅ぼした方が良さだろうな、あのトランプ王国の時の様に……『そう上手くいくか?』ん?」

イーラ達はソファでくつろいで座っているスタークの方を見て、ベールは「どういう意味だ?」と問う。

『あのプリキュア達……案外そうとうやるかもな?それにビルドの方もお前達のジコチューを倒せる様だからな?』

「フーン!偉そうに言うなよ!そっちのスマッシュもやられただろ!」

イーラが抗議すると、スタークは何も感じずに答える。

『スマッシュの事に関しては、ビルド達の力の確認する為に送っただけだ。それに次は俺もあいつらと闘うつもりだ。そんな時は協力してくれよ!』

そして笑いながらスタークはイーラ達にそう言うのだった。

四葉財閥の豪邸では、ありますがプロデュースの事について話していた。

「プロデューズって……」

「何をするの？」

「それは……」

具体的に何をするのかを言おうとするが、シャルル達は何かを感じ取った。

「ジコチューの闇の鼓動シャル！」

「何？場所は？『大貝町の駅前のようなですな』えっ？」

晴夜達はセバスチャンの示した位置に思わず振り向き、六花は「分かるんですか!?!？」と驚く。

「四葉財閥の情報網を侮って貰っては困りますわ、セバスチャン」

「はい」

そう言っただけでセバスチャンが三再リモコンを操作すると、外の地面からリムジンが出て来る、それに晴夜達は呆然としてしまう。

「「ハハハ……」」

三人で呆れていたその時、晴夜の携帯が鳴り、確かめるとスマツシユの反応が確認された。

「どうしたの晴夜君？」

「どうもジコチューがいる場所にスマツシユらしい反応があるそうだ」

それを聞いたマナ達は驚き、晴夜は外に出て行く。

「悪いが先に行く!」

そう言つて晴夜はスマホにボトルを差し込んだ。

『ビルドチェンジ!』

すると音声と共にスマホがバイクに変わった。ビルド専用バイク『マシンビルダー』を出して、それを見たマナ達は驚く。

「ええっ! バイク!?」

「どう、すごいでしょ! 最高でしょ! 天才でしょ!」

そう言つて晴夜はマシンビルダーに乗って走り出して行つてしまい、マナと六花は慌てて叫ぶ。

「あっ!! 待つてよ晴夜君~~~~!!?」

「中学生のバイク乗りは駄目なのよ~~~~!!?」

…良い子のみんなはバイクは16〜18歳になつてから乗ろう!

えっ? 晴夜はいいのかつて?

………細けえ事はいいんだよ!

その頃、町ではジコチューが暴れていた。

「いいぞジコチュー！もつと暴れるろ！」

ご機嫌なイーラ。すると、何処からかの発砲か、ジコチューが態勢を崩した。

「ん？」

イーラが振り向くと、マシンビルダーに乗った晴夜がやって来て、ブレーキを掛けるとバイクから降りて来た。

「これ以上はさせないよ！ジコチューー！」

「出たな、ビルド！」

イーラは睨みながら言うと、晴夜はビルドドライバーを装着し、2本のボトルを数回振り、栓を開けてドライバーに差し込んだ。

『タカ！ガトリング！ベストマッチ！』

ドライバーのレバーを回し、前後からランナーが出現すると、アーマーが形成され、音声 flowed.

『Are you ready?』

「変身!!？」

一二つのアーマーが合体し、晴夜の体に装着された。

『天空の暴れん坊！ ホークガトリング！ イエーイ！』

「勝利の法則は決まった…ん？」

ビルドが変身完了したと同時にありすの車が到着したが、ハート達はなぜか車の上に立っていた。

「み、みなぎるく愛くキュアハート」

「え、英知の光くキュアダイヤモンド」

「うっ!?? 気持ち悪くい」

「ハート! 大丈夫!?」

「おおい大丈夫か!?」

「う、うん……大丈夫……うぶっ!?」

ビルドはハート達を心配するが、どうやら大丈夫でないようだ。

ハートに至っては、今にも吐き気を催しそうだった。

そして今回のジコチューはミュージックプレーヤーだった。ジコチューは音波を飛ばして攻撃を仕掛けて来た為、全員は直ぐに躲して、ビルドはすぐにドライバーから武器を形成した。

『ホークガトリンガー!』

ホークガトリンガーを手に取り、ジコチューに向けて撃つ。

光線で銃弾を防がれるがビルドは連続発射で攻撃し、ジコチューはそれを受けてしま

ハートとダイヤモンドも連携プレーで攻撃して、ジコチューを翻弄する。

「いいぞでランス〜!!? さあ、あります。僕達も……」

しかし、ありますは紅茶を飲みながら観戦していた。

「あります！ 呑気にお茶なんか〜！」

「大丈夫ですよ、既に勝負はついています！」

「えっ?」

ありますが言うと、予想が的中したジコチューが突然暴れなくなつた。

「ん? どうしたジコチュー? ……つて電池切れかよ!!?」

「ハート、今のうちに!」

チャンスと感じたビルドはハートにとどめを刺す様に言い。それを聞いたハートはキュアラビーズをラブリーコミュニティにはめ込んだ。

「貴方に届け! マイスイートハート!」

胸のハートのアクセサリーからエネルギーを放ち、それを受けたジコチューの眼がハートになつた。

「ラブラブラブ!」

ジコチューは浄化され、それを見たイーラは悔しがる。

「くそ! 覚えてろ!」

イーラはそれだけを言い残し、消え去った。

「一件落着!……んっ?」

ビルドが後ろを向くと、後ろから血の様に赤いワインレッドのスーツを纏った姿をした人物が現れた。

『ほう、なかなかやるな。これが新しい「プリキュア」かあ〜!』

「お前は?」

ビルドが問うとその人物が答えた。

『俺か?俺は「ブラッドスターク」。よろしくな!!?』

『「ブラッドスターク」?(奴らの仲間か?) 闘うために来たのか?』

『いや、今日は挨拶に来ただけだ!だが、次から相手になつてもらうからな!!? チャオ〜』

♪

そう言つてスタークは煙を纏い消えていった。ビルドはとりあえず変身を解除した。

「……『ブラッドスターク』、何者なんだ?」

その日の夕方。

晴夜やマナ、六花はありす邸へと戻っていた。

「駅前の監視カメラの映像は全て削除しておきました。ネットに上げられた情報も削除

済みです」

「御苦労さまです」

「徹底的だな……」

さすがの晴夜も四葉財閥の凄さに驚いた。

「執事さんつて、ホント凄いですね！」

「いえ、それほどでも」

マナは感心しながら言うと、セバスチャンは謙遜しながら答える。

「……と、まあ、こんな感じに。私がプロデューサーとして、皆さんをしつかりサポートしますわ」

「確かに。これなら安心できる」

その光景に皆が微笑んでいると、ランスが立ち上がり、ありすへと近づいていく。

「ありす……」

「ランススちゃん？」

ランスの声に反応し、ありすはランスを見る。

「ありすはどうして戦わないランス？ マナも六花も晴夜も一生懸命戦っているのに、ありすだけ後ろでお茶を飲んでいるなんておかしいでランス！」

「ランス？」

ランスがありすに向かって言い出した事に周りが反応する。

「ありすもプリキュアに変身して、一緒に戦うべきでランス!」

「そう言ってもさ、ありすはキュアラビーズを持ってないでしょ?」

「確かに、変身するにはそれが必要だしな……」

マナの言葉に晴夜は頷きながら答える。

「キュアラビーズ?」

「ああ、これ」

そう言つて、マナはキュアラビーズを取つて見せる。

「それがないと変身できないシャル」

「それでしたら……セバスチャン」

「ハイ……」

ありすに言われたセバスチャンはとあるものを出す。それはキュアラビーズだった。

「持つていたの!」

「何で!?」

「クローバータワーで露店のお兄さんにいただきました」

「あの人が……」

「みたいだね……」

晴夜達はジョー岡田の事を思い浮かべる。すると、ランスはありすの手を掴む。

「これでハツキリしたランス。ありす、僕は君に巡り合うためにこの世界に来たんだ。ランス。プリキュアになって僕と一緒に戦ってほしいでランス！」

しかし、ありすから出た言葉は…

「ゴメンなさい。私……プリキュアにはなりません」

ランスは「ガーーーーーン！」と口で言うほどショックを受ける。

「あ、ありすのバカアアアアア！」

「ランスー！」

ランスは泣きながら飛び出して行き、シャルルとラケルはそれを追いかけていく。

「ランス……」

「私達も追いかけてよう！」

「う、うん。それじゃ、またね、ありす」

「ハイ」

マナと六花が出ていくと、晴夜はゆっくり立ち上がりありすを見て、マナ達の後を追いかけた。

その後、晴夜達は近くの公園に居たランスを見つけたが、見るからにがっかりしてい

た。

「はあく……ありすは何でプリキュアになってくれないでランスス？」

と言った時、マナが「その理由……心当たりがあるかな」と呟いた。

「何か、知ってるの？」

晴夜の問いに答えようと、マナは近づいてくる六花とシャルル達を視界に入れながら、昔の出来事を説明した。

——それは、小学生5年の時だった。

ありすはお嬢様の事で生徒達がよくからかっていた事があり、その日も男子生徒から色鉛筆の事で男子からからかわれていた。

そんな中、マナ達が注意をしてその場は去って行ったが。その放課後、男子達が先生の兄を連れて来て、マナ達に仕返しに来た。

マナは勇敢に立ち向かったが、男子達から『ウザい』、『目立ちたがり』と言われ、泣いてしまったのだ。

その時、ありすが言った。

『取り消して下さい……』

『ありす……?』

『なんだてめえ?』

『マナちゃんを傷つけた事……今すぐ……取り消して下さい!!?』

「あのありすが……」

「それでどうなったでランス?」

「それが……」

「ありすはお爺様の教えで沢山習い事していたの。ピアノや習字だけじゃなく、空手に

柔道、剣道、合気道……」

「すぐ……それでどうなったんだ?……って、まさか……」

晴夜が言うとうとマナは頷き、また話し始める。

喧嘩の結果、ありすがあつという間に三人を倒したのだ。

そして我に返ったありすは自分がした事にかなり動揺し、そのまま去ってしまった。

「それ以来、ありすは武道のお稽古を全部辞めちゃった。ありすは友達のことを馬鹿にされると怒りで我を忘れちゃうの……」

「多分自分でもわかっているんだろうね……だからありすがプリキュアにならないのは

きつと……」

「怒りで我を忘れて、同じ様になってしまうからか……」

晴夜がそう呟いていると、シャルルが何か察知した。

「闇の鼓動シャル……」

「えっ、また!? ?」

「マナ!」

「うん!」

二人は頷きあうと、晴夜はマシンビルダーに乗りながら「マナ達はジコチューを頼んだ!」と託して何処かへ行こうとする。

「何処に行くの?」

「ありすの家だ!ランス、お前も来い!」

「分かったでランス!」

ランスを肩に乗せ、そのままバイクのエンジンを鳴らしながらありすの家に向かった。

「六花行こう!ジコチューを止めないと!」

マナがそう言うのと六花は頷き、二人はジコチューのいる所へ向かった。

ありすの豪邸にある暗い部屋。そこではありすがキュアラビーズを見つめながら悩んでいた。

「私は……どうすれば……お爺様なら」

それを見ていたセバスチャンが、

「お嬢様……本当は皆様と一緒に闘いたいのではないでしょうか？ですから時には素直になるのもいいと思います」

とありすに助言をすると、そこに晴夜とランスが入って来た。

「まあ、お二人共？どうしてここに？」

ありすが問いかけると、まずはランスが言った。

「ありす！君の気持ちはマナ達から全部聞いたランスよ。」

「……だけど！今の君ならあの時と違って、大事なものを守れるでランス！」

「ランスちゃん……でも……」

それでも戦う事に迷いが生じている彼女に、今度は後ろにいた晴夜が話しかける。

「ありす、君の過去についてマナ達から聞いた。」

確かに怒りで我を忘れるのは、とても怖い事だつてわかるよ……

でも大事なのは、正しい力と間違っている力をちゃんと知る事だよ！今の君なら出来るはずだよ！

それに、もしあの時のようになってしまったら、俺がマナや六花と一緒に君を全力で止める!

それが仲間として、友達としての役目だ!

「っ!!」

晴夜の言葉を聞いたありすは自分の祖父の言葉を思い出し、大切なものを守るために闘うと決心すると、ありすのラビーズが輝く。晴夜とセバスチャンは見守り、ランスは眼を光らせる。

「……ありがとう、晴夜さん、ランスちゃん」

「え?」

ありすは真っ直ぐな目で晴夜達を見て、お礼を言う。

「私はもう、恐れません!」

晴夜はそれを見て頷き、ありすとマナ達の所へ向かう為、屋敷の外にあるマシンビルダーの所に行き、彼女にヘルメットを渡す。

「んじゃ!行きますか!」

「はい!」

バイクに乗った晴夜はありすを後ろに乗せると、セバスチャンが彼らをお見送りする。

「どうかご無事をお祈りしています」

二人は頷いて、晴夜はマシンビルダーを走らせるのだった。

一方マナ達は、ラジカセのジコチューが暴れている場所に到着する。

「行くよー！」

「ええー！」

二人がそう言うと、シャルルとラケルはラブリーコミュニケーションに変化して、ラブリーコミュニケーションにキュアラビーズをはめ込んだ。

「プリキュア、ラブリンクー！」

その掛け声とともにラブリーコミュニケーションの画面に指で「L・O・V・E」と描く。

『L・O・V・E！』

するとマナの髪が長くなり、頭頂部でハート型に結われ、金色になる。次に衣服がピンク色のコスチュームになり、アームバンドとブーツ、そして腰の横にリボンがついて、キャリーにシャルルが入り彼女はポーズを決めながら叫ぶ。

そして六花も光に包まれ、伸びた髪が頭頂部で髪飾りに結われ青紫色になり、服装も青色のコスチュームになり髪飾りや耳飾りがダイヤの形になった。

「みなぎる愛！キュアハートー！」

「英知の光!キュアダイヤモンド!」

「愛を無くした悲しいラジカセさん?このキュアハートが貴方のドキドキ、取り戻して見せる!」

そしてハートがそう言うて戦い始めるが、ジコチューは前回と同じ攻撃で攻めて来た。

「前回と同じ様に電池切れになるまで粘るよ!」

だがイーラが自信満々に「ばーか!同じように行かないぜ?よく見ろよ?」と煽ると、それを聞いた二人はジコチューの後ろの方へと目を向け、驚いた。

何とラジカセジコチューはコンセントでつながっていたのだ。

「あれじゃ時間稼ぎをしても意味無いじゃない!どうしよう!」

そう考えているとラジカセジコチューからテープが放たれて、ハートとダイヤモンドをあつという間に拘束してしまい。ハート達はそのまま地面に倒れてこんでしまう。

「しっ、しまった!」

「よし!ジコチュー!止めだ!」

「OKバイバー!」

ラジカセジコチューはそのままハート達に向かっていく。

その時、一台のバイクがジコチューに突進してぶつかり、倒れこんだジコチューの近

くでバイクはドリフトしながら移動する。それにイーラはイラつきながら叫ぶ。

「げ!!? 来やがったな!ビルド!」

そのバイク、マシンビルダーから晴夜とありすが降りてきた。

「やあ、ジコチューさん」

「お待たせしました」

マシンビルダーから降りてきたありすがハート達にそう言う。

「それ以上私の大切な友達を傷つけるのは……許しません!」

ありすは大声でそう答える。

「ありす!!?!」

ハート達はありすの登場に驚きを隠せない、そんな中でありすは「ではランスちゃん、お願いできますか?晴夜さんも?」とランスと晴夜にそう訊く。

「もちろんランス〜!」

「了解!」

そう言つてラブリーコミュニケーションに変わるランス。そしてありすはラブリーコミュニケーションにラブリーズをはめ込んだ。

「プリキュア!ラブリンク!」

その掛け声とともにラブリーコミュニケーションの画面に指で「L・O・V・E」と描く。

『L・O・V・E!』

そして光に包まれ、シニヨンの部分から髪の毛が伸びて橙色になり。黄色のコスチュームを身に纏うと、髪飾りとクローバー形の耳飾りが付けられ。リボンがついたりストバンドとブーツを装着すると、両袖がパフスリーブになり、腹部にリボンがついてスカートがパニエで膨らんだようになりながら変身完了した。

「ひだまりポカポカ!キュアロゼッタ!」

名乗りポーズを決めるロゼッタ。

「ひだまりポカポカ?」

「キュアロゼッタ!」

そう言うダイヤモンドに、喜びながら彼女の名を言うハート。

そして晴夜もビルドドライバーを装着し、2本ボトルを取り出しながら振るといくつかの数式や化学式が現れ、栓を開けた。

「さあ!実験を始めようか!」

2本のボトルをドライバーに差し込んだ。

『ラビット! タンク! ベストマッチ!』

ドライバーのレバーを回し、前後からプラモの様なランナーが現れ、アーマーが形成され晴夜は構えて叫んだ。

『Are you ready?』

「変身!!?」

二つのアーマーが合体し、身体から蒸気が流れて音声 flowed。

『鋼のムーンサルト! ラビットタンク! イエーイ!』

赤と青のアーマーが重なり、兎と戦車がモーターの姿・科学の力の戦士『ビルド』に変わった。そして、右のアンテナをなぞり上げながら右手を広げる。

「勝利の法則は、決まった!!?」

「世界を制するのは愛だけです。さあ、あなたも私と愛を育んでくださいな」

ビルドが決め台詞を言っている横で、ロゼッタも手でクローバーの形を作りそう答える。

「何だそりや!!? やっちまえジコチュー!」

ジコチューに指示するイーラ。

そしてジコチューはビームを発射して、それを避けるビルドとロゼッタ、だがジコチューはすぐにテープを出してロゼッタの腕を拘束した。しかしロゼッタは力を入れてジコチューを背負い投げ吹っ飛ばし、そのままジコチューを地面に叩きつける。

ロゼッタはビルドの隣に着地し、自分の手を見る。

「すごい……これが大切なものを守る力……」

そう左胸に手を触れてそう呟いていると、イーラが生意気だそ!と叫ぶ。

「つていうか、今更お前も参戦するのか?戦おうともしなかつたお前が?弱腰のくせに!?」

…が、それをビルドが反論する。

「違う、ロゼッタは自分の力に飲み込まれるのを恐れたただけ。だが今は、自分の思うように力を出す事が出来る!」

「晴夜さん……!」

「これでどうだい!ポリウム最大!俺のバズーカウケトルカ!」

ジコチューがパワーをフルにして攻撃を始めた。

それにロゼッタが前に出て、ラブリークommunionにラビーズをはめ込む。そして、画面を指でなぞった。

「カッチカチのロゼッタウオール!」

そう叫ぶロゼッタの手の平にクローバー型のエネルギーが発生し、ジコチューの光線は防御された。

「防いだ!?」

「すごい!」

ロゼッタの鉄壁の防御に驚く一同。

「だが防御だけじゃな!!?」

「いいえ! 防御こそ最大の攻撃です!」

ロゼッタは両手のひらから小型の四つ葉のクローバー形のエネルギー障壁をそれぞれ二枚発生させて、二枚を合わせるように叩き付けると、ジコチューの光線を消滅させた。

「!?」

「なっ、音が消えた!!?」

「何で!!?」

ハートはなにが起こったのかわからなかったが、ダイヤモンドとビルドがその理由に気づいた。

「そうか! ノイズキャンセリング!」

「音波同士が打ち消し合って消したのか……」

そしてロゼッタが「今です!」と叫ぶ。

「よし! なら今回は俺が決める!」

そう言つてビルドはドライバーから『ドリルクラッシュャー』を形成すると、それをソードモードにし、ゴリラボトルを差し込んだ。

『ゴリラ!』

『Ready go!』

『ボルテック ブレイク!』

ドリルクラッシュャーを振り落とし、大きな拳方エネルギーがジコチューに向けて放たれると、そのままエネルギー塊は敵を叩き潰す様に直撃。

「オ~~~~マイ~~~~ガ~~~~!!?」

ジコチューは粒子化して浄化され、プシケータを取られた青年も元に戻った。

「く~~~~~~~~!覚えてろよ~~~~!」

捨て台詞を言つてその場から消えるイーラ。ビルドはドリルクラッシュャーを肩に置き一息する。

「ふう~~~~~~~~」

『ほう~~~~~また新しいプリキュアの誕生かあ!』

すると背後から声が聞こえ、ビルド達が声の聞こえた方を見ると、そこにはスタークがいた。

「スターク~~~~」

『よっ!約束通り勝負に来たぜ!!?』

……が、今日は辞めておこう。少々分が悪いからな

またの機会にしようぜ!!? チャオ~~~~♪』

「お、おい……」

そう言つてスタークは何もしないまま、その場から消えていった。

「あいつ、一体何だ？」

「晴夜君、さっきの人は？」

「わからないが、少なくともジコチュー達の仲間だと思う」

そして変身を解いた晴夜達、ランスはありすに礼を言う。

「ありがとうありす、君こそボクの最高のパートナーランス！」

「ウフフ、これからもよろしくね」

そう言つてありすが抱きつき、六花が言う。

「これでプリキュアは三人ね」

「キュアソードも入れば、四人シヤル」

ありすは思わず「キュアソード？」と問い掛け、晴夜は答える。

「もう一人のプリキュアなんだ。だが味方が敵か不明な少女だよ」

「それでしたら、心当たりがあります」

「本当!?？」

皆はありすの言葉に振り向き、ありすらある物に指を刺す。

「クローバータワーの防犯カメラにもう一人、プリキュアと思わしきひとが映っていました……そう、それが丁度……」

「「えっ!?」」

「ありすが指差したのはエースティと描かれていた真琴のポスターであった。」

「マジか……」

「嘘……まっぴー?」

ありすの衝撃発言に、全員が驚いていた。

次回! Re. ドキドキ&サイエンス!

第5話 うそ! あの子がキュアソード!? ?

第5話 うそ！あの子がキュアソード!?!?!

翌日、四葉家の庭では晴夜達が集まり、剣崎真琴について話していた。

『アイドル 剣崎真琴、デビュー曲は発売一週目でミリオンヒット!!? 現在では、スター街道ばく走中の歌姫である』

……本当に彼女がキュアソードなの？」

六花は本当に剣崎真琴がキュアソードなのかとありすに質問する。

「はい、クローバータワーにキュアソードが現れたあの日の展望台に登った人の数と、降りた人の数が食い違っているのです。

真琴さんとそのマネージャーさんのお二人は、展望台から降りた形跡がございませ
ん」

「あの子がね……」

「で、でもそれだけじゃ？」

「いえ、他にもございます」

そう言った後、資料を六花と晴夜の二人に見せるセバスチャン。そこには指紋、足のサイズ、毛髪から採取されたDNAの情報が載っていた。

「指紋、足のサイズ、毛髪、全てのデータを確認しましたが一致しています」と答えるセバスチャン。

「科学捜査班出勤させちゃったの!?!?」

「四葉家凄すぎ……」

四葉家の行動力に改めて驚く六花と晴夜。

とその時、マナが立ち上がる。

「マナ?どうした……」

「まこぴーがキュアソード!アイドルとプリキュア……両方こなしちゃうなんて凄すぎる!」

くうくう……こうしちゃうられない!」

マナはそう言って、まこぴーの元へと走り出す。

「お、おい?」

「ちよつとどこ行くの!?!?」

「決まっているでしょう!まこぴーに会ってもう一度話をしてくる!」

「どこにいるのか知ってるの!?!?」

その時、猪突猛進気味だったマナは六花の言葉で立ち止まる。

「そもそも相手は芸能人よ?そんな簡単に会えるわけないでしょ?」

「あ……そうでした……」

それを聞いてマナは落ち込む。

「結局会う手段がないか……」

晴夜が紅茶を飲みながら呟くと……

「それでしたら私にお任せ下さい」

その言葉を聞いた晴夜達はありすの方を向き、当の本人は笑みを浮かべる。

場所が変わり、スタークとジコチユートリオが居るクラブ。

「四人目のプリキュアだと？」

「ああ！つたく!!？次から次へと増えてよ!!？ そのうち1000人ぐらいになっちゃう

んじゃないの？」

イーラはポップコーンを食べながら不満を叫ぶ。

「そうなる前にお前が始末しておけよ？」

「何で人任せなんだよ！」

「まっ、1000人まで増えたら本気出すわ」

ソファに寝ながらベールはそう適当に返事する。

「この野郎!」

『まあ、イーラ。そうカリカリするなく!』

「うるさいな!!?」

イーラは別のソファにもたれていたスタークに怒鳴る。

ふと、マーモは三人に眩く。

「たとえ四人でも手を組んだりしたら厄介よ?」

それを聞いていたイーラ、そして寝そべっていたボールは起き上がる。

「王女の手掛かりを得るまで泳がせておくつもりだったけど……手遅れになる前に、潰しちやおうかしらね?」

不気味に笑うマーモ、それを聞いたスタークは立ち上がる。

『それはお前達で勝手にやりな……俺は俺の目的がある。』

……おっと、忘れる所だった』

そう言い出すとマーモに、人をスマッシュに変える武器『スチームブレード』を見せる。

『マーモ、次にジコチューした奴にそいつを使いな!!?』

そう言つてスタークは彼女にスチームブレードを渡した。

その頃、晴夜達はとある建物の前に立っていた。

「真琴さんはここで音楽番組の収録があるそうですわ」

「テレビ局？」

シャルルが言うと、晴夜は最初はテレビ局、次にありすの方を見る。

「なるほどな……」

（でも、何でありすはそんなことを知ってるんだ？）

——あれ、ここの看板……」

晴夜はそう思いながらテレビ局の中へ入った。

「どうやって中に入るの……？」

六花にそう聞かれたマナがどうやって入るかと考えていると、ありすは誰よりも先に歩き出した。

「ちよ、ちよつとありす……？」

ありすの行動に叫ぶ六花。目の前には警備員が立っているにも関わらず、彼女は奥の方に入ろうとしていた。

そしてありすが目の前に来ると、警備員は「いらっしやいませ」と頭を下げ、彼女は「ごきげんよう」と答えて検問を抜ける、

それを見た晴夜達はただ呆然とする。

「うそ……」

「なんだ、普通に入れるじゃない」

「マナはそう言つて歩き出すが、それを見た晴夜は思わず

「あつ!待つて!マナ、ストップ!!?」と叫ぶ。

「晴夜の発言に『?』を出す六花、しかしマナはそれを気にせずに行く。

「ごきげんよう!」

と言つてありすと同じ様に通ろうとする。

「ちよつと待つて下さい!ここは関係者以外立ち入り禁止です!」

……と、普通に警備員に止められてしまった。

「ええ!?」

「やつぱり……そう簡単に入れないよね……」

「いいんです、彼女たちは私のお友達ですから」

「失礼しました!」

ありすの言葉を聞いた警備員にすぐに通して貰い、エレベーターの中でマナ達は「ど

うゆうこと?」と問う。

「ここは父が経営している会社の一つなんです」

「ああ、なるほど」

「えっ? どう言う事?」

マナは六花の納得に振り向き、それに晴夜が答える。

「実は気付いてただけど、ここの看板に『ヨツバテレビ』って書いてあったんだ」

その事にマナ達は気付いた。

「ヨツバテレビ……」

「名前で気付くべきだったわね……」

名前で気付くべきだったと苦笑する二人だった。

その後エレベーターを降り、晴夜達は真琴が収録中のスタジオに到着した。ありますが扉を開けて中に入ると、曲が聞こえてくる。

「この曲……」

その音楽に反応して、晴夜達はステージを見ると、そこには収録中の剣崎真琴の姿があった。

そして収録が終わったのだろうか、スタッフに挨拶しながらマネージャーと真琴が歩く姿に、マナは目を光らせていた。

「ま、ま……びーだ……!」

「さすが、ここで見るとテレビで見ると数段可愛なく」

「素敵な方ですわね」

「見惚れている場合、今日は正体を確かめに来たんだから」

「ハイ」

ありすはそう言って、その間に沈黙が流れる。

「……ん? 次の作戦はないのか?」

「え?ありませんが」

「ええ!?!?」

ありすの言葉に六花は思わず声を上げてしまう。

それに周りのスタツフが反応し、注目が集まる。

六花は謝る様な姿勢になると、スタツフ達は仕事へと集中する。

「どうするんだ? いきなり聞くわけにもいかないだろ」

「大丈夫です。きつと、マナちゃんが何とかしてくれませわ」

「確かにマナなら……ん? そう言えば、マナはどこだ?」

「え? ええ!?!?」

六花はマナがいけない事に気付き、叫ぼうとした時に晴夜とありすが六花の口を押さえる。

「ムー!?!?」

「ダメですよ」

「また大声出したら、今度は怒られるぞ！」

「……」

晴夜とありすの注意を受けて、六花はコクリと頷く。

それを確認すると二人は六花の口から手を放し、あたりを見渡し、一度スタジオを出た。

「恐らくだけど、マナは劍崎真琴の楽屋に行ったんだと思う」

「確かに、マナならあり得そう」

「マナちゃんらしいですね」

そう三人が話し合い、三人は劍崎真琴の楽屋へと向かった。

一方、劍崎真琴の楽屋では、マネージャーと今後のスケジュールの打ち合わせをしていた。
「最近、ちよつと忙しい過ぎるわね、仕事減らそうか？」と、マネージャーは相談するが、真琴は大丈夫だと平然と答える。

「大丈夫、私の歌を待っていてくれる人の為だから平気」

その言葉を聞いて、嬉しそうな顔するマネージャーは、「飲み物でも買ってくる」と

言って部屋を出た。

「……疲れている暇なんてないのよ」

ふと真琴は、鏡に向かってそう呟く。するとノック音が鳴った。

「どうしたの? お財布でも忘れたの?」

「失礼します」

最初はマネージャーかと思っていた真琴。しかし入ってきたのはマナだった。

「あなた、あの時の!!?」

「改めて、初めましてキュアハートです!!? あたしの仲間になって下さい!!?」

「は?」

マナは早速キュアハートと名乗り出し、手を差し伸べた。

それから彼女はあれからの経験や、仲間が三人に増えた事、ビルドの事を話す。

「まこぴーはあたしの憧れでとっても可愛いのに、歌うときは凛々しくてすごいなうって思ってたんです。そんなアイドルがプリキュアだったなんてホント感激です。まこぴーが仲間になってくれたら百人力、いや千人力ですよ!」

と熱弁するマナ。しかし、真琴は椅子の背もたれを強く握ってご立腹、怒っていそうな顔をしていた。

「あれ? えーつと………キュアソードさん………ですよね?」

「何のことからしら？」

マナのバツクから顔を出すシャルル。

「あなた、ここは何処だか分かつてるの？テレビ局よ！」

すると真琴はマナに向かって怒りの声を上げた。それに反応して、シャルルはバツクに隠れる。

「私達プロがお茶の間に夢を届ける場所なの。あなたの勝手な思いで踏み荒らしている様な場所じゃないわ」

真琴はそう説教し、それを聞いていたマナはシヨボーンとした。

「ちよつとなんの騒ぎ？」

そこへマネージャーが戻つてき、続くように晴夜達も楽屋に到着した。

「見つけた」

「やっぱり真琴さんの控え室に来ていたんですね」

「ん？マナ？」

晴夜はマナの顔色がさつきまでとは違うことに気づいた。そのまま晴夜達は真琴に頭を下げ、マナを連れて退場した。

「どうかしてるわ、あの子」

先程のマナの行動を見て、真琴はそう言うのであった。

それから、マナは自分が真琴に言った事と何を言われたのかを晴夜達に話した。それを聞いた三人は納得した。

「なるほどね……」

「それで落ち込んでいたのか……」

「……あたし、握手すれば誰とでも友達になれると思っていた、プリキュア同士ならばなおさら……きつと仲良くなれるに違いないって……」

その事を聞いていた晴夜達は黙って聞いて、マナは話し続ける。

「でも大切な事を忘れてた……」

仲良くなるにはちゃんと、相手の気持ちをつかろうとしなきゃ駄目なんだ。まこぴーはアイドルで歌を歌うのが大事なのに……真剣な気持ちを邪魔しちゃった……」

そう悲しそうな顔で話していると、その様子を見ていた晴夜は彼女に語りかける。

「大丈夫だよ」

「えっ?」

マナは晴夜の方を見る。

「俺達が話を聞く限り、マナはすぐに行ってしまう場合が多いけど、今の自分の間違えが分ったなら大丈夫!」

それにアイドルって簡単に集中力が消えたりしない……だから、もつと自信を持ってよっ。」

「晴夜君……」

「そうよ」

それに晴夜達が振り向くと、真琴のマネージャーのDBが来た。

「劍崎真琴はいつだって真剣、だからあの子の歌は心に響くの」

「あなたは？」

「真琴さんのマネージャーさん」

「ついてきなさい」

晴夜達はDBに付いて行き、再びスタジオに入った。

そこではちようど真琴の歌が始まっている様であった。

マナはあの部屋で話していた事を思い出す。

「あの子、不器用だから、普段はあんな言い方しかできないけど、その歌には大切な願いが込められているの。」

それは自分の歌を聴いてくれた人が笑顔になってくれる事。

だから、いつもベストを尽くして、最高のパフォーマンスを披露しなくちゃならないの。貴女にもそういうのいない？」

マネージャーに聞かれ、マナはそれに頷く。

「あります、あたしにも。」

「……あたし、謝りたいです」

「わかった。時間を作ってあげるわ」

「ありがとうございます!」

「頑張れ! マナ!」

「うん!」

そして、マナはステージで歌っている真琴の姿に釘付けになっていた。

一方、別の方向では一人の少女が険悪な表情で真琴を見ていた。

「何よ……ディレクターもカメラマンもうつとりしちゃって……あんな子がトップアイドルなんて認めない……みんなの注目もスポットライトも私のもんだから……!」

少女が呟くと、プシユケーが少し黒く染まった。

「でも……ぶつちやけ歌も踊りも負けてるもんね……」

「もつと練習しよう……」

しかしすぐに冷静になり、そう呟くとプシユケーに染まっていた黒の部分も小さくなった。

「いいんじゃない？好き sadece 注目を浴びちやえば……？」

突如、マーモが少女の耳元で囁く。

「だれ？？」

少女は突然の声に驚くと、目の前にはマーモがいた。

「あなたの望み……叶えてあ・げ・る♪」

マーモはそう言つて指をパチンと鳴らす。

するとプシユケーが全て黒く染まり、それが少女の胸から出てきて倒れる。

「暴れる!!？お前の心の闇を解き放て！」

マーモがそう叫ぶと、星の形をしたジコチューが現れた。

しかもそれだけじゃなく、スタークからもらつたスチームブレードを少女に向けると、ガスが発射された。それにより少女の姿が、穴の空いた橙色の球体状の身体を持つ怪人・バーンスマツシュへと変わった。

その様子を見たスタジオの中にいる晴夜達一同は驚く。

「ジコチューシャル！」

「どうしてこんなところに!!？」

「スマツシュもいるケル!!？」

バーンスマツシュは右腕の火器『スマツシュバーナー』から火弾を出し、周りの機材

を手当たり次第破壊しており。マーモもジコチューに暴れる様に指示をする。

星の形をしたジコチューは回転しながら真琴に向かっていき、彼女はその攻撃を避けるが、ジコチューにぶつかった衝撃でバランスを崩し倒れてしまう。

「まっぴー!」

マナが叫んでいる時に晴夜はホークガトリンガーを出し、ジコチューとスマッシュに向けて撃ち、二体の動きを止めた。

マーモはそれを見て舌打ちする。

「チッ!ビルド!」

「あなた達……」

「大丈夫?」

「ええ……」

晴夜は真琴の無事を確認するとマーモに話し掛ける。

「まさか、お前が人をスマッシュに変えていたのか!」

晴夜の問いマーモは違うと答えた。

「違うわよ、いつもやっているのはスタークよ!

この武器もスタークが作ったものらしいし」

「スタークが!?!?」

「…でも、改めて使ってみると良く出来ているわね、なかなかの発明品だわ」

その言葉を聞いた瞬間、晴夜の顔がいつもと違うことにマナは気付く。その顔は、まるで怒っているような感じだった。

「晴夜君……」

「スタークに伝えとけ……そんなもん、発明って言わねえんだよ!!?」

（こんな風に怒っている晴夜君を見るの、初めて……）

「ジコチューの方は頼む、俺はスマツシユを倒す!」

晴夜がそう言っつて、ドライバーを出す。

「「うん!!?」」

晴夜はビルドドライバーを腰に装着し、2本のボトルを取り出し、数回振って栓を回すと、ドライバーに差し込む。

『忍者!コミック!ベストマッチ!』

レバーを回すと前後からアーマーが形成され、音声の流れると晴夜は叫ぶ。

『Are you ready?』

「変身!!?」

二つのアーマーが合体し、晴夜の体に装着されると再び音声流れれた。

『忍びのエンターテイナー! ニンニンコミック!イエーイ!』

「行くよ!」

マナと六花、ありすはラブリーコミュニケーションを取り出し、それぞれのプリキュアに変身した。

「プリキュア、ラブリンク!」

マナ達は光に包まれて、姿を変える。

そして、マナ達もプリキュアへと姿を変えて現れる。

「みなぎる愛!キュアハート!」

「英知の光!キュアダイヤモンド!」

「陽だまりポカポカ!キュアロゼッタ!」

「愛をなくした悲しい星さん!このキュアハートが貴方のドキドキ、取り戻してみせる!」

最後にハートはジコチューに向かって決め台詞を言った。

それを見たマーマは「こうなったらあいつらからやっておしまい!」と命令する。

「あなた達……」

と声をかけるジコチューに構える三人。

しかし…

「さては新人アイドルユニットね!!」

というジコチューの言葉に驚く三人であった。

一方、ビルドはすぐさま真琴に向かっているスマッシュを阻み、四コマ忍法刀に搭載された四つの技を巧みに操ってスマッシュを翻弄しつつ、刀のトリガーを3回押した。

『風遁の術！』

ビルドの周りに風が出現し、風の力を刀に乗せてスマッシュを攻撃。そのままスマッシュを吹き飛ばす。

そして、真琴の方を見て彼女の名前を呼ぶ。

「剣崎さん。もし君がキュアソードなら、ハート達と一緒に変身して戦ってほしい！」

「ツ……何のことかわからないわ」

「違うなら、それでもいい！でも、もし本当なら頼む！」

ビルドの頼みに黙り込む真琴。

(どうして……そんなに私を頼るの……)

真琴は、ビルドの力なら自身に頼まなくてもいけると思っていた。

「「きゃあああああー！」」

「っ！ハート！ダイヤモンド！ロゼッタ！」

ビルドがスマッシュと闘っている間に、三人はジコチューに攻撃され、吹き飛ばされ

た。

そしてジコチューはビルドと真琴の方へと顔を向ける……特に真琴を重視しながら。「スターは私だけ!」

ジコチューはそう言つて星を閉じたかと思うと、開いた瞬間、光を放つてきた。

「うっ!」

「ま、眩しい……!」

ビルドと真琴は手で目を隠すようにすると同時に、何か空気を切るような音が聞こえてくる。ビルドは攻撃だと思い、すぐに真琴の前に出て、四コマ忍法刀を構えた。

「……はっ!?!」

真琴が目を開けるとビルドがジコチューの高速回転攻撃を四コマ忍法刀を盾にして、自分を庇つてくれていることに気づいた。

「うおおおおお!」

ビルドは足に力を入れ、攻撃を防ぐ。

それと同時にキュアハートも現れ、四コマ忍法刀に防がれたことによつて回転が弱まったジコチューを止める。

「ジコ……!?!」

「貴方までどうして……!?!」

真琴はビルドだけでなく、キュアハートの行動にも驚いていた。

「誰にも邪魔をさせない！ここはまこぴーの、大事なステージなんだから！」

「！」

「まこぴーには、みんなが笑顔になる歌を届いてほしいから！」

「そうだ！だからこそ、彼女の歌は最高なんだー!!？」

二人の言葉に真琴は黙り込む。

そしてビルドもジコチューを掴むと、キュアハートと目を合わせる。

「せー！のっっ！」

二人は掛け声を出すと同時に力いっぱい押し返し、ジコチューはそのまま壁に突き刺さる。

その隙にビルドはドライバーから違うボトルを取り出し、振り始めると、彼の周りに数式と化学式が出現した。

「さあ、実験を始めようか！」

2本のボトルの栓を回し、ドライバーに差し込む。

『パンダー！ ロケット！ ベストマッチ！』

ビルドはドライバーのレバーを回し、ランナーが出現すると今度は白と空色のアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

二つのアーマーが合体して装着されると、再び音声が流れた。

『ぶっ飛びモノトーン!ロケットパンダ!イエーイ!』

その姿は、複眼はパンダの前身と飛行するロケットを模しており。右腕はパンダのよ
うな巨大な爪、左腕はロケットを模している様な姿になった。

「勝利の法則は決まった!」

決めゼリフを言うと、起き上がったスマッシュがビルドに向かってきた。

しかし、ビルドは巨大な爪——『ジャイアントスクラッチャー』を活かして、スマッシュの攻撃からカウンターを決めると、左腕のロケットをスマッシュに向けて発射する。ロケット——『コスモビルダー』による攻撃によってスマッシュは体制を崩した。

その隙にドライバーのレバーを回し、音声が流れる。

『Ready go!』

すると、スマッシュの周りに放物線が現れ、ビルドはその線に滑るような勢いで急降下と共に巨大な爪の一撃を食らわせる。

『ボルテック フィニッシュ!イエーイ!』

「はあああああああ〜!!?」

その一撃にスマツシユは倒れた。ビルドは倒れたスマツシユにエンプティボトルを向けてスマツシユから成分を抜き取り、元の少女の姿へ戻した。

「あくもく！何やってんの！〈ブツツ！〉あら？」

マーモがスマツシユに倒された事に舌打ちをしていたが突然、周りの電気が消えた。

「な、何？？」

ステージの電気がつくと、一人の紫の髪の少女が現れた。

「もしかしてあの方は？」

「キュアソード！！？」

「やっとお出ましのようね、ジコチューー！」

マーモはソードを狙うようジコチューーに指示した。

ジコチューーはすぐにフラツシユ攻撃で目を眩ませようとするも、ソードは目を瞑って目眩しを防いだ。

その隙に突進するジコチューーだが、ソードはそれを避けてカウンターのキックを当て、ジコチューーは吹き飛ばされてまた壁に激突する。

「ええっ？？ 見えてるの？？」

「こんな攻撃、見なくても避けられるわ」

そしてソードはその後にも優勢に戦いを進めていた。それをチャンスと思い、ダビィの

名を叫ぶ。

「ダビ〜!」

ソードはラブリーコミュニケーションにラビーズをはめ込み、画面をなぞる。

「閃け!ホーリーソード!」

そう叫ぶと手のひらから無数の剣型のエネルギー技を放つ。

「ラブラブラブ!」

ジコチューの目はハートに変わり、浄化されてプシユケーに戻る。そして、プシユケーが持ち主の元へと戻っていくのを見て、ビルドやキュアハート達らはキュアソードを見る。

マーモはいつのまにか居なくなっていた。

「あの……ありがとう」

「おかげで助かったよ!」

二人がお礼を言うと、キュアソードは横顔で二人をみる。

「私はただ、ジコチューを野放しにしたくなかったの。」

それとスマツシユの方を倒してくれた、ビルドへの借りを返しただけ」

「あ……」

キュアソードが歩き出したのを見て、キュアハートは止めようとしたが何も言えず、

そのまま彼女は暗闇へと消えていった。

その日の夕方。『ぶたのしつぽ亭』に晴夜が訪れると、マナ達が手紙のようなものを持って立っているのに気付いた。

「マナどうしたそれ？」

「まこぴーのマネージャーさんからさつき置いていったの……」

「何が入っているの？」

マナが封筒を開けて中身を見て、四人は驚きの声を出す。

そして翌日。

『劍崎真琴ファン感謝デー』とステージに貼られ、ステージの方では真琴はファンのみならず握手会が開かれていた。

「次の方へ」

と言うとマネージャーが妙に嬉しそうな顔にする。

その事に真琴は疑問を抱きながらもファンと握手するために顔を上げると……

「あなた！」

驚くことに、相手はマナだった。

「今日はファンとして来ました。」

「……あの、この前はすいませんでした!」

「マナはこの前のことを詫げる。」

「もういいわよ」

「あの、気付いたんです。まこぴーにとっての歌と同じように、私にもやらなくちやいけない大事なステージがあることに」

「その言葉でマナを見る真琴。」

「まこぴーみたいに素敵にはできないですけど、それでも一生懸命ベストを尽くして頑張りたいと思います!」

「あなたのやりたい事って何?」と問う真琴にマナは答えた。

「皆の笑顔を守る事です」

「そう言つて真琴と握手し、真琴に父親が作った桃マンをあげて別れたマナは晴夜達の所に戻り、晴夜からどうだったのかと聞かれる。」

「うん、伝えられたよ!」

「よかったね」

「うん!」

「ですが、真琴さんへ疑いは残ったままですが……」

「確かにね……」

同意する六花、しかし晴夜は問題ないと言う。

「別にいいんじゃない、今すぐ知らなくても」

「そうだよ！」

そんなマナ達の話している姿を、真琴はステージから見ていた。

その頃、どこかの洞窟で一人の少年が目を覚ました。

「ここは、どこだ？」

すると、一つの小さなドラゴンが少年の元に現れる。

少年が立ち上がると、そのまま洞窟の外に出た。

そして少年が見たものは――

「これは………いつのまに、ここまで酷くなってるのかよ！クソッ！」

そう叫ぶと、少年は怒りの叫びを上げながら地面に拳を叩きつけた。

次回! Re. ドキドキ&サイエンス!
第6話 真琴の正体とオムライスと料理の特訓?

第6話 真琴の正体とオムライスと料理の特訓？

マナがまごびーの握手会に訪れたその翌日、真琴は番組の収録を終える。

(どれだけ歌えば……あの方に届くの、どうすれば……)

そんな中、彼女はそう心の中で思っていた。

「ねえ真琴、仕事のオフアーがあんだけど？」

真琴に仕事の話をするDB、それを聞いた彼女は振り返る。

「レストランを訪ねてお料理体験をするそうよ。たまに歌以外の仕事もいいんじゃない？」

歌以外の仕事もやってみたら？とそう真琴に話す。

「いいわ……ただし一つ条件があるわ」

「条件？」

と、真琴が提示してきた条件という言葉にDBは『？』を出すのだった。

そして次の日、ちょうど学校から帰ってきた晴夜とマナと六花。

すると、相田家の周りに人だかりができていた。

「ん? 何だ?」

「あれ? 何だろ?」

自分の家の周りに人だかりが出来ていることに驚くマナ。六花と晴夜も加えて、彼女は実家の中に入っていた。

「テレビの取材?」

「すごい!」

六花が友達の人に取材が来た事に驚き、マナが凄いと声を上げていると、晴夜は健太郎に「凄いですね! 取材なんて」と話し掛ける。

「そうなんだよー! 是非この店ですて希望があつて、急に決まったんだ!」

健太郎は店に取材が来た事を嬉しそうに語る。

「ここはぶたのしっぽ亭の2代目として、しっかり腕を振るわないと!」

「気合い入ってますね!」

「大丈夫! パパの料理は日本一だもん!」

店に取材が来た事だけでも嬉しいと感じた健太郎だったが、マナの言葉で更に嬉しくなった。

「わしゃまだ認めておらんがな……」

後ろの椅子に座っている宗吉がそう答え、健太郎は苦笑いをする。

マナのお母さんはそんな宗吉を宥めていた。

「まあまあお父さん。アイドルが来るって話だし、笑顔で迎えましょう！」

「アイドル？」

「アイドルとは、すごいですねえ〜」

「誰が来るの!?!」

「えーとね……確か……」

あゆみは誰が来るのか思い出そうとしてしていると、玄関のドアが開いた。

入って来たのはなんと、真琴とマネージャーのDBだった。

「こんにちは」

「おはようございます」

それぞれの挨拶をする二人。

「まこぴー!」

真琴を見て嬉しそうな表情を浮かべるマナ、晴夜と六花は驚き、そしてマナは真琴に近づく。

「嬉しー!まこぴーが家に来てくれるなんて!」

手を出して握手を求めるマナだが、直ぐに手を引つ込めてすぐに笑顔を見せる。

「仕事で来ただけよ………あなたのお家だったの?」

「はい！あたし、相田マナって言います！マナって呼んでくださいね！」

「私は菱川六花です」

「俺は桐ヶ谷晴夜、以後お見知り置きを」

それぞれ自己紹介し、真琴は晴夜の方をジッと見ていた。

「な、何か？」

「……別に。(ビルドもいたのね)」

そう言つて真琴は顔つきを変えず、厨房へと向かった。

そして収録が始まった。

「まずはにんじんを洗つて？」

「はい」

にんじんを真琴に渡す健太郎、

…が、彼女はにんじんをボールに入れると、なんとその中に洗剤を入れ始めた。

「えっ……？？」

「なっ……？？」

「ちよ、ちよつと……？？」

晴夜と六花とマナの三人は、真琴の思わぬ行動に驚く。

「洗剤はなしで！ねっ！」

すぐに彼女を止める健太郎。

「す！すみません！真琴は料理初めての物で！！？」

「？」

DBは頭を下げてスタッフや健太郎に謝る。

「ま、まあ……きつと緊張しているのよね」

あゆみは苦笑いをしながらそう話す。

——ちなみに野菜を洗剤で洗いたい場合は、専用の洗剤を使った上で短時間で洗い、ちゃんと水で最後まですすぎましょう。

「じゃ、じゃあ……今度はベーコンを切ってもらおうかな」

健太郎はそう言つて真琴にベーコンを渡す。真琴はまな板にベーコンを置くと、包丁をまるで剣を構えるような姿勢で持つ。

（えっ？あれつて……ま、まさか……！！？）

晴夜の嫌な予感の数秒後に的中。真琴は包丁を振り下ろして、ベーコンをまな板ごと真つ二つにしたのだ。

それを見た皆は余りにもあんな光景に呆然としてしまい、スタッフが間を空けて突っ込みを入れる。

「真琴ちゃん………剣道じゃないんだから………」

「えっ?」

「すみません!すみません!」

DBは必死で謝るが、だんだん表情が険しくなる宗吉。それに唾然とする晴夜とマナと六花。

「き、きつと緊張が解けないのよ………」

そう言つてあゆみは宗吉をゆだめる。

「そ、そうだ!卵を割りましょう!卵を!」

そう真琴に指示するカメラマンは、「ハードルを下げて………」と健太郎に小声で指示する。

「じゃ、じゃあ………」

卵の割り方を教えようとする健太郎だが、既に真琴が右手と左手で、それぞれ三個ずつ卵を持つていた。

「割ります」

そう言つて右と左で卵をぶつける。当然だが、次の瞬間には「ぐちゃあ」となった卵の残骸が真琴の服に付いた。

「マジか………」

晴夜は真琴の行動に呆れて、それを見たマナ達は絶句、宗吉の表情が更に険しくなった。

「ワザとじゃないんだよね……?」

「そうだよ……まこぴーの顔真剣だもん……」

マナの言う通り、真琴の表情は真剣そのものだった。

「まこぴー、食べ物には愛情たっぷり優しくね?」

「えっ? 食べ物だったのこれ?」

手に付いた可哀想な卵を見てそう答える真琴。

マナ達は、彼女が卵を食べ物だと知らずに割っていたと知り、再び絶句する。

「かあー! 卵が食いもんとも知らねえで何が料理だ! 出直してきな!」

宗吉はそう言ってその場からいなくなる、そして真琴は不安そうな表情をするのだった。

夕方、とんでもない新事実を知らしめられたスタッフ達は落ち込んでいた。

「はあ、参ったな……明日まこぴー、ちゃんと来てくれるかな……別の企画を考えた方がいいんじゃないのか?」

そう言いながら引き上げるスタッフ。彼らが居なくなつたのを確認して、健太郎はド

アを閉める。

「いや、驚きましたね、あんなに料理が苦手とは……」

健太郎はそう、座っている宗吉やマナ達に聞こえるように話す。

「苦手とかそういう問題じゃねえ」

「お父さんは料理には心を込めてほしいのよね？」

「心を？」

マナはその事に頭をかしげ、宗吉はそうだと言う。

「そうだ、一度まな板に向かったらとことん食べる相手を思っで作る……それが料理つてもんだ」

「食べる相手を思っつか……でも」

晴夜は思う、それは包丁で切ろうとした時の真琴の姿。

その姿は、まるで『獲物』を狙ってるかの様だった…

一方、車で移動中の真琴とDB。

「悪かったわね。このところ歌に煮詰まってる様だから、気分転換になればと思っただけ……」

「ううん、悪いのは私……」

真琴はもつと料理の事を勉強してからいけばよかったと後悔する。

「どうしてあの店を選んだの？ 知ってたんでしょ？ あそこがマナって子の家だつてこと」

運転をしながら聞くDBに真琴は答えた。

「あの子達がどんな生活をしてるか見たかっただけ」

「で、どうする？ この仕事キャンセルしてもいいのよ」

そう言われた彼女は、窓の風景を見ながら考える。

その数時間後、 ありすも来てマナの部屋で先のことを話していた。

「まあ……真琴さんがいらしたのですの？」

「びっくりでランス〜」

マナからそう聞いて驚くありすとランス。

「きつと僕たちの事を調べにきたケル！」

「それはないと思うけど……」

「まあ、確かにそんな感じはしなかった……」

そうラケルに六花は言い、 晴夜も同意した。

「大丈夫かな〜まこびー……ちよつと失敗しちゃったし……」

「ちよつとじゃないけどね……」

六花はマナの言葉に苦笑いをしながら答える。

「おじいちゃんにあんな事を言われて落ち込んでるんじや……」

「そうよね、あなたのおじいさんが怒るなんて相当やばいよね? あれは……」

「うん、だから心配なのよ」

六花の言う言葉にマナはうなづく。

「マナは本当にまこぴーの事が好きシヤルね」

「あたし、まこぴーを迎えに行つてくる!」

そう言つて椅子から立ち上がり走り出す。

「ちよ! マナ!!? どこ行くの!!?」

「まこぴーを迎えに行つてくる!」

「えっ!!? ちよ……」

マナの言葉に驚く晴夜達、そして外に出るマナに六花が「ストツ—ープ!!?」と叫ぶ。

彼女の言葉に動きを止めるマナ、六花達も外に出てきた。

「迎えに行くつてあなた……まこぴーが今どこにいるか知つてるの?」

「そういえば……知らない……」

何処に居るか訊かれたマナの答えに、六花は思わずため息を吐く。

「あつ、でもこの間マネージャーさんに貰った手紙に名刺が！」

「でしたらまずそちらにお電話してみるとか」

「けど、いきなり行っても門前払いになるだけだと思うよ？」

晴夜の言葉にマナはうなづく。

「だよね〜……また迷惑かけちゃうところだった……」

みんな、また勝手な事言つてごめん……」

「大丈夫、でも意外と戻つて来るかもよ……」

とそう言つたその時、二人の女性が歩いてきた。それは真琴とDBだった。

「まこぴー！本当に戻つてきた!!？」

マナは真琴が戻つて来てくれたことに喜びながら二人に近づく。

「良かった！戻つて来てくれて！」

「何？」

「あの………良かったら、一緒にオムライスを作る練習をしませんか？いろいろコツがあるんです！」

マナは料理の練習を一緒にしようかと真琴に質問する。

「練習………私もちゃんと、お料理出来るようになりたくて戻つて来たの………付き合つて

くれる?。」

「はい!本当……戻って来てくれて嬉しいです!」

「マナ、あなた事を心配して待ってたんですよ」

「仕事を途中で投げ出したくなかっただけよ……」

マナ達がそう話すと、真琴はそう答える。

「はい!でもやっぱり嬉しいです!」

そして、マナも笑顔で答える。

その後五人は厨房に集まり、オムライスの材料を揃えて、料理を始めた。

「では、どうぞ」

「よし、割るわよ」

そう言つて、真琴は卵を一つ手に取ると、そのまま力強く叩きつけてしまい、卵の身が台の上に出てきてしまう。

「あ……」

「肩に力入りすぎかも」

「力?」

「うん。卵にそこまで力を入れなくても、割れるので見ててください」

そう言うとマナは卵を一つ手に取り、ボウルの角で叩き、中で割る。

「へえ……」

「コンコンパカッ！がリズムです」

「コンコンパカッ！……」

真琴はそう言いながら卵を手に取り、肩の力を抜いてマナがやった様にやると、綺麗に卵がボウルの中に割れた。

上手に卵が割れたことに彼女は嬉しそうにして、マナ達も笑みを浮かべる。

「お、できたー！」

「やったー！」

「お見事ですわ」

その後は、晴夜と六花が包丁の切り方を教えた。

次にありますが盛り付けについてアドバイスし、美味しいオムライスが完成した。

その時の真琴の笑顔に共鳴し、マナ達の顔は笑顔になっていた。

その頃、ジコチュークラブでは、イーラがボウリングをやっていた、

…がしかし、ガーターばかり出していた。

「ふっ……上手くいかない時って、何をやってもダメじゃない……」

「うるさいな!この間負けて帰って来たじゃないか!」

激昂するイーラはもう一度投げるが再びガーターだった。

苛立つイーラだったが、マーモは彼に向けて怒鳴る。

「しようがないでしょう!!?ビルドがあんなに強くなってるなんて!!?予想外だったの!!?」

「まずいぞ……」

『ああ、まずいな……』

隣の椅子に座っていたボールとスタークが、パフエを我武者羅に食べようとするマーモにそう言った。

「何がまずいのよ!!?まずいのはこれ!!?」

『違う、そうじゃない』

「キングジコチュー様がお怒りだそうだ、俺達に残された時間は……そう長くない」

「くうく!!?もつと頑張りなさいよ!」

もつと頑張れと叫ぶマーモ。

「お前も頑張れよ!」とイーラがツツコむと、二人は喧嘩を始めた。

「やれやれ?そろそろ俺の出番かな、それにビルドの実力を試すのも悪くないな」

「ボールが立ち上がって眩くと、スタークが座りながら警告をする。

『おい、ボール。やるなら気をつけろよ』

『どういう事だ、スターク……』

『プリキュアもそうだが、ビルドの方もどんどん強くなっている、油断すると痛い目を見るぞ〜』

不敵な笑いを溢してそう言うスタークに、ボールは鼻で笑って返した。

そして次の日、料理番組の本場マナ達は真琴の様子を見守っていた。

「今、真琴はチキンライスを作っており、それを終わると、とうとう卵で包もうしている。」

「すごいな、一晩の練習で一人でここまで作れるようになるなんて……後は卵か」

「そうですね」

「最後の難関よね」

「しつかり、まごびー！」

マナ達は応援する形で真琴を見ていた。

そして、真琴はチキンライスを卵で包んでいき、そしてある程度火を通したら、お皿

に盛り付ける……結構大きなオムライスを。

「やったね!まこぴー!」

「つて、でか!?」

マナは嬉しそうに言うが、カメラマンがオムライスの大きさに驚いて声をあげる。

「あれつて、何人前作っただ……」

「ご、ゴメン!あたしがつい、四人分の材料用意しちゃつて!」

「ああ、構いませんよ。せっかくですから、皆さんで食べているところを撮影させてください」

カメラマンの人が笑顔で答えると、マナは安心したかのような顔をする。

「じゃあ、まこぴー!仕上げお願いします!」

マナは真琴の元に行くと、ケチャップを手渡す。

「ハイ、どうぞ」

「これ、何?」

「こうするんですよ」

そうやって彼女は真琴と一緒に、ケチャップでオムライスに何かを描き始める。

そしてケチャップで描き終わると、そこにはハートマークがあった。

「ハートか」

「マナちゃんらしいですわ」

「確かにね」

「あ、六花やありすも手伝って！晴夜君も！」

「えっ!?」

「わかりましたわ」

「しようがないな」

そう言つて、皆でオムライスに飾り付けをしていく。完成したオムライスはにんじんでトランプのスートのマークがあつた。

その後マナ達は座り、スプーンを手に持つて一緒にオムライスを食べる。

一口食べると、皆は同じ反応をする。

「美味しい！」

「美味しいですわ！」

「うまい！」

真琴も一口食べると、目を見開く。

「ホント、美味しい」

そして、真琴はしばらく考え事をする。

それにマナと晴夜は反応する。

「まこびー?どうしたの?」

「何か考えごと?」

二人が聞くと、真琴はスプーンを置いて、晴夜やマナ達を見る。

「……大切な事を思い出しの」

「大切な事?」

「貴方達のおかげよ」

「ああ……!まこびー……!」

「よくわかんないけど、よかった!」

マナは真琴にお礼を言われ、とても嬉しく感じた。晴夜も彼女が喜んでいる様子を見て満足そうにしていた。

「青春だね」

その様子を見ていたスポンサーの人とADはそう会話をする。

「撮ってるばかりじゃなくて、俺も食べてえな……」

オムライス……仕事なんかほっぽり出してたべちやおうかな〜」

マナ達がオムライスを食べているのを見て、そう呟くカメラマンの男性。すると男性のプシケが少し黒く染まった。

「いやいや……仕事は仕事我慢我慢」

だがそう呟くと、カメラマンのプシケーの黒い部分も小さくなった。

「食っちゃえばいいじゃん……」

突如、カメラマンにそう囁くイーラ、それに驚いたカメラマンは裏口のドアを見る。

そしてドアが開き、イーラが現れた。

「お前の望み……叶えてやるよ」

イーラはそう言つて指をパチンと鳴らすと、男性のプシケーが黒く染まり、男性の体から出てきた。

「暴れろ！お前の心の闇を解き放て！」

イーラがそう叫ぶと、豚のジコチューが現れた。

「ウオーー！腹減ったブー！」

ジコチューがそう叫ぶと声が聞こえたのか、健太郎は廊下に向かう。

「闇の鼓動シャル……！」

「厨房の方ね……」

そして健太郎達が厨房に向かうと、ジコチューが厨房にあつた食材を食べていた。

「な、何だ!?」と驚く一同。するとドアが開きセバスチャンが入ってきた。

「皆さん、ここは危険です。早く外へ」

「でもまだ中に娘達が……!!」

「大丈夫です。すでに避難しました」

そうセバスチャンが答え、あゆみはテーブルを見てマナ達がいなかったことを確認する。

「さあ早く!」

「は、はい!」

そして外に避難する一同。一同が避難した後、晴夜達がテーブルから顔を出す。

「みんな、準備は良いか?」

「「うん!」」

晴夜が確認すると、そうマナ達はうなづく。

「行くよシャルル!」

「わかったシャル」

「ラケル、私達も!」

「了解ケル!」

「ランスちゃん、準備はよくて?」

「もちろんでランス」

シャルル達はコミュニケーションに変わり、マナ達はコミュニケーションにキュアラビーズをセットした。

「プリキュア！ラブリंक！」

『L・O・V・E！』

マナ達は光に包まれて姿が変わり、キャリーにシャルル達が入ると彼女達はポーズを決めながら叫ぶ。

「みなぎる愛！キュアハート！」

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

「陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

晴夜はドライバーを出し、腰に装着した。

そしてラビットとタンクのボトルを取り出し、2本のボトルの栓を回した。

「さあ、実験を始めようか！」

そう言つてボトルをドライバーに差し込むと、音声が鳴り響く。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

音声が鳴り終わると晴夜はドライバーのレバーを回し、前後からスナップライドビルダーを出現させる。そして、二つのアーマーが形成された音声が流れるのと同時に晴夜は構えて叫ぶ。

『Are you ready?』

「変身!!？」

彼の体に二つのアーマーが合体し装着され、体から蒸気が流れ再び音声で鳴り響く。

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイー！』

「愛を無くした悲しい豚さん！このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻してみせる！」

そして最後にハートが手でハートのマークを作り、そうジコチューに言った。

「ふん!!? 今日という今日は、お前ら全員まとめてコテンパンにしてやるぜ！」

彼らの前に現れたイーラはりんごを食いながらビルド達に言う。

そしてビルド達は…

「またあなたですか？」

「性懲りもなく現れて……」

「しつこい奴だな……」

…何度も現れるイーラに飽きれていた。

「それはこつちの台詞だ！やれ、ジコチュー！」

ジコチューに指示するイーラ。しかしジコチューは食材を食べて動かなかった。

「食ってないで動け！」

イーラが怒鳴りながらりんごを投げつける。するとジコチューは壁に突進し、激突する。

「お店が!?？」

お店を壊されて思わず叫ぶハート。そしてジコチューは壁を食べ始めた。

「マジかよ……」

「食べてるし!?？」

「まあ？お行儀の悪い？」

「そんなものを食べたならお腹壊しちゃうよ！」

ズレた突っ込みを入れるロゼッタとハート。するとジコチューの体が更にデカくなった。

「大きくなった!?？」

「まあ！よく食べる子はよく育って本当ですのね！」

「そこは感心するところじゃないから！」

ロゼッタに突っ込みを入れるダイヤモンド、その様子にビルドは不味いなど呟く。

「このままだと店が食べられる、ならば……」

ドライバーからドリルクラッシュヤーを形成し、ガンモードにしてジコチューに向けて撃つ。しかし攻撃は命中したが、脂肪で跳ね返された。

「ダメだ、分厚い脂肪で防がれる」

その間にジコチューが壁を突き破ると、目の前にはオムライスが置いていて真琴もD

Bもいた。

「オムライス食べたい〜!!?」

そして体が壁から抜け、料理に向かうジコチュウ。

「ダビィー!」

「その顔……待ってたわ」

そう言うとDBはラブリーコミュニケーションに変化した。

「え?!?」

「コミュニケーションになった?!?」

そして、真琴はコミュニケーションにキュアラビーズをセットする。

「プリキュア! ラブリンク!」

『L・O・V・E!』

すると髪がサイドテールで薄紫色になり紫色のコスチュームで、髪飾りや耳飾りがスパーード型になり、三人同様アームバンドとブーツの丈が長い、アームバンドにはリボンがついている。左右非対称の袖で、腰の横にもリボンがついている。

「勇気の刃! キュアソード!」

「このキュアソードが愛の剣でああなたの野望を断ち切ってみせる!」

手でスパーードの形を作り、そう叫ぶソード。

「まこぴーがキュアソード！」

「やっと正体現してくれたな！」

キュアソードはビルドやキュアハート達を見て、コミュニケーションにキュアラビーズをセツトする。

倒れていたジコチューが立ち上がると同時に、キュアソードはコミュニケーションにハートを描く。

「閃け！ホーリーソード！」

光の剣を無数に放ち、それがジコチューに直撃すると、浄化されていく。

「ラブラブラブ！」

そう言って、目がハートになったジコチューの姿はプシケーへと変わり、持ち主の元へ帰っていく。

「ちっ!!? 覚えていろよ！」

そう捨て台詞を吐いてその場から消えるイーラ。光が降り注ぐと、壊れていた店内は元に戻っていく。

店内が無事元に戻ると、キュアハートは嬉しそうにキュアソードを見る。

「まこぴー！ やっぱり、まこぴーがキュアソードだったんだね！ もうキュンキュンだよ！」

そう言っただけで抱き着こうとするが、華麗にかわされる。

「見ていられなかっただけよ」

「私達、この時を待っておりましたわ！」

そうソードの方を見て話すロゼッタ。

「うん！貴方と仲間になりたくて」

そしてハートは彼女に近づきそう言っただけで、手を差し出すと、キュアソードはその手を見る。

（同じだ。私も……だから、私、ここに来たんだ。それと……）

キュアソードは体をキュアハートの方へと向け、キュアハートの手を見てから、ビルドも見ると。

ビルドはなぜ見られているのか疑問を抱くが、ダイヤモンドはそれに気付く。

「晴夜君」

「え？……ああ」

ビルドは戸惑いながらも気付く、手を差し出す。

それを見ると、キュアソードは微笑む。

「ありがとう」

そう言っただけで手を握った。その時だった……

「この時を待っていた」

『!?!』

いきなり聞こえた声に全員が反応すると、そこにはサングラスをした一人の男、ベールが立っていた。

「お前達四人が一堂に集まる、この時を、そしてビルドもいるのもな」

「どちら様ですの?!?!」

「名乗る必要はない。お前達と会うのもこれが最後だ。」

さらば、プリキュア!そして、仮面ライダービルド!

そう言つて、ベールが何かを放ち、全員はそれに身構える。

だがそれと同時に床に大きな穴が空き、その穴に落ちていく。

「な、なんだ?!?!ウワアアアアアア?!?!」

「!?!きやああああ?!?!」

そして穴が消えて、その場からビルドとハート達が消えると、ベールは呟く。

「もはやこの世界に光が届く事は無い。ここは我々、ジコチューの物だ」

館を口にし小さく笑っていると、後ろからスタークが現れる。

『おいおい、笑つてる場合か?油断すると足元を掬われるわぞ』

「心配するな、あの世界では絶対に脱出できない」

『ならいいが…』

そう言つて気づいた時には、ボールもスタークも消えていた。

次回！ Re・ドキドキ&サイエンス！

第7話 ギリギリの戦い！そして、現れるもう一人のライダー

第7話 ギリギリの戦い！そして、現れるもう一人のライダー

突然現れたボールによって作られた巨大な穴に落とされた晴夜達。

しばらくして、マナが目を覚ました。

「う……あれ？」

起き上がったマナは辺りを見回すと、そこに見えるのは全て砂漠の様な景色だった。そんな光景を見ている中、倒れていた六花とありすを見つける。

「六花！ありす！よかった……はっ、まこぴーは!?？」

「ランスちゃん達も居ません」

「それに晴夜君も……ハッ！」

六花の驚きの言葉を聞いたマナ達は振り向き、遠くに聳え立っていた巨大な物体に驚く。

そこには、ジコチューの親玉『キングジコチュー』が立っていた。

「何なのあれ……！」

「(なんだろ、胸の奥がジリジリいつている……ここに居ちゃ駄目だ!)みんな逃げて『そ

の必要はないわ』え?。」

マナは後ろを振り向くと、真琴が砂漠の丘に立っていた。

「まこぴー!」

「キンググジコチューは深い眠りに付いているの……襲って来ることはないわ」

「キンググジコチュー?」

「どうしてそんなことを知っているの? 貴方は一体……」

ありすがあの巨大な何かの名前を反復していると、六花の問いに対して真琴はしばらく眼を閉じ、再び眼を開きながら答える。

「私の名前はキュアソード、このトランプ王国を守護する……最後の戦士?」

(……何故少し疑問形なのかしら?)

そう言うキュアソードこと真琴は、少し疑問形で答えた。

その頃、マナ達から離れた所。そこでは一人の少年がトランプ王国へと向かっていった。

「もうすぐだ……ん?」

少年は目の前に倒れている人物を見つけ、倒れている所に向かって走った。

そこに居たのは晴夜だった。

「おい、大丈夫か？」

「うっ……？あれ、ここは？……ってか、お前誰？」

「お、お前こそ誰だよ!!？」

お互い驚き合うと、少年は晴夜の腰に装着されているドライバーに目が光る。

「お前……なんで、そのドライバーを持つてるんだ？」

「は？」

そう晴夜に言う少年は後ろから同じドライバーを出す。

「ビルドドライバー……」

「お前も博士から貰ったのか？」

「博士？なんて名前の博士なんだ？」

晴夜はビルドドライバーを作っただろう人物の名前を少年に問う。

「桐ヶ谷拓人博士……」

その言葉を聞いた瞬間、晴夜の体に衝撃が走った。

「父さん……」

「えっ……」

次の瞬間、晴夜は少年の肩を掴んで問い詰める。

「父さんが……父さんがこの世界にいるのか？」

「どこだ……どこにいるんだッ!」

少年は思わず、晴夜が掴んでいた腕を振り払った。

「知らねえよ!?俺だってわからないんだ!それよりも早くトランプ王国の宮殿に行か
ねえと!」

「トランプ王国……ここの名前か?」

「ああ!たぶんそこに行けば、きつとソードもいる」

少年のソードという言葉に晴夜が反応した。

「ソード……もしかしてキュアソードことか?」

「お前、あいつの事知ってるのか?」

「ああ、俺達はサングラスを掛けた奴にこの世界に送り込まれた」

「つ!?? だつたら急がねえと!!?」

「おい、待てよ!」

少年が急いで走ろうするところを止め、少年は晴夜の方を見た。そして、晴夜はビルドフォンとボトルを出し、ライオンボトルをビルドフォンに差し込み『マシンビルダー』へと姿を変えた。

それを見て、流石の少年も驚いた。

「うわあ!なんだよこれ?」

「俺の発明品さ！ そうだ、まだ名前いってなかったな。

俺、桐ヶ谷晴夜」

「……龍牙、上城龍牙だ」

互いに自己紹介すると、晴夜は龍牙にヘルメットを渡し、龍牙がバイクに乗ったのを確認した晴夜がエンジンを掛ける。

「道案内を頼む」

「……わかった」

走り出したバイクは、トランプ王国の宮殿へと向かう。

その一方、シャルル達もマナ達とはぐれてしまっていて、彼女達を探すために大声で叫んでいる。

「マナー！！？ 六花ー！！？ ありすー！！？」

「晴夜も一体どこにいますのでランスス〜！！？」

そう叫んでいたその時、ラケルが何かに気が付く。

「ハッ！、隠れるでケル！」

とシャルル達が隠れた後の上にジコチューが飛んでいて辺りを見張っていた。

その光景にシャルル達は絶望に追いやられる。

「トランプ王国はすでにジコチューの支配されてるケル、見つかったらおしまいケル!」
「ジコチューに罠にはまってトランプ王国に送り返されて……おまけにマナ達と離れ離れ……」

「僕達、どうしたらいいでランス?」

「僕も分かんないケル……」

そう考えてる三匹だったが段々と悲しくなっていき…

「「びええええええええええ!!」」

そして、遂に泣いてしまった…

とその時。

「落ち着くビー!」

泣き出してしまったシャルル達に向かって、暗い方から一喝されたのである。

それに驚きその方角を見ると、一匹の紫色をした妖精がそこにいた。

「泣いてもはじまらないビー!ここからどうするか考えるビー!」

突然現れたその妖精にシャルル達は少し戸惑う。

「ええつと……」

「あなたは?」

するとその妖精は自己紹介を始めた。

「私はダビィ！キュアソードのパートナーダビィ！」

「「あああああ!!!」」

そしてお互い自己紹介を済ませようとしたがダビィに後回しにされた。そしてシャルルが宮殿にマナ達は向かうのではないかと考えつき、四匹は行動を始めた。

すると、ダビィにシャルルが質問した。

「ねえダビィ……どうしてトランプ王国はこうなつてしまったシャル？」

「僕たち生まれてすぐにあつちの世界に飛ばされたから、分からないケル」

するとダビィは足を止め、語り始めた。

「トランプ王国はとても平和な国だったビィ……」

ダビィの話によるとトランプ王国は笑顔でたくさん満ち溢れ、アンジュ王女のおかげでとても豊かな国だった。

……だがある日、突然ジコチューが攻めてきた。

そして奴らは国の人々をジコチューに変えていった。

それでもアンジュ王女は希望を捨てずにジコチューに立ち向かっていきキングジコチューを封印した。

そしてシャルル達を魔法の鏡に送り込んでいた時にアンジュ王女が追いつめられ、追

いつめていた所をキュアソードが駆けつけて共に鏡の中に入って行ったが、その時に彼女は女王とはぐれてしまったのだった。

その話を同時にマナ達も聞いていて、改めて真琴の思いを知った…

そして六花とありすはある事に気が付き、真琴に聞く。

「もしかしてあなたがアイドルをやっていたのは?」

「王女様を見つげるため?」

「私には歌しか残っていなかった……歌い続けていければきつと、あの方も気づいてくれるって思っていた。

……けれど……王女様は見つかからない……

私がどんなに歌っても、王女様は答えてくれない……」

そう言葉にする真琴に、六花達はそれを黙って見る事しかできなかった。

だがその時、マナが立ち上がって彼女に近寄る。

「だったら一緒に王女様を探そうよ?」

「えっ!?!」

それに真琴はマナの方を向く。

「一人より四人で探せば見つかるよ!」

「マナちゃん？」

「何……言ってるのよ」

困惑する六花達。

「あのマーモって人も、王女様の行方を捜していた……きつと王女様を見つけれたら困る理由があるんだよ！」

その言葉に対して、真琴は目をつぶって言う。

「新たなジコチューが生まれている間、ジャネジーが生まれるの。奴らはそのジャネジーを集めてキングジコチューを復活させようとしているのよ。

「だけど……キングジコチューが目覚める前に王女様を取り戻す事が出来れば、今度こそあいつを封印できるかもしれない……」

「ほら！ねっ！」

マナは六花達とそれを聞いて言う。

「それに……私たちがジコチューを浄化すれば、それだけキングジコチューの復活を遅らせる事ができるって事ね？」

これまでの話を聞いて、六花はそう分析する。

丁度その頃、マシンビルダーで宮殿を目指す晴夜と龍牙も、此処での悲劇を龍牙から

聞いた。

「なるほどな、つまりこの国をここまで最悪な事をしたのは、あのイーラやマーモ達という事か……」

「ああ……」

「それで、お前はソードとなんで一緒じゃなかったんだ？」

晴夜が何故彼女と一緒にじゃなかったのかと質問すると、龍牙はその理由を答えた。

「俺は……あの時、ソードと一緒に周りにいたジコチューを倒して、宮殿に向かうはずだった……」

「はずだった……」

「宮殿に向かう途中に、スタークって奴が現れたんだ」

「スタークが……」

晴夜はかつて、自分達の前に現れたワインレッドの怪人を思い浮かべた。

「知ってるのか？」

「ああ、奴は俺達の世界でも人をスマツシユに変えた張本人。そして、俺達の前に現れた」

「そうだったのか……とにかく俺は、ソードを先に行かせて一人でスタークに挑みただけだ、俺は奴に負けた。」

それで、俺が目覚めた時には……」

話が止まり龍牙の方を見ると、とても苦しい顔しているのに気付き、そんな彼に声をかける。

「そんな、しよぼくれた顔すんなよ」

「なんだと！お前に俺のなにか『わかるよ！』……えっ？」

「お前の気持ちはよく伝わるよ！俺もお前の話や、こんな町の姿を見せらちや、黙っていられなくなる……」

「お前……」

晴夜のその言葉に、龍牙は少し心が軽くなったような感じになる。しかし……

「でも、ズボンのチャックが全開だけだな」

「えっ……あ……？」

晴夜からの助言を聞いた龍牙は自分のズボンを確認すると、本当にチャックが全開だった。急いでチャックを締め、晴夜に話しかける。

「いつからだよ？」

「割と最初から……？」

「そんな前から、何で言ってくれねんだよ！」

「どのタイミングで言うのか気づけよバカ」

「バカってなんだよ!なんでバカなんだよ!!?」

「おいおい、揺らすなよ……」

そんなこんなでじゃれ合いながらも、二人は宮殿へを目指し向かっていく。

元の世界にある、ジコチュークラブにて。

ベールがソファに寝そべっていて、その近くの椅子に座っていたスタークに晴夜達の行方について話していた。

『ビルド達をトランプ王国に……?』

「ああそうだ、それにトランプ王国はもはやジコチューの巣窟。小僧や小娘達では生き延びることさえ敵わぬ。と思うが……」

そう言いつつもベールは起き上がってサングラスをかける。

「念のため、確かめておくか」

『そうしておけ、ビルドやプリキユアはしぶといからな……』

その事にベールは鼻で笑い、姿を消していった。

その頃、塔で話していたマナ達。

すると、湖からジコチューカエルの軍団が現れ、マナ達を襲い、一気に塔はカエルでぎつしりとなった。残ったカエルが2階から逃げたマナ達を追ってくる。

「なんでこんなに居るの？」

「この国の人みんなジコチューに変えられたの、生き残ってるのは私とあいつだけ……」
そのまま彼女たちは、T字路で左に曲がる。

しかし、逃げた先の通路が崩落してること気付く。

流石にここを通るのは難しいと感じた六花達であつたが……

「飛ぶよー！」

なんと、マナは崩壊した通路の先に飛び移ると言い出したのだ。

「えっ!?? 無理無理!」

と首を横に振る六花であるが、三人同時に飛び込み、無事に向こう側に着地した。だが運悪く、真琴は足場が崩れてしまい、ジャンプが間に合わなかった。落ちながら飛んだが明らかに足りず、落ちそうになったその時、真琴の手をマナが掴む。

真琴が背後を見ると、後ろからカエルジコチューが迫り来ることに気付く。

「私の事は放つていて貴方達だけでも逃げなさい」

とマナに逃げる様に言うが、彼女は首を横にふつて拒否した。

「あたし、逃げたりしない。キングジコチューを倒してトランプ王国に平和を取り戻してみせる!」

「あなた一人で何ができるって言うのよ!」

「マナの発言に反論する真琴であったが…」

「一人だけではありませんわ」

「幸せの王子がやるって言うんだから、私達も人肌脱がないとね」

と六花とありすも手を差し出す。

「止めなさい。貴方達はトランプ王国とは何の関係も無いでしょ」

「友達を助けるのに理由なんて必要?」

それを聞いて真琴は初めて会ったクローバータワーの出来事を思い出す。

(まるでブレない……強いんだな、この子)

ふと、そんなことを思う真琴は、決意したのか、六花達の方に手を差し出す。そして、上にながった。

一方、追ってきたカエル達は空中で揉めている間に墜落した。

「あらあら……」

その光景を見たありすとマナは溜息をする。

「あの……助かったわ……ありがとう」

その言葉に三人は嬉しそうな気持ちになった。

「さてと、これからどうする？」

マナはこれからの行動指針を考える。

「まずは、元の世界に戻らない事にはにつきもさつちもいきませんわ」

「そうね、せめて、晴夜君やラケル達とも合流できれば……」

「魔法の鏡……」

「「えっ？」」

真琴は自分が脱出する時に使った時空の扉の事を思い出し、マナ達に話す。

「それにくぐれば、もう一度貴方達の世界に戻れる筈……」

もしかしたらダビィ達も、そこに向かっているかも……」

それを聞いてマナ達は、真琴の案内で宮殿を目指し、走り出した。

そして宮殿に着き、真琴が最後に王女といった部屋へと到着した。

「鏡がいつぱい……」

「魔法の鏡はこの奥よ」

そして真琴の案内の下、マナ達は魔法の鏡を探そうと歩き出すと……

「遅かったな」

声が聞こえ、前を向くマナ達。

そこには鏡を持ったベールが立っていた。

「お前達の探し物はこれか?」

「魔法の鏡!?」

「トランプ王国と異世界を繋ぐ唯一の鍵……お前達が生きていれば必ずここに現れると思ってた」

『ほくう、お前にしてよく気付いたなベール』

するとベールの後ろから声が聞こえ、彼は声の聞こえた方を見る。

「スタークか……」

「スタークツ!」

彼の後ろにスタークが立っていた。真琴はスタークを見て構えを取り、マナ達も構える。

「この俺と一戦交えようというのか?勝てる見込みもないというのに」

「やってみないとわからないでしょ!」

「生憎だが……ゲームオーバーだ!フン!」

ベールは鏡を倒し、それによって鏡は割れてしまい、光が失われた。

「これでお前達は永遠に元の世界に戻れない……」

『残念だったな』

二人がそう嘲笑う様に眩くと、真琴は絶望的になり膝を着いた。

（最後の望みも消えた……私はもう二度と女王様にも、あいつにも会えないんだ……）

「主を失った宮殿と共に朽ち果てるがいい……フフフ……ハハハハ！」

ベールが勝利を確信しながら大きく笑っている……

「はっはっはっはっはっ……！」

突然、マナが笑い始めた。

「あん!??!？」

『ん?!』

ベールとスタークはそんな彼女の様子に疑問を抱いた。

「そんな事であたし達の心が折れると思ったたら大間違いよ！」

マナはとても自身満々に言う。

「何だと?!?!？」

「あたし達は貴方の力でトランプ王国を送り込まれた！」

それは……貴方には自由に、時空を行き来出来る能力がある証拠！」

マナはそあ分析すると、ベールは驚く。スタークは「あの小娘、思ってたよりメンタ

ル強いな」と思っていた。

「鏡なんかなくても……貴方に元の世界に送り届けてもらえばいいのよ!」

「お前、俺を屈服させる前提で言ってるのか?」

「モチのロン!」

「何処から出てくるのその自身……」

「マナちゃんらしいですわ」

六花とありすはそれぞれマナに言い、それを見ていた真琴も言う。

「負けたわ……貴方に……戻りましょう!貴方達の世界に!」

「!うん!」

『だが、変身も出来ないお前らに何ができるんだ?』

スタークがそう訊くと、後ろからバイクのエンジン音が聞こえた。

二人が音が聞こえた方へと視線を反らしたその時、天井のシャンデリアも落ちてきた。其処には妖精達がおり、マナ達の元に戻った。

「なんだ!」

ベールは驚くが次の瞬間、出口からマシンビルダーに乗った晴夜と龍牙が現れた。バイクはドリフトし、マナ達の前に止まった。

「!晴夜君(さん)!」

「よう!いいタイミングで間に合ったな!」

そして、真琴はもう一人の方…龍牙を見ていた。

「……………龍牙……………なの？」

「ああ…その、心配かけたな……………」

「私……………」

真琴は涙目になりながら龍牙に語りかけるが…

「話は後だ！今はコイツらを倒す！」

晴夜が真琴と龍牙にそう言う。

「……………うん！ダビィ！私、もう絶対諦めない！」

トランプ王国の平和が戻るその日まで……………ジコチューと闘う！」

真琴は出かけていた涙を引っ込め、覚悟を決めた。

「準備はいいか？」

晴夜の言葉に全員が頷き、マナが言う。

「行くよ、皆！」

マナ達はラブリークミューンにキュアラビーズをセットして叫ぶ。

「『プリキュア・ラブリンク！』」

マナ達はラブリークミューンの画面を指で「L・O・V・E」と描く。

『L・O・V・E！』

すると四人の体は光に包まれ髪が伸び、それぞれ違った頭頂部の髪飾りに結われ、次に彼女達の妖精。パートナーと同じ色のコスチュームになり、キャリーにシャルル達が入ると、彼女達はポーズを決めながら叫ぶ。

「みなぎる愛!キュアハート!」

「英知の光!キュアダイヤモンド!」

「陽だまりポカポカ!キュアロゼッタ!」

「勇気の刃!キュアソード!」

「一二響け!愛の鼓動!ドキドキプリキュア!」

次に、晴夜と龍牙はビルドドライブを腰に装着する。

すると、龍牙の所に小さなドラゴンの様な物が現れ、龍牙の手に置かれてガジェットとなった。

「それは?」

「こいつは博士から、変身する時に必要だって言われて貰ったんだ」

「まあいい、行くぞ!」

「おう!」

「さあ、実験を始めようか!」

二人はボトルを出し一回降り、龍牙はガジェット——『クローズドラゴン』にボトル

を差し込んだらドラゴンの絵が現れ、音声が鳴った。

『ウエイクアップ!』

晴夜は2本のボトルをベルトに差し込み、龍牙はボトルを差したガジェットをベルトに差し込むと音声が流れた。

『ラビット!タンク!ベストマッチ!』

『クローズドラゴン!』

さらに二人はドライバーのレバーを回すと、スナップライドビルダーが出現し、アーマーが形成された。

しかし龍牙のアーマーはそれだけじゃなく、横にガジェットと似た形のアーマーが形成されていた。

そして、音声が鳴り響く。

『Are you ready?』

それと同時に、晴夜と龍牙は同時に構えて叫ぶ。

「変身!!?」

『鋼のムーンサルト! ラビットタンク! イエーイ!』

『Wake up burning! Get CROSS—Z DRAGON! Ye

ah!』

兎と戦車の二つのアーマーがモチーフのビルド。

だが龍牙の変身した姿はハーフボディのビルドとは違い、両方とも同じアーマーが体に装着され。更に横に形成されたアーマーも装甲になり、『ドラゴライブレイザー』『バーンアツプクレスト』を纏い、頭部にはドラゴンの頭部みたいな出力調整装置――『フレイムエヴォリユーター』が追加され、大きくビジュアルが変わった。

「それ、名前は？」

「クローズだ！」

「仮面ライダー……クローズか」

「仮面ライダー？」

「俺がそう呼んでいるだけだ」

「仮面ライダー……クローズ、なんかいい名前だ！負ける気がしねえ!!？」

そして戦いが始まった。まずはハートがベールにパンチしたが、軽く避けられた。

「何だその拳は？ハエが止まるぜ？」

「はあああああ！」

次にソードはジャンプキックを放つが、ベールはその足を掴んだ。

「お前の蹴りは軽い」

「え!? きゃあー!」

ソードを投げつけるが、ダイヤモンドがそれを抱えられた。

それを見たベールは二人に衝撃波を放ち、二人へ向かっていくが、そこにロゼッタが二人の前に立ち、ラブリーコミュニケーションにラビーズをセットする。

「カッチカチのロゼッタウオール!」

ロゼッタウオールで防ぐも、ベールの衝撃波の方が強く、ロゼッタは吹き飛ばされる。

「ロゼッタ!」

それを見たベールは「どうした? もう終わりか?」と、ハート達に挑発する。

一方のビルドとクローズは、スタークと闘っていた。

「ハッ!」

「オラア!」

ビルドがドリルクラッシュャー、クローズは拳で攻撃するが、スタークはそれを防いだ。『どうした? その程度か?』

「余裕かましている場合かよ!」

クローズはすかさずスタークに攻撃をするがあっさり避けられ、逆にカウンターを食らってしまった。

「ぐわあ!」

『おいおい、再び挑んできたわりには随分呆気ないな』

「くそ!何で当たらねえんだよ!」

そう悔しがっているクローズを見て、ビルドは話しかける。

「攻撃が単調過ぎるんだよ。そんなんで勝てるかよ」

「なんだと!」

「ちよつと見てろ!」

お前誰の味方なんだよと文句を言うグロースにそう言つて、今度はビルドがスタークに挑む。

『今度はお前か、俺を楽しませてくれよ!』

「ああ、楽しませてやるよ」

そう語りながら違うボトルを出して、ドライバーに差しているボトルと差し替える。

『タカ! ガトリング! ベストマッチ!』

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

一二つのアーマーが形成され装着され、音声が流れた。

『天空の暴れん坊!ホークガトリング!イエーイ!』

「変わった!?？」

「ハア!!？」

ビルドは翼を広げ、ホークガトリンガーの特徴の空中での銃撃で敵を翻弄する戦いでスタークに攻撃する。

『グッ、さすがだな！だがそのフォーム、一度見ているんだよな!!？』

とスタークがスチームガンで反撃して来たが、ビルドは躲し…

「これだけじゃない！」

更に違うボトルを差し込んだ。

『ニンジャ！コミック！ベストマッチ！』

レバーを回し、また新たなアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「ビルドアップ！」

『忍びのエンターティナー！ニンニンコミック！イエーイ！』

ニンニンコミックフォームになったビルドは四コマ忍法刀を持ち、刀のトリガーを一回押す。

『分身の術！』

複数に分身したビルドは、全方向からの攻撃でスタークをかく乱した。その隙に刀の

トリガーを2回押す。

『火遁の術!』

ビルドの分身は一つになり、刀に炎を纏って更に音声が響く。

『火炎切り!』

『うわあ!?!?』

『うおっ!?!』

スタークに一刀両断するような勢いでスタークに攻撃。見事に直撃すると、偶然近くにいたベールもその衝撃を受ける。

「すげえ……」

感心するグロース。二人が吹き飛ばされるのを見たソードはビルド達に指示を出す。

「みんな!私があいつを引きつける……その隙にあなたたちの技や必殺技で攻撃して
!」

「いいのか?」

「いいから!」

「わかったわ!」

ソードが全員にそう提案したのを聞いて、ビルドはボトルを取り替えて最初のフォームに戻し、一同はそれぞれ構える。ソードはラブリーコミュニケーションにラビーズをセットし

た。

「閃け！ホーリーソード！」

ホーリーソードをベールとスタークに向けて放つ。

「どこを狙っている！」

『残念だったな』

ジャンプし避けるベールとスターク。

しかしホーリーソードは前方の鏡に命中し、それに反射されたホーリーソードが上にいた二人に命中した。

「何？？」

『ちっ！計算して撃ったのか？！』

ホーリーソードが命中しバランスを崩すベールとスターク。

そしてダイヤモンドはラブリーコミュニティにラビーズをセットした。

「煌めきなさい！トウインクルダイヤモンド！」

ベールとスタークに技を放ち、二人の足を凍結させた。

『くっ！！動けん！』

「貴方に届け！マイスイートハート！」

マイスイートハートをベール達に放つハート。

そして、ビルドとクローズはドライバーのレバーを回し、足にエネルギーを集約させていた。

『Ready go!』

「行くぞー!」

「おお!!?」

ビルドから化学式の放物線が出現しベール達を挟む。

更にクローズの背後からは蒼い炎の龍のエネルギー体『クローズドラゴン・ブレイズ』が現れる。

そして二人は飛び、ビルドは放物線を滑り込むように加速し、クローズは後ろの龍の吐く火炎に乗り、同時にダブルライダーキックをかました。

『ボルテック フィニッシュ!』

『ドラゴニック フィニッシュ!』

「ハアアアアアア!!?」

ビルドとクローズ、ハートの技は同時にベール達へ直撃。

スタークを吹き飛ばし、ベールから黒いオーラが出てきた。

「やった!」

「ふう〜」

「しゃあー！」

一同は攻撃が命中した事に喜ぶ。しかし、ベールとスタークは立ち上がった。

「くう……おのれ、俺のジヤネジーをここまで奪われるとは……！」

『まさか、ここまでやるとは予想外だった』

「なんてタフなの!?？」

ビルド達はベール達のタフな所に驚く。

「皆さん！あれをー！」

するとロゼッタは何かに気付き、ハート達に叫んだ。

みんながロゼッタが指差した方を見てみると、先ほどの時空を超える鏡の破片が光っていたのだ。

「あれは……！」

「魔法の鏡はまだ生きているー！」

「みんな！今の内にー！」

ビルド達はすぐに鏡の破片がある所へ向かう。

「逃すものか……！」

「逃げるんじゃない……私達は必ず帰ってくる！」

王女様と、一緒に必ずトランプ王国を蘇らせる！」

ベールにそう答えるソード。そしてビルド達は光に包まれ、宮殿から姿を消した。

「くっそう……プリキュア!おのれ仮面ライダー!」

ベールは悔しさの余り叫ぶが、一方のスタークは不敵な笑いを堪えて考え込んでいた。

『(……ビルドの方は3・7、クローズは3・5か)』

……思っていた以上に……成長している……こいつは面白くなってきた』

トランプ王国から戻った晴夜達は、どこかの公園に着く。

「イタタタタ……」

真琴は見事に着地したが、他のみんなは失敗していた。

「(こ)は……」

「どうやら戻って来られたみたいね」

すると真琴は空の方を見る。そして、トランプ王国の道が閉じて行くのをただ見届けた。

「トランプ王国への道が……」

「これでもう……」

真琴と龍牙はもうトランプ王国に行けなくなるのではないかと思うが…

「大丈夫だ！」

「え？」

真琴と龍牙は晴夜達の方を向き、マナが二人に話す。

「また一緒に帰り道を見つけよう」

「王女様を探さないといけないしね」

「トランプ王国を取り戻す為にも」

そう言つてマナ達は手を重ね合わせ、晴夜が言う。

「真琴！龍牙！必ず俺達の力でトランプ王国と王女を取り戻す！」

晴夜の言葉にマナ達は頷き、真琴と龍牙は目を閉じ、マナ達の手に乗せる。

「お願い、みんなの力を貸して」

「俺からも頼む、力を貸してくれ」

「うん！」

「必ず、ジコチュー達に勝とう！」

『おー！』

晴夜やマナ達はその心に、新たな誓いを立てるのだった。

次回！ Re. ドキドキ&サイエンス！

第8話
バースデー! 不思議な赤ちゃん

第8話 バースデイ！不思議な赤ちゃん

ここは晴夜の家の地下室、いわゆるビルドのアジトであり、それと同時に晴夜の部屋でもある。

部屋の中はいくつかの数式や化学式が書かれており、武器を作る材料や道具も揃っていた。

そして今、晴夜は龍牙への説明に苦勞していた。

「いいか、もう一度言うぞ……これが最後だから……」

「おう」

晴夜はボードに書いてあることを説明しようとしており、龍牙はそれを黙って聞いている。

「お前が！真琴と一緒にこの世界で暮らせないのは……」

「おう」

「真琴はこの世界では、今や売れ子のアイドル……」

「おう」

「マスコミなどに、お前と一緒に暮らしているのが見られたら……」

「おう」

「報道とかになり、真琴の仕事に関わる問題に……」

「おう」

「なるんだよ!」

「あ! やつとわかった!」

龍牙は2時間以上掛けてようやく晴夜の説明を理解した。

晴夜は非常に疲れたような顔をしながら、やつと説明をわかってくれた事に呆れた。

「つたく、この説明に時間取らせやがて、これだからバカは」

「バカってなんだよ! バカって!」

龍牙は晴夜の肩を掴んで体を揺らしながら、さらに質問する。

「大体なんで、俺はお前の家に居候しなきゃいけないんだ!」

「マナ達の家に泊めるわけにいかないからに決まってるだろ!」

それを聞いて龍牙は静止した。その後、晴夜は溜め息を一息ついた。

「はあく……とところでお前のガジェットドラゴンに入っていたこのメモリチップとこのボトルは何だ?」

晴夜は龍牙にそれを見せてると、龍牙はその質問に答える。

「何だそれ? そんなのいつ入っていたんだ?」

答えは知らない、であるが。

「なんだよ知らねえのかよ……まあ、いいや。」

ボトルについてはまだわからないが、このメモリチップのデータは父さんのトランプ王国での事やライダーシステムについて色々記載している。

……が、一部のデータが破損している」

「マジかよ！それ直せるのかよ？」

「時間は掛かるかもしれないが、なんとかやってみるつもりだ」

それを聞いた龍牙はホツとして腰を置く。

「しかし、せっかく真琴と再会出来たっていうのに一緒にいられないなんて……」

「そんな顔するなよ、明日になればまた会えるだろ」

そして翌日。大貝町のモニターから真琴の歌のPVが流れていて、見ていた人達は真琴の歌に惹かれていた。その中に変装して隠れていた真琴はため息をしながら誰かを待っていた。

「まっぴー！」

後ろから声が聞こえ、振り向くと眼を輝やかせているマナがいて、その後ろには六花、ありすがいた。

「お待たせ！本日はお日柄も良く待ち合わせ日よりだね！桜は綺麗に咲いてるし、空は青く、太陽は温かい……もうサイコー！」

真琴はマナの行動が意味が理解出来ず、六花は若干呆れた眼で見ている。

「マナ……テンション高過ぎて変」

「だってだって、あのまこぴーが……今此処にいるんだよ！」

「剣崎さんがリアクションに困ってるでしょ」

と指摘する六花に笑いながらありますが口を開いた。

「ウフフ、マナちゃんは真琴さんと友達になれたことが嬉しくて仕方ないですよ」

「え？」

ありすの言った事にマナは頷く。

「そうなの！嬉しくって胸がキュンキュンしまくりなの！」

「どうどう、落ち着いて」

そんな様子を真琴は呆然と見ていた。

「それより早く行くこう？晴夜君と龍牙君も先に行ってるかもしれないし」

そう六花が言うのと四人は目的地へと向かった。

「ところで真琴さん？」

「何？」

その途中でありすは真琴に質問をする。

「龍牙さんとはどんな感じなんですか？」

「龍牙……まあ、いつも前だけ向いている所がマナに似てるかな……」

「そういえば、なんで龍牙君も晴夜君と同じドライバーを持つてるの？」

「それは……」

六花の質問に対して真琴は何か言おうとしたが、丁度目的地のソリティアに到着し、同時に晴夜と龍牙も到着した。

「……ね、貴女達にラビーズを渡した人がいるのは」

「そうだよ」

「名前は？」

龍牙はマナにその人の名前を聞くが……

「名前？何だっけ？」

「ジヨー岡田だよ！」

お兄さんの名前を忘れていたマナに晴夜が突っ込んだ。

「あ、それだ！その人の名前！」

そんなマナを見ていた真琴と龍牙はため息をし、マナは話す。

「あのお兄さんならきつと何か知ってるよ。トランプ王国や王女様の事……晴夜君のお

父さんの事も」

「だといいけどな」

晴夜はそう言いながらソリティアに近づき、ドアを開けて中に入る。

「こんにちは、お兄さ〜ん マナです。」

「こんにちは、 マナですよ。」

「……う〜ん?」

「どうやらいらつしやらない様ですね?」

「鍵もかけてないし、この店大丈夫なのかな?」

「それより、この店お客さん来てるのか?」

六花と晴夜がこの店の心配をしているそんな中、龍牙は店の中を見ていると一つの小さな丸いテーブルに布が被さっているのを見つける。

「ん? 何だこれ?」

「どうしたの、龍牙?」

「なにか見つけたの?」

マナが龍牙に何か見つけたのかと言っていると、被さっている布が落ちた。

そこにはなんと、大きなタマゴがあったのだ。それを見た全員はしばらく呆然とする。

「これは……」

「おおー!!? 大つきなタマゴだ!」

マナがそう言っていると後ろから晴夜が勢いよく前に出てきたて、髪をかきながら叫び始めた。

「おおおー!!? 何だこのタマゴ!!どこから来たんだろ!?!調べてみたい……一体どんな品種から何なんだっ!」

晴夜のハイテンションっぷりを見た六花達はかなり驚いた。

「晴夜君……マナよりすごいかも」

「珍しい物を見るとテンションが上がってしまうようですね……」

ですけど、このタマゴ、オムライスにしたら、十人前は出来るでしょうか?」

その事に真琴はありえないさそうな顔して、六花は思わず突っ込む。

「いやいや、タマゴじゃないでしょう、ダチヨウのタマゴだってこんなしか……」

「恐竜……『えっ?』恐竜のタマゴかもしれないよ!エイリアンのタマゴとか?」

ジェスチャーでダチヨウの卵の大きさを作っていると、マナは目をキラキラと輝かせながら言い、それに六花は呆れる。

「ありえないわよ……」

「可能性あり、だったら見てみたい」

「おーい?出ておいで、なーんてね」

と言いつつ、マナは指でタマゴにチョンとする。するとその時、タマゴにヒビが入ってしまい、一同がそれに唾然とする。

「えっ……?」

そして、タマゴから強烈な光が吹き出る。

「「「ええっ!?」」」

驚いているとタマゴから手が出て来て、そして全体が割れて中から可愛いらしい赤ちゃんが現れる。

「きゅぴー!」

「う……生まれた?」

「赤ちゃんのタマゴでしたね?」

「……………」

「ウソ……………」

「本当にいた……………」

みんながそれに呆然としてる一方、赤ちゃんはみんなの方を見て首を傾げる。

「きゅぴ?…アイ〜」

その可愛いらしい笑顔に、マナの母性本能に火が付いた。

「か……!可愛い〜!!!」

「つておい!?」

マナの突然の行動に龍牙は突っ込んだ。

「可愛いけど、それより前に言うべきことない?」

「タマゴから生まれるなんて、珍しい赤ちゃんですね」

「珍しいとかそう言うレベルじゃないでしょ!?」

とありすのマイペースに六花は突っ込みを入れた。その時、赤ちゃんは背中に生えている翼で宙を飛ぶ。

「きゅぴ〜」

「うわあく飛んだ!」

「お上手です〜」

普通の人が見たら確実に異常に思われる様子を見ても、マナとありすの二人は呑気に褒めていた。

「待って!そこ褒め〜……ツ!ああ〜もう〜!晴夜君〜!何とかして……晴夜君?」

「おっほほほほはーッッ!!?すごい赤ちゃんだ!!一体何処の子なんだろ調べてみ

たいー!」

「晴夜君まで〜」

晴夜は今にも『ヒヤッホホッウ!』と奇声を発しそうな勢いで興奮しているため、すでに手遅れだった。

赤ちゃんが飛んだのを見てマナ達は呑気になり、六花はため息をした。

「時間よ、真琴」

それからしばらくすると、ダビイが人間の姿がDBになりながら真琴に話しかける。

「どうなさったの、ダビイちゃん」

「申し訳ないけど、私の真琴はこれで失礼するわ。これから仕事なの」

どうやら真琴はこれから仕事のようだ。

「そうなのか?」

「えっ、まこぴーもう行っちゃおうの?」

「ええ、それじゃあ」

「真琴、頑張れよ」

龍牙は真琴を応援していると…

「……龍牙、ちよつと付いて来て」

「えっ?……わかった」

真琴に言われて龍牙は真琴とDBに付いて行き、店を出ていく。

「まこぴーとあんまり話せなかつたな」

「しようがないわよ。仕事なんだから」

と落ち込むマナを六花が慰める。

「アイドルは忙しいしな」

「はあ……」

マナは溜め息を出す。

「……それより、ちよつとこれを見て欲しいんだ」

気を取り直して晴夜がそう言うと、バックの中からパソコンを取り出して開き、持っていたメモリーをパソコンに差し込むと画面からいくつかのファイルデータが出た。

「これは……」

「なんのデータですか？」

六花とありすの二人が質問すると晴夜は答える。

「これは、父さんのトランプ王国での記録やライダーシステムについて記載されている」

「こんなにいっぱい記録してたの？」

「まあ、とりあえず開いてみよ」

パソコンのデータファイルを開き、動画の再生ボタンを押すと画面から白衣を着た男性が映った。

「この人が……晴夜君のお父さん？」

「ああ……」

そして、映像の男性の話が始まった。

『この映像を見ている者、私は桐ヶ谷拓人。研究と開発の両方に携わる科学者だ』

「父さん……」

『これから話す内容は、トランプ王国を守るために作ったライダーシステムについてだ、それでは説明しよう。』

……まずはじめに、私が何故この世界に居るのかを話そう。この世界に来たのは4年前のあの事故によってだ』

「事故？」

そのことについては晴夜が話す。

「……4年前、父さんの研究室に強烈な光が降り注ぎ、その場にいた研究員や資料の全てが消えたって事件があったんだ」

「そんなことがあったの……」

マナはそう呟く。

『それにより、私はこの世界に飛ばされた。』

しかし、この世界は凄い。この世界は私達の世界とは違い科学が発展した世界ではなく、科学では計れない物が多く、実に調べがいのあるものだった』

「なんだか、晴夜さんに似ていますね」

「まあ、親子だからね」

『そこで、私は王女様に相談し、トランプ王国に自分の世界の物を取り入れてみた』
すると、映像から汽車などの画像が現れた。

「わあ〜！晴夜君のお父さん凄い!!？」

「まあ、研究者でもあり、開発者でもあるからな」

『さて、本題に入ろうか。何故、私がライダーシステムを作ったかについて話そう』
「……」

「いよいよね」

みんなが黙りパソコンに目を向ける。

『そもそも、私がライダーシステムを作ったのはアン王女からの要望だった』

「えっ!!？」

「王女様が!!？」

これには全員驚いていた。まさか、アン王女の要望でドライバーが作られたものだった

たと言うことに。

『アン王女は新しいプリキュアの誕生の時、一人では心配だと思い、私に一人サポートできる者を付けたいと言ってきた。』

そこで私はライダーシステムを作ることに決めた。

だが、プリキュアと同レベル、もしくはそれ以上となると難しいので、私は自分の世界で研究中だった地球上のエレメントを取り入れたボトルをライダーシステムに取り入れた。

向こうでは完成できなかったが、この世界の力を合わせた事で完成させる事が出来た』

そう言うって拓人はビルドドライバーと蒼いボトルを掲げた、近くにはクローズドラゴンが飛んでいた。

『完成させたライダーシステムを、私は龍牙という少年に託した。』

彼は幼少の頃から新しいプリキュア、キュアソードの親友らしく、更にこのガジェット「クローズドラゴン」が彼の心と同調した。

だから、私は彼にドライバーとドラゴンボトルを託し———』

それを最後に、拓人の映像が途切れた。

「あれ?どうしたの?」

「どうやら、まだここまでしか復元できなかったようだな……」
と言つて、晴夜はビルドドライバーを見る。

「このドライバー、父さんが作ったのか……」

「でも、心配ね。晴夜君のお父さんの無事かどうか……」

「……そうだな」

そう言つて晴夜はパソコンを閉める。

その一方、真琴は車の外を見ながら溜め息を漏らす。

「真琴？」

「その溜め息は王女様の情報を聞けなかったせい？」

運転中のDBが尋ねる。

「えっ？」

「気にすんなよ、また出直して聞けばいいじゃねえか」

「……わかつてる」

「じゃあ、溜め息の理由は何かしら？」

「あの子達、仲がいいんだなあって、あの三人は昔からの友達。でも、私は違う」

それを聞いた龍牙とDBが笑い出した。

「何?」

「あの三人と友達になりたくて緊張してたんだんでしょ?」

「緊張なんてしてないわよ!」

「言いたいことがあるなら、素直に言えばいいんだよ。お前はいつも硬く考えちゃうからいけねえんだよ!」

「だから、違うって……!」

その頃、マナ達が赤ちゃんをあやしていたら、赤ちゃんが泣きそうな表情となった。

「どうしたんですか?」

「ぐずり出したわね」

すると右手が光り出し、何故か手には哺乳瓶のキュアラビーズが握られていた。

「これって……」

「もしかして……」

すると、シャルル達が出てきた。

「キュアラビーズシャル!どうしてこの子が持つてるシャル?」

「この子はトランプ王国と関係があるのかかもしれないケル!」

「関係って、どんな関係でランス?」

「さあ……」

「分かれれば苦勞しないけどな。」

（けど、ラケルの言う通り、この赤ちゃんはトランプ王国と関係あるかもしれない。

……とは言っても、ラビーズを持っていただけじゃ関係は——）」

「びええええええ!!」

「!?」

鳴き声が聞こえ、途中で考えが止まる。遂に限界が来たのか、赤ちゃんは泣き出してしまったのだ。

「と、とりあえずこれを使ってみよう! シャルル!」

キュアラビーズをラブリーコミュニケーションにセットして丸を描く。

すると真ん中が点滅し、哺乳瓶が出て来た。

「おおうっ! 哺乳瓶!」

哺乳瓶を赤ちゃんに近づけると、美味しそうに飲み始めた。

「お腹が空いていたのですね」

「いい飲みっぷり」

お腹がいっぱいになった赤ちゃんは、嬉しそうな表情を見せる。

「良かった。すっかりご機嫌じゃん」

「赤ちゃんにミルクを飲ませた後は、ゲップをさせないと」

「流石六花ちゃん。お母様が小児科医であって、赤ちゃんのお世話をご存知なのですね」

マナは六花の言われた通り、ゲップをさせようと赤ちゃんを抱き上げた。

「こう?」

「そうそう」

マナが赤ちゃんの背中を軽くポンポン叩く。すると、赤ちゃんはゲップを出した。

「出た!」

「いいゲップだね」

いつの間にかいたジョー岡田に驚き、マナと六花が慌てて妖精を隠す。

「こんにちは」

「どうも、お邪魔してます」

とありすと晴夜はジョー岡田に挨拶する。

「やあ、みんな揃ってどうしたのかな?」

挨拶を返されると、慌てて六花は質問する。

「どうしたもこうしたも!何なんですかあの卵!?!」

六花は卵の殻を指差す。

「ていうかこの子!『この子、卵から生まれたんですよ』ってマナ!」

「うーん……僕が言える事は——赤ちゃんの名前を決めなきゃね♪」
「何がいいかな？」

「ええっ!?？」

ジョーは赤ちゃんの名前を決めようと言うと、マナはそれ便乗した。

六花はそれに驚いていた。

「アイアイ言ってますから、アイちゃんでもいいかがでしょうか？」

「アイちゃんかー……いいね！キyunキyun来る名前だよ！」

「そんないい加減な……！」

「でもこの子とっても喜んでるみたいだけど」

晴夜が言うジョーも同意した。

「うん！ステキな名前だね」

と嬉しげに赤ちゃんは浮かぶ。

「まあ、本人がいいなら……」

呆れながらも六花も同意した。

「アイちゃんに決まり！」

というわけで、赤ちゃんの名前は『アイ』と決まった。

その後、仕事を終えた真琴と一緒に行った龍牙がソリティアへと来た。

「まこぴーこんにちは。あたちアイちゃんでちゅー、よろしくね」

マナはアイちゃんの両腕を動かしながらよろしくと言う。

「ね？」

「ええ……」

真琴はアイちゃんの笑顔に見惚れるも、平常心に戻る。

「よろしくな」

と龍牙がアイちゃんと握手した。

すると、ダビィが真琴の心をみんなに言う。

「『きゃーッ！カワイイー！こちらこそよろしくー！』って真琴は思ってるビィ」

「ちよつとダビィー！」

「そう思ってるなら、素直言えばいいのによ」

龍牙も、素直に言いたいことがあるなら言えばいいと話す。

「そっかー、まこぴーもアイちゃんにメロメロなんだね！カワイイよねー！キュンキュンしちゃうよねー！」

そう言つてマナはアイちゃんを真琴に近づける。

「だっ！するっ！」

「結構よ」

「やれやれビィ」

(……まだ、慣れないのか?)

晴夜が彼女を見てさう考えていると、ジヨーが真琴に挨拶した。

「こんにちは、お嬢さん、少年君。初めまして、ジヨー岡田です」

ジヨーが真琴に挨拶すると、真琴はジヨーに質問した。

「あなたに、お聞きしたい事が」

「何かな？」

「トランプ王国の王女様の行方について、何かご存知ありませんか？」

「ああ、王女様」

「知ってるのか??？」

真琴と龍牙が期待すると、ジヨーから出た言葉は…

「女の子はみんな、お姫様だからね。君も、君達みんながいわば王女様さ」

龍牙は愕然とし、真琴は手を強く握り、その場にいた全員が呆然とした。

「悪いけど、僕は用事があるから、アイちゃんのお世話、よろしくね」

ジヨーは帽子を被りながらそう言い、店から出て行った。

「はーい！」

「ちよつと……………」

「お、おい……………」

「また逃げられた……………」

ソリティアを後にし、散歩する六人。

龍牙は面倒事を引き受けるマナの姿を見て疑問を持ち、六花に彼女のことを聞く。

「……………なあ」

「なに？」

「あいつはいつもこんな事してるのか？」

「まあね、マナは超が付くほどのお節介さんなのよ」

「マナちゃんは昔からこんなですよ」

「……………そうなのか」

それを聞き、何気に不満気に答えた。それに気付いた晴夜がとうしたんだよと問いかける。

「いやその、誰も感謝される事も無いのに何で、と…思…つ…て……………」

龍牙はそう呟くと…

「マナは別に誰かに感謝されて欲しいとか、見返りを求めているわけじゃない！」

「えっ!?」

そのまま、晴夜は龍牙に言う。

「彼女は自分が正しいと思う事を一所懸命している。ただそれだけだよ」

「自分が正しいと……」

「これは絶対覚えておけよ！見返りを求めたらそれは、正義とはいわねえぞ！」

「……」

晴夜の一言が龍牙の胸に刺さる。

一方その頃、アイちゃんが急にぐずり始める。

「あらら?どうしたのかな?ほら!高い高い!」

アイちゃんを上げるが、手から離れ、飛んで行ってしまった。

「つて高すぎる〜!」

「待ってシャル〜!」

何とかシャルル達のおかげでマナ達の元に戻した。

「はーい、ミルクでちゅよ〜」

今度はお腹が減っているのかと思い、哺乳瓶を近づける。だが、お腹が空いておらず、嫌々と首を横に振った。

「え?違うの?」

「お腹が減っているワケじゃないみたいだな」

そして遂にアイちゃんが泣き出してしまふ。

「ご飯じゃないならオムツかも。……あれ?濡れて無い」

オムツかと思われたが濡れておらず、これでも無かった。

「ど、どうすれば……?」

「そうだ!子守唄を歌おう!」

「あ、いいね!」

マナのその言葉を聞いた瞬間、六花とありすが慌てて離れ、耳を塞ぐ。

「え?なに?なに?」

「なんだよ急に?」

「どうしたの?」

その行動に三人は首を傾げる。その時…

「ね〜〜むれ〜〜♪」

マナが子守唄を歌い出すと、木に留まっていた鳥が全て逃げ出した。

「こ、これは……」

「酷いビィ〜!」

「(ひ、酷すぎだ……)(」

一瞬だけ聞いた晴夜と龍牙も慌てて耳を塞ぐ。

本人には自覚が無いが、マナはともつもないほどの音痴だった。更にアイちゃんは泣き出し、余計に悪化してしまう。

「うわああああああああん!!!」

「あれ？何で?!?」

「今になって知ったけど……マナ音痴だったの……?」

「やばすぎだろ……」

「本人には自覚無いんだけど……」

同じ公園にて、アイちゃんと泣き声とマナの音痴の歌が原因でベンチで寝っていたサラーマンの男性が目覚めます。

「うるさいなー……気持ちよく寝てたのに……俺の貴重な昼休みが台無しじゃねーか……」

そう呟くと男性の心がプシュケーが少し染まった。

「でも赤ちゃんが泣くのは仕方ないか……それに公園は子供の遊び場なんだし……」

しかしそう言うと言とプシュケーが少し晴れるが……

「寝ちゃえばいいじゃない……」

「誰だ!?」

突如現れたマーマーモが耳元で囁く。

「あなたの望み、叶えてあ・げ・る」

指を鳴らすと同時にプシユケーが真っ黒に染まり、取り出される。

「暴れる!お前の心を解き放て!」

闇を加えたプシユケーから羊のジコチューが生み出される。

「ジコチュー!……アイちゃん、大丈夫だよ!あたし達が絶対にアイちゃんを守るから!」

そう言つてマナはアイちゃんを励ます。

「みんな行くよ!」

『うん! (ああ!) (おお!)』

マナ達はキュアラビーズをラブリーコミュニケーションにセットし、晴夜と龍牙はボトルを取り出し一回振り、龍牙はガジェットにボトルを差し込む。そして二人はボトルとガジェットをドライバーに差し込む。

『ラビット! タンク! ベストマッチ!』

『ウエイクアップ! クローズドラゴン!』

レバーを回すと、前後のライドビルダーからアーマーが形成された。

「プリキュア！ラブリンク！」

『L・O・V・E！』

『Are you ready?』

「変身!!？」

マナ達は光に包まれ、プリキュアの姿に変わり、晴夜と龍牙はアーマーが体に装着され体から煙が吹き出る。

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ！』

『Wake up burning! Get CROSS—Z DRAGON! Yea

h—』

「みなぎる愛！キュアハート！」

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

「陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

「勇気の刃！キュアソード！」

「響け！愛の鼓動！ドキドキ！プリキュア！」

ポーズを決め、ハートはジコチューを見て言う。

「愛を無くした悲しい羊さん！このキュアハートが貴方のドキドキ、取り戻してみせる

！」

いつも通りセリフを言うと、全員構える。

「メエエエエ！」

ジコチューは何か叫ぶと、いきなり数体へと分裂する。

「分裂した！ニンニンコミックみたいな奴だな！」

ビルドが驚いていると、次に柵が生えてきたのだ。

「なんか生えた？」

「柵……よね？」

ダイヤモンドは首を傾げながら見ると、羊のジコチューが柵を飛び越え始める。

「羊が一匹」

「羊が二匹」

「羊が三匹」

その様子を見ていると、急に全員なんだか眠気に襲われる。

「なんだか、急に眠たくなってきた……」

「どうして、急に……」

「……って、眠たくなっている場合じゃ！」

キュアハートとビルドらは眠たそうにしており、キュアダイヤモンドは頭を振って意識を保とうする。

「ですが、耐えがたいものがありますわ……」

「くそ、なんだよこれ……」

「くっ!」

ソードは起き上がろうとするが、体に力が入らず、六人は膝をついてしまう。

「今よ! やつておしまい」

マーモが指示を出すとジコチュー達が体当たりをしてくいて、ビルド達はその攻撃を食らって、吹き飛ぶ。

『ああああああ!』

悲鳴をあげながら吹き飛び、倒れる六人。それを見て笑うマーモ。

「ハハハ。暴れなさい、ジコチュー。キングジコチュー様にジャネジーを送るのよ!」

「……この!」

キュアハートが立ち上がり、立ち向かおうとするが……

「羊が一匹」

「羊が二匹」

「羊が三匹」

それにより、また眠気に襲われる。

「うう、またあ……」

「力が……」

「クソが……」

「眠ったらダメだ……」

「おやすみなさい……」

「みんな!ね、眠るな……くっ」

ビルドは立ち上がり、ボトルを取り出そうとするが、眠気でうまく差し込めず、全員その場で寝てしまう。

「フフ、これでプリキュアも仮面ライダーもおしまいね」

「うわああああああああん!」

倒れたビルド達を見て、アイちゃんは泣き出してしまう。

それにマーモは反応する。

「もう、うるさいね赤ん坊ね。ジコチュー、黙らせないちやないさい」

ジコチューに指示を出すと、アイちゃんにビルド達にやった様に柵を飛び越えて、眠気を与えようとするが……

「どうして眠らないの?ジコチュー、しっかりやりなさいよ!」

「め!うるさいメエ!」

ジコチューはマーモを目掛けて催眠を放ち、マーモはそれによって眠ってしまう。

「あああああああああああ！」

「うるさいメエ！」

ジコチューがアイちゃん目掛けて突撃しようとしていた。

その時…

「きゅぴらぱ〜！」

「ジコオ!?？」

アイちゃんから出た光がプリキュア達を纏い、起き上がったのだ。

「何、この光？」

「もしかして、アイちゃんが!?？」

そう言つて、光を放つアイちゃんを見る。

ソードとロゼッタはすぐにビルドとクローズを揺すつて起こす。

「ん……?つて何だ、あの光？」

「少なくとも、悪いものではないな……おっと」

ビルドは何かに気付き、ボトルを取り出してドライバーに差し込む。

『ハリネズミ！消防車！ベストマッチ！』

レバーを回し、アーマーが形成された。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

その頭部はハリネズミと消防車をモチーフとした複眼を模しており、右腕はハリネズミの様な針が出ていて、左腕は消防車のホースを模したアーマーが装着され、音声が響く。

『レスキュー剣山!ファイヤーヘッジホッグ!イエーイー!』

そして光が収まり、アイちゃんが再びジコチューに狙われる。

「アイちゃん!つてまた眠気が……」

そう言つて眠りそうになり、ジコチューがアイちゃんを襲おうとした時だった。

ビルドは左腕のホースー『マルチデリユージガン』を自分と全員を向けて発射した。

「みんな、目を覚ませ!」

「「「ぶわあ!」」」

全員の顔に水を掛け、ジコチューもそれによりアイちゃんから離れた。

そして、目覚ましたハート達は起き上がる。

「これなら、いける!」

ハート達が目覚めますと、ジコチューが再び柵を飛び越えようとしているが、それに反応するダイヤモンド。それを飛び越えている途中で、ダイヤモンドが…

「羊が一匹」

「羊が二匹」

「羊が『3, 285, 945匹!!』」

「…メエ?」

それにより混乱したのか、ジコチューの動きは止まり、悩み始める。

その隙にビルドがクローズに言う。

「龍牙! ビートクローザーを出せ!」

「ビートクローザー?」

すると、龍牙のドライバーから武器が形成された。その形はロングブレードの様な姿をし、音声が流れた。

『ビートクローザー!』

「おお! なんだよこれ!?」

「昨日お前が寝ている間に作っておいてやった」

「すげえ! いやあ! これなら負ける気がしねえ!」

そう言つてクローズはジコチューにすかさずビートクローザーで斬りかかり、羊のジコチューを吹き飛ばす。

「ジコオ!」

それによりジコチュー達は、我先と争い始めた。その隙にハートが言う。

「ソード!龍牙君!一緒に行くよ!」

「うん! (おお!)」

ソードはラビーズをセットし、クローズはグリップを1回引いた。

『ヒツパーレ!』

『スマツシユヒツト!』

「閃け!ホーリーソード!」

二人の技にジコチュー達の柵を壊し、ジコチュー達は更に混乱した。

「僕らの柵が〜!」

「今よ! (だ!)」

と言うソードとクローズに頷き、ハートはラビーズをセットした。

「貴方に届け!マイスイートハート!」

ジコチューの目はハートのマークになる。

「ラブラブラブ!」

そう言うジコチューは浄化され、男性の元に戻った。そして、寝ていたマーマが目を覚ますと…

「今日のところはこの辺で許してあげる。じゃあねえ〜!」

何やら満足そうに去っていた。何でそこまで嬉しそうなか、不思議に思い全員変身を

解除した。

「何でアイツ嬉しそうに去っていたんだ？」

「さあ……」

……どうでもいい事だが、マーモは寝不足によって肌にニキビができていたが、一眠りした事でニキビが治ったため、機嫌が良くなったそうだ。

そして、アイちゃんが眠りそうになっていた。

「お、眠りそうだな」

「なあ、真琴。お前が子守唄でも歌ってやれ！」

「え？どうして？？」

「どうしてもだ」

龍牙がそう言うのと真琴は頷いてアイちゃんを抱きあげて、子守唄を歌う。

「〜♪」

やはりアイドルをしているだけあって、非常に心地の良い子守唄であり、それをみんな聞き入れる。

「流石だな」

「ああ！真琴の唄は最高なんだ！」

そう言つて、全員は微笑むのだった。

次回! Re・ドキドキ&サイエンス!

第9話 アイちゃん、学校に行く

第9話 アイちゃん、学校に行く

穏やかな日常の中で晴夜は学校へと向かっていた。そこで、マナと六花が止まっていたのを見つけ、二人に声を掛けた。

「マナ！六花！おはよう！」

「あ、晴夜君……おはよう！」

「おはよう！晴夜君」

晴夜が二人の振り返った顔を見ると、何か不安そうな顔をしていた。

「どうしたの？」

「実は……」

マナが体を向けるとマナの腕にはアイちゃんが抱っこしてあり、晴夜は驚いた。

「アイちゃん!? どうして？」

「実は……」

なぜこうなったのか、マナが経緯を話し始める。

——晴夜が来る少し前、マナと六花はいつも通り学校へと登校していた。

マナは「いい朝だね」と伸びながら言う。

「sudden、突然に、quickly、素早く——」

六花の方は英単語を暗記カードを使って勉強していた。

「?何してるの?」

「今日の予習よ。最近何かと忙しいでしょ?学校じゃ生徒会の仕事もあるし、空き時間にも進めておかなきゃ」

「おおっ!流石学年トップ!」

と感心するマナ。すると…

「豊かな知性は女性を美しくする。キミは将来、素敵なレディになるだろうね」

「もう!そんな冗談は止めてください!」

突然の言葉に六花は思わずデレデレする。

「って……」

と後ろから声が聞こえて、それに気付いた2人は後ろを振り向くとアイちゃんを抱いたジョー岡田がいた。

「お兄さん!」

「いやあよかった、見つかった。はい、ママでちゅよ」

そう言いながら、アイちゃんをマナに差し出し、マナが抱える。

「これで一安心。実は平安時代のお姫様が身につけていた貴重なアクセサリーが見つかったて連絡があつてね。これから買い付けに行つて来るから、アイちゃんのお世話は頼んだよ」

「はあ……ええ〜っ!?」

「——それから、お兄さんはタクシーに乗つて行つちやたの……」

「それは災難だったな。それで、どうするの?これから学校なのに……」

晴夜は呆れながら言う。

「どうしよう……」

三人はどうしようかと途方に暮れてたその時だった、後ろから声が聞こえた。

「もしもし皆さん」

「誰かを忘れてはないケルか?」

その声の主は、誇らしげな表情をしたシャルルとラケルだった。

場所が変わり大貝第一中学校の校門前の植木に隠れながら、三人と妖精二匹が話し合っていた。

「シャルル達が、アイちゃんを？」

「しっかりお世話するシャル！」

「大丈夫か？」

「そうよね……」

「何ケルその反応!!?」

「わたし達だけじゃ頼りないと思ってるシャルか!!?」

晴夜達の不満そうな反応にシャルルが怒り出す。

「だったらランスも呼ぶシャル！」

とシャルルが言うところコミュニケーションに変わり、ラケルがランスに連絡を入れる。

「もしもし?」

するとコミュニケーションからありすの声を聞こえた。

「お前達、通話が出来たのか!!?」

「ダビイに教えて貰ったケル」

親指を立てたラケルがそう答える。

一方、連絡を受けたあたり。

「まあ……それは大変ですわね」

「行ってもいいでランス？」

「もちろんですわ」

ありすの許可が取れたランスがマナ達の元にやってきた。

「早速飛んできたランス」

「これでバッチリ！」

「シャルルにお任せシャルル！」

とやる気満々にマナに言うシャルル。マナがちよつと考えると…

「分かった！その熱意をかうよ！」

シャルル達が面倒を見ることを許可した。

「ええくっ！！？」

「いいのかよ……」

「「わーい！」」

そんなわけでシャルル、ラケル、ランスの三人の妖精がアイちゃんの面倒を見る事となった。

「いた！」

「生徒会長！」

と、声が聞こえる方を振り向くと、サッカー部と野球部が走ってこっちに向かってきた。

「やば……!」

「隠れろ!」

晴夜と六花とシャルル達が慌てて植木に隠れる。

そして、お互いの部がマナに用件を言う。

「聞いてくれよ! サッカー部の奴らヒデエんだ!」

「いや悪いのは野球部だ!」

「はあ!? 嘘つくなよな!」

「どっちが!」

「何だやんのかコラ!?」

「ストープ!」

その時、いがみ合う二人をマナが止める。

「スポーツマンなら、試合の前の握手でしょ」

マナは二人の腕を掴み、握手を交わさせる。

「まずは、喧嘩の理由から聞かせて」

「あ、ああ……」

「実はさ、グランドのー」

両部の問題を解決する為マナは一緒に向かい。六花と晴夜はその様子を確認して植木から出て移動する。

「今の内に生徒会室へ行くわよ」

「わかった!」

そのまま話している間に晴夜達は生徒会室へと向かった。

その頃、マナの方は……

「つまり、どちらが朝練でグランドを使うかで揉めていたワケね」

「ああ」

「これからは、曜日ごとに交互に使うって事はどう?」

両部に曜日ごとに交互に使うという提案を立てた。両部共そのマナの提案に同意した。

「一件落着だね!」

グランドの問題はこれで解決した。

だが、これから騒動が起こる事を、この時はまだ知らなかった。

それから少し経った頃、晴夜達が生徒会室に到着した。

「確かにここなら、放課後まで誰も来ないはず」

「マナも私も、学校にいる間はあるな調子だし、今日はお願ひする事にするわ」

「任せるシャル！」

チャイムが鳴り、晴夜が時計を見た。

「六花、時間!?？」

「いけない！じゃあ頼んだわよ」

「分かったケル！」

授業の時間が近づいてきた為、アイちゃんの世話はシャルル達に任せ、晴夜と六花は教室へと向かった。

「アイちゃん！」

「これから少しの間、僕達がパパでー」

「あなたがママですよ」

「きゅび〜！」

「本当にカワイイシャル〜！」

シャルル達もアイちゃんの笑顔に見惚れる。

「アイちゃん、高い高いしてあげるランス〜」

ランスが高い高いしようとしたが、アイちゃんに頭を掴まれ、回される。

「微笑ましいスキンシップケル」

「アイちゃん、やめ——」

「そのくらい我慢するシャル」

「ま、待つてアイちゃん——」

目を回した所に、今度はランスの耳をしゃぶられる。

気が済んだのと同時に手元から離れ、倒れてしまった。

ちなみに耳にはしゃぶられた跡が残った。

「きゅぴらっばー！」

倒れたランスを介抱しようとしたラケルがアイちゃんの力で浮かぶ。

ラケルだけでなく、イスやファイルもアイちゃんの力で浮かんだ。

「助けてケル〜！」

目を回して倒れると同時に、アイちゃんの力も切れた。

「あ、アイちゃん……」

「きゅぴらっばー！」

それから生徒会室には、アイちゃんの力で何らかの影響を受けた妖精達の悲鳴と色々な物が落ちる音が響いたのであった。

休み時間になり、マナと六花と晴夜が様子を見に生徒会室へ向かう。

「アイちゃん、大丈夫かな？」

「まあ、大丈夫じゃない……？」

「そうね、一応ラケル達もいるし」

生徒会室に入ると、アイちゃんがマナに気付き、両手で持っていたラケルとランスを投げ捨てマナの方へ飛んでいき、マナが抱っこした。

「ア〜イ！」

「アイちゃん！」

「元氣そうでよかつ……たつて、えっ!?？」

晴夜達が生徒会室の周りを見ると、イスが倒れたり、本が落ちてたり、ゴミが散らばったりして荒れていた。

「何これ……？」

「も、問題無いシャル！」

シャルルは慌てるような言い方でマナ達に言う。

「あ、アイちゃんと仲良く遊んでいただけシャルよ！」

そう言うがシャルル達はポロポロで疲れていた。

「どんな遊びをしたら、部屋がこんなになっちゃうのよ」
「もしかして遊ばれてた?」

晴夜のこの発言にシャルル達は慌ててしまう。

その時、アイちゃんが泣き出してしまう。

「そろそろミルクの時間じゃない?」

「シャルル、お願い」

「分かったシャルル!」

マナはキュアラビーズをラブリーコミュニケーションになったシャルルにセットして丸を描くと、真ん中が点滅し、哺乳瓶が出て来た。

マナは哺乳瓶を近づけるが、どうやら違うらしく、更に泣き出してしまった。

「え?」

「あ、あれ?どうしたの?」

アイちゃんが泣いてる理由が分からず、困惑する晴夜とマナ。

「六花!」

二人は六花に尋ねるが:

「え、えーっと、ミルクを飲みたがらない理由は色々考えられるけど……ゴメン!わからないわ」

「そんな〜！」

六花は二人に手を合わせ、分からないと答えた。

「アイちゃん……（お願い……泣かないで……）」

マナがそう心の中で呟いたその時、三日月が描かれたキュアラビーズが現れた。

「これは……」

「新たなラビーズが生まれたケル！すぐに使って見るケル！」

六花がキュアラビーズをラブリーコミュニケーションにセットして丸を描くと、真ん中のハートが点滅し、ベッドが出て来た。

それだけでなく、生徒会室の周りが月や星が照らす夜の様になった。

「夜になった……」

するとアイちゃんがベッドに向かって飛び、ベッドの上に乗ると同時にタオルが覆われ、眠りについた。

「どうしてキュアラビーズが……」

「あくまで俺の予想だけど、マナの思いに反応して生まれたかもな」

「その通りケル！心の中で愛が育つと、ラビーズが生まれるんだケル！」

「……ってダビィが言ってたランス〜」

「もうラケルったら、そう言う大事な事はすぐに伝えないと……」

すると、チャイムが鳴った。

「マナ、晴夜君、もう行かないきゃ！」

「じゃあ引き続きよろしくね」

「三人共頑張れよ！」

マナと六花と晴夜は授業が始まるので、生徒会室を再び後にした。

それからシャルル達はアイちゃんの寝ている姿をジッと見つめていた。

「大人しくしていると、天使に見えるケル」

「このまま寝かせておくシャル」

シャルルとラケルはアイちゃんの寝顔を見ていると…

「誰か来るでランス！」

足音がしたのを感じランスが机から降りるた際、何故か本と定規でシーソー状態になっていた黒板消しが飛び、何故かそれがアイちゃんの顔に命中してしまった。

「！」

「何やつてるシャル！アイちゃんが起きちゃうシャルよ！」

ランスを説教しようとするが、偶然シャルルが定規の上に乗る、その反動でこれまた偶然にもラケルが飛んでいき、アイちゃんの上に乗ってしまう。

その原因で目を覚ましたアイちゃんが泣いてしまう。

「アイちゃん、シーシャル！」

「誰か、いるんですかー？」

泣き声を聞いてた男子生徒が生徒会室に入る。

「ホントに誰か来たでラケル〜！」

三匹は慌てて掃除ロッカーの中に隠れる。

「静かに〜！」

その男子生徒が掃除ロッカーを開けると、バケツとモップ、二つの雑巾が飛んで行った。

「晴夜と六花の嘘つき〜！誰も来ないって言ってたでランス〜！」

「ランスに怒る資格は無いケル！」

その原因は妖精達とアイちゃんが乗ったり覆ったりしながら飛んでいたからであった。

それから美術室の石像が光ったり、体育館の倉庫の道具などがアイちゃんの力で動き、学校中大騒ぎになるまで発展していた。

「アイちゃん待つシャル！」

追いかけてようとしたシャルル達だが、ボールと同時にゴールに入った。その間に開いていた窓から外に出て行ってしまった。

そんなこんなで放課後になり、マナ達は問題になったことを知らずに再び生徒会室に向かった。

「アイちゃん、ちゃんと寝れてるかな？」

「大丈夫だろ！あれだけ気持ち良く寝てるんだし……」

「生徒会長！」

三人が振り向くと多くの生徒がマナと六花と晴夜の元にやって来る。

「どうしたのみんな!?」

「みんなちよつと落ち着いて」

「まず、なにがあつたの？」

「出たんです！」

「お化けが！」

「はあ？」

生徒達の発言にマナ達の頭から『?』が浮かんだ。

「誰もいない音楽室から何か聞こえてきて……」

「中を覗いたら、肖像画のベートーヴェン、ショパン、モーツァルトが空飛ぶバケツの指揮で合唱してたの！」

「あれはきつと呪いの歌よ……！」

それから色々聞かれて一番決定的だったのは、「シャルク、ケルク、ランス」って聞いたという生徒がおり。その瞬間、その原因が何のか気付いた三人はお互いの顔を見て、晴夜は髪をかく。

「それってやっぱり……」

「あの子達……」

「最悪だ……」

「……マナ、六花、晴夜」

「「あっ」」

三人は声が聞こえて上を見ると、シャルル達がいた。

場所を変えてシャルル達は事情を話す。

「ええっ!?」

「アイちゃんとはぐれちゃった!?」

「マジで!?」

「ゴメンシャル！」

「とにかく探すぞ！まだそんな遠くには行ってないはず！」

「うん！」

三人は、アイちゃんを探しに向かう。

一方のアイちゃんは。

野球部とサッカー部のグラウンドのスケジュールに目がいった。

「きゅびらっば〜！」

○と??の印がアイちゃんの力で浮かび出した。

それで野球部とサッカー部が使用しているスケジュール表に落書きをってしまった。

「これ、お前らの仕業だろ！」

「それは、こつちのセリフだ！」

落書きされたスケジュール表を見せ、野球部とサッカー部の間にまたいがみ合いが起きてしまう。

「やっぱりお前達とグラウンドを分け与えるなんてゴメンだ！」

「こつちこそ！」

「俺達が使った方がきつと強くなれるんだ！」

二人がそう言うと二人の心のプシユケーが黒く染まり出す。

「まあ、どっちも一回戦負けの弱小クラブなんだけどな……」

「それを言うなよ……もう一度話し合うか……」

だがどっちにしろ、自分達はお世辞にも強いチームでない事を思い出し。すっかりしらけてしまった二人のプシユケーが先の発言により小さくなつたが……

「話し合いなんてめんどくさいじゃん」

「だ、誰だ！」

声が聞こえた方を向くと、そこにはイーラがいた。

「欲しいなら、奪っちゃえば？ お前らの望み叶えてやるよ！」

指を鳴らすと同時に二人のプシユケーが真っ黒に染まり、取り出される。

「暴れろ！ お前らの心の闇を解き放て！」

闇を加えたプシユケーからサッカーボールと野球ボールのジコチューが生み出される。

「ジコチューショット！」

「ジコチューホームラン！」

するとイーラの後ろからスタークが現れた。

『お前ら、更にプレゼントをやろう！』

スタークはスチームブレードを二人に向けて発射し、二人の姿がスマツシユへと変わった。

『じゃあな！イーラ、後は頑張りな！チャオー！』

スタークは煙に覆われ消えていった。

「またかよ、スタークの奴…」

外が騒がしいことに気付いたマナ達は外を見る。

「あれは……」

「ジコチューとスマツシユが二体ずつもいるケル！」

「しかも、ジコチューの方は喧嘩してる!?？」

二体のジコチューが喧嘩してるのを目撃する。

「とにかく、すぐに止めるぞ！」

「うん、ランスはありすを呼んできて！」

「了解でランス〜！」

ランスがありすの元に向かう。

「行くよ、シャルル！」

「シャルル〜！」

「ラケル!」

「オツケーケル!」

「行くぞ!」

マナと六花はキュアラビーズをコミュニケーションにセットし、晴夜はドライバーに装着し、ボトルを取り出して栓を回し、ドライバーに差し込む。

『ラビット! タンク! ベストマッチ!』

レバーを回し、ライドビルダーからアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身!!?」

「プリキュア! ラブリンク!」

二人は画面に「L・O・V・E」と描き、音声流れる。すると、マナ達の体が光に包まれ、それぞれの色のコスチュームを纏い。晴夜の方は二つのアーマーが重なり、晴夜の体に装着され、音声が流れる。

『鋼のムーンサルト! ラビットタンク! イエーイ!』

「みなぎる愛! キュアハート!」

「英知の光! キュアダイヤモンド!」

「愛をなくした悲しいボールさんとスマッシュユさん達! このキュアハートがあなたのド

キドキ、取り戻してみせる！」

ハートは胸にハートマークを作り、ジコチュー達に向けて言うが、ジコチュー二体はケンカを続けていたため、全然聞こえて無かったので、ハートがホイッスルを鳴らす。

「うるせー！」

「……」

ジコチューとスマツシユ達がハートの方を見て怒鳴る。

「野球もサッカーも、子供達の憧れのスポーツでしょ？」

「そんな、小さい事でケンカしたら、みんな悲しむでしょ」

ハートとビルドに指摘されると、ジコチューが黙り込み考える。

「サッカーが憧れ!?？」

「野球の方がたくさん点が入って人気があるジコ！」

「何言っているジコ！サッカーの方が人気のあるジコ！」

「はあ!?？時間短いクセに！」

「ただ入ればいいってもんじゃないジコ！」

また、二人のジコチューは揉め始めた。

「やめなさい！うわ!?？」

「ハート！」

ハートは止めようとするが、ボールが邪魔して近づけない。

「暴れるジコチューー！キングジコチュー様にジャネジーを送るんだ！」

そう言つてサッカーボールを蹴るサッカージコチューーと野球ボールを打つ野球ジコチューー。

「あ！アイちゃんが居たケル！」

ラケルが言うのと、花壇の上で蝶と戯れるアイちゃんの姿を見つける。

するとジコチューーの二つのボールがアイちゃんに迫る。

「危ない！」

「カッチカチの、ロゼッタウオール！」

だがその寸前にロゼッタウオールを展開したロゼッタが現れ、ボールを止めた。

そして、跳ね返ったボールがジコチューーに命中する。

「間に合いましたわね」

「キュアロゼッタ！」

すると、今度は……

「キュアソード！」

「ジコチューーの気配を感じて来てみれば……」

キュアソードが現れる。

「五人来たとしても——」

「残念だな！五人じゃなくて六人だ」

後ろの方からここまで来た龍牙が現れた。

「龍牙！」

「ソードから連絡があつて来てみれば、ジコチューだけじゃなく、スマツシユまで居るとはな……」

そう言つて龍牙はドライバーを装着し、ボトルを一回振り、クローズドラゴンをガジェットに変え、差し込む。

『ウエイクアップ！』

『クローズドラゴン！』

ドライバーにガジェットに差し込んでレバーを回し、アーマーが形成された。

「変身!!？」

アーマーは龍牙の体に重なり装着され、音声が流れた。

Wake up burning! Get CROSS—Z DRAGON! Ye

ah!』

「ふん！全員揃つても無駄！」

イーラがそう言うのとジコチューは立ち上がった。

「ジコチューは頼む。俺と龍牙でスマッシュを止める」

「わかった!」

ビルドとクローズがスマッシュの方へ向かうと、ジコチュー達がプリキュアに向けて攻撃を仕掛けた。

「弾丸シュート!」

ハートとダイヤモンドは攻撃を防ごうとしたが…

「手を使うのは反則!」

「「えっ?」」

ジコチューの発言に躊躇してしまい、ハートとダイヤモンドは吹き飛ばされた。

「消える魔球!」

投げたボールをロゼッタが止めようとしたが、消えてしまい、直撃を受ける。

「無回転シュート!」

「コースが読めない……!」

コースの読めないシュートに混乱し、ソードが吹き飛ばす。

「無茶苦茶だけど……強い……!」

一方、ビルドとクローズも二体のスマッシュに苦戦していた。

「はああああ……なに!? うわあ!」

ビルドのドリルクラッシュヤーの攻撃があたるも、『ストレッチスマッシュ』はゴムのように伸縮するので、攻撃が今ひとつ急所に当たらず、カウンターを喰らう。

「晴夜! ヤロー!」

クローズの方は氷を使うスマッシュ——『アイススマッシュ』は氷柱状のような矢の攻撃を無数に発射して来ており、攻撃に出れずにいた。

「これくらいなら全然……」

と思っていたが、周囲が凍結し始め、クローズの足も氷により固められ始めた。

「なっ!? なんだよコレ?」

自分の事に目が行っている隙にスマッシュが目の前におり、そのまま攻撃され吹き飛ばされる。

「クソ! マジ強え!」

「ちよつと! ヤバイかもな」

「ま、ママ……」

みんなが苦戦している姿を見て、アイちゃんが泣きそうになった。

「危ないから来ちゃダメ!」

「そこで待って!」

「アイちゃん、心配しないでランス〜」

「ジコチューやスマッシュなんてすぐにやっつけるケルよ」

「そしたらまた、一緒に遊ぶシヤル！」

だが、ジコチューとスマッシュ達は強く、六人は苦戦し、吹き飛ばされる。

「そろそろトドメだ。先にプリキュアをやっつけろ！」

イーラはジコチューとスマッシュ達にビルド達を始末するように命ずるが…

「きゅびらっば〜！」

アイちゃんが叫ぶと同時にプリキュアの四人が光に包まれる。

「アイちゃん？」

「なんだこの光？」

二体のジコチューの突進をハートは余裕で躲す。

「これは……」

「スピードアツプ、しましたわ！」

なんと、アイちゃんの力でプリキュア四人のスピードが速くなっていった。

「だが、これはちよつと……」

「早すぎだな……」

ビルドとクローズは呆然としながら見ていた。そして二人はスマッシュの方を向き、

立ち上がる。

「負けてられないな！」

「おお！」

「な、何だアレ……？！」

イーラもプリキュアの四人のスピードが速くなった事に驚いた。

「ストーツプ！」

六花がそう叫ぶと同時に足が止まった。

「ワールドだがメジャーだか知らないけど、こちらはチームでいかせもらうわ！」

と宣言するダイヤモンド。どうやら、アイちゃんの力とチームワークで戦って行くよ

うだ。

「じゃあ、こっちもチームである二体のスマッシュを攻略しますか！」

「よし、ジコチューはキュアダイヤモンド監督、スマッシュはビルド監督についていこう

！」

と指を立てハートは言い、クローズ達は頷く。

まず、スマッシュの方を片付けるためビルドはドライバーのボトルを取り替え新しい

ボトルを差し込んだ。

「やっとうっ！つを！試せる！」

『ライオン！掃除機！ベストマッチ！』

レバーを回すと、再びアーマーが形成された。

『Are you ready?』

『ビルドアップ！』

『たてがみサイクロン！ライオンクリーナー！イエーイ！』

二つのアーマーが重なり、新たなアーマーが装着される。

その姿は、複眼はライオンと掃除機がモチーフとなり、右部分はライオンの尾と顔のようなガンドレット。左部分は掃除機のホースが繋がったような形になった。

『ライオン?』

『掃除機も付いてますね』

アイスマッシュはビルドに向けて無数の氷柱攻撃をしてきたが、ビルドは掃除機

ー『ロングレンジクリーナー』を向けて攻撃を吸収した。

『吸収した!』

『いや、あれは吸収と言うより吸引じゃない?』

ハートとダイヤモンドがそんなことを言っている間にも、決着がつきそうだった。

『そんな事より、勝利の法則は決まった!』

そう言つてビルドはドライバールのレバーを回す。

『Ready go!』

『ボルテック フィニッシュ!』

掃除機の吸引で二体のスマッシュを一箇所にまとめ、更にライオンの尾で捕縛した。

「龍牙! 今だ!」

「わかった!」

クローズはすぐさまドライバーのレバーを回した。

『Ready go!』

背後に龍のエネルギー体が現れ、そのままクローズは龍に乗ると、そのままスマッシュに向けて飛んでいき、ライダーキックを放つ。

『ドラゴニック フィニッシュ!』

強烈なクローズの一撃にスマッシュは二体共倒れた。

ビルドは倒れたスマッシュに向けてボトルを向け、そのまま成分を採取すると、スマッシュは元の人間の姿に戻った。

「まず、ひとつ!」

「さあ、今度は私達の番よ!」

次にジコチューの攻略が始めた。

最初はサッカーボールジコチューを相手取る。

「光線球キャノンシュート！」

「今よ！スライディング！」

シュートを放つ寸前にスライディングするロゼッタ。

「そのまま、カウンター！」

ボールを奪ったロゼッタがカウンターを決め、ゴールを決めた。

「ゴール！ですわ」

次に野球ボールジコチューの攻略を始めた。

「落ちる魔球！」

「当たるだけでいいわ！」

「了解！」

ジコチューがボールを投げる球をソードがバントで当てる。

「回って！回って！」

アイちゃんの力によって素早くなっていたので、すぐに回り終わり、ソードはあつという間にホームインしてジコチューにVサインした。

そして、負けたシヨックで二体のジコチューが真っ白になっていた。見事になくらしいに真っ白に燃え尽きてます。

「お前ら、何落ち込んでんだよ!?？」

「ダメ押しよ！」

「任せて！」

イーラがジコチューに怒鳴るが、二体のジコチューが立ち直る前にハートはラビーズをコミュニケーションにセットし、彼女の胸にエネルギーが集まる。

「あなたに届け！マイスweetハート！」

ハートの技がジコチューに命中し、二体のジコチューは目がハートになった。

「ラブラブララブ！！？」

浄化されたプシケが二人の元に戻った。

「これで、ゲームセット……つてな」

「クソツツ！二体ずつでも勝てねえのかよ！帰る！」

そう言つて、イーラは消えていった。

「アイちゃん！」

飛んで来たアイちゃんがハートに抱かれる。

「それにしてもさっきの力……」

「ええ、アイちゃんは私達の想像のつかない力を、秘めているのかもしれないね」

「とりあえず、みんなに何らかの力を与えてみたいだな。（やっぱりこの子は、何かが

関係してるのか……？）」

それから、しばらくしてからマナは野球部とサッカー部の問題について話し合っていた。それが終わると晴夜と六花と合流した。

「野球部とサッカー部は？」

「うん、仲直りしてもらえた」

そう言つて三人は学校の門を出た。

「今日はホントに疲れたよ……」

「全くだよ」

「そもそも、お兄さんが無茶ぶりして来なかつたらこんな大騒動にはならなかつたのよ」

「そうだった、帰つたらとちめてやらなきや！」

「程々にな！」

晴夜達はジョーに対してどうするのかを考えていた。

一方、ベッドの上ではアイちゃんとシャルル、ラケル、ランスが寝言を言いながら眠っていた。

「今日は、お疲れ様」

大騒動が起きたが、シャルル達は今日一日頑張つたのだった。

次回！
R e . ドキドキ&サイエンス！
第10話 ドツキリ注意報！二人の転校生

第10話 ドッキリ注意報!二人の転校生

とある朝、カエルの目覚まし時計が鳴り、既に制服に着替えた六花が止めた。

「おはよーラケル」

「おはようケル……」

ラケルが目をごすりながら起きると、そのまま二人は朝食をとる。

「マナ、もう起きたかな? 昨日は遅くまで生徒会の資料を作ってたみたいだし、今日は早めを迎えに行こつ」

「六花はマナのいい奥さんケル!」

「奥さんの意味分かってるの?」

「ケル?」

マナの心配をする六花を見たラケルが奥さんみたいだと言うが、よくわからずに使っていたようだ。

二人は朝食を済ませると、その後家を出て、マナと晴夜と一緒に学校へと向かう。その途中で六花は二人に今朝のことを話す。

「へえ、六花がマナの奥さん？」

「ね、笑っちゃうでしょ？」

「うんうん、確かに」

「へっ？」

話を聞いていたマナが頷きながら、晴夜も「確かにそうだ」と言つて肯定する。

「奥さんつてさ、いつもそばにいてくれて、頼りになる一番のパートナーでしょ？」

「まさに、六花の事だな！」

「私も、そう思うシヤル！」

「な、何言つてるのよ二人とも……」

マナと晴夜が六花をからかっていると学校に到着し、教室に入った。

それからしばらく経ち、先生が入ってきてホームルームが始まった。

「えー今日から、このクラスに新しいメンバー二人が加わる事になりました」

城戸先生の口から、転校生が来る事を告げられた。

「転校生？」

「男？女？」

「ドキドキだね！」

「どんな子だろ?」

それを聞いた生徒達は、どんな転校生が来るのか楽しみでいた。

「一人はみんなの方が良く知ってるんじゃないかな? どうぞ、入って」

教室のドアが開き、そこにいたのは:

「「えー! まこぴー!?」」

「龍牙!?」

何と、この学校の制服を着た真琴と龍牙だった。

ホームルームが終わると、クラスメイトだけでなく、廊下にも他の生徒が集まっていた。

「生まこぴーがすぐそこに!」

「驚きだよね!」

「僕なんか席隣ですよ!」

「ビックリしたよ、転校して来るなんて」

「ホント、突然どうしたの?」

真琴と龍牙の突然の転校に、マナと六花の二人は驚いた。

「王女様を見つけ出すためにも、もっとこっちの世界を知らなきゃと思って」

「それに何より真琴は、みんなと一緒にいたいんだビィ」

「もうキュンキュンだよ！まこぴーがあたし達といたいと思うなんて！」

そう言つてマナは真琴に手を出し、彼女を歓迎する。

「ようこそ、大貝第一中学校へ」

真琴も手を出し、お互い握手を交わす。

その様子を見た他の生徒は、マナ達が真琴と知り合いなのかと驚く。

「何か……みんな見てる？」

「こんなに注目されるんだ……！アイドルつて大変……！」

真琴がアイドルだということを忘れていたマナは、皆に注目されていたことにさつきまで気づいてなかった。

真琴はみんなに向かって微笑むと同時に、歓喜に溢れた。

「流石人気アイドル……」

「いつも笑顔でいなきやいけないなんて大変ね」

マナと六花がそう思っていると、ダビィが二人に語り掛ける。

「真琴が気を許せるのは、みんなだけだビィ。くれぐれも真琴の事、よろしくお願いしますビィ」

マナ達にそう言い、一礼した。

「大丈夫よ、こっちの学校の事は色々調べて来たもの」

真琴はダビィを机の中に隠し、学校についてはキチンと調べて来たと伝えた。

「そういうえば、龍牙君は？」

「ああ、龍牙なら晴夜と一緒にどこかに行ったわよ？」

一方、学校の外では晴夜が龍牙になぜ転校して来たのか尋ねていた。

「お前なんでこんな所に？」

「真琴がこの学校に行くって言って、ダビィが『龍牙も一緒に転校するビィ!』って言うから……」

「その気になったと……」

「おお！」

「はあく……」

晴夜は呆れながら溜め息をつく。

「まあいい、とりあえず……」

晴夜は龍牙に手を差し出す。

「今日からクラスメイトとしてよろしくな」

「おお！」

龍牙と握手を交わし、その後二人は教室へと戻った。

「……そういえば、お前この世界の学校についてはわかっているのか？」

と晴夜が聞くと、龍牙は親指を立てる。

「任せろ！バッチリだ！」

「……不安だ」

晴夜は龍牙の発言に半信半疑の気持ちになった。

それから真琴と龍牙は授業をする事になったが、本当に調べて来たのか、真琴の方はテストでサインを書き、裁縫で雑巾と机のシートをくつつけてしまうなど。龍牙の方も書道の授業で硯を使わずに墨汁を直接筆にぶっ掛けようとしたりと、二人して同じような失敗ばかり続いた。

……つまりまあ、真琴と龍牙の転校初日はとても破茶滅茶だった。

やっと放課後になり、マナ達は帰る支度をした。

「お疲れ様、六花、晴夜君。まこぴーと龍牙君が学校に慣れるまで、もう少し時間がかかりそうだけど、三人でフォローしよっ」

「うん！」

「そうだな」

そう言つて五人は教室を出て、下校しようとした時、

「真琴さん!お疲れ様でしたー!」

『お疲れつしたー!』

校門前には紫の羽織りを着た人達がずらつと並んでいた。

「えっ?」

「なんだ?あの人達は?」

「まこぴーの知り合い?」

マナ達はずらつと並んでいる集団に驚く。

「ああ、あれは真琴の応援団つて、ダビィから聞いた」

「みんなしつかりしてるし、礼儀正しいいい人達ビィ」

「「へえー……」」

応援団の人達に向かつて真琴は微笑むと、団員達がメロメロになり、中にはサインが

欲しいと言う者もいた。

「バツカヤロウ!真琴さん今プライベートなんだぞ!何がサインだ!」

『ハッ!そうでありました!』

「我らが規律、全百三十カ条復唱だ!一つ!まこぴーのプライベートを守ります!」

『まこぴーのプライベートを守ります!』

応援団の団長が規律の一ヶ条を復唱すると、団員も続けて復唱する。

「確かに礼儀正しいだな」

「約束、百三十もあるんだ……」

六花がそんなことを言っている……

「あつ、いたいたまこぴー!」

「ホントにこの学校に転校して来たんだ!」

今度は週刊誌のカメラマンがやって来て、写真を撮り出す。

「週刊誌の記者さんビィ」

「先に行つてちょうだい。あなた達に迷惑はかけないわ」

「えっ?でもせつかく一緒に帰ろうと——」

残念そうな顔するマナに六花が言う。

「私が注意を引きつける!」

「六花?」

「あなた達はその隙に裏門から逃げて!」

そう言つて記者達に近づき言う。

「あなた方、今写真撮られましたけど、学校の許可はとつたんですか?」

六花の発言に記者達は怯み、続けて六花は言い放つ。

「一般生徒や制服が写るのは、学校としてNGのハズ!それに何より、剣崎さんも制服を着てる時は、アイドルではなく生徒です。お引き取りください!」

六花に続くように応援団長も記者達に言い放つ。

「彼女の言う通りだ!まこぴーのプライベートに踏み込むな!」

その様子を見て、龍牙が「今の内だ!」と言う。

「行くぞ!」

「うん!行くこうまこぴー!」

「ええ!」

その隙に四人は裏門に向かってダッシュした。

その後、四人は無事に裏門から出て行く。

「もう、大丈夫だ」

「ええ、ありがとう」

六花と団長のおかげで何とか記者達から逃げ切った。

「じゃあ、俺たちはここで!」

「うん!じゃあね!」

そう言つて晴夜と龍牙は帰つていった。マナと真琴もそのまま帰路についていく。

「それにしても六花は機転が効くシヤルね！」

「うん！ホント頼りになるよね！」

「いい仲間がいて、幸せね」

「仲間でもあるし、何と言つても六花は親友！」

それを聞いた真琴が言葉を止める。

「まこぴー？」

「いいなーつて真琴は思っているビィ」

「ダビィ！」

「まこぴーは素直でカワイイシヤル！」

「うん！ホントキュンキュンだよ！」

その頃、記者達の対応を終えた六花は一人で歩いてた。

「ごきげんよう六花ちゃん」

「ありす……」

彼女のそばにピンクのリムジンが止まり、窓が開くと座っていたありすが挨拶をした。

「そのお話は車の中でどうですか?」

「ありすに勧められ、六花は車に乗った。」

「真琴さんと龍牙さんが転校していらしたそうですね」

「もう知ってたんだ」

「二人は車の中で真琴と龍牙についての話をした。」

「ええ、でも心配ですね。真琴さんと龍牙さんは、こちらの学校に通うのは初めてでしょうし。」

「……でも、嬉しいのですわ、みんな近くにいられるようになって」

「うん、マナもまこぴーが転校して来てすごく喜んでた」

「だが六花の表情は、少し複雑そうな顔になっていた。」

「ちよつと寄ってみませんか? マナちゃんのお家に」

「うん!あの後どうなったか気になるし!」

「二人はマナの家に着き、マナの部屋に入っていく。」

「あつ六花!ありす!」

「えつ?まこぴー?」

「まこぎげんよう」

「マナの部屋にはマナだけでなく、真琴もいた。」

「あのね、まこぴー今日はお仕事休みなんだって！」

「えっ？」

「それは楽しそうですわね」

「でしょでしょ？」

「そういえば、龍牙が住んでいるところこの近くのよね？」

ふと真琴が尋ねると、六花が「確かそのはずよ」と答えた。

「ちよつと行ってみよう！ねえまこぴー！」

「うん！」

「六花達も行こう！」

「え!!?……うん」

「いいですわね」

四人は揃って龍牙の住んでいるところ、もとい晴夜の家を訪れた。

「ここが晴夜君の家」

「立ってないで入りましょう」

四人が中に入ると目の前にハットを被ったおじさんが出て来た。

「いつらしい！」

「あ!お、お邪魔します。えつくと……」

「あ、俺 晴夜の叔父の石動総一郎、よろしく!」

「どうも、それで、晴夜君と龍牙君は?」

「晴夜!龍牙君!お客様だぞ」

総一郎が大声で言うのと、地下から龍牙が出てきた。

「お!みんななんでここに?」

「あんたの様子を見にきたのよ!」

「まあ、とりあえず、上がってて」

総一郎がそう言うのとマナ達はお言葉に甘えて家に上がり、龍牙は地下の方に行き、マナ達も付いていった。

すると、目の前に小さな冷蔵庫があり、龍牙が開ける。

——が中は冷蔵庫ではなかった。

「なにこの冷蔵庫?」

「まあ、それは後で入ってくれ」

「「「えつ?」」」

龍牙に続いてマナは冷蔵庫の中に入ると、その中の部屋を見たマナ達は驚きを隠せなかった。

部屋の黒板にはいくつもの数式や科学式が書かれており、その近くには何やら大きな電子レンジのような機械が見えていた。

「すごいですわ」

「いや、すごい領域を超えてる」

「わあー！あれ？晴夜君、何やってるの？」

マナは晴夜の方を見ると、机に向かって何かを作っているようだった。

「ああ、あれは新しいベストマッチを見つけたから、それ専用の武器を作ってるらしい」

「え!?？今まで使ってた武器、全部晴夜君が作ってたの!?？」

六花が驚いていると、晴夜は立ち上がった。

「出来たー!!」

晴夜が手に掲げた武器は弓のような武器だった。

「名付けて『カイゾクハツシャー』!」

「出来たのか？」

「ああ！すごいでしょ！最高でしょ！天才でしょ！」

晴夜はいつにもなくハイテンションだった。

「ねえ、この武器って弓なの？」

「そうだよ、って……みんないつからいたの？」

「さつきだよ!ねえ、それで何この武器は?」

「この武器の攻撃は……」

そう言つて晴夜は武器を振りながら解説する。

「各駅電車!急行電車!快速電車!海賊電車!四・段・回!」

「ちよ!!?もう!周り見てよ!」

みんなに当たりそうだったので六花が注意する。

「ごめんごめん」

口ではそう言うが、晴夜の心は早く試したくてウズウズしていた。

それから、晴夜はこの部屋の事を教えたりみんなと話していて、その後マナは六花とありすに今日は一緒に泊まらないか誘つたが、二人共今日は都合が悪いので断つて帰つていった。

…一方の六花は、何か落ち着かない気持ちで一杯だった。

ジコチュークラブのボウリング場では、イーラが苛立っていた。

「なんで思い通りに行かないんだよ!何でもかんでも僕の思い通りになりればいいのに!」

『おいおいイーラ、何坊やみたいな事言ってるんだ?』

「ああ!?」

ガターばかり出してるイーラはスタークに突っかかるが…

「いや大事な気持ちだ。全て自分の思い通りに運ばば……それこそ最も重要だ」

そこにケガだらけのボールが現れる。

「相変わらずジコチューね。いつまで経っても大きな坊やなんだから」

「バソニーコーだらけだしな」

「む……」

ベールは言い返す言葉もなく黙っていた。

そして翌朝、いつも通り六花が目覚まし時計を押す。しかし、今日はまだ布団を被っていた。

「あつー!ヤバツ!」

昨日の事を考えていたせいか、寝過ぎしてしまった事に気付いた六花はすぐに学校の支度をして、下へ降りた。

「お母さん行つてきます!」

「朝ご飯は?」

母の亮子は朝ご飯について聞くが…

「ゴメン時間無い! マナを迎えに行かなくちゃ!」

「あら? マナちゃんからさつき電話があつて、今日は真琴ちゃんつて子と先に行くつて……」

「え?!? (どうしたんだろ? 何かあつたのかな?)」

不安な気持ちを抱いたまま、六花は慌てて走る。

その時、丁度学校に向かう晴夜と龍牙に遭遇する。

「あ、晴夜君、龍牙君。おはよう!」

「おはよう」

「おお!ん? 何んか急いでるのか?」

「二人共。マナとまこぴーがどこに行つたか知らない!」

「え? なら丁度いいや俺たちも向かうところなんだよ。一緒に行こうか?」

「あ、うん!」

晴夜の言葉に六花は頷き、三人はマナのいる所へ向かう。

「あつ! いたケル! マナとまこぴーケル!」

ソリティアでアイちゃんをあやしてしているマナと真琴を見つけた。

「アイちゃんに会いに来たんだ」

「まこぴー、ミルクあげてみて」

「えっ？出来るかな？」

「出来る出来る！」

「はいアイちゃん、ミルクですよー」

真琴が哺乳瓶を近づけると、アイちゃんがミルクを飲み始めた。

「上手上手！ほくらアイちゃん、ママのマナとパパのまこぴーですよー」

丁度近くには「ホントにパパとママみたいだね」と評するジョーがおり、それを晴夜達は微笑ましく見ていた。

「確かに、パパとママだな」

「なんか、お似合いかもな」

（パパとママって…）

その様子を見ていた六花は何やら不満そうに思っていた。

「まるで新婚さんですね」

いつからいたのか、ありすとランスが六花達の横にいた。

「「「ありす！」」」

「おはようございませす」

いきなり現れたありすに三人は驚いた。

「たまたま通りがかったのですけれど、楽しそうですね。マナちゃんも真琴さんも」
「俺達も混ぜてもらいたいな？」

「うん……」

（あれ？……何だろこの感じ……？）

胸がキュンとなつて、チクンとして……

昨日から私、何だか変……」

「六花？」

隣を見た晴夜は、六花の様子がいつもと違うのに気付いた。

「羨ましい〜！実には羨ましい〜！」

すると声が聞こえ、聞こえた方に顔を向けると、その横には真琴の応援団長が羨ましいと叫んでいた。

「あれって確か……」

「どなたですか？」

「まこぴーの応援団長さん」

「俺もぶっちゃけ、まこぴーとあんな風に仲良くなりたい！」

そう呟くと団長の心のプシケーが黒く染まりだす。

「つて、いかん！今はまこぴー、プライベートじゃないか！しかも俺はまこぴーを守る立場の者！」

と言うと、プシユケーが黒く染まらなくなった。そして団長は横にいた晴夜達に気付いた。

「……し、失礼しました！」

そう言つて団長は逃げるように走つていった。

「どうしたんだろう？」

「ええ、心配ですわね」

彼の事が心配になり、四人が団長の後を追う。

その頃、団長は公園で息切れし、自分に怒鳴る。

「イカン、自分だけ仲良くしたいなんて不純だあ！」

「いいんじゃない？自分だけ仲良くしちゃえば」

だが突如マーモが現れ、団長に囁く。

「誰だ!?？」

「あなたのその望み、叶えてあ・け・る」

マーモが指を鳴らすと同時にプシユケーが真っ黒に染まり、取り出される。

「暴れろ!お前の心の闇を解き放て!」

闇を加えたプシユケールから左手にうちわ、右手にサイリウムを持ったハートのジコチューが生み出される。

「ジコチューケル(でランス)!!」

「応援団長さん!」

その頃、ソリティアでも――

「闇の鼓動シャル!」

「あつちの方から感じるビィ!」

シャルル達が言うマナと真琴もジコチューの元に向かった。

一方、ジコチューの方ではジコチューが熱唱していた。

「まこぴーは俺のもの!まこぴーに近づく奴は、俺が許さーん!」

「あいつ、ヤキモチを焼いているのか?」

「(同じだ、私も……!) マナとまこぴーが仲良くしてるのが羨ましくて、ヤキモチ焼いて……」

六花は自分も同じように嫉妬心を感じていたことに気づく。

「でも、それって当然ですわ」

「えっ？」

ジコチューの様子を見ていたありますがそう眩き、それに晴夜も便乗した。

「ありす言う通りだよ。大好きな友達といつも一緒にいたい。一番の仲良しになりたい、誰もが持っている気持ちだよ」

「そうですよ！私にもありますもの」

「六花だって、あの応援団長の奴と同じだぜ！」

と龍牙が言うと、晴夜が龍牙を叩く。

「イテエ！何すんだよ！」

「俺の台詞を言うな！」

二人のいつものジャレ合いが始まった。

「本当に？」

晴夜達の話聞いた六花がそう尋ねると、その一言に三人は笑顔で頷く。

「本当ですわ。でも、その気持ちを悪に利用するジコチューは許せませんわ」

「俺だけのまこぴー、まこぴーだけを見てる〜！」

「そうか……そういうことか！行くわよ、ラケル！」

と吹っ切れた感じに六花は言う。ラケルもコミュニケーションに変わり、六花はラビーズを

セツトした。

「プリキュア!ラブリンク!」

『L・O・V・E!』

六花が画面にハートを描くと、六花の体が光に包まれ、青いコスチュームを纏いプリキュアへと姿が変わる。

「英知の光!キュアダイヤモンド!」

「止めなさい!」

ダイヤモンドは両手を広げて止めようとする、ジコチューの赤かった頭がピンク色に戻る。

「これ以上団長さんを利用させない!」

と言うダイヤモンドは、ラビーズをセツトした。

「煌めきなさい!トウインクルダイヤモンド!」

放ったトウインクルダイヤモンドがジコチューの両足を凍らせた。

「動けないジコ……!」

「あなたの愛はその程度なの?そんな氷、あなたの愛で溶かしてちょうだい」

「L・O・V・E! I LOVE まこぴー!」

マーモの一言にジコチューのサイリウムから炎が放たれ、氷を溶かされた。

「氷が！」

「ありす！晴夜君！龍牙君！」

「大丈夫？」

マナと真琴が合流した。

「ああ！」

「大変ですわ！真琴さんの応援団長さんが……」

マナと真琴は現在の状況を確認した。

「行くよ！みんな！」

「「ええ！」」

「オーケー！」

「ああ！」

マナ達はラブリークミュオンにラビーズをセットし、晴夜と龍牙はドライバーを腰に装着し、ボトルを振り、龍牙はガジェットにボトルを差した。

『ウェイクアップ！』

音声が流れると二人はドライバーに差し込む。

『海賊！電車！ベストマッチ！』

『クローズドラゴン！』

レバーを回し、二人の前後からアーマーが形成されて、音声と共に五人は叫ぶ。

『Are you ready?』

「変身!!?」

「プリキュア!ラブリンク!」

マナ達の体は光りに包まれ、髪が伸びると頭頂部が髪飾りで結ばれ、光から現れるとそれぞれの色のコスチュームを纏う。

「みなぎる愛!キュアハート!」

「陽だまりポカポカ!キュアロゼッタ!」

「勇気の刃!キュアソード!」

「みんな!」

「うん!」

ダイヤモンドはハート達が来たことに気付き、ハートが頷く。

「響け!愛の鼓動!ドキドキプリキュア!」

そして、晴夜と龍牙は二つのアーマーが体に装着され、変身完了し音声が流れる。

『定刻の反逆者!海賊レッシャー!イエーイ!』

『Wake up burning! Get CROSS—Z DRAGON! Ye a r!』

ビルドの姿は複眼はジョリロージャーと線路を模しており、右側は海賊船とコート、左側は遮断機と信号機を模していた。これぞ新フォーム『海賊レッシャーフォーム』。

そして、ドライバーから『カイゾクハッシャー』が形成される。

「勝利の法則は、決まった!」

「愛を無くした悲しい応援団長さん!このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻してみせる!」

ビルドはいつもの決め台詞を、ハートは胸にハートマークを作り、ジコチューに言う。

「I LOVE まこぴー!」

「応援団長さんの気持ちは嬉しい。けど、そんな事に利用されて、団長さんだって嬉しくないよね?」

とソードが言うが…

「誰だお前……?俺のまこぴーの邪魔すんな!」

ソードがまこぴーである事に気付いていないのか、そうやってジコチューは足の氷を砕く。

「落ち着け、まこぴーなら……!」

「L・E・T・S! Let's Go!まこぴー!」

ジコチューの顔から光線を放つ。クローズはビートクローザーを出すと、ビートク

ローザーのグリップを2回引つ張る。ソードはコミュニケーションにラビーズをセットした。

『ヒツパレー! ヒツパレー!』

「閃け! ホーリーソード!」

『ミリオンヒット!』

クローズとソードの放った技がジコチューの光線を切り裂く。

「カッチカチのロゼッタウオール!」

次にロゼッタがロゼッタウオールで光線を防ぐ。

「煌めきなさい! トウインクルダイヤモンド!」

そして、再びダイヤモンドの放ったトウインクルダイヤモンドが光線を凍らせた。

「今よ、ハート、晴夜君!」

「オーケー! 任せて!」

「行くぞ!」

氷の上をハートとビルドは走り、同時に跳躍する。

そして、カイズクハツシャーの弓を――電車型攻撃ユニット『ビルドアロー号』を海賊船型攻撃ユニット『ビルドオーシャン号』から引つ張つぱると、エネルギーが溜まっていく。

『各駅電車! 急行電車! 快速電車! …』

「あなたに届け！マイスweetハート！」

そして、ハートが技を放つと同時にビルドは弓を離す。

『海賊電車！発車！』

カイゾクハツシャーとマイスweetハートが命中したことでジコチューは浄化され、プシユケーが応援団長の元に戻った。

「あれ？」

「全く、愛に溺れちゃうなんて」

マーモはそう吐き捨てると撤退して行った。

「やっぱり、ハートとあなたとのコンビ、最高ね！」

「「えっ？」」

すると、急にソードがハートとダイヤモンドを褒め出した。

「いつもあなた達が羨ましかった。信頼し合ってて、親友って感じで。」

……後から来た私は、あなた達のようにになれるかどうか分からないけど……でも、私もなりたい！あなた達と親友に！」

「ソード……」

「私も同じ気持ちでしたわ。もっと皆さんと仲良くなりたい。心からのお友達に」

「俺もみんなと本当に友達になりてえ！」

「ロゼッタ……龍牙君（みんな同じだったんだ。みんな胸がキュンとて、胸がチクンとしてたんだ!）」

ダイヤモンドは笑顔で言う。

「変よ、みんな? 私達、もうとっくに友達なのに」

みんなが笑顔になり、それを見ていたビルドはダイヤモンドの悩みが解決したことを悟った。

（どうやら、六花の靄は消えたみたいだな）

その日の夕方。

「ねえ、週末ウチに泊まりに来ない?」とマナが、提案する。

「いいですわね、泊まりっこ!」

「賛成! みんなでご飯食べた!」

「真琴も最高に楽しみ思って思ってるビィ!」

「ダビィ! 私のホントの気持ち言わないでって言うてるてじよ!」

こうして六人は、より絆を深める事が出来たのであった。

次回! Re. ドキドキ&サイエンス!

第11話 プリキュアの新たな力！そして、スタークの正体…

第11話 プリキュアの新たな力!そして、スタークの 正体…

その日、晴夜は六花と一緒に資料を運んでいた。

「ごめんね、晴夜君、手伝ってもらって」

「別に、全然問題ないよ」

二人が会話をしながら生徒会室に向かっていると、六花の目に二人の女子生徒から何かを頼まれるマナが映った。

「ちよーつと待ったー!」

「うわあ!? ちよつ、六花!」

六花は晴夜に自分の資料を乗せ、彼女の元へ向かう。

「ダメよ!絶対にダメ!」

「まだ何も聞いて無いよ……」

「どうせマナに試合に出てくれて要請でしょ?」

「どうして分かったの?」

「その腕を見れば一目瞭然です。ソフトボール部キャプテン、千葉先輩」

六花の言う通り、ソフトボール部のキャプテンである女子生徒の一人、千葉は右腕を骨折していた。

六花は口をマナの耳元に近付ける。

「マナはプリキュアと生徒会の活動で手一杯でしょ？助つ人なんて軽々しく受けちゃダメ」

プリキュアと生徒会の両立だけでも大変なのに、ソフトボールまでやったら他が疎かになると注意する。

「でも、本当に困ってるみたいだよ？」

マナがそう言うと、千葉ともう一人の生徒が今の自分たちについて語る。

「その通り！次の試合は予選の突破が掛かった大事な一戦です！」

「お願いします！」

二人は頭を下げて頼む。それに対してマナの答えは…

「分かりました、お任せ下さい！」

「ええっ!?？」

いつもの如く願いを受け入れたのだった。

「ありがとう！」

「では早速、今後の打ち合わせを……」

マナが二人に連れて行かれる。

「ちよつとマナ!もう知らない……!」

六花が呆れていると、晴夜が大量の資料を持ってヨロヨロとしていた。

「六花!そろそろ、手伝って……」

「あつ!ごめん!晴夜君!」

彼女は自分の預けた資料を取り、晴夜に事情を話す。

その日の夜…

「ただいま……」

「お帰り(なさい)」

「おつかれ、マナ」

ソフトボールの練習を終えたマナが家に帰ると、六花とありす、真琴、それに晴夜に龍牙にいる。

「え!?何で!?あたしだけ仲間はずれ!?」

「マナは部活だったでしょ」

「あ、そっか……」

そう言えばそうだったと苦笑をする。

「六花から聞いたぞ。マナ、ソフトボール部にスカウトされたんだって?」

龍牙は彼女がソフトボール部の手伝いをしているということ、六花から聞いたことを話した。

「うん、どーしてもって言われちゃって……」

「マナちゃんらしいですわ〜」

「幸せの王子は押しに弱いよね」

「なんだ? 幸せの王子って?」

龍牙が『幸せの王子』と言う物が何なのか分からずに六花に聞き出す。

「あそっか、龍牙君は知らなかったわね。幸せの王子つてのは童話の話なの」

六花は幸せの王子についての説明をし始める。

「金や宝石で出来た王子の像が、貧しい人に自分の金や宝石をあげるって話なの」

「へえ〜、なんか、マナみたいだな、それと晴夜にもそれっぽいよな」

「よく、誰かれ構わずに厄介事に首を突っ込むとかで人助けするからな」と龍牙が言う
と、六花も頷く。

「そうね、晴夜君もマナと似てるからね」

「そうかな?」

「そうなるよ、六花ちゃんはその話の中のツバメですね」

ありすの一言でみんなが同意して大笑いすると、晴夜がマナに聞く。

「それで、試合はいつなんだ？」

「今度の日曜日。場所はうちの学校のグラウンド」

「絶対応援に行きますね」

「……助っ人に先発を任せるようなヘナチヨコ部ですけどね」

「なんか、怒ってる？」

「別に。マナの分まで校外活動のゴミ拾いのお手伝いをしたり、吹奏楽部の講演会の打ち合わせをしたり、広報の原稿をチェックしたりするぐらいで怒ったりしませーん」

（絶対怒ってるな）

晴夜は六花が怒っていることを察した。

「流石は六花様！愛してる〜」

マナは自分の今の気持ちを言うと、六花は真琴の事を話す。

「まこぴーも怒ってるよ。王女様探しがちつとも進んで無いから」

「えっ？」

「別に怒ってるワケじゃないけど……」

「けど？」

「不思議なのよ。お手伝いで呼ばれただけなのに、どうしてそんなに真剣に打ち込める

のこなつて」

何故そんなに物事に真剣に打ち込めるのかと、真琴はマナに質問する。

「あたしはいつも全力主義だし！何より、誰かの役に立てるって嬉しくない？」

マナがそう言うが、真琴に今だに分からなかった。

その後、真琴はその帰り道。車の窓の外を見ながら、マナの言った事を考えていた。

「誰かの役に立つのって、そんなに楽しいのかな……」

その声を耳にしたDBが「キュアハートの事？」と真琴に聞く。

「うん」

「あなただって、トランプ王国ではみんなのために歌を捧げてたじゃない。

あなたは、それに喜びを感じてたんじゃない？」

DBは真琴にそう言うが、本人は「よく分からない」と呟く。

「だったら、あなたも彼女の応援にいつてみたら？」

いい刺激、貰えるかもしれないわよ」

「そうね」

DBの提案に同意する真琴であった。

一方その頃。ジコチュークラブのボウリング場では珍しくボールがボウリングをし
ており、イーラとマーモ、スタークはそれを見ていた。

(キュアハート……借りは必ず返してやる……)

連続でストライクを出すボールが心の中で眩く。

(それとビルド……奴も)

次に投げたボールが力が入っていた影響なのか、ピン全てを粉々にした。

『今日はかなり荒れてるな』

「何だよオッサン、イライラし過ぎだろ」

「触らぬ神に祟りなし。放っておきなさい」

興味なさげにマーモが言うと、二人はそのままメロンソーダを飲む。

そして翌日。マナはソフトボール部の干したユニフォームを伸ばしていた。

全てを伸ばし終えた彼女が「ふう、これで良し」と納得していると、そこへソフトボ
ール部の一年がやってきた。

「先輩何してるんですか?」

「みんなのユニフォーム、汚れてたから洗濯しておいた！」

そう言つて一年生の部員に綺麗になつたユニフォームを見せる。

「雑用は私達一年生がやります！」

「先輩は助つ人なんですから……！」

「練習に専念して下さい……！」

一年生の部員がマナの仕事は自分達のことだと主張するように言うが、そんな時に放たれた彼女の発言が心に響く。

「あたし、一人が頑張つても、チームは強くないよ？」

レギュラー座を勝ち取るために、互いに励まし合い、技を磨き合う。

その熱意こそチームを強くする！

一年生だからつて、遠慮してちゃダメ！」

「「は、はい！」」

「分かつたら、さっさと着替えて。ランニングに行くよ」

「「はい！」」

このマナの発言により、ソフトボール部の部の空気が変わり、より一層明日の試合に臨めるよう全員が努力するようになった。

そして、練習終わりの夕方。

「会長!お疲れ様でしたー!」

「お疲れー!明日の試合頑張ろうね!」

「「はい!」」

マナに挨拶を言っつて、一年生四人は帰って行く。

「相変わらず、君は人気者だね」

「お兄さん!アイちゃんも!」

と振り向くと、ジョーとアイちゃんがいた。

「マナ、お疲れ!」

更にマナが後ろを振り返ると晴夜がいた。

「晴夜君!どうしてまだ学校に?」

マナが晴夜になぜまだ学校にいるのかを聞くと、晴夜は先生と呼ばれて、こんな遅くの時間の下校になったと事情を話す。

「そう言う君こそ珍しい、ジャージのまままで下校なんて」

「いや、これはですね……」

彼女はジョーに自分がソフトボールの助っ人として試合に出ることを話した。

「そっか、なら僕もアイちゃんと応援に行こうかな」

「ぜひ！」

「よかったな、マナ！」

「うん！」

「そうだ」

ジョーがそう言うのと、ポケットからピンク色の矢のようなものが刻まれたキュアラビーズを取り出した。

「勝利の女神に、お守りをあげよう」

「え？いいです！」

「遠慮はいけないよ」

「あ、あちよつと……」

しかし、マナにあげようとしたラビーズをアイちゃんが掴んでしまった。

「どうやら、アイちゃんが気に入ってしまいましたね」

「そのようだね、気に入ったのなら、君にあげるよ！」

ジョーはアイちゃんのよだれかけに、ラビーズをセットした。

「良かったねアイちゃん！」

マナに言われて喜んでるアイちゃん。するとそこへ：

「お取り込み中失礼」

「!?」

と聞き覚えのある声に気付く晴夜とマナ。

「相田マナさん。桐ヶ谷晴夜君。」

……いや、キュアハート。そして、仮面ライダービルド」

公園にあつた屋根の上に、ベールが立っていた。

「お前は（あなたは）……」

「マナ、晴夜、気をつけるシヤル」

（分かつてるけど、これじゃあ変身出来ない……）

ジョーがいるため、二人は変身出来ない。

「俺と勝負しろ」

「嫌よ。あなたと戦う理由なんてあたしは無いもの」

「マナの言う通り、俺にもお前と戦う理由がない」

マナの発言に晴夜も同意して、ベールに言う。

「お前ら、トランプ王国の惨状を目の当たりにしたくせに、そんな寝言を言うのか」

「見たさ。だが、ここでお前を倒しても王国は元に戻らない」

「……その倒せる物言い、気に入らんぬ。」

「はっ!」

ベールはサングラスを外し、手から電撃を放った。

「うわっ!」

ジョーは何とか電撃を躲す。

「どうした?早く変身しろ。」

変身前の貴様らを倒しても、俺は満足出来ないのでな」

そう言うのと、もう一度電撃を放つ。

「危ない!うあああああつ!」

マナの代わりに、ジョーが身代わりとなって電撃を受けた。

「お兄さん!（ジョーさん!）」

「フン、余計なマネを」

「余計じゃ…『余計なんかじゃねえよ!』…晴夜君」

「誰かの命を守りたい。誰かの為に尽くしたい。そう言う気持ちがあるから人は強いんだ!」

「そういうのあなたには分からないの!?!?」

「黙れ!」

ベールが叫んだ後、指を鳴らした。

するとアイちゃんがシャボン玉のようなものに包まれ、ベールの元に向かって行っ

た。

「アイちゃん!」

「お前!何を!」

「コイツを返して欲しければ、明日の午前八時に四葉ターミナルに來い。

……ただし、お前ら二人で來い。もし、他の仲間を呼んだ場合は……」

「まさか!」

両手でアイちゃんのいる球を壊すそぶりを見せ、消えて行つた。

「アイちゃん……アイちゃん!」

その後、晴夜は家に帰り、明日の事を考えていた。

どうすれば、アイちゃんを無事に取り返せるかどうかをー

「おい、晴夜どうした。さっきから難しい顔してよ」

晴夜の様子がいつもと違うことに気づいた龍牙は、どうしたのかと問う。

「いや、なんでもない」

そう言つてパソコンに目を向ける。パソコンの画面からは修復出来た父のデータが出ていた。

それに気付いて、そのファイルデータを開き確認。データを見ると、晴夜の目は大き

く開いた。

「これは——嘘だろ……」

翌日、晴夜の叔父：石動総一郎が出かけようとしていた。

それを見た晴夜は「今日もバイト？」と総一郎に聞く。

「ああ！この家の生活費やお前のために稼ぐ事が大事だから！

父さん達の年金だけじゃあ不安だろう」

「本業は、科学者なのに」

「仕方ないだろ。俺の仕事場の研究所は潰れちゃたからな」

「そうだったな」

そう呟く総一郎に晴夜はそうだったと言う。

「じゃあ、行ってくる」

「いつてらっしゃい」

そう言つてバイト先の仕事へと向かった。

そして晴夜は何かを考えながら、黙つて総一郎の方を見ていた……

それからしばらく経ち、ソフトボールの試合を見るために大貝第一中学校に来ていたありすとセバスチャンが歩いてると、龍牙や六花、真琴がいるのが見えた。

「おはようございます」

「おはよう、あります」

「来たか」

「ハイ。」

「……あら? 試合はまだ始まってませんの?」

「それがね……」

真琴が視線を向けた先には大貝第一中学校のソフトボール部の部員達だけだった。

「どうやら、マナがまだ来ていない様なのだ。」

「……晴夜さんもいないですか?」

「そうなの、マナと一緒に出た見ただけだ」

「なんか、厄介事に関わってるような気がするな」

「可能性は……ありそうね」

六花達は、また二人が何かの厄介ごとくに首を突っ込んでいると推測する。

その頃、マナと晴夜はボールが指定された場所へと来ていた。

そこにボールが姿を現す。

「約束通り、お前等だけで来たか。いい度胸だ」

「アイちゃんはどこー！」

マナが聞くと、ボールは指を鳴らす。

すると、球体が姿を現し、中ではアイちゃんが眠っていた。

「アイちゃん！よかった……さあ、約束通り来たんだ。アイちゃんを返せよ！」

「ああ、約束通り返してやる。ただし、俺に勝てたらな」

それを聞いた晴夜とマナは、目を合わせると頷き合う。

「行くぞ、マナ」

「うん！行くよ、シャルル！」

マナはコミュニケーションを取り出し、晴夜はドライバーを取り出す。

コミュニケーションにキュアラビーズをセットし、ドライバーを装着して、ボトルを2本出し、

ドライバーに差し込む。

『海賊！電車！ベストマッチ！』

ドライバーのレバーを回すと、ランナーが出現し、アーマーが形成された。

『Are you ready?』

「プリキュア！ラブリック！」

「変身!」

『L・O・V・E!』

マナは光に包まれて、姿を変え始め。晴夜には二つのアーマーが装着され、ドライバーから音声が響く。

『海賊レッツシャー!イエーイ!』

そして姿を変え、キュアハートとビルドが並び立つ。

「その自己中極まりないおじさん!このキュアハートとビルドが!貴方からアイちゃんを取り戻してみせる!」

「行くぞ!」

ビルドはカイゾクハツシャーを持ち構える。

「ふふ、それでいい」

ベールはニヤツと笑いながら呟く。

その頃、龍牙達サイド。

六花達はマナをコミュニケーションで一所懸命呼び出しているが…

「どう?シャルルに繋がった?」

「呼び出してるけど……」

「応答無いランス〜」

「こつちもだ、晴夜と繋がれねえ」

マナと晴夜に連絡が付かず焦っていた。

一方、ソフトボール部の人たちもマナが来てない事に焦りを感じていた。

「お願いです！もうちよつと待つて下さい！」

「そう言われても、選手が揃わない場合は不戦敗になる決まりだからね」

「そ、そんな……！」

「無理よ、会長がいらないんじや……」

「勝てるわけ無い……」

（無理もないわ。一番頼りにしてたものが急に消えてしまったんですもの）

部員の誰もがマナがいない事に勝てる自信すらも失っていた。

その時…

「キャプテン！私に投げさせて下さい！」

一人の部員が名乗りを上げた。

「京田？」

「私達、会長に教えて貰いました！」

「みんなで力を合わせれば、どんな困難も突破出来るって！」

「会長が来ないのは、きつとワケがあるんだと思います!」

「戦いましょう!会長の分まで!」

「……わかった。精一杯やろう!」

「ありがとうございます!」

そしてマナを抜いた状態で、試合が始まった。

「お嬢様」

そこへセバスチャンが現れ、ありす達に何かを伝えた。

一方、二人はベールと戦闘を行っており、二人はベールが放つ電撃を避けていた。

そのビルドの上を飛び超えて、キュアハートがベールに近づく。

「はああああああ!」

キュアハートは連続で拳、蹴りを放つが、そのどれも軽々と躲される。

ビルドはすぐさまカイゾクハツシャアのユニットを引く。

『各駅電車!急行電車!快速電車!……』

「ハート退け!」

「!?」

ハートはビルドの射線上から離れた。

『海賊電車！発射！』

だが、ベールはそれをガードしてダメージを最小限に押さえた。

次に二人はコンビネーションを見せてるが、それまでもが躲される。

「く……クソ……！」

「ハア……！ハア……！」

「どうした？もう息が上がっているぞ」

「まだまだ！」

カイゾクハツシャを振りベールに攻撃する、それに続いてハートも殴りかかるが再び躲されてしまい、ベールは距離を取った。

それと同時にベールが指を鳴らす。

「ん？あ？？」

ビルドは上を見上げると、クレーン車がコンテナを持ったまま二人の頭上へ移動する。

そしてコンテナが落とされ、二人は回避のために走り出す。

「うおおおおおおお！」

「わわわわわ！」

今度は連続でコンテナが落とされ、二人は急いで回避する。

それにより、更に疲れてたのか手を地面についでしまう。

「やっぱり、罨だったシヤル!」

「卑怯者!」

「こんな事しやがって!」

「俺たちジコチューにとつて、最高の褒め言葉だ」

ビルド達は文句を言うが、ボールは開き直つてそう言い放つた。

「俺だつたら最悪だな」

「ふん」

ボールが指を鳴らした瞬間、トラックが動き出した。

そのトラックは二人目に掛けて突進してきており、二人はかわそうとするが間に合わない。ならばと、ビルドはボトルを変えるようにした時だった。

「煌めきなさい!トウインクルダイヤモンド!」

聞き覚えのある声が聞こえたと思うと、それと同時に吹雪の様な攻撃がトラックに直撃し、凍らせて止める。

「何?」

ボールがそれに驚いていると、キュアハートとビルドの元に四人、姿を現わす。

それはクローズ達だった。

「龍牙！みんな！」

「どうして？？」

ハートとビルドはみんなが何故ここにいるのか疑問に思うが…

「セバスチャンが探してくれましたの」

「そういう事だ。どんなに優れた選手だけじゃあ、勝負には勝てねえよ！」

「私達もチームなんだから、もう少し頼りなさい！」

「みんな……！」

「最高だなー！」

ビルドとハートは嬉しそうにみんなを見る。やはり、このメンバーは最高のチームなんだと改めて二人は感じた。

「ソフトボール部のみんなもあなたの分まで頑張ってる！私達も頑張ろう！」

「みんな、頑張ってるんだ……！」

「負けてられないな！」

「うん！」

そして、ハートはプリキュアメンバーを見る。

「行くよ！」

「「うん！」」

四人は飛び上がるといつものアレを始める。

「みなぎる愛!キュアハート!」

「英知の光!キュアダイヤモンド!」

「陽だまりポカポカ!キュアロゼッタ!」

「勇気の刃!キュアソード!」

「一二!響け!愛の鼓動!ドキドキプリキュア!」
「一二」

四人はいつもの台詞とポーズを決める。

「行くぞ!龍牙!」

「っしやあ!」

そう言つて、全員戦闘態勢に入る。

その時…

『面白くなってるな!手を貸そうか?』

と、再び聞き覚えのある声が聞こえた。

「スターク!」

『よっ!』

ベールの後ろの方からスタークがやって来た。

「何しに来た?」

『なくに、手伝ってやろうと思っただけだ』

「その必要はない」

そう言うと、ベールはあるものを取り出す。

それは黒いプシケードだった。

「アレは！」

「闇のプシケード！」

すると、ベールは闇のプシケードをジコチューに変えるのではなく、逆に手に指を狭めるくらいのサイズへと凝縮させる。

「お前の闇を我に捧げよ！」

そう言うと、なんと闇のプシケードを飲み込んだのだ。

その瞬間、ベールは雄叫びを上げる。

「うおおおおおおお！」

『ほう〜これは……』

「嘘でしょ!?!?」

「あんな事が出来るのかよ」

「何が起こるんだ!」

「何なの、アレ!?!?」

皆はそう言って、危険を感じ、構える。

その瞬間、ベールの体から煙が出て、それが消えると……そこには巨大なケータイがあった。そしてケータイが開くと、画面にはベールの顔が映っていた。

「ハハハハ！ジコチューの能力を吸収し、パワーアップした！これがベールビーストだ！」

とベールが言うが、ビルド達の反応は…

『おいおい……』

「うわあ……」

「なんとというか……」

「ご愁傷様だな」

「その内、良いことあるんじゃないか？」

「いや、励ましてどうするのよ」

「でも、何ていうか……」

案の定、ビルド達からの反応は微妙だった。

それを見たベールは焦る。

「……スターク！ビルドとクローズはお前に任せる！」

『はあく……しようがねえな』

「ベールの方は頼む。俺たちでスタークを止める」

「わかった！」

そう言つてプリキユア組はベールの方を向く。

「見た目だけで判断すると痛い目に遭うぞ、シヤターチャンス！」

そう言つて押しつけた瞬間、光が放たれ、それに怯むハート達。

その間にベールが近づいてきて、ロゼッタとダイヤモンドを掴むと投げ飛ばす。

「あああああ!?？」

そのまま二人はコンテナに叩き付けられた。

「ダイヤモンド、ロゼッタ!はあ!」

ソードはジャンプし、飛び蹴りを放つが、タイミングよく閉じたベールが挟み込む。

「この……!」

「マナーモード!バイブル!」

その瞬間、ベールが震え始め、ソードに振動が襲い掛かる。

「あああああああ!」

「ソード!」

ハートは走り出し、助けようとした時。

「メール送信!」

ベールはそう言ってソードを吐き出し、ハートと激突させる。

それにより二人は倒れるが、なんとか立ち上がった。

その頃、ビルドとクローズは向かって来るスタークに構えていた。

『さあ、こつちも始めようか?』

「臨むところだ!今日こそ、決着を付けてやる!」

そう言つてビートクローザーを構え、クローズはスタークの元へ向かっていく。

「はあああああああ!」

ビートクローザーで攻撃するクローズだが、スタークはなんなく躲す。

一方のビルドはスタークの方をずっと見ていた。

(本当に、あの人がスタークなのか……)

そう考えていたがすぐさま気を取り直して、ビルドはカイゾクハツシヤーを構えス

タークに攻撃する。

『各駅電車!発射!』

『おっと!』

『急行電車!発射!』

二度に渡る狙撃を躲すスタークを見て、ボトルを取り替えた。

『タカ!ガトリング!ベストマッチ!』

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

『ホークガトリング! イエーイ!』

ホークガトリングになり、ドライバーからホークガトリンガーが形成された。翼を広げて得意の空中戦でスタークに攻撃するが、スタークはまるで見透かしているようにビルドの攻撃を防ぐ。

「クソ!」

「おいおいこの程度か?」とスタークが挑発すると、またボトルを取り替えた。

『忍者! コミック! ベストマッチ!』

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

再び形成されたアーマーが重なった。

『ニンニンコミック! イエーイ!』

『分身の術!』

ニンニンコミックへ変わったビルドは四コマ忍法刀のトリガーを1回押し、分身したビルドは全方位の攻撃でスタークを惑わせ、その隙に刀のトリガーを2回押した。

『火遁の術!』

『炎炎切り!』

炎を纏った刀で分身しながら攻撃しようとした時、スタークは自分の武器のブレードとガンを合体させ、音声が流れる。

『ライフルモード!』

「!?」

スタークは一回転し、ビルドの分身全員に攻撃を当てた。当然これには本物にも直撃した。

「ぐわあ!」

「晴夜!はっ!」

ビルドに気を取られていると、スタークはクローズの目の前におり、スタークの攻撃を至近距離で受けてしまつて、ハート達の所まで吹き飛ばされた。

「クソ……」

「強い……!」

「でも、負けるワケには行かない……!アイちゃんを取り戻すまでは!」

「俺もだ!」

そう言つてハートはコミュニケーションにラビーズをセットし、ビルドはラビットボトルとタックボトルに取り替えた。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

「ビルドアップ！」

『ラビットタンク！イエーイー！』

そしてビルドはレバーを回した。そして放物線が出現し、ボールとスタークを挟む。

『Ready go ！』

「貴方に届け！」

「っ！はあ！」

ビルドは放物線に乗り、ハートは放つ態勢に入る。

『ボルテック フィニッシュ！』

「マイスイートハート！」

「はあああああああ！」

二人の必殺技がボール達に向かっていき、攻撃した。

「やりましたわ！これで！」

と全員が思っていたが、ボールの閉じる攻撃によって二人の必殺技は弾かれてしまい、ビルドは地面に倒れる。

「ぐあっ！」

「そんな！」

「言っただろ!見た目で判断するなど!」

そう言うときベールは回転し、ハート達に体当たりして、撥ねとばす。

「みんな!」

『よそ見している場合か!』

更にスタークの攻撃によりビルドとクローズが吹き飛ばされる。六人はダメージが溜まり、なかなか立ち上がれずにいた。

するとベールはアンテナを抜きだし、それを何とアイちゃんに向けた。

「なっ!まさか!」

「お前らだけで来いと言ったはずだ。約束を破った罰だ」

「させない!」

そう言って、二人が立ち向かうが、腕の振り払いで倒れてしまう。そしてベールはアイちゃんを見る。

「グッバイ」

そう言って投げた時、アイちゃんが目を覚まし、倒れているビルドとハートが目に入る。

それに涙を浮かべると同時に…

「きゅぴらぽ〜!」

その声を上げた瞬間、ピンク色の光が放たれて、投げられたアンテナが打ち消される。
『ツツ？？』

「何？？」

「何が起こってるんだ？」

ビルド達が不思議そうに見ていると、ハート達の元にキュアラビーズが飛んできた。

そして、四人は目を合わせて頷き、それを空に掲げる。

「[[[[ラブハートアロー！]]]]」

その瞬間、プリキュアの四人に弓のような武器が現れる。

「これは……」

「とりあえず、ラビーズを！」

「おのれ！くらえ！」

ベールはすぐさまアンテナを投げる。

その時、ロゼッタがラビーズをセットし、中央のシャフトをなぞると先端のハートが光る。

「プリキュア！ロゼッタリフレクション！」

ロゼッタはラブハートアローを向けると、そこにいつものよりも巨大な四葉の盾が現れる。

「何!?」

そして次にダイヤモンドがラビーズをセットする。

「プリキュア!ダイヤモンドシャワー!」

ダイヤモンドがラブハートアローを上に掲げ、叩くと吹雪が吹き荒れる。それにより、ベールは凍り出す。

その様子を見ていたスタークは…

『ほう、プリキュアの方はなかなかやるな!だがお前達は無駄だ。お前達の攻撃パターンは全て見切っている!』

プリキュアの新しい力に関心していたが、ビルドとクローズには勝ち誇ったように言う。ビルドは立ち上がる。

『そうかよ! だったら!これでどうだ!』

いつも使っているとは違うボトルを2本出し、そのボトルを振る。

「さあ、実験を始めようか!」

そう言つて、ドライバーに差し込む。

『オクトパス!ライト!ベストマッチ!』

『オクトパス?』

ドライバーのレバーを回し、アーマーが前後から形成された。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

新たなアーマーが重なり、ビルドに装着されると、音声が流れる。

『稲妻テクニシャン! オクトパスライト! イエーイー!』

「あん? こんなベストマツチ聞いてないぞ?」

その姿は、複眼はタコと電球を模しており、右肩にタコの無数の足が模しており、左肩にBLDライトの様な発光装置が装備された。

「勝利の法則は、決まった!」

決め台詞を言うと、ビルドの右肩のタコ——『フューリーオクトパス』の無数の足がムチのようにスタークに攻撃する。

スタークは慣れない攻撃パターンに戸惑っていた。

『チツ! こんな物を用意していたとは』

「これでフィニッシュだ!」

ビルドがそう言うと、ドライバーのレバーを回した。

『Ready go!』

音声が流れると、右側のアーマーから黒い墨が発射された。

『ボルテックフィニッシュ!』

スタークが墨で周囲が見えずにいた隙に近づき、左側のライト——『BLDライトバ
ルブシヨルダー』によって輝いたパンチでスタークを吹き飛ばす。

「おお! やったぜ! 晴夜!」

とクローズが近づくと、倒れていたスタークが立ち上がった。

『やるじゃねえか! だが……これでボトルの浄化は全て済んだ。

今日はこれくらいにしておくぜ! じゃあな!』

そう言つてスタークは煙を纏つて消えていった。

「……」

「ス、スタークの奴、逃げやがつて……」

それを見ていたベールがそんなことを呟いている。

一方、次にソードがラビーズをセットした。

「ブリキユア! スパークルソード!」

ソードは無数の矢を放つと無数の刃に変化し、それがベールに放たれる。

「今よ、キュアハート!」

そして、最後にハートがラビーズをセットする。

「ブリキユア! ハートシュート!」

ハートは弓を放つかのように引き、目の前に巨大なハートが現れる。

それをウインクしてから手を離すとハートが放たれ、それがボールに直撃し、浄化が始まる。

「ぐあああああー！」

ボールが悲鳴が聞こえると同時に煙が舞い上がり、浄化されたプシユケーが姿を現し、プシユケーは元の人の元へと飛んでいた。

「覚えてろ！」

そう言つてボールは悔しそうにしながら去つて行く。

その後、マナ達は試合会場へと向かう。

ソフトボール部は試合には無事に勝利し、マナは試合に間に合わなかった事をソフトボール部に謝る。

だが、部員達は今日の事で大切を学ぶ事が出来たとマナに話す。

それを見ていた真琴は、この間のマナの言葉の意味がわかったような気持ちになつていた。

——だが、晴夜だけ何やら暗い顔をしていた。

それに龍牙達が気付き、晴夜に聞く。

「どうしたんだよ？ さっきから浮かない顔してよ」

「珍しいですね?どうかしたんですか?」

「どうしたの?」

と龍牙とあります、六花が聞くと…

「あつ……いや、その……叔父さん今帰っても、いないんだよな?」

「?ああ、今日もバイトだからな」

——そして、その日の夜。

地下室から誰かが入り、机に置いてあつたボトルと壁に飾つてあつたパネルを取り、袋に詰め持つて行こうしているものがあった。

そして、玄関から出ようとした時、その人物の後ろから晴夜が現れた。

「こんな時間に、俺たちのボトル持つてどこ行くんだよ?」

「総一郎叔父さん？」

そう、ボトルを持って盗もうとしたのは、晴夜の叔父：石動総一郎だった…

「バイトだよ……って、うそは通用しないか？」

「ああ、あんたがスタークなんだろ……」

「ほぅ、証拠は？」

そう言う時晴夜はスタークの戦いでフィニッシュに使ったボトルを見せる。

「これまでのバトルで、スタークは俺の攻撃を読んでた。まるで俺の手を読んでいるようだ……でも、最後のこのボトルの特性を知らなかった。

このボトルは龍牙にも秘密にしていたものだ……

俺が持っているボトルの特性を一番近くで知ることが出来るのは龍牙と……あんただけだから……

…そして、これだ！」

そう言つて晴夜は持つていたパソコンの画面を見せた。

それは晴夜が修復した父のデータであり、そこには「スタークの正体は『石動総一郎』である。」と書かれていた。

「どうなんだよ、なんとか言えよ！」

「へっ！チャオ！」

「待てよコラ！」

そう言つて総一郎は玄關のドアを開け、外へ逃げていった。

晴夜も総一郎の後を追いかけていったのだった：

次回！Re. ドキドキ&サイエンス！

第12話 偽りのヒーロー、ビルドの進化！

第12話 偽りのヒーロー、ビルドの進化！

「はっはっはっはっはっ……」

晴夜は今、逃げ出した自身の叔父：石動総一郎を追うために走っていた。総一郎が曲角で曲がるのが見え、晴夜も曲がった。すると息切れした総一郎が柱の傍に座っていて、到着した晴夜も息切れして腰を置く。

「ああ……しんどい！はあ……歳だな！」

「はあ、はあ……ツ、なんで、あんたが!?!?」

晴夜は総一郎に問うと、総一郎が息切れしながら答える。

「俺には壮大な計画があるんでね、やむを得なかった……だから見逃してくれない?」
「できるわけねえだろ！」

「……だよな、あとポトル2本回収しなければならぬからな」

晴夜が総一郎の頼みを断ると、総一郎が立ち上がる。

「ここに来たのも計算ずくってわけか」

「人目につかない場所の方が存分に戦えるだろ」

そう言って1本のポトルを取り出し、1回振ると持っていた武器の銃に差し込む。

『コブラー!』

すると不穏な音楽が流れ出し、銃を上に向ける。

「蒸血」

総一郎がそう言つてトリガーを引くと、黒い霧が彼の周囲を囲む。

そして霧が晴れると、その姿はスタークへと変わっていた。

『ミストマツチ……コツ・コブラ……コブラ……ファイヤー!』

「俺がブラッドスタークだ」

そう言つてスタークが咳払いする。

「ん”っん……馴染みがあるのはこっちの声か?」

するとスタークの声が変わった。

晴夜は立ち上がりドライバーを腰に装着し、ボトルを取り出して振ると栓を回した。

そして、ドライバーに差し込む。

『オクトパス!ライト!ベストマツチ!』

レバーを回し、前後にアーマーが形成される。

『Are you ready?』

「変身!」

『オクトパスライト!イエーイ!』

変身を完了すると、オクトパスライトの右側の無数のタコの足で攻撃した。

スタークはスチームブレードを使いビルドの攻撃を躲すが、ビルドの方がスタークを押ししていた。

『厄介なボトル残しやがって……俺タコ嫌いなんだよ！』

とスタークが言っている際にドライバーのレバーを回した。

『Ready go!』

右側から墨が発射され、スタークの周囲が墨で黒くなった。そして左側のライトが輝き、そのままスタークに突撃し、攻撃する。

『ボルテック フィニッシュ！』

その勢いでスタークに命中させ、吹き飛ばす。

そのまま攻撃を続けようとした時、スタークは盗んだパネルを向けると無数の光の泡がビルドを襲う。

「やっ！」

ビルドは吹き飛ばされてしまい、ドライバーからボトルが外れ、変身が解除された。

落ちたボトルをスタークが拾うと、姿がまた霧に覆われ、石動総一郎の姿に戻った。

「これで、ミッシェンコンプリートだ。チャオ！」

そう言って総一郎は走って逃げていった。

「おい！待てよー！」

晴夜が叫ぶが既に総一郎の姿は見えなくなっていた。

「……………うおおッ！」

晴夜は、怒りで拳を地面を叩きつけた。

そして次の日。晴夜の部屋にマナ達も来て、みんなに昨日の夜の出来事を語る。

「うそでしょー！」

「晴夜さんの叔父さまが……………」

「スターク！」

「……………ああ」

晴夜はスタークの正体をみんなに話していた。

「マジかよ……………」

「スタークがこんな間近にいるなんて……………」

「驚きダビィー！」

「それに、ポトルも全部奪われたんでシャルか！」

全員がスタークの正体が晴夜の叔父：石動総一郎だと知った時、やはりというべきかみんな驚いていた。

「……ありす、頼みがある」

「何ですか？」

「石動叔父さんが父さんがいなくなつてからの4年間、なにをやつていたか調べてくれないか？」

「わかりました。何とかやつてみます」

ありすは晴夜の頼みを了承した。

「俺は、対スターク用のアイテムを作ってみる」

そう言つて1本のボトルを出した。そのボトルを見た龍牙は、それが自身のクロードドラゴンガジェットの中に搭載されていたものだど気付いて晴夜に問う。

「おい？そのボトルつて、俺のドラゴンに入ってやつたら？」

「ああ、あれから調べてみるとこのボトルには、スタークが昨日俺に使つた力と同じ成分が入っているのがわかつた」

「それでこれを使つてどうするの？」

マナが聞くと、「こいつを使つて、ビルドの強化アイテムを作る」と晴夜が答える。

「でも、ボトルは全部持つていかれたんでしょう？」

「それなら、問題ない！」

「「「え？」」」」

晴夜の発言に龍牙達は「？」を浮かべる。

その頃、ジコチュークラブでは。総一郎が盗んだボトルとパネルを机に置いていた。

「これが、ビルドが変身していたボトル全部か？」

「ああ」

「でも、自分の身内を騙すなんて人が悪いわね、あなたも」

とマーモが総一郎を煽てると、それで…と質問する。

「これをどうするの？」

「とりあえず、キングジコチューの完全復活のための障害は一つ消えた。これでビルドは

変身できない」

「なあ、相性のいいボトルだと光るんだよな」

「ああ！試しにこのパネルに差してみろ！」

総一郎がそう言い、イーラがパネルにボトルをはめ込めると…

『ミスマッーチ！』

「「？？」」

はめたボトルの栓から旗があられた。すると、他のボトルも…

『ミスマッチ！ ミスマッチ ミスマッチ ミスマッチ、ミスマッチ！』
「偽物！」

総一郎が直ぐさまボトルを握る。

「ハハツ……やるじゃねえか！」

そう呟くとそのまま、手に持ったボトルを握り壊したのだった。

一方、晴夜家の地下室では。龍牙達は本物のボトルを見ていて、晴夜は何やら準備している様子だった。

「まさか、ボトルをすり替えていたとはな。いつ、作ったんだよ？」

「叔父さんの正体を知って作っておいたんだ」

龍牙の質問に晴夜がそう答えつつ、これからやる実験の準備を行い続ける。

「叔父さんは必ず、ボトルを取りに戻ってくる。その間に強化アイテムを完成させる」
そう言つてボトルをフラスコのチューブにつける。

「よし！じゃあみんな！この物質の成分と合うベストマッチのボトルを見つけてくれ
！」

「ええ!? あたし達が見つけるの？」

「そうーじゃあ、よろしくー!」

マナが聞くと晴夜はそうだと頷き、答える。

「よし、じゃあ俺から、えつくと、パンダ、ロケット」

龍牙はロケットパンダのボトルを差し込むとフラスコが爆発し、龍牙がぶつ飛ばされた。

それを見て晴夜は「ロケットパンダはダメ」とメモに書く。

「じゃあ、私が……よし、これよー!」

六花はゴリラボトルとダイヤモンドボトルをはめ込む。すると、フラスコから無数のダイヤが現れた。

「あの、これって?」

六花が後ろを向き、みんなの顔を見ると察しがついた。

「ゴリラモンドもダメ」

「それじゃあ、これよ!!」

真琴は忍者とコミックのボトルを差し込む、今度はフラスコから大量の紙が飛びだしてきた。

「どうゆう仕組みなの!?!」

「んー、これかな?」

マナはラビットボトルとタンクボトルをはめ込むと、フラスコにエネルギーが集まっていた。

「おお！成功だ！！ラビットタンクがこのボトルの成分に合うんだな！サンキューマナ！」

マナにお礼を言っていると、ドアが開く音が聞こえた。

「みなさん、よろしいですか？」

「「ありす！」「」

からありすが現れた。

「晴夜さんに頼まれていた、貴方の叔父さまについて調べてきました」

「ああ、ありがとう」

ありすは晴夜に資料を渡した。

「石動総一郎。元科学者。あまり目立った研究者ではありませんが、とても誠実な方だったそうです。」

「……ですが、勤めていた研究所は2年前に潰れ。その後は、独自で密かな研究をしていた……と噂されていたそうです」

「独自にしていた研究？なんだよそれ？」

「それに関しては、こちらまで調べきれませんでした」

「晴夜君の叔父さんってどんな研究してたのかな?」

「さあな」

その後、晴夜だけを部屋に残し、マナ達は外に出ていた。

「晴夜君大丈夫かな?」

「どうしたんだよ急に?」

「だって、自分の叔父さんが敵だって知ったから……」

「そうね……」

しばらくみんなの間に苦悶が続くと……

「でも、俺はあいつを信じる」

「龍牙?」

「あいつの言う科学の動向についてはよくわからないけど、俺は……あいつの事なら、俺は信じられる!」

「龍牙君……そうね、あたしも晴夜君を信じる!」

マナが言うとうと六花達も頷く。

その頃、晴夜は地下室で一人、総一郎の事を考えていた。

すると突然、晴夜の携帯が鳴りだし、彼はその電話に出た。

「……………何の用だ？」

『相変わらず、クールだね』

案の定、電話の相手は石動総一郎だった。

『あんな偽物の掴ませやがって……………どうやらお前とは、決着をつける必要があるようだな！』

「俺は、最初からそのつもりだけど」

晴夜は総一郎との一騎打ちを要望してきて、晴夜はオーケーの返事を出した。

『お前が、初めて変身した場所覚えているか？』

「……………」

そして電話が終わると、浄化装置の音がなりレンジの扉が開いた。

そして翌日。マナが部屋の窓を見ると、傘をさして、雨の中どこかに行こうとする晴夜の姿が見えた。

「晴夜君……………何処に」

そう思って、マナは家を出て晴夜の後を追おうとする。

一方、晴夜は指定された場所、初めて変身した工場に到着した。既に総一郎は来ていた。

「懐かしいな。ここから、お前の……自分の人生が大きく変わったよな」

——その通りだ、ここが俺の人生が変わるきっかけとなった始まりの場所である。

その時、支えてくれたのは紛れもない叔父・総一郎だ。

「俺にしてくれていたこと……俺だけじゃない、みんなにしてくれた事、俺達が過ごした時間は、全て偽りだったのか？」

晴夜が総一郎に問うと……

「全部が全部嘘ってわけじゃない。たまに感動してうるつとしたし、騙して悪いなあって思ったよ」

「ふざけるな！」

怒りを感じた晴夜は自分の傘を捨て、ドライバーを装着した。

総一郎も傘を捨て、持っていた銃……『トランスチームガン』を見せ付ける。

そして、お互いボトルを取り出し、スロットに差し込む。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

『コブラ！』

「変身！」

「蒸血」

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ！』

『ミストマツチ……コツ・コブラ……コブラ……ファイヤー！』

そして晴夜は仮面ライダービルド・ラビットタンクフォームに、総一郎はブラッドスタークへと変身した。

「はあああ！」

『ふうん！』

二人が同時に走りお互いパンチが命中し、二人の戦いが始まった。

ビルドとスタークの戦いは激しさを増していた。

ビルドのドリルクラッシュヤーとスタークのスチームブレードが火花を散らし、スタークの攻撃に押され始めたビルドは直ぐにドリルクラッシュヤーにボトルを差し込む。

『ニンジャー！』

『Ready go！』

『ボトルテック ブレイク！』

忍者ボトルを差し込むと、数枚の手裏剣が出現し、そのままスタークに攻撃した。

手裏剣が命中したことで態勢を崩すことが出来、そのまま攻撃を仕掛けようとした時、ビルド……晴夜は総一郎との日々を思い出し、振り返ってしまう。

『よっ!晴夜。コーヒー飲むか?……えっ、いらない?せつかく入れたのに……マズッ!?!』

『ほう、これが新しいボトルか!流石晴夜だな!!』

『おかえり、晴夜』

その影響でビルドの動きが鈍くなってしまう。スタークはその隙を逃さず、ビルドにスチームブレードで反撃を始める。ビルドはなすすべ無くスタークの攻撃をもちろに受けてしまい、変身解除へと追い込まれて、晴夜はそのまま倒れこんでしまう。

「……できねえよ、できるわけねえだろ!」

今の俺をここまで作ってくれたのは、父さんや母さん……そして、あんただ。そして今は、あんたのおかげで、俺は人間らしくいられた!あんたを信じて、ここまでやってこれたんだ……

なのに……倒せるわけねえだろ!」

これまでの自分を作ってくれた人でもあり、家族の存在である総一郎を、晴夜はやはり倒す事が出来なかった。

『勝負あったようだな!』

だが、スタークは無防備な晴夜を仕留めるためにトランスチームガンで晴夜に向ける。

その瞬間…

「プリキュア！ハートシュート！」

スタークは晴夜を仕留めようとするものの、何かに攻撃によって阻まれる。それを避けると、今度はビートクローザーがスタークのもとに飛んできて、スチームガンが飛ばされた。

「!?？」

晴夜は起き上がり、飛んできた方を見ると、ハート達四人と龍牙の姿があった。

「晴夜君！」

「み……みんな……」

『お仲間の登場か……』

スタークは眩くと、龍牙はスタークの方を見ていた。

「……俺があんたを倒す！」

そうやって、龍牙はガジェットにボトルを差し込む。

『ウエイクアップ！』

そして、そのままドライバーに差し込み、走り出す。

『クローズドラゴン!』

『Are you ready?』

「変身!」

『Wake up burning! Get CROSS—Z DRAGON! Yeah!』

そのままクローズになり、スタークに攻撃を始め、ハート達は晴夜の元へ走って駆け寄って来た。

「晴夜君!大丈夫?!」

「みんな、どうしてここに?まさか……」

何故ここが分かったがなんとなく察し、ロゼッタを見る。

「いいえ、ハートが貴方の後についていて、私たちにこの場所を教えてください」

「ハート……」

「ごめん、勝手に後をつけて」

「ていうか、一人で勝手な事をしないでよね!言ったでしょ、私たちはチームだって!」

「ダイヤモンド、ごめん……」

とダイヤモンドが勝手に無茶しないでと晴夜を叱った。

一方、クローズとスタークの戦いが行われおり、クローズは連続で拳を繰り出す。

「俺があんたを許せないのは、トランプ王国の崩壊に関わって、ジコチューの奴らに手を貸していることだけじゃねえ！」

クローズは怒りの言葉を放ちながら、スタークへ攻撃を続ける。

「一番許せねえのは！あんたが！晴夜の想いを踏みにじったことだ！」

今まで晴夜を支えてくれた総一郎が裏切っていた事を耐えられず、その想いを伝えようとしますが、スタークは落ちたスチームガンを拾い、コブラボトルを差し込む。

『スチーム ブレイク！コブラ！』

スタークの攻撃を至近距離で受けてしまい、そのままクローズは飛ばされ、そのまま変身解除へと追い込まれてしまった。

「く……くそっ！」

「龍牙！はあああああ！」

「ソード！」

ソードとダイヤモンドがそのままスタークに飛び蹴りをしようとした。

『今度はお前らが相手か？』

スタークは二人の攻撃避け、更に二人は立て続けに攻撃をしたが、呆気なく躲かれ。そのままカウンターで、ダイヤモンドとソードをスチームブレードで吹き飛ばす。

「きゃあああああ！」

「ソード！ダイヤモンド！」

スタークは二人にスチームガンを構え発射したその時、ロゼッタが前に出て、ラブハートアローをラビーズにセットした。

「プリキュア！ロゼッタリフレクション！」

そしてロゼッタは巨大な四つ葉の盾で二人を守る。

『ほおう、なかなか硬い盾だな』

「みんな……！」

晴夜が立ち上がりとうとしたその時、スタークが語りだす。

『……なあ、不思議だと思わないか。』

何故お前がビルドになるのを身内である俺が止めなかったのか？

何故お前にスマッシュと戦わせたのか？』

急にスタークが話し出し、全員がそれを聞いていた。

『それは、お前にボトルを浄化させるためだ！』

「なんだと!？」

晴夜にボトルの浄化をしてもらうためにスマッシュと戦わせていたと告白すると、そのままスタークは話を続ける。

『俺の研究を完成させるには、フルボトルが必要だ。』

だが、あのトランプ王国の悲劇で多くのボトルが成分を失くした……そんな時、お前が仮面ライダーの力を手に入れた事を知り。お前にスマッシュと戦わせ、その成分を採取させて、ボトルを復活させる事にした』

「それって……」

このスタークの発言に、晴夜達は驚きを隠せなかった。

『そう……いつはボトルを浄化させる。そのためだけにいた存在なんだよ!』

するとスタークは晴夜の服を掴み、彼を嘲笑う様に衝撃の暴露を続ける。

『お前は正義のヒーローを演じていたにすぎない! 仮面ライダーごっこをしていただけなんだよ!』

そう言うのと彼の服を離し、投げ飛ばした。

『これで、わかっただろ! いかにも、お前が俺の手の平で踊らされていたのか!』

「……酷い……自分の計画のために、晴夜君を利用していたなんて! 許せない!」

晴夜達に今までやって来た事を全て明かしたスタークのカミングアウトに対して、ハートが声を震わせながら叫ぶ。

すると……

「最悪だ……」

倒れていた晴夜が呟くと、全員が倒れていた彼の方を向く。

「晴夜君……」

「ここまで、コケにされていたとは……」

今までスタークにいいように使われていた事を知り、そう呟きながら立ち上がる。

「……けどな、俺達が信じていたものは、幻なんかじゃない。

俺も龍牙も、ハートやソード、ダイヤモンドにロゼッタ。みんな誰かの力になりたくて戦ってきたんだ。

誰かを守るために、何度も立ち上がってきたんだ。

そして、必ず俺達はトランプ王国を取り戻してみせる！」

「晴夜……」

『できるのか？お前らに？』

「あんたがいなくても、俺には……俺達には守るものがある。

俺は、自分の信じる正義のために……あんたを倒す!!？」

そう言つて晴夜は炭酸飲料の缶のようなものを取り出した。

『む……？』

晴夜はその缶を数回振り、缶のプルタブを開ける。

すると、缶の口から泡が噴出され。そのまま上に掲げ、ドライバーに差し込む。

『ラビットタンクスパークリング！』

音声は鳴り響き、晴夜はドライバーのレバーを回す。

そして、前後からスナップライドビルダーが現れるが。いつものと違い、プラモの様なランナーではなく、フレーム部分がビルドマークの様な形をしたランナーが出現。発泡増強剤『ベストマツチリキッド』が流し込まれるとアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身!!?」

腕を広げ、構えるとアーマーが晴夜の体に装着され、アーマーから無数の泡が弾けながら、音声は響く。

『シユワツと弾ける! ラビツトタンクスパークリング! イエイ! イエイ!』

「ラビツトタンク?」

「でも、いつもと違う」

「ええ」

「あれが晴夜君言っていた。新アイテム……」

「すげえ」

確かにいつものラビツトタンクフォームとは違い、アーマーが炭酸の刺激をイメージしたかのようにギザギザになり、新たに白いカラーがトリコロールの様に足されている。

「勝利の法則は、決まった!」

そう言つてビルドが戦闘態勢に構えると、左足の『クイツクフロツセイレッグ』からエネルギーが溜まっている。だがそれだけじゃなく、左足から泡——『ラピッドバブル』が噴出され、そのまま飛ぶと一瞬でスタークの目の前まで飛びスタークに攻撃して、スタークに攻撃が当たるとまた泡が噴出され、スタークを吹き飛ばす。

『クツ……ハア!』

スタークは反撃するために蹴りやパンチをするが、ビルドはその全てを見切るようにスタークの攻撃を躲し、カウンターを与える。

「フツ!ハアアア!」

押され出したスタークはスチームブレードを持ち攻撃しようとするが、ビルドはスチームブレードの攻撃を躲しながら攻撃をする。すかさず更に攻撃しようとするが、ビルドの優勢に変わりはなく、再びカウンター攻撃をしてスタークを吹き飛ばし、思い切り柱に激突させた。

『やるじゃねえか。なら、これはどうだ!』

スタークは胸のコブラのマークを両手で隠し、そのまま両手を開けると、胸から二匹の巨大なコブラを出現させる。

「何ですか?あれは?」

「あれはコブラ!? 猛毒の蛇よ!」

「晴夜君! 危ない!!?」

二匹の巨大なコブラがビルドを囲み攻撃をしてくる。

ビルドはギリギリで躲しているが、二匹のコブラが遂にビルドを捕まえ、二匹がぐるぐる巻きにしようとする。

しかし…

「!!?」

「ハアア!」

四人は驚いていた。コブラに捕まっていたビルドから、また無数の泡が噴出され、二匹のコブラを振りほどいたからだ。

そのまま、ビルドは二匹のコブラの尾を掴み、何度も回した。

そのまま二匹を上放り投げ、上に向けて二度も蹴る。そのまま天井に穴が空きそこから、二匹のコブラが外に出ていった。

『マジかよ』

様子を見るために外に出たスターク。すると、ビルドが二匹のコブラを追う姿が見えた。

そして、ビルドはドライバーのレバーを回す。

二匹のコブラ周りから『デイメンションバブル』によってワームホールのような放物線が形成され、二匹のコブラはその中に吸い込まれ拘束される。

『Ready go!』

二匹を追うようにビルドもワームホールの中に入っていく、音声は鳴り響く。

『スパークリングファイニッシュ!』

「ハアアアアアアアアア!!?」

ビルドがそのままワームホールへ向かってキックを放つとワームホールの中にいたコブラは消滅され、ワームホールの出口から無数の泡が噴出される。

『何!ウツ!グワアアア!』

無数に噴出された泡がスタークを襲い。スタークは防ごうしたが吹き飛ばされ。そのまま倒れこむと、変身解除されて石動総一郎の姿に戻った。

「バカな!この、俺が!」

胸を抑えながら総一郎が呟くと、ビルドが総一郎の目の前で着地し、ビルドはスパークリングをドライバーから抜き、変身解除をした。

それと同時に、後ろから龍牙とマナ達もやってきた。

「たつた今、俺の中で石動総一郎は死んだ」

「晴夜君……」

そう晴夜が言い放つと、総一郎は立ち上がった。

「言ってくれるじゃねえか、そんなものを作っていたとは……」

さすが、天才科学者にして発明家、桐ヶ谷拓人の息子だ」

そして晴夜を褒めるかのような発言をする。

「晴夜、今回は俺に勝ったご褒美として、当分はボトルの回収は諦めてやる！それよりも

俺は、お前ら六人の成長が楽しみだ！」

「え？」

「どういう事だ？」

「じゃあな、お前ら！次にやる時までにもっと強くなっているよ！チャオ！」

「!!? 待って！」

そう言つて総一郎が高くジャンプして、晴夜達の前から去つていった。

そして、雨が止み。晴夜はマナ達の方を向いた。

「みんな、ごめん！迷惑かけて……」

と晴夜はみんなに頭を下げた。

「もう、頭を上げてよ。」

何度も言うけど、私達六人はチームよ！どんな困難も一緒に乗り越えよ！」

「そうですよ！」

「六花、ありす」

「つたく!心配させるんじゃないよ!」

そう言つて龍牙は拳を晴夜の胸に当てる。

「そうよ、少しは私達を頼りになさいよ!仲間でしょ!」

「龍牙、まこぴー」

「晴夜君!」

マナが晴夜に手を差し出した。

「叔父さんに、晴夜君は偽りじゃない、本物の正義のヒーローだつてことを証明しよう!」

晴夜は照れ臭いのか、髪をかきながら言う。

「マナ……ああ!今、最高にそう思っている!」

晴夜はマナと握手した。

——こうして晴夜の心に、また新たな誓いが出来た。

次回! Re. ドキドキ&サイエンス!

第13話 サプライズ! マナ、弟子を取ります

第2章 『ロイヤルクリスタル&レジーナ編』

第13話 唐突！マナ、弟子を取ります

清々しい平穏な日。学校の花壇の横を通過する1人の男子生徒が校舎の前に立ち止まって何かを決意すると、再び校舎へと向かって歩き出した。

その頃、校舎内では晴夜達が教室の隅で話をしていた。

「それにしても……この間は色々あったわね」

「まさか、アイちゃんに助けて貰うし、スタークの正体が晴夜君の叔父さんだったり……」

「でも、そのおかげでみんなさらに強くなったシャル！」

「だけど、喜んでばかりもいけない」

「ああ、早く王女様を探せねえとな」

「そうだね」

五人が話し合っていると「失礼します！」と、一人の男子生徒が勢いよく叫びドアを開けた。

「な、何?」

その男子生徒はマナの元へと向かってきた。それを見たシャルル達は急いで晴夜達の後ろへと隠れた。

「あ、相田先輩!」

「は、はい」

「僕を弟子にして下さい!」

男子生徒はなんと、土下座をしてマナに弟子入りしたいと頼みこんできた。

「で……」

「弟子?」

それから少し経って、マナはその男子生徒から弟子入りしたい理由を聞いた。

「えーつと……一年B組の早乙女純君だよね……」

あ、屋島さん、イス借りちゃってゴメンね」

「いえいえ」

マナは早乙女純にイスを貸してもらっているクラスメイトに断りを入れていた。

「あ、はい! この度は相田先輩に弟子入りしたく、お願いしました!」

「弟子って何ケル?」

「尊敬する人のそばについて、その人から色々な事を学ぶ人の事ビィ」

「またか……」

「また？」

六花のまたか、と言う声が聞こえ、晴夜はどう言うことなのか問いかける。

「またつて事は、前にもあったのか？」

「実はね、マナに憧れる子はたくさんいるから……実はこういう事は初めてじゃないの」
「へえー……」

「それで、どうして純君はあたしの弟子になろうと思ったの？」

「はい、それは昨日の事です……」

マナが質問したところ。純は昨日、大量の本を運ぶ時にフラフラで倒れそうになったがその時、偶然通りがかったマナが助けたらしく、その時のマナが眩しく見えたらしい。

「僕はその姿を見た先輩はとても力強く、頼もしく、まるで白馬の王子様の様でした」

「白馬関係無いし」

「そこは、突つ込まないでおこうよ……」

六花のツツコミに対し晴夜が純をフォローするように言うと、純は話を続けた。

「僕は、相田先輩のように、強く逞しい男になりたいのです！」

「マナ、男じゃないし」

「おい……」

とまた六花は突っ込んでしまった。

「お願いです! 僕を弟子にして下さい!」

そう言つて純はマナに頭を下げて、弟子入りを頼み込む。

「いいよ」

「いいんだ……!」

結構あつさりとマナは弟子入りを受け入れた。

「本当ですか?」

「うん。あたしに出来る事なら協力するよ」

「ありがとうございます!」

そう言つて純はマナに一礼した。それを見た六花はマナに呆れていた。

「はあく、また面倒な事を……」

「断らない。それがマナ……」

「マナらしいよ」

「早乙女純! 弟子として精一杯頑張ります!」

純は立ち上がつてマナに敬礼した。

こうして純は、マナの弟子となった。

それからしばらくして昼休みのチャイムがなると、食堂の方では人混みの嵐となっていた。

「いつぺんに言われても分からないよ、順番に並んで」

その為、食堂のおぼちゃんはかなり困っていた。

「はあ、遅れた、焼きそばパン買えそうにないな」

男子生徒が呟くと、「焼きそばパン欲しいの?」と近くにいたマナが男子生徒に聞き、最後尾から跳ねながら、食堂のおぼちゃんに注文する。

それに気づいたおぼちゃんは、手が離せないから手伝つてと、マナに頼み込む。

「わかりました!」

「えっ?あの、当初の目的とは違うような……」

マナは純の言葉を聞かず、人混みの中を潜り抜けおぼちゃんの元へと向かう。純も続いて行こうとしたが、人混みの中を潜り抜けず、彼女の元へと向かえずにいた。

一方マナの方は売店に到着し、おぼちゃんの手伝いを始めた。

「さあ、注文をどうぞ」

マナはみんなの注文を聞き分け、みんなにパンを配布していく。しばらく経つと、食堂のパンは全部なくなっていた。

「完売でーす!」

マナが完売だと言うと、最後の焼きそばパンを欲しがっていた男子生徒に渡す。

「やった〜! ありがとう会長!」

マナは嬉しそうに帰っていく男子生徒を「毎度ありー」と見送ると、食堂のおばちゃんはお礼を言う。

その様子を見ていた晴夜達だが、晴夜が「そういえばマナ、お前自分のパンはどうした?」と尋ねる。

「あ!」

「忘れてたのね。はあ〜…」

六花は自分のパンを忘れてしまったマナに呆れる。

「さすが先輩、自分の分を人に譲ってあげるなんて! なんて心が広いんだ……」

一方、マナの行動に感動してる純だが、本人はそうじゃないかったので苦笑する。

「みんな〜!」

マナは晴夜達に両手を合わせて昼飯のお願いをする。

「はいはい、あたし達のお弁当分けてあげるわ」

その後も、マナは階段から落ちて怪我した生徒を保健室に運び、保健室からの資料を

職員室を運んだり、学校内の喧嘩の仲裁をしたり、体育館の掃除、生徒会活動など。校内での活動が終わると、放課後の校外でも小学生の安全運動など、多くの人を助けていた。当然、純もマナの弟子なので付いていった。

そして、晴夜や六花達もその様子をずっと見ていた。

次にソリティアに着くと、アイちゃんのお世話をしていた。

「ただいま、アイちゃん」

マナがアイちゃんをあやしてあげている様子を、純は横で見ていた。

「赤ちゃんのお世話までしてるんですか？」

「うん！純君も抱っこしてみる？」

「え？はい！お手伝いします！」

マナは純の腕にアイちゃんを移した。

「結構重いですね」

「頑張ってるな彼……」

「そうね、大体の人はすぐに挫折しちゃうのに」

「そうなんだ」

純を見ていると突然、純がアイちゃんに頬を引っ張られていた。

「あいたたたたた……！」

「ダメだよアイちゃん!」

マナが駄目だと言うと、アイちゃんは頬を引つ張るのやめた。

純は「いえいえ、何のこれしき」と平気そうに言うが、今度は純の髪を引つ張る。

「アイちゃん……」

「六花、アレを使うケル」

「うん」

そう言うと、六花はラビーズをコミュニケーションにセットした。真ん中が点滅し始め、円を描くとガラガラが出てきた。

その後、純に変わって六花が、ガラガラを使ってアイちゃんをあやす。

「あ、純君疲れてるだろ? 座ったらどうだ?」

「え? そんな悪いですよ、先輩!」

「気にすんなよ、ほら、ここ譲ってやるよ!」

「あ、ありがとうございます」

晴夜は立ち上がり、そこに純が座ると疲れが一気に来たのか一息をつく。

「疲れてるみたいだな」

「マナの手伝いをすれば……」

「疲れている時は甘い物が一番です。どうぞ」

「ありがとうございます」

ありますがそう言うと、純は飴を一粒とる。

その様子をマナはジツと見ており、それに純が反応する。

「あ、あの……何ですか？」

「純君つて頑張り屋さんだね」

「え？あ、いえ。先輩に比べたらまだまだです。それにしても今日は大変でしたね」

「そうだね。でも、楽しいよ」

「楽しい？」

マナの言葉に純は首を傾げる。

「うん。だって、ありがとうございますって言ってもらえたり、喜んでもらえたりすると嬉しいじゃない」

「嬉しい……」

「うん！」

マナはそう言うが、純にはなぜそう思えるのかわからなかった。

その時、晴夜が語り掛ける。

「純君」

「はい？」

「俺もさ、誰かの役に立ってると心のそこで嬉しくなるんだ。そういうのが、いつも心の支えになってるんだ。それで人の笑顔を見ると、すげえ嬉しいんだ」

晴夜がそう語ると、純が考え込む。

(僕はただヘトヘトで、そんな余裕……)

それに桐ヶ谷先輩もそんな風になれるなんて……

僕は本当なれるのかな……先輩のように……

いや、頑張れば僕だって……!

「そんな頑張り屋さんの君にこれ。君の望みが叶うように、このお守りラビーズをあげよう」

突然現れたジョーが純にラビーズを付けてあげた。

「あ、ありがとうございます……」

そんな感じで一日が過ぎていった。

その頃、ジコチュークラブのボウリング場では……

「クソ、プリキュアにビルド、クローズ……」

全身に包帯を巻いたボールが現れた。

「随分、酷い姿だな〜！」

「黙れ！お前だつて包帯巻いているだろ!!？」

ベールの言う通り、総一郎もいくつか身体に包帯を巻いていた。この前のビルドの戦いでかなりのダメージを受けていたのだ。

「しかし、お前らビーストモードになるわ、ビルドにコテンパンにされるわ」

「随分本気出しちゃつて」

イーラとマーモはベールと総一郎を嘲笑うような言い方をする。

すると、ベールが「もう後がないんだ。それはお前達も同じだろ」と口を開き、それを聞いたイーラ達が黙り込む。

「今まではちよつと遊んでやっただけさ」

「そうよ、パツクで忙しいのよ」

何やら言い訳がましい開き直りのような発言をすると、総一郎が二人に忠告する。

「キングジコチュー様は大変お怒りのご様子だぞ。このままだと、お前らもただでは済まないかもな〜」

「いいさ。だつたら……本気でやってやろうじゃん！」

イーラがそう言つて立ち上がり、ボウリングの球を掴んで振り上げた。

結果はガターで、後ろにいたマーモが軽く笑つていた。

苛立ってイーラは今度は大量の球を振り上げ、ピンを全て倒す。

「ズル〜い」

「要は倒せばそれでいいんだろ。やってやるさ……プリキュアに仮面ライダー……絶対に倒す!」

そして、翌日。今日も純はマナの弟子として付いていた。

今日は学校の図書館で本を探すのを手伝っていた。ある程度の数を取ると、大量の本を机に置き始める。

「これ、全部読むんですか?」

純が本を積み上げながら尋ねる。

「うん。相談された事の参考になりそうだから一通りね」

「流石先輩!」

その後、純はメモに書いてあった本を見つけ、背伸びして取ろうとするも中々取れなかった為、マナが後ろからその本を取った。

「上の本は、あたしが取るよ」

「すみません……」

純は申し訳なく感じていた。その様子を晴夜達は見ていた。

「よく続くわね」

「あの子、努力家だわ」

「でも、あいつ元気が無いみたいだな」

「はあ……」

本棚を見上げた純が腰をおろし、ため息をつくその姿を見た晴夜は、彼の気持ちを察した。

そして、放課後になると。今度はテニスコートで、ジャージ姿のManaが対戦相手に強烈なサーブを放つ。

「だあーっ!」

強烈なManaのサーブに、テニス部の部員は反応出来なかった。

「凄い……今度の試合の相手のサーブにそっくり……!」

「こんな感じー?」

「はい!お願いします!」

それを見ていた純は、Manaの凄さを改めて感じた。自分には今のManaのような事はとて出来ないと思っていた。

その後、マナは道具を片付けて、鞆を持ちテニスコートを出ようとした。

「じゃあ、試合頑張つてね」

「あ、持ちますよ!」

「え?でも……」

純はマナの鞆を代わりに持とうとした。

しかし、マナの鞆は以外に重く、小柄な純には持ち上げる事が出来なかった。

「今日は重いから、自分で持つよ」

そう言つてマナは軽々と鞆を持ち上げ、先に歩いていった。

その姿を見た純は、自分とマナの差を日に日に感じていた。

その帰り道。純はマナ達五人の後ろを歩いていた。

「あります」

「皆さん、ごきげんよう」

五人の前に、リムジンから降りたあたりすがいた。ありすは後ろに歩いていた純に気が付き、軽く一礼して笑顔を作る。それに気付いた純も一礼した。

「今日もマナちゃんのお手伝いですか?」

「はい」

「それはお疲れ様です」

——お疲れ様。これを聞いた時、自分はマナの近くにいつでも自分は何もしていないのではないかと感じていた。

すると、強い風が吹き、近くで遊んでいた女の子の帽子が飛んでいった。

「任せろ！」

晴夜は飛んだ帽子を追いかけ始め、純も帽子を追いかける。

だが、晴夜の方が足は速く、純は息を切らしていた。

次の瞬間、純は足を引っ掛けて転んでしまった。それと同時に晴夜は飛ばされた帽子を掴む、そしてそのまま掴んだ帽子を女の子に渡した。

「はい、もう飛ばすなよ」

「ありがとう！お兄ちゃん！」

女の子は笑顔で晴夜にお礼を言つて、友達の前へと戻つていった。

「ナイスキャッチ！晴夜君」

マナは親指を立てて晴夜に言つと、晴夜も親指を立てて返す。

……しかし、その姿を見た純は晴夜にも差があるのだと感じていた。

（僕は……背も低くて、足も遅くて、力も無くて……）

どんなに努力しても……僕は先輩達みたくにはなれない……

強く……大きくなりたい……!先輩達よりも……)

純が心の中で呟くと、彼の心のプシケケが黒く染まりだす。

(なれるわけないか……)

しかし、そう呟くと心のプシケケは染まらなくなった。

「なつちやえばいいじゃん」

「え?」

突然、純の耳元で囁くイーラ。

「お前の望み、叶えてやるよ」

イーラは指を鳴らすと同時にプシケケが真っ黒に染まり、純の心から取り出される。

「純君!?」

「大丈夫か!?」

マナと晴夜は倒れた純の元に向かう。

「さて、たまには気合入れなきやな……」

「お前の闇を我に捧げよ!」

イーラはプシケケに闇を加えて圧縮し、自らの口にプシケケ放り込んだ。

イーラがゾウのジコチューと一体化し、ビーストモードとなった。

「何だ？どうした？」

「マナ達はビーストモードとなったイーラの姿にまじまじと見ていた。」

「あれは……ゾウか？」

「ゾウね」

「ゾウですわ」

「ああ、黄色いゾウだな」

「か、カワイイ……」

「ゾウさんカワイイランス」

「……カワイくねえよ！」

真琴とランスはイーラのビーストモードとなった姿に見惚れていた。

イーラの今の自分の姿がカワイイと言われているのを必死で否定する。

「みんな行くよ！」

晴夜と龍牙はドライバーを装着し、ボトルを取り出した二人はドライバーに差し込んだ。マナ達四人はコミュニケーションになったシャルル達にラビーズをセットした

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

『ウエイクアップ！クローズドラゴン！』

音声が届り終わると二人はレバーを回し、ドライバーからアーマーが形成されると音

声が響く。

『Are you ready?』

「変身!」

「プリキュア! ラブリンク!」

晴夜と龍牙の体にアーマーが装着され、変身を完了させ。マナ達四人は光が体を包み、プリキュアへと姿が変わった。

『ラビットタンク! イエイ!』

Wake up burning! Get CROSS—Z DRAGON! Yeah!

「みなぎる愛! キュアハート!」

「英知の光! キュアダイヤモンド!」

「陽だまりポカポカ! キュアロゼッタ!」

「勇気の刃! キュアソード!」

「響け! 愛の鼓動! ドキドキプリキュア!」

「愛を無くしいた悲しいゾウさん! このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻してみせる!」

ハートは胸にハートマークを作り、ビーストモードのイーラに言う。

「ドキドキなんて、いらねえよ！」

鼻を振りかぶり、攻撃しようとしたが、ロゼッタが防ぐ。

「はあああ!!?」

「オラア!!?」

攻撃を防いでいる隙にクローズとソードが繰り出す、かわされて蹴飛ばされる。

「グワア!!?」

ダイヤモンドがさかさず攻撃しようとしたが、イーラはロゼッタを鼻で拘束し、盾にして攻撃を防ぐ。そして鼻を振り下ろしてダイヤモンドとロゼッタを吹き飛ばす。

後ろからハートが攻撃するも、反撃を受けて吹き飛ばされてしまった。

「ウワア！」

「ハート！」

「ならば久しぶりにこいつだ！」

ビルドは2本のボトルを取り出し、ドライバーのボトルと取り替えた。

『ゴリラ！ダイヤモンド！ベストマッチ！』

レバーを回すと、アーマーが形成された。

『Are you ready?』

「ビルドアップ！」

新たに二つのアーマーが装着された。

『ゴリラモンド! イエーイ!』

ゴリラモンドとなったビルドはイーラビーストの反撃を始める。

「がっ……………」

ビルドの攻撃が命中し、イーラビーストは態勢を崩した。

「このく、お前も邪魔だ!」

イーラが叫んでから再び鼻を振りかぶる。

「ぐ……………」

イーラの攻撃をゴリラの腕でガードするが、後ずさつてしまう。

「強い……………」

「確かにゾウはかなりのパワーがあるからな」

「カワイイのに……………」

「カワイイって言うな!」

「その姿で言われてもな……………」

イーラはダイヤモンドの言葉を否定するが、説得力はないに等しい。

「言つとくけど、今日の僕は本気だぜ」

イーラが本気だと言うとハートが立ち上がる。

「当たり前でしょ！純君を助けなきゃ！」

「助けるも何も、僕はコイツの望みを叶えてやってるだけさ。なあ？」

イーラはこれは純の望みだと語ると、純の心の声がハート達に聞こえた。

『強くなりたい……大きく、逞しく……！』

「ほらな。これがコイツの望みなのさ」

「違う！こんなやり方、純君の望みじゃない！」

ハートはこれは純の望みじゃないと否定するが…

『でも僕は……先輩みたいにはなれないんだあああー！』

純の心がそう言うと同時にプシケケが赤く染まりだすと、鼻から水の弾が放ち、ハートを吹き飛ばす。そのまま後ろにいたソードにも水の弾を放つ。

「あなた、Manaの何を見てたの！強ければManaみたいになれるの！？……そうじゃないでしょ！」

手刀で水の弾を切り裂いたソードが叫ぶと、イーラビーストはソードを殴り飛ばす。

その隙にダイヤモンドの回し蹴りをしたが、イーラビーストも回し蹴りで受け止める。

「Manaだって、最初からなんでもできたわけじゃない！」

誰かの力になりたくて、頑張り続けたから、今のManaがあるのよ」

そう教えるダイヤモンドだが、イーラとの力勝負に負けて、蹴り飛ばされる。

イーラは今度はハートに向かって再び水の弾を発射した。するとロゼッタがハートの前に立った。

「出来る出来ないでは無く、大切なのは誰かの為に何かをしたいマナちゃんの心! 強さとは、その事です!」

ロゼッタウォールで防ぎながらロゼッタが叫ぶと、次にクローズがイーラの前に現れ、力強い拳で攻撃しようとした。それに対しイーラも拳で応戦した。

「マナの事、俺はまだ会ったばかりでわからない所はあるけど、誰かの為に一所懸命なれるから、マナは強いだと俺は知った!」

クローズが叫びながら、イーラに力勝負に勝った。

そして、ダイヤモンド達の思いを聞いたハートは…

「みんな褒め過ぎ……」

「「「えっ?」」」

「あたしだってしよっちゆう失敗したり、落ち込んだりしてる」

と立ち上がり、ハートはジャンプしイーラに攻撃した。

「純君と同じだよ」

ハートが放った一撃をイーラは鼻で防ぐ。

「無駄さ。聞こえや——」

『海賊！電車！ベストマッチ！』

『Are you ready?』

「あん？」

どこからか鳴り響く音声にイーラは戸惑い出すと、再び音声が鳴り響く。

「ハート離れろ！」

『海賊電車！発車！』

「どわっ！」

ビルドに言われ、ハートはイーラビーストから離れると、イーラビーストは後ろから攻撃を受け、前から倒れた。

ハートが攻撃した方をみると、海賊レッシャーフォームへと変わったビルドによるカイゾクハツシャーから発射された攻撃だった。

「純君……最初から完璧な人間なんてそうはいない、時には失敗したりする！」

それに人の真似をしても、その人にはなれない！

それは、その人じゃないからだ！」

「うるっせえんだよ！」

ビルドが説教するとイーラは怒り出し、ビルドに向かって連続で水の弾を放ち吹き飛

ばす。

「ぐうつ!」

「晴夜君!」

「他人に気を取られている場合か!」

イーラは鼻を振りかぶり、ハートも吹き飛ばす。

「トドメだ!」

イーラビーストの放った一撃がハートに命中したかに思えた。

——だがその一撃は、ギリギリの所で免れていた。

「は、外れた!?」

「何で?」

「ええい!」

今度は踏み潰そうとするが、寸前で止まった。

それから攻撃しようとしたが、イーラの足は動かなかつた。すると、純の心のプシユ

ケーが白くなっていた。

「プシユケーが!」

「そうか! 純君の心が抵抗してるんだ!」

「なるほどそういう事か……」

(純君、どうやら君の心に届いたようだな)

「ほら、やっぱり。あたしみたいにならなくても、純君はとっても素敵だよ」

ハートが感心していると、イーラは白くなった純のプシケを強引に再び黒く染める。

そして、今度こそ踏み潰そうとするが、ハート達四人に抑えられる。

「いつも頑張ってる純君にあたし……キョンキョンした！だから！君のハートは渡せない！」

ハートが足を抑えながら言うと、ハートはソード達三人の顔を見て首を縦に振る。

「純君を……返せーっ！」

四人はそのままイーラビーストを投げ飛ばした。

イーラが立ち上がるとすると目の前にビルドが立っていた。

「さて、覚悟はいいかな？」

ビルドがそう言うと、ラビットタンクスパークリングを取り出し、ドライバーに差し込んだ。

『ラビットタンクスパークリング！』

ドライバーのレバーを回すと、前後からアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

二つのアーマーが装着されるとビルドの周囲から無数の泡が噴出され、音声で鳴り響く。

『シユワツと弾ける! ラビットタンクスパークリング! イエイ! イエイ!』

ビルドの新フォーム、ラビットタンクスパークリングが装着された。

「勝利の法則は、決まった!」

「これは……!」

「ハアツ!」

ビルドが決めた台詞を言うと、そのままイーラビーストに攻撃し、イーラを吹き飛ばす。

「クソ……こいつがスタークが言っていた、ビルドの新たな力か……」

「よそ見している場合かよ!」

後ろから現れたクローズがビートクローザーを構え、ビートクローザーにロックボルトを差し込む。

『スペシャルチューン!』

ボルトを差し込むと、クローザーのグリップを2回引く張った。

『ヒツパーレ! ヒツパーレ! ミリオンスラッシュ!』

ビートクローザーから出たエネルギーがイーラビーストを捉えて拘束した。

「今だ！」

「わかったわ！」

「「ラブハートアロー！」」

四人が叫ぶとラブハートアローが現れた。

ソードはラビーズをセットした。

「プリキュア！スパークルソード！」

クローズが動きを封じているうちにソードがスパークルソードを放つ。

水の中に封じ込めるとクローズは拘束を解除した。

「バカが！動けるようになればこっちのモンだ！」

今度は上にロゼッタが現れ、それに気づいたイーラビーストが水の弾を放つ瞬間、口

ゼッタはラビーズをセットした。

「プリキュアロゼッタ！リフレクション！」

ロゼッタリフレクションを発動されて、水の弾を防ぎ、水の中に閉じ込める。その隙

にダイヤモンドがラビーズをセットした。

「プリキュア！ダイヤモンドシャワー！」

ダイヤモンドがダイヤモンドシャワーを放ち、イーラビーストを水ごと凍らせる。

「何だよコレ！クソ！抜けねえ！」

「ハート! ビルド! トドメよ!」

「ああ!」

「わかった!」

二人にそう言うと、ビルドはドライバーのレバーを回し、ハートはラビーズをセットした。

「行くぞ!」

「うん!」

ビルドがハートに言うと、高くジャンプした。

『Ready go!』

『スパークリングフィニッシュ!』

『プリキュア! ハートシュート!』

「強くなりたいてって言う純君の思い、まっすぐな願い、それは決して、ジコチューなんかじゃない!」

ハートの放ったハートシュートとビルドのスパークリングフィニッシュがイーラに命中し、そのままジコチューは消滅し、プシケューは純の元へと戻った。

「キュアハートめ……ビルドめ!」

負けたイーラはそのまま撤退した。

それからしばらくして、目を覚ました純はマナに膝枕されていたことに驚き、慌てて立ち上がった。

「あれ？僕は何を……」

「ちよつと昼寝してただけだよ」

「え？」

「？　どうかした？」

「いえ……」

それから数日、純はマナの前に現れなくなった。

「最近来なくなつたなあいつ」

「純君、どうしたのかな？」

「ん？」

「どうした？」

マナが急に立ち止まると、目の前によく手入れされた綺麗な花壇があつた。

「気に入ってもらえました？」

「純君！」

花壇の後ろからエプロンを着ていた純が現れた。

「この花壇、もしかして純君が?」

「ええ」

「すごいな、お前!」

純は、自分にはやはりマナみたいに強くはなれなかった、と語る。

でも、自分の植えた花を誰かが見て、笑顔になったり、元気なっってほしいと思い、花壇に花を植えた、とマナ達に伝えた。

その後、純はマナに弟子になりたいと言った事を謝罪した。

「ううん、スゴイよ純君! こんな花壇作れるなんて! あたし、感動した!」

マナがそう言うのと純が照れくさい様子で微笑んだのだった。

その後、純は晴夜の方を見た。

「桐ヶ谷先輩! 先輩が言っていた。人の笑顔を見ると嬉しい気持ちなるって、今ならわかる気がします!」

「そっか……最高な気持ちになれるだろ!」

「はい!」

(純君が笑顔になって、よかった)

マナは純の笑っている今の姿を嬉しく思っていた。

「ふうーん、あれがプリキュアか」

…そして校舎の上で、謎の少女がマナ達を見て、そう呟いたのだった。

次回！Re・ドキドキ&サイエンス！

第14話 ロイヤルな発見!!？ 王女の手がかり

第14話 ロイヤルな発見!? 王女の手がかり

「ここ四葉邸での一つの部屋では、ありすと多くの執事と会議が行われていた。

「それについてはこれまで通りということでお願います」

ありますがそう言うところから右側の男性が「かしこまりました」と頭を下げる。

その後も、執事達からありますに四葉財閥の話し合いが行われた。

それからしばらくして、会議が終わるとありますを一人残して執事達は部屋を後にした。

「はあく……」

執事達全員がいなくなると、ありますが溜め息をつくどドアを叩く音が聞こえた。

彼女はノック音に返事すると、ドアからセバスチャンが現れて、マナ達が来たと知らせた。

それを聞いたありますは嬉しそうな顔になった。

その後、四葉邸の庭でお茶会をするマナ達。

「アイちゃん、お元気でしたか？」

ありすが尋ねるとアイちゃんは笑顔を見せた。しかし、真琴と龍牙の表情は冴えなかった。

「まこぴー、龍牙君どうしたの?」

「王女様の事が気になって……」

確かに、早く王女様を見つけないといけなないと全員が感じていた。

「どんな小さな事でもいいから、何か手がかりがあればいいんだけど……」

「そうだな、手がかりが無ければ、動くことも出来ないしな」

手がかりが無いかと真琴が考えながら右に向くと、彼女の目にバラが映った。

「バラ……そういえば、王女様はバラが、好きだったわ」

「「バラ?」」

「バラって言っても、種類も多くあるぞ」

みんながバラと言うと、セバスチャンはあるチラシを晴夜達に見せた。

「ローズレディコンテスト?」

「黄色いバラって言うのも、珍しいな」

セバスチャンが見せたチラシにはローズレディコンテストについて書かれており、その中には黄色いバラが写ってあった。

「バラを愛する最高のレディを決めるコンテストでして、優勝者には先日発見された新

種のバラ、ロイヤルイエローが贈られるそうです」

王女様はバラが好き、これは手がかりではないかと晴夜は思った。

一方で、龍牙と真琴はロイヤルイエローと言われているバラを見て、それが見覚えのあるものだと気づいた。

「でもよ、真琴。これって、王家の庭にしか咲かないバラで、こつちの世界には無いハズだぜ……」

「そういえば……」

「ミステリーシヤル……!」

「じゃあ、そのコンテストに参加して、ロイヤルイエローを手に入れましょう」

「「「ええっ!?」」」

「確かに、優勝して手に入れるしか方法は無いしな。俺と龍牙は男だから出れないけどな」

数少ない王女様の手がかりを見つけ、それを手にするためにマナ達はローズレディコンテストに参加することを決めた。

そしてコンテスト当日となり、会場の五星ローズガーデンへとやって来た。

「ここがコンテストが行われるバラ園か」

「綺麗ね！」

「これだけのバラがあるんだ、ここに王女様が居るかもしれねえ！」

「いくら何でもそれは無いんじゃないか」

「誰？アタシを呼んだのは」

全員が声のした方を見ると、金髪で赤いリボンをし、黒を基調にした服を着た青い目の少女がそこにいた。

「アタシ、王女様のように綺麗だから、来てあげたんだけど」

少女がそう言うと、マナが抱いていたアイちゃんに目が映る。

「なあ、もしかしてこの子が王女様か？」

晴夜が小声で龍牙と真琴に聞く。

「さあ、でも一応聞いてみようぜ」

「そうね……」

龍牙が言うのと、真琴が頷き少女に聞いてみた。

「あなた、バラが好きなの？」

「バラ、嫌いだよ！アタシより美しいものはすべて」

真琴が薔薇が好きなのかどうか少女に聞くと、バラは嫌いと言って指を鳴らすと同時に、少女の横にあったバラが全て枯れてしまった。

「ど、どう?」

「違うみたい……」

「だな……」

彼女が王女様じゃないと晴夜が聞くと、彼女からは何か違う気配を感じ始め、警戒する晴夜は後ろにボトルを準備していた。

「あ!それカワイイ!」

急に少女はマナの頭のキュアラビーズを指差す。

「貰ってあげる」

「え?ええっ!??ゴメンなさい、これはちよつと……」

「それじゃあ、交換しない?」

マナがラビーズは渡せないと断ると、少女は交換しないかと提案してきた。

「この世界の平和と」

この事を聞いたマナ達が驚く。

「冗談よ。じゃあもう行くね。お見送りは結構よ」

そう言い、少女は去っていった。

「何だあの子……?」

そしてしばらくして、コンテストが始まろうとしていた。

『さあお待ちせしました! ローズレディコンテスト最初のステージ、ソーシャルダンスです!』

「そ、ソーシャルダンス?」

「ソーシャルダンスって何だ?」

「それはあれ……まあ見ればわかるだろ」

「わかんねえのかよ!」

晴夜が誤魔化したことに龍牙が呆れると、「おーほっほっほ!」と高笑いが後ろから聞こえてきた。

「場違いなお猿さんが迷い込んでると思ったら、ありすのお友達でしたの?」

すると晴夜達の後ろからロールヘアーの金髪少女が現れた。

「お、お猿さん?」

「俺たちのことか?」

「麗奈さんたら、お猿さんは酷すぎますわ」

「そう?じゃあお猿様どうかしら?」

「流石麗奈様、ピッタリですわ」

麗奈達の発言にマナと六花、晴夜は意図を察した。何も知らない龍牙と真琴は理由を三人に聞く。

「どうしたの?」

「ありすは友達が悪口を言われると、我を忘れて怒っちゃうのよ。まだ小学生の時、マナをいじめた中学生をやつつけちやった事があるの」

「一人でか?」

「ええ」

「マジかよ……」

龍牙と真琴が事情を知ると、ありすが麗奈達の方へと歩き出し、全員が心配になった。「麗奈さんたら、相変わらず冗談がお上手ですね」

晴夜達はありすが怒る所か落ち着いている事に安心した。ありすは麗奈についてみんなに紹介した。

「こちら、このバラ園の持ち主で、幼馴染の五星麗奈ちゃんです」

「幼馴染と言うより、ライバルかしら。四葉財閥より一つの数字が多い、五星財閥の一輪挿しのバラ、五星麗奈よ」

第一印象としては麗奈は目立ちたがり屋だと感じた。

「どうやらこの子もコンテストに参加するようで、麗奈もありすも参加するのだと聞いてきた様だ。」

「はい。この四人で」

「そこのお二方は？」

麗奈は晴夜と龍牙の方を指した。

「えつくと、僕らはありません達の応援来たので」

「そうですか。ん？あなた劍崎真琴では？」

「そうだけど」

麗奈は真琴がありす達と一緒にいると知ると、真琴の参加は卑怯だと言い出し、後ろにいた少女達も卑怯だと言い出した。

だが、麗奈の狙いは悪口を言ってありすを怒らせ事。しかし、ありすは怒る所か冷静に答えた。

「お待ちください。これは最高のレディを決めるコンテスト。アイドルだろと関係ないと思いますわ」

「「そうだよ！」」

「それに、アイドルは参加禁止だなんて誰も一言も言ってねえぞ！」

「まあ、そんなルールないからな」

「そうですわ」

麗奈は返す言葉も無くなり、ありす達を叩き潰すと宣言して、ありす達の前から去っていく。

「龍牙」

「何だよ」

「あの四人、またなんかやるかもしれない。俺たち二人で注意しとくか」

「わかった」

晴夜と龍牙で麗奈たちを見張ることにした。

「麗奈様、ありすも参加するとなると、かなり強敵になるかと」

「大丈夫。あの子は友達の悪口を言われたり危険な目に遭ったりすると怒ってキレちゃうの」

どうやら麗奈はありすをワザと怒らせて失格にさせるのが狙いみたいだ。

そして、コンテスト最初のステージ、ソシアルダンスが始まった。

ありす以外の三人もうまく踊っていた。

「みんな上手いな!」

「ああ!初めてとは思えないな!」

だが、麗奈は三人がうまく踊れているのに苛立ち出した。
「どうなってるの?」

取り巻きの子が麗奈に近づき、三人の誰かのヒールにヒビを入れておいたと麗奈に伝える。

すると、彼女の言う通りマナのヒールのかかどが折れ、尻餅をついてしまった。

「あいつた〜」

「マナちゃん!」

「何で?まさか……!」

「おーっほっほっほはっ!ブザマね。ブザマなお猿さんね」

麗奈の発言に晴夜達はこれは意図的なものと察した。

「(そっか、ありすを怒らせるためにわざとやったのね!)大丈夫。こうすればほら」

マナが立ち上がってそう言うのと、もう片方のヒールのかかどを折った。

「もつとダンスがしやすくなったわ。さっ、ダンス再開よ」

「マナちゃん……」

その様子を見た麗奈は舌打ちをする。

次のステージは絵画、マナ達はガーデンのバラをメイン絵画を書き始める。

「あの麗奈って子、ありすを怒らせてコンテストを失格させようとしてたのね!」

「きつとまた、何か仕掛けてくる来るはずだよ」

「皆さん、描けました?」

自分のを書き終えたありすがマナ達の元に来た。

すると、後ろから麗奈の取り巻きの子が一人で、走りながらマナ達の絵画に絵の具を撒き散らした。

「ごめんあそばせ。手が滑りましたわ」

「これではどうする事は出来ませんわね」

そう言うってから麗奈達は高笑いを始めた。

「あなた達、いい加減に——!」

六花が麗奈達に怒ろとした時、

「おかげでいい絵になりましたわ」

ありすがそう言うってみんなに自分の絵を見せると、先よりも綺麗な絵になっていた。

「すごい!」

「私達にも教えて!」

(次こそは……!)

そして次のステージではピアノ演奏が始まる。

「ピアノカー」

「これなら自信あるかも」

どうやらトップバッターは六花のようだ。

「六花、頑張れ！」

「頑張るケル！」

「任せてといて！」

そのまま六花はピアノの大屋根を持ち上げると、なんとその中で子猫が眠っていた。何でこんな所に子猫がいるのよ……！」

しかも猫は気持ち良さそうに寝ていたので、起こすのがかわいそうだと感じていた。

「あらあら、犬猿の仲つて言いますけども、お猿さんも猫も嫌いなようね」

猫がいるからピアノが弾けないわかっていて、また麗奈は高笑いをし始める。

「ありますが怒んなくても、こつちが我慢出来ないよ！」

「ええ！」

マナと真琴が我慢出来なくなったその時、ピアノを弾く音が聞こえた。

そのピアノを弾いていたのは、ありすだった。

「なんて優しい音色……」

「イライラが癒されて行く……」

「それだけじゃない、猫を起こさないように、猫の部分だけ避けて弾いている」

「凄すぎるよありす!」

「スゲエ才能だぜ!ありす!」

「お嬢様をあなどっては困りますな」

ありすの凄さに麗奈はかなり悔しがっていた。

そして、いいよ最終選考の発表まで進んでいた。

『さあ!これより最終選考に残った二人を発表します!まずは、五星麗奈さん!』

「当然」

『そしてもう一人、四葉ありすさん!』

「「やったあ!」」

「よっしゃあー!」

「いいぞ!ありす!」

マナ達や晴夜達だけではなく、シャルル達もアイちゃんも喜んでいた。

というわけで決勝は、ありすと麗奈の勝負となった。

『最終ステージはテニスです!今年のローズレディの座は、このゲームの勝者に送られ

ます！』

最後のステージのテニスが今、始まろうとしていた。

「ありすく、頑張るランス〜！」

「『頑張つてー！』『』」

「はいー！」

そして試合が始まった。

試合はお互い、ほぼ互角と言っている程の勝負が繰り広げられたため、試合は中々勝負が決まらず、最後のセットに持ち込まれた。

しかし、次のポイントを取ればありすの勝利だ。

「ありす！あと少しだよ。ん？」

サーブを打とうとしたありすの顔へ急に光が入り、ミスしそうになった。

「今、ありすの目に光が！」

「ああ、間違いなく何か光った！」

「行ってみよう！」

五人はすぐに光が指した方向に向かった。その光の正体は、取り巻きの一人がコンパクトを使って彼女に当てていたものだった。

「いたー！」

「反則だぞー！」

五人は光を当ててた取り巻きの子を見つけた。

「来たわね」

そう言うのと五人は驚くと、後ろの出っ張りから別の取り巻きの子が二人現れ、五人に泥水をかけた。

「あー！」

「無様、無様、無様！お猿さん達が泥だらけよ？」

ここまでやれば、さすがのありすも怒るだろと麗奈は心中で盛り上がる。

だがそれでも、ありすは怒らなかつた。

「!?……何で怒らないのよー！」

「友達を、守るためです！」

「その友達が酷い目に遭っているのよ！怒りなさいよ！」

「不思議な事に、怒りが何故か湧いて来ないのです！」

「だから、何で！」

「分かりません。でも、私が変われたのなら、それは、マナちゃんや晴夜さん達のおかげです！」

「「「ありす……」」」

ありすのその言葉を聞いた晴夜達は、自身の心に響くのを感じた。

「あんな連中の、どこがいいのよ！」

「私には……最高に輝く宝物です！」

ありすの放ったスマッシュが決まり、遂に勝負がついた。

『やりました！優勝は四葉ありすさんです！』

ありすはローズブレディコンテストの王冠を掴み取った。

「「やったあ！」」

「よっしやあー!!?」

「ありす……最高だなー！」

「お見事です」

マナ達もありすの優勝にみんなは喜び、シャルル達やアイちゃんも大喜びしていた。

「使えない子達ね、消えておしまい！」

「「失礼しまーす！」」

麗奈に怒られた取り巻きの子達は走り去っていった。

「フーン！ありすが私に勝てたのは実力じゃないわ！友達のおかげよ！友達なんて……いなくなればいいのよ！」

麗奈が呟くとプシユケーが黒く染まり出す。

「——でも、本当は私も友達が欲しい……」

しかし、麗奈がそう眩きプシケケーが黒く染まらなくなると……

「いいんじゃない？友達がいなくなれば」

「!?」

麗奈の耳元からマーモが囁く。

「あなたの望み、叶えてあげよう」

突如彼女の前に現れたマーモが指を鳴らすと同時にプシケケーが真っ黒に染まり、取り出される。

「お前の闇を我に捧げよ！」

マーモはプシケケーに闇を更に加えて圧縮し、自らの口にプシケケーを放り込んだ。そしてバラと一体化し、ビーストモードとなった。

「マーモビーストの誕生よ」

マーモがビーストモードになったのを見ると晴夜と龍牙はドライバーを出し、マナ達はコミュニケーションとなったシャルル達を持って構える。

「みんな、行くよ！」

「「うん！」」

「「ああ！」」

二人はドライバーを腰に装着し、ボトルを取り出した。マナ達はラビーズをコミュニケーションにセツトした。

『タカ！ガトリング！ベストマッチ！』

『ウエイクアップ！クローズドラゴン！』

『Are you ready?』

「変身!!?」

「プリキュア！ラブリンク！」

晴夜と龍牙の体に形成されたアーマーが装着され、マナ達は光に包まれプリキュアへと姿が変わった。

『ホークガトリング！イエーイ！』

『Wake up burning! Get up CROSS—Z DRAGON!!』

Yeah!』

「みなぎる愛！キュアハート！」

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

「陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

「勇気の刃！キュアソード！」

「響け！愛の鼓動！ドキドキプリキュア！」

「愛を無くした悲しいバラさん! このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻して見せる!」

「ドキドキなんかいらないわよ!」

ハートが決め台詞を言うとマーモビーストがツタを使って攻撃して来て、それに対してビルド達は跳躍してかわす。

だが、ロゼッタ以外がツタにより拘束されてしまった。

「しまった!」

「くそ!」

「バラバラ作戦成功ね」

ハートやビルド達が動けなくなれば、マーモはバリアしか使えないロゼッタは怖くないと思っていたが…

「はあああああつ!」

ロゼッタの放った一撃が、マーモビーストに内からダメージを与えた。

「ちよ、ちよつと、話違くない!?」

「私は、あの日に誓ったのです! プリキュアの力は、大切な人を、仲間を守るために使う!」

「フン! 何が仲間よ! そんなものが必要無いのよ!」

「いえ、必要です！私は、マナちゃん達と出会うまで、友達がいませんでした」

ロゼッタはマーモのツタの攻撃をかわしながら友達の事を話す。ロゼッタもずっと友達が欲しかった。その思いが募って、悪口を言われると、怒りで我を忘れてしまっていた。

「何をゴチャゴチャと！」

「でも、マナちゃん達とプリキュアをやるようになって、色々な事を一緒に経験するようになって、私達の絆は強くなりました……」

そして、より強い信頼で結ばれたからこそ、他の人の言葉に心を動かされる事が無くなったのです！」

「「ありす……」」

だが、遂にロゼッタも拘束されてしまった。しかし……

「真の絆を持つことが出来た今、私にためらいはありません。

……私は、友達を守るために、正しき力を全力で使います！」

ロゼッタがそう言うのとツタを打ち破った。

「ラブハートアロー！」

ロゼッタが上に掲げるとラブハートアローが現れ、ラビーズをセットした。

「プリキュア！ロゼッタリフレクション！」

そしてロゼッタはロゼッタリフレクションを展開した。

「フン、バリアで何が出来ると言うのさ『えいっ!』へぶっ!!!?」

ロゼッタリフレクションをマーモに向けて放たれ、マーモの顔面に命中した。

同時に、ハートとビルド達の拘束も解けた。

「ありがとうロゼッタ!」

「さあ、こつちもこれで決めてやる」

ビルドがラビットタンクスパークリングを取り出し、ドライバーに差し込んだ。

『ラビットタンクスパークリング!』

『Are you ready?』

「ビルドアツプ!」

『シユワツと弾ける!ラビットタンクスパークリング!イエー!イエー!』

ビルドはラビットタンクスパークリングへとフォームチェンジした。

「それが、スタークとイーラを倒した姿ね、だったら、アンタから倒してやるわ!」

マーモがツタでビルドに襲い掛かると、ビルドは一瞬の速さでマーモの懐に入り、すかさず攻撃した。

「速い!」

そのままマーモを吹き飛ばす。

「この〜」

マーモが立ち上がると、再びビルドに攻撃しようとするが、ビルドの動きにマーモは反応出来ず、また攻撃を食らってしまった。

「ビーストモードでも……歯が立たないって言うの!?？」

マーモが呟いているうちにビルドは、消防車ボトルをドリルクラッシュャーに差し込み、ドリルが回り出した。

『消防車！Ready go！』

『ボルテック ブレイク！』

「ハアアアア！」

回り出したドリルが炎を纏い、そのまま無数の泡と共にマーモから放たれたツタを全て燃やした。

「熱つつ熱つつ！」

「だったら、消しあげるわ！」

ダイヤモンドはラビーズをラブハートアローにセットした。

「プリキュア！ダイヤモンドシャワー！」

ダイヤモンドが放ったダイヤモンドシャワーで火は消えるが、凍らされて動けなくなってしまう。

その隙にソードがラビーズをセットし、クローズはドライバーのレバーを回した。

『Ready go!』

クローズの背後にドラゴンが現れ、クローズの右腕に力が収束されていく。

『ドラゴンニツク フィニッシュ!』

『プリキュア!スパークルソード!』

今度はクローズとソードがドラゴンパンチとスパークルソードを同時にマーモへ放ち、ダメージを与える。

「これで、フィニッシュだ!」

ビルドもドライバーのレバーを回し、高くジャンプした。そして、ハートはラビーズをセットした。

『Ready go!』

『スパークリングフィニッシュ!』

「はああああああ!」

『プリキュア!ハートシュート!』

ビルドとハートがスパークリングフィニッシュとハートシュートを同時に放つ。

先にビルドの技が決まり、その後ハートの技が命中するとマーモビーストは消滅した。

浄化されたプシケケイが戻り、周りも元に戻った。

「お、覚えてなさい……!」

焦げてアフロになったマーモが引き上げていった。

その後、ありすはコンテストに優勝し、手に入れたロイヤルイエローを真琴に渡す。

「はい……何か王女様の事で感じますか?」

「今はまだ……でも、このバラが手に入ったのは、ありすのおかげよ。ありがとう」

「そんな……皆さんのおかげです!」

「本気のありす初めて見た。凄いね!」

真琴に褒められ、ありすは頬を赤くする。

「まこぴーがありすを褒めてる……!」

「私達だって褒められた事無いのに!」

「今日のありすは、カッコ良かったランス!」

「キュンキュン来たシャル!」

「これでプリキュアは、ますます強くなったビィ!」

「さらに、晴夜と龍牙もいるから心強いケル!」

「でも、みんなも凄いよ!」

「ああー！」

そこにアイちゃんがロイヤルイエローに触れると突然、ロイヤルイエローが光り出した。

すると、ロイヤルイエローは普通の赤いバラとなり、そこから黄色いラビーズが出て来た。

「これは……」

「ラビーズだよな？」

「どうして？」

晴夜達はロイヤルイエローからラビーズが出てきたことに疑問を抱いたのだった……

その頃、ジコチュークラブのボウリング場では、ボロボロになったマーモが帰ってきた。
た。

「フン、プリキュアにビルド、クローズめ……！」

「何だよその頭！アフロじゃねえか！」

マーモの髪を指差したイーラが大笑いしながら叫んだ。

「るっさいわね！ビルドにやられたのよ！」

「……ぷっ」

ベールの方も笑いを堪えている。

「アンタ達いい加減に笑うんじゃないわよ！」

「ざまあないな、マーモ」

「休暇でも貰ってバカンスとしゃれ込みみたいな」

「休みたいなら、永遠に休みをあげるわ」

後ろの方から声が聞こえて振り向くと、マナ達がバラ園で会った少女がジコチューのアジトに現れた。

「あ？」

「何だお前？」

「偉そうに！」

三人が文句を言っていると、少女の後ろから総一郎が現れた。

「おいおい、お前らそれぐらいにしとけ」

「スターク、そいつは何者なの？」

「アタシ？」

「アタシはレジーナ。キングジコチューの娘よ」

「「ええっく!?」」

その少女の名はレジーナ、キングジコチューの娘と名乗ったのだった。

次回! Re. ドキドキ&サイエンス!

第15話 シャウトせよ! 六花の秘密

第15話 シャウトせよ！六花の秘密

——それは、幼き日の記憶。両親と一緒に綺麗なお花畑を嬉しそうに歩く六花の記憶。

カメラを構えながら花を覗いている六花に父の悠蔵が呼ぶ。

「なあ六花。六花は将来、何になりたいの？」

悠蔵が六花に聞くと、

「お医者さんになりたい！」

娘がカメラマンと言わなかったことに父は残念そうな顔した。だが、六花に自分の仕事の事を話す。

「でも、パパみたいな世界を駆け回る写真家も楽しいぞお〜」

六花の父はカメラマンの良さを主張するが、六花は首を横に振り、改めて母みたいな医者になりたいと主張する。

「六花、頑張ってお勉強する！お医者さんになるの！」

それでも尚、元気な顔で医者になりたいと言う六花。

これが、彼女が医者になる夢の始まりだった。

そして現在。学校の掲示板には、この前の中間テストの結果が貼られていた。

それを見た六花はショックを受けていた。

「あ、テストの結果出たんだ！一位は当然、六花で決まりだよなー？」

マナと真琴が六花の元に来ると、六花の名前は一位から一つ下の二位に書かれていた。

「二位、菱川六花……えっ？ええーっ!?？」

「何だ？」

マナが叫ぶと近くにいた晴夜と龍牙も、マナ達の元に現れてどうしたのかと訪ねる。

そしてしばらく経ち、ソリティアに場所が変わると六花はずっと椅子に座りながら落ち込んでいた。

「何とも言えない光景シャル……」

「六花……」

「今はそつとしてあげろ……」

未だに六花は二位を取ったショックから抜けていなかった。

一方、龍牙と真琴はこの前出現したラビーズを見ていた。

「なあ……これ、どこかで見たことある気がしないか？」

「うん……この不思議な宝石、トランプ王国のお城で見た事がある気がするの」

「まさか、ロイヤルクリスタル!?？」

「ロイヤルクリスタル？」

「それは何ですか？」

ダビィが言うには、ロイヤルクリスタルとはトランプ王国の王家に伝わる伝説のクリスタルらしい。

「……だとすると、何でそれがこの前のバラの中に入っていたんだ」

「それは分からないビィ」

「それがそのロイヤルクリスタル……」

「……に、似てる気がするビィ」

黄色のクリスタル一個だけだと、本物かどうか分からない。真琴と龍牙も一度しか見ていないので、本物かどうか確信を持てなかった。

とみんなが悩んでいると、誰かのお腹の音が鳴った。

「ゴメン、お腹空いちちゃって……」

お腹の音を鳴らした正体はマナだった。

「あ! そうだ、夕ご飯みんなを誘ったらってお母さん言ってたの」

「まあ嬉しいですわ」

「六花もどう?」

「ゴメン、このあと用事あるから。先に失礼するね」

「待ってケル〜!」

六花も誘おうとしたら、六花は用事があると言って六花とラケルは先に帰っていた。

「心配ですわね」

「思い詰めなきやいいけど……」

その後、マナ達は『ぶたのしっぽ亭』に到着した。

「ただいまー!」

「お帰りなさい」

「あっ!」

驚きこ声を上げるマナの前には、見知らぬ女性がカウンターに座っていた。

「誰?」

「六花のママ!」

その女性は、六花の母親の亮子だった。

「今日はお仕事終わり？」

「いいえ、少し休憩したら着替えを取りに戻って、病院に戻るわ」

「なあ、病院って？」

「六花ちゃんのママは、大きな病院のお医者さんをしているのです」

「あら？君は確か近くに引越してきた……」

「あ、この間引越して来た桐ヶ谷晴夜です」

「私は菱川亮子。六花の母親よ」

二人が自己紹介をすると、あゆみが亮子に話しかける。

「悠蔵さんは元気？」

「手紙を読む限りはね。あの人の事だから、心配ないでしょう。それよりも今は、六花の

方が……」

「六花に何があつたんですか!?!」

六花の事を話そうとすると、マナが急に亮子に詰め寄る。

「落ち着けよ、菱川さん驚いているだろ？」

「ゴメンなさい……」

「あ、いや、まあ、大した事じゃないんだけど……」

亮子が言うには最近の六花は部屋で大きな声や物音が聞こえたり、呪文みたいな寝言

を呟いたり様子がおかしいようだ。

次の日の放課後、その日も六花はマナ達よりも先に帰っていった。

「六花、一体どうしちゃったんだろ……?」

「テストで一番を取れない事が、そんなに大変なのか?」

なぜ一番を取らなければならないのか疑問に思っていた龍牙がマナに聞くと、直ぐにその理由が返ってきた。

「六花の場合は特別なんだよ。六花の夢は、ママと同じ立派なお医者さんになる事。

そのためには、学校で一番になれるぐらいに頭が良くないといけないの」

「そうなんだ」

「確かに、医者になるって事はかなりの学力がいるからな」

でも、最近の六花は様子がおかしい、六花の母親も心配している。何か原因があると晴夜達が考えていると…

「それはアレに違いはないビィ!」

「アレ?」

真琴のカバンからダビィが出て、心当たりがあると言い、それに対してマナと真琴が疑問に思う。『アレ』が何なのかわからない龍牙はダビィに聞き出す。

「アレってなんだよ、ダビィ？」

「ズバリ……」

「ズバリ？」

今度はシャルルがマナのカバンから出てきた。

「六花はグレちゃったシャルル！」

「ええっ!?？」

シャルルはレディースの格好をした六花の姿を思い浮かべながら言った。

「テレビで見たシャルル！」

「年頃の子は、ちよつとしたきっかけで悪い子になっちゃうんだビィ！」

「いや、流星にそれは……」

「大変でランス〜！」

ランスが慌てながら駆けつけ、マナの顔にぶつかった。

「どうしたんだよ、ランス？」

「さつき六花が大きな建物に入ったのを見たでランス〜！そこで何か、バシーン、バシーンって思いっきり叩いてる音がするでランス〜！」

「まさか……ケンカ!?？」

「やっぱりグレたシャル〜！」

「嘘でしょ!!?」

「とにかく、行ってみよう!」

急いでマナ達は六花が入ったと言う建物へと向かった。

「この建物でランス〜!」

建物の前には既にありますが待っていた。

「みなさん!こちらです!」

ありすと合流すると、直ぐに建物の中に入った。

「早まらないで六花!」

マナは中に入ってそのまま襖を叫んで開けた。

「えっ?」

襖を開けると確かに六花の姿はあった。しかし、ケンカではなく、競技カルタしている様子だった。

「あれ……?」

「あなた達……」

その後、六花はみんなに事情を説明した。

「競技カルタ?」

「何それ？」

「百人一首って言う、有名な唄が書かれた札を取り合う遊びだよ」

「遊びじゃないケル！」

「ご、ゴメン……」

ラケルの言う通り、競技カルタはれつきとしたスポーツのひとつである。詳しいルール等は各自ネットで調べてね！

「じゃあ、部屋で大声出してのは……」

「ラケルと一緒に練習してたの」

原因がわかると、晴夜はシャルルとダビィを見る。

「誰がグレたんだよ」

シャルルとダビィは目を逸らしながら口笛を吹いていた。

「でも、カルタを始めていたなんて知りませんでしたわ」

「きっかけは、百人一首の本だったわ。」

勉強のつもりだったのに、切ない恋の歌の数々に胸を締め付けられ、どんどんハマって行ったの」

その後調べているうちに、競技カルタの存在を知ったらしい。

「気が付いたら入門してたケル」

「六花ちゃんらしいですけど、それでは勉強が疎かになったのでは？」

「ありすの言う通りよ。医者になる夢を叶えるためには、他の事にうつつを抜かしてる場合じゃない……」

「六花……」

「でも、もう辞めるつもり！私にとっては、ママとの約束が一番なもの」

そう言うのと六花は一週間後に開かれるクイーンの手合わせ会のポスターを指差す。

「そこで自分の実力を試して、終わりにするわ！」

「なあ、クイーンって……」

「日本一カルタが強い女の人よ」

「王女様もカルタが好きで、よく遊ばれていたわ。何か手がかりが得られるかも」

真琴はアン王女がカルタをしていた事を思い出しながら話した。

「トランプ王国なのに、カルタまでたしなわれてたんですね……」

「わかった、一週間後だね！それまでの間六花がカルタと勉強を両立出来るように、協力するよー！」

「しようがないな、俺も手伝うよー！」

マナと晴夜がそう言うのと龍牙達も賛同した。

「みんな……！」

これにより手合わせ会までの一週間、みんなで六花のサポートをする事になった。

翌日、四葉家の大広間に集まり、カルタの練習が行われていた。

「競技カルタに大切な事は、暗記・技術・体力です。早速一週間の特訓メニューを組んでみました」

セバスチャンが競技のカルタに必要な事を伝えると、次にルールについて説明した。

「試合のルールは簡単。お互いの陣地二十五枚ずつ札を並べ、自陣の札をゼロにした方が勝ちでございます」

一通りルールを伝えると全員がカルタを目を移す。

「そんなに短いの？？」

「覚えたわ」

「えっ！もう？？」

六花の記憶力に脱帽するマナであった：

それからは体力作りのためにランニング、筋トレ、勉強と行われたのだった。

その日の夜。晴夜と龍牙は家に着くとそのまま二人は地下室の部屋で、晴夜がパソコンに方に目を向けている一方、龍牙の方はかなり疲れている様子だった。

「やっぱ俺……頭使うのは無理だ。カルタの暗記一つくらいしか出来ねえよ」

「まあ、お前はバカだからしょうがねえよ」

「バカって、なんだよ!バカって!」

晴夜と龍牙がいつも会話が終わると、再び晴夜はパソコンの画面に目を向け、父親の研究データを見ていた。

すると、あるデータファイルを開いて、目を大きくしながら立ち上がった。

「これは……これなら、絶対にジコチュー達を倒せるし、トランプ王国も救い出すことが出来るはずだ!」

晴夜が開いた研究ファイルそれは一体なんなのか、それはどんなものか、今は誰も知る由もなかった…

一方その頃、ジコチュークラブでは、キングジコチューの娘であるレジーナがくつろいでいた。

「肩揉んで」

「はいはい」

ベールがレジーナに言われた通り、肩を揉み始める。

「メロンジュースはまだ？」

「自分でやりなさいよ」

マーモがレジーナの頼みを断ると、スタークが現れて代わりにジュースを渡した。

『どうぞ、お待たせしました』

「つたく、キングジコチュウ様の娘が来るなんて聞いてないわよ！」

マーモが愚痴を言うと、レジーナがまた彼女に命令した。

「ねえ、シユークリーム買って来て」

「はあ!!？」

「そんな事言っていると、パパに言いつけちゃうわよ？」

マーモは嫌がるが、レジーナに脅されると仕方なく買いに行く事を決めた。

「イーラ！荷物持ちしなさいよ！」

しかし返事がなく、辺りを見てみるとイーラの姿はなかった。

「どこ行った!!？」

そして、手合わせ当日となった。

六花は気合い充分な感じだった。

「ありがとう。みんなのおかげで、前より上達した気がする」

「きゅびゅー!」

「頑張つて、だつて」

今日はアイちゃんも応援に来ていた。

「こんにちは、皆さん」

そして、みんなの前にクイーンが現れた。

「あの人が……」

「ええ、クイーンよ」

そして、手合わせが始まった。

流石クイーンと言うべきか、その圧倒的な強さを見せ挑戦者に全勝をしていた。

休憩時間に入り、みんなはロビーに集まり、クイーンの影響を話していた。

「凄い迫力だったよ!」

「まさにスポーツですわね」

「競技カルタつて初めて見るけど、生で見るとかなりの迫力があるよな」

「速いだけじゃない。札の配置にペースの作り方、レベルが違い過ぎる……!」

六花は、自分じゃ到底敵わないと感じ始めた。

「六花……」

それに気づいた晴夜は六花を元気付けようとする。

「六花、とりあえず今持つてる力を全部出して挑めばいいよ！」

「晴夜君……」

「そうだよ！そのために、今日までみんなで頑張ってきたんだから！」

「マナ……そうね！私なりに頑張ってみる！」

晴夜とマナの一言に六花は少しだけ落ち着きを取り戻せた。

一方の真琴は、さっきのクイーンの事を見て何かを感じていた。

「あの人……」

「真琴？どうしたんだよ？」

「やっぱり、何かを感じる」

「それって、さっきのクイーンの事か？」

「うん……」

その頃、広間ではサインを断ったクイーンがため息を吐いて呟いた。

「みんなが私を称え、尊敬の眼差しを送る……」

ああ、それなのにどうして……クイーンのわたしにふさわしいキングが現れないの

……!?？」

「どうやら、自分の実力に近い男が現れないから恋愛が出来ないようだ。そう叫んでいると同時に、クイーンのプロシユケーが黒く染まり出す。」

「つて、高飛車にハードル上げてるからいけないのよね」

「そう呟くと、プロシユケーが染まらなくなった。」

「いいじゃん、高飛車でも」

するとクイーンの前でイーラが囁く。

「お前の望み、叶えてやるよ」

指を鳴らすと同時にプロシユケーが黒く染まり、取り出された。

「お前の闇を我に捧げよ！」

プロシユケーに闇を加えて圧縮し、イーラは自らの口にプロシユケーを放り込んだ。

そして、イーラとカルタのジコチューと一体化したビーストモードとなった。

「今日は本気出しちゃおうかな」

広間の方が騒ぎ出したのに気づいた晴夜達は直ぐに広間に向かい、ビーストモードとなったイーラの姿を目撃した。

「あれは……!」

「行くぞ!」

晴夜と龍牙はドライバーを装着し、ボトルを取り出し、マナ達はラビーズをコミュニ

ンにセットした。

『ニンジャ！コミック！ベストマッチ！』

『ウエイクアップ！クローズドラゴン！』

音声が届り終わると二人はレバーを回し、アーマーを形成させる。

『Are you ready?』

「変身!!?」

「プリキュア！ラブリンク！」

晴夜と龍牙の二人はアーマーが体に装着され、マナ達四人は光に体が包まれ、姿が変わった。

『ニンニンコミック！イエーイ！』

『CROSS—Z DRAGON! Yeah!』

「みなぎる愛！キュアハート！」

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

「陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

「勇気の刃！キュアソード！」

「響け！愛の鼓動！ドキドキプリキュア！」

「愛を無くした悲しいカルタさん！このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻して

「見せる」

ハートは胸にハートマークを作り、イーラビーストに言う。

「出たな!」

イーラはビルド達を倒そうとするが…

「わたしに挑むと言うの?生意気な子達!」

突然、イーラの方ではなくジコチューの方が勝手動き出した。

「な!?」

「いいでしょう!ならカルタで勝負よ!」

「お前何勝手な事を!」

「おいでなさい!我がカルタ達よ!」

ジコチューが叫ぶと同時に周りからカルタの札が出て来た。

「いざ、勝負!」

「カルタするの!?」

「いつもとは変わったジコチューだな…」

ジコチューとのカルタ勝負が始まった。

『よもすがら——』

「見つけた!」

イーラビーストがカルタを取ると弾き飛んだカルタの札がハートに命中し、壁に叩きつけた。

「見つけた札をこつちに弾き飛ばして攻撃するって事か……!?」

「先にふだを取らないと！」

『あきのたの——』

「これは、我が衣手は露に濡れつつよ！」

「これね！」

ソードが札の上に乗ると急にブザー音が鳴り出し、赤くなった。

「残念。それは『わがみよみふるながめせしまに』よ！お手付き！一枚あげる！」

ジコチューは今度はソードに札を投げつけた。

「ソード！このやろ！」

『きみがため——』

「これは知ってますわ！」

「俺も！」

クローズとロゼッタが札を取ろうとするが、イーラビーストが勢いよく両手を塞いで札を取り二人を吹き飛ばす。

「ずるいですわ！」

「きたねえぞー！」

「これは囲いつて言つて、立派なテクニックよ」

やはりプロと素人では勝負の差が出て、全員がイーラビーストが投げつけた札でダメージを受けてしまい、かなり押されている。

「活躍しすぎだぞお前……まあでも、あのビルドとクローズも押ししてるし、認めるしかねえけどな」

ビルドもなすすべ無く、札を受けて何度も吹き飛ばされた。

「とても歯が立たない……！」

「こんなのどう戦えつて言うんだ……!?？」

確かにこのままだと、札が無くなる前に全員がやられてしまう。

(相手はクイーン……やつぱり私に勝てるワケが……)

ダイヤモンドは敵のあまりの強さに勝てる自信を無くし始める。

「大丈夫だよ」

「えっ？」

「そうですわ。今日まで頑張つて練習したんですもの」

「私達が応援するから」

「やってきた事全部出そうぜ！」

「確かに強い相手だけど、敗北の確率はゼロとは限らない！勝ってる確率だって存在する！」

「みんな……」

しかし、ダイヤモンドはみんなに励まされる。

「キュアダイヤモンド、あなたの努力の成果を見せてあげて！」

「分かった！」

ハートの差し伸べた手を掴んで、自信を取り戻したダイヤモンドが立ち上がる。

『はなのよの——』

「これは、さつきお手付きしたやつ！」

「させるか！」

イーラビーストが突進して阻止しようとしたが、ダイヤモンドがそれを躲してイーラは自分から壁にからだを叩きつけた。

その隙に札に向かって跳び、ダイヤモンドが取った。

「そんな馬鹿な！」

「取ったー！」

今度はダイヤモンドが札をイーラビーストに弾き飛ばした。

「痛ってー!？」

「キュアハート!晴夜君!」

隙が出来た内にビルドは四コマ忍法刀のトリガーを2回を押した。

「ラブハートアロー!」

ハートがラブハートアローを出現させ、ラビーズをセットした。

『火遁の術!』

刀に炎を纏いそのままイーラビーストに向かっていた。

『火炎切り!』

「はあーっ!」

そのまま火炎切りでイーラビーストに攻撃し、イーラビーストの態勢を大きく崩した。

「今だ!ハート!」

ビルドは攻撃が終わるとイーラビーストが離れ、ハートの方は既に発射態勢に入っていた。

「うん!プリキュア!ハートシュート!」

止めにハートシュートを放ち、イーラビーストに命中し、イーラビーストは消滅した。

「クッソー!今日は散々だ!」

そのままイーラは引き上げていき、

プシケケーが持ち主に戻ると同時に、周りの様子も元に戻った。
「ふう、今回は随分と厄介な敵だった……」

その後、六花とクイーンの手合わせが終わったが、結果は六花の負けだった。
……でも六花は、自分を全部出せたと満足している様子だった。

「久しぶりに楽しい試合だったわ。でも、私に勝つにはまだまだだね。これ、あげるわ」
クイーンは六花に自分のお気に入りのお札を差し出す。

「ありがとうございます！」

「それじゃ」

そのままクイーンは去っていた。

「強かったね、クイーン」

「でも、かなり大善戦だったな！」

アイちゃんがカルタに触れた途端、カルタが光り出した。

「カルタが!?」

「光った……!?」

「ロイヤルクリスタル？」

光が消えると、カルタの上には青いロイヤルクリスタルがあった。

そして真琴が持っていた黄色いクリスタルと反応し、二つ目のロイヤルクリスタルが光り輝いた。

「惜しかったわね」

「えっ!? ママ!!? 何でここに!?」

すると突然、六花の母である亮子がみんなの前に現れた。

「違うんです! 六花は悪気があつたんじゃなくて……! これには深いワケが……」

「黙つててゴメンなさい! でも、もう大丈夫。また勉強して、お医者さんになれるように頑張るから!」

「全くこの子は……」

「ゴメンなさい……」

六花がそう言うのと、亮子は六花を抱き締めた。

「別に怒つてなんかいないわよ」

「えっ!?」

「あなたは子供なんだから、もっと自由にしているの。カルタが好きなら続ければいい。

他にやりたい事を見つかったら、全力でやってみればいい」

「そうそう。たくさん夢を見て、持つことはいい事だ。医者じゃなくて、写真家を目指せばいい」

そこに写真家で六花の父親の悠蔵が現れる。

「パパ！」

「ただいま。……うん？見慣れない子がいるね」

悠蔵は晴夜と龍牙の方を見る。

「この子達は、この間引つ越してきた桐ヶ谷晴夜君と上城龍牙君よ」

「そうなのか。晴夜君と龍牙君だね。僕は菱川悠蔵。六花の父親で写真家なんだ」

「初めまして。桐ヶ谷晴夜です」

「上城龍牙だ」

「それよりも、パパもなんでここに？」

「あれ？ママに聞いてないのか？」

実は昨日帰つてくると亮子に連絡していたらしい。

「ここまで自由なものも、困るものね」

「まあいいんじゃないか。土産話もたくさんあるし。六花の話も聞かせて欲しいな」

「ちよつとパパ！」

と言うと悠蔵が六花の手を握る。今度は亮子が六花の手を握る。

家族三人で帰る六花の笑顔は、すつきり晴れやかなものだった。

「父親か……」

一方、六花の父親の姿を見ていた晴夜は、自分の父親の事を思い出した。
(父さん……今どこにいるんだ)

次回! Re. ドキドキ&サイエンス!

第16話 アイドルの日々。そして、クローズ覚醒!

第16話 アイドルの日々。そして、クローズ覚醒！

その日、学校の教室で真琴が出る映画『スノーホワイト』の広告をマナと六花、龍牙が見ていた。

「すごい！まこぴー今度の映画に出るんだ！」

「しかも主役かよ、すげえ！」

「楽しみだね！」

今回、真琴は主役の白雪姫の役だった。

「ダビィが意地悪な女王役ケル？」

「そうそう……って違うビィ！」

ダビィが突っ込みを入れると、広告の女王役の女性を指す。

「女王は『おおとり環』だビィ！」

「おおとり環って？」

「映画化の若きクイーンって言われてる人だよね？」

「そう、クイーン！」

「だから真琴も期待してたビィ。もしかしたら王女様かもって……」

だが、真琴とダビィが実際にあってみたら、かなりいじわるな女王みたいな人だったらしい。

「そうなんだ……」

「まさにハマリ役ね」

「あれ？まこぴー寝ちやつてる」

「疲れているみたいね」

「うん……あれ？そういうえば晴夜君は？」

マナが言うと、確かに晴夜も真琴と一緒に自分の机で寝ていた。

「なんか、最強システムみたいなのを夜遅くまで作っていたって言うらしいんだよ」

「最強システム？」

「真琴は映画の撮影で忙しいのに、毎晩遅くまで王女様を探してるビィ」

「「えっ？」」

「真琴……俺たちの知らない所で頑張っていたのか……」

それからしばらくして、ソリティアへと場所が変わり。

「それはそれは。真琴さん大変過ぎますわ」

「うん。でも頑張らないと！みんなのおかげでロイヤルクリスタルが二つも見つかった

し、王女様も近くににいるはずだから」

「晴夜さんは発明もいいですけど、ちゃんと睡眠を取ってください」

「はい、注意します……」

ありますが晴夜に注意していると、マナが真琴に話しかける。

「ねえまこぴー、今日のお仕事一緒に行ってもいい？」

「えっ？」

「まこぴー人大変なのに放ってはおけないよ！」

どうやらマナは真琴の仕事の手伝いをしたいらしく、一緒に行って良いかと頼み込む。

「一緒にいれば、何か手伝える事があるかもしれないね」

「私もご一緒させていただきますわ」

「俺も一緒に行くぜえ！真琴の力になりたいんだ！」

「なるべく邪魔しないようするから」

更に六花とあります、龍牙に晴夜も一緒に行くと話す。

「みんな……」

そのままみんなで車の乗り撮影所に向かった。

その途中で、マナは晴夜が今作っている『最強システム』について尋ねる。

「晴夜君……龍牙君から聞いたんだけど、今作っている『最強システム』って何?」

「うーん、簡単に言えばビルドドライバーよりかなり強いドライバーかな?」

「ビルドドライバーより凄いドライバー! そんなの作ってるの!」

「まあな、お陰で今日は眠くってしょうがないよ」

それから、しばらく撮影所『四葉撮影所』に到着し、晴夜達は中に入っていく。

「おはようございます!」

「なんで『おはよう』なの?」

とマナが言うと、ありすが説明した。

「撮影所では何時であっても、仕事始めの挨拶は『おはようございます』なんですわ。どんな時間でも、爽やかに始められるように」

「へえー、詳しいわねありす」

「ここはお父さんの持ち物だし、ありすは慣れてるんでランス」

「ほほーう」

「撮影所持ってたんだお父さん……」

「話には聞いていたんですが、凄いなありすの親父さん……」

「流石は四葉財閥だな……」

龍牙達が改めてありすの実家の顔の広さに驚きつつ、真琴が撮影する撮影所を目指し

ていると、

「あつ！高倉裕次郎だ〜！」

「ホントだ」

移動中に俳優の高倉裕次郎と遭遇した。

「おはようございま〜す！」

「ちよ、マナ？」

マナが挨拶すると高倉裕次郎も挨拶を返してくれ、マナのテンションは一気に上がった。

「かつこいいく！お母さんにも見せてあげたかった！」

「ダメだ。まこぴーのお手伝いどころか完全に楽しんでる……」

「でもなんか、ちよつとホツとした。マナは元気が移ったかも」

「マナちゃんつて、そういう所ありますわね」

「何々？」

マナが尋ねると五人は笑った。

「よーし！仕事も王女様探しも頑張る！」

（真琴……すげえなお前、俺も負けられねえな！）

その後、撮影現場に到着し、しばらくしてからリハーサルが始まろうとしていた。

「それでは、リハーサル始めます!」

「よろしくお願ひします」

「よろしく」

「ドキドキするね〜」

「うん」

「こう間近で撮影を見ると迫力あるな」

そしてそのまま撮影はスムーズに進み、次のシーンに入ろうとしていた。

「それでは、次のシーンです。老婆に変装した女王がリングを持って来る所です」

(女王様……一体どこにいらっしやるの?)

「真琴ちゃん?」

「あ、はい!スイマセン……!」

真琴は女王様の事を考えていた為、撮影の事を忘れてしまい、スタッフの話聞いてなかった。

「真琴……」

真琴の姿を見て、龍牙は何か考え事をしていたのかを感じた。

「はいじゃありハーサル行きまーす!」

(っ!いけない、セリフ)

リハーサル中に王女様の事を考えていて、真琴はセリフを忘れてしまう。

「カーツト！真琴ちゃん、リッラスリッラス！」

「すみません……」

「前々から思っていたんだけど、あなた演技に集中してる？」

さつきまで様子を見ていた環は、真琴がリハーサルに集中してなく、他のことを考えているのだと既に気づいていた。

「その……」

「正直あなたにはがっかりだわ」

それを見ていたマナ達は撮影の大変さを感じていた。

「怖いシャル……!!」

「あんな風に言われたら、余計緊張しちゃうわ……!!」

「でも、それでは女優さんは務まらないですわ」

「「えっ？」」

「舞台上立った瞬間から、あそこに立っているのは真琴さんではなく、白雪姫なのですか」

「そっか……」

「厳しいお仕事なのね」

それからしばらくして、リハーサルは再開された。

「それでは、リハーサル再開します!」

(しっかりとしなきゃ。演技に集中しないと!)

「頑張れ……真琴」

龍牙は小声で彼女に声援を送る。

「王子様、今どこにいらっしやるの?早く会いたいです」

今度はセリフを忘れず言えた。しかし:

「それが心から会いたって顔?」

「えっ……?」

環の発言によってリハーサルは中断された。

「何?どうしたの?」

「おおとり環が演技を続けなかったですわ」

「あなた、練習不足なんじゃない?台本綺麗過ぎなんだもの」

確かに、彼女の言う通り真琴の台本は傷一つ無かった。対するおおとり環の台本はポ

ロボロだった。

「大勢のお客さんが、この映画の完成を楽しみにしてくれるの。やる気が無いなら、帰って頂戴」

「そんな……」

「真琴……」

リハーサルが終わり、みんなは真琴の控え室へと集まる。

「何なの？ おおとり環ったら！」

DBがそう叫んでから妖精の姿に戻る。

「白雪姫の女王よりいいじわるビィ！」

「ダビィの言う通りシヤル！」

「ねえまこぴー、よかつたら今日ウチにご飯食べに来ない？」

マナは晩飯に真琴を誘おうとするが、彼女は明日も撮影が早いと言って断った。

その後、真琴はまだ仕事があるのでマナ達は先にセバスチャンの運転する車に乗り、撮影所を後にする。

「大丈夫かなまこぴー……」

「今日はゆつくり寝て欲しいけど……お芝居の練習しちゃうんだろな……」

「真琴さん……頑張り屋さんですからね……」

「でも、それぐらいやらないとお芝居は成功しないって事だからな……」

（俺に何か出来る事は無いのか……）

真琴の心配をする晴夜達の横で、龍牙は自分に出来る事はないかと思考する。

翌日、学校では今日も真琴は机の上で眠っていた。

「まこぴー、今日も辛そうだね」

どうやら朝から撮影だったらしく、かなり疲れている様子でした。

「実はタベも、練習の後王女様を探しに行ったビィ」

「「「ええっ!?」」」

真琴は仕事が終わると、そのまま夜遅くまで王女様を探していたとダビィがマナ達に伝えた。

「きつと、ジツとしてられないんだビィ」

「あたしもだよ!まこぴーが一人で頑張ってるのに、ジツとなんかしてられない!」

「そうだな!俺たちもまこぴーの為に出来る事をしよう!」

そして、学校が終わり。撮影所に向かった真琴は控え室でリハーサルの準備を始める。

「ねえ真琴、本当に辛いなら、お仕事を辞めてもいいのよ」

「ううん、大丈夫……環さんが言ってたように、この映画の完成を楽しみに待ってくれる

人達がいる。

「ここで投げ出すわけには行かないわ」

「でも、真琴は十分一人で頑張っているわ」

DBが頑張っているとと言うと、真琴は自分はまだまだだと話す。自分に比べておおとり環は自分以上に演技に集中していると話し、「もつと頑張らないと」とDBへ語る。

「真琴変わったわね。今は王女様だけじゃなく、応援してくれる人達の事もちゃんと見ている」

「なら、王女様を探すの俺たちに任せてくれないか？」

「え？」

真琴が控え室のドアを見ると、そこに龍牙達がいた。

「そうだよ、王女様探しはあたし達に任せて！」

「私達、まこぴーの力になりたいの！」

「仲間ですもの」

「まこぴーは撮影の方を頑張れよ！」

みんなが真琴の代わりに王女様を探すと言う。

「みんな……！…本当にお願いいしいの？」

真琴がみんなに尋ねると、みんなは首を縦に振る。

「もちろん」

「まこぴー頼ってくれてキュンキュンだよ!」

「一人で頑張らなくてもいいですわ」

「仲間を頼ってくれよ!」

「ありがとう。じゃあこれを持って行って」

真琴はロイヤルクリスタルの入った袋を差し出す。

「この前みたいにくリスタル同士が近づくと、光って反応し合うかもしれないわ」

「うん、分かったよ!」

「真琴、お前は自分の仕事に集中しろ、王女様は俺たちで必ず見つけてみせる!」

「龍牙……うん!」

龍牙達は王女様の探索へと向かった事で、真琴は撮影に集中する事が出来るようになった。

(よし、今はお芝居に集中しよう!環さんに負けられない!陰で支えてくれているス
タッフさんのためにも、一緒に頑張ってくれる仲間のためにも!)

仲間達の支えもあり、撮影は順調に進んで行った。

その頃、ジコチュークラブでは、いつもの通りにレジーナがくつろいでいた。

「何なのコレ？」

「お望みのトウモロコシですが……」

「見りゃ分かるだろ」

「だからどうしてトウモロコシなのかって聞いているの」

「は？」

「だってあなたがトウモロコシ食べたいって言うから……！」

「私が食べたいのは香ばしいバターコーンよ！」

どうやらレジーナはバターコーンが食べたかったらしいが、伝え方が悪かったのか生のトウモロコシが出てしまった模様。

「何だよソレ!?？」

イーラは持っていたトウモロコシを投げる。

「バターコーンならバターコーンと言っていただけかないと……」

「てゆーか、どっちでもいいし」

マーモがトウモロコシを投げると、投げたトウモロコシをボールが掴んだ。

「何よイジワル！もういいわ、スターク付いてきて！」

『あいよ！』

レジーナが言うのとソファで座っていたスタークが立ち上がった。

「どこかにいないかなー、あたし好みのこつてり香ばしいバターコーンみたいな子」
「いるかそんなヤツ!」

場所が変わり、『ぶたのしっぽ亭』。

「ここ数日、王女様の手掛かりを探すが、結局何も見つからず悩んでいた。
しばらくして、別行動で探しに行っていた晴夜と龍牙が入ってきた。

「みんなどうだった、なんか手掛かり見つけたか?」

「ううん、今日も見つからなかった……」

「今日も収穫なしか……」

「ロイヤルクリスタルにも変化なかったし……」

「頑張ってる真琴さんのためにも、何としても見つけ出しましょう」

「ありすが言うのとマナと六花が頷く。

「でも、今日みたいに闇雲に探し回ってもどうにもならないよな?」

「確かに……」

「じゃあどうやって探すかと晴夜達が話していると、シャルルが急にコミュニケーションとなつ

た。

「ダビイから電話シャル」

『みんな、真琴からメッセージだビイ』

『いよいよ撮影も大詰め、明日がクランアップです。良かったら見に来て！』

どうやら明日で撮影も大詰めらしく、真琴はみんなに見に来て欲しいらしい。

「明日最終日なんだ！」

「それは見に行かないとなー！」

その日の夜。晴夜と龍牙は地下室で寝ていた。

だが龍牙は、明日の真琴の撮影の事が気になって眠れずにいた。

すると晴夜の作業に使っている机に置いてあるケースが気になり、ケースを開きその中を確認した。

「……ドライバー？」

ケースの中に入っていたのは、黒がメインカラーのビルドドライバーと違い、青色のドライバーで、特徴的だったのはレンチ型のレバーが付いていたことだった。

そしてもう一つはポトルとはまた形が違う袋の様な形で、中もかなり柔らかい。

そして、そのマークに目を移す。

「……ドラゴン?俺のか?」

それを見て、これは自分の物なのだと言はれていた。

翌日、晴夜達は撮影所に到着し、真琴のいるスタジオへと向かう。

「あれ?ソリティアのお兄さん」

スタジオまで歩く途中、ジョーとアイちゃんに出会った。

「お、いい所に来てくれた!」

「どうしてここに?」

ジョーはここへ来たのは真琴の映画で使う小道具を届けに行くためだったが、道がわからなくなったらしい。

「あたし達もそこに行く所だったんで、良かったら持つて行きますよ」

「本当かい?助かるよ」

ジョーはマナに小道具を渡した。マナ達そのままスタジオへとまた歩き出す。

一方スタジオでは、真琴はおおとり環の演技に目を大きく見ていた。

(凄い……環さんはやっぱり凄い……!)

真琴は環の演技力に感激していると……

「見つけた。アタシ好みのバターコーン。じゃなくて、ワガママな子!」

真琴が声ができる方を見ると、どこから現れたのか五星ローズガーデンで出会った少女……レジーナがおおとり環を指差していた。

「あなたは……！どうしてここに!?？」

「うーんとねー。ワガママな香りを辿って来たたら、ここに辿り着いたの」

理由を話しながら飛び降りて着地すると、レジーナはおおとり環に近づいた。

「ね、あなたってワガママでしょ？」

「何なの、この子……？」

「環さん、下がって下さい！」

「喜んで。アタシ、あなたのご主人様になってあげるわ」

レジーナはそう言って手を差し出してくる。

「ふざけないで。撮影の邪魔をしないで頂戴！」

「今すぐここから出て行きなさい！」

「ふーんだ、アタシに命令しないでよね。アタシの命令は絶対だけど……あなたを素敵なジコチューにしてあげる！」

レジーナの指から放たれた光線が、プシユケーを黒く染める。

おおとり環から取り出されたプシユケーがひび割れ、鏡のジコチューが作り出された。

「どうして!?? 環さんはジコチューでも何でも無いのに!」

「あら、ジコチューじゃない人間なんていないでしょ?ま、アタシの魔力なら誰だってジコチューにできちゃうけど」

生み出された鏡ジコチューがスタジオ内を暴れ始める。

その頃、スタジオに向かう途中だった晴夜達。すると急にラケルが現れた。

「闇の鼓動を感じるケル!」

「場所は?」

「スタジオの方からランス〜!」

「真琴!」

「おい、龍牙!待てよ!」

龍牙が先にスタジオへ走って向かうと、晴夜達も後を追いかけてスタジオへと向かう。

『おっと!そこまでだ!』

すると、晴夜達の前にスタークが現れた。

「どけよ!今あなたの相手してる暇はねえんだよ!」

『そっちが無くて、俺にはお前らを足止めする理由があるんだよ』

スタークがそう言うのと晴夜が前に出た。

「龍牙、マナ達も。先にスタジオ行け、俺が相手をする」

「晴夜君……うん！みんな急ごう！」

「晴夜……恩にきるぜ！」

スタークは晴夜に任せ、マナと龍牙達は真琴のいるスタジオへと向かって走り出す。

『お前一人で俺とやる気か？』

「ああ！」

『言つとくが、この前みたいにいけると思うなよ』

スタークがそう言うと、晴夜はドライバーを装着し、ボトルを取り出してドライバーに差し込む。

『海賊！電車！ベストマッチ！』

『Are you ready?』

「変身！」

形成されたアーマーが晴夜の体に装着され、身体から蒸気が流れ出た。

『海賊レッシヤー！イエーイ！』

海賊レッシヤーフォームへと変身したビルドはカイゾクハツシヤーを構え、スタークへ向かって走り出す。

「ハアアアア！」

カイゾクハツシャーとスチームブレードがぶつかり合い、戦いが始まった。

スタジオでは、鏡ジコチューが光線で衣装や台本を燃やしていた。

「よく燃えるわね」

「真琴!」

「まこぴー!」

「龍牙、みんな!」

スタジオに龍牙とマナ達が到着し、真琴の元へと駆け寄った。

「大丈夫?」

「環さんを安全な所へ!」

真琴が言うのとセバスチャンがおおとり環を抱え、スタック達を連れて避難させる。

「みんな、行くよ!」

「うん!」

「ええ!」

「おお!」

龍牙の手にクローズドラゴンが置かれ、ガジェットへと変わるとボトルを差し込み、ドライバーに差し込む。

『ウエイクアップ！クローズドラゴン！』

『Are you ready?』

「変身！」

「[[プリキュア！ラブリンク！]]」

龍牙の体に形成されたアーマーが装着され、マナ達の体が光に包まれ姿が変わり、全員が変身を完了する。

『Wake up burning！ Get CROSSE—Z DRAGON

！Yeah！』

「みなぎる愛！キュアハート！」

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

「陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

「勇気の刃！キュアソード！」

「[[響け！愛の鼓動！ドキドキプリキュア！]]」

「愛を無くした悲しい鏡さん！このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻して見せる！」

「ふーん、やれるものならやってみれば？」

五人はジコチューの連射する光線を走りながら躲し、反撃に出ようとする。

「ラブハートアロー!」

ソードラブハートアローを出現させると、ラビーズをセットする。

そしてジコチューを攻撃しようとするが…

「プリキュア! スパークルソー!」

「カーツト!」

「えっ!?」

「やっっちゃえジコチュー!」

映画の仕事をしてきた影響なのか、レジーナの言葉に気を取られたソードに向けてジコチューが光線を放つ。

「プリキュア! ロゼツタリフレクション!」

ロゼツタがロゼツタリフレクションを発動させ、ジコチューの攻撃を防いだ。

「ロゼツタ!」

「大丈夫、一緒に頑張らしましょう!」

ジコチューがソードとロゼツタを見ている内にダイヤモンドがラビーズをラブハートアローにセットした。

「プリキュア! ダイヤモンドシャワー!」

ダイヤモンドがダイヤモンドシャワーで足元を凍らせた。

「今よ！キュアハート！龍牙君！」

「うん！」

「よっしゃー！」

ハートがラビーズをラブハートアローにセットし、クローズがドライバーからビートクローザーを出し、持ち構えてグリップエンドを引く。

『ヒッパレー！ヒッパレー！ヒッパレー！』

ビートクローザーにエネルギーが収束され、音声が響く。

『メガヒット！』

「プリキュア！ハートシュート！」

ハートとクローズの攻撃でとどめを刺す。だが、ジコチューの放つ光線がハートシュートとメガヒットを消滅させ、発生した衝撃で五人を吹き飛ばし、クローズは変身解除してしまった。

「どう？アタシのジコチューは？凄いでしょ？」

「そんな……ハートとクローズの技が効かないなんて……！」

「クソ！どうすれば、勝てるんだよ……ッ！」

龍牙が地面を叩きつけて叫ぶと、龍牙は昨日の夜、ケースに入っていた青色のドライバーを思い出し、今日持ってきていた事に気づく。

(あれを、使えば奴に勝てるかもしれないねえ……やっつてやるー)

龍牙は立ち上がって、装着していたビルドドライバを外した。

「龍牙……」

「何を？」

ソード達が龍牙がドライバを外した事に驚くと、青色のドライバを装着し、音声
が流れる。

『スクラツシユドライバー!』

「スクラツシユドライバー？」

「何、あのドライバー？」

初めて見たドライバーにみんな戸惑う中、龍牙はドラゴンの絵柄がある小さな袋の
な物——『ドラゴンスクラツシユゼリー』を取り出す。

「もう、これしかねえんだ！」

そう言つてドライバーに、ドラゴンスクラツシユゼリーを『パワープレスロット』に
差し込む。

『ドラゴンゼリー!』

音声がり響き、龍牙は構える。

「変身!!？」

ドライバーに着いていたレンチ型のレバー『アクティベイトレンチ』を下ろすとセツトしていた袋が潰れ、龍牙の体に電流が流れ龍牙にダメージを与える。

「ぐわあああああ！」

「龍牙！」

ソードが龍牙の安否を心配したその時、彼の周りから巨大なピーカーと特殊加工容器『ケミカライドビルダー』が出現する。

『潰れる！流れる！溢れ出る！』

それと同時に液体が投入され、龍牙の体を覆った。

液体が彼の姿を変え、更に頭部からゲル状の液体——『ヴァリアブルゼリー』が放出。それがボディや頭部のパーツ等になり、装着された。

『ドラゴンインクローズチャージ！ブラア！』

「なにあれ？クローズなの……？」

「わからない……」

「もしかして、あれって晴夜君の言っていた最強システム？」

「それがあの姿というのですか？」

今のクローズの姿は今までは青と黒がベースだったのに対して、今は銀色の装甲に覆われた頭部と胸部がクリアブルーへと変わり、頭部がドラゴンを象っているような姿に

なる。

これがクローズの強化形態、『クローズチャージ』だ。

「うおおおおお！なんだ、この力は！負ける気がしねえ!!」

クローズはそのままジコチューに向かって走り出す。

「外見が変わって意味ないのに、ジコチュー！やっちゃいなさい！」

レジーナがジコチューに命令すると、クローズに向けて光線を放つ。だが命中した光線は、クローズには全くダメージがなく、そのまま勢いよく拳を繰り出してジコチューに攻撃した。

「オラア！」

クローズの攻撃はジコチューに命中し、ジコチューを凄いい勢いで吹き飛ばす。

「うそ!?!」

「凄すぎ!?!」

「これが最強システムの力、何ですか?」

ハート達は今のクローズの強さに驚く。

その頃。ビルドとスタークとの勝負も激しくなっていた。

『各駅電車、急行電車、快速電車、海賊電車、発車!』

カイゾクハッシャーで攻撃するビルドだが、スタークは余裕でその攻撃に耐える。

『やるな、前より少しは成長したようだな!』

「時間がない、一気に勝負をつける!」

『ラビットタンクスパークリング!』

ビルドはラビットタンクスパークリングをドライバーにはめ込み、レバーを回す。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

『シユワツと弾ける!ラビットタンクスパークリング!イエー!イエー!』

『ちっ、一番めんどくせえのになりやがって!』

「勝利の法則は、決まった!」

スパークリングフォームになって圧倒的な速さでスタークを攻撃。それによって完全にビルドが優位に立っており、そのままドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

『スパークリングフィニッシュ!』

ビルドによるパンチでのスパークリングフィニッシュが決まり、スタークを吹き飛ばす。

「悪いが、先に行かせて貰うぜ!」

ビルドは急いでスタジオへと向かう。

だが、その様子を見ていたスタークは不敵な笑いを浮かべながら呟く。
『いいぞ……この調子でどんどん強くなってくれよ、晴夜……そして、龍牙……』

一方、スタジオではジコチューを押しているクローズがおり。その間にソードが立ち上がって他の皆に言う。

「四人で一緒にやってみよう！一人じゃ出来ない事も、四人の力を合わせればきつと……！」

「ソード……！」

「さあ！」

ソードの手を掴んだハートが立ち上がる。

「俺と晴夜は、仲間外れかよ！」

「ううん、もちろん二人も一緒よ！」

「私達なら出来る！」

ハートが言うのと、三人が頷く。

すると、そこにアイちゃんが現れ、新たなラビーズが現れる。

「アイちゃん！これは……！」

「新しいラビーズ！」

「よくわかんねえけど、一気に決めてやるぞ！」

「うん！みんな、行くよ！」

ハート達は新たなラビーズをラブハートアローにセットした。

一方のクローズはドライバーのレンチ型レバーを下ろすと、音声が鳴り出す。

『スクラップブレイク！』

「オリアアアアアア！」

クローズの右足に青色のエネルギーが溜まり、ジコチューに向けてキックを放つ。

「二」プリキュア！ラブリーフォースアロー！「二二」

それと同時に四人がラブハートアローの弓を大きく展開させ、台尻の部分の引き金を引き絞ると前にハート型のエネルギー体が出現。四人は相手にウインクしてラブリーフォースアローを発射させた。

クローズのスクラップブレイクとラブリーフォースアローが命中し、ジコチューは浄化された。

プシケーは持ち主の元に戻ると同時に、周りも元に戻った。

「良かった……」

「うん！やったね！」

ハートとソードがハイタッチする。

「はあ、はあ……」

「この、やろー！？」

後ろからビルドが現れ、何かバテている様子のクローズに後ろから蹴りを入れる。

「何すんだ！」

「なに、お前スクラツシユドライバ―使ってんだよ!!」

ビルドが言うのと、後ろから拍手の音が聞こえ、六人は後ろを向くと、拍手をしていたレジーナがいた。

「あたしのジコチューを倒すなんてスゴ〜イ！」

レジーナは自身のジコチューを倒した六人を褒める。

「あなた、この前バラ園で会った……」

「どちら様ですか?」

「君は一体何者なんだ?」

ビルト達が彼女が何者なのか訪ねると、レジーナはそれに答える。

「アタシはレジーナ。キングジコチューの娘よ」

「「「ええっ!?」」」

「マジかよ……」

「キングジコチューの……」

「娘だと……」

レジーナの正体を知ったビルト達が唾然としていると……

「じゃ、まったねー」

そう言つて、レジーナは消えた。

「っ!!? 待ちやがれ! ウツ……!」

「龍牙!」

追いかけようとした時、急にクロローズが倒れ出し、ソードはクロローズに駆け寄った。

「馬鹿やろ……」

それから数日が経ち。映画は完成され、試写会と舞台挨拶が行われた。

「皆さん、本日はご来場していただきまして、誠にありがとうございます。おかげさまでとっても素敵な映画が出来上がりました。」

これも、応援して下さったスタッフやみんな。

そして——頑張り屋さんでひた向きな、かけがえのないパートナーのおかげです」
「どうやら真琴のひた向きの演技は、おおとり環に認められたようだ。」

その後、控え室に戻り晴夜達と合流した。

「嬉しかったようだな。環さんの言葉」

すると、ロイヤルクリスタルが光りだし、おとり環と交換した台本から紫色のロイヤルクリスタルが出て来た。

「ロイヤルクリスタル……!」

「今度は紫か……」

「まるで、呼び合ったりようでしたわ」

「うん!」

「王女様……」

「見つけようぜ、必ず王女様を!」

「ええ!」

これで晴夜達は、三つ目のロイヤルクリスタルを確保したのだった。

次回! Re. ドキドキ&サイエンス!

第17話 レジーナの迷惑な一日

第17話 レジーナの迷惑な一日

いつものジコチュークラブのボウリング場、ボール達三人が何やら何かを始めようとしていた。

「コント・ジコチュー」

と言うボール。

「おい、早くボケろコラ！」

マーモを叩くイーラ。

「そつちがボケなさいよ」

と叩き返すマーモ。

「全員ツッコミじゃコントにならんやろ。このジコチューめ」

「あんたもな（ね）」

「……どうも、ありがとうございました」

と三人が頭を下げる。

「くっだらな」

どうやらレジーナはジコチュートリオのコントがお気に召さなかったようだ。

「お前が何かやれって言ったんだらうが」

「あの小娘、一回どついてやろうかしら」

「よせ、キングジコチュー様の娘だぞ」

イーラとマーモが愚痴を言うのと、ベールが二人を止める。

「あの子がよつぽど面白いわ」

『プリキュア！ハートシュート！』

レジーナはキュアハートの姿を思い浮かべる。

「キュアハート……アタシのものにしようと！」

立ち上がり、キュアハートを自分のものにしようと誓った。

「……あ、そう言えばあの赤色と青色をした子、あれなんていうのかしら？

ねー、アンタ達に聞きたい事があるんだけど」

「何でしょうか？」

「あの赤と青の色の子、なんて言うの？」

レジーナは三人に赤と青の色の子……ビルドについて聞いた。

「赤と青の色のヤツ？……ああ、ビルドか」

「ビルドって言うんだ。強いのか？」

「ええ、おそらくプリキュアの四人よりも強いかと。それに奴はプリキュアではなく、仮面ライダーと呼ばれる存在です」

「もう一人、クローズって奴もいるぜ……」

「クローズ？……ああ、この前いた子ね、あの子は暑苦しくてヤダ」

レジーナはビルドに興味はあるが、クローズには大して興味が無いようだ。

「ビルドね……あの子もアタシの物にしようっとー」

ビルドの方も自分のものになしようとレジーナは決めた。

穏やかで天気がいい日、晴夜と龍牙は学校に向かおうとしていた。

「イテテテテ、体中が痛エ……」

「お前がこの前、勝手にスクラッシュドライバーを使ったからだ」

この前、龍牙がスクラッシュドライバーを使った影響で龍牙は体中が痛むらしい。

「いいか、もうあれで変身するなよ！」

「なんだよ！真琴達のピンチを救ったじゃねえかよ！」

「それが、問題なんだよ」

「はあ？」

何が問題なのかわからない龍牙に晴夜が答える。

「サブキャラのお前が目立つたら、俺のヒーロー感が薄れるだろ！」

晴夜は意味のわからない発言を言う。：結構メタい発言である。

「はあく!?なんだよそれ! って、なんで俺がサブキャラなんだよ! ……つか、スクラツ シュドライバーって何だよ!」

「スクラツシュドライバーはな……」

晴夜がスクラツシュドライバーを説明しようとすると、前の方でマナと六花、真琴が止まっていた。

「あいつら、何やってんだ……」

「とりあえず、行ってみるか……」

二人がマナ達のいる所に向かう、するとそこにはレジーナがいた。

「君は……」

「はぁーい、ビルド……じゃ悪いわね。あなた名前は？」

「桐ヶ谷晴夜……」

晴夜はレジーナに自分の名前を教える。

「この前は酷い目に遭わせてゴメンね」

するとレジーナは晴夜達にそう言うてから微笑む。

「ゴメンで済んだら、プリキュアと仮面ライダーはいらないわ！」

「今度は何を企んで……！」

「戦いに来たんなら……！」

龍牙と六花と真琴が前に出て構える。

「アタシ、マナと晴夜の事がとーっても気に入ったの。

だから……友達にしてあげる！」

二人の目の前でレジーナは、友達になろうと言い出した。

「友達に？」

「してあげる？」

レジーナが言った事に龍牙と真琴と六花は、敵であるのに友達になろうなんて理解出

来なかった。

「嬉しいでしょ？」

「嬉しいわけではないでしょ！」

「真琴の言う通りだ！」

「プリキュア！ラブリンク！」

真琴の体が光り出し、キュアソードへと変身した。

「私はあなたを許さない!」

ソードはレジーナを指差して叫ぶ。

「何怒ってるの?」

「怒るに決まっているでしょ!」

「そうだ、お前達はトランプ王国を……俺達の故郷を……」

しかしレジーナは「そんなの知らないもん」と答え、滅ぼしたのは自分の父親だと言
う。

それを聞いた二人は怒りが込み上げてきた。

「あなたね……!」

「このやろー……!」

龍牙がビルドドライバーを装着しようとした時、

「ストーツプ!」

マナがソードと龍牙とレジーナの間に入る。

「マナ、どいて!」

「とにかく落ち着こう。ね?」

「人が来ない内に……」

「真琴、ひとまず変身を解くビー」

三人言われ、ソードは変身を解き、真琴の姿へと戻った。

「お前もだ、ドライバー外せ」

「……チツ！」

舌打ちすると龍牙もドライバーを外した。

「マナと晴夜とアタシは友達だよ。いいよね？」

「いいよ。友達になろう」

「俺もいいよ。よろしく」

「ちよつと、マナ^{!!}?それに、晴夜君まで^{!!}?」

晴夜とマナは何の迷いも無くレジーナと、友達になる事を受け入れた。

「どうして?この子と友達になるなんて、まさか本気じゃ無いわよね?」

真琴がレジーナと友達なるのを本気なのかと二人に問う。

「本気だよ。レジーナと友達になれたらいいなって思ってる」

マナがそう言うのと、真琴は黙り込む。

「まこびー?」

「信じられない……敵なのよ!マナと晴夜だつて見たでしょ^{!!}?ボロボロにされたトラ

ンプ王国を!」

「うん……」

「でも、何となくだけどレジーナは違う気がするよ……」

「晴夜はレジーナは他のジコチュー達とは違うと言うが……」

「何が違うの？」 キングジコチューの娘なのよ！」

「真琴が真剣に何が違うのか聞きだす。」

「そうなんだけど……その……何か憎めないって言うか……」

「あつ！まこぴー待って！」

「マナと晴夜が何を考えてるのか、全然分からない」

「待てよ、真琴」

「真琴はマナが差し出した手をはたき、先に学校に行き、龍牙も後を追っていった。」

「とりあえず学校に行こう、マナ、晴夜君」

「うん……」

「じゃあ、また後で」

「レジーナ、またね」

「またね」

「晴夜とマナ、六花も学校へと向かった。」

「学校に着くと教室のドアの隙間から覗いていてから、大振りです歩いてくるが真琴は無」

反応。

「完全にまこぴーに嫌われた……」

「仕方ないでしょ」

真琴が何も言ってくれない事にショックを受け、マナは机の上で頬を乗せて涙を流す。

龍牙も晴夜に何故レジーナを受け入れたか聞いた。

「なあ、何であいつと友達になったんだ？」

「先も言ったら、レジーナはあんまり憎めないって、それに敵って感じがあまりしない。ただそれだけだ」

「それだけって……」

「はぁーい！」

「レジーナ！」

話の途中でレジーナが教室に入ってきた。

「どうしたの？」

「遊びに行こつ、マナ、晴夜！」

「えっ？む、無理だから、これから授業……」

「授業なんてサボっちゃえばいいじゃない」

「そう言うワケには……」

マナが言いかけると、レジーナは指を鳴らす。

すると教室のドアを開かないようにして、先生が入れないようにした。

「これで授業出来ないわ」

「ノーッ！」

「まずい！」

すぐさまマナはレジーナを連れて教室から走り去った。

「すいません！すぐ戻ります！」

晴夜は先生に頭を下げ、教室を出てすぐにマナの後を追った。

「大丈夫か、あいつら……」

「心配だわ……」

龍牙と六花は不安を感じ、真琴は二人を黙って見ていた。

その頃、教室の外ではマナと晴夜がレジーナに注意していた。

「ダメだよ学校に来ちゃ！」

「マナと晴夜のためだよ？勉強よりも遊ぶ方が楽しいに決まってる。だからマナのためにやったの、嬉しいでしょ？」

「気持ち分かるけど、とにかく今はダメだから！」

「学校が終わったら付き合うから。ね？」

「分かった……二人がそう言うんならそうするわ」

しぶしぶだが、理解してくれたレジーナは二人の元から離れていった。

「はあ……」

「わかつてくれたかな……」

マナがため息をつき、晴夜が髪をかきながら呟くと、二人は教室へと戻った。

そして放課後へとなり。マナは六花に頼まれ生徒会室へ向かおうとし、晴夜は授業使った機材を片付けを頼まれ、一緒に行こうとする。

「マナ、晴夜、学校終わったよ。遊ぼっ！」

するとレジーナが目の前に現れた。

「生徒会室に寄るからちよつと待っててくれない？」

「俺も、片付けあるから待っててくれない？」

「待てない」

もう少し待つて欲しいという晴夜とマナの頼みを断るレジーナ。

「だからアタシが片付けてあげる！」

「ちよ、ちよつと待つて！」

レジーナが指を鳴らそうとしたがマナが慌てて止める。

「片付けるってまさか……」

「学校を消すの」

衝撃的な発言を軽々しく告げた。

「「ええっ!?」」

晴夜とマナは指を鳴らそうとするレジーナを止める。

「ダメだよ!絶対ダメだから!!」

「そうだよ!」

「どうしてダメなの?マナと晴夜のためなのに」

二人の発言に不思議がるレジーナに我慢できず、六花が説教を言おうとする。

「それはちよつと違うんじゃない?友達なら、二人の都合を考えても——」

「アナタに聞いて無いから」

レジーナが指を鳴らすとバツ印のテープが現れ、六花の口を塞いだ。

「む!むむむむ!」

「六花?」

「行こっ!」

レジーナは晴夜とマナの手を掴み、すぐさま走り去っていた。三人が去って行くのを

見届けた六花はテープを剥がす。

「マナ！晴夜君！もう……」

「早く早く！」

「分かったってば〜！」

「そんなに急がなくても〜！」

その頃、真琴は龍牙と一緒に校舎を出て、車が来るのを待っていた。

「じゃあね、龍牙」

「おお、仕事頑張れよー！」

真琴が校舎前に来た車に乗ろうとすると、マナと晴夜がレジーナに連れられているのを見えた。

「あいつら……」

「いいの？」

「早く出して」

真琴は車に乗り、仕事へと向かった。

「何処行こっか？」

レジーナは二人に何処へ行きたいのかを聞いた。

「ええっ？何処か行きたいところがあるんじゃないの？」

「別に、二人が行きたいところに行ってもいいよ」

「そ、そう。じゃあ街を案内するよ」

マナが街を案内すると言うと、レジーナもオーケーと答え、マナと晴夜が階段を登ろうする。その時、レジーナが指を鳴らすと、階段がエスカレーターの様になった。

「楽チンでしょ？」

それを見た晴夜は「あゝ……どうかな」と困り気味に応える。

その頃、ソリティアではお茶を飲みながら、六花、龍牙がありすに今日の事を話す。

「マナちゃんと晴夜さんがレジーナさんがお友達に？それは何だか、ややこしい事になりましたわね」

「マナと晴夜君、大丈夫かな？」

「だな……」

三人はマナと晴夜の心配をするが…

「だいじょーぶー！」

いきなり後ろからレジーナが現れ、三人が驚いた。

「なんで！ここに？」

「喉が渴いたって言うから」

ドアから晴夜とマナが現れ、彼女が喉が渴いたからと聞いた二人が連れて来たと答える。

「ありすが入れてくれる紅茶はとっても美味しいんだよ」

「じゃ、作って」

ありすの紅茶は美味しいとマナが言うと、レジーナは六花とありすの間に座り、ありすに紅茶を作ってと命じる。

「マナちゃんも晴夜さんのお友達ですもの。美味しい紅茶をお入れしますわ。」

しばしばお待ちくださいな」

「えー？アタシは今すぐ飲みたの！」

「急いでは、美味しい紅茶は飲めませんわ」

ありすはレジーナに言うと、レジーナは仕方なく待つ事にした。

「はあく、仕方ないわね。じゃ、そのアンタ何か食べるもの持ってきて」

「え、俺か？」

レジーナが龍牙に指を指しながら命ずる。

「いいから、早く」

「なんで俺が!」

(龍牙頼む、後で、バナナとヨーグルトとやるから!)

晴夜がモーションで持ってきてもらう様に伝えると、龍牙はそれを察知した。

「……つたく」

龍牙は仕方なく立ち上がり、何か食べるものがないかソリティアの中に入る。

「この子名前は?」

「アイちゃんだよ」

マナがアイちゃんを抱きながら紹介すると、レジーナを見たアイちゃんが微笑んだ。

「カワイイ〜!」

「遊んであげてよ。シャルル、お願い」

「オツケーシャル」

コミュニケーションが変わったシャルルにラビーズをセットし、円を描くと音符が出現。音符から流れた音に合わせて、アイちゃんだけでなく、妖精達とレジーナも楽しそうに踊り出した。

「何ボサつとしてんの? 紅茶、早く作ってよ」

「え? あ、はい」

そう言うつてからまた一緒に踊り出した。それから、しばらくアイちゃんと一緒に遊び

続けるレジーナ。

「ねえ、あれからまこぴーと話した？」

六花がマナに聞くと仕事に忙しくて話していないみたいだ。

「そっか……」

「ちよつと、アタシのマナと馴れ馴れしく話さないでくれる？」

「アタシのつて……マナはモノじゃないわ。それに私はマナの幼馴染で——」

「マナの友達にはアタシよ。だから……あなたはもうお払い箱なの」

レジーナは六花を指差して言う。

「はあ!?」

「六花……」

「マナ、行こつ! 晴夜も!」

そう言うレジーナは二人の手を掴み、そのままどこか行ってしまった。

「レジーナさん、もうすぐ紅茶が——」

「いらな——い」

「みんな、ゴメーン!」

レジーナ達が行ってしばらくして食べ物を見つけた龍牙がソリティアから出てきた。

「おい、食べ物見つ——つてあれ? 晴夜達は何処いった?」

「さつき、走って行ったわよ」

「はあ!?!……何だよそれ!」

「やはり、一筋縄では行きませんわね」

それから、しばらく経ち。『ぶたのしつぽ亭』で真琴の曲を聴きながら、マナが机の上で涙を流していた。

「まこぴー!」

「そんなにまこぴーに会いたいなら、もうレジーナと友達になるのを止めたら?」

六花が提案を出すと、「それはダメ」とマナが言った。

「どうしてですか?」

「友達だよって言うレジーナの言葉、嘘じゃないと思ったし……友達になれるってビビって来ちゃったんだもん」

「ビビってどう言う事?」

「うーん……」

「きちんと思っている事を真琴さんに伝えませんか」と

ありすが言うが、マナはどう伝えればいいか頭を抱えて悩む。

「とにかく、相手がトランプ王国を滅ぼしたのは事実なんだし、まこぴーがレジーナを許

せないのは当然よ」

「うん……でも、敵と友達になつちやダメなのかな？」

「ダメって事は無いけど……」

「とても難しいと思いますよ」

「まこぴー、どうしてるかな……」

「気になるなら、私達が様子見て来ようか？」

「本当？ だったら、これ」

マナは立ち上がり、紙袋を六花に渡す。

「これ、まこぴーに渡してくれる？」

「オツケー」

「はぁーい、マナー！」

同時にレジーナが店に入ってきて、マナの手を掴み、外へ出る。

「六花、ありす、お願いね！」

マナが見えなくなると、六花とありすはため息をついた。

一方、いつもの地下室では。

「なあ、いつまでレジーナのワガママに付き合うつもりだよ！」

龍牙が何やら作業していた晴夜に、何時までレジーナのワガママに付き合うのかと尋ねる。

「さあな、でもワガママなだけで、やっぱりそんなに悪い奴とは思えない……」

晴夜がそう言うのと、龍牙がため息をつく。

「つたく、本当お前って超が付くほどお人好しだよな」

龍牙が呆れながら呟く。

「それで、今何やってんだよ？」

龍牙は今やっている作業について聞くと、晴夜が答えようとする。

「ちよつと、試してみたい事を……」

「はぁーい、晴夜！」

突然、後ろからレジーナが現れ、後ろにマナもいた。

「レジーナ！ どうして？ ここに？」

「マナに教えてもらったの。さあ、美味しいものを食べに行こう！」

「ちよ、待って、まだ作業が……」

晴夜の言葉を聞かずにレジーナが晴夜の腕を掴み、外に出る。

「お、おい。あいつ本当に大丈夫か？」

その後、アイス屋に着いた三人はアイスを食べていた。

「美味しい！マナ、これすっごく美味しい！」

アイスを食べて喜ぶレジーナ。

「でしょ？このアイスはこの辺では一番なんだから」

「初めて来たけど、確かに美味しいなこのアイス」

「さっすがアタシの友達。使える〜」

「どうせなら、頼りになるって言って欲しいな〜……」

そして三人は外に出て、イスに座る。

「他のも美味しいよ。六花はチョコチップ。ありすはミント。まこぴーはベリー味が好きなんだ」

「確か龍牙はバニラが好きとかいってたな」

「へえ〜」

と二人がみんなが好きなアイスの味を言うと、レジーナの機嫌が悪くなった。

「どうして？」

「「えっ？」」

「あなた達はアタシの友達でしょ？なのにどうして他の子の事を考えるの？」

「レジーナ……」

「他の子なんていらなの」

「ちよつと待つて、それはちが——!」

「それは違うよ」

「アナタ……」

「晴夜君……」

マナがレジーナの考えは違うと言おうとした時、先に晴夜が違うと言った。

「自分が気に入られないからって理由でそういう考えは違うと思うよ!」

「うるさいうるさい! いらぬ物は消しちゃえばいいのよ!」

そう叫ぶと、レジーナが立ち上がる。

「まずはあいづらを消して、あなた達をアタシの物にする」

そう言つて、レジーナは二人の前から消えていった。

「レジーナ!」

「ごめん……少し言い過ぎたかも」

晴夜が先の発言は言い過ぎたとマナに謝る。

「ううん、晴夜君の言つた事は正しかったよ」

「そうか……それより、レジーナは何処に行つたんだろ?」

「……まさか……!」

晴夜はレジーナがどこへ行ったか察し。すぐさまビルドフォンにボトルを差し込む。
『ビルドチェンジ!』

マシビルダーと変形し、ヘルメットのボタンを押すとヘルメットが二つ現れ、その内の一つをマナに渡す。

「どうしたの?」

「カンだけど、わかる気がする。レジーナが行った所が」

「はっ!?」

マナも何処にレジーナが行ったか察し、ヘルメットを被ると後ろに乗り、晴夜がエンジンをかけ走り出した。

一方その頃。撮影場では、真琴が仕事をしていた。

「マナからの連絡は無いビィ」

「そんな事聞いて無いでしょ?」

真琴が休憩の合間にマナから連絡があったか確かめるが、連絡は無かった。

「まっぴー」

と声が聞こえた真琴が振り向くと六花とありす、龍牙がドアの前に立って手を振っていた。

「はい、差し入れ」

「マナちゃん特製のオムライスですわ」とありすが中身を言うと六花が紙袋を真琴に渡す。

「どうして作った本人は来ないの？それに晴夜も！」

「それは……」

真琴はすぐに二人はレジーナと一緒だと察した。

「私、マナと晴夜が分からない」

「俺達もよくわからないし、晴夜自身も分からないってよ」

「えっ？」

真琴が驚くと、続けて六花が言う。

「マナもね、レジーナと友達になれる直感があるみたい」

六花が言うにマナの直感は、昔から侮れないらしい。

「初めて見たカニジコチューにお説教をしたと言う人ですから。頭で考えるよりも、心で感じたことを信じてまっすぐ行動しているのですよね……」

「でも相手はキングジコチューの娘だし、そう上手くは行かないわよね……」

「心配にならねえか、マナや晴夜が」

龍牙が言う通り、確かに真琴は晴夜とマナの事が気になっていた。

すると、後ろから「見ーっけ！」と声が聞こえ、四人が後ろを振り向くとレジーナの姿があった。

「レジーナ！」

レジーナはそのまま、降りて着地する。

「マナと晴夜の友達は大アタシだけでいいの」

彼女が現れると同時にスタッフの一人が入ってきた。

「スポンサーから、差し入れてくす」

「あー！丁度いい！あなたを素敵なジコチューにしてあげる！」

そう言って彼女は、たまたま差し入れ持つて来たスタッフのプシユケーを黒く染めた。

取り出されたプシユケーがびび割れ、缶のジコチューが作り出された。

「それと、コレはサービス！」

「それは、人をスマツシユに変える…」

「やめろ！」

レジーナは今度はスチームブレードをスタッフに向けてガスを発射し、スタッフはスマツシユへと変わった。

「あなた達邪魔だから、消えちゃって」

レジーナが作り出したスマッシュとジコチューが暴れ出す。

一方、晴夜とマナもジコチューが現れたことを知る。

「ジコチューが現れたシヤル！」

「みんな……」

「マナ！捕まってる！」

マシンビルダーのスピードを上げ、ジコチューが現れた場所へと向かう。

「みんな、行くよ！」

六花が言うと、六花達三人はラビーズをコミュニケーションにセットし、龍牙はドライバーを装着し、クローズドラゴンにボトルを差し込み、そのままドライバーに差す。

『ウエイクアップ！クローズドラゴン！』

『Are you ready?』

「変身！」

「『プリキュア！ラブリンク！』」

龍牙の体にドライバーから形成されたアーマーが装着され、六花達三人は体が光に包まれ、プリキュアへと姿を変えた。

『Wake up burning! Get CROSS—Z DRAGON! Yea h!』

「英知の光! キュアダイヤモンド!」

「陽だまりポカポカ! キュアロゼッタ!」

「勇気の刃! キュアソード!」

全員の変身を完了すると、ジコチューの頭のプルタブが開き、そこから缶が連射され、ダイヤモンド達は跳躍してかわす。

「差し入れは無理矢理押し付けるもんじゃないでしょ!」

「まさしくジコチューですわ。何て自分勝手な……!」

「ラブハートアロー!」

ロゼッタがラブハートアローを出すと、ラビーズをセットする。

「プリキュア! ロゼッタリフレクション!」

ロゼッタリフレクションを発動させて攻撃を防ぐも、防ぎきれず破れてしまう。

一方、スマッシュと戦っていたクローズ。だが、スマッシュの方が優先な様子だった。

「こいつ、今までのスマッシュより強え……」

「そうでしょう! スタークが強化してくれたから」

スタークにより、強化されたスマッシュユーースマッシュハザードによってクローズは

追い込まれ、スマツシユはそのままクローズを倒れていたダイヤモンド達の所まで吹き飛ばし、クローズは変身解除まで追い込まれた。

「くそっ！ならー！」

龍牙がスクラツシユドライバーを装着しようとするが……

「いい気味ね」

レジーナは倒れていた四人にトドメを刺そうとジコチューに命令する。

トドメを刺そうとしたその時、エネルギー弾がジコチューに命中した。

「誰!?」

放たれた方を見ると、ホークガトリンガーを持った晴夜とマナがマシンビルダーに乗って現れ、マシンビルダーを停める。

「みんな！大丈夫か?」

「みんな!」

二人がみんな方へ駆け寄ると、レジーナが二人の前に現れる。

「ねえマナ、晴夜。アタシ二人のために色んなことをいつぱいしてあげたよね?今度は二人の番だよ。アタシのために、この子達の友達を辞めて。いいよね?」

レジーナがマナと晴夜の二人に六花や龍牙、ありす、真琴との友達を辞めてと提案するが……

「嫌だ……」

「マナ……」

「ん？何？」

「辞めないよ！絶対友達辞めない！」

マナがそう言うのとマナはラブビーズをコミュニケーションにセットした。

「プリキュア！ラブリンク！」

マナの体が光に包まれ、キュアハートへと姿を変えた。

「みなぎる愛！キュアハート！」

「愛を無くした悲しい差し入れさん！このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻して見せる！」

ハートが決め台詞を言うと晴夜は龍牙の方に駆け寄り、スクラツシユドライバーを構える龍牙の腕を掴む。

「やめろ！」

「何すんだよ！」

「これ以上、それで変身するとお前の身体が保たないんだ！」

「えっ！！？」

「どう言うことなの？」

「なんで、身体が保たないの？」

ソードとハートが理由を尋ねると、晴夜がスクラツシユドライバーについて話す。

「スクラツシユドライバーは、確かにビルドドライバー以上にボトルの力をフルに使える」

「でしたら、こちらの方が……」

「でも、その代わり変身者のアドレナリンが一気に上がり、自分でも力の抑えが利かなくなる。それが続くと身体がボロボロになるんだ」

それを聞いた瞬間、全員が啞然となる。

「どうして……どうして、そんな物を作ったの？」

ソードが聞くと、晴夜が答える。

「本当は……俺が使うはずだった」

「え？」

晴夜はスクラツシユドライバーは自分が使うつもりだったと話す。

「その力を使いこなせるようになれば、トランプ王国を取り戻せるように……」

「その必要ねえ……」

すると龍牙が、晴夜が使う必要は無いと言う。

「お前、一人にカッコつけさせねえよ！そんなもん、俺が乗り越えてやるよ！」

「龍牙……」

「それに、このゼリーの成分はドラゴン……つまり、俺のдарろ！」

龍牙がそう叫ぶと、晴夜はため息を吐きながら髪をかく。

「はあく……最悪だ。つたく、おいしい台詞言いやがつて」

晴夜は龍牙の腕を持ち上げ、龍牙の立たせる。

「何かあつたら、俺が全力で止める」

「頼むぜ！相棒！」

龍牙が拳を出すと晴夜も拳を出し龍牙の拳に当てる。

「ちよつと、晴夜！」

「ごめんな、レジーナ。俺には相棒を……友達を裏切れない！」

「どうして……」

「行くぞ！」

「おお！」

二人がドライバーを装着し、晴夜はラビットタンクスパークリングを、龍牙はドラゴンスクラッシュゼリーをドライバーに差し込む。

『ラビットタンクスパークリング！』

『ドラゴンゼリー！』

晴夜の周りにスナップライドビルダーが出現し、ランナーからアーマーが形成され、龍牙の周りにはビーカーが現れた。

『Are you ready?』

「変身！」

晴夜の体にアーマーが装着され、龍牙の方はビーカーに青い液が投入され、ビーカーが割れると頭部からゲル状の液が噴出し、それがボディとなつて装着され、音声が鳴り響く。

『シユワツと弾ける！ラビットタンクスパークリング！イエイ！イエイ！』

『潰れる！流れる！溢れ出る！ドラゴンインククローズチャージ！ブラア！』

二人が変身を完了すると、クローズチャージから電流が流れてクローズの身体にダメージを与える。

「グウウ……こんなバチバチ、なんてことはねえー!!」

クローズが自分の身体に強く拳をぶつけると、身体から電流が消えた。

「お前……」

「……いける！力を抑えることが出来る！」

クローズが反撃に出て、襲つてきたスマッシュを吹き飛ばす。

「あいつ、本当乗り越えやがった……」

ビルドが感心していると、ジコチューが攻撃して来た。

ハートとビルドに当たると思っていたが、クロースとダイヤモンド達三人に命中してしまった。

「みんな！」

「マナ、晴夜、あなたたちのせいだよ。みんな可愛そう」

当たったのが二人のせいだとレジーナが言うが…

「マナや晴夜君のせいじゃない……マナと晴夜君の友達になったのは、なりたいたいと思ったのは私のほうなんだから！」

「私達は、自ら望んでマナちゃんと晴夜さんと共にいるのです！この程度の困難は、承知の上ですわ！」

「ダイヤモンド……」

「ロゼッタ……」

ハートとビルドはそう呟くと…

「レジーナ、違うよ。あたしの大事な人を消すなんて、そんなの友達がする事じゃない！」

「どうして逆らうの？？どうして言う通りにしないの！友達なのに！」

レジーナがマナにどうして自分の言うとおりにしないのかと言うと、ビルドが反論す

る。

「友達だから！本当の友達になりたい、だから本音をぶつける！間違っているなら全力で止める！」

「聞きたくない！」

レジーナが言うのとスマッシュハザードこと、アイスマッシュハザードが氷の氷柱をハートとビルドに向けて放つと、ソードとクローズがそれを防ぎ切り落とした。

「聞きなさい！友達なら、相手の話を聞くべきよ！」

「相手の事を考えやるそれも友達だろ！」

「ソード、龍牙君……」

「もう、アタシに説教しないで！」

「レジーナ……仕方ないな、ちよつと説教しないと伝わらないか！」

ビルドは只の話し合いでは伝わらないと感じた。

「ハート、晴夜、行くよ！」

「うん！」

「オーケー！」

「こつちもオーケー！」

「ですわ！」

「こつちもいいぜ！」

皆が気合いを入れると…

「龍牙、ツインブレイカーを出せ！」

「ツインブレイカー？」

何のことだかわからなかったクローズ、すると左腕から青い液体が集まり、武器と
なつて現れた。

『ツインブレイカー！』

「おお！すげえ！」

ツインブレイカーを出現させたクローズはそのままジコチューとスマツシュに攻撃
する。

「オラア！」

『ビームモード！』

ツインブレイカーのモードが変わると、砲撃に変わり、ジコチューとスマツシュに命
中させ、相手の態勢を大きく崩す。

それを見たレジーナは驚きを隠せなかった。

「卑怯よ！そんな力を持つてるなんて！」

「いや、こういう作りだったんだけど……とにかく、一気に決めるぞ！」

「うんー！」

「「「ラブハートアロー！」」」

四人がラブハートアローを出現させ、ラビーズをセットした。

「「「プリキュア！ラブリーフォーアロー！」」」

そして、ビルドはドライバーのレバーを回し、クローズはレンチを降ろした。

『Ready go!』

高く二人がジャンプし、キックの態勢に入る。

『スパークリングフィニッシュュ！』

『スクラップブレイク！』

「「はあああああはあ！」」

ラブフォーアローとスパークリングフィニッシュュ、スクラップブレイクがジコチュートスマッシュに命中し、ジコチュートは浄化された。

そして、ビルドはエンプティボトルの栓を回し、スマッシュから成分を抜き取り、元の姿に戻してプシュケーも持ち主の元に戻るとあたりの光景も元に戻った。

そして、ビルドがレジーナの方を向く。

「レジーナ、俺たちと……本当の友達になろう」

「何それ？意味わかんない！」

レジーナはそう言つて消え去つていった。

その後、撮影が終わると真琴は今後レジーナについてマナと晴夜に聞く。

「まだ、レジーナと友達続けるの?」

「自分でもどうかと思うけど、あたし、あの子が根つからの悪い子だと思えないの」
そう真琴に言うと、やっぱりレジーナを敵対視できないとマナは言う。

「でもあたし、トランプ王国のためなら何だつてするし!」

「俺も、そのために俺はこれからも戦つていく!」

「私はレジーナの事、絶対許せないわ。いくらマナと晴夜の友達でも。」

……これが私の本音だけど、いい?」

「えっ?」

「本当の友達は、本音をぶつけるんでしょ?だから、ぶつけてみたんだけど」

「まこぴ〜!」

マナは号泣しだした。

「後、差し入れのオムライス多過ぎ、一人じゃ食べきれないわ」

「どうやら、差し入れで作ったマナのオムライスの量が多かったとマナに言うと食べるのを手伝つて、と頼み込む。」

本当の友達だからこそ、本音を言える友達がいる。今日の事は六人の友情が固いもの

だと知った日だった。

その頃、一人の少年が大貝町に着いた。

その少年の手には、ロボットの絵柄が描かれているスクラツシユゼリーが握られている。

「久しぶりだな、大貝町……あいつら、元気してるかな？」

果たして、この少年は一体何者なのか……

次回！Re・ドキドキ&サイエンス！

第18話 三人の幼馴染への帰還、現れる黄金のライダー！

第18話 三人の幼馴染への帰還、現れる黄金のライダー!

ジコチューのアジトにある総一郎の部屋では、総一郎が机に自分の使っているコブラボトルと同じ色をしたボトルがいくつか置かれていた。

「さあつて、ビルドとクローズも強くなったところでこいつを試してみるか?」

そして、城とクワガタ、フクロウの絵柄が描かれている3本のボトルを手にとって掲げた。

「これで、また面白くなるな」

総一郎は、何かを楽しんでいるかのような口調でそう呟くのだった。

その頃、晴夜達はソリティアに集まり、三つのクリスタルを眺めながら話し合っていた。

「クリスタルは今は三つ……」

「あと、いくつクリスタルがあるのかしら?」

あといくつクリスタルがあるのかと六花が呟くと、みんなが考える。

「なあ、まこぴー、クリスタルってトランプ王国でいくつあったか覚えてないのか?」

「ごめんなさい、私と龍牙も一度しか見てないからよく覚えてないの」

「そうか……」

真琴と龍牙も一度しか見てないから正確な数がわからないと言って、またみんなが悩むと、ダビイがDBへと変身した。

「真琴、そろそろ時間よ!」

「わかった、ごめん。これから撮影なの」

「そんな……じゃあ今日の夜。家にご飯食べにきてよ!」

「わかった。必ず行くね!」

真琴がマナに今日の夜ご飯を食べに来ると言って、DBと共に仕事へと向かった。

「真琴さん、最近少し忙しくなりましたわね」

「あいつの分まで、俺達が頑張るしかねえな!」

「そうだな」

龍牙が言うとう全員が頷いた。

一方、メモを見ながらソリティアへ向かって歩いている一人の少年がいた。

「えつくと、ソリティアって店が確かこの辺りに……？」

少年がソリティアに近づくと、少年が仕事に向かう真琴の車が目に入る。

「あれは、まさか……気のせいか」

先ほど見たのは気のせいだと思い、それからしばらくして、少年はソリティアの前に到着した。

「……か……」

「あれ、お客さんかい？」

「アイー！」

出かけていたジョー岡田とアイちゃんがソリティアの前にいた少年に話しかける。

「あんたは？」

「この店のオーナーのジョー岡田です、よろしく。で、この子はアイちゃん」

「アイー！」

ジョーとアイちゃんが自己紹介する。

「俺は別に客じゃない、ただ、この店に友達がいるからって聞いたから来ただけだ」

それに対して少年は客じゃないとジョーに言う。

「そうか、まあ、とりあえず入ってよ」

ジョーが少年をソリティアに入れる。

「あ、お兄さん、アイちゃんお帰りなさい。

……つて、あれ?」

「どうした? ん?」

「誰だあいつ?」

上にいた晴夜達がジョーが帰ってきたのを確認するが、晴夜と龍牙は隣の少年の方が気になっていた。

すると…

「「かずやん(和也さん)!!」」

マナと六花、ありすが少年をそれぞれ『かずやん』、『和也』と叫ぶ。

「よう!」

「えっ! 知り合いなのか?」

晴夜が少年について聞くと…

「彼は沢田和也。私とマナは『かずやん』って呼んでいて、小学校の時から私達の幼馴染よ。でも、2年くらい前に家の農家の事情で引っ越しちゃたの」

六花が和也の事を紹介してくれた。

「へえ、農家なんだ」

「なあ、農家って何だ?」

「野菜を栽培して店とかに売ったりしている仕事を農家と言うのです」
ありすが農家について、龍牙に説明した。

「うちもかずやんの家で取れた野菜をよく使ってたの」
「そうだな……所で、お前ら二人知らねえ顔だな」

和也が晴夜と龍牙の方を見る。

「自己紹介がまだだったな、俺は桐ヶ谷晴夜。この春に引越してきたんだ。で、こいつは上城龍牙、俺の助手」

「誰が助手だ！」

「だって、お前うちの居候だろ」

龍牙と晴夜のいつものやり取りが始まった。

「面白い奴らだな。沢田和也だ、よろしくな」

二人のいつものじゃれ合う姿を見て、面白いという和也が彼らに自己紹介する。

「和也さん、どうしてこの町に戻ってきたんですか？」

「ああ、じいちゃん達とこれから一緒に仕事するって事になったから、この町に戻る事になったんだ」

大貝町に戻った理由をありすに説明した。

「でも、なんでここに私たちがいるってわかったの？」

「さつき『ぶたのしつぽ亭』にいったら、みんなここにいてあゆみさんから聞いてな、ここに来たんだ」

和也がソリティアにきた理由を話す。

その後、和也とマナ達と小さな頃の話や自分の家の仕事の事などを話してくれた。

しかし和也はこれから用があると行って、ソリティアを後にして出ると、入れ替わるようにセバスチャンが入ってきた。

「皆さん！大貝町の南区で、スマッシュが三体现れました！」

「えっ!?？」

晴夜は急いでビルドフォンを見る。確かにスマッシュの反応はある。

更に…

「大変でフランス〜！」

「同じ所からジコチューの闇の鼓動も聞こえるシャル！」

「えー！」

「急ぐぞー！」

晴夜が言うのと、マナ達も領き急いで立ち上がってソリティアを出てジコチューとスマッシュ達の元へと急ぐ。

「……あいつら、あんなに急いでどこに行くんだ？」

ソリティアを出て、まだ近くにいた和也が急いで出て行く晴夜達を見て、疑問に思う。

その頃、町の方ではジコチュー……ロボットジコチューと三体のスマッシュが暴れていた。

「いいぞー！もつとやれー！」

急いで町へ向かった晴夜達が到着し、連絡を受けた真琴も合流した。

そこではジコチューと三体のスマッシュが、町の人たちを襲っていたのが見えた。

「何？あのスマッシュ、今までとは姿が違うー！」

六花の言う通り、相手は城とフクロウ、そしてクワガタがモチーフのスマッシュで、今までのスマッシュとは違う感じがした。

「とにかく、スマッシュから成分を取ってジコチューを止めるぞー！」

「うん！みんな！行くよ！」

晴夜とマナが言うのと、晴夜と龍牙がビルドドライバーとスクラッシュドライバーを装着し、マナ達四人はコミュニケーションに変身用ラビーズをセットした。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

『ドラゴンゼリー！』

「変身！」

「プリキュア！ラブリック！」

晴夜と龍牙にアーマーが装着され、マナ達四人の体が光に包まれると、プリキュアへと姿が変わり、皆んなの変身が完了した。

『ラビットタンク！イエーイ！』

『ドラゴンインクローズチャージ！ブラア！』

『みなぎる愛！キュアハート！』

『英知の光！キュアダイヤモンド！』

『陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！』

『勇気の刃！キュアソード！』

「『響け！愛の鼓動！ドキドキプリキュア！』」

「愛を失くした悲しいロボットさんとスマッシュユさん達！このキュアハートがあなた達
のドキドキ、取り戻してみせる！」

ハートが胸にハートマークを作りジコチューとスマッシュユ達に言う。

「いけえ！お前ら！」

イーラの指示でジコチューとスマッシュユ達がビルド達に襲いかかる。

最初はフクロウタイプのスマッシュユが飛びながら突進してきた。

全員避けるが、今度はクワガタがモチーフのスマッシュユ——スタッグスマッシュユが後

ろから二本の剣『ラプチャーシザース』でソードとダイヤモンドに攻撃する。

「うわあああああ！」

「ダイヤモンド！ソード！」

クローズが二人に駆け寄る。

「大丈夫か！このヤロー！」

クローズはスマツシユに攻撃しようとするが、スタッグスマツシユが避けるとその後ろでキャツスルススマツシユが頭部の砲撃ユニット『カタプルタキヤノン』を構えており、エネルギー波をクローズに向けて放つ。

「何？！ぐわあ！」

クローズはエネルギー波を正面から受けてしまう。

「龍牙君！」

「余所見している場合か！」

「ジコ〜！」

今度はロボットジコチューがハートとビルドに襲いかかる。うする。

「プリキュア！ロゼッタリフレクション！」

ロゼッタがロゼッタリフレクションを展開し、ロボットジコチューの攻撃を防ぐ。

すると、後ろから最初に突進してきたフクロウのスマツシユ——オウルスマツシユが

後ろから突進してきた。

「まずい!」

『タカ!ガトリング!ベストマッチ!』

ビルドはドライバースーツにタカボトルとガトリングボトルを差し込み、レバーを回す。

「ビルドアップ!」

『ホークガトリング!イエーイ!』

ホークガトリングへとフォームチェンジし、ホークガトリングを構えてオウルスマッシュに放つがスマッシュの勢いは止まらず、ビルドとハートに体当たりし、ロゼッタと衝突するとロゼッタリフレクションが解除され、ジコチューの攻撃まで受けてしまった。

「何だよ、こいつら強え!」

「でも、諦めるわけにはいかないわ!」

「ええ、まだいけるわ!」

「ああ、ここからだ!」

ビルド達は諦めずスマッシュとジコチューに立ち向かう、心は折れていない。

すると、離れた所で泣いている少女の姿が見えた。

それに反応したキャッスルスマッシュが、少女にエネルギー波を放つ態勢に入ろうと

する。

「まさか……!」

「早く逃げて!」

全員が少女に逃げるように叫ぶが、スマツシユは少女が逃げる前にエネルギー波を放つ。

すると、一人の男が少女を庇いエネルギー波を回避した。

「和也さん!」

少女を庇い、助けたのは和也だった。

「大丈夫か?」

「うん……ありがとう、お兄さん!」

和也にお礼を言った少女は急いで走って逃げ、和也が確認すると、スマツシユ達の方を向く。

「こいつらか、あの子を泣かせてるのは……」

突然、和也が何かを握ってジコチューとスマツシユの前に現れた。

「あの、ドライバー……まさか……!」

和也の手に握られていたものに全員の目が奪われる。それは、スクラツシユドライバードだった。

そのままドライバーを腰に装置し、音声が響く。

『スクラッシュシユドライバー！』

和也は懐から取り出したスクラッシュシユゼリーの栓を回し、ドライバーに差し込む。

『ロボットゼリー！』

和也はジコチュー達に指を指し向けながら高々と叫ぶ。

「変身!!?」

和也がドライバーのレンチ型レバーを下げると、巨大なビーカーが出現し、黄色の液体が和也の体を覆う。そしてビーカーが割れると黄色の液体がスーツとなり、その後頭から黒いゲル状の液体が噴出し、それがアーマーとなつて装着された。

『潰れる！流れる！溢れ出る！ロボットイングリスイブラー！』

「仮面ライダー……」

「マジかよ……」

「和也さんが……」

「変身した……!」

和也が仮面ライダーへと変身した事に全員が驚き、何を言えbaikかわからず、絶句していた。

「 그리스、見参。テメエらを心の火……心火だ……心火を燃やしてぶつ潰す!」

和也が変身した姿は、金色のスーツを纏い。頭部・胸部はクリアブラックでより機械的な装甲になっており、自ら 그리스 と名乗る。

「新しい仮面ライダーだど!? お前らやれ!」

イーラが指示を出すと、スマッシュユが 그리스 に襲いかかる。

そのまま 그리스 に攻撃するが、 그리스 には全然効いてない様子だった。

「こんなもんか、全然足らねえな」

그리스 が反撃に出て、スマッシュユに拳を繰り出す。

『ツインブレイカー!』

黄色の液体が集まり、 그리스 の左腕からツインブレイカーが形成された。

『アタックモード!』

音声が鳴ると 그리스 はツインブレイカーでスマッシュユにダメージを与える。

『ビームモード!』

그리스 がモードを変えると、ビルドと同じフルボトルを出した。

「ボトル?」

ビルドが言うところ、 그리스 はボトルをスクラッシュユドライバーの差し込む。

『ヘリコプター! デイスチャー! ジボトル! 潰れな〜い!』

『デイスチャー! ジクラッシュユ!』

グリスの右腕からヘリコプターのプロペラが形成され、そのプロペラが回り出し空中に浮きながら、ツインブレイカーでビームを放つ。

その後、プロペラを消して着地し、グリスはドライバーにスクラッシュゼリーをもう一度差し込む。

「これで終わりにしてやる」

そう言うところグリスはドライバーのレンチを下ろした。

『スクラッシュファイニッシュ！』

グリスの左右の肩のパーツである『マシンパックスホルダー』から黒い液——ヴァリアブルゼリーが発射され、その勢いのまま三体のスマッシュに向かってキックの態勢に入った。

「オリアアアアアアア！」

スクラッシュファイニッシュが決まり、三体のスマッシュに命中した。

「マジ、強え……！」

「それだけじゃない、あいつはスクラッシュドライバの力を使いこなしている」

「あ〜！もう〜！ジコチューいけええ！」

ロボットジコチューが襲い掛かろうとする。

「なら、俺たちはこつちを決めますか！」

ビルドはドリルクラッシュャーを出してガンモードにし、ボトルを取り出すと、ハート達四人はラブハートアローを出現させる。

『Ready go!』

『クローズドラゴン! Ready go!』

ビルドはシリンドラーを回したホークガトリンダーを右に持ち、左に持ったドリルクラッシュャーにボトルを差し、クローズはツインブレイカーにクローズドラゴンを差し込む。

『フルバレット!』

『ボルテック ブレイク!』

『レッツブレイク!』

「二」プリキュア!ラブリーフォースアロー!「三」

ラブハートアローの弓を大きく展開させ、台尻部分の引き金を引き絞り、前面にハート形のエネルギー体を生成される。

相手にウインクし、ラブリーフォースアローを放った。

そのままビルドとクローズ、ハート達の技が命中し、ロボットジコチューは浄化され、プシケューは元の相手の所に戻った。

「クソッ!覚えてろよ!」

イーラは捨て台詞を言って去っていった。

ビルドはグリスが倒したスマツシユから成分を採取しようとエンプティボトルの栓を回し、スマツシユに向ける。

しかし、スマツシユから成分は採取されなかった。

「ん？なんで、採取出来ないんだ？」

ビルドが悩むと、スマツシユから何か出て来て、それと同時にスマツシユは元の人の姿に戻った。クローズが出て来たものを拾うと、それはボトルだった。

しかし、普段ビルドが使うボトルと異なり、キャップ部が茶色になっていて、ボトルを保護する外装パーツは紫のクリア素材で構成され、成分を表すエングレーブは銀色になっている。

「ボトル？ぐわあー！」

「龍牙！」

ビルドが何者かに攻撃されて倒れたクローズに駆け寄る。

『よう、久しぶり……でもないか』

「スターク！」

突然、スタークが現れ、先程クローズが拾ったスマツシユから出てきたボトルを奪う。

『おつかれさん、このボトルは回収させてもらぞ、俺の研究に必要なだからな。』

じゃあ、チャオ〜!」

スタークは黒い煙を纏い、消えていった。

「何を考えてるんだ……?」

スタークが消えると晴夜と龍牙、そして和也はドライバーからボトルとゼリーを抜き、晴夜は和也に近づく。

「そのドライバー、何処で手に入れた?」

晴夜がドライバーをどこで見つけたと和也に聞く。

「ああ、うちの家の畑の土の中にケース」と埋もれていたのを俺が見つけたんだ」
「埋まっていたのか!」

「試しに使ってみたら、変身出来た。それだけだ」

龍牙の突っ込みは置いといて、和也がドライバーについて話すと晴夜は「そのドライバーを見せてくれ」と頼む、和也は自分のドライバーを晴夜に見せる。

「どうなんだ?」

ドライバーを見ていた晴夜に龍牙が近づく。

「おそらく、これは父さんが作ったものだ」

晴夜はこのドライバーは自分の父：拓人が作った物だと言う。

「なんで、博士のだってわかるんだよ」

龍牙はなぜこのドライバーが晴夜の父が作った物だと尋ねる。

「父さんのデータにスクラツシユドライバーとロボツトスクラツシユゼリーを完成させたと記載がされてある。おそらくそれがこのドライバーだろ。」

「……地面に埋まっていた理由はまだ分からないけど」

晴夜が説明すると龍牙達は納得し、晴夜は和也にドライバーを返す。

「そんな事はどうでもいいとして、マナと六花、ありす、その姿は何だ?」

「えっ?」

なんと、和也はハート達がマナ達——幼馴染三人組だと気付いていたようだ。

「何のことでしょうか?」

ロゼッタがそう言っつて誤魔化すが…

「とぼけるな、その声に喋り方、あと俺の名前を知ってる事、それとありす、お前の戦い方、一緒に柔道習っていた俺が知らないわけないだろ」

実は和也はありすと一緒に柔道をやっていたらしく、ロゼッタの戦い方がそれと同じだと思っつて確信になったと言う。

「仕方ないわ、この際かすやんにも話そう」

「そうだね」

ハート達は和也に全てを打ち明ける。自分達が今は伝説の戦士プリキュアである事、

ジコチュー達やスマッシュと戦っている事、ソードとクロースの故郷のトランプ王国を取り戻すために今はロイヤルクリスタルを集めている事を話した。

「なるほどな。あんま信じられねえが、こんなドライバーやあんな力を見せられた以上信じるしかねえな」

「和也さん……」

マナ達がやろうとしていることはあまりにも過酷なので、もしかしたら協力してくれないかもしれないと全員が思っていたが……

「まあ、でも幼馴染の仲として俺も協力するぜ！」

「本当！ やった！ これで仲間が増えた！」

和也が協力すると言ってハート達が喜ぶと、そのままハート達も変身解除した。すると、和也が変身解除した真琴の方に目に写る。

「ん？ んん！ でヒイ！」

和也が真琴に近づき、自分の携帯のホーム画面と真琴を何度も見る。

「でヒイ！ やっぱり間違えない!!」

和也が笑顔になった顔を手で隠し、その後自分の携帯のホーム画面の真琴の写真と見返す。

「まこびーだ！ まこびーだ!! イエー!!!」

「……………えっ?」

『えっ?』

「へっ? あ!?? むむ!」

真琴を見てハイテンションになる和也。すぐに真琴を方を向いてピシツとなる。

「沢田和也! 14歳! あなたのライブを生で初めて見た時から心火を燃やしてフオーリンラブでした!」

和也はどうやら真琴のフアンのようだ。

「あ、握手して下さい!」

「は、はあ……………」

「やったああああ!! まこぴーに握手してもらったぜ! イエーイ!!」

真琴が和也が握手して、握手を終えた和也はさらにテンションが上がる。再び真琴の方を向くと…

「まこぴー任せて下さい! この沢田和也が心火を燃やして、あなたの故郷のトランプ王国を取り戻してみせます!」

「あ、ありがとう……………」

和也が真琴に言うのと晴夜やマナ達の方を向く。

「あ、これからよろしくな」

和也は笑顔でみんなに言う。

新たな仲間。仮面ライダーグリス・沢田和也が仲間になり、ジコチュー達と戦う仲間が増えたのだった。

次回！Re・ドキドキ&サイエンス！

第19話 狙われたクリスタルとジヨールの正体

第18. 5話 超バトルSS・兄貴への恩返し!誕生クマテレビ!

マナの実家の料理店である『ぶたのしっぽ亭』にて、仮面ライダーグリスこと 沢田和也とマナと六花、ありすの四人は、和也の持っていたボトルについて話をしていた。

「えーつと、これがかずやんが持っているボトル全部?」

「ああ」

今、マナ達の前には和也の所有するボトル:その三つが机の上に置かれていた。

その内の1本のボトルを六花が持ち上げて見ている。

「このボトルは……消しゴム?」

六花が持つボトルは消しゴムボトルと言われているものだった。

「それでこちらは……ヘリコプターですわね」

「この間の戦いで使っていたボトルだね」

ありすとマナも机からヘリコプターボトルと呼ばれているボトルを見ていた。

「これらのボトルって、スクラッシュドライバールとロボットゼリーと一緒にケースに入ってたのよね?」

「そう言う事だ。ドライバーを使っていた時に試しに使ってみたりしたんだ」
六花の問いに和也はそう答える。

「あつちで変身した時はどんな感じで使ってたの？」

今度はマナが和也に問いかけた。

「あくそうだな……このヘリコプターのボトルは烟を荒らすカラスとかを追い出す時に使って、この消しゴムのボトルは……姿を消して畑泥棒を脅かす時に使ったな」

「ほとんど畑関連だし……」

「和也さんらしいですね」

六花はライダーの力を烟を守るのに使っていることに少し複雑な気分になった。

「それじゃあく……これは何のボトルなの？」

マナは三つのボトルのうちの最後の一本を見せた。

「このボトルは……ウマでランスか？」

「どう見てもクマでケル！」

ラケルがボトルの名前を間違えたランスに突っ込んでいると……

「おまたせ〜」

「晴夜君」

ドアが開かれ、中に入ってくるのは晴夜と龍牙、そして……

「ああ!!まこぴーだあ〜〜!」

「えつと…………どうも…………」

真琴が入って来たことによりさつきまでとは違い、無駄にテンションが高くなった和也。

そしてそのテンションの高さに思わずたじろぐ真琴。

「ああ!あなたの歌う唄はきつとこの世の全てを虜にする力があるに違いない!何故なら俺の火のように燃え上がる心はすでにあなたに取られるのだからー!!」

何故か急にミュージカル風に語り出した和也。

「あ…………うん…………」

その姿を見て苦笑いする真琴。

「いや、何言ってるんだお前」

それに突っ込みを入れる龍牙。

「ハア!?何ってさつき言った通りだろうが!」

まこぴーの歌は正にサイコーだって事をなあ!!」

龍牙の突っ込みに反応する和也。

「…………なあみんな!この間手に入れたボトルの成分の浄化が終わったんだ!見てくれ!」

和也をスルーして浄化したボトルを見せる晴夜。

「おい晴夜！聞いてんのか！俺の溢れんばかりのまこぴー愛をよお!!」

「ハイハイ、聞いてますよ」

「ねえ晴夜君、今回のボトルってどんなものなの？」

マナはこのボトルの成分は何なのかを聞いた。

「これか？このボトルの成分はくくくズバリ、テレビだ!!」

「テレビ？」

「テレビって、あのテレビですか？」

六花とありすは晴夜に聞き返した。

「ああそうなんだ！さあ、一体何のボトルとベストマッチするんだ」

晴夜は頭をかきながら喋っていると…

「あのか、失礼します」

突然、ドアが開き、一人の少年が入って来た。

「あつ、もしかしてお客様？」

マナは少年にそう聞くと…

「いえ、ここに沢田和也って人が来ているって聞いたんで来たんですけど……」

どうやらこの少年は和也を探しに来たようだ。

「ん?俺のこと呼んだか?」

和也は少年の前に来ると…

「!!…あ…ああ……………」

突然、少年の様子がおかしくなってしまう。

「おっおい、どうしたんだよ。具合でも悪いのか?」

和也は少年を心配して近づくと…

「会いたかったですううう……………!!!」

「げふう?!?!」

「かずやん!?!」

少年がいきなり和也のお腹にタツクルして来た。

「やっど!やっど会えました!兄貴イ!!」

「あ…」

「兄貴イ?」

「知り合いか和也?」

「いや……別に……」

龍牙の問いに和也はそう答えると…

「何言ってるんですか兄貴イ！俺ですよ！俺俺!!」

「……オレオレ詐偽？」

「違いますよ!!土方真直郎ですよ!!」

「ひじかた、ますろう……？」

正直ピンときてなかったのか、和也が少し考えていると…

「……あそつか、名前言つて無かったな。え〜つと、ほらっ！半年前に俺がヤンキーに絡

まれていた時に！」

「……!!ああ!!お前、あの時の!!」

「はい!そうです！」

どうやら和也はこの少年が誰なのか思い出したようだ。

「そうかそうか!あの時の!おばあちゃんは元気か？」

「ハイ!元気です！」

「えっ、知り合いか？」

晴夜は和也に知り合いなのかを聞く。

「まあな、俺があつちで農家の手伝いをしているって言つてたよな？」

「ああ」

「そんな時に出会ったのがこいつだ」

仰向けになっていた和也は真直郎を退かして話し始めた：

それは、和也が家の農家の事情で引越してから1年半近くが経った時の事。

和也が家の近くで散歩していると：

『おいゴラア!!どこ見て歩いてんだよババア!!』

『そうだぞコノヤロー!顎門パイセンの腰に何当たってんだよああ!!』

『す…すみません、すみません!』

『うう…』

何やら怒っている様子のヤンキー二人と、そのヤンキーに謝っているおばあさんと自分より一つ下の孫らしき少年が怯えているのが見えた。

『あくあ、こりあ慰謝料請求しないとなあ?』

『とりあえず有り金全部寄せゴラア!!』

『そ…そんな…』

『お…おばあちゃん…』

ヤンキーがおばあさんに金を要求していると…

『おい、お前ら』

『ああああん!?!』

『!!』

その様子を見ていた和也は、ヤンキーを呼んで注意を引いた。

『なんだテメエ☒どこ中だよ!!』

『顎門パイセンに馴れ馴れしくお前呼ばわりするんじゃねえよ!!』

『……』

ヤンキーと和也との間に緊張感が漂うと…

『……おい、お前』

『えっ?』

突然、和也は一つ下の少年に声をかけた。

『さっさと行け』

『えっ!?!』

和也は少年におばあさんと一緒に逃げる様に言う。

『でっでも!それじゃあんたは……!』

今、和也の前にいるヤンキーは明らかに高校生ぐらいであり、喧嘩を売った場合、和

也がどうなるかは…

『はっ!俺を誰だと思ってるんだ!!』

『俺は!!農家の息子、沢田和也サマだぞ!!この程度の奴らなんて事はねえ!!』

『!!』

それを聞いた少年…真直郎は和也のセリフが胸の奥底まで響いた!

真直郎は理解した、この人ならきつと大丈夫だと。

真直郎は和也の言った事が頭ではなく、『心』で理解した!!

『さあ、さっさと逃げなあ!』

『はいっ!!』

そう言うとき真直郎は自分の祖母を連れて逃げて行った。

『ふうく…行つたか…』

『…おいテメエ、何やってんだコノヤロー』

『せつかくのカネヅルが行つちまつただろうがああん!』

ヤンキー二人は和也に迫る。

『そんな事はどうでも良い…』

『はあ!?!』

『だが、せめてものお詫びだ…祭りを楽しもうじゃねえか…』

それを聞いたヤンキーは…

『祭りだあ？なーに言ってるんだテメエ!?』

『ぶっ殺してやる!!』

怒り心頭になって二人がかりで和也に殴り掛かってくるが…

『オラア!!』

『グベエ!!』

『ば…パイセンんんん!!?!』

二人のパンチを空ぶつたと思つたら、いつのまにか殴られていた、な…何を言っているのか分からないと思うが（ry。

『どうした…その程度じゃあ…俺を満足なんざできねえぞ…』

『ゲツ!!』

『最大!』

『グツ!!』

『無限!』

『ぼばあ!!?』

『極致!』

『ぐべらああ
!!!!???』

『どうした……俺は!心火燃^燃やさなくても!まだまだいけるぞおお!!』

『ぐつはああああああああ!!!』

『パイセエエエエエんツツ!!!』

『はっ!農家舐めんな!!』

「……つて言うことがあったんだ」

「そんなことが……」

「でも最後のつて……」

「うん……」

「なんていうか……」

「途中からお前のワンサイドゲームになってんじゃねーか」

そして和也の話を聞いていたマナ、真琴、六花、ありす、晴夜の感想が以上の通りである。

「……まあ、そんなことがあって兄貴にお礼がしたくて地元からここまで来たっす!」

「へー」

「地元から……なんですぐにお礼に行かなかったの?」

六花の質問に真直郎は…

「……ええ、実は俺も直ぐにお礼に行きたかったんですけど、家の手伝いやら、学校の補修やらで忙しくて……」

「あーなるほどね〜」

「それは仕方ないことですね」

「……仕方ないことなのか？」

龍牙はマナとありすに対してそう突っ込みを入れる。

「そしてやっと一段落入ったと思ったら……」

「すでに半年かかっっていて、当のかずやんは居なくなっちゃったと……」

そう言う六花。

「だから俺！あなたにお礼を言うためにここまで来たっス!!」

「おおーそうか、お疲れさん」

和也は真直郎に労いの言葉をかける。

「すごい！かずやんにお礼を言うためにここまで来るなんて！」

「普通、こつちに来てまでお礼を言おうとする人はそうそう居ないからな」

そしてマナと晴夜は真直郎に感心していた。

「だから俺！兄貴に恩返しを！あの時の恩を返したいんです!!」

真直郎は和也にそう言うど…

「……いや、しなくても良い」

「……えっ!?!」

「かずやん!?!」

真直郎とマナは和也の言葉に驚いていた。

「……お前は俺のために、お礼を言いに来たんだよな」

「……はい」

「だったら、俺への恩返しはそれで十分だ!」

「へ?」

「俺がやったことは人助けをした……ただそれだけだ!」

たったそれだけの為にわざわざ遠い場所から来たんだろ?

……だから恩返しなんてしなくても十分俺は嬉しいし、気持ちも十分に伝わって

る」

「…………でも」

「……それじゃあこうしよう、俺が困った時は是非俺の手伝いをして欲しい」

「!!」

「そして、俺への恩を思いっきり返してくれ!」

「……はい、分かりました！」

家族へのお土産を買うためと言って、真直郎が居なくなつた後、晴夜は和也に聞いた。

「……なあ、良かったのか？あれで」

「何がだ？」

「だって、ここに来てやつとお前に会えたって言うのに、やったことがお礼だけって……
本当に納得してんのか？あいつ」

「……確かに、かずやんは大したことないって言ったけど、彼にとっては凄く大きなこと
だったんじゃないの？」

晴夜とマナはそう言う……

(……晴夜とマナの言う通り、お礼だけってのもあれだったかも……)

和也は直ぐに真直郎を見つけに行こうとすると……

「ジコチューの闇の鼓動が聞こえるシャル！」

「!？」

タイミング悪くジコチューが現れたそうだ。

「……ちっ!!」

「みんな行くよ！」

マナたちはジコチューを止める為にぶたのしつぽ亭を出た。

一方その頃、真直郎は公園のベンチに座って考え事をしていた。

(……兄貴は困ったら頼ってくれって言ってたけど、俺に出来ることって一体なんだろう……)

どうやら真直郎は和也にどうすれば役に立てるのかを考えていたようだ。

「よっ!何か元気がないようだな〜少年!」

「!?!」

真直郎は後ろを振り向くとそこには総一郎が居た。

「あんた誰……?」

「俺か?俺は只の通りすがりのおじさんだ。

……それよりも君、なんだか困ってる様だな〜」

「……俺は別に困ってなんか——」

「いや、嘘を言っても俺には分かるぞ〜、大方誰かの役に立つにはどうすれば良いのかを考えていたところ……ってどこかな!」

「……」

「そんな少年くんの良いものをあげよう!」

「えっ?」

総一郎が取り出したのは、膨らんだ形をしており、棘が描かれているボトルであった。浄化前のボトル、スマッシュボトルである。

「こいつを使えばきつとお前の憧れの人の助けになれるぞ!」

「でも……」

真直郎は受け取りを拒否しようとしたが、その時……

「ジコチュー!」

「ええ!」

近くで巨大なハチの化け物、ハチジコチューが飛んでいた。

「なっ、なんだあれ!」

突然現れた化け物に驚いていると……

「居たぞ!」

「……えっ!?!」

するとそこに晴夜達が現れた。

「あの人達はレストランにいた……しかも兄貴まで!」

真直郎は草陰に隠れて晴夜達の様子を見ていると……

「現れたわね!プリキュア!仮面ライダー!」

(プリキュア? 仮面ライダー?)

化け物と一緒にいた女性の言っていた言葉に疑問を抱いた。

「みんな行くよ!」

マナがみんなに言うのと、晴夜と龍牙と和也がそれぞれビルドドライバーとスクラツシユドドライバーを装着し、マナ達四人はコミュニケーションに変身用ラビーズにセットした。

『ラビッツ! タンク! ベストマッチ!』

『ドラゴンゼリー!』

『ロボットゼリー!』

『Are you ready?』

『変身!』

『プリキュア! ラブリンク!』

晴夜と龍牙と和也にアーマーが装着され、マナ達四人の体が光に包まれると、プリキュアへと姿が変わり変身が完了した。

『鋼のムーンサルト! ラビッツタンク! イエイ!』

『潰れる! 流れる! 溢れ出る! ドラゴンインクローズチャージ! ブラア!』

『潰れる! 流れる! 溢れ出る! ロボットイングリス! ブラア!』

『みなぎる愛! キュアハート!』

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

「陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

「勇気の刃！キュアソード！」

「響け！愛の鼓動！ドキドキプリキュア！」

「愛を無くした悲しいハチさん！このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻し見せる！」

ハートは手でハートを作り、いつもの決め台詞を言う。

（ええええええ!!?へんつ、へんしんつて！ええええええ!!??）

真直郎は目の前で起こっていることに驚きを隠せず^{!!}にいた。

総一郎は真直郎の後ろで囁く、悪魔の契約でもするかのように……

「どうだくすごいだろ……あれがプリキュアと……仮面ライダーだ」

「あれが……」

するとビルド達はハチジコチューに挑んで行った。

（すげえ……あんな化け物になんのためらいもなく突っ込んで行っちゃったよ……）

ビルド達は勇敢に立ち向かうが……

「ジ〜コチュー〜♪」

「クソっ届かねえ!」

「なんて素早いのだ!」

ジコチューの動きが素早く、飛んでいてなかなか攻撃が当たらないでいた。

(あ……兄貴達が苦戦している!どうすればー)

『俺が困った時は是非俺の手伝いをして欲しい』

その時、真直郎は和也が言っていたことを思い出していた。

「…覚悟は決めたか?」

「……はい」

「そうかくそれじゃあ、これを自分の身体にかける、それだけで力が手に入る」

真直郎は総一郎からスマッシュロボトルを受け取り、晴夜達の所へ行った。

「!?お……お前は!」

「真直郎君!」

一方、ビルド達は突然出てきた真直郎に驚いていた。

「……兄貴、さっき俺に言いましたよね? 『俺が困った時は是非俺の手伝いをして欲しい』って……」

「なに？」

「今がその時っす！」

真直郎はスマツシユボトルを自分の身体に振りまけた。

「!?おい!それって……」

「うっ、うっうわああああああああ!!!」

すると真直郎の身体が変化していき、その身をアイスマツシユへと変化させた。

「あらラツキー、スマツシユになったのね」

「何が起こったの!?!」

「あいつ、自分の身体に浄化前のボトルを振りまけたんだ!」

「つまり、浄化前のボトルを振りかけたことで、再びスマツシユになった、ってことかよ

……」

「そんな……」

ビルド達が啞然としていると……

「ウガアアアアア!!」

アイスマツシユがビルド達へと襲いかかってきた。

「おい晴夜!こいつ襲いかかってきたぞ!!」

「やっぱり自我を失っているんだ!」

ビルドがグリスにそう言っ手伝おうとすると…

「ダメだ!!」

「はあ!？」

「こいつがスマツシユになったのは俺のせいだ……だから、俺が落とし前を付ける!」

「ちよ!何言ってんだお前!」

「……最悪だ」

『ツインブレイカー!』

ツインブレイカーを出現させたグリスはボトルを1本取り出して差そうとする。

「グルオオオオ!!」

「ぐあっ!!」

しかし、アイスマツシユは氷柱状のような矢の攻撃を無数に発射してきて、グリスはそれによりボトルを落としてしまう。

「クソっ!」

「アア……ヴァニギ」

「!!」

「喋ったぞこいつ!」

（自我が僅かに残ってるのか?）

「アアア〜ウ、ウガアアアアア!!」

するとアイススマッシュはハート達が戦っていたジコチューへと攻撃を始めた。

「ジコツ!!」

「ちよ!?!何すんのよこいつ!!」

マーモはいきなりこつちに攻撃してきたスマッシュに文句を言う。

「スマッシュがジコチューを!?!」

「きつと、真直郎君はまだ自分を失ってないんだよ!だから今、あたし達の手伝いをしてくれた!」

ソードが驚いていると、ハートは真直郎がまだ完全に自我を失っていないのだと言う。

「真直郎……」

グリスは思わず彼の名前を呟くが…

「グルオオオガアアア!!」

アイススマッシュは再びビルド達に襲いかかってきた。

「くそっ!またかよ!!」

グリスはアイススマッシュに向けて構えると…

「和也!!」

ビルドはドリルクラッシュャーをガンモードにしてスマッシュに攻撃した、

そしてビルドはグリスに向かって叫んだ！

「何一人で、戦おうとしてんだよ！俺達はチームだろうが！」

「……………」

「お前があいつに対して申し訳ないって思う気持ちは分かる！だが、俺達をもっと頼れよ！」

「晴夜……………」

「おい晴夜あ!!」

するとクローズが先ほどグリスが落としてボトルをビルドに渡した。

「それとさっき浄化したボトルをええ！パリピボトルだ!!」

「……………テレビボトルのことを言ってるのか？」

「……………それだ！」

クローズはビルドにグリスのボトルークマボトルとビルドの持つテレビボトルを
使えと言う。

「……………でもなんでテレビと……………クマなんだ？」

「感だ！俺の第・六・感!!」

「答えになってないじゃんそれ……………大丈夫かなあ」

ビルドはとりあえずクローズの言うとおりに、クマとテレビのボトルをドライバーに差

し込む。

『クマ!テレビ!ベストマッチ!』

「ええ〜!!ベストマッチになっちゃったよ…」

ビルドはそう言うと、そのままレバーを回し、アーマーが形成された。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

二つのアーマーが合体し、ビルドに装着され再び音声 flowed。

『ハチミツハイビジョン!クマテレビ!イエー!』

ビルドの左複眼は熊の顔と手がモチーフになっており、右複眼がテレビを模しているものとなり、右手には鉤爪が付いていて、ボディは複数のテレビが並んでおり、そこにビルドマークが映し出されている姿になっていた。

これがビルドの変身した『クマテレビフォーム』である。

「あれがクマとテレビのボトルの力?」

「どんな戦い方をするのでしょうか?」

ダイヤとロゼッタはビルドの新フォームを見て、どんなものなのか気になっていた。

「それがクマテレビか……よし!行くぞ晴夜!」

「よーし、行くkへザザツ——>……ん?」

「な、なんだ？」

ビルドが攻撃しようとする、突然、左肩の大型テレビからノイズ音が聞こえてきた。

『——ボトルの中から世界を見つめる番組　クマテレビ』

「えっなんだこれ」

左肩のテレビから何かの番組が始まった様だ。

『——皆さんこんにちは、「ボトルの中から世界を見つめる番組　クマテレビ」のメインキャスターを務めます、わたくし、「テレビさん」と申します。』

すると、テレビにアナログテレビ型の被り物を装着した女性が出て来た。

「……え？なんなのあれ？」

「ジコ……？」

ジコチュー達も困惑していた。

『これから、皆さんの悩みにわたくしが答えていきます。』

それでは、あなたの悩みをぶった蹴り！』

「もしかして、今回のフォームって……」

「ずっとあんな感じなのかしら？」

『——まず始めに、今回の敵について説明していきます。』

今回のスマッシュ、アイススマッシュには体内に氷を生み出す器官が備わっており、

戦闘時は「アイシクルチルアロー」という氷柱状の矢を大量に発射して周囲を凍結させる戦法を得意としています。」

「へえ、そうなのか、よくわからないけど」

クローズはテレビを聞いていたが、よくわかってなかった。

「グオオオオオオ!!」

「おい晴夜!!こっちきたぞ!」

再びアイスマッシュがビルドに襲ってきた。

「おっと!」

ビルドはクマテレビの右手に付いている鉤爪を盾にしてスマッシュの攻撃を防いだ。

「オラアア!!」

クローズがスマッシュの隙を見つけて攻撃するが…

「オラッ!って硬っ!」

「グシャアアアアアアアアアアアア!!」

アイスマッシュはクローズの前に氷の壁を作って攻撃を防いでおり、更にはクローズを胸の辺りまで凍らせてしまった。

「うわっ!冷たっ!……って、凍ってるー!!」

クローズは体の半分を凍らされ、それに戸惑っていると…

『ー続いてはショートアニメをご覧下さい。ー』

…どうやらショートアニメが始まるようだ。

「はあ!?!なんでこんな時にアニメなんてやるんだよ!」

「いや知らないよ」

ビルドとクローズが言い合っている…

『——『なんか静かですね』——』

「ウガアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「こっちは全然静かじゃないけどね!」

ビルドはアイスマッシュの攻撃を防ぎながらテレビの中の少年に突っ込んだ。

『——『街にはギャラルホルンも居ないし、本部とはえらい違いだ……』

『ああ、火星の戦力も件並み向こうに回してんのかもな……』

『まあ、もうそんなこと関係ないですけどね!』

『上機嫌だな?』

『そりやそうですよ!みんな助かるし、タカキも頑張ってるし!俺も頑張らないと』

——

「……俺達は何を見せられているんだよ!?!ていうかタカキって誰だよ!!」

「だから知らないよ!」

「グオオオオオオオ!!」

『———そうだ、俺たちが今まで積み上げてきたもんは全部無駄じゃなかった。これから俺たちが立ち止まらないかぎり、道は続く———』

「グルオオ!!」

「うげっ!?!」

テレビでショートアニメを放送している最中にビルドは攻撃を受けてしまったその時、

『———ぐっ!!』———』

「連動した!?!」

『———『うおお〜!』バンバンバン!———』

「グガア!?!」

するとテレビから銃弾が出てきてスマツシユを攻撃した。

「うわっ! テレビに銃撃された!?!」

「いわゆる3Dテレビというものでしょうか?」

「3Dの域を超えているよねこれ!?!」

「なるほど、このように攻撃することもできるのか!」

ビルドはそう言って再びテレビを見ると…

「BGMー『フリージア』ー」

『——『だからよ、止まるんじやねえぞ……』（キボノハナー）——』

「「……死んでるー!!?」

先程銃を撃ったスーツの男性が何故か左手人差し指を指したまま、うつ伏せになり画面内で死んでいた。

『——続いては——』

「えっ！今ので終わりかよ!?!」

「……とりあえずさっきのように攻撃してみよう!」

ビルドはそう言うと、テレビから熊の手を出してスマッシュを攻撃した。

しかし、アイスマッシュは直ぐに氷の障壁を作つて防御するので、あまりダメージを与えられない。

「くそっ！あの氷の力をなんとかしないと——」

『——おや?どうやらお手紙が届いたようですね。』

「……手紙?」

「誰の?」

『——えー、ペンネーム「突撃!真つ直ぐトラック」さんからのおたよりです——』

「まっ……真つ直ぐ?」

「真っ直ぐ……ますぐ……」

「——もしかして、真直郎君?」

ビルド達は手紙の相手が真直郎ではないかと睨んでいた。

『——俺には、憧れている人がいます。』——』

「……」

『——その人は堂々としていて、凄く強くて、とても頼りになる人で、あの時も俺のこ
とを助けてくれたつす。』

——だから俺、あの人の助けになりたくて、あのボトルの力を使ったつす。』——』

『——でも結局、俺がバカなせいで兄貴に迷惑をかけてしまったつす。こんな事したく
無いのに、体が上手く動かないつす。俺はただ、兄貴の役に立ちたかっただけなのに』

「……」——』

『——だから、兄貴は謝らないで下さい。』——』

「……えっ」

『——兄貴は自分のせいだつて言ってるつすけど、俺がこんな姿になったのも、迷惑を
掛けてるのも、全部俺のせいつすから』——』

『——兄貴は何も悪くないつす、もし謝ったら俺は兄貴を許さないつす。だから俺のこ』

とは気にしないで下さい、だって——』——

『——『兄貴はいつだって、最高にカッコよくて……カッコイイ兄貴ですから——！』——』

「……カッコいいって、2回も言ってんじゃねえよ……」

「和也……」

「かずやん……」

「——おい晴夜！」

「!!」

「俺は、あいつを全力で止める。だから、——お前も手伝ってくれ!!」

「……言われなくてもやるつもりだったよ」

「へっ、そうかよ！」

「それじゃあ——』——では、続いてのコーナーです——』いや空気読めやああああ!!」
完全に二人と一緒にスマッシュを倒す流れだったのに、テレビによる横槍が入ってしまい、ぐだぐだな雰囲気になってしまう。

『——『レディース!アード!ジェントルマン!今回お呼びするのは、新時代のニューウェーブ!「飛電インテリジェンス」のお二人です——』——』

すると画面の横から二人の男女が出てきた。

『——『どうもくー!みんなー!今日は見に来てくれてありがとう、「飛電インテリジエン」の社長、「アルトしやちよー」です!そして——』——』

『——『アルトしやちよーの秘書を務めています、「イズ」と申します』——』
どうやら二人はお笑い芸人のようだ。

『——『ハイ!皆さん、この間うちの会社で沢山の社員が就職して来てくれました!そこでこの俺、アルトしやちよーが直々に新社員の挨拶に行っただんですよー。そして社員の皆の前でこう言っただんです!』——』

『——『輝け!これでみんなも「しんにゅーシャイーン!!」……ってね』——』

「「「……えっ?」」」

『——『ハイッ!アルトじゃくないと!』——』

男性が画面の方に指を指してポーズを決めた。

「……しんにゅー、シャイーン……ねえ、あれってどう言う意味?」

「……いや、あたしもちよつとわからないな」

ソードとハートがギャグの意味を考えていると…

『——』今のギャグは「新入社員」と、太陽と言う意味の「シャイン」を掛けた、実にユーモア溢れるギャグで——』

『——』ちよつ！ギャグの解説しないで!?』——』

「あら、どうやらギャグの解説をしてくれてるみたいですね」

「……結構キツそうね……」

「………何よこの茶番、ジコチュー！早いとこプリキュアを————ん?」

マーモは、殆ど戦いを放棄していたハート達にジコチューをけしかけようとしたが……

「~~~~~ツツツツツツツツツツツツツツ!!」プルプルプル

肝心のハチジコチューは、何かに耐えているかのように体を震わせている感じで。し

かも、顔を見せてたまるかと言わんばかりにそっぽを向いていた。

「えっ?どうしたのあのジコチュー……」

「……もしかして、笑うのを我慢しているの?」

「……………いやいやいや、そんなわけないじゃない!……ないわよね?……えっ、嘘でしょあんた!?」

「……」

ハート達の戦いがほぼ中断しちゃっている一方、ビルド達の戦いは混沌を極めていた。

「グオオオオオオオオオ!!」

「おい!もうこんなことはやめろ!本当はこんなことやりたくないんだろ!!」

「くそっ!全然おさまる気がしねえぞ!」

「……おい、いつまでここで凍ってればいいんだろ、出してくれろ」

両手に氷の塊を付けて攻撃をしているアイスマッシュを止めようとビルドとグリスが戦い、未だに下半身が凍ったままのクローズが助けを呼んでいた。

「龍牙!?今ちよつと忙しいから待っててくれ!」

「いや俺、結構待ってるんだけど?」

アイスマッシュの氷の能力をなんとかしないと倒すことが出来ないと考えているが……

『——次のコーナーは「教えて!ブラッドせんせー」をお送りします。』

『『ブラッドせんせー』だあ?』

「今度は何が……まさか……」

クローズはどんなものが放送されるのかを見ていたが、ビルドは番組コーナーのタイトルを聞いて、何かに気付いたようだった。

『——「教えて!ブラッドせんせー!」——』

『——『——チャオ♪みんな大好きブラッドせんせーだよー!』——』
 「やっぱアンタかよおおお!!」

画面に出てきたのは、地味に豪華なソファアーに寝転がっているスタークの姿だった。

『——『これから君達に戦いのサポートとなるヒントを、教えるゾイ☆』——』

「ゾイってなんだよ!」というかあんたがサポートするって時点で、もはや不安しかねえよ!」

ビルドがそう言うのとスタークはソファアーから起き上がり、声のトーンを変えて喋り出した。

『——『……まあ、お前らが俺の話を聞かないのは勝手だ。』

だがそうなった場合、誰がお前ら二人の代わりに戦うと思う?』——』

「『えっ?』」

『——『上城だ。上城は自分だけが凍らされてお前らの役に立てていないことを気にしている、だから全力でスマッシュを倒そうとするだろう。だが上城は現在進行形で凍らされているからそもそも動くことが出来ない』——』

「『……』」

『——『ビルド、お前は俺の言う事を聞くしかないんだよ』——』

「『……なんかそのセリフ言うのはまだ早すぎる気がする』」

「どうゆう意味だよそれ……」

クローズとグリスが言い合っている……

「グオオオオオオオオオ!!」

「クツ!……いいから早く言ってくれ!!」

アイススマッシュを止める為にビルドは仕方なく、スタークのヒントを聞き出そうとした。

『——』「よし、それじゃ一回しか言わないからよーく聞くんぞぞ! いいか? 一回だけだぞ? 一回だけだからな? 本当に一回だけだからな!」——』

「わかったから早く言えよ!」

『——』「……あくでもなく、すぐに言うのも何だか面白くないしなくぶつちやつけ言うのがめんどくさいしでも言わないとこのコーナーが成立しないしなく……うーん、やっぱ止めるか? いやいや、それだどこいつらが可愛そうだしなあ」——』

「グガアアアアアア!!」

「早くしろやああああああ!!」

これが完全にこの状態を楽しんでいるスタークの図、である。

『——』「しよーがねーなく、じゃ言うぞ?……」「氷に不純物が入ると強度が下がる」——』

「……………えっ!?それだけかよ!」

「……………氷に…不純物……………そうだ!」

クローズはヒントの短さに文句を言ったが、ビルドはこれだけで何かに気付いたようだ。

『——『気付いたようだなくそれじゃこのコーナーはこれでおしまい!来週も見てくれよなく……………ちなみにあの少年にボトルを渡したのは俺だwww』——』

『——ハイ、お疲れ様でした。』

スタークは最後に笑いながらそう言うのとテレビの画面が元のコーナーに戻った。

「……………いや、お前のせいかなぁああああああ!!」

そしてグリスはボトルを渡した犯人がスタークである事に怒りを感じていた。

「グオオオオオオオオオ!!」

「……………だがこれで勝利の法則は決まった!」

ビルドはそう言うのと右腕の『ジャイアントハニーアーム』から大量の蜂蜜を出して、攻撃してきたスマッシュを怯ませた。

「えっ!熊の腕からハチミツが出てきた!」

「熊はハチミツが好き、と言うところをモチーフにしたのでしょうか?」

「グウウウ…」

「ウオオオオオオ!」

グリスがスマッシュが怯んでいる隙に攻撃をしてきた。

それに気付いたアイススマッシュは再び氷壁を出して防御しようとした。

「オラア!」

「!?」

しかし、先程と違い簡単に氷壁が壊れてしまい、グリスの攻撃を受けてしまった。

「おお!なんかさつきより氷が脆くなってる!!」

「氷に蜂蜜を混ぜて強度を下げた!これで簡単に突破できるぞ!」

ビルドがそういうと、グリスはそのままスマッシュに攻撃を続けた。

その隙にビルドはクローズの氷を溶かす為にドリルクラッシャーを取り出し、ボトルを装填した。

『消防車!Ready go!』

『ボルテックブレイク!』

「ちよつと熱いぞ!」

そう言うくとクローズに向けて、ガンモードにしたドリルクラッシャーから炎を撃ち込んで氷を溶かした。

「ちよ、あつつ!あつあつ!熱いんですけど!」

「だから熱いって言ったじゃん」

一方グリスは、アイススマッシュにパンチとツインブレイカーによる攻撃を繰り広げていた。

「最善！」

「グウウ!!？」

「全力！」

「ゴガア！」

「救済！」

「アギィ!!？」

「——お前は俺に謝るなと言ったな……」

「グ、ヴウウウウ……」

「お前の望み通り、絶対に謝らないぞ、その代わり……」

そしてグリスはそのまま、スマッシュにツインブレイカーを叩き込んだ。

「俺は全力でお前を助けるぞ！真直郎おおお!!」

「ガアアアアアア!!？」

スマッシュはそのまま地面を転がっていき、それを見ていたクローズはツインブレイカーを出し、ロックボトルを装着した。

『ビームモード!』

『シングル!』

ボトルを差し込んだクロズは、ビームモードにしたブレイカーをスマッシュに向けて放った。

『シングルフィンッシュ!』

そして、ブレイカーから出た鎖状のエネルギー体がスマッシュを拘束した。

「晴夜!和也!いまだ!!」

「よし!これでフィンッシュだ!」

ビルドがそう言うのとドライバーのレバーを回して必殺技の準備をした。それと一緒にグリスもスクラッシュユードライバーのレンチを下げた。

『Ready go!』

『ボルテック フィニッシュ!イエーイ!』

『スクラッシュフィンッシュ!』

ビルドの左肩に付いているテレビの画面から出現した『熊出没注意』を模した看板を通り抜けると、ビルドの体が巨大化する。そのままビルドはアイススマッシュに向けて巨大化した爪によるアッパーカットを叩き込んだ。

さらに、左右の肩のパーツからヴァリアブルゼリーを発射して飛んでいたグリスは、

その勢いのまま上に吹っ飛んだアイススマッシュに向かってキックをくらわせた。

それによって完全に倒れたスマッシュに、グリスは先程拾ったエンパイボトル……真直郎が使ったボトルを向けて成分を採取して、元の姿に戻した。

「真直郎君が元に戻ったわ！」

「よかった……」

「ちっ……ちよつと、いつまで笑っているのよ!?早くプリキュアを倒しなさいよ！」

元に戻った真直郎に安堵しているハート達に対して、マーモは未だに笑っていたジコチューに向かってプリキュアを倒すように命令した。

そして気を取り直したのか、ジコチューは構え直したハート達に向かって飛んでいき——

——そのまま素通りしていった。

「「「……えっ?」」」

啞然とするハート達とマーモをスルーしてジコチューが向かったのは——

「ハチミツうめ〜」へペロペロペロペロ〜

「いや、何やってんのよあんたああ!!」

先程ビルドが撒き散らした蜂蜜を四つん這いになって夢中で舐めているジコチュー、

と言うシュールな光景にマーモは思わずシャウトする。

「……ラブハートアロー!」

ダイヤモンドが上に掲げるとラブハートアローが現れ、ラビーズをセットした。

「プリキュア!ダイヤモンドシャワー!」

ダイヤモンドシャワーを放ち、ハチジコチューの手足と蜂蜜を舐めていた舌を凍らせた。

「ジ……ゴ……!?」

「……ちよつと気は進まないけど、いくよ!」

他の三人もラブハートアローを出現させる。

「プリキュア!ラブリーフォースアロー!」

ラブハートアローの弓を大きく展開させ、台尻部分の引き金を引き絞り、前面にハート形のエネルギー体を生成される。

相手にウインクし、ラブリーフォースアローを放った。

「ラブラブラブ!」

そして、ハート達の技が命中したハチジコチューは浄化され、プシケーは元の相手の所に戻った。

「あくも〜!今回のジコチューもスマッシュも全然役に立たないじゃない!!」

マーモがそう言うとそのまま去っていった。

…それから数日後、晴夜達はソリティアに集まっていた。

「……真直郎君、あれからどうしたのかなあ?」

「あの後、目を覚ました真直郎さんは和也さんに謝ってすぐに帰ってしまいましたからね……」

あの戦いの後、真直郎は目を覚ましてすぐに和也達に謝罪をした。

晴夜達が仮面ライダーであることとプリキュアであることを秘密にして欲しいと言って、それに承諾した真直郎は直ぐに彼の地元に戻って行ってしまった。

「……」

「かずやん、やっぱりまだ気にしてるのかな……」

「……これは和也の問題だ、しばらくはそっとして置こう」

マナと晴夜が話していると、ソリティアのドアがおもいきり開かれた。

「うお! 誰だ!?!」

突然の来訪に驚いた龍牙がそう尋ねると、ドアを開けた人物はこう答えた…

「俺が誰かって? なら教えてやろう!!」

その人物はソリティアに足を踏み入れ、声を大きくして言った!

「暴走! 激走! 爆走! いずれも〜真っ直ぐ!!」

「北等中学の暴走トラック! 土方~~~~真直郎!!」

その人物とは、土方真直郎、本人であった。

『ええええええええ!!!』

真直郎のあまりの豹変ぶりに、暗夜達はかなり驚愕していた。

最初に会った時は平凡な服を着ていたはずなのだが、今の真直郎の姿は、リーゼントヘアーツツパリが着るような短ランとボンタンと言った服装になっており、何より特徴的なのは黄色い生地(シボ)に黒い字で書かれた『912』の数字と腰の辺りにスクラツシユドライバーのイラストが描かれたTシャツだった。

「えーつと、どうしたんだその格好は……」

「ハイ! 兄貴の役に立てるようになる為(シボ)にまずは格好から変えていこうと思(シボ)い、色々と考えた結果、こうなりました!」

「いや、なんでそうなったの!?!」

和也の質問に答えた真直郎に六花はそう突っ込んだ。

「それじゃあ、そのTシャツは……」

「このTシャツは兄貴をリスペクトして自分で作りました！」

「自作かよそれ!？」

「その912って数字……ク・イ・ズ？」

「 그리스 です! 912と書いてグ・リ・スと読みます!」

そういうと真直郎はスクラツシユドライバーのレンチを下げるジエスチャーをおこなった。

「んな無理矢理な……」

「じゃあ……お前が持っているその箱はなんだ?」

和也は真直郎の持っている箱について聞いた。

「コレっすか?これは兄貴達への感謝と謝罪の意味も兼ねてのブツです!どうぞ!」

和也達は貰った箱の中身を確認すると、そこには袋に包まれた大量のパンが入っていた。

「これは……メロンパン?」

「ハイ!この間うちで作った新作の『ハチミツメロンパン』です!どうぞ召し上がって下

さい!」

「お前の実家、パン屋なのか……」

和也達がそう言い合っていると、外から真直郎を呼ぶ声が聞こえてきた。

「あつ、どうやら時間みたいっすね。今回は親父と一緒に来てパンを売りに来た時、たま近くを通りかかったので声をかけさせていただきました!それではお元気で!!」

そういうと真直郎は父親の元へと戻って行った。

そして、晴夜達は貰ったハチミツメロンパンを見ながら真直郎について話し合った。

「なんか、俺たちが思っていたよりも大丈夫そうだな」

「真直郎君、前に会った時と比べて生き生きとしてたね」

「でも、なんか変化の方向性がちよつとずれてる気もするけど……」

「……まあ、本人が満足しているならそれでいいんじゃないか?」

和也はそう言うのと、ハチミツメロンパンの袋を開け、一口食べるのだった。

「……あ、これ普通に美味いな」

次回!Re. ドキドキ&サイエンス!

第1X話 ドルオタ、推しと付き合うってよ

続きはない。

第19話 狙われたクリスタル

「はあ〜……」

いつもの地下室で晴夜はパソコンに目を向け、何やら悩んでいる様子だった。

気になった龍牙が晴夜に聞く。

「なにやっつてんだよ?」

「実はな……」

晴夜が龍牙にパソコンの画面を見せると、そこには『Error』のマークが出ていた。

「何だよこれ?」

「このデータを見るにはパスワードの入力が必要なんだよ。でも先から試しているいろいろ入力してみたが、どれもヒットしないんだ……」

ため息の理由を龍牙に語る。

「それより、お前体の方は大丈夫か?」

「ん?全然問題ないぜえ!」

晴夜はスクラッシュシユドライバーの反動による体の負担がないか聞くと、全然問題ない

と龍牙は答える。

「そうなるよ、お前はスクラツシユドライバーの力を完全に自分の物に出来たようだな」
「おお！これでトランプ王国を取り戻すのにまた近づけただぜ！それに、和也も仲間なつてくれたからな！」

龍牙は自信満々に言うが、確かにこれだけみんな強くなればいけるだろうと晴夜も思っていた。

後は、王女様を見つけるだけ。

翌日、森の中を晴夜達は歩いていった。

「森の中を歩くのって気持ちいいね！」

「何呑気な事言ってるシャル！」

「私達は王女様の手掛かりを探しに来たんですからね」

「着いたでランス〜！」

ランスが言う入り口のようなところが見えた。

「はい。ここが世界に集まった名だたる彫刻を集めた、森の彫刻美術館ですわ」

森の彫刻美術館に到着し、ありすが此処の美術館の説明をする。

「へえ、変わった彫刻がかなり多いな」

晴夜の言う通り美術館に置かれていた彫刻は、普通の彫刻に比べ変わったものが多かった。

「王女様は彫刻が好きだった」

「ひよつとしたら、こつちの世界に見にきてるかもしれないビイ！」

確かに彫刻が好きなら、王女の手がかりが出てくる可能性はあるとみんな思っていた。

「でも、彫刻を見ている時、何故か悲しそうな目をしていた」

「それって、どんな彫刻だったの？」

「確か、俺が見たときは……男女が一緒にいた彫刻だったな」

「なかなか、ロマンチックな彫刻が好きなんだな」

「でもそれを見て悲しんでいたのか今でも分からないの」

周りが黙り込むと、マナが皆に向けて気を取り直そうとする為に言う。

「とにかく、今日はこの美術館をみんなで探そう！」

「そうだな、なにか手掛かりがあるかもしれないかもな」

続けて言い放った晴夜の発言に五人は頷いた。

「ひよつとすると、ここに四つ目のロイヤルクリスタルがあるかもしれない。そんな気がする」

真琴がそう呟くと…

「はぁーい！」

「レジーナ！」

突然、レジーナが目の前に現れた。

「誰だよ？あいつ？」

和也は初対面なので、六花に誰なのかを聞いた。

「あの子はレジーナ。私達が戦ってるキンググジコチューの娘なの」

「娘!? そんな奴が何でこんな所にいるんだよ！」

「あいつ、晴夜とマナの事をすげえ気に入ってるんだよ」

「変わった子だ……（でも、すごく可愛い）」

キンググジコチューの娘だと聞いた和也がレジーナを見て、そんなことを思っていた。

「ねえ、知らない子がいるけど、あなた誰？」

「沢田和也だ。よろしくな、あ、俺の事は『かずやん』って呼んでくれ」

「あたしはレジーナ、よろしくねかずやん」

和也とレジーナはお互い自己紹介すると、晴夜がレジーナが何故ここにいるのかを聞く。

「どうしてここに？」

「マナ、晴夜、聞いて！アタシ今度こそいい子になったんだよ！マナと本当の友達になるためにね！」

「友達になるのはいいですが、この間の事はちゃんと反省してくれたのでしょうか？」
「この間の事？」

「ありすは反省したかと聞くが、レジーナは何の事かわからなかった。

「ジコチューを作り出して、人をスマッシュに変えて、みんなに酷い事したでしょ？」
「もちろん反省したよ」

「本当に？」

「したした」

「本当に反省したのか、不安だと六花は思った。

「反省する事の意味、お分りですか？」

「え？知らない」

「ありすが念のために尋ねて答えを聞くと、やはりかと知り、全員が呆れ顔になった。

「まあ、反省の意味はおいおい説明するとして……」

「レジーナ、友達ならあたしだけじゃなくて、みんなとなろうよ」

「みんなと？」

「そっ、みんなと！」

「うー……が、頑張る」

（あれ？この子……）

（この前とちよつと違うような……？）

レジーナの様子がこの間と違うと六花とありすは感じていた。

「うん！頑張ろう！」

「マナ」

「まこぴー？」

「王女様探しと、ロイヤルクリスタルの事は言わないでね」

「う、うん」

真琴がマナに王女様探しについては伏せるようにマナに注意する。

「ところで、何しここに来たの？」

「えっ!? いや、あの、その……」

「もちろん、彫刻を見に来たの！」

「そう、そうなんだよ！」

六花と晴夜が誤魔化す。

「ふーん……それなら！あつちに凄い彫刻があるんだって！一緒に行くっ！」

マナと晴夜の手を掴んでレジーナが走り出した。

「流石キングジコチューの娘。かなり、ジコチューの子だな」
(やつぱりちよつと不安かも……?)

六花達もマナと晴夜、レジーナを追いかけた。

「ちよ、ちよつとレジーナ！待って！」

「ス、ストップ、ストップ！」

二人に待てと言われ、レジーナは足を止める。

「どうしたの二人共？」

「行くなら、みんなで行こう」

晴夜が言うと六花達が三人に追いついた。

「えー？アタシはマナと晴夜の三人だけの方がいい」

「みんなとも友達に难道でしょ？」

「さつき、自分で頑張るって言っただろ」

「でもね、とつても美味しかったんだよ？この間三人で食べたアイス」

レジーナがこの間晴夜とマナと一緒に食べたアイスの事を話す。

「だから三人がいいのね」

「でも、三人よりみんなと食べればさらに美味しく感じるし、もつと楽しいって思うよ」

「そうかな……？」

「そうだよ」

「本当はマナと晴夜と三人が良いけど、我慢する」

「ここまで正直だと、腹も立たないね……」

六花が呟いていると真琴は何か深刻そうな顔していて、その事を龍牙が尋ねる。

「大丈夫か？」

「まこぴー、俺が相談相手になります」へキリツ

「何出しゃばってんだ！」

龍牙と和也が揉めると真琴は何かを感じ、ある彫刻を見つけた。

（呼んでる……！）

「真琴!!？」

「まこぴー!!？」

「どうしたんだ!!？」

何か呼ばれていると感じた真琴はそのまま彫刻の元へ走り出し、晴夜達も追いかけた。

「まこぴー、どうかしたの？」

「この像がどうかしたの？」

「あれ？俺、この像どこかで見たことがあるぜ……」

「マジかよ！」

龍牙がどこかで見たことがあると呟くと…

「この像……王女様にそっくり！」

『ええっ!??!』

「王女様？」

真琴が王女にそっくりな彫刻だと話すと、レジーナが後ろから出てきた。

「な、何でも無いんよ！」

「そうそう、何でも無いから！」

マナと晴夜がレジーナを誤魔化そうとする。

「いやあ、素敵な彫刻だね」

「ソリティアのお兄さん!??!」

「いつから、ここに……!??!」

いつの間にかジョー岡田とアイちゃんがいた。

「やあ、こんにちは」

「アーイ！」

「アイちゃんも!??!」

「あははははっ！その帽子面白〜い！」

「こちらのレディは？」

誰かと聞かれたレジーナは「アタシはレジーナよ」とジョーに自分の名前を言う。

「美しい名前ですね。以後、お見知りおきを」

（どうしてこの人がここにいるの……？王女さまによく似たこの彫刻の傍に……）

「お兄さんはどうしてここに？」

「最近飾られたこの彫刻に一目惚れしちゃてね。いや、もしかしたら彫刻の方が僕に一目惚れしちゃたのかも」

と、何やら最後の所は自慢の様に聞こえる感じで話す。

「あははははっ！この人面白い！」

「ちよつとレジーナ！」

「まさか、この彫刻のモデルを知ってるんですか？！」

「えっ？あつ、もうこんな時間か。これから大事な商談があつてね。アイちゃんもよろしく頼むよ」

ジョーはマナにアイちゃんに預け、どこかへ行ってしまった。

「えっ？あつ、ちよつと！」

「行ってしまったわね……」

「俺達がいなかったたら、どうするつもりだったんだ……？」

「なんか自由な人だな〜」

（なんか、隠している感じがするな……）

晴夜が考えていると、カゴからアイちゃん飛び出てくるが、アイちゃんの様子がいつもと違い、不安そうな顔でいた。

「はーい、アイちゃんー！」

覗いていたレジーナと目が合うとアイちゃんが泣き出した。

「何で泣いちゃったの？」

「アタシに任せてー！」

レジーナが笑せようとしたが、それでも泣き止まらない。

「こういう時はー！」

「このラビーズを使うシャルー！」

シャルルが出した羊ラビーズをコミュニケーションにセットして円を刻むと、羊と柵が出て来た。

そのまま羊を数え続けたアイちゃんは次第に眠っていった。

「カワイイ寝顔ね」

レジーナが微笑みながらそう言う。

（マナと晴夜君の言ってた通りね）

(この笑顔に、嘘はありません)

(こいつ、もしかしてそんな悪い奴じゃねえのか?)

(天使の笑顔に見えるぜ)

六花とありす、龍牙と和也はレジーナへの見方が変わって来た。

「ねえ、マナと晴夜はこの彫刻はどう思う?」

「うん、凄く綺麗な人だね」

「そうだな、本当に素敵だよな」

「アタシも好きだなー。特にあの胸の宝石!」

レジーナが胸の赤いガラス玉を指差す。

「もしかしてアレ、ロイヤルクリスタルなんじゃ……!」

「何それ?」

「そ、それは……!」

「とつてもロイヤルなクリスタルって事でランス〜!」

ランスがそう言い訳をするが、流星にそれは誤魔化しになってないと全員が思っていた。

それを聞いて嘘だとわかったレジーナは頬を膨らませる。

「あつ、嘘ついてる。嘘つきは泥棒の始まりなんだよ」

「そう言うことわざはよく知ってるんだ……」

誤魔化しきれないと考えたマナはレジーナに正直に話すことにした。

「あのね、ロイヤルクリスタルは、あたし達が探してるとつても大切な物なの」「ふーん………だったらアタシがプレゼントしてあげるよー」

レジーナはそう言つて、アイちゃんをベビーベッドに入れ、彫刻に近づく。

「ちよつと………?」

「おい、何を?ま、まさか……」

嫌な予感を感じた晴夜を他所に、レジーナは彫刻に触れた手に力を入れると、その彫刻を跡形もなく壊してしまった。レジーナはそのまま赤いガラス玉をマナに渡す。

「はい、マナ」

「どどどどどどどどうしよう〜!?」

「やべえだろコレー!」

これを見た六人は大慌てした。直そうと試みたが、すぐに崩れてしまう。

「ですよねー………晴夜君の技術でどうにかならない………?」

「流石に無理です………」

「なんて事をしてくれたんだ!」

「ゴメンなさい！」

「「「ごめんなさい！」」」

その後、マナ達六人は彫刻を壊してしまった事に対し、美術館の館長らしき人に謝る。

一方のレジーナはものともせず赤いガラスの石を見つめていた。

「本当に、すいませんでした！」

「全く……！」

「まあまあ。そんなに怒らなくても」

「先生……」

美術館から一人の男性が出てくる。

「この方……？」

「君達の壊した彫刻の作者、人見先生だ」

その人物はレジーナが壊した彫刻の作者である人見先生だった。

『ゴメンなさい！』

六人が一生懸命に謝る。だが、人見先生はあまり怒っている様子ではなかった。

「いいんだよ。中学生の力で壊れる物じゃないし、元々ヒビでも入っていたんだろう。」

それに自分でも不思議なんだ。あれは最初から自分の作品じゃないような気がして
いたんだ」

『えっ?』

「どういう事何ですか?」

人見が言うには、あの赤い石を拾った時に、物凄いイマジネーションを掻き立てられたそう。それにより、一気に完成させたいらしい。

「でもこれ、ただのガラス玉だよ」

「レジーナ……!」

マナに呼ばれたが、本人はすぐさま逃げ去った。

「まあ、形ある物は全て壊れる。それがこの彫刻の運命だったんだろう」

「本当に、すいませんでした!」

その後、晴夜達は壊した彫刻の片付けを始める。

しかし壊した張本人であるレジーナは、どうしてマナ達が片付けをしているのか疑問を抱き、「何やってるの?」とマナに問いかける。

「後片付け」

「そんな事しなくてもいいじゃん。許してくれたんだし」

「気持ちの問題だよ。元どおりには出来ないけど、この位はな」

「でも壊したのはアタシだよ? マナや晴夜達は関係無いじゃない」

「何言ってるの。友達だからに決まってるでしょ」

「友達……?」

「友達だからこそ、こう言う時は一連托生。苦楽を共にしたいって思うんです」

「ま、マナみたいに人のトラブルを何でも背負い込む人を友達にする苦労しますけど」

「ありすが友達の大切さをレジーナに話している横で、六花がそう誰かさんに対する愚痴を溢す。」

「確かに、苦勞してるよな」

「まあまあ、そう言わずお付き合い下さい……」

「しようがないなあ。付き合ってやるか」

「相変わらず、良いコンビだな!」

「流石、幼馴染!」

和也と晴夜が言うのと六人が笑いあつた。

その様子を見ていたレジーナは……

「アタシも……なりたい……」

「アタシも……友達に……なりたい!」

「何言ってるの。レジーナはもう友達でしょ」

「そうだよ!俺達はもう友達だよ!」

「……うん！」

マナと晴夜にもう友達だと言ってくれた事を嬉しく感じたレジーナは笑顔で頷いた。

(何だろ……この感じ……胸の奥がドキドキする……！)

次の瞬間、レジーナが持っていた赤いガラス玉が光り出し、ロイヤルクリスタルに姿を変えた。

「あれは……！」

「ロイヤルクリスタルシヤル！」

レジーナがロイヤルクリスタルを見つめていると、突然レジーナの目の色が赤くなつた。

「レジーナ？どうしたの？」

「これが……ロイヤルクリスタル……！」

「レジーナ？」

心配したマナと晴夜がレジーナが大丈夫かと尋ねると、手を振り払った。

「そのロイヤルクリスタル、全部アタシが貰ってあげる。さあ、渡して」

何とレジーナはクリスタルを渡してと、マナ達に要求してきた。

「ダメだよレジーナ！」

「さっきも言ったけど、とても大事な物——！」

「アタシは欲しいって言ってるの！」

「レジーナさん？」

「どうしたんだよ。何か変だぞ！」

「くれないなら……奪ってあげる！」

「どうして……」

先までとは違い、彼女の性格の変わり様に全員が驚いた。

「片付けは捗ってるかな？」

様子を見に来た人見がやって来る。

そして、レジーナの赤い目を見た人見は、新しいアイデアを思い付いたという顔になった。

「あの目は……また創作意欲が湧いて来たぞ！」

「丁度いいわ。」

あなたを素敵なジコチューにしてあげる！」

レジーナが指から放った光線が、人見のプシケを黒く染めた。そして取り出されたプシケがひび割れ、彫刻のジコチューが作り出された。

「芸術は……破壊だーっ！」

ジコチューが叫びながら彫刻を壊す。

「どうしてこんな……!」

「みんな行くよ!」

晴夜と龍牙と和也がビルドドライバーとスクラッシュユドライバーを装着してポトルとゼリーをセット、マナ達四人はコミュニケーションに変身用ラビーズをセットした。

『ラビット! タンク! ベストマッチ!』

『ドラゴンゼリー!』

『ロボットゼリー!』

『Are you ready?』

「変身!」

「プリキュア! ラブリंक!」

晴夜と龍牙と和也がアーマーが装着されて仮面ライダーとなり、マナ達四人の体が光に包まれると、プリキュアへと姿が変わり変身が完了した。

『鋼のムーンサルト! ラビットタンク! イェーイ!』

『潰れる! 流れる! 溢れ出る! ドラゴンインクローズチャージ! ブラア!』

『潰れる! 流れる! 溢れ出る! ロボットイングリッド! ブラア!』

『みなぎる愛! キュアハート!』

『英知の光! キュアダイヤモンド!』

「陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

「勇気の刃！キュアソード！」

「響け！愛の鼓動！ドキドキプリキュア！」

「愛を無くした悲しい彫刻さん！このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻し見せる！」

いつもの決め台詞を言うハート。

「ドキドキなんていらな～い。プリキュアとビルドとクローズ、グリスを倒して、ロイヤルクリスタルを奪うのよ！」

「レジーナ！」

「何やってるんだ来るぞ！」

ジコチューが振り下ろしたハンマーを跳躍してかわす。

更に破壊を繰り返す為にハンマーを振り下ろし、多くの彫刻を破壊していった。

「彫刻が！」

「もう止めて！これ以上壊さないで！」

ハートが叫ぶがジコチューは一向に止めようとしなない。

「ラブハートアロー！」

ソードはラビーズをラブハートアローにセットした。

「プリキュア！スパークルソード！」

「こつちもだ！」

『ツインブレイカー！ビームモード！』

ソードがスパークルソード放つと、クローズも同時にツインブレイカーをビームモードに攻撃する。しかし…

「効いて無い！」

「随分と固い敵だな……！」

ソードとクローズの攻撃では、ジコチューには傷一つ付かなかった。

すると、ジコチューの目からハートとビルドに向けてビームを放った。

「ハート！」

「晴夜！」

だが代わりにソードとクローズが身代わりになり、ビームをモロに受けてしまう。すると、二人の身体がみるみると石化していった。

「これを！」

ソードはロイヤルクリスタルの入った袋をハートに投げつけると、完全に石化してしまった。

「ソードと龍牙君が彫刻に!?？」

「何て事を……!」

「酷い奴だな……!」

「さあ、次の作品になるのはどいつだ!」

「あれを全員喰らったら終わりだ!みんな、散らばるんだ!」

ビルドの指示で五人は散らばり、ビルドはその隙にボトルを取り替える。

『タカ!ガトリング!ベストマッチ!』

『Are you ready?』

「ビルドアッブ!」

『ホークガトリング!イエーイ!』

ホークガトリングへとフォームチェンジし、翼を広げて飛びながら、ジコチューを攪乱しようとする。

「私に任せて!」

「プリキュア!ダイヤモンドシャワー!」

ダイヤモンドが放ったダイヤモンドシャワーによりジコチューを凍らせた。

「やった!」

「芸術は……破壊だ!」

しかし、ジコチューは全身に覆われていた氷を砕いた。

「ダイヤモンドシャワーが効かないケル！」

「隙ありだ！」

一瞬気を取られてしまった隙にジコチューのビームを喰らい、ダイヤモンドを石化させてしまう。

「ダイヤモンド！」

ジコチューは「破壊だーっ！」と言って、今度はロゼッタに攻撃する。

「プリキュアロゼッタリフレクション！」

ロゼッタもロゼッタリフレクションを展開するがジコチューの攻撃に耐えきれず、破れて砕けてしまった。

「ロゼッタリフレクションも〜!?!?」

「彫刻！」

今度はロゼッタもビームを喰らい、石化してしまった。

「ロゼッタ！」

次にグリスがツインブレイカーに2本のボトルを差し込む。

『シングル！ツイン！ツインブレイク！』

ツインブレイカーを至近距離でツインブレイクを命中させるが、ジコチューはグリスの攻撃を耐えた。

「ヤロー、何て硬さだ!」

「彫刻!」

「しまった……!」

そして、グリスもジコチューの光線を浴び彫刻となった。

「和也!」

そして、ジコチューの手によってソードとクローズの横に飾られた。

「みんな(…)」

「さすがアタシのジコチューね」

「レジーナ!みんなを戻せ!」

「いいよ。ただし、ロイヤルクリスタルを全部くれたらね。断るなら——あなた達の大切なお友達を壊してあげる!」

「そんなこと——」

ビルドがラビットタンクスパークリングを取り出し、構えるが…

「おっと、少しでも動いたら、この子達は粉々よ」

「くっ……!」

これでは、何にも手出しができない。

「レジーナ、本当にどうしちゃたの?今日のレジーナはあたしだけじゃなくて、みんな本

当の友達になれたって思ったんだよ？

あの時あたし、凄く嬉しくて、胸がキュンキュンしたの！レジーナもキュンキュンしなかった？」

「あはははははっ！くっつだらない。何勝手な事言ってるの？」

「レジーナ！」

「どうせあなた達のお友達を助けるつもりも無かったし、面倒な取り引きなんて止めね」
「そんな……」

今のレジーナの発言は、先までの彼女とはとても信じられないものだった。

「ジコチュー！ロイヤルクリスタルを奪いなさい！」

レジーナの叫びと同時にジコチューがビルドとハートに襲い掛かる。

「破壊だーっ！」

ビルドはホークガトリンガーのシリンドラーを回し、ハートはラブハートアローにラブビーズをセットした。

『フルバレット！』

「プリキュア！ハートシュート！」

二人の技でジコチューのビームは相殺できたが風圧により吹き飛ばされ、後ろの彫刻に叩きつけられた。

「バカね。早く渡せばよかったのに……」

さあ、プリキュア全員とビルドとクローズの彫刻を完成させなさい！」

ハートとビルドに向けてジコチューがビームを放った。

「はあああああつ！」

すると銀色に輝く鎧を纏った謎の戦士のような人が現れ、ビームを剣で受け止めた。

「お……お兄さん！」

「ジヨ……ジヨーさん！」

その戦士の正体はジヨウ岡田だった。

「君の友達にハートシユートを放つんだ！」

「えっ、何で？」

「君なら、友達を元に戻せるはずだ！ さあ！」

「みんな……今助けるからね！」

ハートが立ち上がり、ラブハートアローを構える。

「させないわ！」

「こっちもだ！」

いつの間にかニンニンコミックへとフォームチェンジしたビルドが四コマ忍法刀を構えて、レジーナの妨害を防ぐ。

「ハート、俺が隙を作る！チャンスがあればみんなにハートシユートを！」

「うん！わかった！」

「邪魔しないでよ！」

レジーナがビルドに攻撃を続ける。ビルドはもう一度ボトルを取り替えた。

『海賊！電車！ベストマッチ！』

『Are you ready?』

『ビルドアップ！』

『海賊レッシャー！イエーイ！』

更に海賊レッシャーへとフォームチェンジし、カイゾクハツシャーで狙撃しながらレジーナをハートから遠ざける。

「もうー！」

「助かるよ！」

「後で、色々と説明してもらいますよ！」

「わかったよ」

ビルドとジョーにより、レジーナは彫刻になった5人から離れた。

「ハート！今だ！」

「うん！プリキュアハートシユート！」

ハートがハートシュートを石化したみんなに放つと、石化が解け、全員が元に戻った。

「みんな……行くよ！」

「こつちも決めるぜ！」

ビルドはラビットタンクスパークリングを差し込んだ。

『ラビットタンクスパークリング！』

『Are you ready?』

「ビルドアップ！」

『シュワツと弾ける！ラビットタンクスパークリング！イエー！イエー！』

スパークリングへとビルドはフォームチェンジし、そのままカイゾクハツシャを構

えた。

そしてドライバーのレバーを回した。

『Ready go!』

『スパークリングフィニッシュ！』

クローズはツインブレイカーにクローズドラゴンを差し込み、更にドライバーのレンチを下ろした。音声は鳴り出し、クローズの後ろからドラゴンが出現した。

『レッツブレイク！』『スクラップブレイク！』

そして、グリスもツインブレイカーにボトルを一本差し、ドライバーのレンチを下ろ

した。

『シングル！シングルブレイク！』『スクラップファイニッシュ！』

「『プリキュア！ラブリーフォースアロー！』」

ラブハートアローの弓を大きく展開させ、台尻の部分の引き金を引き絞ると、前にハート形のエネルギー体を生成される。

そして相手にウインクして、ラブリーフォースアローを放つと同時にビルドとクローズも同時に技を放った。

四つの技がジコチューに命中し、ジコチューは浄化された。プシケも持ち主の元に戻り、壊された彫刻も元に戻った。

「さあ、ロイヤルクリスタルを返してもらおうか！」

「アタシを誰だと思ってるの？キングジコチューの娘、レジーナよ！」

レジーナが放った光線を剣で防ぐが後ずさり、ジョーは片膝をついてしまう。

「ジョーさん！」

「だ、大丈夫……」

「今日の所は帰ってあげる。でもね覚えておきなさい、ロイヤルクリスタルは、全部アタシの物よ！じゃーね」

そう言ってレジーナは引き上げた。

「レジーナ……」

「きゅびゅー！」

「よしよし」

飛んで来たアイちゃんがジョーの元へと飛び、抱きつかれた。

「あなたは一体……」

「その鎧……！」

「なんか、知ってるのか？」

「間違えねえ！その鎧は……」

「トランプ王国の……戦士の証……！」

「「えっ?!?!」」

「マジかよ……！」

まさか、ジョー岡田がトランプ王国の戦士だとは、みんな驚きを隠せなかった。

「あなたと王女様は、どういう関係なのですか?!?!」

「僕の名は、ジョナサン・クロンダイク。アン王女の婚約者さ」

『ええっ?!?!』

「うそだろう……！」

「この人が……！」

「王女様の……!?」

「婚約者……!?」

ジョー岡田の本名はジョナサン・クロンダイクと言い、更に王女様の婚約者だと告げたのだった。

次回! Re・ドキドキ&サイエンス!

第20話 最後のクリスタル

第20話 最後のクリスタル

美術館でジコチューを倒してしばらくしてから夕方、晴夜達は場所をソリティアに移した。

「はい、どうぞ」

ジョーが六人に紅茶を差し出す。差し出された紅茶を真琴、龍牙以外の四人が見始める。

「それじゃあ質問をどうぞ」

「もう色々あり過ぎて何から聞けばいいか……」

「アイちゃんやロイヤルクリスタルの事はご存じでしたの？」

「お兄さんが王女様の婚約者って本当ですか!?!」

マナとありすがジョーに質問する。

「順番に話して行こうか。まずは……」

ジョーは、真琴と龍牙の方を向いた。真琴はジョーを見て睨みつけていた。

「僕は君たちと同じ、トランプ王国の生き残りだよ」

そう言うと、自分ことジョー岡田は、世を忍ぶ仮の姿だと話す。そして、ロイヤルク

リスタルも本物だと告げた。

「本物ですか。良かったですわ」

「じゃあ、アイちゃんについては——」

晴夜はアイちゃんについての正体も聞こうとするが…

「さあ？」

「さあつて……」

「川原でたまごを拾ったのは本当だよ。不思議な子だよね」

どうやらジョーもアイちゃんの正体までは知らないようだった。それを聞いた和也は、川からどんぶりごと流れてきた卵をジョーが拾う姿を思い浮かべた。

「川原で見つかったんですか……桃太郎かよ……」

「またしらばつくてるんじゃないケル？」

「信用無いなあ……」

「日頃の行いのせいランス」

「あはは……」

ランスが言うのとジョーが苦笑する。

「後は、僕とアンの事だったね。僕達は間違いなく、将来を誓い合った仲だ」

「あなたと王女は、相思相愛だったのですね」

「うん」

晴夜が聞くとジョーが認めるが…

「私は王女様からそんな話聞いていません！」

「ま、まこぴーが、怒鳴った！」

まこぴーが怒鳴った事に和也は驚く。

「ま、真琴……でも、俺も初めて聞いたぜ」

「そうだろうね。君たち二人がアンに仕える前の事だし」

「馴れ馴れしく王女様を呼び捨てにしないで下さい！」

「ちよつと落ち着けよ、気持ちには分かるから……」

激昂する真琴を龍牙が止める。

「改めて、君達に伝えておくよ。ロイヤルクリスタルは全部で五つ。全てが揃った時、奇

跡の切り札が現れるはずだ」

「奇跡の切り札……?」

「それってどう言う——」

六花が奇跡の切り札とはどういう事なのか聞くが、ジョー本人もそれに関しては詳しくは分からないらしい。でも、何としてもクリスタルを集め、トランプ王国を救わないといけないと語る。

「そうですね」

「それに、レジーナに取られた分は後回しにするとして……当面は最後のクリスタルを探す必要があるな」

「でも、どこにあるのかさっぱりでランス」

「そうだな、手掛かりがさえあればな……」

確かに最後のロイヤルクリスタルの場所は未だわかっていない。悩んでいるとジヨーが晴夜の方を見る。

「ところで君は僕に聞きたいことは無いかのかい？」

「えっ!?」

ジヨーが晴夜に聞きたい事はないのかと聞く。

「……俺からの質問は、後でいいです」

「そう。……さて、そんな君達にこれ」

ジヨーが六人に旅のしおりを差し出した。

「何ですか？」

「旅のしおりさ」

「私達はのんきに旅行してる場合じゃ……!」

「汽車と菜の花畑……?」

マナがしおりのページをめくると、そこには汽車と菜の花畑の写真の風景が貼られていた。

「観光の鉄道が走るSL用の写真さ」

「これが手がかりですか？」

「この風景が、僕とアンの思い出の場所によく似てるんだ」

晴夜の疑問に対し、ジョーはトランプ王国の思い出の場所に似ていると語る。

「思い出の……場所……？」

「見つけたのは彼だけだね」

するとジョーの肩に、どこからか飛んで来た青い鳥が乗った。

「旅行かー……」

「いいんじゃないか？」

晴夜がいいんじゃないかと言うとマナがうなづく。

「そうだね……分かりました！それじゃああたし、お弁当用意して来ます！」

「まあ、楽しみですわ」

「有名な菜の花畑か、興味あるな」

「もう、四人とも……仕方ないわね」

「面白そうだな」

「王女様の……最後の手がかり……」

ありすと和也、六花、龍牙が旅行を楽しみにしている横で、真琴は最後の王女の手掛かりがあるのだと知り、何処に王女様がいるのかと考えていた。

その後、マナ達は帰るが晴夜はソリティアに残り、ジョーに聞きたい事を尋ねる。

「それで、君が僕に聞きたい事は何だい？」

「ジョーさんは、俺の父さん……桐ヶ谷拓人について何か知ってますか？」

晴夜は行方不明になっている自分の父親が今、どうなっているかジョーに聞く。

「すまない、僕も博士が今どうなっているのかわからないんだ……」

「そうですか……」

やはりジョーも桐ヶ谷拓人のことに関して情報は持っていないかった。

「でも、君の父親には色々感謝してるよ」

ジョー曰く。晴夜の父親、拓人はトランプ王国の人々に科学の素晴らしい所やアン王女に頼まれ、プリキュアのサポートになるためにライダーシステムの開発をしてくれた事にとっても感謝してると話す。

「やっぱり、すごいな父さんは……」

ありがとうございます。少しでも父さんの事を話していただいて」

「礼には及ばないよ」

「じゃあ、そろそろ俺は帰ります」

「うん、それじゃあ」

晴夜が立ち上がり、出ようとする。

「それじゃあ、失礼しました」

ジョーにそう言っつて、ソリティアを出る。すると、ソリティアの外ではマナがいた。

「マナ?!? 帰ったんじゃないかなかったのか?」

「えつくと、やっぱり生徒会長として聞いておく必要があるかなつて……」

マナは晴夜の疑問に対して、そう言っつて誤魔化す。

「そうか……心配してくれて、ありがとうな」

晴夜がそう言っつと、ビルドフォンにボトルを差し込み、ビルドフォンを投げる。

『ビルドチェンジ!』

マシンビルダーに変形し、晴夜がヘルメットのボタンを押し、マナにヘルメットを渡す。

「俺のせいで帰るのが遅くなったんだろ、家まで送るよ」

「ありがとう」

マナが後ろに乗り、晴夜がエンジンを掛けるとマナの家『ぶたのしつぽ亭』へと向か

う。

いつもジコチュークラブのボウリング場では、イーラやマーモ、ベールがロイヤルクリスタルを見ていた。

「これがトランプ王国に伝わるお宝か……」

イーラが赤のロイヤルクリスタルを見て呟く。

「よし、鑑定してやろう。ほう、いい仕事してますねー」

「あなたに何が分かるってのよ。わたしに任せなさい」

「何ドサクサに紛れて持ってこうとしてんだよ……!」

「言いがかりよ、放しなさい……!」

三人がクリスタルを取り合っていると、クリスタルが光り出し、レジーナの元に戻った。

「ダメよ、勝手に触っちゃ。これはアタシのなんだから。」

……クレイ……この輝きはアタシの物……そう全て……」

そう言い、どこかに向かつて行つた。

——それを見ていたスタークこと、総一郎。

「トランプ王国のお宝に、レジーナの変わりよう。これはまた、面白いことになりそうだな」

総一郎は、まるで楽しんでいるかのような口調だった。

それから日が経ち、晴夜達は目的地へ向かうために電車や列車と乗り継ぎを行う。

そして、駅に降りて少し待つと、目的の汽車がやって来た。

「美しい汽車ですわね」

「ええ、気品すら感じるわ」

そして晴夜達は汽車に乗り、しばらくして汽車は発車した。

「普通の電車よりゆっくりなのね」

「でも、風情がありますわ」

普通の電車と違い、汽車の速度はゆっくりで風景を堪能出来るような感じだった。

「お弁当食べよう！」

「待ってたでランス〜！」

「ジャーン！桃マン弁当〜！パパと一緒に作ったの。いっぱいあるからどんどん食べてね」

マナが持つてきた桃マン弁当をみんなに渡すと、ジョーが真琴にお茶を差し出す。しかし真琴は「結構です。自分のがありますから」と言つて、自分の持つてきたお茶を飲む。

「そう」

「……今日も、まだご機嫌斜めだな」

「いい加減、いつもに戻つて欲しいけどな……」

「俺はどんなにまこびーが機嫌が斜めだろうが付いていける自信がある！」

「そういう問題じゃないですよ」

真琴の心配をする龍牙に対して、晴夜は和也の発言に突つ込みを入れていた。

それからしばらくしてお弁当を食べ終えると、既に全員が旅を楽しんでいた。

「つて！楽しんでばかりじゃダメでしょ！」

「そうだ！クリスタル探さなきゃ！」

旅行に来た本当の目的を思い出した六花とマナの二人が叫ぶと、窓の外を見つめる。

「いや、窓の外を見ても、見つからないと思うけど……」

「きゅぴらっば〜！」

蒸気を見ていたアイちゃんが自分の力で蒸気の色をピンク色にし、ハートの形が出るようにさせてしまった。

「な、なんだ!?」

「こ、これって、まさか……」

「「アイちゃん!?」」「」

「うーん……おつかしいな……念のため、少し点検させてもらいますね」

この事が原因により汽車は近くの駅に停まり、点検することになってしまった。

「ゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさい!」

この後、マナが何度も頭を下げると、運転手はなぜ謝っているのか驚く。

「旅にトラブルはつきものだよ」

「お兄さん、どこへ?」

六花は何処かに行こうとしているジョーにそう尋ねる。

「散歩。せっかくだからみんなも行こうよ」

「だけど、ここで待つ方が……!」

「焦ってもクリスタルは手に入らないよ」

ジョーがそう言って、駅を出て行くとアイちゃんも一緒に行ってしまった。

「素性は分かっても、中身はよく分からない人だな……」

「行く、みんな」

「マナ……」

「確かに、ここで待つよりはずっといいかもしれないな」

「晴夜君まで……そうかもね」

マナと晴夜も散歩に行こうと言うと、六人も駅の外を出た。

そして、駅の外に出ると、そこには美しい菜の花畑が広がっていた。

「スゴイシャル〜！」

シャルル、ラケル、ランスが菜の花畑に向かって飛んで行った。

「ここって、お兄さんの言っていた風景？」

「アイちゃんが導いてくれたのかもね」

「まるで、平和だった頃のトランプ王国に似ているビィ」

「そうなのか？」

「ああ、この風景を見るとすげえ懐かしい感じがする」

龍牙は平和だった頃に見た菜の花畑の風景を思い出してそう答える。

それからしばらくして、ジョーは辺りを見回させる木の下に座って菜の花畑を見ていた。

「少し、いいですか？」

「もちろん」

マナが来て、ジョーの横に座った。同時に暗夜も二人の下にやってきた。

「あたし、クローバータワーで初めて会った時から、お兄さんって不思議な人だなんて思ってたんです。何を聞いても煙に巻いてばかり。でも、何故か嫌な気持ちにならなくて……」

それはきつと、お兄さんがいつもあたし達を導いていたからなんですよね」

「あはは、買い被り過ぎだよ。それに、キングジコチューを倒し、トランプ王国を救えるのは伝説の戦士プリキュアと……ビルドとクローズ、グリスの三人の仮面ライダーだよ」

「でも、ジョーさんのおかげでここまで来れたのかと俺は思いますよ」

「そうかな。でも、クリスタルを見つけるまで強くなったのは、紛れもなく君達自身の力だよ」

ジョーがそう語るとそこへ風が吹き、彼の目には一瞬、アン王女の幻が見えた。

「……もう少しだ」

「王女様って、どんな人なんですか？」

「えっ？まこぴーと龍牙君から聞いてない無いかい？」

「恋人のお兄さんの話も聞いてみたいんです」

「参ったな……少しは長くなるけど、いいかい？」

ジョーが二人に聞くと、二人は頷き、この場にいなかった六花とあります、和也もやって来た。

「僕の知ってるアンは、そうだな……彼女は、ちよつとお転婆で、可愛らしい女性だよ。」

アンは好奇心旺盛で、あらゆる世界の文化、晴夜君のお父さんの科学にも興味を示したんだ。

僕は、そんな彼女に仕える戦士の一人だった。

僕らが互いを惹かれ合うまで、それほど時は必要としなかった。

その後、僕らは遠い辺境の警備に付く事になり、城を離れれば行けなくなった。

そして……あの悪夢が訪れた」

ジョーはあのトランプ王国の悲劇の日、すぐに城に戻り、ジコチューを倒しながら城に辿り着いた時に、魔法の鏡を潜りこつちの世界に来たらしい。

「トランプ王国もアンも、誰も救えなかったのはキュアソードとクローズだけじゃない。僕もさ……」

「ごめん、あんまり楽しい話では無かったね」

「いいえ、聞いてよかったです」

「話してくれて、ありがとうございます」

話してくれた事にマナと晴夜は礼を言う。

「さつ、そろそろ駅に戻ろうか。君達もいいかな？必ず、アンに会いに行こう」
ジョーが言うと、木の裏で話を聞いていた真琴と龍牙が出てきた。

「はい……」

真琴が涙を一粒流し、はいと答えた。

「一緒に、会いましょう！ジョーさん！」

そして八人は駅の方へ戻っていった。

その頃、駅の方では。

「こ、こら君！何してるの！」

「運転させてよ〜！」

「ダメだ！」

勝手に運転しようとしていた子供が、運転手に止められていた。

「その気持ち分かる！やりたいものはやりたいよね！」

突然、子供に囁くレジーナ。

「あなたを素敵なジコチューにしてあげる！」

レジーナが指から放った光線が、子供のプシユケーを黒く染めた。

子供から取り出されたプシケケがひび割れ、蒸気機関車のジコチューが作り出された。

「それと、もう一つね」

更にレジーナがスチームブレードを子供に向け、ガスを発射すると子供がスマッシュへと変わり、ジコチュー機関車の上に乗った。

「あれは……」

「ジコチューシャル！」

「汽車まで一緒だビィー！」

ジコチューが横を通り過ぎると、そこにあつた菜の花がなくなっていた。

「菜の花畑が！」

「止めるぞー！」

晴夜はビルドドライバー、龍牙と和也はスクラッシュユードライバーを装着し、ボトルとゼリーを取り出し、差し込む。マナ達四人はコミュニケーションに変身用ラビーズをセットした。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

『ドラゴンゼリー！』

『ロボットゼリー！』

『Are you ready?』

「変身!!?」

「プリキュア!ラブリック!」

晴夜と龍牙と和也の周りにランナーとビーカーが現れ、そこから三人の体に装着されると仮面ライダーに。マナ達四人は光に包まれ、プリキュアへと姿を変えた。

『ラビットタンク!イエーイ!』

『クローズドラゴンインチャージ!ブラア!』

『ロボットイングリス!ブラア!』

「みなぎる愛!キュアハート!」

「英知の光!キュアダイヤモンド!」

「陽だまりポカポカ!キュアロゼッタ!」

「勇気の刃!キュアソード!」

「響け!愛の鼓動!ドキドキプリキュア!」

名乗りあげると機関車ジコチューへと向かう。すると、ビルド達の前にレジーナが現れた。

「はぁーいマナ、晴夜」

「レジーナ!」

「アタシ、あなた達のクリスタル、ゼーンぶ貰いに來たんだ」

「そんな事、させるわけ無いでしょ！」

「逆らっても無駄だよ？力づくで取っちゃうんだから」

すると、鎧を纏ったジョーがビルド達の前に現れた。

「お兄さん！」

「彼女は僕に任せて、君達はジコチューを止めるんだ！」

ジョーはビルド達に「ここを任せて欲しいと頼み込む。

「わかりました。お願いします！」

レジーナをジョーに任せ、ビルド達はジコチューの元へと向かった。

「邪魔しないで！お兄さん！」

レジーナがジョーに光弾で攻撃すると、ジョーはそれを打ち消した。

「クリスタルを返してもらえるかな？」

「ダメよ。あれはアタシのだもん」

「それじゃ、仕方ないね」

その頃、ジコチューを止めようとするビルドやハート達はというと。

「コラー！止まれ！」

ビルドが叫ぶがジコチュー機関車は一向に止まろうとしない。

その間に七人が車体の上に登ると、前の方から飛行能力を持つスマツシユーフライ
ングスマツシユハザードがビルド達に襲いかかってきた。

「スマツシユ！」

「なんで！」

「きつと、レジーナが誰かをスマツシユに変えたのよ！」

ダイヤモンドが推測するとまたスマツシユがこつちに向かって飛んでくる。それへ
クローズとグリスがスマツシユを掴み、一緒に地面に落ちた。

「この、スマツシユは俺達が止める！」

「お前らはその隙にジコチューをなんとかしろ！」

「わかったわ！」

スマツシユはクローズとグリスに任せ、ビルド達五人はジコチュー機関車を止める。

「止まりなさいい！」

「線路じゃない所を走るなんて……！」

「あなたは汽車なんでしょ!?？」

「そうさ！だが……俺はレールなんて型にはまらねー！」

ジコチュー機関車はなんとまあ、無茶苦茶なことを言う。

「何人たりとも、俺を止める事なんて出来やしねー!」

ジコチュー機関車が叫ぶのと同時にスピードがさらに上がった。

「このままだと……なら!」

ビルドが立ち上がると、2本のボトルに差し替えた。

『タカ! ガトリング! ベストマッチ!』

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

前後に形成されたアーマーがビルドに装着される。

『ホークガトリング! イエーイ!』

「ハアア!」

ホークガトリングになったビルドは翼を広げてジコチューの先に前の方まで飛んで

いき、地面に着地するとさらにボトルを取り替る。

『ゴリラ! ダイヤモンド! ベストマッチ!』

ボトルを差し込むとレバーを回し、アーマーが形成された。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

さらに新たなアーマーがビルドに装着される。

『ゴリラモンド！ イエーイ！』

ゴリラモンドフォームになったビルドは、そのままジコチュー機関車のスピードを緩めるために止めようとする。

それを見たハートも決意し、列車の上を走り出した。

「キュアハート！」

「何をする気！ まさか……！」

「うおおおおおおつ！」

「ハート！」

ジコチューの前に飛び降り、ビルドと共にジコチューを止めようとする。

「これ以上は絶対ダメ！ お兄さん……！ 思い出を……！ 守るんだあ！」

「ジョーさんの思い出は……！ 絶対！ 壊させはしない！」

ビルドとハートの力でジコチュー機関車のスピードを緩めた。

「私達も絶対に、王女様に会いに行く！」

「ラブハートアロー！」

ソードがラブハートアローを出現させ、ラビーズをセットした。

「プリキュア！ スパークルソード！」

ソードのスパークルソードが連結部分を破壊した。

「だあああああつっ！」

そこからハートがジコチューを投げ、ビルドがジコチューをぶつ飛ばし、地面に叩きつけた。

そして、スマッシュを引け受けたクローズとギリスも決着がつく様子だった。

「必ず！俺たちは王女様に会ってトランプ王国を取り戻す！」

「心火を燃やして、俺達は見つけてやるぜ！」

『ツインブレイカー！』

ツインブレイカーを出現させたクローズとギリスは、お互い2本のボトルをツインブレイカーに差し込んだ。

『シングル！ツイン！ツインブレイク！』

二つのボトルを差し込んだ事でツインブレイカーのレイジングパイルが回転し、二人はそのままスマッシュに向かって走り出した。

「オラアアアア！」

「オラアアアア！」

ツインブレイカーの攻撃が命中し、スマッシュは倒れた。

「はあああ……やったぜ！」

「しゃあー！」

一方、ジコチューの方はまた立ち上がり、ビルド達に突進して来ようとする。
「まだ来るか！ならー！」

ビルドがラビットタンクスパークリングをドライバーに差し込む。

『ラビットタンクスパークリング！』

レバーを急速に回転させ、アーマーを形成させた。

『Are you ready?』

「ビルドアップ！」

『シユワツと弾ける！ラビットタンクスパークリング！イエー！イエー！』

そして形成されたアーマーがビルドに装着され、ラビットタンクスパークリングへとフォームチェンジした。

「決めるぞー！」

「みんな！行くよー！」

ハートが言うのと、ビルドはドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

ビルドが高くジャンプすると、ハート達四人はラブハートアローを出現させ、ラビー

ズをセツトした。

「「プリキュア！ラブリーフオーサロー！」「」

ラブハートアローの弓を大きく展開させ、台尻部分の引き金を引きしぼり、前面にハート形のエネルギーが生成されると、四人が相手にウインクをした。

『スパークリングファイニッシュ！』

ビルドが技を繰り出すと同時に、四人もラブリーフオーサローを放つ。スパークリングファイニッシュとラブリーフオーサローが命中し、ジコチューは浄化され、菜の花畑も元に戻った。そして、スマッシュを倒したクローズとグリスマもやってきた。

「おお、終わったか」

「そっちもか……って、お前らスマッシュから成分は取ったか？」

「えっ？ああ？やべえー！」

「まだ、抜いてねえ！」

「バカヤロー！」

三人は急いで倒れているスマッシュのところへ向かい、到着するとすぐにビルドはエンプティボトルの栓を回し、成分を吸収する。子供は元の姿に戻り、プシケも彼の元に戻った。

「ん？」

「あれ？もう負けちゃったの？」

レジーナとジョーはその様子を見て、決着が付いたと察する。

「どうする？まだ続けるかい？」

「なーんか白けちやたから、止めとく！まったねー！」

そう言つて、レジーナは去つていった。

「良かった、汽車も無事だよ」

「菜の花畑も元に戻つて良かった」

その時、持つていた三つのクリスタルが浮かび、汽車のプレートが光り出す。すると、そのプレートから最後のピンクのロイヤルクリスタルが出て来た。

「これって……」

「もしかして、最後のクリスタル！」

「最後のやつばピンクか！」

「やりましたわね」

「これで、あと一つ！」

「うん！奪われた赤いクリスタルだけ！」

「それで、全て揃うんだな！」

菜の花畑を守り、最後のロイヤルクリスタルも無事に手に入った。

——残るは、レジーナの持つ赤のクリスタル。

次回！Re. ドキドキ&サイエンス！

第21話 ジコチューゲーム、そして語られる真実！

第21話 ジコチューゲーム、そして語られる真実!

ジコチューのアジトで、レジーナが赤いロイヤルクリスタルを眺めていた。

「キレイ……本当にキレイ……」

クリスタル……もつと欲しいな……」

「欲しいなら奪っちゃえばいいじゃん」

「プリキュアと仮面ライダーを倒してクリスタルを奪う。一石二鳥よ」

「そうすべきです。あなたはキングジコチュー様の娘なのですから」

ベール達がビルドとハート達から残りのクリスタルを掻っ払う様に提案する。

「そうね。でも、ただ奪うだけじゃ面白く無いわ。だって相手はマナと晴夜だもの、楽し

くやらなきやね」

「それで、実際の所どうやって奴らからクリスタルを奪うんだ……?」

総一郎がどの様にクリスタルを奪うのか内容を聞くと、レジーナはニヤリと笑う。

その頃、ソリティアの外でみんなが集まっていた。

「アンの手がかりとなるクリスタルは、全部で五つだ」
「そのうち四つが揃った」

いま手元にあるのは、ピンク・青・黄色・紫の四つのクリスタルである。

「残りは一つは、レジーナさんが持っています」

「それで、五つ全部が揃うのか」

「何とかして、レジーナからクリスタルを取り返さないと！」

「うーん」

「どうしたんだい？」

六花達がどうにかしてレジーナから赤のクリスタルを取り返せないかと考えていると、ジョーが悩んでいたマナを尋ねる。

「出来れば、レジーナとは戦いたくないな……」

「俺も同じ気持ちなんだ、戦わずにクリスタルだけ取り戻す方法はないかって……」

晴夜もマナの意見に同意するが、今のレジーナの状態からではクリスタルを貰うのは難しいかもしれない。

「クリスタルを返してと、頼んでみてはいかがでしょう？」

「でも、頼んで返してくれるなら、苦労しないわ」

「そもそも、あいつが素直に渡すか？」

「やっぱり、難しいか……」

「戦わずクリスタルを手に入れる方法って、無いのかな……」

全員が何かいい案がないか考えていると……

「あるよ」

声がかえって振り向くと、いつの間にかレジーナがそこにいた。

「はぁーい、マナ、晴夜」

「レジーナ!」

「やっほー、アイちゃん」

アイちゃんと笑顔でタッチすると、テーブルに置かれていた四つのクリスタルを見つめる。

「他のクリスタルもキレイだね。アタシもこれ、欲しいな……」

それを見て、クリスタルが奪われるのではないかと警戒した真琴がテーブルに置いたあつたロイヤルクリスタルを掴んだ。

「だからマナ、晴夜、ゲームやろう」

「ゲーム?」

突然、マナ達にゲームをやろうとレジーナが提案してきた。

「そう、五つのクリスタルを賭けてゲームで勝負するの。」

で、勝った方がクリスタルをゼーンぶ貰える。どう?」

「ゲームって……どんなゲーム?」

「それは始まってからのお楽しみ」

「よし、やろう!」

「マナー!」

躊躇いなくゲーム勝負をしようとしたマナに、六花と真琴が怒鳴る。

「ゲームだなんて怪し過ぎるわ!」

「クリスタルを奪うためのワナよ!」

「もし負けてしまったら、全てクリスタルが奪われてしまいます!」

六花と真琴、ありすの三人はゲームをするのは反対だとマナに言う。

「晴夜、お前はどうかんだ?」

龍牙はゲームを受けるのに、「反対か賛成なのか晴夜に聞く。

俺は、ゲームを受けた方が良い思う」

晴夜はゲームを受けるのには、賛成の方だった。

「リスクが高過ぎますわ!」

「こんなの、絶対罠に違いないぜ」

「確かに、罠の可能性は高い。でも、ゲームに勝てば戦う事もなく、クリスタルを手に入

れる」

「さっすがアタシのマナと晴夜。そうこなくっちゃ」

「でもマナ、おそらく普通のゲームじゃない、罠が仕掛けられている!」

「そうかもしれない。でもあたし、この勝負に挑みたい!協力してくれないかな!」

とマナは六花達に協力してほしいとお願いする。

「色々不安はあるけれど、マナがそこまで言うならやりましょう」

「お付き合いたいしますわ」

「しょうがねえな!一丁やりますか〜!」

「必ず勝って、クリスタルをゲットするわよ!」

「心配すんなよ!俺達なら負ける気がしねえ!」

みんなゲームに協力してくれると言ってくれた。

「ありがとうみんな」

「でも、一つ心配なのは、ゲームの後にレジーナが本当にクリスタルを渡す気があるのかどうかよ」

だが本当にレジーナがクリスタルを渡すのか、そこだけが不安だった。

「レジーナ!俺達がゲームに勝ったらクリスタルは全部貰える。それは、本当なのか!」

「うん」

晴夜の発言にレジーナが頷くと、マナがレジーナに小指を出した。

「じゃあ、指切りしよう!」

「何?」

「約束を守る印だよ」

「約束?」

そう言うのと、レジーナも小指を出し、マナと指を合わす。

「指切りげんまん、嘘ついたら針千本のーます!」

そしてマナとレジーナと約束の指切りを交わす。

「レジーナ、約束したよ」

「約束ね。それじゃあ、ゲームの世界へレッツゴー!」

レジーナが指を鳴らすと、ガマ口型のジコチューが出て来た。

皆が驚いているとジコチューの口が開き、マナと晴夜達はその口の中へ吸い込まれていく。

それだけじゃなく、アイちゃんも吸い込まれてしまった。

「みんな!」

ジヨも一緒に行くこうとしたが、どこから攻撃が飛んできた。飛んできた方を見るとそこにはボールがいた。

「トランプ王国の騎士よ、レジーナ様はお前を呼んでいない」

その後、ベールもジコチューの口に入り、ジコチューは消滅してしまった。

「みんな……」

今のジョーには信じて待つことしか出来なかった。

ガマロジコチューの中に入り、マナ達はゲームの世界に落下していく。

そしてゲームの世界に足を踏み入れたが、その前にマナと六花、真琴はありすの下敷きとなっていた。

「イタタタタタ……アイちゃん大丈夫?」

マナが尋ねると、アイちゃんは飛んでいたため無事だった。

「とつても大丈夫みたいです」

「良かったあ……あれ? 晴夜君と龍牙君は?」

「和也さんも……?」

「そういえば、三人がいない」

マナ達は辺りを見回してみたが、晴夜と龍牙と和也の姿はなかった。

晴夜と龍牙と和也は、マナ達とは別の所へ着いてしまった。

「イテテテテテ……ここはどこだ？」

「イテエー！なんだよここは？それに、真琴達はどこだ？」

「なんだよこれ？やつぱ、罨……」

辺りを見回すとマナ達四人の姿もなく、ここには三人しかいなかった。

「ようこそ、観客席へ」

晴夜達は声が聞こえる方を振り向くと、そこにはソファに座っていた総一郎がいた。

「あんた……」

「お前がスタークの正体か」

「よろしくな、グリス」

総一郎が挨拶すると、三人がドライバーを取り出し、装着しようとする。

「おいおい、そんな警戒するな。戦う気なら今はない。お前らと話がしたいんだよ」

「話……」

「あんたなんかと話はしねえ！それより、真琴達はどこだ！」

「返答次第では、ここでお前を……！」

龍牙と和也がそう言いかけたところで、総一郎が指を鳴らすとマナ達とレジーナ達が

映し出された。

「みんな……どうゆうことだ、ゲームするんじゃないのか……」

「俺達は、観客としてこのゲームを見届ける。それだけだ」

「それって、どうゆうことだよ?」

「つまり、俺達はゲームに参加出来ないって事だ。ここで、みんなの勝利を信じるしかない……」

「なんだと!じゃあ俺達は……クソッ!レジーナの奴……ちつくしよう!」

龍牙が何も出来ない事に悔しくて地面を思い切り叩く。

「今は、信じよう。みんなが勝つ事を……」

晴夜が言うと、龍牙と和也は映像に映っているみんなを見る。

一方、映像の向こう側に居るマナ達は…

「アタシがつくったゲームステージだよ」

ライトが照らされると、レジーナとベール達三人が立っていた。

「ゲームが終わるまで、ここからでられないからね」

「待って!レジーナ、晴夜君と龍牙君とかずやんはどこ?」

「このゲームに、あの三人の仮面ライダーが参加だと人数が合わないからな。だからこのゲームには参加させない。」

「今ごろ、スタークと一緒に別の部屋で観戦してるだろ」

「そんな……」

「仕方ないわ、私達四人でやりましょう！」

六花が言うとなりあり、真琴が首を縦に振り頷く。

「みんな！行くよ！」

「うん！」

「ええ！」

マナ達四人がコミュニケーションに変身用ラビーズをセットした。

「プリキュア！ラブリック！」

四人の体が光に包まれ、プリキュアの姿へと変わった。

「みなぎる愛！キュアハート！」

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

「陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

「勇気の刃！キュアソード！」

「響け！愛の鼓動！ドキドキプリキュア！」

「レジーナとジコチューさん！このキュアハートがあなた達のドキドキ、取り戻して見せる！」

ハートは胸にハートマークを作り、いつもの決め台詞を言う。

「いいわあ！アタシをドキドキさせて！ゲームは三つよ！」

「三つ……以外と少ないな」

別の場所から見ていた晴夜はそう呟く。

すると、ハート達の前に台座が現れ、ソードが台座の上にクリスタルを置いた。そしてサッカー場へと場所は変わる。

「第一ゲームは、サッカーのPK勝負よ」

第一ゲームは、PK戦が行われる。

プリキュアチームの最初のキッカーはソード、ジコチューチームはベール。

「頑張れソード！」

「入る入る——！」

（絶対入れる……！）

ソードの強烈に放ったシュートはそのままゴールに入り、1点を取った。

「やったあ！」

「よっしゃあ、いいぞ！ソード！」

「流石だ——まこび——！」

別の部屋で見ていた龍牙と和也も喜ぶ。

だが、晴夜は不審に感じた。何故ボールはボールを止めようとは行かなかつた？

(何か、怪しいな……)

次は、攻守交代でジコチューチームはイーラがキツカー、プリキュアチームはロゼッタがキーパーといった組み合わせ。

「ほらよ」

キックオフが始まると、イーラは適当にボールを蹴った。

「余裕でキャッチですわ!」

転がってきたボールは、余裕でキャッチ出来る程だった。

すると、ボールがジコチューへと変化した。

「え?」

ボールは高速で回り、ロゼッタを弾いてから、ジコチューボールは自分からゴールに入った。

「ゴール!」

「ちよつと!ボールがジコチューだなんて卑怯だわ!」

「こんな不公平な勝負、あり得ない!」

今のは反則だとダイヤモンドとソードが抗議する。

「アリだよ。だってここはアタシが作ったアタシの世界。アタシがルールなんだから」

「やはり、罨か……」

そして晴夜も自分が思ってた通り、罨だったことに気付く。

そして、次にダイヤモンドがキッカー。しかし、ボールを蹴らず立ったまま苛立つていた。

その理由は、ボールジコチューが目の前で踊っていたからだ。

「あっ！猫が逆立ちしながらお魚啜えて跳んでるー！」

とダイヤモンドが指を差しながら言うのと、ボールジコチューがダイヤモンドが指した方見る。

（隙あり！）

気をとらせてその隙に蹴ろうとする。しかし躲かれてしまい、そのまま追いかけてつこうが始まってしまった。そして、ボールジコチューが手の上に乗る、点は取られなかった。

「そんな……」

「ざんねーん！」

そして、次のキッカーはレジーナとなる。ちなみにキーパーはロゼッタである。

「次はアタシだよ！」

「どうぞ、おいで下さい！」

「行くよー！はあっ！」

レジーナが放ったシュートはゴールの上に飛んだ。

「外れたビィー！」

外れたと思いきや、ゴールもジコチューだった。

「ゴールもジコチューですの？？」

ゴールが伸び、レジーナのシュートが入ろうとした時だった。

「そうはさせませんわ！ラブハートアロー！」

ロゼッタがラブハートアローを出現させ、ラビーズをセットした。

「プリキュア！ロゼッタリフレクション！」

ロゼッタリフレクションを展開させ、ゴールを防いだ。

「やった！防いだ！」

しかし、ジコチューが目から光線を放ち、ロゼッタを吹き飛ばした。

「ロゼッタ！」

その隙にゴールジコチューがボールジコチューをゴールへと入れた。

「ゴール！」

ハート達はすぐにロゼツタに駆け寄る。

「大丈夫?」

「はい……」

「卑怯過ぎる……!」

「だから、これもアリなんだよ。アタシのゲームではね」

別の部屋で見ていた晴夜と龍牙と和也も、あまりにもあんな勝負に苛立ちを隠せなかった。

「きたねえ!こんな所で、黙って見てられるか!」

「ああ、急いで向かうぞ!」

龍牙と和也は立ち上がり、部屋から出ようとするが、部屋には出口もなく、どうやって出るかわからない。

「何処に入り口があるんだよ!」

「クソツ!どうやって出るんだよ!」

「この部屋から出るには、ゲームが終わるまで出ることとは出来ない」

「そんなにまで、俺達がゲームに参加されると困るのか?」

「まあな、お前らまで参加されるとこちらが負ける確率が大きくなるから……」

晴夜と龍牙、和也を参加させると、ジコチューチームは負けるかもしれないと踏んで、三人をこの部屋に閉じ込めたと総一郎が言う。

そして、次のキッカーはハートだった。

「これで決めないと負けだわ」

「ハート、頑張つて！」

「行くよ！」

踊るボールジコチューに宣告すると、左足で蹴ろうとするハート。やはり、避けられてしまう。

だが、その隙についてハートは後ろに向けてバック宙し、「ごめんね」と言つてボールを蹴つた。驚いたボールも反応出来なかった。

「よし、決まつた！」

見ていた晴夜も決まつたと確信した。

しかし、ボールジコチューがシャッターを出し、ハートの放つたシュートを跳ね返しゴールならず、という結果になった。

「ぎんねーん！」

ハートがガツカリする。

「ダメだったか……」

見ていた晴夜も残念そうに言う。

突然、向こう側との映像が途切れた。

「さあつてくそろそろ話してやるか」

「話……何をだよ?」

「スマツシユについてだよ……」

「はあ?そんな、アンタが作ったんだろが!」

スマツシユを作り出したのは総一郎だと龍牙が問い詰めるが……

「違うな、俺は完成させただけだ。作ったのはお前の父親、桐ヶ谷拓人だ晴夜」

「えっ?……まさか、父さんがスマツシユを……」

まさかの父親が。スマツシユを作ったのは自身の父親だと知り、晴夜は自分の耳を疑う。

その頃、ゲームは第二戦のボウリングが始まろうとしていた。

「第二ゲームはボウリングよ」

ボウリングが始まると、レジーナとジコチュートリオは連続ストライクを決める。

「オールストライクだビィ〜！」

「嘘……！」

「普通に上手い！」

「見たか僕達の実力を」

「伊達にいつもボウリング場で駄弁って無いわ！」

「この日のために我々は密かに練習をしていた！」

「次はあなた達の番よ！」

そう言ってレジーナが指を鳴らすと、ピンが大量に増えた。

「な、何これ!？」

「これ全部倒さないとストライクにならないからね」

「全部って……何本あるの?」

ピンの数は間違いなく百本以上ある。

「私から行くわ！」

最初にダイヤモンドがボールを転がす。ボールは真ん中へと向かって行く。

「ど真ん中ですわ！」

「行っけーっ！」

だが、ボーリングピンもジコチューで、横に移動し、ボールが何も無い真ん中を通り

抜けて行つた。

「ガターだ!」

「ど真ん中に行つたのに、ガターは無いでしょ!」

とダイヤモンドが抗議するが…

「アリよ!アタシのルールではね!」

「どうするシャル!?!」

「ボウリングで負けたら後が無いケル!」

「このままじゃクリスタルが奪われてしまうでランス!」

「これに勝つて次も勝てば、クリスタルはゼーんぶアタシの物」

「みんなみんな!ちよつとちよつと!」

4人が集まり作戦会議を始める。

「何だ?作戦会議か?」

「悪あがきは見苦しいわ」

「それじゃ、いいわね?」

「キュアロゼッタ、参ります!」

作戦会議を終えるのと同時に、ロゼッタが立ち上がって手を上げた。

ボールを持ったロゼッタが、高速で回り出した。

「何だ？」

「クラシックバレエで培った回転でランス」

「高速回転で勢いをつけるビィ！」

プリキュアの力とバレエの技術によって生み出されたロゼッタによる大回転は、正に台風のような圧倒的パワーを生み出していた！

そしてタイミングよくボールから手を離し、ボールがより高速に向かって行った。

「どんな球を投げてても無駄よ！」とレジーナが言うともたジコチューが横に移動する。

「プリキュア！スパークルソード！」

そこにソードがスパークルソードを放ち、逃げ場を失わせた。

真ん中に集まったジコチューが全て倒れたが、まだ左右には多く残っていた。

「やるじゃない……でもまだ残ってるわよ。さあ、どうする？」

「あたしが残りのピン、全部倒して見せる！」

今度はハートが投げる事となった。

「だあああああつ！」

しかし、ハートが投げたコースはど真ん中。

「しまった！」

「そのコースじゃピンに当たらないシャル！」

ハートの投げたボールは、真ん中のコースに向かっってしまう。

「勝ったわ!」

レジーナが勝利を確信したその時だった。

「きゅぴらっば〜!」

アイちゃんが力を発動し、ボウリングの球を増やした。そして、増えたボウリングの球が、全てのピンを倒した。

——これが、レジーナの発言によりフラグ回収した瞬間である。

「「やったあ!」」

「よし!これで一勝だ!」

第二ゲームは、プリキュアチームの勝利となった。

「アイちゃんすご〜い!」

「しゅご〜い!」

「アイちゃんが喋った!」

「今言ったよね!しゅご〜いって!」

「言った言った!」

「しゅご〜い!」

「ソード、アイちゃん言葉が移ってるビィ」

ソードが頬を赤くし、みんなで笑い合った。

今度は体育館に場所を移す。

「第三ゲームはドッジボールよ。アイちゃん、審判よろしくね」

レジーナはアイちゃんを審判にさせた。このゲームでこの様な手段を取ったのは、おそらくさつきみたいないない事がないようにするためだろう。

「さりげなくアイちゃんのパワーが封じられたわ!」

「このゲームに勝てば、私達の勝ちよ!」

「チームワークで頑張ろう!」

「「ファイツ、オー!」」

四人で手を重ね合い、闘志を燃やす。

アイちゃんが笛を鳴らすと同時に、試合が始まった。

外野にはロゼッタ置き、内野には残りの三人と言った組み合わせだった。外野にいたバスケットボールジコチューが、三人に向かって飛んで行く。

「プリキュア!ダイヤモンドシャワー!」

ジコチューをかわし、ダイヤモンドがダイヤモンドシャワーを放ってジコチューを凍らせた。

「へえー、やるわねー!」

レジーナが指を鳴らすと、プリキュア側のコートが凍り出した。

「うわっ! あいたた……」

急に凍ったコートで足を滑らせたダイヤモンドが尻餅をつく。

「何このコート……!」

「そっちのコートはツルツル滑るから、気をつけてね」

レジーナの投げたボールがソードに当たり、上に飛んだ。

「たああああ!……セーフ!」

なんとかハートがキャッチして、ソードのアウトを防いだが、ハート達の不利に変わりはない。

一方その頃。別の部屋での晴夜と龍牙、和也は総一郎の言った真実に驚いて、ハート達の試合を見ていなかった。

「父さんが、スマツシユを……!」

「そんなわけ、ねえだろ!」

「出まかせ言うなよ! コラッ!」

「信じる信じないは、お前達の勝手だが、お前ら三人のライダーシステムもスマツシユと

「同じなんだぞ?」

「なんだと……!」

「元々、スマツシユとはライダーシステムが完成するまでの段階によって作られたもの。『ネビュラガス』と呼ばれるガスを注入した者はその瞬間から改造人間の様なものになり、それに対して人間のハザードレベルが 2 以下なら怪人に。そして、お前達三人はハザードレベル 3 以上だからライダーになれる。」

つまり、晴夜、お前の父親の研究は人を傷つける化け物を生み出した引き金となったようなものだ」

「そんな……」

晴夜は膝を折り、愕然とする。そして、総一郎は立ち上がる。

「さあくて、話は終わりだ」

総一郎がトランススチームガンを出し、コブラボトルを差し込んだ。

『コブラ!』

「蒸血!」

総一郎がトリガーを引くと彼の周りが霧に覆われ、霧が晴れるとスタークへと姿を変えた。

『ミストマッチ……! コツ・コブラ……! コブラ……! ファイアー!』

『ここから、戦いの時間だ』

「上等だ!」

「相手になつてやる!」

龍牙と和也はスクラツシユドライバーを装着すると、ドラゴンゼリーとロボットゼリーを取り出し、ドライバーに差し込む。

『ドラゴンゼリー!』

『ロボットゼリー!』

差し込むと、龍牙と和也の周りにビーカーが出現した。

「変身!」

ビーカーの中から出た液が龍牙と和也を包み、ビーカーが割れると。龍牙の体が青いスーツを、和也は黄色いスーツを纏い、頭部から噴出された液によりアーマーとして装着された。

『潰れる!流れる!溢れ出る!ドラゴンインクローズチャージ!ブラア!』

『潰れる!流れる!溢れ出る!ロボットイングリズ!ブラア!』

『ツインブレイカー!』

「行くぞ!コラっ!」

「うおおおおお!」

クローズとグリスがスタークへ戦いを挑む。

二人はツインブレイカーをスタークに向けるが、スタークは彼らの攻撃を防御する。

『ほうく、スクラツシユドライバーの力を完全に物にしたか!』

「ああ!今の俺は負ける気がしねえ!オラア!」

「このまま、一気に行かせて貰うぜ!」

一方、晴夜はドライバーを装着するどころか、戦う気力すら無くしていた。

「おい、いつまで拗ねてんだよ!いい加減しろよ!」

クローズが晴夜に叱咤するが、晴夜はまだシヨックから立ち直れずにいた。

「俺の父親の研究で、多くの人が……俺の、俺の父親のせいで……!」

自分の父親が人を傷つけていた、スマツシユを作っていたと言う真実を受け入れられずにいた。

すると、龍牙が…

「お前の父親は……博士が作ったのは、スマツシユだけじゃあねえだろ!」

「えっ!?」

「もしかしたら、本当に博士がスマツシユ作ったかもしねえ!でも、博士は、お前の親父が作ったライダーシステムは!誰かの為に戦い、誰かを守るために作られたものだから!」

「お前……」

「その力で、多くの人の明日を……未来を……守ってきただろ！」

それを今、実現させてるのは、桐ヶ谷拓人博士の息子、桐ヶ谷晴夜……お前だろ！」

——そうだ、今までライダーシステムを使ってきたのは、誰かを守る為に、多くの人の明日を守るために作られたものだと思いついた。そんな大事な事を忘れるなんて……

「……最悪だ、お前なんかに思い出されるなんて……」

そう言つて、晴夜は立ち上がった。

「そうだったな、ライダーシステムはみんなを守る為、大勢の人の明日を守るために作られたものだったな！」

「やつと、思い出したか！」

「さあ、実験を始めようか！」

晴夜はビルドドライバーを装着し、ラビットボトルとタンクボトルを取り出す。そして数回ボトルを振り、いくつもの数式が現れるとドライバーに差し込む。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

レバーを回し、前後からランナーが出現するとアーマーが形成される。そして、スタークに指を差しながら構えると、高々と叫ぶ。

『Are you ready?』

「変身！」

前後のアーマーが装着され、体から蒸気が流れ、さらに音声が響く。

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイー！』

——晴夜は人々の明日を守るために戦う科学の戦士、『仮面ライダービルド』へと変身した。

「勝利の法則は、決まった！」

アンテナをなぞるように上に上げ、手の平を開き、決め台詞を言うと、スタークに向かって攻撃する。

『どうした、親父の罪を受け入れられずにやけになったか？』

「違う！もし本当に父さんが作ったのなら、俺はトランプ王国を取り戻すことで、この父さんの罪を俺が償う！そのために、この力を使う！」

そう言つてビルドが、スタークに拳をぶつける。

その頃、第三ゲームのドッチボールの方は…

「何やってんだよ。僕がさつきと片付けてやるよ……あん？マーモ邪魔だ。そこどけよ」

イーラがボールを投げようとしたが、前をマーモが塞いでいた。

「嫌よ。そつちが移動すれば」

怒ったイーラの投げたボールが、マーモに当たった。

「わりーわりー。手が滑った」

「あるわよね……手が滑る事って……キィ〜ヤァ〜!手が滑った〜!」

マーモが勢いよく投げたボールをイーラは躲し、ボールの顔に命中した。

「お前ら〜!」

今度はボールも二人に向けてボールを投げるが、二人は躲した。躲したボールはレ

ジーナの足に命中した。

「あ……」

「痛い……」

「わ、わざとじゃありません!本当です!……イーラ!マーモ!お前達が避けるからだ

!」

「投げたあなたが悪いのよ」

「そうだそうだ」

「お前ら……!」

二人はボールに責任をなすりつけようとす。

「もう!みんな許さない!」

レジーナが指を鳴らすと、大量のボールが上から降って来て、ボール達に命中した。「あつたま来た！大体前から気に喰わなかったのよ！この小娘！」

「何よオバさん！」

「アタシはまだお姉さんよ！」

「ピチピチに若いアタシから見たらオバさん！」

ジコチューチームはチーム同士の乱闘により、ゲーム所じやない様子だった。

「えーつと、ドツジボールは……」

「戦っている相手が変わっていますね。」

「これが、ジコチュードツジボール……」

そこにアイちゃんが試合終了のホイッスルを鳴らした。

「試合放棄ね！」

「と言うことは——」

「プリキュアの勝利だバイ！」

三つのゲームが終わった結果、2対1によりプリキュアチームの勝利で終わり、同時に空間も元に戻った。

すると、ビルドとクローズとグリスが現れ。ジコチュー側からはスタークが現れた。

「あれ？（こ）は？」

「晴夜君！龍牙君！かずやん！」

プリキュアの四人はビルド達三人に駆け寄る。

「みんな、勝ったのか？」

ビルドが聞くと、ハートが親指を立てる。

『何だお前ら？負けたのか？』

「負けた……？」

レジーナは負けた事を受け入れられずにいた。すると、ビルドが彼女に駆け寄る。

「レジーナ、約束だ！クリスタルを渡すんだ！」

「クリスタルを……渡す……？」

「レジーナ？」

「嫌……」

「え……？」

「嫌よ……アタシ、クリスタルが欲しい……誰にも渡したくない！」

レジーナはクリスタルを渡す事を拒む。

「クリスタルは、トランプ王国の宝物よ！」

「そいつは、俺たちにとって大切な人を見つけるために、必要な物なんだ！」

「アタシにだって必要だわ！」

「ハートと晴夜君は、あなたのゲームがワナかもしれないって分かった！でも、あなたを信じて受けたのよ！」

「信……………？」

すると、レジーナの目が赤から青に変わった。

「そうだけ、俺達が何を言っても、マナと晴夜はお前を信じた！」

「その信頼を裏切るのですか!!？」

「レジーナ……………」

すると、後ろの四人がレジーナに語りかける。

「メンド臭えなー。約束なんか破っちまえばいいだろ」

「破っていいの?」

『いいんじゃないか?お前が欲しいなら力強くで奪えばいい!』

「邪魔する者を蹴散らせばいいわ」

「私達はジコチュー。ましてあなたは、キングジコチュー様の娘なのですから」

「そうだ……アタシはキングジコチューの娘！」

ジコチューの三人とスタークの発言で、レジーナの目の色がまた赤くなった。

「レジーナ！」

「約束でも友達でも渡さない！クリスタルはアタシの物よ！」

指を鳴らすと同時に、ガマ口ジコチューが現れた。

「レジーナ! やめるんだ……!」

「ジコチュー! プリキュアと仮面ライダーを倒して、クリスタルを奪って!」

「お前の物は俺の物! 全部よこせ!」

どこそのガキ大将みたいなことを言いながら、ジコチューがロイヤルクリスタルを奪おうとする。

「仕方ない……!」

『ラビットタンクスパークリング!』

ビルドはラビットタンクスパークリングを差し込み、レバーを回す。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

『シュワツと弾ける! ラビットタンクスパークリング! イエイ! イエイ!』

スパークリングフォームへとフォームチェンジし、ドリルクラッシュャーも装備した。

ハート達四人がジコチューの口を抑え、ロイヤルクリスタルを奪われるのを阻止する。

「クリスタルを渡さない! 渡さない! ここから出られないわよ!」

「絶対に渡さない!」

「ここはジコチューの中！ 私達の力で浄化すれば出られるハズよ！」

「クリスタルを奪うのよ！ ジコチュー！」

「レジーナ！ 約束は破るためにあるんじゃない！ 守るためにするんだよ！」

「約束は、人と人の誓いなんだ！ だから、破ることは許されなんだ！」

ビルドがそう言うと、ジコチューをドリルクラッシュャーで攻撃し、更にクローズとグリスがツインブレイカーでダメージを与えた。そして、ジコチューがよろけた隙に四人がジコチューを投げ飛ばした。

「決めるぞー！」

ビルドが言うのとレバーを回し、クローズとグリスはレンチを下ろし、ハート達四人はラブハートアローを出現させる。

『Ready go!』

「二二プリキュア！ ラブリーフォースアロー！ 二二」

ラブハートアローの弓を大きく展開させ、台尻部分の引き金を引き絞り、前面にハート形のエネルギー体を生成する。そして相手にウインクし、ラブリーフォースアローを放った。

そして、ビルドとクローズとグリスが勢いよくジコチューにライダーキックを放つ。

『スパークリングフィニッシュ！』

『スクラッププレイク!』

『スクラップフィニッシュ!』

スパークリングフィニッシュとスクラッププレイク、スクラップフィニッシュ。そして、ラプリーフオーサローが命中する。

ジコチューは浄化され、プシケーに戻った。

すると、そこにゲートが現れ、六人を吸い込んだ。

そして待つていたジョーの近くから、七人が出て来た。

アイちゃんがジョーに抱きつく。

「お帰り、アイちゃん。みんな」

「た、ただいま……」

「なんとか、無事に帰れた……」

そこにジコチューの三人とスターク、レジーナも出て来た。

「クリスタルは?」

「なに? どこ行つたんだよ!」

消えたクリスタルを探そうとすると、

「ここよ! クリスタル五つ、貰ったわ!」

後ろを振り向くとレジーナの手元には、全てのロイヤルクリスタルがあった。

「これでクリスタルは全て、アタシのモノよ」

レジーナが五つのロイヤルクリスタルを近づけたその時、光り出してどこかへ飛んで行ってしまった。

「クリスタルが……」

「飛んでっちゃった……」

「一体どこへ行っただ……」

五つ全てが揃ったクリスタルは輝き出し、どこかへ飛んでいってしまったことに晴夜達は驚きを隠せずにいたのであった…

次回！Re・ドキドキ&サイエンス！

第22話 クリスタルを追って雪山へ

第22話 クリスタルを追って雪山へ

五つのクリスタルが揃うと急に光り出し、五つともどこかへ飛んで行ってしまった。

「ちよつと！どうなってるの!?!」

「俺達に分かるわけねえだろ!」

「もう！追うわよ！クリスタルを!」

『俺は面倒だからここまでだ、チャオ!』

そう言つてスタークは煙を纏つて消えていった。

「もう！行くわよ!」

レジーナとジコチュー達はクリスタルを探しに向かった。

「あたし達も行こう!」

「待つて!行こうつてどこに!?!」

「……あ」

確かにクリスタルがどこへ行つたのか知らない。

すると、ソリティアの前にピンクのリムジンが停まり、セバスチャンが出て来た。

「皆様、お困りのようですね。ここはわたくしめにお任せを」

「セバスチャンさん……?」

「現在クリスタルは北西の方角にマツハ3の速度で移動しています」

リムジンに搭載している装置で、飛んで行ったクリスタルの位置を特定する。

「凄い!」

「そんな事まで分かるシャル!?」

「この車すごい技術だな」

「人工衛星から送られて来る情報で、位置を特定出来るんですわ」

「さらつと言ったけど……」

「相変わらず、すげえな」

俗に言う、かがくのちからつてすげー!つて奴である。

「人工衛星まで……流石財閥だな」

「セバスチャンさんって何者のなんだよ……?」

「四葉家の出来る執事さんでランス」

ランスが自慢気に言う。そのままクリスタルの行方を調べていると、突然クリスタルの反応が消えた。

「む? 反応が消えました」

「どういう事ですの?」

反応が消えてしまい、クリスタルの位置が分からなくなってしまう。

「クリスタルの位置が分からなくなった……と言う事ですか？」

「はい」

「そんな……」

「クリスタルが消えた所へ行ってみよう！」

マナがクリスタルが消えたところに行つて、探しに行こうと提案するが…

「座標が示す限りでは、氷河地帯のようですが」

セバスチャン曰く、クリスタルの位置が途絶えた場所は氷河地帯だと言う。

「氷河地帯……かなり遠くへ飛んでいったな」

「それってどんな所ケル？」

「夏でも溶けない氷に覆われた場所よ」

「涼しそうケル！」

「まあ、最初はそう思うかもしれないけど、実際に行くとかかなり寒いぞ。この格好のままだと凍死するな」

「ケル……」

晴夜の発言にラケルは怯えた。

「どうやって行くビィ？」

「氷河地帯とは、かなり遠いからな……何か飛べる乗り物があれば……」
「皆様、ここも私にお任せを」

晴夜達は現在、セバスチャンの操縦するヘリコプターで、ロイヤルクリスタルを見失った所まで向かっていた。

「凄いね、セバスチャンさんって」

「何でも出来るスーパーマンシヤル！」

「まさかヘリコプターで行くなんて思わなかったよ」

「真琴さん、どうなさいました？」

「何としても、レジーナ達より先にクリスタルを見つけないと！」

「そうですわね」

「うん」

「「ああ！」」

晴夜達はクリスタルを探そうと気合を入れる。

「そういえば、晴夜君と龍牙君とかずやんは別の場所でスタークと何をしていたの？」

「……」

「晴夜……」

「気にすんなよ、話すよ」

晴夜はみんなにスタークに聞かされた真実を教えた。スマツシユがライダーシステムと同じ仕組みであるものと告げられ、それを作ったのは、晴夜の父親と告げられた事を。

「そんな……」

「でも、こいつのおかげで大事な事を思い出したよ、ライダーシステムは多くの人の明日を守るためのものだって！」

「珍しくガラにもない事言ってたよな！」

晴夜と和也が龍牙を見ると、龍牙が照れ臭そうに笑う。

「それにしても、レジーナは許せないビィ！」

「マナとの約束を破ったでランス〜！」

「ケル！」

ふと、マナ達の約束を破ったレジーナに対し、ダビィ達が怒りを吐露する。

「でもあの時のレジーナ、何となくおかしかったんだ……」

「そうだな、いつもと目つきが違ってた……」

「本性を現したのかもしれないわ」

「マナと晴夜君がレジーナを信じたい気持ちは分かる。でもあの子はマナを裏切った。」

それは事実よ」

「次は、この前のようにゲームでは済まされなくてもいいかもしれません」

「それにこれ以上、卑怯な事をするなら、許さねえ！」

「ああ、もし今度また同じことするなら、ただじゃおかねえ！」

真琴達はレジーナが約束を破った事を許せないと話していると晴夜が…

「俺は、レジーナをまだ信じてみたい」

「晴夜君……」

「何言ってるの？レジーナはマナとあなたとの約束を破ったのよ！」

「そうだけど、レジーナの性格が変わったのは、あの美術館で赤いクリスタルを見つけてからだ」

「そう言えば……」

「じゃあ今のレジーナは、ロイヤルクリスタルがそうさせたって事……？」

「まだ詳しいこと分かんないけど……それに、この前のゲームの時、一瞬だけ目の色が戻ったんだ。」

それに、あの時あんな事をしたのは、ジコチュー達が余計な事を言ったからで、言わなければもしかしたら……だから、もう少し信じたいんだ」

晴夜もマナ同様、レジーナを信じる気持ちに、六花達は何も言葉が出なかった。

「晴夜君……ありがとう……」

へりはそのまま、氷河地帯へと向かう。

しばらくして、へりは近くの山荘に着陸し、クリスタルが消えた位置を確認する。

「クリスタルが消えたのは、あの山の山頂付近ですが、これ以上へりで近づくのは危険です」

へりではこれ以上行けないと、セバスチャンが言う。

「つまりここから先は、雪山登山ってワケですね」

「いかにも」

するとそこへ、山荘の管理人が現れた。

「アンタらまさか、山頂に向かうつもりかね？」

「あ、はい」

「そのつもりです」

晴夜とマナが登山すると管理人に話す。

「それはいかん。あの山は昔から霊峰とされ、山頂付近はなんぴとも立ち入ってはならんのだ。未だかつて、頂上に登った者はいない」

「えっ、そうなの？」

山荘の管理人が晴夜達に登山道するのは危険だと伝える。

「ご安心を。座標が示した地点は、立ち入り禁止区域の外です」

「そうだとしても、あの山は若い娘には厳し過ぎる。無理はせん方が……」

「それでも、行かなければ！あそこには、探し続けたものがきつとあるんです！」

「そうなんだ！そこにあるかもしれない！だからどうしても行きたいだよ！」

真琴と龍牙の発言に何かを感じた山荘の管理人が二人に問う。

「何か、ワケがあるようじゃな」

「は？」

「であれば、あの山の光の伝説を信じなさい」

「光の伝説？」

「何なんですか？その伝説って？」

「あの山には昔から信じあう仲間、つまりパーティを奇跡の光が救うと言う伝説がある。

健闘を祈ってるよ」

『ありがとうございます！』

八人が管理人に登山の許可を頂き、お礼を言う。

「よし、行こう！奇跡の光を信じて！」

「ああ！」

「おおー！」

「うん」

「ええ」

「行つてらっしゃいませ」

セバスチャンとアイちゃんは山荘で待つ事にした。

登山を始めると、晴夜と龍牙、和也はドライバーを装着し、マナ達四人はコミュニケーションにラビーズをセットし、ジョーも鎧を纏つた。

『ラビット！タンク！ベストマツチ！』

『ドラゴンゼリー！』

『ロボットゼリー！』

『Are you ready?』

「変身！」

「プリキュア！ラブリンク！」

『ラビットタンク！イエーイ！』

『クローズインドラゴンチャージ！ブラア！』

『ロボットイングリッド！ブラア！』

「みなぎる愛！キュアハート！」

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

「ひだまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

「勇気の刃！キュアソード！」

「一二響け！愛の鼓動！ドキドキプリキュア！一二」

山をジャンプして先に進むハート達プリキュアとビルド達仮面ライダー。

だがジョーは六人より進むのが遅く、途中で息を切らしていた。

「大丈夫ですかー？」

「既に息が上がっていますが……」

「もう少しスピードを遅くしましょうか？」

「何の、これしき！これでも僕は……トランプ王国の……ナイトなのでね……」

「トランプ王国のナイトの能力が疑われそうな様子だけだ」

「そう言ってるなよ。かわいそうだろ」

——ぶつちやけ、鎧を脱いで登山用の服を着た方がいいのでは？と思った私は悪くないはず。

「手貸しましょうか？」

「雪山で無理は禁物です！」

「だ、大丈夫！いざと言う時は、速攻頼らせて貰うから！」

大丈夫だと言って、六人はさらに上へと登って行き、頂上よりかなり近い所で一度止まる。

「空気が薄くなって来た」

「だいぶ、高い所まで登ってきたらかな」

「気温もかなり低いわね。変身してるから耐えられるけど」

途中の広い所で足を止めるが、大分上まで来たので、空気は薄くて寒かった。

「ここで変身が解けたらかなり危ないな」

「ええ、気を付けないと」

「クリスタルが消えたのはどの辺り？」

「座標が示すポイントは、この辺りなのですが……見当たりませんわね」

ロゼッタが落ちた地点の地図を広げて答える。

「雪の下に埋もれているのかもな」

「マジか……」

グリスがそう言うと、六人が広大な雪の景色を見る。

「よーし！掘ろう！」

「えっ?!ここ一面を?!」

「それは……いくら何でも無理なんじゃ……」

しばらく遅れて到着したジョーが言う。

「よし！なら、俺が！」

クローズがツインブレイカーを出して地面に向ける。

「おまえ、何する気だよ！」

すぐに、ビルドがクローズを止める。

「ん？いや、掘るの面倒だからこれで」

「バカヤロー！雪崩が起こるかもしれないからダメ！」

「バカって何だよ！バカって！」

ビルドとクローズが揉めてると、ソードが周りを見渡しながら何処かにあるかもしれないクリスタルに呼びかける。

「まこびー？」

「どこにあるのー！クリスタル！奇跡の光の伝説が本当なら、お願い！光って！」

「来たわねプリキュアに仮面ライダー」

しかし、その呼びかけに反応したのはクリスタルではなく、レジーナとジコチュートリオだった。

「レジーナ！」

「話は聞いたぜ。クリスタル、この辺にあるんだな？」

「であれば頂くまでね」

「搜索ご苦労」

「どこまでちやつかりしてるのよ！」

「晴夜さんとキュアハートに言う事は無いんですの……!!?」

ロゼッタがレジーナに問う。

「あるよ。クリスタルは渡さない」

「レジーナ……」

（目の色が……先より濃くなった？やはり、クリスタルが関係しているのか？）

晴夜はレジーナの変化にクリスタルが関係していると感じる。

「クリスタルを手に入れて、どうするつもりだ!!?」

「そんなのあなたに関係無いでしょ？」

「関係あるんだよ！あれはトランプ王国を……この世界を救う鍵かもしれないんだよ

！」

「王女様も、クリスタルも、絶対あなたには渡さない！」

そう言ったソードはレジーナを指差した。

「フン。王女なんてどうでもいいし。アタシが欲しいのはクリスタル。クリスタルだけ

よー！」

そう言うのと更にレジーナの目の赤色が濃くなった。

(また！でも、何でそこまでクリスタルを求めらんだ…)

「レジーナ、どうしちゃったの?!? あたしが知ってるレジーナじゃないみたい！」

「フン、アタシの何を知ってるって言うの?」

「レジーナ……!」

「これ以上話しても無駄よキュアハート。あの子はもう……友達じゃない!」

「待ってくれ! ダイヤモンド、もう少しだけ……!」

「帰って! クリスタルはアタシの物よ!」

レジーナが指を鳴らすと同時に、上から巨大な雪玉が転がって来た。

「ラブハートアロー!」

ロゼッタは直ぐにラブハートアローを出現させ、ラビーズをセットする。

「プリキュア! ロゼッタリフレクション!」

そしてロゼッタリフレクションを発動させ、雪玉を投げ飛ばした。

「みんな消えてなくなっちゃえ!」

レジーナがもう一度指を鳴らすと同時に、今度は更に大量の雪玉が転がって来た。

「クソッ! まだ来るのよ!」

『ビームモード！シングル！シングルフィンッシュ！』

「ハアッ！」

グリスがツインブレイカーにボトルを差し込み、ビームモードで砲撃で雪玉を破壊する。その隙に、ソードがラブハートアローにラビーズをセット。

「プリキュア！スパークルソード！」

ソードはレジーナ達に向けてスパークルソードを放ったが躲かれてしまう。

しかし、その攻撃で雪原が崩壊し、レジーナがクレバスの中に落ちて行く。

「レジーナ！」

落ちるレジーナの手を掴んでハートが救おうとするが、ハートも一緒に落ちてしまった。

「ハート！レジーナ！」

ビルドもハートとレジーナを追って下に落ちる。

「マナー！晴夜君ー！」

「マナちゃん！晴夜さーん！」

ダイヤモンドとロゼッタが呼びかけるが、二人から反応が返って来ない。

「私のせいでキュアハートが……晴夜が……」

「ううん。マナと晴夜君は自分の意志でレジーナを助けに行っただと思う」

「そうですわね。マナちゃんと晴夜さんにとつてレジーナさんは、今も友達なのかもしれないません」

「それに、あいつら事だ。きつと大丈夫だ！」

「無事だつて信じようぜ！」

「……うん！」

四人がソードを慰める。

「いずれにしても、早く助けに行かないと」

「変身してたから、多分死んではないハズだと思うけど」

「それに、晴夜さんがフォームチェンジすれば……」

ダイヤ達がビルドとハートの安否について言い合っていると……

「諸君、今日の所は一時休戦と行こうじゃないか」

「休戦？」

急にクローズ達にベールが休戦を持ちかける。

「とか言つて油断させて、一気に襲つて来るつもりなんじゃ……！」

「テメエらなんか、もつと信じられねえよ」

「怪しい過ぎるんだよ！」

「そう考えるのは勝手だが、お前達も仲間を探さねばマズいのでは？」

「ま、そう言う君達もキンググジコチューの娘に何かあったら困るだろうしね」

ジョーが聞くが、あまり心配してなさそうな答えが返ってきた。

「別にあたし的にはレジーナなんてどうなってもいいけど」

「でもアイツのためにキンググジコチュー様にお置きされんのは勘弁だな」

「お互い争ってる場合じゃ無いと思うがな」

そう言つてベール達三人は姿をくらませた。

「とにかくまずは、キュアハートとビルドを見つけよう。さあ、僕達も行こう」

ジョーが言うと四人が頷く。

「かなり深いクレバスよ」

「皆さん、気を付けて参りましょう」

「踏み外したら、終わりだな」

「無事でいて、キュアハート……晴夜……」

「待つてろよ！ すぐに向かうぜ！」

六人がクレパスの中を慎重に降りていく。

その頃、クレパスの真下では……

「寒っ……！」

水滴が顔に当たったレジーナが目を覚ます。

その横では、レジーナの手を掴んだまま気を失ったマナが倒れており、近くには変身解除した晴夜も倒れていた。

「マナ……晴夜……」

何……？ クリスタル？ ……キレイ……」

レジーナは飛んで来た五つのクリスタルを両手で掴むと、クリスタルが光り出し、突
然氷が崩れ出した。

「！レジーナ！危ない！」

「逃げろ！」

目を覚ましたマナと晴夜がレジーナを崩れる氷から離れた。

「マナ、晴夜、あれ！」

崩れた氷の中から出て来たのは、氷に全身を覆われたアン王女だった。

二人が近づくと、レジーナの目の色が赤から青に戻り、クリスタルも光らなくなった。

「王女だ……」

「えっ？この人が？」

「トランプ王国の王女……？」

「クリスタルが、王女様の所に導いてくれたのかも！」

と三人が氷に覆われている王女様を見つめる。

「綺麗な人……」

「うん……」

「とても、優しい人だと、感じる……」

レジーナと晴夜、マナは目の前にいる王女様に見惚れていると……

「マナ……晴夜……これ……」

約束破つて、ゴメン……」

レジーナは持っていたロイヤルクリスタルをマナに渡す。

「レジーナ……」

「戻ったのか……」

「えっ?」

「あたしの知ってるレジーナに戻った!」

「ちよつとマナ……!」

マナは勢いよく、レジーナを抱き締める。

「やっぱりレジーナだ!」

「当たり前でしょ、変なマナ。でも、どういう事?戻ったって」

「この赤いクリスタルを初めて見た時、お前の目の色と性格が変わってたんだよ」

「ついさっきのレジーナは別人みたいで、クリスタルを見ると、目つきが変わっちゃってんだ」

晴夜とマナが今でのレジーナの性格を話す。

「今は……どう？」

「変わらない。何だったのかな？」

「ああ！いつものレジーナだ」

と言ったら晴夜とマナは王女の氷に近づく。

「でも、あの人を王女様なら、急いでまこびーと龍牙君、ジョーさんに知らせなきゃ！」

「まこびーと龍牙、ずっと王女様を探してたからな」

「何のために？」

「それは……滅びてしまったトランプ王国を元に戻して、人々を救うためだよ」

「そうなるよ、アタシやパパはどうなっちゃうのかな……？」

「レジーナ……」

「あの人をパパを石にしたんだし……」

「ねえ、レジーナ。あたしにも何が真実なのか分からない。」

でも、レジーナのパパがトランプ王国を元に戻してくれたら、王女様も、これ以上戦ったりしないんじゃないかな？」

「分かり合えるよ！俺たちとレジーナだって友達になれたんだ！」

「でも、パパって凄く怖いし……」

「大丈夫！あたし達が王女様とレジーナのパパの懸け橋になるっ！」

「何かあったら、俺たちが力になるよ！」

「うん……」

一方、ダイヤモンド達はクレバスを滑りながら降りていた。

「みんな〜！」

「シャルル！」

マナとはぐれてしまったシャルルがダイヤモンド達と合流した。

「マナとはぐれちゃったシャル〜！」

「大丈夫。マナもきつと近くにいます。多分晴夜も！」

「一緒に探しましょう！」

「だが、一つ問題がある」

「どうしたんですか？」

「この先には足場が無い、晴夜君のボトルのように飛べる力があれば……」

ジョーがこの先には道が無いと告げる。

「確かに、こんな時、晴夜が入ればな……」

「私に任せて！」

ダイヤモンドがラブハートアローにラビーズをセットする。

「プリキュア！ダイヤモンドシャワー！」

そしてダイヤモンドシャワーで氷の階段を作り、先へと進んだ。

その頃、マナ達がどうやって帰ろうか考えていると、光が自身達の元へとやって来ている事に気付く。

「ん？あの光は……」

「ダイヤモンドシャワーの光だ！」

「みんなが来てくれたんだ！」

「おーい！みんなー！」

晴夜とマナは叫びながら、みんなを呼ぶ。

「もう、そんな大声出さなくてもアタシが連れてってあげるってば」

そう言つて指を鳴らす、何も起こらなかった。

「あれ？」

不審に思ったレジーナは何度か鳴らしたが、やはり何も起こらなかった。

「何で？力が使えない……」

「マナーー！」

「みんな……！レジーナ、みんなが来てくれたよ！」

マナは皆が迎えに来てくれた事を喜んでいると、レジーナは気まずい感じでそつぽを向く。

「じゃあ行けば……アタシが一緒に行くのはおかしいでしょ……」

約束破って、酷い事しちやっただし……」

暗い顔をしてそう話す、晴夜とマナは気にせずレジーナの手を掴む。

「じゃあ一緒に謝ろっ」

「えっ？」

「許して貰えるまで、何度でも俺もマナも一緒に謝るよ！」

「どうしてマナと晴夜が……？」

「友達だから。レジーナもみんなも」

「だからこそ、みんなにもレジーナの事を分かって貰えるまで、一緒に謝ろ！」

マナと晴夜はレジーナと一緒にみんなに謝ろうと言う、それを聞いたレジーナは……

「バカみたい……！」

「えっ？」

「？」

「本当にマナや晴夜みたいなバカ、見た事無い……！」

でも、マナと晴夜を裏切ったアタシはもつとバカ……！バカバカバカ！
マナと晴夜の優しさに、思わず涙を流す。

「レジーナ……」

「さあ、行こうぜ！」

マナと晴夜はそう言つて、三人で一緒にダイヤモンド達の所へと向かう。

「マナー！晴夜ー！」

「シャルル！」

シャルルが三人の元に来た。

「マナ！晴夜君！」

「マナちゃん！晴夜さん！」

「みんな！」

「来てくれた！」

そして六人も降りて来た。

「三人とも、無事で良かった！」

ソードが二人の無事を確認するとレジーナの方を見る。

「私はやっぱり、あなたを信じる事は出来ない。

……でも、あなたがいなくなるとマナが悲しむから……」

「俺もソードと同じけど、晴夜が信じてるから、俺もお前を信じたくなつた」

「ありがとね！信じてたよ！絶対みんなが来てくれるって！

そしたら、ダイヤモンドシャワーの光が見えて——」

「起こつたのですね！奇跡の光の伝説が！」

「そしてもう一つ奇跡が……！」

「ええ、これです」

晴夜は氷に覆われているアン王女を五人に見せる。

「アン！」

「「王女様！」」

「やっぱり王女様だったんだ！」

「見つかったのね！」

「ええ！」

「あれが、まこぴー達が探していた王女……（綺麗な人だな）」

六花達が行方不明だった王女が見つかった事を喜び、和也は初めて見た王女の感想を
心中でそう呟く。

「王女様！」

「アン！」

ソードとクローズ、ジョーの三人がアンの元へ走り出した。

その時、近くまで三人がきた瞬間、雪ダルマジコチューが道を塞いだ。

「帰れ！この山は俺の物！」

「やっちゃいなジコチュー！」

「人を蹴散らして、トップで頂上を極めるのよ！」

どうやら、マーモとイーラが作ったジコチューらしい。

「俺が一番ナリ！」

雪玉を放ち、ソードとクローズ、ジョーを吹き飛ばした。

「ラブハートアロー！」

ロゼッタがラブハートアローを出現させ、ラビーズをセットした。

「プリキュア！ロゼッタリフレクション！」

ロゼッタリフレクションを発動し、雪玉を跳ね返した。

「行くよ！シャルル！晴夜君！」

「オーケー！」

晴夜がドライバーを装着し、ボトルを差し込む。マナはコミュニケーションにラビーズをセッ

トした。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

レバーを回し、前後にランナーが現れるとアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身！」

「プリキュア！ラブリンク！」

晴夜の体にアーマーが装着されて仮面ライダービルドに、マナの体が光に包まれてプリキュアへと姿を変える。

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ！』

「みなぎる愛！キュアハート！」

二人は変身を完了した。

「レジーナ！下がってろ！」

ビルドが指示すると、レジーナは後ろへと下がる。

「プリキュア！スパークルソード！」

ソードがスパークルソードを放ち、ジコチューにダメージを与える。

「雪ダルマか、ならこいつの出番だ！」

ビルドはそう言って2本の違うボトルを差し込む。

『ハリネズミ！消防車！ベストマッチ！』

『Are you ready?』

「ビルドアップ！」

ドライバーから形成されたアーマーが重なり装着された。

『ファイヤーヘッジホッグ！イエーイー！』

ファイヤーヘッジホッグへとフォームチェンジしたビルドはラダーから火炎放射を出し、雪だるまジコチューに攻撃すると、雪だるまジコチューの体が徐々に溶け始めていく。その隙にビルドはドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

『ボルテック フィニッシュ！』

ハリネズミの右腕で雪だるまジコチューを吹き飛ばした。

「一気に行くぞ！」

「うん！みんなで行くよ！」

『ラビットタンクスパークリング！』

ラビットタンクスパークリングを差し込み、レバーを回すとアーマーが形成された。

「ビルドアップ！」

そう叫ぶと新たなアーマーが装着される。

『ラビットタンクスパークリンググーイエイ！イエイ！』

スパークリングへとフォームチェンジし、ドリルクラッシャーを構えるとボトルを差し込み、同時にドライバーのレバーを回した。

『Ready go!』『Ready go!』

『ボルトックブレイク!』『スパークリングファイニッシュ!』

クローズもツイインブレイカーにクローズドラゴンを差し込む。

『クローズドラゴン!Ready go!』

『レッツブレイク!』

するとクローズの背後にドラゴンが現れた。

そして、グリスはドライバーからロボットゼリーを取り出し、ロケットボトルを差し込んだ。

『ロケット!』

『デイスチャージボトル!潰れなくい!デイスチャージクラッシュ!』

すると、グリスの腕からロケットが形成された。

『プリキュア!ラブリーフォースアロー!』

ラブハートアローの弓を大きく展開させ、台尻部分の引き金を引き絞ると同時に、前にハート形のエネルギー体を生成される。

そして相手にウインクして、ラブリーフォースアローを放った。

先にビルドとクローズとグリスの技が決まると、次にハート達のラブリーフォースアローが命中したジコチューは浄化され、プシケューはもとに戻っていた。

戦闘が終わり、王女の元へと向かうが、ボールが氷を浮かせた。

「王女は頂いて行くぞ」

「王女様！」

「アン！」

「レジーナ！」

「マナ……晴夜……」

レジーナはイーラとマーモに両腕を抑えられていた。

「行きましょう。お父様がお待ちです」

そして王女とレジーナは、ボール達に連れてかれてしまった。

次回！Re・ドキドキ&サイエンス！

第23話 突入！トランプ王国と禁断のアイテム！

第23話 突入!トランプ王国と禁断のアイテム!

ジコチューのアジトで、イーラとマーモが王女を捕まえたので祝杯を挙げていた。

「勝利の味は格別だぜ」

「あなたを始末すれば、トランプ王国は本当にオ・シ・マ・イ」

マーモが氷に覆われていたアン王女に言う。

「せっかく再会出来たのにすぐにお別れなんて、寂しいわあ」

「今まで一番働いたんだから、僕の手柄だよな。これからはベールもマーモも僕の部下だ」

そう言うつてからイーラとマーモは笑うが、すぐに止めた。

「……ところで、何でまだ氷漬けのままなんだ?」

「これじゃあ手出し出来ないわよ」

マーモが言うつと、イーラが巨大なハンマーを出す。

「だったら割ってみよう。だあああああつ!」

そのまま氷を巨大ハンマーで叩き込んだが、ヒビ一つ入らず、逆に衝撃を受けた。

「甘いわよ、そんなんじや」

今度はマーモがダイナマイトを出してきた。

「お、おい！やり過ぎだろ!？」

「離しなさいよ！」

マーモがダイナマイトに点火させて氷を壊そうとするが、イーラに止められる。

「あつ！」

そして落ちたダイナマイトが爆発し、二人は大ダメージを受けたが、王女の方は傷一つ無かった。

「どうぞ……あれはもう、お父様の所を持って行くしかありません」

ベールがレジーナのいるカウンターにメロンクリームソーダを置いて言う。

「そうね……」

だが今のレジーナはハートとビルドの事を考えていた。

「おや、どうされました？」

「何でも無い！」

と言つてレジーナが顔を隠す。

「そうですか？まるで誰かを気にされてるようなお顔でしたね」

「そんなワケ無いじゃない！そんなワケ……」

一方、ソファでレジーナを見ていたスターク。

『……情に流されているな、完全に……』

彼女の様子を見ていた彼は、レジーナが何を考えているか察していた。

その頃、雪山から返ってきた晴夜達はソリティアへと集まっていた。

すると、ジョーが立ち上がった。

「お兄さん、どこへ……!」

「トランプ王国だよ。アンはきつと、キングジコチュウの元へ連れて行かれたはずだ。もう一刻の猶予も無い……!」

苛立ったジョーがトランプ王国へ向かおうとする。

「でも、トランプ王国に行く方法は無いビィ……!」

「魔法の鏡みたいなものはもうないからな……!」

「どうしたら……!」

「クソツツ!行く手段が無しかよ!」

みんなが悩んでると。

「大丈夫シャル!」

「前向きに行くケル!」

「きつと何とかなるでランスよ」

「前向きだな、お前ら……」

シャルル達が言うのとみんなが前向きになった。

その時、アイちゃんが持っていたロイヤルクリスタルが光り出した。

「ロイヤルクリスタルが……!」

「これは……!」

「トランプ王国に繋がるゲート……か?」

五つのロイヤルクリスタルが正五角形を精製すると、トランプ王国へのゲートを作り出した。

「入れって言ってるの?」

「クリスタルは今まであたし達を導いてくれた!今回もきつとそうだよ!」

「行こう!」

八人が出現した空間ゲートに入ろうとする。

「アイちゃんのお世話は、お任せ下さいませ。ご武運を」

「行こう、みんな」

晴夜の発言にマナ達が頷く。

八人がゲートに入り、トランプ王国へと向かう。

「(絶対!)」

「(王女様をー)」

「(アンをー)」

「(取り戻す!そして、レジーナともちやんとお話しするんだ!)」

「(必ず、二人を連れて帰る!)」

七人が誓いを立てると、晴夜と龍牙と和也はドライバーを装着してボトルとスクラツシュゼリーを出し、マナ達はラビーズをコミュニケーションにセットした。

『ラビット!タンク!ベストマッチ!』

『ドラゴンゼリー!』

『ロボットゼリー!』

『Are you ready?』

「変身!!?」

「プリキュア!ラブリック!」

晴夜達三人は仮面ライダー、マナ達四人はプリキュアへと姿が変わる。

『ラビットタンク!イエーイ!』

『クローズインドラゴンチャージ!ブラア!』

『ロボットイングリッド!ブラア!』

「みなぎる愛!キュアハート!」

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

「陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

「勇気の刃！キュアソード！」

「響け！愛の鼓動！ドキドキプリキュア！」

そして八人はゲートをくぐり、トランプ王国へと向かう。

その頃、トランプ王国ではジコチューの親玉、キングジコチューの前にジコチュートリオから王女を差し出された。

「キングジコチュー様、トランプ王国の王女を連れて参りました」

「遅おい！」

「申し訳ございません！」

キングジコチューの怒声にベール達は一瞬驚いたが、すぐに謝罪した。

「だがレジーナ、お前の事は褒めてやろう。流星は私の娘よ」

「ありがとう、パパ……」

レジーナは褒めてもらえたのにあまり嬉しく無いような様子だった。

「王女を前に」

「はっ」

キングジコチューの前にアン王女が浮かび上がる。

「お前を始末すれば、私を止める者はもういない」

キングジコチューが放った赤黒い稲妻を浴びたが、王女の氷には傷一つついて無かった。

「その姿でまだ抵抗するか!」

「しかし、王女はこちらの手の内。先に人間界の者達を全員ジコチューに致しましょう」
浮かない顔をしていたレジーナは、キングジコチューとベールの会話に驚く。

「えっ?!?人間界をトランプ王国のようにするつもりなの?!?」

「当然でしょう」

「でもそこまでしなくても……!パパが動ける分になるまでで……!」

とレジーナが言うが、キングジコチューは…

「温いわあ!トランプ王国も人間界も、所詮前菜に過ぎぬ!」

メインディッシュは宇宙!全宇宙のジャネジーが私の物なのだ!」

キングジコチューは宇宙すらも自分のものにすると言い出した。

「流石、キングジコチュー様!」

(そんな……)

自分の父親の本当の狙いを聞いてレジーナが更に驚く。

「つつ……！」

するとレジーナの胸が急に痛みが生じた。

「先程かららしくありませんなあ、レジーナ様。」

我々はジコチュー、人間界がどうなるうと関係無いではありませんか。キングジコチュー様が本気を出されれば、人間界もプリキュアも仮面ライダーも終わり。

レジーナ様も、面倒な連中とおさらば出来て清々するでしょう？」

「何で……止まらないの……！」

レジーナの胸の痛みは一向に収まる気配が無い。

「愛を振りまくプリキュア、そしてプリキュアに手を貸す同じ様な存在である仮面ライダーなど、いなくなってしまう方がいい」

「そんなのダメ！」

キングジコチューに向けてレジーナが叫んだ。

「パパ！人間界に手を出さないで！」

レジーナの発言に下にいた大量のジコチュー達は驚いた。

「何言ってるんだ？」

「キングジコチュー様に逆らうとは何て恐れ多い！すぐに謝られた方が……！」

レジーナに謝るようにとボールが言うが、

「もう遅い!誰に向かって口を聞いている!」

「でも!」

それでもレジーナは必死にキングジコチューを説得しようとする。

「黙れ!お前などもう私の娘では無いわ!」

しかしキングジコチューの叫びと同時に、稲妻がレジーナに落とされ、倒れてしまった。

「フン、ジコチューが人の心配なんて……」

「随分おバカさんになっていたのね」

『キングジコチュー様。まさか、自分の娘に制裁を下すとは恐ろしいくお方だ』

イーラとマーモが彼女にそう言い、少し離れた所から見ていたスタークもそう呟く。

「私の前から消え失せろ!」

「後の始末はわたくしにお任せを」

ボールが指を鳴らした途端、叫び声と同時にゲートから七つの人影が飛び出して来た。

「何だありや?鳥か?」

「隕石?」

「いや……あれは、プリキュアに仮面ライダーだ……!」

その正体は四人のプリキュアにジョー、そして三人の仮面ライダーだった。

『来たか！待ってたぜ！いよいよよこいつを渡す時が来たようだな！』

スタークが懐から赤い銃のトリガーみたいなものを出し、それを見つめながらそう呟いた。

その頃、トランプ王国に到着したビルド達。

「何でこうなるの〜！」

「最悪だあ〜！」

だが空中から現れた為、そのまま八人が急落下して行ってしまった。

「皆さん、無事ですか？」

「何とか……」

「ここが、トランプ王国か……」

下が砂だったため、全員ケガはしていなかった。

「ちゃんと、トランプ王国に着いたみたいだね」

トランプ王国に着いたと確認すると、クローズとソードがトランプ王国の風景を見る。そこへグリスが駆け寄る。

「ここがお前とまこびーの故郷か？」

「ああ、本当はもつといいところなんだよ……この姿を見ると、早く取り戻してえ!つて思っんだ!!」

「絶対取り戻そう!みんなで!」

「おお!」

「俺もこんな風景見せられたら黙っていられないぜ!」

トランプ王国を必ず取り戻そうと三人が頷く。

「ここからが本番だよ」

「王女様は、あそこにいるハズ!早く……」

「急ごうぜえ!」

八人が王女の元へ向かおうとする。

「行かせるかよ」

しかし、彼らの前にイーラとマーマが現れる。

「わざわざトランプ王国に来るなんて、面倒な奴らだな」

「それとも、自分から倒されに来たの?」

「そんなつもりは、さらさらございせんわ!」

「俺達は、王女様を心火を燃やして助けに来たんだよ!」

ロゼッタとグリスが強く叫ぶ。

「まつすぐに暑苦しい目。すごく不愉快だわ」

マーモが指を鳴らすと同時に、大量のジコチューが囲むようにして現れ、同時に六人は臨戦態勢を取った。

「やれ！」

イーラとマーモの叫びと同時に、ジコチューが襲い掛かった。

「プリキュア！ロゼッタリフレクション！」

ロゼッタがジコチューの攻撃をロゼッタリフレクションで防ぎ、ダイヤモンドは羊ジコチューを蹴り飛ばす。

「ダイヤモンド！」

「ここは私達が喰い止める！あなたと晴夜君で先に王女様の元へ！」

「でも……」

今度は別方向から現れたジコチュー達が襲ってきた。すぐにグリスがツインプレイカーにボトルを差し込む。

『シングル！シングルブレイク！』

グリスが向かってきたジコチュー達を払いのけた。

「考えてる暇はねえ！行けえ！」

「ホント、うっとおしい！」

マーモが鞭を出し、ハートに攻撃しようとする。

「レディ、ダンスの相手なら僕が務めるよ」

だが、マーモの鞭をジョーが剣で抑えた。

「邪魔すんなよな!」

今度はイーラがナイフを投げつけた。

「それはこっちのセリフよ!」

イーラが投げつけたナイフをソードが手刀で弾き飛ばす。

「どけえ!」

『クローズドラゴン!』

クローズがツインブレイカーにクローズドラゴンガジェットを差し込み、背後からドラゴンが現れる。

『Ready go !レッツブレイク!』

「プリキュア!スパークルソード!」

レッツブレイクとスパークルソードがジコチューの群れに命中し、突破口を作った。

「道は作った!」

「今よ!」

「アンを頼む!」

「はい！」

「みんな……頼む！」

ビルドがビルドフォンにボトルを差し込み、マシンビルダーへと変えて、それにビルドとハートが乗った。

「行くぞー！」

「うん！」

マシンビルダーのエンジンをかけ、アン王女の元へと向かう。

「やっぱり、アイツら使えんな……まあいい。口を開けば愛だの友情だの、虫唾が走るプリキュアと仮面ライダーめ、そんなに好きなら、愛のために散れ」

その様子を見ていたベールが指を鳴らすと同時に、マシンビルダーで走っていたビルドとハートの前にジコチューが現れた。

「またジコチューだ？」

「捕まってる！突っ切る！」

マシンビルダーのスピードを上げ、ドリフトしながら周りのジコチューを払いのけ、そのまま先へと進み、キングジコチューに続く階段へと着いた。

すると、目の前にスタークが現れた。

『よぉ〜！』

「…………ハート、先に行け!あとで俺も行く!」

「晴夜君…………わかった!」

ハートが王女の元へ走って向かった。それと同時にビルドはラビットタンクスパーリングを取り出し構える。

『おいおい、そんなに構えるな。戦いに来たんじゃない』

「何?」

『お前にコイツを渡しに来たんだよ!』

そう言つてスタークがビルドに何かを投げ渡した。

「これは…………」

渡されたものは、赤い銃のトリガーのようなものだった。

『お前の父親が作った禁断のアイテム、「ハザードトリガー」だ』

「ハザードトリガー?」

『無事に帰れたら、調べてみればいいさ。じゃあ、チャオ〜♪』

そう言つてスタークは煙を纏い消えていった。

「おい…………一体これを渡して何をさせるつもりだ…………」

ビルドがハザードトリガーを見ながら呟いた。

——何か、不吉なことが起こる様な気がする、そんなことを考えながら…

その頃、先行したハートが、気を失ったレジーナを発見した。

「レジーナ！」

レジーナにハートが駆け寄る。

「どうしたの？しっかりして！」

「キュア……ハート？」

ハートに呼ばれたレジーナが目を覚ます。

「良かったあ……」

しかし、安心したのもつかの間。柱の傍にヒビが入り、クモジコチューが出て来た。

そして二人の足場がクモジコチューによって崩れ、ハートとレジーナは落下してしま
う。

だがハートは落ちる寸前でクモジコチューが出した糸を掴み、ギリギリでマグマへの
落下を逃れた。

「マグマ?!先に飛んで上へ！」

「うん……ダメ……力が封じられてるみたい……」

キングジコチューによって力を封じられてしまったため、レジーナは本来の力が使え
なかった。

「ブザマだな」

「あなたは……!」

「シヨータムだ」

ハートとレジーナの前に現れたベールが指を鳴らすと、空に二人の状況が映った画面が現れた。

「見るがいい、プリキュア共に仮面ライダー共!」

「キュアハート!」

「レジーナさんも一緒ですわ!」

「どういう事?!?」

「なんだよ、あいつらの下!」

「おい!あの下って……まさかマグマか?!?」

映像を見ていたクローズ達は驚き出す。

「すぐに登ろ。任せといて!」

ハートがレジーナを抱えながら登る。

「そんなに動いて大丈夫か?」

ベールがそう言うのと、ハートが登っていた糸が切れかけていた。

「?!? 糸が切れそう!止まって!」

「はいー」

糸が切れそうになり、レジーナから止まると聞いたハートは動きを止めた。ギリギリで糸が切れるのが止まり、二人は安堵の表情を浮かべた。

「お前達が掴んでいる一本の糸、それはこのクモジコチューの糸だ。

本来は一人分の重さにしか耐えられん。二人揃って助かるのは不可能だ。

だが、どちらかがマグマに落ちれば別だがな」

「そんな事するわけ無いでしょー」

そう叫び、またハートは登り始める。

「他人を思うから裏切られる。他人を気にするから単純な罠にもかかる。

やっぱりジコチューこそが最高だな」

「違う！人を信じなきや、幸せになんてなれないよ！」

彼女はそう叫ぶが、更に糸が切れ、段々と下へと落ちて行く。

「二人仲良くマグマに落ちて、愛など何の役にも立たないと証明してくればそれで結構。万が一、レジーナがキュアハートを犠牲にしても、俺が糸を切るだけだ。

（そうすれば、俺はジコチューのNo. 2。そしていずれは……）」

自分の野心が叶うと確信するべール。

一方、ジコチューと戦っているダイヤモンド達は…

「キリが無いわね……」

「全く、どれだけ出てくるんだらうね?」

「しつこい奴らだ!」

少しずつ倒していくものの、一向に数が減る気配が無かった。

「みんな一斉に技を撃って道を開くわよ!」

「「わかった(わ)!」

「ええ!」

「おお!」

「「ラブハートアロー!」」

三人がラブハートアローを出現し、ラビーズをセット。クローズはクローズドラゴン
を、グリスは2本のボトルをツインプレイカーに差し込む。

『レッツブレイク!』

『シングル! ツイン! ツインブレイク!』

『プリキュア! ダイヤモンドシャワー!』

『プリキュアアロゼッタフレクシオン!』

『プリキュア! スパークルソード!』

「「くらえええええ!」」

五人の技が周りのジコチュー達を一気に浄化することができた。

「なっ!」

「覚えてなさい!」

捨て台詞を吐いてイーラとマーモは消えていった。

「みんな!急ごう!」

彼らは急いでハートの元へと向かう。

その頃、マグマの上にいるハートとレジーナ。

「ねえマナ、アタシとマナは、何なのかな?」

「友達だよ」

「マナは……変わらないね」

「えっ?」

レジーナはかつて自身に言ってくれた事を、今も変わらず言ってくれる。約束を破ってしまった自分を、友達を傷つけた自分を許してくれたキュアハートとマナを見ながら。彼女と同じ様に許してくれて、友達だと言ってくれた仮面ライダービルドと晴夜の事を思い浮かべながら語り出す。

「アタシね、マナと晴夜と会ってから、おかしくなっちゃったみたい。

マナや晴夜に優しくしてもらうと、胸がドキドキするようになったの。

二人が辛そうな顔を見ると、胸がズキズキするようになったの」

彼らと作った思い出が、父親と一緒にいた時間と比べたらほんのチョットしか無い筈の思い出が、自己中だった自身の心を変えてしまった。

どうして、こんな気持ちになるんだろう。前まではこんな事なかったのに。

——この気持ちは、一体なんなのだろう。

そんな事を考えながら、彼女は問いかける。今の自分の、理解不能な感情を知るために。

「ねえ、何なのかな?この気持ち?」

それを聞いたハートは、そんな彼女の疑問に、静かに答えた。

「それはね、人を思いやる気持ち——愛だよ」

愛……自己中な自分が持つことなどなかった筈の気持ち。

ハートの発言を聞いたレジーナは、ある決断をする。

「愛……これが、そうなんだ。

……マナ、大好き——」

一粒の涙を垂らし、そう言うってからレジーナはハートの手を離れた：

——だが、レジーナは落ちなかった。

「諦めちゃダメー！」

「!?」

突然、ハートがクレーンゲームのアームの様に両足を使ってレジーナを抑え、レジーナに諦めるなと言う。

「でも……」

「でももだつてもいりません！こんなので、全然ピンチじゃないよ！あたしを誰だと思ってるの！」

あたしは……大貝第一中学生徒会長よ！」

ハートは自分が生徒会長だからだと彼女に高々と言う。

「はあ!？」

「それって、凄いの?」

生徒会長が凄いの?とレジーナが聞く。

「凄いよ!生徒会長はみんなの笑顔のためなら、レジーナのパパよりも強くなれるんだから!」

「そうシャル!マナは宇宙一シャル!」

「んなワケ無いだろ!さっさと落ちろ!……何だ今のは?」

ベールが叫んだ瞬間、何かがハートとレジーナがいる穴に入った。

「ハート!レジーナ!」

それは、ホークガトリングへとフォームチェンジしたビルドだった。

「晴夜(君)!!」

「待たせたな!さあ、行くぞ!」

ビルドがハートとレジーナの手を掴む。

「うん!」

レジーナが頷くと同時に、レジーナから力が溢れ出した。

「何だ!?」

同時に、ジコチューを片付けた五人が集まった。

「あれは……!」

「これは……」

(何だろう……すごく、ドキドキが止まらない……!)

力を取り戻したレジーナは、ハートを抱えて飛び、ビルドと一緒にマグマの穴から出てきた。それを見たボールが啞然とする。

「ば、バカな……!」

「カッコ悪いな」

「全く、役立たずなんだから」

後ろにいたイーラとマーモが役立たずとボールに言う。

「くそッ! ジコチュー共! レジーナを始末しろ!」

クモジコチューが口から糸を吐き、レジーナの両腕を封じる。

「フン! 力さえ戻れば、アタシは無敵よ!」

そのまま糸を掴み、クモジコチューを投げ飛ばした。

「こうなったら、一気にやっておしまい!」

マーモの指示でジコチュー達がビルド達に向かってきた。

「こつちも一気に行くよ!」

「うん!」

「ええ!」

「俺達も行くぞ!」

「おお!」

「任せろ!」

ビルドはラビットタンクスパークリングをドライバーに差し込む。

『ラビットタンクスパークリング!』

『Are you ready?』

『ビルドアップ!』

『シユワツと弾ける!ラビットタンクスパークリング!イエー!イエー!』

「勝利の法則は、決まった!」

スパークリングへとフォームチェンジし、決め台詞を言うと。ビルドがドライバーのレバーを回し、クローズとグリスはドライバーのレンチ型レバーを下ろし、三人が高くジャンプする。

『Ready go!』

『スパークリングファイニッシュ!』

『スクラップブレイク!』

『スクラップファイニッシュ!』

ビルドとクローズとグリスがライダーキックの態勢に入る。

「プリキュア！ラブリーフォースアロー！」

ラブハートアローの弓を大きく展開させ、台尻部分の引き金を引き絞り、前面にハート形のエネルギー体を生成される。

相手にウインクし、ラブリーフォースアローを放った。

ラブリーフォースアロー、スパークリングファイニッシュ、スクラップブレイク、スクラップファイニッシュにより襲いかかって来たジコチューを全て一掃した。

「アンは返してもらおうよ！」

みんながジコチュー達を倒した隙にジョーが王女を取り返す。

「早く扉へ！」

「はい！」

「急ぐぞ！」

ビルド達が急いでゲートに向かって走り出す。

「アタシは……」

レジーナは一緒に行っているのか、戸惑っていた。

「レジーナ！」

「パパ……！」

キングジコチューがレジーナを行かせないよう止めようとする。

「おのれえ……! 私に立てついたらばかりではなく、プリキュアと仮面ライダーと心を通わせるとは……!」

レジーナの上から雷が落ちてくるが、ソードとクロースが飛び込んでレジーナを救う。

「ケガは無い?」

「立てるか?」

「うん……」

「早くゲートに向かうぞ!」

「急ぎましょう!」

「行こう」

「うん」

ハートがレジーナに手を差し伸べる。レジーナもハートの手を掴もうとする。

「レジーナあああああ!」

「悪いけど、少し黙ってもらおうか!」

ビルドがそう言うのと、カイゾクハッシャーが形成され、キングジコチューに向けて構える。

『各駅電車!急行電車!快速電車!海賊電車!……発車!』

「ハア！」

「ぐおおおおおつ！」

カイズクハツシャアの狙撃がキングジコチューに命中すると同時に、ハートがレジーナの手を掴んだ。

「こつちだ！」

ゲートまで走る八人。

「逃がさんぞお！」

キングジコチューは逆上しながら片っ端から落雷を落とす。

「おのれプリキュアアアア!!おのれ仮面ライダーアアアアアア!!!」

八人がゲートに入ると同時に、ゲートは塞がった。

「やったでランス〜」

「完全勝利ケル！」

「王女様……」

「やったな……」

クローズが言うとソードが頷く。

「これで……良かったんだよね？」

レジーナはハートとビルドを見ると、ハートは笑顔で返し、彼女も力強くハートの手を握る。

これにより王女を奪還し、レジーナを連れて人間界へと戻るのであった。

次回! Re. ドキドキ&サイエンス!

第24話 起動するアイテム、その名をハザードトリガー!

第24話 起動するアイテム、その名をハザードトリガー！

晴夜達はどうにかキングジコチューの追撃から逃れ、トランプ王国からソリティアに戻って来れた。

「お帰りなさいませ。皆様ご無事で何よりでした」

「ただいまです……」

「どうにか、戻って来れました……」

と晴夜達がセバスチャンに言うのと、みんなが氷に覆われていたアン王女を見る。

「どうにかして、王女様を助けないと」

「けど、この氷かなり硬いぞ」

龍牙が覆われている氷を叩く。

「王女様を目覚めさせるためには、王子様のキスで決まりでしょ」

「それって、白雪姫の場合だと思うけど……」

和也が突っ込むと、マナがジョーの方を見る。

「ジョーさん、お願いします！」

「えっ? 僕がかい?」

マナに頼まれたジョーは、アン王女にキスした。

——しかし、何も起こらなかった。

「何も起こらないケル!」

「流石におとぎ話みたいには行かないか……」

まあ、そんな上手くいくわけ無いかと確信する。

「あつはつは、面目ない」

「軽いシャル!」

「これはただの氷じゃ無いランス」

「アン王女が身を守るために、氷の鎧を纏ったのかもしれないケル」

「だとしたら、簡単には解けないビィ」

「じゃあ、どうすればいいの?」

「ジコチューさん達は、きっとまた王女様を奪いに来ますわ」

ありすの言う通り、ジコチュー達は王女を奪いに来るだろう。

「アンが目覚めるまでは、身を隠した方がいいだろうね」

ジョーは暫くは身を隠しておいた方が良いと提案する。

「確かに、ジコチュー達がわからない所へ隠した方がいいと思います」

「でもどこに?」

「悪いけど、それは君達にも秘密にさせて貰うよ」

「えっ?」

「なんでだよ?」

「なんで教えてくれないと、疑問に思う真琴と龍牙。

「その方がいいと思います」

「晴夜が二人に、知らない方が見つかるリスクも下がると述べると取り敢えず納得した。

「君も来るかい?」

「ジョーが飛んで来たアイちゃんを抱く。

「じゃ、後の事は頼んだよ」

「はい!」

「こっちは任せろ!」

「そちらも気をつけて下さい」

とにかく、しばらくアン王女はジョーに預ける事となった。

ソリティアを後にし、帰路につこうとする。

「さてと。王女様はひとまず安心として……」

そう言うってから七人がレジーナの方を見つめる。

「あーあ。これからどうしよっかなー?」

「レジーナ……」

「あんな風に飛び出して来ちゃって、パパの事を本気で怒らせちゃった。謝ってももう、許してくれないだろうな……」

もうキングジコチューの元へは帰れないとレジーナが呟く。

「レジーナは、父さんの事が大好き?」

「うん……」

「あんなに酷い目に遭わされたのに?」

「だって、アタシのパパだもん」

「そっか。あたしも、レジーナの事大好きだよ」

「えっ?」

マナもレジーナが好きだと言い、それを聞いた彼女は思わず驚く。

「レジーナがあたしを助けてくれた時、レジーナの優しい思いが伝わって、とつても嬉しかったよ!」

「私にも伝わったわ、あなたの気持ち。ありがとう、マナを助けてくれて」

「まこび〜!」

「お前の友達の思う心を伝わったぜ！後、今まで疑って悪かったな」
「龍牙君！」

「お前の心、俺にも強く伝わったぜ！」

「ありがとう、レジーナ」

「私にも、伝わりましたわ」

真琴と龍牙の他に、和也と六花、あります。みんなも、レジーナからの思いが伝わったという。

「みんな……」

「言ったら、絶対に思いは伝わるって！」

「ね？大好きな気持ちは、絶対伝わるんだよ！」

「だから、キングジコチューにもきつと伝わるよ、レジーナの思い」

「晴夜、マナ……うん……」

みんなからの感謝の言葉を聞いたレジーナの目から涙を一粒出しながら、笑顔で頷く。

「じゃあ、帰ろう！」

「えっ？でもどこに？アタシにはもう帰る場所——うわあ！」

レジーナの手を掴んだマナが勢いよく走り出した。

そしてここ、ぶたのしっぽ亭へと場所が変わる。

「と言うワケで……しばらくうちに泊めて下さい!お願いします!」

そう言ってからマナは両親に頭を下げる。

「お願いします……」

「関係ないかもしれませんが、俺からもお願いします!」

レジーナと一緒に来た晴夜も頭を下げる。

それを聞いていた宗吉は……

「また人助けか?」

「はい……」

「しようがないのう……」

「マナのこうゆう所、誰に似たのかしら」

「ほんとにね。レジーナちゃん、だっけ?」

健太郎はレジーナに話しかける。

「はい」

「ちよつと元気が無いみたいだね。そういう時は、食べるに限る!」

「えっ?」

「桐ヶ谷君も食べて行かないか？」

「えっ？ いいんですか？ じゃあ、お言葉に甘えさせてもらいます」

しばらくして、食卓には健太郎の作ったオムライスが置かれた。

「さあ、召し上がれ！」

「いただきます！」

レジーナは用意されたオムライスを口にすする。

「美味しい！」

「でしよでしよ！」

そのオムライスを食べたレジーナが美味しいと叫んだ。

「パパのオムライスを食べると、元気が出るんだ！」

「フン、ワシに言わせればまだまだだ」

「あら？ 私はもうお父さんのオムライスを超えてると思いますけど」

「何だと!？」

健太郎の挑発を聞いた宗吉は即座に突つかかる。

「まあまあ、食べる時ぐらいは楽しくしましょう」

「じゃあ今度、レジーナに審査してもらおうよ！」

「えっ？ アタシが？」

「よかろう。レジーナちゃんならえこひいきせんからな」

「あゆみが褒めてくれるのは、何も夫婦だからってワケじゃ——」

「それもありませんけど」

「な……!」

あゆみのこの発言を聞いた健太郎は軽くシヨックを受けた。

そんな楽しい食事の一時を、レジーナは幸せに思えた。

(不思議……みんなを見てると、胸がポカポカする……)

でも……何で……?

ポカポカしてるのに、胸が苦しい……)

しかし何故か、胸に苦しみが感じられる。

「どうしたの?」

「な、何でも無い!」

夕食が終わると晴夜は家に帰り、レジーナはマナの部屋でマナと一緒に夜を過ごす。

「わあ! マナカワイイ!」

マナのアルバムを見たレジーナがかわいいと言う。

「えへ、そうかな?」

「アタシの次にね」

「ですよー……?どうしたの?」

「アタシには、パパとの思い出が全然無くなって思つて」

急にレジーナは、キングジコチューとの思い出が無いと言い出す。

「あんまりお父さんと、お出かけしなかったの?」

「どうだったかな……」

「覚えてないの?」

「うん。思い出そうとしても、頭の中がモヤーっとなつて」

「不思議シャル……」

父親である筈のキングジコチューとの思い出が無いと言うレジーナの話聞き、シャルルは不思議に思つた。

しかしマナはその話を聞き、自身の提案を彼女に話す。

「だったら、パパとの思い出はこれから作って行けばいいんじゃない?」

「これから?……でも、怒らせちゃったし……」

「さつきも言つたでしょ。好きって気持ちは絶対伝わるんだよ!」

「そうかな……?」

本当に伝わるかレジーナは不安がる。

「そうだよ。だってレジーナは、あたしに気持ちを伝えてくれたじゃない！」

「パパもきつと分かってくれるよ！」

「……よし！落ち着いたら一緒に会いに行こう！」

「ええっ？」

急にマナがキングジコチューに会いに行くと言つて、レジーナは驚く。

「レジーナの気持ちを、あたしも一緒に伝えたい！晴夜君だつて一緒に来てくれるよ！」

「うん！」

「じゃあ、明かり消すね」

眠り始めたマナの元にレジーナが飛んで来て、横からマナの布団に入った。

「一緒に寝てあげる！」

マナとレジーナは、手を繋いで眠りについたのだった。

その頃、晴夜の家の地下室では。疲れてきた龍牙が近くで爆睡しているのに対して、晴夜はパソコンに目を向けていた。

そして、『ハザードトリガー』とパソコンに打ち込むと、今まで開かなかったデータファイルが開いた。

「開いた」

開いたファイルから父親のビデオ映像まで出てきた。

『この、ハザードトリガーをビルドドライバーに装着し変身すれば、変身者のハザードレベルは一気に上昇する』

——どうやらこれは、ビルドの強化アイテムだと晴夜は察した。

しかし、ビデオ映像はまだ続いていた。

『但し、これを長時間使うと、脳が刺激に耐えられなくなる……その瞬間、見えるものすべてを破壊するだろ』

その言葉を聞いた瞬間、晴夜は驚きながら立ち上がった。

そして、ケースに入れていたハザードトリガーを取り出す。

（父さんは、何でこんなものを作ったんだ…）

晴夜がそう思いながら、トリガーを見つめるのだった。

一方外では、ジコチューの三人がレジーナを探していた。

「あーあ。あのワガママ娘を放つぽり出したかと思えば、今度は探して来いだなんて」

「ジコチュー過ぎるぜ、キングジコチュー様も……!」

レジーナを探すのが面倒くさそうにイーラとマーモが言う。

「だが、それはそれで面白い」

「どこが?」

ベールの言う、面白いの意味がわからなかったイーラが聞く。

「プリキュアと仮面ライダーはレジーナに友情を感じた。そのレジーナが再び悪に染まれば……」

「確かに面白そうね」

「流石ジコチューの王だぜ!……それにしても、スタークの奴どこに行ったんだ」

「放っておけ」

イーラはアジトから消えたスタークの事を言うが、ベールはスタークのことを一先ず放置する様に言った。

そして次の日、健太郎の運転する車で海へとピクニックに向かった。晴夜も流石に今日はマシビルダーは使わず、車に乗る方を選んだ。

「アタシ、ピクニックって初めてかも」

「そうなの? あたしも久しぶりなんだ〜!」

「じゃあ今日は、とことん楽しみますか〜!」

「海だーっ!」

マナが叫ぶと目的地の海が見えた。

「天気も良くて最高ね！」

海に着き、みんなで準備を始めた。

「よーし！まずは砂浜でかけっこだ！」

準備を済ませからかけっこしたり、砂のお城を作ったり、ビーチバレーなどをして遊んだ。

そして時間はあっという間に過ぎ、夕方となった。

「レジーナ、ピクニックどうだった？」

「うん！すっごく楽しかった！海って何だか、気持ちが落ち着く」

「それは、良かったな！」

「僕は心が迷って進めなくなった時、こうして海に来るんだよね」

「えっ？パパが？」

「よくこの海に来てたんですか？」

晴夜がよく来ていたのかと健太郎に聞く。

「うん。そして、どこまでも続く空と海を見て、こう思うんだ。この海は世界と繋がっている。この空は宇宙と繋がっている。だったら、ちっぽけな事で迷ってないで、ちよつとずつでいいから前に進んでみようって」

「ちよつとずつでいいから、前へ……」

健太郎の言葉がレジーナの胸に響く。

「なーんてね。カッコつけ過ぎちやつたかな？」

「いいんじゃない。たまにはカッコいいパパも」

「それにその言葉、心に最高に響きました」

「マナの親父さんも意外な一面があつたんだな」

「でも、マナちゃんのお母様は、そういう所が好きになつたのですね」

「すげえ!カッコ良かったぜ!」

「おいおい……」

みんなが健太郎を褒め言葉を言い終わると同時にみんなで笑い合つた。

(また胸がポカポカする。でも……苦しい)

また、レジーナの胸が苦しくなつていくのを感じていた。

「じゃあ行くよ!」

マナはカメラのセルフタイマーをセットしてみんなの所へ走るが、石に引っかかつて転んでしまった、だがそれを健太郎が救つた。

そして、その姿がカメラで撮られた。

「大丈夫かい?」

「うん。ありがとう」

「流石マナのパパね」

六花が健太郎を流石と褒める。

(アタシも……こんな風にパパと仲良く出来たらいいのに……)

それを見ていたレジーナは自分も父親とあんな感じになりたいと思うと……

「見つけたぞ」

そこにジコチューの三人が現れた。

「レジーナ、さっさと帰るわよ」

「キングジコチュー様がお待ちかねですよ」

「パパが……?でもアタシ、帰りたくない」

ジコチュートリオがレジーナに帰る様に言うが、本人は帰りたくないと答える。

「いいから来るんだよ!」

「何なんだ君達は!」

「人間は引っ込んでな」

前に出た健太郎をイーラが吹き飛ばし、岩壁に叩きつけた。

「パパ!」

マナと六花が気絶した健太郎の方へ向かう。

「大丈夫。気絶してるだけよ」

健太郎の無事を確認するとジコチュー達の方を見る。

「アン王女はどこだ?」

「あなた達に教えるものですか!」

「知っててもお前らに話すことなんかねえよ!」

龍牙と真琴がジコチュー達に言うのと、ベールが肩を鳴らす。

「やれやれ。痛い目に遭わないと分からないようだな」

「それはこつちのセリフだ!お前らの好きにはさせない!」

「みんな!行くよ!」

四人がラビーズをコミュニケーションにセットし、晴夜達三人はドライバーを装着すると、ボトルとゼリーを差し込む。

『ラビット!タンク!ベストマッチ!』

『ドラゴンゼリー!』

『ロボットゼリー!』

晴夜の周りにはランナーが出現し、龍牙と和也の方はビーカーが現れる。

『Are you ready?』

「変身！」

「プリキュア！ラブリンク！」

晴夜達三人の身体にアーマーが装着され、仮面ライダーへ。マナ達四人は光に包まれ、光から現れるとプリキュアへと姿が変わった。

『ラビットタンク！イエーイー！』

『ドラゴンインクローズチャージ！ブラア！』

『ロボットイングリス！ブラア！』

「みなぎる愛！キュアハート！」

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

「陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

「勇気の刃！キュアソード！」

「響け！愛の鼓動！ドキドキプリキュア！」

「愛を無くした悲しいジコチューさん！このキュアハートがあなた達のドキドキ、取り戻して見せる！」

ハートが胸にハートマークを作り、ジコチュー達に決め台詞を言う。

「行くぞ」

ボールが光弾を放つと同時に、イーラとマーマーがこちらへと向かって行く。

六人が光弾をかわしてから迎撃するが、ハート達四人が反撃を受けてしまう。

「マナー！」

「みんな！」

すると今度は、ビルドとクロースとグリスがジコチューの三人へ向かってきた。

「なんだよ。お前らにとつてレジーナは、邪魔者じゃ無かったのかよ！」

「ああ。確かに今でも邪魔者だ」

「ならなぜ、今さら連れ戻そうとする」

グリスがジコチュー達に理由を聞く。

「こちらにも事情と言うものがあるんでね。大人しくレジーナを渡す気は無いか？」

「あのワガママ娘を連れて帰んねーと、キングジコチュー様がうるせえからな」

「渡してくれれば、今日の所は帰ってあげるわよ？」

「それはダメだ！今帰ったら、キングジコチューに殺される！だから、連れて帰らせない
！」

レジーナを連れて行かせないとビルドが叫ぶと、ラビットタンクスパークリングを構え、ドライブバーに差し込む。

『ラビットタンクスパークリング！』

『Are you ready?』

「ビルドアップ！」

叫ぶと新たに形成されたアーマーがビルドに装着される。

『シユワツと弾ける！ラビットタンクスパークリング！イエー！イエー！』

スパークリングフォームへと変わり、カイゾクハツシャーを持ってベールに近づき攻撃する。

「このおっ！」

「ぐおっ……！」

ビルドから攻撃を受けたベールは叩きつけられる。

「何やってんだよ！そらっ！」

今度はイーラがナイフを投げつける。

「俺もいるんだぜ！」

クローズがナイフを払いのける。

『ツインブレイカー！』

『シングル！ツイン！』

ツインブレイカーを出現させたクローズは2本のボトルを差し込む。

「はあああ〜オラア！」

『ツインブレイク！』

「いって……!」

ツインブレイクの攻撃を繰り返してイーラにダメージを与える。

「アンタ達じゃアテになんないわ!」

マーモは鞭を作りだし、ビルドとクローズ、グリスに向かって振るつたが、三人は余裕でかわした。

「今度は俺だ!」

グリスがツインブレイカーをビームモードにし、ボトルを差し込む。

『シングル! ツイン! ツインファイニッシュ!』

ツインファイニッシュのツインブレイカーの砲撃をマーモに命中させると、ボール達は一度集まる。

「もう、あいつら面倒くさいわね」

「仕方ない、一人ずつ潰して行くぞ!」

「しようがねえな!」

今度は三人がかりで、最初にビルドに向かってきた。

「来るか!」

ビルドが今度はドリルクラッシュャーとホークガトリンガー、二つの銃を構えると、ボールから先に光弾が飛んできた。すぐさま避けると、目の前にすでにマーモがいた。

「お返しよー！」

マーモが鞭を使い、ビルドに攻撃しビルドが握っていた武器が落ちた。

「ぐわあー！」

「おっとー！まだまだぜー！」

「何?！」

ビルドが態勢を崩された隙に今度はイーラが至近距離でビルドに向けてナイフを投げた。ガードする暇は無く、そのままハート達の所まで吹き飛ばされる。

「晴夜ー！」

「よそ見は危険だぞー！」

ビルドの方を見ていたクローズだが、いつのまにかベールが目の前いた。そのままベールの光弾が命中してしまった。

「龍牙ーヤローー！」

ツインブレイカーにボトルを差し込むとすると、マーモが鞭でグリスの手を縛る。

「何ー！」

「お前も同じ目に合わせてやるー！」

ベールがグリスに近づき、クローズと同じ光弾をグリスに向けて放ち、三人はハート達の所まで飛ばされた。

「晴夜！龍牙！かずやん！」

「これで、終わりだ（よ）！」

イーラとマーモが同時にエネルギー波を七人に向かって放たれた。

「プリキュア！ロゼツタリフレクション！」

前に出たロゼツタガロゼツタリフレクションを発動して防ぐが、後ろからのボールには気付いていなかった。

「ロゼツタ！」

「危ない！マナー！晴夜ー！」

レジーナの叫びと同時に後ろを向くが、既に遅く、腕から光線が放たれた。

光線の命中と同時に、ロゼツタリフレクションも解け、エネルギー波も受けてしまった。

「マナー！晴夜！みんな！」

ビルドとハート達の元へと走るが、レジーナの胸にまた痛みが生じた。

「何……？この胸の苦しみは……！さっきも同じ痛みが……！」

わからない痛みがレジーナを苦しめる。

「何で……？」

『それは、お前が愛を知ったからだ』

レジーナの耳に声が響くと同時に、空が雷雲に包まれる。
「!?? この声……!」

雷と同時に現れたのは、キンググジコチューだった。

「パパ!」

「うそだろ……何で!?」

「どうなってんだ……!」

「まさか……キンググジコチューが蘇ったの……!?」

まさか本当にキンググジコチューが蘇ったと思う。

「違う……あれは……!」

「キンググジコチューが映した幻だビィ!」

今現れているキンググジコチューは幻だとダビィが言う。すると突如発生した竜巻が

レジーナを呑み込んだ。

「レジーナ!」

「レジーナを返して! きゃあ!」

「ハート!」

ハートは竜巻の中に入ろうとするが、竜巻から雷が放たれて入れず、ビルドがハートを支える。

「レジーナ!」

「レジーナさん!」

「戻って来て!レジーナ!」

「戻れレジーナ!」

「レジーナ!」

ビルド達が竜巻の中のレジーナに叫ぶ。

その頃、竜巻の中にいるレジーナは…

「パパ……」

『レジーナ、お前の心には愛が芽生えてしまった。プリキュアと仮面ライダーと心を通わせたばかりにな。』

だから心が痛く、苦しくなる』

「アタシに愛が……?」

キングジコチューは、レジーナの心には愛が芽生えたのだと、レジーナに告げる。

『そんな下らん感情は捨てて、帰っておいで』

愛を捨てて帰ってこいとレジーナに言う。

「嫌よ……アタシの事、娘なんかじゃないって言ってたじゃない!

パパなんか嫌い！大っ嫌い！」

キンググジコチューに嫌いだと叫ぶレジーナだが…

『すまなかつた……許しておくれ。私にはお前が必要なんだ』

「アタシが……？」

『ああ。私の可愛い娘、私だけのレジーナ……』

「パパ……」

レジーナはキンググジコチューが自分を大事にしてくれていると感じ出す。

「でもアタシ、マナと晴夜の事が好き！どうしたらいいか分からないの！」

と叫ぶとレジーナがまた痛む胸を抑える。

『かわいいそうに……大丈夫だよ、レジーナ。ジャネジーを受け入れれば、苦しみも消えてもっと強くなる』

「ジャネジー……？」

『さあ、受け取っておくれ。これがパパからお前へのプレゼントだ』

上からジャネジーがレジーナに注入される。

「あれ……？苦しみが消えてく……でも……」

完全にジャネジーに染まったレジーナは目の色が赤くなり、コスチュームの赤い部分とリボンが紫色に染まった。

「ああ……やっぱりアタシはパパが好き。

それをアタシから引き裂いたのは——」

プリキュア……仮面ライダー……」

レジーナが叫び終わると同時に竜巻が消えた。

「レジーナ!」

ビルドとハートがレジーナに駆け寄るとする。

「!? 待て! ハート!」

「えっ?」

ビルドがハートを止める。

「あー! 何かスツキリした感じ!」

「レジーナ……?」

「レジーナ……目の色がまた……」

「消してあげる」

「!?」

目の色が赤くなっているどころか、先程の姿から変わり果てたレジーナの指から強力な光線が放たれた。すぐさまビルドがドリルクラッシュャーを盾としてハートの前に立

つ。

「何だ！このパワーは……！」

そのパワーは、今までのレジーナのパワーとは比べものにならないくらいものだった。

「しぶといわね。ならまずはアナタからよ！」

更にもう片方の指から光線を放つ。その威力に、盾にしていたドリルクラッシャーも耐えきれないでいた。

「マズイ……このままじゃ……！」

レジーナが放つ光線のケタ違いのパワーに、遂にドリルクラッシャーが崩壊し、ビルドは直撃を受けてしまった。

「うわあああああつ！」

「晴夜君！」

直撃を受けたビルドは変身が解けてしまった。

「くっ……！何てパワーだ……！」

「スツゲエ……！あのビルドを圧倒してやがる……！」

「これがキングジコチュー様の与えし力だ！」

ビルドを一撃で変身解除まで追い込んだレジーナの強さにベール達も驚く。

「レジーナに……何が……?」

「多分……キングジコチューが邪悪な力を植え付けたのよ……自分に従わせるために……!」

「そこまですんのかよ!許せねえ!」

「自分の娘を力で支配させて従わせるなんて……どこまで卑劣何だ!」

「酷い……!」

「あんまりですわ……!」

「レジーナは……パパの事が大好きなのに……!」

「それを利用するなんて!キングジコチューの思い通りにはさせない!」

キングジコチューの卑劣なやり方に怒りを感じ出す暗夜達。

「何を言ってるの?この世界にはアタシとパパしか必要無いの。」

あなた達こそ消えちやいなさい!」

レジーナが巨大なエネルギー球を作り出し、光線の雨を降らせてハート達に攻撃するも、かろうじて全員無事だった。

「レジーナ……話を聞いて……!」

「もうあなた達は必要無いの」

「俺達みんな必要だ!レジーナは……大切な友達だ!」

「友達？」

「そうです……私達はもう友達です！」

「この間キュアハートを助けた事、忘れたの!?!？」

「あの時……私もレジーナの事、本気で友達だって思えたのに……！」

「お前は、キングジコチューの娘でも、友達思いの優しい奴なんだ！」

「お前の本当の心は、そんなじゃねえ！」

「あの時の気持ちを取り戻して！レジーナ！」

「戻って来い！レジーナ！」

「レジーナさん！」

「レジーナ！」「レジーナ！」

レジーナに全員が大切な友達と伝える。しかし……

「知ってるよ。友達とかそう言う下らないもので、アタシを苦しめようとしてるんでしょー！」

今のレジーナにとって、友達とは自分苦しめたものだと言夜達に言う。

「違う！そんな訳無い！」

「そんな事で苦しむわけない！」

「ざんねーん！もうその手には乗りませーん！はあつ！」

「ヤベエぞー!」

「危ねえ!ぐわあ!」

レジーナが上へ飛んでから光線を放ち、ハート達を庇ったクローズとグリズに命中し、二人も変身解除してしまった。

「龍牙!」

「和也さん!」

ソードとロゼッタが龍牙と和也に駆け寄る。

「どうすれば……いいの……?」

「ラプリーフオーサアローなら、悪い心を浄化出来るかもしれない……!」

「それに賭けよう!」

「ハート!」

「分かった……!」

「[[プリキュア!ラプリーフオーサアロー!]]」

ラプハートアローの弓を大きく展開させ、台尻部分の引き金を引き絞ると同時に、前にハート形のエネルギー体を生成される。

——だがハートは、撃とうとしなかった。

「キュアハート!?」

「マナ……」

「あたし……やっぱり出来ない！」

やはりハートには、レジーナにラブリーフオーサアローを打つことが出来なかった。
「おバカさん」

レジーナは竜巻を起こし、ハート達四人を丘に叩きつけた。

「「みんな！」」

ダメージを受け過ぎたハート達四人も変身が解けてしまった。

「みんな……大丈夫……？」

「しっかりするシャル！」

「そろそろ終わりにしてあげようかな」

そういつて、レジーナが巨大なエネルギー球を作り出す。

(マズイ……！こうなったら……もう……！)

「さようなら。偽りの愛の戦士プリキュア！そして、仮面ライダー！」

レジーナが七人に止めを刺そうとする。

「レジーナ……止めて……！」

「レジーナ！」

だが、マナ達の前に晴夜が立ち上がって、レジーナの前に出た。それを見た彼女はエ

ネルギー玉を一度消した。

「晴夜君……」

「まだやるの？ 負けるのに？」

レジーナがそう言うのと晴夜は再びビルドドライバーを装着した。

「レジーナ、お前を取り戻す……この身を賭けても！」

そう叫びハザードトリガーを出す。そして、トリガーのスイッチを押した。

『ハザードオン！』

不気味な音が鳴ると、トリガーをビルドドライバーの『BLDライドポート』に差し込み、ラビットポトルとタンクポトルを差し込む。

『ラビット！タンク！スーパーストマツチ！』

『ドンテンガン！ドンテンガン！ドンテンガン！ドンテンガン！』

そして、ドライバーのレバーを回した。

『ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！』

すると、ドライバーからいつものランナーではなく、金型のような鉄板——『ハザードライドビルダー』が前後から現れた。

『Are you ready?』

「変身」

二つの金型の鉄板が晴夜の体に重なり、レンジの音のような音が鳴り響くと、変身が完了し音声が響く。

『アンコントロールスイッチ！ブラックハザード！ヤベー！』

「何だよ、あの姿は……」

「黒いビルド……」

今変身したビルドの姿は全身が黒く染まり、身体の各部が少し鋭角化していて、仮面に付いている複眼はラビットタンクなのに、味方ですら何か恐ろしいものを感じるものになっていた。

——果たして、このビルドが一体何をもたらすのか……

次回！Re・ドキドキ&サイエンス！

第25話 ハザードは止まらない！現れる新たなプリキユア！

第25話 ハザードは止まらない!現れる新たなプリキュア!

黒いビルドこと、ハザードフォームへと変身したビルドの姿に、レジーナとジコチュウ達が驚く。

「何なの、あの姿……!」

「知るかよ!あんなのがあるなんて僕達聞いてないぞ!」

「ご安心を、我々で直ぐに片付けます」

「面倒だけど、仕方ないわね」

「ベール達三人がビルドに向かって行き、攻撃をしてきた。」

「っ!」

彼らはさっきの連携で再びビルドを倒そうすると、ビルドの動きは先より早くなり、ベール達三人の連携を崩しながら蹴り飛ばす。

「なんだと?」

「動きが先よりも早いわ!」

「!のおー!」

イーラが後ろから攻撃をしようとする。だがすぐにビルドは躲し、カウンターで吹き飛ばす。

「パワーも先より上がってるぜ……」

仮面ライダービルド・ハザードフォームの強さにベール達三人は驚き、手も足も出なかった。

「何やってのんよ！使えないわねえ！」

今度はレジーナがビルドへ向けて光線で攻撃してきた。

「レジーナ！」

ビルドが避けると今度はレジーナは距離を詰め、殴り掛かろうとする。

「やめろ！レジーナ!!これ以上お前と戦いたくない!」

「言ったでしょ！アタシとパパ以外は必要無いって!だから、アンタも消えないさいよ!」

「目を覚ませ!」

「うるさいわね!」

レジーナはビルドの言葉に聞く耳を持たず、再び攻撃してくるが、ビルドはレジーナの攻撃を防御する。

だが、ビルドは抵抗があるのか一度も攻撃せず、レジーナから距離を取るために離れ

る。

「くっ!?? どうすれば……あつ!??」

突然、ビルドが頭を抑え出した。

「晴夜君!」

「どうしたの、急に……!」

「頭が痛いのでしようか……?」

（何だ、急に意識が……!??まさか……これが……!）

ビルドは悟った。これがハザードトリガーによる、『戦闘が長引けば脳が刺激に耐えきれない』と言うことなのだ。

——このままだと、まずい!

（や、やめろ……!）

その時、父親の言葉が脳裏に甦る。

『その瞬間、目に見える全てを破壊するだろ……』

（やめてくれ……!——）

それを最後にビルドは頭を抑えていた腕をだらんと下ろす。

「晴夜君……」

「どうしたの……?」

「おい!晴夜、どうした!」

「おかしい、反応がねえぞ!」

マナ達が叫ぶが聞こえるはずもない。

今のビルド……晴夜には自我がない。

「これで終わりよ!」

レジーナがビルドに光線を放つ。

「……」

しかし、ビルドはレジーナの光線を避けると、あっという間にレジーナとの一気に距離を詰めた。

「えっ!?」

『マックス!ハザードオン!』

トリガーのスイッチを押し、ビルドはいつもより早い勢いでレバーを回す。

『ガタガタゴットン!ズツタンズタン!』

『Ready go!』

『オーバーフロー!ヤベー!』

ビルドの黒く包まれたパンチがレジーナに命中し、レジーナを吹き飛ばした。

「きゃあああああー!」

「レジーナ!」

「そんな、晴夜君がレジーナに攻撃するなんて……」

「まるで、いつもの晴夜さんじゃないような気がします」

いつものビルドとは違う事に驚くマナ達。だが、驚いていたのはマナ達だけじゃなく、ベール達三人も同じだった。

「ば、バカな……!」

「嘘でしょ! ジャネジーを取り込んだあのレジーナを簡単に……!」

「今のビルドやばくねえか……!」

レジーナが涙を浮かべて悶え苦しんでいる様子を見た三人が話していると、ビルドはベール達の方を見て、三人に向かって歩き出した。

「ど、どうすんだよ!」

「あれ、絶対ヤバいわ!」

「に、逃げるしかない……!」

逃げようとしていた三人だが、話してる間にビルドが既に彼らの前にいた。

「「えっ?」」

『Ready go!』

『オーバーフロー!ヤベ〜イ!』

ビルドはそのまま三人に一撃ずつ蹴りを入れ、あっという間に吹き飛ばし、三人共岩へと激突した。

「何だよ……この、パワーはよ……」

「どうして、急にこんな力を……」

「ま、不味い……今のあいつは危険過ぎる……」

ベール達三人がビルドへの怯えを感じ出した。

「何だよ、強えけどこれは……」

「ああ、今のあいつ絶対おかしい!こんなあいつの戦い方じゃねえ!」

「ええ!一体どうしちゃたのよ……」

「晴夜君……」

マナ達は今のビルドの強さと戦い方に不審感を感じ出す。

「くぅ〜!許さない!」

ビルドに吹き飛ばされたレジーナが殴られた部分を押さえながら立ち上がり、宙に浮いてビルドを見る。

「アンタなんか、絶対許さない!」

叫ぶと、レジーナが再び巨大なエネルギーの玉を作り出した。

「みんな!消えちゃえー!」

「やめて、レジーナ……レジーナ……!」

レジーナがエネルギー球をビルドに投げつけたその時、謎の光線がエネルギー球を打ち消した。レジーナは飛んできた光線を方を見る。

それを打ち消したのは、赤いプリキュアだった。

「赤の……?」

「……プリキュア?」

「何なの、アナタ!」

「愛の切り札!キュアエース!」

赤いプリキュアは岩に着地し、自らキュアエースと名乗った。

「キュア……エース……?」

「初めて見る戦士だビィ!」

（何なのアイツ……!?!?見てるだけで胸の奥がムカムカする!）

キュアエースを見てレジーナが胸がムカムカすると呟き出す。

「アタシの前から、消えろ!」

そう叫んで放った光線がエースの着地していた岩に命中し、岩が崩れ去った。

「どこを見ているのかしら？」

だがエースは既に躲して、すぐさまレジーナに迎撃に移った。

エースの力はレジーナを圧倒し、着々と追いつめていた。

「速い！」

「一気に決めさせて頂きますわ！」

「彩れ！ラブキッスルージュユ！」

エースは手に持ったルージュユを唇に塗り、相手に向かってキスを投げると、前方にハート形のエネルギー体が生成される。

「ときめきなさい！エースシヨット！ばきゅん！」

両手持ちして頭上に掲げたラブキッスルージュユを振り下ろし、エースシヨットを放ち、レジーナへと命中した。

レジーナはダメージを負い、そのまま倒れた。

「凄い……！」

すると、レジーナが倒れ込んだ所にビルドがやってきて、レジーナを掴んでいた。

「晴夜の奴、何にする気だ……？」

『マックス！ハザードオン！』

龍牙が呟くと、ビルドはトリガーのスイッチを押し、ドライバーのレバーを握ろうと

していた。

「ま、まさか……!?」

「ヤベエぞ!止めろ!」

「だめ……ダメだよ!晴夜君!」

ビルドに向かってマナが叫ぶが、意識のない今のビルドには聞こえはしない。

「……………あ……………」

「……………」

『ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!』

「やめろ!晴夜!」

龍牙が立ち上がり、ビルドに向かって走り出すと、スクラツシユドライバーを装着し、

ドラゴンスクラツシユゼリーを差し込んだ。

『ドラゴンゼリー!』

「変身!」

『ドラゴンインクローズチャージ!ブラア!』

クローズチャージへと再変身した龍牙はツインブレイカーにクローズドラゴンを差し込む。

『クローズドラゴン!』

『Ready go!レッツブレイク!』

『Ready go!』

「……い………や………」

そしてビルドは、レジーナにトドメを刺すための準備を終え、全身から漆黒の強化剤を黒いオーラのように噴出しながら腕を上げた…

『オーバーフロー!ヤベーイ!』

「やめろおおおー!!」

クローズのツインブレイカーが間一髪、ビルドに命中し、レジーナを離れた。吹き飛ばされたビルドの変身は解除されると、クローズも変身解除し、龍牙と倒れていた和也も立ち上がり晴夜の元に駆け寄る。

「おい、大丈夫か?おい!」

「?……俺は………何をやっていたんだ……」

まさか………」

「………覚えてねえのかよ?」

その隙に倒れていたレジーナを、ボールが介抱した。

「キュアエースと言ったな。覚えておこう」

ボールがキュアエースに向けてそう言う。

「待って……レジーナを連れて行かないで!」

レジーナが居なくなってしまうと思ったマナは傷だらけの体に鞭を打ち、ボールにレジーナを連れて行かないでとお願いする。

「プリキュア……絶対許さない!」

だがレジーナがマナに向けたのは、憎しみの瞳だった。

「それと……」

レジーナがボールから降りるとフラフラと晴夜の元へと近づき、晴夜の顔を叩く。

「アタシを倒そうとしたアンタなんか、もつと許さない!!……くう!」

フラフラのレジーナをボールが支える。

「ビルド、俺たちもお前に受けた痛み、今度は数倍して返してやる!」

「覚えてろよ!」

「ここまでされたからには絶対許さないわ!」

レジーナ達が晴夜に恨み言を言うと、そのまま引き上げて行った。

「レジーナあっ!」

その姿に衝撃を受けたマナは、あまりの悲しみに涙を流した。

(俺が……レジーナを……倒そうとしたのか……俺が、この手で……?)

そして晴夜は、自分がレジーナを手にかけてしようとしていたと言う実感に、押し潰され

そうになっていた。

「泣けば、悩めば、あの子が戻って来るとでも言うのですか？」

急にエースが口を開いた。

「さあ、立ちなさい。あなたには立ち止まっている余裕などありません」

そして、七人に立ちなさいと言う。

「ちよつと待つて下さい！」

「あなたは知らないのよ！ マナがどれほどレジーナを思いやつて来たか！」

「どこのだなたかは存じ上げませんが、マナちゃんの気持ちをないがしろにするのは許せません！」

六花達がエースにそう話すが、本人は気にせず再び口を開く。

「プリキュア五つの誓い！」

「一つ！プリキュアたるもの、いつも前を向いて歩き続ける事！もつと、強くなりなさい！」

「無理だよ……！あたし……もうこれ以上強くなつてなれない……！」

エースは今より強くなれと言いつが、マナは泣きながら強くなれないと叫ぶ。

「仕方ありませんね」

その様子を見たエースは、マナが髪留めとして使っていたキュアラビーズを取り上げ

る。

「あなたが愛を取り戻すまで、これはわたたくしが預かります。それと……」

エースは晴夜と龍牙と和也の方を見る。

「……何だよ?」

「俺達にも何か言いたいことがあるのか?」

「あなた方二人では、ありません。私はこちらの方に用があります」

エースは晴夜の方に用があると語る。

「いつまで下を向いているつもりですか!」

エースが晴夜に喝を入れると、晴夜はエースの方を見るために顔をあげる。

「あなたは、自分の力に飲み込まれて、挙げくの果てには暴走するとは……戦う者としては最悪です!」

「ツ!!?」

エースの発言が、晴夜の心に強く響く。

——その通りだ、さっきまで間違いなく晴夜はハザードトリガーの力に飲み込まれて、自我を失っていた。

「それでは、アデュー」

「ちよ、ちよっと!」

そのままキュアエースはどこかへと行ってしまった。

「行っちゃったビィ……」

「ごめん……みんな……あの人の言う通りだよ……」

あたしには、プリキュアの資格なんて無い……!」

「マナちゃん……」

「マナは何も悪くない!だから……泣かないでよ……!」

プリキュアの資格が無いと言うと、マナを六花とありすが慰めようとする。

同時に、晴夜が口を開く。

「なあ……俺は……本当に暴走していたのか……?」

「そ、それは……」

「もし、本当なら……俺は、俺は……う、うわああああああ!」

晴夜は頭を抑え、自分ののでかした事を思い出し、発狂した。

「落ち着け、お前はレジーナを止めようとしただけだ!」

「そうだ!だから、自分を責めるな!」

和也と龍牙が懸命にフォローするが、晴夜の叫びは止まらなかつた。

ジャネジーを植え付けられたレジーナはまた敵となり、マナはキュアエースにキュアラビーズを取り上げられ。そして、晴夜は自分が暴走し、レジーナを手に掛けようとし

たことによる罪悪感で戦意喪失となった…

その頃、トランプ王国へと戻ったベール達はレジーナをキングジコチューに渡していった。

「うつつうつつ!」

「かわいそうな我が娘よ……今は眠れ。深く、もつと深くに」

キングジコチューは自らの力でレジーナを深い眠りへとついでしまった。

「そのキュアエースとは何者なのだ?」

「分かりません。ですが、恐ろしい相手です。それに、ビルドも……」

「随分と手こずってるみたいじゃない?ベールちゃん」

後ろを振り向くと、二人のジコチューが立っていた。

「その呼び方は止めろリーヴァ!」

「アンタ達、あれからまだ一つも世界を攻略出来ていないんですって?」

「俺達はもう世界を三つ滅ぼして来てやったぜ」

ベール達の前に新たな幹部、リーヴァとグーラが現れた。

「グーラ！」

「ハッ、ドーセサルしか住んでないようなチンケな世界だろ」

「言ってくるじゃない」

「お前も頭から食ってやろうか？」

「食えるもんなら食ってみろ！」

「止めんかあ！」

キングジコチューが叫ぶとジコチュー達は黙った。

「リーヴァ、そしてグーラよ、プリキュアと仮面ライダーの殲滅はお前達に任せる！」

「ハハッ！」

「……ん？仮面ライダー？誰なのそれは？」

リーヴァは聞き覚えのない名を聞いて、疑問に思った。

「奴らはプリキュアに手を貸している。それが仮面ライダーと言う邪魔者だ。

名をクローズ、グリス。そして、ビルドの三人だ」

「何だそいつ？強いのか？」

「ああ、テメーらなんかよりもな！特にビルドがな！」

「ビルド？その仮面ライダーがそんなに強いのか？」

「ああ！ビルドは、ジャネジーを取り込んだレジーナ様さえも倒してしまう強さを持つ

ている」

「へえ、面白いじゃない」

「それいつもプリキュアと一緒に食ってやろう!」

リーヴァとグーラがビルド達にとつての新たな強敵として現れることとなったが、その横でベールはここにいない人物について思い出した。

「失礼ですが、キングジコチュー様」

「なんだ?」

「スタークは今どこにいるかご存知ですか?」

「このお方なら何か知ってると思います、ベールはキングジコチューにスタークの場所を聞く。」

「奴なら、貴様らが戻ってくる少し前に『旅に出る』と言って出ていった。我の力になるため戻って来ると言ってるな」

それに対してキングジコチューは、スターク——総一郎は旅に出たとベールに言う。

「そうですか。(——何を考えているスターク?)」

それから、数日後…

「おい、晴夜。いつまでそうしてるんだよ！」

「ああ……」

龍牙が晴夜に言うのと虚ろな顔でそう呟いた。

今の晴夜の姿は髪がいくつも跳ねていて、自分の作業用の椅子に座り、寝るとき以外は全然動かない。まるで魂が入っていないような状態だった。

「じゃあ、俺もう学校に行くからな！お前も明日から来いよ！」

と晴夜に言うが、晴夜は黙ったままに何も言わなかった。そのまま、龍牙は地下室を出て、玄関へと向かう。

「龍牙君」

「ん？」

声をかけられた龍牙は後ろを振り向くと、晴夜の祖父と祖母がいた。

「晴夜はどう、少しは元気になった？」

二人は龍牙に今の晴夜の状態を聞く。

「今は、ソツとしといてやって下さい、あいつは絶対立ち直る！」

龍牙が自身満々に言う。

「そうだな、晴夜なら大丈夫だ。拓人の息子だ」

「そうですね。ありがとう、龍牙君」

祖母が龍牙にお礼を言う。

「いや、寧ろ俺の方があいつに救われた……じゃあ、いつてきます!」

「いつてらっしやい!」

龍牙は玄関を開け、外に出て学校へ向かった。

その頃、地下室にいる晴夜は。

(俺は、この先どうすればいいんだ……? レジーナを助けると言って、自分がこのザマか……)

レジーナを助けられなかった事、そしてハザードトリガーを使い暴走し、レジーナを倒そうとした事から未だ立ち直れずにいた。

『許さない……』

「!? レジーナ……!」

声が聞こえ、顔を上げると自分の目の前にレジーナの幻影が見える。

『許さない……アタシを倒そうとしたアンタなんか!』

幻影とはわかつているのに、レジーナへの怒りが自分の体に強く伝わってくる。

「ごめん……ごめんなさい……ごめんなさい……」

晴夜は謝る。何度も何度も嗚咽を吐きながら謝り、顔を上げるとレジーナの幻影は消

えていた。

(もう……戦いたくない……)

そして、その日の昼頃。

ビルドフォンから電話が鳴り、晴夜がその電話に出る。

「何の用だ……？」

それからしばらくして、晴夜は大貝町で一番景色が見える公園に来ていた。

「よう、元気そう……ではないな」

そのこのベンチに総一郎が座っていた。

「電話でこんな所に呼びつけて、何の用だ……」

気の抜けた声で電話でここに呼んだ総一郎に尋ねると、総一郎が笑い出す。

「何が、おかしいんだ！」

「まだ、わかってないようだな。」

いいか、キングジコチューのジャネジーを植え付けられた以上、レジーナは完全に前達の敵になった。

つまり、お前は自分達を襲う敵を倒そうした……それだけだ」

晴夜は、自身がレジーナを倒そうとしてしまった出来事を、「それだけ」と言った総一郎に怒りを感じた。

「それだけ?……ふざけるな!レジーナは、俺たちの友達だ!だから……」

「助けようとしたかったからか……それはまた、能幹気な事だな」

だが総一郎の発言に、晴夜は何も返す言葉がなかった。

「まあ、この先、お前が戦わないのは勝手だ。」

だが、今後現れる二人の新たな幹部ジコチューには、クローズとグリスと他のプリキュアだけでは無理かもな」

「……新たな幹部?」

「リーヴァとグーラ、それが新たな幹部だ。はつきり言つてベール達より数段強い……」

だから、お前が戦うしか無いんだよ!」

総一郎が晴夜に言うが、晴夜は首を無理だと横に振る。

「これを聞いたらお前にもわかつているはずだ!だから、何かを期待してここに来たんだろ!」

「うるせえ!」

晴夜が殴りかかろうとする。だが、総一郎はそれを避け、晴夜の腹を殴ると倒れ込んでしまう。

「どうすれば……どうすればいいんだよ！」

晴夜が両手で地面を叩きつける。

「お前が奴らに勝てばいい、それだけだ」

「……………無理だ……無理だ」

総一郎がそう語るが、晴夜は今の自分には、無理だと言う。

「また、自分を見失うのが怖い。安心しろ、勝つ方法はある。それと情報を与えてやる」

「情報？」

「レジーナの事だ」

「レジーナ……！」

総一郎はレジーナの情報を話してやると言ってきた。

「今、レジーナはキングジコチューによって深い眠りについてしまっている。

キングジコチューを倒せばレジーナに植え付けられたジャネジーだって消えるかもしれない」

そう言うと、総一郎は持つて来たケースを開け、それを晴夜に見せる。その中には、今まで晴夜自身も一度も使ったことのないボトルばかりがあった。

「なんだよ、このボトル？」

「トランプ王国に残っていたボトルだ。しばらくの間、このボトルを貸してやる。

ビルドドライバーの最大の特徴はハザードレベルでは計れない強さを持っている事だ」

そう言うのとトランスチームガンを出し、コブラボトルを差し込んだ。

『コブラ!』

「蒸血!」

『ミスマツチ!コツ・コブラ!…!コブラ!…!ファイヤー!』

黒い霧を纏い、霧が晴れるとスタークへと変身した。

「立て。俺と戦えばボトルの特性を生かした新たな戦い方を探しながら、ハザードレベルを上げられるかもしれない。

レベルが上がれば、ハザードトリガーだって使いこなせるかもしれない」

スタークが言うが、晴夜は倒れたまま動こうとしない。

「何をためらっている!お前には守るべきものがあるんじゃないのか!」

自分が信じた正義の為に戦ってきたんじゃないのか!それとも、全部嘘か!」

スタークに言われ続けると晴夜はケースに手を伸ばし、ボトルに掴む。

「最悪だ……こんなに苦しくても、戦うしかないのか……!」

でも、もう迷ってもいられない、必ずレジーナは取り戻す!そのため、俺は強くなる

……!」

晴夜が呟くと、ビルドドライバーを装着し、ボトルを振ってドライバーに差し込む。

『フェニクス！掃除機！』

ドライバーのレバーを回し、前後からランナーが出現した。

『Are you ready?』

するといつもの様にその音声が響いた。その時、ハザードトリガーを使った自分を思い出し、一瞬戸惑う。

だが、晴夜は高々と叫ぶ。

「変身！」

戸惑いながらも、晴夜はビルドへと変身した。

「うおおおおおー!」

ビルドはそのままスタークに向かって火炎攻撃をするが、スタークは避けて、スチームガンで反撃に出る。

「ダメダメだ！二つの力を使いこなしていない！」

「まだまだ！」

今度は違うボトルをドライバーに差し込む。

『ローズ！ヘリコプター！ベストマッチ！』

『Are you ready?』

「ビルドアツプ!」

『情熱の扇風機!ローズコプター!イエーイ!』

赤と緑のアーマーが装着され、バラの鞭とヘリコプターのプロペラが装着された。

「どんだけ、赤と緑が好きなんだよ!」

スタークがスチームブレードで攻撃しようとするが、ヘリコプターのプロペラで攻撃し、そのままスタークに命中し、次にバラの鞭で攻撃する。

「やっぱり、ベストマッチは想像以上だな!まだまだ行くぞ!晴夜!」

『ターゲット!ウオッチ!ベストマッチ!』

「おおおおおお!」

ビルドとスタークによるハザードレベルを上げる為の戦いは、さらに激しくなっていた。

次回!Re. ドキドキ&サイエンス!

第26話 新たな誓い!ビルドとハート!

第3章 『エース&ハザードトリガー編』

第26話 新たな誓い！ビルドとハート！

晴夜が総一郎と会っている一方、大貝町の商店街ではお祭りが開催された。

龍牙、六花と真琴も学校帰りにお祭りに来ていた。

「「「くんにはー！」」

「「いらっしやい！」」

ぶたのしっぽ亭も屋台を展開し、フランクフルトを出していた。

「うーん、いい匂い」

「美味そうー！」

龍牙達が健太郎が焼いていたフランクフルトを見る。

「味見してみる？」

「「いただきます」」

健太郎からフランクフルトを受け取り、三人はフランクフルトを口にす。

「あの、マナは……」

真琴はマナの事が気になり、あゆみに聞く。

「昨日からずっと部屋で寝たままでご飯も食べてないのよ」

「そうですか……」

「やつぱり、マナも……」

やはり、マナも晴夜と同じで立ち直れずにいる様子。

「何かあったのかい?」

「えっ? な、何がって?」

「マナが塞ぎ込むなんて、滅多に無い事だからね。」

もしかしてレジーナちゃんとケンカでもしたんじゃないかって思って」

「あれはケンカと言うレベルでは無かったけど……」

「えっ?」

「大丈夫です。今は辛いかもしれないけど、マナはきつとすぐに元気になると思います」

「そうっす。マナは絶対いつものマナに戻るはずだ」

真琴と龍牙がマナは絶対元気になって戻って来ると言うのと、健太郎は「ホッ」と笑う。

「そうだね。マナは本当にいい友達を持ったな」

「ええ」

その後、場所を変え。和也とありすとセバスチャンも合流した。

「晴夜とマナの状態はどうだ?」

和也が聞くと龍牙達が首を横に振る。

「そうか……」

「マナと晴夜は落ち込んでるみたいね」

「無理ねえよ……レジーナを奪われた上に……」

「マナはラビーズも没収されちゃったビィ」

「晴夜は、自分が暴走してしまった事をまだ責めてるケルか？」

ラケルが龍牙に聞くと、龍牙が縦に首を振る。

「それもだけど、一体何者なのかしらね、キュアエースって……」

「その件ですが……」

「どうしたんだよ？何かわかったのか？」

和也がありすに聞くと、セバスチャンが説明する。

「いいえ、あれからキュアエースの行方を探っておりますが、有力な情報は未だ掴めておりません」

「相当手強い相手でランス〜！」

キュアエース関して情報は未だ無いとありす達が言う。

「あら？マナちゃんのお爺様」

ありすの目に大荷物を運ぶ宗吉が映った。

四人は宗吉の元へと駆け寄る。

「「「こんにちは!」」」

「おや、こんにちは」

龍牙達五人が宗吉に挨拶する。

「この大量な荷物で何するんだ?」

龍牙が荷物について宗吉に尋ねる。

「お祭りのイベントでフリーマーケットをやるんじや。

マナにも手伝ってもらおう約束だったんじやが……」

「良かったら手伝わせて下さい」

「いいのかい?」

「もちろんですわ」

「俺らに任せて下さい!」

「俺も、やるぜ!」

「あの、私も手伝います」

宗吉の手伝いを出た五人はフリーマーケットを始める。フリーマーケットの会場では、真琴が売り子を担当し、そこには人が多く集まっていた。おそらく、ほとんどが真琴のファンだろ。

「流石、アイドルやってるだけにすげえな」

「当たり前だ！まこぴーはな、みんなの太陽なんだよ！」

真琴はみんなにとっての太陽だと、和也は叫ぶ。

「何か趣旨変わって無い？」

「賑やかになるのはいい事ですわ」

龍牙と和也と六花とありすの四人は荷物を運ぶ手伝いを担当していた。

「そう。人が集まれば活気が生まれる。活気のある町はみんなを笑顔にする」

「マナちゃんの方まで、私達で祭りを盛り上げましょう」

「そうね」

「じゃあ！頑張つて行こぜ！」

（あいつも、いい加減いつもの感じに戻ってくれねえかな……）

六花達がマナの方まで祭りを盛り上げようとしている一方、龍牙は晴夜の事を考えていた。

その頃、マナはレジーナを奪われたショックで昨日からずっと部屋に籠り切りで、ご飯も食べていなかった。

「マナ、何か食べないと体に毒シャル」

「いけない……」

サンドイツチが乗った皿を持ったシャルルが促す。

「しっかりするシャル!あなたは伝説の戦士プリキュアシャルよ!」

励まそうとしたシャルルだが、マナの顔は暗いままだった。

「あたしはもう……」

彼女がそう言いかけたその時、

「きゅぴらっば〜!」

どこからかアイちゃんの声が響き、マナの家が光に覆われた。

「何、今の……?」

マナがベットから降りると、ドアをノックする音が聞こえた。

「表が忙しくなってきたから、少しの間アイちゃんを見てくれる?」

「えええええっ!?」

ドアを開けたあゆみが抱えていたのは、ジョーと一緒にどこかへと行ったハズのアイちゃんだった。

「アイちゃん、どうしてここに!?」

それなのに、マナはここに居るアイちゃんに驚く。

「あなたの妹なんだから、ここに居るのは当たり前でしょ?」

「い、妹!?」

なんと、突然アイちゃんがマナの妹ということになってしまった。

「じゃ、お願いねー」

あゆみが部屋を後にする。

「どういう事シャル?」

「多分、さっきの魔法であたしの妹と思ひ込まれたんじゃないかな……?」

「ええええええ〜っ!?」

「あつ、そういえば」

再びあゆみが部屋に入ってきて、急いでシャルルは隠れた。

「ど、どうしたの?」

「桐ヶ谷君が来てるわよ」

「えっ?」

「さあ、どうぞ」

あゆみが言うのと後ろから晴夜が現れた。

「よう……マナ」

「晴夜君……あれ?その傷どうしたの?」

マナの言う通り、晴夜の顔には多くのすり傷が出来ていた。

「じゃあ、ごゆっくり」

「はい……」

あゆみはまた、部屋を後にして下へと向かった。

「マナ、その……この前は……」

晴夜が何かを言いかけようとする……

「マナ、せいや」

「「えっ?」」

二人の名前を呼ぶ声が聞こえ、驚くとアイちゃんを見る。

「アイちゃん……今、俺たちの名前を……」

「アイちゃん、今マナって、せいやって呼んでくれた!?」

今、アイちゃんが自分達の名前を呼んだのだと気付く。

「アイちゃん、マナ、せいや、いっしょきゅぴゅ!」

アイちゃんが二人に笑顔を見せる。

「アイちゃん……」

「あい」

「お世話ラビーズ?これを使って欲しいの?」

手に握っていたお世話ラビーズをマナに差し出す。

「マナはラビーズをコミュニケーションにセットして円を刻むと、ラツパが出て来た。マナ、せいや、げんきげんき〜！」

そのラツパを吹いてマナと晴夜を元気づけた。

「もしかして、俺たちを励ましてくれるの？」

「アーイ！」

「アイちゃん……あたしの方がお世話されちゃった……」

「……アイちゃん、ありがとう」

晴夜がアイちゃんに近づき、礼を言う。

「アイちゃん、晴夜君もお祭りに行かない？」

マナがアイちゃんと晴夜に外のお祭りに行かないかと聞く。

「アーイ！」

「ああ！」

それに対し、晴夜とアイちゃんが頷く。

晴夜とマナとアイちゃんの三人は外に出て商店街のお祭りを回る。

「美味しい！」

「アーイ！」

マナの顔に少しずつだけ、笑顔が戻ってきた。

その後、近くのベンチに座る。

「なんか、少しだけ落ち着けたかも」

「だいぶいつも調子のマナに戻ってきたシャル」

「ごめんね、シャルル。心配かけて」

マナがシャルルに今まで心配をかけた事を謝る。

「マナ……この前は、ごめん……」

「え？」

そしてマナは、突然謝り出した晴夜に驚く。

「あの時、俺がハザードトリガーの力に飲み込まれていなければ、レジーナを……」

「……そんなことないよ。晴夜君はレジーナを取り戻そうと、一生懸命頑張っていた」

「でも、俺は暴走してレジーナを倒そうした……」

晴夜は、自分が暴走したことにまだ責任を感じていた。

「自分を責めないで。晴夜君がレジーナを取り戻そうとしていたのは、みんな知ってるから！」

「そうシャルよ!それに晴夜があの時、戦ってくれなかったらシャルル達全員やられてたシャルよ!」

マナとシャルルが気落ちしている晴夜を慰める。

「マナ、シャルル……ありがとう……」

……さつて、もう少し屋台でも周るか！」

晴夜がベンチから立ち上がる。

「うん！」

「賛成シャル！」

「アーイ！」

再び三人と一匹の妖精はお祭りの中を周る。

「みんな、最高に楽しそうだな」

「お祭り賑やかだね。レジーナも見たら喜ぶだろうな……」

レジーナも一緒に見れたらとマナが言うと、晴夜は総一郎が告げた事を伝えるべきか

悩んでいた。

「マナ、実は……」

「レジーナ……?」

「えっ? ちよつと！」

突然、レジーナらしき人影を見つけたマナは駆け足で追った。晴夜もマナの後を追いかけた。

そのまま二人は商店街の裏側に向かうも、そこには誰もいなかった。

「どうしたんだよ、マナ」

「今レジーナが、でも……いるわけ無いか……」

レジーナがいないと思いき、マナが落ち込む。

「いつまで背中を丸めているつもり?」

突然、女の子の声が聞こえ、二人が振り向くと片手にアイスを持った二人より年下の少女が壁際に立っていた。

「あつ、ちよつとアイちゃん!」

その少女の元へとアイちゃんが飛んで行くが、特に驚いたそぶりを見せず、微笑んで抱いた。

(なんで、俺達以外の子にアイちゃんが……この子は……)

少女を不思議に感じる晴夜。

「そんな事では、いざれあなたの大事なものを失う事になってよ、相田マナさん。」

それに、桐ヶ谷晴夜さん。あなたもですよ」

その少女は、どういうわけか二人の名前を知っていた。

一方その頃。フリーマーケットの会場では、真琴が客引きをしていると知ってきた真琴

のファンで溢れていた。

「サインください！」

そこへファンの二人がサインを下さいと頼みこんできた。

「ごめんなさい。今日はプライベートですのでサインはちよつと……」

DBがプライベートだと言い、サインは断られた。

「ええっつ、そんな……」

ファンの二人のプシユケーが黒く染まり出す。

「まあいつか」

「まこびー、生で見られたし」

しかし、そう言う二人のプシユケーは染まらなくなつた。

「我慢する事無いじゃない。あなた達の望み、叶えてあげるわ」

突然現れたリーヴァが指を鳴らすと同時に、ファンの二人のプシユケーが真っ黒に染まり、取り出される。

「暴れる！お前らの心の闇を解き放て！」

闇を加えた二つのプシユケーからマジックペンと色紙のジコチューが生み出された。

「皆さん、逃げて下さい！」

セバスチャンが多く人を避難させるために誘導する。

全員がいなくなると、龍牙と和也はスクラツシユドライバーを装着し、真琴達三人はコミュニオンを構える。

「みんな!行くよ!」

真琴が叫ぶと龍牙はドラゴンゼリーを差し込み、和也もロボットゼリーをドライバーに差し込み、真琴達はラビーズをコミュニオンにセットした。

『ドラゴンゼリー!』

『ロボットゼリー!』

「変身!」

「プリキュア!ラブリンク!」

龍牙と和也のビーカーが割れ、頭部の『スクラツシユノズル』から液が噴出され、クローズチャージと 그리스へと変身し、真琴達三人が光に包まれ現れると、プリキュアへと姿が変わった。

『『潰れる!溢れる!流れ出る!』』

『ドラゴンリンクローズチャージ!ブラア!』

『ロボットイングリス!ブラア!』

「英知の光!キュアダイヤモンド!」

「ひだまりポカポカ!キュアロゼッタ!」

「勇気の刃！キュアソード！」

名乗り上げると全員が変身完了した。

「マナと晴夜君が変身出来ない分、私達で何とかしないと！」

「ええ！」

「うん！」

「心火を燃やすぜ！」

「行くぜえ！」

五人がジコチューに向けて、走り出した。

「あーら、お早い登場ですこと」

「あなた達何者!？」

だがその時、ダイヤモンド達の前にリーヴァとグーラが現れた。

「私はリーヴァ」

「俺はグーラだ」

「どうぞお見知り置きを」

そう言つてリーヴァが投げつけたシルクハットをクローズ達は躲す。そのシルクハットはなんと木を真つ二つに切り裂いた。

「何!?!？」

「ええっ!??!」

「よそ見していると食べちゃうぞ!」

ダイヤモンドに向かってグーラが突進する。

「プリキュア!ロゼッタリフレクション!」

前に出たロゼッタがロゼッタリフレクションを発動して抑えるが、グーラはこれを噛み砕いた。

「噛み砕きやがった!」

「アナタ達二人の相手はこれよ!」

リーヴァがクローズとグリスの目の前にシルクハットを投げると、中からスマッシュが二体現れた。だが、そのスマッシュはいつもと様子が違っていた。

「邪魔なんだよ!」

クローズとグリスがツインブレイカーで攻撃するが、まるで反応がない。

「何!??!?ぐわあ!」

クローズとグリスを吹き飛ばした。

「何だよコイツ?普通のスマッシュとは違う」

「それは、私達の力を与えて強化したスマッシュよ。簡単にはたおせないわよ」

「何だと!」

五人に二体のジコチューと二体の強化スマッシュが襲い掛かった。

その頃、商店街の裏にいるマナと晴夜は…

「あなたは……」

「マナ！晴夜！闇の鼓動シャル！」

「何……!?？」

シャルルがコミュニケーションに変わると、戦っているみんなの声が聞こえた。

『スパークルソードが効かない！』

『コイツら！いい加減に！ぐわあ！』

それは、みんなの苦戦している声だった。

「行こうシャルル。みんなの所へ」

「でもマナは変身出来ないシャルよ！」

「それでも行く」

みんなの元に行くとマナが言うと、少女の方を見る。

「ありがとうございます！」

「えっ？」

突然、マナが少女に礼を言った。

「あたし、レジーナがいなくなった事で頭が一杯になって、大事な事が見えなくなっていたんですね」

自分が反省すべき事を少女に伝える。

「でも、何が一番とかじゃなくて、あたしはみんなの笑顔を守りたい！」

仲間達の笑顔も、レジーナの笑顔も！

全部、守って見せる！」

「マナ……」

「……それで、アナタはどうなんですか？桐ヶ谷晴夜さん」

「俺は……正直言って、まだ自分が怖い」

晴夜がそう語ると、ハザードトリガーを出す。

「俺はこの力が怖い、これを使ってまた暴走するかもしれない……」

「晴夜君……」

「でも、俺はこれからも誰かの明日を守るため戦う！そのためライダーシステムがある

！そのためこの力を使う！」

戦う覚悟を晴夜も持っていると言おう。

「行くぞ！マナ！」

「うん！」

二人はフリーマーケット会場に向かって走り出した。

その頃、二体のジコチューはダイヤモンド、ロゼッタ、ソードにインクをかけ、色紙で吹き飛ばした。

「いい魚拓、いやキュア拓が出来たわね」

「みんな！」

「次はクローズ、 그리스、あなた達のも作ってあげるわ」

「ふざけるな！作られてたまるかよ！」

「同意見だ！ここからは俺達の番だ！」

그리스が叫ぶと、 ツインブレイカーにボトルを2本差す。

『シングル！ツイン！』

「はあああ〜！はあ！」

『ツインブレイク！』

그리스は走りながらインクジコチューのインクをかわし、インクジコチューとストロングスマッシュユハザードにツインブレイクを決め、スマッシュを倒した。

命中させると今度は色紙ジコチューとファングスマッシュユハザードが攻めてきた。

そして、クローズが二体の前に出る。

『クローズドラゴン!』

それを確認すると、今度はクローズドラゴンを差し込み、ドライバーのレンチを下ろす。

『Ready go!レッツブレイク!』『スクラップブレイク!』

「くらえ!」

「ジコオー!」

ツインブレイカーでのスクラップブレイクを決め、色紙ジコチューを吹き飛ばしス
マッシュの二体目も撃破した。

「へえ、中々やるわね」

「そいつはどうも、ぐわあ!」

いきなり、グーラがクローズに向けて攻撃してきた。

「龍牙、大丈夫か?」

「ああ!てめえ!きたねえぞ!」

「きたない?油断してる方が悪いと思うが」

「このやろく!ハアツ!」

クローズがビームモードでグーラに攻撃した。しかし、グーラはその攻撃を飲み込んでしまった。

「マジかよ……!!」

(クソツ……コイツら半端ねえ、でもな……!!)

クローズが立ち上がると倒れていたダイヤモンド達がヨロヨロの状態で立ち上がる。

「まだやるつもり?」

「私達は負けるわけには行かないのよ!」

「マナちゃんや晴夜さんの分までこの町を……!!」

「みんなの笑顔を……守ってみせる!」

「まだまだ、俺たちの心火は消えないぜ!」

「あいつら二人が帰ってくるまで俺達は戦う!」

戦う心の折れないクローズ達が再び立ち上がる。

「うっとおしいわね……ジコチュー!」

リーヴァがジコチューに指示しようとした、その時。

「ちよーつと待ったー!」

五人の前に出たマナの叫びが、ジコチューを吹き飛ばした。

「マナ!」

「来てはいけません!」

「あなたは変身出来ないのよ!」

ダイヤとロゼッタ、ソードがマナへ逃げるように言うが…

「あたしはもう逃げない!大切な人達を守るために、あたしは戦う!」

ジコチューの放ったインクを落ちていたパラソルを広げて防ぐ。

「まだまだ!」

弾いたインクが色紙ジコチューに当たったことで仲間割れを起こし、次の瞬間、どこからかの砲撃が二人のジコチューに命中した。

「誰ジコチュー!」

「俺だよ!」

「晴夜!」

砲撃したのは、ドリルクラッシュャーのガンモードにして構えていた晴夜だった。

「やった!」

「マナちゃん流石です!それに晴夜さんも!」

「お見事です。相田マナ。いえ、キュアハート」

すると、木の陰からあの少女が現れた。

「プリキュア五つの誓い!」

「一つ!プリキュアたるもの、いつも前を向いて歩き続ける事!」

マナは少女に続いてそう叫んだ。

「まさかあの子……!」

「取り戻したようですね、あなたの愛を。」

それと、貴方も恐怖から抜け出したようですね、桐ヶ谷晴夜。いえ、仮面ライダービルド。

「さあ、一緒に戦いましょう!」

少女がマナにラビーズを返す。

「はい!」

「ああ!」

二人が言うのと、晴夜はリーヴァとグーラを見る。

「さあ、実験を始めようか!」

晴夜のいつもの台詞を言うとビルドドライバーを装着してボトルを振り出し、マナはラビーズをコミュニケーションにセットした。

『ラビット! タンク! ベストマッチ!』

ドライバーのレバーを回し、前後よりアーマーが形成される。

『Are you ready?』

「変身!」

「プリキュア!ラブリンク!」

晴夜の身体にアーマーが装着され、ビルドへ。

マナは光に包まれ、光から現れるとプリキュアへと変身した。

『鋼のムーンサルト!ラブットタンク!イエーイ!』

「みなぎる愛!キュアハート!」

「愛を無くした悲しいサインさん!このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻して見せる!」

ハートの中から力が溢れ出す。

「そいつらの顔も真っ黒にしておしまい!」

「出来るかしら?あなた達に。」

アイちゃん、行くわよ!」

「きゅぴゅ!」

「プリキュア!ドレスアップ!」

「きゅぴゅ!」

アイちゃんから出た光から箱——ラブアイズパレットが出現された。それが自動で開くと、少女はラビーズをセットし、中に入っていたロイヤルクリスタルを左から右へタッチしていく。そして、七つの炎のシルエットに包まれる。

燃える炎の中から現れると、その姿は少女から大人の女性へと姿が変わった。

「愛の切り札！キュアエース！」

「美しさは正義の証！ウインク一つで、あなたのハートを射抜いて差し上げますわ！」

その少女はなんとキュアエースに変身した。

『えええええっ!!??』

正体を知っていたビルドとハート以外の五人達は驚いた。

「行くわよ」

「はい！」

「ああ！」

ビルドとハートとエースが反撃を始める。

まず、色紙ジコチューがビルドに向けて攻撃をしてきた。色紙ジコチューが放った色紙を躲しながら前に出たビルドがボトルを変え、レバーを回す。

『ローズ！ヘリコプター！ベストマッチ！』

『Are you ready?』

『ビルドアツプ！』

『情熱の扇風機！ローズコプター！イエーイ！』

「ん？あんなボトルあったか？」

クローズは今ビルドが使っているボトルを見たことないと呟く。

ローズコプターとなったビルドは、左肩にあるヘリコプターのプロペラー——『バトローターブレード』を装着し、飛びながら右腕の『イバラツシユアーム』からバラの茨の鞭を出してジコチューに攻撃する。

「痛いジゴオー!」

ビルドの攻撃に気を取られていると、次にハートがマジックペンジコチューにラツシユを繰り出す。

その隙にビルドはさらにボトルを差し替える。

『トラ! UFO! ベストマッチ!』

「また、知らねえボトル!」

『Are you ready?』

「ビルドアツプ!」

また、新たなアーマーがビルドに装着された。

今度はトラとUFOがモチーフの姿になった。

『未確認ジャングルハンター!トラユーフォー!イエーイ!』

今度は色紙ジコチューに向けてUFO型のエネルギー体を出現させ、それに乗ってトラボトルの力によって数段に上がった格闘能力で色紙ジコチューを圧倒する。

そしてエースが色紙ジコチューの眼前で止まり、衝撃で後ろにいたグーラごと吹き飛ばした。

そして、ビルドはまたボトルを変える。

『キリン！扇風機！ベストマッチ！』

『Are you ready?』

「ビルドアツプ！」

『嵐を呼ぶ巨塔！キリンサイクロン！イエーイー！』

今度はキリンの長首がモチーフの右腕——『キリネックブレイカー』と扇風機がモチーフの左腕——『サイクストーマー』を持つ姿へフォームチェンジした。

そして、ビルドはドライバーのレバーを回した。

『Ready go!』

『ボルテック フィニッシュ！』

ビルドが扇風機の腕から風を纏いそのまま宙に上がり、キリンの腕から巨大なエネルギーが出現し、マジックジコチューに叩きつけ、近くいたりヴァをも叩きつける。

エースとハートが背中を合わせる。

「二人ともよろしくって？」

「ええ！」

「ああ!勝利の法則は、決まった!」

ビルドが言ううとラビットタンクスパークリングを出す。

『ラビットタンクスパークリング!』

スパークリングを差し込むとレバーを回す。

『Are you ready?』

「ビルドアツプ!」

『ラビットタンクスパークリング!イエー!イエー!』

ラビットタンクスパークリングへとフォームチェンジしたビルドは、ドリルクラッシュャーにカプトムシボトルを差し込むと、ドリルクラッシュャーのドリルが回る。

『カプトムシ!』

それと同時にドライブバーのレバーを回す。

『Ready go!』

「はあああ〜!はあ!!?」

『ボルテックブレイク!』『スパークリングファイニッシュ!』

ドリルクラッシュャーを地面に向けて放つと、泡が出ながら色紙ジコチューの下からカプトムシの巨大な角のエネルギー体が出現し、色紙ジコチューを拘束した。

「彩れ!ラブキツスルージュー!」

エースがルージュを唇に塗り、相手に向かってキスを投げると、前方にハート形のエネルギー体が生成される。

「ときめきなさい！エースショット！ばきゅん！」

両手持ちして頭上に掲げたラブキッスルージュを振り下ろし、エースショットを放つた。

ビルドの技を受けた直後にエースショットが命中し、色紙ジコチューは浄化された。そして、今度はマジックペンジコチューに目を向ける。

「これで、フィニッシュだ！」

ドリルクラツシャアを投げ捨て、ビルドはドライバーのレバーを回した。

『Ready go!』

ビルドは高くジャンプして、キック態勢に入った。

『スパークリングフィニッシュ!』

そして、ハートはラブハートアローにラビーズをセットした。

「プリキュア！ハートシュート！」

そのまま、ハートはハートシュートを放った。

スパークリングフィニッシュとハートシュートを受けたマジックペンジコチューは浄化された。

「キュアエース……!」

「次は容赦しないわよ。それとビルド、あんたも覚えてなさいよ」

リーヴァとグーラの二人は撤退して行った。

「キュアハート!良かった……!本当に良かった……!」

いつものハートになって現れたのを見たダイヤモンドがハートに抱きつく。

「ゴメンね。心配かけて」

「いいのよ。ハートが元気を取り戻してくれたなら」

「ええ、本当に」

「お前も、もう大丈夫なのか?」

「……心配かけて悪かったな」

「無理すんなよ、何かあったら俺達を頼れよ!」

ビルドが謝るとクローズとグリスが彼の胸に拳を当て、ハートとビルドが元気になった事に喜ぶ五人。

「喜んでる暇はなくなつてよ、あなた達の試練はまだ始まったばかり。

早く登っていらつしやい、わたくしのステージまで、待っているわ。アデュー」

最後にそう言ってエースは去っていった。

「キュアエース……」

「あの方は一体……」

キュアエース、彼女の謎はますます深まるばかりだった。

みんなが不思議に思っている一方、ビルドはハザードトリガーを見る。

（今日は敵に初めて見せたボトルだったから良かったが……やはり、この先の力は必要になってくるはずだ……）

そう思いながら、ハザードトリガーを握りしめるのだった…

次回！ Re・ドキドキ&サイエンス！

第27話 プロとしての覚悟！

第27話 プロとしての覚悟!

リハーサルを終えて控え室に戻った真琴はインカムを外した。

「次のコンサート、チケット完売したそうよ。」

追加公演のオフアールがあるんだけど——真琴?」

DBは真琴と打ち合わせをしていると、彼女が下を見て黙っていた事に気付く。

「私……歌っていいのかな……」

今までずっと、王女様を探すために歌って来たけど、結局私の歌は何の役にも立たなかったわ」

すると、自分の歌が役に立たなかったと言い出す。

「そんな事……王女様のためだけじゃないわ。あなたには大勢のファンがいるじゃない。みんなあなたの歌を楽しみにしてるのよ」

DBが真琴の歌はみんな楽しんでると励ます。

それでも、真琴の顔は優れなかった。

そして、場所が変わってぶたのしつぽ亭。そこで晴夜達が集まっていた。

「キュアエース……強かったね」

彼らは今、キュアエースの話をしていた。

「あの方がいらつしやらなかつたら、どうなっていた事か……」

「確かに、あの時いなかつたらもつと厳しいかつた思う」

「ああ、間違いなく俺達よりずっと強い」

——その通りだ、キュアエースの強さがあつたからこの前はなんとか乗り切つた。

「けど、トランプ王国に残つてた戦士は俺のクローズとソードだけだつたはずだ」

「そうなるか……一体何者？」

全員が「うーん」と唸りながらキュアエースについて悩んでいる。

「とにかく、変身前の姿は私達より年下だつたよね？」

小学校三年生くら——」

「四年生です」

突然、キュアエースの少女が現れた。

「あらこんにちは、キュアエースさん」

「こんにちは。わたくしの名前は、円亜久里ですわ」

円亜久里、それがキュアエースに変身する少女の名前だつた。

(小学生だったのか……ある意味驚きだな)

晴夜が亜久里を見てそんな感じのことを思っていると、アイちゃんが亜久里の方に飛んでいく。

「きゅぴ〜!」

「アイちゃん! 今日もカワイイでちゅね〜」

亜久里がアイちゃんをあやす。

「ところであなた達?」

「は、はい!」

「何か?」

「これは何ですか?」

「えっ?」

亜久里は机に置かれていたロールケーキを指す。

「セバスチャンが作った、桃のロールケーキですわ」

「どうぞお召し上がり下さい」

「いただきます」

セバスチャンに勧められた亜久里はロールケーキをフォークで一口大に切り、口に入れてから間もなく、大きなアクションをした。

「ど、どうしたの?」

「だ、大丈夫?」

マナと晴夜が亜久里に聞くと、亜久里の顔が満足そうな笑顔になっていた。

「美味し〜い!程よく焼き上がったふわふわのスポンジ、濃厚ながら甘すぎない生クリーム、惜しめも無くふんだんに散りばめられた旬の桃!それらが優しく抱き合つて、爽やかな初夏を感じます!

これは……愛のハーモニー!」

食べたロールケーキの味の感想を言う亜久里に、晴夜達は驚く。

「凄い……一口食べただけでここまで語れるとは……」

「食レポの才能があるかもな」

「亜久里ちゃんはスイーツが大好きなんですね」

「にしても、本当に小学生かよこの子?感想が大人過ぎるだろ……」

亜久里の食レポの才能に驚いていた。正直普通のグルメ番組やミスター●つ子、孤●のグルメとかでもやっていけるくらいレベルである。

その後、亜久里はセバスチャンの手を握る。

「パティシエ顔負けの見事な腕前、何より食べる相手を喜ばせようとする愛を感じます!ブラボーですわ!」

「恐れ入ります」

セバスチャンは亜久里に礼を言う。

「更には言えば突然の来客にも動じず、さらりと受け入れる手際の良さ、まさに執事のプロフェツショナル!……それに比べて、あなたは本当にプロですか?」

亜久里は真琴の方を見る。

「何言ってるんだよ! 真琴はプロの歌手だろ!」

「その通りだ! まこぴーはみんなにとって最高の歌手なんだぞ!」

龍牙と和也は亜久里に真琴はプロの歌手だと強く話す。

「昨日テレビであなたの歌を聞かせていただきました。正直言つてがっかりですわ」

しかし、亜久里は真琴の歌にがっかりしたと語る。

「ちよ、ちよっと待つてよ! まこぴーは凄く人気がある歌手なんだよ!」

「歌唱力も定評がある実力派よ!」

「いくらなんでも、がっかりするような歌じゃないよ」

晴夜達も真琴の歌は素晴らしいと言う。

「トランプ王国でも一番の歌唱力を持つ歌姫なんだビィ!」

すると、ダビィが亜久里に飛びかかろうとするが、片手で止められた。

「世間の評価は知りません。ただ昨日のあなたの歌からは、1カケラの愛も感じられま

せんでした。

わたくしが感じたものは——迷い」

「!?？」

亜久里の今の発言が、真琴の心に強く響く。

「あのような歌を歌って、プロとして恥ずかしく無いのですか？」

「まこぴーは頑張ってるよ！歌いながらプリキュアもやってるし！」

「プリキュアとしても半人前ですわ。わたくしが助けなければ、あなた達はジコチューに負けていた。違いますか？」

「そ、それは……」

「それに桐ヶ谷さん。あなたも私がいなければあの暴走機械を使うはずだった。違いますか？」

「ツ!?」（……確かにこの子がいなかったら、恐らく俺はハザードトリガーを使っていた）」

「全てが中途半端なのです。あなた方は、今のままではキングジコチューに勝つ事など、到底不可能ですわ」

亜久里がそう言うと、玄関の方に歩いていく。

「ごちそうさまでした。ではわたくしはこれで失礼します」

別れを言うと亜久里はドアを開けて出ていった。

「えっ? ちょっと待って! キュアエース!」

マナがドアを開けると、既に亜久里の姿は無かった。

それから、しばらくして真琴が車で帰ろうとしていて、マナ達が見送ろうとしていた。

「まこぴー、今度のコンサート楽しみにしてるからね!」

「まこぴー! 俺は次のコンサート心火を燃やして応援します!」

「絶対見に行くからな!」

龍牙達が今度の真琴のコンサートを見に行くと言おうと…

「私、プロ失格だわ……」

「えっ……?」

「何言ってるんだよ……?」

真琴がプロ失格だと言う発言に驚く。

「キュアエースの言った通りよ。最近ずっと迷っていたの。王女様が見つかった今、何のために歌うのか。こんな曖昧な気持ちで歌ってはいけないって」

しばらく、沈黙が続くと真琴が口を開く。

「——私、歌手を辞めるわ!」

「「ええっ!?」」

「うそだろ!?」

真琴の口から、歌手を辞めると出て全員が驚く。

「今度のコンサートで、引退を発表する」

「ちよつと待つてよ!まこぴー!」

「何も辞める事……!」

六花が言うのと横から和也が泣きながら、真琴を説得する。

「まこぴー!それだけはやめてくれー!まこぴーの歌が無くなると俺は……」

「考えな直せよ……!なっ!」

四人が真琴を説得しようとする。

「もう決めたから。私は歌を辞める。そう決めたから!」

そう言い、車のドアを強く閉じ、車は出てしまった。

「本気かな……」

「ダメだよ……まこぴーは歌を辞めちや、絶対絶対ダメだよ!」

「当たり前だ!絶対にそんなことさせねえ!」

「なんとしても、止めるぞ!」

「何か策があるのか?」

晴夜が龍牙達に作戦があるのかと聞くが「ない」ときっぱり言う。

「おいおい……」

そして、翌朝。

学校の下駄箱の辺りでマナ達が打ち合わせをしていた。

「ねえ、本当にやるの?」

「もちろん。まこぴーを歌わせよう作戦、レッツゴー!」

「頼むぞ! マナ!」

龍牙が言うくとマナが親指を立て、真琴の元へと向かう。

「まこぴー……」

「!?」

「まこぴー、歌を辞めてはいけませんわ。絶対絶対辞めては——」

王女のお面を被ったマナが真琴に歌を辞めてはいけないと言った。

「マナ、なんのつもり?」

当然、秒でバレた。

「あ、いや……王女様から止められれば、思い直すんじゃないかと思って……」

何でバレたの?」

「王女様は私をまこぴーとは呼ばないわ」

マナに呆れた真琴はそのまま教室へと向かった。

「しまったあ！」

「いや、他にも色々無理が……」

「ダメか……」

「なあに、俺に任せなさい！」

昼休みになり、お昼の放送の時間になった。

『ええ、今日は今流行りの曲を流します』

マナの力で晴夜を放送の担当させ、放送が流れると、まず最初から真琴の曲を流れ出した。もちろん、放送の曲を仕掛けたのは晴夜である。

「なるほど、これならまこぴーも歌う気持ちにさせられる」

「いける！」

誰もがいける気がする、思っていた。

それからしばらくして昼休みが終わり、晴夜が放送室から戻って来た。

「どうだった？まこぴー歌うに気になった？」

晴夜がマナ達三人に聞く。

「それが……」

「まこぴー、自分の曲が流れだ途端、逃げちゃった」

「えっ?つまりこれは失敗……」

三人が首を縦に振ると晴夜はガックと下を向く。

そして、放課後になると、真琴の応援団が現れ、その中の中心に和也もいた。

「まこぴー!我らはまこぴーの大ファンです!あなたの歌は我々の心火を燃やしてくれる素晴らしいものです!これから頑張って下さい!」

和也が強く叫ぶと、後ろにいた団員も叫ぶ。

「なるほど、ファンならまこぴーは裏切れない!」

「てか、和也のやつ、いつまこぴーの応援団に入ったんだ?」

晴夜達は和也がいつの間にか応援団に入っていたことに驚く。

「ごめんなさい」

「ま、まこぴー!なんで!?!」

「ごめんなさいと言って真琴は走って行ってしまい、力なく崩れ落ちた和也のショックは計り知れなかった。

その後、今度は学校の前でオーケストラが演奏会をしていた。

「四葉フィルハーモニー交響楽団による生演奏です!さあ、歌って下さいな!」

ありすが真琴に歌って下さいと言う。

「う……歌わないって言うてるでしょ！」

だが真琴は歌わないと言って、そのまま走って逃げてしまった。

「生演奏作戦もダメか……」

「思わず歌いたくなる音色だと思っただけですけど……」

「いや、これは流石に歌いづらいと思うよ……」

「いくらなんでも、これはやり過ぎだろ……」

「かずやんと応援団さん達もやり過ぎだと思っただけよ」

「真琴……」

学校から真琴が帰宅すると、ジョギングして体力をつけようとする。

「ジコチューに負けないために、少しでも鍛えないと！」

すると近くでアイちゃんの泣き声とマナの酷い子守唄が聞こえた。

「やつぱりあたしじゃダメなのかな……あれから少しは練習してるんだけどなあ……」

自分が音痴だと知らず、相変わらず酷い様子だった。

「こんな時まこぴーがいてくれたらな……」

マナが呟くと、後ろから真琴が現れた。

「あ、まこぴー！何かアイちゃんが泣き止まなくてさ……子守唄歌ってくれない？」

アイちゃんに子守唄を聞かせようと両手を差し出すが、引つ込めた。

「もう歌わない。そう言ったハズよ」

「どうして……? みんなまこぴーの歌を聞きたいのに」

「歌手は私だけじゃないわ」

「楽しく無かった? まこぴー?」

歌ってるまこぴーは、いつもとつても楽しそうだったよ。

それを見てると、何だかあたしも胸がポカポカして楽しくなつて——」

歌手をやつてた頃は楽しいかつたはずだよ、とマナが言うが…

「楽しんでる暇は無いわ」

真琴はそう言い、マナの元から離れた。

すると、階段の所に龍牙がいた。

「龍牙……」

「なあ、本当にやめるのか?」

龍牙が聞くと真琴は首を縦に振り頷く。

「言つたでしよう、私は歌手をやめる」

きつぱり言うと言つて真琴は歩き出した。

「本当に! それでいいのか!」

龍牙の言葉に真琴は足を止め、龍牙は真琴の方を向く。

「お前言つてたじやねえか！いつか、たくさんの人に自分の歌を届けたいって！」

今、それが叶つてるのに、何で捨てるんだよ！」

龍牙が真琴にかつて彼女が語っていた夢のことを強く言う。しかし、そのまま何も言わず行つてしまった。

「どうして、みんな歌手を辞めるのを止めるの？」

「みんな、真琴に歌を続けて欲しいんだビィ」

「ダビィ、あなたもそうなの？」

「真琴にはやりたい事をやって欲しいビィ。」

ダビィはそれを、応援するビィ！」

ダビィが言うとき真琴は、すぐにまたジョギングを再開した。

それから、しばらくして龍牙は晴夜の地下室へと帰った。

「お帰り。どうだったまこぴーは、説得出来たか？」

「ダメだった。絶対やめるってよ……」

そう語つた龍牙がベツトに腰を置く。

「そうか……」

晴夜は再びパソコンに目を向ける。

「やつと、自分の夢が叶ったのに……」

「夢……それって、まこびーの?」

晴夜が聞くと龍牙が首を縦に振る。

「俺と真琴は、トランプ王国で小さい時から幼馴染って感じなんだ。

その時、あいつ言ってたんだ……『いつか、自分の歌をみんなに届けたい』って。

今それが叶ってるのに、なんで……」

龍牙が苦悩すると、晴夜が龍牙の肩をポンつと叩く。

「焦るなよ、まだ今度のライブまで時間があるゆつくり考えようぜ!」

「晴夜……おお! ようし、絶対真琴を辞めさせるかよ!」

晴夜に励まされた龍牙は、真琴のアイドル道を辞めさせまいと強く叫ぶ。

その頃、ジコチュークラブのボウリング場では。

「そうれつ!」

リーヴァがシルクハットを投げ、ボウリングのピンを倒す。

「まずい……」

そしてグーラはボウリングの球を食っていた。

それを見ていたボール達三人は呆れていた。

「食いモンじゃねえっつーの……」

「ボウリングも知らないなんて野蛮だわ」

「知っててやってるのよ。とつとと王女探してもしてらっしやい」

リーヴァが三人に王女を探しに行つてこいと命令する。

「お前達に命令される覚えは無い！」

「キングジコチュー様のご命令なんだよ！」

キングジコチューの命令ならば仕方ないと思うボール達。

「仕方がない、行くぞ」

「チッ！」

「覚えてらっしやい！」

文句を言いながらボール達三人は王女を探しに去っていく。それと同時に、リーヴァはテレビで真琴の歌っている姿を見ていた。

「ふーん……面白そう」

そして、コンサート当日。四葉ドーム多くの人が真琴の歌を聴くため集まっていた。その頃、控え室では……

「えっ!?まこぴーまだ来てないの!?!?」

「連絡もつきませんわ」

なんと、会場にはまだ真琴が来ていなかった。

「もうコンサート開始まで時間が無いわ……!」

「どこ行っただんだ?」

「真琴……」

龍牙が控え室を出て、走って真琴を探しに行ってしまった。

「龍牙の奴……俺達も探しに行こう!たぶん、近くにいるはず」

晴夜が言うとながが領き、急いで真琴を探しに向かう。

「あいつどこにいるんだよ!」

会場の外を探していた龍牙。辺りを見てるとベンチで真琴が座っていたのを見つけた。

「真琴、コンサートが始まる時間だビィ」

「そうね、行かないと……行って、引退するって……言わないと」

「真琴……！」

「龍牙……」

未だにアイドルを引退するかを悩んでいた真琴は、走って現れた龍牙を見上げる。

「はあはあ、はあ……！コンサート始まるぞ……」

息を切らしながら龍牙はそう言ってコンサートに連れて行くこうとする。

「うん……」

その頃、控え室前では、テレビ局のレポーターが待機していた。

「もしや開演前にトラブル？控え室に突撃してやろうかしらー！」

テレビ局のレポーターが控え室に突撃しようと考えると同時に、プシユケーが黒く染まり出す。

「ダメダメ、それは流石にルール違反だわ」

そう呟くとレポーターのプシユケーは黒く染まらなくなる。

「突撃しちゃえばいいじゃない。」

あなたの望み、叶えてあげるわ」

突如、レポーターの元に現れたリーヴァが指を鳴らすと同時にプシユケーが真っ黒に染

まり、取り出される。

「暴れろ！お前の心の闇を解き放て！」

闇を加えたプシケからマイクのジコチューが生み出された。

そして、ステージに現れるリーヴァ。

「皆さ〜ん！今日の主役は私！そして……！」

「ジコチューです！」

ドームの上からジコチューが降りて来た。

「みんなー！ジコチューしてるかー!!？」

「イエーイ！」

観客達は何が起こってるのか分からなかった。

「もう、ノリが悪い客ね。開場！」

リーヴァの叫びと同時にジコチューが超音波を放った。

まだ会場の中にいた晴夜達がジコチューの元に行き、構える。

「行くよー！」

「ああー！」

マナ達がコミュニケーションにラビーズをセットし、晴夜と和也はドライバーを装着し、ポトルを取り出して差し込む。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

『ロボットゼリー!』

『Are You Ready?』

「変身!」

「プリキュア!ラブリンク!」

三人の体が光に包まれ、光から現れるとプリキュアへと変わり、晴夜は形成されたアーマーが装着され、ビルドへと変身した。和也もピーカーの中でアーマーが構成されて、グリスに変身した。

『ラビットタンク!イエーイ!』

『ロボットイングリス!ブラア!』

「みなぎる愛!キュアハート!」

「英知の光!キュアダイヤモンド!」

「陽だまりポカポカ!キュアロゼッタ!」

「愛を無くした悲しいマイクさん!このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻して見せる!」

ハートは胸にハートマークを作り、いつもの決め台詞を言う。

「来たわね、プリキュアに仮面ライダー」

「突撃!」

「ここはまこぴーのステージだよー！」

「悪いけど、退場を願うよー！」

先行したダイヤモンドが足元を攻撃し、よろけた所に下からハートとビルドがドームの外へと蹴り飛ばした。

一方その頃、龍牙と真琴もジコチューが現れたことを知る。

「ジコチューだビィー！」

「みんな！」

「急ぐぞー！」

二人が急いでみんなの元に向かう。

「プリキュア突撃レポート！」

ジコチューがマイクをハートに向ける。

「恋人はいますか？」

「は？」

次にダイヤモンドにマイクを向ける。

「テストは何点だったんですか？」

「そんなの今関係無いでしょ！」

ダイヤモンドが答えると、今度はロゼッタにも構える。

「貯金はいくらあるんですか？」

「さあ。数えた事ありませんわ」

そして、ビルドにもマイクを向ける。

「あなたは、何個のフォームがあるんですか？」

「えっ？ えつくと、いくつ…今あつたけ？」

「あなたの趣味は？」

「まこぴー命！ って今関係ねえだろ！」

「ちゃんと答えて下さいい！」

ジコチューが質問にまともに答えなかったビルド達を吹き飛ばした。

「何なのこの質問攻め!!？」

「失礼なジコチューだな！ コラっ！」

「プライバシーの侵害です！」

「でもこのジコチュー、強い！」

「なら、一気に決める！」

ビルドがラビットタンクスパークリングを出す。しかし、ジコチューの指から出した

コードで五人の動きを封じた。

「みんな!」

ステージに着いた真琴が階段を駆け上がりとした時、何かとぶつかった。

「どうした……って、アイちゃん!」

「アイちゃん? どうして……」

ぶつかったのはアイちゃんだった。そして、アイちゃんの手になんか握られていた。

「ラビーズ?」

「なんで? アイちゃんを持つてるん……?」

「ダビィにはめるビィ!」

アイちゃんの手握られていたのはラビーズだった。真琴はラビーズをセットして

円を刻むと、鏡が出て来た。

「鏡?」

『ソード……クローズ……』

「ま、まさか……!」

「つ! 王女様! 目覚められたのですか!?!」

なんと、その鏡にはアン王女が映し出されていた。

『いいえ、まだ。今はアイちゃんの力を借りて話しています。長くは持ちません……』

キュアソード、私のために、そちらの世界でも歌ってくれていましたね。

あなたの歌、あなたの気持ち、届いていましたよ』

「本当ですか……?」

『動く事も、声を上げる事も出来ない私に、希望を失いかけた私に励ましてくれたのはソード、あなたの歌でした……』

あなたの歌を聞くと、胸がポカポカして、元気が出て来たのです

。本当にありがとう』

「王女様……」

『まだ目覚める事は出来ませんが、ジヨナサンがそばにいてくれるので、私は大丈夫です。』

ですからこれからは、自分のために歌って下さい』

「自分の……ために?」

『昔のように、楽しみながら……』

あなたが楽しいと、私も嬉しいわ、だから歌って下さい。キュアソード。

そして、クローズ……あなたもこれから、ソードをサポートしてあげなさい、

あなたもトランプ王国の戦士の一人です』

「王女様……任せてくれ!」

『頼みましたよクローズ』

龍牙に真琴のことを託すと、鏡から王女様の姿が消えてしまった。
「王女様もマナも、同じ事を言ってるビィ。」

王女様もマナもダビィも、みんな真琴の歌が大好きなんだビィ。
楽しく歌う真琴の歌を聞きたんだビィ!」

ダビィが言うのと、彼女の目から涙が出ていた。

「私……歌いたい……!」

「応援するぜ、お前が歌を続けるまで一生な」

「きゅび〜!」

「龍牙……!ありがとう……!」

真琴は改めて、大好きな歌を歌って行く事を決意するのだった。

「行くか?」

「うん!」

真琴が涙を拭って龍牙共に、ビルドとハート達の元へと向かう。

一方、五人はジコチューに押されていた。

「プリキュアも仮面ライダーもこれで終わりね」

「まだ終わって無い！」

「諦めるワケには参りません！」

「俺達の心火はまだ消えてねえぞ！」

「まこぴーの大切なコンサートを、絶対絶対守るんだ！」

「ああ！負けられるか！」

四人が叫ぶと拘束していたコードが切れる。

切ったのはキュアソードだった。そして隣には龍牙もいた。

「ソード！」

「みんな、私のために、ありがとう」

そこに、マイクジコチューがソードにマイクを向ける。

「プリキュアなのに、どうして歌ってるんですかー？」

それでもプリキュアですかー？」

マイクジコチューがソードにそう質問すると…

「私は歌うプリキュアよ！」

「歌なんか歌って何になるの？何の役にも立たないのに」

歌を歌うことなど無意味だと言うリーヴァに、龍牙が反論する。

「わかってねえな！こいつは役に立つ役に立たないの理屈で歌って来たんじゃないんだ

よー!

こいつは歌が好きで、みんなに届けたい、そんな思いで歌ってたんだ! だから今までずっと歌って来れたんだ!

「あたしも好きだよ! まこぴーの歌!」

「ああ! まこぴーは歌は最高だー!」

ハートとビルドも真琴の歌は好きだと言う。

「歌いたいから歌うなんて、随分ジコチューね」

「そうね。でも、こんな私を応援してくれる人がいる。だからその人達のために、自分のために、私は歌う!」

するとソードから力が溢れ出した。

それと同時に、彼らの前に亜久里が現れ、ソードと龍牙に語りかけて来た。

「愛に目覚めたようですね。キュアソード。」

プリキュアの力は愛から生まれます。大好きな事をひた向き続ける事、それも愛なのです」

「愛……」

「迷いが愛の力を妨げていましたが、あなたは迷いを乗り越え、新たな力、更に大きな愛に目覚めた。お見事です」

「プリキュア！五つの誓い！一つ！愛は与えるもの！」

「あなたは、歌で世界に愛を与えていた。これからも世界に響かせて下さい。愛の歌を
！」

……そして、上城龍牙——クローズ、あなたもプリキュアの思いを理解し、支え続けるその真つ直ぐな心は素晴らしいです」

龍牙の真琴を支えるその姿は素晴らしいと亜久里が言う。

「アイちゃん、行きますわよ！」

「きゅび〜！」

「俺もいいか？」

「ええ」

「じゃあー！」

龍牙が叫ぶと、スクラツシユドライバーを装着し、ドラゴンスクラツシユゼリーを取り出し差し込んだ。

『ドラゴンゼリー！』

龍牙の周りに巨大なビーカー出現し、龍牙は高々と叫ぶ。

「変身！」

「プリキュア！ドレスアップ！」

「きゅびらっば〜!」

ビーカーに青い液が貯まり、割れると龍牙はクローズチャージへと変身し、亜久里は炎に包まれ炎から現れると姿が大きく変わって、キュアエースとなった。

『潰れる! 流れる! 溢れ出る! ドラゴンインクローズチャージ! ブラア!』

「今の俺達は、負ける気がしねえ!」

「愛の切り札! キュアエース!」

「美しさは正義の証! ウインク一つで、あなたのハートを射抜いて差し上げますわ!」

エースが手でエースマークを作り、ジコチューに向けて叫ぶ。

「好きなスイーツは何です——かーッ!」

質問の途中でクローズが蹴り飛ばされた。

「しっこいんだよ!」

「ちよつと! ここは私のステージよ! 乱入はお断わり!」

リーヴァはクローズに帽子を投げつける。

「独りよがりなステージは迷惑です。はあああああつ!」

エースが前に出て花びらが舞う風を起こし、帽子を途中で止めて返した。

「あなたの行為に、愛は感じませんわ!」

「はっ!」

クローズがツインブレイカーのビームモードでリーヴァとマイクジコチューに繰り出す。

「ささつと！このステージから！出て行けえ!!」

クローズが叫ぶと、ツインブレイカーにクローズドラゴンを差し込む。

『クローズドラゴン！Ready go!』

音声が響くと、クローズの背後に龍が出現した。

「オラア！」

『レッツブレイク！』

レッツブレイクと響くとクローズがマイクジコチューとリーヴァを吹き飛ばす。

「もう〜ジコチュー！クローズの動きを止めなさい！」

リーヴァがクローズを止めると命令する。

「甘いですわ！」

エースはすでにラブキッスルージュを構えていた。

「彩れ！ラブキッスルージュ！」

ルージュを唇に塗り、相手に向かってキスを投げると、前方にハート形のエネルギー体が生成される。

「ときめきなさい！エースショット！ばきゅ〜ん！」

両手持ちして頭上に掲げたラブキツスルージユを振り下ろし、エースショットを放った。

紫のエースショットを受けたジコチューは動けなくなった。

「お二人とも、今ですわ!」

「ええ(ああ)!!」

『ビートクローザー!!』

クローズはビートクローザーを出し、ロックボトルを差し込み。ソードがラブハートアローを出現し、ラビーズをセットし、さらにクローズはドライバーのレンチレバーを下ろした。

『スペシャルチューン!!』

『ヒツパレー!!ヒツパレー!!ヒツパレー!!』

ビートクローザーによって作られたエネルギーがツイインブレイカーから現れたドラゴンがビートクローザーからのロックエネルギーと合体した。

『メガスラッシュ!!』

『レッツブレイク!!』

『プリキュア!スパークルソード!』

クローズの二つの合わせ技とスパークルソードがマイクジコチューに命中し、ジコ

チューはプシケケーに戻った。

プシケケーが持ち主に戻ると同時に、周りも元に戻った。

「やるじゃないクローズにキュアソード。面白くなつて来たわ」

最後にそう言つて、リーヴァは引き上げて行つた。

戦いが終わると、真琴のコンサートが開かれ、大勢の人達に幸せを与えていた。

その後、控え室にみんなが集まつた。

「やっぱりまこぴーは凄いや！歌でみんなをこんなに笑顔に出来るんだもん！」

「そうね。笑顔はジャネジーを消して行く」

「真琴さんは歌で世界を救っているのかもしれないわね」

「やっぱ、まこぴーの歌は俺達ファンの心を癒してくれるぜ！」

「ああ、今日のライブ最高だーってみんな思つてるはずだよ」

「歌から愛が溢れています。ブラボーですわ！」

「私は歌う事が大好きです！歌っていると楽しくて、嬉しくて、幸せな気持ちになります

！・そんな気持ちをも、みんなにも感じて貰いたい。だから歌います！」

真琴が言うのと、龍牙が笑顔で真琴に言う。

「ずっと応援してるからな！お前のファン第1号は俺だからな！」

「うんー!」

真琴も笑顔で言う。

迷いを吹っ切れた真琴のコンサートは、大成功に終わったのだった。

次回! Re. ドキドキサイエンス!

第28話 登場!!? ジョチューロイン!

第28話 登場!?? ジコチューヒロイン!

突然だが、大貝空港に飛行機ジコチューが現れた。

「いつもニコニコ、疲れちゃうー!」

そう叫び、周りのものを壊して行く飛行機ジコチュー。

「あそこだ!」

そこに既に変身したビルド達七人が現れた。

「立ちっぱなしで足がパンパン!」

ジコチューはそう言って、今度はイスを踏みつぶす。

「何なの、あのジコチュー?」

「キャビンアテンダントのつもりでしょうか?」

「随分勝手なキャビンアテンダントだな」

「ジコチューだから当然だろ」

「とりあえず、止めるぞ!」

「お客様の中に、王女様はいらっしゃいませんか?」

王女様がいらないかと飛行機ジコチューが叫ぶ。

「王女様を探してるんだわ!」

「その通り。王女はどこへ隠したの?」

声が届く方へ振り向くとリーヴァが現れる。

「知ってたって教えない!」

「もし、知ってたとしてもアンタには絶対教えねえよ!」

ハートとビルドが教えないとリーヴァに言い放つ。

「だったらアンタ達に用は無いわ。ジコチュー!」

「アテンション、プリーズ!」

リーヴァの指示で飛行機ジコチューのエンジンから火弾を放つ。

「プリキュア!ロゼッタリフレクション!」

ロゼッタがロゼッタリフレクションを発動し、火弾を防ぐ。

「なら、このベストマッチだ!」

ビルドは、ボトルを差し替えた。

『フェニクス!ロボット!ベストマッチ!』

音声と同時にレバーを回し、前後からアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

ビルドが叫ぶと二つのアーマーが装着された。

『不死身の兵器！フェニクスロボ！イエーイー！』

右腕と左複眼部分がフェニクスのモチーフとなり、左腕にロボットアーム『デイストラクティブアーム』が装着された、フェニクスロボへとフォームチェンジした。

そしてジコチューの放った火弾をビルドの火炎で相殺し、更に連射してダメージを与えた。その隙にドライバーのレバーを回す。

『Ready go！』

『ボルテックファイニッシュ！』

ビルドの身体が炎に包まれ、フェニクスの翼——『エンパイリアルウイング』を開き、飛行機ジコチューに体当たりし、かなりのダメージを与えた。

これに怒ったジコチューが今度は火炎放射を放った。

それに対してロゼッタはロゼッタリフレクションを出して防御した。

「プリキュア！ロゼッタリフレクション！」

しかし、ロゼッタリフレクションが火炎放射に耐え切れずに碎け散り、直撃を受けそうになる、その時だった。

「ときめきなさい！エースショット！ばきゅん！」

エースが現れ、両手持ちして頭上に掲げたラブキッスルージュを振り下ろし、エース

シヨットを放った。

飛行機ジコチューは浄化され、プシケューは持ち主の元に戻り、周りも元に戻った。「フン、覚えてなさい!」

負け惜しみを言ってからシルクハットを投げつけた。

「させるか!」

ビルドがロボットアームで防ぎ、シルクハットを打ち返した。

直撃する寸前で引き上げたので、リーヴァには当たらず、シルクハットも消えた。

七人は人が居ない場所へと移す。

「申し訳ございません!」

私の守りが弱いばかりに、危険な目に遭わせてしまい……!」

ロゼッタは攻撃を防げなかった事に責任を持ち、みんなに謝る。

「そんな事無いって!」

「ロゼッタが悪いわけじゃない」

「責任は私達みんなにあるわ」

「俺も防御に強いベストマッチに変えればよかったと思ってる」

「もう一人の責任じゃねえよ!」

だがそれはロゼッタの責任ではないと、ビルド達と言う。

「ですが……」

ロゼッタはエースの方を見る。

「わたくしから特に言う事はありません。

あなたは自分で気付く子です。頑張って成長なさい」

そう言つてエースは何処かへ行つてしまい、ロゼッタはエースの方をしばらく見ていた。

「あります……」

その後、ありますは四葉邸へと帰宅するが、あまり元気が無い様子だった。

「はあ……」

「あります、さつきからため息ばかりでランス」

「お嬢様、一息お入れ下さい」

「ありがとう、セバスチャン」

セバスチャンが紅茶の入ったカップをありますの前に置く。

「キュアエースの導きで、マナちゃんと真琴さんは自らを高め、龍牙さんも更に力をつけました。私も三人のように自分を高めなければなりません」

「お嬢様は日々努力なさってます」

「でも、まだまだ足りないのですわ。もっと頑張らないと……」

「ありすが眩くと、立ち上がって何処かへ行ってしまった。」

「お嬢様……」

セバスチャンが眩くと、インターホンが鳴り、セバスチャンは映像を見る。

その頃、四葉邸の武道場では、ありすが道着に着替えて座っていた。

「お願いいたします!」

「ありすが礼と同時に、畳が飛んで来た。」

「はあっ!」

「飛んで来た畳を蹴り飛ばすと、六つの腕を持ったロボットが出て来た。」

「拳が雲っておるわ!」

「ロボットの反撃を受けたありすは吹き飛び、背中から壁にぶつかった。」

「こんな事では、皆さんをお守り出来ませんわ!もう一本!」

「久しぶりに見たな、お前のその姿」

「ありすが叫ぶと、入り口の前に和也がいたのに気付く。」

「今日のこと、気にしてんのか?」

「はい、今日は皆さんを守れなかった。ですから……」

「俺も付き合っつてやるよ」

「えっ？」

和也がありすの特訓に付き合っつてやると言った。

「俺も、もつと自分のレベル上げねえと、晴夜と龍牙に置いていかれるからな」

「和也さん……では、お願いします」

ありすは和也と共に再び特訓を始める。

「お嬢様……」

セバスチャンは扉の影から頑張るありすを見て号泣していた。

そしてセバスチャンは一人、四葉邸の研究室にいた。

「遂にこれをする時が来たようです」

トランクを開けると、そこにあるのはビルドドライバーだった。

「科学の推移を結集し、作り上げた私が用意した専用ビルドドライバー！」

今こそ、お嬢様の右腕となる時！」

セバスチャンが白いラビットボトルとタンクボトルを取り出した。

元々は人工コミュニケーションを考えていたが、ビルドとクローズとグリスの力を見て、こつちを選んだ。ちなみにボトルは晴夜が作ってくれた。

セバスチャンに頼まれた晴夜は、ドライバーのデータをセバスチャンに渡し、セバスチャンは一人で研究していた。

セバスチャンが作っていたビルドドライバーは、晴夜達が使っている様な変身するのにハザードレベル3以上を必要とするドライバーではなく、セバスチャンの様にハザードレベルが足りない、もしくははなくても変身出来るドライバーである。

そして、つい最近完成したのだ。

謝礼をいくらか出すつもりだったが、晴夜はあまりいらなと言った。その代わりにデータはコピーしないとと言う約束とマシンビルダーを乗るのを大貝町の中では問題ないとかわした。

振り返ると、セバスチャンは白いボトル2本を入れたビルドドライバーを装着する。

「変身ー！」

セバスチャンに形成されたアーマーが装着され、白いアーマーで鎧のようなモノを纏い、マントを付けた姿となった。

「お嬢様のためならば、このセバスチャン、鬼にも悪魔にもなる覚悟！」

いざ、実践テスト開始！」

セバスチャンが凄いスピードで走り出した。

「加速は上昇、各所の違和感も無い！これならばお嬢様の役に立てる！」
セバスチャンは必殺技を放つ為にドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

「いぎ！セバスチャンアタック！」

セバスチャンアタックは地面に小型のクレーターを作った。

「はあ……はあ……！」

しかし、いくら四葉家の執事とはいえ流石に歳だったので、息を切らしていたのだ
た。

その頃、町の方ではイーラとマーモが王女様を探していた。

「いねーなー、王女」

「真剣に探してから言いなさいよ」

「お前にだけは言われたくない！大体何だその帽子、マダムか！」

「日焼けはお肌の大敵なのよ。あそうだ、マイナスイオン浴びに行こう！」

マーモはマイナスイオンを浴びにどこかへ向かった。

「あ、コラコラ！リフレッシュ休暇か！」

イーラはツツコムが、既にマーモはリフレッシュしに行ってしまった。

一方、滝ではセバスチャンが滝修行をやっていた。

セバスは「浸透目客、爽快なり」と滝にうたれながら呟く。

「マイナスイオン、カモーン!」

そこにマイナスイオンを浴びに来たマーモが現れ、滑るのと同時に持っていたトランクを落としてしまう。

そのトランクはセバスチャンが持っていたのと同じで、セバスチャンのトランクの近くに落ちてしまった。

「むっ、こんな時間か!急がねば!」

セバスチャンは時間を確認し、自分のとは気付かないままマーモのトランクを持って行ってしまった。

「もう、どこ行っちゃったのよ?」

そして、セバスチャンは再び変身する為にトランクを開けた。

「四葉家筆頭執事の名に賭けて、お嬢様をお支えする!……んん!?」

トランクを開けると、中に入っていたのは専用ビルドドライバーでは無く、化粧道具が入っていた。

「何ぬう!?？」

滝の方では、マーモが自分が落としたトランクを拾う。

「いつけない、日焼け止め日焼け止め……何これ？」

中に入っていたのは専用ビルドドライバーだった。

「どこかで見た事あるような……」

『鋼のムーンサルトル・ラビットタンク・イエーイー!』

マーモが思いだそうとすると、ビルドの使うビルドドライバーだと思い出す。

「まさかと思うけど……変身?」

腰に付けたビルドドライバーにボトルを2本セットし、変身と呟いた。

すると姿を変え、何故かライダーに変身してしまった。

「ええっ!?？」

その頃、ドライバーが消えたことに驚いているいるセバスチャンが美顔ローラーを持つ。

「一体これは……?」

「こうするでランス〜」

セバスの元に現れたランスが美顔ローラーの使い方を教える。

「ああ、なるほど……って……この際使い方はいいのです。」

それより何故専用ドライバーと人工ボトルがこのような物に変化してしまったのか

……」

「ベルトとボトル」

「あっ!」

何かに気付いたセバスチャンは滝の方へ向かった。

「?」

「あつた!」

すぐさま滝へと向かい、トランクを見つめる。だが開けると中は空だった。

「ドライバーとボトルが無い! 無いーっ!」

「セバスチャン?」

後ろにいたありますが、セバスチャンに声をかける。

「お嬢様! 和也様はどうしたんですか?」

「先程帰りましたが、所で何をしてるんですか?」

「ドライバーとボトルがどうか言ってたでランス〜」

「ドライバーとボトル？」

「あ、いや、その……」

セバスチャンは誤魔化そうとすると、ランスが着信が鳴った。

「あつ、通信でランス」

通信が入り、ランスがコミュニケーションの姿になる。

『ありす、四葉デパートにジコチューが現れたよ！』

「すぐ向かいますわ！」

マナから四葉デパートにジコチューが現れたと連絡が入った。

「今度こそしっかり皆様をお守りしなければ！」

ありすがそう呟きながら、四葉デパートへと向かう。

そして、四葉デパートの地下街で現れたつまようじジコチューは試食品をバクバク食べてた。

「食い尽くせ！」

「皆さん！避難して下さい！」

セバスチャンの避難誘導に従い、その場にいた店員と客が避難する。

既に変身完了していた六人がジコチューに応戦していた。

「試食品を食べまくってる……」

「食いしん坊みたいだな……」

「試食品で腹いっぱいになれば、金払わずに済む!」

なんとまあ、セコイ考えのジコチューである。

「何て器の小さいジコチューなの!?」

「ガキみたいに、小さな奴だな!」

「小さい言うな!」

ジコチューがカップを投げつけるが、特に何も起こらなかった。

「攻撃まで小さいわ」

「器の小さいジコチューって、こんなにも弱いんだな」

「言われてんぞ、ジコチュー」

「大きくなる!」

グーラにそう言われるとジコチューが叫びと同時に巨大化した。

「成長早っ!」

「なら……」

ビルドがボトルを差し替えようとすると……

「おーっほっほっほっ！」

そこに高笑いがか聞こえ、姿を変えたマーモが階段を降りながら現れる。

「どなたですの？」

「問われたからには名乗らないワケには行かないわね。

我が名は……えつと……」

『みなぎる愛！キュアハート！』

マーモはハートの変身後の台詞を思い浮かべる。

「そうそう、あんな感じで。みなぎる美しさ！キューティマダムよ！」

自らをキューティマダムと名乗るマーモ。

「ティーマダム？」

「キューティマダムよ！」

「キューティって感じには見えねぞ……！」

「失礼ねえ！」

ハートとクローズの発言に、マーモはツツコミを入れる。

（あのドライバー、確かセバスチャンさんが作った……）

「マーモが今使っているビルドドライバーを見て、セバスチャンが作った奴だと思っ
るド。」

「どちらの奥様でしょう?」

「いやいや、マダムじゃ無くてマーモだし」

「お前、何かおかしなモン拾って食ったのか?」

「どうやら、全員マーモだと気付いているようだ。」

（なんとと言う事だ……!あれは間違いなく私が作ったドライバーとボトルによる変身
……!）

「よりによって敵の手に渡っていたとは……!」

「敵にドライバーとボトルが渡っているのを知り、凄いい勢いでセバスチャンから冷や汗
が流れ出した。」

「どうする?」

「どうするって言ってもな……」

「なんか、ツツコミ所が多過ぎて、どこから突っ込んでいいか分からない……」

「どういうつもりかしら……?」

（これは一大事……!）

（ふふつ、悪くないわ。生まれ変わったあたしに釘付けね）

「うるさいジコー！」

「髪が乱れたらどうするの！お下がりに！」

マーモの高笑いにイラつと来たジコチューが襲い掛かるが、持っていた扇子から風を起こし、ジコチューを吹き飛ばした。

「みんな！行くよ！」

『Ready go!』

『ボルテック フィニッシュ！』

ビルドが放物線でジコチューを捕獲し、ボルテックフィニッシュを放った。

「「プリキュア！ラブリーフォースアロー！」」

ハート達はラブハートアローの弓を大きく展開させ、台尻部分の引き金を引き絞ると同時に、前にハート形のエネルギー体を生成される。

そして相手にウインクして、ラブリーフォースアローを放った。

ボルテックフィニッシュとラブリーフォースアローが命中したジコチューは浄化された。

「いい気味だわ。おーっほっほっ！」

「オイ！お前味方じゃないのかよ！」

マーモとグーラはそう言いながら引き上げていった。

「はて……」

「どういう事?」

「何考えてるのか、全然わかんねえ……?」

「マーモは心を入れ替えたのかな?」

「それは無いんじゃないか?」

ビルド達はマーモの意図が全然読めないでいた。

(何としても、ドライバーとボトルを取り返さなくては……!)

しかし、私一人では難しい……ここは晴夜様に協力を仰がねば……!)

「セバスチャンさん、ちよつといいですか?」

変身解除した晴夜がセバスチャンに尋ねる。

「せ、晴夜様……」

「分かってます。場所を変えて話しましょう」

そして、晴夜は四葉邸の研究室へと場所を変えた。

「じゃあ、やっぱりあれはビルドドライバーとボトルで変身したんですね」

「はい。不覚にも敵の手に渡ってしまいました……」

セバスチャンにドライバーの事情を聞く晴夜。

「でも、なんでマーモの手に？」

「おそらく、私が滝で修行してた間に……」

「滝？」

セバスチャンが修行していた滝へと晴夜を案内した。

「この辺に滝ってあったんですね……」

滝があつたことに驚く晴夜。

「私は何とかしてマーモを探します。くれぐれも他の皆さんには内緒をお願いします」

「分かりました。ですが無茶しないで下さいよ」

それから数日経ち、ソリティアへと全員が集まっていた。

「ご覧なさい。この記事を」

亜久里が晴夜達にある記事を見せる。

「黒い貴婦人、キューティマダム現る……!?？」

「キューティマダムって、この前のマーモだよな……」

「あちこちに現れては、人助けをしているようだ」

記事の内容を六人に話す亜久里。

「マーモったら、どうゆうつもり？」

「心を入れ替えたとは思えないけど……」

「なんか、企んでるんじゃないかねえか?」

六花と真琴がそんな話をしていると、龍牙はマーモが何か企んでいるのではないかと睨む。

「でも、人助けしてるんだし、あの人の中で何かが変わったんじゃない?」

「見た目も大分変わったシャル」

「ちよつとかわいくなつたでランス」

「女性ファンが急増中って噂ケル」

「ダビイは趣味じゃないビイ」

マナとシャルルはそう言っていると、亜久里が口を開く。

「いずれにしても、マーモが何を考え、どういった力で変身を遂げているのか調べる必要がありそうです。手分けしてマーモを探しましょう」

「「うん」」

「おお!」

マナ達が頷く一方、ありすだけが悩んでいる様子だった。それに気づいた和也があまりに尋ねる。

「ありす、どうした?」

「いえ、何でもありませんわ」
「ありすが何でもないと言う。」

一方、晴夜もドライバーのことを考えていた。
(不味いな、早く取り返さないと)

その頃、セバスチャンはマーモを一人で探していた。

「どこだ?どこにいる、キューティマダム?いや、マーモー」

セバスチャンが車の中でタブレット端末を操作してマーモを探す。

「む?そこかっ!」

建物の中にマーモの反応を捕え、急いで向かった。

その頃、マーモが店から出てくると…

「探しましたぞ」

「誰?って言うか何?」

「鋼鉄の執事と呼んでいただけこう」

鎧を纏ったセバスチャンがマーモの前に立ちはだかる。

「鋼鉄の……何?」

「いいから私の専用ドライバーとボトルを返して下さい!」

「ふーん、あれ、あなたのだったんだ。てつきりビルドのかと思ってたけど」

「さあ、お返しを！」

「ヤダって言ったら？」

「力づくで取り返すまで」

「望む所よ！」

「であれば御免！」

鎧を着たセバスチャンがマーモに立ち向かうが、指から放った光線を受けて吹き飛ばされてしまう。

「何のこれしき……！」

立ち上がり、もう一度立ち向かうが、また光線を受けてしまう。

「やらせはせん！やらせはせんぞ！」

盾で防ぐものの、力の差は歴然で、返り討ちにあってしまった。

「セバスチャンさん、大丈夫か！」

偶然近くに来ていた和也が倒れたセバスチャンを揺する。

「おーほっほっ！御免あそばせ！」

「セバスチャン！」

マーモが引き上げたのと同時にありすも駆けつけた。

そして、三人は四葉邸へと戻り、セバスチャンを手当てする。

「申し訳ございません、お嬢様、それに和也様」

「無茶はしないでくださいよ……」

和也がセバスチャンの手当てを行いながら、ドライバーの事情を話した。

「謝らなければならぬのは私の方ですわ」

「えっ……?」

「あります……」

「セバスチャンは、非力な私を助けたい一心でドライバーとボトルを開発して下さいましたのでしょ? 情けない主でごめんなさい」

ありますがセバスチャンに頭を下げて自分が不甲斐ない事を謝る。

「とんでもございません! お嬢様はわたくしにとつて最高のご主人様でございます!」

セバスチャンがテーブルを叩くと同時に紅茶が跳ね、手にかかってしまう。

「あちやちやちゃ!」

「……思えば、セバスチャンはいつも私を守ってくれていましたね。」

小石につまづけば下敷きになり、お化け屋敷が怖いと泣けばお化け達を追い払い、寂しくて眠れない夜は笑わせてくれて……

今度は、私があなたを守る番ですわ」

そして、ありすの話を聞いていた和也も立ち上がった。

「俺も協力するぜ、こうゆう時こそ協力して行こうぜ！」

「和也さん……はい！」

そして翌日、遊園地のヒーローショーにマーモが割り込んで来た。

「我が名はキューティマダム！強く美しい貴婦人よ！（悪くないわ。もう一暴れしちゃおう）」

マーモは自分がヒーローだと思い、調子に乗っている。

「そこのお前！ここがお前の墓場となる！さらばヒーロージャー！」

マーモがヒーロージャーも吹き飛ばした。

これを見ていた子供達は泣き出した。

「我こそが正義！我こそが最強よ！」

自分が正義だと主張するマーモ。

しかし、遊園地にたどり着いたありすと和也は…

「いい加減になさい！子供達が泣いてるじゃありませんか！」

「一つだけ、教えてやる！自分を正義だと決めつける奴は、それは、正義じゃない！」

和也とありすがそう叫ぶがマーモは…

「今日のヒーローはこの私。私より目立つ奴は許さないわ！この力は全て、私の欲望を満たすためにあるのよ！」

「ヒーローが欲望なんて言うんじゃあ…本当に終わりだな。コラッ！」

「もし、そうであれば、私は鬼にでも悪魔にでもなりますわ！」

子供達、そして愛する執事のために！」

「お嬢様……」

「セバスチャンさんは子供達を！」

「ハッ！さあ、今の内に逃げますぞ！」

セバスチャンが子供達を連れて避難したのを確認すると、ありすはコミュニケーションにラビーズをセツトした。

「プリキュア！ラブリンク！」

ありすの身体が光に包まれ、光から現れるとありすはキュアロゼッタへと変身した。

「陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

ロゼッタが名乗ると、和也はスクラツシユドライバーを装着した。

『ロボットゼリー！』

スクラツシユドライバーにロボットスクラツシユゼリーを差し込み、マーマを指差しながら叫ぶ。

「変身!」

和也が叫ぶと同時にスクラツシユドライバーのレンチを下ろし、周囲に巨大なビーカーが出現した。黄色い液体が和也を包み、ビーカーが割れると彼の身体には黄色いスーツと黒のアーマーが装着される。

『潰れる!流れる!溢れ出る!ロボットイングリス!ブラア!』

「心火を燃やしてぶっ潰す!」

グリスへと変身し、ロゼッタと共にマーモに攻撃する。

「今日はやけに頑張るじゃないの」

ロゼッタの蹴りがマーモを吹き飛ばす。

そこに晴夜達もヒーローショーのステージへ到着した。

「みんな、行くよ!」

晴夜達二人はドライバーを装着し、マナ達はコミュニケーションにラビーズをセットした。

「変身!」

「プリキュア!ラブリンク!」

晴夜と龍牙の体にアーマーが装着され、マナ達三人は光に包まれプリキュアへと姿を変える。

『海賊レッシャー!イエーイ!』

『ドラゴンインクローズチャージ！ブラア！』

「みなぎる愛！キュアハート！」

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

「勇気の刃！キュアソード！」

五人がマーマモに向かって行こうとすると、マーマモは扇子で暴風を放つ。

「プリキュア！スパークルソード！」

ソードがスパークルソードを放ち、暴風を打ち消した。

「ドライバーとボトルを返して下さい！」

「あれは私の物よ。もう名前書いちゃったのよ！」

「だったら、力づくでも取り返す！」

グリスがマーマモに力の入った拳をぶつける。

「これまで私を守り続けてくれた、セバスチャンのために！」

ロゼッタの心に共鳴するかのように、ロゼッタから力が湧きあがって来た。

「愛に気付いたようですね。キュアロゼッタ」

「キュアエース……」

「あなたは守り、守られている」

するとそこへエースが現れ、ロゼッタに話しかける。

「プリキュア! 五つの誓い!」

「一つ! 愛する事は守り合う事! いかなる時も守り合い、愛を貫きなさい!」

「はい!」

「そして、仮面ライダーグリスあなたは自分の心の炎を燃やしロゼッタの思いに応えた。これからもあなた心を貫きなさい!」

「上から目線だな……だが、お前の言う通りだ」

グリスは自分の胸に拳を当てる。

「俺も心火を燃やして行くぜ!」

「ではアイちゃん、行きますわよ!」

「きゅびゅ! アイ!」

「プリキュア! ドレスアップ!」

「きゅびゅらっば!」

アイちゃんから出た光から箱が現れ、その後七つの炎のシルエットに包まれ、炎から現れるとキュアエースとなる。

「愛の切り札! キュアエース!」

「美しさは正義の証! ウィンク一つで、あなたのハートを射抜いて差し上げますわ!」

「彩れ! ラブキッスルージュ!」

ルージュを唇に塗り、相手に向かってキスを投げると、前方にハート形のエネルギー体が生成される。

「ときめきなさい！ エースショット！ ばきゅん！」

両手持ちして頭上に掲げたラブキッスルージュを振り下ろし、エースショットを放つた。

黄色のエースショットが当たったマーモは動きを封じられた。

「くっ、何よこれ!？」

マーモが動けなくなった隙にグリスはレンチを下ろす。

『スクラップフィニッシュ！』

それと同時にツインブレイカーにボトルを2本差し込む。

『シングル！ ツイン！ ツインブレイク！』

大量のヴァリアブルゼリーを出して足場を作り、その上を滑走しながらマーモにツインブレイカーのアタックモードで怒涛の攻撃を加えた後高く打ち上げ、スクラップフィニッシュで地面に叩き落とす。

「喰らいやがれ！ コラッ！」

グリスの合わせ技が決まり、マーモはそれを耐えるが流星にかなりのダメージを与えた。

「キュアロゼッタ!今ですわ!」

「やらせるもんですか!」

マーモは悪あがきとしてロゼッタ達に光線を放った。

「プリキュア!ロゼッタリフレクション!」

発動したロゼッタリフレクションが光線を吸収し、威力を増して還された。

「跳ね返した!」

「凄い!」

「パワーアップしてる!」

跳ね返した光線がマーモに命中し、ドライバーを破壊した。

「何すんのよ!あのキャラ気に入ってたのに!」

変身解除したマーモはそのまま撤退した。

「お見事ですわ、キュアロゼッタ。あなたは温かく、そして強い子ね。

そして、仮面ライダーグリス、あなたも」

その後、四葉邸へとありすは戻り、壊れた専用ビルドドライバーをセバスチャンに渡す。

「ごめんなさい、セバスチャン。ドライバーを壊してしまつて」

「とんでもありません。あんな物、お嬢様には必要無かったです」

「やっぱりセバスチャンが入れてくれるお茶が一番ですわ。末永くよろしくお願いいたしますわね」

「(ト)ち(ラ)そ」

セバスチャンの淹れてくれた紅茶を飲み、ありすは静かに微笑む。

セバスチャンを全力で守りたいという愛でありすは、パワーアップを遂げたのだ。た。

一方、晴夜家の地下室では、専用ドライバーで使われた白いラビットボトルとタンクボトルがあった。

一応セバスチャンに残っていたと言ったら、「使つて下され」と言つて譲つてくれたのだ。

「白いラビットボトルとタンクボトルか」

白いラビットボトルとタンクボトル……後に『ローラビットフルボトル』と『ロータックフルボトル』と名付けられる二つのボトル……

——果たしてこのボトルは一体何をもたらすのか、今の晴夜には予想がつかない。

次回! Re・ドキドキ&サイエンス!
第29話 ジャツジせよ! 六花の気持ち

第29話 ジヤツジせよ！六花の気持ち

学校のホームルームでは夢についての話をしていて、マナは立ち上がる。

「あたしの夢は総理大臣です！そして、みんなの笑顔を守ります！」
いきなりあたしの夢は総理大臣だと言いだす。

マナの話聞いて、大きな夢と感心する先生はその後、他のみんなはどうだと問う。

「夢かく、よく分からないな。でも菱川さんはもう決まってるいいよね」

三村が六花に言う。確かに六花の親は医者であり、それは彼女の夢でもある。

「あれ？…でも私がお医者さんになりたいのって、ママがそうだから…なの？」
六花は自分の夢について深く考え込む。

その後、マナ達は甘味処へと場所を変え、おやつを食べながら今日のホームルームでの夢についてを話していた。

「総理大臣？マナちゃんらしい夢ですわ」

「いやー、それほどでもー」

「また随分と大きい夢だな」

「そういえば、晴夜は自分の夢はなんだよ?」

「え?なんだよ、いきなり」

龍牙は晴夜の夢は何と聞く。確かに晴夜の夢は誰も知らない。

でも、予想はつく。おそらく晴夜の夢は…

「やっぱり、科学者かな」

やはり、晴夜の夢はみんなが思った通りの答えだった。

「でも、もつと他のことでもいいかなって思う。」

科学者以外でも、科学を伝えられる事はあると思うし、今は一番叶えたい夢がある」

まさか、晴夜は科学者以外の道も考えているようだ。

「晴夜君ならどんな夢でも叶えられて思うよ!」

「では、今はどんな夢を持っているのですか?」

「もちろん、トランプ王国を取り戻し、愛と平和だった世界を作る!それが今の俺の夢だ」

晴夜の発言にみんなが笑顔で頷く。

彼の言う通り、今の全員の夢はトランプ王国を取り戻すことである。

「六花はやっぱり医者か?」

「えっ?うん……」

「あれ？違ったっけ？」

「そうなんだけど……本当にそうなのかなって」

「どういう事です？」

「うん、自分でもずつとお医者さんになるって思ってたんだけど……」

六花は自分の夢は親の影響や、ただの憧れから始まったものだと考え込んでいた。

「それはつまり、本当の気持ちでは無かったと言う事ですね？」

声がした方を振り向くと、スイーツを食べていた亜久里がそこにいた。

「亜久里ちゃん？どうしてここに？」

「わたくしは以前から、このモチモチ白玉と寒天、黒糖のハーモニーに惹かれてここへ通い詰めていたのです」

通い詰めと言ひ、亜久里はスイーツを口に入れる。

「ねえ、本当の気持ちじゃないってどう言う事？」

亜久里が言った言葉の意味がわからなかった六花は、彼女にその理由を尋ねる。

「その答えは、自分で探すものじゃなくて？」

どうもあなたは、心が揺らいでいるようね。ならば丁度いい機会です。自分の本当の気持ちについて、とことん悩んでみてはいかがですか？」

そう言ひ、亜久里は甘味処を後にした。

「本当の、気持ち……」

六花は亜久里の言う、自分の本当の気持ちとは何か悩む。

その後、晴夜とマナ、龍牙、六花は自分の家に帰り、亜久里の事を話し合っていた。

「キュアエースって不思議な存在だね」

「未だに何を考えてるか分からないけど」

「それに、いつプリキュアになったのかも教えてくれないしな」

「いずれ、話してくれるんじゃないか？」

亜久里は不思議な子だと四人が話し合う。

「でも、キュアエースのおかげであたし達のパワーが高まつてるのは確かなんだよね」

「まあね」

「それよりもさっきの事、大丈夫？」

「えっ? 平気平気。それより、今日は3カ月ぶりにパパが帰って来るんだ。」

その上ママも早番だし」

「それじゃ、今夜は久しぶりに三人で晩ご飯だね」

「うん! それじゃ、また!」

六花はラケルと家に帰って行った。

た。
ジコチューアジトのボウリング場では、イーラがリーヴァとグーラにバカにされていた。

「おわっ！何しやがる！」

「何だ、ノラ猫かと思っちゃった」

リーヴァに蹴り飛ばされるイーラ。

「ふざけんな！」

「勝手に俺達のアジトに入るからだ」

グーラがそう言っつてイーラの頭を掴む。

「ここは僕達のアジトだぞ！」

イーラが反発するが……

「でも今は私達に取られちゃったでしょ？」

リーヴァの発言にイーラは何も返す言葉がなかった。

「あーもう、うるせえガキだな！」

イーラをレーンに投げ飛ばし、ストライクが決まった。

「ストライク」

結局、アジトに入られなくなったイーラは人間界へと逃げた。

「クソー!アイツらー!」

イーラはリーヴァとグーラに対して怒りを露わにしていたが、彼の頭上では雷が鳴り響いていた。

「うるせーんだよ!雷!」

叫び終わると同時に雷がイーラに当たり、海に落ちてしまった。

一方、家族の帰りを待つ六花が居る菱川家では、一本の電話が来ており、彼女はその電話に出た。

「もしもし?あつ、ママ?」

電話の相手は六花の母・亮子からだった。

「どうしたの?うん……えっ?」

そう、分かった。いいのよ。患者さんのためでしょ?そうしてあげて」

早番のはずが急な用が出来てしまい、帰れなくなったらしい。

「えっ?パパも?ううん、いつもの事じゃない」

…どうやら、六花の父も帰れないようだ。

「うん、大丈夫だから。うん、じゃあね」

六花はそう言つて母からの電話を切る。

「お母さん、帰つて来ないケル?」

「うん。パパもね。飛行機が欠航したつて」

今日は三人揃つて晩御飯を食べる筈が、それぞれの都合で六花の両親は帰れなくなつてしまった。

「それは……残念ケル」

「いつもの事よ。何でラケルがそんな顔してんのよ。」

……あ、そうだ!」

寂しげな表情になつたラケルの耳を撫でながら話す。

「よしラケル! 明日は私とデートしよう!」

翌日、六花とラケルは自転車に乗りながら海へと出かけた。

ラケルは自転車のカゴの中に入つていた。

「何で海ケル?」

「えっ? うん、別に。何となく海もいいかなつて」

そう言い、六花はラケルと一緒に砂浜を歩き続ける。

「——風をいたみ、岩打つ波も己のみ。砕けてものを思うころかな」

「百人一首ケル？」

六花の言葉が百人一首の一つだと気付くラケル。

「うん。岩に打ち付ける波を見ながら、思い悩む少女の唄よ」

「ふーん……六花も、思い悩んでるケル？」

「やっぱり、ママに憧れてただけだったのかな」

自分の夢は親の憧れだと六花は語る。

「思えばプリキュアになったのも、生徒会に入ったのも、マナと一緒にならって思ったからだし」

そして、自分はいつも誰かに憧れているだけなのかと言い出す。

「それじゃあ、私自身の気持ちは一体どこにあるんだろう。」

私は……どうしたいのかな？」

「それは……きつと六花にしか分からないケル」

「そうね……」

しばらく砂浜を歩き続けると近くに岩が見え、ラケルはそこから何かを発見した。

「つ！六花！誰かが倒れてるケル！」

「えっ？大変！」

岩の下には、誰かが気を失ったまま倒れていた。

「大丈夫ですか？！」

「コイツは……！イーラケル！」

倒れていたのは、なんと敵であるイーラだった。

「な、何でこんな所に？！しかも酷いケガ……！」

「近づいちゃダメケル！危ないケル！」

「で、でも、このま放つとくワケには……！どうしよう……？どうしたら……」

ええーい！悩んでたつてしようがないじゃない！」

六花は深く悩んだが、気を失ったイーラを日影に運び、介抱する。

「気が付いたケル！六花！逃げるケル！」

「で、でも……」

イーラが目を覚まし、ラケルは六花へすぐにイーラから離れようと言う。

「あなたが……助けてくれたんですか……？ありがとうございます。」

それにしても、僕は何を……

いや、そもそも僕は……誰だ……？」

「えっ!?」

「これって……」

「まさか……」

「記憶喪失……!?」

なんと、イーラは昨日の夜に打たれた落雷のショックで、記憶喪失となってしまうていたのだった。

「ここは一体……痛っ! いった……!」

「ああ、動いちゃダメ! ケガしてるんだから」

「ありがとう。優しいんですね」

イーラに優しいと言われた六花は思わず頬を赤くして照れた。

その後、六花は仕方なくイーラを自分の家へと連れていた。

「こんな事していいケルか……?」

ラケルはこんな事をしていいのかと不安がる。そんな時、イーラが六花の元に歩いて来た。

「あの、何か手伝いましょうか?」

「ケガ人は気を遣わなくていいのよ」

オムライスを作る六花が気を遣わなくてもいいと答えると、お皿に作ったオムライスを置く。

「マナのパパみたいには行かないか——あつ！」

「危ない！」

足を引つ掛けて転んだ六花をイーラは身を挺して救い、オムライスも無事だった。

「ごめん！大丈夫!？」

「ええ、なんとか」

「そつちじゃなくてあなたが！」

「僕は、何とか」

「そつ。あなたが無事なら、それでいいわ」

イーラが無事な事に安心した六花。

「——天使のような人だ……」

「ええ!？」

「……………」

「いつまでくつついてるケル——！」

ラケルが叫ぶと六花の髪がイーラの鼻に当たる。

「えつきしー!」

六花の髪が鼻に当たったイーラはくしゃみを出した。

「ゴメン……」

「いえ……」

それから三人はオムライスを食べる為に机に集まった。

「「「ただきまーす」」」

三人がオムライスに手を伸ばす。

「つつ……!」

「大丈夫?」

しかし、イーラは腕の痛みで手からスプーンを落としてしまう。

「ケガしてるんだから、気をつけないとダメケルよ!」

「ありがとう。君も優しいんだね」

イーラが優しいねと言うと、ラケルが照れる。

「そのケガじゃ食べづらいわね。ラケル、スプーン貸して」

「はいケル」

ラケルが六花にスプーンを渡す。

「ありがと。はい、こっち向いて」

「い、いや、一人で出来ますから……」

「出来なかつたでしょ。ほら、遠慮しないで」

「いや、そんな、悪いですって……」

六花が遠慮するイーラにオムライスを食べさせようとする。

「全く、いくらケガしてるからって甘やかし過ぎケル！」

甘やかしている六花を見て、ヤキモキしながらラケルが二人から離れると……

「ラケル」

「シャルル！ランス！何でここにいるケル！」

ラケルの元にシャルルとランスが現れた。

「六花が家族という間、ラケルが暇してると思つて——」

「遊びに来たでランス」

ラケルが驚いていると、二匹はここに來た理由を言う。

「そ、そうケル？」

「何慌ててるシャル？」

「慌てて無いケル！」

「何かあつたでランス？」

「何にも無いケル!」

ラケルがシャルルとランスに何もないと誤魔化すが、

「怪しいシャル!」

「怪しいでランス」

シャルルとランスが下に降りると、そこでイーラの姿を見た二匹は驚きの声を上げた。

それから六花は、イーラを連れて晴夜達と外で合流し、事情をみんなに話す。

「記憶喪失?」

「うん、それにケガもしてたから、放つとけなくて」

「六花ちゃんらしいですわ」

「でもよ、いつ襲って来るか分からないぞ」

「ええ、危険だわ」

「分かってるわよ……」

晴夜達にこのまま介護するのは危険だと言われると、六花は分かっていると呟く。しかし……

「甘いですわ」

『キュアエース!』

後ろからキュアエースー亜久里が現れた。

「もし、その者を放っておいて、何か起きたなら、あなたにその責任が取れて?」

——亜久里の言葉は決して間違っていない。イーラはジコチュー、六花達の敵である。

「手傷を負っているとしても、敵は敵。悪は悪。アイちゃん」

「きゅび!」

「プリキュア! ドレスアップ!」

「きゅびらっば〜!」

アイちゃんから出た光から箱が現れる。その後、七つの炎のシルエットに包まれて、炎から現れるとキュアエースとなる。

「愛の切り札! キュアエース!」

「美しさは正義の証! ウィンク一つで、あなたのハートを射抜いて差し上げますわ!」

手でエースのマークを作り、エースは名乗りを上げる。

「変身した……!」

イーラは亜久里が変身した事に驚く。

キュアエースはラブキッスルージュをイーラに向ける。

「何するつもり!?」

「六花さん……」

だが、イーラの前に六花が出る。

「回復し、記憶が戻れば、その者は再び襲い掛かるでしょう。

ならば、今ここで！」

「止めて！」

今ここでイーラを倒そうとするエースを六花が止めようとする。

同時に天気が悪くなりだし、雨も降り出した。

「おどきなさい。どきなさい！」

「嫌よ！」

どきなさいと言われても六花は一步も引かない。

「その者の今までの行い、忘れたワケではないでしょう?」

「もちろん覚えてるわ。」

でも……どんな人であつても、ケガをして苦しんでいるなら、私は助けてあげたい!

でなきや、きつと後悔する!

私は……後悔したくない!自分の思いを信じるわ!」

六花は今の自分の思いをエースにぶつける。

「あなたもですか？」

「えっ？ラケル？」

ラケルもイーラを庇うようにして前に出てきた。

「僕だって、本当はエースが正しいと思うケル！」

でも……！僕は六花を信じるケル！」

「ラケル……」

「納得は出来ねえけど……」

「みんな……！」

ラケルが自身の覚悟と想いを話すと、晴夜やmana達、みんなもイーラの前に出る。

「私も、ラケルと同じだわ」

「うん」

「もしかた敵となるんなら、俺達が戦う！」

晴夜がドリルクラツシャを構えて、エースに言う。

「見つけたぞプリキュア！仮面ライダー！」

突然、橋の上にグーラが現れる。

「キュアダイヤモンド、その思い、見極めさせてもらおうわ」

花びらに包まれたエースはその場から姿を消した。

グーラが口から放った光線をかわすが、イーラは六花が庇った際に頭を打ってしまった。
う。

「大丈夫!?」

「あ、はい……」

六花はイーラの無事を確認すると、立ち上がり、イーラに離れるように言う。

「危ないから下がって。みんな!」

晴夜達三人はドライバーを腰に装着し、ボトルとスクラツシュゼリーを取り出し、差し込む。六花達四人はコミュニケーションにラビーズをセットし、高々と叫ぶ。

『海賊! 電車! ベストマッチ!』

『ドラゴンゼリー!』

『ロボットゼリー!』

「変身!」

「プリキュア! ラブリック!」

晴夜達三人はそれぞれのアーマーとスーツを纏い、仮面ライダーへとなり。マナ達四人は光に包まれ、光から現れるとプリキュアへと姿が変わった。

『海賊レッシャー! イエーイ!』

『ドラゴンインクローズチャージ! プラア!』

『ロボットイングリス！ブラア！』

「みなぎる愛！キュアハート！」

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

「陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

「勇気の刃！キュアソード！」

「二」響け！愛の鼓動！ドキドキプリキュア！「二」

「六花さんも……変身した……！」

「凄……青くて、フワフワして、キラキラして……あつ！な、何だ？」

ダイヤモンドの姿を見て、イーラに何かが頭の中に浮かび、頭を抑える。

「愛を無くした悲しいジコチューさん！このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻して見せる！」

ハートがハートマークを作り、グーラに名乗りを上げる。

「プリ……キュア？」

「じゃあ俺は、お前らのドキドキを食ってやるぜ！」

「お前なんかに食わせるかよ！」

飛び降りたグーラに向けてビルドがカイゾクハッシャーを構え、何発か発射した。

しかしグーラはその攻撃を飲み込んでしまう。

「ならこれだ!」

『クジラ! ジェット! ベストマッチ!』

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

『天駆けるビッグウェーブ! クジラジェット! イエーイ!』

ビルドはクジラと戦闘機がモチーフの複眼とアンテナを持つ姿、クジラジェットフォームへとフォームチェンジし、ドライバーからドリルクラッシュヤーが形成され、グーラに放つ。

数発命中したがグーラは怯まず、プリキュアと仮面ライダーに戦いに挑む。

「何だ……? 一体、何が……?」

その頃、記憶喪失のイーラには何が起きているのか全く理解出来なかった。

七人はグーラのパワーに圧倒されて行き、反撃で吹き飛ばされてしまった。

「イーラ、そんなトコで何してやがる!」

「イーラ……? はあ!?」

「当たっても知らんぞ!」

「逃げて!」

光線がイーラに当たりそうになってしまい、ビルドが大波を出して守ろうとしたその

時、イーラは自分の手でグーラから光線を弾いた。

「テメー！何しやがる！」

「——プリキュアと仮面ライダーを倒すのは……この僕だ！」

この口ぶり、どうやら、イーラは記憶を取り戻したようだ。

「まさか……」

「記憶が……？」

「……戻ったみたいだな」

「そう……良かった」

イーラが記憶を取り戻したことを知ったダイヤモンドは、安堵の表情を浮かべる。

「な、何で怒んねえんだよ？変なヤツ」

「だって、嬉しいんだもん。きつとこれが私の素直な気持ちなんだと思う」

これが自分の、本当の気持ちだとイーラに伝える。

「邪魔だイーラ！」

「喰らえ！プリキュアに仮面ライダー！」

ダイヤ達に襲い掛かるグーラに対し、イーラは斜めに衝撃波を放った。

イーラが出した衝撃波を受けたおかげでグーラの攻撃は当たらなかつた。

「イーラ！余計な事を！」

「おっと、わりー、わりー」

(まさか……助けてくれた……?)

ダイヤモンドが考えるとイーラは何も言わず、そのまま去って行った。

それを見届けたダイヤモンドが微笑むと同時に、力が溢れだした。

「見せて貰いましたわ。あなたの本当の気持ち」

突如、ダイヤモンドの前にエースが現れる。

「プリキュア五つの誓い!」

「一つ!プリキュアたるもの、自分を信じ、決して後悔しない!」

(まさかさつきのは……私の本当の気持ちを気付かせるために?)

「ありがとう、キュアエース」

「何の事ですか?」

パワーアップしたダイヤモンドはグーラへ突進し、圧倒して橋の上へ跳んだ。

「お行儀の悪い食いしん坊さん!このキュアダイヤモンドが、あなたの頭を冷やしてあげる!」

「キュアダイヤモンド、いまこそわたくしと共に戦いましょう!」

「彩れ!ラブキッスルージュ!」

エースはルージュを唇に塗り、相手に向かってキスを投げると、前方にハート形のエ

ネルギー体が生成される。

「ときめきなさい！エースショット！ばきゅん！」

両手持ちして頭上に掲げたラブキツスルージュを振り下ろし、エースショットを放った。

青のエースショットが当たったグーラは泡の中に閉じ込められた。

「ラブハートアロー！」

ダイヤモンドはラブハートアローを出現させ、ラビーズをセットした。

「プリキュア！ダイヤモンドシャワー！」

「かき氷なら大好物だぜ！」

顔だけ出せたグーラはダイヤモンドシャワーを飲み込む。

「呆れた……でもそれなら！」

更にダイヤモンドシャワーをグーラに向けて放つ。

「どうだ！」

「お粗末様。ところで、そろそろ頭は冷えたんじゃないかしら？」

「?……ツ!?頭が痛え！氷を食い過ぎた！くそー！覚えてろ！」

アイスクリームやかき氷など食べ過ぎて起こる頭痛を引き起こしたグーラは撤退した。

「遂にダイヤモンドもパワーが高まったね」

「凄かったな!」

「出る幕が無かったわ」

「ま、たまにはそんな日もあるじゃねえか」

ハートとギリス、ソード、クロースがダイヤモンドのパワーアップに感心していると、ラケルがダイヤモンドの元に来る。

「流石六花ケル!」

「ありがとう、ラケル」

「お見事です、キュアダイヤモンド。しかし油断はしないで下さい」

「えっ?」

「イーラの事です。おそらく、次に現れた時はきつと……」

「ええ、分かっているわ」

エースの言いたい事が理解した時、エースはビルドを見る。

「そして、後は桐ヶ谷さん。あとは貴方が力に飲み込まれない事です」

「……わかってる」

そう、まだビルドはハザードトリガーを使いこなせていない。ビルドのこれからの目標は、ハザードトリガーの力を使いこなせるようになる事だと感じる。

「ではまた。アデュー」

花びらに包まれたエースは姿を消した。

その後、ビルドはハザードトリガーを見る。

「今の俺に使いこなせるか……」

やはり晴夜にはまだ、ハザードトリガーを使うのに躊躇いが見られる。

その後、六花が自宅に戻ると、家には父・悠蔵と母・亮子がいた。

「いやー、無事に帰れて何よりだよ」

「それはいいけど、何よこのお土産？」

テーブルには悠蔵が買ってきたお土産が置かれていた。

「現地の人に貰ったんだ。何でも、夢を叶えてくれるお守りらしいぞ」

「そつ。ありがとう、パパ。でもそれは丁度良かったわ」

「何が？」

「うん。改めて言うのも照れくさいけど、私、夢が出来たの」

「夢って、医者じゃ無かったっけ？」

「うん、私の夢はお医者さん！ただ……今までとちよつと心構えが違うって言うか……」

「何かあったの？」

「ちよっとね」

胸を張る六花の表情は、とても素直な笑顔になったのだった。

一方、イーラは六花が付けてくれた包帯を取っていた。

取った包帯は、そのまま風に乗って何処かに飛んでいく。

「……フン」

夕日に照らされながら飛んでいく包帯を見ながら、彼は何処かに消えて行ってしま
う。

どこか物憂げな表情をしながら…

次回! Re・ドキドキ&サイエンス!

第30話 新たな敵と新たなライダー!

第30話 新たな敵と新たなライダー!

晴夜達がどんどん成長していくその頃、ジコチュークラブでは、リーヴァが焦っていた。

「くう〜!ビルドとクローズにグリス!あいつらが面倒だからプリキュア達を仕留められないわ!」

ビルドとクローズ、グリスの存在がリーヴァの心情を焦らせていた。

「特にビルド!何か、ビルドの弱点はないかしら?」

ビルドの弱点が何かと呟く。

『知りたいのなら、俺が教えてやろか?』

突然声が聞こえ、リーヴァが後ろを振り向くと、そこにはスタークがいた。

「あら、スタークちゃんじゃない。アンタ旅に出てたんじゃなかったの?」

『ああ!この後直ぐにまた、旅に出る。それよりもビルドの弱点が欲しいようだな』

スタークが弱点が欲しいのかとリーヴァに語りかける。

「ええ!欲しいわよ!ビルドがいなければ後はどうにでもなるわ!」

『そうか、ならこのデータを返してやろう』

スタークがメモリチップデータをリーヴァに投げる。リーヴァはそれをキャッチした。

「何よ、これ?」

『それには、ビルドの今までの戦闘データがある。それを見て対策を練りな、それと……』

スタークが指を鳴らすと、スタークの後ろから二人の人物が現れる。

その二人はそれぞれに歯車のギアを装着したような姿をしていた。

一人は身体の右半分に白い歯車に似た装飾を付けており、顔の左半分にはエンジンを模したような仮面をつけている。

もう一人は身体の左半分に青緑色の歯車がついた、先程の人物と比べるとアシメトリーなデザインをしており、顔の右半分にはリモコンを模したような仮面で覆われている。

『そいつを貸してやる。精々頑張りな、チャオ〜!』

スタークがそう言うと、黒い煙を纏って消えていった。

「ありがとう、スタークちゃん!これで、ビルドもおしまいよ!」

リーヴァがビルドのデータと新たな戦力を手に入れて、勝利を確信したと言わんばかりに高々と笑う。

その頃、桐ヶ谷家で龍牙が晴夜を探していた。

「晴夜ー！晴夜ー！」

龍牙が名を呼ぶが反応がない。それどころかいつもの地下室にも姿がない。

「あいつ、一体どこに行っただ？」

龍牙は晴夜がいないと呟くと、後ろから晴夜の祖母が現れた。

「晴夜なら、今日は朝早くから何処かへ行ってしまったわよ」

「えっ!?……あいつ、朝早くから何処に行っただ？」

晴夜の行き先がわからないまま、龍牙は一人でソリティアへと向かう。

「おはよう」

ソリティアに入っていくと、既に六花にありす、真琴、和也が来ていた。

「おはよう、龍牙。あれ？晴夜はどうしたの？」

真琴はいつもは龍牙と一緒にいる筈の晴夜がいない事に気付く。

「あいつ、朝から何処かへ行ったらしいんだ。行き先も告げずに」

「えっ!??晴夜君も！」

「晴夜もって……あれ？ そういえば、マナはどうした？」

マナが来ていない事に気付いた龍牙。いつもなら既に来ているはずだが。

「二人共、何処へ行ってしまったんでしょう？」

「晴夜はともかく、マナの場合は何か厄介事に首を突っ込んでじゃあねえか？」

「それは、あり得るね。なんてたつて幸せの王子だから」

「でも、マナのそういうところがみんなに惹かれるのよね！」

真琴が言うのと四人が頷く。

「でしたら、晴夜さんは何処に行ったのでしょうか？」

ありすが呟くと皆は晴夜がない理由に悩む。

一方、噂の晴夜はマシンビルダーを近くに留め、何処かへ向かって歩いていった。

そこは、マナの父に連れて行ってもらい、レジーナと最後に遊んだ海だった。

——そして、初めてハザードトリガーを使った場所でもある。

「レジーナ……」

晴夜が呟くと持っていたハザードトリガーを見つめる。

（あれから、色んなボトルを使い、俺自身のハザードレベルは上げてきたつもりだが……今の俺にこれを使いこなせるか？）

ハザードトリガーを見てそう思っていた。

『ここに来て、自分の罪を再確認しに来たのか？』

すると、後ろから現れたスタークが、晴夜に問い掛ける。

「何の用だ？」

『ふふっ……ちよつと様子を見に来ただけだ。』

それで、あれからハザードトリガーは使えるようになったのか？』

スタークがハザードトリガーは使えるようになったか聞く。

だが、まだ晴夜は使いこなせないなので、何も言えなかった。

『そうか。なら、ボトルを引き取らせて貰う』

「渡すと思うか？これ以上アンタの好きにはさせない」

スタークがいきなりボトルを引き取ると言い出したがしかし、晴夜は断った。

『そう言うと思つたよ』

どうやら、スタークは晴夜が断わる事は分かりきっていたようだ。

『お前とキュアハート、そしてレジーナは良く似ている』

「いきなりなんだ……」

するとスタークが晴夜とマナ、レジーナは似ていると言い出す。

『お前とキュアハート、レジーナはどちらも守るものがある。』

しかし、違いがあるとすれば。レジーナは父親、キングジコチューを守るという覚悟だけで、他には失うものがない。

だが、お前とキュアハートは多くの物を抱え過ぎている。

だから、お前ら二人は自分を解放する事が出来ない』

「知ったような口を聞くな！」

晴夜がスタークの考えを否定する。

『さあ、ボトルを回収させてもらおう』

スタークが言うのと晴夜はビルドドライバーを装着し、ボトルを差し込む。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

『Are you ready?』

「変身！」

『ラビットタンク！イエーイ！』

晴夜はビルドに変身し、スタークに攻撃を仕掛ける。

そして、砂浜へ場所を移し、ビルドとスタークの戦いが激しく行われる。

押され出したビルドはラビットタンクスパークリングを構えて振る。

『ラビットタンクスパークリング！』

プルタブを開けた後にラビットタンクスパークリングをドライバーに差し込み、レ

バーを回す。

『Are you ready?』

「ビルドアップ！」

『ラビットタンクスパークリング！イエー！イエー！』

スパークリングフォームへとフォームチェンジしたビルドはスタークへの反撃を始め、拳や蹴りを連続で繰り出すけどれもスタークに防御されてしまい、今回はスタークの方がビルドを押ししている。

『もう、俺にはスパークリングは効かん！』

スタークの言う通り、今のビルドのスパークリングの力はあまり通用していない。

『今のお前が俺に勝つには、ハザードトリガーを使うしかない！』

スタークがそう言うと、ビルドは左足にある『クイックフロッセイレッグ』にエネルギーを収束させる。

ビルドがそのまま収束させたエネルギーで加速し、飛び蹴りで攻撃しようとするが、スタークはすぐに察知すると距離を取り、そのままカウンターでビルドを吹き飛ばす。

すると、ビルドからいくつかのボトルが落ちてしまい、スタークが落ちたボトルを拾いながら語りかける。

『そんなに、自我を失うのがそんなに怖いのか？』

もしそうなら、残りのボトルを出せ！お前の持つているボトルで、俺の計画はさらに完成に近づく』

「そんなこと……」

ビルドが立ち上がり、ハザードトリガーを出して、ドライバーに差そうとするが、手を止めてしまう。

「……させるか！」

『ハザードオン！』

しかし、迷いながらもハザードトリガーのスイッチを押し、ドライバーに差し込む。

『海賊！電車！スーパーベストマッチ！』

『ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！』

海賊と電車のボトルを差し込み、レバーを回すと金具の鉄板、ハザードライドビルダーが前後に出現した。

『Are you ready?』

「ビルドアップ……」

前後に出現した漆黒の金型が重なり、レンジの音が鳴ると重なっていた金型が離れ、そこから黒いビルドが現れる。

『アンコントロールスイッチ！ブラックハザード！ヤベーイ！』

ハザードフォームへとビルドはフォームチェンジし、カイゾクハツシャーを構えてスタークに向かっていく。

『やっと、その気になったのか』

スタークのそれは、ビルドがハザードフォームになるのを待っていた様な口ぶりだった。

ビルドはカイゾクハツシャーを振り回しながらスタークに攻撃する。

『もつと、もつと、お前の全てを出しきれ！』

スタークはビルドの攻撃を受け続けながら、全力を出せと煽る。

「大丈夫だ……まだ、行ける……！」

これまでの戦いでビルドもレベルを上げてきたか、前回よりハザードフォームで意識を保っている。

「もう、少し……うっ！」

突然、ビルドの動きが止まってしまい、ハザードトリガーの暴走が始まり出す。

「あつ……ダメ……か……！」

遂にビルドの自我が無くなった。そのままビルドはカイゾクハツシャーを落とす、自我を失いつつ、ビルドはトリガーのスイッチを押す。

『マックス！ハザードオン！』

そして、ドライバーのレバーを回す。

『ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！』
『Ready go！オーバーフロー！』

黒いオーラを纏ったビルドの拳が連続でスタークに繰り出す。

『ハザードレベル4. 2……4. 4……これがハザードトリガーの力か……いいぞ、リミッターを外せ！』

スタークがビルドのハザードレベルを眩きながらビルドに殴られ続ける。

『ヤベー！』

ハザードトリガーから音声が鳴ると、ビルドがスタークを殴り飛ばす。

『いいぞ！俺の想像を超えて来い！まだいける筈だ！俺が求めていたレベルに達して来い！ さあ！』

ビルドが更にスタークを攻撃しようとした、次の瞬間――

『プリキュア！ハートシユート！』

どこからかの砲撃が飛んで来てビルドに命中し、ビルドは強制変身解除になった。

スタークが飛んで来た方を向くと、そこにはラブハートアローを構えていたキュアハートの姿があつた。

そのままハートは、変身解除した晴夜に駆け寄る。

「晴夜君！」

ハートが叫ぶと意識が戻った晴夜が彼女を見る。

「ハート……」

「相手なら、あたしになるわ！」

ハートがスタークの方を見て構える。

『はあく、とんだ邪魔が入ったか……』

晴夜、残りのボトルの回収はまた今度にしてやる。チャオ！」

そう言うときスタームガンを周りに発射し、気付いた時にはスタークの姿は消え去っていった。

その後、変身解除したマナは急いで晴夜の元に駆け寄る。

「晴夜君、ごめん！大丈夫!？」

「いや、ありがとう……おかげで助かった」

手を差し伸べられた晴夜が彼女の手を掴み立ち上がる。

「でも、なんでマナがここにいるんだ？」

「うん、ここに来ればレジーナに会えるんじゃないかなって、思ってた……」

「マナもか……」

「えっ!??じゃあ、晴夜君も！」

「うん……俺もここに来たのはレジーナに会えるかなって……」

会って謝りたいんだ……」

やはり、あの時の事を晴夜はまだ引きずっていた。

「あの時、自我が無くなっていたとはいえ、俺はレジーナを倒そうとした……」

その事を、謝りたいんだ……」

「その時は、あたしも一緒に謝るよ!」

「マナ……」

「だって、レジーナとあたし達は友達だから一緒に謝ろ!ね!」

マナの言葉に晴夜の心が軽くなる。

「ああ、その為にも、キングジコチューにレジーナを元に戻して貰えるようにするために強くならなきゃな!」

「うん!」

マナが笑顔で頷く。

「それじゃあ、そろそろ帰ろう!」

「そうだな!みんなに何も伝えずに来たから心配してるだろしな」

晴夜とマナは大貝町へ戻る。

その頃、ビルドの研究をしているリーヴァはというと。

「なるほど、ビルドのフォームには、攻撃パターンが存在する……」

つまりそれさえ分かれば、対策を万全にすればビルドを排除できるわ」

「何やってんだお前？」

後ろからグーラが現れ、何をしているのかを聞く。

「ビルドの研究よ！これで、ビルドを排除できるわ」

「なんか、面倒な事やってんな……」

グーラはリーヴァのやってる事が面倒くさそうに見えていた。

「さあくて、ビルドを排除しに行くわ！あんた達も付いて来て！」

リーヴァはスタークが連れてきた二人と共に、ビルドを倒すために出ていった。

その頃、海岸から帰ってきた晴夜とマナがソリティアへと到着し、先にマナがソリティアへと入った。

「ただいま！」

「どこ行ってたの？」

「ちよつと人助けを……」

マナが言うのと、少し経ったら晴夜も中に入ってきた。

「お、晴夜。お前、朝からどこ行つてたんだよ」

「ちよつとな……」

「また、一人で何か抱え込んでるでしょう?」

真琴が言うのと、晴夜はそんなことないと話す。

「大変ケル! ジコチューの闇の鼓動ケル!」

『えっ!』

「場所はどこだ?」

「大貝町の大広場の公園から聞こえるでランス!」

「みんな、行こう!」

マナが言うのと全員急いで大広場の公園へと向かう。

現場に到着すると、リーヴァが作り出したジコチューが大広場で暴れていた。

「公園は、俺のものだ!」

ジコチューは公園は自分の物だと叫ぶ。

「止めろ!」

晴夜達七人がジコチューの前に現れる。

「来たわね、ビルド。さあ、出てきてらっしゃい！」

リーヴァが手を叩くと、スタークが連れてきた二人が現れる。

「なんだ、コイツら？」

「新しいスマツシユか？」

——確かに、スマツシユに……いや、何か違う。なんだこの感じ!?

「それは、スタークちゃんが用意してくれた。エンジンブロス、リモコンブロスって言うのよ」

「エンジンブロス……リモコンブロス……」

スタークが用意した新たな敵、『エンジンブロス』と『リモコンブロス』が晴夜達の前に立ちはだかる。

「mana達はジコチューの方を、俺と龍牙と和也で奴らを止める！」

「わかった！」

mana達四人がラビーズをコミュニケーションにセットし、晴夜達三人はドライバーを装着し、ボトルとゼリーを差し込む。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

『ドラゴンゼリー！』

『ロボットゼリー!』

『Are you ready?』

「変身!!?」

「プリキュア! ラブリンク!」

晴夜達三人は仮面ライダー、マナ達四人はプリキュアへと姿が変わる。

『ラビットタンク! イエーイ!』

『クローズインドラゴンチャージ! ブラア!』

『ロボットイングリッド! ブラア!』

『みなぎる愛! キュアハート!』

『英知の光! キュアダイヤモンド!』

『陽だまりポカポカ! キュアロゼッタ!』

『勇気の刃! キュアソード!』

「響け! 愛の鼓動! ドキドキプリキュア!」

「愛を無くした悲しい公園さんとプロスさん達! このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻してみせる!」

ハートが胸にハートマークを作り、リーヴァ達に言う。

「行きなさい!」

リーヴァの指示により、ジコチューとプロス達がビルド達に襲ってきた。ハート達はジコチューを引き受け、ビルド達はプロス達の相手をする。

ジコチューの方はなんとかハート達が押しているが、ビルド達はプロス達にかなり手を焼いている。

「コイツら、スマッシュより強い……でもなんだ？コイツら考えて戦っているのか？」
プロス達の戦い方に疑問を持ちながらも、ビルドはラビットタンクスパークリングを差し込み、ドライバーのレバーを回した。

『ラビットタンクスパークリング！』

「ビルドアツプ！」

『シュワツと弾ける！ラビットタンクスパークリング！イエー！イエー！』

「でも、負けるられるかよ！一氣に決めるぞ！」

ビルドが叫ぶと三人同時にドライバーのレバー操作をして、ドライバーから音声が強く響く。

『スパークリングファイニッシュ！』

『スクラップブレイク！』

『スクラップファイニッシュ！』

「「はあああああはあ！」」

三人同時にライダーキックを放つ。

しかし、ブロス達はまるでわかっているように攻撃を躲して、後ろから三人を攻撃した。

「なんだ、コイツら……」

「俺たち攻撃をわかってたのか……?」

「でもなぜ俺たちの動きが分かっているんだ?」

ビルド達は自分達の攻撃パターンがすべて読まれている事に驚く。

「その通りよ! エンジンブロスちゃんとリモコンブロスちゃん達には、あなた達の戦闘データが入っているのよ!」

「「なんだと!」」

「でも、なんで戦闘データが……まさか……!」

ビルドは悟った。戦闘データを渡した奴はおそらく、いや間違いなくスタークだと。

「さあ、ブロスちゃん達! ビルド達にとどめを刺しちやなさい!」

二体のブロスの腕部に装着された攻撃装置『ギアトルクガントレット』から巨大な歯車が出現し、ビルド達に向けて放たれる。

「みんな、危ない!」

「避けて!」

ハート達が叫ぶが避ける暇がない、このままでは確実に命中する。

「仕方ない……もう、これしかない！」

ビルドはハザードトリガーをしようとし、ドライバーに差そうとした次の瞬間、ブラス達が放った歯車が相殺された。

「何……！」

「なんで……」

「おい、誰か……前にいるぞ！」

グリスが言うと確かにビルド達の前に誰かいる。そして、爆煙から姿が見えてきた。その姿に周りが驚く。

「仮面ライダー……」

「マジかよ……」

「四人目の、仮面ライダー……」

その仮面ライダーは全身がパープル色の姿で、あちこちに白いひび割れの様なものがあり、脚部にワニの歯のようなデザインが施され、ワニの顎を模った装甲——『セルフェイスクラッシュャー』が白くヒビ割れた黒い頭部を挟む構造となっていた。そして何より特徴的だったのは、腰にスクラッシュユードライバーを装着していたことだった。

ドライバーに差し込んであるものはクローズやグリスが使用しているスクラッシュユ

ゼリーではなく、晴夜が使っているボトルの様だが、全体がクリアパープルであり、フタ基部はゴールドとなっていて、中央に赤い大きなヒビが入っていた。

「な、何よ！あなた！」

リーヴァがパープル色の仮面ライダーに問う。

「お前に名乗る必要はない、お前達は大義のために犠牲となるんです」

「何よ！ムカつく子ね！プロスちゃん達やってしまいなさい！」

プロス達はパープル色の仮面ライダーに襲い掛かるが、彼らの攻撃を防御しながら、カウンターを与えプロス達に着実に攻撃していき、プロス達の態勢が崩れていく。

その隙に、パープル色の仮面ライダーはスクラッシュドライバーのレンチを下ろした。

『クラックアップフィニッシュ！』

パープル色の仮面ライダーは、エネルギーの牙『克蘭チャーファング』を生成した両足をプロス二体に噛み付くように両脚で挟み蹴りを繰り返し、そのまま二体のプロスを吹き飛ばした。

「マジ強え……」

「同じスクラッシュドライバーなのに……」

パープル色の仮面ライダーの強さに驚くビルド達。と見とれている間にジコチュー

が襲ってきた。

すかさず、全員がジコチューの攻撃をかわす。

「こっちは早くジコチューを！」

「わかった！」

ハート達四人はラブハートアローを出現させ、ラビーズをセットした。

「二」プリキュア！ラブリーフォースアロー！「二二」

ラブハートアローの弓を大きく展開させ、台尻部分の引き金を引きしぼり、前面にハート形のエネルギーが生成され、相手に四人がウインクした。

ラブリーフォースアローが命中し、公園ジコチューは浄化され、そのままはプシユケーにジコチューにされた者の元へと戻った。

「そんな、ジコチューとブロスちゃん達が!? く覚えてなさい！」

リーヴァは、ブロス達を連れて去っていった。

それを見たパープル色の仮面ライダーも去ろうとすると、ビルドが止める。

「待てよ！お前、誰なんだ？」

「仮面ライダー………ローグ」

「ローグ………」

パープル色の仮面ライダーは自らをローグと名乗った。

「また、会いましょう……仮面ライダービルド」

ローグはビルド達の前から去っていった。

「仮面ライダーローグ、一体誰なんだ……」

新たに現れた仮面ライダーローグ。

その正体は誰なのか。そして、あのスクラッシュユードライバーを作ったのは誰なんだとビルドは考えていた。

その頃、ローグは誰もいない森の中にいた。

「おつかれ、なかなかの初陣だったな」

そこにいたのは、総一郎だった。ローグは総一郎が現れるとドライバーからボトルを外し、変身を解除した。

——その姿は、晴夜達よりも背が低く、小学生に近い感じだった。

「なんで、僕にこんな力を……」

少年は、総一郎に何故ライダーシステムをくれたのかと尋ねる。

「なあくに。お前とボトルが惹かれ合った、それだけだ」

適当な理由を少年に言う総一郎。

「で、このドライバーは返せばいいのですか？」

「お前にやるよ。チャオ〜」

総一郎は少年の前から去っていった。

森から出ると、総一郎は突如、胸を抑える。

「なに、勝手なことしてんだよ！」

すると総一郎からスタークになった時と同じ声で自分に言う。

「これ以上、お前の好きにはさせない……そして、晴夜にもだ！」

今度は、もとの総一郎の声で言う。

「まあいい、これはこれで面白くなる。フッフツ……」

また、スタークになった時の声となり、不気味な笑い方をする。

果たして、総一郎の身体には何が起きているのか、今は誰も知る由もない……

次回！Re・ドキドキ&サイエンス！

第31話 タイムリミットとの勝負！

第31話 タイムリミットとの勝負!

ビルド達は大貝町でグーラが作り出した自転車ジコチューの暴走を止めようとしていた。

「暴れるジコチュー!」

「空いてる場所に停めて、何が悪い!」

自転車ジコチューが道を暴走し続け、ビルド達はそれを止めようとする。

「道を歩く人の邪魔になるでしょ!」

ダイヤモンドの言葉を聞かず、ジコチューはビルド達に突進攻撃をするがビルド達は跳んでかわす。

「何を手を焼いているのです!」

「キュアエース! いたの!?」

建物の上に立つキュアエースが七人に何にもたっているのだと叫ぶ。

「この程度の相手なら、問題無いハズですよ!」

「いつもながら厳しい……」

「でも、そんなに手を焼いてないけど……」

ビルドが呟いていると、エースが町の時計塔を見ていた。

「時間が掛かり過ぎですわね！」

『えっ?』

「まだそんなに……時間は経ってないぞ！」

「またお会いしましょう! アデュー!」

そのままエースはビルド達に手を貸さず、去って行ってしまった。

「行っちゃった……」

「時間を気にしてたな……」

「皆さん、集中して決めましょう!」

「ああ、まずはこいつを止めるぞ!」

ロゼッタとグリスの言う通り、今は目の前のジコチューを止める事が優先だと気づき、再びジコチューに体を向ける。

「マツハ1000!!?」

「えっ?!? マツハ1000?!?」

「マツハ1000って、そんなに出せるのかよ!」

「んな訳ないでしょう!」

「ソード! 龍牙君! タイヤを狙って!」

「ラブハートアロー!」

『シングル!シングルフィニッシュ!』

ダイヤモンドの指示でクローズはツインブレイカーにボトルを一本差し、ソードはラブハートアローを出現させ、ラビーズをセットする。

「プリキュア!スパークルソード!」

ソードがスパークルソードを放つ。

ジコチューは最初は余裕でかわしていたが、よろけた所に命中し、前輪がパンクした。「これでどうだ!はっ!」

後ろからクローズがガドリリングボトルの能力でツインブレイカーによる連射で後輪もパンクさせた。

「今よ!ハート、晴夜君!」

ダイヤモンドが叫ぶと、ビルドはドリルクラッシャーにボトルを差し込み、ハートはラブハートアローを出現させ、ラビーズをセットする。

『Ready go!』

『ボルトクブレイク!』

ロケットボトルを差し込むと、ドリルクラッシャーのドリルが飛び、ジコチューに命中した。

「プリキュア！ハートシュート！」

同時にハートはハートシュートを放った。

ハートシュートが命中し、自転車ジコチューは浄化された。

「ふーっ……」

ジコチューを倒し、グーラも去っていくと、みんなで喜び合ったのだった。

その日の夕方、みんなで明日の茶道に使う和菓子を持って行こうと向かっていきながら、今日のエースの事について話していた。

「ちよつと厳し過ぎるなーって思うけど、キュアエースのおかげで、みんな強くなれたよね」

「相変わらず彼女の事は何も分かって無いけど」

「来る時も去る時も突然だからなく」

「謎過ぎて、なんか気になるんだよね」

みんながキュアエースの話をしているなか、晴夜はローグの事を考えていた。

(ローグ……一体誰からポトルとドライバーを……)

ドライバーとポトルは自身と父・拓人、そしてドライバーのデータを見せたセバスチャンさんにしか作れないはずと晴夜が考えているうちに、お菓子を届ける目的地へ到

着した。

「あつ、あそこだよ。ママが茶道を教わってる円茉莉先生のお家」

「ん……?円……?」

「お菓子を届けるんだったわよね?」

「うん。パパ特製の和菓子だよ。明日の野点で使うんだって」

「野点?」

「野点ってなんだ?」

野点とは何かと龍牙がみんなに聞く。

「外でお客様をもてなす、お茶会の事ですわ」

「ありすが野点について龍牙と真琴に説明している中、マナがインターホンを鳴らすと、家から亜久里が出て来た。」

「あら!!?」

「あれ?えっ?」

「キュアエ——」

「円!亜久里です……!」

キュアエースと言いかけたマナを亜久里が止めようとすると、今度は和服を着たおばあさん——円茉莉が出てくる。

「マナさん、お菓子を持って来てくれたのですね」

「あ、はい……」

マナは栞莉に持ってきた和菓子を渡した。

「ありがとうございます。これで明日は、いい野点になります。」

「……あら、初めて会う人が二人もいるわね」

栞莉は晴夜と龍牙の方を見て言う。

「初めまして、桐ヶ谷晴夜です」

「俺は、上城龍牙だ」

二人は栞莉に自己紹介した。ちなみに和也の事は以前に会ったことがあるそうだ。

「晴夜君と龍牙君ね。私は円栞里。亜久里の祖母です」

「あ、よろしくお願ひします」

「孫をご存じ？」

「え？孫？キュアエ——」

「先日、お祭りでお会いしたのです」

今度は晴夜がキュアエースと言いかけた所で亜久里が誤魔化す。

「まあ、そうでしたか」

「ちよつと、よろしいですか？」

晴夜達と共に茉莉から少し離れる。

「おばあ様の前で、キュアエースと呼ばないで下さい!」

「やっぱりキュアエ——」

シャルルが言いそうだったが亜久里に止められる。

「こんな近くにいらしたとは」

「灯台下暗しだったわね」

「驚いて、何処から突っ込んでいいのか……」

「そのような言い方はおよしになって。わたくしは、逃げも隠れもしませんわ」

亜久里が晴夜達に言う。

「ですが、今は少々……都合が悪いのも事実です……」

あ、こう言うのはどうでしょう!」

亜久里は何かを閃き、晴夜達に閃いたことを話す。

その頃、ジコチューアジトのボウリング場では、グーラが苛立っていた。

「あー、腹が立つ!」

ビルド達に負けて苛立ったグーラはテーブルやソファァーを食べていた。

「その辺にしておきなさい。アジトが無くなるでしょ」
「これが食わずにいられるか！」

リーヴァの言葉を聞かず、アジトの物を食べ続ける。

「確かに、仮面ライダーはともかくプリキュアがあそこまで力をつけるなんて予想外だったわ」

リーヴァは仮面ライダーは兎も角、プリキュアの予想外の成長に驚く。

「このままじゃ私達も、ベール達の二の舞になり兼ねないわね……」

「こちらも合体技を使ってみましょうか」

「俺とお前がか？」

リーヴァがグーラとの合体技をしようと提案する。

「私、あなたのワールドな所、気に入ってるのよ」

「ワールド？悪い気はしないな……俺もお前のシルクハット、嫌いじゃないぜ」

「まあ嬉しい。それじゃ……」

「試してみる？（か！）」

リーヴァとグーラ、二人の息が合った。

翌日、マナ達は亜久里の提案により野点へ招待された。

「よくいらつしやいましたね」

着物を着た亜久里が晴夜達を出迎える。

「こんにちは！」

「本日はお招きいただき、ありがとうございます」

マナ達は着物姿だったが、晴夜と龍牙、和也は私服だった。

「野点なんて緊張するけど、キュアエースの事を知りたい機会だわ」

「そうね」

六花と真琴は小声でそんな会話をし、亜久里は晴夜達ライダー組を見る。

「桐ヶ谷さん達もよくいらつしやいました」

「今日はよろしく」

「なんか、自信がねえな」

「まあ、ハナからお前は無理だろうけどな」

「ああくん、なんだと！」

龍牙と和也が揉めそうになると真琴が二人の間に入る。

「もう、二人共やめなさい！」

「もうやめます!!な！」

真琴に頼まれては仕方ない、そんな感じで和也がやめると龍牙は呆れてため息をつく。

「ハイ。それでは、どうぞこちらへ」

用意されている場所へと移動を開始した。

亜久里の後のついていく様に歩き、周りには誰もいない場所へと来た晴夜達は、全員が正座をして座っている。

「それでは！これより、貴方達に茶道の作法を教えて差し上げます」

「いや、私達は何もそこまで」

マナがそう言いかけると…

「プリキュア！五つの誓い！」

「一つ！プリキュアたるもの、一流のレディであるべし！」

「『『『そうなの!?!』』』」

「そんな、まだ誓いがあったのか」

晴夜達はプリキュアの誓いがまだあることに驚く。

「もちろん！仮面ライダーの誓いがあります！」

「『『『えっ！俺達も!?!』』』」

ライダーである晴夜達にも誓いがあると亜久里が言う。

「仮面ライダーたるもの、何事にも全力に取り組む！」

「わかりましたか！」

「は、はい……」

亜久里の発言に何も言い返す言葉がなかった。

「わたくしがお茶を立てる前に、お菓子を食べ切ってください」

「は、はい……」

亜久里に言われ、それぞれ和菓子を口に入れる。

「美味し〜い！」

「流石、マナの親父さんが作った和菓子だ」

「メチャクチャ、うめえ〜！」

六花と真琴、和也と龍牙がお菓子を口に運んでから、和菓子の味の感想を言う。

それに続きマナが食べようとすると、亜久里が欲しがる目で和菓子を見ていた。

「食べる……？」

「よかつたら、俺のあげようか？」

これを聞いた亜久里は目を輝かせるが、すぐに正気に戻った。

「茶道の基本はもてなしの心です。もてなすわたくしが食べるワケには行きませんわ」

「お菓子が絡んだ時だけは可愛いのに」

六花が言うのとみんな確かに頷くと、亜久里は器用にお茶を立てていた。「どうぞー！」

亜久里はに立ててたお茶の入ったお椀を置き、マナがすぐ様お椀に手を伸ばそうとする。

「その前に挨拶！」

「いただきます！」

「マナちゃん、『お手前、頂戴します。』ですわ」

「へえー」

「流石四葉家のご令嬢」

「確か、飲む前にやる事があつたはずだけど……」

「こういう事もあろうかと、ちゃんと勉強して来たの！」

お茶碗は……ほっ！」

真琴はお椀を上投げ、傘の上に乗せて回し始めた。

「回すの！」

「お、上手いな真琴！」

傘でお椀を回すのが上手いと龍牙が言うが、流石それはちよつと……

「ま、まこびー、それはちよつと……」

「回し方が違うと思うビィ!」

「えっ?」

「違うのか?」

真琴の行動に龍牙の発言に全員がズッコケた。

シャルル達はお椀が大き過ぎて中々飲めず、アイちゃんも抹茶を舐めたらあまりの苦さに泣いてしまい、マナはすぐにアイちゃんをあやす。

「あらあら」

「アイちゃんにはこの味早過ぎたね……」

「流石に赤ちゃんには……」

「あなた達!」

亜久里はみんなのふざけっぷりに怒っていた。

「ゴメン!ちゃんとやるから!」

マナが謝りながら立とうとした瞬間、何故か倒れてしまう。

「だ、大丈夫?」

「あ、足が痺れた……」

倒れた理由は、足が痺れたからだった。

「まこぴーは平気なの……?」

「当然でしょ！」

マナが真琴の足をつつくと、真琴も倒れた。

「し、痺れた……！」

「やせ我慢だったビィ」

真琴も足が痺れていたが、我慢していた模様。

すると晴夜が龍牙の方を見ている、龍牙も先からなんか様子がおかしい、額から脂汗が出ていた。

「龍牙、どうした先から足が震えてるぞ？」

「まさか、お前も……！」

「な、なわけねえだろ！」

龍牙が言うとうと晴夜と和也は彼の足をつつく、すると龍牙も倒れ出した。

「足が……し、痺れた……！」

「お前もかよ！」

足が痺れた光景を見ていた亜久里が笑い出した。

「亜久里……ちゃん？」

「だって、おかしな事をなさるから。」

今日はこの辺にしておいてあげますわ。そもそも野点では、茶室のような堅苦しい作

法は必要ありませんしね」

「「「えっ?」」」」

「俺達をからかたってたの!?」?

「そんな事ありませんわ」

「もう!」

みんなも亜久里も誘われ、みんなで笑い合ったのだった。しばらくして亜久里の祖母・茉莉が現れた。

「楽しそうですね」

「おばあ様!」

「亜久里がお友達を茶席に連れて来たのは初めてなんですよ」

「そうなんですか?」

「これからも亜久里と仲良くしてやって下さいね」

「「「はい!」」」」

「嫌ですわおばあ様……皆さんと少しお散歩して来ます」

「おさんぽー!」

「はい、行ってらっしゃい」

亜久里に案内で散歩に出かけ、川の方へとやって来た。

「綺麗……！」

「ここまで透き通つてる川、初めて見た」

「ここは有名な清流なのです。気持ちいいですよ」

みんなは清流の川に足をつける。

「本当だ！」

「気持ちいいですわ」

「痺れが取れる〜！」

みんな気持ち良さそうな顔で涼しんだ。

（キュアエースじゃない時の亜久里ちゃんつて、普通の女の子なんだな）

（これが、あの子の本当の姿かもな……）

マナと晴夜は亜久里を見てそう思っていると、亜久里は晴夜達の方を見る。

「これまで、あなた達に厳しく接して来て申し訳ないとおもっています」

亜久里は今までの接し方に問題があったと謝罪する。

「あなた達に強くなって欲しい、その一心でして来た事です」

「これまで、厳しく指導していた理由をみんなに話す。

「わたくしに聞きたい事があるのでしよう？お答えしますわ」

「どうして私達を鍛えてくれるの？あなた一人でも十分、キングジコチューと戦えそう

なのに」

「そうだよな、あれだけ強いのになんでだ？」

真琴と龍牙が亜久里に質問する。

「わたくしだけでは無理なのです。」

わたくしは、こちらの世界で生まれたプリキュアです」

「こつちの世界で生まれたってどうゆうことだ？」

「かつてジコチューと戦い、一度敗れました。」

その時に、パートナーのアイちゃんは卵に戻り、離れ離れになっていたのです。

ですがある日、アイちゃんはわたくしの前に戻って来てくれて、あなた達との出会いに導いてくれました」

「ジョーさんの所にいたはずなのに、そんな事になっていたのね」

「一ついいかな？」

「どうぞ」

六花がそう呟くと、晴夜も亜久里に質問をする。

「ロイヤルクリスタルは、君が変身するために必要な物なのか？」

「はい。ロイヤルクリスタルはわたくしに変身するのに必要な物です。」

あなた達が集めてくれたおかげで、もう一度変身出来るようになりました。感謝しま

す」

「僕も聞きたい事があるケル。

どうして亜久里は変身すると大きくなるケル？」

ラケルが言う通り、確かにどうして亜久里は変身する時は大人なるのか、皆それが疑問に思っていた。

「想いの力です」

「想いの力？」

「ジコチューによって、危機にさらされてる世界を心から守りたい。

わたくしはその思いで自らを成長させたのです」

「凄すぎシヤル……!!」

「じゃあ逆に、その思いが弱かったら？」

「変身は出来ませんが、力は落ちてしまいます。」

今こうしてる間にも、キングジコチューは多くの世界を飲み込み、復活へと近づいています。

それに対抗するため、わたくしは真のプリキュアのステージに立ったあなた達と共に戦いたいのです」

「分かったよ、あたし達も強くなったもの！」

「まだまだですわ!」

あなた方はもつと強くなれます! ならなくてはいけないのです!

ジコチューの恐ろしさはこんなものではありません!」

亜久里はこれからの戦いの為に、もつともつと強くなる必要があると語る。

「今話した事はおばあ様は知りません。どうか、あの人には内緒にしてください!」

理由は、茉莉を危険に巻きこみたくないんだと晴夜達に伝える。

「もちろん。ね?」

「約束するよ」

(もつと頑張らなくちゃ、レジーナのためにも!)

マナが考えていると亜久里は晴夜達ライダー組に近づく。

「そして、あなた方仮面ライダーにももつと強くなつて欲しいのです!」

特に桐ヶ谷さん、あなたにはあの力を自分の物してほしいのです!」

「あの力つて……ハザードトリガーのことか……」

晴夜が言うとお亜久里が頷く。確かにハザードトリガーの力を自分のものに出れば

：

でも、まだオーバーフロー状態になると自我が無くなるのが問題だ。

「ハザードトリガー……」

晴夜はハザードトリガーを出し見つめる。

すると、川の北側の方から悲鳴の聞こえ、みんなで急いでその場所へと向かう。そこには巨大なコンロジコチューと、傍にはリーヴァとグーラが立っていた。

「これがジコチューシャル……!?？」

「何て大ききだビィ！」

「来たわね、プリキュアに仮面ライダー」

「驚いたか？これが俺達コンビの結晶、合体ジコチューだ！」

「サイズは二倍、力は五倍、ジコチュー度は十倍よ！」

「確かにこれまでとは違うようですね！」

「今回はわたくしも行きます！5分で終わらせませすわよ！」

（5分……?）

5分とは一体……亜久里の意味を考えながらも晴夜達三人はドライバーを装着し、マナ達四人はコミュニケーションにラビーズをセツトした。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

『ドラゴンゼリー！』

『ロボットゼリー！』

ボトルを差し込み、晴夜はドライバーのレバーを回し、龍牙と和也はドライバーのレ

バーを下ろした。

『Are you ready?』

「変身!」

「プリキュア! ラブリンク!」

晴夜達の体に形成されたアーマーが装着され、仮面ライダーへ、マナ達四人は光に包まれ、光から現れるとプリキュアへと姿を変える。

『ラビットタンク! イエーイ!』

『ドラゴンインクローズチャージ!』

『ロボットイングリス!』

「みなぎる愛! キュアハート!」

「英知の光! キュアダイヤモンド!」

「陽だまりポカポカ! キュアロゼッタ!」

「勇気の刃! キュアソード!」

「響け! 愛の鼓動! ドキドキプリキュア!」

「愛を無くした悲しいコンロさん! このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻して見せる!」

手でハートマークを作り、コンロジコチューにいつもの決め台詞を言う。

「アイちゃん」

「きゅぴー！」

「プリキュア！ドレスアップ！」

「きゅぴらっばー！」

アイちゃんから出た光から箱が現れる。その後亜久里は七つの炎のシルエットに包まれ、炎から現れるとキュアエースとなる。

「愛の切り札！キュアエース！」

「美しさは正義の証！ウインク一つで、あなたのハートを射抜いて差し上げますわ！」

エースがエースマークを作り名乗りを上げる。

「初めての共同作業だ！」

「上げて行くわよ！」

「レッツ、バーベキュー！ファイアー！」

腕のチャツカマンでコンロの火を入れ、体の鉄板から熱が放たれた。

「あ、熱い……！」

「肉が焼けたぞー！」

「肉？……じゃない！」

「ミサイルよ！」

骨付き肉の形をしたミサイルが放たれるが、全員が跳んでかわす。

今度は野菜の形をしたミサイルが放たれるも、それもギリギリでかわす。

「もつと食え!」

ジコチューからまたミサイルが放たれる。

「食えるかそんな物!」

そう叫ぶとビルドはボトルのドライバーを差し替える。

『タカ! 扇風機!』

「ビルドアッ!」

トライアルフォームに変身したビルドは、タカと扇風機の風力でジコチューのミサイルを跳ね返し、ジコチューにダメージを与える。

「ビルドが邪魔ね。また、よろしくね」

リーヴァがシルクハットを投げると、ビルドの前にエンジンブロスとりモコンブロスが現れた。

「また、コイツらか!」

「晴夜!」

クローズとグリスがビルドの元に行こうとすると、グーラが二人の前に立ちはだかる。

「奴を助けたかったら、俺を倒してからしな！」

「常套だ！」

「後で後悔するなよ！コラッー！」

クローズとグリスはグーラとの勝負が始まる。

ビルド達の動きが封じ込められ、ハート達では、ミサイルを止めるのにも限界がある。

「キリがありませんわ！」

「(後3分……それまでに終わらせなければ……！)」

合体技を！わたくしが足止めします！」

「彩れ！ラブキツスルージュー！」

エースはラブキツスルージューを出現させると、ルージューを唇に塗り、相手に向かってキスを投げ、前方にハート形のエネルギー体が生成される。

「ときめきなさい！エースショット！ばきゅくん！」

両手持ちして頭上に掲げたラブキツスルージューを振り下ろし、エースショットを放つた。

黄色のエースショットが当たったジコチューは蔓で動きを封じられた。

「火力アップ！」

しかし、火力を上げたジコチューが蔓を燃やし尽くした。

「まさか!」

「エースショットが破られた!」

「マジかよ」

「自分の心配もしたら!」

その隙にリーヴァがシルクハットを投げつけて四人にダメージを与えた。

「なっ!」

「昨日のお返しだ!」

グーラがハート達に気を取られていたクローズとグリスにラリアットでダメージを与えてきた。

「皆さん!」

「みんな!くそっ!コイツらさえなんとかなれば!」

助けに行きたいが、二体のブロスがビルドを自由にさせない。

(後2分!)

「締めのでザートはいかが?」

「デザート?甘くて凄く美味そうな匂いだ!行くぞ!ジコチュー!」

「あ!どこ行くの!?!今日は共同作業でしょ!」

「あいつらなんで……」

「甘い匂いがするって言ってたぞ」

グーラがジコチューを連れて甘い匂いのした方に向かい、リーヴァが追いかける。

「あの方角は……おばあ様！」

「させるか！どきなさいよ！」

ブロス達を振り払いビルドもエース共にリーヴァ達を追いかける。

その甘い匂いのする方には、まだ野点中の茉莉達がいたのだ。

「追わなきゃ！」

ハート達もすぐに立ち上がり、追いかける。

(後1分！)

するとエースの胸元が赤く光り出す。

「ここか！甘い匂いだ」

野点中にグーラが乱入し、お茶と和菓子を握り、それを食べた。

「うんめ〜」

「何ですあなた！茶席を土足で荒そうとは！恥を知りなさい！」

「あ？お前も食ってやろうか？」

「やめなさいよ！」

いつの間にかスパークリングへとフォームチェンジしたビルドが、ドリルクラッ

シャーでグーラに攻撃する。

「おばあ様!」

「ときめきなさい! エースショット!」

エースショットを放とうとするが、いきなり変身が解けてしまった。

「どうして変身が……!?」

(そうか……! 5分で終わらせなきゃならないのは、こう言う事か! だから昨日も時間を気にしていたのか!)」

すぐにビルドが跳躍し、落下する亜久里を救う。

「大丈夫か?」

「わたくしは大丈夫です。ですがおばあ様が……!」

「大丈夫……でも、かなりやばいかも……」

ビルドはジコチュー、グーラ、そして二体のプロス達に囲まれていた。

「キュアエースはもう変身できない。ビルド! 今日で貴方も終わりよ!」

リーヴァが勝負合ったかのように高々と笑う。

「この状況を抜けるには、ハザードトリガーしかない!」

そう言うのとハザードトリガーを取り出した。ビルドは迷わず、トリガーを起動させる。

『ハザードオン!』

トリガーが起動し、ドライバーに差し込む。そして、ウルフとスマホのボトルを差し込む。

『ウルフ! スマホ! スーパーベストマッチ!』

『ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!』

レバーが回ると同時にビルドの前後から金型が出現した。

『Are you ready?』

「ビルドアツプ」

金型はビルドと重なり、金型が離れるとスマホと狼モチーフの複眼を持つ黒い姿を纏ったビルド。スマホウルフハザードフォームへと姿を変えた。

『アンコントロールスイッチ!ブラックハザード!ヤベー!』

「な、何よあれ? あんなのスタークちゃんからのデータにはなかったわ!」

「プロスちゃん達やっておしまい!」

ハザードフォームに驚くりーヴアはプロス達に指示をし、プロス達がビルドに襲いかかるうとする。

しかし、ビルドは二体のプロスを同時に拳をぶつけ、吹き飛ばす。

「何やってんだよ!」

今度はグーラとジコチューから襲って来るが、ビルドのハザードフォームはグーラ達を完全に押し留めていた。

「あと少し……いける……! あっ……!」

ビルドは頭を抑え出し、ハザードトリガーによる暴走が始まろうとしていた。

「ダメ……か……」

抑えていた腕を下ろすと、トリガーのスイッチを押した。

『マックス! ハザードオン!』

『ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!』

『Ready go! オーバーフロー! ヤベー!』

暴走したビルドはドライバーを回すと足から黒いオーラを纏い、グーラの腹を思い切り蹴り飛ばした。

「な、グーラを一撃で!」

危険を感じたグーラはビルドから離れ宙へと飛ぶと、再びブロス達がビルドに襲い掛かる。

「止めなさい! ……あ!? ? 晴夜君!」

ようやく、ハート達が追いつくとハザードフォームになったビルドに驚く。

「晴夜の奴、またあの姿になったのか」

「あなた達！」

「どうして変身が……!?？」

亜久里がキュアエースないことに気づく。

「わたくしが成長したプリキュアでいられるのは、5分だけなのです！」

「だからすぐお帰りになられていたのですね！」

「そんな理由があつたのかよ……」

「任せて！ 亜久里ちゃんの大切な人はあたし達が守る！」

「ジコチュー！ 奴をバーベキューにしてしまえ！」

グーラがジコチューに指示をするが、暴走状態のビルドを止めることはできない。

「今こそ亜久里ちゃんに、キュアエースに強くなった成果を見せる時！」

「その前にまず晴夜を正気に戻さねえとな！」

「おお、行くぜ！ 龍牙！」

クローズとグリスが頷くとビルドに向かって走っていく。

一方、ビルドは複眼からアプリのアイコンの様なものを出してプロス達の周囲に纏わりつかせ激突させている間に、ドライバーのレバーを回し終えた。

『オーバーフロー！ ヤベーイ！』

黒い狼のオーラを纏った強烈な拳が、二体のプロスを機能停止まで追い込んだ。

「いやー! プロスちゃん!」

リーヴァがシルクハットでプロス達を回収する。

同時に、グリスがフルボトルをスクラップシュドドライバーに差し込む。

『ロック!』

『デイスチャージボトル! 潰れな〜い! デイスチャージクラッシュユ!』

グリスがロックボトルの力によって現れたチェーンでビルドを拘束した。

「今だ! 龍牙!」

「わかった!」

クローズがドライバーのレバーを下ろした。

『スクラップブレイク!』

ツインブレイカーでのスクラップブレイクをビルドに命中させ、ビルドのドライバーからハザードトリガーが外れた。

「はあ!? 俺は、またか……」

ビルドが正気に戻ると目の前にハート達がいた。

「晴夜君達は休んでいて、ここからあたし達が決める!」

ハートが走って勢いを付けてからジコチューに跳躍し、チャツカマンの先端をトングで切らせた。

ハートはジコチューの顔面にラツシユを繰り出す。

「支え合う心を！」

ロゼッタがリーヴァのシルクハットをかわし、ドロップキックを放った。

「大事な思いを！」

「未来の夢を！」

「喰らえ！」

グーラのラリアットをソードとダイヤモンドが抑え、二人の拳からの一撃で吹き飛ばした。

吹き飛んだリーヴァとグーラがジコチューの顔面に当たった。

「くじけても立ち上がる強さを！」

「二」プリキュア！ラブリーフォースアロー！「二」

ラブハートアローの弓を大きく展開させ、台尻部分の引き金を引き絞り、前面にハート形のエネルギー体を生成されると相手にウインクし、ラブリーフォースアローを放った。

ラブリーフォースアローを受けたジコチューは浄化され、プシユケーは持ち主の元に戻った。

「あなたが変な食い意地出すから！」

「うるさーい！食べる事は俺の生きがいだ！」

口論を繰り広げた二人は引き上げた。

それから夕方になり、茶道の会場は元に戻ると、晴夜はみんなに頭を下げる。

「みんな、ごめん……また暴走した……」

晴夜がみんなにまた暴走してしまつた事を謝る。

「つたく、気にすんなよ！」

龍牙と和也は拳を晴夜の胸に当てる。

「お前、前に言つたろ。『危なくなつたら全力で止める！』つてな」

「ああ、全力を止めてやるよ！」

「そうですよ。私にも言いましたよね。暴走したら止めると、私達がまたあなたが暴走した時は止めます」

ありますが言うと六花と真琴も頷く。

「みんなで一緒に乗り越えよう！」

「みんな、ありがとう……」

晴夜が言うと、亜久里がみんなの方を向く。

「今日は情けない所を見せてしまいましたね」

亜久里が今日は情けなかったとみんなに謝る。

「そんな事無いよ。亜久里ちゃん、とつても素敵だよ。はい、亜久里ちゃんの分」

マナが袖からお茶菓子を出す。

「食べて無かったのですか？」

マナは亜久里の為に取っておいたそうだ、そして亜久里はマナからお茶菓子を貰う。

「今日は本当にありがとう」

「こちらこそ。これから、ご指導よろしくお願いします」

「では、これまで以上にビシバシ行きますわよ！」

亜久里が笑うと、みんなも大笑いした。

この日は、みんなの仲が深まる最高の一日となった。

次回！Re. ドキドキ&サイエンス！

第32話 サマーエンジョイ！お祭りで大騒ぎ

第32話 サマーエンジョイ!お祭りで大騒ぎ

夏休みが始まり、晴夜達は強くなるため体力作りのために全員でランニングに勤む。

「いくら何でも、毎朝ランニング十キロはキツくない……?」

既にへロへロになった六花が亜久里に尋ねる。

「何を甘えた事を言っているのですか!」

「分かっているって。あたし達はトランプ王国を救うために、もう一段上のステージに登らなければならない!」

「そのための強化トレーニング!」

「それも今日で十日日!遂に最終日です!」

「思ったより長かったな」

みんなは今日までの十日間、このトレーニングを続けてきた様だ。

「それに、これは桐ヶ谷さん、あなたのためでもあるんですよ!」

急に亜久里は晴夜の方を向き、これは晴夜の為でもあると語る。

「えっ?どういうことなの」

「あなたは、理屈で強くなるとするのが、いけません！」

時には、体を鍛えて強くなってみてください！」

「は、はい……」

亜久里の発言に、晴夜は何も返す言葉がなかった。

「そうだよな、晴夜って理屈だけって時があるからな」

「お前の場合、だだバカなだけだろ」

「バカってなんだよ、バカって!!」

晴夜が龍牙に言うのと走りながらいつもの口喧嘩が始まった。

「お前ら、走りながらよくできるな」

全員はゴールである学校へと到着した。

「あの子、また来てる……」

「森山さん——」

その時、ゴール前の学校で一人の少女が走っている晴夜達を見ていた。

「やっと、ゴールだ……!」

ゴールの学校に着くと六花は疲れて倒れこむ。

「大丈夫六花?」

「大丈夫じゃないわよ……!」

「ほら、水だ」

和也がペットボトルの水を渡し、六花は渡された水を一気に飲む。

「生きかえるく……」

「お腹空いたく!」

「では、私のお家で朝食を一緒にしましょうか」

「マジかよ!よっしやあー!」

「なら今から——」

みんなが四葉邸へ朝飯を食べに行こうとすると…

「ダメです!休んでる暇はありませんわよ!」

いきなり亜久里がダメと言い出す。

「最終日は夜までスケジュールがビツシリなんです!」

亜久里は晴夜達に、この後の予定が書かれたスケジュールの紙を見せる。

「えっ!?? こんなにやるの?」

ビツシリ書かれたトレーニングメニューを見て、晴夜は驚くというか、これはやり過ぎだと思った。

「みんなだと思っただの!」

「みんなで夏祭りに行こうと思っただの!」

「トレーニング優先です!」

「マナは祭りに行きたいと言うが、亜久里はトレーニングが優先と強く訴える。
「そんなあ〜！」

「マナは涙目になると流石に他のみんなもやり過ぎだと思う。

「トレーニングには私も賛成だけど……」

「ちよつと厳し過ぎませんか？」

「うんうん！」

「いくらなんでも、ここまでやるのかよ……」

「俺でも、こんなには出来ねえよ」

「龍牙達も無理だというと、晴夜は亜久里が用意したスケジュールの紙を取った。

「何をするですか？」

「亜久里ちゃん、理屈だけどあまりここまでやるといざ戦う時、身体が動かなくなるかもしれない……」

「たまには、身体を休めることもトレーニングだと、俺は思うけど」

「ですが……」

「亜久里が言いかけると周りがボヤけて倒れてしまう。今日までの過度な運動のし過ぎで貧血となつてしまったようだ。

「大丈夫!?？」

「亜久里ちゃん!」

晴夜達を見ていた少女が叫ぶと、倒れる寸前で晴夜が救う。

「あの……」

「大丈夫、多分疲れて倒れたんだと思うよ」

日影に場所を移し、亜久里をベンチに寝かせ、六花が水で濡らしたハンカチを額に乗せる。

「しばらく休めば、よくなると思うわ」

「良かった……」

亜久里は大丈夫だと言われ、少女はホッとすする。

「起きたら水分補給させないとな」

「亜久里ちゃんのお友達ですか?」

「と、友達って言うか、同じクラスってだけなんですけど……」

彼女は亜久里のクラスメートらしい。

「お名前は?」

「森本エルです」

「エルちゃんか。亜久里ちゃんって学校ではどんな感じなんだ?」

「あたしにも教えて!」

晴夜とマナはエルに、亜久里は学校ではどんな感じかと尋ねる。

「はいー!」

「亜久里ちゃんは普段からとっても大人ぽくて、相手が上級生でも、自分が正しいと思つた事は堂々と意見する事が出来て、カッコ良くて……!」

エルは亜久里での学校での事をみんなに話す。

「あたし達という時と一緒だね」

「だから、お姉さんとお兄さん達とも仲良しなんだと思うけど……同じ年の私達には興味が無いみたいで……」

「えっ?なんか気に触る事をしたとか?」

「いえ!無視するとかじゃないんです!」

誰とだつておしゃべりするし、グループ活動だつてちゃんとやるし——

でもそれ以上、深くは付き合おうとしないって言うか……」

(もしかして、戦いに巻き込まみたくないからなのか……)

晴夜は亜久里が学校のみならず深く付き合わないのは、ジコチューとの戦いに巻き込ませたくないからというのが理由だと考えた。

「エルちゃんは、亜久里ちゃんと仲良くなりたいたいだね」

「いえ、別にそんな……」

「そーゆー事なら、お姉さんに任せなさい!」

「出た、幸せの王子……」

「あんまり変な事するなよ?それで失敗した例があるからな」

「大丈夫だよ!」

和也の心配に対してマナが大丈夫だと自信満々に言うと、亜久里が目覚めました。

「亜久里ちゃん!良かった……!」

「森本さん……」

亜久里が目覚めると、隣にクラスメイトである森山エルがいる事に気づく。

「亜久里ちゃんを心配して、一緒にいてくれたんだよ」

「わたくしはもう大丈夫です。特訓を再開しま——」

言葉の途中で晴夜が亜久里の肩を抑える。

「さっき倒れたばかりだろ、これ以上やると本当に身体が持たないよ」

晴夜が亜久里に言うと、続けて六花達も語りかける。

「これ以上無理しちゃダメよ」

「調子の悪い時に無理したら、返って体に良くないわ」

「たまには息抜きも必要です」

「それに、飯を食べる事だつて身体作りに大事だぜ」

「そうそう、『腹が減つてはなんとか』つてな」

「『腹が減つては戦は出来ぬ』だ。いい加減覚えろよ、バカ」

「バカつてなんだよ！バカつて！」

晴夜と龍牙の口喧嘩がまた始まった。

「と言うわけで、今日の特訓はこれでしゅーりよー！」

今晩はエルちゃんと一緒に夏祭りに行くといいんじやないかな！」

マナは今日の夏祭りに行こうとみんなに提案する。

「夏祭り……？」

「うん！花火大会もあるし、スーパースペシャルに美味しいスイーツもあるよ！」

「スーパースペシャルに美味しいスイーツ？！」

……そんな事で釣られるワケには行きませんわ」

亜久里はスーパースペシャルに美味しいスイーツと聞いて目を輝かせたが、すぐに正気に戻る。

「エルちゃんはどうか？」

「あ、亜久里ちゃんが良ければ行ってみたいな……」

「じゃあ決定だね！」

「でも……」

「友達とのお付き合ひも、大切な事だ」

「分かりました……」

「やったあ!じゃあ七時にお祭り広場の階段の所に集合ね!」

「はい!じゃあ亜久里ちゃん、七時に!」

「気をつけなよー!」

エルはみんなに手を振って帰って行つた。

「何故ですか……?」

亜久里が暗夜達にトレーニングを止めるのは何故と問う。

「わたくしもお友達と遊ぶ事は否定したりはしませんわ。」

でも、今はそれよりも他に優先すべき事があるはずです!」

「もしかして、学校で友達を作ろうとしなかったのも、それが理由?」

「その通りです」

「まあ、戦いに巻き込ませたくない気持ちは分かるけど」

「昔の私もそうだった。もちろん、今でもトランプ王国の事は忘れてないわ。」

……でもね、みんなと付き合う事で、多くの事を学んだの」

真琴がみんなのおかげで多くのことを学べたと言う。

「亜久里ちゃん、友達っていいものだよ」

「俺も友達ってのは最高のものだって、こいつに教えられたんだぜ」

龍牙も晴夜のおかげで友達を仲間の大切さを学べたと言う。

「分かりましたわ……」

「じゃあ腹も減ったし、朝ご飯も食べに行きますか」

「そうだね。そう言えば朝ご飯まだだったし」

「では行きましょうか」

朝食を取るために、みんなは四葉邸へと足を運んだのだった。

その頃、ジコチュークラブのボウリング場では、リーヴァが苛立っていた。

「キュアエースめ……！私の方が美しいのに、私より目立つなんて……！」

「ムカつくよな」

これまで自分達の邪魔をし、尚且つ自身よりも目立っているエースを邪魔に感じていた。

「それに、ビルドよ！あんなフォームをまだ持っていたなんて！」

更に前回の戦いで、ビルドがハザードフォームでプロス達を圧倒していたことにも悔

しがっていた。

「キュアエースとビルドさえ葬り去ってしまえば、後はどうって事無いのよ……!」

「ムカつくよな」

「……さつきから何食べてんのよ」

「のびーるアイスだ」

「のびーるねえ……そう!それよ!」

グーラのアイスを見てリーヴアが何かを閃いた。

「やらねーからな」

グーラが体を逸らし、アイスはやらないとリーヴアに言う。

「アイツがキュアエースでいられるのは5分だけ!」

そしてビルドのあのフォームは時間になりさえすれば、あとは勝手に暴走する!

のびーるバトルで変身の解除と暴走をすればこっちのモンよ……!」

リーヴアの次の作戦が決まった頃、大貝町では、時が過ぎて夜の七時。晴夜達は待ち合わせ場所のお祭り広場の階段の所へと歩いていった。

ちなみにマナ達四人は浴衣姿だが、晴夜達三人はいつも通り私服だった。

「ちやーんとぬいぐるみのフリをしているのよ」

「二任せるシャル(ケル)(でランス)(ビー)！二二」

シャルル達にぬいぐるみのフリをするようにと警告する。

「大丈夫かな……」

「多分大丈夫だと思うよ。誰も気にしてないようだし」

晴夜の言う通り、みんなはシャルル達をぬいぐるみだと思い込んでいる様子だった。

「エルちやーん！お待たせー！」

先に来ていたエルを見つけ、手を振って声をかける。

「あの……亜久里ちゃんは？」

その頃亜久里は、先に祭りの中心である屋台に一人でいた。

「美味しくそうなスイーツがたくさん！早く食べたらい！」

様々な屋台の食べ物を見て目を輝かせていた。

「円さん？」

亜久里が声が聞こえた方を向くと、一人の少年がいた。

「柴咲さん……」

彼の名は柴咲幻冬。亜久里とエルのクラスメイトの一人である。

「珍しいですね、円さんがこんな所にいるなんて」

「別にわたくしは……」

亜久里が言いかけると、一緒に来ていた友達が彼を呼ぶ。

「じゃあ、円さん。また……」

幻冬はそう言つて亜久里と別れ、友達の方へと向かった。

「亜久里ちゃん見つけ！探したよ〜！」

入れ替わる感じで晴夜達と合流した。

「皆さん遅かったですわね」

「何言つてんのよ、待ち合わせは階段の所でしょ？」

「え？」

「まあまあ。それより浴衣、気合い入ってるじゃん！」

「これはお婆あ様が用意して下さいなんです……」

浴衣の事を照れながらそう話す。

「亜久里ちゃん、浴衣可愛い！」

「ありがとう、森本さん」

「あの……」

「エルちゃんのも、可愛いよね？」

「ええ、可愛いですわ、エルちゃん。ところで、スーパースペシャルな美味しいスイーツって？」

亜久里は小声でマナ達に美味しいスイーツはどこで食べられるのか尋ねる。

「それもだけど、まずはお祭りを楽しもう！」

そんなこんなで、みんなで祭りの屋台を回る。

「あの、金魚すくいしない？」

「金魚すくい？」

みんなで金魚すくいの屋台へと向かい、先にエルが挑戦する。

「やったあ！……あつ！」

出目金を掬うが、紙が破れてしまった。

「なるほど。金魚をすくうから金魚すくいですか……」

「この黒い出目金が欲しかったんだけどな……」

「それなら、金魚すくい荒らしと呼ばれたあたしに任せて！」

マナが腕を捲り上げて言う。

「ウチのは手強いよ」

「行くよ！」

マナが挑戦するが荒らしどころかすぐに失敗し、涙を流した。

「どこが荒らしよ……」

「一瞬だったな」

「よおし、今度は俺だ!」

今度は龍牙が金魚すくいに挑戦する。

「オリヤアアア!」

龍牙が勢いよく金魚を取ろうとするが、すぐに破け。あまりの勢いで水が飛び、和也と真琴に掛けてしまった。

「あれ?」

「龍牙〜!」

「俺とまこびーにかけるって何考えてんだ、コラッ」

「わ、悪い……」

この後、龍牙は二人にかなりしごかれた。

「では私が!」

「お嬢ちゃん、出来るね?」

今度はありすが挑戦する。一瞬ですくい上げ、他の金魚もすくう。

「すごいランス〜!」

だがありすの頭の上に乗っていたランスが落ち、紙も破けてしまった。

「ダメだよ、ぬいぐるみ入れちゃ。しかし、近頃のおもちやをよく出来てるねえ」
金魚すくいのおじさんはランスの腹を押すと口から水が出て、店員の顔に掛かってしまふ。

「次はわたくしが！」

「頑張つて！」

「いい？水面に対し、45度の角度で決るようすくうのよ」

「わかりましたわ。いぎ！」

「あんまり力入れ過ぎたら、すぐに破れちゃうから、気をつけて」

晴夜と六花のアドバイスを受け、亜久里が金魚すくいに挑戦する。

「たあああああつ！」

やはり力を入れ過ぎてすくったので、紙は破け、亜久里とエルは濡れてしまった。

「亜久里ちゃんズブ濡れ……」

「エルちゃんもですわ……」

濡れたお互いの姿をみて二人は笑い合ふと、今度は射的に挑む。

「当たった！……あ、残念！下に落ちなきやダメなんだよね」

「よーし……！」

真琴も射的に挑戦する。

「まこぴーがまこぴートランプを狙ってる!」

真琴が自分の姿が写ったトランプを狙う。

狙い撃ったが、左に逸れてモグラのこけしに当たって落ちた。

「まこぴートランプは俺が貰う!」

まこぴートランプの欲しさに今度が和也が挑戦する。

しかし十発も挑戦するが、一発も当たらなかった。

「何故だ〜!何故当たらん〜」

「ただ狙うだけじゃダメよ。弾道を計算しないとね」

メガネをかける六花がカエルのぬいぐるみを狙う。

「早く撃ちなよー」

マナが肩を叩くと慌てて撃ってしまい、真琴と同じモグラのこけしが当たってしまった。

「そんな〜……」

六花が悲しむと今度は亜久里が挑戦する。

「わたくしがエルちゃんのお雪辱を果たしますわ!」

「頑張つて!」

「いざ! (エースショット!ばきゅん!)」

一発でエルが当てたおもちゃを落とした。

「凄い亜久里ちゃん！」

「じゃあ俺もやるか」

晴夜も一発で当てた。ビルドで銃の扱いには慣れていた為であろう。当てたのはカエルのぬいぐるみだったが、晴夜はそれを六花に渡す。

「え？ いいの？」

「これ欲しかったんだろ？ あげるよ」

「何だか悪いわね」

六花は晴夜からカエルのぬいぐるみを受け取った。

「良かったケルね、六花」

六花がぬいぐるみを貰うといきなり和也が頼み込む。

「晴夜！ 頼む、まこぴートランプを取ってくれ！」

和也が晴夜に自分の欲しい下品を取ってくれと泣き寝入りする。

「いつものように心火を燃やして自分で取りなよ……」

呆れながら言うと、和也は本当に心火を燃やしてまこぴートランプを取ろうとまた挑戦するが、結局当たらずに終わった。

一通り回るとみんなは待ち合わせの階段に座る。

「あ〜……って、いつまで拗ねてんだよ」

まこぴートランプを手に入れなかった事に和也は暗くなっていた。

「何故だ、何故当たらなかった……」

和也が暗くなっている間にみんなはかき氷を食べる。

「美味しい〜……でも、これは普通のかき氷。スープースペシャルに美味しいスイー
ツって……」

「食べる?」

「い、いえ……」

「はい」

エルが食べていた抹茶味を一口貰う。

「美味しい〜!甘いあずきの効いた抹茶を包み込んで、ブラボーですわ〜!

わたくしのも食べて下さい!」

「うん!」

亜久里はいちご味のかき氷をエルに分ける。と二人の顔から笑顔で笑い合う。

「いい笑顔だな」

「よーし!みんなで食べ合いっこしよー!」

「グッドアイデアですわ!」

「スイーツに関しては素直なんだから」

マナのアイデアでみんなでかき氷の食べ合いっこをした。和也もまこぴーのかき氷を分けて貰うと、ようやく元気を取り戻した。

「不思議ですわ。最初の一口より、皆さんから貰ったかき氷の方が美味しいですわ」

「それはね、みんなで食べてるからだよ」

「みんなで？」

「一人でより食べるよりもみんなで食べた方が美味しいだろ？」

「もしかして、スープースペシャルに美味しいスイーツと言うのは……」

亜久里の質問にみんなは笑顔で返し、それに対して亜久里は理由を理解でき、それからしばらく、みんなでかき氷を食べていた。

その頃、花火大会が始まり出そうと考えたみんなが集まり出すと、一人の少年が不満そうな顔をしていた。

「チエツ、コイツらがいなけりや、花火大会を一人占め出来るのに」

そう眩くと少年のプシユケーが黒く染まり出す。

「でも、みんなで見た方が楽しいか……」

しかしそう眩くと、少年のプシユケーは黒く染まらなくなる。

「独り占めしちまえば」

「いいじゃない。あなたの望み」

「倍にして叶えてやる!」

突然現れたリーヴァ達二人が指を鳴らすとプシケが真っ黒に染まり、少年から取り出される。

「「暴れる!お前の心の闇を解き放て!」」

「「さらに、ブロスちゃん達もよろしく!」」

闇を加えたプシケから祭りジコチューが生み出され、リーヴァのシルクハットからエンジンブロスとリモコンブロスが現れ、お祭りの会場で暴れる。

「ジコチューシャル!」

「亜久里は、エルちゃんど!」

「エルちゃん、逃げましょう!」

晴夜の指示でエルを亜久里に任せて逃がした。

「みんな!行くよ!」

「「うん!」」

「ええ!」

「「ああ!」」

マナが言うと、晴夜達はドライバ―を装着し、ボトルを差し込む。マナ達四人はコミュニケーションにラビ―ズをセツトする。

『ラビツト！タンク！ベストマッチ！』

『ドラゴンゼリー！』

『ロボツトゼリー！』

三人はボトル差し込みドライバ―のレバ―を回し、下ろした。晴夜の前後からランナ―が、龍牙と和也の下からビ―カーが出現した。

『Are you ready?』

「変身！」

「プリキュア！ラブリンク！」

七人が叫ぶと晴夜達の身体に形成されたアーマ―が装着され仮面ライダーへ、マナ達の身体が光に包まれ、光から現れると四人はプリキュアへと変身した。

『ラビツトタンク！イェーイ！』

『ドラゴンインクローズチャ―ジ！』

『ロボツトイングリ―ス！ブラア！』

『みなぎる愛！キュアハ―ト！』

『英知の光！キュアダイヤモンド！』

「陽だまりポカポカ!キュアロゼッタ!」

「勇気の刃!キュアソード!」

「**二**「響け!愛の鼓動!ドキドキプリキュア!」**三**」

「愛を無くした悲しい夏祭りさん!このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻して見せる!」

胸にハートマークを作り、リーヴァ達に名乗りを上げる。

「現れたわね、プリキュアに仮面ライダー!」

「俺達がプロス達が止める!ハート達はジコチューを!」

ビルドの指示により、ライダー組はプロス達を、ハート達でジコチューを止める。

「ん?ターゲットがいねえぞ」

「ちよつと!キュアエースはどうしたのよ!」

「たとえキュアエースがいなくても!」

「私達だけで戦えるわ!」

「生意気な……!やっておしまい!」

水ヨーヨーをかわしてハートとダイヤモンドがダブルキックを放つが、跳ね飛ばされる。今度はロゼッタとソードが迎撃するが、腕のライフルから放たれたコルク弾を受けて

しまう。

(みんなが……)

「いたぞー！」

「ターゲットはここよー！」

階段の上の神社へと逃げる亜久里とエルはリーヴァとグーラに見つかってしまった。

「エルちゃん、逃げてー！」

そしてジコチューが腕のニードルで亜久里に攻撃した。

当たらなかったものの、階段が崩れて落ちてしまいそうな状況となった。

落ちてしまいそう、と言ったのは、落ちる途中でエルが亜久里を助けたからだ。

「わたくしの事はいいから逃げてー！」

ビルド達も、助けに行きたいがジコチューとブロス達が邪魔で亜久里を助けに行けな

い。

「今の内にトドメを刺すのよー！」

ジコチューが亜久里にトドメを刺そうとした次の瞬間、突然誰かがジコチューの攻撃

から亜久里を守り、カウンターを与えた。

「あなたは……！」

「ローグ……！」

守ったのは、前にビルド達を助けた仮面ライダーローグだった。

「あの仮面ライダー、また邪魔を！」

『クラックアップファイニッシュ！』

ローグのパンチが祭りジコチューを吹き飛ばす。

「プリキュア! スパークルソード！」

その際にソードがリーヴァとグーラに向けてスパークルソードを放ち、亜久里から遠ざける。

「手を離してエルちゃん！」

「離さない! 私、亜久里ちゃんと友達になりたいんだもん！」

エルが亜久里の手を強く掴む。

「何でそこまで……?」

「亜久里ちゃんは私を助けてくれた！」

私に気にかけていたくせ毛を男子にからかわれた時、助けてくれた!

とつても嬉しかった! だから今度は私が助けるの!」

「わたくしの一言をそんなにも大切に……」

愛が……溢れて来ます……!」

亜久里が呟くと今度はローグが亜久里の手を掴む。

「あなたまで……」

「見捨てたりしない！ここには君が必要な人が沢山いる！」

ローグとエルは力を振り絞り、亜久里を救った。

「ありがとう、エルちゃん」

「亜久里ちゃん……」

「それと、あなたもありがとうございませす」

「早く逃げろ、ここは危険だ」

ローグは二人に早く逃げるように伝えると、戦いの方に向かう。

「エルちゃん、わたくしには秘密があるんです。でも、それが何かは言えません。それでもわたくしを信じてくれますか？」

自分を信じてくれるのかとエルに尋ねる。

「信じるよ！あたし、亜久里ちゃんの事信じる！」

「では、目を閉じて待っていてくれますか？」

「うん！」

エルは目を閉じて亜久里の無事を祈った。

「アイちゃん！」

「きゅび！」

「プリキュア!ドレスアップ!」

「きゅぴらっば〜!」

アイちゃんから出た光から箱が現れ、その後七つの炎のシルエットに包まれると、姿も大きく成長し、炎から現れるとキュアエースとなる

「愛の切り札!キュアエース!」

「美しさは正義の証!ウインク一つで、あなたのハートを射抜いて差し上げますわ!」
いつもの決め台詞を言い、キュアエースが現れる。

「キュアエース!」

「現れたな!」

「5分後へのびーる攻撃よ!」

そう言うってからリーヴァは砂時計を反対に回し、エースに向けてヨーヨー攻撃、射的コルク、リーヴァとグーラの光線が放たれるが、エースは次々と躲す。

だが、隙を狙われて輪投げで拘束されたエースは悲鳴をあげ、地面に落ちてくる。

「「キュアエース!」」

「1分経過。あと4分で変身解除よ!」

「そしたらプリキュアを全滅させ、人間どもからプシケを抜きまくってやる!」

エースは祈るエルの姿を思い出す。

「エルちゃんはわたくしを信じて待っていてくれます。その為に、わたくしは戦います！」

立ちあがるとエースは赤いオーラを纏い、リングを粉碎する。

リーヴァとグーラはそれを見て驚く。

「エルちゃんだけではありません。わたくしの大切なお友達に手を出したら……ただではおきません」

エースはジコチューに向かってジャンプをして殴り飛ばし、ジコチューは月をバックに舞う。

その影響で、ハート達の拘束も解除され、プロス達と交戦中のビルド達が駆けつける。

「みんな、大丈夫！」

「うん、エースのおかげで助かったよ」

疲れた顔の四人を前に降り立つエース。

「わたくしを夏祭りに誘った訳が分かりましたわ」

エースが言うともんなは顔上げて語る。

「これまでのわたくしは、自分の思いで一杯でした。

でも、私の事を大切に思ってくくれる人が傍に居る事に気付かされました。そして、そのことが私に愛と力を与えてくれることも」

「そうだよ。でもね、最初にその事を教えてくれたのはキュアエースだよね」

「ああ、この最高に大事なことを忘れないでくれたのは、エースのおかげだよ!」
クローズ達も揃って笑って言うと、エースは嬉しそうな顔になる。

「教えていたつもりが、今回は皆さんにしてやられましたね」

エースはそう話すと、振り返って空から降って来るジコチューを見上げる。

「ここはわたくしにお任せ下さい!」

「……手を貸そうか」

ローグが手を貸そうかと言うと、「頼みますわ」とエースは了諾した。

「なら、俺達はコイツらをなんとかしますか!」

ジコチューはエースとローグに任せ、ビルド達は再びブロス達へと挑む。

だが、ビルド達三人はかなり手を焼いている。流石にこちらのデータを持って戦っているだけはある。

「さあ、ビルド、早く暴走しちやいなさいよ」

「残念だけど、その必要はない」

しかしビルドはハザードトリガーを使う必要がない言い出す。

「俺は何回も戦っている相手には研究するタチでね!こいつらの攻略はすでに出来ている」

そしてビルドドライバーに取り出したボトルを差し替える。

『クジラー！消防車！』

ボトルを差し込むと、ドライバーのレバーを回しアーマーが形成された。

『Are you ready?』

『ビルドアップ！』

形成された二つのアーマーがビルドに装着された。

「勝利の法則は決まった！」

決め台詞を言うと、消防車のアーマーのホースから水を放つ、するとエンジンブロスの動きが悪くなる。

「歯車つてのは、ちよつと水をかけると動きが鈍くなるモンなんだよ！」

ビルドが理屈を語っている間にグリスがエンジンブロスに攻撃する。

「んじゃ、カッコつけるために俺がトドメを刺す！」

グリスがとどめを刺すと言ってグリスさらにエンジンブロスに攻撃を仕掛ける。

「こつちも負けてらんねえ！」

クローズも負けてられず、リモコンブロスに立ち向かう。

「無駄よ！アンタの攻撃でやられるブロスちゃんじゃあ…『オラッ！』なに！」

リーヴアが言いかけてる内にクローズがリモコンブロスを押し始める。

「どうした!そんなモンか!」

「行くぞ!今日は八つ当たりだ!」

グリスがドライバーのレンチを下ろし、高くジャンプした。

『スクラップファイニッシュ!』

グリスの肩のパーツから放たれた黒い液を加速に利用し、スクラップファイニッシュのライダーキックでエンジンブrosを吹き飛ばす。

『Ready go!』

「こつちも行くぜ!」

今度はクローズがツインブレイカーにクローズドラゴンを差し込み、ビートクローザーも出現させ、ロックボトルを差し込む。

『スペシャルチューン!ヒッパレー!ヒッパレー!ヒッパレー!』

グリッPEndを3回引つ張り、ビートクローザーは鍵の剣へと姿を変える。

「くらえ!」

『メガスラッシュ!レッツブレイク!』

ビートクローザーから放たれたエネルギーをツインブレイカーから出現した龍との合わせ技をリモコンブrosにぶつける。

「バカな!ブrosちゃん達が!」

ビルド達三人の結束でプロス達は完全に機能停止した。

「あちら、終わったな」

「ええ！では、こちらも！」

「彩れ！ラブキッスルージュ！」

エースはルージュを唇に塗り、相手に向かってキスを投げると、前方にハート形のエネルギー体が生成される。

ローグは自分の銃に、ドライバーに差してあったボトルを差し込む。

『クロコダイル！』

「ん？あの武器、スタークが使っているのと似ている？」

ビルドはローグの銃を見て、スタークのトランスチームガンと似ていることに気づく。

ローグの持つトランスチームガンに似た、紫がメインカラーで金の装飾と緑の歯車の着いた銃——『ネビュラスチームガン』をジコチューに向ける。

「ときめきなさい！エースショット！ばきゅくん！」

『ファンキーブレイク！クロコダイル！』

ローグとエースの技が同時に決まりジコチューは浄化され、元のプシケーに戻った。

プシユケーが持ち主に戻ると同時に、周りが元に戻った。

「おいおい、3分も持たねえ上にビルドは暴走しなかったじゃねえか」

「うっさいわね!のびーる攻撃は失敗よ!」

作戦が失敗するとリーヴァとグーラは撤退し、ローグもこの場から去ろうとする。

「待て!お前、スタークとなんか関係があるのか?」

ローグの使った武器を見てスタークとなんらかの関係があるのかと思ひ尋ねるが、ローグはビルドの質問に答えず、結局そのまま去っていた。

「エルちゃん、もう大丈夫ですわ」

「亜久里ちゃん……!」

変身を解いた亜久里がエルの元に戻る。

「良かった……!無事で……!」

亜久里の無事を確認したエルは抱き着き、涙を流して喜んだ。

戦いが終わり、仲良く手を繋ぎ花火を見る亜久里の表情は、優しい少女の素直な笑顔だった。

そして、その様子を遠くから見ている少年がいた。

「円さんが、変身した……」

柴崎幻冬、彼の手には紫のボトル——『クロコダイルクラックフルボトル』が握られていた。

「この力と何か関係があるのか？それとビルドが言っていたスタークって……？」
晴夜達が仮面ライダーローグの正体を知るのは、まだ先の話のようだ。

次回！Re. ドキドキ&サイエンス！

第33話 パートナーとしての役割

第33話 パートナーとしての役割

今日みんなは、ソリティアで平穏なひと時を過ごしていた。

そんな時…

「ダビィ先生！」

「先生？」

シャルルがいきなりDBのことを先生と言い出した。

「どうかシャルルに、変身の仕方を教えて下さい！」

ソリティアの下ではシャルルがDBに変身の仕方を教えてくれと頼み込んだ。

「変……？」

「身……？」

「シャルルもダビィみたいに人間に変身したいシャル！」

「いきなりどうしたの？」

「この姿だと、マナのお手伝い出来ないから……」

あたし、人間になってマナのお手伝いしたいシャル！」

シャルルが人間になりたかった理由は、この前マナのために生徒会の仕事を手伝おう

としたが、何も出来なかったからであり。人間になれば、マナを手伝えるところからである。

「なるほどね。そう言う事なら——」

「「ダビイ先生！」」

今度はラケルとランスもDBに寄ってきた。

「僕にも教えて下さいケル！」

「ランスも人間になりたいランス〜」

ラケルとランスも頼み込む。

「「お願いします〜！」」

三匹は土下座して頼み込んだ。

「でも、人間の姿になると飛べなくなるし、通信も出来なくなるし、他にも妖精なら出来る事が出来なくなるかもしれないわよ」

DBが人間になった時のデメリットを教える。

「それでも、マナを助けたいシャル！」

「僕も六花のお手伝いをしたいケル！」

「ランスもでランス〜」

それでもなりたいたいと頼み込む。

「分かったわ。じゃあやってみましょ」

「わーい！」

「ただし、人間になるのって凄いパワーを使うから、最初は一時間ぐらいにしておく事」

「はーい！」

「では……へんしん！」

一度元の妖精の姿に戻り、ダビイが妖精の姿から再びDBへと姿に変わった。

「凄いシャル！」

「一瞬で変身しちゃったでランス」

「でも、どうやったかよく分からなかったケル……」

「大丈夫。本当に大事なものは心から変身したいと願う気持ちだから」

「心から変身したいと願う気持ち……」

「ええ。まずはなりたい人間をイメージして、そして強く願うの」

三匹は人間になりたいと強く心に願う。

（マナみたいな女の子に……）

（六花と同じ年ぐらいの男の子に……）

（カッコいい男子に……）

（（なりたい！））

そう願ったその時シャルル達が光り出し、姿を変えた。
だが人間では無く、シャルルはヤカンに、ラケルは椅子に、ランスは長靴に姿を変えた。

「何これ椅子!?!?」

「何で長靴?」

「あたしなんてヤカンシャル!」

人間の姿からかなりかけ離れた方に変身してしまった。

「みんな、もっと集中してイメージジしてみて」

DBに言われもう一度強く願う。

（今度こそ人間に!）

（人間に!）

（人間に……!）

「「へーんしん!」」

もう一度シャルル達が光り出し、姿を変えた。

今度は先程とは違い、ちゃんとした人間の姿となった。

「わーい!変身出来たシャル!」

変身出来たシャルルが喜びの声を上げる。

「でも僕、チビツ子になっちゃったでランス〜」

「ランス末っ子だしね」

「僕長男なのに、何でシャルルよりチビツ子ケル!?」

「でもみんな、最初にしては上出来よ。とは言え慣れてないんだし、くれぐれも人間でいる時は一時間ぐらいに——」

D Bが説明している間に既にシャルル達は上に行ってしまった。

「「じゃーん!」」

「え? 誰?」

「迷子か?」

いきなり、現れた子を見てみんなが思っていると。

「シャルルだよ!」

「ランスでランス〜」

「僕だよ分かる?」

「え?」

『ええ〜っ!?』

みんなの目の前に現れた三人が人間になったシャルル達だったという事に驚いた。

「ホントにホントにシャルルなの!?」

「シャル！」

「本当にラケル!?？」

「そうケル！」

「僕達ダビイみたいに人間に変身したでランス〜」

「凄いですわ！」

「まさか、変身出来るなんて……」

「ビックリ過ぎて、何も言葉が出ねえ」

全員、シャルル達の姿を見て驚いて言葉が出なかった。

「みんな、一つ聞かせていただきますか?どうして人間になったのです?」

亜久里がシャルル達がなぜ人間になったのかと尋ねる。

「えーつと……僕、前から六花と一緒に勉強したり、運動したりしたかったケル！」

「いいねえ、青春だね！」

「ランスは、ありすに子守唄を歌ってあげたいでランス〜」

「嬉しいですわ」

「はーい!はいはーい!シャルルはマナのお手伝いをしたいシャル！」

「シャルル……」

(そういえば、この前手伝えなくって、落ち込んでたよな)

晴夜はこの前、シャルルがマナの仕事を手伝えなかったことを思い出した。

「シャルル、マナの事忙しくて可愛そうって言ってたものね」

「ありがとう！」

マナがシャルルを抱き締める。

「そう言う事だから、この子達の想い、認めて貰えるかしら？」

アイちゃんを抱えたDBが上に来る。

「私からもお願いするわ」

「俺もいいと思うけど」

晴夜と真琴も亜久里に認めて貰う様に言う。

「分かりました。これも妖精達の成長の証。各々、人間としても、パートナーをサポートしてあげて下さい」

「はいー！」

亜久里から許可を貰い、シャルル達はこれから人間としても支えると返事をする。

その夜。マナの部屋ではシャルルはホチキスで資料をまとめる作業を終わらせた。

「はい、マナ」

「え？おおっ！凄くいい！上手に出来たね！助かるよ！」

マナの仕事を完璧にこなしていた。

その頃、菱川家ではラケルが手伝いしようとして張り切る。

「よし！まずは宿題を終わらせるケル！」

「ああ、宿題ならもう休み時間に終わらせたわ」

「えっ!?？」

ラケルは六花の宿題をやるうとしたが、既に学校で終わらせていた。

「じゃ、じゃあ晩ご飯作るケル！」

「それも今朝仕込み済ませちゃった」

晩ご飯を作ろうとするが、既に朝の内に仕込みを終わらせていて、手伝える事が既に無かった。

「流石は六花……僕、役に立てないケル……！」

「そんな事無いって。一緒にいてくれるだけで嬉しいし」

「でも……」

ラケルは六花の手伝いが出来なくて、悲しんでいた。

一方、四葉邸でのランスとはいうと……

「あります、子守唄で寝かしつけてあげるでランス〜」

ランスが子守唄を歌ってありますを寝かしつけるが、逆に自分の方が眠ってしまった。

「やはり眠ってしまったわね」

「ええ、可愛らしいですわ。まるで、小さな弟が出来たようで」

「はい」

「あります、お布団かけてあげるでランス〜……」

ランスは夢の中で、ありますを寝かしつけているような可愛らしい寝言を放つのだった。

翌日、マナ達は学校へと向かっていた。

「今日もマナのお手伝い頑張るシャル！」

「ありがとうね、シャルル」

「今日は、なんか機嫌がいいね」

「マナの役に立ててるようで良かったビィ」

マナの仕事を手伝えることにシャルルは上機嫌だった。

「僕は全然、六花の役に立てなかつたケル……」

一方のラケルは六花の手伝いが出来なくて落ち込んでいた。

「言ったでしょ。一緒にいてくれるだけで嬉しいって」

六花の言葉を聞いて、ラケルは開き直った。

「よーし！ だったら僕、六花の傍を離れないケル！」

「シャルルはもつともーつとマナのお手伝いをするシャル！ 早く放課後になって、マナのお手伝いしたいシャルよ〜！」

「シャルル、すつごく嬉しそうね」

「マナの力になれることが嬉しいんだよ」

「あたしもキュンキュンだよ〜！」

そして放課後となり、生徒会室へと仕事を始める。

「わーい！ 放課後シャル〜！ へん……しん！」

昨日とは違い、今日は制服姿へと姿を変えた。

「いいなあ……僕も変身したいけど、小学生になっちゃうし……」

（まあ、小学生の姿じゃあ、ここだと無理があるからな〜）

「ラケルの分まで、シャルルが頑張るシャル！」

張り切っていると、副会長の十条が生徒会室に入ってきて、シャルルに気づく。

「会長、その子は？」

「えーつと……臨時でお手伝いをお願いしてる……」

「シャルルです！よろしくお願ひしますシャル！」

「シャル？」

「じゃなくって、よろしくお願ひしまーす！さあ、何でもお仕事頼んで下さーい」

「じゃあこの書類、ホチキスでまとめてもらえないかな？」

「シャルルにお任せ！」

シャルルは頼まれた仕事をすぐに始め、数分経つと…

「えーつと……」

「出来ましたー！」

「早っ！」

驚くほど早く作業を終わらせた事に驚く。

「次は何をすればいいですか？」

「それじゃ、文化祭で使う備品をチェックしてもらおうかな」

「はーい！」

今度は文化祭の備品のチェックをしに、備品が置かれている部屋に向かい…

「終わりましたー！」

「早っ！」

これも早い内にシャルルは終わらせた。

「しかも完璧……！流石会長のお知り合い、素晴らしい助っ人ですね！」

しかもミス一つ無く、まさに完璧だった。

「でしょ？シャルルにはいつも助けてもらってるんだ」

「それに、似ていますねお二人は。まるで姉妹みたいです」

「おーい相田、ちよつといいか？」

「はい、何でしよう？」

クラス担任の城戸先生が生徒会室に入る。

「第二中学の生徒会長に、大至急これを渡して来てもらいたいんだが、行けるか？どうしても必要な書類らしくてな」

書類の入った封筒をマナに渡す。

「行きます。任せて下さい！」

「じゃ、頼んだぞ」

「はい！」

「でも会長、この後文化祭の打ち合わせが入ってますし、バレー部の助っ人も頼まれているんじゃない……」

「そうだった！」

この後に文化祭の打ち合わせとバレー部の助っ人を頼まれていた事を、マナはすつか

り忘れていた。

「あーもう、体が二つ欲しいよ……」

「シャルルにお任せ！お届け物、あたしが行って来ます！」

マナから書類を受け取ったシャルルは第二中学へと向かった。

「大丈夫かな？」

六花はシャルル一人に任せた事に心配がる。

「俺が付いてくよ。何かあったら連絡するよ」

「じゃあ、晴夜君お願い」

晴夜はシャルルの後を追いかけた。

しばらくして、シャルルと合流し、そのまま一緒に第二中学へと向かう。

「一人で大丈夫シャルよー」

「何かあるかもしれないからだよ」

歩きながら話していると、階段のあたりで重そうな荷物を運んでいたおばあさんが見えた。

「大丈夫ですか？」

晴夜とシャルルがおばあさんの元に駆け寄り、重そうな荷物を一緒に階段の上まで運ぶ。

その後は、子供が道路に飛び出そうしているところを助けようとし、トラックの上に渡す書類を投げてしまい、二人に急いで追いかけた。

その頃、第一中学の体育館ではバレーの試合が始まろうとしていた。

「遅いなあシャルル、大丈夫かな……？」

「晴夜君が付いてくれたから、大丈夫だと思っけど？」

二人は晴夜とシャルルの帰りが遅くて気になっていた。

（いいなあ、一中は強くて。ウチの学校負けてばっかりだし。今日こそはズルして勝ちたい！）

一方、一人のバレー少女が心で呟くとプシユケーが黒く染まり出す。

（でも、正々堂々と戦って勝たなきゃ、意味無いか……）

そう言ううとプシユケーは染まらなくなった。

「そうか？」

「ズルしてもいいんじゃない？」

「あなたの望み——」

「倍にして叶えてやる！」

少女の元に現れたリーヴァとグーラの二人が指を鳴らすと同時にプシケケが真っ黒に染まり、取り出される。

「暴れる！お前の心の闇を解き放て！」

闇を加えたプシケケからバレーボールマシンジコチューが生み出された。

「ジコチュー!!？」

「またあの二人だわ！」

「やれ！ジコチュー！」

「試合ごとブツ壊しちゃって！」

「弾丸サーブ！」

ジコチューは口からバレーボールを出し、サーブを放った。

その頃、違う場所にいた龍牙達にもジコチューが現れたと連絡が来る。

「闇の鼓動が聞こえるビィ！」

「えっ!!？」

「マジかよ！」

「闇の鼓動でランス〜！」

「行きましょう！」

「場所は……マナ達の学校か！」

龍牙達四人も急いで大貝第一中の体育館へと向かった。

「マナ！六花！」

「大丈夫ですか！」

龍牙と和也、ありすと真琴がマナ達の元に来る。

「つたく、懲りねえ奴らだな！」

「うん！みんな、行くよ！」

マナの掛け声で全員がドライバーとコミュニケーションを構える。

「プリキュア！ラブリンクー……って、シャルルいないんだった！」

マナはプリキュアに変身しようとしたが、シャルルはまだ戻って来てなかったの
で、変身したくても出来なかった。

「もしかして、人間の姿のままにいるビィ!?」

「うん、あたしの仕事手伝ってくれて……」

「だとすると、闇の鼓動が聞こえて無いのかもしれないビィ！」

「早く、晴夜君に連絡しないと！」

「あたし、連絡してくる！」

「ああ、ここは俺たちに任せろ！」

「早く、晴夜に連絡しろ！」

「ゴメンね、行って来る！」

マナは晴夜に連絡しようとして体育館を出ると、龍牙と和也はドライバーを装着し、六花、ありす、真琴はコミュニケーションにラビーズをセットした。

『ドラゴンゼリー！』

『ロボットゼリー！』

龍牙と和也がスクラッシュゼリーを差し込み、レンチを下ろすと、五人が高々と叫ぶ。

「変身！」

「『プリキュア！ラブリンク！』」

龍牙と和也の周りにピーカーが出現し、液体が二人の体を包み、ピーカーが割れるとアーマーとスーツが装着され、六花達三人は光に包まれ、光から現れると髪と服も変わりプリキュアへと姿を変える。

『ドラゴンリンクローズチャージ！ブラア！』

『ロボットリンクグリス！ブラア！』

「私達が相手よ！」

「行くぜえ！」

変身を完了し、五人がジコチューに向かって走り出す。

「よーし、試合開始だ！」

グーラが試合開始を宣言し、同時にリーヴアがジコチューを応援する。
「ミラクル弾丸サーブ！」

ジコチューから放たれた強烈なサーブが五人に炸裂する。

「プリキュア！ロゼッタリフレクション！」

「プリキュア！スパークルソード！」

『シングル！シングルファイニッシュユ！』

ジコチューの放ったサーブをロゼッタはロゼッタリフレクションで弾き飛ばし、ソードとクローズはスパークルソードでシングルファイニッシュユで撃ち落した。

「トドメですわ！」

「ときめきなさい！エースショット！ばきゅん！」

クローズ達の元に現れたエースがエースショットをジコチューに放つ。

エースショットが命中したことで浄化されると思いきや、ジコチューの顔面が回転し、浄化を無効化にした。

「コートチェンジ！」

「エースショットが効かなかった！」

エースショットが効かなかったことに全員が驚く。

「ソイツの顔は裏表にある」

「片面をやつつけても、もう片面は戦えるのよ！」

「その間にもう片面は復活する。ソイツはコートチェンジを繰り返し、永遠に攻撃出来るんだ」

今回のジコチューは両面同時に浄化する必要があるそうだ。

「どうすれば……」

「大丈夫。もう片面を攻撃すれば！」

「そうですね。わたくしのエースショットと、あなた方のラブリーフォースアローで！」

「でも、ハートがいませんわ……」

ロゼッタの言う通り、ハートがいなければラブリーフォースアローは出来ない。

「晴夜の奴まだかよ！」

「今は耐えるしかねえ！」

「今日と言う今日は私達の勝ちよ！」

「勝利のサーブだジコチュー！」

更にジコチューの放ったサーブを六人は受けてしまった。

その頃、みんなが戦っている中、第二中学にいた晴夜とシャルルは。

「やっと届け終わったシャル……疲れたシャル……」

「大変だシャルル！」

届け物を終えて疲れて出てきたシャルルに、校門で待つていた晴夜が駆けつける。

「どうしたシャル？」

「ジコチューが現れて、みんなもう戦ってる！」

マナから連絡を受けた晴夜はシャルルに伝える。

「え？でも闇の鼓動は聞こえなかったシャル……はっ!?？」

『でも、人間の姿になると飛べなくなるし、通信も出来なくなるし、他にも妖精なら出来る事が出来なくなるかもしれないわよ』

シャルルは昨日ダビィに言われた、人間になった時のデメリットとの事を思い出した。

「それで聞こえなかったシャル……」

「ゴメンなさい！ダビィの言う事を聞かなかったあたしが悪いシャル……！」

シャルルが泣きながら謝罪すると、晴夜がシャルルの肩をポンつと叩く。

「悪いのはシャルルじゃないよ。シャルルは、マナのために変身してしたんだろ。それは間違いじゃないよ」

「晴夜……」

「急ごう。みんなの元へ！」

「うん！」

シャルルは妖精の姿に戻ると晴夜はビルドドライバーを装着し、ボトルを差し込む。

『タカ！ガトリング！ベストマッチ！』

レバーを回し、前後にアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身！」

形成されたアーマーが晴夜の体に装着され、音声が鳴り響く。

『天空の暴れん坊！ホークガトリング！イエーイー！』

ホークガトリングへと変身すると翼を大きく広げて飛び、第一中学へと向かう。

第一中学の校門では晴夜達を待っていたマナが既にいた。

「晴夜君！シャルル！」

ホークガトリングフォームのビルドがマナの前に降り立つ。

「遅くなった！」

「ゴメンシャル！」

「ううん、あたしのために頑張ってくれたもの、ありがとうシャルル！」

「マナ……」

「シャルル、行くよ！」

シャルルが、コミュニケーションへと変わりラビーズをセットし叫ぶ。

「プリキュア・ラブリンク！」

マナは掛け声と同時にラブプリコミュニケーションを「L・O・V・E」と描く。

マナの髪が長くなり、頭頂部でハート型に結び金色に変色し、次に衣装がピンク色のコスチュームになり、アームバンドとブーツ、そして腰のリボンが着いて、最後にキャリーにシャルルが入り、キュアハートとなり決めポーズをしながら名乗り上げる。

「みなぎる愛！キュアハート！」

「急ごう！」

二人は急いで、体育館にいるみんなのところへと向かう。

一方、体育館で戦っていたダイヤモンド達は苦戦していた。

「お前そろそろ時間切れなんじゃないのか？」

更にエースのリミットも近づいていた。

「この勝負、いただきだぜ！」

「大丈夫、必ず戻って来る！」

「ええ、必ず！」

ジコチューが攻撃しようとするところそこへビルドとハートが現れ、ホークガトリンガーの連射が決まり、更に体当たりが当たったことでジコチューは吹き飛んだ。

「クライマックスには間に合ったな！」

「みんな、遅くなつてゴメン！」

「ゴメンシャル〜！」

ビルドとハートがみんなの前に現れ、シャルルが迷惑を掛けた事を誤る。

「お待ちしておりましたわ！」

「よし、行こう！」

「このジコチューの特徴は既に聞いた」

ビルドはボトルを取り替え、ドライバーにボトルに差し込む。

『ニンジャ！コミック！ベストマッチ！』

そして、ドライバーのレバーを回した。

『Are you ready?』

「ビルドアツプ！」

『ニンニンコミック！イエーイ！』

ニンニンコミックヘフォームチェンジし、四コマ忍法刀を構える。

「勝利の法則は、決まった！」

ビルドが決め台詞を言うと、クローズとグリスにロックボトルとローズボトルを渡し、受け取るとクローズとグリスが左右に移動し、ツインブレイカーにボトルを差し込む。

『『シングル！シングルフィンッシュ！』』

二人のツインブレイカーからロックボトルのチェーンとローズボトルの鞭がコートジコチューの顔を拘束した。

「な！顔を！」

「言ったろ、勝利の法則は決まったと」

ビルドが四コマ忍法刀のトリガーを押す。

『分身の術！』

ビルドが分身し、ジコチューを四方を囲む。

「皆さんは表の顔を、私は裏の顔を狙います」

「了解！」

ダッシュでジコチューの裏に回り、ビルドは四コマ忍法刀のトリガーを2回押した。

『火遁の術！』

分身したビルド達の刀が炎を纏い、ハート達もラブハートアローを出現させ、ラビー

ズをセットし、エースもルージュを構える。

「プリキユア！ラブリーフォースアロー！」

「エースショット！ばきゅくん！」

ラブハートアローの弓を大きく展開させ、台尻の部分の引き金を引き絞ると、前にハート形のエネルギー体を生成される。

そして、ルージュを唇に塗り、相手に向かってキスを投げ、前方にハート形のエネルギー体が生成される。それと同時にビルドも技を放った。

『火炎切り！』

分身したビルド全員の火炎切り、エースショットとラブリーフォースアローの挟み撃ちでジコチュー爆発し、プシケータに戻った。

「どこが無敵なんだよ！」

「私に文句言わないでよね！」

リーヴァとグーラは口論してから引き上げた。

プシケータが持ち主に戻ると同時に、周りが元に戻った。

「みんな……シャルルのせいで本当にゴメンシャル……！」

「シャルルは忙しいマナのために役に立ちたかったでランス」

「シャルルの気持ち、分かるケル。大好きな人の力になりたいって言う気持ち」

「あたしもだよ。あたしね、シャルルがあたしを助けてくれようとして、本当に嬉しかった。姉妹みたいだって言われた事もね。シャルルの事、本当の妹みたいに思ってるし、大好きだから！」

「マナ……」

マナ達はパートナーのために頑張ったシャルル達との絆を深めると……

「皆さん、妖精達とも絆を深め、更にも上のステージに上れましたわね。ブラボーですわ」
そう言っただけで称える亜久里が、四人の居るベンチゾーンにやってくる。

「亜久里ちゃん」

「時は来ました。あなた達には最後の試練に挑んでいただきますわ」

「最後の試練？」

「晴夜さん、あなたもそこであなたの真価が試されます」

「俺の……真価」

晴夜の真価。それは、ハザードトリガーをその試練で使いこなせるようになるという事だと晴夜は感じていた。

——果たして、最後の試練とは？

次回！Re・ドキドキ&サイエンス！
第34話 最後の試練、逆襲のラビット!!？

第34話 最後の試練、逆襲のラビツト!!？

晴夜達は四葉家の自家用飛行機に乗り、最後の試練の場所へと向かっていた。

「アレ？あの大きい鞆マナの物？」

「うん」

「何を持ってきたの？」

「えへへ、秘密」

マナがそう言っていると、奥からありすが歩いてやってくる。

「まもなく到着ですわ」

「もうすぐか……」

それを聞いてから、真琴と龍牙は亜久里の方を見る。

「ねえ、そろそろ教えてくれない？私達の最後の試練の事」

「そうだけ、これから待っている試練ってなんだよ」

二人が質問すると亜久里は読んでいた本を閉じる。

「この夏の猛特訓で、貴方達は立派に成長しました。」

その総仕上げとして、一万年のプリキュアが手にしたという三種の神器の一つ、水晶

の鏡を手に入れてもらいます」

「『水晶の鏡?』」

「そんな神器が、今から向かう所に存在するなんて」

「俺も、そんなの初めて聞いたぜ……」

「いや、お前はバカだから覚えてないだけだ」

「なんでお前まで言うんだよ! バカって!」

龍牙が反応し、和也の肩を揺らし、いつもの痴話喧嘩が始まる。

「それで、その神器にどんな伝説があるんだ」

和也が三種の神器の伝説はなにかと尋ねる。

「遠い昔、この宇宙がまだ闇に支配されていた時代。伝説の戦士、プリキュアが現れたのです。この世界に愛と平和をもたらすために。」

あらゆる物を貫く光の槍、『ミラクルドラゴングレイブ』。

あらゆる真実を映し出す水晶の鏡、『マジカルラブリーパッド』。

そして、あらゆる知識が積み込まれた黄金の冠、『エターナルゴルデンクラウン』

亜久里は最後のエターナルゴルデンを手に冠のジェスチャーを作って説明するかのようにしており、マナを見た後、みんなを見る。

「それらの神器を駆使して、彼女たちは闇を討ち払ったと言われています」

「そんな物があるなら、調べてみたいかも！」

晴夜は髪を抑えながらいつもの調子になる。

「待つて。聞いた事があるわ、ミラクルドラゴングレイブつて……」

「あ！確か王女様が使つてた槍……！」

その言葉にみんなは驚きの声を上げて反応する。

「確かにトランプ王国の王女は光の槍を持っていたと聞いています」

「王女様はその光の槍でキングジコチューを封印したのですね」

「これから手に入れようとしている水晶の鏡も、その槍と同じ力が込められている？」

「そう言う事です」

すると真琴がため息を吐き、皆は反応をする。その手は震えていた。

「まこぴー？」

「不安なの。もし、ここで失敗したらまた振り出しに戻ってしまう様な気がして」

すると、全員が答える。

「心配するなよ、俺たち全員なら試練なんかには負けねえよ！」

「そうだよ！今日まで頑張ったんだもの」

「マナちゃんと龍牙さんの言う通りですわ」

「そうよ。トランプ王国だけじゃない。レジーナも取り戻さないといけないしね」

それをみて、全員が驚愕する。

「あ、アレは何だケル!?」

「私に聞かれてもわからないシヤルよ〜!」

「嘘だろ……こんなのが実際に存在するのかよ……」

すると、その巨大な何か——ドラゴンの様なモノは翼を強く動かし移動すると、それによつて起きた突風により、飛行機はバランスを崩す。

全員が吹き飛ばされないように態勢を保つのだつた。

その後、飛行機は水上に不時着し、近くの島に暗夜達は降りていた。

「皆〜大丈夫〜?」

「ハイ、何とか」

「死ぬかと思つた……」

そう呟いていると、六花が何かに反応し、皆はそれに反応する。

「どうした?」

「眼鏡なくした……」

六花の発言に全員がガクツとする。

「命と眼鏡、どっちが大切なの?」

「眼鏡……」

眼鏡が大事と言うとまたみんなガクツとなる。

「もう六花つたら〜」

「命より眼鏡か……」

皆が笑い合っている時だった、

「久しぶりだな、亜久里」

亜久里はその声に反応し、聞こえた方へと向く。

他にもその声に反応して見ると、そこには亀の様な甲羅を背負った妖精がいたのだ。

見た限りだと、歳をとっている様にも見える。

「まさか、お前が乗っているとは思わなかったぞ」

「メラン!」

「お知り合いですか?」

「遙か一万年の昔から、水晶の鏡を護り続けてる妖精です」

一万年と聞くとみんなが驚く。

「一万年前から?!?妖精ってそんなに長生きできるの?!?」

「いや、亀の様にも見える。亀は万年という。それが関係しているかもしれない」

晴夜がメランの亀の甲羅を見て推測する。

「僕たちと同じ、プリキュアのパートナーでランスかく？」

「そうなんじゃねえか？」

ランスがそう言っていると、マナと晴夜がメランと握手をする。

「初めまして。私、相田マナです！」

「俺は、桐ヶ谷晴夜」

すると、マナと晴夜はメランの手を両手で握る。

「私達、どうしても水晶の鏡が必要なんです」

「私達は伝説の戦士、プリキュアの名にふさわしいだけの力を身に付けてきました！どうか、水晶の鏡を譲ってください！」

「では、男の貴様ら三人は何だ？」

メランが晴夜達を見ると、晴夜は真剣な目つきでメランを見る。

「俺は、仮面ライダービルド。作る形成するって意味のビルドだ。そしてこいつは仮面ライダークロース、俺の助手！」

「誰が、助手だ！」

晴夜が助手と言い、龍牙が突っ込みを入れてみると和也が仲裁する。

「まったく、お前らよ……俺は沢田和也。仮面ライダーグリスだ」

「ッ!？」

グリスが自己紹介すると、メランは突然龍牙に顔を近づけて見る。

「なんだよ?」

「お前、自分が何者かわかってるのか?」

「はあ? 私は、上城龍牙ですが、何か?」

「……そうか、ならいい」

メランが龍牙から離れる。

(自分が何者か? 一体どういう事だ?)

晴夜はメランが龍牙に聞いた質問の意味を考えていた。

そして、メランが口を開く。

「いいだろう」

その言葉に全員が笑みを浮かべると、メランはマナから離れる。

「そこまで言うのであれば、この私が直々にお前達の実力を試してやろうではないか!」

そう言った瞬間、メランに異変が起き、姿を変え始める。

その姿はどんどん大きくなっていき、それに皆は驚く。

「嘘でしょ……?!!?」

「大きくなってやがる……?!!?」

その姿は、さつき見たドラゴンの姿へと変わったのだ。

それに晴夜達は驚く。

「さつき見た見た恐竜さん！」

「いや、これは、恐竜じゃないぞ……」

「そうよ！ありえないわ！第一（……）」

そう言っている、メランが口から炎を吐き、その炎が上空に舞う。

「恐竜は炎を吐きません！」

「ドラゴンなんて、本当にいたのかよ……ありす？」

和也がありすを見ると、ありすは目を輝かせながらドラゴンとなったメランを見ていた。

「どうした？」

「素敵な怪物さん！セバスチャン！」

「いけません。さあ、こちらに」

ありすが言おうとした事を悟り、セバスチャンがそう言うのと全員はメランから逃げる様に走り出す。メランはそれに気付くと空を飛び、晴夜達の前に降り立つ。

「どうした！怖気ついたか！」

そう言つて尻尾を振り下ろし、晴夜達はそれを何とか躲す。

「そんな事で、よく伝説の戦士を名乗れたものだ。水晶の鏡が欲しければ、この私を倒

してみろー!」

マナ達はそれを聞いて、真剣な顔つきになる。

「これが最後の試練ですか」

「相手にとつて、不足はないわ」

「晴夜君と龍牙君、かずやんは下がって!これはプリキュアの試練だから!」

「わ、わかった」

晴夜と龍牙、和也が下がろうとしたが、メランは晴夜達も見る。

「お前達も来い」

「何?でも、これはプリキュアの……」

「お前達三人の仮面ライダーの力も見せてみろ!お前達が私に勝っても水晶の鏡を渡しやる!」

メランはそう言つて雄叫びを上げ、晴夜と龍牙、和也は仕方なくドライバーを装着する。

「何を考えているのわからんが、行くぞ!」

「行くよ!みんな!」

マナがそう言うと、マナ達はコミュニケーションにラビーズをセットし、晴夜と龍牙、和也はボトルとゼリーをドライバーに差し込む。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

『ドラゴンゼリー！』

『ロボットゼリー！』

三人の周りにライドビルダーとビーカーが出現し、アーマーが形成される。

『Are you ready?』

「変身！」

「プリキュア！ラブリンク！」

マナ達は光に包まれると姿を変え始め、晴夜達はドライバーから形成されたアーマーが体に装着され仮面ライダーへ、そしてプリキュアとなったマナ達が降り立つ。

『ラビットタンク！イエーイ！』

『ドラゴンインクローズチャージ！ブラア！』

『ロボットイングリッド！ブラア！』

『みなぎる愛！キュアハート！』

『英知の光！キュアダイヤモンド！』

『陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！』

『勇気の刃！キュアソード！』

「響け！愛の鼓動！ドキドキ！プリキュア！」

ハート達はいつもの台詞とポーズを行う。

「数をそろえたところで、私には勝てぬぞ。ライダーは何をするかわからんがな」

「数だけではありません！」

「何？」

亜久里の言葉にメランは反応する。

「私も本当の力を手に入れたのです！アイちゃん、行きますわよ」

そう言うとき亜久里は変身へと移る。

「プリキュア！ドレスアップ！」

「きゅびらっばー！」

そう言うとき亜久里はアイちゃんから召喚されたラブアイズパレットにラビーズをセツトし、変身の手順をとると炎に包まれて、姿を変え始める。

そして、炎が消えるとキュアエースとなった。

「愛の切り札！キュアエース！」

キュアエースへと変身を遂げ、三人のライダー、五人のプリキュアはメランを見る。

「では、見せてみる！お前達の力を！」

メランはそう言うとき、口に炎を溜め込む。

それを見たロゼッタがラブハートアローを出現させ、ラビーズをセツトする。

「プリキュア！ロゼッタリフレクション！」

ロゼッタリフレクションを展開し、メランから吐き出された火炎放射を防ぐ。それに反応して、ハートとソードが飛躍する。

「プリキュア！ダブルキック！」

二人は急降下による威力を高めた蹴りを放つ。

「ふん！」

「あああああ！」

メランはすぐに頭を振るい、二人に直撃させると、吹き飛ばされる。

そして、すぐにキュアダイヤモンドがメランの後ろに回り込み、ラブハートアローを構える。

「プリキュア！ダイヤモンドシャワー！」

そして、キュアダイヤモンドが吹雪を起こし、それにより翼が凍り付く。

「どうよ……え？きやあ!？」

だがメランの尻尾で叩かれ、吹き飛ぶと今度はビルドが前に出る。

「ドラゴンなら、こつちも空中戦で勝負だ！」

タカボトルとガトリングボトルを取り出す。

『タカ！ガトリング！ベストマツチ！』

ビルドがボトルを差し替えると、レバーを回す。

『Are you ready?』

「ビルドアツプ！」

形成されたアーマーが新たにビルドに装着された。

『ホークガトリング！イエーイ！』

「ハアツ！」

ビルドは翼を広げてホークガトリングが得意の空中戦へと入り、ホークガトリンガーをメランに向けて、発砲する。

「なんだい？その豆鉄砲みたいな攻撃は！」

しかし、メランにはあまりダメージを与えられなかった。

「効いてないか……ぐわあ！」

メランが尻尾でビルドを叩き落とす。

「だったら、これでどうだ！」

『シングル！ツイン！ツインフィンニッシュ！』

今度は、クローズがツインブレイカーにボトルを差し込み、ビームモードでメランにツインフィンニッシュを直撃させる。

「今のは、かなり効いたぞ！」

「――の割には、余裕だな」

メランは火炎弾をクローズに向けて放ち、その隙に 그리스が後ろを取りドライバーのレバーを下ろす。

『スクラップフィニッシュ！』

グリスのライダーキックがメランに放たれるが、メランはそれを手で止めた。

「何！ぐわあ！」

そのままグリスを掴み掘り投げる。

「和也！なら、今度は炎で勝負だ！」

『フェニックス！ロボ！ベストマッチ！』

ビルドはまたボトルを差し替え、新たなアーマーが前後に形成される。

『Are you ready?』

「ビルドアップ！」

『フェニックスロボ！イェーイ！』

フェニックスロボへとフォームチェンジし、ビルドはドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

『ボルテックフィニッシュ！』

炎を纏ったビルドはメランに体当たりするがメランはビルドの体当たりを避け、その

ままビルドを尻尾で叩きつける。

「(仕方ない……) みんな、ハザードトリガーを使う! バックアップを頼む!」

「わかった!」

ビルドが言うのとハート達が頷き、ビルドはハザードトリガーのスイッチを押す。

『ハザードオン!』

そしてハザードトリガーをドライバーに取り付けると、もう一度ラビットボトルとタンクボトルを差し込む。

『ラビット! タンク! スーパーベストマッチ!』

『ガタガタゴットン! ズツタンズタン! ガタガタゴットン! ズツタンズタン!』

レバーを回すのと同時にビルドのドライバーから漆黒の金型が現れた。

『Are you ready?』

『ビルドアップ!』

金型がビルドの体と重なり、新たなアーマーとなって装着された。

『アンコントロールスイッチ! ブラックハザード! ヤベー!』

金型が離れるとラビットタンクハザードフォームへとフォームチェンジした。

「ほおう、本気になったと言うのか」

「はああああああ!」

ビルドの繰り出す拳がメランを吹き飛ばす。

「なかなかの力だ。じゃが、焦っている攻撃で勝てると思っているのか！」

「ツッ!?」（見破られてる!だが、すぐに決着つけられれば!）」

ビルドがさらに攻撃を仕掛ける。今のところメランとの差はほぼ互角だった。

（もう少しだ……あつ!）

頭を抑え、ビルドの動きが突然止まる。

（やばい……そろそろ意識が……）

自我を失ったビルドは、そのままトリガーのスイッチを押す。

『マックス!ハザードオン!』

スイッチを入れると、ドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

『オーバーフロー!ヤベェイ!』

メランの攻撃を素早く避け、ビルドはメランに黒く染まった拳を叩きつけて吹き飛ばす。

「ダメージを与えた!」

「すごい……」

「押しているわ……」

「確かに凄い力じゃが、自我を失っているようでは意味がない！」

メランが言うのと、立てて続けて攻撃しようするビルドの視界から飛んで消えた。メランへと視線を向けてたその先には、ハート達六人がいた。

そしてビルドは、目に映る全てを破壊しようとするハザードフォームの特性上、ハート達に攻撃を仕掛けようとする。

「不味いわ！早くトリガーを止めないと！」

「任せて！」

「プリキュア！ダイヤモンドシャワー！」

ダイヤモンドシャワーでビルドの足を凍らせて動きを止める。

「今よ！」

「わかった！」

ダイヤモンドの指示でクローズとグリスはツインブレイカーの砲撃を放ち、それによつてビルドからトリガーが外れた。

「はあつ？ くそ、ダメだったか……」

ビルドの意識が戻ると、一旦全員が集合する。

「強い……！」

「バラバラではダメです！皆の力を一つにしなれば！」

「そのようだな」

「行こう！皆！」

ビルドはドライバーに違うボトルを差し込む。

『海賊！電車！ベストマッチ！』

ボトルを差し込み、ドライバーを回した。

『Are you ready?』

「ビルドアップ！」

新たなアーマーがビルドに装着された。

『海賊レッツシャー！イエーイ！』

海賊レッツシャーへとフォームチェンジし、カイゾクハツシャーを構える。

『クローズドラゴン！Ready go！』

『シングル！ツイン！』

「彩れ、ラブキツスルージュ！」

ハート達はラブハートアローを出現させた。ビルドはカイゾクハツシャーを引くと、クローズとクローズドラゴンをグリスは2本のボトルをツインブレイカーに差し込む。更にキュアエースはラブキツスルージュを構える。

「二」プリキュア！ラブリーフォースアロー！「二」

『レッツブレイク!』

『ツインファイニッシュ!』

先にハート達とクローズとグリスの技が決まった。

「ときめきなさい! エースシヨット! ばきゅ〜ん!」

『海賊電車! 発車!』

「はあ!」

次にエースとビルドが放ち、二つの技と一緒にメランに向かう。

「ふん!」

それを見たメランは目を光らせ、バリアを展開する。

それにより五つの技が防がれたが、少しヒビは入っていた。

…だが、それだけだ。

「ん? この程度か?」

「やはり、いつものベストマッチだけでは無理か……」

「最近のプリキュアの実力はそんなものか! 仮面ライダーのパワーはバカにはできないが、これで終わりだ!」

メランは口に炎をため込み、それが吐き出されると大爆発が起きるのだった。

夕方、全員髪がボサボサになっていて、何というか、ドリフ頭になっている。晴夜の場合はドリフと言うか、髪が跳ねすぎだ。

「最悪〜だ……」

皆の視線は亜久里へと向く。

「なあ。亜久里ちゃんは、以前からメランと知り合いだったみたいだけど、何かあるのか？」

和也が亜久里にメランとの関係を聞く。

「プリキュアとして、目覚める以前の話です」

亜久里の言葉に皆は耳を傾ける。

「私は不思議な力に導かれて、この島を訪れた事があるのです。そこで私はメランと出会い、こう言われました」

『水晶の鏡が欲しいだと？アレを手にする事が許されるのは伝説の戦士、プリキュアだけだ。出直すがいい』

「私、一人の力では伝説の戦士と呼ばれるステージに辿り着けない。そう悟った私は共に鍛え上げる事ができる仲間を見つけようと思いました」

「それで私達と一緒に特訓を重ねたのですね」

「けれど……伝説のステージへは思っていたより遠かった」

亜久里が落ち込んでるのを見て、マナの目は力が籠る。

「まだ終わりじゃなああああ！」

「マナ？」

マナは髪を元に戻すと、亜久里を見る。

「二度や二度負けたくらいで諦めてどうするのよ！ここで引き下がったら！たった一度の14歳の夏が無駄になっちゃうでしょう！」

マナはまだ諦められないと、海に向かって叫ぶ。

「セバスチャンさん！」

「ハッ！」

そう言つて、セバスチャンはマナの荷物を取り出す。

「ちよつとマナ？」

「何を持ってきたの？」

六花と真琴がそう問いかけると、マナは自分の鞆をあさり出す。

「見てのとおり、料理の道具。とりあえず、ご飯を食べよう。腹が減つては戦は出来ぬつて言うし」

「マナらしいよ」

晴夜がそう言うのと、マナは亜久里にキャンプで使う炊飯器を手渡す。

「やり方、わかる?」

「いいえ……」

「じゃあ、六花!お願い!私は野菜を剥くから」

「俺も手伝うぜ。料理は得意分野だ」

「じゃあ、かずやんも手伝って!」

「よおし!みんなで始めよう!」

そう言っつて、料理を始めようとするみんなに亜久里は反応する。

「あの!私にも作り方、教えてくださるかしら?」

「合点承知!」

全員で役割を決め、カレーの調理を開始した。

その頃、洞窟内では水晶の鏡を見守るメランがいた。

「これまで何人もの戦士たちがこの鏡を欲して、戦いを挑んできたか。しかし……お前の様な強い心の持ち主は未だ現れない」

呟いていると、何かのニオイに気付き、反応する。

「なんだ、このニオイは」

メランはそう呟いて、そのニオイを辿る。

そして、晴夜達は出来たカレーを食べようとしていた。

『いただきます！』

そう言つて、みんなでカレーを食べ始め、亜久里は一口食べると、大きく反応を示す。
「ツー！なんですか、これ！」

亜久里はそう言つてマナに今自分の食べているカレーについて聞いており、妖精たちからも絶賛である。

そうやって、皆でカレーを食べていると…

「お前達」

「メラン！」

「とつとと立ち去れと言つたはずだぞ。お前達、遊びに来たのか？」

メランはそう言つて、晴夜達に近づく。

(そうは言つても、今は帰る手段が無いけどな……)

晴夜の言う通り、ここに来る時に使っていた飛行機は壊れているため、まだ帰れなかつた。

「まあ、そう言わずに一緒に食べない？カレーは皆で食べるとおいしさが増すんだよ」
そう言つて、マナがよそつたカレーをシャルルが渡しに行く。

「どうぞシャル」

それを受け取り、メランは一口食べると何か反応を示し、また一口、一口と食べ始める。

「どうしたビィ？」

「辛かったケル!!」

ダビィとラケルがメランにどうしたのか聞く。

「……あたしやね、ずっと一人でこの島で暮らしてきた。誰かと一緒に食事するなんて、それこそ一万年ぶりだよ。」

だからかね、さつきから胃袋が驚いちゃまってのさ。誰かと一緒に食べる料理は、こんなにおいしいのかつてね……」

その言葉にマナはカレーに目を向ける。

「あたしもね、このカレーと一緒に食べたい人がいるの。」

あたし、レジーナがどうしているのかわからなくて、心配で仕方がないけれど、それを確かめる術もなくて……」

「マナ……」

マナの言葉に晴夜もレジーナの事を思い出す。そして、今レジーナがどうしてるかも晴夜は知っている。

「ホントなら今すぐにでも、レジーナの事を取り戻しに行きたい。王女様を目覚めさせて、トランプ王国を取り戻したい。」

そのために、もつともつと強くなる必要があるんです!」

「俺も……マナと同じ思いだ。ここで止まるわけにはいかない!」

晴夜も「止まらない」とメランに強く言う。

「あたしにや関係ないね。さ、それを食べたたら帰りな」

「帰えない!」「帰りません!」

「マナ、晴夜君」

晴夜とマナはジッとメランを力強く見つめている。

「私からもお願いします!もう一度、チャンスをください!」

「お願いします!」

「お願いします!」

そう言つて、真琴や龍牙達もメラン頼み込む。

するとメランは晴夜にある質問をした。

「一つだけ聞きたい。お前はなぜわしと戦つた時、生き物と機械の組み合わせにこだわ

る」

「えっ？それは、ベストマッチがそうだから……」

ベストマッチだから有機物と無機物を組み合わせられる、それがビルドの力だと話
す。

それを聞いていたマナがふと口を開く。

「実は、前から思ってたけど。もし、同じ物質のボトル同士で変身したら、どうなるのか
なってる？」

——同じ物質での変身、それを聞いて晴夜は考え始める。

「同じボトルで変身すれば、か……そうだ！」

何かを閃いたのか、ポケットから以前セバスチャンから預かったままの白いラビット
ボトルを出す。

そして、自分のドライバーに2本のラビットボトルを差し込む。

『ラビット！ラビット！』

するとドライバーからラビットのシルエットが二つとも浮かび出た。

「「光った！」「」」

同じボトルでもいけることを確認し、喜ぶと晴夜はハザードトリガーを取り出す。

「よし、いけるか？」

『ハザードオン!』

ハザードトリガーのスイッチをドライバーに差し込み、レバーを回す。

『ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!』

『Are you ready?』

音声が届くと、ドライバーから電撃が出てローラビットボトルが爆破した。

「やっぱ、ダメか……」

「まあ、いきなり試したわけだしね」

ダメだったと全員が思っていたら、晴夜が落ちたラビットボトルを見る。

「いや、同じ成分だから強い干渉が起こった。全ての成分が一つの成分になって凝縮した。」

つまりは全体が収縮した力でやれば……」

正直、晴夜が言っていることが複雑過ぎて誰もついていけなかった。

「ラビットラビットの力に耐えられる装置さえ、出来れば……」

セバスタンさん!手伝って下さい!今からハザードトリガーでも耐えられる装置を作ります!」

「かしこまりました!」

「でもよ、材料がないぞ!」

「材料ならある！」

「えっ？どこに……まさか……」

晴夜は壊れた飛行機の部品を使うと言い。自分の持ってきたカバンを開けると、中から作業用の道具が入っていた。

「こんなの持って来たの!?!」

「よおーし！あたしも手伝う！」

「マナに出来るの?」

晴夜達の姿を見てメランは目を閉じると、みんなを見る。

「あの山の麓に鍾乳洞がある。明朝、そこで決着をつけよう」

『ハイ!』

メランが去ると晴夜は自分の時計を見て、時間を確かめる。

「明朝か、時間がない。みんな手伝ってくれないか?」

晴夜が頼み込むとみんな頷き、シャルル達も人間態に変身して、作業を手伝うと言ってくれた。

晴夜の指示のもと、全員でビルドのパワーアップアイテムを製作が行われる。

その日の深夜。みんなが疲れて眠っている中、マナは目が覚めて立ち上がると、晴夜が

まだ一人で作業していた事に気づく。

「晴夜君、そろそろ寝ないと体に悪いよ」

「うん。でも、もう少し、これでハザードトリガーを最大限に引き出す事が出来る！」

晴夜は必死にパワーアップアイテムの製作に目を向けており、マナはそんな晴夜の姿を見ていた。

「晴夜君、すごいな。一つの事に一生懸命取り組んでいるから」

「俺なんか、全然凄くないよ、父さん達に比べたらまだまだだよ。それよりもマナの方が凄いと俺は思ってるよ！」

晴夜は凄いとマナが言うが本人はそんなことないと答え、マナの方が凄いと話す。

「えっ?」

「誰かの為に一生懸命なれる、どんな人でもマナは握手を交わして、多く人と繋がりを作るマナは凄いや!俺なんかより最高に!」

「!?」

晴夜がマナは自分よりすごいと笑顔に言っていると、突如、マナが胸を押さえる。

(あ……あれ?何、この胸のドキドキ!)

「マナ?どうした?」

「えっ!? えつくと、なんか手伝おうか!」

「じゃあ、その道具取って」

マナが晴夜に作業用の道具を渡す。

(……何だろう、このドキドキ?)

マナは胸を押さえながら、今の自分の状態に疑問を抱いていた：

そして、明朝。洞窟では試練が再び行われているのに、晴夜はまだ作業が終わってなかった。

「晴夜様！まだですか？」

「もう少し……よし！出来た！ハザードの力を最大限に生かすボトルと武器！」

ガラスケースの中には普通より長いボトルが入っており、その横には新たな大剣の様な武器も用意されていた。

「凄いでしよう！最高でしょう！天才でしょ♪」

パワーアップアイテムが完成し、ハイテンションになる。

「じゃあセバスチャンさん、あとお願いします！」

「かしこまりました。ご武運を！」

そして晴夜は急いでみんなが試練を受けている洞窟へと向かった。

一方、洞窟の中では強い地響きが起きていた。

そこには変身したハート達が、ドラゴンとなったメランと戦っていたのだ。

「はあああああ！」

キュアハートが走り出し、一緒に飛躍すると拳を放つが、それを翼で受け止められる。ハートは吹き飛ばされ、壁に激突する。

そこに入れ替わるようにエースが蹴りを叩き込むが、少し怯むだけで、頭突きを叩き込まれる。

「ああー！」

「大丈夫か？」

「ありがとうございます！」

グリスがエースを受け止めると、グリスはクマボトルをスクラツシユドライバーに差し込む。

『チャージボトル！潰れなく！チャージクラツシユ！』

クマボトルの力によりグリスの手が巨大なクマの手となった。

「くらえ！」

巨大なクマの手で攻撃するが、メランはグリスの攻撃を両手で受け止める。

「無駄なことを」

「そいつは、どうかな？」

「何？」

グリスの後ろからクローズとソードが現れ、既にクローズはツインブレイカーにクローズドラゴンを差し込んでいた。

「プリキュア！スパークルソード！」

「これでどうだ！オオラア！」

『レッツツブレイク！』

レッツツブレイクとスパークルソードを至近距離で放った。

だが、メランはバリアを展開し、レッツツブレイクとスパークルソードを防ぐと、一度全員が集まる。

「あのバリアが厄介だわ」

「それなら、私がロゼツタリフレクションをぶつけて、バリアを相殺します」

「一人だと、難しいぞ」

「そうよ」

「なら、四人でやってみよ！ラブリーフォーアローが使えるんだから、ラブリーフォースリフレクションも使えるんじゃないかな」

「試してみる価値はありそうね」

話し合っていると、メランが尻尾を振って攻撃し、全員は飛躍してかわす。

「なら、私とクローズさんとグリスさんとで引きつけます！」

「任せたよ！」

エースとクローズ、グリスがメランを引きつける。

クローズとグリスはタカボトルとヘリコプターボトルをドライバーに差し込む。

『(デイス) チャージボトル！潰れな〜い！(デイス) チャージクラッシュ！』

クローズにタカボトルによる翼が装着され、グリスにはプロペラが装着される。

二人は飛びながら、ツインブレイカーを放つ。

「そんな攻撃が効くか！」

メランが翼で二人を吹き飛ばし、地面へと落とす。

「まだまだ！」

「俺もだ！」

二人はすぐに立ち上がると、グリスはツインブレイカーにボトルを差し込み、クローズはレバーを下ろした。

『シングル！ツイン！ツインブレイク！』

『スクラッシュブレイク！』

「ときめきなさい！エースショット！ばきゅんん！」

エースもエースショットをメランに向けて放つ。

「何度やつても同じ事だ！」

バリアを張り、三人の攻撃を防ぐ。

「今だ！私達の力をキュアロゼッタに！」

ロゼッタの背中に手を当て、ハート達四人の体が光り出す。

「二」プリキュア！ラブリーフオー斯里フレクション！「二」

ロゼッタのラブハートアローから四葉のクローバーの盾が出来る。

「行きますー！」

ラブリーフオー斯里フレクションとバリアが衝突し、メランのバリアにヒビが入り、相殺されるとメランは驚く。

「何？？」

「やりましたー！」

バリアが無くなると、クローズとグリスは走ってメランの下へと走って行き、ドライバーのレンチを下ろした。

「行くぞー！龍牙！」

「おおー！決めるぞー！」

『スクラップブレイク!』

『スクラップフイニッシュ!』

クローズとグリスが高くジャンプし、ライダーキックの態勢に入った。

「はあああああ〜!」

二人のライダーキックが決まり、メランにかなりのダメージを与えた。

「今だ! いけえ! エース!」

エースがラブキツスルージュをメランに向ける。

「ときめきなさい! エースショット!」

エースショットを放とうとした次の瞬間、エースの変身が解除された。

「しまった!?」

「ここですか!」

「5分過ぎたんだ!」

「ふん! 甘いわ!」

メランは雄叫びを上げると翼を動かし、それにより起きた突風に亜久里以外は吹き飛び、壁に叩きつけられる。

「ふん!」

メランはハートに近づき、一気に足で踏みつける。

「「キュアハート！」」

みんなが声を上げると、ハートは押し潰されまいと持ち上げようとしていた。

「どうした、もうおしまいか？ さっきの威勢はどうした？ 大切な仲間を救うのではありませんのか？ 何かを止めようとしていたのではないのか？ お前達の想いはその程度という事か？

そして、あのビルドというものはどうした？ 奴は自分の力が怖くて怖気づいたか！？」

「そんな事……ない！ そして、晴夜君は怖気づいてなんかいない！」

ハートは完全に立ち上がり、そのまま踏み潰されないように耐える。

「あたしは……絶対にあきらめない！」

そして、晴夜君も諦めずここに絶対に来る！」

メランの脳裏に、一人のプリキュアを思い出すと、今度はソードが連続で拳をメラン叩き込む。

「トランプ王国を救うまで負けられない！」

だが、次の瞬間。翼でキュアソードに攻撃が叩き込まれ、吹き飛ばされて、壁に激突する。

次はキュアダイヤモンドとロゼッタが同時に走り出し、メランに蹴りを叩き込み、吹き飛ばす。

「万が一にでも可能性があれば」

「私達は最後まで戦います」

「貴様ら……!」

『『シングルファイニッシュ!』』

音声が届くと、後ろからツインブレイカーをビームモードで放ったクローズとグリスだった。

「俺たちをわすれてるぜ!」

「あんたはさつき、晴夜が怖気づいたって言ったな!」

あいつは、そんな奴じゃない! あいつは誰よりも愛と平和を守るために戦っているんだ!」

「何故、そう思う……!」

「あいつは、俺にとつての最高の相棒だからだ!」

叫ぶとクローズ達の攻撃によりメランは岩へと激突し、ハートがメランの前に立つ。

「私達はもつともつと強くなる。強くなってレジーナに会いに行くんだから!」

自分の信念を叫ぶと、ハートは高くジャンプした。

「生意気な! 喰らえ!」

メランはハートに向けて、口から炎を放った。

「キュアハート！」

だがハートは、そのままメランの放った炎を突破した。

メランの目に映ったその姿は、かつてのパートナーキュアエンプレスの姿が重なり、瞳に映るその姿に驚いていた。

そしてハートのパンチは寸前で止まるが、メランの周囲に旋風を巻き起こす。

動きが止まった後、限界に達したのか気を失って落ちていくと、彼女の変身が解除された。

「マナー！」

メランはその姿を見て何かを思っていると、遅れてきた晴夜が倒れたマナの元へ駆け込む。

「貴様、遅かったな！怖気づいたと思っただぞ！」

遅れて到着した事に気づくと、晴夜はメランの方を向く。

「俺は絶対に逃げない！トランプ王国を取り戻し、レジーナを助けるまでは最後まで戦い続ける！」

メランに自分の戦う理由を強く語る。

「メラン、俺と一対一で勝負してほしい！」

「良かろう！では！」

晴夜が一騎打ちをメランに申し出た。

それを承諾したメランは体を光らせると、人型と同じくらいになっていく。

——その姿は、まるで仮面ライダーのようだった。

「仮面ライダー?」

「あえて言えば、仮面ライダードラグリーン」

銀色にも見える灰色のアーマーを身に纏い、頭部の真ん中に一本の金の角、腹部には赤い宝石の様なものが付いたベルト状の装具が出現し。赤い複眼で晴夜を見ながら、自ら仮面ライダードラグリーンと名乗った。

「ドラグリーンか」

「ここでお前が勝てば、水晶の鏡をお前達に託そう」

「つまり、俺が勝つかどうかで最終試練の結果が決まるのか?」

「そういうことだ」

「晴夜……頼むぞ!」

龍牙は変身解除した拳を晴夜に向け、後ろにいた六花達も強く頷く。

「ああ、任せろ……!」

龍牙が出した拳を晴夜も拳で当てる。

二人の戦いが始まるなか、龍牙達はマナを連れて二人の戦う場から離れる。

「この試練は、俺一人のものじゃない、みんなとの……これまでの成果を見せる！」

みんなの思いを背負いながらビルドドライバーを装着し、ラビットタンクスパークリングを出し、ドライバーに差し込む。

『ラビットタンクスパークリング！』

ドライバーのレバーを回すと、アーマーが形成される。

『Are you ready?』

「変身！」と高々に叫び、二つのアーマーが装着されると、無数の泡を噴出した。

『シユワツと弾ける！ラビットタンクスパークリング！イエー！イエー！』

スパークリングフォームへと変身したビルドはドリルクラッシュヤーと四コマ忍法刀を構えていた。そして、ドラグーンは長剣『ドラグーンセイバー』を取り出し構えていた。

「行くぞー！」

「はあああああー！」

ビルドとドラグーンの武器が衝突し、火花を散らす。

「なるほど、昨日の戦いより腕を上げているな！ならば！」

ドラグーンから翼が出現し、飛びながらビルドに攻撃する。

ビルドはホークガトリンガーとドリルクラッシュヤーをガンモードにし、ドラグーンに

攻撃する。

ドラグーンはそれを全て躲し、ビルドに攻撃を命中させた。

「ぐわあ！」

攻撃は直撃したがすぐに立ち上がって、再びドラグーンに向かって走り出して攻撃すると、鏑迫り合いとなる。

「聞きたいことがある、貴様ら仮面ライダーの力はどうかやって出来ている？」

ドラグーンが仮面ライダーの力は何かと聞く。

「科学だ！」

ビルドが自分達の力の事を強く叫ぶ。

「科学……一万年生きて科学程破滅に通じる道はない！」

「っ!?」

「科学がもたらすものは、人間の愚かな行為による破壊！それが科学が破滅する道だ！」
「っ!!? そんな事はない！科学は人を幸せに出来る！平和利用出来る！俺は科学の可能性を信じてる！」

拳をぶつけながらビルドが科学の力を強くドラグーンに言う。

そして、二人が一定の距離を取る。

「では、お前のあの暴走装置はどう説明する？」

自我を失うような物を、どう平和に利用する」

ドラグーンはハザードトリガーをどう利用するのかと問う。

「あれは、禁断のアイテムだ！本当は作っちゃいけないかった！」

「では、なぜ貴様の父はそんなものを作った！」

そんなものを作れば、多くの人が傷つくとわかりながら作ったなど、やはり科学は破壊する道だ！」

ドラグーンが剣でビルドに攻撃しながら叫ぶ。

「もし、本当にそうだったら……今の俺がそれを変えてみせる！」

ドリルクラツシャーをガンモードへと変える。

『Ready go!』

『ボルトテックブレイク!』

ビルドはドリルクラツシャーにボルトを差し込み、ホークガトリンガーと共にドラグーンに攻撃する。

しかし、ドラグーンは長剣を盾にして攻撃を防ぎ、カウンターで剣を振るいビルドに命中させる。

「ぐわあああ！」

「その程度の力でよく言えたものだな！」

ビルドが倒れていると離れて見ていた龍牙を見る。

『その力で、多くの人の明日を……未来を……守ってきたら！』

それを今、実現させてるのは、桐ヶ谷拓人博士の息子、桐ヶ谷晴夜……お前だろ！』

「……最悪だ。こんな時に思い出しちゃうなんて……」

あの時、スマツシユを作ったのは父だと聞かされた時、クローズに励まされた言葉を思い出す。

「龍牙のバカに言われたあの言葉が、今の俺を作ってくれた……」

あいつだけじゃない、和也、マナやみんなの思いを受け……正義のために、そして多くの人の明日を守る為にライダーシステムを使ってきた！

それが、父さんがライダーシステムを作った本当の願いだと信じて！」

ビルドがみんなに支えられ、今日まで戦って来たと語ると、ハザードトリガーを出した。

「俺は、俺のやり方で今の俺を超える！そして、レジーナの元にたどり着く！」

ハザードトリガーのスイッチを押し、ドライバーに差し込む。

『マックス！ハザードオン！』

「そう言つて、その暴走装置をまた使うのか?」

ドラグーンがそう問う中、ビルドはガラスケースから完成させたボトルを出し、そのボトルを振つて上の栓を回す。

「それは……」

『ラビット!』

音声が届くと長いボトルを半分に折り、ドライバーに差し込む。

するとボトルの前に二つのラビットのシルエットが浮かぶ。

『ラビット&ラビット!』

『ドンテンガン! ドンテンガン!』

「ビルドアップ!」

『ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!』

ハザードライドビルダーが出現し、ビルドと重なりハザードフォームのビルドが現れると、後ろから紅い兎のようなユニット——『ラビットラビットアーマー』が現れ、そのユニットがパージされた。

『Are you ready?』

『オーバーフロー!』

ドライバーから音声が鳴ると、ビルドはパージされた部品を拾うかのようにジャンプ

し、ビルドに装着される。

『紅のスピーディージャンパー！ラビットラビット！ヤベー！ハエー！』

「なんだよ、あれ！」

「あれが、ギユインギユインのズドドドド……」

「二つのラビットボトルが合わさった力……」

「晴夜君が作り上げた。新アイテム……」

「これが、晴夜さん新たな姿……」

「こんな姿になるとは、驚きです」

ビルドの今の姿は、ハザードフォームの面影を残しつつ、紅の色一色に染まったアーマーを持ち、後ろには兎の長い耳のようなモチーフの加速マフラー『マフラビットアクセラレーター』が施されていた。

新フォーム『ラビットラビットフォーム』を見て全員が驚く中、新たなフォームを装着したビルドがドラグリーンに向かって行く。

「ハアアツ！」

「グウツ！」

ビルドの繰り出す拳や蹴りは早く、そして重く、ドラグリーンは防御することに精一杯だった。次のビルドの拳がドラグーンの防御を崩す。

「この、力は……自我を失った時と同じ。なのに、なぜ意識が……」

今までのビルドならこの力が発動している最中は意識を失うはずが、いまは意識を保ちながら、力を自分のものへと変えている。

今ビルドが使っているボトルには、二つ折りにすることで、ラビットとラビットとといった同ボトルの成分が干渉して万能調整剤『スタビライザーヴェイパー』が生成される。

生成された調整剤によってハザードトリガーの強化剤『プログレスヴェイパー』を抑制し、強化剤の濃度を自我を失うギリギリに抑えることで自我を保ったまま、オーバーフロー状態と同等の戦闘力を発揮することができるのだ！

「俺はもう、自分を見失ったりはしない！」

「この力は、完全に俺のものだ！」

ビルドの素早い動きにドラグーンは反応出来ず、ビルドの攻撃が続いて決まる。

「はええ……」

「速すぎて、目がついていけない」

ビルドの新たなフォームの速さに、龍牙達の目でも付いていけないと呟く。

「どこまで、強くなるんだ！」

「これが正義に燃える力！仮面ライダービルドの力だ！」

フルボトルバスター!」

ビルドが叫ぶとドライバーから大剣の様な武器が形成されて現れた。

フルボトルバスターと名付けられた武器を握るとグリップが曲がり砲撃用へと変わり、クアッドフルボトルシリンダーにボトルを入れる。

『ラビット!』

キャノンモードにしたフルボトルバスターをドラグーンに向けてトリガーを引く。

『フルボトルブレイク!』

赤いエネルギー砲弾が発射され、ドラグーンが防御するが耐えられずに命中し、防御に使った腕を庇う。

更にボトルをフルボトルバスターに入れる。

『ラビット!パンダー!ジャストマッチデース!』

ドラグーンは剣を構えるが、ビルドは気にせずトリガーを引く。

『ジャストマッチブレイク!』

赤と白の混じる砲撃を長剣で切ろうとしたが剣は吹き飛び、更にドラグーンにダメージを与える。

そして、今度は3本のボトルを差し込む。

『ラビット!パンダー!タカ!ミラクルマッチデース!』

音声が鳴ると、ドラグーンはシールドを展開して構える。だが、ビルドは怯まずトリガーを押す。

『ミラクルマッチブレイク！』

今度はさらに大きくなった赤いエネルギー弾がドラグーンの展開したシールドを砕く。

「ここまで、パワーが……！」

「俺達は必ずレジーナを取り戻して！愛と平和の世界を守るために、この力を使う！」

ビルドが叫ぶとドライバーのレバーを回す。

『ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！』

『Ready go！』

『ハザードフィニッシュ！』

ビルドが高くジャンプして、キックの態勢に入る。

そして、ビルドの蹴る足が脚部の『ジャンプチャンプレガス』に搭載された次元伸縮バネ『ディメンションスプリングァー』の影響で伸びた。

「伸びたー！」

「足が伸びましたわ！」

「それ、兎と関係ない！」

足が伸びた事に驚く六花達。しかし、ビルドの伸びた足はドラグリーンに届かず、ドラグリーンが伸びた足を蹴ろうとする。

すると…

『ラビットラビットフィンッシュ!』

伸びた足が縮んで、その勢いでドラグリーンを吹き飛ばす程の勢いのライダーキックを放つ。ドラグリーンは岩へと激突し、同時にビルドは着地した。

「これが、仮面ライダービルドの力……」

ドラグリーンが立ち上がるとすると、フルボトルバスターを目の前に向けていたビルドが既に立っていた。

(負けたよ……)

ドラグリーンがそう思うと、突然ビルドが倒れて変身解除してしまう。

「何……」

「……晴夜(君・さん)！……」

五人が晴夜に駆け寄ると、晴夜からイビキが響き渡る。

…寝てしまっているようだ。

「寝てのんかよ!」

「疲れてのよ」

「夜遅くまで、今日のためにずっと頑張っていたから」

「今は寝かしてあげよ」

亜久里が倒れていた晴夜に近づくと、

「晴夜さん、素晴らしかったです。あなたは、暴走装置の力を完全に自分の力へと変えま
した」

ドラグーンから元の妖精の姿に戻ったメランが晴夜に近づき、彼からもマナと同じ様に何かを思うのだった。

「ん……」

「お目覚めですか？」

晴夜が目を開けると、日が昇ろうとしていた清々しい青空が目に入り、セバスチャンが近くにいると龍牙と和也が後ろにいた。

起き上がると、マナ達がメランと話しているのが見えた。その手に水晶の鏡があるの
も見えた。

「やったのか……」

「ああ！やったんだぜ！」

「一番良いところはお前に殆ど持っていかれたがな！」

起きがった晴夜はメランの元に向かう。

「晴夜君！水晶の鏡！もらえたよ！」

水晶の鏡を晴夜に見せる。

「それだけじゃなく、晴夜やつとあの暴走装置を自分のものにしたわね！」

「カツコよかったですわ！あの兎同士のフオーム」

「うん！あれならレジーナを取り戻せるよ！」

「素晴らしかったですわ！晴夜さん！」

「いいな、あたしも見たかったな」

みんなが晴夜がハザードトリガーを使いこなせる様になったことについて話していると、メランが背中を向けて語る。

「かつて、私達は巨大な闇の勢力と世界の破滅を求める種族と私達は、死力を尽くして戦った」

「世界の破滅を求める種族……？」

メランの言う種族について晴夜が考えていると、メランは語り続ける。

「仲間が次々と倒れ、誰もが諦めかけていたその時、私のパートナーキュアエンプレスが言った……『私、絶対諦めない』と」

語り終えるとメランはマナに近づくと

「お前は、私のパートナーとよく似ている。そして……」
今度は晴夜に近づく。

「桐ヶ谷晴夜……お前の可能性を信じる心、お前もキュアエンプレスと似ている。わしも信じよう、科学の可能性をお前はそれを体現させた」

晴夜の新たな成長にメランも科学の力を信じると言った。

「メラン……ありがとう」

晴夜は髪をかきながら礼を言うと、迎えのヘリが見えてきた。

「後は、お前達に任せたまよ」

「なあメラン、俺たちと一緒に来ないか？」

「そうだよ、一緒にジコチューとスマツシユを止めよ！」

晴夜とマナが言うところ、メランは行けないと答え、メランは晴夜達も別れを告げて、晴夜達は大貝町へと帰っていく。

「キュアエンプレス、これでいいんだな」

メランは花束を伝説のプリキュアの墓の場所へと置く。

「だが、信じられる。今のプリキュアと仮面ライダービルドなら、絶対に負けないと！」

……後は、あの上城龍牙がどちらへ転ぶか？」

龍牙の事が気になるメラン、一体龍牙からメランは何を感じたんだろうか……
今はまだ、それを知る時では無い……

次回！ Re・ドキドキ&サイエンス！

第35話 最大の危機！ 逆転を呼ぶのは、奇跡のパッドとタンク！

第35話 最大の危機！逆転を呼ぶのは、奇跡のパッドとタンク！

いつものジコチュークラブのボウリング場では、リーヴァとグーラ、そしてベールが座っていた。

「マズいな・・・俺達を押しにかけてプリキュアと仮面ライダーを倒すと大口叩いておきなからこのザマ・・・」

キングジコチュー様にご報告したらどうおっしゃるか」

ベールがビルド達に連敗続きのリーヴァとグーラに向かってそう話す。

「フン、プリキュアと仮面ライダーなんていつでも倒せるわ」

「そうだ。今までは腹ごなしの準備運動だ」

「見せてあげる、私達の本気。もう既に始まっているわ、この世界を滅ぼすとおきの作戦がね」

そのとおっておきの作戦は、既に始まっていた。すると、小さな蝙蝠がリーヴァの手に置かれる。

「あら、奴のデータを取って来たのね、ありがとう。：スタークちゃんにブロスちゃん

達……いや、ブロスちゃんを強化してもらったし、フッフツ……これで、奴らも終わりよ!」

リーヴァは高々と笑う。まるで、勝利を確信するかのような笑いだった。

その頃、試練から帰って数日経ち、晴夜達は四葉邸に集まって水晶の鏡を見ていた。

「もしもし」

「ドアじゃないし」

マナがノックする様に叩くが何も反応しない。

「もしもし」

「電話じゃないし」

電話をする様を持って話してみるが、当然何も反応しなかった。

「真実を映す鏡、マジカルラブリーパッド。王女の槍と同じ力を持つこの神器を使いこなせば、キングジコチューを浄化出来るハズ」

「でもよ、どうやって使えばいいんだよ……」

「鏡なのに何も映さないし」

「本当に使えるようになるのかよ?」

「メランが認めてくれたんだ。使いこなせるようになるさ」
「では、調べてみましょう」

ありすが持っていたスイッチを押すと、ブラインドが降りて暗くなり、凄そうな機械が下から現れた。

更にテーブルがスライド移動して中に入り、スキャンと同時に解析が行われた。

「残念ながら、現代の科学では解析は難しいようです」

「摂氏千度の耐火実験や、深海での耐久実験もやってみますか？」

ありすが提案すると晴夜が機械の中にある水晶の鏡を見る。

「いや、一度分解してどんな素材から調べてみるのが・・・」

晴夜が道具を持って、本当に分解しようとしている感じで提案する。しかもハイテンションで。

「やめろ、この科学バカ！」

龍牙がハイテンションになった晴夜の腕を掴んで止める。

「そ、それよりも、アイちゃん！」

「きゅぴらっば〜！」

…アイちゃんの力でも何も起きなかった。

「きゅぴらっば〜でもダメか・・・」

「やはり、分解して……」

「だからそれは、やめろ!」

和也が晴夜の頭を叩いて止める。

「キングジコチューに対抗出来る力を手に入れたのに、それが使えないなんて……」

みんな落胆していると、六花がある事を思い出した。

「ねえ、それもだけど、メランが龍牙君に『自分が何者かわかってるのか』って言った時のことなんだけど……」

「あ!それ俺も思った!いや……じつは前からコイツの事は気になっていたんだ……」

「お前……俺に告白したいのか?」

「違えよ!」

晴夜はそう言って、龍牙の頭を叩く。

「おかしいと思わないか、いきなりスクラッシュドライバーを使いこなせるようなり、和也と違い何度も変身して使いこなせるようになったわけじゃない……」

「そうだよな、俺が使いこなせるようになったのは、五、六回くらい何度も変身して慣れたからだだよな……」

「それって、何か関係あるの?」

「それだけならともかく、龍牙の場合はハザードレベルの上がりようが普通にしてはか

なり早すぎる」

みんなが龍牙の成長の事を考えているとその時、誰かの腹の音が鳴った。

「だ、誰？」

「えへへ・・・」

腹の音を鳴らしたのはマナだった。

「ねえ、お腹空かない？」

マナがぶたのしっぽ亭でお昼を食べようと言い出し、みんなで向かおうとする。

「セバスチャンさん・・・」

「何でしょう？」

晴夜がセバスチャンに父からのメモリーデータを渡す。

「龍牙の事を調べて貰えませんか？おそらく、父の研究に何かあると思うんです。出来

るだけこの事は内密に・・・」

「わかりました」

セバスチャンは晴夜からメモリーデータを受け取る。

それからしばらくして、ぶたのしっぽ亭へと到着した。

「ただいまー！」

「「「お邪魔します」」」

「あら六花」

すると其処には六花の母：亮子がいた。

「ママ!お仕事は?」

「休憩中よ。このオムライスがどうしても食べたくなっちゃって。」

「ほら、亜久里ちゃんも入って入って!」

「とても食事する気分では・・・」

ドアの前で不安な表情で立ち止まった亜久里をマナは入るように促す。

「やはりわたくし達にはまだ力が足りないのでしょうか・・・?」

「腹が減っては戦は出来ぬ。だよ」

「しかし・・・」

「考え過ぎなんだよ亜久里ちゃん。俺もハザードトリガーを使いこなせるなっただから、きつとラブリーパッドが使いこなせるようになるよ!」

「晴夜さん・・・」

「それにお腹が減ってちゃ、頭が働かなくていい考えなんて浮かばないよ」

「そうそう。晴夜君の言う通りだよ」

「あら亜久里」

「おばあ様、どうしてここに？」

今度のお茶会の連絡のために亜久里の祖母：茉莉も来た。

「わざわざすみません」

「はい！」

「ありがとうございます」

お茶会の予定が書かれた紙をあゆみに渡した。

「わたくしも食べて行こうかしら、オムライス。皆さん、ご一緒してよろしいですか？」

「もちろんです！」

おじーちゃん！。パパー！。美味しいオムライス頼むねー！」

「オーケー！」

歪みながらも、健太郎と宗吉はオムライス作りのために厨房に入る。

「ほら、亜久里ちゃんも入って入って！」

「セバスチャンも一緒に食べましょう」

「では、お言葉に甘えて」

「ママ、隣の席いい？」

「ええ、もちろん」

食事を終えてテレビを見ると、ニュースがある事件の事を報道してた。

その事件はそれまで元気だった人達が、いきなり眠ったまま目を覚まさないと言うものだった。

「まあ、何なのかしら?」

「みんな疲れてるのか?」

「んな訳ねえだろ」

(何だか嫌な予感がするな・・・)

晴夜がそう心の中で呟き終わると同時に、黒い球が店の中へと入った。

「アイちゃん?どうしたのですか?」

それを察知したアイちゃんが暴れ出した。

更に町の人達やリポーター達も黒い球が体に入ると同時に眠り出した。

「どういう事?」

「おいおいどうなってるんだ?」

ガタツと音が聞こえて振り向くと、あゆみ達が眠っていた。

「皆さん!」

晴夜達は倒れて眠ってしまったあゆみ達に駆け寄り、揺すって起こそうとする。

「ママ!大丈夫?!?」

「眠ってるシャル!」

「おじいさん!?」

「目を覚まさないわ」

「一体何が起こってるんだ？」

「ママ！」

「おばあ様！」

「起きるケル！」

「しつかりして下さい！」

晴夜達が声をかけて起こそうとしたが、あゆみ達が起きることはなかった。

「黒い物体が皆さんに・・・」

「セバスチャン！」

黒い物体があゆみ達に入った事を言うと、セバスチャンにも黒い球が入り眠ってしまった。

「黒い物体・・・それが原因なのか・・・？」

「危ない！」

亜久里が黒い球に気付いてすぐにマナと晴夜の中に入った。

「マナ（ちゃん）！」

「晴夜！」

その時、ラビーズとボトルが光り出し、中に入った球体を消滅させた。

「これは……」

「ラビーズとボトルが守ってくれたシャル!」

「今のが、黒い球体……」

『カモーン、プリキュア、仮面ライダー』

するとテレビにリーヴァの顔がアップで映し出される。

「リーヴァ……!やはり、お前達が……!」

『これは世界を滅ぼす最後の手よ。私達が育てたジコチュー植物の実は、大量のジコチューの種を生み出すの。飛び散ったその種は空から降り注ぎ、町中の人間達のプシケーに植え付けられる。人間達は今はただ眠っているだけ。』

でも、種が芽を出せば、全てのプシケーは闇に染まり、何十万ものジコチューとなつて大暴れする。ジコチューとなった人間達が、自分で自分達の国を滅ぼすつてワケ。更にそれだけのジコチューが誕生すれば、ジャネジーが一気に増えて、キングジコチュー様が復活するのよ!芽が出るまであと僅か、もうこの世界はおしまいよ。止める方法はただ一つ、私達を倒す事だけ』

これを聞いた後、マナ達はDBの運転する車で、晴夜と龍牙はマシンビルダーで四葉テレビへと向かった。

すると、道に真ん中に誰か立っていた。

「ブロス……でも何だ？コイツら合体してる……！」

なんと、エンジンブロスとリモコンブロスが合体した姿で晴夜達の道を邪魔する。それを見た和也が車から降り前に出る。

「ここは、任せろ！お前から先に行け！」

「ですが、和也さん一人では……」

「なら、僕が手伝います」

突如、一人の少年が晴夜達の前に現れる。その手にはスクラツシユドライバーを握っていた。

「柴崎さん！」

「知り合いなの？」

柴崎^{しばさき}幻冬^{げんと}、彼は亜久里のクラスメイトである。

「もしかして、君が……」

晴夜が言いかけると幻冬は晴夜達にボトルを見せる。

「あいつが、あの時の仮面ライダー！」

龍牙が叫ぶと幻冬は頷く。

「君の話は戦いが終わってからゆっくり聞かせてもらおう」

晴夜が言うのと、幻冬は「わかりました」と頷く。

「急ぐぞ! 時間がない!」

「ダビィ!」

「分かったわ!」

マナ達を乗せた車と晴夜のマシンビルダーがアクセルを噴かして四葉テレビへと向かった。

和也と幻冬はブロスに目を向ける。

「さあつて、まこびー達のために頑張りますか!」

和也が気合い入れようとする。幻冬に質問する。

「おい、ライダーになるからには覚悟は出来てるんだよな?」

「もちろん、この力を貰った時から覚悟は出来てます!」

「ガキのくせ、言うじゃねえか!」

和也と幻冬はスクラッシュシュドライバーを装着した。

「行くぞ!」

「ええ!」

『ロボットゼリー!』

『へピキ！ピキ！ピキ！』デンジャー！クロコダイル！』

二人はドライバーにゼリーとボトルを差し込み、レンチを下ろし、高々と叫ぶ。

「変身！」

和也と幻冬から巨大なビーカーが現れ、和也の方には黄色い液体を纏い、幻冬には紫の液体と下から巨大なワニの口のようなものまで出現し、お互いのビーカーが割れると二人はスーツとアーマーを纏った。

『潰れる！流れる！溢れ出る！ロボットイングリス！ブラア！』

『割れる！食われる！砕け散る！クロコダイルインローグ！オラア！へキヤー！』

そして、グリスは頭部にあるスクラッシュユファウンテンからヴァリアブルゼリーを噴出させてクリアブラックの装甲の装着を行い。ローグの頭部に取り付けられたセルフェイスクラッシュヤーがワニの様に噛み付くと、クロコダイラタンアーマーに白いヒビが入って緑の複眼が現れる。

二人は仮面ライダーグリス、仮面ライダーローグへと変身した。

「心火を燃やして！ぶっ潰す！」

「大義のための犠牲となれ」

「はあああ！」

グリスとローグは合体したブロス——『ヘルブロス』との勝負を始めた。

グリスとローグにヘルブプロスの相手を任せて、晴夜達は四葉テレビ前に到着した。

「あなた達が来たって事は、あつちはグリスが引き受けてるのね。」

でも、あなた達は——」

「俺らには絶対勝てねえ!」

「そんなの・・・やってみなきや分からないよ!」

「それに、こつちには切り札がある!」

晴夜と龍牙はドライバーを装着し、晴夜はハザードトリガーを取り出す。

『マックス!ハザードオン!』

ハザードトリガーのスイッチを入れ、ドライバーに差し込む。

「あら?それ使つていいの?」

「ご心配をどうも」

晴夜はフルフルボトルを数回振り、上の栓を回した。

『ラビット!』

晴夜と龍牙はボトルとゼリーをドライバーへと差し込み、マナ達四人はコミュニケーションをセットした。

『ラビット&ラビット!』

『ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！』

『ドラゴンゼリー！』

『Are you ready?』

晴夜の周りに金具とラビットのユニットが、龍牙の方は巨大なビーカーが出現した。

「変身！」

「プリキュア！ラブリンク！」

晴夜達が叫ぶと晴夜と龍牙の体にアーマーが装着され、ビルドハザードとクローズチャージになり、ビルドはそのままパージされたラビットのユニットを拾うかのように装着し、マナ達四人は光に包まれ、光から現れるとプリキュアへと姿を変える。

『オーバーフロー！』

『紅のスピーディージャンパー！ラビットラビット！ヤベーイ！ハエーイ！』

『潰れる！流れる！溢れ出る！ドラゴンインクローズチャージ！ブラア！』

六人は仮面ライダーとプリキュアへと変身を完了した。

「わたくしも！」

「待つて。あなたには5分のリミットがある。まずは私達に任せて！」

「分かりました！」

亜久里もエースに変身しようとしたが、ダイヤモンドに止められ、一旦任せる事とし

た。

「見なさい!」

「これが俺達の本気だ!」

そう言うとりーヴァとグーラが合体し、ゴリラの体と頭蓋骨を足した様な胴体と頭の部分に仮面を付けたジコチューとなった。

「合体した!?」

「マジかよ・・・!」

「さーてと——」

「行くぜ!」

ハート達は両手を組み合わせて叩きつける攻撃を躲すが、その攻撃によつて生まれた風圧で車が吹き飛んだ。前に出たハートとロゼツタがラッシュを繰り返して吹飛ばされた。されたり避けられてしまい、一瞬の隙を突かれて攻撃を受けて吹き飛ばされた。

今度はダイヤモンドとソードが飛び蹴りを放つも、これもガードされ、二人は流れを変えるためにラブハートアローを出現させ、ラビーズをセツトした。

「プリキュア!スパークルソード!」

「プリキュア!ダイヤモンドシャワー!」

スパークルソードで怯ませ、ダイヤモンドシャワーで凍らせたが、一瞬で砕かれてし

まった。

「みんなで行くよ！」

「「プリキュア！ラブリーフォースアロー！」」

ラブハートアローの弓を大きく展開させ、台尻部分の引き金を引き絞り、前面にハート形のエネルギー体が生成される。そしてハート達は相手にウインクし、ラブリーフォースアローを放った。

だが、合体ジコチューが開いた口の中に飲み込まれた。

その際にクローズがツインブレイカーにクローズドラゴンを差し込み攻撃しようとする。

「これで、どうだ！」

『Ready go！レッツブレイク！』

「そんなもん！」

合体ジコチューは口をまた開き、クローズのレッツブレイクすらも飲み込まれてしまう。

その隙に、ビルドが合体ジコチューに攻撃を仕掛ける。

「やるわね……」

「はあ！」

今度はビルドがラビットトラビットフォームのスピードで攻撃するが、全て防がれる。

「何?この攻撃は」

「弱すぎだぜ!」

「何・・・!」

ビルドは距離を取り、腕と足を遠くから伸ばしながら攻撃するがそれすらも防御される。

「どうして・・・!」

「なんで、攻撃が読まれてるの?」

まだリーヴァとグーラはラビットトラビットフォームを知らないはず。なのに、この二人は攻撃パターンを把握している。

「ならこれだ!」

『フルボトルバスター!』

フルボトルバスターを構え、赤いエネルギー弾を発射するが、合体ジコチューに躲かれてしまう。

「今度はこつちから!」

「行くわよ!」

合体ジコチューが力を解放し、ビルド達に襲い掛かろうとする。

「プリキュア！ドレスアップ！」

「きゅぴらっば〜！」

流石にこれ以上は危険だと判断した亜久里がキュアエースに変身した。

「エース！」

「一気に決めますわよ！」

「ならこつちも！」

ビルドはフルボトルバスターに3本のボトルを差し込む。

『ラビット！海賊！忍者！ミラクルマツチデース！』

「彩れ！ラブキッスルージュ！」

エースはルージュを唇に塗り、相手に向かってキスを投げると、前方にハート形のエネルギー体が生成される。

「ときめきなさい！エースシヨット！ばきゅ〜ん！」

『ミラクルマツチブレイク！』

両手持ちして頭上に掲げたラブキッスルージュを振り下ろし、ビルドもフルボトルバスターのトリガーを引き、エースシヨットと同時に放った。

それに対して合体ジコチューが光線を放ち、激しくぶつかり合う。

しかし、ジコチューは更に光線の威力を高めてミラクルマツチブレイクとエース

ショットを打ち破った。ビルドとクローズは無事だがハート達五人は深手を負った。

「ラブリーパッドは!?」

エースの手に先まで握られていたラブリーパッドが消えていた。

「あら、これ三種の神器の一つじゃない?」

なんと、ラブリーパッドは合体ジコチューの手に渡っていた。

「神器?」

「伝説の戦士が使うって言うアレよ」

「それを返せ!」

ビルドが拳や蹴りを繰り返すが、合体ジコチューはビルドの攻撃をことごとくガードする。

「どうして、攻撃パターンが読まれるんだ……!」

「こんな物、こうよ」

ジコチューは手に力を込め、ラブリーパッドを五つに割ってしまった。

「ラブリーパッドが……」

「これで勝負アリね。……ん?」

「そんなガラクタを集めてどうすんだ?」

ハートがラブリーパッドの破片を集めてるのを見て尋ねる。

「ガラクタじやない・・・壊れてたって、メランの思いが込められた宝物だよ！」

「ああ！物にはその人が使つて来た！魂がある！それを馬鹿にするお前達に負けるわけにはいかない！」

ビルドはフルボトルバスターを再び持ち構えると、エースも立ち上がる。

「プリキュア五つの誓い！」

「一つ！プリキュアたるもの、いつも前を向いて歩き続ける事！」

「たとえラプリーパッドが無くても、あなた方などに断じて負けません！」

合体ジコチューにラツシユを繰り出すエースだったが、時間切れになつて変身が解けてしまった。

「終わりよ！」

「やべえ！」

合体ジコチューが光弾を亜久里に放つが、クローズは亜久里の盾となり、亜久里を庇う。

「ぐわあ！」

亜久里は無事だが、光弾はクローズに命中し、クローズが変身解除してしまった。

「龍牙！大丈夫か？」

ビルドが龍牙に駆け寄る。

「ああ・・・でも、ドライバーが・・・!」

最悪な事に、光弾はスクラツシユドライバーに命中し、完全に破損してしまった。

「ジコチューの種は間もなく目を覚ますわ。トドメを刺すのはそれからにしてあげる!」

「お前達の世界が滅んで行く様を、ゆっくり見物してろ!」

合体ジコチューはビルド達への勝利を確信し去っていった。

「何一つ、通用しませんでした・・・」

「私達に出来る事はもう・・・」

ロゼッタとダイヤモンドが絶望感と悔しさに打ちひしがれていると:

「ソード、ゴメン・・・シャルル、ゴメン・・・」

あたし・・・トランプ王国を失ったみんなの気持ちを分かったつもりでいた・・・でも、本当は分かって無かった・・・

自分の身近な人達が、大切な街がこんな事になって、初めて分かった・・・!

胸がこんなに痛むんだね・・・凄く悲しくて・・・悔しい!」

ハートは世界があと少しで滅ぶという絶望で胸を痛め、悲しくて悔しく感じたと声を上げて泣き崩れた。

「ハート・・・」

その様子を見ていた合体ジコチューは喜びを感じていた。

「もつと泣け、もつと叫べ！」

「この世界と共に、あなた達ももうおしまいよ！」

ハートが泣き叫ぶのを見て、ビルド達への勝利を確信した合体ジコチュー。

「ふんっ！」

突如、ハートが両手で頬を風圧が出来るくらい勢い良く叩いた。

「あー、泣いた泣いた。スツキリした。うん、落ち込むのはもうおしまい！」

するとどう言う事だろう！かつて友を喪くした時と違い、彼女は泣くだけ泣くと自ら喝を入れて、速攻で立ち直ったのだ！

「さあ、反撃だよ！」

「反撃？」

「ハートの言う通りだ。ラブリーパッドは割れ、全然歯が立たなかった。

でも、まだ勝利の法則はある。それはハートも気付いているはずだけど」

ビルドがまだ方法はあるとみんなに言うのと、ハートの方を向く。

「うん！あたし達が今よりも一つと強くなるっ！」

亜久里ちゃんは世界を守りたいって想いで自分を成長させて、エースになった。強い

想いで成長出来るなら、あたし達はもつと強くなれる!」

「今すぐ強くなれると言うのですか!?!?」

「なれる!みんなを助けたいってこの気持ちだが、ジコチューに負けない!それが俺たちを強くする!」

「それに、一人じゃない!」

亜久里の疑問にビルドとハートが答えると、ダイヤモンドがため息をつく。

「たく、いつも無茶ばかり言うけど、今度は本当に無茶ぶりね」

「でも、ハートの言う通りです。どんなに彼らが強くても、気持ちでは負けません!」

「みんなが一緒なら、頑張れる!」

「俺たちなら、負ける気がしねえ!絶対にな!」

「メランの一万年の思いに応える!」

ダイヤモンド達が言うところとハートが拳を突き出す。

「リーヴァは、これが最後の手だと言った」

「つまり、彼らも追いつめられているって事。全力でぶつかって行こう!」

ダイヤモンドが上に手を乗せる。

「みんな一緒なら、怖いものではありません!」

「この世界を、トランプ王国のようにはさせないわ!」

「必ず、俺たちはあいつらに勝つ！」

ロゼッタとソード、龍牙も続いて手を乗せる。

「必ず、みんなの明日をこの手で守る！」

更に、ビルドも手を乗せる。

「キュアハート、まさかあなたに教えられるとは思いませんでした」

最後に亜久里が手を乗せた。

「あなたは……いいえ、あなた達はプリキュアの新たなステージに登ったようですね！」

「プリキュア五つの誓い！」

亜久里がそう言うと、ハートはプリキュア五つの誓いを復唱する。

「一つ！プリキュアたるもの、いつも前を向いて歩き続ける事！」

ハートは思い出す。たとえば友達を失ったとしても、仲間の為にも立ち止まらず、常に

歩み続ける大切さを。

「一つ！愛は与えるもの！」

ソードは思い出す。歌う理由を見失って迷いが生じるも、「自分のために、そして自分

を応援してくれる人のために歌う」ことを決めた時のことを。

「一つ！愛する事は守り合う事！」

ロゼッタは思い出す。幼い頃から自分の面倒を見ているセバスチャンを守っていく

決意を抱いた日のことを。

「一つ!自分を信じて、決して後悔しない!」

ダイヤモンドは思い出す。どんな時でも、「医者になりたい」という夢と「自分の気持ち」を信じて行動する事の大切さを。

「一つ!プリキュアたるもの、一流のレディであるべし!」

亜久里は思い出す。心身ともにもっと強くならなくてはならぬという想いの下、自ら創り出した矜持を。

「一つ!」

ハートは語る。六つ目の誓いを。

「六つ目!?」

「みんなで力を合わせれば、不可能は無い!」

みんな!行くよ!」

ハート達は決意を新たにし、もう一度戦いに向かうと、ビルドは龍牙の方を向く。

「龍牙、お前に頼みがある」

「俺に?」

頼みごとを託された龍牙は不思議そうな顔をする。

一方その頃、 그리스、 ローグはヘルブロスに苦戦していた。

距離を取ってツインブレイカーとネビュラスチームガンで攻撃するが、ヘルブロスに命中こそはするがあまりダメージを与えられていない。

「くそ、マジかよ……!」

「()まで、強くなってるなんて……」

流石に合体しているだけあって、かなり苦戦を強いられている。

そして、ヘルブロスは攻撃を開始する。ギアでの攻撃が二人だった頃よりも強力で、 그리스とローグはガードの構えをしているだけで精一杯だった。

「!??!マズイ!」

ヘルブロスが 그리스に更に攻撃しようとする。

次の瞬間、ヘルブロスが吹き飛ばされ、 그리스とローグの前に何が落ちていた。

「何が……?」

「こいつは、龍牙の……!」

そう、それはクローズの武器『ビートクローザー』だった。

「和也ー!ローグ!」

マシんびルダーに乗ったクローズが 그리스達の前に現れた。

「龍牙?!?なんで?……ってか、スクラッシュユンドライバーはどうした?」

スクラッシュドライバーが壊れたため、龍牙はビルドドライバーでいつものクローズへと再変身していた。

「話は後だ!お前らこれを使え!」

クローズがビルドから預かったボトルを二人に渡す。

「?よくわかりませんが・・・使ってみましょう!」

「おお!」

グリスとローグはボトルを差し込む。

『シャーク!』

『バイク!』

『(デイス) チャージボトル!潰れな〜い! (デイス) チャージクラッシュ!』

スクラッシュドライバーの力によって出現されたバイクとサメが形成され、二人同時にヘルブロスへと攻撃したが、ヘルブロスは防御の姿勢を取る。

「?」

「おい、動き止まったぞ」

攻撃をガードしたヘルブロスは、いきなり動きが止まった。

「わからねえが、一気に行くぞ!」

「ええ!」

「おおー！」

クローズはビートクローザー、グリスはツインプレイカーを、ローグはネビュラスチームガンを構え、三人共ボトルを差し込む。

『スペシャルチューン！ヒッパレー！ヒッパレー！ヒッパレー！』

『シングル！ツイーン！』

『クロコダイル！』

三人の武器にエネルギーが収束されていき、ヘルブロスへと放たれようとしている。

『メガストラッシュ！』

『ツイーンフィンッシュ！』

『ファンキーブレイク！』

「はあー！」

三人の技がヘルブロスに命中し、三人技をまともに受けたヘルブロスは木っ端微塵に爆破し、破壊された。

「やった・・・」

「しゃあー！」

「よっしゃあー！・・・って喜んでる場合じゃねえ！」

クローズはグリスとローグに今の状況とビルドから伝えられた事を二人に話す。

合体ジコチューはクローズ達がヘルブロスと戦っている場所で、爆発が起こったのを見た。

「どうやらあっちも勝負あつたみたいね」

「これで、仮面ライダーが一人消えた」

彼らはヘルブロスがグリスを倒したと思いい込んでいた。

「そこまでよ!あたし達の世界は、あたし達が守る!」

「この世界の明日を奪わせない!」

ビルド達がジコチュー植物がある屋上へとやって来る。

「往生際の悪い子達ね」

「まとめて消してやる!」

合体ジコチューが暴風を起こし、吹き飛ばされそうになるが何とか耐える。

ビルドが先陣切つて、合体ジコチューに攻撃する。

「くう!」

しかし、合体ジコチューは難無く防御する。

「無駄よ、そのフォームの特性は既に分析済みよ。しかもそれが、今の最強のフォームつ

て事も」

「なんで、知ってるの?」

ハートが言うと、合体ジコチューの元に一体の小さな蝙蝠が現れた。

「この子に、ビルドの情報を探らせてたの」

どうやら、あの蝙蝠はスパイロボのような役割をしていたらしく、リーヴァ達はその蝙蝠からの情報でラビットラビットフォームの攻撃パターンを読んでいた様だ。

「あなた達の理想、『ラブ&ピース』なんて、下らない理想も終わりね!」

合体ジコチューはビルドを壁へと吹き飛ばした。

「下らない理想なんてない!」

「あなた達が世界を滅ぼす力を持っていても、絶対に消せないものがある!」

「守りたい。私達のこの気持ちは消せません!」

「そんなもの、お前達ごと消してやる!」

ハート達がそう語ると、今度は口から光線を放つ。

「消させない! あたし達の町! メランの思い! あたし達を守る!」

「あなた達がどんなに強くても、私達は屈しない!」

「この鼓動が高鳴り続ける限り!」

「この胸がキュンキュン動く限り! あたし達は!」

「「「諦めない!」」」

ハート達が諦めないと言う強い決意を抱いたその時、ラブリーパッドの破片が光り出した。

「ラブリーパッド?」

「凄いパワーを感じるシャル!」

そしてその破片が、タブレット端末のような姿に変貌した。

「これは・・・」

「ラブリーパッドが、わたくし達の鼓動に答えてくれたのです!」

その力が、亜久里をもう一度エースに変身させた。

「ラブリーパッド、感謝します」

「みなぎる愛!キュアハート!」

「英知の光!キュアダイヤモンド!」

「陽だまりポカポカ!キュアロゼッタ!」

「勇気の刃!キュアソード!」

「愛の切り札!キュアエース!」

「「「響け!愛の鼓動!ドキドキプリキュア!」」」

「あたし達がこの町のドキドキ、取り戻して見せる!」

初めて五人揃って決め台詞を言い、ハートが胸にハートマークを作り、いつもの決め台詞を発する。

「無駄だつて……!」

「言つてんでしょ!」

合体ジコチューがハート達に襲い掛かろうとした、その時だった。

「それはどうかな!」

ビルドは既に立ち上がっており、合体ジコチューの後ろを取っていた。

「!?? 貴様……!」

『マックス! ハザードオン!』

ビルドはドライバーからフルフルボトルを外し、一つの長さに戻す。数回振り出すと、ビルドの下から化学式が現れた。

——そして、ボトルを振っている最中、ウサギが飛んでいるような軽い音が鳴つてたが、途中からボトルの音が機械のプレス音の様な重い音に変化していた。

「さあ、実験を始めようか?」

久しぶりにそのセリフを言うと、フルフルボトル『フルフルラビットタンクボトル』の栓を回した。

『タンク!』

「!?!?!」

タンク、と鳴るとボトルを再び半分に分け、ドライバーに差し込む。

『タンク&タンク!』

『ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!』

レバーを回すのと連動して、後ろからタンクの戦車のユニットが何体も現れると、合体ジコチューに攻撃を行う。そして、ユニットは空中へと浮かぶ。

『Are you ready?』

『ビルドアップ!』

『オーバーフロー!』

ビルドからラビットラビットフォームのアーマーが外れると、ジャンプして宙に浮かんだタンクのアーマーを拾うかのように装着した。

『鋼鉄のブルーウオーリア!タンクタンク!ヤベー!ツエー!』

装着された新たなアーマーを纏ったビルドはラビットラビットと違い、全身に青いアーマーが纏り、肩に戦車の砲撃——『BLDタンクタンクシールド』がつけられ、腕には戦車のローラーがモチーフになっているであろうガンドレット——『ファイトマイトガントレット』がついてあった。

「勝利の法則は、決まった!」

ビルドは頭のアンテナをなぞるかのようになげ、決め台詞を言う。

「何ですって!?」

「どうゆうことだ!リーヴァ!」

「そんなの知らないわ!」

ビルドの新たなフォームに戸惑いながらもビルドに攻撃しようと拳を出すのが、ビルドは腕のその攻撃を防御した。すると、ビルドの腕の戦車のローラー『ブルータンクローラー』が動き出し、合体ジコチューの拳にダメージを与える。

「いたあああ!?!」

叫んでる間にビルドの肩の戦車の砲撃が火を放ち、合体ジコチューを吹き飛ばした。

「どういうことなの?」

「新アイテムでの変身はラビットトラビットのはず・・・」

合体ジコチューだけでなく、ソード達もビルドのこのフォームについては知らなくて驚いていた。

「タンクタンクフォームだよ」

「ハート、あなた知ってたの?」

ハートが頷き、あのフォームの存在をみんなに打ち明けた。

——それは、メランの試練が行われていた島での深夜の作業を手伝っていた時の事。

『時間掛かっているけど、間に合うの?』

『うーん、ラビットラビットだけならな……』

『ラビットラビットだけって……?』

『マナにだけ、教えておくよ』

『え?』

マナが近づき、晴夜のパソコンに目を向けるとラビットラビットフォームのデータの隣に、もう一個のフォームのデータが記載されていた。

『これは……』

『これが、今作っているアイテムによって出来る、もう一つのフォーム……』

タンクタンクフォーム』

実は晴夜はラビットラビットフォームと並行でもう一つ、タンクタンクフォームも作っていた。みんなに言わなかったのは、このフォームは秘密兵器としておきたいと晴夜がマナに教えたからだ。

『もう……! だったら早く使つてよ!』

『秘密にしておくのが長過ぎです!』

秘密にしていた事にハート以外が怒ってる間に、ビルドは着実に合体ジコチューを押ししていた。

「お前は理想を掲げる事を下らないって言ったな？」

「だから何よ？」

「理想を掲げて何が悪い！」

フルボトルバスターで合体ジコチューに攻撃する。

「ラブ&ピースがこの世界で脆い言葉かなんて知っている！」

それでも、謳うんだ！愛と平和は俺たちがもたらすものじゃない！多くの人がそれを胸に生きていける世界を守る！」

「調子に乗るな！」

合体ジコチューが反撃に出ようとする、フルボトルバスターを砲撃モードに変え、4本のボトルを差し込む。

『タンク！ジェット！ガトリング！ロケット！アルティメットマッチデース！』

フルボトルバスターのトリガーを引く。

『アルティメットマッチブレイク！』

4本のボトルの力が融合した青い巨体なエネルギー弾が合体ジコチューに命中した。

「はいっ……！」

「安心しなさい、この植物を守りきれば私達の勝利よ!」

『ドラゴニックファイニッシュ!』

『スクラップファイニッシュ!』

『クラックアップファイニッシュ!』

「!?」

音声が届くまえ振り向くと、後ろのジコチュー植物をクローズ、グリス、ローグの三人がライダーキックで攻撃していた。

「キサマらー!」

リーヴァが叫ぶのと同時に、三人のライダーキックは決まり、植物ジコチューは完全に破壊され、三人は同時に着地した。

「ばかな・・・」

「ヘルブロスが負けた・・・それよりもなぜ、私たちに悟られずにここまで・・・!」
「教えてやろうか?」

合体ジコチューはビルドに振り向く。

実は晴夜が渡したボトルは、晴夜の研究結果でブロスの動きを止める事が出来ると判明した。そして、クローズ達三人がここまで悟られず攻撃出来たのは、グリスが持っていた消しゴムボトルで姿を隠したからだ。あとは見破られずここまで飛んできて、攻撃

するだけ。

——これが、ビルドが導き出した勝利の法則。

「そんな、バカな……」

合体ジコチューは動揺が隠せずにいた。

「動揺してますね……」

「ふん！ ざまあねえな！」

「お前たちの負けだぜ！」

合体ジコチューが動揺してるなか、ビルドがフルボトルバスターを構えてハート達五人共に目の前に立っていた。

「これで終わりだ！ リーヴァー！ グーラー！」

ビルドはフルボトルバスターにフルフルボトルを差し込む。

『フルフルマッチデース！』

フルボトルバスターを構えると、ビルドの足が戦車のような姿へと変わった。そのまま旋回しながら合体ジコチューへと攻撃していく。

『フルフルマッチブレイク！』

そして、最後の強烈な一発が合体ジコチューに叩き込まれる。

「今だ！ 決めろ！」

「うんーみんな行くよー!」

ビルドが言うのとハート達五人はキュアラビーズを詰め込み、マジカルラブリーパッドの中央にそれぞれのシンボルマークを表したエネルギーカードを出現した。

「私達の力をキュアハートの元へ!」

四人がエネルギーカードをキュアハートのマジカルラブリーパッドに送る。

四枚のエネルギーカードがハートのマジカルラブリーパッドの画面の上に載り、ハート形を描き、五枚のカードを合わせた強力なエネルギーカードを生成する。

「プリキュア!ラブリーストレートフラッシュ!」

ハートは合体ジコチューに向けてラブリーストレートフラッシュを放った。

フルフルマッチブレイクを受けた所にラブリーストレートフラッシュが命中し、合体ジコチューは浄化され、町も人もすべてが元に戻った。

戦いが終わり、ぶたのしっぽ亭へと戻り、幻冬も入れて全員で食事をすることになった。

「美味しそう!」

「いただきます!」

テーブルの上には美味しそうなオムライスが各々の席に置かれていた。

晴夜が手を伸ばそうとすると、六花達にタンクタンクフォームを隠してたことについて叱られていた。

「亜久里、どうしたの？」

「皆と一緒にご飯を食べる。それが嬉しくて」

「あたしも、当たり前だと思ってたけど、これって、最高に幸せって事だよね！」

「ああ、今この感じが最高だー！」

晴夜が髪をかきながら笑顔で言う。

「さっ、お喋りは後にして！」

「温かい内に食べな」

激闘を終え、みんなで楽しくご飯を食べたのだった。取り戻せたこのかけがえのない日々を、みんなは心から「くしやつ」っとなっていた。

ジコチュークラブのボウリング場では、深手を負ったりヴァとグーラが戻って来ていた。

「マジカルラブリーパッド・・・タンクタンクフォーム・・・！」

「何てパワーだ・・・」

「プリキュアにビルドめ……!次こそは……!」

「残念ながら次はありませんよ」

「ベール……!」

「一体何を……!」

突如、後ろにいたベールがリーヴァとグーラのジャネジーを吸収する。

「我々の力の源、ジャネジーを頂いているんですよ。」

「可哀そうに。あなた方はプリキュアとビルドとの戦いで酷く消耗してしまっただけ。もう抵抗する力も残っていないでしょう」

「貴様……!」

「まさか、最初からそれが目的で……!」

「お疲れ様でした。では、さようなら」

「ベエエエエルウウウウウウウ……!」

その叫びを最期に、全てのジャネジーを吸収し尽されたリーヴァとグーラは消滅した。

「後は俺に任せろ」

ベールの笑いが、誰もいないボウリング場に響き渡ったのだ……

「任せられるかね……?」

飴の形へと凝縮されたジャネジーを喰らいながらボールが振り向くと、旅に出ている総一郎が現れた。

「スターク……」

「いよいよ、本番の幕開けだ」

——これが、今後更に厳しくなる戦いの始まりでもあった。

次回！Re・ドキドキ&サイエンス！

第36話 文化祭で大パニック！

第4章 『エボルト&もう一人のビルド編』

第36話 文化祭で大パニック!

激闘から数日経ち、しばらくは何事もなかった。

そんなある日、晴夜の家の地下室で幻冬を呼び、なぜ仮面ライダーになったのかを聞いていた。

「なるほど、総一郎叔父さんから、ボトルとドライバーを貰ったって訳か……」

「はい……まさか、あの人が皆さんが戦っていた敵とは知らなくて」

幻冬は総一郎がスタークだと知らず、ボトルとドライバーを渡されたと話す。

「いいじゃねえか！仲間が増えたんだぜ！」

「お前なあ……まあ、ドライバーも確認したけど、何も細工は無かったしな（でも、何を考えてるんだ？叔父さんは？）」

晴夜は総一郎の考えが理解出来ず、考えていると龍牙が話を変える。

「なあ、それよりも！俺のスクラッシュユドライバーどうだ？」

「この間の戦いで龍牙のスクラッシュユドライバーは壊れ、未だ修理の余地がない。

「ん？ああ、悪いけど完全に壊れたから修理するなら、結構時間かかるぞ」

「マジかよ！つたく、どうすんだよ……」

まだ修理の余地が無いと知った龍牙はガツカリし、壊れたドラゴンスクラッシュゼリーに触った。

すると、スクラッシュゼリーが爆破して、ドラゴンゼリーが黒いフルボトルのサイズへと変わった。

「アツツー！ツ！あついんですけどー！」

龍牙の手から落ちたボトルを晴夜が拾う。

「ボトル……なんで？」

なぜか、龍牙が触っただけでボトルが出来た事に驚き、龍牙の方を向く。

「なんだよ？」

「いや……あれ？」

急に晴夜の視界がボヤけ、そのまま晴夜は倒れてしまった。

「せ、晴夜さん！」

「おい！晴夜、大丈夫か！おい！」

倒れた晴夜を龍牙と幻冬が揺する。晴夜の顔がかなり赤くなっていた。

翌日。大貝第一中では、明日に行われる文化祭——大貝祭の準備が進められていた。

「晴夜、過労で倒れたの!？」

「昨日、いきなりな」

龍牙が昨日晴夜が倒れた原因を真琴、六花に話していた。

「まあ、最近一番頑張っていたから疲れが溜まってたのよ」

確かに、ラビットラビットやタンクタンクなど新しいフォームを完成させるのに無理し過ぎたと三人が話していた。

「明日くらいには、元気になつてるはずだぜ」

三人が話しながら準備を続けると、しばらくして校門に全生徒が集まる。

「ふーっ、準備完了！」

「いよいよ明日の土曜は文化祭！みんな！楽しもうね！」

「「「おーっ！」「」」」

マナの掛け声の共にみんなが叫ぶ。

「今日も会長は頑張ってますねー」

「フン、いつか倒れなきやいいけどな」

「お疲れ様」

桃田と二階堂がそんな事を言い合っている一方、六花がマナを労う為に彼女の肩をポンと触れた途端、マナは糸が切れた人形のように倒れてしまった。

「ちよつと！マナ！」

「マナ！大丈夫かよ？」

倒れたマナに真琴と龍牙、六花が駆け寄る。

「ダメ……」

文化祭を翌日に控えたその日、マナまでも晴夜と同じようにダウンしてしまったのだった。

それから、晴夜を除いたメンバーが集まりマナの部屋でマナの介抱をする。

「過労だって」

「倒れたと聞いて、本当に心配しましたわ」

体温計も高くなっており、熱を出していた。

「大丈夫か、マナ？」

「そんなに疲れが溜まっていたなんて……」

皆はよく考えてみれば、マナはこの前の大変な事件の後、休みなく文化祭の準備で動き回っていた事を思い出した。

「それって冗談抜きでヤバいと思いますけど？」

幻冬がマナの無茶の行動を聞いて思った。

「でも、みんな文化祭楽しみにしてたし、つつい張り切っちゃったんだよね」
「それで倒れちゃ世話無いでしょ」

「ごめんなさい・・・」

マナは無理していた事をみんなに謝る。

「まあとにかく、病人は大人しく寝てる事だ」

「熱もあるんだから、明日は休みなさい」

「ええっ!?文化祭は——!」

「休みなさい!」

「はい、分かりました・・・」

六花と和也に休めと言われ、仕方なく休む事にした。

それからしばらくして、龍牙達は自分達の帰路に経つ。

「本当にマナだったら、幸せの王子なんだから」

「幸せの王子?どなたですの?」

帰り道を歩く六花に亜久里が尋ねる。

「昔あった、童話の主人公だよ」

「マナにそっくりだもん。後、晴夜君にも似ているんだよ」

「確かに、誰かのため頑張ってる所がマナと晴夜は似てるからな」

「・・・」

幸せの王子と言う言葉が気になった亜久里は図書館で幸せの王子を借り、部屋で読み始めた。

「むかしむかし、ある町に、美しい宝石と金箔で飾られた王子の像がありました。優しい心の持ち主だった王子は、出会ったツバメに頼んで、自分の宝石を町の貧しい人々に届け始めました」

ここまで読むと幸せの王子は確かにマナと晴夜に似ていると思い、そのまま読み続ける。

「最初は剣のルビー、次は瞳のサファイア、それだけではとても足りず、王子は全身の金箔を人々に分け与えました。」

そして・・・えっ!!?そ、そんな・・・」

その結末を見て、亜久里は驚きの声を上げたのだった。

それから、しばらくして亜久里は何かを決意し、晴夜の家へとやってきて、地下室の扉に足を踏み入れる。

「晴夜さん・・・」

〈ドカアーーーーーン!!??〉

亜久里が言いかけるといきなり爆発が起こり、部屋中が煙に覆われていた。

「な、なんですか?」

「出来たー!」

爆煙の中から晴夜がゴーグルをつけながら、身体中汚れて現れた。

「凄いでしょ!最高でしょ!天才でしょ!」

いつものフリーズでハイテンションに叫ぶと、続いて龍牙も現れた。

「それより、これどうするんだよ?」

煙が晴れると、地下室の部屋はめちやくちやになっていた。

「晴夜さん——!」

声聞いて振り向くと埃被ったゴーグルを取る。

「あれ? 亜久里ちゃん、いつから?」

「あなた! 熱を出していたはずです! 何をしてるのですか!」

「何って? クローズの強化アイテムを・・・」

「そうやって、他人の為に尽くしては身体が持ちません! 寝てて下さい!」

そう言う亜久里は強引に晴夜をベットに寝かす。

「亜久里ちゃん?」

「良いですか！今のままでは幸せ王子様なのでいけません！」

「はい？」

「龍牙さんも！ちゃんと監視して下さい！」

亜久里はそのまま地下室の扉を思い切り閉めて出て行った。

「・・・なんで？俺は怒られたの？」

晴夜は自分が怒られた理由がわからずにいた。

その頃、ジコチユークラブボウリング場ではボールがイーラとマーモに何かを渡そうとしていた。

「何だそれ？」

「ブラッドリング。強力な魔力を秘めたアイテムだ」

ボールがイーラとマーモにブラッドリングと名付けられた指輪を見せる。

「着けてみるがいい。見違えるほど強くなれるぞ」

「ホントかよ？」

そう言つて疑いながらも二人はブラッドリングを指にはめた。

すると力が溢れ、強くなり、ジャネジーが上がるのも感じる。

「それと俺が今日からジコチュー軍団のナンバー2だ。お前達は俺の手足となり、その力で人間界を支配するのだ」

「あなたがナンバー2？」

「何を偉そうに」

「大人しくしてた方が身のためだぞ」

「調子に乗んなよ」

「とんだおバカさんね！自分が与えた力で——」

「やられちまうんだからな！」

二人がボールに襲い掛かろうとする。

その前にボールが指を鳴らすと、ブラッドリングから電撃が起こり、イーラとマーモがダメージを受けた。もう一度鳴らすと、電撃が収まった。

「は、外れない！」

「騙したわね！」

「騙される方が悪い」

二人がブラッドリングを外そうとするが、外す事が出来ず、ソファからボールが立ち上がる。

「そのリングは、リーヴァとグーラのジャネジーから生み出したものだ」

「と言う事は……」

「まさか、あなた……!」

これを聞き、このリングはリーヴァとグーラがボールに倒された事を意味している事を理解した。

「さっさと俺の前に跪き、忠誠を誓え。リーヴァとグーラのようになりたくなかったらな」

「しばらく見ない間に随分と偉くなったもんだな」

そしてその様子を、離れたところから総一郎が観察していた。

そして文化祭当日となり、ありす、和也、亜久里と幻冬も学校に来ていた。

「遂に始まりましたわね、文化祭!」

「みんな、賑やかなだな」

「しゅごい!」

「学校でお祭りなんて面白いランス」

「マナは家で休んでるの?」

「うん。シャルルが見張ってるハズよ。晴夜君の調子は?」

「今日は大人しくしてはすだ。晴夜のおばあさんも見てくれるからな
みんなが話していると、一人のおばあさんは六花達に近づく。」

「あの一、来客用のスリッパはどこかしら?」

「ああ、はい」

お年寄りの女性がスリッパはどこかと尋ねた。

「どうぞ!スリッパです!」

「ああ、助かったわ。ありがとうね」

「いえいえ」

「マナ!?何でいるのよ!?」

スリッパを渡したのは、なんと家で寝ていたハズのマナだった

「シャルルが見張っていたんじや・・・」

「止められなかったシャル・・・」

マナを止められなかったとシャルルがみんなに謝る。

「一晩寝たからもう大丈夫だよ!」

「そんなワケ無いでしょ!」

みんなは勝手にマナが来た事に怒っていると。

「あゝの、娘の教室に行きたいのですが・・・」

「はい！ご案内しますね！」

男性が娘の教室に行きたいと言い、これを聞いたマナは案内しようとした。

「ちよつとマナ！」

幸せの王子の事を思い出した亜久里はマナの制服の首元を掴み、保健室へと引つ張って行った。

「え!? あ、亜久里ちゃん！」

亜久里はマナと保健室に向かった。そして無理矢理ベッドの上に乗せられたマナは、上に毛布を掛けられた。

「あなたは分かっているのですか！町の人に尽くした幸せの王子はボロボロになって、最後は鉛の心臓だけになってしまふのですよ！」

「はあ……」

亜久里は幸せの王子の童話の結末を語り出す。

「皆さんは幸せの王子に頼り過ぎです！ここはわたくしに任せて下さい」

「ちよ、ちよつと……！」

「あなたは絶対安静です！お目付け役に後でありすさんと和也さんをお呼びします」

「お願いします」

そう言つて亜久里は、保健室を出て行つた。

それを見ていた幻冬と龍牙、真琴は。

「円さん、いつに増して迫力があるような・・・」

「晴夜、もしここにいたら間違ひなく、保健室送りだったな」

「幸せ王子の話をしてから、なんか変わったわね」

その頃、学校の廊下で副会長の十条が悩んでいた。

(遂に・・・副会長の僕が責任者になってしまいました・・・何事も無く終わりますよ
うに・・・)

「副会長! 大変です!」

そんな願いを覆すように十条の周りに多くの生徒達が集まつた。

「来場者が予想以上で、パンフレットが無くなつてしまいました!」

「迷子が頻発しています!」

「トイレが混んでいます!」

「どうしましょう副会長!」

「ど、どうしよう・・・」

「やっぱり会長がいてくれないと・・・」

「マナは来ません！」

生徒全員がマナの存在が大きいと感じていたその時、彼らの前に亜久里が現れた。「あなた達は文化祭実行委員ですわよね？」

だったらその程度のトラブル、人に頼る前に、ご自分で何とかしてみなさい！

物事を成し遂げようとするには、相応の苦勞と努力が必要なのです！

自分が苦勞せず問題が解決して、そこに価値などありますか!? いえ！ありません！」

亜久里が実行委員の生徒に叫ぶとそのまま歩き去った。

「想像以上のふがいなさですわね。マナの苦勞が忍ばれるものです。こうなったら、ビシバシ行きますわよ！」

ビシバシ行こうと決意し、次の場所へ向かった。

しばらくして通りかかった六花が見たのは、亜久里に……小学生の女の子に言われてふがいなさを痛感して落ち込む生徒達の姿だった。

「ど、どうしたの？」

亜久里に色々と指摘された生徒達が口を揃えて言う。

「何も言い返せませんでした……」

「……?」

一方、マナ達のクラスの二年二組では、ウエイトレスをしていた真琴が生徒達に囲まれていた。

「ヤベエ、なんとかしねえと・・・」

その様子を見ていた龍牙達はなんとかしようと考えていると、

「しつかりなさい!出し物とはいえ、あなた達は喫茶店のスタッフでしょう!」

「亜久里ちゃん!」

「その自覚を持って、毅然と対応してみせなさい!」

今度は教室の方に亜久里が来て注意した。

「「はい・・・」」

「いつもより厳しいな・・・」

亜久里は教室を後にし、保健室へと戻った。

その頃、保健室では。

「熱は下がったみたいですよわね」

ありますが体温計を見ると、マナの体温は平熱になってた。

「それじゃあ——」

「だーめ。ですわ」

ベッドから出ようとしたマナを幻冬が戻す。

「もう少し休んで下さいよ」

今保健室にいるのはマナとありすと幻冬だけだった。和也は一応マナの両親に連絡を入れていた。

亜久里が保健室に戻って来る。

「亜久里ちゃん・・・」

「全く皆さん、しょうがないですわね！」

「何をしていたの？」

「学校の皆さんを鍛えていたのです！」

この学校の生徒達は、童話の人々と同じです。幸せの王子から溢れ出る愛に頼ってばかりで・・・！」

「いや、別にあたし気にして無いし・・・」

「そうやってあなたも甘やかすからいけないのです！」

このままでは皆さん、面倒な事を人任せにする心の持ち主になって、ジコチューにされてしまいますわ！その上マナまでポロポロになってしまったら、一体どうするのですか！

そうしないためには、一人一人が強くならなければいけないのです！」

亜久里の発言に、マナは何やら不満そうな顔していた。

「何か言いたそうですわね」

「確かに亜久里ちゃんの言う通り、みんな強くなれたらそれが一番かもしれない：

でもね、あたしだって何でも出来る訳じゃない。晴夜君も言つてたよ？それぞれ出来る事と出来ない事があるって。

そんな時、誰かを手伝つたり、助けて貰つた時に、胸がドキドキすると言うか：：キュンキュンすると言うか：：そう言う気持ちも、凄く大事な気がするの。それに、学校のみんなだつて人に頼つてばかりじゃないと思うよ」

マナがそう話すと和也が保健室に入ってきた。

「一応、健太郎さんに電話してきたけど、マナ、お前勝手に家出たらしいな」

それを聞いて全員が驚く。

「まさか、何も言わないで出て来たのですか？」

「だって、文化祭が：：：」

マナの行動に呆れて何も言えなかった：：：その時、謎の轟音が保健室まで響いた。

「何か：：：」

「大きな音が：：：」

「したよね・・・」

「何だ今の音？」

幻冬が窓から外の様子を見る。

「外の方が騒がしいですけど？」

「何かあったの？」

保健室のドアを開けたマナはたまたま通りかかった生徒に話を聞く。

「キャンプファイヤーのやぐらが、崩れたそうなんです！」

「えっ!?？」

先程の音は、キャンプファイヤーのやぐらが崩れた音だった。

「どうしましょう会長！」

「やつぱり、皆さんダメダメですわ！」

轟音が聞こえて駆け付けたマナ達が見たのは、グラウンドで崩れたキャンプファイヤーのやぐらと、周りにいた生徒達だった。

「手伝え桃田」

「あ、はい！」

すると、周りにいた生徒の内の二人が丸太を運びに向かう。

「二階堂君!?？」

「まだ後夜祭まで時間がある！会長も言ってる。みんなで楽しもうってな」
「そうさ！楽しもうぜ！みんなだよ！」

その言葉に動かされた生徒達が、みんなで力を合わせてやぐらを直し始めた。

「これは……」

マナに頼りきりだった筈の生徒達が自ら行動した事に亜久里は驚く。

すると、亜久里達の前に生徒が集まって来た。

「あのー……さつきあなたに言われた後、自分なりに考えたんだ」

「パンフレットの代わりに、各教室の出し物を図にして貼り出したり、校門で親子連れに名札を渡したり、迷子になってもすぐ親に連絡出来るようにしたの」

「体育館のトイレを解放したら、混雑が解消したよ」

先程亜久里に怒られた生徒達が、自分なりの考えでトラブルを解消出来たと話した。

「いえ……」

亜久里の指導は、生徒達に大きな影響を与えていた。

同じ頃、マナ達のクラスの喫茶店で大声で喋ってた生徒が注意を受け、プシユケーが黒く染まり出した。

「いいじゃん。好きなようにお茶すれば」

注意された生徒の心にイーラが囁く。

「お前の望み、叶えてやるぜ」

指を鳴らすと同時にプシケーが真つ黒に染まり、取り出された。

「暴れる！お前の心の闇を解き放て！」

闇を加えたプシケーからカップジコチューが生み出され、教室内で暴れていた。

そして、教室から出たジコチューはグラウンドに出てやぐらを直していた生徒達に襲い掛かろうとする。

「文化祭の邪魔はさせるか！帰れ怪物！」

「そよそよよ！」

「俺達が相手だ！」

生徒達がやぐらを守るようにして立ちはだかる。すると…

『ラビットラビットフィンッシュ！』

音声が響き渡り、強烈なキックがカップジコチューを吹き飛ばし、何者かが生徒達の前で着地した。

「何？誰だ？？」

「俺だけど？イーラ」

「ビルド！」

ラビットラビットフォームへと変身したビルドが現れ、生徒達を救った。

「だ、誰だよ?」

二階堂の問いにビルドは振り向かずに名乗る。

「仮面ライダービルド。作る、形成するって意味のビルドだ。以後お見知り置きを」

「晴夜君!」

「あいつ、いつ来たんだよ!」

突然、ビルドが現れた事にみんな驚く。

「とにかく、どこか早く人目につかない場所は……」

「あそこよ!」

マナ達は変身するために、占いの館のテントの中へ入り、全員はドライバーにボトルを、コミュニケーションにラビーズをセットした。

『ウエイクアップ! クローズドラゴン!』

『ロボットゼリー!』

『デンジャー! クロコダイル!』

龍牙達はボトルをドライバーに差し込み、ランナーとピーカーが現れる。

『Are you ready?』

「変身！」

「プリキュア！ラブリンク！」

「プリキュア！ドレスアップ！」

龍牙に形成されたアーマーが装着され、和也と幻冬の身体に液化装備『ヴァリアブルゼリー』を硬化させたものが装着されて、マナ達四人は光に身体が包まれ、光から現れると姿を変え、亜久里はアイちゃんから出た光線から出現したラブアイズパレットにより七つの炎のシルエットに包まれ、大人へと姿を変えると、その後全員の変身が完了した。

『Wake up burning! Get CROSS—Z DRAGON! Yea h—!』

『ロボットイングリス！ブラア！』

『クロコダイルインローグ！オラア！へキヤー！』

『みなぎる愛！キュアハート！』

『英知の光！キュアダイヤモンド！』

『陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！』

『勇気の刃！キュアソード！』

『愛の切り札！キュアエース！』

「……響け! 愛の鼓動! ドキドキプリキュア!」

ハートにクローズ達も変身を完了し、ビルドと共にやぐらを守り、ジコチューを生徒たちから遠ざけた。

「何だお前達!」

「強え!」

「あたしはキュアハート! みんなに助太刀するわよ!」

「愛を無くした悲しいコーヒーカーップさん! このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻して見せる!」

ハートマークを作り、いつもの決め台詞を言う。

「来るのが遅いだろ」

「そう言うお前は、何一人でカツコつけて登場してんだよ!」

グリスがビルドの頭を叩く。

「ええい、プリキュアに仮面ライダーめ!」

「イーラ! あなたも面白い加減、こんなバカな事は止めたら!」

「うるさい! 俺に命令すんな!」

「奴らはどうしたんだ?」

いつもならいる筈のリーヴァとグーラの姿が見えなかった。

「あん？ああ、リーヴァとグーラなら、ボールが消しちゃったからもういねえよ」
イーラはリーヴァとグーラが消えたことをビルド達に告げた。

「ジコチュー！お前の本気、見せてやれ！」

イーラがブラッドリングをビルド達に向ける。

（何だあの指輪？）

すると、ジコチューにエネルギーの腕が数本作り出され、全員に襲い掛かった。

「何これ!?!」

「いつもより……!」

「パワーが……!」

「上がっている!」

「感じがします!」

「あいつら、以上だ!」

「でも、何でいきなり!」

「こんな強さを!」

「一体どういう事だ!?!」

全員がカップジコチューの攻撃を避ける。

「ブラッドリングが生み出したジコチューはスピード五倍、パワー十倍！そして態度は

「百倍だ!」

ジコチューが放ったアッパーガードしたビルド達を上を吹き飛ばした。

(あのリングの力か!)

そしてジコチューの手でカップの中に入れられ、高速で回り始めた。

回り終わると同時に中から出るが、皆目を回し、そのまま倒れてしまった。

「気持ち悪い〜」

「まだフラフラする・・・」

「油断しました・・・」

フラフラになりながらもダイヤモンド達は立ち上がるが、ハートとビルドだけは危機的状況になっていた。

「おい!大丈夫か?」

二人は治りかけの状態だった為かなりヤバイ状態になっている、しかもビルドはまだきついはずなのにラビットラビットフォームに変身している。あと1回でも回されたら吐きそうな状況となってしまうていた。

「キュアハート!ビルド!」

「無理も無いわ。ただでさえ体調が悪かったのに・・・」

「これじゃあ、ラブリーパッドも使えませんか・・・」

「わたくしが時間を稼ぎます！乗り物酔いには強い方ですの！」
「エース……」

エースが一人でジコチューとの戦いに向かうと、心の中でマナの正しさを感じていた。

（正しいのはマナの方でしたわ。童話の中の人々は、幸せの王子を鉛の心臓だけにしておしまっただけど、この学校の皆さんは違った！マナから貰った愛で、自分の心に芽生えさせている！）

ジコチューにラツシユを繰り返し、心の中で呟く。

「お互いに愛を与え合う事で感じるドキドキ、キュンキュン、その胸の暖かさを知っている。そして、それは……わたくしの心の中にも！」

ジコチューが避け、エースに攻撃をしようとした次の瞬間。

『クラックアップフィニッシュ！』

ローグのライダーパンチが決まり、エースの危機を救った。

「一緒に行こう！エース！」

「ええ！皆さんの大切な思い！守って見せましょう！」

「エースミラーフラッシュ！」

三つの長方形の鏡がジコチューの周りを囲み、マジカルラプリーパッドの画面の上で

三角を描く事で鏡面からの光のエネルギーが互いに連結し、エースミラーフラッシュを放った。

「な、何だこれは!」

「あれは・・・エースの新しい技?」

「ラブリーパッドの奇跡ですの・・・?」

エースの新たな技に驚いているとビルドはある事を思い出す。

「おい、龍・・・じゃなくてクローズ!」

「あん?」

生徒たちがいる場で本名を言いそうになったビルドはクローズに何か投げ渡す。

「俺が使うはずだったが、貸してやるよ!」

「おおく!完成させたのか!」

渡されたものは、ナツクルの様な形をし、炎の様な色合いをした新たな強化アイテムをクローズに渡した。

「しゃあ!負ける気がしねえ!」

クローズはナツクルにボトルを差し込む。

『ボトルバーン!』

「オリヤアアア!」

クローズの攻撃がジコチューに命中したが、ダメージは与えられなかった。

「あれ？ん？うわあ！」

敢え無くジコチューに飛ばされる。

「イテエ、全然効いてねえじゃねえか！」

「お前が昨日すぐ寝たから試せなかつたんだろ！いいから、武器として使いなさいよ！」

ビルドが言われるとクローズが軽いため息を吐く。

「負ける気しかしねえ」

呟いている間にジコチューが更に攻撃を仕掛け来た、これを交わしクローズはもう一度、ナツクルにボトルを差し込み、手をナツクルに当てる。

『ボルケニツクナツクル！』

音声が鳴ると、今度のクローズの攻撃は一撃でジコチューを吹き飛ばした。

「なんだ、使えるじゃねえか！」

改めて、今回の新しい武器は使えると感心する。

「今だ！決めるぞ！」

『マックス！ハザードオン！』

『タンク！』

フルフルラビットタンクボトルをドライバーから外し数回振って栓を回し、半分に

割ってからもう一度ドライバーに差し込む。

『タンク&タンク!』

『ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!』

レバーを回すのと同時に小型のタンクユニットが現れ、ジコチューに攻撃する。

「何だよ!あれ!」

攻撃が終わるとユニットは宙に浮かぶ。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

ラビットラビットのアーマーがパージされ、タンクのユニットがビルドに装着される。

『オーバーフロー!』

『鋼鉄のブルーウオーリア!タンクタンク!ヤベー!ツエー!』

「マジカルラブリーパッド!」

タンクタンクフォームになると同時にハート達もマジカルラブリーパッドを出現させる。

『フルフルマッチデース!』

ビルドもフルボトルバスターにフルフルボトルを差し込み、青い巨体なエネルギーが

形成されていき、トリガーを引く。

『フルフルマツチブレイク!』

キュアラビーズを詰め込み、マジカルラブリーパッドの中央にそれぞれのシンボルマークを表したエネルギーカードを出現した。

「二」私達の力をキュアハートの元へ!「二」

四人がエネルギーカードをキュアハートのマジカルラブリーパッドに送る。

四枚のエネルギーカードがハートのマジカルラブリーパッドの画面の上に載り、ハート形を描き、五枚のカードを合わせた強力なエネルギーカードを生成する。

「プリキュアーラブリーストレートフラッシュュー!」

ハートは敵に向けてラブリーストレートフラッシュューを放った。

フルフルマツチブレイクが命中した所にラブリーストレートフラッシュューが命中し、ジコチューは浄化された。

プシュケーが持ち主の元に戻り、壊れた物は全て元通りとなった。

「今日は挨拶代わりだ!じゃあな!」

「あの人達、いなくなっちゃった!」

「誰だったんだ・・・?」

イーラが引き上げ、生徒達が目を開けると、既にプリキユア達と仮面ライダーの姿は無かった。

夜になって、キャンプファイヤーとフォークダンスの後夜祭が行われた。

六花、ありす、真琴、龍牙、和也、幻冬はフォークダンスに参加し、晴夜とマナと亜久里は上でその様子を見ていた。

「亜久里ちゃん、ありがとう」

「えっ?」

「俺からも、ありがとう」

晴夜とマナが亜久里にお礼を言う。

「今日は俺とマナの事心配して、頑張ってくれたんだよね」

「もしかしたら、童話の幸せの王子が与えた愛は、町の人々に届いていたかもしれない。今日のように、皆さんが王子に愛を返してくれる世の中になれば、あなた達が犠牲になる事も、人々がジコチューに屈する事無いのかもしれない」

「そういう風になればいいね」

「ああ、それに今日のようない日が続けば、誰もジコチューにはならないよ」
(そんな未来を作るために、わたくしはあなた達と、愛のために戦いますわ)

亜久里は愛で支え合う未来を作るために戦うと改めて決意した。

「亜久里ちゃん踊ろ！晴夜君も！」

マナが踊ろうと言うと二人は頷き、キャンプファイヤーのみんなの元に向かおうとする。

「よっ！久しぶり！」

突然、声を聞こえて晴夜が振り向くと、階段の上に総一郎がいた。

「叔父さん……何しに来た？」

晴夜がビルドドライバーを取り出す。

「そんな、構えるなよ。戦うのは今じゃない」

「んだと……」

総一郎が指を鳴らすと、地震が起こった。揺れが激しくなると晴夜はキャンプファイヤーの方を見て、薪は崩れなかった事を確認した。

「よかった……？」　「なんだよ、あれ？」

大貝町の山の辺りを見るとに巨大な遺跡のような建造物ができていた。

「晴夜、明後日あの場所に来い。そこでボトルをすべて回収させてもらう。チャオ♪」

総一郎はスチームガンで煙を纏って去っていった。

「叔父さん、アンタは何がしたいんだ……」

…
総一郎の狙いがわからない晴夜。果たしてボトルを賭けた対決はどちらに転ぶのか

次回! Re. ドキドキ&サイエンス!

第37話 明かされる真実…燃えろクロース!

第37話 明かされる真実：燃えろクローズ！

『Ready go!』

「オラアア!!」

『ドラゴニックファイニッシュ!』

男が一人、怪物と戦っていた。

だが、戦えど、戦えど、数は減らず、彼の疲労は溜まっていく一方だった。

「ハア、ハア、はあ……くそっ!後どのくらいぶっ潰せばいいんだよ!!」

戦いに少し区切りが付き、休んでいるがまたすぐに戦いに行かなければならない。

今、彼——仮面ライダークローズがいるのは、そんな地獄である。

「ソードとはぐれちまったし……早く見つけねえと……」

戦っている最中、キュアソードとはぐれてしまったのか、彼女を探しながら戦っていた様だった。

——今、トランプ王国には、人が居ない。多くの人々がジコチューに変えられてしまい、無事なのはもはや自分や相棒であるソードと王女様、他の先輩のプリキュア達であろう。

「何処に居るんだよ・・・!!」

ここでようやく、人らしい人を見つけた。彼が見つけたのは、ソードの先輩であるプリキュアであった。

本来ならば、誰かに、それも知り合いに会えたのなら喜ぶ場面であろう。

——ただし、腹から大量に血が出ていなければの話なら・・・

「おい！大丈夫か!?おい!!」

「……………あ、貴方…………」

「待ってろ！今なんとかするから！」

クローズはそう言うが、彼に医学の知識は無に等しい。知ってたとしても傷に絆創膏を貼るか布で覆うぐらいしか知らない。

それに、今の彼女の様子を見ると、出血が激しく、かなり体力を消耗している。

——もはや、助かる可能性はゼロだろう。

それでも、クローズは自分が出来ることは安全なところに連れて行って、患部を布などで押さえてやることぐらいであろう。少なくともそう考えていた。

「はあ、はあ……………待って、話を聞いて…………!」

「!?何言ってるんだよ！早くその血を止めねえと！」

しかし、彼女はクローズを止めて、話をしようとしていた。

…彼女は深々と切り裂かれた自身の腹部を見て、自分はもう助からないと悟ったのか。せめて彼に、大事な話をしようとしている様だ。

「いいから聞いて！……はあはあ……貴方は今すぐ、王女様とソードと一緒に、ここから逃げて……」

「……どう言うことだよ、それは……」

「いいから、早く逃げて……奴に、出会う、前………に………」

「?……おい、どうしたんだよ急に黙り込んで！おい!!」

クローズは喋らなくなってしまった先輩のプリキユアに大きな声で語りかけている。

…だが、彼女はもう喋ることは無いだろう。

彼女の冷たい体が、それを物語っている。

「…なんでだよ……何でこんな事に、なってんだよ!!」

クローズは、今の地獄がどうして起こったのか、理解できなかつた。

そんな彼でも、理解できることがあつた。それは……

「俺は……何も守ることもできねえのかよ……くそおおおツツ!!」

——自分の無力さを……理解してしまったことだつた……

文化祭を終えた翌日、四葉邸で昨日出現した建造物について話していた。

「現在出現した建造物ですが、今のところ何の問題はありません」

「問題ねえって、あんな巨体なもんが現れてか・・・？」

「でも、何であんなものが・・・？」

みんなが突然現れた建造物の事を考えると晴夜が口を開く。

「多分・・・スタークの仕業だろ」

「ええっ！どうやってやったの？」

六花が質問すると晴夜はわからないと首を横に振る、するとマナがいきなり立ち上がる。

「こうゆう時は、すぐに突入しよう！」

いきなりマナが出現した遺跡の建造物に突入しようと言いだし、全員驚く。

しばらくして、セバスチャンがやってきて、晴夜に近づく。

「晴夜様、少しよろしいですか？」

セバスチャンは晴夜の耳元で囁く。

「っ!? わかったんですか？」

晴夜の質問にセバスチャンが首を縦に振り、晴夜が立ち上がる。

「どこ行くんだよ？」

「ああ、ビルドドライバーの修理に……一応予備としては必要だろ……」

晴夜はそう誤魔化し、セバスチャンと一緒に部屋を後にする。

その姿をマナはずっと見ていた。

「……」

「マナどうしたの？ 晴夜をずっと眺めて……」

「えっ!? ううん！ 何でもないよ！」

マナはそう言うが、晴夜の行動を見て薄々何かを感じていた。

（何か、また隠しているじゃないかな？）

彼女は、晴夜が何かまたみんなに何か隠してるんだと考えていた。

その頃、晴夜は四葉邸の研究室へとセバスチャン共に父の記載データを見ており。その中に人の遺伝子細胞の事が記載されていた。

「これは……」

「はい……龍牙様のことに関するデータがありました」

晴夜は以前、龍牙の事について調べて欲しいと頼み、セバスチャンに調べて貰ってい

た。

「これって、本当なんですか？ 龍牙の体に異星人の遺伝子が含まれているって？」

「はい・・・龍牙様はただの人間ではございません」

記載されたデータからは龍牙の遺伝子に関する情報があった。しかも、龍牙の体は普通の人間とは遺伝子構造の違いが多すぎる。更に父は、龍牙には何か別の遺伝子が含まれている可能性があるかと疑われている、と書かれている。

「でも、龍牙はトランプ王国の住人だからって線も・・・」

「いえ、真琴様の遺伝子とも重ねて見ましたが、真琴様は私達とは変わりませんでした・・・」

「そんな・・・」

「これでは完全に龍牙は晴夜達とは違うという事になってしまう。

「晴夜様、どうされますか？」

この事実を知れば、これからの接し方が変わるのかもしれないと思えばスチャンが尋ねると、晴夜は口を開く。

「どうもいません・・・あいつは、俺にとっては人間です。それに今までの関係を帳消しにさせない」

晴夜にとって龍牙は人間だと呟く。セバスチャンはホツとすると、パソコンを触る。

「それと、龍牙様についてわかりますと、このようなデータも出てきたのです」

セバスチャンが次のデータファイルを開いた。開いたファイルからはビルドドライバーと似たデータが現れ、そこにドライバーの名前が書かれていた。

『『エボルドライバー』？ビルドドライバーの原型となったドライバーとも書かれていませんね』

「はい・・・それ以上の記載はされてませんでした」

セバスチャンが説明すると晴夜は「後は自分で調べてみます」と言い、研究室を後にした。

その頃、出現した遺跡の建造物の中では総一郎とベールが話をしていた。

「こんな物を出現させて、何をしたいんだ？」

「なあくに、これはほんのデモンストレーションに過ぎん。俺の狙いのためのな」

自分の本当の狙いをベールに語り出す。

「何が狙いだ、まさかキンググジコチュー様の・・・」

「そんなんじゃない、俺の狙いは三つある。」

一つはボトルを60本揃える事だ。二つ目は上城龍牙の覚醒だ」

「クローズだと、あのトランプ王国のライダーに何の価値がある?」

クローズと聞いてベールが驚くと、総一郎は気にせず話を続ける。

「そして、最後は・・・俺の力を取り戻す事だ」

「貴様の力、何だそれは?」

「まあ、それはいざれ話す。それより明日、奴が来たら手伝ってくれよ!そのためにお前にあれを渡したからな!」

ベールは不満気に総一郎から去っていった。

そして、ベールが去ると総一郎はピストン部分を彷彿させる作りや動物の眼のような細部が特徴のボトルを取り出す。

「後は究極のドライバーが完成すれば、すべてが揃う」

究極のドライバー。それが総一郎の手に渡るとどうなるのか、そして何が起こるのか。

翌日、晴夜はマシンビルダーでスタークが生み出した遺跡へと向かい、目の前に止めるとドライバーを装着しボトルを取り出した。

『ラビット!タンク!ベストマッチ!』

レバーを回して前後にランナーが出現すると、アーマーが装着された。

『Are you ready?』

「変身！」

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイー！』

ビルドへと変身すると、再びマシンビルダーで建造物へと向かう。

建造物が近づくといくつかの罠が現れ、ビルドの進路を阻み、マシンビルダーから降りる。

「そこまでだ」

ベール、イーラ、マーモの三人がビルドの前に現れる。

——やはり、そんな簡単には行かせてはくれないか、と考えていると…

「よう」

立ち上がって振り向くと龍牙達がいる、和也に頭を叩かれた。

「私達に内緒で何やろとしてたの？」

「まさか、一人だけやろうって訳じゃねえだろな」

「みんな・・・なんで？」

どうしてみんながここにいる事に驚くと、ありすがパットの監視カメラの映像を見せる。

「監視カメラで晴夜さんがここに向かっているのを知ってみんなで先回りしました」

「黙っているなんて酷すぎます」

「水くさいにも限度があります!」

「でも、これは・・・」

晴夜はみんなからお叱りを受けていた。

・・・だが、今回の事は巻き込みたくないと思ったからみんなには言わなかった。と晴夜は答えた。

——そんな事を言うと思った。

「自分のことだから、迷惑かけられないか? ふざけるな!」

「あたし達だって、関わってるよ! みんなで一緒に行こう!」

マナが叫ぶと全員がビルドの前に出てドライバーとコミュニケーションを構え、ボトルとラビーズをセットした。

『ウエイクアップ! クローズドラゴン!』

『ロボットゼリー!』

『デンジャー! クロコダイル!』

龍牙の周りにはランナーが出現し、和也と幻冬の方はピーカーが現れる。

『Are you ready?』

「変身！」

「プリキュア！ラブリンク！」

「プリキュア！ドレスアップ！」

龍牙達三人の身体にアーマーが装着され、仮面ライダーへ。マナ達五人は光と炎に包まれ、光から現れるとプリキュアへと姿が変わった。

Wake up burning! Get CROSS—Z DRAGON! Yea h—」

『ロボットイングリス！ブラア！』

『クロコダイルインローグ！オラア！へキヤー！』

「みなぎる愛！キュアハート！」

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

「陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

「勇気の刃！キュアソード！」

「愛の切り札！キュアエース！」

「響け！愛の鼓動！ドキドキプリキュア！」

名乗りを上げ、全員は変身を完了した。

「みんな・・・つたく、俺のヒーロー感薄れるだろ」

最後の所は小声で呟くとクローズがビルドに振り向く。

「これが終わったら、後で全員に飯奢れよな！」

「わかったよ……」

ビルドがみんなに言うのとビルドが立ち上がる。

「結局、全員が相手か、まあいい」

ベールが総一郎から貰ったもの……トランスチームガンを構え、バットボトルを差し込む。

『バット!』

「それは、スタークの!」

「蒸血」

『ミストマッチ!』

トリガーを引くとベールの体が黒い霧に包まれ、霧が晴れると、黒いアーマースーツを纏った姿で現れた。

『バット・バツ・バット…ファイヤー!』

「スタークと似ている……」

『『ナイトローグ』と、奴が言っていた』

ベールが変身した姿をナイトローグと名乗る。

「ローグって、同じ名前……」

ナイトローグと聞いてローグと名前が同じ事に幻冬は少し戸惑う。

その隙にナイトローグが指を鳴らすと、ナイトローグ達の後ろから十体もの敵が出現した。

「何、コイツら……」

「ロボット……?」

ビルド達の前に現れた敵はロボットなのか、両肩や腕に色んな武装が付けられていた。

「そいつら、この遺跡を守護するもの、ガーディアンだ」

「ガーディアン……」

「やれ」

ナイトローグの指示で、十体ものガーディアンがビルド達九人に襲いかかる。

ガーディアンは腕の武器からいきなり砲撃をしてきた。ビルド達は当然躲し、ガーディアンに応戦する。だが、ガーディアン達だけならともかく、ナイトローグやブラツトリングを着けて強くなったイーラやマーモがいるため先には進めない。

『タンク!』

フルフルボトルをドライバーに差し込み、レバーの回転と共にタンクユニットが現れ

ガーディアンを攻撃した。

『タンク&タンク!』

『ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!』

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

叫ぶと同時に、宙に浮かぶタンクユニットを装着し、フルボトルバスターを構える。

『オーバーフロー!』

『鋼鉄のブルーウオーリア!タンクタンク!ヤベー!ツエー!』

タンクタンクフォームへとフォームチェンジし、フルボトルバスターにフルフルボトルを差し込む。

『フルフルマッチデース!』

フルボトルバスターに青いエネルギー弾が収束され、フルボトルバスターのトリガを引く。

『フルフルマッチブレイク!』

フルフルマッチブレイクが放たれ、ガーディアンを三体同時に破壊することができた。

すると、クローズがナイトローグに向かって走っていた。

「ベール！」

『ボトルバーン！』

マグマナツクルをナイトローグに向けると、ナイトローグはそれをガードしながら呟いた。

「全く、お前のようなトランプ王国を守れなかった男が、スタークの狙いとはな」

「!? 俺が狙いつてどうゆう事だ！」

「さあな、だがスタークの狙いはお前だ」

クローズにはナイトローグの言葉の意味がわからなかった。

「避けなさい！ 龍牙！」

「!?？」

クローズが距離を取ると、ラブハートアローを構えていたソードがナイトローグの前に現れる。

「プリキュア！ スパークルソード！」

ソードがスパークルソードをナイトローグに放つ。

「大丈夫？」

「…おお」

いつもより声が小さい返事でソードに返し、再びガーディアンとの応戦になろうとす

るとハートが口を開く。

「ハート!」

「晴夜君達は先に行つて!」

ハートがビルドに先に行つてと言う。

「行かせるか!」

ナイトローグがビルドの前に立ちはだかるとローグとエースが前に出てビルドを守る。

「ここは、僕らが引き受けます! 龍牙さんと和也さんと一緒に中へ!」

「ここは、私達が食い止めます!」

「幻冬君、エース、ありがとう!」

ナイトローグ達はローグとハート達に任せ、ビルド、クローズ、グリスの三人は建造物の中へと向かっていく。

「あいつら、中に・・・」

イーラが三人を追うとすると、ダイヤモンドがラブハートアローを出現させ、ラビーズをセットした。

「プリキュア! ダイヤモンドシャワー!」

ダイヤモンドがダイヤモンドシャワーを放ち、イーラに攻撃する。

「行かせないわ！」

マーモが鞭で攻撃しようとするのとロゼッタがロゼッタリフレクションを出し、マーモの攻撃からビルド達を守った。

「行ってください！」

「悪いな！」

みんなの助けもあり、三人は無事に建造物に侵入することが出来た。

その頃、遺跡の中いる総一郎は台座に置かれていた大きな箱を見ていた。

「いよいよ、俺の計画も完成に近づく」

そう言いながら、トランスチームガンを構える。

すると、トランスチームガンを握っている自分の腕をもう片方の手で止める。

「一体、お前は何がやりたいんだ……！」

「勝手に出てくるな！黙って見てろ！」

いつもの総一郎の声に対して、スタークになった時の声でそう言うのとトランスチームガンにボトルを差し込む。

『ゴブラー！』

不穏な音楽が流れ出し、銃を上に向ける。

「蒸血」

総一郎がそう言うってトリガーを引くと、黒い霧が総一郎の周囲を囲み、そして、霧が晴れると総一郎の姿はスタークへと変わった。

『ミストマツチ!コツ・コブラ!…コブラ!…ファイヤー!』

一方、遺跡へと潜入したビルド、クローズとグリスは、建造物の中にいたガーディアと戦っていた。

「はああああああ!」

ビルドはラビットトラビットへとフォームチェンジし、フルボトルバスターでガーディアンを撃破していく。

『ボトルバーン!』

「オリヤ!」

『シングル!ツイン!ツインフィニッシュ!』

クローズも新たな武器・マグマナツクルで、グリスはツインブレイカーでガーディアンを倒していく。

周りのガーディアスが全て一掃すると、全員変身を解除し無事を確認する。

「龍牙、和也!大丈夫か?」

「まあな、にしてもコイツら数が多くてイヤになるぜ！」

晴夜と和也が話している中、なぜか龍牙だけ黙りこくっていた。

「龍牙どうした？」

いつもなら口うるさい龍牙が、何故黙っているのか問う。

「ここに入る前、ベールが俺に言ったんだ……」

『スタークの狙いは、お前だ』って……」

（龍牙が狙い？ どう言うことだ、スタークの狙いはボトルじゃないのか？

もしかして……）

スタークの狙いが一体どつちなのか考えると、急に晴夜達の前に扉が現れ、開きだした。

「なんで、急に扉が？」

「来いってことだろ！ 行くぞ」

三人が扉の中に入る。中はさっきいた部屋よりも広く、周りには何本の柱が立っていた。

「この部屋どこかにスタークがいるのか？」

「おそろくな、だけど気を付けろ、何か畏があるかもしれない」

晴夜が注意するように言っしてしばらく歩くと三人の目の前に床に座っていたスター

クがいた。

『ようこそ、仮面ライダー諸君』

「・・・アンタに聞きたい事がある、この建造物を作って一体何をするつもりだ!」

この建造物を作った目的は何かとスタークに問う。

『この建造物は、俺の力を取り戻すデモンストレーションに過ぎん、お前達からボトルを回収すれば、すぐにでも消す』

そう言つて、スタークが立ち上がる。

『さつて、話は終わりとしてボトルを渡してもらうか』

スタークがボトルを渡すように言ってくるが晴夜達三人はドライバーを装着した。

「アンタには、絶対に渡さない!」

『そう言うと思つたよ』

スタークは指を鳴らすと、下からスマッシュが二体現れた。それを確認し、三人はボトルをドライバーに差し込む。

『ラビット!ラビット&ラビット!』

『ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!』

『ウェイクアップ!クローズドラゴン!』

『ロボットゼリー!』

ドライバーのレバーとレンチを操作し、三人の周りに金具とランナー、巨体なビーカーが出現した。

『Are you ready?』

「「変身！」」

『紅のスピーデージェンパー！ラビットラビット！ヤベーイ！ハエーイ！』

『wake up burning ! CROSS E—Z DRAGON ! Yea
h !』

『ロボットインギリス！ブラア！』

三人の体にアーマーが装着され、仮面ライダーへと変身した。

それと同時に、スマッシュがビルドとグリスに向かってきた為、ビルドとグリスがスマッシュに攻撃を仕掛ける。

フルボトルバスターにツインブレイカーの攻撃が命中しているがスマッシュの様子がいつもと違う。

「どうなってるんだ？反応がない？」

『そいつらは、自体を持たないクローンスマッシュだ』

クローンスマッシュ。つまり、コイツらは人為的に作られたスマッシュ。ビルドとグリスの攻撃は確実に決まっているのにクローンスマッシュは全く効いている様子を見

せない。

『さあつて、俺たちもやるか?』

スタークが立ち上がると、スタークから赤いオーラが溢れて出ていた。

「うおおおおお!」

クローズが叫びながらスタークに拳で攻撃する。

『俺が狙い』つてどうゆう事だ!そのせいでトランプ王国が滅んだつて!」

『ベールの奴、余計な事を・・・』

「どうなんだ!」

『その通り!』

クローズの拳を掴んで叫ぶ。

『確かに俺の狙いはお前だ・・・だがまだ足りない!』

スタークがクローズを払いのけ、台に置いてあつた箱に手を当てるとクローズの周りに箱のような形をしたものが形成され、クローズを覆い、中で爆破するとクローズにダメージを与え変身解除してしまった。

「龍牙!」

「スターク!」

グリスがスタークにツインブレイカーを振り回して攻撃する。

『クローズに感化されたか？だがお前も足りない！』

グリスを吹き飛ばし、再び箱に触ると柱がグリスを攻撃し、壁に激突し変身解除してしまった。

「かずやん！」

「この部屋を自由に操作できるのか？」

ビルドが推測している間にスタークが倒れていた龍牙に話しかける。

『お前の力はそんなものか？』

また箱に触れると赤いエネルギーが放たれようしていた。

「やめろー！」

エネルギーが龍牙に放たれた。だがエネルギー波は龍牙ではなく、庇うために前に出たビルドが受け、ビルドも変身解除してしまった。

「晴夜……」

『こんな、至近距離で受けてそんなに死にたいのか？』

晴夜を服を掴んで、壁にぶつけると首を絞める。

「アンタは一体、龍牙に……」

なぜそこまで龍牙にこだわるのか、晴夜は苦しみながら問う。

『お前は、もう知ってるんだろ？上城龍牙がただの人間じゃないって事を』

「!??なんで、アンタがその事を・・・!」

その事を知ってるのは晴夜とセバスチャンだけのはず、なんでスタークが…
それを聞いた龍牙が晴夜に問う。

「晴夜・・・俺が人間じゃねえってどうゆう事だ・・・!」

「それは・・・」

『言葉通りだ。お前は・・・「やめろ!」人間じゃない』

「えっ?うそだろ・・・」

スタークの発言に龍牙の体に衝撃が走る。

『お前の体に流れる血は俺と同じ世界を滅ぼす力だ!俺はその遺伝子を持つお前が成長し、強くなるのを待っていた』

「アンタと同じ?・・・なんだよ・・・それ・・・」

『お前は今まで戦っていたのは、プリキユアを守るためでもなく、晴夜達を助けるためでもない・・・戦いだけだ』

「それ・・・以上は・・・やめろ・・・!」

晴夜はスタークの発言を止めるように言うがスタークは止めようとはしなかった。

「戦う事でしか満たされない、その時点でお前は俺と同じ存在、人間じゃないんだよ!」

「そんな・・・俺が人間じゃねえ・・・」

自分が人間じゃない事に驚くこと信じられず、動揺し混乱しそうになると晴夜が口を開く。

「あん時みたいなの……しよぼくれた顔してんな……」

龍牙の顔が初めてトランプ王国で出会った時の顔を思い出し、その時の同じ顔だったと呟く。

「確かにお前の遺伝子は、人間じゃなかった……でも、俺から見ればそれだけでお前はバカで単細胞の人間なんだよ……!」

「晴夜……」

晴夜の言葉が、人間じゃない自分を人間だと思ってくれている、そんな思いに思わず涙が出そうになる龍牙。

『黙ってる!』

「ぐわああああ!」

「晴夜!」

スタークが晴夜の首をさらに締め付ける。苦しんでる晴夜の姿を龍牙は倒れて見ることしか出来なかった。

「なんで……体が動かねえんだ……立ち上がれねえんだ……どうして……いつも、俺は助けられねえんだ……」

『いいから、早く逃げて……奴に、出会う前……に……』

『龍牙……、私……何も守れなかった……』

その時龍牙は、自分の無力さと、トランプ王国を守れなかった事を思い出してしまふ。自分ももっと早く着いていれば、助けられたかもしれない命を助けられなかった時の事を。

自分ももっと強ければ、彼女に……真琴にあんな思いをさせずに済んだかもしれない。

俺はまた、誰も助けられずに生きていくのか？

俺はまた、後悔したまま朽ちていくのか？

「あいつは、俺を信じてくれた……人間だって、言ってくれたんだ……最高の相棒なのに……！俺は……何も出来ねえんだ……いいのか……」

龍牙が呟くと、ヨレヨレだが立ち上がろうとする。

「いいわけねえだろ！」

そして龍牙が叫ぶと龍牙の瞳が赤くなった。それを見たスタークは晴夜を離した。

『いいぞ！龍牙！』

スタークが箱に触れると赤いエネルギー光線が龍牙に直撃した。

すると、直撃したエネルギーは龍牙の体から出ていき、龍牙の持っていた黒いボトルに集まって、それをフルボトルへと姿を変え、龍牙の手に置かれる。

「龍牙・・・ナツクルに差せ！」

龍牙はクローズマグマナツクルにボトル——『ドラゴンマグマボトル』を差し込んだ。

『ボトルバーン！』

グリップを上へと上げ、そのままドライバーに差し込む。

『クローズマグマ！』

レバーを回し、龍牙の後ろからナツクルと同じ形状の形をした巨大なもの——『マグマライドビルダー』が出現した。

『Are you ready?』

「変身！」

ナツクル型のビルダーから流れ出た溶岩が龍牙の体に掛かり、流れ出た溶岩——『ヴァリアブルマグマ』からヤマタノオロチのような八体の龍が現れ固まる。そのままナツクルが前を押すと固まった溶岩は壊れ、そこに新たなフォームへと変身したクローズが現れた。

『極熱筋肉！クローズマグマ！アーチャチャチャチャチャ　チャチャチャチャアチャー

!』

「クローズマグマ」

晴夜に名付けられたクローズの新たなフォーム『クローズマグマ』。

その姿は、全身がマグマのようにオレンジ色な姿になっており、頭や胸、肩、腕、脚部には黒い龍のようなモチーフと後ろに羽——『ソレスタルパイロウイング』まで装着されていた。

「力がみなぎる……魂が燃える……!俺のマグマがほとばしる!」

『やれ』

スタークの指示で二体のクローンスマツシユがクローズに襲い掛かる。

だが、クローズのマグマのような炎に包まれた拳がクローンスマツシユを寄せ付けず、クローズの嵐ようなラツシユが続く。

「もう誰にも止められねえ!」

クローズの熱い拳がクローンスマツシユの体を貫き、スマツシユは爆破した。

それを見てスタークがクローズに襲いかかる。

『いいぞ!龍牙!お前の本気を見せてみろ!』

「ハッ!上等だ!」

クローズの拳がスタークを吹き飛ばした。

「今の俺は負ける気がしねえ！」

いつもの台詞を叫ぶと、ドライバーのレバーを回し高く飛んだ。その後ろをマグマの炎を纏ったドラゴン達——猛光火碎龍『マグマライズドラゴン』が追い、クローズがキックの態勢に入ろうとし、音声が響く。

『ボルケニックアタック！』

「オリヤヤヤヤヤヤ！！？」

八体の炎を纏ったマグマのドラゴンの力を足に収束させたライダーキックをスタークに放つ。

『ぬおおおおお！』

クローズのライダーキックが決まり、スタークは変身解除し、石動総一郎の姿に戻り、クローズが着地すると体から湯気が出ていた。

「熱っ！あっつい！熱いですけどー！」

クローズが叫んでる間に晴夜は急いで台座に置かれていた箱を奪う。

「この箱は貰うぞー！」

晴夜が言うと石のかげらが晴夜の頭に当たり、上を見上げる。

なんと、建物がどんどん崩れ始めていたのだ。

「なんで、いきなりー！」

「とりあえず逃げるぞー!」

三人が急いで出口に向かって走る。

その頃、外で戦っていたナイトローグ達やハート達も、遺跡がどんどん壊れていく事に驚く。

「ああ・・・建物が!」

「崩れだしましたわ」

「チツ! スタークの奴、失敗しやがったな!」

「どうすんだよ?」

「疲れたし、あたしは帰りたいわ」

三人が呟くと、ナイトローグとイーラとマーモは撤退していった。

「いけない! 晴夜君達が!」

「晴夜さん、和也さん!」

「龍牙ー!」

みんなが叫ぶ中、エースだけが冷静でいた。

「・・・大丈夫ですわ」

みんながエースの指した方を見ると崩れた建造物の瓦礫からクローズが二人を背

負って飛んで出てきた。そして、ハートの前に着地し、変身解除した。

「痛えー！もうちよつと優しく着地してくれよ」

「贅沢言うなよ！それよりどうよ！俺のクロスマグマ、マジ最強だったろ！」

「まあ、口ではなんとでも言えるがな」

「んだと！誰が助けてやったと思ってるんだよ！」

龍牙が和也をじゃれ合いながら関節技をする。

「参ったか！」

「参りませんー！」

「もうやめなさいよ」

「かずやんがもたないわ」

ソードとダイヤモンドが止めようとするその光景を、みんなは笑って見ていた。

「その箱は何ですか？」

エースが晴夜の持っていた箱について尋ねる。

「ああ、これ。スタークが武器として使ってたみたいだけど・・・この箱をどつかで見た

ことがあつたような・・・」

晴夜が呟くと瓦礫からスタークが出てきた。

『今回は、これで引いてやる・・・だが、上城龍牙。お前と俺の運命から逃れない』

スタークが言う。龍牙が前に出る。

「例えそうだとしても……俺がアンタと同じ力を持っていても俺は、仮面ライダーだ……アンタが世界を破滅させるために力を使うなら……俺はこの力を愛と平和のために使う！それが、俺が信じた仮面ライダーだ！」

『ふん。晴夜、その箱はいずれ取り返す。チャオ』

スタークは煙を纏って消えていった。

そして、晴夜と龍牙はみんなに話した。龍牙の体から人間にしては遺伝子の構造が違い、スタークは龍牙のその力が狙いだ。

「たったそれだけ！」

「龍牙さんが私たちと違うのは遺伝子だけで私たちと変わりません」

「そんな、小さな事で悩むなよな」

「驚きましたけど、龍牙さんって僕から見れば人間だと思います」

「あなたの持つ熱い心は人と変わりません」

「龍牙君は今でもあやし達のみんなの友達だよ！」

「みんな……」

「アンタは私を支える仮面ライダーでしょ！」

ソードが拳を龍牙の胸に当てると、晴夜を見る。

「なあ、お前はただの単細胞でバカの人間だろ」

晴夜が笑顔で言う。龍牙が晴夜の肩を掴む。

「俺は！バカじゃねえー！」

晴夜の肩を揺する。まるで初めて会った時のような感じだ。

そして、開き直るように叫ぶ。

「よおーし！みんなでメシ食いに行こうぜ！」

「『『『賛成ー！！？』』』』」

みんなが言うと、晴夜はスタークから奪った箱を見る。

「この箱って、一体スタークとなんの関係があるんだ……？（でも、何処かで見たことが……？）」

スタークから奪ったこの箱には一体何なのか、気になっていた。

そして、なぜこんなにも初めて見た感じがしないのか……

その頃、総一郎はジコチューのアジトに戻り、自分の部屋に入ると。自分のテーブルにビルドドライバーと似ているドライバーが置かれていた事に気付く。

「もう、トランスチームシステムは必要ない……」

トランスチームガンを投げ、机に置かれていたドライバーに手を伸ばす。

「いよいよ、本当の力で奴らを潰すか？器の方も完成したからな。フツフツ……楽しみだな」

そう呟きながら、総一郎はドライバーを装着した。

『エボルドライバー！』

“エボルドライバー”と音声が鳴ると総一郎は2本のボトル——『コブラエボルボトル』と『ライダーエボルボトル』を差し込む。

『コブラ！ ライダーシステム！ エボリューション！』

ボトルを差し込みレバーを回すと、ベートーヴェン作曲の『交響曲第九番』らしき曲を流しながら、前後のランナー『EVライドビルダー』からアーマーが形成され、どす黒いオーラを纏う。そして、総一郎は腕を胸の辺りに交差させる。

『Are you ready?』

「変身！」

周りに歯車のようなエフェクトが回りながら、総一郎の体に二つのアーマーが装着された。

その姿は、天球儀や星座早見盤など、宇宙に関連する器具がモチーフとして全身にあ

しらわれていた。

『コブラ！ コブラ！ エボルコブラ！ フツハツハツハツハツハ！』

「仮面ライダーエボル・・・フェイズー・・・ついに、取り戻したぞ！」

総一郎が変身した新たな仮面ライダー、『仮面ライダーエボル』。

——この仮面ライダーがいずれ、ビルド達に襲いかかる最悪の敵となる…

次回！Re・ドキドキ&サイエンス！

第38話 お泊り会でグリスの心火

第38話 お泊り会でグリスの心火

四葉邸での夜、マナ達プリキュア組はお泊り会を開いていた。

「ではこれより・・・告白タイム！」

そんな中、その場を盛り上がるようにマナが叫ぶ。

「何ですのそれ？」

「好きな人を告白するのではないのでしょうか？」

「え、好きな人・・・!?？」

ありすの発言に戸惑う真琴。

「お泊り会と言えば告白タイムだもんね」

六花にキスしようとするマナ。トランプをしていたシャルルとラケル。アイちゃんに齧られ、ランスとヌイグルミの上にいたダビイが振り向く。

「そんな習慣が！」

「恐るべしお泊り会ダビイ！」

何か勘違いしている妖精達。

「じゃあ、ありす選手から！」

「は、はあ……」

ありすが受け入れるとヘリコプターのプロペラの音が聞こえた。
ジコチューだと思い、アイちゃんと妖精達が警戒する。

「いえ、お父様ですわ」

否定して驚くマナ達が振り向き、外の方へと向かう。

「お父様〜!」

嬉しそう走っていくあります。マナ達も一緒に付いて行つた。

眼前には自家用ヘリが止まっておりセバスチャン達、家中の使用人達がお出迎えに出
ていた。

「おー、あります! 更に元気に大きくなつたねえ!」

「3ヶ月ではそんなに代わりませんわ」

ハグされるありすに笑う。「お久しぶりです」と後ろにいたマナが挨拶する。

「マナ君、六花君も元気そうだね! 和也君も元気かねえ?」

と返す星児にマナと六花は和也も元気だと頷く。

「おや、そちらは?」

真琴と亜久里の方を見る星児に、ありすは「劍崎真琴さん、円亜久里さん」と二人を
紹介する。

「初めまして」

「素晴らしい！ 全世界に向けてユニットデビューさせたくなるような美人揃いだ！」
カメラジェスチャーでマナ達を見ると、ありすは笑っているが、真琴と亜久里は困り気味。

「ところでお父様、突然の帰国でしたけど」

「急用が出来た。だから明日の大統領との晩餐会、私の代わりに頼めるかな」

「お安い御用です」

星児の任された仕事を引き受けるありす。

「すまない」と詫げる星児はこの後、スイスに飛ぶと伝えると「では皆さん、御機嫌よう！」と手を上げる。

ニッコリ見送るマナ達の後ろで、真琴と亜久里は驚いていた。

「大統領……」

「スイス……」

ありすの父から出た言葉に驚き、真琴と亜久里は言葉が出なかった。

その頃、晴夜の家の地下室では龍牙の他に、和也と幻冬の二人も来ており、龍牙の体の遺伝子の状況と未知のドライバーのデータを見せていた。

「改めて見ると、すげえな龍牙の体・・・」

「俺だつて、驚いて何も言葉にできねえよ・・・」

「ん？ 晴夜さん、その次のファイルは何ですか？」

幻冬が言うのと、龍牙についての研究ファイルにはまだ続きがあつた。試しに押し試してみるのが開くまでには時間かかると表示され、パソコンを閉じた。

「さつて、暗い話はここまででしょうか？」

「そうですね、気分を変えましょうか？」

何か明るい話をしようと思案し、四人が考えると珍しく龍牙から口を開く。

「あ！ 俺さ、前から聞きたいと思つてただけど、和也つてどうやってマナと六花とありすと幼馴染になつたんだ？」

「えっ？ どうやって・・・」

「俺も気になるな、どんな出会いだつたんだ？」

「ありすさん見たいな大金持ちと何で友達になれたんですか？」

三人が和也に聞くと、和也が立ち上がつて晴夜の作業机の道具を持ちながら話す。

「俺たちが初めて出会つたのは今から8年前だ・・・」

和也が語りだそうとする・・・

和也が語りだそうとした一方、広い広いありすの部屋のベッドの上に居るマナ達がありすの父について話していた。

「それにしても豪快なお父様でしたわね」

「ありすのパパは世界中に支社を持つ四葉財閥の社長でランス」

「社長って何か知ってるの？」

真琴に聞かれ、ドヤ顔で知らないと返すランスに呆れる一同。

「でも、ありす。いつもそんなお父さんの仕事の手伝いして大変じゃない？」

大変は認めつつも楽しいとありすは返答する。

——だって夢の為だから、とのこと。

「夢？」

「はい、世界中の人を笑顔にするのが私の夢なのです」

笑顔で言うありす。それを聞いてすごいとランスは感心する。

「私がそんな考えを持ったのはマナちゃんと和也さんのお陰なんですよ」

とマナに言うが、言われた本人は少し驚く。

「あたしとかずやん何かしたつけ」

「その話聞いてみたいですわ」

「ではお話ししましょうか、あれは、まだ私が6歳の時でした」

ありすはマナと六花、和也との出会いを語り出した。

~~~~~

この頃のありすは体が弱くて、いつも家の庭で一人で遊んでたらしい。

ある日蝶を発見し追いかけるありすは、レンガ調の道の隙間に引っかけりコケてしま  
う。

「危ない！」

その時スライディングし、お腹でありすをキャッチしたのがマナだった。

「大丈夫？」

戸惑いながら頷いて名前を聞くありす。

口に手をあて「しっ！」とするマナがありすに言うのと、空に向けて指を指すと、先ほ  
どの蝶がマナの指の先端に止まる。

マナは腕をゆっくり下ろしてありすの目の前に持つてきてあげる。

「ちようちよ、好き？」

と聞くマナに、少し間をおいて「はい」と答えるありす。

すると、裏門からマナを呼ぶ聞き覚えのある声が聞こえた。二人は少し驚き、蝶は飛

んでいってしまった。

「勝手に入ちやダメでしょ!」

「早く出ろ、叱られるぞ!」

裏門から小さい頃の六花と和也が叫ぶ。

「さっきの蝶々を追いかけてて」

入ってきた理由を話すと、自分のせいで逃してしまったと落ち込みながらありすは謝る。

「いいよ。それに・・・きつと、これでよかつたんだ」

空を見上げて蝶を見送ると、やっぱり俯いてしまう。

「ここでもつといっぱいちようちよが居るとこ知ってるんだけど、一緒に行かない?」

マナは蝶々が沢山いる所に案内しようと、ありすと一緒に誘う。

「え、でも・・・」

「あ、ごめん。急に言われても困るよね」

マナは両手を広げ、左右に動かしながら謝る。

「あ、いえ・・・」

私・・・行ってみたいです」

ありすはそう答えると、驚きながらも嬉しそうな表情になったマナは門外の六花と和

也を見る。六花と和也も嬉しそうである。

「じゃあ行くこう!」

とマナありすと一緒に外へ向かう。それを見つけたメイドが止めに行こうとする。

「よいのだ」

しかし、そのメイドはセバスチャンにより追いかけるのを止める。

「全ての責任は私が取る」

ありすを連れ、四人は行ってしまった。

蝶がいつぱい飛んでいるそこは、辺り一面のコスモス畑であった。

「うわあ〜!」

驚きの声をあげるありす。コスモス畑を走る四人だが、途中でありすが転ぶと心配するマナと六花と和也。だが、コケたまま転がって笑ってるありすを見て三人も寝転がる。

「あたしね、ホントはあなたの事知ってたんだ」

「門の外から時々見てたんだ。でも、ずっと庭から出てこないから」

「何か理由があるのか? 家から出ないのは?」

ありすは自分は体が弱くて家から出ちゃいけないと父親に言われてると理由を話す。



「マジかよ！」

「え、そうだったの！」

「まずいことしちゃった？」

理由を聞いて、マナと六花と和也はうろたえる。

「いいんです。こんなに楽しい思いをしたのは初めてですから」

三人に返すとありすが咳き込む。

「大丈夫!?？」

六花と和也に心配して起き上がる。

「平気ですこのくらい」

ありすが言うと、和也が自分の水筒からお茶をコップを入れ、ありすに渡す。

「飲めよ、少しは喉が楽になる」

「ありがとうございます」

ありすがそれを飲むと、また三人を見る。

「それよりも、もっと色んなところに行ってみたくありませんか」

「ホント!?？」

「なら、色んな所を見よぜ！」

「よし、行っちゃおう！」

マナ達三人が嬉しそうに言うと言くと頷くありす。

「あたし、相田マナ！」

「私は、六花、菱川六花！」

「俺は和也、沢田和也！かずやんってあだ名があるんだ！」

三人が自分の自己紹介した。

「ありす・・・四葉ありすです」

ありすは自分の名前を名乗った。

それが四人の出会いだった。

それからありすは、よく家を抜け出してマナと六花と和也と遊ぶようになった。山中を進み、滝に行ったり、それから、四人で砂浜を走り回ったり、ダンボールのスライダーやお菓子面白い食い、似顔絵を描いたりして遊んでいた。

ある日の雨の竹林。頭をかばってるありす後ろでは何やら小屋の前の入り口のカーテンを開けると入るとすぐに天井を見上げているありす。

「なんですの、ここ？」

「六花とかずやんとで作ってたの」

「私達の秘密基地だよ」

「俺達にとつて特別な場所だ」

するとありす・マナ・六花・和也の順に水滴が落ちてくる。未完成だと説明し、四人で完成させようとマナが言う。

「お手伝いします」

「約束だよ」

「はい!」

約束するありすは、その後みんなと葉傘で雨の中を楽しそうに走る。

ところがその日、ありすが熱を出してしまった。

息が荒いありすに濡れタオルをおでこに乗せるセバスチャン。

その後、仕事から帰宅してきた父：星児がセバスチャンから理由を尋ね、残念だと呟く。

それからしばらくし、ありすはマナ達と遊ばなくなり、不安になった三人は四葉邸への門の前にやってきた。

「最近居ないね・・・」

「どうしたんだろ?」

「また体悪くなったのか?」

三人が心配していると、セバスチャンが三人の前にやってきた。

「ありすお嬢様はもう一緒に遊ぶ事はできません」

「「え!?」」

もう遊べないとセバスチャンの発言に三人が驚く。

ありすはこれから外国へと引越しすることになったと、セバスチャンは三人に告げた。

「ここよりさらに環境の良い所で暮らすべきだと父親が決められたのだ。

「いつですかそれは・・・」

「今日、もう間もなく」

「そんな・・・」

もうすぐありすとのお別れという事実には、三人は言葉が出なかった。

そんな中、ありすは部屋で一人で何かを持ってポツンと立っていた。すると、ドアから出発だと伝えられた。

「マナちゃん、六花ちゃん、和也さん・・・ごめんなさい」

自分が書いた三人の似顔絵を見て、涙が出そうになる。

「ありす〜!」

その時、自分を呼ぶ声が聞こえ、辺りを見回し、木のところを見るとそこにはマナ、六花、和也の三人がいた。そのまま三人は室内へと入っていた。

「三人ともどうやってここに?」

「それより外国に引越すなんて……」

「なんでこんなことになったんだ?」

三人にこうなつた理由を語る。

「私が……お父様の言いつけを破つてしまったから……」

「本当に行つちやうの?」

「秘密基地作るんじゃないの?」

マナと六花の二人が言うのと、ありすは一緒に作りたいが父親には逆らえないと答える  
と、和也がありすに近づくと、

「ありすの心はどうなんだ?」

和也の問いに悩むとドアを叩く音が聞こえ、「出発するよ」と父・皇児の声が聞こえてきた。

それを見たマナはドアのノブに鍵をかける。

「ごめんなさい!でも……」

「ん？誰だね君は・・・そうか、ありすを連れ出したというのは君だね」  
察するとドアを強く叩き開けようとする。

「ありす！」

「ありす！」

「ありす！」

三人が叫ぶと、ありす三人の遊んでいた日々を思い出していく。

「私・・・私は・・・ここに居たいです・・・」

私、マナちゃんと六花ちゃん、和也さんと一緒に居たいです！」

ありすの意思が伝わり四人は手を取り合う。

その一方で強引にでもドアを開けようと星児が指示を出そうとしていた。

「お待ちを・・・」

セバスタンが星児や使用人達の前に現れ、手伝えと頼まれるが出来ないと反抗する。

「何？」

「私の仕事はお嬢様の幸せを願い、護る事。それを阻むと言うのなら例え相手が誰であろうと・・・お相手いたしますぞ」

「なるほど、ありすの友人を入れたのもお前だな」

と察すると星児は使用人にセバスチャンが攻撃するよう指示をし、セバスチャンが使用人達の足止めに入る。

「セバスチャン……」

「六花！」

六花がパットで何かを調べていた。

「それは……」

「この家の事がわかるからって」

このパットは、セバスチャンが三人に渡したものらしい。

「よし、大体わかったわ」

「あります、行こう外へ！」

マナがすすり手を握り、四人は飛び出した。しばらくして星児と使用人達が入ってきたが既に四人の姿はなかった。

四人はすすり部の部屋にあった抜け道から部屋から脱出した。

「こんな抜け道あったなんて」

「この家、こういう仕掛けが沢山あるの」

話してる間に使用人達がマナ達四人を見つけ、慌てて逃げる。

「どうしよう〜」

「任せて！」

六花が二つの像の鼻を突つくと、通路から鉄球が現れて使用人達の進路を妨害した。

その後、四葉邸の抜け道を使い外へと繋がる道を四人で探し回り、ようやく外へと繋がる入り口へと到着した。

「いまだ！誰もいねえ！」

「急ぐう！」

四人は急いで門へと走って行く。すると噴水から星児が現れた。

「あります、待ちなさい、あります！」

「お父様！ごめんなさい！」

父親に謝りながらありますはマナ達と共に走る。使用人達と共に走って追いかけるが、流星に年か星児は息を切らしている。

「あります……何時の間にあんなに走れるように……」

しかし、星児はありますの姿が遅しく見えていた。

「もう少しだよ！」

四人は既に門の前とやってくると、床下のシャッターから使用人達が現れた。

「そんなのありかよ！」



「こつちー！」

引き返そうとすると既に後ろの方にも多くの使用人がいた。

「そんな！」

完全に四人は使用人達に囲まれていた。

「ありす……」

使用人達の前に星児が現れた。

「お願い、ありすを連れて行かないで！」

マナが星児に連れ行かないで頼み込む。

誰もが、ありすを連れて行ってしまうと思われていた。

「驚いたよ。何時の間にか元気になったんだね」

だが、待っていた言葉は全然違っていた、ありすはマナと六花と和也を見る。

「はい……マナちゃん達と出会って、沢山元気を貰いました」

マナと六花の手を握り、後ろにいた和也は笑顔でその様子を見ていた。

「この子達が、好きかい？」

星児の質問に頷き、ありすが自分の思いを語る。

「お父様、私、ここに居たいです。マナちゃんと六花ちゃんに和也さんとずっと一緒に居たいです！」

——これが四人の出会いであり、始まりの話だった。

~~~~~

時は戻り、桐ヶ谷家の地下室へと場所は戻る。

「何というか……」

「破茶滅茶過ぎて言葉が出ねえ」

「まあ、これが俺たちの出会いだな。じゃあ、次は俺から指名させてもらぜ！えつくと……」

突如、晴夜のビルドフォンから電話の音が鳴り、晴夜がそれに出た。

「……わかった、今から行くよ！」

「どうした？」

「マナ達からだ。四葉邸でジコチューとスマッシュが現れた」

「マジかよ！」

「急ぎましょう！」

四人は急いで四葉邸へと向かう。すると、和也は晴夜の机に置かれていた新しく作られたドラゴンスクラッシュゼリーが目に入る。

(借りるぞ！)

和也がスクラッシュゼリーを握り、三人の後を追いかける。

その頃、四葉邸ではヘリコプタージコチューが上空に現れ、クローンスマッシュが地上に現れていた。

「お父様のヘリが！」

更によりす達が空を見ると、星兎が乗っていたヘリコプターが今にも落ちそうになっていた。

「みんな行くよー！」

マナが言うと四人はコミュニケーションとラビーズを取り出した。

「[[プリキュア！ラブリック！]]」

「[[プリキュア！ドレスアップ！]]」

マナ達四人は光に包まれ、亜久里はアイちゃんから出現したラブアイズパレットにより炎に包まれと五人が姿を変えた。

「みなぎる愛！キュアハート！」

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

「陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

「勇気の刃！キュアソード！」

「愛の切り札！キュアエース！」

「！！響け！愛の鼓動！ドキドキ！プリキュア！！！！」

「愛をなくした悲しいヘリコプターさん！このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻してみせる！」

五人が名乗りを上げ、いつもの決め台詞を言う。

「急げ・・・！！？」

四葉邸の前へとやって来た晴夜達、だがその前にボールが変身したナイトローグが立っていた。

「ここから先には行かせん」

「・・・晴夜、和也は先にいけえ！ここは俺達が食い止める！」

龍牙が言うのと、幻冬も首を縦に振る。

「わかった・・・行くぞ」

晴夜と和也は四葉邸へと入って行くのと同時に、龍牙と幻冬はドライバーを装着し、

ボトルを取り出す。

『ボトルバーン！クローズマグマ！』

『デンジャー！クロコダイル！』

二人がナツクルとクラックボトルをドライバーに差し込むと巨大なナツクル、ビーカーとワニの顎が出現した。

『Are you ready?』

「変身！」

二人が叫ぶと二人の体はマグマと紫の液で覆われ、しばらくしアーマーへと姿を変える。

『極熱筋肉！クローズマグマ！アーチャチャチャチャチャ　チャチャチャチャアチャー
！』

『割れる！食われる！砕け散る！クロコダイルインローグ！オラッ！へキヤー！』

クローズマグマとローグへと変身した二人はそのままナイトローグへと向かって行く。

「オラッ！」

「ぐう！」

クローズのマグマを纏った拳がボールに炸裂する。

「スタークはどうした!」

「奴なら今日は来ていない」

ナイトローグの言う通り、スタークの姿はなかった。

「戻ったら伝えとけ!俺は人間だつてな!うおおおおお!」

クローズがナイトローグにたたみ掛けようと再び攻撃をする。

その頃、四葉邸の中ではマーモが作り出したジコチューとクローンフライングスマッシュが暴れていた。

「ロゼッタはお父さんを」

「わかりました!」

ロゼッタは今にも墜落しそうな、父が乗っていたヘリコプターへと向かう。

「お父様……」

ロゼッタはヘリのドアを壊し、父とパイロットを連れ脱出しようとしたその時、スマッシュがロゼッタの前に立ちはだかる。

「!?」

『ツインファイニッシュ!』

しかし、どこからかの砲撃でスマッシュはロゼッタから離れた。

「和也さん！」

放たれた方を見るとそこにはツイインブレイカーを構えていたグリスがいた。

スマッシュが立ち上がると、ビルドがラビットラビットフォームとなつてスマッシュを抑えていた。

「ここは俺に任せろ！お前はみんなとジコチューの方を！」

「わかつた・・・ロゼッタ、早く降りろ！」

グリスが叫ぶとロゼッタは父とパイロットを連れ地上へと着地した。

しばらくして、セバスチャンもやってきた。

「あとはお任せ下さい！」

「はい（無事でよかった）」

ロゼッタは父の無事を確認し、ホツとする。

「後は頼みます！行くぞ！」

「君は・・・君達は一体・・・？」

二人がジコチューの元へ向かおうとすると、意識を取り戻した星児が二人に話しかける。

「・・・プリキュア、キュアロゼッタです！」

「仮面ライダーグリス・・・」

「キュア・・・ロゼッタ、仮面ライダー・・・グリス・・・」

二人は名を名乗り、ジコチューの元へと行ってしまった。

「はあああああ〜！」

ビルドとクローンスマッシュとの戦いはフルボトルバスターでの攻撃が次々と決まり、決着がつきそうだった。

『フルフルマッチデース！』

フルボトルバスターにフルフルボトルを差し込み、クローンスマッシュ目掛けて走って行く。

『フルフルマッチブレイク！』

ビルドの攻撃が決まり、クローンスマッシュは爆発し、ビルドはそのままジコチュー方へと向かった。

その頃、ロゼッタを除くプリキュア達がジコチューとマーモと戦っていた。

「うー！」

「強い！」

「悔しいけど、確かにパワーが上がってるわ」

ブラットリングの力により、マーモのパワーが上がり、エースとソードを押していた。

そして、さらに鞭で攻撃しようとする。

だが、マーモの鞭は二人に当たらなかった。

「!?？」

「グリス！」

「せめて、かずやんって呼んでよ」

グリスがマーモの放った鞭をツインブレイカーで守る。

「グリス！邪魔しないでよ！」

「まこぴーを傷つけようとしたテメエは、許さねえ！」

心火を燃やして、ぶっ潰す！」

グリスがマーモに向かって攻撃する。

その頃、ジコチューの砲撃がハートとエースを仕留めようとする。

ハートが怯むと四葉の盾が二人を守った。

「ロゼッタ！」

ジコチューの方へ目掛けてキュアロゼッタを投げ飛ばす。

ジコチューはキュアロゼッタ目掛けて大量のミサイルを放ち始める。

それをロゼッタウォールを使い、受け流しながら、ジコチューへと接近していく。

ロゼッタがジコチューが放った砲撃をロゼッタリフレクションで防いでいたのだ。

「ロゼッタ！」

ハートが心配して叫ぶと、ロゼッタはハートを横目で見る。

ロゼッタは微笑むとジャネジーの砲撃を防ぎ切ったと同時にロゼッタリフレクションが二つに割れる。

それを手に取ると、それを武器として振るい始め、ジコチューを攻撃し出した。

「喜ぶ顔が見たいから。世界中を愛と笑顔でいっぱいになりたいから。だから、さあ、貴方も私と愛を育んでくださいな」

そう言つて、ロゼッタはクラブのマークを手で作る。

そして、ラブリーパッドにラビーズをセットする。

すると、ジコチューの真上に黄色の風船が出現する。

「え？何？」

「ロゼッタバルーン！一、二の三！」

そう言つて、手を叩くと風船が割れて、そこから光の蝶が無数に現れ、ジコチューを縛り付ける。

「ロゼッタバルーンは何が出るのか、毎回のお楽しみですわ！」

それを見ていたグリスもある決意をする。

——今のままでは、マーモに勝つに無理だと自覚していたからだ。

「負けてられねえな・・・俺達の出会った、この場所を必ず守る！」

グリスは持ってきたドラゴンゼリーをドライバーに差し込む。

『ドラゴンゼリー!』

差し込むと同時にグリスの体に電流が現れ、グリスの体にダメージを与える。

「かずやん!」

ビルドが駆けつけるのと同時にグリスの両腕から液状が現れ姿を変える。

『ツインブレイカー!』

グリスの両腕から今まで一つだったツインブレイカーが二つ現れた。

「はあはあ・・・愛と平和のためにな! うおおおおお!」

二つのツインブレイカーを装着し、マーモに攻撃を次と命中し、マーモが鞭でグリスに命中させるがグリスには全然ダメージがなかった。

「足りねえな! 全然足りねえな!」

グリスが叫びながらまたマーモに攻撃を次と決める。今のグリスは今までとは比べ物にならない強さだった。

「かずやんいつもより凄い・・・」

「和世の心に強調したのか・・・」

「みんな決めるよ!」

ビルドが推測している間にハート達が上に掲げて叫ぶ。

「二二「マジカルラブリーパッド！」三三」

ハート達五人はマジカルラブリーパッドを出現させ、キュアラビーズを詰め込み、マジカルラブリーパッドの中央にそれぞれのシンボルマークを表したエネルギーカードを出現した。

「二二私達の力をキュアハートの元へ！」三三」

四人がエネルギーカードをキュアハートのマジカルラブリーパッドに送る。

四枚のエネルギーカードがハートのマジカルラブリーパッドの画面の上に載り、ハート形を描き、五枚のカードを合わせた強力なエネルギーカードを生成する。

「プリキュア！ラブリーストレートフラッシュュー！」

カードを前にスライドすると、そのカードが飛んでいき、変身するためのラビーズのマークに変わり、ジコチューに直撃する。

「ラブラブラブ！」

そう言うときジコチューは浄化され、プシケーに戻ると、元の持ち主の元へと飛んでいき、この戦闘で無茶苦茶になったところを治す光が降り注ぎ、全て元に戻る。

「あ〜もう〜！」

ジコチューがやられ逃げようとすると目の前にビルドとグリスが現れる。

「行くぞ！晴夜！」

「オーケーー！」

二人はドライバーのレバー操作をし、高くジャンプした。

『スクラップファイニッシュ！』

『ラビットラビットファイニッシュ！』

二人が同時にライダーキックをマーモに向けて放つ。マーモは防御していたが二人の力に耐え切れず吹き飛ばした。

「ぐっ……覚えてなさい！」

マーモは捨て台詞を言っただけで消え去った。

「ちっ！しくじりやがって！」

ジコチューが浄化された事に気付き、舌打ちすると、その隙にクローズがナツクルを外し、もう一度ボトルを差し込む。

『ボトルバーン！』

「力がみなぎる！魂が燃える！俺のマグマがほとばしる！……」

叫びながらナツクルに手を当てた。

「もう……誰にも、止められねえ！」

『ボルケツクナツクル！』

クローズのマグマの炎を纏ったナツクルがナイトローグに炸裂し、ボールの姿に戻った。

「くう！この俺様が・・・覚えてろ！」

ダメージを喰らったボールはそのまま退いていった。

しばらくして晴夜達も四葉邸で星児の見送りするためにはりポートへ合流する。

「和也君、久しぶりだね」

「お久しぶりです」

星児と握手すると、晴夜達の方に目を向ける。

「はじめまして、桐ヶ谷晴夜です」

「上城龍牙だ」

晴夜が龍牙を叩き「礼儀よく挨拶しなさいよ」と龍牙に囁く。

「柴崎幻冬です。はじめまして」

三人が自己紹介する。

「これからも娘と仲良くしてやってくれると嬉しい」

と言つて去ろうとする星児。

だが、何かを思い出したのか、顔だけ向けてありすを見る。

「そうだ、伝言を頼めるかな？」

「え？」

「笑顔を護るのもいいが、あまり危険なマネはしないようにと。ね」

「それはどなたに？」

「もちろん、キュアロゼッタ君と・・・仮面ライダーグリスにだ」

「ハイ」

そのまま星児は海外出張へと出発した。

それからはみんなでありすの部屋へと戻り、話の続きをしていた。

次回！Re・ドキドキ&サイエンス！

第39話 最凶のライダーが現れる

第39話 最凶のライダーが現れる

崩壊したトランプ王国で、ボール達三人がキングジコチューに呼ばれ、キングジコチューの怒りを受けていた。

「キサマらアアー!!」

「ヒイ、申し訳ございません!!」

「プリキュアと仮面ライダーを倒すどころか、奴らは倒せず、見す見す成長していると、どうゆうことだアアー!!」

キングジコチューの発言にボール達は何も言えず黙ってお叱りを受けるしかなかった。

「まあまあ、キングジコチュー様々」

すると、ボール達の後ろから、天球儀や星座早見盤など宇宙に関連する器具がモチーフとして全身にあしらわれているライダーが現れる。

「誰だお前?」

「おいおい、この声を忘れたのか?」

しばらく考え込むとボールは思い出し、口を開く。

「まさか、スタークか!」

「ビンゴー!!?」

そのライダーは手を叩くとベールに指をさして叫ぶ。

「だが、スタークじゃない、エボル・・・仮面ライダーエボルだ」

そしてそのライダー・・・エボルは自分のライダーの姿の名を名乗る。

「スターク・・・いや、エボルよ。それがキサマが我のために手に入れた力か?」

「その通り。キングジコチュー様の力となる、まさに最強の仮面ライダーでございます」
「跪きながら、エボルがキングジコチューに言う。

「なら早速、まずは我に攻撃した仮面ライダービルドを倒せ!!?」

「はい」

エボルは命令を実行するためキングジコチューの元から去り、人間界へと向かおうと
していた。

(このままでは、俺がジコチューのナンバー2の座を、奴に取られる!)

ベールが心の中で自分の評価と今の座をなんとか守ろうと内心焦っていた。

(キングジコチュー、悪いがビルドを倒すのはまだ先だ。まずは、上城龍牙からなんだ
よ)

一方、エボルの心中では晴夜よりも龍牙からと呟く。

——今、最凶のライダーがビルド達に襲い掛かろうとする。

その頃、晴夜の家の地下室にマナと真琴がやってきた。

「晴夜君、龍牙君！」

「おお！マナに真琴はどうした？」

マナと真琴の手には弁当箱を持っていた。

「マナのお父さんと一緒に作った桃マン。作り過ぎちゃって……」

「ありがとう」

二人が作った桃マンを受け取ると、晴夜はパソコンのある机に戻り、パソコンに目を向ける。

「今度は何調べてるの？」

真琴が聞くと晴夜が二人にパソコンの画面を見せた。

「『エゴルドドライバー』？」

「ああ、ビルドドライバーの原型になったものだから知りたくって調べてみたいんだけど……」

晴夜がパソコンのキーボードのエンタを押すと、『know league』。

誰も知らないと出された。

「はあく……この通り調べようにも調べられないんだ……」

調べられなくて晴夜がため息をつく。

「元氣だしてよ、そんなだとアイちゃんからまた笑顔が消えちゃうよ！」

「……ごめん、今はアイちゃんに大事な時期だもな」

——その通り。今はアイちゃんがイヤイヤ期に入り、ここしばらくの間、みんなひと苦勞でアイちゃんがイヤイヤ期を乗り切れるよう導いてきた。

そしてもう一つ、ラケルが人間の女の子に恋をした。その時は和也が恋のキューピットになってやるとラケルの恋を手伝ったが、その人には既に彼女がいたため失恋へとなってしまっただが、その後は六花一筋へと戻った。

「さって、もう少し頑張って見ますか！」

またパソコンの画面に目を向け、エボルドライバーの検索に打ち込む。

（やつぱり、こんな風に一生懸命何かに取り組んでいる晴夜君を見ると、胸がドキドキする……）

そんな晴夜の姿を見てマナが胸を押さえて心の内で呟く。それを見た真琴が振り向いてどうしたのか聞く。

「マナ？どうしたの、胸を押さえて？」

「えっ? ううん何でもない!」

晴夜と龍牙もマナの方を見る。

「顔を赤いけどよ、また過労か?」

「体調悪いんなら、送るけど?」

「ううん、全然問題ないよ!」

晴夜達がそう言うが、マナは何でもないと誤魔化す。

——彼女が心のドキドキの原因に気付くのは、まだ先のようなだ。

その日の夜、龍牙がベッドで寝てる中、まだ晴夜は『エボルドライバー』について調べようとしていた。

でも、父の研究を調べようとしても、エボルドライバーについては『know league』と繰り返し現れる。

「ダメか……」

流石の晴夜も今回は諦めようと思っていた。すると、何かに気付き出す。

「待てよ……今まで、検索するときはパスワードが合わないければ『Error』と出るのは……でも、何でこれは『know league』とある。…誰も知らない……もしかして!」

晴夜はパソコンに龍牙の遺伝子に関するデータをダウンロードした。

しばらくして、データのダウンロードが完了し、ついにエボルドライバーに関するデータファイルが開いた。

「開いたー！」

「何だよ・・・まだやってたのか？」

晴夜が叫ぶと、寝ていた龍牙が目を覚めてしまった。

「開いたんだ！『エボルドライバー』に関するデータが！」

「マジかよ！」

龍牙が起きると二人は急いでパソコンに目を向けた。記載されていた内容はローマ字で書かれていたが晴夜が読み上げる。

「なんて書いてあるんだ・・・」

「エボルドライバーは、一万年前のキュアエンプレスとの戦いで敵であるエボルトが使っていたドライバ・・・その力は世界を滅亡させる力を秘めている・・・」

「それマジやばいドライバーってことか？」

「バカっぽく言えばそう言う事だ」

「バカって何だよ・・・てか、一万年前って、メラン達の時からか！」

龍牙が思い出した。メラン、かつてキュアエンプレスのパートナーである妖精この時

からこのドライバーを持つエボルトと戦っていたことになる。

『かつて、私達は巨大な闇の勢力と“世界の破滅を求める種族”と私達は死力尽くして戦った』

「おそらくな、メランが別れ際に言っていたのが、エボルトって敵なんだろう」

しばらく沈黙が続くと、龍牙が口を開く。

「なあ、そのエボルトドライバーって今どこにあるんだ？」

龍牙が質問すると、晴夜が画面を下へと動かす。すると、エボルトドライバーの現在の場所とドライバーの状態が記載されていた。

「今はトランプ王国の地下に封印されているらしい。しかも、破損しているからジコチューの奴らが見つけて修理出来ねえよ」

「なんだよ、俺ちよつとヤベーと感じたぜ……」

龍牙がホツとして言うとき晴夜が画面を動かすと、下に方にまだリンクがあり、晴夜がそこをクリックすると、父が残したメモが記載されていた。

「!?…これは……」

晴夜は父が記載されていたメモを読む。

「何だよ？なんかわかったのかよ？」

「エボルトについて記載されている」

「エボルトって、さっき言ってた一万年前の敵だろ？もうそんな昔の敵について……」

「いや、エボルトは……」

晴夜は父が残したメモに記載されていた事を龍牙に話す。

その翌日。マナは晴夜の事が気になり、今日も桐ヶ谷家へとやってきた。

「おはようございます！」

マナが元気よく言うと、晴夜の祖父母が現れた。

「おや、マナちゃんいらっしやい！」

「あの、晴夜君いますか？」

晴夜がいるか尋ねる。

「晴夜なら、朝早くから龍牙君と一緒に出かけちゃったよ」

「えっ？！？！そうですか……」

晴夜がいないと知り、マナが桐ヶ谷家を後にしようとする、玄関の所に立て掛けてあつた一人の青年の写真に目が入る。

「（誰だろ？）あの、この人って誰なんですか？」

写真に写っている人は誰なのかと晴夜の祖父に尋ねる。

「それは、晴夜の兄『桐ヶ谷巧』だよ」

晴夜の祖父は写真に写っている人は晴夜の兄だと言うと、マナは驚いた。

「晴夜君、お兄さんがいたんですか？」

「まあね、晴夜とは確か六つ離れていたはずだよ。天才科学者の逸材だと言われていたよ」

「へへえ、晴夜君凄いいお父さんが居れば、凄いいお兄さんもいたなんて」

マナは凄い父親だけでなく凄い兄がいる事に関心していた。だがそれとは対照的に、晴夜の祖父母は辛い顔をしていた。

「そうとも言えないの……」

「どうしてなんですか？」

「巧は1年前に亡くなったんだ……」

「えっ……」

晴夜の兄、桐ヶ谷巧は既に亡くなっていると告げられると、マナは驚いて言葉が出なかった。話によると晴夜の兄は別の家に住んでおり、そこで部屋が火事になり亡くなったと教えられた。

「そんな事が……」

マナは晴夜の過去が辛く悲しいものだど、感じていた。

マナが晴夜の家に来ていたその頃、幻冬が亜久里に呼ばれ、大貝町の公園にやつてきた。

「円さん、話って?」

「前から聞きたいことがあったのです・・・なぜ、貴方は仮面ライダーとなり、戦う道を選んだのですか?」

「どうして、いきなりそんな事を・・・」

「わたくしは今まで、自分の使命と思い、プリキュアになりました。」

ですが、あなたは何故、仮面ライダーローグとなったのですか?」

亜久里にそう言われた幻冬は、静かに自分がライダーになった理由を話した。

「僕は、円さんみたいになりました・・・」

「わたくしに・・・」

「僕は、いつも弱くて、誰かの為に自分の正しい事を言える円さんが大きく見えた・・・」

そんな時に、あの人僕の前で現れて、このドライバーを渡された」

『強くなりたいか?力が欲しいか?ならこれをあげよう!これを使えば世界を救える

力が手に入る!』

幻冬がスクラッシュドライブを取り出し、見つめる。

「あの人に言われたんです、世界が大変な事になると。トランプ王国での悲劇を教えられ、この世界も同じようになるかもしれない・・・そんな嫌です!だから、決めただ、みんなを守るために戦うって。その力があるのなら!」

幻冬が自分がローグとして戦う覚悟を亜久里に強く言うのと、亜久里は目を閉じて近づく。

「・・・わかりました。あなたの思いは、晴夜さん達に負けないものを感じましたわ」

「円さん・・・」

「これからも、一緒に戦って下さい」

「うん・・・よろしく!」

二人が握手を・・・共にこれからも戦っていく約束であるような握手を交わした。

「お取り込み中失礼」

「!?」

二人が振り向くとそこにはナイトローグと数体のガーディアンにクローンスマッシュがいた。

「あなたは……」

「何の用ですか？」

「お前達を人質に取る」

ナイトローグが幻冬と亜久里を人質に取ると言い出した。

「随分と汚い手を取りますね」

「お前達が人質の隙にプリキュア共に仮面ライダー達を倒す。そのために協力してもら
うぞ」

ナイトローグが指を鳴らすと、スマッシュ達が幻冬と亜久里に襲い掛かろうとした。

その時、突然、スマッシュ達の体から火花が飛び散った。

「何!?」

ナイトローグが驚くと、そこにホークガトリンガーを持った晴夜と龍牙が二人の前に
現れた。

「晴夜さん、龍牙さん……」

「どうしてここに……?」

「ちよつと、人を探しをね!そしたら偶然二人を見かけて!」

「でも、おかげで手間が省けたぜ!」

二人が言うとなイトローグ達の方を向く。

「人質なんて、相変わらず卑怯だなべール。それとも、キングジコチューが怖いから、何とかしなければならぬと思つてこんな手を取つたのか？」

「ギクッ……そんなじゃない！ ええ、い！ お前ら、奴らをやってしまえ！」

凶星なのを誤魔化し、ガーディアンやスマッシュ達に命令し、今にも晴夜達に襲い掛かるうとしていた。

「亜久里ちゃんは下がって、ここは俺たちがやる」

「わかりましたわ」

アイちゃんがいないため変身出来ない亜久里が晴夜達から離れると、晴夜達はドライバーを装着し、フルフルラビットタンクボトルとクローズマグマナックルとクロコダイルクラックボトルをドライバーに差し込む。

『マックス！ ハザードオン！』『ラビット&ラビット！ ビルドアップ！』

『ボトルバーン！ クローズマグマ！』

『デンジャー！ クロコダイル！』

ボトルを差し込むと三人はドライバーのレバーを操作し、三人の周囲に巨大な金型とナックル型のビルダー、そしてピーカーにワニの顎が出現した。

『Are you ready?』

音声が鳴ると三人が高々と叫ぶ。

「変身!!?」

晴夜の体に形成されたアーマーを装着され、龍牙と幻冬は流れ出た溶岩と紫の液体が体を覆いアーマーへと姿を変える。

『オーバーフロー! 紅のスピーディジャンパー! ラビットラビット! ヤベーイ! ハエーイ!』

『極熱筋肉! クローズマグマ! アーチヤチャチャチャチャ ちゃちゃちゃちゃアチャー!』

『割れる! 食われる! 砕け散る! クロコダイルインローグ! オラツ! ヘキヤー!』

三人が仮面ライダーへと変身すると、三人はスマッシュとガーディアンに向かっていく。

「ええ、こっぴどい、こっぴどい!」

ナイトローグが指を鳴らすと亜久里の後ろからいきなりベンチジコチューが現れ、亜久里に襲い掛かろうとする。

「亜久里ちゃん!」

「逃げろ!」

「円さん!」

「ソードハリケーン！」

三人が叫ぶと無数の光剣が竜巻に載せてジコチューにぶつかる。

「ソード！」

「オラア！」

今度はグリスが現れ、ダブルツインブレイカーでクローズが目を離していたスマツシユに攻撃する。

「かずやん！みんな！」

「貴方達だけで何やってるの！」

「このやろー！何俺たちに黙って、何楽しいことしてるんだよ！」

グリスがクローズに叫ぶとハート達三人もやってきた。

「みんなどうしてここに？」

「ランスちゃん達が闇の鼓動を感じたからです！」

「それで、ここに來たってわけ！」

ロゼッタとダイヤモンドが説明するとアイちゃんが現れ、亜久里に近づく。

「アイちゃん、よろしくて！」

「アイ！」

「プリキュア！ドレスアップ！」

亜久里はアイちゃんから出現したラブアイズパレットにより炎に包まれ姿を変えた。

「愛の切り札！キュアエース！」

キュアエースとなり、ハート達と手を重ねて叫ぶ。

「**「「響け！愛の鼓動！ドキドキプリキュア！」**」

「愛をなくした悲しいベンチさん！このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻してみせる！」

五人が名乗りを上げ、いつもの決め台詞を言う。

「結局、こうなるのかよ！」

ナイトローグがいつものパターンだと呟く。

クローズがスマッシュとガーディアンを炎を纏った拳で倒していく。

「力がみなぎる！魂が燃える！俺のマグマがほとばしる！……もう……誰にも、止められねえ！」

クローズが最近のフレーズを言うとドライバーのレバーを操作した。

『Ready go!』

『ボルケニックファイニッシュ！』

クローズの体からマグマのオレンジの炎が吹き上がり、炎を纏ったクローズの拳がスマッシュを貫いた。

そして、グリスがドライバーのレンチレバーを操作し、高くジャンプした、
『スクラップフィニッシュ！』

グリスの肩や背中からヴァリアブルゼリーを勢いよく噴出して加速、ライダーキックを食らわせ同時に破壊した。

「くう〜！どこまで俺の邪魔をすればいいんだ！」

ナイトローグが叫んでる間にビルドがジャンプし、足を伸ばし空中で攻撃がガーディアンに命中し爆発した。そして、着地するとフルフルボトルを外し振り出した。

『タンクー！』

タンクと鳴るとボトルを再び半分に分け、ドライバーに差し込む。

『タンク&タンクー！』

レバーを操作し後ろからタンクの戦車のユニットが現れ、ナイトローグとジコチューに攻撃し、ユニット空中へと浮かぶ。

「なんだ！この面倒くさいちっこいのほ！」

『Are you ready?』

『ビルドアップ！』

『オーバーフロー！』

ビルドからラビットラビットフォームのアーマーが外れ、ジャンプし、宙に浮かんだ

アーマーを装着する。

『鋼鉄のブルーウオーリア！タンクタンク！ヤベー！ツエー！』

『フルボトルバスター！』

フルボトルバスターを持ち、スマッシュ達に向けて砲撃を放ち、スマッシュを破壊し、マグネットボトルを差し込む。

『マグネット！』

フルボトルバスターから形成された青いエネルギー弾がナイトログとベンチジコチューを磁力で拘束した。

「今のうちだ！」

ビルドが言うとハート達が頷き、五人が手を上に掲げる。

「マジカルラプリーパッド！」

マジカルラプリーパッドを出現させ、ラビーズを詰め込むと、マジカルラプリーパッドの中央にそれぞれのシンボルマークを表したエネルギーカードを出現した。

「私達の力をキュアハートの元へ！」

四人がエネルギーカードをキュアハートのマジカルラプリーパッドに送る。

四枚のエネルギーカードがハートのマジカルラプリーパッドの画面の上に載り、ハート形を描き、五枚のカードを合わせた強力なエネルギーカードを生成する。

「プリキュア！ラブリーストレートフラッシュユ！」

ハートはナイトローグとジコチューに向けてラブリーストレートフラッシュユを放ち、直撃したジコチューは浄化され、ナイトローグも変身解除し、トランスチームガンも破壊された。

「おのゝれ．．．！」

倒れたベールは醜態を晒しながら悔しがって呟く。

「あくあ、俺が力を与えてやったのにこのザマとはねえ〜」

すると総一郎が現れ、ベールに近づきながら言う、ベールが使ったバットボトルを拾い、ビルドの方を見る。

「よう、晴夜に龍牙！久しぶり、でもないか．．．」

総一郎が軽々しく挨拶すると、ビルドも総一郎の方を見る。

「俺も龍牙にアンタに用があったんだよ、叔父さん．．．いや、

異世界の生命体・エボルト．．．」

「「「えっ？？」」」

ビルドの口からいきなり異世界の生命体と言う驚きの言葉を発言し、クローズを除いた全員が驚く。

「どうゆうことなの?」

「異世界の生命体って……」

グリス達にはビルドが言っていることが何がなんだかわからなかったため、ビルドがみんなに説明する。

「簡単に言うと、今いる叔父さんは叔父さんであって叔父さんではない、叔父さんの体を支配している」

「エボルト……聞いたことがある。確か、以前に世界が破滅の王に……」

ソードが言うと総一郎が手を叩いて拍手する。

「ほう、そこまで調べているとは流石だな」

「だが、無駄だ! アンタのドライバーであるエボルトドライバーは、今はトランプ王国にある。しかも、破損しているし、例え見つけてもアンタには直せない!」

強気で言うと、総一郎が不気味に笑う。

「果たしてそうかな」

総一郎が何かを取り出し、それを自分の腰に装着した。

『エボルトドライバー!』

「エボルトドライバー!? そんな、誰が直したんだ!」

エボルトドライバーと聞いた晴夜は驚き、ある程度推測する。

（確かに見つけるだけなら可能かもしれない、でも修復出来るだけの技術はない筈……）
一体誰が修復したのかとビルドが考えてる間に、総一郎はドライバーにボトルを差し込む。

『コブラ！ ライダーシステム！ エボリューション！』

総一郎がドライバーのレバーを操作すると、ボトルにデザインされたコブラの口やピストン部分が連動し動き出し、総一郎の周囲からランナー『EVライドビルダー』が出現。異様なオーラを纏ったアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身！」

総一郎が叫ぶとアーマーが総一郎の体に装着された。

『コブラ！ コブラ！ エボルコブラ！ フツハツハツハツハツハツハツ！』

その姿は複眼部分は赤く、コブラをモチーフにしているようなデザインが成されてお
り、

肩部や胸部にある天球儀——『EVOコブラシールド』、『アーミリアクター』や頭部の星座早見盤——『マスタープランニスフィア』など宇宙に関連する器具がモチーフとして全身にあしらわれている、『仮面ライダーエボル』へと変身した。

「エボル、フェーズ……！」

「あれが……」

「仮面ライダーエボル……」

エボルがビルド達に向かって歩き出した。

「ハート達は離れてろ。はぁ！」

「晴夜君……」

ビルド達四人の仮面ライダーがエボルに向かって走り出した。

ビルド達が同時に攻撃するとエボルは四人の攻撃は受け流しながら捌き、四人を振り払う。

「くう！これでフェイザーかよ」

ビルドが呟くとローグが一人でエボルへと向かって行く。

「幻冬君！一人じゃ危険だ！」

しかしローグはビルドの声を聞かず、そのままエボルに一人で立ち向かう。

「準備運動には丁度いい」

「あなたは僕を騙した！それが許せないんだ！」

ローグが怒りの言葉を叫びながら、エボルに拳や蹴りを繰り返す。

「感情的だな、それでは俺には勝てない！」

しかし、エボルはローグの攻撃を躲しながらカウンターで圧倒し、ローグの腕を掴む

とドライバーのレバーを回した。

『Ready go!』

『エボルテックフィンニッシュ！チャオ！』

足元に星座座早見盤を横したフィールドを発生させると、エネルギーを右足に収束させてキックをローグに放つ。

「ぐわああああ！」

吹き飛ばされたローグはそのまま変身解除してしまった。

「幻冬君！大丈夫ですか？」

「なんとか……」

倒れていた幻冬がエースに駆け寄る。

ローグ仮面ライダーローグの装甲内部はヴァリアブルゼリーで満たされており、通常時は柔らかく動きやすいが、攻撃を受けると瞬時に硬化し、徹甲弾を受け止めるほどの防御力を発揮する。

しかし、エボルの腕部・脚部に付いている『EVOゼノバイダークローブ・シューズ』は接触した物体を自在に分解・再構築できるため、攻撃対象の装甲を無視して内部中枢に攻撃を叩き込むことが可能。

そのため、ローグの優れた防御力は、エボルの前では無に等しかった。

「マジかよ、一撃でかよー！」

「上等だ！」

エボルを力を見たビルド達が三人で再び攻撃を繰り出し連携で行こうとするが、エボルにこれ一つ命中せず、防御されてしまう。三対一のビハインドなんてエボルは関係ないって感じである。

「まだライダーシステムには慣れないな〜」

「エボルトだか、エボルだか知らねえが！これでも喰らええ！」

クローズがビートクローザーのグリップを引っ張る。

『ヒッパレー！ヒッパレー！ミリオンヒット！』

ビートクローザーの攻撃が決まるが、エボルはビートクローザーの攻撃を受けて止め、ビートクローザーを掴む。

「これで俺の力はまだ2%に過ぎないんだぞ」

クローズを払いのけて言うと、スチームガンを三人に向けて放ち、命中させる。

それによって三人からボトルが落ちていく。

「俺はまだまだ強くなる！だがお前には退場してもらおう！」

一瞬でエボルがビルドに近づくと、エボルの紫のオーラを纏った拳がビルドに決まり、そのまま吹き飛ばした。

「くう！ぐわあああ！」

ビルドは踏み止まるが変身解除してしまい、そのまま苦しみながら倒れこむ。

「晴夜君！」

ハートが急いで晴夜に駆け寄るが、突然晴夜が苦しみ出し始めた。

「晴夜！」

「てめえ！」

「お前らもこれで終わりだ！」

エボルがクローズとグリスを至近距離で光弾を放つと、二人も変身解除してしまっ
た。

「龍牙！」

「和也さん！」

ソードとロゼッタの二人が駆け寄ると、二人はダメージを覆ったが問題はなかった。

だが、晴夜は違った。体から奇妙な紫色の血管が現れたのだ。

「晴夜君！しっかりして！晴夜君！」

「晴夜君に何をしたの!?!」

エボルが晴夜達から落ちたボトルを拾いながら、晴夜にしたことを話す。

「人間界にはない毒を晴夜に埋め込んだ。保って二日とこころだ。チャオ〜！」

最後にそう言うと、エボルは一瞬のうちに彼らの前から姿を消した。

「ぐわああああー!!」

「晴夜君!晴夜君ッ!」

苦しむ晴夜の姿に、ハートはただ叫ぶことしかない出来なかつた。

次回!Re. ドキドキ&サイエンス!

第40話 ほとばしるマグマ!命懸けの変身

第40話　ほとばしるマグマ！命懸けの変身

エボルの戦いから一日経った。

エボルの毒を埋め込まれた晴夜は四葉家との繋がりのある病院へと運ばれ、現在は集中治療室の中にいる。

「はあ、はあ、はあ……」

ガラス越しで毒で苦しんでいる晴夜を、マナ達はただ見ていることしか出来なかった。

「晴夜君……」

マナが呟くと、ありすが現れ全員が振り向く。

「ありす、どうだ。晴夜の毒は治療出来そうか？」

和也が治療出来るかと聞くが、ありすは首を横に振る。

「ダメです。毒の性質がわからないために、治療法がわからないと……」

ありすがみんなに毒の治療が出来ないと話すと、龍牙が壁を強く叩く。

「くそー！」

「このままだと、エボルの言う通り晴夜はあと一日しか保たないわ」

真琴がそう言うのと晴夜の着ていた上着からビルドフォンから着信音が鳴り出し、龍牙がビルドフォンを取り着信相手を見る。

「叔父さんからだ・・・!」

龍牙がそう言ってみんなが頷くと、総一郎からの電話に龍牙が出る。

「何の用だ!」

『龍牙か? 晴夜の様子はどうか?』

「とぼけるんじゃないやねえ! アンタが一番わかってるんだろう!」

晴夜の状態は総一郎の方がわかってるのに、知らないように見せる言い方が龍牙の怒りに触れる。

『そう怒るなよ! 今どこに居ると思う? 家の地下室いるんだよ! 懐かしいな』

感情に浸るような発言をすると、突然話が変わる。

『取引きしないか?』

「取引き?」

総一郎が取引きしようと持ちかけてきた。

『お前達が持つてるボトルの全てと俺から奪ったあの箱を俺に渡せ。そうしたら、晴夜を毒から解放してやる』

取引きの内容を龍牙達が聞くと叫び出す。

「ふざけんな！そんな取引き乗れるわけが『なら、晴夜は諦めるしかねえな』…それは……」

龍牙は総一郎から返ってきた発言に何も言い返す事が出来なかった。

『お前達に選択権はない。答えが出たら地下室に來い！チャオ♪』

総一郎からの電話が切れ、龍牙が携帯を持っていた腕を下ろす。

「なんだって……？」

「取引きだってよ……俺達の持つてるボトルの全てと、この前晴夜があいつから奪った箱を渡せて、そうすれば、晴夜の毒を治してやるつてよ」

取引き内容を聞くとみんなはあまりにも理不尽過ぎる取引きに怒りを感じる。

「許せない！晴夜さんの命が危ないからこんな取引きを持ちかけて来るなんて！」

幻冬が叫ぶと、和也が龍牙に聞く。

「どうするんだ……奴に本当にボトルを渡すのか？」

「でも、ボトルを渡さなかつたら晴夜君が……」

みんなが苦しむ晴夜の姿を見て、ボトルを渡して助けるのが第一だと誰もが考えた。

「……とにかく、一度晴夜の家の地下室に帰る」

「私も行く！みんなはボトルをとりあえず用意して」

みんなが頷くと龍牙と真琴は晴夜の家の地下室へと向かう。

「晴夜君……」

「マナ……」

和也達がボトルを準備しようとし行動を開始する中、マナは一人、ガラス越しで晴夜が治る事を誰よりも願っていた。

その頃、晴夜の家へと到着した龍牙と真琴が、地下室の晴夜の部屋へと向かう。

都合良く、今は晴夜の祖父母の姿はなかった。そのまま二人が地下室に入る。

「何やってんだよ!」

二人が中を見ると地下室が総一郎に荒らされていた。

「俺から盗んだあの箱を隠してるんじゃないやねえかと思つてな」

「ふざけるな! さっさと晴夜を治せ!」

「やめろ! 俺のジャケットにシワができちゃうだろ!」

龍牙が総一郎の服を掴みながら叫ぶと、総一郎が龍牙の掴んだ手を離し、ジャケットのシワを直そうとし、話を変える。

「取引きに応じれば、救つてやるよ。お前らの持つボトルの全てとあの箱をくれならな」

「やるわけねえだろ!」

「なら、晴夜が死んでもいいんだな。さつきも言ったがお前ら選択の余地は無いんだよ」

！

龍牙がはボトルを渡すの断るが、総一郎のこの発言に何も言えず、龍牙が止まる。

すると、真琴が前に出て口を開く。

「許せない！晴夜の叔父さんの体でこんな酷い事をするなんて！」

「俺の正体に気づけなかったお前らがよく言えるねえ〜」

「だったら、力づくでも晴夜の毒を直させる！」

真琴がコミューンを持って構えると、総一郎がため息を吐く。

「プリキュア！ラブ・・・」

「ふうん！」

「きゃあああ！」

真琴がプリキュアへと変身しようとすると、総一郎の手から放たれた衝撃波が真琴を

襲い、壁に衝突して倒れた。

「真琴！」

倒れた真琴に駆け寄り、肩を揺する。

「真琴！大丈夫か！真琴！おい！」

「大丈夫ビィ！気絶してるだけビィ！」

真琴が無事で安心すると、総一郎が口を開く。

「さあ、どうする? 取引きするのかしらないのか・・・はつきりしろ」

総一郎の発言に龍牙が黙り込み何かを決意し、ダビイに言う。

「ダビイ、真琴を頼む・・・」

「わかったビイ・・・!」

龍牙が真琴をベットのの上に移動させ、総一郎の方を向く。

「ついて来いよ」

しばらくして、四葉展示館へと総一郎を龍牙が連れていた。ここは、晴夜が総一郎からあの箱を奪った際にセバスチャンに箱を預け、ここへと保管させた所だ。

「ここが、今の保管場所か」

「もうすぐ残りポトルが到着する」

ポトルもすぐに着くと総一郎に伝える。

「しかし、お前も物好きだな〜人間を助けようとするなんて〜」

「どういう事だ?」

「忘れたか? お前は人間じゃないって」

総一郎の言葉が聞いて思い出す。あの建造物で総一郎が言った事：

——『お前の体に流れる血は俺と同じ世界を滅ぼす力だ!』

あの言葉の意味が龍牙にはまだわからなかった。その様子を見たエボルトは、龍牙に自身との関係を語る。

「俺とお前は一心同体！同じ生命体なんだよ！お前と俺の遺伝子が一つになった時……それが！本当のエボルトになるんだよ」

「な、何言ってるのか、わかんねえよ！」

動揺しながら、龍牙は総一郎から離れた。

「まあ、無理もない、お前はその時の記憶を無くしてるんだからな。」

そして、あの男が俺たち二人の正体に気づいた」

「あの男？」

「お前も知ってるだろ？『桐ヶ谷巧』の事を」

その名前を聞いて驚いた。確か晴夜の兄貴で、1年前に亡くなったと聞いたことがある。

「晴夜の兄貴がなんで関係するんだよ！」

「そこから先はまた、後でだ。今は取引きが優先だ」

「何？」

総一郎が何処か向き、龍牙も総一郎が向いた方向を向くと救急車のサイレンの音が聞こえ、しばらくして救急車は龍牙達の前に到着した。

救急車の中から和也と六花、ありすが出てきた。中にはマナと担架で酸素マスクを被っている苦しんでる晴夜もいた。

そのまま、ボトルの入ったケースを持って近づく和也達と合流する。

「本当に奴を信用するのか？」

「罠の可能性だってあるケル」

「それにボトルを渡しても……」

「本当に治してもらおう保証は……」

「でも、他に方法はねえ……」

晴夜のためだと三人が頷き、龍牙にボトルの入ったケースを渡し、四人はそれを持って総一郎との取引きを始める。

「ボトルを渡す前に晴夜の毒を治せ！」

ボトルのケースを見せながら龍牙が晴夜の毒を治す様に言うと、急に総一郎が笑い出した。

「何がおかしい？」

「晴夜の毒を治すには、俺を倒すしかない。俺が消滅すれば、晴夜の体内の毒も消えるって事だ。いいだろう、ボトルと晴夜を賭けて勝負してやるよ」

『エゴルドライバー!』

総一郎がエボルドライバーを装着した。

「上等だ！行くぞ！」

龍牙と和也はドライバーを装着し、六花とありすの二人はコミュニケーションにラビーズをセツトした。

「変身!!？」

「プリキュア！ラブリンク！」

『ボトルバーン！クローズマグマ！』

『ロボットゼリー！』

龍牙と和也はドライバーに差し込むと巨大なナックル型ビルダーとビーカーが出現し、六花とありすの体が光に包まれた。

『Are you ready?』

龍牙と和也の体はマグマと黄色のヴァリアブルゼリーを覆い、アーマーへと姿を変え、六花とありすが包まれた光から現れるとプリキュアへと姿を変える。

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

「陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

『極熱筋肉！クローズマグマ！アーチャチャチャチャチャ ちゃちゃちゃちゃアチャー

！』

『潰れる!流れる!溢れ出る!ロボットイングリス!ブラア!』

四人が変身を完了すると、総一郎もボトルを取り出し、ボトルの栓を回した。

「お前達が束になって掛かってこようが、俺には勝てない」

総一郎が呟くとボトルを差し込む。

『コブラ! ライダーシステム! エポリューション!』

総一郎がドライバーのレバーを操作すると、総一郎の周囲からランナーが出現し、異様なオーラを纏ったアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身!」

叫ぶとアーマーが総一郎の体に装着された。

『コブラ!コブラ!エボルコブラ!フツハツハツハツハツハツハツハツ!』

エボルへと変身したのを確認し、四人が構える。

「あの強さは異常よ...!!」

「ええ、おそらくバラバラで戦ってはいけません」

「ああ、四人一緒に行くぞ!」

「わかった!」

四人が打ち合わせすると、四人はエボルに向かっていく。

その頃、桐ヶ谷家地下室では、総一郎に気絶させられた真琴が眠っていた。

「ん……」

「大丈夫ですか？」

「気がついたみたいですね」

真琴が目覚めると近くには幻冬と亜久里が目の前にいた。

「私は……!? 龍牙！」

自分に何があったかを思い出し、真琴が叫ぶと近くに龍牙の姿はなかった。

「龍牙は!？」

龍牙がどこにいるのかと、幻冬と亜久里に聞く。

「ボトルの取引きに六花さん達と一緒に行きました」

「そんな……早く行かないと! くう！」

龍牙の所に行こうとするが、打ちどころが悪かったせいか体に力が入らず、起き上がるのが難しかった。

「無茶ビィ! こんな体で行くなんて!」

「それでも! 行かなきゃ……」

真琴が起き上がるとすると、亜久里が真琴を止める。

「亜久里ちゃん……?」

「あなたがここで無理をすれば、龍牙さん達の迷惑になると思わないのですか?」

「それは……」

「信じましょう!龍牙さん達がエボルを倒して、晴夜さんも助かるって」

「……そうね。(みんな、頼んだわよ……龍牙)」

三人は龍牙達の無事を祈って待つ事を選んだ。

「はあ、はあ、はあ……」

「晴夜君、頑張って!」

救急車の中、毒が晴夜の体を蝕み続け、既に限界に近い。しかし、六花達から晴夜に付き添ってあげて欲しいと言われたマナは、晴夜に頑張ると懸命に、必死にエールを送る。

そして、クローズ達四人が晴夜を助けるため、必死になって戦っている。

四人はうまくコンビネーションでエボルをかき乱しながら、攻撃を続けと決めていく。

「はあ!」

クローズとダイヤモンドから繰り出された拳をエボルが防ぐ。

「かずやん！」

「オラッ！」

クローズ達がエボルを足止めしている隙に、グリスの二つのツインブレイカーが命中した。

「くう！」

「プリキュア！ダイヤモンドシャワー！」

エボルが怯んだ隙に、ダイヤモンドシャワーがエボルの足を凍らせた。

「小賢しいマネを！」

「今のうちよ！」

クローズとグリスはドライバーのレバーを操作し、高くジャンプした。

『Ready go!』

『ボルケニックアタック!』

『スクラップファイニッシュ!』

二人のライダーキックが決まり、エボルにダメージを与えてダウンさせた。

「なかなかやるなく、だったら一人ずつ潰すか」

エボルがトランスチームガンとスチームブレードを持ち、クローズ達に接近してく

る。

「オラア!...何!??」

エボルがクローズの攻撃を避けると後ろにいたグリスを集中的に攻撃する。

「和也さん!はああ!」

「ロゼッタ!はあ!」

ダイヤモンドとロゼッタが二人掛かりでエボルに攻撃をする。

「お前らは、後だ!」

「きゃあああああ!」

ダイヤモンドとロゼッタが二人をスチームブレードの攻撃で振り払う。

二人を振り払うと、エボルは武器を合体させる。

『ライフルモード!』

モードが変わりスチームブレードのバルブ栓を回した。

「させるか!」

『スチームショット! コブラ!』

「ぐわあああ!」

グリスの前に出てクローズが守ろうとしたが、放たれたエネルギー弾は曲がりくねりクローズを避けてグリスに命中し、グリスが変身解除してしまった。

「和也さん！」

「大丈夫!？」

ダイヤモンドとロゼッタの二人が変身解除した和也に駆け寄る。

「うおおおおお！」

クローズの拳がエボルに攻撃を繰り返す。だが、エボルはクローズの拳を掴む。

「ハザードレベル4.7・・・お前の力はそんなもんじゃないだろ！」

エボルがスチームブレードでクローズに攻撃が命中し、クローズがエボルから離された。

「そうだろ！相棒！」

「うるせえ！俺の相棒は桐ヶ谷晴夜と劍崎真琴の二人だけだ！」

攻撃しながらクローズが自分の相棒は二人だけだと叫ぶ。

「なくに、ムキになってるんだよ。愚かな人間達に肩入れしてどうする？」

「なに？」

「お前の故郷とも言えるトランプ王国も、醜い欲望から滅んだのかもしれないんだぞ」

「!?・・・そんなわけねえだろ！」

「どうかなく人間ってのは、どこまでも身勝手な生き物だと思わないか？」

「知ったような口を聞くな！」

クローズが再びエボルに向かって攻撃していく。

「俺が知ってる奴らはみんな誰かの為に戦ってきた!誰かを守るために必死に戦っていたんだ」

「ハザードレベル4. 8...まるで、自分が人間みたいな口調だな。

だが、お前は違う。何千、何万の命を奪ってきた俺の一部だ!」

エボルが言うのと、クローズが距離を取る。

「俺はアンタとは違う!」

「いい加減目を覚ませ!」

エボルがドライバーのレバーを操作し、エボルの足にエネルギーが収束され、出現したフィールドにクローズが吸い込まれていく。

『Ready go!』

『エボルテックフィンッシュ!チャオ!』

「ぐわああああ!」

エボルの出現させたフィールドの中でキックがクローズに決まり、クローズを吹き飛ばして変身解除へと追い込んだ。

「龍牙!」

「どうした、この程度か?」

エボルがスチームガンを龍牙に向けて放たれた。

「プリキュア！ロゼッタリフレクション！」

しかし、ロゼッタがロゼッタリフレクションを展開し龍牙を守った。

そして、ダイヤモンドが前に出て、マジカルラブリーパットを出現し、ラビーズをセツトした。

「ダイヤモンドスワークル！」

マジカルラブリーパットから放たれた水流により、エボルを龍牙から距離を離れた。

「流石は三種の神器の一つだな、だがお前ら二人では俺には勝てないぞ」

エボルがダイヤモンド達に言うと、龍牙が倒れながら口を開く。

「まだまだ・・・俺がアンタを倒して晴夜を助ける！」

龍牙がボトルをもう一度ナツクルに差そうとしていた。

「よせ・・・強制解除から再変身は体への負担が大きい・・・！」

和也が龍牙をもう一度変身しようとそれを止める。

「だってよ。どうする？晴夜の命を諦めるか、それとも自分の命を犠牲にして晴夜を助けるか？」

「他人のために命張れるかよ・・・って、アイツと出会う前の俺だったらそう言ってたはずだ・・・」

倒れながら龍牙が呟くと救急車の中にいる晴夜に向けて呟く。

いつも他人の為に、ビルドとして戦っていた晴夜。敵であるレジーナも取り戻そうとしたり、人間じゃないかもしれない俺の為に戦ってくれた。そんな晴夜から沢山、それも数え切れないくらい教えられてきたと。

少なくとも、真琴を守る為だけにライダーとして戦ってきた彼は、そう感じていた。

「最悪だ・・・晴夜、お前のせいで俺は愚かな人間から抜け出せねえみてえだ・・・
ありがとうな・・・」

晴夜へ今までの礼を言うと言った龍牙は立ち上がり、ボトルを握りしめ晴夜の方を振り向く。

「ヒーローは、俺だ!」

龍牙はもう一度、クローズに変身する事を決意した。

「待って!」

「危険です!やめてください!」

「やめろ!龍牙!」

みんなが変身するのを止めるが、龍牙は迷わずボトルをナックルに差し込む。

『ボトルバーン!』

グリップを上へと上げ、そのままドライバーに差し込む。

『クローズマグマ!』

ナツクルを差し込み、ドライバーのレバーを操作した。

『Are you ready?』

音声が鳴り響くと、拳を手に当て構える。

「変身!」

叫ぶと共にナツクル——マグマライドビルダーが出現し、そこから流れ出た溶岩が龍牙の体に掛かり、流れ出た溶岩からヤマタノオロチのような八体の龍が現れて固まる。そのままマグマライドビルダーが前へ動き、固まった溶岩を砕くと、そこに変身した姿で現れた。

『極熱筋肉!クローズマグマ!アーチャチャチャチャチャ　チャチャチャチャアチャア!』

龍牙は再びクローズマグマへと変身した。

だが、強制解除からの再変身したせい、クローズの体からマグマの炎がいくつも吹き荒れていた。

「無理だ、龍牙!体が保たねえぞ!」

「どうってことはねえよ!うおおおおお!」

雄叫びを挙げクローズは一人、エボルに向かつて行く。

「それでこそ、俺の一部だ!」

エボルも向かって来る、二人の拳が衝突し、お互い激しいラツシユへと化した。どちらも互角の戦いを繰り広げていた。

「うおおお!オラア!」

マグマの炎を纏ったクローズの拳が決まり、エボルにダメージを与えた。

「ハザードレベル4.9……いいぞ、もう少しだ!」

「力がみなぎる……魂が燃える……!俺のマグマがほとぼしる!オラア!」

叫びながらクローズから繰り出された拳が次々と決まり、さらに炎を纏ったクローズの拳がエボルを吹き飛ばした。

「ハザードレベル5.0——!」

エボルが吹き飛ばされながらも踏み止まり叫ぶ。

「もう誰にも……止められねえ!」

『ボトルバーン!』

ナツクルをドライバーから外し、もう一度ボトルをナツクルに差し込み、手に当てナツクルに収束されたエネルギーがエボルに向けて攻撃しようとする。

「今だ!」

エボルがドライバーのレバーを操作し、右手にエネルギーが収束されクローズに向

かっていく。

『Ready go!』

「うおおおおおおおー!!」

クローズのナツクルの炎を纏った攻撃とエボルのエネルギーが収束された拳がぶつかり合おうとしていた。

『ボルケニツクナツクル!アチャー!』

『エボルテックファイニツシユ!チャオ!』

クローズとエボルの技がぶつかり、音声が鳴り響くと、二人のぶつかり合う拳から電撃が周りに発生し地面を抉っていた。そして、二人の技から最後に凄い衝撃波が発し、全員が顔を伏せる。

衝撃波も消え、全員が顔を上げると炎が燃え上がる瓦礫の中、エボルの姿はなかった。

そこにいたのは、クローズマグマから変身解除した龍牙が立っていた。

「エボルに勝ったのか?」

「龍牙さん!すごいですわ!」

「晴夜君の毒は!」

ダイヤモンドが救急車の中に入り、毒が消えてるか確認する。

だが、晴夜から毒は消えていなかった。

「ふんー!」

しかし、龍牙が腕を振るモーションを取ると晴夜から毒が徐々に消えていく。

「毒が消えていく……」

「ふあ!?」

毒が消え意識を取り戻した晴夜が起き上がり、マナとダイヤモンドの方を向く。

「俺は……マナ、ダイヤモンド……エボルは!」

「エボルは、龍牙君が倒してくれたの!」

外に龍牙が立つて居るのが見え、マナとダイヤモンドに支えられ救急車から降り、龍牙に近づこうとする。

「……どうして、龍牙さんが晴夜さんの毒を……」

「「えっ!?」」

ロゼッタの発言に驚いて、三人が足を止める。

「どうして、出来たんだ龍牙……」

和也が龍牙に聞くと、龍牙がこつちを振り向いた。

「敵に塩を送るなんて、優しいだろ」

なんと、龍牙から出た声のエボルの声になっていた。

「お前は……まさか……!」

「龍牙君じゃない……」

「エボルト……!」

「そう、俺が龍牙の体に乗っ取った。ふうん!」

エボルが指を動かすと、落ちていたボトルのケースがエボルに引き寄せられ、ボトルのケースがエボルの手に渡ってしまった。

「さつてと、あとは箱を取りに行くか」

ボトルのケースを持って、エボルは展示館の中にある箱の元へと歩いていく。

「行かせるか!ぐう!」

晴夜はマナとダイヤモンドの支えを払い、一人で追おうとしていた。だが、治ったばかりでまだ体が思うように動けなかった。

「無茶よ!そんな、治ったばかりで……!」

「私達が行きます!だから、晴夜さんは……」

「みんなに迷惑かけたんだ……だから……!」

一人でフラフラで歩きながら、エボルの後を追いかけるため、展示館に保管している箱の場所へと向かう。

「晴夜君……」

その頃、展示館の中に入っていたエボルは扉を壊していき、箱が保管されている部屋へと到着した。

「いよいよ、力を取り戻す時が来たか〜！」

エボルが呟きながら、箱へと近づく。

「待て〜！」

晴夜も部屋へと到着し、エボルに向けて叫ぶ。

「これ以上、お前の好きにはさせない！」

「そんな体でやれるのか？」

「うるせえ〜！」

晴夜はビルドドライバーを取り出した。

「はあく、いいだろう、相手をしてやる」

ため息を吐きながらエボルが振り向いて言うのと、晴夜はハザードトリガーを付けたビルドドライバーを装着した。

『マックス！ハザードオン！』

フルフルラビットタンクボトルを振り、栓を回しボトルを半分に分けた。

『ラビット！』

そのまま、ドライバーにボトルを差し込んだ。

『ラビット&ラビット!ビルドアップ!』

『ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!』

『Are you ready?』

漆黒の金型『ハザードライドビルダー』が出てくるとラビットラビットアーマーが出現した。

「変身!」

晴夜の体に金型が重なり、ハザードフォームとなつて変身し、パージされたラビットラビットアーマーを空中で装着した。

『紅のスピーデー・ジャンパー!ラビットラビット!ヤベー!ハエー!』

仮面ライダービルド・ラビットラビットフォームへと変身し、エボルに向かっていく。果たして、エボルトによって乗っ取られた龍牙を助けられるか…

次回!Re. ドキドキ&サイエンス!

第41話 危ういアイデンティティー!自分の存在する理由…

第41話 危ういアイデンティティ！自分の存在する理由……

ビルドがエボルと一人で戦っている頃、ダイヤモンドとロゼッタは、エボルの攻撃で倒れていた和也を起き上がらせる。

「かずやん、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。それより、晴夜の奴……」

「ええ、心配ですわ」

三人が展示館を向く。一人で龍牙の体に乗ったエボルトを倒すために追っていた晴夜が気になっていたからだ。

「とりあえず、私達も行くこう！」

「そうだな」

「ええ！」

ダイヤモンドの発言に頷くと、三人が展示館の方へ向かおうとする。

「!? 待ってください」

「どうしたの？」

急に呼び止められた二人は足を止めて、ロゼッタに近づく。

「あそこに、誰が倒れておられるのです」

「え? 誰が?」

ロゼッタがエボルの変身した瓦礫の場所を指し、二人が見ると確かに誰かが倒れている姿が見えた。

そのまま、三人が瓦礫が近づくと、倒れている人物の姿を見て驚いた。

「叔父さん……」

倒れていたのは、晴夜の叔父：石動総一郎だった。

「おい! しつかりしろ! おい!」

和也が総一郎を揺すりながら、声をかける。

「うっつ……」

「大丈夫よ。意識はまだあるみたい」

ダイヤモンドの発言で和也がホッとすると立ち上がる。

「ダイヤモンド、ここを頼む。俺とロゼッタで晴夜の所に行く」

「わかったわ。任せて!」

「行くぞ!」

「はい!」

総一郎をダイヤモンドに任せ、和也とロゼッタは展示館へと向かった。

ダイヤモンドが彼らを見届けると、総一郎が目を覚まして話しかけてきた。

「キュアダイヤモンド……」

「総一郎さん、しつかりして下さい」

「あの箱を……エボルトに奪われては……ダメだ……奪われると……世界が……」

「世界……世界がどうなるんですか！」

ダイヤモンドが総一郎の言いたいことを聞こうとすると、総一郎が口を開こうとする。

「そ、それは……」

「総一郎さん！総一郎さん！」

しかし総一郎が何か言うとした瞬間に意識を失ってしまい、肝心な事を聞けなかった。

その頃、箱を保管してる部屋の中でビルドが、龍牙の体に乗ったエボルドラゴンと戦っていた。

「なんで、アンタが龍牙の体に！」

ビルドが拳と蹴りを繰り返しながら、なぜ龍牙の体がいるのかを問う。

「お前にまだ、話してなかったな。もともと、俺と龍牙の一つの生命体だった」

「それは、一万年前の戦いと関係があるのか・・・?」

「その通り!」

エボルはビルドを払いのけ、一万年前の戦いの事を語り出した。

「俺達は、一万年前の戦いでキュアエンプレスに戦い、敗れた一人だ。その時、俺の自分の力と体をこの箱に封印された。そして、この箱は人間界へと放たれた」

エボル・・・いや、エボルトは一万年前にキュアエンプレスに破れ、この箱に封印されていたと話す。

「なら、なんで龍牙の体に・・・」

不可解な点はそこだ。

封印されていたのなら、龍牙の体にその遺伝子が入っているのはおかしい。

「箱に封印されそうになった直前、俺は遺伝子の一部を放出させたんだ。」

そして一万年経ち、俺の遺伝子は再び活動を始めた。俺の遺伝子生命体はトランプ王国の世界を周り上城龍牙の母親に憑依した。

だが、その生命体は母親ではなく、体内にいた龍牙に憑依してしまった。そして、生まれた時にその生命体は俺の力と記憶を失ってしまった」

エボルの話を聞き、すぐに理解した。子供が生まれるのは命の誕生でもある。おそら

くその影響で龍牙はエボルトに憑依されず、遺伝子だけを受け継いだのだと推測できる。

「そして、4年前にこの箱はお前の叔父・石動総一郎に発見された。その瞬間、俺は石動の体に憑依した。そして、この箱にある力を使って、トランプ王国へと向かおうとした」

「4年前……まさか、父さんがトランプ王国に飛ばされた原因は……」

4年前と聞き、晴夜の父・桐ヶ谷拓人がトランプ王国に飛ばされたのと同じ時だと察した。

「察しがいいな。そう、俺がこの箱を使ってトランプ王国に向かおうとした時に偶然、あそこに居たお前の親父を巻き込んだしまった」

「お前が……父さんを！」

父親を飛ばしたのは事故ではなく、意図的なものだど知り、怒りを感じたビルドが殴り掛かろうとする。

「おいおい、まだ話の途中なのに礼儀がなってねえな」

「黙れ！」

エボルが避けると、もう一度とパンチを繰り出すがまた避けられる。

「本来なら、あのトランプ王国の惨劇で龍牙と融合するつもりだった。だが、あの時、奴のハザードレベルはまだ俺と融合できるほど無かった。だから、俺は奴を生かし成長す

るのを待った。そして、とうとう俺と融合できる5.0へと達した」

エボルが語り続ける中、ビルドは何度もエボルに殴り掛かろうとする。

「はあ、はあ、はあ……」

「なかなか、頑張るな。流石俺が作り上げた、仮面ライダーだ」

「作られた……仮面ライダー」

エボルはいきなり、自分を作った仮面ライダーと言い出した。

「ああ、お前には本当の事を話してなかったな晴夜。お前がビルドになれたのは、俺の

おかげなんだぞ！」

「……どういう事だ？」

「言葉通りの意味だ。お前はもともとビルドに変身するはずなかった……いや、そもそも変身する資格なんてなかったかもなく」

変身する資格は無かった。晴夜にはエボルの発言の意味がわからなかったが、ビルドドライバーは彼の為に送られたものだと言っている。

「もともとビルドドライバーはお前の兄：桐ヶ谷巧のものだからだ」

「に、兄さんが……」

このビルドドライバーは元々自分の物じゃなく、兄の物だと聞き、彼の身に衝撃が走った。

「このエボルドライバーの修復もお前の兄貴がしてくれた。

お前の兄貴は何も知らず心良くやってくれた。だが予想外な事に、父親がビルドドライバーを奴に送られてしまった。俺の正体と計画を知ったあいつは俺を部屋に呼んだ」

——それは、1年前に遡る。

晴夜の兄：桐ヶ谷巧は総一郎の体に乗っ取ったエボルトに、トランプ王国で封印され破損していたエボルドライバーの修理を任した。だが、父親から送られたビルドドライバーとトランプ王国でのデータが送られたことすべてを知り、総一郎を部屋と呼んだ。

『アンタと上城龍牙は、異世界の生命体エボルトなんだろう！この世界を滅ぼすのが目的だと！』

『父親の送られた資料を読んだのか』

『アンタには、すっかり騙された！だから、こつちも手を打った！』

『それで、どうするつもりだ？』

『当然、アンタと上城龍牙の二人を倒す！』

巧がビルドドライバーを装着し、ゴリラボトルとダイヤモンドボトルを取り出し、差

し込む。

『ゴリラー!ダイヤモンド!ベストマッチ!』

そのままレバーを操作し、音声の流れ出した。

『Are you ready?』

『変身!!?』

巧が叫ぶがドライバーから何も出現しなかった。

『残念だったな、それは偽物だ』

『すり替えたのか!!?』

『人間ごときに、俺がやられるわけないだろ。お前が直してくれたエボルドライバーは

どこにある?』

『誰が教えるか!お前の計画にこれ以上加担するつもりはない!』

『そうか、残念だが知られたからにはしょうがない。ふうん!』

『ガア!』

スタークの腕から伸びた尻尾のような攻撃が巧の胸を貫き、巧が倒れた。

『つたく、面倒な事させやがて、チャオ〜!』

スタークは巧の部屋を後にした。

その後、巧の部屋は火事となった。

そして時は戻り、今の現状となった事をエボルトは語り続ける。

「じゃあ、兄さんが死んだのは……!」

「残念だが、俺じゃない。俺は奴を殺したつもりない」

エボルトに殺されたわけじゃない。だとしたら何故、あの時死んだのか、理由が見えてこない。

「そうして、俺はお前に桐ヶ谷巧のビルドドライバーを渡した。そして、以前話した通り俺の計画の手始めとしてボトルの浄化をしてくれた。感謝してるよ」

「なぜ、俺を選んだ……!それだけなら、他にも居たはずだ!」

「簡単さ、お前が利用しやすいからさ」

「……!?」

「石動の記憶では、お前の持つ技術と知識は兄貴と引けを取らない。何より、お前は誰かが傷つく事を、絶対に黙っていない。直ぐに行動に出る。」

「そういう点では、お前が適任だと思った」

「貴様……!うわあああ!」

晴夜は今まで、自分のしてきた事全部がエボルトに利用され、そのための手伝いを奴

の手の平の上で行なっていたのだと知り、怒りで我を忘れそうになっていた。

「いくら叫んでも無駄だ。お前は仮面ライダーになった瞬間、俺に利用される事が、お前の存在する理由になったんだからな!」

エボルはドライバーのレバーを操作した。

『Ready go!』

『エボルテック フィニッシュ!チャオ!』

「!??ぐわあああああー!!?」

そして、右腕に青い炎を収束させたパンチをビルドに放つ。もろに受けたビルドはそのまま倒れ込み、変身解除してしまう。

「晴夜君!」

晴夜の後を追いかけてきたハートが部屋に到着し、晴夜に駆け寄る。

「待てよ!くう!」

「晴夜君、無茶だよ!」

「最後に言っておくぜ。なぜ、俺がお前の毒を直してやったと思う。お前にはまだ、やってもらいたいことがあるからだ」

エボルがそう言うのと、箱が置かれている台座に近づき、箱を奪う。

「チャオ!」

「待って！」

ハートが向かって行こうとするが、箱を持ってエボルは去っていった。

「そんな……」

「龍牙……クソオオオオー！」

晴夜は地面を強く叩いた。

——龍牙を助けられなかった……そして、自分の全てが作られたものだと知った……

その頃、大貝町の入り口から灰色のカーテンが現れ、そのカーテンから一人の青年が現れた。青年はマゼンタのトイカメラを首にかけていた。

「ここが、新たな世界か？」

呟くと、青年の手には白黒の何も描かれていないカードが握られていた。

「さって、探すとするか。この世界の仮面ライダービルドを……」

青年が歩き出し、仮面ライダービルドを探し始めるために歩き出した。

場所が変わり、ジコチュークラブのボウリング場で、ジコチュー三人とエボルドラゴ

ンが話していた。

「話を聞かせてもらった」

「まさか、あなたが一万年前からいた存在だったなんて・・・」

「どうやら、龍牙達の会話と話を三人も聞いていたらしい。」

「だが、貴様はビルドを倒す事が出来たものを、生かしているとは・・・キングジコチュウ様はさぞお怒りだとおられるぞ」

「そう言うな。あいつにはまだやってもらわなければならないんだ」

「やってもらいたい事？」

「まあ、気長にやるさ。それに一万年もあの世界にいたんだ。もっと人間つてのを観察したいんだ」

エボルがソファに寝転がって呟く。

そして翌日、エボルに箱を奪われ、龍牙を連れ去られてから一日経った。

晴夜は地下室で一人、自分が作った今までの武器やボトルを見ていた。

そして、いつもならこの部屋で騒いでいるはずの最高の相棒・・・龍牙が居ない事を思い浮かべていた。

「龍牙……」

自分を助けようと必死に戦ってくれたのに、龍牙を助けられなかった。

——だからなのか、俺自身の心には大きな穴が空いた気がした。

自分がエボルトにいいように利用され、知らず知らずに奴の手を貸していた。

——その事実により、俺には仮面ライダービルドである資格は無いと強く感じ始めていた。

「どうすればいいんだよ……」

そう、自分の髪を抑えながら呟く。

「晴夜君……」

声が聞こえ振り向くと、其処にはマナが立っていた。

「マナ……俺って、仮面ライダーの資格もなく、ただ利用される存在なのかな……」

晴夜は、自分の存在する意味が何なのかわからなくなってきた事を、マナに話す。

「あたしは、晴夜君が仮面ライダーでよかったと思っっている！」

「マナ……」

「晴夜君は、あたし達がプリキュアになる前までずっと一人で戦っていた。みんなの笑顔を守りたい！みんなの明日を作って守ってあげたい！その気持ちでずっと戦って来た筈だよ。愛と平和を守るために」

マナは晴夜に、貴方が仮面ライダーで良かったと強く語る。

「そうだけど・・・今はわからないんだ。なんで、ライダーになったんだって」

それに対して晴夜はそう言うのと立ち上がった、地下室を後にした。

「晴夜君・・・」

どう何を告げればいいのかわからないまま、マナは晴夜を一人どこかへ行かせてしまった。

それから、しばらくしてフラフラ歩きながら町を歩いていると晴夜は一人、川が流れる水面に映る自分の姿を見ていた。

「兄さんの代わりで、エボルトに作られた仮面ライダーか・・・」

晴夜はビルドドライバーを見て思っていた。

確かに、最初はマナや龍牙の言う通り、誰かの為に戦っていた。

でも、今はどうなんだ。なんで仮面ライダーになったのか、もう俺にはわからなくなっていた。

晴夜が頭中で考えていた時、彼の足元に火花が飛び散った。

「敵か!?!」

晴夜が飛んできた砲撃の方を見ると、そこには一人、銃のような武器を持っていた人

物が見えた。特徴的だったのは、その姿はピンク・・いや、マゼンタに近く、頭部に何枚ものプレートらしきものがはめ込まれていて。何より、腰の部分に巻いている物が気になっていた。

「ベルト?」

そのベルトは白く丸い形をしており、円の辺りには九つのマークが小さく描かれていた。

「お前が、この世界の仮面ライダービルドか?」

「・・・あんたも仮面ライダーか?」

晴夜はマゼンタ色のライダーに仮面ライダーなのかと問う。

「ああ。で、お前がビルドなら早く変身しろ」

マゼンタ色のライダーが晴夜に変身しろと言い、晴夜はビルドドライバーを取り出す
が、装着する事に悩む。

本当に、これを巻いていいのかと。俺には、これを巻く資格はあるのかと。

「どうした?変身しなきゃ死ぬだけだ!」

マゼンタ色のライダーは銃にしていた武器を剣に変え、晴夜に降り掛かるとする。

「・・・仕方ない」

晴夜はビルドドライバーを装着し、ラビットタンクスパークリングを取り出した。

「やっつと、その気になったか」

スパークリングを数回振り、プルタブを開けて上に掲げるとビルドドライバーに差し込んだ。

『ラビットタンクスパークリング!』

音声が鳴り響き、晴夜はドライバーのレバーを回し、前後からビルドマークのフレームが現れ、そこから更にランナー『スナップライドビルダー』が出現し、アーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身!!?!」

腕を広げ、構えると。アーマーが晴夜の体に装着され、アーマーから無数の泡が弾け、音声が響く。

『シユワツと弾ける!ラビットタンクスパークリング!イエー!イエー!』

スパークリングフォームへ変身したビルドはドリルクラッシュシャーとカイゾクハツシャーを持ち、マゼンタ色の仮面ライダーに向かっていく。

晴夜が地下室を出てしばらく経った頃、マナは一人でソリティアへと到着した。

既に六花達も居り、みんなに昨日起こった事を全て話した。

エボルトに龍牙が乗つ取られた事と箱を奪われてしまった事。

そして、ビルドの存在……

「晴夜君は……」

「今は考えたいから一人にさせてほしいって……これからビルドとして戦っているのか
わからないって……」

「そう、総一郎叔父さんの容体はどう？」

「はい、体に特に外傷もなく命に別状もなく、エボルトも抜けています。ですが、まだ意識の方はまだ戻らないと」

「それより、エボルトに乗つ取られた龍牙を助けねえとな」

「でも、あの強さは異常よ」

「僕たちで、助けらるので……あ！」

言いかけると龍牙が乗つ取られて悲しんでいる真琴の方を向く。

「龍牙……」

「まこぴー……ん!?」

真琴の顔を見て和也の頭からいくつかの妄想が浮かんだ。

（まこぴーの心は今、傷ついている。ここで、まこぴーの心を癒してやる事が出来れば……）

「おおい、晴夜はいないのか？」

「見たらわかるだろ、ここにはいねえよ！」

「そうか、まあお前らだけでもいい。ふうん！」

「「うわあ!!?」」

エボルトが見えない程のスピードで全員に向かってきた。

「—————は？」

「どこなのよー！」

いつの間にかソリティアとは違う場所へと移動させられた。見たところ採石場のよ
うな場所だった。

前を向くとそこにはエボルトがおり、その横には昨日奪われた箱まで置かれていた。

「どうだ？俺の力は？」

エボルトはボトルが装着されたパネルのようなものを取り出した。そのパネルを手
から離すとパネルは箱の方へと装着された。

「龍牙を解放して！」

「返して欲しいなら、力強くでやるんだな」

エボルトがmana達の方を向くとエボルトドライバーを腰に装着し、ボトルを取り出して

栓を回し差し込んだ

『コブラ! ライダーシステム! エボリューション!』

エボルトがドライバーのレバーを操作すると、その周囲からランナーが出現し、異様なオーラを纏ったアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身!」

叫ぶとアーマーが龍牙の体に装着された。

『コブラ! コブラ! エボルコブラ! フツハツハツハツハツハツハ!』

仮面ライダーエボルへと変身したのと同時にクローンスマッシュも現れた。それを見たマナ達はドライバーとコミュニケーションを取り出した。

「みんな! 行くよ!」

「[[[[ええ (おお!)]]]]」

マナの合図にみんなが叫ぶとボトルとラビーズをセットした。

『ロボットゼリー!』

『デンジャー! クロコダイル!』

和也と幻冬の方からビーカーとワニの顎が出現し構える。

「変身!!?」

「プリキュア！ラブリンク！」
「プリキュア！ドレスアップ！」

和也と幻冬の二人にビーカーに液が二人の体に覆われ、ビーカーが砕けた。

マナ達四人は光に包まれ、亜久里はアイちゃんから出現したラブアイズパレットにより炎に包まれと五人が姿を変えた。

『ロボットイングリス！ブラア！』

『クロコダイルインローグ！オラア！へキヤー！』

「みなぎる愛！キュアハート！」

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

「陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

「勇気の刃！キュアソード！」

「愛の切り札！キュアエース！」

「響け！愛の鼓動！ドキドキプリキュア！」

「あたし達がスマッシュを引きつける、ソードとかずやんと幻冬君はエボルを」

「わかった。任せろ」

「龍牙、待ってて。今助けるわ！」

「行くよ！」

七人がエボルとスマッシュに向かっていく。

みんながエボルと戦いが始めようとしていたその頃、ビルドはマゼンタ色の仮面ライダーと戦っていた。

ビルドの武器とマゼンタ色の仮面ライダーの武器がぶつかり合う。実力はお互い互角に近い戦いだっただ。

「やるじゃないか、だったらさっさいっだ」

マゼンタ色の仮面ライダーはカブトムシのライダーの絵柄の書かれていたカードを取り出し、それをベルトの真ん中に差し込んだ。

『KAMEN RIDER! KABUT!』
「変わった……」

マゼンタ色の仮面ライダーは姿を変え、カードの絵柄と同じライダーである『カブト』へと変わった。

『ATTACK RIDER! CLOCK UP!』
「消えた!?ぐわあ!」

新たなカードを差し込み、カブトが消えるといきなりビルドに何かの攻撃を食らって

しまい、連続で同じような攻撃を受けていく。

「!?? そうか・・・なら!」

ビルドは四コマ忍法刀をドライバーから形成し、トリガーを3回押した。

『風遁の術!』

ビルドの周囲に風が出現した。

「そこだ!」

「ぐわあ!」

ビルドが四コマ忍法刀を振るとカブトに直撃した。

「やはり、超高速で動いていたのか」

ビルドは四コマ忍法刀で風を出し、その風に触れたその瞬間を狙った。

「流石に頭がいいな。ならこれだ」

また別のカードを出し、ドライバーに差し込んだ。

『KAMEN RIDE! RYUKI!』

今度は赤い色のアーマーを纏い、龍がモーターの姿―『龍騎』へと変わった。

「またかよ!」

「行くぜ!ふう!」

龍騎がビルドに襲い掛かろうと思いきや水面へと潜っていた。

「えっ? どうやって?」

水面に近づくと、いきなり水面からまた龍騎が現れ、剣を持ってビルドに攻撃してきて命中させた。

「どんな、物理法則だよ!」

「これだけじゃない」

『ATTACK RIDE! STRAIK VENT!』

龍騎の腕に龍の顔のような形をした武器——『ドラグクロー』が装着された。

それを見たビルドはカイゾクハツシャーを構え、トリガーを引く。

『各駅電車! 急行電車! 快速電車! 海賊電車! 発車!』

「ハアア!」

ドラグクローとカイゾクハツシャーから放たれたエネルギーがぶつかり合い、その爆風でビルドを吹き飛ばした。

「何だよ、この威力・・・だったら・・・」

『FINAL ATTACK RIDE! AG AG AG AGITO!』

「!?」

爆煙の中からまた別のライダーへと変身した仮面ライダーの右足に収束された光輝くキックがビルドに決まった。

「ぐわああああ！」

決まったキツクの影響で吹き飛ばされ、晴夜は変身解除してしまった。

「強い……これが、本物の仮面ライダーの力……」

「何を迷っている」

「!?？」

『アギト』となったライダーは真ん中のベルトの機械を引き、変身解除した。

そこには赤いTシャツに黒のジャケットを着た20代後半の男性。そして首には変わった形のトイカメラをぶら下げていた。

「どうして、俺が迷っていると思うんだ？」

「戦いに余計な考えが混じっていた。それがお前の動きを次の行動にも影響し鈍らせていた」

「……」

青年の発言に何も言い返す言葉がなかった。

「……ライダーの資格が無いんだ、俺には……」

晴夜は青年に話した。自分は兄の代わりにライダーになり、ずっとエボルトの計画のために利用されていた事。そんな自分にライダーの資格はないと感じていた事も。

「なるほど、大体わかった」

「大体って……」

晴夜がそう言うのと、青年は川の方へと身体を向ける。

「少年、教えてやる。俺も利用されたライダーだ」

「あなたも……」

青年が自分も利用されていたライダーだと語る。

「ある時、俺はある男の口車に乗せられた。そうすれば世界が救えると言われてな。

でも、結局の所は利用され最後は捨てられた。妹にも、仲間さえにも……」

「それで、どうしたんですか？」

「自分が犯した罪だ。俺は俺のやり方でその世界にケリをつけた。だが、そのおかげで知れた。こんな俺にも大切なものがあるとな」

「大切なもの……(俺にとって大切なもの……)」

「それに、俺やお前のような利用されたライダーなんて世界を回れば大勢いるぞ」

「えっ?」

「だが、どいつもこいつも例え利用されていたと知っても、自ら信念と決意で前に進んでいた。お前は無いのか?何か理由や決意があつてライダーになつたんじゃないのか?」

「理由……は?」

晴夜は思い出した。脳裏にこびり付いた、あの言葉を…

「最悪だ・・・また、思い出されちゃった・・・」

晴夜が立ち上がると、ビルドフォンから着信音が鳴った。

「はい。セバスチャンさん・・・わかりました。すぐに行きます」

ビルドフォンの電話を切り、もう一度青年の方を見て頭を下げた。

「ありがとうございます。あなたのおかげで思い出しました。

俺がライダーになった、本当の理由」

「そうか」

「そう言えば、あなたの名前は何ですか？」

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えなくていい」

「そうですか。ありがとうございます」

晴夜は走って、何処かへ向かっていた。その姿を青年はトイカメラを持ちシャッターを切って晴夜を写した。

「どうやら、俺がこの世界でやるべきことは済んだな」

青年が絵柄ないカードを見ると、カードからビルドの絵が浮かび上がる。

「さて、次の世界に行くとするか！」

青年は灰色のカーテンを出現させ。青年、いや・・・門矢士はカーテンを潜り、また新たな世界へと行ってしまった。

その頃、碎石場でエボルと戦っていたハート達は、エボルとクローンスマツシユと戦っていた。

ハートとダイヤモンド、ロゼッタ、エースの四人はクローンスマツシユと戦っている。

「よし、これならいける!」

「エースが決めて!私達が隙を作るわ!」

クローンスマツシユがエネルギー波を四人に向けて放たれた。

「プリキュア!ロゼッタリフレクション!」

だが、ロゼッタリフレクションがスマツシユの攻撃を防いだ。

「今です!」

「ええ!彩れ!ラブキツスルージュ!」

エースはルージュを唇に塗り、スマツシユに向かってキスを投げると、前方にハート形のエネルギー体が生成される。

「ときめきなさい!エースシヨット!ばきゅくん!」

エースシヨットが決まり、クローンスマツシユを破壊することができた。

だが、グリスとローグ、ソードがエボルに戦いを挑むが、三人掛かりでも手も足も出なかった。

「スパークルソード！」

エボルにスパークルソードを放つてる間にグリスが高くジャンプし、ドライバーのレ
ンチを下ろした。

『スクラップ フィニッシュ！』

「オラアアア！」

グリスがライダーキックでのスクラップフィニッシュを放つが、簡単に跳ね返され
た。

「龍牙！」

ソードがエボルに近づき、龍牙を叫ぶ。

「龍牙！お願い目を覚まして！帰ってきて！」

エボルの中に呼びかける。すると、声が聞こえた。

「ソ、ソード・・・俺だ・・・助けてくれ・・・」

「はっ!? 龍牙、戻ってきたの！」

龍牙の声が聞こえたソードは、龍牙の意識が戻ってきたと感じるが：

『ライフルモード！』

「!?？」

ライフルモードとなった銃がソードを攻撃し、ソードを吹き飛ばした。

「どうだ、いい声してるだろ。残念だが、奴の意識はもう無い」

「龍牙……」

「ここは僕らでやります」

ソードの前に二人が出ると、グリスが一つの提案を出した。

「俺が動きを止める。その隙に俺ごとやれ！」

「……わかりました」

「よし、行くぞ！クラッ！」

グリスが二つのツインブレイカーを放ちながらエボルに接近していく。

「至近距離で俺に勝とうなんて、甘い！」

エボルがグリスに拳を繰り出そうとするとその瞬間を狙い、グリスがエボルの腕を掴んだ。
んだ。

「何？？」

そのまま、グリスはエボルの腕を掴んだまま後ろを取り、エボルの動きを止めた。

「今だ！やれ幻冬！」

「はい！」

ローグはドライバーのレンチを下ろした。そしてエボルへと向かっていく。

『クラックアップ フィニッシュ！』

ローグの右手に収束されたエネルギーがエボルに攻撃しようとする。

「無駄だ」

「何？ぐわあ！」

エボルがスチームガンを後ろを見ずグリスに攻撃してきた。エボルを掴んでいたグリスは離れ、膝をつくと至近距離でグリスに光弾を当てる。

「和也さん！」

「お前も邪魔だ！」

エボルもドライバーのレバーを回した。

『エボルテックファイニッシュ！チャオ！』

エボルのカウンターキックをもろに受けたローグはそのまま飛ばされ、二人とも強制変身解除してしまった。

「二人共大丈夫!？」

「ええ、でもあいつ……」

「とんでもねえ、バケモノだな……」

「当然だ。人間ごときがやられるか」

エボルは箱の方へと歩いていった。

「さあつて、いよいよメインイベントの始まりだー！」

エボルがまたボトルが装着されていたパネルを出し、箱に取り付けた。すると急に箱の六面が強く光り出した。

そして、箱から荒々しく強い竜巻が出現し、周囲の視界を悪くする。

「なんだよ!この竜巻は!」

「目が、開いていられない!」

全員が目隠し竜巻から目を守っていた。しばらくして竜巻が止み、目を開く。

「皆さん!見てください!」

ロゼッタが箱の方を指すと、箱に装着されたボトルから色が消えていた。

「ボトルの色が・・・」

「消えた・・・」

全員がボトルから成分が消えた事に驚いているとエボルの手にはハザードトリガーと似た構造の機械が握られていた。

「ついに、取り戻した。フツハツハツハツハツハツハツハッ!ーぐわあ!」

エボルが高々と笑っていると何かの砲撃がエボルに直撃した。

みんなが砲撃が放たれた方を向くとドリルクラッシュヤーをガンモードに持った晴夜だった。

「晴夜（君）（さん）!」

みんなが晴夜の名を言うと、晴夜はみんなの前に出た。

「お前か？どうした、自分が利用されてきた存在だと知って、もう戦う気が無くなったんじゃないのか？」

エボルの発言に晴夜はドリルクラッシュャーを下ろした。

「確かに俺は、運命や偶然に仮面ライダーになった訳でもない・・・お前に作られ利用された存在かもしれない・・・」

「晴夜君・・・」

「でも、俺は！例え利用され、作られたと仮面ライダーだとしても・・・俺は、俺の信じた正義のために、ビルドとして・・・仮面ライダーとして戦ってきた!!？」

そう俺は誰かを守りたい、明日を守りたいその思いでライダーになった。

今でも覚えている、あの時、あいつが言ってくれた言葉——

『その力で、多くの人の明日を・・・未来を・・・守ってきただろ！』

それを今、実現させてるのは、桐ヶ谷拓人博士の息子、桐ヶ谷晴夜・・・お前だろ！』

「答えなきやな、あいつのために・・・」

そう言う時晴夜は、ハザードトリガーのスイッチを押した。

『マックス!ハザードオン!』

フルフルラビットタンクボトルを振り、フルフルインジケーターに赤いランプが出た瞬間と共にセレクトイングキャップを回した。

『ラビット!』

そのまま、ボトルを半分に割ってドライバーに差し込んだ。

『ラビット&ラビット!』

『ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!』

『Are you ready?』

巨大な金型とラビットラビットアーマーが出現し、ユニットが空中へパージされた。

「変身!」

ハザードライドビルダーが晴夜の体と重なり、金型が離れてハザードフォームへと変身し、パージされたラビットのユニットを飛びながら装着し、着地した。

『オーバーフロー!紅のスピーディジャンパー!ラビットラビット!ヤベーイ!ハ
エーイ!』

「行くぞ!エボルト!」

ビルドが一人エボルトに向けて拳をぶつけた。

「何だと!」

「ハアア！」

その一撃は、エボルトのガードした腕を吹き飛ばす程の威力だった。

「バカな！前より強くなっているだろ!? どういうことだ！作られたお前がなぜ…」
「確かに俺は、アンタに作られた、兄さんの代わりかもしれない！」

けど、俺には守りたいものを取り戻したいものがある！」

——今後ろにいる、守りたい仲間達。もう一度会いたい、レジーナ・・・そして、かけがえのない相棒、龍牙をこの手で取り戻す。

「そのために俺は兄を・・・桐ヶ谷巧を超える！」

ビルドの拳がエボルトの防御を崩していく。

「ハザードレベル5。3・・・やるじゃねえか・・・」

エボルトが呟くと、エボルトは青いボトルを取り出した。

「だったら、龍牙の体内から採取したコイツで決めてやる！」

コブラエボルトを取り外し、ドラゴンエボルトを新たに差し込んだ。

『ドラゴン！ ライダーシステム！ エボリューション！』

レバーは操作すると、周囲からランナーが出現し、また異様なオーラを纏ったアーマーが形成された。

『Are you ready?』

ドライバーから形成されたアーマーが、エボルの周りに歯車の様なエフェクトが回りながら装着された。

『ドラゴン! ドラゴン! エボルドラゴン! フツハツハツハツハツハ!』

『ビートクローザー!』

エボルドラゴンになったエボルは、その手にドライバーから形成されたビートクローザーを持ち、ビルドに攻撃を仕掛ける。

「流石、俺のために作ってくれた武器だけの事はある。ふうん!」

「ぐわあ!」

エボルが振り回すビートクローザーの攻撃を受けてしまう。続けて攻撃をしようとしたが、ギリギリの所で避けた。

「違う! それは龍牙の為に作った! アンタの為じゃない!」

「わかってないな、お前が作った武器はすべて俺のものなんだよ!」

エボルのビートクローザーの攻撃をかわしながら、距離を取る。

「だったら、こっちも!」

フルフルボトルをドライバーから外し、数回振り栓を回し、青いランプが出た瞬間半分に割ってからもう一度ドライバーに差し込む。

『タンク&タンク! ビルドアップ!』

『ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！』

レバーを回すのと同時に小型のタンクタンクアーマーが現れ、周囲を囲みながらエボルに攻撃する。

攻撃が終わるとユニットは宙に浮かぶ。

『Are you ready?』

『オーバーフロー！』

『ビルドアップ！』

ラビットラビットのアーマーがパージされ、タンクのユニットがビルドに装着される。

『鋼鉄のブルーウオーリア！タンクタンク！ヤベー！ツエー！』

『フルボトルバスター！』

タンクタンクフォームとなり、その手にフルボトルバスターを持ち砲撃モードで青いエネルギー弾をエボルに向かって放つ。

対するエボルは、ビートクローザーでフルボトルバスターの光弾を切りながら近づいてくる。

「大したモンだ！だが、せっかくの素晴らしい発明も全て俺のためだったから虚しいよな」

「元はと言えば、アンタのせいだろ!」

フルボトルバスターを砲撃モードから剣モードへと変えた。

「アンタが居なければ、龍牙がこんな目に合うことも!父さんも居なくならず、トランプ王国だって滅んだりしなかった!」

フルボトルバスターの攻撃を命中させながらエボルに叫ぶ。

「本当にそうか?もし、俺がいる居ないにしても、お前達はいずれ同じ道を辿るんじゃないか?」

「なんだと!」

「科学の行き着く場所は破滅だと!科学が発達し、便利になれば人は考える事を放棄していく、よって何も考えず争いに満ちていく…それが、科学がもたらす未来だ!」

「人間は、そんな単純じゃない!」

ビルドはフルボトルバスターでビートクローザーでの攻撃を受け流し鏢迫り合いとなった。

「例え、過ちを犯しても!二度と繰り返さないために、何をすべきか、体系し、研究すべきことが科学の役割だ!」

「俺は人間を信じてる!」

フルボトルバスターにフルフルボトルを差し込む。

『フルフルマッチデース!』

ドラゴンエボルを振り払い。フルボトルバスターで攻撃に出る。

『フルフルマッチブレイク!』

青いエネルギーを纏ったフルボトルバスターがドラゴンエボルにダメージ与えた。

「人間ごときが、やるじゃねえか」

エボルドラゴンがビートクローザーを使って立ち上がるとする。するとハザードトリガーと似たトリガーをビルドに見せた。

「それは・・・」

「エボルトリガーが、この中に俺の力の全てが入っている」

エボルはエボルトリガーのスイッチを押そうとした。それを見てビルドが警戒した。

——しかし、トリガーは何も反応がなかった。

「やっぱり、まだダメか。晴夜、今日はこの辺りで引いてやる。チャオ〜」

エボルはビルド達の前から去っていく。

エボルが引いたのを確認すると、ビルドは変身解除し、落ちていた箱を持ち上げ、白くなったボトルをドライバーに差し込んでみた。

「やっぱり、成分は抜けてるか・・・」

ボトルの成分が抜けてるのを確認すると、後ろにはハートがいた。

「晴夜君、もう大丈夫なの?」

「ああ、通りすがりの仮面ライダーの人に大事な事を思い出せた」

「二二通りすがりの仮面ライダー?」三三

晴夜の言う通りすがりの仮面ライダーとは誰なのか、頭に?が浮かんだ。

「それに、龍牙を助けなきゃな!」

晴夜が言うのとみんなが頷く。もう、晴夜には迷いなかった。

すると、ソードが持っていた鏡ラビーズが光り出した。

「これは……」

ソードは鏡ラビーズをコミュニケーションにセットした。

すると、鏡からアン王女の姿が映し出された。

「アン王女……」

『桐ヶ谷晴夜君、皆さんに話しておくことがあります』

「話して、エボルトに関してですか……?」

『ええ……』

アン王女が語り出す、エボルトの正体とは……

次回! Re. ドキドキ&サイエンス!

第42話

エボルトの野望!!?

計画の真相

第42話 エボルトの野望!? 計画の真相

ビルドの活躍によりエボルトドラゴンが退き、なんとか難を逃れた。

だが、エボルがエボルトリガーを出現させたため、ボトルから成分が全て抜き取られてしまった。そんな時、以前手にした鏡ラビーズが光り出し、そこからアン王女が映し出された。

そして、エボルトについて語り始めようとする。

「一体、この箱はなんですか、この箱のエネルギーはなんですか?」

『皆さん、その箱は「パンドラボックス」と言います』

「パンドラボックス?」

「禁断の箱って意味よ」

「パンドラボックス・・・うつ!?」

箱の名前を聞いた晴夜が頭を抑えると、頭の中から自分の過去の出来事がフラッシュバックのように脳裏に浮かぶ。その中にパンドラボックスのような箱が記憶から出てきた。

「晴夜君、大丈夫? 先の戦いで頭を打ったの?」

「いや、なんでもない（今は：：もしかして、俺はこの箱を一度見たことがあるのか：：？）」

心配してくれたハートに大丈夫だと答えると、和也はアン王女に質問する。

「なあ、今更なんだけどエボルトってなんだよ」

『エボルトとは、一万年前キュアエンプレス達が戦った、世界を破滅させる種族の王にあたる存在です』

「世界の破滅を求める．．．それって、メランが言ってた．．．！」

『そのパンドラボックスも、元々はエボルトの物だと言われています。それをキュアエンプレス達三人が三種の神器の力を合わせて、エボルトを封印したと言われています』

「この箱は、エボルトの物だったということになりますわね」

『一万年前の戦いの後にこの箱は誰にも手が届かない人間界へと送られました。』

ですが．．．』

「晴夜の叔父さんが見つけてしまった」

『はい．．．一部の力でもエボルトは石動総一郎へと憑依してしまいました。それにより、トランプ王国へと向かおうとした』

「あの．．．どうして、エボルトはパンドラボックスを直ぐに開けて力を取り戻そうとしなかったのですか？」

幻冬の発言も最もだ。エボルトがパンドラボックスから解放されたのなら、直ぐにでも箱を開ければよかった。なのに、そうしなかったにはそれ相当の理由があるのだと察した。

『それは、エボルトがトランプ王国に飛ぼうとしたとき、来たのはエボルトではなく、桐ヶ谷博士だったのです』

「・・・父さん」

アン王女が言うには。晴夜の父はあの時、エボルトが憑依した総一郎を無理矢理パンドラボックスから離し、そのせいで箱と共にトランプ王国に飛ばされたらしい。

「あの！パンドラボックスとボトルに何か関係があるんですか？」

ハートの言う通り、エボルトが箱を求めていたのはわかったが、ボトルに執着していた理由がわからない。

『それは、エボルトの力が解放されないためです。エボルトが力の一部でも復活したと知り、私の父と桐ヶ谷博士が話し合い、エボルトの力が解放されないようパンドラボックスからボトルが60本精製されたんです』

（そうか、エボルトがあそこまでボトルに執着していたのは箱を開けるためだったのか）
『皆さん、エボルトの野望を止めて下さい！お願いします！』

鏡からアン王女の姿は消え、ラビーズからも光がなくなると、晴夜がパンドラボックス

スに近づき、成分がなくなったボトルを見る。

「・・・せめてボトルがあれば良かったんだけど、ボトルの成分は全部空にされてしまったから・・・」

晴夜が呟くと、アイちゃんがパンドラボックスに近づいた。

「きゅぴらっば〜！」

アイちゃんから放たれたエネルギーがボトルに降りかかる。

すると、アイちゃんのエネルギーにより全てのボトルから色が戻った。

「色が・・・もしかして！」

晴夜はボトルを一本パネルから抜き取り、自分のドライバーへと差し込んだ。

『ラビット！』

ラビットのシルエットがドライバーから浮かび上がった。

「成分が戻った！なんで・・・」

ボトルに成分が戻ったことに驚く。アイちゃんには不思議な力を持っていたのを知ってたがボトルの成分まで戻せた事に関して推測が付かなかった。

（なんで、アイちゃんにボトルの成分が戻せたんだ・・・）

その頃、崩壊したトランプ王国でキングジコチューの所へと呼ばれたエボルトがやってきた。

「エボル、いやエボルトよ！なぜビルドがまだ生きていて！何をやられて帰ってきた！」

「そう怒鳴るなよ、キングジコチュー。俺はアンタにとつて最高の兵器なんだぞ」

「わかっておる！だが、私はビルドが憎いんだ！あの時私を攻撃した奴がな！」

「わかったよ。次にやるときはちゃんとやるよ！その代わりにこのジコチューを何体か貸してくれ」

「いいだろ、それでビルドが倒せるならな！」

「仰せのままに！」

エボルトがキングジコチューの命令を了諾し、キングジコチューのもとを離れると、エボルトリガーを取り出した。

「さあつて、いよいよ力を取り戻す瞬間が来るな！」

エボルトリガーを見て呟くと、人間界へと向かおうとしていた。

「おい！エボルト」

「なんだ？ベール」

エボルトが人間界へと向かおうすると、目の前にベールがやってきた。

「お前の狙いはその乗っ取っているクローズの体を手に入れ、力を取り戻すことじゃない

いのか?」

「残念だが、俺の真の狙いと目的は違う。気分が向いたら話すよ、チャオ〜!」

エボルトはベールから去っていくと、ベールは壁を強く叩く。

「エボルト! 貴様のいいようにはさせない! 必ず・・・貴様を出し抜く!」

ベールはエボルトの存在が邪魔だと感じ出していた。

翌日、採掘場から戻った晴夜は地下室に戻り、パンドラボックスについて調べ始めていた頃、真琴がやってきた。

「晴夜、何してるの?」

「エボルトを倒す為にパンドラボックスの力を利用してビルドの能力を限界まで引き上げるアイテムを作る!」

真琴がパンドラボックスを見ると上のパネルだけが外されており、外された緑色のパネルに何本のケーブルが付けられていた。

「実はエボルトが父さんの研究データの一部を消してたんだ」

「え!?」

「それを復元してみるとこのパネルは別の装置に再構築されることがわかった」

パソコンのキーボードを操作すると、画面と連動しパネルが別の構造の装置へと変わった。

「すごいー！」

パネルが新しい装置に変わるの見て驚くと晴夜が装置を掴み見つめる。

「ただ・・・これを使えばライダーシステムは人間の限界値を超える・・・」

「ちよつと、それって危険なんじゃない・・・?」

真琴が心配していると、それと同時に画面から装置が使った場合の人体の影響は『DANGER』と現れていた。

「大丈夫！天才の発明ですから！それに龍牙を助けるために必要だろー！」

「そうだけど・・・」

開き直るように晴夜が問題ないと言うが、部屋の入り口から晴夜と真琴の会話を隠れて聞いていたマナは：

（晴夜君・・・また・・・）

マナには感じていた。晴夜の問題ないと言うが、それは嘘で、みんなを心配させないに言った為だと言う事に。

その頃、ソリティアではマナ、真琴、晴夜以外の全員が集まっていた。

「ううくん……」

「六花ちゃんさつきから何を難しい顔をしてるんですか？」

「アン王女の言つてたエボルトについてよ」

「何か気になることでもあるのか？」

「うん……アン王女の話ではエボルトは一万年も前から世界のあらゆるものを滅ぼしてきたらしいじゃない。それなのに今回はかなり時間が掛かっている」

「確かに、変ですな。それだけの力を持つていたのなら、わざわざキンググジコチュー達に手を貸している理由がわかりませんわね！」

みんながエボルトの行動について話していると幻冬は黙ってボトルを見ていた。

「幻冬君？どうしたんですか？」

「あ、いや今のままで本当に僕たち勝てるのかなって……あんな強いエボルトに……」
幻冬はエボルトを倒せるかどうか、不安になっていた。

「……しかし、いくら仮面ライダーでも彼は元々、只の小学生で、これからのことに対して不安になったとしても仕方なかった。」

「幻冬君！あなた……！」

そんな幻冬を亜久里が叱ろうとすると、和也が幻冬の服を掴んだ。

「和也さん……」

「お前の気持ちはわかる！俺だって勝てるどうか弱気になった！」

でもな、俺たちはトランプ王国を取り戻し、龍牙やレジーナを助けて！エボルトより更に強いかもしれないキングジコチューに挑むんだぞ！」

「・・・和也さん」

「だから、もつと気持ちを強く持て！」

和也の言葉を聞き、弱気になってしまった自分に後悔すると、亜久里が幻冬に言う。

「晴夜さんが言っていましたわ！ライダーシステムは想いが強くなれば強くなるって！晴夜さんと龍牙さん、和也さんだって出来ました！貴方だってライダーです！」

「亜久里さん・・・皆さん！すいませんでした！勝手に一人弱気になってしまいました！」
幻冬がみんなに先言った発言を謝る。

「一緒に強くなろうぜ！」

「はい！」

「大変ケル！ジコチューの闇の鼓動がたくさん感じるケル！」

「「「「？」」」」

突如、ジコチューが現れたとラケルが叫ぶと、続いてソリティアにセバスチャンが入ってきた。

「皆さん大変です！」

「セバスチャンどうしたんですか？」

「大貝町の噴水広場でスマツシユが多数出現されました！」

「こつちもかよ！」

「みんな！」

真琴が和也達と交流し、真琴にスマツシユとジコチューが分かれた所から出現した事を話し、二手に分かれ行動を開始した。

「わかったわ！行くわよ和也！」

「まだ、和也かよ」

和也は真琴にかずやんと呼んでくれず、ガツカリする。

「あ、幻冬！」

「はい？」

「六花にありす、亜久里ちゃんを頼むぞ！」

和也の発言に首を縦に振ると和也と真琴はスマツシユの方へと向かい、六花達四人はジコチューの現れた方へと向かった。

先に六花達四人が、多数のジコチューが出現した現場に到着した。町の中ではトランプ王国大勢居たカラスジコチューだった。

「あ！あれ！」

「あれはトランプ王国で沢山おられたジコチューでは」

「それが、何でこんなに沢山！」

「考えてみましょうがありません！皆さん行きましょう！」

亜久里が言うと、六花とありすはコミュニケーションを取り出し、幻冬はドライバーを腰に装着し、ボトルを取り出した。

『デンジャー！クロコダイル！』

幻冬からピーカーとワニの顎が出現し構える。

「変身!!?」

「プリキュア！ラブリンク！」

「プリキュア！ドレスアツプ！」

幻冬のピーカーに液により体が覆われ、ワニの顎によってピーカーが砕けた。

六花とありすは光に包まれ、亜久里はアイちゃんから出現したラブアイズパレットにより炎に包まれと三人が姿を変えた。

『クロコダイルインローグ！オラア！へキヤー！〜』

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

「陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

「愛の切り札！キュアエース！」

四人が変身完了すると、大勢のジコチューへと向かっていた。

その頃、そんな事を知らずに地下室で椅子に座っていた晴夜は装置を見ていた。

「これを使えば俺は……」

晴夜はパネルが再構築された装置を見つめていた。そして、パソコンの画面からは『DANGER』のアラームが鳴り続けていた。

すると、晴夜のビルドフォンから着信音が鳴り出し、晴夜がビルドフォンを掴み電話に出た。

「どうした？」

『晴夜！大変だ！町中にスマツシユとジコチュー達が現れて暴れ回ってる！』

和也はジコチューは六花にありす達が向かってくれたと晴夜に伝え、一緒にスマツシユの元へと向かってくれと連絡した。

「わかった！俺もすぐに向かう！」

晴夜が椅子から立ち上がって、向かおうとすると足を止めた。

「マナ……」

入り口の所でマナが一人立っていたからだ。

「それって、命に関わるんでしょ?」

「そんな訳ないだろ!」

晴夜が言うとすぐにパソコンの画面を消し、地下室の入り口へと向かおうとした。

「どうして……」

「えっ?」

マナが晴夜の腕を掴む。

「龍牙君のため、町を守るため、トランプ王国を取り戻すため……なんで、もつと自分を大事にしないの? 晴夜君に何かあったら、あたし達ずっと後悔するかもしれない。」

龍牙君だって、まこびーや六花達みんな、晴夜君を止められなかったら……」

晴夜の服の袖を掴ながら自身の気持ちを言うと、晴夜が口を開く。

「エボルトの計画に手を貸していた俺には、エボルトを止める責任がある」

「そんなの、晴夜君一人の自己満足だよ!」

「そうかもしれない……それでも、俺がケリをつけたいんだ。俺が戦うしかないんだ」

マナは何を言っても意思を曲げない晴夜に、思わず悲しそうな顔になる。

「なんで、伝わらないの……」

「十分伝わってるよ。ありがとうマナ」

「じゃあ、約束して! 必ずみんな帰ろうって」

すると彼女は晴夜に、必ずみんなで帰ろうと約束する。それを聞いた晴夜は一瞬黙り込むが、すぐに笑顔になって返事を返す。

「約束する！絶対みんなで帰る！」

「うん！」

マナが頷くと二人は地下室を出て、外でマシンビルダーを出すと急いで現場へと向かった。

その頃、スマツシユの現場ではクローンスマツシユが暴れ回ってる町の中、そこに指を鳴らしながらスマツシユに指示を出している龍牙に憑依したエボルトがいた。

「早く来い、晴夜。町がなくなちまうぞ！」

指を鳴らし続けながら呟くと後ろから晴夜とマナが合流した和也達と一緒に到着した。

「遅かったな、もうすぐこの世界も終わりだ」

「そんなことさせるかよ！」

「必ず、龍牙を解放する！」

「みんな！行くよ！」

マナが叫ぶと四人はボトルとラビーズを取り出した。

「プリキュア！ラブリック！」

『マックス！ハザードオン！』

和也はロボットゼリーを取り出し、晴夜はフルフルボトルを振り、赤いランプの出た瞬間と共に栓を回した。

『ラビット！』

二人はボトルをドライバーにボトルを差し込んだ。

『ラビット&ラビット！』

『ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！』

『ロボットゼリー！』

二人がドライバーを操作し、ドライバーから金型とラビットユニット、巨大なビーカーが出現した。

『Are you ready?』

「変身！」

和也の体が黄色の液体が覆われグリスへ、金型が晴夜の体と重なり、金型が離れハザードフォームへと変身し、パージされたラビットユニットを飛びながら装着し、着地した。

『潰れる！流れる！溢れ出る！ロボットイングリッド！ブリアー！』

『オーバーフロー！紅のスピーディージャンパー！ラビットラビット！ヤベーイ！ハエーイ！』

「みなぎる愛！キュアハート！」

「勇気の刃！キュアソード！」

四人が変身完了すると、クローンスマツシユの何体が四人に襲い掛かり、四人が応戦に入った。

「晴夜！スマツシユは俺たちに任せろ！」

「あなたはエボルトから龍牙を解放して！」

「わかった！」

フルボトルバスターでスマツシユを払いのけ、龍牙の前にへと到着した。

「エボルト……！」

「さあ、始めようぜ！」

エボルトドライバーを腰に装着し、ボトルを取り出すとドライバーに差し込んだ。

『コブラ！ ライダーシステム！ エボリューション！』

龍牙がドライバーのレバーを操作し、龍牙の周囲からランナーが出現し、異様なオーラを纏ったアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身ー!」

叫ぶとアーマーが龍牙の体に装着された。

『コブラー! コブラー! エボルコブラー! フツハツハツハツハツハツハ!』

エボルコブラになった龍牙は素早いスピードで、ビルドのフルボトルバスターの砲撃を回避し、一瞬にビルドに接近してきた。

そして、そのまま拳や蹴りを繰り出しビルドに攻撃してきた。

フルボトルバスターを放ちエボルを飛ばし、町の柱へとエボルは激突した。

その隙にフルボトルをドライバから外し数回振り栓を回し、青いランプが出た瞬間半分に割ってからもう一度ドライバに差し込む。

「ビルドアップー!」

『タンク&タンクービルドアップー!』

『ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!』

レバーを回すのと同時に小型のタンクユニットが現れ、エボルに攻撃する。

攻撃が終わるとユニットは宙へと浮かぶ。

『Are you ready?』

『オーバーフローー!』

ラビットラビットのアーマーがパージされ、タンクのユニットがビルドに装着され

る。

『鋼鉄のブルーウオーリア！タンクタンク！ヤベー！ツエー！』

フルボトルバスターのグリップを折って砲撃モードへと変え、スパイダーボトルをクアッドフルボトルシリンダーに差し込んだ。

『スパイダー！』

ボトルを差し込むと同時にフルボトルバスターに紫のエネルギー弾が収束された。

『フルボトルブレイク！』

紫のエネルギー弾が放たれエボルに命中し、エボルは町の柱まで飛び、蜘蛛の糸がエボルを拘束した。

エボルが動けなかったその隙に新たなボトルを差し込む。

『ドライヤー！フルボトルブレイク！』

フルボトルバスターから放たれた赤いエネルギー弾が放たれ、ドライヤーの熱の風がエボルにダメージを与えた。

「流石にもうフェイズーは攻略したか・・・じゃあ、これでどうだ！」

ドラゴンエボルボトルを取り出し、コブラエボルボトルと切り替えてドライバーに差し込む。

『ドラゴン！ライダーシステム！エボリューション！』

レバーは操作すると、周囲からランナーが出現し、また異様なオーラを纏ったアーマーが形成された。

『Are you ready?』

ドライバーから形成されたアーマーが装着された。

『ドラゴン! ドラゴン! エボルトドラゴン! フツハツハツハツハツハツハ!』

ドラゴンエボルトとなり、ビルドから放たれた蜘蛛の糸を切り剥がして地面に着地し、一緒にビルドの方へと向かっていく。

その頃、カラスジコチュー達と戦っていたローグ達四人は町で逃げてる人達を避難させながら戦っていた。

「早く逃げて!」

「急いでください!」

ロゼッタが攻撃を防いでる隙にローグがスクラッシュユドライバーのレンチを下ろした。

『クラックアップフィニッシュ!』

ローグは脚部からエネルギーの牙『クランチャーファング』を生成し、両足がジコチューを噛み付くように両脚で挟み蹴りを繰り返した。

「彩れ！ラブキツスルージユ！」

ルージユを唇に塗り、スマツシユに向かつてキスを投げると、前方にハート形のエネルギー体が生成される。

「ときめきなさい！エースショット！ばきゅ〜ん！」

エースショットが決まりカラスジコチューを浄化され、四人周りにいたジコチューは全て浄化され四人が集まる。

「みんな大丈夫！」

「はい」

「ええ、周りの人達も無事に避難出来ました」

「ですが、妙ですわね」

「妙ってどういうこと？」

「なぜ、ジコチューとスマツシユをこれほど離れた場所へと展開するのですか？」

エースが疑問に思っていた事をみんなに発言する。

「そうね、わざわざこんな何キロも離れた場所じゃ無くしても……?!?もしかして……

みんな、スマツシユが現れたところに向かうよ！」

何かに気づいたダイヤモンドが走り出すと三人も後を追う。

「どうしたんですか！」

「こっちは囷よ！私達からスマツシユが現れた所まで離すためのね！」

「では、エボルトの狙いは！」

「少人数で私達を倒すことよ！急がないと！」

四人は急いでスマツシユとエボルトと戦っているビルド達の元へと向かう。

その頃、スマツシユを担当していたハートとグリス、ソード。

ソードがマジカルラブリーパットを出現させ、パットにラビーズをセットした。

「ソードハリケーン！」

ソードのマジカルラブリーパットから放たれたソードハリケーンがスマツシユの周囲を塞ぎその隙にハートがラブハートアローを出現させ、グリスが高くジャンプし、ドライバーのレンチを下ろした。

「プリキュア！ハートシュート！」

『スクラップ フィニツシユ！』

「オラアアアア！」

ハートのハートシュートとグリスのスクラップフィニツシユが、ソードハリケーンによつて周囲を塞いだスマツシユをすべて破壊した。

その頃、エボルトドラゴンとフォームチェンジしたエボルがビートクローザーを使いビ

ルドを押ししていた。

「くう！」

「いいこと教えてやる！キングジコチューの狙いは何だか知ってるか？この人間界を滅ぼした後は、次に宇宙を支配することだ。実に欲が深い奴だ！」

「そんなことさせない！俺たちが必ず終わらせる！」

ビルドはパネルから再構築された装置を取り出し、差し込もうとすると、マナに言われた事を思い出す。

『なんで、もつと自分を大事にしないの？晴夜君に何かあったら、あたし達ずつと後悔するかもしれない。龍牙君だって、まこぴーや六花達みんな、晴夜君を止められなかったら……』

彼女が言っていたことを思い出し、ドライバーに差し込む事を戸惑うが決意は変わらなかった。

「ごめんな……みんなを守ることが俺が何より大事にしてることなんだ……」

戸惑ったがフルフルボトルをドライバーから外し、再構築された装置をドライバーへと差し込み、レバーを操作した。

その瞬間、装置から電流が現れるとその電流がビルドへと流れていき、ビルドにもダメージを与えた。

「ビルド・・・アップ・・・!」

電流を流れながらもドライバのレバーを回し続け、流れ出た電流は周囲へと散乱しエボルトの方にまで流れた。

「これは・・・」

電流が消えるのと同時にスマッシュを倒したハート達三人が到着した。

「はっ!? 晴夜君、あの装置を・・・!」

ハートはビルドドライバにあの装置が差し込まれていたことに気づく。見た限りではタンクタンクフォームのままでも何も変化はなかった。

エボルトはそのままビートクローザーで斬りかかろうとしてきた。

ビートクローザーはビルドに命中はしたがビルドにはダメージが無く一步も動かなかった。そのままビルドはエボルトを振り払った。振り払ったパワーが強くエボルトを町の噴水の水の中へと勢いよくふっ飛ばした。

「どうなってるんだ?」

「あれがパネルの力なの?」

ビルドの強烈な一撃を目にしたハート達が驚いてると、噴水からエボルトが倒れながら

出てきた。

「ハザードレベル6・・・ついに・・・人間の限界をこえたか。晴夜、お前も愚かな人間の一人だったというわけだ」

「どういう事だ」

彼らにはエボルの呟いた言葉の意味がわからなかった。

「俺がなぜ、キングジコチューに手を貸していると思う？お前を使って自分の力を取り戻すためだ」

エボルが言うとエボルトリガーを取り出した。

「この中にあるエネルギーを完全に引き出すには人間の体力では限界がある。だから、俺は科学の力を利用した」

「何？」

「お前は戦いが厳しくなれば否が応でもライダーシステムを強化せざるを得ない」

エボルの発言、それはビルドのこれまで成長や進化すらも計画の手の内だったことを意味する。

「それがお前をビルドにした真の理由・・・プロジェクトビルドの全貌だ！」

「そんなことのために・・・ふざけるな！」

エボルトの計画を打ち明けられ、怒りを感じたビルドがエボルに殴り掛かるとする。

するとエボルトが、一瞬にしてビルドの懐に入る。

「もう、遅い！全て計画通りだ！」

エボルトの拳がビルドの中に入っていく。

「エボルトの拳がビルドの中に……！」

「晴夜君！」

三人が急いでビルドのもとに駆け寄ろうとする。

「人間の限界を超えたビルドをいただいて！俺は完全になる！」

ビルドからエネルギーを吸収し、力を取り戻そうとすると、その瞬間エボルトの体から龍牙が離れ、龍牙は解放された。

「ハッ……この時を待ってたよ」

龍牙がエボルトと離れたのを確認すると片方の腕でエボルトを拘束し、ドライバーのレバーを回し出した。

「何のマネだ！」

「俺のハザードレベルを測ってみろ！」

「なっ……!?? 6. 1. 6. 2. 6. 3. . . . バカな . . . どんどん上がっていく！」

いきなりビルドのハザードレベルが急上昇していることに驚く。

「父さんの研究でお前の計画はお見通しだ！龍牙を取り戻すためにあえてお前の策略に乗ったんだ！」

エボルがビルドに掴まれた腕を振り解こうともがくがビルドは完全にエボルの腕を離そうとはしなかった。

「こんな、急激に上げて、どうなるのかわかってるのか！」

「ああ、お前と一緒に消滅する！」

「!!?」

ビルドの言った発言に三人が驚く。

「そんな・・・晴夜君やめて！」

(ごめんな、マナー！)

心の中で約束を破った事を謝り、ドライバーのレバーを回し続ける。

「人間ごときが俺を欺くだと!!?ふざけるな！」

「これで終わりだ！エボルトーーー！」

次の瞬間ビルドとエボルの周囲が爆発し、衝撃波が周りにいた三人を暈った。

三人が目を開けると、爆煙の中が見え始めると、倒れていた二人の姿が見え、三人が二人に駆け寄る。

「晴夜君！晴夜君！目を開けて！」

「龍牙! しつかりしなさい!」

「ん……ソード……」

龍牙が目を覚ました。口調からしてエボルトは龍牙の体から抜けたようだ。

「龍牙……!」

「目覚めたか!」

「俺は……は!? ? 晴夜は!」

龍牙が起き上がって、隣で髪が白髪になって倒れていた晴夜に気づき、晴夜の肩を揺する。

「おい! 晴夜!」

龍牙が晴夜に叫ぶと晴夜が起き上がった。

「晴夜君……」

晴夜も無事だと安心してみんながホツとした。

しかし……

「折角の計画が台無しだ」

「「「!? ?」」」

晴夜の声を聞いて、全員が驚いた。その声は晴夜のものではないが、聞き覚えのある声だった。

「お前……」

「そんな……晴夜君……」

晴夜の瞳が赤く変わり、晴夜の手から放たれた衝撃波が四人を吹き飛ばしたが、グリスが三人を支えた。

「大丈夫か！」

「ああ……」

「ありがとう、かずやん」

「でも、晴夜はエボルトに……」

口調からして晴夜はエボルトに憑依されたと全員が思った。

そのまま晴夜は自分の体に入れた手を入れ、体からボトル——『ラビットエボルト』が現れた。

「まあいい」

晴夜はエボルトドライバーを装着し、ボトルの栓を回した。

『ラビット！ ライダーシステム！ エボリユーション！』

『Are you ready?』

晴夜がドライバーのレバーを操作し、晴夜の周囲からランナーが出現し、異様なオーラを纏ったアーマーが形成された。

「変身！」

叫ぶとアーマーが晴夜の体に装着された。

『ラビット！ ラビット！ エボルラビット！フツハツハツハツハツハツハ！』

覆面がラビットラビットフオームの様なものとなり、アーマーがエボルドラゴンと同じ感じへと変化した。エボルの新たなアーマー、『エボルラビット』である。

「フェーズ3、完了……！」

エボルの新たなフオーム、ラビットエボルに全員が驚き声が出なかつたが、龍牙が前に出てビルドドライバーを装着した。

「何がフェイズ3だ！晴夜を返せ！」

ナツクルを取り出しボトルを差し込んだ。

『ボトルバーン！』

グリップを上と上げ、そのままドライバーに差し込む。

『クローズマグマ！』

ナツクルを差し込み、ドライバーのレバーを操作した。

『Are you ready?』

音声が届り響くと、拳を手に当て構える。

「変身！」

龍牙が叫ぶが、後ろからマグマライドビルダーが出現するどころか、何もドライバーから出てこなかった。

「えっ？なんで！」

ドライバーの故障と思い、もう一度ドライバーを回すが何も出現しなかった。

「どうしたの、龍牙！」

「わからねえよ！何も出てこねえ！」

何で変身出来ないか龍牙にもわからなかった。

「残念だったな、お前はもう変身出来ない」

突然、龍牙が変身出来なくなってしまった。

——果たしてハート達は晴夜を解放できるのか…

次回！Re. ドキドキ&サイエンス！

第43話 最恐のフェーズ！

第43話 最恐のフェーズ!

晴夜が命を懸けて龍牙を助けた後、エボルトと共に消滅しようとしたが、晴夜はエボルトに体に乗っ取られてしまい、エボルトの完全体は防いだがフェーズ3へとなつてしまった。

「フェーズ3・・・完了」

そう言うときエボルトトリガーを取り出し、起動させようとしたが何も起動しなかった。「やっぱ駄目か！人間の体を中途半端に乗っ取ったため力が解放出来ない・・・」

エボルトトリガーの力を解放できないと知ったエボルトは、エボルトトリガーを下ろすときを上を向く。

「やってくれたなあー！ー！晴夜アアアッ！」

するとエボルトは周りに衝撃波を出しながら叫ぶ。

「何グダグダ言ってるんだ・・・さっさと晴夜を解放しろ！」

もう一度ナツクルを取り出し、ドラゴンマグマボトルを差し込んだ。

『ボトルバーン！』

グリップを上へと上げ、そのままドライバーに差し込む。

『クローズマグマ!』

ナツクルを差し込み、ドライバーのレバーを操作した。

『Are you ready?』

音声が鳴り響くと、拳を手に当て構える。

「変身!」

龍牙は変身と叫ぶが、やはり後ろからマグマライドビルダーが出てくることはなかった。

「なんで、変身出来ないんだ!」

「言ったはずだ。お前はもう変身出来ない!」

「え?」

「どういうこと?」

「お前の体内あった俺の遺伝子は全て俺が取り込んだ。つまりお前はただの無力な人間に成り下がったんだよ」

「そんな・・・じゃあ、もう龍牙は仮面ライダーになれないってこと!?!」

「まあ、そう言う事だ。よかったな願いが叶って」

龍牙はもう変身出来ないと言われ戸惑うと、グリスが前に出てツインブレイカーを構える。

「だったら、俺が晴夜を助けてやる!」

グリスが一人、ダブルツインブレイカーで攻撃するが、エボルにダメージを与える所かエボルは一步足りとも動かなかった。

「今、無性に腹が立っているんでね・・・遊びは終わりだ!」

エボルがグリスのツインブレイカーの攻撃を止め、腕を掴むとグリスを何度もパンチや蹴りを繰り返してグリスを叩きつける。

「さらに強くなってやがる!」

龍牙が咄くとエボルはグリスの首を掴みながら持ち上げ、グリスを空高く掘り投げた。それと同時にエボルの右足にエネルギーが収束されていく。グリスが落下しそうになった瞬間、エボルは収束された右足でグリスにキックを繰り返して、攻撃を喰らったグリスは壁にへと激突した。

「ぐわあああ!」

壁に激突したグリスは強制変身解除してしまった。

「マジかよ・・・」

「今日はお前らに預けたパンドラボックスを取り返して帰るとするよ!家の地下室にあるんだろ。チャオ!」

「行かせるか!」

「待って！」

龍牙とハートが追おうとしたが、エボルは一瞬にして龍牙達のもとから去っていった。

「みんな！」

エボルが消えていくのと同時にダイヤモンドにローグ達四人が合流した。ローグは壁の所で倒れていた和也に気づいた。

「和也さん！」

すぐにローグは和也に駆け寄り介抱する。

「大丈夫ですか？」

「ああ、なんとかな」

ローグに支えられ立ち上がると、エースが晴夜が居ないことに気づく。

「晴夜さんは？」

「晴夜はエボルトに体が乗っ取られたわ」

「「「えっ!?」」」

晴夜がエボルトに乗っ取られたと聞きダイヤモンド達が驚くと、ソードが膝を折って下を向いている龍牙に近づく。

「龍牙……」

「俺は・・・なんで、俺はいつも肝心な時に助けられねえんだ!」

変身出来ず、晴夜を助けられない。龍牙は自分の無力感に押しつぶされそうになっていた。

その頃、地下室に到着したエボルはパンドラボックスに近づき持ち運ぼうとするが、箱はすり抜けて掴むことが出来なかつた。

「ん?…晴夜・・・許さん!」

エボルが箱が置かれていた台座を蹴ると箱は消えてしまった。先まで置かれていたパンドラボックスは台座から見せた立体映像だった。本物は既に何処かへ行ったと知り、エボルトの怒りはさらに上がった。

そのまましばらくして、地下室を出たエボルトはジコチュークラブへと戻った。

「おいおい、随分と荒れているなエボルト」

ソファで座っていたベールがエボルトに話しかける。

「何が言いたいんだ」

「なあに、そろそろお互い腹を括って話そうと思つてな」

ベールがそう言うのとエボルトはもう一つのソファに座った。

「……俺の目的は自分の力を取り戻すことが第一だ。そのためにキングジコチューにも手を貸している」

「キングジコチュー様への忠誠は今までと変わらないと？」

ベールが質問すると、エボルトはエボルトリガーを取り出す。

「ああ、だがビルドに邪魔されたから力を取り戻せなかった。後はこの装置にハザードレベル6以上の力を集めなければならぬがそう簡単にはいかん」

「それで、どうやってエネルギーを集めるんだ」

どうエネルギーを集めるのかと聞くと、エボルトはソファの上で寝転がる。

「気長にやるさ。この一万年人間界にいたんだ、俺はお前らと違って人間と言うものを観察したいんだ」

「観察し終えたらお前は人間界を滅亡させるのか？」

「さあ、それは俺の機嫌次第だ」

その頃、エボルトが暗夜を乗っ取って去った後、四葉邸へと集まった龍牙達。

パンドラボックスも、今は四葉邸に居る龍牙達の前に置かれていた。

「どうです?何かわかりましたか?」

「いえ、晴夜様から持ってきたデータですが、データが多くなかなか・・・」

セバスチャンが今見ているのは、晴夜の地下室から持ってきた父親のデータファイルだった。六花はもしかしたら何か手掛かりがないかと考えていた。

「探しましょう、もしかしたら私達の力となるデータがあるはずです!」

「かしこまりました!」

もう一度、パソコンに目を向け六花達が求めている研究データを探す。すると、龍牙が口を開く。

「セバスチャンさん、俺をもう一度ライダーに戻す方法とかわかるか?」

「残念ですが、先程見たところ。龍牙様の場合は晴夜様、和也様、幻冬様と違い、エボルトの遺伝子によりライダーシステムが使えるようにしていたらしく、今の私たちに・・・」

「そうすつか・・・」

「龍牙・・・」

「俺が変身出来ねえなら、みんなに晴夜を頼むしかねえのか・・・でも、悔しいぜ。」

もう誰も失いたくねえのに・・・」

もう変身出来ないとわれ、自分が何も出来ない無力な存在になったのが心苦しかつ

た。

すると誰かの携帯の着信音が鳴り出した。鳴り出したのは龍牙の携帯からだった。

「!?・・・晴夜からだ!」

晴夜からだと言うと全員頷き、龍牙がその電話に出た。

『俺だよ、俺・・・どこに隠れてるんだ』

エボルトが電話の奥から何処にいるのか尋ねてきた。

「何の用だよ?」

『パンドラボックスを返せ、一時間以内に大貝町タミナルに来い!』

「行くわけねえだろ!」

『晴夜に会えなくなってもいいのか、晴夜の人格なんていつでも消せるんだぞ。主導権

は俺が握っているんだ。チャオ〜』

龍牙に脅しの言葉を言うと、エボルトからの電話が切れた。

場所が変わり、ジコチュークラブのエボルトの部屋でビルドフォンを切るとそのまま放り投げた。

「晴夜、聞いてたか・・・お前のせいで俺の計画は台無しになったんだー!」

晴夜に計画を壊されたため激怒になり、エボルトの叫びが部屋中が響き渡る

「ただで済むと思うなよ。まずはお前が何より大事な仲間を消す!」

その頃四葉邸では、エボルトからの電話が切れるとマナが椅子から立ち上がって四葉邸を出ようとしていた。

「ちよつと、待つてマナ!どこに行くの!?!」

「晴夜君を助けなきゃ!」

「なら、俺も行く!」

マナが一人で行こうとすると、和也も一緒に行くと言い出した。

「和也さん……」

「俺たちがやらないで誰があいつを助けるんだよ!あいつはいつも他人の為に戦っていた……ラブ&ピース、初めて聞いた時はよくわからなかったが、詰まる所みんなそのために戦っていたはずだ」

「うん!」

「俺も行く!」

「駄目!龍牙は変身出来ないのよ!」

クローズに変身出来ない龍牙を真琴は止めようとする。

「それでも!あいつは俺のもう一人の相棒なんだ!」

龍牙が真琴に言う、真琴がため息をし、止めても無駄だと悟った。
「もう〜！しょうがないわね！私も行くわ！」

真琴も一緒に行くと言い、四人で向かおうとする。

「みんなちよつと待って！」

突然、六花がみんなに言う、全員足を止めた。

「もしかしたら、晴夜さんをエポルトから解放できるかもしれません！」

「皆さん、晴夜様のお父様のデータのこれをご覧下さい」

セバスチャンが天井からスクリーンを出し、今パソコンに出てる映像をみんなに見せる。

「これは、三種の神器とエポルトについてですか？」

「そう！アン王女が言ってくれたでしょう！かつてのプリキュアは三種の神器を使ってエポルトを封印したって。もしかしたら・・・」

「なら、俺と龍牙で先にエポルトのところに行く」

「だったら、僕も・・・」

「お前はここに残れ。万が一の時、お前の力が必要だ」

「でも、それじゃあ二人が・・・！」

幻冬も行くこうとすると、龍牙が幻冬に前に現れる。

「頼む。お前がみんな守ってくれ!」

龍牙が幻冬に残ってくれと頭を下げた。

「龍牙さん……わかりました!」

「すまねえ……行くぞ」

「ああ!」

「セバスチャン、二人を送って下さい、後は私たちが」

「わかりました」

龍牙と和也は四葉邸を出るとセバスチャンのリムジンに乗り、エボルトの取引きの場所へと向かった。マナ達は確実に晴夜を助ける方法を見つけ出そうとする。

「急ぎましょう。時間がありません!」

「ええ!急いで晴夜を取り戻す対策を立てるわよ!」

(待つてて晴夜君……)

一方、取引き場所へと先に到着したエボルトが、体を伸び入れていると後ろにいるイーラとマーモを見てため息をつく。

「はあく、俺を見張るようべールに命令されたか?」

「本当は面倒くさいけど……」

「このリングの所為で強引にだよ」

ブラットリングを見せ、命令だから仕方ないと二人が説明する。

「つたく、ベールの奴……まあいい、しつかり頼むぞ」

二人がわかったと言うと、しばらくして階段から風呂敷に包んだパンドラボックスを担いだ龍牙と一緒に来た和也が現れた。

「持ってきたか？」

エボルトが聞くと、龍牙が風呂敷からパンドラボックスを取り出し、エボルトに掲げて見せる。

「晴夜を解放しろ！」

「そのつもりはない！」

だがエボルトは腕をバツテンマークに掲げて、晴夜を解放しないと言う。

「んだと！」

「晴夜は俺を怒らせた。だから、奴の目の前でお前達を消す！」

自分の髪を引っ張り龍牙達を消すと宣言した。

「ふざけやがって！ だったら俺が晴夜を助ける！」

和也はスクラッシュドライバーを装着し、ロボットスクラッシュゼリーを取り出し、ドライバーに差し込む。

『ロボットゼリー!』

スクラツシユドライバーにロボットゼリーを差し込み、マーモ達を指差しながら叫ぶ。

「変身!」

ビーカー内で黄色い液体が和也を包み、ビーカーが割れて 그리스へと変身した。

『潰れる!流れる!溢れ出る!ロボットイン 그리스!ブラア!』

「変身出来ないトランプ王国のライダーとただの人間界のライダーに何が出来る・・・

俺が出るまでもない、任せたぞ」

イーラとマーモの肩を叩き、エボルトは後ろへと下がった。

グリスは一人、イーラとマーモ二人を相手に戦いに挑む。龍牙もパンドラボックスを地面に置き、マグマボトルを取り出した。

「うおおおお!オラア!」

ボトルの力を使い、拳をイーラに繰り出す。簡単に掴まれてしまった。

「そんなんで僕に勝てると思うなよ!」

龍牙は簡単にイーラに払いのけられた。やはり生身でボトルの力を一部使ってるだけでは二人には通用しなかった。

「晴夜!必ず助けてやる!」

『ビームモード！』

一方のグリスはツインブレイカーのモードを変え、射撃で二人の動きを封じる。

『アタックモード！』

動きを封じた隙にツインブレイカーで二人に攻撃を決めて行く。そしてドライバーのレンチを下ろした。

『スクラップ ファイニッシュ！』

2本のツインブレイカーにエネルギーが収束されていく。

「行くぞー！コラッ！」

エネルギーが収束されたダブルツインブレイカーで攻撃しようとした瞬間、

「ふうん！」

エボルトの手から衝撃波が放たれ、グリスの攻撃がエボルトにより妨害され途切れてしまった。

「チャンス！」

グリスが態勢を崩すとイーラがナイフを放って攻撃をし、マーモは鞭を取り出し、鞭による攻撃を何度も繰り返し出しグリスを倒した。

「これで、終わりだ（よ）！」

イーラとマーモが同時にエネルギー波をグリスに向かって放たれた。

『クラックアップ フィニッシュユ!』

目の前にローグが現れ、クラックアップフィニッシュユのライダーパンチによりエネルギー波が相殺されグリスを救った。

「お待たせしました」

「対策は出来たのか?」

「はい、今皆さんこっち向かっていきます!」

ローグはドライバーのレンチを下ろした。

『クラックアップ フィニッシュユ!』

ローグの両足がイーラとマーモを噛み付くように両脚で挟み蹴りを繰り返して出し、二人をそのまま吹き飛ばした。

「いてえー!」

「もう、やってられないわ!」

イーラとマーモは撤退していった。二人が撤退すると戦う気のなかったエボルトが出てきた。

「人間界のライダーが二人か! いいだろ! 相手になってやるよ!」

エボルトドライバーを腰に装着し、ボトルを取り出しエボルトドライバーに差し込んだ。

『コブラ! ライダーシステム! エボリユーション!』

エボルトがドライバーのレバーを操作し、周囲からランナーが出現すると、異様なオーラを纏ったアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身！」

叫ぶとアーマーが晴夜の体に装着された。

『コブラ！ コブラ！ エボルコブラ！ フツハツハツハツハツハツハ！』

仮面ライダーエボル・コブラフォームになり、まずはローグに向かって行った。二人はお互いパンチやキックを繰り返して続けた。

「ほろ／＼初めて頃に比べたら随分強くなったじゃないか！だが、ライダーの力を与えてやったのに俺には感謝もないのか？」

「あなたが僕にこの力をくれた事を感謝しています。でも、あなたがこの世界を苦しめようとするなら、僕はあなたと戦います！愛と平和のために！」

自分の戦う理由をエボルに向けて言う。

「和也さん……行きますよ！」

「おお！オリアアアア！」

グリスとローグが二人掛かりでエボルに向かっていく。二人が同時に攻撃し合いエボルも防御するのに手一杯でグリスとローグが押していた。

「面白い!ならば、こっちも本気で行くか!」

ラビットエボルボトルを取り出し、コブラエボルボトルと入れ替えドライバーに差し込む。

『ラビット! ライダーシステム! エボリューション!』

『Are you ready?』

エボルの周囲からランナーが出現し、異様なオーラを纏ったアーマーが形成されエボルの体と重なった。

『ラビット! ラビット! エボルラビット! フツハツハツハツハツハツハツ!』

エボルラビットとフォームチェンジすると、二人向かって近づいて来る。グリスがすぐさま攻撃しようとする。だがツインブレイカーの攻撃は全く効かず、ローグも加勢に出る。

「即席コンビで俺に勝てる思うな!」

エボルがグリスを掴むとローグがグリスを助けようと攻撃を繰り出す、だがエボルは攻撃してきた方にグリスを盾とした。

「ぐわあ!」

「和也さん!このお!」

もう一度攻撃しようとするともた盾にされてしまった。これでは攻撃出来ない戸

感っていると、ローグを払いのけ掴んでいたグリスを遠くへ蹴り飛ばした。
「なんだ！この力は……！」

ラビットエボルの力は二人掛かりでも歯が立たなかった。龍牙も加勢しようとするがボトルを振って一部の力を上げるだけではどうにもならないと感じていた。

「……どうすれば……あん？あのボトル……」

龍牙はエボルのエボルドライバーのホルダーのボトルを見て何かを思い立ち、龍牙はエボルに接近し、エボルの体を掴む。

「龍牙さん！」

「俺の邪魔するな！」

エボルが肘打ちで龍牙に攻撃し龍牙を払いのけると、ローグを左腕から出たエネルギーで拘束するとドライバーのレバーを操作する。

『Ready go!』

エボルの右腕にエネルギーが収束され、エボルのライダーパンチがローグに直撃した。

『エボルテック フィニッシュ！チャオ！』

攻撃が決まるとエボルがグリスとローグが倒れた場所へと向かおうとする。

「待てよ！」

龍牙の声が聞こえ、エボルが振り向く。

「こいつは俺の体内から採取したボトルなんだろ!」

龍牙がエボルのボトルホルダーから奪ったドラゴンエボルボトルを見せる。

「いつの間に……だがそいつはお前には扱えない!」

「だとしても、やるしかないんだ!」

右手でドラゴンエボルボトルを握り、エボルに一人向かっていく。そのままボトルを握ったまま生身にエボルに何度も拳をぶつける。

「あゝ、懐かしいな。前はこうやってお前の攻撃を受けたもんだ。だが……」

エボルが拳をぶつけ続ける龍牙を払う。

「あの時と決定的に違うのは俺の遺伝子が入っていない!」

ライダーに変身してないため龍牙が受けたダメージはいつもより計り知れなかった。

そこへハート達五人が到着した。

「龍牙! やめて! 変身出来ないのに危険よ!」

キュアソードが駆け寄り龍牙に生身で戦い行くのをやめるように言うが、龍牙は立ち上がった。

「……大丈夫だ」

「龍牙……」

「あいつは、何度も俺を助けてくれた……だから、今度は俺があいつを助ける番なんだ！」

龍牙は再びボトルを握りもう一度エボルに向かつて拳をぶつけ続けるが、エボルがまた龍牙を払う。

「諦められないねえ。だが無駄だ！」

エボルが龍牙の抵抗は無駄だと言うが、龍牙はもう一度立ち上がった。

「まだまだ……何度だって……立ち上がってやるよ！」

もう一度、龍牙はボトルを強く握りエボルに拳で何度でも攻撃する。

「何度やっても無駄だ！お前はただの人間……」

エボルが言いかけると龍牙の拳が青いオーラを纏い、エボルに拳の攻撃が効き始めた。

「ぐお！」

「ハア！」

さらに拳を繰り出し、エボルに青いオーラ纏った攻撃が決まっていく。

「うおおおおお……オリヤアアアアア!!」

今までになく強い一撃がエボルの態勢を崩す程のダメージを与えた。

「どういことだ！」

エボルが龍牙に何が起きたのか驚いていると、龍牙が握つてたボトルを見る。

すると、青い色だったドラゴンエボルボトルは金色に近い色へと姿を変え、龍牙のもとにクローズドラゴンも現れた。

「いけるか?」

クローズドラゴンに聞くとクローズドラゴンが頷き、クローズドラゴンはガジェットと変わり龍牙の手に置かれた。

「頼むぞー!」

龍牙はクローズドラゴンに色が変わったドラゴンエボルボトル——『グレートドラゴンエボルボトル』を差し込んだ。すると、クローズドラゴンのガジェットの色が変わった。

『覚醒!』

クローズドラゴンの起動スイッチを入れ、ドライバーに差し込む。

『グレートクローズドラゴン!』

『グレードクローズドラゴン』と音声が鳴ると、ボトルの成分が龍牙の体に取り込まれ、一瞬苦しみ出したが龍牙は構わず叫ぶ。

『Are you ready?』

「変身!」

ドライバーから音声が鳴り、クローズに変身する時と同じランナーと横からクローズドラゴンのアーマーが出現し、龍牙の体と重なり変身した。

『Wake up CROSS! Get GREAT DRAGON! Yeah!』

「!? クローズの色が変わった!」

「変身しやがった!」

「凄い・・・」

エボルトの遺伝子が無くなり、もう変身出来なかったはずの龍牙がもう一度仮面ライダークローズへと変身した。——だが、再び変身したクローズはいつも違った。

アーマーの色が変わり、クローズドラゴンのハーフボディも変わり、エボルドラゴンの印象があるような感じがした。

「はあ! うおおお!」

新たなクローズ・・・グレードクローズがエボルに拳を向け攻撃する。

「バカな、お前から力の全ては奪ったはず! 新たな遺伝子を創造したというのか!」

「うるせえ!」

「だが、所詮は俺の一部、負けるわけがない!」

エボルが言うところクローズは距離を取り、マグマナックルを取り出した。

「晴夜、お前がくれた力で俺たちは明日を掴む！」

マグマナツクルにボトルを差し込み、ドライバーに差し込んだ。

『ボトルバーン！クローズマグマ！』

「力を・・・貸してくれ!!？」

クローズの後ろからマグマライドビルダーが出現した。すると中で煮られていたヴァリアブルマグマを頭上からぶちまけた。足元からヤマタノオロチのように八頭の龍が伸び上がり、冷めて全身に固着したマグマを後ろから押し割って姿を現した。

『極熱筋肉！クローズマグマ！アーチャチャチャチャチャ　チャチャチャチャアチャー
！』

グレードクローズからクローズマグマとなると、ハート達全員が一度集まる。

「みんな聞いて！エボルトから晴夜を助ける作戦を言うわ！」

キュアダイヤモンドが晴夜を助ける作戦があるとみんなに言う。

「みんなでエボルトの注意を引いて！その際にマジカルラプリーパットの力をエボルトにぶつけるのよ！」

「どういう事だ？」

「晴夜さんのお父様の調べでは、エボルトと三種の神器の力は相反するものと記されています」

「なるほど、それをぶつけなければもしかしたら晴夜から離れるかもしれないって訳か！」
「ええ！その時、晴夜がエボルトと離れた瞬間に貴方達仮面ライダーが同時に技を叩き込むの！」

「任せろ！今の俺たちは負ける気がしねえ！」

「みんなで晴夜君を助けるよ！」

「……「おお!!？」」「……」

みんなが晴夜を助けようと意気込むとクローズ達三人はエボルトに向かっていく。
「待ってろ！晴夜。今助けてやるぞ！」

エボルトの注意がクローズ達三人に目を向けていると、ハート達から注意が離れている隙に五人が手を上に掲げる。

「……マジカルラブリーパッド！……」

ハート達五人がマジカルラブリーパッドを出現させ、キュアラビーズを詰め込みハートを除く四人のマジカルラブリーパッドの中央にそれぞれのシンボルマークを表した。

「……私達の力をキュアハートの元へ！……」

四人がエネルギーカードをキュアハートのマジカルラブリーパッドに送る。

四枚のエネルギーカードがハートのマジカルラブリーパッドの画面の上に載り、ハート

ト形を描き、五枚のカードを合わせた強力なエネルギーカードを生成され、後はタイミングを待つばかりだ。

ラブリーストレートフラッシュが確実に決めるため、クローズ達三人はエボルトに隙を作れるよう必死に攻撃する。

「ええい！面倒な奴らだ！」

エボルが呟いている隙にクローズはナツクルをドライバーから外し、もう一度ボトルをナツクルに差し込む。

『ボトルバーン！』

自分の手に当てナツクルに収束されたエネルギーがエボルに向けて攻撃しようとする。

『ボルケニツク ナツクル！アチャー！』

「オラア！」

「くう！」

ボルケニツクナツクルがガードしたエボルトを崩す一撃として決まった。

「今だ！」

「!?」

クローズの叫び共にハートはパットからカードを離れた。

「よし、今だ!三人で決めるぞ!」

「はい!」

「おお!」

クローズ、グリス、ローグの三人が同時にドライバーのレバーを操作し、三人は高くジャンプし、右足に収束されたエネルギーをエボルに向けて放つ。

『ボルケニツク アタック!』

『スクラップ ファイニツシユ!』

『クラックアップ ファイニツシユ!』

「はあああああ〜!」

三人のライダーキックが決まるとした瞬間、エボルがエボルトリガーを取り出した。

「ならば、その力を利用する!」

エボルトリガーを前に出し、三人のライダーキックを防ごうとした。

すると、三人のライダーキックの力を取り込もうとしてエボルトリガーのメーターにあたる部分が回り出した。

「何?ぐわあ!」

三人のライダーキックは決まらず、三人は吹き飛ばされた。

「どうして!」

「わからねえ……いきなり跳ね返された」

吹き飛ばされた三人が起き上がると、エボルの握っていたエボルトリガーが化石のような色から、所々に白の装飾がなされ、黒く染まった色へと変わっていた。

「真の力よ、蘇れー！ー！！？」

『オーバー・ザ・エポリューション！』

エボルトリガーが起動するとトリガーから黒い竜巻が出現し、周りにいた全員を巻き込んだ。

「晴夜（君）ー！ー！！」

クローズとハートが黒い竜巻に巻き込まれた晴夜を庇い、その影響によりクローズは変身解除してしまった。

黒い竜巻は次第に強くなり、プリキュア以外全員変身解除してしまった。

「皆さん！竜巻の中で何か光ってますわ！」

エースが竜巻の中を指差すと竜巻の中心のあたりから何か光るものが見えた。

黒い竜巻が消えると空中に白いアーマーを纏ったライダーが浮かび上がっており、そこから音声が届いてきた。

『ブラックホール！ブラックホール！ブラックホール！レポリューション！フハハハハ

ハハハハ……!』

「あれが……」

「完全体……!」

遂にエボルトが完全体となつてしまい、エボルコブラに白服のようなアーマーを纏つた様な姿になつている事に驚いてると、龍牙とハートはエボルトから解放された晴夜に近づく。

「晴夜……しっかりとしろ!晴夜!」

龍牙が晴夜の肩を揺する。

「ん……」

「晴夜君!」

二人が晴夜が意識を取り戻し、起き上がったのを見てホツとした。

しかし……

「ここは……?」

「え?晴夜君……大丈夫?」

「晴夜……なんで君達が弟の名前知ってるの?」

「はあ!?何言つてんだよ!お前……」

自分の事を弟と言い、龍牙とハートは何がどうなったのかわからなかった。

「僕は・・・桐ヶ谷・・・桐ヶ谷巧だ」

しかし、次に晴夜の口から放たれた言葉に、二人は驚いて声も出なかった。

桐ヶ谷巧・・・晴夜の兄。そして、ビルドになるはずだった人であり、龍牙を消そうと考えていた人。だが、既に死んだはずの人でもある。

一体何が起こったのか、ハート達には理解が出来なかった。

次回！Re・ドキドキ&サイエンス！

第44話 兄と弟…ジーニアスは止まらない！

第44話 兄と弟：ジーニアスは止まらない!

ハート達はエボルトから晴夜を解放することが出来たが、エボルトは三人のライダーキックの力を利用して、完全体へと復活してしまった。

そして・・・解放された晴夜は自分の事を兄：桐ヶ谷巧と言いつ出した。

「お、お前・・・」

「君はまさか、上城龍牙か?ここは、どこだ・・・?何が起きた?」

「なんか・・・晴夜君、じゃない・・・」

この口調、本当に晴夜じゃないと二人は感じていた。

「ほう。まさか、桐ヶ谷巧の人格が晴夜に取り付くなんて、面白いことになったな」

エボルトが桐ヶ谷巧の人格になった晴夜と龍牙、ハートの前に着地してきた。

「スターク・・・いや、エボルトか!」

「フェーズ4・・・これが俺の完全体の姿だ。お前がエボルトドライバーを直してくれたおかげで力を取り戻せた」

「これが・・・本当の姿・・・うつろ?」

龍牙が頭を抑えると、龍牙の頭からキュアエンプレスやメラン．．．そして、エボルトが完全体となって世界を滅ぼそうとした、過去の映像がフラッシュバックで龍牙の頭から浮かぶ。

「なんだ？今の．．．」

和也と幻冬が龍牙とハートの前に合流した。龍牙も今見た事を後にして立ち上がってエボルトに向け、三人はボトルを握る。

「まだやるのか、再変身は体への負担が大きいだろう」

エボルトが三人に向けて言うが三人は迷わずボトルの栓を回し、龍牙はグレートクロードドラゴンに差し込む。

『覚醒！』

龍牙がガジェットのスイッチを入れたと同時に、三人はドライバーにボトルを差し込む。

『グレートクロードドラゴン！』

『ロボットゼリー！』

『デンジャー！クロコダイル！』

三人がボトルを差し込みレバーを操作した瞬間、ドライバーから再変身しようとした影響か三人の体から電流が体に流れる。

「ぐわああああ…!!変身!」

Wake up CROSS! Get GREAT DRAGON! Yeah!

『潰れる!流れる!溢れ出る!ロボットイングリス!ブラア!』

『割れる!食われる!砕け散る!クロコダイルインローグ!オラア!へキヤー!』

三人共もう一度変身する事が出来た為、エボルに向かつていく。

だが、再変身した影響か、三人の動きが先までとは格段に落ちていたために、エボルに手も足も出なかった。

「そんな状態で俺の相手が務まると思えるのか?」

「くそ…!」

「今までとは、比べ物にならない!」

「諦めるな!また三人に同時にやればいけるはずだ!」

『スクラップ フィニッシュ!』

グリスが言うとう自分のドライバーのレンチを下ろした。

「はい!」

『クラックアップ フィニッシュ!』

ローグとクローズもレバーを操作した。

『Ready go!』

音声が鳴り響くのと同時に三人が高くジャンプし、収束されたエネルギーのキックをエボルに向けて放つ。

『グレードドラゴニック フィニッシュ!』

三人がライダーキックはエボルに決まった。だが、エボルは三人のライダーキックを片腕で止めていた。

「この程度か、はあ!」

三人のライダーキックを片腕で軽く跳ね返した。

「じゃあ、今度は俺から行くぞ!」

エボルが目には映らない一瞬のスピードで三人に攻撃をし、三人はなすすべなく受けてしまい倒れてしまう。

「はあ、はあ……うおおおお!」

クローズが立ち上がり拳を繰り出すが、エボルは一瞬のうちにクローズの懐に入った。

「はあ!」

そのまま黒いオーラを纏った拳がクローズに決まり、クローズを吹き飛ばした。

「半端ねえ……」

飛ばされたクローズは強制変身解除してしまった。

「龍牙!」

「余所見している場合か」

エボルがドライバーのレバーを、握り回し出した。

『Ready go!』

レバーを操作し終わると、エボルが高くジャンプした。

『ブラックホール フィニッシュ! チャオ!』

空中で前方宙返りを繰り返して勢いを付け、グリスとローグにキックを叩き込むと、二人が吹き飛んだ先に発生させたブラックホールに放り込んで圧縮させた。

そして爆発し、二人が変身解除して倒れていた。

「かずやん! 幻冬!」

龍牙が叫ぶが二人は気絶しているのか、反応がなかった。

エボルはそのまま倒れている和也と幻冬のもとへ歩き出した。

「これで、終わりだ」

エボルが気絶している二人にスチームガンを構え、とどめを刺そうとする。

「エースミラーフラッシュ!」

そこに三つの鏡がエボルの周囲を囲み、エースがマジカルラプリーパッドの画面の上

で三角を描き、鏡面からの光のエネルギーが連結すると、エースミラーフラッシュを放ち、エボルは二人から離れた。

「お二人共、大丈夫ですか!?!」

エース達四人が現れて二人を介抱しようとするが反応はなく、ダイヤモンドが二人の脈があるか確かめる。

「大丈夫、脈は正常よ」

「皆さん、ここは一度撤退しましょう!」

ロゼッタの意見に全員同意した。全員逃げるためにまずソードが前に出た。

「ソードハリケーン!」

無数の光剣を竜巻に載せてエボルの動きを封じた。

その隙にロゼッタがマジカルラプリーパットを出現させ、ラビーズをセットした。

「ロゼッタバルーン!一、二の三!」

風船が割れて、そこから光の蝶が無数に現れ、全員の姿を隠した。蝶が離れていくと既にハート達五人も晴夜達四人の姿もなかった。

「逃げたか。懸命な判断だ」

エボルは龍牙が置いていったパンドラボックスを拾い、エボルトリガーをパンドラボックスに入れる。すると、箱から黒いパネル出現した。

エボルはそのパネルを外し、コブラ、バット、ゼブラ、ハサミがモチーフの4本のボトルを差し込んだ。

「あと、6本かあ。最終章の始まりだ」

場所が変わり、崩壊したトランプ王国のキングジコチューの前にベール達三人が座っていた。そこに一人の人間が入ってきた。

それは、かつてエボルトが憑依した総一郎だった。

「エボルト。また、その人間の体に乗っ取ったのか?」

「いや、完全体となった今の俺に人間の体はもういらぬ、これはただの擬態だ。本人の方はまだ夢の中だ:」

キングジコチュー様、頼みがあるのですが?」

「頼みだと……!」

「これからも、あんたに協力するさあ。……ただ、人間界だけ俺に支配させてくれないか?」

「なに……」

「気が変わったんだ、俺はあの世界を滅ぼすのはやめた。あの世界を俺は支配したいん

だ」

「そんなもの、乗るわけが……」

「よからう！」

「キ、キングジコチュー様……！」

キングジコチューはエボルトの頼みを受け入れた。それを聞いたボールは驚きを隠せなかった。

「ただし、これまで通り我に力を貸せ！それが条件だ！」

「どうも感謝します」

エボルトは礼を言うと、キングジコチューの前から去って行く。

しばらくして、エボルトはジコチュークラブの自分の部屋とは違う。多くの機械が置かれていた部屋と入る。

「キングジコチューとの取引が了承された。計画を進める！」

エボルトが言うのと部屋中には一人、ガスマスクを被り白い防護服を纏った人が現れた。

「頼みますよ。先生」

エボルトは防護服を纏った人の肩を叩く。

果たして、エボルトが目的とする、最終計画とは。そして、エボルトの研究に手を貸しているこの人は……

場所が変わり。地下室では、マナに真琴、龍牙の三人がいた。

六花達はエボルトから逃げた後、和也と幻冬は四葉病院へと運ばれた。

しばらくして、六花から連絡があり。二人は外傷はそこまで酷くなく、再変身による体への負担が大きかったらしい。

「うん、わかった。かずやんと幻冬君は大丈夫だつて」

マナが龍牙と真琴に言うのと二人がホツとする。ただもう一つ問題があった。

「こっちは、どうなのかな?」

三人が晴夜の方を見る。

「オッ！これが僕の顔！まさか弟の体なんて〜！」

晴夜が自分の顔を鏡を見ながら、混乱すると、いきなりペンを持ってボードになにやら方式を書き始めた。

そんな姿を見て、三人が小声で話していた。

「ねえ、本当に晴夜じゃないの?」

「うん・・なんかそうみたい」

「桐ヶ谷巧って・・あいつは自分の事をそう呼んだ」

「でも、晴夜のお兄さんって1年も前にエボルトに倒されたんでしょ？」

真琴の言う通り、晴夜の兄：桐ヶ谷巧は1年前にエボルトに倒されたと聞いていた。

すると晴夜は、ボードからペンを離し三人に体を向ける。

「はあく。：確かに、僕はエボルトにやられた。だが、奴は僕を生かしてエボルトドライバーの場所を吐かせようとした。だから、僕は自分の体を捨てる事した」

自分の体を捨てた。桐ヶ谷巧は自分がエボルトの毒を受けた時、自分の部屋に火を付け、エボルトドライバーの場所の秘密を守ろうとしたと話す。

「そして、僕はこの本物のビルドドライバーに僕の記憶と人格のデータの全てを詰め込んでおいた。いつか、自分が復活する為にね」

そう言っつて、今まで晴夜が使っていたビルドドライバーを掲げる。

「でも、なんで今になって目覚めたの？」

真琴が聞くと、晴夜がパネルから再構築したアイテムを見せる。

「おそらくこのアイテムの力で僕の仕込んだデータが呼び覚まし、晴夜の体として復活したんだろ」

仮説を言うつと、再びボードに方式を書き始める。

「あ、それともう一つ。スマツシユを知ってるだろう？あれを完成させたのは僕なんだ」

「「えっ!?」」

なんと、スマツシユを作り出したのは彼、桐ヶ谷巧だと言う。

「そもそも、人間をスマツシユに変えるあのガスは、パンドラボックスから生み出された未知の物質だ。そこから僕はスチームブレードを作って、それに内蔵されているネビュラガスを打ち込む装置を使い、スマツシユを生み出してボトルの成分を集められるようにした。

・・・それがスマツシユを作った理由だ」

「でも・・・エボルトはスマツシユを作ったのは晴夜君のお父さんだつて……」

「・・・おそらく、奴がそう言ったのは弟の晴夜を動揺させる為だろう。スマツシユのベースは、僕が今までできてきた実験からだ」

マナがジコチューゲームの後に晴夜が語っていたエボルトの話の言うと、彼はエボルトが言ったことは晴夜を動揺させる為だと推測した。

「すまなかつたねえ、だが抜けたボトルの成分を取り戻すためには仕方ないことだった。

すべては科学の発展のためだ」

スマツシユを作った事を平然と、何も悪いことをしたつもりは無いと言うような発言が龍牙は氣に入らず立ち上がる。

「ふざけるなよ！何が科学の発展だ、そのせいでどれだけの人が苦しんだと思って……」
「そんなことより、解せないのは君だよ！上城龍牙！エボルト遺伝子を持つ君がなぜ僕の弟と一緒に行動しているんだ。僕は君とスタークを倒すつもりだった」

「俺にはエボルトの時の記憶がねえ、だから敵じゃねえよ！」

「どうかな？晴夜は人を信じすぎるところがある。それを利用してピエロを演じているかもしれないな」

「てめえ……」

龍牙が殴り掛かろうとすると、その前に真琴が前に出て晴夜の服を掴む。

「真琴……」

「謝りなさいよ！いま龍牙に言ったこと！」

「事実を述べただけだよ、キュアソード。手を離してくれないかな」

そう言いながら晴夜は真琴の手を払う。

「お前、いい加減に……」

自分は何も間違っていないと言うような態度に我慢出来ず、龍牙は思わず手を出しそうになると、また龍牙の頭からキュアエンプレス達とエボルトが戦った一万年前の記憶が脳裏に浮かぶ。

「龍牙君どうしたの？」

「なんでもねえよ。ちよつと外行ってくる」

龍牙は晴夜の服を掴んでいた手を離し、一人地下室を出ていった。

「うるさいのがいなくなった所で本題に入ろうか」

龍牙がいなくなったのを確認すると、パネルから再構築されたアイテムを持ちながら二人に話す。

「この究極のアイテムを完成させエボルト倒す。そして・・・上城龍牙も」

「ちよつと待つてよ! なんと龍牙を消す必要があるのよ!」

龍牙を倒すと宣言し、真琴が立ち上がって晴夜をみる。

「彼はエボルトの遺伝子を持つている」

「待つてよ! それは記憶が・・・」

「彼がいつエボルトとして復活してもおかしくない・・・僕のようにね」

真琴は今の晴夜の話を言ってる口調を聞いて感じていた。

——こいつは、晴夜じゃないと。

「アンタとは話にならないわ」

真琴は晴夜、いや・・・巧に呆れて地下室を出て行こうとする。

「ま、ま、びー!」

マナが止めようとするが結局、真琴は地下室から出ていってしまった。

その頃、地下室を出て公園で一人座っていた龍牙は以前エボルトが言った言葉を思い出していた。

『何千、何万の命を奪ってきた俺の一部だ！』

(俺はあんな奴とは違う！けど……)

龍牙はエボルトから奪ったグレードドラゴンエボルトを見つめる。

(コイツを使ったら、急に頭からあんな記憶を見るんだ?)

エボルトが完全体からなったら急に脳裏に浮かんでくる一万年前の戦いの記憶。それが龍牙の心に強く感じる。

龍牙が考えて、頭を上げると真琴がこっち向かって歩いてくる。

「真琴……」

龍牙が呟くと、真琴がいきなり走り出しコミュニケーションを取り出した。

「プリキュア！ラブリンク！」

「お、おい……！真琴……！」

いきなりキュアソードになり、龍牙に向かっていく。

その頃、四葉病院では完全体となったエボルトのライダーキックを喰らい怪我をし、意識を失っていた和也と幻冬が二人部屋の病室で寝ていた。

「……ん、ここは……」

「和也さん、大丈夫ですか?」

和也が目を覚まし周りを見ると、近くに六花とありす、そして、隣のベッドで寝ていた幻冬と看病している亜久里とアイちゃんの姿があつた。

「六花、ありす……俺は、たしか……」

和也は自分がエボルトの技を喰らい、幻冬と二人でやられてしまった事を思い出した。

「エボルトのヤロー!今度こそは……くう!」

「無理しないでよ!まだ、怪我が酷いんだから!」

「けど……あ!そういえば、晴夜はどうなった!?」

「それが、晴夜さんは……」

六花とありすが晴夜に身に起こったのかを和也に話した。

「……ん、亜久里さん」

しばらくして、隣のベッドで寝ていた幻冬も目を覚ました。

「気がつきましたか」

「亜久里さん、アイちゃん・・・」

意識を取り戻した幻冬は、亜久里に介抱されながら起き上がった。

「マジかよ・・・晴夜の兄貴の人格が晴夜の中に・・・」

「え!? どうゆうことですか?」

今、目を覚ました幻冬には和也の言ったことがよくわからなかった。

「マナ達からの話では、晴夜君が使ってたビルドドライバーは元々晴夜君のお兄さんものだったらしいのよ」

「でも、なんで晴夜さんの体にそれが・・・」

「亡くなる前にビルドドライバーに自分の記憶と人格データを詰め込んだらしいのです」

「それが龍牙君を助けるために使ったあのアイテムの影響でビルドドライバーに仕掛けられたシステムに反応したらしく、晴夜君の体にお兄さんの人格が乗り移ったらしいのです」

「それって、今の晴夜さんは見た目は晴夜さんでも、僕達が知ってる晴夜さんじゃないって事なんですか?」

「そういうことになるわね」

六花が説明が終わるのと同時に、病室にマナが入ってきた。

「マナ……晴夜はどうだ？」

「今は地下室で、エボルトを倒すためのアイテムを作ろうとしている。発明に夢中になるところは晴夜君と一緒にの……」

マナがそう言うのと、桐ヶ谷巧の目的をみんなに話した。それを聞いてみんな桐ヶ谷巧の考えの最後が理解出来なかった。

「エボルトと倒したら、龍牙さんも倒す……」

「おい……なんで、龍牙を倒す必要があるんだよ！」

みんなは巧がエボルトだけでなく、龍牙をも倒すなんて納得が出来なかった。

「龍牙君にエボルトの遺伝子があるから倒すって」

「そんな……そんなのだ『わたくしは、それがいいと思います！』え!?? 亜久里ちゃん、今なんて……」

「わたくしはエボルトの遺伝子を持って龍牙さんを消す考えは正しいと思います！」

「どうして……龍牙さんを消すだなんて考えを認めるんだよ！『昔のわたくしならそう言ってたはずです』……え!??」

「わたくしは龍牙さんはわたくし達にとつて大切な仲間ですから、エボルトに戻ることはありません！」

亜久里が龍牙はエボルトになることは無いと言うと、マナが椅子から立ち上がった。

「マナ・・・？」

「あたし、もう一回話してみる！」

病室を出て、もう一度桐ヶ谷家の地下室へと向かった。

「晴夜さん、もとに戻りますか？」

「マナちゃんなら、もしかしたらいけると私は思います」

「・・・なあ、最近になってマナの奴、やけに晴夜の事気にかけてないか？」

「そういえば・・・もしかして・・・」

「どうしたのですか？」

「ううん。何でもない（それはないか・・・マナだもん）」

六花は自分が考えている事はないだろう思っていた。

しばらくして、マナは晴夜の家の地下室の入り口の冷蔵庫と到着し、中に入ろうとする。

〈ドカアーーン!!〉

「な、何！」

中に入るといきなり、驚く程大きな爆発音が地下室に鳴り響く。

「マナが部屋を見ると、周りは数多くの方程式が書かれた紙が散らばっており、巨大なボトル製造機の階段の上に立っていた晴夜の姿があった。」

「完成した！全てのボトルの成分を取り入れた究極のパワーアップアイテム。」

その名も・・・ジーニアスボトル！」

パネルから再構築されたアイテムをジーニアスボトルと名付けた。

「ハッ！凄いでしょう、最高でしょう、天才でしょう♪」

階段を降りながら腕を上に掲げながら、晴夜がよく言うフレーズを発する。

「そのフレーズ、お兄さんから来てたんだ・・・」

「今まで晴夜が言ってたフレーズが兄から来たものだと思い、やっぱり兄弟だと感じていた。」

「これで、エボルトを倒せる。上条龍牙も・・・！」

巧が呟くとマナが近づいて来る。

「あの、どうしてそんなに龍牙君を倒そうって思うんですか？」

なぜ、そこまで龍牙を倒そうと考えているかを尋ねる。

「僕に言わせればなぜ、君達は敵だと思われる上城龍牙を庇うのかな？印象とかで彼を判断するのは・・・」

「もつと、友達を信じて下さい！」

「友達……はあく。青春漫画じゃあるまいし、そんな非科学的な事で彼を信用するなんて」

巧は友達を信じて、というマナの発言に呆れるのかような口調だった。

「なんで、人を信じようしないんですか？」

マナの一言を聞いた巧は足を止めた。

「晴夜君は……何よりも友達を大切にしていた。龍牙君のことを知っても友達であること変わりはなかった」

「そうらしいね。それにキンググジコチューの娘であるレジーナって子ども友達に成ろうしたらいいね。そんな危ない奴と友達になるなんてバカとしかいいようがない」

「レジーナはそんな子じゃない！」

レジーナの事を否定するような言い方をした巧が許せず、マナが叫ぶ。

「レジーナは本当は優しい子なんです！あたしが危なかった時助けてくれたんです！」

トランプ王国に潜入した時、レジーナは自分を助けてくれた事を話す。

「それは、演じてただけだよ。君達を騙し最後は君達に牙を向けた。違うかい？」

巧はレジーナに対する見方を変えようとせず、龍牙と同じように危険対象としてしか見てなかった。

「違います！レジーナはキンググジコチューに利用されただけで、もしかしたら元の優し

いレジーナに戻るかもしれないんです!」

「そんな方法はない」

レジーナを戻せると言うマナの意見を、巧は即刻否定した。

「それと君達は勘違いしてるけど、晴夜はビルドじゃない!仮面ライダービルドもこのビルドドライバーも僕のものだ!晴夜はただエボルトに利用された偽りの仮面ライダーだ」

「晴夜君は偽りなんかじゃない!晴夜君はビルドを自分だけのものだなんて思っていない」

——それは、まだボトルを浄化していた頃、教室にいた晴夜にマナが話しかけた時のことだった。

「晴夜君、今日は機嫌がいいね」

「まあな、今日は朝から豊作でね」

晴夜はポケットから新しいボトルをマナに見せる。

「わあ〜!新しいボトルだ!」

「ああ!早く試したい!」

晴夜は新しいボトルを早く使いたくて、心の底からウキウキしている様子だった。

「・・・でも、こんな新しいボトルが見れるのはマナ達のおかげだと思ってる」

「え？」

「俺、大貝町に引越して来る前まではずっと一人でスマツシユと戦っていたから」

それを聞いたマナは、晴夜はマナ達がプリキュアになる前からずっと一人でスマツシユと戦っていた事を思い出した。

「その時は、ボトルが出来ても一人で喜んでいた。でも、この町に来てマナに六花、ありす、まこびーや龍牙に出会えて、ボトルを浄化して精製していると今のビルドは自分だけのものじゃなくなつて、みんなのおかげで強くなれるって思ったんだ」

そして、今のビルドがここまで強くなってきたのは、エボルトの計画じゃない。みんなと積み重ねてきた思い出がビルドを強くした。だから、ビルドは自分だけのものではない。

「晴夜君は・・・ビルドの力はみんなとの出会いで強くなった。だから、ビルドは自分だけじゃなくみんなとの大事な思い出だって！」

「思い出・・・」

「あなたにだってあつた筈です。毎日がドキドキするような友達が!」

マナが言うど巧は近くの椅子に座り込み、下を向く。

「僕に友達なんて居ない……」

「そんな……絶対いたはず!」

「友達を信じてても裏切られてバカを見るだけだ……」

僕が信じられるのは科学だけだ……」

下を向きながらジーニアスポトルを強く握りしめる。

「あたしは、晴夜君を絶対に裏切らない!晴夜君は誰にだって優しく接してくれる。誰かの明日を守るためや何かに向き合った時に向かうところがあたし……」

「マナ!ジコチューの闇の鼓動シャル!」

言いかけるとシャルルがいきなり現れ、ジコチューが現れたと叫ぶ。

「……わかった!行こうシャルル!」

「シャル!」

マナは地下室を出て行き、ジコチューが現れた場所へと向かった。

「相田マナ……そういうわけか。晴夜の事が……」

マナの心を巧は感じていた。晴夜の事が気になってしょうがないとー

場所が変わり、大貝町の公園ではいきなりキュアソードへと変身したため、龍牙もグレードクローズへと変身した。

そして、クローズはレバーを回し、右腕にエネルギーが収束されていく。ソードはラブハートアローを出現させ、ラビーズをセットした。

『グレードドラゴニック フィニッシュ！』

「スパークルソード！」

クローズの腕から放たれた後ろに出現したドラゴンと共に放たれ、ソードもスパークルソードを放った。二人の放った技は激突し、相殺されてしまった。

技を打ち終わると二人は坐りこみ、変身を解除した。

「どう？少しは強くなったでしょ！」

「特訓なら、特訓って言えよ！」

「言ったら、本気出さないでしょう」

真琴の言う通り、特訓って先に言われると何処か甘さが出てしまうだろうと思っていた。

「もうすぐ、キングジコチューとも戦わなければならないのよ。悪足掻きでもいいから少しでも強くならないと」

「ああ・・・そのためにもまずエボルトをぶっ倒す!」

龍牙がエボルトを倒すと言うと、真琴は桐ヶ谷巧が言った事を龍牙に話す。

「桐ヶ谷巧はアンタを消すつもりよ」

そう言うのと龍牙は驚いたのか、急に黙り込む。

「心配しないでよ! 私達がそんな事をさせない!」

「真琴・・・」

「アンタはどこからどう見ても人間よ。まあ、ちよつとバカっぽい所があるけど」

「つたく、お前までそれ言うのかよ」

龍牙がグレートドラゴンエボルボトルを取り出して見つめながら真琴に言う。

「なあ、もし俺が暴走した時・・・そんな時は容赦なく俺を倒してくれ」

「えっ?」

「冗談だ。締まらねえなあ、あいつがいねえと・・・」

龍牙は晴夜の事を思い浮かべながら、ボトルをポケットにしまい込む。

「大変ダビィ! 闇の鼓動ダビィ!」

「マジかよ・・・行くぞ真琴!」

「ええ!」

二人が立ち上がって、急いで現場へと向かった。

大貝町の大通りの広間にまたトランプ王国にいたジコチューが現れていた。

二人が到着すると、ジコチューの反応に気づいたマナや病院から来た六花にありす、亜久里も駆けつけた。

「みんな、行くよー！」

マナの掛け声と共にドライバーとコミュニケーションを取り出した。

『覚醒！』

龍牙はクローズドラゴンの起動スイッチを入れ、ドライバーに差し込む。

『グレートクローズドラゴン！』

『Are you ready?』

「変身！」

「[[プリキュア！ラブリンク！]]」

「プリキュア！ドレスアップ！」

クローズに変身する時と同じランナーと横からクローズドラゴンのアーマーが出現し、龍牙の体と重なり変身する。マナ達四人は光に包まれ、亜久里はアイちゃんから出現したラブアイズパレットにより炎に包まれると五人が姿を変えた。

『Wake up CROSS！ Get GREAT DRAGON！ Yeah』

!」

「みなぎる愛! キュアハート!」

「英知の光! キュアダイヤモンド!」

「陽だまりポカポカ! キュアロゼッタ!」

「勇気の刃! キュアソード!」

「愛の切り札! キュアエース!」

「!」 「響け! 愛の鼓動! ドキドキ! プリキュア!」 「!」 「!」

五人が名乗り上げ変身を完了すると、ジコチューに向かっていく。

ジコチューがエネルギー波を放ち、全員が避けると、ハートとダイヤモンドは飛躍した。

「たあああああ!」

二人が同時にキックが決まり、ジコチューが態勢を崩した。ジコチューは反撃に出てまた六人に向かってエネルギー波を放ってきた。

「プリキュア! ロゼッタリフレクション!」

ロゼッタリフレクションを展開させジコチューの攻撃を防いだ。

その隙にソードはマジカルブリーパットを出現させ、ラビーズをセットした。

「ソードハリケーン!」

ソードハリケーンを放ち、ジコチューの動きを封じた。

「龍牙！エース！今よ！」

「わかった！」

クローズはドライバーのレバーを操作した。

「ええ！彩れ！ラブキッスルージュー！」

エースはルージューを唇に塗り、スマツシユに向かってキスを投げると、前方にハート形のエネルギー体が生成される。

「ときめきなさい！エースショット！ばきゅくん！」

『グレードドラゴニック フィニッシュ！』

エースショットとライダーキックが決まり、ジコチューを浄化することができた。特訓のおかげかクローズとソードのレベルはかなり上がっていた。

「やっぱ、そいつらじゃあ相手ならんか〜」

クローズ達はジコチューが全滅したのを確認すると、エボルドライバーを腰に装着した総一郎が現れた。

「叔父さん！もしかして、またエボルトに！」

「いいや、これは擬態だ。ここから俺も参戦するぜ！」

エボルトトリガーを取り出し、トリガーを起動させる。

ハートが走り出し攻撃しようとするが、一瞬のうちにエボルは目に止まらないスピードで攻撃を行う。六人は何も出来ず、この前の戦いの二の舞だった。

「スパークルソード！」

「ダイヤモンドシャワー！」

ソードとダイヤモンドのラブハートアローによる、無数の剣と吹雪を放つ。

しかし、エボルは何倍にも速いスピードで二人の攻撃を躲し、カウンターで攻撃を繰り出した。

「速い……」

「今までの、フォームとは比べ物にならないわ」

「みんな、マジカルラブリーパッドで決めるよ！」

ハートが言うのと全員頷き、ハート達五人は手を上に掲げる。

「一二」マジカルラブリーパッド！「一二」

ハート達五人がマジカルラブリーパッドを出現させ、キュアラビーズを詰め込むと、ハートを除く四人のマジカルラブリーパッドの中央にそれぞれのシンボルマークを表した。

「一二」私達の力をキュアハートの元へ！「一二」

四人がエネルギーカードをキュアハートのマジカルラブリーパッドに送る。

四枚のエネルギーカードがハートのマジカルラブリーパッドの画面の上に載り、ハート形を描き、五枚のカードを合わせた強力なエネルギーカードを生成され…

「プリキュア!ラブリーストレートフラッシュユ!」

エボルに向けてラブリーストレートフラッシュユを放った。

「ふん。はあ!」

しかし、エボルの手から小さなブラックホールのような円盤が出現し、ラブリーストレートフラッシュユを吸収した。

「そんな・・・」

「ラブリーストレートフラッシュユが・・・」

「飲み込んだ・・・」

今まで決まっていたラブリーストレートフラッシュユが効かなかったことに、ハート達は動揺していた。

「やはり、お前らは三種の神器の力を全て引き出していなかったか」

「・・・さあつて、今度は俺の番だ」

エボルが一瞬に内にハート達五人の前に移動した。そのままエボルは黒く染まった拳を五人に放ち、吹き飛ばした。

「っ、強い・・・」

「わたくし達は、まだ三種の神器を使いこなせていないと言うのですか？」
「でも、あたしはまだ諦めない！」

ハート達が起き上がろうとする。しかし、エボルにやられた傷によって体をうまく動かすことが出来なかった。

「みんな……あん？」

クローズ達が振り向くとビルドドライバーを腰に装着し、手にフルフルラビットタンクボトルを持った巧が現れた。

「何しに来た？」

「別に君達を助けに来たわけじゃない」

「巧さん……」

そう語る巧の前に数体ものクローンスマッシュが現れ、向かってくる。

『マックス！ ハザードオン！』

ハザードトリガーが起動し、フルフルラビットタンクボトルを数回振りキヤップを正面へと回した。

『ラビット！』

フルフルボトルをドライバーへと差し込み、レバーを回した。

『ラビット&ラビット！』

『ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!』

『Are you ready?』

「変身」

指を鳴らすとドライバーからハザードライドビルダーとラビットラビットアーマーが出現し、晴夜の体にハザードライドビルダーが重なった。

『オーバーフロー!紅のスピーディージャンパー!ラビットラビット!ヤベーイ!ハエーイ!』

金型が離れた後、パージされたラビットラビットアーマーがそのまま装着され、ラビットラビットフォームへと変身した。

「仮面ライダービルド。作る形成するって意味のビルドだ。以後お見知り置きを」

スマッシュに指をさしながら自己紹介すると、フルボトルバスターを持ちスマッシュに向かっていく。

「はっ!ほおら〜!」

ビルドはフルボトルバスターを使い、スマッシュ達の攻撃を流しつつ、自分の攻撃をラビットラビットフォームのスピードでカバーしながら戦っていた。

「使いこなしてやがる」

「ボトルを僕にフィットするよう調整したからね!」

『フルフルマッチ デース!』

フルフルボトルをフルボトルバスターに差し込む。

『フルフルマッチ ブレイク!』

赤いエネルギーを纏ったフルボトルバスターを回転斬りのように攻撃し、ビルドの周りを囲っていたスマッシュを破壊した。

「なら、俺が相手になってやるよ」

エボルがビルドに向かって来ようとする、先にビルドが走り出し仕掛ける。

エボルはビルドのフルボトルバスターの攻撃を受け流し、鏑迫り合いとなる。

「お前とお前の弟に感謝しているよ。おかげで力を取り戻せた!」

「確かに僕はお前に力を貸した!けど、その計画を僕が壊す!」

「笑わせるな、お前らのライダーシステムなど、誰も助ける事が出来ず多くの犠牲を生むものだ。所詮、俺を復活させるための道具に過ぎん」

「それは、結果論だ!僕はお前を倒す!」

ビルドはエボルから距離を取り、ジーニアスポトルを取り出した。

「ほう」

「ビルドアップ」

そしてジーニアスポトルを起動しようと、スイッチを入れる。

——だが、何も反応はなかった。

「えっ!??なんで!」

「どうしたの?」

「おかしい、完璧に仕上げたはずなのに」

動揺しながらも、ビルドはジーニアスポトルのスイッチをもう一度押すが何も反応はなかった。

「それが人間の限界だ!」

エボルがスチームブレードでビルドに攻撃を始める。ビルドは無すべくなく、エボルの攻撃を受けてしまった。

「くう!」

「これで終わりだな。また、俺にやれるとはな桐ヶ谷巧!」

『Are you ready?』

『極熱筋肉!クローズマグマ!アーチャチャチャチャチャ ちゃちゃちゃちゃアチャア!』

エボルがスチームブレードを降り掛かろうとした瞬間、クローズマグマとフォームチェンジしたクローズがビルドを守った。

「気持ちがいねえんだよ!あんたにはあいつがどんな思いで戦ってたのかわからねえ

のか!」

クローズにそう言われるとビルドは変身解除した。

「……」

「あいつは……桐ヶ谷晴夜は正義のヒーローなんだよ。誰かを守るために、誰かの未来の為、誰かの明日を作るために戦ってきたんだ!」

「……」

「あなたにはそんな気持ちねえだろうが!」

クローズが巧に叫ぶとエボルにパンチやキックを繰り返し、攻撃を続ける。

「フォームチェンジした所で俺には勝てん!」

クローズの攻撃を防ぎつつ、エボルはドライバーのレバーを回した。

『ブラックホール フィニッシュ! チャオ!』

黒く染まったエボルのカウンターパンチがクローズに直撃し、クローズを変身解除へと追い込まれた。そして、倒れていた龍牙の服を掴む。

「残念だが、お前を助けてくれるヒーローはいない。勘違いも華々しい!」

エボルは龍牙を投げ飛ばした。

そんな姿を見ていると、巧を頭を抑え、今までの晴夜の記憶が頭から流れてきた。

『あいつは、俺を信じてくれた・・・人間だって、言ってくれたんだ・・・最高の相棒なの・・・!』

『アタシね、マナと晴夜と会ってから、おかしくなっちゃったみたい。マナや晴夜に優しくしてもらおうと、胸がドキドキするようになったの』

『もっと、友達を信じて下さい!』

頭から流れる晴夜の今までの全ての記憶が巧の心を揺さぶり、体の中に聞こえるもう一つの心が反応しようとしていた。

「!?」

顔を上げると、歯車や数式が書かれた意識の世界の中に入る。

そこは、同じ服を着て、腰にビルドドライバーを装着していた、晴夜と巧・・・二人の兄弟だけの世界だった。

「お前は信じられるのか、友達を、自分自身も・・・!」

巧の質問に晴夜は迷わず、首を縦に頷いた。

「なら見せてくれ!お前が信じるものを、未来を・・・」

巧が手を差し出すと、晴夜も手を出し巧の手と重ねる。そして、巧の体が光り、晴夜の中へと入ると、意識の中の世界にある歯車と数式が動き出した。

——そして、曇りかかった空が晴れ、光が射し込まれ、龍牙の前に一人の少年が前に出る。

「何やってんだよ、龍牙！」

「へ．．．！」

自分のことを呼び捨てにするこの口調。まさかと思い、顔を上げる。

「やつぱり、サブキャラには荷が重かったみたいだな！やつぱり決めるのは主役の役目だな！」

「晴夜．．．」

「晴夜君、もしかして．．．！」

「自意識過剰な正義のヒーローの復活だ！」

ジーニアスポトルを向けてエボルに、この口調。

——間違いなく、桐ヶ谷晴夜だった。

「記憶が戻ったの！」

「ハートとお前の声が聞こえてたよ」

「晴夜君．．．」

「遅えんだよ！」

龍牙も嬉しくって泣きそうであまらない顔を隠しながら言う。

「さあ、実験を始めようか!」

いつもの決め台詞を言い、ジーニアスボトルを起動させる。

『グレート! オールイエイ!』

ジーニアスボトルが光り出し、音声で鳴り響くとボトルの真ん中のキャップを回し、腕を高々と上げドライバーに差し込む。

『ジーニアス!』

ジーニアスと鳴り響く音声と共にドライバーのレバーを回す。

『イエイ! イエイ! イエイ! イエイ!』

音声とともにレバーを回し、晴夜の周りから加工設備プラント——『プラントライドビルダーGN』が作られていき、何本ものボトルが晴夜の後ろを囲み、再び音声が鳴る。

『Are you ready?』

そして晴夜は、人差し指を頭の上に当てる。

「変身!!?」

晴夜が叫ぶと共に黄金のビルドマークが晴夜の胸に出現し、白いボディが装着されると同時に、後ろを囲むボトルに成分が注入され、プラントから射出された60本のボトルが全身に装填される。

『完全無欠のボトルヤロー！ビルドジーニアス！スゲーイ！モノスゲーイ！』

左複眼・左側頭部・右背部・右肩・右腕・左脚に暖色系のボトルが、右複眼・右側頭部・左背部・左肩・左腕・右脚に寒色系のボトルが装着され、頭部の額部分にはビルドドライバーの「ボルテックチャージャー」と同様の意匠『GNシンキングサーキット』、胸部には黄金のビルドのライダーズクレスト型の特殊変換炉『フルビルドリアクター』が組み込まれた。

「勝利の法則は・・・決まった！」

そしてビルドは右複眼を上の方になぞり上げ、手の平を開きながら決め台詞を叫ぶ。新たなフォーム・・・ジーニアスフォームとなり、ついに桐ヶ谷晴夜が戻ってきた。

次回！Re・ドキドキ&サイエンス！

第45話 アイちゃんがジコチューに！

第45話 アイちゃんがジコチューに!

桐ヶ谷巧の人格から戻った晴夜は、兄が作り上げたジーニアスポトルを使い、仮面ライダービルド・ジーニアスフォームへと変身した。

「勝利の法則は、決まった!」

「ハツハツハツア!面白い!」

その様子を見たエボルはスチームガンをビルドに向けて放った。

しかし、ビルドがその場を一步も動くこともなければ、エボルの攻撃も当ることはなかった。

「うそ!どうやって!」

普通に直撃コースなのに、ビルドは何も無く攻撃も当たらなかつた事にダイヤモンド達は驚く。実際は、目では捉えきれない速さでエボルの攻撃を跳ね返しただけなので。

「なるほど、ならぬ!」

エボルとビルドは目にも捉えきれないスピードで戦い始めた。

皆が二人の動きを捉えられない中、二人はキックやパンチを繰り返して続けた。そ

して、ビルドはエボルの繰り出した拳を掴むと、そのままドライバーのレバーを回し、ビルドの右側に装填された有機物のボトルが光り出した。

『ワンサイド!』

光り出したボトルのエネルギーは右腕に収束されていく。

『Ready go!』

『ジーニアス アタック!』

ビルドのライダーパンチが決まると、彼の拳からエボルの体にエネルギーが注入されていく。

「なっ!?」

注入されたエネルギーが危険を察知し、エボルがすぐビルドから離れる。

「ぐわあ!なんだあ、これは・・・」

しかし、ビルドが注入したエネルギーのせいかエボルの動きが止まった。

エボルが動かなかつた際にビルドはドライバーのレバーを2度回した。

『ワンサイド! 逆サイド!』

今度は左側の無機物のボトルが光り出し、右足にエネルギーが収束されていく。

『Ready go!』

『ジーニアス ブレイク!』

音声が鳴ると同時にビルドのキックが炸裂し、動けなくなったエボルを壁へと激突させた。

「マジ強え・・・マジ最強・・・」

ジーニアスフォームの強さに龍牙は驚いて、何をどう言えばわからず、語彙力の無い台詞でそう呟きながら起き上がった。

「まさか、そんな秘密兵器を隠し持っていたとは・・・」

壁に突きつけられたエボルが起き上がり、ビルドに呟く。

「いいだろう、今回はこれで引いてやるよ。」

だが忘れるな、次はこうはいかんぞ、チャオ〜」

ビルドに別れを言うとエボルは去っていった。

エボルが去るとビルドはドライバーからジーニアスポトルを外して変身解除し、ジーニアスポトルを見る。

「兄さん・・・ありがとう」

ジーニアスポトルを見た晴夜は、兄・桐ヶ谷巧の技術の凄さを改めて感じ、超えなきやならない壁の大きさを感じた。

ポトルを仕舞うと倒れていたハートの方を振り向き、近づいて目の前に着くと手を差し伸べる。

「大丈夫か？ハート」

ハートは晴夜の手を握り、起き上がる。

「本当に・・・晴夜君？」

「さつきから言ってるでしょう。天才科学者の息子の桐ヶ谷晴夜です！」

「ア〜イ！」

アイちゃんが晴夜に近づき、機嫌よく笑っていた。

「うん！晴夜君に間違いない！」

その様子を見て涙が出そうになると、ソード達も駆け寄り涙を拭う。

「晴夜君なのよね・・・？」

「口調からしたら晴夜さんと思うのですが？」

「まさか、だけど桐ヶ谷巧じやないよね」

「だから・・・さつきも言ったでしょう！天才科学者の息子の・・・」

晴夜が言いかけると、後ろから足音が聞こえ、全員が振り向く。

「和也さん！」

「幻冬さんも！」

怪我直ったばかりの和也と幻冬がスクラッシュユドライバーを装着し走って現れた。

「おい！みんな、敵は・・・って、誰もいねえ！」

「晴夜さん……じゃなくなつて巧さんでしたね」

「かずやん、幻冬君。俺だよ、晴夜」

「えっ?」

「……もしかして、晴夜さん?」

「戻つたのか?」

和也が聞くと晴夜をクルリと体を回す。

「よう! дайまいま! 天才科学者の息子の桐ヶ谷晴夜です!」

そして笑顔で自慢気に言う。この口調を聞いた全員は間違ひなく、晴夜だと確信した。

「……何が、ただいまだ! てめえ、心配して損したじゃねえか! 心火を燃やしてぶつ潰す!」

和也が晴夜に向かつて走り、思い切り晴夜の体を叩いて説教する。和也からの説教が終わると龍牙に近づき、手を差し伸べる。

「遅くなつたな、相棒!」

「くつたく、いつもお前は遅いんだよ!」

龍牙は晴夜の上げた手を掴む二人が固い握手を交わした。

「兄さんの事、悪かつたな。お前を傷つけた」

「・・・気にすんなよ。もう何言われたか覚えてねえよ」

「そうだった・・・お前はバカだからそこら辺は問題ないか」

「バカって何だよ！せめて、もうちよつと他の事言えよ！」

この二人のじゃれ合い、これは誰にも真似できない、二人だから出来ること。

——晴夜は元に戻ったと、全員思っていた。

じゃれ合いが終わるとハートが晴夜の前に現れた。

「ハート？」

「もう絶対、あんな無茶はしないで！」

「ごめん・・・あの時、約束を破って」

——無事に帰るって言っていたのに。

ハートはエボルトから龍牙を救い出すために自らも犠牲にしようとしてエボルトを倒そうとした晴夜の自分勝手な行動をしたことに怒っていた。

「・・・でも、無事に戻ってきて良かった」

ハートが笑顔で晴夜に言う。

「!?？」

すると、ハートの笑顔を見て何かを感じた晴夜は顔を赤くして顔を反対の方に向く。

(・・・今、なんでハートの笑顔を見て反応したんだ?)

その頃、エボルトの実験室では。ビルドにやられたエボルトが戻り、ソファで倒れ込むと、ビルドに攻撃された胸を抑える。

「まさか、あんな物を作り上げていたとは・・・」

エボルトが呟くと、防護服を着用した人が現れた。

「予測では、あそこまでの力を引き出すとは思わなかった。だが、あいつだからあそこまで引き出せかもしれない」

防護服を着ていた人がジーニアスポトルについて話すと、エボルトは黒いパネルを見る。

「・・・だが、俺の計画が完成すれば、簡単に奴を倒してやるよ」

エボルトの最終計画。彼はそれを成すための、黒いパネルの完成を楽しみにしていた。

翌日、秋の雰囲気には舞う公園でおいしそうにクッキーを食べているアイちゃんを晴夜達は見ていた。

「食べ過ぎるとよくないからそこまでね」

言い聞かせると、アイちゃんが挙手する。

「ジュースの飲みすぎもよくないからそこまでよ」

「素直ないい子にはご褒美ですわ」

ランスがコミュニケーションが変わるとありすがラビーズをセットし、太鼓を出した。その太鼓をアイちゃんは楽しそうに叩いてる。

「ちよつと前まではイヤイヤって言うイヤイヤ期だったけど」

「それも卒業したって感じだな」

楽しそうなアイちゃんを見て、みんなはイヤイヤ期はもう終わったと思った。

「不思議だね、アイちゃん的笑顔を見ると」

「心がとつても優しくなつて」

「元気が出るようね！」

「この優しい顔でこの笑顔があればジコチューがパワーアップすることもありませんわね」

「これで、ひと段落乗り切つたな」

「アイちゃん頑張つて色んなことに挑戦してましたね」

幻冬がアイちゃんの頭を撫でると、不思議そうにこつちを見て笑つた。

場所が変わり、ジコチュークラブでボールがある提案をイーラとマーモに話す。

「何? あの羽の生えた赤ん坊をジコチューに育てるだど?」

「アイちゃんだ・・・」

『正しい子どもの育て方』と言う本を読んでるボールはアイちゃんと訂正した。

イーラとマーモが素っ気無い態度をとり、それにムカついたボールは二人のブラットリングに電流を流した。

「アイちゃんがジコチューになれば我々のパワーがアップする。そうすればプリキュアと仮面ライダーを倒せる」

「でもどうやって、ジコチューに育てるって簡単じゃないわよ」

「そこで・・・」

服をとると全身タイトの衣装になるボール。暫し間を置くイーラもマーモがポーズをとられて慌てて逃げる。ボールは右手を軽く腰らへんに手を当て、見せてくる。

「指人形で行く」

指人形を付け、アイちゃんをジコチューにするための計画を始める。

みんなとアイちゃんと外で遊びしばらくした頃、晴夜はパソコンを向け、何かのプログラムを組もうとした。だが、頭の考えのどこかではマナの事を考えていた。

(はあく、なんだろ…マナの笑顔は何度も見てきたはずなのに、今日はやけに引つかかる…)

「晴夜…晴夜！」

「!??え…なに?」

「なについて、お前さつきから手止めてるからどうしたと思つてよ」

「ああ、ちよつと考えごと『相変わらず、鈍いな…』えつ?」

「どうした?」

「いや、なんでもない…(今、兄さんの声が…)

いきなり兄の声が頭から聞こえ、何が起こったのか自分にもわからなかった。

その日の夜、相田家のマナの部屋ではマナとアイちゃんとシャルルが寝ている。

「アイちゃん アイちゃん」

「きゅび?」

アイちゃんが気持ちよく眠っていると、自分の名前を呼ぶ声が聞こえ目を開く。

「ここだよ、アイちゃん」

天窓を見ると指人形がいた。アイちゃんは寝ぼけながら起き上がり、飛んで見に行くが、近づいてみたらもういなかった。

〈ひよこん!〉

いきなり出てきたベールの指人形が窓越しでアイちゃんの前に現れた。

「「こんばんは、アイちゃん」」

幼児番組のような挨拶し、イーラにニワトリ、マーモや猫の指人形も現れた。

「僕達は君の友達さ」

「寝るのはまだ早いわ」

「一緒に、遊ぼうよっ!」

指人形を見て友達と言ってくれて感動したのか、嬉しそうなアイちゃんが目を輝かせていた。

「夢のパラダイスヘレッツラゴーだ」

「楽しいよ」

「おいでよ」

「早く早く」

三人がアイを誘うとする。アイちゃんは超能力で窓を開け、ベール達を追う。

「アイちゃん、こつちだよ〜」

ベール達と共にアイちゃんの動きに合わせて飛行していた。

「ノリノリだね、アイちゃん」

「今夜は泣かさないわよ、アイちゃん」

自分達の人形を動かしながら誘惑し、アイちゃんを誘導していく。

翌朝。マナはアイちゃんを起こすが、本人はまだ眠たそうな感じだった。

抱いたマナ曰く、アイちゃんは朝からいつも元気なのに寝ているという。食事も膨れっ面で拒否した。

「食べたくないの?」

「ちゃんと食べないとダメシヤル!」

お説教を喰らうが「やつ!」と拒否するアイちゃん。

「またイヤイヤ期かな?」と思うマナの横では、アイちゃんが赤ちゃん椅子の机をイヤイヤ言いながら叩く。

「マナ! 急がないと学校に遅刻しちゃうシヤル!」

「ホントだ! じゃあシヤルル、今日はアイちゃんを見てて」

「まかせるシヤル」

シャルルに言われ、マナは学校へと向かった。

その日の夕方、みんなが相田家に訪れた。

「ただいま・・・えっ!」

部屋に入ると中は無茶苦茶になっており、シャルルはボロボロだった。

「どうしたのこれ?」

「アイちゃんがお昼寝しないから玩具を取り上げようとしたら、イヤイヤと引つ張りあいになってこうなったシャル」

シャルルがこうなった説明をすると、後ろでラケルとランスと玩具の取り合いしてるアイちゃんがいた。そしてランス、ラケルの順に投げ飛し、ラケルはダビィと激突した。

「アイちゃんも随分力持ちになったのね」

「この間、うちで野菜の収穫やったからかく?」

「それでも、強くなりすぎですよ」

マナは晴夜達に「今朝からまたイヤイヤ期が始まったみたいなの」と教える。

「アイちゃん、なんか変わったシャル」

シャルルは膨れっ面でガラガラをたたきつけてるアイちゃんを見ながらそう説明する。

「まあ、まだ赤ちゃんだもんね」

「日々、変化成長するのが赤ちゃんですわ」

「しばらく経ったら、いつものアイちゃんに戻るだろう」

だがシャルルはきつと何かあると考え、自分が突き止めようと思える。

(でも、なんでいきなりまたイヤイヤ期に・・・昨日までは、そんな感じはなかった・・・)
晴夜も急にこんなことになるなんておかしいと感じていた。

そして、夜になり。原因を突き止めようとシャルルが夜更かししようとするが、結局寝てしまい、目を開けた頃には朝だった。マナに挨拶されやつてまった顔のシャルルはアイちゃんを気にすると、アイちゃんもまだグツスリ寝ていた。

つついて起こそうとするがやっぱりグズる。

「まさか!」

顔を見合わせる。

その後ジュースも飲みまくって、マナの飲みすぎだよと言う静止も聞く耳も持たずなアイちゃん。マナは本格的に2度目のイヤイヤ期が始まったって感じだと思う。

「今晚こそ・・・」

そして、再び夜へと変わった。シャルルは起きてアイちゃんのイヤイヤ期の原因を探ろうとした。

「我慢シャル、寝ちやダメシャル、ファイトシャル」

そう呟いて寝ないようにするが、数分後にはすっかり寝ってしまう。

その頃。その日の夜、地下室では爆睡して寝ている龍牙に対して、晴夜は父親のデータからまだ開けないデータを開こうとパスワードを入力する。

「ダメだ……残ったデータが開かない。はあく、アイちゃんのこともあるし……」相変わらず、他人のことばかりだな』っ!?!?」

兄の声が聞こえ、後ろを振り返ると周りは白く染まつており、そこは長々と続く階段と境界線のような鏡が置かれていた。

「ここは……?」

晴夜が辺りを見回し、鏡を見るとそこに防護服を着た桐ヶ谷巧がいた。

「兄さん……」

「ここは、僕とお前の記憶の世界……ここで僕とお前の記憶を共有できるんだ」

「記憶……もしかして、俺が4年前の父さんの記憶が曖昧なの、兄さんの仕事……!」

「そんな事より……お前は今、他人の事を考えるより、エボルトを倒すことに専念しろ!」

「わかってる……でも、俺はアイちゃんの優しい笑顔を取り戻したい」

「はあ、本当にお前は……」

巧が呟くと急に周りが光り輝き出した。晴夜が顔を上げると、元の自分の部屋へと戻っていた。

「……今のは、夢か?…あれ?」

パソコンの画面を見ると、開けなかったデータが開いていた。そこには、晴夜も知らない10本のボトルの事が書かれていた。

「人工的に作られたボトル……ロストボトル?」

ロストボトル……父親のデータから出てきたこのボトル。フルボトルは違うこのボトルが何の意味があるのかわからなかった。

その頃、ジコチューグラブのボウリング場。そこには、ボール達に連れてこられたアイちゃんがいた。

「おやちゅー!」

「はーい!」

アイちゃんと言えばマーモがクッキーを出し、アイちゃんが口にする。

「じゅーちゅ」

「はあい!」

イーラがジュースを取り出し、アイちゃんが勢いよく飲む。

「おもちゃ」

アイちゃんに要求すれば二人を玩具を出す。

「ジコチューに好きだけえ」

「食べて飲んで遊んでね」

イーラとマーモの言うとおりに実行するアイちゃん。

「もつと〜!」

「ハイハイ」

要求されると途端にやる気ない返事で準備する。

「どんなワガママを言ってもゼーんぶ自分の言うとおりになるって最高だろ〜?」

「それがジコチューよ。アイちゃんもジコチューになりたいよね」

苦笑いしながらアイちゃんを口説き落とそうとしていた。

アイちゃんはそれに答える様に、嬉しそうに二人の頬を引っ張る。

「楽しいのか〜?」

イーラが聞くと、アイちゃんは頷く。

「よかったわ」

アイちゃんの涎掛けのハートが黒く染まりかけ出した。

「アイちゃんが完全なジコチューになるまで、時間の問題だな」

ベールは心中でそう考え、ニヤつく。

「そうなれば俺は更にパワーアップ。人間界から奪ったジャネジーをも独り占めし、エボルトもキングジコチュー様をも超える力を手に入れば、ジコチュー界のナンバーワンからワンに昇格だっ！」

メロンジュースを飲みながら妄想をし、嬉しさを我慢しきれなり、口にジュース残ったまま大笑いをする。

すると前方からボウリングのピンが飛んできてベールの顔面に直撃する。

「アイちゃんがボウリングしようって」

「ふん！ バカバカしい！」

「きゅびらっば〜！」

癪に障ったのか、涎掛けのハートを光らせて超能力発動し、ベールをレーンに正座させる。

そのまま超能力で飛ばされるボール。慌てて逃げようとして滑ったボールをピンごと撥ねとばす。

ドヤ顔のアイちゃんの後ろでボールが酷い目に遭ってはしゃいでるイーラとマーモ。すると二人もレーンに置かれる。逃げようとするも轢かれるのは当然の結末。

超能力で動くボールとボール達の悲鳴がしばらく暫く続く。それを見て喜んでるアイちゃんの涎掛けのハートはほぼ闇に染まってる。

「今は我慢だ!もう少して俺は……なんばー……わん……」

子供声をバツクに、当然ながら指人形もガツクリと倒れる。

明け方。帰って来るアイちゃんが眠そうに自分のベビーバツクに入ろうとした。

丁度その時、鼻ちようちんが割れたシャルルがアイちゃんが帰ってくるのを目撃した。

そしてその日の夕方、大貝中の昇降口でその事を晴夜達に話した。

「えーアイちゃんが朝帰り!?!?」

それを聞いて驚く六花。頷くマナはシャルルが見たと教える。

「まさか、アイちゃんがそんな」

「見間違えじゃねえか?」

「でも、もし朝帰りなら夜どこに行ってるんだ？」

「確かに最近のアイちゃんはすごくワガママになっちゃって。それと関係してるかも……」

話しながら下駄箱に着き、マナが下駄箱をあけると中から手紙が落ちてきて、それを拾う。

「ら、ら、ら、ら、らぶれちゃー!!?」

「ラブレター!!?」

「どうした? お前まで珍しい……」

六花がうろたえると、晴夜まで反応した。

だが、マナが表を見ると果たし状だった。それを見て二人は『はあく』と安心したのか、

ため息を吐く。

「本当にどうした? お前……」

「え? いや……別になんでもない」

誤魔化すと、晴夜と龍牙も果たし状に書かれた内容を読むと、目を大きくした。

『アイちゃんはあずかった かえして欲しければ 町外れの廃工場まで来い! ベー
ル』

「アイちゃんが浚われた!」

「今すぐ助けに行かないと!」

「でもまた何か企んでいるかもしれないよ」

「俺達を誘う罠かもしれないねえ!」

「例えそうだとしても、アイちゃんは絶対取り戻してみせる!」

マナは手紙を強く握りながら、アイちゃんを取り戻そうと誓う。

「行こう!どっちにしてもアイちゃんが危険だ!」

晴夜達は学校を出て、アイちゃんの元へと急いで向かう。

しばらくし、和也やありす達とも合流し指定された廃工場へと到着した。中には既にベール達三人が背後を向きながらいた。

「アイちゃんはどこ?」

「隠してないでおだしなさい!」

「もし、何かしたなら…」

「ここにいますよ」

子供声で振り向くベール。

彼が抱っこする腕にはサングラスをかけ、灰色衣装の着たアイちゃんがあり、晴夜達

はそれを見て驚く。

「アイちゃん！」

「その格好どうしたの？」

「アイちゃんこつちへ」

亜久里が言うがアイちゃん来る気はなかった。

「やだつて言ってるよ」

「お前らが勝手にそう言ってるだけだろ！」

「違うよ、これはアイちゃんの意味だよお〜」

和也の鼻に指人形をおしつけるイーラ。

「アイちゃんはく、私達と居るほうが楽しいんだよねえ」

そう言つて指人形を振るマーモ。

アイちゃんはそれに対して「ハイ！」と応える。

「アイちゃんは完全なジコチューになつたんだよ」

「そんなの嘘ですわ！」

「ジコチューに好きだけ飲んで」

「ジコチューに好きだけ食べてね」

イーラとマーモがお菓子とジューズを与えると、アイちゃんは両手叩いてごく機嫌な表

情になる。

「そうか! お前らが夜な夜なアイちゃんを連れ出してジコチューに育てていたな!」
晴夜はアイちゃんの急な変わりようはベール達の仕業だと察する。

「正解だよ!」

「でも、今更気付いても遅いよ」

二人が言つてるとアイちゃんがゲップしながらドヤ顔でクッキーを食べてる。

「ダメだよアイちゃん!」

「もうやめて!」

「お腹壊しちゃうよ」

マナ達が叫ぶがアイちゃんは止めようとしなかった。

「ほーら、怖いお姉ちゃんとお兄ちゃん達が怒ってるから、取り上げちゃうね」

ベールはその言葉通りお菓子とジュースを没収させアイちゃんを嫌がらせる。

「いいねえくそのジコチュー」

「きたよきたよくジャネジーが漲ってきたよ!」

と指人形振りながら言うイーラとマーモ。

「アイちゃんは絶対取り戻す!」

「皆、行くよ!」

マナが言うと全員頷く。

「アイちゃん！」

亜久里がアイちゃんを呼ぶがそっぽ向かれる。

「亜久里ちゃんは危ないから下がってて」

晴夜達四人はドライバーとボトルを取り出し、マナ達四人はコミュニケーションとラビーズを取り出した。

『ラビット&ラビット！』

『ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！』

『グレートクローズドラゴン！』

『ロボットゼリー！』

『デンジャー！クロコダイル！』

晴夜達四人がドライバーのレバーを操作し、四人の周囲からそれぞれのビルダーが出現した。

『Are you ready?』

『変身！』

『プリキュア！ラブリンク！』

晴夜達四人の身体にビルダーから形成されたアーマーが装着され、仮面ライダーへ。

マナ達五人は光に包まれ、光から現れるとプリキュアへと姿が変わった。

『オーバーフロー! 紅のスピーディージャンパー! ラビットラビット! ヤベーイ! ハ
エーイ!』

『Wake up CROSS! Get GREAT DRAGON! Yeah
!』

『潰れる! 流れる! 溢れ出る! ロボットイングリス! ブラア!』

『割れる! 食われる! 砕け散る! クロコダイルインローグ! オラア! ヘキヤー!』

『みなぎる愛! キュアハート!』

『英知の光! キュアダイヤモンド!』

『陽だまりポカポカ! キュアロゼッタ!』

『勇気の刃! キュアソード!』

亜久里以外の全員が変身を完了すると、構える。

『幻冬君。君は亜久里ちゃんを守ってあげて!』

『わかりました!』

ハートの指示でローグは亜久里をフォローにするためビルド達から離れた。

ビルド達はアイちゃんを取り戻すためベール達三人に向かっていく。

『プリキュアども、仮面ライダーども!』

「今日がお前達の最期の日よ！」

イーラとマーモが闇の光弾を作り出し、ビルド達に向かって放つ。唸り声と共に廃工場の壁を破壊する。七人が工事から出るとイーラとマーモがすぐさま飛び出てきた。

ハートとビルドはマーモ、ダイヤモンドとクロースはイーラの連撃を防御中。

「こいつら、またパワーが上がってる！」

押されているとロゼッタとグリス加勢に入り、イーラの連撃を防御する。

『ビームモード！』

グリスがツインブレイカーでイーラをロゼッタから離すが、難なくイーラは砲撃を躲した。

「挟み撃ちよ！」

ソードの指示でダイヤモンドとクロースがハートと突撃を仕掛ける。

「何のこれしき！」

両手にバリアを張るマーモ、それによって爆風で弾き飛ばされる四人。

「皆さん！」

「隙あり！」

「危ねえ！」

心配するロゼッタにイーラが光弾を放ちグリスがロゼッタを庇うが巻き込んでしま

い倒れてしまう。

いつにもなく押しつけて笑っているイーラとマーモにボールも勝ちを確信していた。

「アイちゃんにうるさい事を言う、怖いおねーちゃん、おにーちゃん達をおにーちゃん達
がとつちめてくれるよ〜」

アイちゃんの目を伏せながら言うボールに喜んでるアイちゃん。

「はっはっはっ、ざまあねえなあ!何が漲る愛だ!」

「愛なんてものは儂く消える下らないものなのよ」

「愛は・・・くだらなくない!」

「はあ!?」

ハートが叫ぶと立ち上がって、叫び続けた。

「それに、決して無くなったりしない。愛って信じる事だから。あたしがアイちゃんを
信じている限り、愛は無限に溢れてくる」

「うるせえ」

イーラが光弾を放つと、ビルドが前に出てフルボトルバスターを放ち、光弾を相殺し
た。

「晴夜君」

「ハートの言う通りだ。俺達がアイちゃんを信じる限り、俺達の力はいくらでも溢れる

！

ビルドが言うのと亜久里も何か決意し、キリツとした顔になってアイちゃんに叫ぶ。

「アイちゃん、目を覚ますのです。アイちゃん！」

亜久里が呼びかけるとアイちゃんは涙を流して泣き出す。

「アイちゃんが泣けばジャネジーが強くなるわ」

ジャネジーが上がったイーラとマーモがビルドに向かってくる。ビルドもフルポトルバスターを構え、イーラとマーモを迎撃する。

ビルドが応戦していると負のエネルギーは廃工場屋上のタンクの足場を捻じ曲げ、タンクが転落していた。

「「危ない！」「」

ハート達が起き上がり、転落したタンクに向かって急いで走っていく。ビルドも二人を払いのけ、フルポトルを外し数回振ってキャップを回した。

『タンク！』

フルポトルをもう一度差し込み走りながらレバーを操作した。

『タンク&タンク！ビルドアップ！』

『ガタガタゴットン！ズツタンズタン！』

タンクユニットが現れ、イーラとマーモに攻撃し、ビルドの方へと宙へと飛んでいく。

「ビルドアップ!」

ラビットトラビットアーマーがパージされ、タンクタンクのアーマーが装着されタンクタンクフォームにチェンジし、ハート達を受け止める。亜久里はソードとローグが受け止めた。

「ここは私達が!」

「キュアハートと晴夜さんはアイちゃんを!」

「でも・・・」

「任せろ!早く行けえ!」

領いてハートとビルドは去り、もう一度ラビットトラビットへとフォームチェンジする。泣いたアイちゃんを抱いたまま慌てて逃げるボールをハートとビルドが追い掛ける。

「おいで、アイちゃん!」

「アイちゃんを返せ!」

「誰が渡すか!」

「誰が渡すか!」

大泣きの影響か、支えていたタンクに亀裂が入りハートとビルドのところへ倒れてくる。中は空洞だが、閉じ込められることは避けられない。

「アイちゃん!」

ビルドとハートは同時に飛びかかり、アイちゃんを守ろうとした。その瞬間、タンクはビルドのハートの上に落ちた。

「アイちゃん！」

「「キュアハート！」」

「「晴夜（さんん）！」」

ベールは難を逃れたがアイちゃんの姿もなかった。それを見て、アイちゃんもタンクの中にいると察した。

中では割れたサングラスが落ちていた。気を失っていたハート目を覚まし、ビルドも起き上がる。中は外側が暗く、何故か中心は明るい。

起き上がる二人はアイちゃんを見ると、泣きかけたアイちゃんがいた。

「アイちゃん！」

ハートがアイちゃんを見ると、すっかり黒ずんでる涎掛けを見て目を潤ませる。

「アイちゃんごめん。アイちゃんの事、ジコチューになるまで気付けなくて」

「ハート・・・アイちゃん・・・」

ハートは大泣きのアイちゃんを、目を潤ませながらギユツと抱きしめる。

「アイちゃんがあたし達の事、忘れてしまっても信じてるから」

「アイちゃんが笑顔でいるとすっごく幸せな気持ちになれるんだ。

だから・・・思い出してほしい」

二人が呟くと、ハートはアイちゃんにこれまでの事を話し始める。

「ねえ、アイちゃん。前にみんなでかずやんの農園行った事、覚えてるかな？ 頑張る亜久里ちゃんに釣られてアイちゃんもニンジンが大好きになったんだよね。いっぱい食べて大きくなろう」

和也の家の農園で収穫体験した事を語る。

「あの頃のアイちゃん、イヤイヤ期でよく泣いてたよね。あたし、どうしたらいいかわからなくて困ってたんだ。でも、あたしも赤ちゃんの時にママやみんなに支えられて大きくなったんだよね。アイちゃんはどんな女の子になるのかな？

短い間に色々な事が沢山あったよね。あたしがレジーナと離れ離れになって落ち込んでいた時、あたしと晴夜君をアイちゃんが励ましてくれたこと」

レジーナの事で悩んでいた時、アイちゃんはハートとビルドの心を慰めてた事。

「初めてしゅごーいって喋ったり、学校でヒヤヒヤしたりしたこと・・・

六花、あります、まこぴー、龍牙君、かずやん、亜久里ちゃん、幻冬君、シャルル達、それからお兄さん」

みんなとのかけがえのないアイちゃんの思い出をハートが語り続けるとビルドも近

づき、足を曲げてアイちゃんを見る。

「アイちゃん、俺もアイちゃんのおかげで今もビルドとして居られるんだ」

そう言つてドライバーからハザードトリガーを外した。

「俺が初めてハザードトリガーを使った時、俺はトリガーの力に飲まれ自我を失つてレジーナを倒そうとした」

ハザードトリガーをアイちゃんに見せながら初めて使つた時の話をする。

「あの日の事は絶対に忘れてない。あの時はもう戦いたくないって自分でも思ったし、自分を何度も責めた……でも、アイちゃん的笑顔を見て思い出したんだ。

俺は、アイちゃんの様な優しい笑顔を守りたいって、それが戦う覚悟を取り戻せた……だから、ありがとうアイちゃん」

「皆で支えあつて、やつてこれたよね。そして、あたし達と初めて出会つた時の事、覚えてるかな？」

ハートが初めてアイちゃんと出会つた時……同時にアイちゃんのおぼろげな記憶の卵が割れ……ハートとビルドの顔に掛かっていた逆光が晴れる。

「マ……ナ……?せ……い……や」

アイちゃんが目を輝かせ、二人を見る。

「アイちゃん」

「マナー!」

優しい顔でハートを呼び、嬉しそうなアイちゃんは「マナー!」と言いながら抱きつく。

「アイちゃん大好きだよ!」

お互いの顔をスリスリする。

ハートの優しい笑顔を見て、ビルド——晴夜が、何故自分がハートの事を気にかけていたかわかった。

(そうか……俺は……ハートの事が……)

ビルドが心で呟くと二人に近づき、ジーニアスポトルを取り出した。

「よし、行こうか、みんなの所に!」

『グレート! オールイエイ!』

音声が発すると同時にキャップを正面に回し、ビルドドライバーに差し込む。

『ジーニアス!』

『イエイ! イエイ! イエイ! イエイ!』

レバーを回すと、特殊加工設備『プラントライドビルダーGN』が精製された。

『Are you ready?』

音声が流れるとビルドに白いボディースーツが装着し、それと同時にボトルに成分が

注入され、プラントビルダーから射出された60本のボトルが全身に装填される。

『完全無欠のボトルヤロー！ビルドジーニアス！スゲイ！モノスゲイ！』

ジーニアスとなるの同時に閉じ込めていたタンクに光が刺し込まれる。

「きゅぴらっば〜！」

アイちゃんの言葉と共にタンクは完全粉碎され、アイちゃんを抱いたキュアハートと

ジーニアスフォームとなったビルドが現れた。

「「キュアハート！」」

「アイちゃん！」

「「晴夜（さん！）」」

ビルド達が出て来ると同時にイーラ達のジャネジーが弱り始めた。

「力が落ちていく！」

「帰ろつと」

イーラとマーモが逃げようとするするとブラットリングから電流が流れ、二人を逃げられない様にする。

「ブラッドリング最大パワーで行けえ！」

タンクの上でボールが命じると、闇に光るブラッドリングからジャネジーが漲る。

「おおすげえ！」

「こうなりやヤケよ!」

ジヤネジーが上がりイーラとマーモがやる気になった。

「アイちゃん!」

アイちゃんを出迎えると亜久里が叫ぶ。

「プリキュア! ドレスアップ!」

「きゅぴらっば〜!」

亜久里はアイちゃんから召喚されたラブアイズパレットにラブீズをセットし、変身の手順をとると炎に包まれて、姿を変え始める。

そして、炎が消えるとキュアエースとなった。

「愛の切り札! キュアエース!」

「くらえ!」

イーラとマーモは変身したキュアエースに向けて、先ほどの光弾をエースに向けて発射する。

「彩れ! ラブキツスルージュ!」

ルージュを唇に塗り、相手に向かってキスを投げると、前方にハート形のエネルギー体が生成される。

「ときめきなさい! エースショット! ばきゅ〜ん!」

エースが放つのと同時にアイちゃんの光を後ろから浴びたエースショットはイーラとマーモの光弾を圧倒する。

「すごい！」

「これが完全に愛を取り戻した、アイちゃんの力ですわ」

パワーアップしたエースショットはイーラとマーモを喰らい、完全に延びていた。

「ちっ、役立たずどもが！」

指を鳴らし、倒れた二人からブラッドリングを没収、自身の両手人差し指に一つずつ装着された。

すると、風船が膨れるように体を肥大化させるベール。動きがなんとも気持ち悪い。

「スーパー、ベール！」

決めポーズをとり、ビルド達の前に現れた。

「アイちゃんに愛が戻った今、あたし達に恐れるものはない！」

ハートが言うのと全員頷き、ハート達五人は手を上に掲げる。

「「「マジカルラブリーパーット！」」」

ハート達五人がマジカルラブリーパーットを出現させ、キュアラビーズを詰め込みハートを除く四人のマジカルラブリーパーットの中央にそれぞれのシンボルマークを表した。

「「「私達の力をキュアハートの元へ！」」」

四人がエネルギーカードをキュアハートのマジカルラブリーパッドに送る。

四枚のエネルギーカードがハートのマジカルラブリーパッドの画面の上に載り、ハート形を描き、五枚のカードを合わせた強力なエネルギーカードを生成され、

「プリキュア!ラブリーストレートフラッシュユ!」

スーパードラブルに向けてラブリーストレートフラッシュユを放った。

ベールはラブリーストレートフラッシュユに何度も拳を繰り出し、防ごうとした。すると、ベールの前にビルドが現れた。

「お前は俺がビルドする!」

ビルドが叫ぶと、ドライバーのレバーを回した。

『ワンサイド!逆サイド! オールサイド!』

ビルドに装着された60本のボトル全てが光り出し、ビルドとベールの周囲を数式と方式が囲む。

「勝利の法則は、決まった!」

ドライバーから虹色に輝くグラフの放物線が現れ、ベールを拘束した。

『Ready go!』

ビルドが高く飛躍し、放物線を乗るように勢いよくベールに向かってライダーキックを放つ。

『ジーニアスファイニツシュ!』

ラブリーストレートフラツシュが決まった所にジーニアスファイニツシュがベールにボトルのエネルギーを注入していく。

「俺は、ナンバー一に、なる男だあ〜!」

ベールが叫ぶが二つの技が決まり光の中でダメージを受け、爆発し半裸で返つて来る。それと同時にビルドも地面に着地する。

「やばい・・・ジャネジーが・・・」

ジーニアスボトルの影響でベールのジャネジーが急激に落ちていた。彼から落ちたブラッドリングは消滅して、姿を消す。

「覚えてなさい!行くわよ、このポンコツ!」

イーラがベールの肩を貸し、マーモがベールに拳骨すると去っていき、工場も元通りに戻った。

その夜、水路傍を寝ているアイちゃんを抱っこしながら帰路を歩いていた。

「よく寝てるね」

「今日は色々あったもんな」

「アイちゃんの力と晴夜のジーニアスの力があればキングジコチューにも勝てるかも知

れない」

「確かに晴夜さんのジーニアスポトルとアイちゃん的笑顔にはそれだけの力があるかも知れませんか」

「そうですね。そうなればキングジコチューと相對する時が来たのかも知れません」

「そしたら・・・」

「レジーナとも会える」

みんなが話している中、楽しい夢を見ているのかアイちゃんはニツコリと笑っていた。

その頃トランプ王国、キングジコチューの前に呼ばれたベール達三人。

「あああく、ビルドにボコボコにされたみたいだな」

「くうくエボルト、貴様・・・!」

エボルトの言葉に何も言い返す言葉がなく、ベールは拳を強く握りしめる。

「あーあ、わざわざトランプ王国に呼び出されたつてことは・・・」

「またお説教?」

「口を慎め、聞こえるぞ」

ベールが二人に注意する。

「あんた達ってダメね、やっぱりアタシがいないと」

「そ、その声は！」

聞き覚えのある声が聞こえ、トランプ王国の空を見上げると。キングジコチューの上から緑色の闇の空間が出現し、そこから水色の光の球体が現れ、中から無数の赤い光線が飛び出し間もなく砕け散る。

「レジーナ！」

三人が声を揃える。

「レジーナ様！ でしょ？」

キングジコチューによって深い眠りについていたレジーナが、ついに目覚めた。

次回！ Re. ドキドキ&サイエンス！

第46話 再会と槍…変化するボトル

第46話 再会と槍：変化するボトル

滅亡したトランプ王国で目を覚ましたレジーナは、目覚めた後すぐ、王国の部屋を改造し寛いでいた。

「お待たせしました。たこ焼きです」

ボールが出来立てのたこ焼きを持ってきた。レジーナがそれを口にいれるとムツとしはじめる。

「どうかしましたか?」

「タコが入ってる」

たこ焼きにタコが入っているとクレームをつける。

「そりゃあ、たこ焼きなんですから」

「アタシはタコが嫌いだからタコ抜きで作り直して」

レジーナの困った命令を出され、ボールは困り出す。

「諦めなさいよ、この子のジコチューっぷりは今に始まったことじゃないでしょ」

「とは言え、いくらなんでもやりすぎなんじゃないのか? 王女の部屋をここまでリフォームした事?」

「ちよつと悪趣味よね」

イーラが部屋の改造について話すとマーモも同意する。

「無能なあんた達に言われたくないわ。プリキュアと仮面ライダーにやられっぱなしだし、パパを復活するために必要なジャンネジーも全然集まらないし」

レジーナが二人に嫌味な発言をするが、二人は何も言い返せなかった。

「お言葉ですが、レジーナ様が眠っておられる間、プリキュア達は三種の神器の一つ・ラブリーパードの入手し確実にパワーアップしています」

「だったらあんた達も手に入れればいいでしょう。三種って言うから他にもあるんじゃないよ」

レジーナに他の三種の神器を手にしろと言われ、三人が目を合わせる。

「確かに、この王宮の奥深くにアン王女が使っていた、ミラクルドラゴングレイブが眠っております」

ベールはミラクルドラゴングレイブの所在をレジーナに教えた。

「だったら・・・」

「俺達には抜けねえんだよ・・・」

レジーナが何故手にしないのかと言いかけると、ジコチューには抜けないんだよとイーラは呆れ顔で語る。要するに、槍に魔法がかかっているため抜けないらしい。

「あたし達はその魔法を解く為に王女を探してたつて訳。わかった？」

「ええよくわかったわ。あんた達がホントに無能だつて事がね」

「なんだと！（なんですつて！）」

レジーナの嫌味の発言に我慢出来ず、二人が同時に叫ぶ。

「だが、強くなつてるのはプリキュア達だけじゃないぞ」

するとエボルトが部屋の入り口から現れ、壁に背中をつけながら話し出す。

「お前が寝てる間、新たなライダーにローグが現れた。グリスも僅かだが力を上げ、クローズはクローズマグマへとパワーアップした。さらにビルドはハザードトリガーの力を乗り越え、予想外な事にジーニアスフォームへとなりやがった」

「ビルド……」

エボルトがビルドの事を話すとレジーナは顔を強く引き締め、怒りが込み上がっているのが分かる。

「ビルド、あいつはアタシを倒そうした。絶対に許さない！」

以前、ビルドがハザードフォームへと初めてなった時、レジーナを倒そうしたことがあった。そのため、彼女はビルドを恨んでいる。

（レジーナが目覚めた今、俺達に猶予はない。ここは一か八か、あの光の槍に賭けてみるか）

レジーナを見たベールが自身の地位に危機感を感じ、何かを考え始める。
「いい顔だな、そんなお前にプレゼントだ」

エボルトが指を鳴らすと、エボルトの後ろから防護服を着用した人物が現れ、レジーナに膝まずき、なにかを見せた。

「何これ？」

レジーナの目の前に見せられたのは、2本のボトルとエボルトドライバーだった。

「君用に用意した、エボルトドライバーだ」

レジーナはエボルトドライバーに手を伸ばし、ドライバーを掴んだ。

「これで、ビルドを・・・晴夜を！」

そしてエボルトドライバーを握りしめ、自分を倒そうとしたビルドに復讐しようと考え
る。

その頃人間界では、ソリティアに全員集まり外の庭に出ていた。

そんな中、マナが一人でシャドーボクシングをしていた。

「何やってるの？」

「私達、何だか強くなった気がしない？」

「どれどれ?」

「よし、試してやるよ」

「まこぴく!俺も混ぜて!」

真琴と龍牙、和也がやって来て、四人で軽く組み手を始めた。それを見て六花は呆れ顔になる。

「確かにマジカルラブリーパッドの力も使いこなせるようになりましたし、晴夜さんもジーニアスフォームとなりました」

「僕たち自身もかなり強くなりました」

「いよいよキンググジコチューと雌雄を決する時が来たのかもしれない」

ありす達が言うのと四人がお互い殴りを避けながら叫ぶ。

「これでやつとレジーナに会いに」

「トランプ王国を取り戻しに!」

「いける!」

盛り上がる四人がポーズを決める。

「で、どうやっていくつもり」

と六花からツツコミを入れると四人が考え込む。

一方、晴夜はそれとは別の事を考え込む。

(ロストボトル・・・父さんが作った人工的な10本のボトル・・・ここからだ、データが少ない)

それぞれ、五人が考え込むとシャルルがみんなの前で叫ぶ。

「こういう時は作戦会議シャルル！」

シャルルが言うのと妖精達が同意し、皆でお茶でも飲みながら知恵を出し合うことを提案する。そのために全員がソリティアの中に入ると、見覚えのある人影がドアへ歩いてくる。

そしてドアが開いた音が聞こえ、全員がそつちを向く。

「お兄さん！」

「ジョーさん！」

「やあー！」

そこに現れたのは、アン王女をジコチューから隠すため共に姿を消した筈のジョナサン・クロンダイク。こと、ジョー岡田だった。

「どうしたんです!?急に戻って来て！」

「王女様はどうしたの!?？」

「アイちゃんがこつちに戻って来ていたの、知ってましたか？」

皆はいきなり戻ってきたジョーに色々と問い詰め始める。

「まあまあ落ち着いて、話は順番に聞くから」

「その前にご紹介したい方が二人います」

「ありすが言うのと、幻冬と亜久里が前に出てきた。」

「円亜久里と申します」

「柴崎幻冬です」

頭を下げながら、幻冬と亜久里が自己紹介する。

「ジョー、岡田です。初めまして、ミス・キュアエースと仮面ライダーローグ」

ジョー岡田は亜久里の手を取りながら二人に挨拶する。

「知ってたんですか？」

「風の噂でね」

「こちらこそ、あなたの噂はかねがね伺っていますわ。あなたの婚約者、アン王女の事も」

「そう」

ジョーが言うのと亜久里の手を離し、立ちあがる。

「僕が戻ってきた理由は他でもない。その王女の事なんだ」

「続けてアン王女について話すとみんなが顔を合わせる。」

「王女様のこと？」

真琴が聞くとジョーが頷く。

「あれから色々試してみたけれど、王女は一向に目覚める気配が無い。何か方法がないかと調べているうちに、僕は一つの答えに辿り着いたんだ。それは……」

「それは？」

「それは伝説の戦士プリキュアが手にしたと言われる、三種の神器の一つ・ミラクルドラゴングレイブ」

龍牙と真琴が王女が持っていた槍だと思い出す。

「この世のあらゆる物を貫くと言う光の槍。それさえあれば、王女の封印もきつと解ける」

槍があれば王女は目を覚ますとジョーがいう。

「槍の力で……王女様が目覚める！」

なんか分からないが、目が動揺しまくりの真琴。

「待って下さい」

「王女様の槍は今何処にあるのかわからないでランス」

「確か今はトランプ王国の王宮の地下にあるはずだ」

和也が以前亜久里が言った事を思い出し、みんなに言う。

「じゃあ、無理ね。私達にはトランプ王国に行く方法が無いし……」

六花の言う通り、晴夜達では魔法の鏡もない限りトランプ王国に行く手段がない。

「心配ないよ。僕が空間移動で連れて行くよ」

ジョーが指を鳴らして、晴夜達に言う。

「空間移動なんてできたですか？」

今までジョーが空間移動が出来るだなんて知らなかったため、晴夜達は驚いた。

「いや、あ、その、特訓したんだよ特訓！僕だって王女の傍で遊んでた訳じゃないからねえ」

ジョーが誤魔化すと、晴夜達は誰が行くかどうか考える。

「どうします？」

「行くしかないでしょ」

「最初からそのつもりだったしね」

「虎穴にいらさずんば虎児を得ず、ですわ」

ありますが言うと、和也がある事に気づく。

「プリキュア全員が行くなら、俺達はここに残った方が・・・」

エボルトが完全体になった今、万が一の為に仮面ライダーは残るべきと和也が話す。

「俺も連れてほしい」

「晴夜……」

晴夜はいきなり、自分もトランプ王国に連れていてほしいと頼み込む。

「どうしても行きたんだ。トランプ王国に……」

龍牙が晴夜の目を見て何かを感じた。

「しようがねえな、いけよ！」

「俺と龍牙で留守番しとくよ」

「えっ、僕は？」

「お前もトランプ王国に行け、みんなの事を頼むぞ」

ここうして晴夜と幻冬も一緒に行く事になった。すると誰かのお腹が鳴る。

「お腹すいたでランス」

お腹を鳴らしたのはありすの頭上に居るランスのようだ。

「出かける前に腹ごしらえだね。腹が減っては戦は出来ぬ」

「あ、それなら丁度いい物が」

ジョーが言うのと、いきなり大皿に盛った大量のたこ焼きを取り出した。

「なぜたこ焼きなんですか？」

「なんとなく作りすぎてしまつてね」

ジョーが苦笑しながら後頭部をかくと全員がそのたこ焼きに手を伸ばす。

「頂きます」

真琴が遅れてたこ焼きに手を伸ばす。

そのまま全員、たこ焼きを口の中に入れて食べ始める。

「ほくほくの小麦粉の香りの中に紅しようがの辛さとカツオ出汁の風味が……」

亜久里がたこ焼きを評していると何かに気付き、他のみんなもそれに気づいた。意味に気付いてないのはジョーだけだった。

「このタコ焼き……」

「……タコが入ってない!!?」

全員が声を揃えてタコが入ってない事を指摘する。

「あ、えーっと、それは……」

「ニセモノ……」

ランスが呟くとギクツとするジョー。

「タコの入ってないたこ焼きなんて偽物でランス!」

「僕としたことが、入れ忘れてしまったね」

面目無いと思いき、ジョーが後頭部に手を当て苦笑しながら、タコを入れ忘れた事を謝る。

しばらくして、晴夜達はジョーによってトランプ王国へとワープした。

万が一為に龍牙と和也はソリティアへと残った。

「なあ、あのジョーさん……」

「ああ、間違えねえな……さて、俺達は実験を始めようぜ！」

「はあ？」

龍牙が晴夜の決め台詞を言い出した。

「俺達は戦えば戦うほど強くなるんだろ！だったら、あいづら帰ってくるまでにちよつとでも強くなろうぜ！」

「ふん。面白いやるか！」

和也も同意し、龍牙と特訓をはじめようとした。

その頃、晴夜達七人はジョーのおかげでトランプ王国に到着した。

「あつと言う間についてちゃった」

「本当にワープしたんだ」

皆は本当にジョーがワープ出来たことに驚いた。

「(こ)が……トランプ王国」

「皆さんから話を聞いていましたけど……」

亜久里と幻冬の二人が周りをキョロキョロしながら歩く。

「そういえば、亜久里ちゃんと幻冬君ここに来るの初めてだったね」

「はい、聞いてた通り酷いですね。これをキングジコチューが……」

幻冬が言うのと王国からの吹き風が亜久里に当たる。

「でも、何かしら……この頬に当たる風の懐かしい感じ……」

ここに来るの初めての筈なのに、亜久里はトランプ王国に初めて来た感じがしなかった。

「まこぴー、父さんの研究室の場所ってわかる？」

「ええ、確か王宮から離れた所に研究室があった筈だけど」

「そうか……今から行ってみる」

晴夜は槍の場所ではなく、父親の研究室に向かうと言い出す。

「ええ!?でも、一人じゃ危険よ」

トランプ王国はジコチューだらけの為、一人で行動するのは危険だという六花。

「じゃあ、あたしも行くよ」

「大丈夫!すぐに追いつくよ」

「でも、晴夜君はすぐに約束破るから……」

マナは彼がエボルトと消滅しようとした時の事を思い出すと、

「大丈夫!今度はちゃんと約束を守るから」

晴夜が開き直り、今度は約束を守ると笑顔で言う。

「わかった。約束だよ」

「了解！」

マナが許すと晴夜がビルドドライバを装着し、フルフルラビットタンクボトルを差し込んだ。

『ラビット&ラビット！』

『ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！』

「変身！」

ハザードライドビルダーとラビットユニットが出現し、晴夜の体にハザードライドビルダーが重なり、ラビットラビットのアーマーを纏った。

『オーバーフロー！紅のスピーディジャンパー！ラビットラビット！ヤベーイ！ハエーイ！』

ラビットラビットフォームへと変身し、ジャンプしながら父親の研究室へと一人向かっていった。

「晴夜君……」

「さあ、王宮はあっちだ！」

ジョーによる案内のもと、マナ達は王宮へと目指す。

そして別行動をしていた晴夜は父親の研究室へと到着し、ドライバーからボトルを外し変身を解除した。

「……か……」

晴夜は安全のためビルドドライバーを装着したまま、中へと入っていく。

部屋の中は薄暗くなっていたため、ビルドフォンのライトを付けながら中に入り、父親が置かれていたいくつかの資料を読み上げる。

晴夜は父の作った10本のボトル、ロストボトルの手掛かりはないのかと思い、この場所へと訪れたが、残された資料は王国で作った発明と持っている父親のデータにある事ばかり。

「はあく、ダメだここにある資料は全部フルボトルに関することと、ライダーシステムについて……」

やはり、晴夜が求めていた情報はここにもなかった。

『いくら、探しても無駄だよ』

巧の声が晴夜の心から聞こえてきた。

「また、兄さんか……?」

『ロストボトルは、悪魔のボトルだ。ハザードトリガーと同様にな……』

兄の声はそこで途切れてしまった。

「……兄さんは、父さんも信用してないのか？」

晴夜が読んでいた資料を持ち上げると、何枚か纏めていた紙が落ちた。

「あ、やべえ」

晴夜は資料を机に置くと落ちた紙を拾い、表に返す。

「これは、ロストボトルについて！」

ついに、晴夜が探していたロストボトルについての資料を発見し、すぐにロストボトルについて読み上げる。

「これは……でも、父さんは何のためにこんな研究を」

父が作ったロストボトル、それを見て晴夜を目を大きくした。しばらくして晴夜は研究室を出て、マナ達が向かっている槍の場所へと向かう。

一方、ソリティアでみんなの帰りを待っていた龍牙と和也は外で龍牙の案で模擬戦を続けていた。

「うおおおおお！」

「オリヤヤヤヤヤ！」

二人の拳が顔に決まり、お互い変身解除し地面に座り込む。

「どうだ、結構ハザードレベル上がっただろ」

「つたく、荒ぼいやり方だな」

和也が言うとうと、龍牙がポケットからグレードドラゴンエボルボトルを取り出し見つめる。

(あれから、変な記憶は見なくなったな……)

一万年前の記憶が見なくなったと心の中で呟く。

すると、ソリティアの前に四葉家のリムジンが現れた。

「あれは……」

「ありすの所の車……」

リムジンからセバスチャンが慌てて出てきた。

「セバスチャンさん」

「どうしたんすか?」

「お嬢様達は?」

「今、晴夜やマナ達と一緒にトランプ王国ですが?」

「大変です! 町にスマッシュが現れました!」

「!?」

二人が顔を合わせて頷くと、立ち上がってセバスチャンから場所を確認し、直ぐに向

かった。

現場に到着すると、何体ものスマッシュが町で暴れていた。

「おい、ちよつと数が多くねえか」

「マジかよ、晴夜やマナに真琴達がいねえこのタイミングでかよ・・・」

「ああ、中々都合がいいぜ」

フェイズ4のブラックホールフォームへとなったエボルが龍牙と和也の前に現れた。

「エボルト！」

「よう、龍牙にグリス。元気してたか？」

「てめえの仕業か？」

「やつぱり、晴夜達がいねえのを狙ったな」

「ほうく、気付いたか？今頃、トランプ王国では晴夜とキュアハートにとって嬉しい再会

があるかもな？」

「晴夜とマナにとつて嬉しい再会？」

「何言つてやがるんだ！」

龍牙と和也はドライバーを装着し、マグマナックルとロボットスクラッシュゼリーを

取り出した。

『ボトルバーン！クローズマグマ！』

『ロボットゼリー!』

龍牙と和也はナツクルとゼリーをドライバーに差し込むとマグマビルダーとビーカーが出現した。

『Are you ready?』

「変身!!?」

二人が叫ぶと龍牙と和也の体はマグマと黄色の液を覆い、仮面ライダーへと姿を変えた。

『極熱筋肉!クローズマグマ!アーチャチャチャチャチャ ちゃちゃちゃちゃアチャア!』

『潰れる!流れる!溢れ出る!ロボットイングリスイブラー!』

二人が変身完了すると、二人はスマッシュユへと向かっていった。

クローズは得意の格闘技術で、グリスは二つのツインブレイカーを使いスマッシュユに攻撃を続ける。

「オラツ!オラツアアアアア!」

クローズのマグマの炎を纏った拳がスマッシュユを押ししていた。

「力がみなぎる!魂が燃える!俺のマグマがほとばしる!もう誰にも止めらねえ!」
クローズがいつもの決め台詞を叫ぶとドライバーのレバーを回す。

『ボルケツクファイニツシュ!』

クローズの体がマグマを纏い、スマツシュに向けてラツシュを繰り出した。

『ビームモード!』

グリスはツインブレイカーを二つ同時に放ちながらスマツシュを怯ませた。

『アタックモード!』

グリスがモードを変えスマツシュに向かって攻撃を繰り返す。

「速攻! 攻略! 撃破!」

グリスが叫びながらツインブレイカーで攻撃を続けると、スマツシュが反撃に出た。だが、グリスはスマツシュの攻撃に一步も引かなかった。

「足りねえな・・全然足りねえな!」

『スクラップ ファイニツシュ!』

グリスがドライバーのレンチを下ろしヴァリアブルゼリーを勢いよく噴出してライダークックを食らわせる。

二人の技が決まり、スマツシュは全て片付けられ、二人が集まる。

「早速、特訓の成果が出たな!」

「ああ、強えぜ!」

「その程度で強くなったとは、めでたい奴だな。いいだろう俺が相手になってやる」

「上等だ！」

「行くぞ！コラっ！」

二人が気合いを入れエボルに戦いを挑む。

だが、特訓して少し強くなったとしても完全体のエボルの方が二人を何枚も上回っていた。

二人はエボルの強力なスピードとパワーに翻弄されていた。

「やっぱ強え……」

「晴夜の奴、よくこんなのに何度も勝てたな……」

「お前らに面白いものを見せてやる」

エボルがドライバーのレバーを回しだした。

『Ready go!』

『ブラックボール フィニッシュ！』

するとエボルの上空から黒い空間のようなものが出現し、周りのものを空間に向かって吸い込み始める。

「なんだよ……これ……」

「ひ、引き寄せられる……」

ブラックホールのような強力な引力が二人だけでなく、周りにいる人や物をも吸い込

もうとしていた。

「いいぞ、もつと吸い込め！」

エボルが叫ぶとクローズが頭を抑え始める。すると、クローズの頭からまた一万年前の記憶が通り、今エボルがしている事と同じ事をしていて時の記憶が流れる。

「はあ、はあ、はあ．．．壊してやる．．．ぶっ壊してやる！」

クローズが引き寄せられるのを無視して一人、エボルに向かっていた。

「うおおおおお！」

クローズが繰り出した拳が決まると、エボルが作り出したブラックホールが消えた。

「消えた．．．」

グリスはブラックホールが消えた事に驚く。

「はあ、はあ．．．ぶっ壊してやる！」

クローズがさらに拳を繰り出し、エボルに積極的に攻撃を仕掛ける。だがクローズが繰り出した拳がエボルが繰り出していた攻撃と同じように黒く染まっただけで、異様な感じだった。

「まさか、まだこれほど力を持っていたとは．．．」

エボルが眩くと、クローズは地面にエボルから落ちていたドラゴンボトルを握る。

すると急にボトルが光り出し、青色だったドラゴンボトルが銀色へと色を変えた。

「!?？」

「ボトルの色が変わった……」

エボルはドラゴンのフルボトルの色が変わった事に驚く。クローズはそのボトルをナツクルへと差し込む。

『ボトルバーン!』

クローズがナツクルを手に当てると、ナツクルから銀色のエネルギーが収束されていた。

『ボルケニックナツクル!』

銀色のエネルギーを纏ったナツクルがエボルに放たれ、エボルを壁へと吹き飛ばした。

「マジかよ……」

グリスは今まで苦戦していたエボルをこうも簡単に吹き飛ばした事に驚く。

「こいつは、面白い事になったな。今日はこの辺で引いてやる。チャオ〜」

エボルはクローズとグリスの前から去っていった。

その様子を高い位置から見ていたものがいた。

「銀色に光輝くボトル……ハザードレベル7か」

その人物は、クローズのボトルの変化を冷静に推測していた。

場所が変わり、トランプ王国では晴夜と別れたマナ達はしばらくして王宮の前と到着した。そして現在は王宮の地下を進んでいた。

「この地下水道を通っていけば敵に見つからず王宮の真下に行けるよ」

ジョーが指をさし、地下の道を案内を受けながら進み続けた。

「ここは複雑に入り組んでいるから迷ったら危険よ」

真琴が指摘するとアイちゃんがラブリーパッドを取り出す。

「アイちゃん？」

「何をするんだい？」

亜久里の前でラブリーパッドを弄っている。すると、ラブリーパッドに何かが表示された。

「これは・・・」

「ひよつとして、地下水道の地図？」

地下水道の地図が現れて真琴が驚く。

「点滅する光点が光の槍の在り処を示しているんじゃないかな」

六花がラブリーパッドから点滅された所を察する。

「さすがは三種の神器、互いに呼び合っていると言うことか」

ジョーが感心して呟いていると、シャルル達がジョーを睨みつける。

「なにかな？」

「別に？ なんでもないシャル（ケル）」

「そんなことより、先を急ごう」

ジョーが言うのと、みんなはミラクルドラゴングレイブのある場所へと目指す。

そのまま地下道を進み続け、地下の大きな扉を見つけ、その扉を開いた。

「皆さん、あれを！」

声をあげると、そこには地面を突き刺さっていたミラクルドラゴングレイブの姿があった。

「これが、ミラクルドラゴングレイブ!?？」

マナ達が嬉しそうに駆け寄る。

「ええ、間違いない、王女様の槍よ！」

ミラクルドラゴングレイブを見て、王女様の槍と答える真琴。

そこで一人、離れて見ているジョーは…

（これさえ手に入れば、俺はナンバーワンに…さあ、早く抜くんだ…
…へ？）

いきなりとマナ達がかつちを向いて並びだし、こつちを睨んでいる。

「ど、どうしたんだい？ 早く、あの槍を・・・」

「その前に、いい加減正体を現したらどうなの？ ベールさん！」

マナが今のジョーはベールだと指差して叫ぶ。

「・・・何時から気付いた」

「最初におかしいと思ったのは・・・あなたが王女様を王女と呼び捨てにした時よ」

六花もマナに続いて指差す。

「ジョナサンは王女様の事を、愛情を持ってアンと呼ぶわ！」と教える真琴。

「そもそも、空間移動ができるなんて怪しすぎるビィ」

「それにー！」

真琴とダビィが指を指すとシャルルとラケルが前に出る。

「エプロンの色が違うシャル」

「マフラーがベールのまんまだケル」

「と、言う訳で」

亜久里と幻冬も指差すと、ありすが前に出てくる。

「あなたはまさにタコの入っていないたこ焼き」

「偽物でランス〜！」

ランスが締めると、動揺しまくりのジョーが後ろへと下がると、背中に何かの感触を感じ、後ろを振り向いた。

「変装するのなら、もうちよつと工夫しなよ。ベールさん」

背後にいたのは、ホークガトリンガーを握っていた晴夜だった。

「ビルド・・・くうく」

ジョーが晴夜から離れ、煙を出しながら跪いてベールの姿となり、ジョー岡田のツラを落とした。

「・・・そうと知りながら何故ここまでついて来た？」

ベールが質問すると、晴夜は銃を下ろして答える。

「それは勿論、俺は父さんの研究データを手に入れる事とキングジコチューと・・・」

「キングジコチュー様と？」

「話をつけるためよ！」

「は・・・話だと!?？」

キングジコチューと話をつけると聞いて呆れたベールの驚きの声がトランプ王国に響く。

「トランプ王国から手を引いて、ジコチューに変えた人達を元に戻すこと。それと・・・」

「これ以上、レジーナに酷い事しないと誓うてもらおう」

キングジコチューと話す内容を晴夜とマナが語る。

「バ、バツカめ！ お前らごときの話、キングジコチュー様が聞き入れる筈が無いだろう」

ベールはキングジコチューと話を受け入れるのは無理だと言うと六花が前に出る。

「それはどうかしら」

「私達は三種の神器の一つ、マジカルラプリーパッドを手に入れて強くなりました」

「はい！」

亜久里が言うときアイちゃんがラプリーパッドを見せ付ける。

「さらに、今の晴夜さんにはジーニアスポトルという最強のビルドになれる」

幻冬が言うとき晴夜がジーニアスポトルを取り出して見せる。

「そして今、王女様の槍、もう一つの神器も手に入る」

真琴は後ろにある槍を見て言う。

「どれもこれも、あなたがここまで私達を案内してくださったお陰ですわ」

ありすが感謝すると、悔しそうに歯を食いしばるベール。

「と、ゆうわけで・・・」

「」「」「本当にありがとうございました！」「」

マナ達に頭を下げられる。アイちゃんだけワンテンポ遅れる。

それを聞いたベールは、悔しくて地面を叩きまくる。

「まだだ、まだ槍は貴様らの物になったわけではないぞ！ジコチュー！」

と彼が叫ぶと「呼んだー!?」とジコチューが降って来る。

「呼んだ!?」ちゅーちゅー、たこかいなー!」

「みんな、行くよ!」

『グレート! オールイエイ!』

『ジーニアス!』

『デンジャー! クロコダイル!』

マナの指示と共に晴夜と幻冬はボトルを起動させドライバーへと差し込み、マナ達四人はコミュニケーションとラビーズを取り出し、亜久里はラバイズパレットをアイちゃんから出現させた。

「二」プリキュア! ラブリック! 「二」

「プリキュア! ドレスアップ!」

『イエイ! イエイ! イエイ! イエイ!』

二人がレバーを操作し、晴夜の後ろからプラントライドビルダーGNが精製され、幻冬はクロコダイルの顎とビーカーが現れて紫の液体が注ぎ込まれる。

『Are you ready?』

「変身！」

晴夜と幻冬が叫ぶとともにビルドとローグへと変身した。

『完全無欠のボトルヤロー！ビルドジーニアス！スゲーイ！モノスゲーイ！』

『割れる！食われる！砕け散る！クロコダイルインローグ！オラッ！へキヤー！』

マナ達四人は光に包まれ、亜久里はアイちゃんから出現したラブアイズパレットにより炎に包まれと五人が姿を変えた。

「みなぎる愛！キュアハート！」

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

「陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

「勇気の刃！キュアソード！」

「愛の切り札！キュアエース！」

「！！響け！愛の鼓動！ドキドキ！プリキュア！！！！」

「愛をなくした悲しいタコさん！このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻してみせる！」

胸にハートマークを作り、いつもの決め台詞をジコチューに向けて言う。

「タコ殴りにしてやる！」

ジコチューのタコの手がパンチを繰り出す。エースとローグが受け止めてビルド達

の五人がジャンプする。

「ジコチューは俺たちに任せて、光の槍を！」

ビルドがジコチューの片手を掴み投げ飛ばす。

「了解！」

四人が着地すると、槍の方へと向かう。

「お前らが槍を抜いたところを、この俺が横取りだ」

宙に浮かんでいたベールが眩くと、ビルド達に倒されてジコチューがイラついたのかハート達に口からの光線を発射する。

「皆さん！」

「避ける！」

先放たれた光線をこっちに向けて放ち三人はジャンプで避ける。

すると、ベールがジコチューの頭上へと近づきタコジコチューの頭を叩く。

「余計な事を・・・槍を抜くまではあつちには手を出すな！」

ベールが叱るとしよぼーんとなるジコチュー。

その隙にハート達はもう一度槍の元へと近づく。

「よかった、槍は無事だ！」

槍が無事だった事に喜ぶと槍を抜こうとする。

「いいぞお、抜け、抜くんだけあ！」

しかし、ハートが力を入れても槍は全然抜けない。

「力を貸すわ、キュアハート」

「私達も！」

ソードが現ると同時にダイヤモンドとロゼッタが参戦し、一緒に槍を抜こうとする。

「ダメだわ」

「ビクともしない」

だが、プリキュアが四人掛りでやっても槍は抜けなかった。

「どうなってる、プリキュアにも抜けないだと！」

『ワンサイド！』

「!?」

槍が抜けなかった事に驚いていると。音声が聞こえ、ボールが振り向く。

『Ready go!』

『ジーニアス アタック!』

ビルドの有機物サイドのポトルが光り出し、右腕にエネルギーが収束されたライダーパンチが決まり、ジコチューがあっさり倒されていた。

「あー! ジコチュー・・・」

「ホントに無能ね、あなたって」

と聞き覚えのある少女の声に気づいたビルドとハートが振り向くと、そこには宙の上に浮かぶレジーナがいた。

「レジーナ様、どうしてここに!?!?」

「ムカムカする気配がしたから見に来たのよ」

レジーナが答えると上空からエースを見下ろす。

「やっぱり、あなただったのね」

レジーナはエースに敗北した事を思い出し、怒りを感じる。

「忘れてないわよ・・・あなたに受けた屈辱!それと・・・ビルド・・・」

レジーナがエースとビルドを見て、以前やられた事を思い出し、恨みが強くなる。

「レジーナ!」

ハートがいきなりレジーナに抱きつく。レジーナがビックリするとハートと共に落ちていく。落ちて痛がるレジーナの両肩にハートは手を置く。

「レジーナ! やっぱり、レジーナだ! 元気にしてた? ちゃんとご飯食べてる?」

ハートが心配するようにレジーナに言っていると、ビルドが二人に近づく。

「レジーナ・・・あの時のこと・・・」

「迷惑なのよ・・・」

「えっ?」

レジーナが溜息をついて、ハートの右腕を左手で払い立ち上がる。

「あたし、目が覚めたのよ。この世で私を本当に思ってくれるのはパパしか居ない。

あたしにはパパ一人だけなのよ」

そう満足そうな顔で語る。

「そんな事ない!」

「キュアハートと晴夜さんもあなたの事、心から思っていますわ」

「それに、ここに居る皆と人間界にいる龍牙君とかずやんとも」

ハートが立ちあがると、ビルドが膝を折りレジーナを見る。

「レジーナ、俺は謝りたいんだ。あの時の事を。だから・・・もう一度ゆっくり話そう。

そしたらきつと、また分かりあえる」

ビルドがレジーナに手を差し伸べる。

「あーもう、相変わらさうざいうざいうざいうざい!もうイラつくのよ!」

レジーナがビルドから離れると、レジーナは何かを取り出した。

『エボルドライバー!』

「レジーナ!それは・・・エボルトの」

エボルドライバーはエボルトの持つオリジナルしかないはず…

なのに、何故もう一個あるのだと驚く。

『コウモリ！発動機！エボルマツチ！』

レジーナはバットボトルとエンジンボトルを二本差し込み、レバーを操作した。

するとレジーナのドライバーから無数のパイプ線——『ペインランドビルダー』が乱雑に現れた。

『Are you ready?』

「変身！」

レジーナの体にパイプ線が一瞬に集まり、レジーナの姿を変える。

『バットエンジン！フツハハハハハ ハハハハハ！』

「そんな……」

「レジーナが……仮面ライダーに！」

今のレジーナの姿は紫・白・黒の3色がメインカラーで。額のコウモリ状の角や胸・肩より煙突の如く伸びるパイプなど、かつてベールが変身した、ナイトローグを彷彿とさせる意匠が各部に見られる。

「仮面ライダーマッドローグよ」

「レジーナ、そのドライバーを誰が作った……」

「知った所で、あんたが知る必要ないでしょ……」

マッドローグが指先にジャンジェーを溜めるが、ハートは動じることなくニッコリ見ている。

そのままマッドローグのエネルギー塊に飲み込まれるハートとビルド。そして打ち出したエネルギー塊がダイヤモンド達の横を通過していく。

「キュアハート！」

「晴夜さん！」

「大丈夫」

発射し終わったマッドローグが満足そうにしていると一転驚く。

ビルドとハートは手を翳して防いでいたのだ。ビルドは仮面を被っているため表情はわからないが、ハートの顔は優しかった。

「なんで？　なんで平気なの？？」

攻撃を間近で受けて平然としていたことに驚いた。

「強くなったんだよ、あたし達。あなたに話を聞いて貰うために」

「笑わせないでよ！」

マッドローグが叫ぶと、浮遊して先よりも巨大なエネルギーを作りビルドとハートに向けて放つ。

「晴夜さん！ハートさん！」

放たれたエネルギーにより周りを煙が纏った。すると、そこにビルドとハートはいなかった。何処にいるのだと探していると、ビルドとハートはマッドローグの後ろに避けていたことに気づく。

「俺達、やっとここまで来れた。戦って、強くなって、実験して、やっとお前の前に立つことができた！」

ビルドは嬉しそうに語ると、マッドローグは拳を繰り出した。

だが、それをビルドは左手で受け止め、そのままハートはマッドローグになったレジーナを優しく抱きしめる。

「俺達と一緒にいこう！レジーナ」

ビルドと一緒にいこうと言われ、マッドローグは動揺する。

「そしてもう一度、愛を取り戻そう！」

「レジーナ！」

「レジーナ！」

レジーナの目に映るビルドとハート。ロゼッタ、ソードも続いて呼ぶ。

「まずいぞ。槍どころかレジーナまで敵の手に落ちたとあれば、俺の首が危ない」

『ファンキーショット！クロコダイル！』

「エースショット！ばきゅくん！」

声が聞こえ、下を見るとそこにはジーニアスアタックを受けた後、更にファンキーシヨットとエースシヨットをくらって延びているジコチューの姿があった。

「あー！ジコチューまでっ！」

それを見てうろたえるベール。その一方、仮面越しのレジーナの眼にビルドとハートが映っていた。

「うるさい・・・」

マッドローグが一言言うと、ジコチューもジャネジーのオーラを纏い始めた。

「そうやってまた、あたしを苦しめるつもりなんでしょ、愛とか友情だとか、そんなものはまっぴら御免よ！」

ジャネジーが増し、それに反応してジコチューに復活の兆しを見せる。

「レジーナ？」

「あたしはパパと一緒に居る時が一番幸せなの！パパの腕に抱かれていると何も考えずに居られるから」

キングジコチューへの思いを語り出し、さらに続ける。

「だから、あたし達の邪魔を・・・しないでよ！」

マッドローグから衝撃波が走ったと思うと波動が発射される。

「レジーナ！」

ビルドとハートが叫ぶが、二人の声は彼女の声は聞こえていなかった。

「力が漲ってきたー!」

マッドローグに反応して立ち上がったとジコチューが叫ぶ。

「立ち上がった!」

「もう一度、いきますわ! エースショット! ばきゅくん!」

もう一度放つがジコチューはエースショットを粉碎し、飛行して上空から口より上向きに発射した光線を雨の様に散らす。

「うっく…はあ!」

ビルドがハート達の上に巨大なダイヤモンドを出現させ、ジコチューの攻撃からみんなを守る。

「どうなってるの!?」

「ジャンネジーです。レジーナの体から湧き出したジャンネジーがジコチューに力を与えているのです」

「レジーナ! 荒ぶる気持ちに飲み込まれちゃダメだよ!」

「うるさいって言うてるでしょ。プリキュアと仮面ライダーはあたしの敵。パパを苦しめる、敵なのよ!」

ハートに対して、敵と叫ぶレジーナ。

その気持ちに応えたのかジコチューが巨大な光線を発射し、五人はそれをジャンプで避ける。

「まずはジコチューを！」

「わかった！」

『フルボトルバスター！』

ビルドがフルボトルバスターを取り出した。

『フルフルマツチ デース！』

フルボトルバスターにフルフルボトルを差し込み、フルボトルバスターから虹色に輝くエネルギーが形成されていく。

『フルフルマツチ ブレイク！』

ビルドがトリガーを引くと、虹色に輝くエネルギー弾がジコチューに向けて放たれた。

「ジコオーー！」

ジコチューに直撃しジコチューが倒れると、フルボトルバスターを捨て、ビルドはドライブのレバーを回した。

『ワンサイド！逆サイド！ オールサイド！』

ビルドの左右の60本のボトルがすべて光り出した。

「勝利の法則は、決まった！」

ビルドが右手をなぞり上げながら決め台詞を言うと、放物線がマッドローグとジコチューを拘束し、高く飛躍した。

『Ready go!』

「レジーナ・・・お前を俺がビルドする！」

『ジーニアスフィニッシュ!』

後ろのボトルから放たれた虹色のエネルギーが加速となりビルドのライダーキックを放つ。

ビルドのジーニアスフィニッシュはジコチューに直撃し、ジコチュー浄化の煙に巻き込まれ小さい悲鳴をあげるマッドローグもダメージを喰らい、変身解除され地面に降り座りこむ。

エースとローグが変身解除したレジーナを見据える。

「まだ分からないのですか?どんなに拒まれようと、どんなに憎まれようとキュアハートはあなたのことを思い続ける」

「晴夜さんも何度も辛い事があった。それでもあなたに会って謝るまでは何度も立ち上がってきたんです。愛と平和を守る仮面ライダービルドとして！」

エースとローグが言うと、後ろの煙が晴れてビルドとハート達が現れる。

「それが、二人の愛なのだから！」

エースが叫ぶと、レジーナが黙り込む。

「・・・そんなの知らないわよ！」

「その通りだ・・・！」

レジーナが二人の思いは知らないと言えたと、防護服を纏った人物がビルド達に現れた。

「レジーナの言う通り、ライダーシステムはそんな綺麗事なエゴを通すために作られたものではない」

「誰？」

「久しぶりだね。キュアソード、巧・・・いや今のビルドは晴夜か」

「!? どうして、俺の名前を？ まさか・・・」

自分の名前を知っていることに驚くと、その人は防護服を脱ぎ捨てる。

脱いだ姿を見てビルドは驚いた。

「・・・父さん」

「久しぶりだな。晴夜」

白衣を纏い、中にカッターシャツとネクタイを付け、白いズボンを着た男・桐ヶ谷拓人。

その姿はビデオ映像で見た姿と同じだった。それをみてビルドはジーニアスポトルを外し変身解除する。

「父さん！えっ？なんで……」

変身解除して、驚いて何がどうなってるんだかわからず、髪を抑える。

「4年経っても、何か起こったりして取り乱すと髪を抑える癖は変わらないな」

晴夜の癖をよく知っている。晴夜もこれを聞いて本当に自分の父親が目の前にいるんだと信じたくなる。——いや、信じてしまった。

「あれが、晴夜君のお父さん……」

「でも、なぜ今ここに、しかもレジーナさんと一緒に……」

ロゼッタがなぜここにいるのか、そしてレジーナを庇うのかについて質問する。

「なぜ、それは私はキングジコチューとエボルトの仲間だからだよ」

拓人から発せられた言葉を聞いて、驚いて声が出なかった。

「博士、今なんて……」

「キングジコチューの仲間と言ったが？」

拓人がジコチューの仲間だと知り、ローグはある事を察する。

「まさか、エボルトのエボルトドライバーを完全修理して、レジーナにもドライバーを与えたのは……」

「私だ」

「そんな・・・父さん」

拓人が——自分の父がキングジコチューに手を貸している事を話していると、後ろのレジーナが呟いている。

「・・・パパには私しかない。あたしが居なくなったらパパは一人ぼっちになっちゃう」
ミラクルドラゴングレイブの前で俯きながら言うと、ミラクルドラゴングレイブが光りだす。

「槍が！」

「だから、パパはあたしが絶対に守ってみせる！」

と言いながら槍を握るとレジーナは槍を抜こうとする。

すると、プリキュアでも抜けなかった槍をあつさり抜き、光の槍の先端が闇の様に邪悪な紫色に染まる。

「あつ!?」

「槍が！」

先までビクともしなかった槍をレジーナが抜けたことにみんなが驚く。

「プリキュアでも抜けなかったのに、どうしてレジーナが！」

「・・・まさか、槍がレジーナを選んだとも言えるのか」

「プリキュアは。パパの敵。そう！　プリキュアは邪魔なのよ！」

「レジーナ！」

この光景を見て、さすがにシヨックなハート。

だが、晴夜の方も父親が敵と知り、シヨックを隠せずにいた。

「パパの敵は、あたしが全部消してあげる！」

レジーナがミラクルドラゴングレイブを構えると先端にエネルギーが集まっていき、巨大な球体となった。

「消えろ、プリキュア！　仮面ライダー！」

レジーナが槍から溜められたエネルギーが晴夜達に向けて発射された。

ロゼッタが前に出て、ロゼッタリレフクシオンを展開しレジーナの攻撃を防ごうとすると、ハート達四人もロゼッタを支え、共に受け止める。ローグは変身解除した晴夜を庇っていた。

「これが、ミラクルドラゴングレイブの威力！」

「流石は、アン王女が使っていた武器だ」

ベールが驚愕し、拓人が感心していると、晴夜が顔を上げて拓人に向けて叫ぶ。

「父さん！　なんで・・・なんで、エボルトとキングジコチューに手を貸すんだ！」

ジコチュー達に手を貸している理由を聞く。

「理由は簡単だ、私の計画を完成させる。その為に、キングジコチューに手を貸している」

「父さん・・・そんな」

晴夜と拓人が話してる間にロゼッタリフレクションも限界に近くなっていた。

「小賢しいわね。でもいつまで耐えられるかしら」

レジーナの言う通り、もう長くは保たない。

「残念ですが、これ以上はもちません」

「諦めない！ あなたに気持ちが届くまで、あたしは諦めないよ！ レジーナ！」

ハートが叫ぶとラブリーパッドが突然出現、鏡を画面に映している。

「何?！」

「鏡?！」

アイちゃんが上からおりてきた。アイちゃんが手を翳して動かすと曇った鏡が綺麗になつていき、完全に綺麗になつたと同時にそこに街が映る。

「これって大貝町?！」

「あたし達の街が見える!」

すると辺りが光りだす。

そして、晴夜達が消滅すると同時にロゼッタリフレクションが消滅しレジーナの光線

に飲み込まれ、巨大な跡が槍の威力を物語る。

「やつらが消えた！今のもラブリーパッドの力なのか」

「おそろくな。だが、こちらが優先なことに変わらない」

拓人が冷静に語る。

「あーあ、逃げられちゃった。でも、次は絶対に許さないから、覚悟なさいプリキュア、

仮面ライダー！」

レジーナは闇色に輝くミラクルドラゴングレイブを持ちながら笑うのだった。

次回！R.e. ドキドキ&サイエンス！

第47話 プログラムせよ！真琴の新たな歌…決意の時

第47話 プログラムせよ！真琴の新たな歌：決意の時

晴夜達がトランプ王国に行っている間、大貝町でエボルトと戦っていた龍牙と和也だが。

龍牙の急激なパワーアップで二人は難を逃れた。

「おい、大丈夫か？」

「ああ」

和也が駆け寄ると疲れて倒れていた龍牙が起き上がった。

「それより、お前のボトルなんで色が変わったんだ」

「わかんねえ・・・」

龍牙がエボルトから取り返した、銀色へと変わったドラゴンボトルを取り出す。

「あの時、ボトルを握ったら急に変わったんだ。そしたら、行けるってボトルを握って思ってたんだ」

龍牙がボトルを見て話すと、二人の後ろから空間のようなものが現れた。

「なんだよー！」

「また、エボルトか！」

二人が空間の前でドライバーを持って構える。

空間から現れたのはトランプ王国からこっちへ戻ってきた晴夜達だった。

「晴夜!真琴!」

「みんな!」

二人はドライバーを下げ、みんなに近づく。

その後、マナ達からトランプ王国で起こった事を聞いた二人は驚いた。

「レジーナが復活した……」

「三種の神器の一つも奪われたのか……」

「はい……」

「ラプリーパッドのおかげで戻って来れたけど……」

「三種の神器の一つが奪われたのは想定外ですわ」

「そっちはどうしたんです。二人とも傷だらけだし……」

幻冬が二人の擦り傷だらけの姿を見て何があったのか聞く。

「俺たちはエボルトと戦っていた」

「危なかったが龍牙のおかげでみんな助かった」

「あ!晴夜。実は俺のボトル……晴夜?」

龍牙が銀色のボトルを見せようとすると、晴夜はロストボトルの資料を握ってベンチ

に座つて下を向いていた事に気付く。

「今は、そつとしてあげよう」

「無理もないわ。自分のお父さんが敵だったんだから」

・・・やはり、晴夜は自分の父親が敵となった事実を受け入れずにいる様だ。

「それに、何故かレジーナが、わたくし達でも引き抜けなかった光の槍を、いとも簡単に抜いたのです」

亜久里がプリキュアでも抜けなかった槍をレジーナが抜けたことに頭を悩める。

「一刻も早くレジーナを倒し、光の槍を取り戻さなくてはなりません」

「待つてー!」

レジーナを倒すと亜久里が言うが、マナが待つてと叫ぶ。

「あたし、レジーナとは戦わない」

「マナ!」

「レジーナは、きつと悪い心を植え付けられてるだけなんだよ!」

「まだそんな事を!あの時のわたくしのエースショットでも、晴夜さんのジーニアスの力でもレジーナは浄化出来なかつたのです!彼女はやはりキングジコチューの娘、愛無き者と心を通わせる事など・・・!」

亜久里はレジーナとは心を通わせることは出来ないと話す。

「そこだよ。レジーナは、パパが好きって言ってた。心の底からパパの事を信じてた」
(父さんを心の底から信じる・・・)

——レジーナはキングジコチューを、父親を信じてる。

それを聞いて晴夜も感じていた。たぶん、自分も心のどこかで拓人を信じてるいると。

「それって、レジーナにも愛があるって事なんですか？」

「愛があるなら、思いは伝わる。あたしはそう信じてる」

マナのレジーナを信じる心はまだ折れていなかった。

「分かりました・・・この件は一旦保留にしましょう」

亜久里が取り敢えずレジーナの件は保留にすると言うと、晴夜の方を向く。

「晴夜さん、あなたは心を決めなければなりません。父親と戦う覚悟を」

「父さんと戦う・・・」

亜久里が晴夜に父親：拓人と戦う覚悟がいると話す。

「わかってるよ・・・」

「晴夜君・・・」

わかってると言ってるが、本当はそんな覚悟を持ってない事はマナ達は気づいていた。

「それと、このラブリーパッドにはまだわたくし達の知らない力が秘められているよう

です。完璧に使いこなせるように、あなた達も努力して下さい。いいですね？」

そう言つて亜久里はアイちゃんと家に帰った。

「父さん……」

そして晴夜は呟きながら、父親が作り上げたビルドドライバーを握る。

その日の夜、真琴はDBの運転する車の中で、DBと話してた。

「亜久里は、槍を奪われた事で責任を感じていたみたいね」

「何となく分かるわ。今思えば私も変に気ばかり焦つてたから」

「それに比べて、マナの方はまるで気にして無かつたわね」

「それだけレジーナを信じてるって事よ。」

(…そう、マナは以前も今もブレて無い。晴夜も。じゃあ私は…前はレジーナを許せなかつた。でも、今はマナと晴夜の言う事、分かる気がする。私も、レジーナを信じてみたい。そのために、私が出る事って何だろう?)

車の窓の外を向いて心の中で呟いていると、事務所のヨツバミュージックへと到着した。

「おはようございますー！」

「おはよう」

同じ事務所に所属して、以前スマツシユに変えられた森ハルナが、大量の手紙が入った紙袋を真琴に差し出した。

「おはようハルナ。何これ？」

「ファンレター」

その手紙は全てファンレターだった。

「凄いじゃない」

「アンタのよ。ちゃんと読んでるの？」

「もちろん」

「返事は？」

「それは・・・書く時間が無くて」

「ファンを大事にしないで何がアイドルよ。アタシは全部返事を出してるわ」

「凄い・・・」

「まあ、ファンに応えるのは別に手紙だけじゃないけどね」

「えっ？」

「アンタには、歌があるでしょ？新曲待ってる人、多いんじゃないの？」

ハルナの言葉を聞いて、真琴は何かを閃いた。

「ありがとうハルナ！」

真琴は、お礼を言って走り出した。

その夜、自宅のマンションでシャーペンを手元に何かを考えていた。

「ココア、入れたけど飲む？」

DBがココアを入れたカップを真琴に渡す。

「随分熱心ね。何を始めたの？」

「ちよつとね」

「今夜は冷えるわ。夜更かしも程々にね」

「うん」

真琴はそのままシャーペンを握り、紙に何かを書き続ける。

その頃、地下室では晴夜がキーボードを打ち込みながら、何か二つのアイテムを作ろうとしていた。

「何やってんだよ？」

龍牙は晴夜が何を作っているのか聞く。

「エポルトとキングジコチューに対抗するためのアイテムを作る！」

そう答えて、アイテムの製作に集中して取り組んでいた。

完全に、父親の事を忘れているような感じだった。

「博士のことは……どうなんだ？」

龍牙の一言が晴夜の手を止め、黙りこむ。

「……そんな事より、今は強化アイテムが優先だ」

父親の事を忘れようと、再び手を動かし発明へと目を向ける。

(無理しやがって……けど、俺も人のことは言えねえか)

龍牙は今日見たエボルトの記憶……そして、なんであんな急激に力を手にしたのか。

この事を気にしながら、地下室から出て行く。

「父さんと戦う……」

龍牙が居なくなると、晴夜は亜久里に言われた事が頭を過る。

『あなたは心を決めなければなりません。父親と戦う覚悟を』

父親と戦う覚悟、それが晴夜の心を迷わせた。

(迷う必要はない)

巧の声が聞こえ、振り向くと自分の記憶の世界へと入り込む。

「兄さん……」

そこには、一人座っていた巧がいた。

「あの人は俺たちを裏切っていた。違うか？」

「俺は・・・父さんを信じたい。もしかしたら、レジーナと一緒に操られて・・・

『バカか』えっ!?!?」

「忘れたのか、父さんはロストボトルという恐ろしいものを作ったんだ」

「それは・・・」

——ロストボトル、それは人間の人体に入れて生成されるボトル。

つまり、人体実験にも近い事をしてると晴夜は父親の資料を読み上げて知った。

「僕はもう・・・あの人を信じない」

巧が姿を消すと、晴夜は元の自分の椅子に座っていた。

その後、自分の髪を抑えて考え込む。

「・・・父さん、なんで」

今まで憧れであり、父親として尊敬していた拓人がこんな酷い実験をしていた。

そして、エボルトとキンググジコチューに手を貸しているという現実が信じれなかった。

その頃、トランプ王国の改造した部屋でミラクルドラゴングレイブを飾ってソファで寝そべっているレジーナのもとにイーラとマーモが現れる。

「お前それ、光の槍じゃねーか」

「ピンポーン」

「一体どうやって・・・?」

レジーナは上機嫌にミラクルドラゴングレイブを見ている。

「よくやったレジーナ!三種の神器の一つが手に入った今、最早恐れるものは無い!一気に人間界を攻め滅ぼすのだ!」

外からキングジコチューが槍を手に入れたレジーナを褒める。

「まだよパパ、人間は心が強くて厄介なの。だからまずは心を弱らせなきゃ」

「って言われても・・・」

「どーするんだ?」

「そうね、例えば・・・それ」

レジーナはそれと言い、イーラが足元にあつたCDを拾う。

「CD?」

「歌は人間の心に栄養を与えるわ。まずは歌を奪うのよ」

レジーナは歌を奪う作戦を考えようとする。

「なるほどな、ならこつちもいいもの用意してやるよ。なあ、先生!」

エボルトが言うのと後ろから白衣を纏った拓人が現れた。

その拓人の手には黒いプシケケーがあり、隣には二体のクローンスマツシユがいた。拓人はプシケケーに一本のボトルを差し込むとプシケケーは宙に浮かび、二体のスマツシユと合体した。すると、CDがモチーフのスマツシユへと変わった。

だが、普通のスマツシユとクローンスマツシユとは違い、何か異様な様子だった。

「これは・・・」

「ロストスマツシユ・・・スマツシユの最強形態と言ったところだ」

——ロストスマツシユ。拓人は黒く染まったプシケケーの力とクローンスマツシユ、そしてロストボトルを利用して作ったという。

「流石、先生。それで、ビルドを倒すんだろ先生」

エボルトが拍手しながら言うのと拓人は首を縦に振る。

「ふうくん。じゃあ、あんたも付いて来てよ。いいわね」

レジーナが拓人に付いて来てと指名する。

「いいだろう。私もあつちで潰しておかなければならない奴がいる」

拓人はレジーナと共に人間界から歌を奪う作戦を考える。

「あらあら、先生をご指名とは大変だねえ〜」

するとエボルトが拓人とレジーナを見て、そう呟いた。

それから数日経ったある日。大貝第一中学校での、晴夜達の教室で。

「劍崎、劍崎!」

担任の城戸が授業中に眠っている真琴を起こそうとする。

「ま、まこぴー……」

マナと担任の声が聞こえ、ようやく真琴が顔を上げる。

「あ、おはようございます……」

「おはよう、よく眠れたか?」

「おかげさまで『そうか、それよりお前、今日補修な』わかりました」

その後、放課後に居残りされても真琴は居眠りをしていた。

その様子を廊下で晴夜達が見ていた。

「まこぴー、どうしたんだろ?」

「最近ずっとあんな感じだな」

「ラケル」

六花がラケルの耳を引っ張ると、コミュニケーションの姿になった。

「どうするの?」

「その道のプロに聞くのよ」

「その道?」

「どの道だよ?」

「ねえ、晴夜君今日も早く帰っちゃったけど、大丈夫?」

「・・・今は、エポルトに対抗するために発明に取り組んでいる」

「そう・・・(晴夜君、もしかしてお父さんのことを紛らわすために)」

マナが呟くと、ここ数日の間、晴夜も学校が終わるとすぐに一人で帰って行ってしまうことに心配していた。

しばらくして、大貝町の図書館へと場所を変えた。

そこで真琴が一人、一生懸命何かを書きながら考えていた。

「どうやら真琴さんは、お仕事でお悩みの様です」

「ああ、この道かー」

「流石ケル」

図書館の中でマナ達は、ありすから事情を聞く。六花が言ったその道のプロとは、ありすの事だった。

「新曲を製作中らしいのですが・・・あのように、煮詰まってるっしやるようですわ」
製作に煮詰まっている真琴を手差しで言った。

「まこぴー、このかずやんがまこぴーのためになら一肌・・・」

「はいはい、かずやん。スイッチを入れるのは、後でね」

和也が暴走しそうになるのを六花が仲裁する。

「煮詰まってるって言うか、煮崩れてるね」

「使い方違うわよ?」

六花が突っ込むと、龍牙が真琴に近づく。

「真琴!」

「龍牙!みんな!何でここに?」

「水くさいよまこぴー。悩みがあるなら、あたし達に言つてよ」

マナが真琴に水くさいと言うと、図書館の外に出て今回の新曲のことをみんなに話す。

「レジーナのために歌を?」

「うん。心を込めて歌えば、もしかしたら、レジーナに私達の想いが伝わるかもしれない」

真琴がレジーナのために新曲を作っている理由を言う。

「そう思つて、新しい歌を作つてみようと思つただけど・・・上手くまとまらなくて」
新曲が中々出来ないと言つと、マナが口を開く。

「じゃあさ、みんなで考えようよぜ！」

「えっ？」

「だって、レジーナへの想いは、みんな一緒でしょ？」

「そうね」

龍牙がみんなで作ろうと提案すると、マナ達も同意した。

「みんな・・・！」

「私もお手伝いしますわ」

「まこぴー！この俺が心火を燃やす曲を作つてやるぜ！」

みんなも協力すると言つと、DBが物陰で隠れている亜久里と幻冬を見つける。

「あら亜久里、幻冬、何してるのこんな所で？」

「べ、別にただの偶然です・・・」

「亜久里ちゃん・・・」

話をこっそり聞いていた亜久里と幻冬の元にDBが通りがかる。

「それは丁度良かったわ。みんな、亜久里と幻冬も手伝つてくれるそうよ」

「ちよ、ちよつと・・・！」

「いいじゃないですか、みんなで協力しよう」

「それじゃあ、みんなでいい歌作るぞーっ!」

マナが言うのと龍牙達も『おー!』と同意の声を上げる。

「わ、わたくしは別に・・・」

「そう言えば、亜久里と幻冬ってどんな歌が好きなんだ?」

龍牙が二人にどんな歌が好きだと尋ねる。

「僕は、Song Birdが好きです!」

「そ、Song Birdとか・・・」

「二人とも私の歌聞いてくれてるの!」

「クラスで流行ってるだけですわ」

「よく、好きだってみんな言ってたよね!」

「幻冬君!」

亜久里が幻冬に照れながら叫ぶと真琴が二人の手を握る。

「嬉しい!サインあげる!」

「えっ!?まこぴーあたしも!」

「まこぴー!このかずやんも心火を燃やしてお願いします!」

「マナと和也はちゃんと作詞に協力してくれたらね」

「えーっ!??まこびーのケチ!」

「…つて、何で今までサイン貰えなかったんだろ」

マナと和也は真琴からサインがお預けとなったが、マナ達も曲作りに協力してくれる事となり、そのおかげで曲が完成し、曲のタイトルは『こころをこめて』となった。

事務所の社長もこの曲を聞いて認め、新曲発表会も決まったのだった。

そして、数日経つと真琴の新曲発表会当日となった。会場は既にファンの方々が集まっていた。

「良く似合ってるわ、真琴」

「ありがとう」

この日のステージ衣装を着て、鏡を見る。

「届くかな、私の歌?」

自分の歌がレジーナに届くか不安がると、スタッフの許可を貰って先に中に入っていた龍牙が口を開く。

「そのために作った歌だろ!信じようぜ!」

「うん」

龍牙に言われて、真琴は心が楽になる。

「届くといいな、レジーナに」

届くと信じ、真琴は首を振って頷く。

「龍牙、晴夜はどうしたの?」

「ああ、夜遅くまで強化アイテム作ってたからな。

でも、今日のライブには来るって言ってたぜ」

その頃、ライブ会場からまだかなり距離がある大貝町の街中で晴夜達が全速力で走っていた。

「もう!何でこんな日に限って寝坊するのよ!」

「ゴメン!緊張して寝れなくて!」

「何でマナが緊張するケル!」

マナが寝坊したため、出発が遅れてしまったらしい。

「まこぴー!今行くぞー!」

和也もまこぴーグッズを完全装備で会場へと走る。

正直言つて、一緒にいると少し恥ずかしい気分だった。(リツカ談)

そんな中、晴夜は一人浮かない顔をしていた。

「晴夜さん、大丈夫ですか?」

元気がなかつた晴夜に幻冬が声をかける。

「大丈夫だよ。それに、まこぴーの歌を聴けばむしろ元気になるよ！」

晴夜達は走りながら、急いで会場へと向かつていた。

「皆さん、探しましたわ」

「ありす！」

すると晴夜達の前に、ありすがリムジンに乗つて現れた。

「皆さん、乗つて下さいな」

ありすの乗つた車が近くで止まり、晴夜達を乗せて会場へと向かつた。

その頃、真琴の新曲のライブ会場には大勢のファンの方が集まつていた。

「いやあ、凄いですね」

「このイベントが成功すれば、俺の事務所はもっと大きくなるぞ」

そう言うと、ヨツバミュージックの社長のプシユケーが黒く染まり出す。

「いや。それよりもまず、剣崎が頑張つて作ってくれたこの歌を、世界へ送り出すことが

第一だな」

「歌を聞くためにこんなに人間が集まつてるの？」

「やっぱり歌は危険だわ。歌なんて無くなっちゃえばいいのよ」

突如、レジーナが社長の前に現れた。

「あなたを素敵なジコチューにしてあげる!」

レジーナの指から放った光線が、社長のプシケを黒く染めた。

取り出されたプシケがひび割れ、CDジコチューが作り出された。ジコチューが現れた事で、周りの人は逃げ出し、会場は既にパニックに陥っていた。

「会場が!」

「まさか、レジーナが!?」

ダビイからジコチューが現れたと聞いた真琴と龍牙が駆け付ける。

「二人でやるぞ!」

「ええ!」

『ボトルバーン!クローズマグマ!』

『Are you ready?』

「変身!」

「プリキュア!ラブリンク!」

マグマライドビルダーからのヴァリアブルマグマと光に身体が包まれ、二人はクローズマグマ、キュアソードへと姿を変える。

『極熱筋肉!クローズマグマ!アーチャチャチャチャチャ ちゃちゃちゃちゃアチャアチャア』

！』

「勇気の刃！キュアソード！」

クローズとキュアソードは変身完了し、ジコチューの前に現れる。

「このキュアソードが、愛の剣でああなたの野望を断ち切って見せる！」

胸にスピードマークを作って名乗りあげる。

「CD買えよー！」

CDジコチューが腕のディスクを投げ飛ばす。二人はディスクをかわし、走って接近する。

「初回特典付けるからー！」

今度は体のケースが開き、先程より大きいディスクを放つ。

「いるかー！」

クローズとソードはジコチューの攻撃を避ける。

二人はCDジコチューのケースを閉じて後ろを取り、ジコチューの足元を攻撃してバランスを崩す。

「はあっ！」

「たああああああっ！」

そのままダブルキックを放って吹き飛ばした。

「へえー、しばらく見ない間にやるじゃない。クローズにキュアソード」

「レジーナ!」

後ろから拍手が聞こえて振り向くと、レジーナがステージの屋根に座っていた。

「やっぱりこのジコチューは・・・!」

「そうよ、アタシが作ったのよ。ねえ、マナと晴夜は?」

「置いて来た」

「ふーん、せっかく晴夜のために一緒に連れて来たのに」

レジーナが言うと、腰にビルドドライバーを装着し、共に付いてきた晴夜の父親・桐ヶ谷拓人が現れる。

「久しぶりだね。龍牙君」

「博士・・・本当にキングジコチュー達に手を貸しているのか?」

「ああ、私の研究を完成するためにはこれがいいと思つてね」

拓人が言うと、クローズは強く拳を握りしめる。

「・・・だったら、俺がアンタを止める」

「できるかな・・・」

拓人はボトルを取り出し、既に腰に装着したビルドドライバーを差し込む。

『忍者!コミック!』

『Are you ready?』

「変身」

『忍びのエンターテイナー！ニンニンコミック！イエーイ！』

拓人のビルドドライバーからランナーが出現し、拓人の体と重なりニンニンコミックフォームへと変身した。

「上等だ！行くぜえ！」

クローズが拓人が変身したビルドへと向かって行く。

「それじゃ、アタシはあなたと遊んであげる！」

『コウモリ！発動機！エボルマツチ！』

エボルドライバーを装着したレジーナはボトルを2本差し込み、レバーを操作した。するとレジーナのドライバーから無数のパイプ線が現れた。

『Are you ready?』

「変身！」

レジーナの体にパイプ線が一瞬に纏わりつき、マッドローグへと姿を変える。

『バットエンジン！フツハハハハハハハハハハ！』

マッドローグへとなったレジーナはキュアソードに攻撃を仕掛ける。

ミラクルドラゴングレイブを横に振り、エネルギー刃を放つが、ソードは躲した。

「こつちよー!」

だが躲したのもつかの間、今度は後ろから放つて来た。

「それは王女様の槍よ!返しなさい!」

「今はアタシのよ!」

振り回しながら無数のエネルギー弾を放ち、ソードを襲う。

その頃、ビルドとなった拓人がクローズを押ししていた。

『隠れ身の術!』

クローズの周囲が煙を巻かれ混乱しているうちにビルドが四コマ忍法刀でクローズを攻撃し、クローズを倒れこむまで追い詰める。

「どうゆうことだ・・・ただのビルドなのに・・・」

初期型のベストマッチのビルドにここまで追い詰めるとは、クローズも想像してなかった。

「突然だ。ビルドドライバーは私が設計したもの、私こそがベストオブビルドなのだよ」

『海賊!電車!』

ボトルを取り替え、ドライバーのレバーを操作した。

『定刻の反逆者!海賊レッシャー!イエーイ!』

今度は海賊レッシャーへとフォームチェンジし、カイゾクハツシャーを構え、トリ

ガーを引く。

『各駅電車！急行電車！快速電車！……』

海賊電車！発車！』

カイゾクハツシヤアの砲撃がクローズに向かって放たれた。

「ぐわあー！」

カイゾクハツシヤアの攻撃を直撃し、今度はかなりのダメージを負った。

「はあ、はあ、はあ……あつー！」

クローズが立ち上がろうとすると、また一万年前のエボルトがブラックホールを作り出した過去の記憶が頭を過る。

「まただ、何だ、体が……気持ちを抑えられない……うわああああああ！」

立ち上がると、勢いよくクローズは拳を繰り出し、ビルドを殴ると、そのまま何度も拳をぶつける。

「どうなつてんだ……力が抑えられねえ！」

自分でも力が抑えられないと言うと、ビルド（拓）がその理由を語り出す。

「エボルトのせいだよ。この前の戦いでエボルトは自らの力でブラックホールを作った」

力が抑えられない理由をクローズに教える。

「それが君の中のエボルトの遺伝子に反応してるんだよ」

「うるせえ!壊してやる・・・ぶっ壊してやる!」

『タカ!ガトリング!』

クローズが叫んで再び向かってくるのを見て、ビルド(拓)はボトルを取り替える。

『天空の暴れん坊!ホークガトリング!イエーイ!』

今度はホークガトリングへとフォームチェンジし、高く飛び上がり攻撃を躲すとホークガトリングのシリンドラーを回す。

『テン!トウエンティ!サーティ!フォーティ!ファイティ!シックスティ!セブンティ!エイティ!ナインティ!ワンハンドレッド!』

『フルバレット!』

空中でホークガトリングの攻撃を何発もくらいクローズが倒れこみ、変身解除となった。

「あつ!...あゝ...」

「龍牙!」

ソードが叫ぶとマッドローグがミラクルドラゴングレイトを投げ、後ろに跳んでかわすも、後ろが壁だったため後が無くなってしまう。

「チョロチョロと動き回って!」

マッドローグの手からエネルギーが凝縮し、コウモリのマークからエネルギー体を取られると、ソードの両腕を封じて身動きを取らせなくした。

「ッ！しまった！」

「これでもう逃げられないわね」

「止めてレジーナ！私はあなたとは戦いたくない！」

「でもアタシはアンタ達が邪魔なの。ジコチュー！」

マッドローグが指示するとジコチューがソードに攻撃しようとする。

「エースミラーフラッシュ！」

『フルフルマツチ ブレイク！』

ジコチューがソードに襲い掛かろうとするが、タンクタンクフォームになったビルドがフルフルマツチブレイクを放ち、エースがエースミラーフラッシュを放って視界を遮った。

「ソード！龍牙君！」

「今助けますわ！」

「てめえら、よくもまこぴーを！心火を燃やしてぶつ潰す！」

ハート達もソードと龍牙のピンチに駆けつけた。

「みんな！」

二人を助けようとしたその時、ナイフが飛び、エネルギー状の鞭が振るわれた。

「イーラ!」

「マーモさん!」

「悪いわね」

イーラのナイフとマーモの鞭をダイヤモンド達四人の動きを封じる。

その隙に、ハートとビルドはマッドローグとなったレジーナの前に現れる。

「マナ、晴夜、来たのね」

「レジーナ! ソードを離して!」

「何でよ?」

「このステージはレジーナのためのものなんだ!」

ビルドとハートが止めるようレジーナに訴える。

「まこぴーはレジーナに思いを届けたいって、歌を作ったんだ」

「あたし達も手伝って、みんなで作ったんだよ! これは、そのお披露目のためのステージ

だったのに……」

「そんなの知らない。やっちゃえジコチュー!」

ジコチューがハートに襲い掛かるが、エースが迎え撃った。ハートも続いて加わる。

「ハート! エース! ぐわあ!」

ビルドが攻撃仕掛けられた方を向くと、そこにCDがモチーフのスマツシユが現れた。

「スマツシユ……」

スマツシユが無数のCD——『グレアスライサー』をビルドに向けて放つ。ビルドはフルボトルバスターを放ち、撃ち落とし避けながら、スマツシユに向けて放つ。

すると、スマツシユが攻撃を食らうとヨロヨロと起き上がる。

「このスマツシユまさか……変えられたのか!」

スマツシユの動きをみてクローンではなく、人間が変えられたものと察する。

「やっぱり、自我を失ってる……採集するしか……」

フルボトルバスターにフルフルボトルを差し込もうとする。

「そんなことをしたら、そのスマツシユは死ぬぞ」

すると、もう一人のビルド（拓）がビルドの前に現れる。

「その声、父さんか!?」

「ああ」

頷かれるとフルボトルバスターを下ろす。

「父さん、このスマツシユ、まさかロストボトルを……」

「流石に、私が残した資料を見つけたか。その通り、このロストスマツシユはクローンス

マツシユとさらに黒く染まったプシユケーと合体させたスマツシユ。倒せばプシユケーと共に消滅するかもしれない」

それを聞いて、ビルドは驚いて何も声がでなかった。そのままCDロスつまツシユともにビルドに向かってくる。

ビルドは反撃に出ようとするが、どちらも傷つけたくないと思っっているため、攻撃できなかつた。

「どうした、傷つけないため攻撃をしないのか?」

ビルド(拓)に弱みを付け込まれ、ビルドはただ二人の攻撃を防御することしか出来なかつた。

「父さん・・・なんで」

「私の目的は二つ、一つはロスロボトル10本を黒く染め、黒いパネルに装填する」

「黒いパネル・・・」

「そして、物理現象を超えた未知の領域、新世界を作る!」

『ラビット!タンク!』

ビルド(拓)の宣言共にラビットタンクボトルを差し込み、レバーを操作して新たなアーマーを纏う。

『鋼のムーンサルト!ラビットタンク!イエーイ!』

「新世界……」

ビルドが呟くとビルド（拓）はラビットタンクフォームへとなるのと同時にドライバーを操作し、放物線のグラフが現れ、ビルドを拘束した。

『Ready go!』

左足のラビットの脚力を利用し、高くジャンプすると放物線に乗る。

『ボルテック フィニッシュ！イエイー！』

「ぐわあああああ！」

ビルド（拓）のライダーキックがモロに喰らい、ビルドは変身解除してしまう。

「なんだよ、新世界って……？それが俺と兄さんを裏切ってまで手に入れたかったものなのかよ……！」

新世界とは何かと、自分と兄を裏切って手に入れたかったと拓人に問う。

「そうだ。お前はそのためになられたヒーローに過ぎん」

父親にもエボルトと同じように自分は偽りヒーローだと言われ、晴夜は泣きそうになる。

初めてエボルトに言われた時以上に、強く心に響いた。

「何、泣いてんだよ」

するとビルド（拓）の攻撃で倒れていた龍牙が起き上がり、晴夜の前に現れる。

「龍牙……」

「作れた存在……上等だ」

龍牙が言うのと倒れている晴夜を見る。

「お前、前に言つたろ。俺たちの信じたものは幻なんかじゃないつてよ。

だったら、俺たちの力を全部見せようぜ!」

そう言つて晴夜に手を差し伸べる。

「最悪だ。また、お前に助けられちゃうなんて……」

晴夜は龍牙の手を掴み、龍牙のおかげで今一度立ち上がる。二人はそれぞれのボトルを取り出し起動させる。

『グレート!オールイェイ!』

『ボトルバーン!』

「言つとくけど、泣いてないからな」

「そうゆうことにしといてやるよ」

二人はドライバーにボトルを差し込む。

『ジーニアス!』

『クローズマグマ!』

二人の元にプラントライドビルダーGNとマグマライドビルダーが出現した。

『Are you ready?』

「変身！」

二人が叫ぶとともに、60本のボトルが装填され、ビルドはジーニアスに。

ヴァリアブルマグマを頭上からぶちまけ、クローズマグマへと変身する。

『完全無欠のボトルヤロー！ビルドジーニアス！スゲイ！モノスゲイ！』

『極熱筋肉！クローズマグマ！アーチャチャチャチャチャ　チャチャチャチャアチャー

！』

「博士の方は任せろ。お前はスマッシュの方を助ける！」

「わかった」

二人が打ち合わせると、クローズはビルド（拓）を、ビルドはロストスマッシュへと向かっていく。

クローズは拳を繰り出しながら攻撃を続ける。だが、攻撃すればする度にクローズはエボルトの遺伝子が体を暴走しようとする。

「駄目だ・・・力が抑えられない」

「このままだと、君はエボルトの遺伝子に飲み込まれてしまうぞ」

「壊してやる、全部壊してやる！」

クローズの拳が黒く染まり出し、ビルド（拓）に向かっていく。

「龍牙!・・・どうすれば、龍牙とスマツシユに変えた人を助ければいいんだ・・・
考えろ、考えるんだ」

スマツシユの動きを止めながら、ビルドはジーニアスの知識をフル活用をしようする。

その様子を見ていたソードもどうすればいいか考えると、何かを思い付く。

(そうだ・・・今レジーナはすぐそこにいる。だったら、届くかもしれない。)

ううん、それだけじゃない、龍牙の心も・・・届けて見せる!)

「ダビィ、一つ頼んでいい?」

「ビィ?」

一方、ハートはマッドローグが放つ無数のエネルギー弾をかわすが、CDジコチュウが投げつけた握手券の直撃を受ける。

「ハート!」

「さっ、トドメよ!」

その時、スピーカーから音楽が流れ出した。

ステージの方を向くと、変身を解いた真琴がダビィの持つて来たインカムを被り、歌おうとしていた。

「しっかり歌うビィ」

「ありがとう」

ダビィからしっかり歌うよう促された真琴は、『こころをこめて』を歌い始めた。

「真琴さん？」

「何だ？」

「何……この歌……変な感じがする……」

マッドローグの力が弱まると同時にレジーナは変身解除し、元の姿へと戻った。

それと同時に、真琴の両腕を封じていたコウモリ状エネルギー体が消滅した。

「はあ、はあ………ま、真琴……」

更に、真琴の歌が流れ出すと龍牙から先まで荒々しい感じが無くなり出す。

「龍牙！（まこびーの歌に……はっ！?!?）」

何かを思い付き、ジーニアスフォームの知識を絞り出して勝利の法則を導き出すため、ビルドの体が輝く。

「これなら、龍牙もスマッシュも救える！」

救える方法が見つかり、スマッシュを払いのける。

「勝利の法則は決まった！」

決め台詞を言い、ドライバーのレバーを操作する。

『ワンサイド!逆サイド!オールサイド!』

ビルドの60本のボトルが光りだし、右足にエネルギーが収束される。

『Ready go!』

音声が聞こえるとともに、ビルドのキックがスマッシュに向けて放たれる。

『ジーニアス フィニッシュ!』

ビルドのキックが決まり、スマッシュを吹き飛ばすとその先にはビルド(拓)と戦っていたクローズをも巻き込む。巻き込まれ爆発すると、ロストスマッシュは浄化され、プシケも元に戻った。すると、黒く染まったボトルがビルドに向かって飛んできた。

「これが、ロストボトル」

「ロストスマッシュから元のプシケを取り戻すために上城龍牙を犠牲にすると
は……」

ビルドはロストボトルを手握りしめ答える。

「それは、どうか」

ビルドがそう言うのと爆発した所から炎を纏ってクローズが現れた。

「あゝ熱っ!あっつい!晴夜、熱いんですけど!」

「……なぜ、無事だ」

ビルド（拓）はクローズが無事なこと驚く。

「まこぴーの歌さ」

ビルドが何故クローズが無事なのかを答える。

「まこぴーの誰かに届けたいという想いの歌が龍牙の心に強く反応した。それで反応が弱くなったエボルトの遺伝子にジーニアスポトルの力でスマツシユと一緒に浄化し、龍牙の遺伝子をジーニアスとまこぴーの歌で中和させたんだ」

ちなみに、ジーニアスの力で浄化させたロストスマツシユをぶつけたのは、クローズに直接技をぶつけるよりもダメージが小さいと考えたからだという。

「ジーニアスポトルとキュアソードだからなし得た技か」

「真琴！俺はもう大丈夫だ！歌え！お前の何よりもかけがえない歌を！」

（龍牙・・・ありがとう！）

クローズに言われ領くと、真琴は歌を歌い続ける。

「胸が・・・チリチリする・・・何なのよ・・・心がざわつく・・・！」

『「こころをこめて」を聞くレジーナの心が、ざわつき出す。

「アンタ達！あの歌を止めなさい！」

レジーナがイーラとマーモ達に歌を止めるように指示をする。

「させないよ！」

ハートがジコチューを殴って叫ぶ。

「私達の歌を！」

「ちゃんと聞いて下さい！」

更にダイヤモンドとロゼッタが攻撃を行う。

「うるせー！」

「耳障りなのよ！」

「大人しく聞け！」

「邪魔はさせない！」

『スクラップ フィニッシュ！』

『クラックアップ フィニッシュ！』

グリスとローグがドライバーを操作し、同時にライダーパンチを放つ。

「クッソ！」

「このまま邪魔されるなんて嫌よ！」

「そこで大人しくあいつの歌を聞いてろ！かずん達はジコチューを頼む！」

「ええ！みんな！」

四人がジコチューの迎撃に向かう。

「止めて……！止めてよ！」

歌いながら段々と近づくと、真琴をミラクルドラゴングレイブで突こうとするが、真琴は片手でそれを抑えた。

「——昨日よりも もっと眩しい♪その笑顔にまた逢いたいから♪」

段々とプリキュアの姿に変わり、ソードの姿になった所で一番が終わった。そして今度は、二番が歌われる。

「二番あんのかよ!?!」

歌い終わるとレジーナが、胸を抑えて苦しんでいた。

「何でこんなに・・・胸が熱いのよ・・・!」

だがすぐさま立ち上がり、ミラクルドラゴングレイブの先端をソードに向けてエネルギーを溜め出した。

「危険です! お逃げなさい!」

「ううん、あたし、逃げないよ!」

「ハート?」

「だってあたし、レジーナを信じてるから」

「そうね!」

「私も!」

「私もです!」

「俺もだー!」

エースはすぐに逃げる様に指示する。だが、ハート達は逃げないと答えた。

「あなた達……」

「エース、レジーナがどんな子なのかは、僕達よりも皆さんの方が良く知ってるはずだよ」

「うああああああつー!」

レジーナが叫ぶと同時に、強力な光線が放たれた。

「レジーナ!」

ハート達がレジーナの名を呼んだその時、胸のハートマークが光り出し、光線をかき消した。

「宝石のキュアラビーズ!?」

更に宝石が描かれたキュアラビーズが現れた。

「あれは……!」

「新しいラビーズか?」

危険を感じたビルド(拓)はハートとソードに攻撃するため、レバーを操作した。

『Ready go!』

そしてハート達に向かってライダーキックを放とうとした。

だが、ビルドが前に出てハート達を守った。

「晴夜君！」

ビルドはビルド（拓）のライダーキックを片腕で必死に防御する。

「今だ！龍牙！」

「わかった！」

クローズがドライバーのレバーを操作し、ビルド（拓）に向かって走っていく。

「ハート達は今のうちに！」

「わかった！」

ハートがコミュニケーションにそれをセットして円を刻むと、アイちゃんの力によって新たなアイテムのマジカルラブリィハープが現れた。

ハートがマジカルラブリィハープを爪弾くと、五人の背中から翼が生えた。

「この温かい光は……」

「どうなってるの？」

「まさかこれが……」

「ラブリィパッドの、真の力……？」

ラブリィパットの真の力により、ハート達はエンジェルモードへとなった。

「これは……」

ビルド（拓）がハート達がエンジェルモードとなって驚くと、ビルドとクローズはドライバーのレバーを回した。

『Ready go!』

『ジーニアスファイニッシュ!』

『ボルケニック ファイニッシュ!』

二人によって放たれたライダーパンチがライダーキックをしたビルド（拓）を吹き飛ばした。

すると、ビルドの手にはビルド（拓）のドライバーから外れたラビットボトルが手にあり、金色へと姿を変えた。

「これは……」

「まさか……お前もハザードレベル7に!」

金色にラビットボトルが変わると、ハート達はジコチューに決めようとしていた。

「みんな!」

「うん!」

「ええ!」

「プリキュア!ロイヤルラブリーストレートフラッシュ!」

ハートがマジカルラブリーハープの弦を爪弾くと、空中で組み立てた陣形の中央か

ら、ロイヤルラブリーストレートフラッシュを放たれた。

ストレインドウムが命中し、ロイヤルラブリーストレートフラッシュが星屑のように拡散して降り注ぎ、舞い上がる金色の羽根の中でジコチューを浄化した。そしてプシケは持ち主の元に戻った。

その瞬間にビルドは金色に変わったラビットボトルを握りしめ、ビルド（拓）を殴る。金色に纏ったビルドの拳がビルド（拓）を吹き飛ばした。

「晴夜……！」

「俺は、決めた！エボルトを倒し、キングジコチューを説得し、愛と平和の世界を守る！そのため桐ヶ谷拓人……アンタを超える！」

ビルドはエボルトを倒し、キングジコチューを説得するため、桐ヶ谷拓人を超えると宣言する。

「覚えてなさい！プリキュア！仮面ライダー！」

「アイツ、どうしたんだ？」

「さあ？」

「（強くなったな……）いいだろう、見せてみる！」

レジーナが引き上げると同時に、ダイヤによって凍らされ、どうにか氷から抜け出して様子を見ていたイーラとマーモも拓人と一緒に引き上げた。

その後イベントは無事に行われ、大盛況となった。

「ゴメンねマナ、晴夜」

「えっ?」

「どうしたんだよ?」

「私の歌、レジーナに届かなかった」

レジーナに歌が届かなかったと謝る。

「いいえ、真琴の歌を聞いたレジーナは震えていました。少なくとも、わたくしにはそう見えませんでした」

龍牙が真琴のインカムを渡す。

「最高の歌だったぜ!真琴!」

持っていたインカムを真琴に渡すと、真琴は龍牙に抱きつく。

「ありがとう!」

「お、おお・・・!」

その様子を見て、幻冬が二人に尋ねる。

「あの・・・もしかして二人は・・・」

「ベストマッチですか?」

ありすがベストマッチだと言うと、真琴と龍牙が離れる。

「な、何がベストマッチだよ！」

「以外とそうかもよ」

チュツつと龍牙の頬を真琴がキスして、龍牙がその場で停止する。

「・・・えっ？」

「あああ！テメエ一人で何まこぴーから唇貰ってんだよ！心火を燃やしてぶっ飛ばす！」

真琴の唇を奪われた。まこぴーファンの和也が悔しがるように龍牙を叩く。その様子をみんなが笑いながら見ていた。

すると、亜久里がわざと咳き込む。

「レジーナには、確かに愛する心があるのかもしれない」

「そうだよ。きつと、そうに決まってるよ。今のまこぴーと龍牙君のように」

「そうじゃなきゃ、レジーナはきつと何も感じなかっただろうさ」

レジーナは真琴の歌で心を震わせていた、そこに希望を感じて沈む夕日を見る晴夜達であった。

——だが、これからの龍牙と真琴の展開がどうなるのが、楽しみでも有る。

次回! Re・ドキドキ&サイエンス!
第48話 夢を守るため、ゼロ度の約束!

第48話 夢を守るため、ゼロ度の約束！

ある日の地下室。

そこには龍牙と真琴がおり、エボルトの遺伝子の影響が無いか、龍牙の体に機械をつけて調べていた。

「どうだ？」

龍牙は自分の体に異常がないのか晴夜に聞く。

「大丈夫だ。お前の体の遺伝子はしっかり中和している」

「よかった」

何も問題無いと聞いて真琴がホッとすると、龍牙は体に付けられた機械を外す。

「ジーニアスとまこぴーの歌によつて中和されたために、お前の力は更に上がったはずだ」

「マジかよ。よし、これでエボルトに倒してやるぜ！」

エボルトを倒すと意気込む龍牙。

「そういえば、あのロストボトルって何よ？」

真琴が聞くと晴夜は、この前の戦いで黒く染まったロストボトルを取り出す。

「そのボトルって、何だよ?」

「ロストフルボトル。フルボトルとは違って人工的に作られたボトルだ」

晴夜がロストボトルについて話したそうとする。

「俺たちの使っていたボトルは、星のエレメントから生成されたものだと言われてる……だが、ロストボトルは人が手によって作られたボトル……」

「でも、なんで黒く染まっているの?」

「……あくまで、俺の仮説だけど。黒いプシケーを取り込んだ事でボトルが変化したのかもしれない……」

晴夜が話していると真琴が時計を見て立ち上がる。

「龍牙! 時間!」

「えっ!? やべえ! じゃあ、晴夜また後でな!」

真琴と龍牙は地下室を出ていった。一人残った晴夜は黒く染まったロストボトルを見つめる。

「兄さんは、どう思うんだ?」

晴夜は自分の中にいる巧に話しかける。

「俺は……父さんは何かを待っているんだと思うんだ」

すると晴夜は、巧と自分の二人の意識の世界へと移動する。そこで、巧に話しかける。

「父さんは、俺がボトルを握って金色になった時、何か嬉しかったように感じたんだ」
金色になったラビットボトルを見ながら自分の考えを呟く。

「それで、お前は父さんを信じてるのか？」

巧の質問に晴夜は首を縦に振る。

「……お前がそう思うけど、僕は信じない」

やはり、兄：巧は父親を信じないと言う気持ちを曲げるつもりはなかった。

「晴夜……」

自分が呼ぶ声が聞こえた為、晴夜は現実世界に戻り、後ろを振り向くとそこに和也がいた。

「和也どうした？」

深刻な顔をしていた和也が口を開き、要件を話す。

「晴夜……俺に強化アイテムを作ってくれないか？」

和也が強化アイテムを作ってくれと言うと、晴夜がパソコンの方へと体を向ける。しかし和也は話を続けた。

「時間がないのは、わかっている！もうすぐ、キングジコチューやエボルトとの戦いが始まるのはわかっている！けど……今の俺だと、みんなの足を引っ張っている」

今の自分の力が晴夜や龍牙達と比べて弱いと感じていた和也は、晴夜に自身の強化ア

アイテムを作ってくれと頼む。

「だから・・・」

和也が言いかけると、晴夜は龍牙のマグナツクルと同じ形をした水色のナツクルを見せる。

「龍牙と同じナツクル・・・」

晴夜は椅子を回転させ和也の方を向く。

「これは、お前のために作ったものだ。…だが、これを今のお前に渡すか不安だった」

晴夜が立ち上がって和也にナツクルを渡し、氷の様な姿にロボットボトルのマークの他にキヤツスル、クワガタ、フクロウのボトルのマークも描かれている、もう一つのナツクル専用のボトルを渡す。

「このボトルには以前、お前が倒したスマツシュのデータを取り入れてある」

このフルボトルには、和也が自分達と初めて出会って倒したという三体のスマツシュとロボットスクラツシュゼリーのデータを入れていると晴夜が語る。

「だが、今のお前がこれを使ったら、ハザードレベルが人間の限界を超え、体がパンクするかもしれない・・・だから、あくまで武器として使ってくれ!」

晴夜が新しいナツクルの説明をすると、和也はナツクルを強く握る。

「世界を守るためなら、命を懸けて戦うのが仮面ライダーだろ・・・」

俺がどうなろうと・・・」

和也が言いかけると晴夜が和也の腕を強く握る。

「お前に何かあると、俺たちが困る」

真剣な眼差しで和也にそれで変身するなど強く言う。

「心配するなよ・・・」

和也が晴夜の掴んでいた腕を離す。

「こいつは、ビルドドライバーに差すもんだろ。俺、スクラツシユドライバーしかねえよ。」

有り難く武器として使わせて貰うぜ」

和也が晴夜から貰った強化アイテムを持って、地下室を出ていった。

・・・そして、地下室を出ると携帯で誰かに電話しようとする。

「俺です。すみませんけど、頼みがあるんです・・・」

翌日、マナ達は四葉邸の花畑へと集まり、水をやってるありすと花畑を見て歓声をあげている。

「わあ！ 綺麗！」

「ありがとうございます。花達もとっても喜んでますわ」

「ありすって学校でもずつと園芸部だよね」

「花を育てるのが好きなのか？」

「ええ、和也さんに花の育て方を教えてもらったのです。」

幼い頃の夢はお花屋さんになることでした」

「今はどうなんですか？」

「お父様の仕事を継ぐ事になっていきますので、その夢は叶えられなくなりました」

「そっか・・・」

ありすが言うのとマナが何かを閃く。

「あ、だったら、その夢を叶えてあげるよ！」

「叶えるって、どうやって」

晴夜がマナが何をすると聞くと、セバスチャンが現れて和也に近づく。

「和也様・・・これを」

セバスチャンは、和也に何かを渡した。

しばらくして、晴夜達は今日開かれるバザー会場へと赴き、何かのお店を準備する。

「「「できた〜！」」」」

「どう？ ありすのお花屋さん！」

「フリーマーケットでお花屋さんをやるってのもいいアイディアだな」

「幼い頃からの夢が叶ってとつても嬉しいです」

「しつかりね、店長さん！」

「はい！」

「ランスも店長でランス」

「店長が何するか知ってるシャル？」

「知らないでランス」

店長が何かと聞かれたランスは知らないと返答し、妖精達に呆れられる。

「コスモスにゼラニウムにシクラメン・・・」

「もっと華やかな花も揃えた方がいいんじゃないですか？」

「いや、この時期はこの三つの花は最適だ」

「へえ、そうなんだ」

「私も好きですわ。季節の花にはその季節に合った美しさがありますもの」

「コスモスは『謙虚』、ゼラニウムは『真の友情』、シクラメンは『はにかみ』って花言

葉があるんだよ」

「流石、かずやん詳しいな」

とそこに、どこからか「おーっほっほっほー！」と高笑いが聞こえた。

それは聞き覚えのある高笑いだった。

「どこのお猿さんが迷い込んだのかと思ったら、ありすさんのお友達でしたのね」

そこにいたのは、かつて晴夜達がロイヤルクリスタルを集めていた時の手がかりになるバラを手に入れるために参加していたローズレディコンテストで妨害をしていた五星麗奈とその取り巻きだった。

「どなたですの? (なんですか?)」

亜久里と幻冬が誰なのかと聞く。

「四葉財閥より数字が一つ多い、五星財閥の一輪の薔薇。五星麗奈よ!」

彼女は久々の名乗りをして高笑いする。

「あの方とはお知り合いですの?」

「前にロイヤルクリスタルを集めてた時にちよつとね」

晴夜が小声で亜久里に伝える。

「妨害ばかりしてきて、大変だったんだよな?」

「うんうん」

麗奈が過去にやった妨害行為を思い出し六花が頷くと、ありすが笑顔で麗奈に聞く。

「麗奈さんもフリーマーケットに参加するのですか?」

「当然よ!あなたが花屋で人気取りするならソレを叩き潰すのが五星麗奈の役目よ」

ありすを潰すのは自分の役目と宣言する。

「この私が、超巨大ビニールハウスで育てた、豪華絢爛たる四季折々の花々であなたに勝負を挑むわ！」

(流石に・・・やりすぎだろ)

一回転し、巨大なビニールハウスを晴夜達に見せると、晴夜はやりすぎだと感じていた。

「あちらを御覧なさい」

麗奈が指差した先には「麗奈の超高級花セレブ」と言う名の花屋。ハウスの中には向日葵やバラなどが栽培されており、こちらとは違って、高級な花を安価で売っていた。

「麗奈さんと一緒にお花屋さんができるなんて嬉しいですね」

ありすは嬉しいと言うが、麗奈にはそっぽむかれる。

しばらくしてバザーが始まり、ありすの花屋も動き始める。

「お花はいかがですか？」

「どうぞー！」

「見ていってくださいー！」

「季節にあつた花はいいかがですかー！」

客引きをするが誰もが足を止めようとしない。

「よし、任せろ」

龍牙が任せろと言い出す。

「何か、案があるんですか?」

幻冬が聞くと龍牙が前に出て、すうくと息を吸う。

「よってらしつしやい!見てらしやい!最高の花がいっぱいあるよ!」

龍牙が大声で大々的に宣言する。すると、若い男性が一人やってきた。

「お!お兄さん!いらつしやい!」

お客さんが店の前に現れて龍牙は指を鳴らす。

「彼女の誕生日に花を贈りたいんだけど」

「それでしたら、こちらのゼラニウムはいかがでしょうか」

お客さんにゼラニウムの花を勧めるあります。

「お待ちなさい!恋人へのプレゼントなら真っ赤なバラが一番ですわ!」

ゼラニウムを見ていたお客さんにいきなり麗奈が割り込む。

「こちらでは超高級なバラを市価の30分の1で売ってるわ!」

そう言つて麗奈は自分の店のバラを見せる。

「じゃあ、お願いしまーす」

麗奈にお客さんを奪われてしまった。

「またお越し下さい」

ニツコリとするありすと高笑いをする麗奈、麗奈は既に勝負ありつて感じですわねと余裕の態度を見せる。

「あ〜！きたねえ！」

「あんな高価な花を激安で売るなんて！」

「そうよ、ずるい！」

「やり口が卑怯ですわ」

「人のお客さんを無理矢理奪うなんて！」

龍牙達は麗奈達のやり方にご立腹だった。

「さすが麗奈さん。何時見ても本当に綺麗な花達ですわ」

しかしありすは麗奈を怒るところか、麗奈を称えていた。

「随分素直ね。そうよ、さすが私よ！ ほめて、もっとお褒め！」

それから、バザー開始から二時間程経過した。

「「お花はいかがですか」」

「さあ、さあ見てつてよ！」

マナ達は声を上げては客引きを続けるが、ありすの店に誰も足を止める者はいなかった。

「お客さん来ないですね・・・」

「隣があれじゃあね・・・」

「こちらと違って、麗奈の店の方がかなりの大盛況でした。

「まあ、そう言わず頑張ろうよ」

「じっくり待てば、誰か来てくれるだろ」

晴夜達は隣の麗奈の花屋に負けず客引きを続ける。

「どうですか、花見ていかないか?」

「元気なさげに歩いてるサラリーマンに和也が声をかける。

「こんにちは。お花いかがですか?」

「花ねえ・・・」

商品を見て乗り気ではなかったが、ありすを見て癒された様で、ちよつと見てみようかなと思いなおす。

「どうぞ、季節の花達です」

「ありますが言うとかコスモスをじつと見ているサラリーマンは「ほお」と感心する。

「コスモスです。私もこの花を見てると心がふんわりつてなります」

「ありすが言うとかサラリーマンが頷く。

「じゃあ、これをお願いしようかな」

「はい」

「ありがとうございます」

嬉しそうに和也がお礼を言うと、お待たせしましたとありますが持つてくる。

「なんだか元気が出てきたよ、ありがとう」

サラリーマンはありすに感謝して、去つていく。

「ありがとうございます」

「やったね！」

「なんか本物のお花屋さんっぽかったよ！」

「ホントですか？嬉しいですわ」

「お花屋さんつて花と一緒に愛も届けているのかもね」

「あたしもレジーナにそんな花を贈りたいな」

「マナ・・・送ろうぜ、いつかレジーナに・・・」

マナと晴夜はいつか、レジーナにも花を送りたいと話し合うと・・・

「花なんていらなーい」

「レジーナ！」

声が聞こえ上を見ると、レジーナがそこに浮いていた。

「けど、花を見ると笑顔にならないか？？」

「言ったでしょ。許せないのよ、アタシより美しいものは全てね。それと、アンタもね！」

初めて会った時の言葉を言うと、どこかへと移動した。

「チエツ、フリマのせいでラジコン飛ばせないじゃん。あんな花、枯れちゃえばいいに」

ラジコンを飛ばそうと来ていた青年が麗奈の花屋を見て、これでは飛ばせないと思いい、枯れると呟くとプシユケーが黒く染まり出す。

「でも、母の日に花をあげたら、お袋喜んでたな」

だが母の日のことを思い出しながら青年が呟くとプシユケーが染まらなくなる。

「花なんか全部、枯らしちゃえ。あなたを素敵なジコチューにしてあげる！」

すると青年の前に突如現れたレジーナの指から放った光線が、青年のプシユケーを黒く染めた。そして、取り出されたプシユケーがひび割れる。

次の瞬間、ありすが育てた花だけでなく、周りの花が全て枯れてしまった。

「花が……!」

「もしかしてジコチューが!?」

「でも、闇の鼓動は聞こえないシャル!」

「どうなってるんだ？」

闇の鼓動も聞こえなければ、一体何処からジコチューが現れたのか検討もつかない。周りの花が枯れて花を買っていった人々は暗くなっていた。

全てが枯れたかと思われていたが、ありす達は枯れていない咲いたばかりの芽を見つけた。

「私の大切な花達が……！」

一方麗奈は、自分が育てた花が全て枯れてしまい、悲しんでいた。

そこで和也とありすがもう一つの枯れていない、咲いたばかりの芽を見つけ出した。

「麗奈さん、緑の葉が一枚でもあるなら、まだ再生の可能性がありますわ！」

「急げ、応急処置をすればまだ間に合う！」

「ええ……」

和也とありすと麗奈が花の応急処置を始める。

「芽を水で綺麗に洗って——」

「枯れていない根だけを残して、下部の負担を減らす」

「新しい土に植え替えるんだ——」

「水をあげます」

次に新しい土に植え替えて水を上げる。

「後は、再生するのを信じて待つだけです」

後は成長して花が咲くのを待つだけだった。

「ええ。でも……何でなの? いつも意地悪ばかりする私に、何で?」

麗奈はどうしてありすと和也が、意地悪ばかりしている自分の為に花の応急処置をしてくれたのかわからなかった。

「この応急処置の仕方は、麗奈さんが教えてくれた事ですわ」

「それに、お前が花にたつぷりの愛情を注いでいる事をお前が売ってた花を見て分かったんだ」

和也は麗奈が売っていた花を見ていて、麗奈の花に対する思いやりを感じていた。

「私も初めて出会ったその日から知ってました。あの時から、麗奈さんもわたくしの大切なお友達ですわ」

「お友達……?」

「はい」

晴夜達はありませんが今まで麗奈の意地悪に怒らなかつた理由がわかった。それは、ありますが麗奈を自分の友達だと思っていたからだだった。

「な、何をバカな事を……!」

麗奈はそう言うが、友達だと思ってくれていた事が嬉しいあまり、踵を返して泣き出

した。

「何で泣いてるケル？」

「涙はね、嬉しい時にも出るんだよ」

「涙は悲しい時や悔しい時だけとは限らないもんさ。時には嬉しい涙があるんだ」

「お嬢様、花が枯れてしまう理由が分かりました」

近くにセバスチャンが現れる。

「四葉の人工衛星が捉えました。この町の成層圏上の映像です」

タブレット端末を操作すると、成層圏の近くに枯れ木ジコチューが映った映像が出た。

「成層圏か・・・通りで気付かない訳だ」

「このジコチューが花を枯らすジャネジーの種を振り撒いております」

「レジーナ！」

パネルをタッチすると、レジーナの姿が映し出された。

「遠過ぎて、ジコチューの闇の鼓動も届かなかったシャルか・・・！」

「急いで止めに行かないと！」

「ああ！急ごうぜ！」

「そう、上手くいくかな」

声が聞こえ振り向くとフェイザー状態のエボルが現れた。

「エボルト!」

「よう! 晴夜。今日はレジーナの指示でお前らを足止めさせてもらうぜ!」

「今はお前と構ってる暇はない!」

晴夜がそう言うのと、エボルは足下にある枯れた花を見る。

「・・・人間とはわからないもんだな、こんな下らん花なんてものを取り戻そうとするんだからな!」

エボルがそう言いながら枯れた花を踏み付ける。

「!!...てめえ、許さねえ!」

龍牙が前に出ようとする、和也が先に前に出た。

「...ここは、俺に任せろ。お前らはジコチューの方に行け!」

「でも、エボルトに勝つには・・・『エボルトは! 俺の怒りに触れた・・・行けえ!』

・・・わかった」

「和也さん、お願いします」

エボルトは和也に任せ、晴夜達はジコチューの方をなんとかしようとするため、エボルトから離れる。それを確認すると和也はスクラッシュドライバーを装着した。

『ロボットゼリー!』

スクラツシユドライバーにロボットスクラツシユゼリーを差し込み、エボルトを指差しながら叫ぶ。

「変身！」

和也が叫ぶと同時にスクラツシユドライバーのレンチを下ろすと、和也の周囲に巨大なビーカーが出現し、黄色い液体が和也を包む。ビーカーが割れると和也の体には、黄色いスーツとクリアブラツクのアーマーが装着される。

『潰れる！流れる！溢れ出る！ロボットイングリスイブラア！』

グリスへと変身すると、ブリザードナツクルを取り出し、左手に装着する。

「かかって来いや！コラツ！」

ブリザードナツクルを装着したグリスはエボルトに向かっていく。

その頃、晴夜達はジコチューを何とかしようとして話し合っていた。しかし、成層圏にいるため行く手段に悩んでいた。

「一つだけ、手があります！」

ありますが一つだけ手があるという、しばらくし、何やら飛行機に乗り込む。

発射態勢の四葉ジェットである。

『コンデイションノーマル、システムオールグリーン』

「ありすって飛行機の操縦もできるんだ」

「ありす、どうかして私達もいけないの?」

「この飛行機は一人乗りなんです」

優しく答えると飛行機のエンジンが点火し出した。

「いきますー!」

発進した飛行機雲を残し成層圏を抜けようとする。

一方、麗奈はありすが乗ったジェットを地上から鉢を抱いて見送って、何かを決意する。

その頃、エボルと一人で戦っていたグリスはブリザードナツクルを使い、仮面ライダーエボル・フェイズーと互角に戦っていた。

『ボトルキーン!』

ボトルをナツクルに差し込み、手にナツクルのボタン『ロボティックイグナイター』を当ててる。

『グレイシャル ナツクル!』

吹雪に荒れるブリザードのようなエネルギーがナツクルを纏い、攻撃を繰り出しエボルを吹き飛ばした。

「ほうく、まさか、ここまでやるとは……なら、こっちも本気で行く！」
『オーバー・ザ・エボリューション！』

そこそこ強くなったグリスを見たエボルはエボルトリガーを起動させ、ドライバーへと差し込む。

『Are you ready?』

『ブラックホール！ブラックホール！ブラックホール！レボリューション！』

エボルトの完全体、ブラックホールフォームとなった。

フェイズ4のエボルは目でも追いきれない程のスピードでグリスを追い詰める。

「くう！早え……」

エボルは攻撃の手を止めず、グリスをさらに追い詰めようとする。

『ライフルモード！』

スチームブレードをトランススチームガンにセットしてライフルモードにしたエボルは、ラビットエボルボトルを差し込む。そのままラビットの素早いスピードがグリスの周囲を囲み、スチームライフルの攻撃を集中的に受けたグリスは膝をつき、変身解除となる。

「無駄だ。晴夜と龍牙ならまだしも、お前では俺に勝てない」

やはり、今の和也では完全体となったエボルトには歯が立たない。

——そう、今のままでは・・・

だが和也にはある。エボルトに勝てるかもしれない、最後の可能性が・・・
「悪いな晴夜・・・約束破るわ」

和也はスクラツシュドライバーを外し放り投げた。

そして、和也は本来持つてもないはずのビルドドライバーを取り出し、装着する。

——それは、ほんのすこし前の記憶。

和也が農家の手伝いに行く前、彼は四葉邸に訪れていた。

「花の育て方を、教えて欲しい?」

「はい」

そこで和也は、ありすから花の育て方について聞いていた。

「それはいいけどよ……どうしてそんな事聞くんだ?」

「和也さんは確か、農家で野菜の他にも花を育てているそうですよ?」

「ああ……でも、どうして俺なんだ? 聞くなら、他の人でもいいと思うんだけど……」

「それは、わたくしが和也さんに聞くのが一番だと思っただからです」

「そうか……わかった、どんな花が良いんだ?」

「そうですね・・・それじゃあ……」

…そして、ありすと和也は四葉邸の花壇に花を植えながら話し合った。

「・・・私、小さい頃はお花屋さんになりたかったんです。

お花屋さんになって、たくさんの人を笑顔にしたくて……」

「へえー、そうなんだ。・・・今はどうなんだ」

「お父さまの仕事を継ぐ事になってるので……」

「・・・なあ、知ってるか？花って……見ていると心がふんわりとするけど、

時々虚しくなるんだ」

「・・・それって、どんなに綺麗な花でも、いつか枯れてしまうからですか……？」

「ああ・・・じゃあ、どうして虚しいって思うんだ？」

「それは、花には等しく、命が宿ってるからです」

「・・・昔、今まで大切に育ててた花が枯れた時、凄く悲しくなって、どうして花って枯れるんだと思ったんだ。そしたら、じいちゃんが言ったんだ……」

『——どんな花でも、どんな生き物でも、生きてる限り必ず終わりが来るものだ。

じゃがな、和也。終わりがあるからこそ、命あるものは皆、尊いんじや』

『……どうゆうこと?』

『花はいつか枯れる。だが同時に、その花が作り出した種は、いつか新しい花を、新しい命を生み出す。そうやって命のサイクルが繰り返され続けるんじゃない?』

それは、わしらが育てている野菜にも、それを食べているわしらも同じなんじゃよ』
『じゃからな和也、お前も花の様に咲き続ける。そして、生き続けるんじゃない。この花の分までな……』

「……いつか、新しい命を……」

「なあ、あります」

和也の祖父の言葉を反復していたありますは、声が聞こえたため和也のほうを振り向いた。

そして和也は植えた花を、ピンクと黄色のコスモスを撫でながら話した。

「今はまだ、お前の夢を叶えるのは難しいかもしれないねえ。……だが、お前がいつか花屋をやりたいって言うなら、俺はお前の夢を、心火を燃やして応援する!」

「……ええ。その時は、和也さん達と……大切な友達と一緒にやらせて下さい!」

「ああ!!」

ありますは花の様に綺麗な笑顔でそう言うと、和也も顔を『くしゃつ』としながら笑つ

た。

——エボルト。奴は、ありすの夢を——ありすと麗奈の想いを貶した。

俺は、それが許せなかった。

和也は『ノースブリザードフルボトル』を一振りしてボトルのキャップを正面に合わせた後『グリスブリザードナツクル』に差し込む。

『ボトルキーン！』

『今のお前がこれを使ったら、ハザードレベルが人間の限界を超え、体がパンクするかもしない……』

——ああ、わかってる。あの時はああ言ったが、俺だってまだ死ぬ気はねえ……

死んだら、マナや六花、まこぴー、亜久里、龍牙、幻冬……

そして、ありすに顔向けができねえから……

そしてレバーを前に倒して、そのままドライバーに入れた。

『グリスブリザード！』

ドライバーから待機音が鳴ると、和也はドライバーのレバーを回し始めた。

すると、クローズマグマの変身時に出てくる、マグマライドビルダーに似たライドビルダーが出現して冷気が一面に漂い、和也の足を膝上まで凍結させる。

——エボルトを、心火を燃やしてぶっ潰す。

——そして、あいつらの為に、死ぬ気で生き延びる。

(——両方やらなくちゃならないのが、仮面ライダーの辛いところだな……)

『Are you ready?』

「……出来てるよ!」

マグマライドビルダーに似たライドビルダーが、大量の液体窒素のような液体——『ヴァリアブルアイス』をぶちまけ、和也を氷塊状態にした。

そして、後ろから氷塊をナックル状のライドビルダー『アイスライドビルダー』が押し割り、変身が完了した。

『激凍心火! グリスブリザード! ガキガキガキガキーン!』

ボディスーツは金色から黒になっており、アーマーが氷を彷彿させるメタリックブ

ルーとなり、水色の氷を印象づけるような冷気を周囲に纏った 그리스。腕にはロボットアーム『GBZデモリションワン』が装着されていた。

「ほうく、そんなものを用意していたとは……だが、それでも勝てん！」

エボルがスチームブレードを 그리스に向けて振り付け、 그리스の肩に直撃させた。

「な!?？」

だが、 그리스は一步足りとも動かなかつた。

「足りねえな！全然足りねえな！」

그리스は肩に直撃したスチームブレードを掴み、エボルを振り払う。

「心火を燃やして……ぶっ潰す！うおおおおお！」

晴夜が言つてた変身したら危険な姿、 그리스ブリザードとなった 그리스が今、エボルに向かつていく。

一方、成層圏を飛行中のありすの乗った四葉家ジェットは、間もなく目標を示す。

「見えました！」

「ジコチューでランス〜！」

「枯れちやいな〜」

枯れ木ジコチューから地球に向けて何か放たれていた。

「ランスちやん、行きますわよ」

レジーナが枯れ木ジコチューと共に待ち構えていたのを確認し、ありすはコミュニケーションにラビーズをセツトした。

「プリキュア! ラブリンク!」

ありすの身体が光に包まれ、光から現れるとありすはキュアロゼッタへと変身した。

「陽だまりポカポカ! キュアロゼッタ!」

ジエツトより脱出。戦闘機からジコチューの上にロゼッタが降り立つ。

「なーんだ、来たのは黄色いのか」

「レジーナさん! 花を枯らすのは止めて下さい!」

「やーだよーだ」

「人間って、花を見ると元気になるんでしょ? 何故だと思いませんか?」

「はあ? そんなの知らないわよ」

「そこに命があるからです!」

ロゼッタはそう言つて透明な球に入った植木鉢をレジーナに見せる。

「花は枯れ果て、残ったのは小さな葉っぱだけです。でも、それでも必死に生きようとしています! その姿は、花と同じくらい美しいとは思いませんか?」

植木鉢の花を持ちながら花の美しさをレジーナに伝える。

「レジーナさんの中には、美しいものを素直に美しいと感じる心があるハズです！
わたくしはそう信じています！」

「ふーん、だつたら何なの？」

「受け取つて下さい！この愛を！」

カプセルに入った植木鉢をレジーナに渡そうとする。

「愛・・・？」

ロゼッタの花を見て一瞬心が揺れ、レジーナの目の色が赤から青に戻る。

「そんなものゝ！ジコチュー！愛と一緒にアイツらを消しちゃえ！」

だがすぐさま首を横に振り、レジーナの目がまた赤く変わり、ジコチューに命令を出した。

ジコチューは「枯れちゃいな〜」と言いながらロゼッタを攻撃する。驚くロゼッタはジャンプで避ける。

「落ちちゃいな〜！」

ジコチューが指先から発射した種マシンガンを背中に受け、ロゼッタは墜落しかける。

「そんなに愛が好きなら愛と一緒に消えちゃえ！」

そう言うレジーナはエポルドライバーを装着した。

『コウモリ!発動機!エボルマッチ!』

ボトルを2本差し込み、レバーを操作した。するとレジーナのドライバーから無数のパイプ線が現れた。

『Are you ready?』

「変身!」

レジーナの体にパイプ線が一瞬に纏わりつき、マッドローグへと姿を変える。

『バットエンジン!フツハハハハハハハハハハハ!』

マッドローグへと変身したレジーナは、更にドライバーのレバーを回した。

『Ready go!』

高く飛び上がり、背中にコウモリのような翼——『マッドナイトフライヤー』を広げる。

『エボルテックアタック!チャオ!』

マッドローグのライダーキックを受け、ロゼッタは地上へ向け落ちていく。

「レジーナさん、ごめんなさい。私の愛の力が足りませんでした。せめて、このコスモスだけでも…」

申し訳ない顔で言うとその時、光るコスモスの芽を見た。

「……そうです。そこに命がある限り、諦めては……いけません」

キリッとした表情になると、どこからかによって奏でられるハーブの音が聞こえた。するとロゼッタに羽が生え、落下が止まる。

「これは……」

ロゼッタを呼ぶ声が聞こえ、振り向くとそこにはエンジェルモードのハート達四人にクローズマグマとローグが現れた。

「皆さん！ どうやってここにへ？」

ロゼッタがどうやって来たのかと聞くと、後ろを指差すハートの背後から聞き覚えのある高笑いと共に巨大な飛行機が現れた。

「麗奈さん！」

コクピットに寄ると乗っていたのは麗奈だった。

「ありす、いえ、キュアロゼッタ」

とコクピットから呼ぶ麗奈。

驚いた様子でこつちを見るロゼッタに頷くハート、それを見てロゼッタはどう言う事なのか察する。

「この五星麗奈、友の為なら世界の果てまでも飛べますわ。」

しかも、この五星財閥のソーラープレーンなら全員乗ることができてよ！」

「ありがとうございます」

ロゼッタは嬉しそうにお礼を言う。

「お礼を言うのは私の方です。これまで私が意地悪をしていたのはあなたと友達になりたかったから・・・それなのにあなたは既に私を友達と思ってくれていた!」

・・・と、今までになく半泣きかつ優しい口調の麗奈。

「はい、初めて会った時から」

とニッコリとほほ笑むロゼッタを見て、麗奈は思わず泣いてしまう。

「皆さん! 私にはこの程度の事しかできませんが、私の大切な友をよろしくお願いいたします!」

「!」
「!」
「!」

「任せろ!」

「当然です!」

ソーラープレーンから離れ、ロゼッタはハート達に寄ってくる。

その頃、地上ではグリスブリザードが完全体のエボルトと激しい闘いが行われていた。

グリスはドライバーのレバーを一回転させる。

『シングルアイス!』

グリスはロボットアームをエボルに向ける。

『グレイシャルアタック！バリーーン！』

そして巨大化した左腕のアームで捕まえたエボルを壁に叩きつける。

「はあ、はあ・・・くう」

グリスはエボルに技を決めると急に膝を折る、それを見て壁に叩きつけられたエボルが近づく。

「やっぱ、その力に体が耐えられないみたいだな」

グリスブリザードは限界だとエボルが言うが、それでもグリスは立ち上がる。

「まだまだ、てめえを倒すくらい全然問題ねえよ！」

「強がるなよ。もうそろそろ限界のはずだ。それに・・・」

エボルは指を鳴らす。すると、後ろから三体のスマツシユが現れた。

——その三体は、以前グリスが初めて倒したスマツシユ——キャツスルスマツシユ、スタツグスマツシユ、オウルスマツシユだった。

「ロストスマツシユって奴か・・・」

「残念だったな、これで終わりだ」

三体のロストスマツシユがグリスに向かってきて、まさに絶対絶命のピンチだった。すると、長い足がグリスの前に現れ、スマツシユを蹴り飛ばした。

「?!?!」

「馬鹿やろ!無茶しやがって!」

「晴夜!」

間一髪のところではビルドが現れ、グリスのピンチを救った。

「ジコチューは!」

「マナと龍牙達に任せた。お前が気になつてな。セバスチャンさんから聞いたぞ、ビルドドライブをセバスチャンさんに用意して貰つたつてな」

「つたく、心配すんなよ」

グリスがフラフラとバランスを崩し出し、すぐさまビルドが支える。

「これ以上は危険だ!このままだとお前は……」

「俺は、守りたいんだ!」

「えっ?」

ビルドは危険だと言うが、グリスは守りたいものがあると叫ぶ。

「ありすと麗奈が大切にしている花を……それを踏み付けたあいつをぶつ倒す!」

「かずやん……」

「お前と龍牙は想いでハザードレベルを上げてきた。だから俺は、何かを守りたいって想いでハザードレベルを上げる!」

「わかった。なら、俺も付き合うよ。いくぞ、和也！」

「おお！」

ビルドはジーニアスボトルを取り出し、ボトルを起動させる。

『グレート！オールイエー！』

音声が鳴ると同時にキャップを正面に回し、ビルドドライバーに差し込む。

『ジーニアス！』

『イエー！ イエー！ イエー！ イエー！』

レバーを回し、プラントライドビルダーGNが精製された。

『Are you ready?』

音声が流れ、ビルドは白いボディースーツになると同時にボトルに成分が注入され、プラントビルダーから射出された60本のボトルが全身に装填される。

『完全無欠のボトルヤロー！ビルドジーニアス！スゲーイ！モノスゲーイ！』

ジーニアスフォームへとフォームチェンジしたビルドは 그리스 と肩を並べ、エボルとスマッシュへと挑む。

「エボルトは任せろ。お前はスマッシュを頼む」

「了解」

エボルは 그리스 に任せ、ビルドは三体のロストスマッシュを引き受ける。

ビルドに三体のロストスマッシュが攻撃を始めた。フルボトルバスターを使いスマッシュの攻撃を防御する。

「こいつらが、ロストスマッシュなら、ジーニアスボトルで救えるかもしれない!」

スマッシュの攻撃をさばきながら勝利の法則を導き出すためにビルドとスマッシュの周囲から数式が囲まれる。

「いける・・・勝利の法則は、決まった!」

そう言つてビルドはドライバーのレバーを回した。

『Ready go!』

ビルドが右手をなぞり上げながら決め台詞を言うと、放物線がスマッシュを拘束し、高く飛躍した。

『ジーニアスフィニッシュ!』

後ろのボトルから放たれた虹色のエネルギーが加速となり、ビルドのライダーキックを三体のロストスマッシュへ放ち、浄化させた。

「チツ! やられたか!」

「余所見すんな! コラツ!」

グリスのロボットアームの攻撃がエボルに直撃した。

「バカな... ハザードレベルが上がってる。先までフラフラだった奴がなぜ!」

「言つたはずだ。心火を燃やしてぶっ潰すつてな！」

グリスはレバーを回し、音声が鳴る。

『シングルアイス！ツインアイス！』

2回以上レバーを回すと、高く飛躍する。

『Ready go!』

グリスの繰り出すキックに吹き荒れる吹雪を纏う。

『グレイシャルフィニッシュ！バキバキバキバキ！バキーン！』

冷気を纏ったライダーキック。エボルを粉碎する程の勢いを繰り出し、エボルを吹き飛ばした。

「やってくれるじゃねえか〜！」

エボルが眩くと起き上がり始める。

「だが、目的は果たした」

エボルの手には、いつのまにか黒く染まった3本のロストボトルがあった。

「しまった！ロストボトルが！」

「あと2本、もうすぐだ。そうすればお前達は終わる。楽しみだなく、チャオ〜！」

そう言うときエボルはロストボトルを持って去っていった。

（あと2本、もう8本ものボトルが黒く染まっているのか、しかも7本はエボルトの奴ら

の手にあるの……)

ビルドは向こうのロストボトルの数を推測する。

「かずやん大丈夫か?」

「ああ、何とか……」

グリスはそう言うが急に倒れ出し、変身解除してしまう。

「かずやん!大丈夫か!」

ビルドが倒れた和也の体を触る。

「まずい!ハザードレベルが急激の上がったために体が付いていけてなかったんだ!このままだと……」

グリスブリザードの影響により、和也の体が限界を超えたためにかなり危険な状態だった。すぐにビルドジーニアスの天才の知識を活かし和也を救うために数式が周囲を囲む。

(……ダメだ、龍牙の時とは違う。ただ中和するだけじゃあ……中和……はっ!? そうだ、これならいける!)

ビルドは和也を救う手段を思いついた。

その頃、成層圏ではマッドローグとなったレジーナと枯れ木ジコチューを止めようと

していた。

「ちよつとマナゝあたしの話を、聞いてくれる？」

「うん、幾らでも！」

ハートがマッドローグの方へと飛んで行く。

「あたしもレジーナといっぱいお話したいの。きつと、晴夜くんも」

「あたしね、そういう友達ゴツコ・・・一番ムカつくの！」

「えっ・・・？」

枯れ木ジコチューがハートに向けて指から種を連射した。

「ロゼツタリフレクシオン！」

しかし、ロゼツタがロゼツタリフレクシオンで種を防いだ。

「大丈夫ですか？」

「ありがとう！」

それを見て、仮面の奥でレジーナは悔しそうに歯を食いしばる。

「全部、消えちやえ〜！」

マッドローグが二人に向けてミラクルドラゴングレイブから光線を放つ。すると、ク

ローズが前に出た。

『ボトル バーン！』

ナツクルにボトルを取り出しもう一度差し込み、手に当てる。

『ボトルケニツク ナツクル!』

マグマを纏ったナツクルがドラゴングレイブの攻撃をぶつけ掻き消そうとする。

その隙にエースがラブキッスルージュを手にしてマッドローグと戦い競り合う。だがエースの方が押され出し、負けて殴り飛ばされる。

「エース!」

「ありがとうございます」

間一髪のところまでローグがエースを庇った。

だが、今度はジコチューの根を覆っていた岩盤を粉碎しハート達にぶつける。

「やったね!今度は特大の種で地球上の花ゼーンぶと、プリキュアと仮面ライダーをしわくちやにしちやつて〜!」

「任せちゃいな」

ジコチューが用意すると傷だらけの体でロゼッタがラブハートアローを構えようとする。

発射するジコチューに気合の声と共にリフレクションで受け止める。

「無理しちゃって・・・でも、どこまで持つかしら」

「いけません!それ以上パワーを使い続けたら、キュアロゼッタの生命エネルギーまで

もが・・・失われてしまいます！」

「「「えっ?」」」

エースの発言を聞いて全員が驚く。

「私は・・・負けません！」

「バツカみたい！ それじゃ守るだけで何にもできないじゃん」

「それでも構いません」

「はあ〜?」

「花はそこにあるだけで人々を笑顔にします。マナちゃんに晴夜さんや麗奈さん達は私にとつて花と同じ。ならば、私にできることは全力でその花を守り抜くことです！」

「そして、レジーナさんも守るべき花の一つなんです！」

ロゼッタはレジーナも、マナや晴夜達と同じ友達だと思っていた。

「あなたに、コスモスの花言葉を送ります。花言葉は『乙女の純心』、本当のあなたは、純真な心を持っています。そして、その心は愛に溢れています！」

叫ぶと同時にロゼッタリフレクションが広がり、コスモスの芽が育つて花が咲いた。

(まただ・・・胸がチリチリして熱い・・・！)

咲き誇ったコスモスを見て、変身解除したレジーナの胸が熱くなった。

そして種にヒビが入って砕け散り、ジコチューの表情が歪んだ。

「みんな、いくよー!」

ハートの声と共に、クローズとローグの二人はドライバーのレバーを回し、下ろす。

『Ready go!』

「二二プリキュア!ロイヤルラブリーストレートフラッシュユ!二二」

ハートがマジカルラブリーハープの弦を爪弾くと、空中で組み立てた陣形の中央から、ロイヤルラブリーストレートフラッシュを放たれた

『ボルケニック アタック!』

『クラックアップ フィニッシュユ!』

さらに、クローズとローグのライダーキックで追い討ちをかけ、ジコチューは浄化された。

「レジーナさんの心には、やっぱり愛が溢れていました」

「むかつくむかつくむかつく!」

彼女は悔しそうに手足をバタバタさせながら逃げて行った。

地上は元通りになり。ありすと麗奈の店で花を買ったサラリーマンと男性客の花も元通りになり、ラジコン青年のプシケも元に戻った。

それから夕方になり、バザーも無事に終わった。

「う……」

「気がつきましたか？」

「あります……俺はどうして？」

グリスブリザードから強制解除し、倒れた和也が目を覚ました。

「お前の体を中和したんだ」

「えっ？」

晴夜が現れジーニアスポトルとマジカルラブリーパットを見せる。

和也の体は急激なレベルアップにパンク寸前だった。そのため、ジーニアスでも治せるか不安があった。

だが真の力に目覚めたマジカルラブリーパットのエネルギーをプラスし、ジーニアスの中和力をさらに高めた。それより、和也の体をさらに強くさせ、パンクを防いだ。

「話が複雑過ぎてどう突っ込んでいいのかわからねえ……」

「とにかく、今のお前ならブリザードの力を最大限に引き出せるはずだ」

晴夜がこれからも安全にグリスブリザードを使えるという。

——すると麗奈が現れ、バラの花の鉢を二つ持ってきた。

「受け取って。友情の証よ。それとあなたもどうぞ」

「ありがとうございます。わたくしからも」

ありすと麗奈が、コスモスとバラが咲いた植木鉢を交換する。

「良かったシャルね〜!」

「でも、ありすの一番の友達はランスでランス〜」

「お花屋さん、楽しかったね!」

「はい!そして今回、新たな夢を持つ事も出来ました」

「新たな夢?」

新たな夢と聞いて、和也はどういうものなのか気になった。

「はい。これまでは漠然と、人々の笑顔を守りたいと考えていましたが、それには、大いなる愛の力が必要だと分かりました」

「大いなる……」

「愛の力……?」

大いなる愛の力と聞いて、真琴と亜久里が呟く。

「か弱くても、そこにいるだけで人々を笑顔にする花のような存在を、大いなる愛の力で守り抜く。そのためにわたくしは、四葉財閥を、更に大きく育てて行きます」

「お嬢様……!」

セバスチャンがありすの成長に涙を流す。

「ありすならきつと出来るぜ。そういう俺も夢を決めたぜ」

「夢ですか？」

「俺はもつと花を育ててみたいと思う。今日のありすと麗奈のようにな」

バラの咲いた植木鉢を持ちながら、和也が自分の夢を話す。

「私も手伝わせて下さい、和也さんの夢を」

「ありがとう」

「あたしもいつか、愛の力でレジーナを」

「俺も、必ず父さんを超えてみせる」

「はい。私も全力でお手伝いさせていただきますわ」

まぶしいくらい笑顔になったありすは、新たな夢への第一歩を踏み出し。和也も新たな力——グリスブリザードの力をものにした。

次回！Re. ドキドキ&サイエンス！

第49話 祝おう！プライムで特別な誕生日

第49話 祝おう!プライムで特別な誕生日

——そこでは、キングジコチューと対峙してるアンジュ王女が見える。

「どうして、人々の笑顔が溢れるこの国を・・・どうして滅ぼそうとするのです!」

「それは・・・お前が一番よく知ってるはずだ。マリー・アンジュ!」

キングジコチューに返された言葉に驚く。

「この世に永遠の愛など存在しない。いずれ輝きは消えて灰の様に崩れ去る!」

「そんなことない!」

「アンジューーーーー!」

ジャンプするアン王女は、気合のかけ声と共にミラクルドラゴングレイブを突き出し、キングジコチューと衝突する。

その夜、亜久里はキングジコチューとマリー・アンジュが戦う夢を見て、目を覚ました。

(どうしてこんな夢を見るの・・・?どうしてこんな悲しい気持ちで目覚めなければなら
ないの・・・?)

翌日、ぶたのしっぽ亭でみんなが集まっていた。

「しし座のあなた。大切な友達とケンカをしましてしまいそう。一緒にスイーツを食べると、

一気に二人の距離が縮まるかも。ラッキーアイテムはクマのぬいぐるみ。だって！」
マナ達は占いの本を見て運勢を話してた。

「ランス、出番だよ」

「ランスはぬいぐるみじゃないランス〜」

「何をしているんですか？」

「星占いよ」

六花が英語の暗記カードを見ながら亜久里に伝える。

「誕生日を十二の星座に当てはめて、その人の運勢や愛称を占うのです」

「あたしは8月4日生まれだからしし座。まこぴーは11月4日、龍牙君は10月30日で生まれのさそり座」

「ありすはふたご座で、和也はかに座、六花はおとめ座シャル」

「晴夜は何座ケル？」

「俺は9月8日生まれだから、おとめ座だよ」

晴夜が自分の星座をみんなに教える。

「六花は興味無いシヤル?」

「そもそも同じ誕生日の人は、世の中にごまんといるわけで、その人が全員同じ運命を辿るのかと言うと——あれ? トランプ王国にも星占いつてあるの?」

「あるわよ」

「王女様は星占いが好きだったビィ」

「そういえば、よく王女様は俺たちに星占いしてくれたよな」

アン王女も占いが好きだったと言うと玄関を開く音が聞こえた。

「ただいまー」

「おかえりなさいーい!」

あゆみが帰って来ると同時に、妖精達は慌ててテーブルの下に隠れた。

「随分楽しそうね」

「ええ。星座の話で盛り上がっていた所なんです」

星座の話で盛り上がっていたと晴夜が伝えると、マナがある事に気づく。

「あつ! 亜久里ちゃんと幻冬君は何座?」

「12月22日のいて座です。あ、亜久里ちゃんは?」

「分かりません」

「えっ?」

亜久里は自分の誕生日がわからないと答える。

「調べてあげる。誕生日はいつ?」

「ですから知らないのです」

「誕生日を知らない? 本当なの?」

「はい、誕生日にはバースデーケーキを食べてお祝いするのですが、わたくしは食べた事がありません」

「マジかよ、自分の誕生日知らないって」

「でもいいのです。誰かの誕生日に御呼ばれして、その幻のバースデーケーキを味わう日がきつと来る・・・! わたくしはその希望を胸に、生きてゆきます」

いつ来るかわからない願いをみんなに告げる。

「それでは、アデュー」

「ばいばい!」

別れの挨拶をし、亜久里は家へ帰った。

「マナ、ちよつと」

「?」

あゆみがマナにこつちと声をかける。

「えっ? 養子?」

「ええ。亜久里ちゃんは、茉里さんの実のお孫さんでは無いのよ」

キッチンの方で、あゆみから亜久里が養子だと言う事を伝えられる。

「身寄りが無かった亜久里ちゃんを、茉里さんが引き取ったって聞いているわ」

「その事、亜久里ちゃんは知ってるの?」

「ええ。血の繋がりにこそ無いけれど、二人は本当のおばあちゃんと孫のように暮らしている」

亜久里の事情をマナに伝える。

「だから、あなたも普通に接してあげてね」

「うん」

しばらくして、マナ達は外へと出て場所を変える。

「亜久里ちゃんに悪い事しちゃったな・・・」

「仕方が無いわよ。悪気があったわけじゃないし」

「亜久里ちゃんもそこまで気にしてなかったはずだ」

「だといいいけど・・・」

店の向かいにあるベンチでマナ達は会話をする。

「そもそも、どうして亜久里はそんな大事な事を言ってくれなかったケル？」
「ラケルの言う通りシャル！」

「大事な事だから、言えない事もある」

「まこぴー？」

「実はね、私も両親がいないの」

真琴も両親がいないと告げられ、龍牙を除くみんなが驚く。

「私がまだ赤ちゃんだった頃に、事故で亡くなったんですって」

真琴は両親が赤ん坊の頃に亡くなっていると話した。

「だから私は、お父さんやお母さんの顔はちっとも覚えていないの」

「孤児・・・だったの」

「でも、寂しくなんて無かった。私達は、王女様の愛に包まれていたから」

「そうだったんだ・・・」

「今は龍牙とダビイもいるし、みんなもいるから、今も全然寂しく無いわ」

「まこぴー！そんな大事な事、どうして言わなかったんだ!?!」

「余計な気を使わせたくなかったからよ」

シャルルが真琴の胸を叩きながら叫び、真琴はシャルルを抱き締めた。

「どんなに親しいお友達でも、言えない事はありますものね・・・」

「誰にだって、みんなに言えない事はあるさ」

晴夜が言うと、マナがベンチから立ち上がる。

「マナ？」

「どうしたシャル？」

「だったらお祝いだーっ！亜久里ちゃんの誕生日パーティーを開いて、あたし達でお祝いするんだよ！」

亜久里の誕生日パーティーを開こうと提案する。

「いつよ？」

「亜久里ちゃんは誕生日が分からないって・・・」

「それで、どうやってお祝いするんだよ」

「分からないと言う事は、いつお祝いしてもいいって事じゃない！」

「何その理屈？」

「決行は明日！各自プレゼントを持って集合！ただし、亜久里ちゃんには絶対気付かれないように！分かった？」

「はいはい」

「なら、盛大にやりますか」

「仕方ねえな〜」

「了解」

マナの意見に晴夜達も同意し、亜久里の誕生日会を、サプライズで開く事を決めたのだった。

「晴夜さん」

「どうした？」

「あの、お願いがあるんです！」

幻冬が晴夜にお願いしたい事があると頼み込む。

その頃、トランプ王国のレジーナがソファで横たわっていた。

「どうしたんだ？死んだ魚みたいな目しやがって」

「何なのよアイツら？人の顔を見れば愛だの心だの・・・マジでダルいわ・・・」
この前の真琴のライブとありすの花を見て、二人に言われた事を振り返る。

「風邪か？」

「違うわよ」

「だよな。バカは風邪引かねえって言うしな」

「バカはどっちよ」

「そうよイーラ。デリカシーの無い事ばかり言っていると、女の子に嫌われるわよ?」

マーモが指摘すると手に持っていたプリンを口に入れる。

「あつ!アタシのプリンアラモード!」

「あらごめんさい。冷蔵庫に入ってたから食べちゃった。」

マーモは全然悪気のないような感じで謝る。

「絶対許さない!」

レジーナは指から電撃を放ち、マーモに当てた。

「お前、たかがプリン一つでやり過ぎだぞ?」

「分かって無いわね。スイーツは女の子を笑顔にする魔法の食べ物なのよ」

レジーナがミラクルドラゴングレイブを持ってどこかへと向かおうとする。

「どこ行くんだ?」

「人間界よ。あっちの世界のスイーツを全部奪い取ってやしないと、腹の虫が収まらない」

「い」

「で、その奪ったスイーツはどうすんだ?まさかお前一人で全部食う気か?」

入り口で座っていたエボルトがレジーナに聞く。

「当然じゃない」

「食い過ぎてお前もグーラと同じ姿になっちゃえばいいんだよ」

イーラはレジーナに聞こえないように小声で呟く。

「何か言った？」

「いんや、何にも。じゃ行つてらつしやーい」

「何言つてんの、アンタも行くのよ」

「イテテ、やめろつて……！」

イーラは耳を引つ張られながら無理矢理連れて行かれた。

「それで、先生！研究の方はどうなのよ」

「問題ない、あとボトル2本……着実に進んでいる」

拓人が黒いパネルに装填されたロストボトルをエボルトに見せる。

「……だが、ビルドとクローズ、そして 그리스までもがあそこまでレベルを上げたのは

予想外だった」

すると拓人は、晴夜達仮面ライダーの成長は予想外だとエボルトに話す。

「でも、先生には対策はあるでしょう」

「……とりあえず、まずは潰せるものから潰すべきだ」

拓人の潰せるものから先に潰す、一体誰を潰すのかは、まだわからなかった。

その頃、地下室で晴夜が机で何か作っていた。

「何やってんだよ？」

「ちよつと、幻冬君と一緒に作ってみたいもんがあつてね」

「へえ、でも珍しいなお前が機械じやないものを作るなんてよ」

龍牙の言うように、今作ってるのは機械というより木材のような感じだった。

「まあ、明日になればわかるよ」

晴夜は作業に目を向けて続ける。

その夜もキンググジコチューとアンジユの衝突を夢に見て、昨日と同じ夢を見た亜久里が、夜中に目を覚ます。

「またあの夢……」

「亜久里、眠れないのですか？」

するとそこへ祖母の茉里がホットミルクを持って現れた。

「おばあ様……ありがとうございます」

亜久里はお礼を言つてホットミルクを飲む。

「何か心配事でもあるの？」

「この所、毎晩同じ夢ばかり見て眠れないのです・・・」

「わたくしも見ますよ。あなたが大人になった夢を」

「わたくしが大人に・・・？」

「白いドレスを着て、お化粧もして、あれはきつとウエディングドレスね」

「わたくしは結婚なんてしません！ずっとおばあ様と一緒にいます！」

「そうは言うけどね、わたくしの元から旅立つ日が来るわ。」

あなたはそう言う星の元に生まれた子供だもの」

「おばあ様・・・」

「さっ、もう寝なさい」

「あの・・・」

「なあに？」

「一緒のお布団で寝てもいいですか・・・？」

「甘えん坊さんね」

茉莉が差し出した手を亜久里が掴む。

この日は二人で、一つの布団に入って眠ったのだった。

次の日、スーパーで買い物をしていた亜久里は、同じく買い物をしていた真琴とDB

を見つけた。

「卵はある、後は……」

「こんにちは。真琴もお買い物ですか?」

亜久里に声をかけられた真琴は反対の方を向く。

「違います。私は劍崎真琴と言う者ではありません」

そして襟を上げて顔を隠して違うという。

「えっ?」

「失礼」

すぐさまレジの方へと走って行った。

「?」

なぜ、すぐ逃げてしまったのかわからなかった。

しばらくして、亜久里はスーパーから出る。

すると、今度は野菜が入っているダンボールを持った龍牙と和也がいた。

「すげえ数だな」

「パーティだろ。多い方がいいだろう」

「そんな沢山の野菜どこに運ぶんですか」

龍牙と和也がギクツとなり、後ろを振り向いた。

「あああ・・・これは」

「あれだよ。あれ」

「あれとは？」

「バ、バイバイ！」

「じゃなー！」

二人は誤魔化し、急いで逃げ出した。

「なぜ、逃げるんですの？」

二人が亜久里から逃げ出した理由がわからなかった。

今度は帰り道に花屋で何かを探すマナと六花を見つけた。

「やっぱバラがいいんじゃないかな？」

「でも、予算がね・・・」

「何の相談ですか？」

亜久里が声をかけられて二人はビックリして驚く。

「贈り物なら、わたくしが見繕って差し上げましょうか？」

「大丈夫だよ」

「私達、ちよつと急いでるから」

そう言い、その場を後にして出ていった。

「??」

その頃、円家でリムジンが止まっており、ありすとセバスチャンが来ていた。

「ありがとう。あの子も喜ぶと思うわ」

「それでは、くれぐれも亜久里ちゃんにはご内密に」

そこでは、ありすと茉莉が円家の前である話をしている。

「ただいまー」

「お帰りなさい」

そこに亜久里が戻って来る。

「何をご内密にですか?」

「えーつと・・・セバスチャン?」

「お嬢様が車内でパンケーキを召し上がろうとした所、あいにくハチミツを切らしてい

たものですから、急遽円様のお宅に立ち寄り、ハチミツをお借りしたのです」

「はあ・・・」

「それでは、ごきげんよう」

急いで車に戻り、車を走らせて円家から去っていった。

「何なのですかあれは?」

「さあ。何でしょうね」

亜久里は家に入り、台所へと入った後買ってきた材料を机に置く。

「大体、今日はみんなおかしいですわ。わたくしの顔を見た途端、コソコソと逃げたりして」

亜久里が、今日はみんなが自分をみてすぐ逃げる態度に不満を持っていた。

「亜久里、今夜は外で食べましようか」

「お買い物をして来たのに？」

「ちよつと用事が出来たの。あなたは六時に、ぶたのしつぽ亭に来て下さいね」

「…分かりました」

亜久里は納得のいかない返事をし、夕方にぶたのしつぽ亭へ行くことになった。

その頃、ホームセンターから晴夜と幻冬の二人が出てきた。

「すいません晴夜さん。手伝ってもらって」

「別に、俺も亜久里ちゃんの喜ぶ顔が見たいし」

「じゃあ、急いで戻って作りましょう！」

「オーケー！・・・あ、そうだ！」

晴夜は懐から何かを取り出した。

それは晴夜の使うフルフルラビットタンクボトルと似ている長いボトルだった。

「これは……」

晴夜は幻冬にそのボトルを渡した。

「強化アイテムだよ。ローグ用な」

「これ、僕のなんですか!」

自分の強化アイテムだと聞いて幻冬が驚く。

「ああ。……けどそれ、ビルドドライバー用なんだよ。」

幻冬君のスクラツシユドライバーは今メンテしてるから」

「じゃあ、今の僕には使えないって事ですか?」

ちよつとガツカリしたような感じで聞く。

「一応、スクラツシユドライバーに変換できるようにしてみよう」

「そうですね……それより、早く戻って準備しましょう」

幻冬が開き直るかのようによく走つてぶたのしっぽ亭へと目指す。

そして時間は過ぎ、六時近くに亜久里がぶたのしっぽの近くに来た。

「何を企んでいるのかは知りませんが、わたくしに隠し事は通用しない事を、思い知らせ
て差し上げ——」

ほっつかむりを付けた亜久里が中の様子を見る。中を見た瞬間、亜久里は目を大きくし

て驚く。

「一体皆さん、何を企んでいるんですの？」

亜久里が中の様子を見ると、中ではマナ達が亜久里の誕生日パーティーの準備を行っていた。

「こんなもんでどうシヤル？」

「なかなかイケるでランス」

「上出来上出来！」

マナが言うのと少し離れた所で、晴夜と幻冬が何やらなにかを作っていた。

「この位置をここで繋げるんだ」

「えつくと、こんな感じですか？」

「そうそう、そのまま続けて！」

晴夜のレクチャーを受け、完成に近づいている感じだった。

「お皿の準備、出来たケル！」

ラケルが出来たと言うと、真琴がカートを押して出てきた。

「出来たわよ」

「こつちも料理が出来たぜ！」

真琴が巨大なバースデーケーキを、和也がパーティー料理を運んで来る。

「凄いいじゃない!」

「先生の教え方が良かったのよ」

「いやあ、それほどでも」

「どうやら、ケーキやパーティー料理は健太郎から教わりながら作った様だった。

「皆さん!急いで下さい!主役が到着してしまいますわ!」

「ヤベツ、早くしねえと・・・!」

みんなは急いで準備に取り掛かる。

「これは、わたくしの誕生日パーティー?どうしてわたくしに内緒でこんな事を?」

「あなたに喜んで貰いたいからよ」

「ツ!おばあ様!」

後ろから茉莉が、亜久里に喜んで貰いたいからと話す。

「誕生日が分からないあなたのために、皆さんが心を込めて準備してくれたのです」

「みんな・・・」

みんなの優しさを知った亜久里の目に涙が溢れる。

「さっ、中に入りましょう。ただし、あなたは何も知らないフリをして、驚かないと駄目

よ」

「はい!」

それから三十分くらい経過し、亜久里は入ってきた。

『亜久里ちゃん！おめでとー！』

店の中に入ると、皆からお祝いの言葉が掛けられた。

「亜久里ちゃん！ロウソク消して消して！」

マナに促されて全てのロウソクの火を消すと、クラッカーが鳴り、電気が点けられた。

『お誕生日おめでとう！』

「ありがとうございます！」

亜久里はみんなにお礼言うと、みんなが用意してくれたケーキに手を伸ばす。そして口になると、いつにもなくいい笑顔になった。

「お婆あ様、誕生日のケーキってこんなに美味しいものだったのですね！」

「良かったわね亜久里」

「はい！これなら毎日誕生日パーティーして欲しいですわ！」

「いや、毎日はいくらなんでも無理だろ」

「そんなにやったら早死にしちゃうわよ？」

みんなが突っ込み入れながら料理を美味しく頂いていると幻冬が椅子から立ち上がる。

「あのく……これを!」

「これは?」

幻冬が小さな箱のような物を誕生日プレゼントとして差し出し、亜久里はそれを受け取る。

「開けてみて」

幻冬に言われて開けてみると中から音楽が聞こえた。

箱の上にはみんなの変身した時のマークやライダーズクレストに囲まれ、

『Happy Birthday 亜久里』と刻まれていた。曲名は『Be The One』と言うらしい。

「オルゴール。自前で作ってみたんだ。晴夜さんに色々とおアドバイスをもらいながらだ
けど」

「幻冬君。ありがとうございます」

亜久里が笑顔でお礼を言う。そして茉莉も、幻冬に近付きお礼を言った。

「幻冬君、亜久里のためにわざわざありがとうね」

みんなが楽しく、亜久里の誕生日パーティーを続けているそんな中、一人の男性がぶたのしっぽ亭に現れる。

「せっかくなのに誕生日パーティーで貸切? ケーキなんか美味そうに食べやがって」

店の外で誕生パーティを見ていた男性のプシケケが黒く染まり始める。

「仕方が無い、他の店に行くか・・・」

「ケーキなんてブチ壊しちゃえばいいのよ」

黒く染まった部分が縮まり、他の店に行こうとした男性の元にレジーナが現れ、ケーキなんか壊せと囁く。

「あなたを素敵なジコチューにしてあげる！」

レジーナの指から放った光線が、男性のプシケケを黒く染めた。

取り出されたプシケケがひび割れ、アリジコチューが作り出され、店に向かって突きつけて来た。

「ジコチューー！」

「まさか・・・」

アリジコチューの放たれた液体を受けた健太郎達は石にされてしまった。

「パパ！ママ！おじいちゃん！」

「いい気味」

「レジーナ！どうしてこんな事を！」

「えっと、ほら何だっけ？マナが読んでくれた絵本でさ、パーティに招かれなかった魔女がお姫様を永遠の眠りにつかせるの——」

「眠れる森の美女?」

「そうそれ!アタシは魔女。ケーキを食べ損なった魔女よ」

レジーナが本の魔女と同じと言うとアリジコチューに命令し、晴夜達も石に変えようとする。

「亜久里ちゃん!ここはあたし達に任せて、茉里さんを連れて逃げて!」

「幻冬君、お前も亜久里ちゃんと茉里さん達の避難するんだ」

「さっ、おばあ様!」

「こつちに来てください!」

幻冬と亜久里が茉里を連れて裏へと移動する。

「ジコチューを浄化すれば、みんな元に戻るハズ!」

「行くぞ!」

晴夜の掛け声とともにドライバーを装着し、マナ達はコミュニケーションにラビーズをセットした。

『タンク!』

晴夜はフルフルラビットタンクボトルをタンクモードし、三人はボトルとナツクルをドライバーに差し込む。

『タンク&タンク!』

『ボトルバーン！クローズマグマ！』

『ボトルキーン！グリスブリザード！』

三人が差し込むと同時にドライバーのレバーを回す。

『『Are you ready?』』

『『変身！』』

『『プリキュア！ラブリンク！』』

晴夜達三人はアーマーを装着し、マナ達四人は光に包まれ、仮面ライダー、プリキュアへと変身を完了する。

『鋼鉄のブルーウオーリア！タンクタンク！ヤベーイ！ツエーイ！』

『極熱筋肉！クローズマグマ！アーチャチャチャチャチャ ちゃちゃちゃちゃアチャー

！』

『激凍心火！グリスブリザード！ガキガキガキガキーン！』

『みなぎる愛！キュアハート！』

『英知の光！キュアダイヤモンド！』

『陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！』

『勇気の刃！キュアソード！』

「愛を無くした悲しいアリスさん！このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻して見

せるー!」

全員の音声と名乗りをあげるとハートが胸にハートマークを作り、いつもの決め台詞を叫ぶ。

「行くぜ!」

「今日こそ決着をつけてあげるわ!」

そう言うのとレジーナはエボルドライバーを装着する。

『コウモリ! 発動機! エボルマツチ!』

ボトルを2本差し込み、レバーを操作した。するとレジーナのドライバーから無数のパイプ線が現れた。

『Are you ready?』

「変身!」

レジーナの体にパイプ線が一瞬のうちに集まり、マッドローグへと姿を変える。

『バットエンジン! フツハハハハハハハハハハハ!』

マッドローグへと変身し、イーラとジコチューが戦闘態勢に入ろうとする。

「とりあえずまずは、ジコチューを外へ出すぞ!」

『フルボトルバスター!』

ビルドはそう言うってフルボトルバスターを放ち、ジコチューを外へと出して、ハート

達はジコチューとの戦闘を開始した。

追おうとすると、マッドローグがドラゴングレイブをビルドに向けて襲いかかる。ビルドはフルボトルバスターで受け流す。

「レジーナ！今日こそお前を取り戻す！」

「取り戻す……アタシを倒そうとしたアンタに何ができるの？」

「それは……」

すると、いきなりビルドに何かの斬撃が飛んで来てビルドが倒れこむ。

「父さん……」

起き上がるとそこにはニンニンコミックフォームとなったビルド（拓）が現れていた。

そのままビルドに向かって四コマ忍法刀で攻撃をしてくる。

ビルドはフルボトルバスターを使い攻撃を受け流し、ビルド（拓）の攻撃を防御し続ける。

「その程度の力でエボルトと立ち向かおうとは……」

「くうー！」

「片腹痛いー！」

ビルドの手からフルボトルバスターが落ち、ビルド（拓）は四コマ忍法刀のグリップでビルドのハザードトリガーを直撃させる。

「!?…何だこれ…体が動かない」

攻撃を踏み止まった瞬間、トリガーから電流が流れビルドの動きが急に止まる。

「晴夜!」

「アンタ!一体何をした!」

「(やはり、弱点には気づいてなかったか…人)の心配より自分の心配が懸命だ」

「!?…ぐわあ!スマッシュ!」

今度はクローンスマッシュが現れ、クローズとグリスに不意打ちをかける。

ビルド(拓)はビルドが動けないうちに四コマ忍法刀のトリガーを押す。

『火遁の術!火炎切り!』

「ぐわあああああー!」

ビルド(拓)の四コマ忍法刀の火炎切りを何も抵抗もなくもろに受けしまい、ビルド

はそのまま変身解除してしまう。

「どうして…動けなかった…」

なぜ、トリガーを攻撃された瞬間、動けなくなったのか晴夜にもわからなかった。

「晴夜!」

「ここは任せろ、お前は晴夜を!」

「わかった!」

『隠れみの術!』

グリスにスマツシユを任せ、クローズは晴夜を助けようとビルド（拓）に攻撃しようとした。次の瞬間、ビルド（拓）の周囲を煙に纏い、姿を消した。

「何、どこに行つたんだよ?」

（もしかして、俺を・・・見逃したのか?）

その光景をみた晴夜は、ビルド（拓）が晴夜を見逃し、姿を消して行つたかの様に感じたのだった…

その頃、ぶたのしつぽ亭の裏へと逃げた亜久里と幻冬、茉里は外へと無事脱出するこゝとが出来た。

「おばあ様! わたくし達はマナと晴夜と一緒にあの化け物を喰い止めます! おばあ様は逃げて下さい!」

茉里と外へ出た亜久里が逃げるように促す。

「大丈夫です! 僕が、亜久里さんを守ってみせます!」

幻冬が亜久里を守ると茉里に言う。

「分かりました。無理はしないでね・・・」

亜久里を抱いて無理しないでと伝える。

「幻冬君、亜久里をお願いね」

「はい」

茉里は二人を信じ、ぶたのしっぽ亭から離れる。

「プリキュア!ドレスアップ!」

「きゅぴらっば〜!」

アイちゃんから召喚されたラブアイズパレットにラビーズをセットし、変身の手順をとると炎に包まれて、姿を変え始める。

そして、炎が消えるとキュアエースとなった。

「お前は!」

「愛の切り札!キュアエース!」

キュアエースとなりマッドローグの前と現れた。

「美しさは正義の証!ウインク一つで、あなたのハートを射抜いて差し上げますわ!」
胸にエースマークを作り名乗りあげる。

幻冬はビルド(拓)の攻撃を抵抗出来ずに受け、変身解除した晴夜に近づく。

一方晴夜は、もう一度ビルドドライバーを装着しようとする。

「晴夜さん、貸して下さい!」

すると幻冬は、晴夜のビルドドライバーを奪い自分に装着した。

そのまま、晴夜から貰った新たな変身アイテム——プライムログフルボトルを取り出し、フルフルボトルのように半分に分け、ドライバーに差し込む。

『プライムログ！』

「プライムログ」と鳴ると幻冬はドライバーのレバーを回す。

『ガブツ！ガブツ！ガブツ！ガブツ！ガブツ！』

ドライバーのレバーを操作すると、金色に輝く線のようなパイプ——『プライムライドビルダー』が幻冬の周囲を囲み、さらにワニの顎が下から出現した。

『Are you ready?』

「変身！」

掛け声と共にパイプが身体に巻き付いて、それをワニの顎が噛み砕く。

『大義晩成！プライムログ！ドリヤドリヤドリヤドリヤ！ドリヤ！』

ログに施されていた白いヒビからエングレービングを思わせる黄金の唐草模様が生かされているものに変わり、肩や顔のワニアゴの一部が白い。また背中に純白のマント——『プライムセイバーマント』を纏っており。胸元には、歯車とログを象徴する鰐の口が組み合わさったライダーズクレストが記されている。

「あれは……」

「仮面ライダー……プライムログだ」

晴夜が名付けたローグの新フォーム『プライムローグ』へと変身した。

「スマッシュどもやれ!」

イーラの指示でスマッシュがローグに接近し、ローグに襲い掛かるとする。

だが、ローグはグリスが手を焼いていたスマッシュを一撃で機能停止させる一撃を喰らわせる。

「マジかよ……」

「すごいですわ!幻冬君!」

エースがローグの新たな力を見て感心すると、マッドローグがエースにドラゴングレイブを振り向ける。

「ムカつくのよあなた!」

振り下ろしたミラクルドラゴンブレイブの攻撃をかわし着地する。

「みんなと一緒にバースデーケーキなんか食べたりにして、自分がいつも主役のつもりなんでしよう?」

「えっ?」

「下らない!アンタなんて、消えてなくなればいいのよ!」

エースに向かってマッドローグが飛び蹴りを放つ。

「下らなくなんか……無い!」

生身で前に出た晴夜が飛び蹴りをドリルクラッシュャーで防ぎ、マッドローグを払う。ハートも隣にやってきて晴夜を支える。

「大丈夫!？」

「ああ、ありがとう」

「一つの命が生まれてくるのは、奇跡なんだよ！あなたも、あたしも、亜久里ちゃんも！」

「それをお祝いしたいって思うのは、当然の事なんだよ！」

「晴夜・・・キュアハート・・・」

「また胸がチリチリする・・・何で・・・？」

マッドローグは胸の位置を抑える。

「キュアハート・・・ビルド・・・アンタ達がいるから・・・！大っ嫌い！」

大嫌いと叫んでエネルギー刃をハートと晴夜に向けて放つ。

すると、ローグが二人の前に現れ、背中のマントを使いマッドローグのエネルギー波を受け止める。

「やめて下さい！あなたは晴夜さんとハートさんの友達じゃないですか？」

「うるさいわね！アンタには関係ないでしょう！」

「関係あります！晴夜さん達の友達なら僕にも関係あります！それに、エースのことをそんな言い方しないでください！」

「何ですって……」

「エースは、亜久里ちゃんは自分の誕生日が知らなくて辛かったはずだ。

いつも周りを引っ張って絶対に弱音を言わない人だ。そんな人を僕は尊敬している。

——でも、だからこそ辛い時は、力になりたい!」

ローグがエースの方を向き自身の気持ちを語る。

「あくもう!うるさい!」

ドラゴングレイブを振り回して攻撃するとローグを押しして攻撃を回避する。

「あなた達の気持ち、いただきました!反撃しましょう!」

「うん!」

二人は横にステップしてかわし、反撃に出ようとする。

「させるかよ!」

イーラが攻めようとするのとグリスはドライバーのレバーを一回転させる。

『シングルアイス!』

グリスはロボットアームをイーラに向ける。

『グレイシャルアタック!バリーン!』

巨大化した左腕のアームで捕えると、ダイヤモンドがラブリーパットにラビーズをセツトする。

「ダイヤモンドスワークル！」

そこにダイヤモンドスワークルを受けたイーラは、ビシヨ濡れで目を回しながら気絶した。

「あなたはそこで頭を冷やしていなさい！」

氷の拘束と水浸しでグロッキーなイーラ。：ドンマイ。

一方のローグはそのままジコチューに向かっていく、ジコチューは光線を放ちながら近づけないようさせるがローグは詰め寄り、ジコチューの腹を思い切り殴り、ジコチューの動きを悪くさせる。

「大義のための犠牲となれ！」

決め台詞を言うとローグはドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

ローグは高く飛躍し、ライダーキックの態勢に入ろうとする。

『プライムスクラップブレイク!』

ローグが脚部から『グランダイルフアング』を展開して、ジコチューに噛み付くように両脚で挟み蹴りを繰り返す。そのまま噛み付いた足で掘り投げジコチューを浄化させた。

元に戻った相田家の三人も驚いている。勿論、先の青年も不思議そうな顔をしてい

る。

「くそお!」

「ローグ、覚えてらっしやい!」

イーラとレジーナがそう言い残し、逃亡していった。

しばらくして茉里がお巡りさんを連れて戻ってきた。

「お巡りさん、ここです」

「なんともなつてないじゃないですか」

「亜久里! 幻冬君! あの怪物は?」

「プリキュアと仮面ライダーがやってきて退治してくれましたわ」

「プリキュア? 仮面ライダー?」

亜久里が言うことに不思議がる。

「さあ、誕生パーティの続きをしましょう」

幻冬が言うのと、みんなは駆け出して店に戻る。

「みんな待ってたんですよ」

亜久里が茉里の背中を押して店内に入れる。

「晴夜さん。すみません勝手に使ってしまった」

幻冬が晴夜のビルドドライバを返し、晴夜が受け取る。

「いや、お前のおかげで助かったよ」

晴夜がそう言うのと幻冬の頭を撫でる。

「でも、こうなるともう一台ビルドドライバー作らないとな」

プライムローグの力を見てもう一台ビルドドライバーを作る必要があると言う。

「どれくらいで出来るんですか？」

「早くて1ヶ月かな？」

「い、1ヶ月ー!?!」

1ヶ月と聞いて、時間がかかると言われた幻冬が驚く。

その頃、トランプ王国の研究室で拓人がパソコンを操作し何かをしていた。横には白と黒の2本のボトルとビルドとクローズのライダーカードが置かれていた。

「もう少し、これさあ完成すれば・・・よし」

よしと言うと拓人がパソコンのキーボードから離れ、2本のボトルを見つめ強く握る。

「これで・・・『キングジコチューを倒せるか？先生？』ツ!?!」

拓人が振り向くと後ろにエボルトとベール、二人の姿があった。

「やはり、キンググジコチュー様を倒すために近づいていたとは、流石研究者だな」

「なぜ、わかった・・・」

「最初から気づいてたさ、だから利用して頃合いを見て始末するつもりだったんだよ」

エボルトに見抜かれていたことに驚いた拓人はポケットに2本のボトルとカードをしまい込む。

(これを、奪われるわけにはいかない!キンググジコチューには必要なものだ。

何としても、晴夜に渡さなければならぬ)

絶対絶命のピンチと思われる父:拓人。

果たしてここから脱出し、晴夜に届けようとしている2本のボトルとライダーカードとは…

次回!Re・ドキドキ&サイエンス!

第50話 四大ライダー対エボルト:最期

第50話 四大ライダー対エボルト：最期

トランプ王国でキングジコチューの仲間であった、晴夜の父：拓人。

だが、スパイであった事をエボルトに気づかれていた。

「エボルト……気づいていたのか？」

「当たり前だろう、人間が俺を欺けると思ったのか？」

気づかれていたのは予想外だと拓人は感じていた。

「さあ、そのボトルとカードを渡せ」

拓人はしまい込んであるボトルとカードを強く握る。

「これは、お前に渡すわけには、いかん」

「だろうな、それを渡すのはお前の息子だろ。仕方ないな」

『エボルドライダー！』

エボルドライダーを装着し、エボルトボトルを取り出してドライバーに差し込む。

『コブラ！ ライダーシステム！ エボリューション！』

エボルトがドライバーのレバーを操作すると、総一郎の周囲からEVライドビルダーが出現し、異様なオーラを纏ったアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身!」

変身と叫ぶと、アーマーがエボルトの体に装着された。

『エボルトコブラ! フツハツハツハツハツハ!』

拓人はボトルを取り出し、既に腰に装着したビルドドライバーを差し込む。

『忍者! コミック!』

『Are you ready?』

「変身」

『忍びのエンターテイナー! ニンニンコミック! イエーイ!』

拓人のビルドドライバーからランナーが出現し、それが拓人の体と重なりニンニンコミックフォームへと変身した。

「いくら貴様がベストオブビルドでも晴夜のジーニアスと比べれば、何の問題もない」

「そうかな」

そう言うのと四コマ忍法刀のトリガーを押す。

『隠れみの術!』

周囲から煙幕が現れる。

「おい、何やってる逃げられるぞ」

「ちっ！逃すか！」

エボルが煙幕の中へスチームガンを放つ。

『分身の術！』

すると煙幕の中から分身したビルド（拓）が現れ、エボルに攻撃を仕掛ける。

「逃げてても無駄だから、俺に勝負を挑むとは」

エボルがドライバーのレバーを操作し、エボルの足にエネルギーが収束され、出現したフィールドに分身したビルド（拓）が吸い込まれていく。

『Ready go！』

『エボルテックフィニッシュ！チャオ！』

エボルの出現させたフィールドの中で分身したビルド（拓）全てに回転キックを繰り返す。

エボルの回転キックを受けたビルドは全て倒れてしまった。

「やはり、無駄の足掻きだったな」

『ドローン！』

「何？？」

すると分身したビルド（拓）が全て消えた。

「偽物だと……！」

「やってくれたな……」

隠れみの術と分身の術を利用してうまく逃げることに成功した拓人はパンドラボックスを置かれていた部屋と到着する。

「……パンドラボックス」

「それを持ってどこに行くの？」

「つー！レジーナ……」

すると拓人の背後からレジーナが現れた。

「パパを裏切るの？晴夜のパパ」

「いや、私は裏切るのではなく君のパパを救ってあげたいんだ」

「パパを救う？何を言ってるのかわからないわ」

レジーナがドラゴングレイブを肩に置く。

「ねえ、アンタ。晴夜のことどう思ってるの？」

「……私は、晴夜のことはずまないと思っている」

拓人は晴夜のことはずまないと呟き出す。

「私の目的のために、私はあの子を利用した。父親として、最低なことをした……」

「ふうくん、まあいいわ。見逃してあげる」

「えっ?」

「これくれたお礼よ。ありがたく思っただけ」

エボルドライバーを見せ、これをくれたお礼だと言う。

「すまない・・・あと、私からお礼を言わせてくれ」

「お礼?」

「晴夜と友達になってくれてありがとう」

そして、拓人はパンドラボックスと黒いパネルを持ってトランプ王国を脱出していった。

その頃、人間界の晴夜の部屋の地下室で、晴夜はハザードトリガーについても一度調べていた。

『この、ハザードトリガーをビルドドライバーに装着し変身するすれば、変身者のハザードレベルは一気に上昇する。但し、これを長時間使うと、脳が刺激に耐えられなくなる・・・その瞬間見えるものすべてを破壊するだろ』

拓人のハザードトリガーのビデオ映像を何度も見返し、映像を一時停止させる。

「やっぱり、ハザードトリガーに関することはこれだけしかないか・・・」

この間の戦いで拓人にハザードトリガーを攻撃された時、何故、急に動けなくなったのか気になっていた。

「ハザードトリガー・・・オーバーフロー状態になれば暴走する禁断のアイテム、停止装置はないはず・・・でも、なのであの時・・・」

あの時、拓人の四コマ忍法刀がトリガーに直撃した時、急に体中の電流が流れ動けなくなった。故障かと最初は思ったが特に異常はなかった。

そのまま、晴夜は椅子から立ち上がると地下室の扉を開け、地下室から出て行き家のリビングへと向かった。

「お、晴夜やつと出てきたか？」

リビングには先に朝食を食べていた龍牙がいた。

「ああ、ちよつと調べごとな。おじいちゃんとおばあちゃんは？」

「なんかの会でしばらく出掛けるからよろしくつてよ」

龍牙がそう言うのと冷蔵庫を開けてコップにお茶を入れる。

「なあ、俺とお前のポトルが変わった理由わかったか？」

龍牙が銀色に変わったドラゴンポトルを見せる。

「さあな、それに関して父さんの研究にもなかったから俺にもわからない」

晴夜も金色に変わったラビットポトルを取り出す。

「けど・・・」

「けど、なんだよ？」

「父さんは、このボトルの変化を見て何かを知っているような感じがした。それを研究データに入れなかったのは、知られるのを防ぐためなのかもしれない・・・」

「それって、エボルトとかに知られたらまずいってことなのか？」

「バカっぽく言えば、そういうことだ」

晴夜はそう言ってお茶を口に入れる。

「そうか・・・って、なんでバカって言うんだよ！」

「反応が遅いんだよ」

龍牙が突っ込みを入れると晴夜のビルドフォンから着信音が鳴り響く。晴夜が画面を見ると『非通知』となっていた。怪しいと思ったが、晴夜はその電話に出た。

「はい・・・えっ!?」

「どうした？」

龍牙が聞くと、晴夜はしばらく黙り込み電話の話を聞き続ける。電話が終わるとビルドフォンを耳から離し下ろす。

「ちよつと出てくる・・・」

「お、おい！どこに行くんだよ！」

晴夜は上着を着てリビングを出て行くと、急いで玄関の方へと向かい外へ飛び出した。

「晴夜！待てよ！」

龍牙も外に出て、晴夜の後を追いかける。

その頃、ぶたのしつぽ亭の外で水やりをしていたマナ。

「ごめんね、まこぴーにも手伝って貰って」

「いいわよ。私も花の水やり好きだし」

今日は仕事がオフで、朝からマナの家で真琴が遊びに来ていたため、二人で店の花に水を与えていた。

「ねえまこぴー、あれから龍牙君とは進展あった？」

「えっ!!? な、何よ急に！」

龍牙の事を聞かれた真琴が、顔を赤くして動揺し出す。

「だって、みんなの前で龍牙にキッスしたじゃん！」

「あ、あれは・・・ん？」

「ん? どうしたのまこぴー？」

マナは真琴と同じ方を向くと、そこに急いで何処かへ向かって走っていた晴夜の姿を

見る。

「晴夜君？」

「どこに行くのかしら？」

晴夜がどこに行くのかと二人が思うと、晴夜を追っていた龍牙も姿を現わす。

「龍牙！」

真琴が龍牙に声をかけると、その声が聞こえた龍牙がマナと真琴の方を向く。

「お、おう！」

「晴夜君どこに行くの？」

「わかんねえよ。電話がかかってきて切れたらすぐに飛び出していったんだよ」

「その電話の相手に行ったのかな？」

真琴が晴夜がその電話の相手に会い行ったのではないかと推測する。

「相手って誰だよ？」

「もしかして、彼女とか？」

「か、彼女?!？」

「どうしたんだよ？急に……」

「……ううん、何でもない。それより晴夜君を追おう！」

マナも急いで晴夜の後を追いかける。

「なんだ急に？」

「マナったら、冗談半分で言ったのに、私達も行くよ」

龍牙と真琴もマナの後を追いかけて走り出す。

「お、おう……でも、マナは何であんなに急ぐんだ？」

「……アンタって、本当に鈍いわね」

「えっ？」

真琴が呟くが、龍牙は真琴の言葉の意味がわからなかった。

その頃、一人走っていた晴夜が目的地と思われる場所へと到着した。

その場所は大貝町の景色が一望出来る公園だった。

「……か……」

「晴夜君……！」

自分と呼ぶ声が聞こえ振り向くとマナが慌てて現れてきた。

「マナ……どうしたの急に」

「晴夜君、彼女に会いにここに来たんでしょう？」

「はあ？ 違うよ」

「じゃあ、なんで一人でこんな所に来たシャル？」

「話があるって言われてね」

「話？」

晴夜が木の方を向くと木の陰から誰かが出てきた。それを見てマナは目を大きくして驚く。

「晴夜君のお父さん……」

「はじめましてだね。キュアハート、相田マナ。晴夜と巧の父、桐ヶ谷拓人だ」

「父さん、何でこんな所に俺を呼んだんだ？」

晴夜がここに呼んだ理由を聞く。すると、拓人は後ろからラビットとドラゴン以外全てポトルを装填した。パンドラボックスを見せる。

「パンドラボックス……」

「なんで、これがここに？」

「私がエボルトから盗み出した」

「えっ!?」

二人は仲間であるはずの拓人が何故パンドラボックスを盗んでいるのか状況が飲み込めなかった。

すると、後ろから龍牙と真琴も合流した。

「……博士なんでここに？」

「・・・まさか、晴夜を倒すために」

「君達も来たか、晴夜だけだったがまあいい・・・」

龍牙と真琴が来て、拓人がここに来た本題を話そうとする。

「私がエボルトとジコチュー達と手を組んだのは、中から彼らの情報を入力し、トランプ王国を救う道を見つけたためだ」

「えっ？それって・・・」

「悪かったな、お前と巧を利用して」

今まで都合のいいように利用していた事を晴夜に謝る。

「待ってよ。話が全然見えねえんだけど・・・」

「つまり、博士は晴夜を裏切ったふりして、本当は裏切ってないってことよ」

「マジかよ」

拓人は本当は味方だと知って驚くと晴夜は一人下を向いて口を開く。

「・・・信じられるかよ。4年もの間、俺と兄さんにも会わず、多くの人が傷ついて、今さら、そんなことが信じられるかよ！」

「すまない・・・全てはトランプ王国の人々を救い、人間界を守るためだった」

「そのために、エボルトの側にずっといたのか。だったらもっと早く防ぐことが出来たはずだ！」

——晴夜の通りだ。エボルト達の近くにいたのなら、彼らを止める手段があった筈だ、と龍牙達は思った。

晴夜の怒りと、その事実を聞いた拓人は目を瞑ると、静かに自身の目的を語る。

「・・・1年前、トランプ王国の惨劇で多くの人がジコチューにされ、命を落としたものもいた。その時から私には、必ずあの世界を救済しなければならなかった。

方法の一つ。物理法則を超えた現象、『新世界』だ」

「新世界？前にも言ってたけど、その新世界って？」

晴夜が拓人が理想としている新世界について聞くと、拓人は黒いパネルを取り出す。

「黒いパネル・・・ロストボトル」

「このパネルはロストボトルが10本揃えばワームホールを形成し、ワープすることができる」

「ワ、ワープ！」

「エボルトの狙いは、このパネルの力でワープ能力を手に入れ、異世界中のあらゆる惑星にワープし、自らの力を上げることだ。

エボルトは一万年もの間封印されていた。それがワープ能力を手に入れば、一万年前以上の力を手に入れられると考えていた」

「じゃあ、10本揃えさせなければ・・・」

ロストボトルが無ければ、エボルトが更なる力を得ることは無い。晴夜はそう考えたが…

「いや、ダメだ!」

「ダメって、なんでですか?」

「それは・・・晴夜!ぐう!」

真琴の問いに答えようとしたその時、いきなり晴夜に何か飛んでくるのに気づいた拓人が晴夜を庇った。

「父さん・・・!」

飛んできた方向を見ると、それを見て全員が驚く。

「・・・エボルト」

攻撃してきたのは、フエイズ1のエボルトだった。

「1年もの間、仲良くやってきたのに残念だよ。先生」

「なぜ・・・ここがわかった」

「そのパネルに発信機を仕込んでいたんだよ」

晴夜が黒いパネルを見ると、確かに発信機が装着されていた。

「ためえ、よくも博士を!」

「許さない!」

龍牙とマナ、真琴がドライブバーとコミュニケーションを取り出す。

『ボトルバーン！クローズマグマ！』

三人はマグマナツクルとラビーズをセットする。

『Are you ready?』

「変身！」

「プリキュア！ラブリンク！」

マグマライドビルダーと光に身体が包まれ、二人はクローズマグマ、キュアハート、キュアソードへと姿を変える。

『極熱筋肉！クローズマグマ！アーチャチャチャチャチャ　チャチャチャチャアチャア！』

クローズとソードの二人がエボルトから拓人を出来るだけ離そうと攻撃する。

「父さん！」

晴夜が拓人に近づき、起き上がらせようとする。

「晴夜・・・すまなかった。お前をまた巻き込んでしまったな」

「またつて・・・なんだよ」

「お前は・・・一年前のトランプ王国の惨劇の時、トランプ王国に来ていたんだ・・・」

「えっ!?？」

「晴夜君が、トランプ王国にいた…」

晴夜がああ悲劇の中にいたと聞き、二人は驚く。

「あんな・・・惨劇を見たお前を・・・この戦いに巻き込んでしまった。すまない」

「父さん、俺そんなこと覚えてないよ・・・」

晴夜は目が潤いながら覚えてないと話す。

「そうか・・・それなら、それでいい」

拓人が笑って言うのと腕を伸ばして晴夜の頭を触る。

「晴夜、また背、伸びたか？」

「伸びたよ・・・」

「そうか・・・」

それを聞いた拓人が嬉しそうにしながら、晴夜の頭から腕を下ろす。

「父さん・・・父さん！」

「晴夜君・・・」

晴夜が必死に拓人の肩を揺するが、拓人からは何も反応がなかった。

「ハート、父さんを頼む・・・」

ハートに父親を託し、晴夜はビルドドライバーを腰に装着する。

「オラア！」

クローズの拳がエボルに決まる。

「おお、まさかここまで強くなっているとは嬉しいね」

エボルはクローズが強くなっている事を嬉しがる様な口調で語る。

「エボルトローラー!!」

すると晴夜の怒りが湧き上がるような叫びが聞こえ、エボルが晴夜の方に振り向く。

「よくも、父さんを・・・父さんの仇は俺が打つ！」

晴夜が今までにない程の怒りでジーニアスポトルを取り出し、ジーニアスを起動させる。

「変身・・・！えっ!?」

ジーニアスを起動させようと、ポトルの起動スイッチを押すがジーニアスから何も反応がない。

「なんで、どうしてだ！」

「どうしたの？」

「わからない、ジーニアスになれない！」

『えっ!?』

晴夜がジーニアスになれないと言い、全員驚く。今まで普通使っていたジーニアスがなぜ今になって起動しなかったのか、晴夜にはわからなかった。

「勝負あつたな！はあ！」

エボルが光弾を晴夜に向けて放つ。

「危ねえ！」

クローズが前に出てエボルの光弾を受け止める。

「くう！」

「龍牙！」

「みんな、一旦引くわよ！」

ソードがマジカルラブリーパットを取り出し、ラビーズをセットする。

「ソードハリケーン！」

無数の光剣を竜巻に載せて周囲を隠し、エボルの動きを封じた。

「くう、余計な事を！」

エボルが動けない隙にクローズが拓人を担ぎ、ハートはパンドラボックスを持ち上げる。

クローズはさらに黒いパネルを拾う。

「よし！」

「させるか！」

スチームガンをソードハリケーンの隙間から放ち、クローズから黒いパネルを落とさ

せる。

「やべえ！」

「急いで、龍牙！」

「わかった！」

「晴夜君！」

四人はエボルから無事に逃げる事が出来、パンドラボックスも取り返す事は出来た。

ソードハリケーンの効果がなくなると四人の姿が消えていた。

「くう！あいつら・・・」

悔しがるのとエボルは落ちた黒いパネルを拾う。

「まあいい、これさえ取り戻せばな」

エボルは黒いパネルを持ち、姿を消した。

エボルから逃げきった晴夜達は拓人を四葉病院へと連れていった。しばらくして六花にありす、和也達も駆けつける。

「マナー！まこびー！龍牙君！」

「皆さん！ご無事ですか！」

「うん、なんとかね。でも・・・」

「マナが見上げると『手術中』と点灯していた。」

「そんなに酷いんですか？」

「ええ、晴夜を庇ってエボルトの攻撃を生身で受けたから」

「それで、晴夜どうした？」

「一人で行きたいところからあるからって言って一人でどこか行っちゃった」

「あいつ、自分の親父さんが危ねえって時に・・・」

「晴夜君だって、混乱してるの、今まで戦ってたお父さんが本当は味方だって・・・」

——それとみんなには話してないが、晴夜がトランプ王国の惨劇の中にいたということを思い出す。だが、晴夜はそんな記憶を持っていないと言う。マナには、それがよくわからなかった。

その頃、晴夜が大貝町からかなり離れた町へとやってきて、『東都物理化学研究所』と書かれていた研究所へとやってきた。

ここは、4年前までいた父・拓人、去年から兄・巧もいた研究所だった。

晴夜は、4年前に事故があった父親のパンドラボックスの研究室に向かった。今は『立ち入り禁止』とされていた。

「ここに、来るのも久しぶりだな」

研究室を見て懐かしく感じる。懐かしさに浸ると晴夜はジーニアスポトルを取り出す。

(なんで、ジーニアスが起動しなかったんだ・・・俺の何が悪かったんだ)

どうして起動しなかったのかと思いつながら、晴夜はジーニアスポトルを握る。すると、ビルドフォンからの着信音が聞こえ、晴夜が電話に出る。

「一体、何の用だ！」

『そういきり立つな』

電話の相手はエボルトだった。

『お前が持つロストボトルを超越せ』

「渡すと思うか・・・お前は絶対に許さない！」

『ジーニアスが使えないくせによく言うな』

ジーニアスが何故か今になって使えない事を言われ、何も言い返せなかった。

『明日の早朝には持つてこい。来なければ今度はお前の大事な仲間が消えるぞ。チャオ』

エボルトからの電話が切れた。電話が切れた瞬間、晴夜は悔しさのあまり、ビルドフォンを地面に投げつける。

——その瞬間、晴夜の胸ポケットから何が落ちた。

それは、あの時拓人が持っていた写真で、手術が始まる前に渡されたものである。その写真は4年前、ここで撮った父親と一緒に撮った写真だった。

「これ……は……？」

晴夜が頭を抑えると何かの記憶を呼び起こされる。

——それは4年前の、10歳の頃の記憶だった。

『父さん！今どんな研究してるの？』

『うーん、異世界があるとかないのか？』

『なにそれ、ファンタジーみたいで面白そう！』

『じゃあ、もしそこから敵が攻めてきたら、父さんと一緒に戦ってくれるか？』

『うーん……いいよ！』

この時、くせで髪をかきながら笑顔で一緒に戦うと自分で言ったことを思い出す。

「最悪だ……こんな時に思い出すなんて……ライダーシステムは怒りや憎しみなんかじゃあ強くなれない。そうだろ、父さん……」

——晴夜は、自分が何故あのジーニアスが使えなかったのか理由がわかった。

あの時の俺は、怒りに身を任せていた。そのせいでジーニアスが使えなかったのだ。

しばらくして晴夜は、研究所から病院へと戻った。

晴夜は『桐ヶ谷拓人』の名前が貼られた病室へと入る。

「父さん……」

そこには、ベットで眠っている拓人の姿があつた。医師の話では手術は成功したと言われたが意識が戻るのかわからないと。

「父さん、約束を守るよ。絶対に」

晴夜は病室を後にしようとする。

「待った！」

いきなり和也が叫ぶと、マナ達が現れた。

「みんな、なんで……」

「なんで、じゃねえよ！お前がジーニアスになれなくて落ち込んでるんじゃないかとおもつてよ」

「それに、お父さんのことも」

晴夜のことを心配してみんな来てくれた。

「大丈夫だよ……もう覚悟はできてる」

晴夜の顔つきが今までと違うことに気づく。

「よし〜!まずは・・・!」

晴夜達はソリティアへと場所を変える。

「で、なんでソリティアなんだ?」

「腹ごしらえ必要だろ」

「よし、かずやん特製スペシャルパスタの完成だ」

「お待ちどう様です!」

そして、幻冬が和也の指導で作ったパスタをみんなが口にする。

『うっ!!?』

パスタを一口入れると、龍牙以外急に噎せる。

「いやいや、そうゆうのいいから」

「何ですか!この味は!」

「ちよつと、食べてみて!」

「えっ!!?そんな不味いはずは・・・」

みんなワザとらしいと思ったが、和也もパスタを口にする。

「む!!?」

和也もパスタを口にした瞬間、噎せ始める。

「おい、幻冬！なんでこんな味になるんだ！」

「レシピがないからこうなるんですよ！」

「そうゆうのは目で見て覚えるんだよ！」

「そんな強引な……」

「はあく、しゃねえ。みんな待つててくれ、直ぐ新しいの作るから」

和也がもう一度パスタを作るために、台所へと向かう。

「同じ材料で同じ方法でやれば、同じ味になるんだけどな」

和也が呟くと晴夜は和也の言葉に何か閃く。

「同じ味……同じ材料……そうか！」

「どうしたの？」

「む？何でもないよ」

晴夜は閃いたことを口にせず誤魔化す。

それから夜になり、晴夜は地下室へと戻った晴夜はハザードトリガーを見る。

「これと、エボルトリガーは同じ形状……なら、構造も同じであるはず。」

トリガーの起動を止めれば奴の動きが止まるはずだ……」

ハザードトリガーを見てエボルトのエボルトリガーと同じだと推測する。

「まさか……父さんはこのことを伝えるために……」

あの時、拓人がハザードトリガーを攻撃したのはこの弱点を教えるためだと気づく。晴夜が椅子から立ち上がり、机に置いてあった二つのビルドドライバーを見つめる。

一つはこれまで使っていたビルドドライバー。

もう一つは父：拓人が使っていたビルドドライバー。

それらを見ていた晴夜は父親のビルドドライバーを掴む。

「父さん、力を貸して」

そう言う時晴夜は、父親のビルドドライバーを見つめる。

翌日、工場跡地にマシンビルダーを止め、晴夜はエボルトとの取り引きの場所へと到着する。

「持ってきたか？」

そこには既に完全体のエボルトがいた。晴夜は持っていたロストボトルをエボルトに見せる。

「さあ、そいつを渡せ！」

「お前には渡さない！」

晴夜はロストボトルをしまい込む。

「そう言うと思つたよ。準備万端だろ」

晴夜は拓人のビルドドライバを腰に装着した。

「お前は俺が倒す」

「俺たちに内緒で何、楽しいことしようとしてるんだ！」

声が聞こえ振り向くとそこには龍牙、和也、幻冬の三人がいた。

「お前ら何で……」

何故この場所がわかったのか驚くと龍牙が晴夜にパットを見せる。

「発信機……」

「ありすに借りたんだよ！お前、一人でエボルトを倒すなんてカッコつけさせねえよ！」
「余計な気使わせやがって、俺たちは仲間だろ」

「お父さんのことなら、マナさん達がいるから大丈夫ですよ。」

……あつ、晴夜さんのビルドドライバもまた借りますよ」

幻冬が置いてきた晴夜のビルドドライバを見せる。

「みんな……」

「ハツハツハツハツ！物好きだね〜そんなに死にたいのか？」

「勘違いするんじゃないぞ！俺達は死ぬために来たんじゃないぞ！てめえを倒して、生き

るために来たんだ!」

「右に同じく!」

「左だけどな・・・」

和也に突っ込まれると幻冬は和也の方へと移動する。

「どこ見てんだよ」

「わざとです」

失敗したことをワザだと誤魔化す。

「バカバカだ・・・へへ〜ん!最高だなく♪」

髪をかきながら笑顔で答えると三人も笑顔で頷く。

そのまま四人はそれぞれの変身アイテムを取り出す。

『グレート!オールイエイ!ジーニアス!』

『ボトルバーン!クローズマグマ!』

『ボトルキーン!グリスブリザード!』

『プライムローグ!』

四人は変身アイテムをドライブバーに差し込み、レバーを何度も回す。

『イエイ!イエイ!イエイ!イエイ!』

未来都市を横した様な巨大なステーション型の特殊加工設備『プラントライドビルダーG

「N」

ナツクルに形状が似たオレンジの坩堝型の特殊取鍋『マグマライドビルダー』

同じくナツクルに形状が似たブルーの坩堝型の特殊凍結装置『アイスライドビルダー』

金色に輝く線——特殊加工筒『プライムライドビルダー』にワニの顎が下から出現。

それぞれ四人の準備完了し、音声流れる。

『『『『Are you ready?』』』』』

「変身！」

「『変身！』」

『完全無欠のボトルヤロー！ビルドジーニアス！スゲーイ！モノスゲーイ！』

『極熱筋肉！クローズマグマ！アーチャチャチャチャチャ ちゃちゃちゃちゃアチャー
！』

『激凍心火！グリスブリザード！ガキガキガキガキーン！』

『大義晩成！プライムローグ！ドリヤドリヤドリヤドリヤ！ドリヤー！』

「はあ！」

四人の変身が完了した瞬間、エボルから衝撃波が放たれたが、四人の体が光り、衝撃波を無効にさせた。

「かかってこいー！」

「「うおおおおお！」」

四人がエボルトに向かって突進していく、最初にグリスがロボットアームで先制攻撃を仕掛ける。

「甘いー！」

エボルトはグリスの攻撃を避けると、次の瞬間、ビルド達三人が同時にエボルトに攻撃を仕掛ける。四人掛りでパンチやキックを繰り返す、途切れることのない攻撃をエボルトに続ける。

だが、エボルトは防御しながら、四人を離そうする。

それに対してビルドは、腕にトゲのエネルギーを纏ってパンチしたり、電撃を纏わせたキックを切り出すのが容易に防がれてしまう。

更にエボルトがスチームガンで攻撃しようとしてきたクローズに反撃し、スチームガンの砲撃が直撃し、後ろにいたビルドも巻き込んでしまった。

次にグリスとローグがエボルトに攻撃を仕掛ける。

「強化アイテムでさらに強くなったな！」

エボルトがつぶやきながらグリスとローグのパンチを受け止める。

そのままエボルトは二人を放り投げる。だが、その隙にビルドとクローズが同時に攻撃

する。

「必ず、アンタを倒す！愛と平和を守るために！」

「やれるもんならやってみる！」

そう言いながら、ビルドとエボルは拳をぶつける。

エボルとの戦いが続く中、エボルはどんどんスピードが上がっていき、四人の仮面ライダーを翻弄していた。

「どんどん、スピードが上がってる……」

「まだ、全てを出していないのか……」

「当然だ、人間如きに本気なるわけ無いだろ〜」

後ろを向きでスチームガンをローグに向けて放つ。

「幻冬！ふざけがって！」

「お前達が何のために戦うか、誰のために戦うかなんか関係ない！」

エボルが光弾をグリスに向けて放つ。

「いくら束になってかかって来ようが俺には勝てない……」

後ろからビルドとクローズが攻撃しようとする。

「人間は無力だ！」

エボルがドライバーのレバーを握り、回し出した。

『Ready go!』

『ブラックホール フィニッシュ! チャオ!』

黒く染まったカウンターキックが決まり、ビルドとクロースを吹っ飛ばした。

四人は工場の外まで吹っ飛ばされた。

「どうした。もう終わりか?」

「確かに、俺達人間は一人では、無力だ…」

けど、一人では無理なことでも多くの仲間と一緒に立ち向かう時、俺たちは一人の時よりも可能性が広がり、敗北は勝利と変わる!」

ビルドが言うのと同時に四人の周囲が虹色に輝く数式に囲まれ、ビルドの60ものポトルが光りだし、勝利へと導く法則が導き出されようとしていた。

「勝利の法則は決まった!」

ビルドが決め台詞を叫ぶと 그리스 と 로그 가 エボルに向かっていき拳を繰り出す。

「無駄なことを」

エボルは二人の拳を掴む。

だが、二人はエボルの腕を利用し、背後へと回りエボルの腕を掴み拘束した。

「龍牙! 今だ!」

「わかった!」

『ボトルバーン!』

「負ける気がしねえー!」

マグマナツクルを外しよう一度ボトルを差し込み、エボルにナツクルを当て続ける。だが、エボルに対してダメージがなかった。

「そんな状態で効くわけないだろ〜」

エボルが言うところとエボリスとローグがドライバーのレバーを操作する。

『グレイシヤル アタック!』

『プライムスクラップブレイク!』

グリスとローグもライダーパンチを繰り出した。しかしエボルに攻撃は効いている様子は無い。

「いくらやっても無駄だ」

「なら・・・龍牙!」

グリスがドライバーからブリザードナツクルを外し、クローズに渡す。

クローズはそのままナツクルにボトルを差し込む。

『ボトルキーン!』

「力がみなぎる!俺のマグマがほとぼしる!もう、誰にも止められねえ!」

クローズの決め台詞を叫ぶとともに、二つのナツクルをぶつけ合せる。

『ボルケニツク ナツクル！アチャー！』

『グレイシヤル ナツクル！バリーン！』

マグマとブリザードを纏ったナツクルがエボルのエボルトリガーに命中し、エボルは二つのナツクルに押し出された。

すると、トリガーから電流が流れ、エボルがフェイズ4から最初のフェイズ1へと姿が変わる。

「何、どういうことだ？！体が動かん！」

トリガーが止まったことで、エボルの動きも止まった。

「晴夜！」

クローズが叫ぶとともにビルドがレバーを回しながら高く飛躍した。

『ワンサイド！逆サイド！オール サイド！』

『Ready go！』

「はあく！」

『ジーニアスファイニツシュ！』

後ろのボトルから放たれた虹色のエネルギーが加速となりビルドのライダーキックを放ち、エボルを吹き飛ばした。

「ぐわあああああー！ー！」

ジーニアスファイニッシュを受けたエボルはそのまま勢いよく倒れこむと、ビルドも地面に着地した。

「やるじゃねえか、俺をここまでやるとは……だが……ぐわああああー！」

何かを言いかけると叫びとともにエボルの体が爆発し、煙が晴れ見えてくるとエボルの姿はなかった。

四人はボトルを外し変身を解除し、集まってエボルトの跡を見る。

「勝ったのか……」

本当にエボルトに勝ったのか聞く。

「やったんですよね……」

皆は周りを見渡すが、エボルトはどこにも姿はなかった。

「じゃあ……」

「よっしゃー！勝ったぞー！」

「やったー！」

晴夜達はこれまでの強敵と思われたエボルトの勝利に喜ぶ。

晴夜は拓人のビルドドライバーを見つめる。

「やったよ……ありがとう、父さん」

父に礼を言うビルドフォンから着信音が鳴り出し、電話に出る。

「マナ、どうした？えっ!!？」

マナから電話をもらい。しばらくして、晴夜達は四葉病院へと到着した。

「みんな！」

「みんな、エボルトは？」

「勝ったぜ！」

「エボルトに勝ったのですか？」

「はい、なんとか・・・」

「皆さん、すごいですわ！」

「やったわね。龍牙！」

「おお！」

「それで、父さんは・・・」

「早く入って、お父さんが待つてるよ」

晴夜は拓人の病室に入る。後ろにはマナもいた。

「・・・父さん」

ベットで眠っていた拓人が意識を取り戻していた。

「晴夜・・・」

拓人は晴夜の頭を撫でる。

「また、背伸びたか……」

「伸びてないよ……」

「そうか、もう直ぐ超えられるな」

「……まだだよ。父さん……お帰りなさい」

涙を出しながら晴夜は、父親の意識を取り戻し、再開できたことを嬉しく思い、涙を流す。

「よかったね。晴夜君」

その様子を病室の外から見ていた龍牙達も良かったと感じていた。

その頃、トランプ王国の研究室の部屋にはなんと、晴夜達にやられた筈のエボルがいた。

「奴等、よくもやってくれたな。だが次は……」

「残念だが、次はない」

「何!!?ぐわあ!」

ベールがエボルトの体を貫通させ、しばらくして何かを取り出した。

出てきたのは2本のロストボトル——『ハンマーロストボトル』と『スパナロストボトル』だった。

「ベール……貴様……!」

「このボトルを10本揃えて、あの黒いパネルに差せばワームホールが出来るらしいな」
「俺の計画を奪うつもりか……」

「当たり前だ。俺はジコチューだからな、じゃあな〜エボルト」

ベールが黒いエネルギー波をエボルトに放つ。

既に晴夜達にやられてエボルトはかなり消耗していたため、ベールの攻撃は致命的だった。

「ベールウウウウー!」

ベールのエネルギー波が消えるとそこには既にエボルトの姿はなく、代わりにエボルトライバーが地面に落ちていた。

「お前の計画は俺が引き継いでやるよ」

エボルトライバーを拾い上げるとそう呟き、ベールは後ろへと放り投げるのだった:

次回! Re. ドキドキ&サイエンス!

第51話 新たなるメモリー？涙の授業参観

最終章 『LOVE & PEACE 編』

第51話 新たなるメモリー?涙の授業参観

エボルトの戦いからしばらく時が経ったそんなある日、久しぶりにジコチューが現れる。

公園に現れた長靴ジコチューにプリキュア組が踏み潰されそうになるが、抑えて投げ飛ばした。

「ジコチュー! さっさとアイツらを倒しておしまい!」

跳んだジコチューが水たまりに着地すると飛沫が飛ぶが、ビルド達は躲して、逆にマーモは飛沫を喰らった。

「何すんのよ! お化粧が崩れちゃうじゃない!」

『Ready go!』

マーモがジコチューに文句を言ってる間にビルドがレバーを操作し、高く飛躍する。

『ハザードファイニッシュ! ラビットトラビットファイニッシュ!』

ラビットラビットビルドのライダーキックが決まり、長靴ジコチューが倒れる。

「水遊びは、周りの人に注意しておやりなさい!」

『クロコダイル!』

エースが唇にルージュを塗り、ローグがスチームブレードを装着してライフルモードにしたネビュラスチームガンにクラックボトルを差し込む。

「ときめきなさい! エースショット! ばきゅ〜ん!」

『ファンキーショット! クロコダイル!』

エースショットとファンキーショットが命中した長靴ジコチューは浄化された。

「覚えてらっしやい!」

マーモが引き上げると同時にエースの変身時間が過ぎ、変身が解けた。

「それでは皆さん、帰りましょうか」

亜久里が言うと、ビルド達も変身アイテムを抜こうとするが・・・

「亜久里・・・」

「おばあ様・・・?」

後ろを振り向くと先程の戦闘を、たまたま通りかかった茉莉に見られてしまった。

更に、時間切れとなって変身が解けて元の姿に戻った所も。

「見て・・・いたのですか・・・?」

「亜久里ちゃん・・・」

「最悪だ・・・」

それから夕方となり、幻冬が円家まで亜久里を送る。

「じゃあ、また学校で」

「ええ・・・また・・・」

いつもの口癖である『アデュー』を言わず亜久里は家へと入っていく。そんな亜久里を見て幻冬は心配になっていた。

「ただいま帰りました・・・」

「亜久里・・・」

亜久里が家へと入り玄関を登る。

「明日の授業参観ですが、一緒に出ま——」

「後にして下さい」

顔を下に向け亜久里は部屋の方をへと向かっていき、入っていた。

「おばあ様に見られてしまうなんて・・・わたくしとした事が迂闊過ぎましたわ」

そして、亜久里が部屋に入ってから数時間と経った。

「亜久里、夕食は食べられますか？」

「いえ、結構です・・・」

茉里が夕食は食べられるかと尋ねるが、亜久里は結構ですと答えた。

「さっきの事、気にしているのですか？」

茉里が亜久里にエースから元に戻ったことを気にしてるのと尋ねる。

「わたくしは前から知っていましたよ。あなたが特別な運命の子である事を」

なんと、亜久里が特別な子である事を、茉里は既に知っていたようだった。

「もうしばらくの間は黙っているつもりでしたが、今が頃合いなのかもしれませんね」

そして、茉里が亜久里に話さなければならぬ事を言う頃合いと言い出す。

「以前、わたくしが身寄りの無いあなたを引き取った事は話しましたね。

わたくし達が出会った日の事、覚えていますか？」

部屋の前で正座し、話を始める。

「はつきりとは覚えていません・・・」

「そうでしょう。そのハズです。何故ならあなたはその時——まだ生まれたばかりの

赤ん坊だったのですから」

その時の亜久里はまだ生まれたばかりの赤ちゃんだと、茉里の口から告げられ、亜久

里も驚く。

「あれは1年前、野点を開いた時の事です」

茉里が1年前に何が起こった事を話し出す。

「空から光る何かが降って来て、そこへと向かってみたら、赤ん坊だったあなたがいたのです。」

すると怪物が現れて、わたくしに襲い掛かろうとしました。その時あなたの体が光って、その光が消えた頃にはその怪物はいなくなり、あなたは今の姿となったのです」

おそらく、その怪物というのはジコチューだと亜久里は聞いていた感じていた。だが、それで今の姿になったのかがわからなかった。

「わたくしは不思議な声に従い、あなたを見守って来ました。一緒にいたのは、マナちゃん達と仮面の方は晴夜君達でしょう? 亜久里?」

返事が聞こえなくなったのが気になって、ふすまを開けると、亜久里の姿はそこには無かった。

亜久里は窓の外から、家を飛び出したのだった。

晴夜達がソリティアを出ると同時に、雨が降って来た。

「凄え雨だな」

「変身が解かれた所を見られちゃった以上、私は茉里さんに正直に話すべきだと思うわ」
「俺も六花と同意見だ」

「でも亜久里ちゃんは、茉里さんをプリキュアの戦いに巻き込みたくないって言ってた

し……」

「やはり、ここはまず亜久里ちゃんの気持ちを聞いてみませんか……」

「明日、様子を見に行きましよう」

「そうだね」

「皆さん！」

声が聞こえ振り向くと雨の中、傘を差して走っていた幻冬が現れる。

「幻冬君、どうした？」

「円さんから、亜久里ちゃんがいなくなったて電話があつて……」

『亜久里ちゃんが!?』

亜久里がいなくなったと聞き、晴夜達が驚く。

「それで、皆さんの所に来たんじやないかと思つて……」

「とりあえず、みんなで探そう！」

マナが言うともんな頷き亜久里を探そうとしようとする。

「……亜久里ちゃん？」

すると幻冬が、こちらに向かつて歩く亜久里に気付く。

今の亜久里の姿は、傘を持っていなくなつたためビシヨ濡れで、靴もしていなかつた事から靴下が汚れ、更に泣きそうな表情も浮かべていた。

「亜久里ちゃん……」

幻冬がずぶ濡れの亜久里に傘を被せる。

「どうしたの?」

マナがどうしたのか尋ねると、急に泣き出した。

「六花!時間を巻き戻す装置とか作れませんか!?」

「ええ?」

すると亜久里は六花に時を巻き戻す装置を作れないか尋ね始めた。

「ここは一つ!四葉財閥の力で!」

「それは……」

「晴夜!ジーニアスだったらタイムマシンとか作って下さい!」

「た、タイムマシン!」

「いくら晴夜がジーニアスでもそれは流石に……」

「そうだ!アイちゃんの魔法なら!」

亜久里がアイちゃんに迫る。

「ちよ、ちよつと落ち着いて!」

「とにかく一旦、えくつと、マナの家へ行こう。このままだと亜久里ちゃんが風邪引いちゃうから」

晴夜が言うのと急いでマナの家へと向かい、家と到着した。

『ええ〜っ!??』

「茉莉さん、全部知ってたの!??」

しばらくし、シャワーを浴び、マナが持ってきた部屋着を借りた亜久里が両手で温かいココアの入ったカップを持って、茉莉が全部知っていた事を話した。

「はい・・・全部どころかわたくしの知らない事まで・・・」

「1年前・・・」

1年前と聞き、晴夜は拓人に言われた事を思い出す。

『お前は・・・1年前にトランプ王国の惨劇の時にトランプ王国に来ていたんだ・・・』

・・・と、拓人が言っていた時と同じだと感じていた。

(1年前って、確か晴夜君も・・・)

あの時間聞いていたマナも、拓人が告げた事を思い出す。

「そして、わたくしはいきなり10歳に成長したらしいです・・・」

『へえー・・・』

「えっ!!?驚かないですか!!?」

次の亜久里の発言に関しては、幻冬以外誰も驚くことはなかった。

「それだけですか?結構ショッキングな事を言ったつもりですが・・・」

「だって・・・ねえ?」

「ねえって、なんでみんな驚かないんですか?」

幻冬と亜久里はなぜみんなが驚かなかったのかわからなかった。

「あなた、プリキュアになる時、いつも想いの力で成長してるじゃない」

「そう言えばそうでした・・・」

「えっ!!?そうだったんですか!」

亜久里が自分が前にみんなにその事を言ったことを思い出し、幻冬は初めて聞いて驚いた。——まあ、その時はまだ一緒に戦ってなかったからしょうがない。

「竹やぶで生まれたなんて、まるでかぐや姫ですわね」

「確かに急成長した所も似てるかもね」

亜久里の成長がかぐや姫と同じだと和也とありますが言い出す。

「かぐや姫?」

「人間の世界で育ち、月の故郷へと帰って行ったお話ですわ」

ありますがかぐや姫のストーリーを語り出す。龍牙が亜久里に質問する。

「なあ、亜久里は前にジコチューと戦って負けただって言ってたよな。それっていつの事なんだ？」

龍牙が珍しくまともな質問をする。

「それです！わたくしもそれが分からないのです！ジコチューに負けたのはおばあ様と出会う前、わたくしが持つてる一番古い記憶なのです」

「一番古い記憶って？」

「わたくしには、その前の記憶が無いのです」

「もしかして誕生日とか知らなかったのは、そう言う事だったから？」

「はい。おそらく、敗北のショックによるものだと思いますが・・・」

自分の事がよくわからなかったのは敗北のせいによるものだと考えていた。

「すみません。その話をする、わたくしとおばあ様が血が繋がっていない事を伝えなくてはならなかったので、言えませんでした」

自分のことをあまり話さなかったことを言っ、皆に謝った。

「謝る必要無いわよ」

「そうだせ、謝る必要は全然ねえよ」

それに対して、謝る必要ないと龍牙と真琴が言う。

「赤ん坊のわたくしがおばあ様と出会う前に、ジコチューと戦っていたと言うのは、おか

しな話です」

「確かに……」

「それに、最近よくアン王女とキングジコチューが戦う夢を見るのです」

最近よくトランプ王国の悲劇を、アン王女とキングジコチューの戦いをよく夢で見ると話す。

「もしかしたらジコチューに敗れていたと思っていたのは、わたくしの記憶では無いのかも……」

自分の過去の記憶に自信をなくす。

「そんな夢を見るって事は、亜久里ちゃんは、アン王女の生まれ変わりとか?」

「あり得そうな気もするけど……」

「茉莉さんに亜久里ちゃんを託した人が誰なのかも、気になるわね」

「何より一番分らないのは……」

「わたくしが何者か、ですね」

亜久里が自分が何者かと呟くが……

「僕は、亜久里ちゃんに僕たちと変わらない人間だと思うけど……」

「えっ? 幻冬君……」

幻冬は亜久里は僕たちと変わらない人間だと言う。

「だって、亜久里ちゃんいつも誰にでも優しく、自分が正しい思った事を動じずに言える。だから、僕は亜久里ちゃんは人間だと思っようよ」

「幻冬君……」

幻冬が言ったことが、亜久里の胸に強く響く。

「そうだな……それに、ここには人間じゃないって言われても心を揺るがないバカがいるんだぜ！」

晴夜が龍牙を見て話す。

「そうそう……ん？そのバカって俺のことか？」

「他に誰がいるんだよ」

「はあく！何で俺がバカなんだよ！」

龍牙が椅子から立ち上がり、晴夜の方を揺する。

「だって、お前エボルトの遺伝子があるってエボルトに言われた時、バカみたいに動じずにクローズマグマになったじゃねえか」

晴夜は龍牙がクローズマグマへと初めてなった時のことを話す。

「だから、なんでそこでバカを付けるんだよ！お前だってバカだろ！科学バカだろ！」

「それは、ジーニアスですからしょうがないでしょう。天才ですから」

「そこ自慢する所じゃねえだろ！」

晴夜と龍牙のじゃれ合いと言い合いを久々に見てみんな笑って見ており、相変わらず仲のいいコンビだな思っていた。

「いずれにせよ、わたくしはこれ以上おぼあ様にご迷惑をお掛けする事は出来ません！もう一緒にいる訳には行かないのです・・・！」

「でも、茉里さんの気持ちも考えるべきだと思おうよ」

幻冬が茉里に気持ちを伝えるべきだと言う。

「まずは茉里さんと話すべきなんじゃないかな？」

「ですが・・・」

本当のことを話すことに亜久里が戸惑う。

「亜久里ちゃんはそのでいいの？茉里さんと離れる事になっても」

「わたくしは——」

晴夜に言われ、亜久里の心は茉里とは離れたくないと心の中で思っていた。

「マナー？茉里さんから電話よー」

「はーい！」

茉里から電話が来たと、下にいたあゆみが伝えると、マナーは下へと向かった。

晴夜も茉里に聞きたい事があるため一緒に向かった。

「きつと、亜久里ちゃんを探されていたのですわ」

「亜久里ちゃん、今日は家に泊まってって」

上に戻ったマナと晴夜が亜久里に今日は泊まってってと伝えた。

「安心して。茉里さんにも事情を話したら、許可貰えたから」

「どこまで話したのですか？」

「聞いたよ。明日の土曜は、授業参観なんですよ？茉里さんも楽しみにしてるって」

「そうなんですの？」

「ええ……。保護者の方々の前で絵を描いて、発表する事になってるのです」

「明日はあだし達が、責任持って学校に送りますって言っておいたから」

「あだし達がつて……」

「まさか……」

「うん。みんなも泊まってって。今夜はパジャマパーティーだよ！」

「いいんじゃない？」

「ナイスアイデアだと思いますわ」

「賛成ー！」

「でも……」

「パーティーと言えば——」

亜久里が言いかけるとシャルル達妖精が何かをみんなに見せる。

「『お菓子シャル(ケル)(ランス)(だビイ)!』」

「スイーツ!...はっ!今のは反射的に...」

お菓子を見て目を輝かせるが、すぐに正気に戻った。

「いいからいいから。よしみんな!今夜はとことん楽しもー!」

『おーっ!』

その後、パジャマパーティーが行われ、トランプをしたり、枕投げをしていたりしていた。みんなと遊んで亜久里にだいふ笑顔が戻ってきた。

それより少し遡って、茉里から電話を振り返る。

マナが茉里から泊まる許可を貰うと、晴夜に電話が変わった。

『やはりあの時、亜久里と一緒にいたのはマナちゃん達と仮面の方は晴夜君達、あなた達だったのね』

マナ達がプリキュアで晴夜達が仮面ライダーと見抜かれていた。

「はい。それとその事は——」

『分かっています。誰にも言わないわ』

「ありがとうございます」

晴夜達のこととは黙ってくれろと約束してくれた。

「亜久里ちゃんから聞きました。あの子は普通の人間じゃ無いって事、1年前に赤ん坊の姿から今と同じ姿に成長した事も」

『ええ、その事を話したら家から飛び出して・・・』

「亜久里ちゃんがパニックになるのは当然だと思います。自分が普通の人間じゃない事と、あなたに正体を見られたショックもあって、考える事が出来無かったでしょうから」

『晴夜君、頼みがあるのだけれどいいかしら？』

「ええ、いいですよ」

茉莉の頼みを晴夜はお受けした。

『亜久里のランドセルと靴を、明日の朝にそちらへ運んでくれる？』

「そう言えば、あの時の亜久里ちゃんは靴も履いてませんでしたね」

『明日、授業参観なの、お願い出来ますか？』

「分かりました。じゃあ朝お伺いします」

『お願いしますね』

晴夜もその後、上へと上がっていった。

深夜も深まってみんなが眠る中、既に爆睡していた龍牙と和也。しかし亜久里だけは眠れなかった。

「眠れないの?」

晴夜が眠れないのと亜久里に尋ねる。

「あのね、さつき亜久里ちゃんは、茉里さんに迷惑掛けたく無いって言ってたけど、きつと茉里さんは、亜久里ちゃんの事少しも迷惑に思っただけで無いと思うんだ」

「どうしてそう言えるのです・・・?」

「電話で色々頼まれちゃったんだ。亜久里ちゃんをよろしくって」

「あなたの事を思っていないければ、そんな事は言えないわね」

「大事な人をおいそれ嫌いになれないものよ」

「絆と言うものは、とっても強いものなのです」

「それにキュアエースはキュアエース。亜久里ちゃんは亜久里ちゃん。俺達にとつての大切な友達だよ。茉里さんにとつても、きつとな」

「あなたはどうしたいの?本当に茉里さんと離れ離れになりたいの?」

「一緒に・・・いたいです・・・」

亜久里は涙を流して、茉里と一緒に居たいと、そう伝える。

「じゃあ、その気持ちを明日、しっかりと伝えてみたらいいんじゃないかな?」

「はい・・・!」

「・・・」

その会話を幻冬が寝たふりをしながら聞いていた。

そして翌日。亜久里の通う学校では、親子で一一緒に登校する様子が見られた。

亜久里は晴夜からランドセルと靴を受け取り、晴夜達と共に学校へと来た。

「頑張れ！」

マナのエールを受け取り、幻冬と一緒に学校へと入って行った。

…それから、しばらく経った後、亜久里と幻冬の通う学校にレジーナが現れた。

「何この絵？」

学校の昇降口の近くにあった絵を見た。

「卒業制作、永遠の友情？変なの。こんな描いて、何の意味があるの？」

するとその時、前に自分がマナとの絵を描いた事を思い出す。

「下らないわ。絵なんてモノがあるから、愛が無くならないのよ。人間界から、絵を消してあげる！」

その頃、亜久里と幻冬のクラスでは保護者の似顔絵を描くという課題が出されていた。

(気持ち伝える・・・)

昨日の夜に晴夜に言われた事を思い返しながら真剣に茉莉の絵を描いていた。

「じゃあ、出来た人は手を挙げて」

亜久里が茉莉の絵を描き終えて手を上げようとしたその時・・・

「きやあああああー！ー！」

外から大きな悲鳴が聞こえ、幻冬と亜久里が椅子から立ち上がる。

学校の外にいた晴夜達も悲鳴の聞こえた方へと向かう。

そこで、レジーナが作り出した消しゴムジコチューが現れ、玄関に飾ってあった記念の絵を消そうとした。

「やめろ！」

晴夜がホークガトリンガーを放ち、ジコチューを吹き飛ばした。

「早く逃げて下さい！」

先程悲鳴を上げていた教師に逃げるように促し、それを聞いた教師はすぐさま逃げた。

「ちよつと晴夜！邪魔しないでよ！」

「レジーナ！何してるんだ！」

「学校中の絵を全部消すためよ！ジコチュー！絵なんて全部消しちゃえ！」

壁を突き破り、学校の中へと入って行った。

「おい！ジコチューが学校に入っていたぞ！」

「急いがないと、他の子達が危ないわ！」

晴夜達は急いでジコチューの後を追いかける。

「ジコチュー！やめろ！」

「これ以上の狼藉は、許しませんわ！」

そこに亜久里と幻冬が駆け付け、更に晴夜達も駆け付けた。

晴夜達四人はドライバーを装着し、マナ達はコミューンにラビーズをセットする。

『ラビット&ラビット！』『ガタガタゴットン！ズツタンズタン！』

『グレートクローズドラゴン！』

『ロボットゼリー！』

『デンジャー！クロコダイル！』

晴夜達四人がドライバーのレバーを操作し、四人の周囲からそれぞれのビルダーが出現した。

『Are you ready?』

「変身！」

「プリキュア！ラブリック！」

「プリキュア!ドレスアップ!」

晴夜達四人の身体にビルダーから形成されたアーマーが装着され、仮面ライダーへ。マナ達五人は光と炎に包まれ、光と炎から現れるとプリキュアへと姿が変わった。

『オーバーフロー!紅のスピーディジャンパー!ラビットラビット!ヤベーイ!ハエーイ!』

『Wake up CROSS!Z!Get GREAT DRAGON!Yeah!』

『潰れる!流れる!溢れ出る!ロボットイングリス!ブラア!』

『割れる!食われる!砕け散る!クロコダイルインローグ!オラア!へキヤー!』

『みなぎる愛!キュアハート!』

『英知の光!キュアダイヤモンド!』

『陽だまりポカポカ!キュアロゼッタ!』

『勇気の刃!キュアソード!』

『愛の切り札!キュアエース!』

『!』響け!愛の鼓動!ドキドキプリキュア!』

『愛を無くした悲しい消しゴムさん!このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻して見せる!』

全員が変身を完了し、ハートが胸にハートマークを作っていつもの決め台詞を言う。
「もーっ！いつつもいつつも邪魔してー！この邪魔虫！」

レジーナが叫ぶとエボルドライバーを装着した。

『コウモリ！発動機！エボルマツチ！』

ボトルを2本差し込み、レバーを操作した。レジーナのドライバーから無数のパイプ線が乱雑に現れた。

『Are you ready?』

「変身！」

レジーナの体にパイプ線が集まって、一瞬でマッドローグへと姿を変える。

『バットエンジン！フツハハハハハ　ハハハハハ！』

マッドローグとなったレジーナはドラゴングレイブをビルドとハートに降り掛かる。

「もうこんな事止めて！」

「レジーナ！やめるんだ！」

「うるさい！うるさい！プリキュアも仮面ライダーも消し消ししちゃえ！」

すると、ジコチューが頭突きを仕掛けるが、跳躍してかわす。

「学校の中で暴れるんじゃないやありません！」

「消しゴムマシンガン！」

するとジコチューが両腕の消しゴムをマシンガンのように撃ち出す。

「プリキュア! ロゼッタリフレクション!」

ロゼッタがロゼッタリフレクションを発動し、消しゴムを弾き返す。

『シングル! ツイン! ツインファイニッシュ!』

「はあ!」

グリスはツインブレイカーのツインファイニッシュを放ち、ジコチューに当たるとバランスを崩す。

「ソードハリケーン!」

そこにソードがソードハリケーンを放ってダメージを与える。

その隙に、クローズがドライバーのレバーを回す。

『グレートドラゴニック ファイニッシュ!』

「オラア!」

ダメージを受けたジコチューにクローズのドラゴンパンチを繰り出し、学校の外へと弾かれた。

「一気にカタをつけますわよ!」

「ダメよ。まだいっぱい残ってるんだから」

マッドローグの手には多くの絵が握られていた。

「それは……！みんなが描いた大切な人の絵！」

「大切な人？」

「そうです！大切に、大好きな人に見せるために描いた宝物の絵です！」

「ふーん、そうなんだ。消しちゃえ！ジコチューー！」

マッドローグは手に持っていた絵を全てばら撒いた。

「止めて！」

「レジーナ！それはダメだ！」

「邪魔だと言ってやるの！」

ミラクルドラゴングレイブを振って強風を起こし、エースとローグ以外が吹き飛んだ。

エースとローグは散らばった絵を必死に集める。

「あとは……」

そして、最後に残った亜久里の絵をローグとエースが必死に探す。

「あつた！」

亜久里の絵はなんとジコチューの前にあつた。

ローグが急いで飛び込み、亜久里の書いた絵を掴んで、間一髪絵を守った。

「はあはあ……よかつた！」

「なんでそこまで必死になるの?そんなの貰って、喜ぶ人なんていないわよ?だったら最初から書かなきゃ良かったのよ」

「そんな事はありません」

「おばあ様!?!」

「茉莉さん!?!」

ローグとエースの前に、茉莉が現れる。

「これは、大切な孫が私のために描いてくれた絵です。たとえ消えてしまっても、込められた愛が色褪せたりはしません!」

ローグから絵を受け取り、消えてしまっても、込められた愛が色褪せたりはしないと
言った。

「あなたの想い、伝わりましたよ。ありがとうございます、亜久里」

「おばあ様……」

「亜久里の絵を守ってくれてありがとう。幻冬君」

「茉莉さん……」

茉莉がローグに礼を言うと、エースが茉莉に抱きつく、するとエースの全身が光り出した。

「これは……」

「温かい光……」

光を見てマッドローグが胸を抑える。

「胸が、チリチリする……。ジコチュー！あの二人をやっつけて！」

マッドローグがエースをやっけてとジコチューに命令する。

「あなた達には無理です。何故ならこのわたくし、円亜久里が、おばあ様に指一本触れさせないからです！」

エースが茉莉の前に立ち、茉莉を守ろうとする。

「おばあ様、これからはもつとご迷惑を掛けるかもしれませんが、全力でお守りします！ですから、どうかお傍にいらして下さい！」

「それはわたくしの台詞です」

茉莉も笑顔でエースの願いに応える。

「……皆さん、このジコチューは僕に任せてくれないかな？」

「それならわたくしも——」

「エースは茉莉さんを守るんだ。皆さんもそうしてくれませんか？」

ローグが一人でジコチューを倒すような発言をする。

「許せないんだ。絵に込められた、その人への大切な思いを消そうとした、この人だけは」

そう言うとローグはスクラッシュドドライバーを外し、ビルドドライバーを装着した。そしてプライムログボトルを取り出し、半分に分けて差し込む。

『プライムログ!』

プライムログと鳴るとドライバーのレバーを回す。

『ガブツ!ガブツ!ガブツ!ガブツ!ガブツ!』

ドライバーのレバーを操作すると、金色に輝くパイプ線がログの周囲を囲み、ワニの顎が下から出現した。

『Are you ready?』

プライムライドビルダーがログに纏わりつき、それをワニの顎が砕いた。

『大義晩成!プライムログ!ドリヤドリヤドリヤドリヤ!ドリヤ!』

そして幻冬はプライムログへとフォームチェンジする。

「亜久里ちゃんの絵を消そうとして、みんなの思いが籠った絵も消そうとしたお前は……絶対に許さない!!」

ログがジコチューに向かっていき、それに対してジコチューはログに攻撃を繰り返す。

だがログはすぐさまに避けると、拳をジコチューにぶつける。そのまま、ジコチューに反撃する隙を与えず拳や脚から何度も攻撃を繰り返す。

「ふんっ！」

両手でジコチューの腕を掴み、地面に向けて投げ飛ばした。

「よ、容赦無いわね……」

「あいつ、いつにもなく強えな……」

「俺達より強くなつてねえか……」

異常なまでのローグの強さにみんなが驚く。

「何なのよアンター！」

マッドローグがローグに近づき、ミラクルドラゴングレイブを振る。

その攻撃をかわし、眼前にまで近づいたローグは背中のマントを離し、マッドローグに投げ、周りが見えなくなった隙にローグがキックを繰り出し、マッドローグを倒れこむとマントを再び装備する。

その隙にドライバーのレバーを操作する。

『Ready go!』

『プライムスクラップ ブレイク!』

レバー操作が終わり、拳を振り上げると、地中から黄金のワニのエネルギー体を作り出してマッドローグに噛み砕く。ローグの放った技がマッドローグの動きを封じ、変身解除させた。

「そこで大人しくしている」

ローグがレジーナに気を取られているその隙に、ジコチューが起き上がろうとしていた。

「これで終わりだ!」

ローグは再びドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

ローグは高く飛躍し、ライダーキックの態勢に入ろうとする。

『プライムスクラップ ブレイク!』

ジコチューに噛み付くように両脚で挟み蹴りを繰り出す。既にポロポロだった消し

ゴムジコチューは何も出来ずに直撃を受け、爆発した。

プシケケが持ち主の元に戻り、壊れた物は全て元通りとなった。

「もーっ!ベーっだ!」

舌を出して叫んだレジーナが引き上げた。

時は過ぎて放課後となり、亜久里が茉里と話し合い、後ろに幻冬に晴夜達もいた。

「勝手に家を飛び出してしまって、申し訳ありませんでした!」

茉里に頭を下げて謝る亜久里。

「今回はこの絵に免じて、庭の草むしりで許してあげます」

茉莉に許してあげると聞き、喜びの表情を見せた。

「晩ご飯、何が食べたいですか？」

「おばあ様のキンピラごぼうが食べたいです！」

「分かりました。さっ、帰りましょう」

「はい！あ、それと・・・」

すると亜久里は後ろを振り返り、幻冬に近づく。

「亜久里ちゃん・・・？」

「幻冬、わたくしの絵を守ってくれてありがとうございます！どうございました！」

「あ、いやその・・・えっ？今幻冬って・・・」

幻冬は『君』付けされなかった事に驚いた。

「そうですわ！幻冬も一緒に夕食を食べましょう！ねえ、おばあさま！」

亜久里が聞くと茉莉が笑顔で頷く。

「さあ、行きましょう！」

「えっ!? その・・・」

亜久里は幻冬の手を繋いで家へと走って帰ったのであった…

次回! Re・ドキドキ&サイエンス!
第5 2 話 クリスマスの二人

第52話 クリスマスの二人

崩壊したトランプ王国のレジーナの部屋にベールが現れた。

「キングジコチュー様の周りがジャネジーで満ち溢れています。復活の日も近いのでは」

ベールが報告すると、レジーナは扇子で扇いでいた。

「そう思つて、もう作戦を開始してゐるわ」

「作戦？」

「知つてた？ 扇子つて要の部分が外れるとバラバラになっちゃうつて」

そう言つたとレジーナが要を外し、扇子は見事にバラバラになった。

「プリキュアも仮面ライダーも同じだと思ふのよ」

残骸を見ていて仮面ライダーとプリキュアも同じと応える。

「マナと晴夜さえ居なくなれば、プリキュアも仮面ライダーもバラバラになるつて事」

「なるほど。奴らの気持ちの象徴であるキュアハート、勝利の法則を作り出すビルドを連中から引き離そうと言ふ訳ですか」

「パパの復活を邪魔するものは、アタシがやつつけるんだから！」

レジーナは晴夜達をやつつけると意気込む。

その頃、ぶたのしっぽ亭ではクリスマスを今や今かと待ち焦がれてるマナがテンションを上げていた。

「早くクリスマスが来ないかな！」

今もなお、マナはクリスマスツリーの飾り付けをしながらはしゃいでいる。

「テンション、激しく高いですね」

「もう直ぐ、クリスマスだからね」

クリスマスももう間近なため、テンションが高いと二人が言う。

「まあ、小さな頃からこの時期が一番テンションが高いんだよ」

「そうなのか・・・？」

「ええ、マナは昔から大好きだもんね、クリスマス」

幼稚園の頃から付き合いの和也と六花はお見通しだった。

「うん！あたし、子供の頃はサンタさんになりたかったんだ、皆に愛を届けるサンタさん！」

目を星にして頷きながらマナが小さい頃の夢を話す。

「マナちゃんらしいですわ」

「今年は皆でパレードを見に行けるし、余計に楽しみね」

「うん！メリークリスマス！」

両手をあげていると、立っていた台座が倒れ、マナも地面に倒れかける。

「うわああ！」

「危ない！」

マナが倒れそうになった次の瞬間、晴夜が倒れそうになったマナの手を掴み、引き寄せてマナが倒れるのを防ぐ。

「あっ……！」

晴夜に手を握られ、近づけられたマナが顔を赤くする。

「大丈夫？」

「えっ？うん……ありがとう」

顔を赤くしたのを隠すため下を向き、助けてくれたお礼を言う。
(やっぱり、晴夜君を見ると胸がドキドキする……)

「……(やっぱりマナ、晴夜君のことが……)」

そして、六花はマナの今の様子を見ながらそう考えていた。

すると、扉が開く音が聞こえ、みんなが振り向く。

そこに二人の学生らしき男女が入って来て、シャルル達はテーブルの下に隠れた。

「おやおや、相田マナさんでは、あーりませんか!」

めがねを掛けた男子が言ってくる、マナは晴夜が掴んでいた手を離し、慌てて男子の方を向く。

「え?」

「あなたも生徒会長スピーチコンテストに参加しちゃわない?」

後ろにいた肌が焦げているギャル学生が、マナに『生徒会長スピーチコンテスト』と書かれたチラシを見せる。

「生徒会長スピーチコンテスト?」

「スピーチコンテスト? 初めて聞きますね?」

「知らないの? 生徒会長の中の生徒会長みたいな、つまり・・・」

「キングオブ生徒会長を決めるコンテストではあーりませんか」

二人が『生徒会長スピーチコンテスト』の事を説明する。

「キングオブ生徒会長ですと!?!?」

「それは、是非マナがならないとな!」

「うん!」

晴夜が言う、マナが頷く。

「知りませんでしたわ。キングオブ生徒会長を決めるコンテストだなんて」

「歴代の総理大臣も学生時代に参加していたとは・・・」

「そんな、コンテストがあるなんて驚きました」

『生徒会長スピーチコンテスト』の存在を知った他のみんなも驚き、マナにエールを送る。

「そうになると、やっぱりマナが出ないとね！」

「くうくうっ！燃えるーっ！」

「おお、燃えてるなマナ！」

マナが燃えてると和也と六花がポスターの内容を確かめる。

「あつ！このコンテストの開催日・・・12月24日って書いてあるぞ！」

「ええっ！クリスマスイブ!?？」

マナもポスターに書かれた開催日を見ると12月24日ークリスマスイブとあった。

「しかもドンピシャでクリスマスパレードの時間と被ってる！」

更に時間がクリスマスパレードの時間と被っていた。

「そんな・・・じゃあ出られないかなコンテスト・・・」

「出たほうがいいんじゃない？」

晴夜がマナに出ればいいと勧める。

「そうね、マナにはキング・オブ生徒会長になってほしいもの」

「そうですね」

「それに、こんな機会だから参加してみろよ」

「でも・・・」

「私達とは何時だつて遊べるんだし、がんばつておいでよ」

「だけど、冬休みは生徒会の仕事もやらなきやいけないしー」

と生徒会の心配するマナ。

「そつちは私がなんとかするわ」

「ホントに？」

「だからマナは頑張つてきて」

「六花く！ 恩に着るよ」

マナは嬉しそうに六花に抱きつく。

それからしばらく経つた頃、家の帰宅の道を晴夜と龍牙の二人が歩いていた。

「なあ、生徒会長スピーチコンテストって一体何やるんだよ？」

「それは・・・自分はこういう生徒会長でありたいとかを多くの人に伝えるとかだ」

「ふうくん、それにしてもやけにマナにスピーチコンテストに出るの勧めたな、お前……」
龍牙が何故マナにコンテストに参加するように勧めたのか晴夜に尋ねる。

「俺はただ、マナがやりたいならやらった方がいいと思っただけだよ……」
晴夜が言うのと、二人が歩き続ける。

「失礼ですが、桐ヶ谷晴夜君ですか？」

するといきなり、二人の前に黒いスーツを着た男性が現れ、晴夜を尋ねる。

「はい、そうですけど」

「おっさん、晴夜なんか用なのか？」

「バカっ！失礼でしょうが！」

晴夜が小声で龍牙に注意する。

「お、おっさん……ごほん！」

龍牙におっさんと言われたスーツを着た男性が咳き込む。

「ええ、実は君に是非とも参加してもらいたいものが……」

男性が晴夜にポスターを渡す。

「科学発明研究発表会？」

晴夜は書かれた題名のポスターを読む。

「そこで他の学生達と一緒に発明研究を発表するんだ。私はそこで担当をするものだ。」

是非とも君に参加してもらいたいんだが？」

「他の人の科学を見れるのか？是非とも興味あるな〜！」

男性が晴夜に参加してほしいと言われ、晴夜は髪をかきながら発表会に興味深々の様子だった。

「あれ？この日、マナのコンテスト日と同じだぜ」

「えっ？あ、本当だ」

龍牙に言われた通り、ポスターに記されていた発表日はマナのスピーチコンテストの12月24日と同じだった。

「どうでしょう。来ていただけますか？」

「あ、そうですね・・・」

みんなとの約束もあるため、晴夜が発表会に出るか考え始める。

「出りやいいじゃねえか！お前、こようゆうの誰よりも得意だろ！」

龍牙はその様子を見て、出ればいいと晴夜に言う。

「それは・・・まあいいか、マナだけパレードに来れないのもかわいそうだし・・・わかりました。参加します」

「ありがとうございます。では、また当日に」

晴夜が発表会に参加すると言うと、男性は後ろを向いて二人から離れて去っていつ

た。

「じゃあ、俺これから病院に行くよ」

「お！博士によろしくな」

晴夜はビルドフォンを取り出し、ボトルを差し込むと、ビルドフォンを放り投げる。

『ビルドチェンジー！』

ビルドの専用バイク『マシンビルダー』へと姿が変わり、ヘルメットを被ってエンジンをかけると、四葉病院へと向かった。

その頃、ぶたのしつぽ亭のmanaの部屋で、manaがコンテストで発表するスピーチを考えていた。

「うくん……」

「mana、何か浮かんだシヤルか？」

「ううん、まだ全然進んでない……」

スピーチの原稿が進んでないとmanaが言うと、自分の手を見る。見ていた手は今日の昼間に晴夜に助けてもらった時に握られた手だった。

（晴夜君に握られた手の感じが、まだ残ってる……）

手を見ながらmanaは、晴夜が以前エポルトに向けて言った事を思い出す。

『例え、過ちを犯しても！二度と繰り返さないために、何をすべきか、体系し、研究すべきことが科学の役割だ！俺は人間を信じてる！』

「人を信じる・・・そうだ！」

マナが何かを閃き、ペンを取るとスピーチの原稿を書き始める。

一方、龍牙と別れた晴夜はしばらくして、マシンビルダーは四葉病院へと到着した。そのまま晴夜は病院へと入り、とある病室の前へと到着すると中に入る。

「父さん！」

病室に入るとベットに座っていて何かの本を読んでいる父：拓人がいた。

「そんな、いちいち来なくても私は逃げないぞ」

拓人は本を閉じて晴夜に言う。

「わかつてるけど、やっぱり4年振りにこうやって話せるのが嬉しいんだ」

「そうか、外はクリスマスパレード前で盛り上がってるな」

「うん、みんな張り切ってるよ」

晴夜は病室の窓の外からクリスマスパレードの準備をしている人達の姿を見た。

「やっぱり、いいな。みんなが笑顔でクリスマスを迎えられるのって♪」

晴夜は人の笑顔を見て思っていた。

この人達の、この当たり前でかけがえのない日々を守るために、みんなと戦っていたと。

「その人達が笑顔でいられるのはビルドとして戦ってきたお前のおかげだ」

拓人が晴夜のおかげと言うが、窓を見ながら晴夜は違ふよと首を横に振る。

「俺だけの力じゃないよ。ここまで戦ってこれたのはマナや龍牙にまこびり、六花にありす、かずやん、亜久里ちゃん、幻冬君。みんなと出会えたからここまで来れたんだ」
「だが、その楽しいクリスマスを笑顔で過ごせない人もいるかもしれない」

「笑顔で迎えられない・・・」

拓人の言葉を晴夜は考え込むと、以前マナとアイちゃんまで大貝町のお祭りを回った時のマナの言葉を思い出す。

『お祭り賑やかだね。レジーナも見たら喜ぶだろうな・・・』

その時のマナの気持ちとクリスマスパレードに來れなくなったマナ、本当は一緒に來て欲しいレジーナのことを思い出す。

「——中でもあの時、マナが少し悲しそうな顔していたと感じていた。」

「そうだ！」

晴夜が拓人が言った事と二人の気持ちを考え、そこから何かを閃き出し叫ぶ。

「どうした、いきなり？」

「決めたんだ、今度の発表するものが！」

「発表？何のことだ？」

「うん。24日に発明の発表するらしく是非参加してほしいって」

「ほう、それで何を作るんだ」

「今閃いた。父さんがヒントをくれたおかげで！」

「そうか・・・」

「よし、やるぞ！」

晴夜はまた外を見て発明の何かをイメージしながら考えていた。その様子を拓人は嬉しそうに見ている、誰かのための発明だと信じてくれてそうな表情だった。

「——晴夜。お前に渡さなければならぬものがある」

「えっ？」

拓人が隣の引き出しを開ける。すると、2本のボトルと二枚のカードを取り出して晴夜に渡す。

「これは……」

ボトルの方は白と黒で、それぞれ鳥と蝙蝠の羽のようなモチーフがあった。

もう一つはビルドとクローズのライダーズクレストが記されたカードだった。

「それと、ハザードトリガーをパンドラボックスに入れてみる。そこに私がエボルト達にも隠していた、白パネルがある」

「白パネル？」

「そこから先は、後で自分で調べろ。私からの課題だと思いなさい」

拓人の言う白パネル。

それが何なのか、暴走装置のハザードトリガーをどう使うのかわからなかった。

その頃、菱川家の六花の部屋にはプリントの山を机に置いていた。

「さて、マナがいなくなると忙しくなるわよ」

マナの分まで生徒会の仕事に取り掛かる。

「六花、ホントにそれでいいケル？」

するとラケルがそれでいいのと六花に聞く。

「ホントはクリスマス、マナと一緒に居たいんじゃない？」

ラケルが六花にマナのクリスマスを過ごしたかったはずだと聞く。

「そりゃあね」

彼女の本当の気持ちは、マナと一緒にクリスマスを楽しみたかった様だ。

「でもこの先、高校に行ったり、社会人になったり、お互い夢もあるし：いつまでもずっと、一緒にいられる訳じゃないからね。離れ離れになってもお互い、頑張らないと」
これからの自分の未来への決意を述べる。

それからしばらく経った夜、地下室で発表で出す発明品を晴夜が作っていた。

「この配列が難しいな・・・」

はんだごとと鉛を使いながら発明に神経を研ぎ澄ませていた。

だがその一方で、拓人の言っていたハザードトリガーを使い白パネルをどうやって出現させればいいのか考えていた。

「なんだろ、白パネルって」

『そんなパネルは存在しない!』

白パネルの事を口にするとう兄：巧の音が聞こえ、振り向くと二人の意識の世界へと入っていた。

「兄さん・・・」

「お前は父さんを美化している」

晴夜は拓人のことを美化していると巧が言い出す。

「父さんは俺達を利用して自分の計画のためにエボルトと手を組んでいた」

「それは違う！」

巧の発言は違うと晴夜が言うと言話を続ける。

「それはエボルトを欺くためにやった事だ！本当は俺達のための事も考えていた」

拓人の行動はみんなために俺達を守るためやっていた事だと言う。

「本当にそうかな・・・」

巧は父親である拓人を信用してない言い方でハザードトリガーを見つめる。

「善意のある人間なら、ハザードトリガーなんて暴走装置は設計したりしない・・・」

巧がその場から消えた途端、もとの自分の部屋へと戻っていた。一旦道具を置き、ハザードトリガーを取り出す。

「ハザードトリガーには、何か別の目的があるはず、それを見つめる」

必ずハザードトリガーの暴走装置以外の使い道を見つけようと意気込みながら、道具を再び握り発明に目を向ける。

「でも、今はこれが先だ」

晴夜はクリスマスマスの発表まで完成させようと必死になって取り組む。

翌日、学校の生徒会室では大量のプリントが置かれていた。

「えーっと、書類はこれとこれを仕上げておけばいいのよね？」

左・右の書類を見ながら聞くとマナが頷く。

「よーし！ みんなとの待ち合わせまでにちやっちやと終わらせるよ」
待ち合わせの時間までにと意気込む。

「六花く、クリスマスにあたしが居なくて寂しくないのかーい？」

「全然」

マナは六花に寂しくないとあつさり返されてガックリする。

「それちよつと寂しい・・・」

「わたしはね、マナにキング・オブ・生徒会長になってほしいの！ その為なら、離れ離れでも頑張っちゃおう！」

「六花・・・」

張り切る六花を見て嬉しそうになる。

「よーし、だったらあたしも頑張っちゃおうよー！」

六花を見たマナは自分も頑張ると意気込む。

その後マナは、教室に鞆を取りに戻ると、教室から晴夜が現れた。

「あつ！晴夜君！」

「よう、マナ。今帰り？」

「うん、明日はいよいよスピーチコンテストだから」

「そうか、俺も頑張らないとな」

「えっ？晴夜君も何かあるの？」

晴夜は鞆から男性に貰ったポスターを見せる。

『『科学発明研究発表会』、晴夜君これに出るの？・・・って12月24日！同じ日にあるんだ』

「まあ、成り行きだけどね」

晴夜がチラシを鞆に閉まって言う、マナは顔を赤くして口を開く。

「あのさ・・・！」

「ん？なに？」

「晴夜君、もし・・・発表まで時間があつたら・・・あたしのスピーチ、聞きに来てほしいの！」

「えっ!?？」

スピーチを聞きに来て欲しいと言われ、晴夜は顔を赤くし、後ろへ振り返る。

(えっ!?？これって、まさか・・・よし・・・)

心の中で何かを決意し、マナの方を振り返る。

「いいよ！時間があつたら必ず行くよ！」

「うん！ありがとう！じゃあ、明日お互い頑張ろう！」

そう告げてマナは走って何処かへ行ってしまった。

「よし！じゃ俺も頑張りますか！」

晴夜も発表会に向けて、発明品のために急いで家の地下室へと向かう。

そして、晴夜とマナの発表会当日となった。マナがぶたのしつぽ亭から出てくるとそこには以前訪ねて来た二人の姿があつた。

「でっはくでっはく、参りませうではありませんか〜！」

「レッツゴーゴー！」

「はい！」

三人はスピーチコンテストの会場へと向かう。

同じ頃、晴夜も・・・

「お待たせしました」

「いえ、俺も今来た所です」

完成した発明品を入れた箱を持ちながら待ち合わせの場所で待っていた晴夜の下に、

発表会の参加を頼んできた男性が現れた。

「では、行こうか」

「ええ」

晴夜も発表会の開催場所へと向かう。

その頃、大貝中の生徒会室には作業中の六花と十条に、手伝いに来た龍牙と真琴も居た。

「きついな〜！」

「大変なのね、生徒会の仕事って」

「会長も菱川さんもいつも頑張っていて、尊敬します」

「マナが引つ張ってくれるからね〜」

「僕達も頑張るケル〜！」

「了解」

ラケルとダビイが机下で判押しの手伝いをしていた。

「マナ、大丈夫かな〜？ スピーチ、とちつたりしないといけれど」

六花はマナの心配をすると、それを見た真琴と龍牙は思わず笑みをこぼす。

「離れていても、六花の頭の中はマナの事で一杯ね」

「流石、幼馴染だな」

「はいケル〜」

ちよい驚く六花。ラケルの声に十条が反応する。

「なんですか？今の声」

「空耳よ、空耳」

六花が誤魔化すと、龍牙と真琴も苦笑いし、机下ではラケルがダビイに口封じされていた。

その頃、コンテストの体育館の会場へとマナ達が到着し、中に入る。

「さあ、ここが会場ですー！」

「さっさと入ってくださいではありませんか！」

「失礼しまーす！…えっ!!？」

「遅れてすみません。…えっ!!?なんだよこれ・・・」

「晴夜君！なんでここに？」

「なんでって、会場がここだって案内されたんだけど・・・けど、これは・・・」

中はどう見ても廃校の体育館。コンテスト看板も汚い紙に素人が書いたような書体で、固定はガムテープである。さすがに晴夜とマナもおかしく思う。

すると、二人がスポットライトに照らされる。

「やつほー！マナー！晴夜ー！」

「レジーナ！」

レジーナが現れて二人は声を上げる。

「アタシからのクリスマスプレゼントよ、受け取って」

レジーナが投げキッスをした途端、後ろのドアが閉まり。晴夜とマナが驚くとその隙にめがね男子とギヤル、スーツの男性が二人から離れる。すると、上から降ってきた牢獄に二人が閉じ込められる。

「何事シャル！」

「これは・・・」

「レジーナ、どういうこと？」

「晴夜とマナさえいなければ、仮面ライダーもプリキュアを倒すのは簡単だと思つてね」
「楽勝楽勝」

「いい気味では、あーりませんか」

「あつけない程楽だったな」

「そんな！お前達だったのか！」

「騙されたシャル！」

ここまで晴夜とマナを案内したのはボール達だと知り、騙されたと気づく。

そんな事も知らない六花達のいる生徒会室でも、トラブルが発生した。

「しまった！この書類、今日中に先生に見せないと！」

「え？」

「あとコレも、コレも終わらせないとまずいです。どうしましょう・・・？」

「そんなに!?？」

「とりあえず、コピーしてきます」

十条は書類を持って走って行ってしまった。

「もう、どうしよう〜！このままじゃパレードに間に合わない！どれから手をつければいいのー！」

六花が仕事の量が多い事に慌てながらどうすればいいのかと狼狽える。すると真琴が何かに気付いた。

「ねえ六花、これ」

書類を差し出すと、それには何かメモがついていた。

「マナメモ？」

それは、マナが書いたメモだった。

『六花、いっぱいいっぱいになったら 大きく息を吸って深呼吸だよ！ 大丈夫、六花ならできるー！』

「マナ・・・」

「ここにも何か挟んであるぞ」

今度は包まれた何かに挟まったメモがあった。

『腹が減っては戦はできぬ！お腹が空いたら食べて♡マナ特製オムライスおにぎりだよ』

開けるとそこにはオムライスおにぎりを始めとしたお弁当があった。

「わぁ、おいしそうだビィ！」

「作っておいてくれたんだ」

「ここにもメモが貼ってあるケル」

ファイルにもメモが貼っている。

『六花様ごめん、会計書類貯めちゃった ヨロシクっ 愛してるよ〜』
そのメモをみて呆れて溜息をつく。

「あーあ、まったく」

「なんだかマナがそばに居るみたいね」

「ほーんと、いつもどおりマナに振り回されてるってカンジ」

「でも何か」

「六花嬉しそうケル」

「え、そう？」

ラケルに言われると目を閉じたまま顔を上げ目を開く。

「マナ、あたしも愛してるよ」

六花がマナのことを心の中で想いながら呟く。

「よし、あと少し。頑張ろう！」

張り切る六花にみんな頷いて仕事に取り掛かる。

「あいつも頑張ってるよな」

龍牙も発表会に行った晴夜の事を思う。

「大丈夫よ！アンタのもう一人の相棒でしょう」

「そうだな。よし、俺もやるぞ」

真琴に言われ、龍牙も気持ちを切り替えて生徒会の仕事を手伝う。

その頃、閉じ込められたマナはキュアハートに変身し、晴夜はドリルクラッシュャーで牢屋に攻撃する。

『Ready go!』

ハートは蹴りを三発繰り出し、晴夜はボトルをドリルクラツシャーに差し込み牢獄を攻撃するも、電撃が走るだけで無傷である。

「だめだ、レジーナが言ってた通りビクともしない」

「せめて、俺が変身出来れば・・・」

二人は、自分たちが閉じ込められてから数時間前のことを思い返す：

「これは魔法の檻だから破れないわよ」

「だったら・・・」

晴夜はビルドドライバーを装着し、フルフルボトルを取りだす。

『ラビット！』

フルフルボトルのキャップの栓を回し、変身しようとするが・・・

「無駄よ！その檻で晴夜が変身したら檻は爆破するから」

「えっ!?」

「ビルド。貴様に変身すれば貴様は助かるがキュアハートはどうなるのかな？」

「くう・・・」

ベールの発言で晴夜はフルフルボトルを下ろす。

「じゃあ仮面ライダーとプリキュア倒してくるから大人しく待っててね。バイイ」

レジーナ達はテレポートで去っていった。

そして、今の状況に至る。

「みんな……」

「大丈夫」

晴夜が大丈夫というと、もう一度ドリルクラツシャーを持ち上げる。

「あいつらなら、俺達がいなくても絶対に大丈夫だよ」

みんなを信じてる晴夜の顔を見て、ハートは顔を赤くして胸を抑える。

（……そうだ、この顔だ……あたしが初めて晴夜君を見てドキドキしたの……

いつもと違ったドキドキに）

ハートがドリルクラツシャーで檻を攻撃し続ける晴夜を見て、何かを感じる。

その頃、生徒会の仕事とも終わった六花達はありすや和也達と合流し、パレード会場の『ヨーロッパパーク』と書かれた通り街に歓声をあげる。

「やっぱり毎年すごいやー！」

「美しいですわ」

幻冬と亜久里が町の飾りを見て目を輝かせる。

「龍牙！あっち行つてみよ！」

「お、おい引つ張るなよ」

真琴が龍牙の腕を引つ張つてあちこち周っていた。

「龍牙の奴く羨ましい奴め〜！」

そしてその様子を和也が悔しそうに見ていた。

「マナちゃんと晴夜さんも一緒に来られれば良かったですね」

「でも今頃、きつと頑張つてるんじゃないかな。総理大臣になると言う夢と自分の作った物を試すために」

「そうだな、今日はあいつらの挑戦だもんな」

「いっぱい写真撮つて後で二人に見せてあげよう」

六花が言うところありすと和也が頷く。

その後、パレードが始まり巨大なクリスマスツリーでみんなが記念撮影を取る。

そして、幻冬と亜久里は外で販売されたお菓子を食べに行く。

真琴と龍牙はゲームセンターでもぐらたたきをしていた。

「オラアアアア！どうだ！」

「やったー！また、私の勝ちね！」

もぐらたたきで得点を競い合っていた様で、真琴が勝つと龍牙が悔しそうにしてい

た。

一方、六花はクレインゲームをしており、和也とありすはそれを見ていて、DBはカメラを持っていた。足で吊り上げたのだが、あげたところで落ちてしまう。

「ああ！」

「おしい！」

「こんな時、マナなら絶対とつてくれるのに」

六花は『大丈夫、六花ならできる！』と言うマナの言葉を思い出す。

「ようし、もう一度チャレンジだ！」

「はい！」

「いけえ、六花！」

真剣な表情で六花はもう一度挑戦する。そのままクレインはカエルのストラップ部を見事に吊り上げた。真剣な顔で見るとありすと和也は口を押さえ、そのまま出口に入りカエルのストラップの獲得に成功した。

「わあ！」

カエル人形を振って喜び、見ていた和也とありす達も嬉しそうである。

「やったー！ 獲れたよマナ！」

後ろを向いて報告するが、勿論マナは居ない。

「あ・・・」

「六花ちゃん・・・」

「六花・・・」

「やっぱり六花、マナが居なくて寂しいケル？」

「ううん、寂しくないよ」

しかし、その様子を店の外から見ていたものがいた。

「ふん、強がり言っちゃって」

「やるならとつととやっつけようじゃあーりませんか」

「そうそう。私もゲームで遊びたいし！」

晴夜とマナを閉じ込めここまでできたレジーナが外で六花達の様子を見ていた。

「うわあ！ 綺麗！」

「素敵ねえ！」

“STARPOP CORN”という屋台の前を通過していく通行人達。そしてそこで働く女性店員は、楽しそうにクリスマスを楽しんでいる通行人に嫉妬していた。

「いいなく、みんな楽しそうで。クリスマスなんてなくなっちゃえばいいのに」

通行人を見て、そう眩く女性店員のプシユケーが黒く染まりかける。

「なんて、いけないよね、こんなこと言っちゃあ。みんなハッピーなのに」

だがすぐに先の発見の考えを思い直す。

「いいんじゃない？ クリスマスなんてなくなっちゃえば。

あなたを素敵なジコチューにしてあげる」

レジーナが女性店員のプシユケーを黒く染め、クリスマスツリージコチューへと変える。

レジーナによって作られたジコチューはそのままパレードに集まった人達を驚かせる。

「ジコチューでランス！」

ランスが言うのと、全員がジコチューが現れた外へと出てくる。

「滅入り苦しみます！」

回転すると無数の球体をバラまく。黄色の球体は適度に転がると弾け、同じ色のガスを放出し、続いて青、緑、紫、黄色と弾け、街の建物は落書きの様にカラフル染められてしまっている。

「皆、いくよー！」

六花の掛け声とともに七人はドライバーを装着し、コミュニケーションを取り出しラビーズを

セットする。

『ボトルバーン！クローズマグマ！』

『ボトルキーン！グリスブリザード！』

『プライムローグ！』

龍牙達がドライバーに差し込むとレバーを操作し、マグマライドビルダー、アイスライドビルダー、プライムライドビルダーにワニの顎を下から出現させる。

『『Are you ready?』』

『『変身！』』

『『プリキュア！ラブリック！』』

『プリキュア！ドレスアップ！』

七人が叫ぶと共に七人の体は包まれ、姿を変える。

『極熱筋肉！クローズマグマ！アーチャチャチャチャチャ　チャチャチャチャアチャア！』

『激凍心火！グリスブリザード！ガキガキガキガキーン！』

『大義晩成！プライムローグ！ドリヤドリヤドリヤドリヤ！ドリヤー！』

『英知の光！キュアダイヤモンド！』

『陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！』

「勇気の刃！キュアソード！」

「愛の切り札！キュアエース！」

七人が変身を完了し、名乗りをあげる。

「来たわね、壊れた扇子！」

「レジーナ！」

「壊れた扇子？」

「どういう意味ですか？」

レジーナはハートとビルド以外の七人がやられてる絵が書かれた扇子を見せる。

「マナと晴夜の居ないあんた達なんて、要を失ってバラバラになった扇子みたいなものってこと」

「それじゃ皆さん、派手に戦おうじゃありませんか！（ありませんか！）」

「では、始めましょうか」

ベール達の口調を聞いて、全員がある事実気づく。

「つて、まさか！」

「マナを誘いに来たのは、あなた達だったのですか！」

「じゃあ、晴夜さんの方も！」

晴夜とマナを誘ったのはベール達だと察する。

「うふふ、私の変装が完璧すぎて分からなかった？」

「生徒会長スピーチコンテストや科学発明発表会なんて真つ赤な嘘さ！」

「ビルドのアドバイス通り、ちゃんと工夫して変装してきたぞ」

三人は晴夜とマナはベール達に騙されたところ機嫌に話す。

「マナに晴夜とあんた達を離れ離れにしたかっただけ」

レジーナが七人に、彼らを離れ離れにするためにマナと晴夜を騙したと明かす。

「そんな！許せない！マナと晴夜君の夢を利用するなんて」

「てめえら〜！許さねえ！」

ダイヤモンドとグリスはレジーナの計画を聞いて、許せないと感じる。

「くひひひひ、怒ってる怒ってる」

「ジコチューー！」

ジコチューーが小声で言うのとレジーナがジコチューーに攻撃命令を下す。

「滅入り苦しみますー！」

体から棒の飾りを生やし回転すると七人に向けて放たれた。七人の前に落ちてきたそれには火がついており、間もなく爆竹の様に炸裂する。

ロゼッタがロゼツタリフレクシオンでガードする。だが威力が高いのか表情が歪みだす。

「はああああああつー！」

気配を感じソードがベルルへパンチしようとしたが回避される。そして反撃、掌から光線を発射する。

「くうー！」

クローズが前に出てソードを守る。

「ソードハリケーン！」

ソードが反撃に出たが回避される。

「マナと晴夜はどこですか！」

攻撃しながらエースがマナと晴夜の所在を問う。

「さあな」

「知ってたつて言うわけないでしょー」

「くらえー！」

イーラとマーモが指先から光線発射してきた。ローグが背中のマントを使いエースを守った。

ダイヤモンドはマッドローグとなったレジーナの前に降り立つ。

「ひどいわレジーナ！マナはキング・オブ・生徒会長になる為に寝ないでスピーチ考えてたのに！それに今日の為に一生懸命作った晴夜君の発明品を！」

「簡単に騙される方が悪いのよ」

「manaと晴夜君を返しなさい！」

ダイヤモンドが突撃し、パンチを避け、マッドローグが左回し蹴りを繰り出す。次にチョップを柄で受け止め、ミラクルドラゴングレイブで突くが避けられる。

そのままダイヤモンドからのキックを防ごうとするが、柄で受け止めきれず吹き飛ばす。

「な、なんなのー！」

マッドローグは予想外の強さに驚きを隠せない。だが、それはダイヤモンドだけじゃない。

『クロコダイル！ファンキーショット！』

ローグがファンキーショットを放ち、イーラとマーモがそれを防ぐとその隙にエースのキックに退けられる。

『ボトルバーン！ボルケニックナックル！』

ベールはソードのキックで怯むとボルケニックナックルでベールを吹き飛ばす。

『シングルアイス！グレイシャルアタック！バリーーン！』

ジコチューをグリスのロボットアームで拘束して、ロゼッタのロゼッタウオールでジコチューを攻撃し退けさせる。

「こいつらー！」

「マナと晴夜が居なくてもつえーじゃねーか」

「誰よ！ 要を失えば楽勝とか言ったの！」

予想外のことにマッドローグが槍を強く握る。

その頃、檻に閉じ込められた晴夜とハートは攻撃を続けて牢屋突破に励むが、弾かれるだけだった。

「マナ、晴夜！ 大丈夫シャルか？？」

「大丈夫・・・行かなきゃ・・・みんなの・・・ところへ・・・」

「ああ、早くしないと・・・」

晴夜はもう一度ドリルクラッシュャーで攻撃をする。だが、やはり傷一つつかなかった。

「くそっ！ 引くくらい硬いな・・・」

「・・・晴夜君、変身して！」

「えっ？？でもそれだとハートが・・・」

今ここでビルドになればこの檻は破れるかもしれない。だけど、それだと檻が爆破しても晴夜は助かるかもしれないが、フラついてる今のハートの状態は危険だと感じてい

た。

「お困りの様だね」

聞き覚えのある声を聞いて二人が振り向く。

「マイスイートハートと天才科学者の少年」

その人の顔を見た晴夜とハートは驚く。

二人が驚いている頃、七人はジコチュー達を押していた。

ベールはソードに空中で叩き落とされ、ジコチューはグリスにロゼッタに投げられかけ、イーラとマーマスはエースとローグに振り回され、マッドローグはダイヤモンドのキックを受け止めていた。

「どうして！ マナと晴夜と離れ離れにすれば、あんた達なんかへなちよこだと思ってたのにいー！」

マッドローグが言うどダイヤモンド達が降り立つ。

「生憎私達は離れていても離れはしないの！」

「離れていても離れはしない……？ 意味分かんないわよ！」

ダイヤモンドの言葉の意味がマッドローグには良く分からなかった。

「たとえそばにいらなくても……マナはいつも私達の事を思ってくれている」

「……俺達もあいつらの事を思う。だから俺達は、離れていても……離れはしねえ！」

ダイヤモンドが言うところ、クローズが続けて言うところ、五人も同意見で頷く。

「心はいつも」

「「つながっているから！」」

五人が続けて叫ぶ。

「レジーナ、あなただつて同じ筈。いつだつてあなたの心の中にマナと晴夜君は居る！」

あなたもいつもマナと晴夜の事を考えてるんじゃない？違う？」

「それに本当はもう晴夜のこと許してるんだろ？」

ダイヤモンドとクローズが説得しようとする、マッドローグが怯みだす。

「確かにお前、いつもマナマナ、晴夜晴夜言ってるよな」

「鬱陶しいくらいにね」

イーラがいうとマーモも同意する。

「う、うるさいわね！」

マッドローグは変身を解除し、後ろで言っていた二人に振り向いて怒る。

「同じだな！」

「マナちゃんも」

「マナもいつもあなたの事を考えています」

「晴夜さんもあなたにどう謝ればいいのかいつも考えていました」

晴夜とマナもレジーナの事を考え、謝りたいと思っていた。

「レジーナはどうしているか、辛い思いをしてないか、寂しい思いをしてないか、もう一度、レジーナと話がしたい。マナは何時もそう言ってるわ」

「レジーナにあの時、自分が暴走してレジーナを傷つけたことを謝りたいってな。それでも、一生許してもらえなくてもいい。ただ、もう一度話したいってな」

二人がレジーナに伝えたい事を語り出されると、レジーナが胸の鼓動に襲われる。

「また・・・また胸がジリジリする・・・どうして・・・アタシが好きなのはパパだけの筈なのに」

レジーナが呟くとジコチューが辛そうに後ろ向きに倒れる

「なんだ？」

「何弱ってんのよ」

「レジーナ様の気分がそのまま現れるんだろう」

レジーナの影響によるものとベールが推測する。

「あなたに私達は倒せない。だって、私達、マナと晴夜君と紡いだ愛でつながっているもの」

ダイヤモンドがレジーナの元へ歩み寄ってくる。

「ジコチューー!」

ジコチューーが持ち直し、ダイヤモンドにかかっていくがあっさり投げ飛ばされる。

「レジーナ、あなたもマナの事が好きなんですよ!晴夜君のこと許してるんでしよう!」

「違うもん、アタシは別に。晴夜の事も・・・」

怯んでレジーナが顔を右に向ける。

「いい加減正直に認めなさい!」

「うるさいわね!そうよ!好きよ!アタシだってマナと晴夜が好き!悪い!?それにあの時のことだって晴夜が悪くないって知ってるもん!」

レジーナがマナと晴夜の事が好きと叫び。あの時、晴夜が暴走したことも晴夜は悪くないと叫ぶ。

「それ。ホント?」

レジーナが目を開けると、そこにマシンビルダーに乗って檻から脱出した晴夜とハートが現れた。

「マナ!晴夜!」

「うわ・・・思いつきり聞かれちゃったし」

「はは、はずいなこれ」

先自分が言った事を思い出し、レジーナが顔を赤くする。

「二人共、無事でよかつた」

「皆も！」

「心配させるなよ！」

「悪い悪い！」

二人が無事だと知り、皆も嬉しそうである。

すると、ハートと晴夜はレジーナに駆け寄る。

「レジーナ、さっきの好きって言うの、ホントにホント？」

「レジーナ、あの時のこと、本当にごめん」

「嘘よ・・・嘘に決まってるでしょ」

レジーナは先のは嘘と、そっぽ向いて二人に言う。

「えー、嘘なの？？そんな〜」

ハートが近寄ると、更に近寄られて怯むレジーナの両腕を掴む。

「嘘じゃないでしょ、ホントでしょ。ねえねえねえ、ねえねえレジーナってばあ〜、ねえ〜」

ハートが揺さぶるとレジーナの赤面が全てを物語っている。

「うざいわね〜！」

レジーナが叫ぶとグツタリしているジコチューに怒りぶつける。

「寝てんじゃないわよ！ジコチューー！」

レジーナにジャネジーを注入されたジコチューーがパワーアップした。

回転しながら大量の球と爆竹を飛散させ、晴夜はそれを避ける。

「さあ、実験を始めようか〜！」

口癖を言うのと晴夜はビルドドライバーを腰に装着し、ジーニアスを取り出す。

『グレート！オールイエイ！』

音声が届くと同時にキャップを正面に回し、ビルドドライバーに差し込む。

『ジーニアス！』

『イエイ！イエイ！イエイ！イエイ！』

レバーを回すと、特殊加工設備プラントライドビルダーGNが精製されていった。

『Are you ready?』

「変身！」

音声が流れるとビルドは白いスーツになり、それと同時にボトルに成分が注入され、

プラントビルダーから射出された60本のボトルが全身に装填される。

『完全無欠のボトルヤロー！ビルドジーニアス！スゲイ！モノスゲイ！』

「勝利の法則は、決まった！」

ビルドジーニアスへと変身を完了し、決め台詞を叫ぶとドライバーのレバーを回す。

『ワンサイド！逆サイド！オールサイド！』

ビルドに装着された60本のボトルが光り出し、ビルドの周囲を数式と方式が囲む。ドライバーから虹色に輝くグラフの放物線が現れ、ジコチューを拘束した。

『Ready go!』

ビルドが高く飛躍し、放物線を乗るように勢いよくジコチューに向かってライダーキックを放つ。

『ジーニアスフィニッシュ！』

ジーニアスフィニッシュが決まりジコチューは浄化され爆発すると、プシユケーに戻った。

プシユケーが持ち主に戻ると同時に、周りも元に戻った。

「レジーナ、待って！」

帰ろうとしていたレジーナに待ったをかけるハート。レジーナは帰ろうとしていたが止まる。

「あたし達って今でも友達だよ！この気持ち、絶対変わらない。好きって言ってくれて嬉しかった！」

と目を瞑りながら言うレジーナの瞳の色が赤から青に戻りかける。

「レジーナ、もう一度、俺達と一緒に……」

振り向いたレジーナの瞳は完全に青に戻っていた。

「マナ・・・晴夜」

するとレジーナの瞳が潤い出し、辛そうな顔になる。

「辛い・・・」

「!?」

「マナと晴夜の事は好き、でも・・・パパの事も好きだから」

二人は何も言い返せず、レジーナを見上げている。

「あなた達にはみんなが居るけど、パパには・・・アタシしか居ないもの」

「レジーナ・・・」

『レジーナ!』

突如、自分を——レジーナを呼ぶ声が聞こえた。

「パパ!」

振り向くとそこにはキンググジコチューの巨大な幻影が現れていた。

『何処だ、私の可愛い娘』

その言葉を最後に幻影は姿を消した。

「そうだ・・・帰らなきゃ・・・。もうすぐパパが目覚める・・・」

レジーナの瞳の色が赤に戻り、テレポートして姿を消す。

「レジーナ！」

慌てて走って叫ぶがレジーナの返事はなく、残ったのは雪が舞う薄暗い空だけだった。

そして夜になり、九人は棒立ちで街の中を立っていた。

「マナ、晴夜君、大丈夫？」

六花が心で尋ねると大丈夫と頷く。

「それにしてもよくここが分かりましたわね」

「お兄さんのお陰・・・」

「俺達、ジョーさんのおかげでここに来れたんだ」

ジョーのおかげだと二人が言う・・・

「久しぶりだね」

そこにアン王女と共に姿を消したジョー岡田こと、ジョナサン・クロンダイクが現れた。

ジョーと再会してしばらくした後、晴夜がマナに近づく。

その後、晴夜達はクリスマスパーティーの用意をしてくれたぶたのしっぽ亭へと向か

う。

「晴夜さん、この箱何ですか？」

幻冬が後ろにある箱は何かと聞く。

「ああ、今日発表するために用意した発明品だよ」

晴夜は箱をみんなに見せる。

「でしたら、見せて下さい」

「私もどのようなものか気になります」

「なあ、やって見せくれよ」

「わかった」

晴夜は箱を開けて中にある発明品をみんなに見せる。

出てきた発明品は正方形の形をしていた。

「なんか、思ってたより小さいな」

「いつもはもうちよつと大きいのに・・・」

いつも作ってる武器よりも小さい発明品だと龍牙と真琴の二人が言うと、晴夜は下のスイッチを押し起動させるとそれを机に置く。

『Ready go!』

音声とともに正方形の機械が光り出した。すると光に当たった壁が姿を変える。

「これは……」

「凄い……」

店の中がクリスマスパレードの雰囲気映し出した。

「名付けて『クリスマス立体映像』」

「まんまかよ!」

龍牙は突っ込むが、晴夜の作った発明品は、店の中でも外のクリスマスを醸し出す雰囲気を見せていた。

「……晴夜君、ちょっと付いてきて!」

「えっ?何!」

マナは晴夜の手を繋ぎ、自分の部屋へと連れて行く。

すると、部屋の鍵を閉めた。

「どうしたの?」

いきなり部屋に入れられてどうしたとマナに聞くとこつちを振り向く。

「——あたし、晴夜君のことが好きなの!」

「えっ?」

自分のことが好きだと言われて晴夜は驚く。

「いつも、発明とか研究に目を向ける姿や、誰かのために一生懸命戦って誰かの明日を作ってあげる。そんな、姿を見ていつも胸がキュンキュンするの!」

好きな理由をマナが言うはまだ続く。

「今回のスピーチが書いたのも晴夜君の言葉からなんだよ!」

スピーチコンテストの原稿が書いたのも晴夜のおかげだと語る。

「——最悪だ・・・先に言われるなんて・・・」

すると晴夜は、いつもの癖で髪をかきながら最悪だと言う。

「・・・俺も、マナの事が一人の女性として好きだよ」

「——えっ?本当、いつから?」

晴夜もマナの事が好きだと言ってマナが驚く。

「初めてジーニアスになった時からかな・・・あの時のマナの笑顔を見て、この笑顔を傷つけたくないって気持ちが強くなって、アイちゃんを助けた時にそれを感じたんだ」

晴夜もマナの好きになった理由を伝える。

「それにあの発明品もマナがクリスマススパレードに出られなくて、悲しんでいたから作ったもんなんだ。だから・・・」

晴夜が言いかけるとマナがいきなり晴夜の唇にキスをする。晴夜は驚いて目を大きくする。

「ん．．．！」

そして、マナは晴夜から離れる。

「ありがとう！晴夜！」

呼び捨てにして言うと、今までない程の笑顔を晴夜に見せる。その笑顔を見て晴夜は顔を赤くする。

「．．．最高だな」

小声で最高だな晴夜が呟く。こっちもいつにもなくいい笑顔だった。

「ねえ、聞かせて。マナのスピーチ」

「うん！晴夜に聞いて欲しいの！」

『俺（私・僕）達にも聞かせて！』

ドアから声が聞こえて二人が開けるとみんながドアの外で二人の会話を聞いていた。

「み、みんな、まさか．．．」

「聞いてたの．．．」

二人の質問にみんなが頷く。

「「「マナ（ちゃん）！おめでどう！」」」

六花達がマナの恋が叶って、おめでどうと叫ぶ。

「よかったな晴夜!!」

「羨ましいぞコノヤロー!」

「晴夜さん、おめでどうございます」

龍牙達も晴夜にお祝いの言葉を述べた。

「みんな・・・ありがとう!」

「へへっ、こつちも最高だな!」

「・・・晴夜君」

マナと晴夜が顔を赤くしながらみんなにお礼を言っていると、晴夜の前に六花が近づくと。

「・・・六花?」

「なんだ?」

「・・・」

——マナ、あなたが選んだのなら、私にそれをどうこう言うことはない。

だって、私達はたとえ離れていても、ずっと離れることはないから。

それに晴夜君となら、マナを安心して一緒に居させられるしね。

・・・マナ、私もあなたが好き、だから——

「・・・マナを、絶対に幸せにしてね？」

「ああ！当たり前だ!!」

晴夜は笑顔でそう言い、六花も涙を一粒流しながら笑顔で頷いた。

その後、マナはみんなにスピーチで言うはずだった原稿を読む。

『人は過ちを繰り返すかもしれない。でも、そんな人が次は間違った方には進まないよう導いてあげられる、そんな生徒会長でありたい』とみんなに発表する。

——だがマナは、みんなにスピーチを発表を聞いてもらったよりも、晴夜に思いを伝えられた事が、何もよりも嬉しかった。

次回！Re・ドキドキ&サイエンス！

第53話 悲しき決着！エース対マッドローグ、明かされる全ての過去

第53話 悲しき決着!エース対マッドローグ、明かされる全ての過去

クリスマスから明けて数日経ち、みんなでソリテイアへと集まった。

「えっ? 僕の偽物が現れたのかい?」

以前ベールが偽物になっていた事があつてか、晴夜達はジョーをじーつと見ていた。

「そうか、それは大変だったね」

だが本人はアイちゃんを抱きながら他人ごとのように言う。

「それだけじゃありません!」

六花は立ち上がってテーブルを叩く。

「ジョナサンが留守の間にこっちは大変だったシャルよ!」

「マジカルラブリーパッドを手に入れたり! 仮面ライダーはパワーアップしたり!」

「アイちゃんがイヤイヤ期を乗り越えたり! 晴夜と龍牙はエボルトに体に乗っ取られたり!」

「そもそもプリキュアと仮面ライダーが一人ずつ増えた事も知らないでランスよく!」

シャルル達が説明してる間にジョーは亜久里と幻冬に近づき、亜久里の手を握る。

「初めまして、キュアエース。仮面ライダーローグ」

ジョーは亜久里と幻冬に初めましてと挨拶する。

「君達二人の事はアンから聞いていますよ」

そう言うのと、亜久里の手のひらに口付けをする。

「なっ……!」

それを見て幻冬が驚くとジョーは手を離す。

「アン王女から……?」

「どう言う事ですか?」

「ご覧の通り、アンはまだ目覚めていない」

階段の下でクリスタルに閉じ込められているアン王女を見て、彼女は未だに目覚めていない事を話す。

「けれど、僕もただ無駄に時を過ごしていた訳じゃない」

そう言ってジョーは、見た事無いキュアラビーズをテーブルの上に置いた。

「これは……」

「ラビーズですか?」

「三種の神器の一つ、エターナルゴールデンクラウンさ」

『えっ? ええっ?!!?』

三種の神器の最後の一つであるエターナルゴールデンクラウンだとわれ、全員驚く。

「一体どこでこれを?」

亜久里はどこで手に入れたのかとジョーに聞く。

「あれは、マナちゃん達と別れたすぐ後の事さ」

ジョーはアイちゃんが亜久里の元へ旅立った後、アンからエターナルゴールデンクラウンを探して欲しいと聞いて、探しに行っていたと答える。

「そうして僕は、アンの言葉に従い、この神器を手に入れてたんだ」

「なるほど」

「さっそく使ってみるシャル!」

「オツケー!」

ラビーズをセットして円を刻むと同時に、アイちゃん力も加わって、エターナルゴールデンクラウンが出て来た。

「これが・・・!」

「三種の神器の最後の一つ!」

「この世の全ての知識が詰め込まれていると言われている、エターナルゴールデンクラウン!」

「黄金の冠は、資格を持つ者にのみ知識を分け与えると言われている」

「資格を持つ者か……」

「君達なら、この冠を使いこなせるかもしれないって思ったんだ。それで——」

「何も起きないけど？」

「ジョーが説明してる途中でマナがエターナルゴールデンクラウンを被っていた。

「いきなり被ってるし！」

「流石はマナ。行動が早い」

しかしマナが被るも、何も起きなかった。

「いけません！それは一万年前の物ですよ！もう少し丁寧に扱って下さい！」

亜久里が取り上げたその時、エターナルゴールデンクラウンが光り出した。

「光った？」

——その瞬間、クラウンは亜久里にこれまでのトランプ王国やアン王女の戦いの記憶を次々と見せた。

「亜久里ちゃん！」

亜久里はその衝撃のあまり、気絶してしまった。

「どうしていきなり……」

晴夜は亜久里が落としたクラウンを触る。

「は……!?」

すると、晴夜の頭からいくつかの記憶が蘇る。

——それは、1年前に起こったトランプ王国での惨劇の記憶だった。

「これは……」

その惨劇の中に確かに自分もいた。全て見えた時、晴夜はクラウンを手から離し、フラフラとなる。

「晴夜!大丈夫か?」

「ああ……大丈夫」

龍牙に支えられ大丈夫だと言うが、マナは何かあったのだと気付いていた。

それからしばらく経った後、クラウンを握った亜久里が目を覚ます。

目を覚ますとそこは自分の部屋だった。

「気が付きましたか?」

「おばあ様……」

「マナちゃん達が、あなたを運んで来てくれたのよ」

「そうですか……」

あまり元気のない様子で起き上がる亜久里。

「おばあ様・・・わたくしはどうしたら良いのでしょうか・・・」
目を覚まして早々にどうしたらいいのかと茉莉に尋ねる。

「わたくしは全てを知りました。自分が何者だったのか、どのような運命を課せられて生きて来たのか。——それはとても悲しく、重い運命です・・・」

亜久里はクラウンから見た記憶で、全てを思い出したと言う。

「あまりにも重くて、踏み潰されてしまいそうです・・・！」

しかしその記憶は彼女にとって辛く、悲しいものだったのか、亜久里の目に涙が溜まる。

「わたくしは・・・わたくしは・・・！」

茉莉が亜久里を優しく抱き締める。

「どれ程辛いものであっても、人は運命に背く事は出来ないのですよ。ただ、受け身で押し潰されるのか、自ら立ち向かって未来を切り開くのか、それはあなた次第。

何を成すべきなのか、本当は分かっているのでしょうか？」

「・・・ありがとう、おばあ様。もう迷いません」

母親同然に大切な存在である茉莉の言葉を聞き、亜久里はもう迷わないと決心した。

その頃、地下室で晴夜と龍牙がある実験を始めようとしていた。そこにはパンドラ

ボックスが置かれていた。

「いくぞ」

龍牙が聞くと晴夜が頷いた。そのまま龍牙はパンドラボックスにハザードトリガーを入れた。

すると、パンドラボックスの中が光りだし、箱から白いパネルが出現した。

「おお〜！白パネルだな〜！」

白パネルが現れて龍牙が驚くと、晴夜は白いパネルを外して見せる。

「このパネルの存在は誰も知らない。エボルトの遺伝子を持つ、お前だから出来たものなんだ」

晴夜が白パネルが出来たのが龍牙のおかげだと言うと、白いパネルについて語り始める。

「このパネルは異世界にアクセスすることが出来るパネルなんだ」

「異世界って、トランプ王国に繋がられるのか！」

「ああ、けどこのパネルには別の使い道があるんだ」

「別の使い道？」

龍牙が聞くと晴夜はCDのロストボトルを取り出して龍牙に渡す。

「ロストボトル？」

「キングジコチュー達の手にある黒いパネルとこの白いパネルに10本のロストボトルを装填した状態でパネル同士を合体させれば、物理法則を超えた現象が起こる・・・」

「そうなれば、もしかしてトランプ王国は元に戻るのか?」

「おそらく・・・けど、最終的な事は俺にもわからない・・・」

晴夜がわからないという龍牙の携帯が鳴り出す。

「真琴、どうした・・・わかった直ぐ行く・・・」

「まこぴー、どうかしたのか?」

「なんか、ソリティアに来てくれて。ちよつと行つてくる」

龍牙は上着を取ると地下室を出て行き、ソリティアへと向かう。

龍牙が地下室といなくなると、晴夜は白いパネルを見つめる。

『どうやら、全てを思い出したみたいだな・・・』

すると、自分の中にいる巧の声が聞こえた。

「・・・この記憶を封じたのは兄さん、それともエボルト?」

晴夜はエターナルゴールデンクラウンから見た記憶を封じたのは巧かエボルトなのか、どつちかと聞く。

『・・・記憶を消したのはエボルトだよ。その記憶を持っていると警戒されて、何か都合が悪かったらしい・・・』

巧は記憶を消したのはエボルトだと答える。

「そっか……」

だが晴夜は、別に恨んでいる様子はなかった。

『晴夜、お前は父さんの言う『新世界』。どう考えてる』

「まだ、わからないけど、父さんはきつとトランプ王国を元に戻すことが『新世界』だと思っ」

『そうある事を願いたいね』

巧の声が消えると晴夜のビルドフォンから着信音が鳴り出す。

「どうした……?」

晴夜が電話に出てしばらくするとマシンビルダーを走らせ、大貝町の一望できる公園へとやってきた。

「晴夜……」

そこには、こここのベンチに来て欲しいと連絡したマナが座っていた。

「どうしたの、こんな時間に?」

「こんな遅い時間に何か用かと聞く。」

「ねえ、あの時エターナルゴールデンスクランウンを握って何を見たの?」

マナは晴夜がエターナルゴールドデンクラウンで何かを見た事に、既に気付いていたようだった。

「やっぱり、気付いてるか……」

晴夜はやっぱりマナには隠し事は出来ないと感じていた。

「全部思い出したんだ。あの時、父さんが言ってた言葉の意味を……」

『お前は……一年前のトランプ王国の惨劇の時、トランプ王国に来ていたんだ……』

——そのことを、クラウンを握って思い出したと語る。

「俺は、一年前トランプ王国に行ったんだ……白いパネルで」

晴夜は後ろから先ほどパンドラボックスから出現した白いパネルを見せる。

「一年前、俺は父さんの研究室へと足を踏み入れた。その時、俺はこの白いパネルを見つけていたんだ。そして、あの悲劇を見たんだ……」

一年前、晴夜は行方不明となった拓人の研究室で見つけた白いパネルを拾った。

その時、パネルが光り出し、晴夜はトランプ王国へと飛ばされた。

『……は、一体何が?』

周りを見回した時、そこにいた人は慌てて逃げていた。

晴夜が上を見上げるとそこには多くのジコチューが人々を襲っていた。

それだけじゃなく、逃げてる人も次々とジコチューになっていった。

『何だよ、これ……』

晴夜は何が起こっているのかわからず、ただ逃げる事しかできなかった。

『はあ、はあ……なんだよこっちは?!』

晴夜が息を切らしながら何がどうなってるのかと呟く。すると、泣いている子供の姿を見えた。

『危ない!』

ジコチューが子供が襲おうとしていたのを見ていた晴夜は、子供を庇って守ろうとした。

その瞬間、誰かが強烈なキックを繰り出し、ジコチューから晴夜達を救った。

『誰……』

顔を上げて見てみると、そこには赤と青の姿をした仮面の戦士がいた。

——そう、晴夜と子供を守ったのはラビットタンクフォームの仮面ライダービルドだった。

『大丈夫か?』

ビルドが子供にそう聞くと大丈夫と頷き、子供は晴夜にお礼を言って去っていった。
『あの……あなたは』

晴夜は何かあったのかわからず、髪を抑える。

『ツ！……お前はまさか、晴夜か？』

その癖を見たビルドは晴夜なのかと問う。

『えっ？』

ビルドはドライバーからボトルを外し変身を解除した。その正体は自分の父親：桐ヶ谷拓人だった。

『父さん！なんで、父さんがここに！』

『お前こそ、何故ここに！』

『このパネルを拾ったら急にこっち……』

晴夜は白いパネルを父に見せる。するとそれを見た拓人は驚く。

『……晴夜？！こっちだ来い！早く！』

拓人は晴夜を連れて、王宮にある魔法の鏡の部屋へと行く。

『父さん……ここは？』

『いいか、晴夜！この世界はもう保たないかもしれない。奴らはこの世界を滅ぼしたら、奴と共に私達の世界にも進行するかもしれない！』

『何言ってるんだよ?』

『いいか、この世界と私達の世界を守るための最後の可能性を持つのは——!』

『・・・誰なのそれ・・・』

知らない名前を言われ、混乱すると拓人は笑顔で晴夜に言う。

『4年ぶりにお前の顔を見て嬉しかったよ。生きてれば、また会おう、晴夜・・・』

『待つて!父さん!』

白パネルを預かった拓人は晴夜を魔法の鏡へと入れ、晴夜は人間界へと戻った。

その後、晴夜は研究室へと戻ると、そこにブラットスタークのエボルトが現れ、晴夜からトランプ王国の惨劇を見た記憶を消した…

『そんな事が・・・』

『最悪だよ・・・こんな時に思い出すなんて・・・』

そう呟きながら、晴夜は白いパンドラパネルを強く握る。

「あの時、俺に誰かを守る力があるなら、助けられた人がいた筈なのに・・・」

——もしあの時、自分にライダーの力があつたなら…

——もしあの時、誰かの為に少しでも多くの手を差し伸べられたのなら…

あの時の無力だった自分が、悔しくてたまらなかつた。

その時、後ろを振り向くとマナが晴夜をギョツと抱きしめる。

「マナ……」

「大丈夫、今の晴夜ならあの時、助からなかった人を助ける事ができる。

それが、愛と平和を守り続ける、仮面ライダービルドだよ」

抱きしめながらマナが晴夜を励ます。

「……やっぱ、俺っていつもマナに救われてるな」

晴夜はマナにいつも救われてると呟くと、マナは晴夜から離れる。

「そうだな、俺がこの力を使ってるのは、誰かの明日を作って守るためにある。だからこそ必ず、トランプ王国を取り戻して見せる！」

「うん！みんなとなら絶対に出来るよ！」

晴夜とマナは大貝町の光り輝く景色を見ながら、トランプ王国を救うと誓う。

その頃、ソリティアへと真琴の連絡を受けた龍牙がやってきた。真琴と龍牙が中に入る。

すると、ジョーが二人にトランプを投げ、二人はこれを片手でキャッチした。

「やあ。君達も呼ばれたんだね」

ジョーが二人に振り向くと、

「お揃いですわね」

亜久里とアイちゃんが入ってきた。

「何でアイちゃんまで？」

四人をソリティアに呼んだのは、亜久里だった。

「何だい？大切な話って」

「これです」

そう言うとき亜久里は、アンが入っていた氷づけのクリスタルを自身の力で粉々にした。

「王女様！」

「なんで！」

「何をするんだ！」

クリスタルが粉々になって三人が驚く。だがそのクリスタルには、アン王女が入っていなかった。

「どうなってるんだ・・・」

「今まで見ていたのは幻。これは、ジコチューを欺き、時間を作るために王女が用意した影なのです」

クリスタルにいたアン王女は偽物だと知り、三人は驚く。

「ゴールドデンクラウンは、わたくしに全てを教えてくださいました。お話ししましょう。隠された王国の真実を——」

亜久里はゴールドデンクラウンから見た真実を四人に全て伝えた。

そして、それを聞いた四人は驚いて声が出なかった。

「そんな・・・そんな事って・・・！信じられない・・・！」

驚きの余り、真琴は持っていたコーヒーカップを落としてしまう。

「マジかよ・・・じゃあ、今までのことは・・・」

「しかし、君の話が本当なら、どうやら、これまでにバラバラだったピースが全て収まる・・・！」

ジョーは亜久里の言ってる事はこれまでの辻褄が合うと推測されると話す。

「クローズ、キュアソード、ダビィ、ジョナサン、これまで王女のために頑張ってくれてありがとう。心からお礼を言います」

亜久里が四人に、アン王女のためにありがとうとお礼を言う。

「わたくしはこれから、レジーナと決着をつけるためにトランプ王国へ参ります」

亜久里はこれからトランプ王国へ行つて、レジーナと決着をつけると言い出す。

「そこであなただ達にも、戦いの行く末を見届けて欲しいのです」

亜久里は四人にもその戦いを見届けて欲しいと頼み込む。

「決着って……!!」

「待つて!どうしてマナと晴夜に打ち明けないの!？」

「晴夜とマナに話せばもしかしたら——!」

「それは出来ません!」

亜久里はこの事を晴夜とマナには話すことは出来ないと呼ぶ。

「亜久里ちゃん!」

「マナと晴夜ならきつと、戦わずに済む方法を探すハズです。わたくしとレジーナのどちらかが倒れても、二人には耐えがたいでしょうから」

亜久里は二人の気持ちを考えて、話したくないという気持ちがあった。

「ですが、この戦いはわたくし達に課せられた運命。避けて通る訳には行かないのです。無理にとは言いません。納得出来ないのであれば、どうぞお帰り下さい」

「行くよ。君達はどうする?」

ジョーが立ち上がると龍牙と真琴、ダビィに二人の戦いを見届けるために行くかと聞く。

正直、行く行かないにしてもどちらも苦しい決断だった。

次の日、マナ達はぶたのしっぽ亭の前におせちの買い出しをするために集まってい

た。

「ごめん、お待たせ」

晴夜がぶたのしつぽ亭へと到着した。

「あれ？龍牙は？」

「一緒じゃなかったの？」

「いや、先に行つたつて聞いたんだけど・・・」

晴夜が言うが来てないのは龍牙だけじゃなく、真琴と亜久里も来てなかった。

「遅いね・・・」

「どうしたんだろ？」

「まこびく！どうしたんだー！」

真琴がいない事に、和也が酷くシヨックを受けていた。

「和也さん落ち着いて下さい。でも遅刻だなんて珍しいですね」

「おせちの材料の買い出しまでには、きつといらつしやいますわ」

晴夜達は三人が来るのを待っていた。

「大変シャル！」

いきなりシャルルが慌てて現れた。

「アイちゃんも居ないケル！」

ラケルからアイちゃんが居ないとみんなに言う。

「あのー!」

「森本さん。なんでここに?」

すると、亜久里の友達の森本エルが慌ててやってきた。

「亜久里ちゃんはいますか!?」

「何かあったの?」

「昨日、亜久里ちゃんが家に来てこれを・・・柴崎君にも・・・」

幻冬にも亜久里から渡された絵を渡すと、エルは亜久里が描いた自分の似顔絵を見せる。

「亜久里ちゃん、何だかいつもと違ってて・・・そう思ったら、もう二度と会えないような・・・そんな気がして来て・・・それで、亜久里ちゃんの家に行ってみたんですけど、いないんです・・・!」

「亜久里ちゃん・・・」

不安となった幻冬は走り出して亜久里を探そうとする。

「あたし達も亜久里ちゃん達を探そう!」

「(嫌な予感がする・・・早く探さないといけない気がする。まさか、龍牙とまこぴーも・・・)」

! ああ、馬鹿が・・・!」

晴夜達も亜久里を探そうと走り出す。

同じ時、トランプ王国ではレジーナが不機嫌そうに巨大なパフエを食べていた。

「おかわり！」

「はいはい！」

ベールが新しい巨大パフエの容器を運ぶ。

「ご機嫌ナナメみたいね」

(マナ・・・晴夜・・・アタシの気持ちも知らないで・・・)

レジーナはメロンソーダをストローで飲みながら心中で呟く。

「まあ何はともあれ、キンググジコチュー様は間もなく完全復活。そうなれば——」

「うるさいわね！アンタに何が分かるって言うの！」

そう言つてレジーナは巨大パフエのおかわりを傍に置く。

「おお怖っ」

その時、謎の揺れと光が生じた。

その光が消えると、マジカルラプリーパットの力でレジーナ達の前に龍牙・真琴・亜久里・ジヨナサンが現れた。

「お前達!どうしてここに!?!?」

「あなたと決着をつける事が、わたくしの運命だからですね。レジーナ」

何故プリキュアとクローズがいるのかとベールが問うと、亜久里はレジーナを決着を付けるためだと言う。

「フン、何をバカな事を・・・」

すると亜久里が、持っていたエターナルゴルデンクラウンをベール達に見せる。

「ツ!それは・・・!」

「まさか・・・エターナルゴルデンクラウン・・・!」

エターナルゴルデンクラウンを見てベール達が驚く。

「その通りです。わたくしのゴルデンクラウンとあなたが持つドラゴングレイブを賭けて、一騎打ちを申し込みます!」

「それだけじゃねえ・・・」

龍牙は晴夜が持っていたCDロストボトルを見せる。

「お前らが持つてるロストボトルと黒いパネルも、この勝負に勝ったらこつちに渡せ」「負けたら、こつちのロストボトルとパンドラボックスも渡すわ」

エターナルゴルデンクラウン、ロストボトルとパンドラボックスも賭けての一騎打ちをレジーナに申し出た。

「あははははっ！」

レジーナは一瞬睨んだが、すぐに笑った。

「面白いじゃない！あなたの事は前からコテンパンにしてあげようと思ってたの」

ソファを足で叩きミラクルドラゴングレイブを握ると、エポルドライバーを装着する。

「その勝負、受けてあげるわ」

レジーナはボトルをドライバーに差し込む。

『コウモリ！発動機！エボルマツチ！』

ボトルを2本差し込み、レバーを操作した。するとレジーナのドライバーから無数のパイプ線が乱雑に現れた。

『Are you ready?』

「変身！」

レジーナの体にペインライドビルダーが一瞬に纏わりつき、マッドローグへと姿を変える。

『バットエンジン！フツハハハハ　ハハハハ！』

レジーナがマッドローグへと変身したのを確認した亜久里達も変身をしようとする。

「アイちゃん、行きますわよ」

「きゅぴー!」

龍牙はビルドドライバーを装着し、真琴はコミュニケーションを取り出す。

「プリキュア!ドレスアップ!」

『ボトルバーン!クローズマグマ!』

「変身!」

「プリキュア!ラブリンク!」

龍牙の体がマグマライドビルダーから流れ出たヴァリアブルマグマが、真琴の体が光り、亜久里は七つの炎のシルエットに包まれて姿を変える。

『極熱筋肉!クローズマグマ!アーチャチャチャチャチャ ちゃちゃちゃちゃアチャー!』

「愛の切り札!キュアエース!」

「勇気の刃!キュアソード!」

三人が変身を完了すると、クローズとソードはジョーと共にエースから離れる。

「行かせねえ!」

「あなた達に邪魔はさせないわ!」

「大人しく見ていて貰おうか!」

「何よ偉そうに!」

クローズとソードとジオナサンがイーラとマーモの前に出て道を塞ぐ。

「キュアエースはアタシの獲物よ！アンタ達はそこで見てなさい」

「行きますー！」

エースとマッドローグによる一騎打ちが始まった。

二人の激しい戦闘が繰り広げられ、その余波で建物が崩れ落ちる。

「さて、レジーナ様のお手並み拝見と行こうか」

その様子を見ながら、ベールは何かを狙っているかのような笑みを見せる。

「なーに？逃げてばっかじゃ決着なんかつかないわよー」

マッドローグがミラクルドラゴングレイブからエネルギー刃を放つが、エースは逃げながらこれを躲す。しかし、逃げた先の建物が崩れ落ち、エースが落下して行く。

「意外とあつけないのね！」

「あなた、深追いし過ぎですわ」

追撃を仕掛けるが、エースはミラクルドラゴングレイブを両腕で捉えた。

「このー離してよー！」

縦に振り回して両腕を放され、強烈な一撃を叩き込むが、マッドローグには命中しておらず、その上空でエネルギーを溜めていた。

「行っちゃえー！ドラゴングレイブー！」

エネルギー波を放つが、エースはかわす。

「もう……こっちに倒さないでよ!」

そのエネルギー波によって、また建物が崩れ落ちた。

クローズとソードは建物が崩れるため移動しながら二人を追う。その途中、ソードは二人の戦いが見ていられなくなった。

「目を逸らしてはダメだ!」

「でも……!」

建物を自力で登るジョーがソードに向けて叫ぶ。

「これは、彼女が選んだ運命なんだ!最後に勝つのはレジーナなのか、キュアエースなのか、僕はそれを見届けなければならぬんだ!」

「けど……」

するとジョーが手を滑らせて落ちるが、その危機をクローズとソードに救われた。

「分かってる!分かってるけど……!」

「これが、本当に避けられない運命だとしたら……!悲し過ぎる……!」

「クソツォー!俺たちは何も出来ねえのかよ!」

クローズが地面を思い切り叩いて叫ぶ。

一方、ソリテイアに晴夜達が到着した。

「亜久里ちゃん！」

「亜久里ちゃん！どこに！」

幻冬が慌ててソリテイアの中を徹底的に探そうとしていた。

「三人はここに来ていたんですわ！」

「ジヨナサンもいないケル！」

ラケルがイスの上に四人のコートが置いてあつたのを見つける。

「なんだよこれ？」

和也が粉々となつたクリスタルに気付くと、晴夜もそのクリスタルを見て何かを感じる。

「これ、王女様が入っていたクリスタルだ．．．でも、王女様はいない．．．」

「王女様はどうなつたの．．．？」

「一体何が起こつてるシャル!?？」

この粉々になつた残骸を見ても、彼らには此処で何が起こつたのかわからなかつた。

「スペードのカード？」

すると晴夜は、クリスタルの残骸に刺さつてたスペードのAのカードを見つける。

その時、ラブリーパッドが突如晴夜達の前に出た。

その頃、トランプ王国での運命の戦いを繰り広げる、二人の決着がさらに激しくなっていた。マッドローグはドラゴングレイブからエネルギー波からエースに向けて放つ。

「ラブキッスルージュ!」

ドラゴングレイブのエネルギー波をラブキッスルージュで上から急降下して突き、これを消滅させた。

「やるじゃない」

「当然ですわ」

エースとマッドローグの実力はエースの方が少し押していた。

「でもよー、勝ちは見えてんだろ?もうすぐ5分経つぞ」

「そうしたらもうプリキュアじゃいられなくなるわ」

二人はエースの最大の弱点、5分過ぎると強制的に変身が解けてしまう事を指摘する。

「甘いですわね。わたくしにはもはや時間の制限などはありません。ゴールデンクラウンの知恵を得て、真のエースに目覚めたのです」

勝利が見えたと思ったその時、エースが高速でマッドローグの前まで飛んでそう言った。

「ゴールデンクラウンの真の力を得たキュアエースは五分と言う時間制限が無くなり、いつまでも変身したままでいられるようになったのだ。」

「何それ!??ズルい!」

「エースミラーフラッシュ!」

それを聞いたマッドローグはズルイと文句を言うが、エースは気にせずエースミラーフラッシュを放って目くらましをし、蹴りを叩き込んで落下させる。

「これで決めます!ときめきなさい!エースショット!ばきゅん!」

エースがトドメを刺そうとエースショットを放つ。

「バカにしないでよね!」

マッドローグはそう言うのとドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

マッドローグの背中から蝙蝠の羽『マッドナイトフライヤー』が出現し、更にドラゴングレイブにエネルギーが溜まっていく。

『エボルテックアタック!チャオ!』

マッドローグも負けじと竜の形をしたエネルギー波を放った。

二つのエネルギーがぶつかって相殺され、大爆発が起きた。

そして爆発が収まると、エースとエボルドライバーが破損し変身解除したレジーナが倒れていた。

「本当に……ここまでやり合わなきゃいけないのかよ……?」

（どうすればいいの……?二人が傷つけ合うのを、私達は見ている事しか出来ないの……?）

クローズとソードはこの二人の決着は、やはり納得の行かないものだと感じていた。

（神器を持つ者同士が本気でぶつかれば当然ただでは済まない。二人が弱った所で全ての神器と奴らが持つ最後のロストボトルを奪い取れば、俺様がナンバーワンだ）

一方、自分の野心が叶う瞬間だと思ふベールが指を鳴らすと、海からイカジコチューがエースを囲むようにして三体現れた。

更にレジーナの方にはゴリラジコチューが現れた。

「行けジコチュー達!キュアエースを倒すのだ!（レジーナもろともな）」

エースとレジーナを倒す好機だとベールは笑みを浮かべる。

「アイツ……!」

「抜け駆けするつもり!?」

「エース!レジーナ!」

「あいつら……!」

クローズとソードが助けに向かおうとするが、クモジコチューの糸によつて身動きが取れなくなつた。すると、クローズが持つていたロストボトルが落ち、ボールがそれを拾う。

「手出しはしねえ約束だろ!」

「そんな約束、した覚えは無いな」

ロストボトルを見せながら約束を覚えてないと言う。

(どちらかが正しいだなんて私には分からない!けれど、私は……!)

(亜久里もレジーナも、どっちも失いたくねえ!)

「マナー……晴夜……!!?」

ソードがマナと晴夜の名前を叫んだその時、上空から放たれた光が囲んでいたジコチュー全てを吹き飛ばした。

「何っ!?」

そこに現れたのは、ビルドジーニアス、ハート、ダイヤモンド、ロゼッタ、グリズブリザード、プライムローグの六人だった。

「みんな!」

ソードがダイヤモンドとロゼッタに抱きつく。

「あの、まこぴー。俺には……」

グリスは二人に抱きつかれて羨ましいそうに言う。

「あなた達……」

「大丈夫、エース」

「ええ……」

「なんで、相談してくれなかったの……」

ローグがエースを介抱して立ち上がらせて何故相談してくれなかったと尋ねると、ビルドはクローズに近づく。

「つたく、無茶しやがって」

「悪かった……」

ビルドの手を掴みクローズが起き上がる。

「みんな!行くよ!」

ハートの声と共に九人がジコチューに構える。

「行け!ジコチュー!」

ベールの指示で吹き飛ばされたジコチュー達が九人に襲いかかる。

ビルド達四人はフルボトルバスター、マグマナツクル、ブリザードナツクル、スチームブレードを取り出す。

「「「プリキュア！ロイヤルラブリーストレートフラッシュ！」「」」

「「「はあくはあああああー！！？」」「」」

ハートがマジカルラブリーハープの弦を爪弾くと、空中で組み立てた陣形の中央から、ロイヤルラブリーストレートフラッシュを放たれた。

ビルド達はそれぞれの武器を地面に向けて放ち、地表を通過してジコチューに直撃した。

星屑のように拡散して降り注ぎ、舞い上がる金色の羽根の中すべてのジコチューが浄化された。

ジコチューが全て浄化されると、エースがラブキッスルージュをレジーナに向けるが、ビルドとハートが庇うようにして前に出ている。

「どいて下さい」

「嫌だよ！何で二人がそうまでして戦わなきゃならないの！！？」

「どうしてこうなったのかわからないけど、戦う必要はないはずだ」

ビルドは二人が戦う必要はないという。

「これが、わたくし達の運命だからです！」

「何なのよ、さつきから運命って」

「一体どういう事なの！？説明してよ！」

ロークが何故こんなことになったのかと聞くとエースはルージユを下ろす。

「分かりました。ここまで来てしまった以上、話さない訳には参りませんね」

エースはここに来たビルド達にも真実を話そうとする。

「わたくしと彼女は、決して相容れる事の出来ない関係」

「どういうことなの、それ？」

エースとレジーナの二人が相容れる事が出来ない関係、ローク達にはその理由がわからなかった。

「元は一つの命、アン王女から生まれた光と影なのです」

「一つの存在から．．．二つの存在が生まれた．．．!?？」

「王女様の．．．」

「光と影．．．」

するとエースは自分とレジーナはアン王女から生まれた光と影。元は一つの命である事を告げたのだった。

「レジーナとキュアエースが．．．光と影．．．!?？」

「王女様から生まれたって．．．」

「どういう事ですの．．．?？」

「龍牙!まこぴー!一体どういうことだ．．．」

ハート達はクローズとソードにどういふことだと聞く。

「な、何言ってるの、二人が光と影って?」

何故、二人が光と影なのかわからなかった。

「あははははっ! そうやってアタシを惑わそうとしても無駄よ。アタシはね、あなたを見てると、胸がムカムカするんだから!」

笑ってから立ち上がり、エースを指差したレジーナが叫ぶ。

「それは、あなた自身を見てるからです」

「アタシ自身?」

「あなたに真実を知る勇氣があるのなら、お見せしましょう。わたくし達の運命を!」
持っていたラビーズがエターナルゴールデンクラウンへと変わった。

「さあ」

エースがレジーナにクラウンに触るよう促す。

「み、見ればいいんでしょ! さっさとよこしなさい!」

エターナルゴールデンクラウンを奪うようにして取ったその時、レジーナの全身が光に包まれた。

「!?」

「レジーナ!」

「これは・・・エース、一体何が起こったんだ」

レジーナに何が起こったのかエースに聞く。

「彼女は今、ゴールデンクラウンに刻まれた王国の記憶を見えています」

「王国の記憶・・・？」

「そこにあるのですね。お二人の真実が」

「それを今、レジーナが見てるのか？」

「キュアエース、あたし達にも見せて！」

「見たいんだ。二人の真実を」

「分かりました。目を瞑って、わたくしと心を重ねて下さい」

ビルド達が頷き、互いに手を掴み、目を瞑る。

「行きます」

エースがエターナルゴールデンクラウンを掴むと、ハート達もレジーナ同様光に包まれ、近付いたアイちゃんも姿を消した。

「(ト)は・・・」

目を開けると全員変身が解けて宙を浮いていた。

「平和だった頃のトランプ王国です」

「これが、本当のトランプ王国……」

晴夜が眩くと白い髭を蓄えた男性と、その男性に抱かれた赤ん坊の光景が晴夜達の前に出てきた。

「あの人は……」

「トランプ王国の国王様だビィ！」

「あの人が亜久里ちゃんとレジーナのお父さん……？」

「と言う事は、王様に抱かれているのは……」

「アン王女なのか？」

「はい。アン王女です」

そう、トランプ王国の国王に抱かれた赤ん坊こそ、後のマリー・アンジュことアン王女である。

「王女様……」

「アン王女はこの世に生を受けた時、同時に母を失いました」

『我が娘、マリー・アンジュよ、お前は母の分まで生きるのだ。人々に夢や希望を与えるこの太陽の如く、光り輝くのだ』

国王は夜明けと共に現れた太陽に重なるようにアンを持ち上げて言った。

「これが、アン王女の始まりだったの……」

「はい、アン王女は国王様の深い愛に包まれ、すくすくと育ちました」

それから、さらに時が経っていき、アン王女も成長していく。

『アン、また腕を上げたな』

『まだまだですわ。お父様』

剣術の練習をしていたアンのもとに国王が現れる。

『だがそろそろ、レディとしての習い事も力を入れて貰わんとな』

国王はヒゲをいじりながらアンにそう言う。

『あらお父様、剣術も立派なレディのたしなみでしてよ』

晴夜達はその記憶を見ていて、アン王女は幸せな父親の愛に溢れた日々を送っていた

事を知る。

「幸せな時間が過ぎて行きました。しかし、アン王女は突然謎の病に倒れたのです」

突然の病に倒れたアン王女、その病は亡くなった母親の病と同じだった。国王は必死

に直そう医者に頼む。

『何とかならんのか!』

『我々の医学ではこれが限界です……』

『博士!あなたの世界の科学の技術ではどうにかならないのか!』

『残念ですが、私にもどうにも……すいません。私でも力になれず……』

その場にいた拓人もどうにも出来ない、国王に告げる。

『ではこのまま、アンの命の炎が消えるのを黙って見ておれと言うのか!』

国王は妻を亡くし、今度は娘まで亡くそうとしているこの現実が許せなかった。

『神よ……!あなたは妻だけでは飽き足らず、娘まで奪おうと言うのか!そんな事はさせぬ……!』

『一つだけ方法があります』

——すると、彼らの前に一人の人物が現れ、国王にアン王女を助ける方法はあると言う。

『何っ?』

『エターナルゴールドエンクラウンです』

『確か、あらゆる知識が詰まった黄金の冠、その力を借りれば……ですが、あれを使うのは……』

『分かっておる。しかし……あの黄金の冠には、伝説の戦士プリキュアが打ち倒した闇が封じられている。もしそれを使えば、闇を解き放つてしまう事になる……!』

『恐れながら国王様、このままでは王女様は……!』

エターナルゴールドエンクラウンの知識があれば確かにアン王女を救うことは出来る

が、それを使えば封印された闇が解放されてしまう。

そんな事を知りながら、国王はエターナルゴールドエンク라운が封印されている地下へと赴く。

『これを使えば、アンは助かる。しかし、この世に再び闇が解き放たれたら、民はどうなる……! トランプ王国で平和に暮らしていたみんなは……!』

クラウンの封印を解けばアン王女を助ける事は出来る。だが、国民を巻き込む大惨事を招くことになる。

『だが……だが他にアンを救う方法は無いのだ……! 闇と手を握って助かっても、アンは喜ばない!』

だが国王は、アン王女の喜ばない事をしてまで、アン王女を治したいという気持ちもあつた。

『だがこのままでは……! どうすれば良いのだ……!? 私……私……!』

迷いに迷い、国王のプシケューがジャネジーで完全に黒く染まった。その時、国王は剣を握った。

『そうだ……アンが死んでしまえばもはや世界は終わったも同然。アンさえ助かれば、世界がどうなっても構わない!』

国王は剣の一振りですべて封印を破壊し、エターナルゴールデンクラウンを掴んで知識を得て、上へと戻った。

だが封印が解かれた事で、闇が解き放たれたのだった。

「そんな、国王が……マジかよ……」

あまりのショックに龍牙が膝を折り、真琴が泣き出した。

「泣かないでまこぴー、龍牙君」

「大切な家族と世界を天秤にかけて言われたら、俺達だって……誰だって迷う」

「マナとかずやんの言う通りよ」

「答えの出せない、難しい問題ですね……」

「国王様だって、苦しい決断だったはずですよ……」

国王はアン王女とトランプ王国の国民、迷った末、アン王女を選んだのだ。

「辛かったはずだ……奥さんだけじゃなくて、娘まで死んでしまったら、あの人はきつと生きてる事に耐えられなかったんだ」

晴夜は国王の気持ちがかかるような気がしていた。

「ゴールデンクラウンから得た知識で、アン王女の病は治りました。けれど、本当の悲劇はここから始まるのです」

封印が解かれ、エターナルゴールデンクラウンから得た知識によりアン王女は意識を

取り戻した。

『おお、アン！気が付いたか！』

『お父様……』

アン王女が意識を取り戻し、国王は嬉しくなった。

——その時、悲劇が始まった。

『聞こえたぞ……闇の鼓動を……自分勝手なよこしまな願い』

『誰だ!?』

突如聞こえた闇の声の囁きが国王に迫る。

『最愛の娘を救うために禁忌を犯し、世界を破滅へと導く……！これぞまさに究極のジ

コチュー！貴様こそ、私の器に相応しい！』

彼らの前に現れた闇が国王を取り込んだ。

『お父様！』

『国王様、どうされました！』

アン王女と拓人の二人が呼びかけると国王は海へと落ちた。誰もが死んでしまったかと思つたが、なんとそこからキングジコチューとなつて出て来たのだ。

『まさか……』

『そんな……！』

「嘘でしょ……!?？」

「こんな事が……」

「国王様が……」

「キングジコチューだったのか……!」

この光景を見た晴夜達は驚いて声も出なかった。

「そうです。国王の魂はジャネジーに支配され、キングジコチューになってしまったのです」

キングジコチューの正体は、ジャネジーに支配されたトランプ王国の国王だった。

その後、ジコチュー軍団の猛攻で王国を守るプリキュア達も最後の一人、キュアソードとその時、ソードのサポートをしていた龍牙のクロースだけだった。

『何故です!お父様!どうして愛が溢れるこの国を滅ぼそうとするのです!』

『この世に愛など必要無い。愛などと言う下らんものがあるから苦しむのだ』

『そんな事はありません!わたくしの命を救ってくれたのは、お父様の愛です!』

『我が名は……キングジコチュー!』

そしてついに、アン王女とキングジコチューの悲しき戦いが始まった。

「激闘の末、アン王女はキングジコチューの身体を石化し、鏡の中へと逃れました。しかし……」

キングジコチューを石化させたアン王女は、魔法の鏡のある部屋へと逃げ込んだ。

『鬼ごっこは終わりだ。王女様』

晴夜とソードを逃がしたアンの前にベールが現れる。

『一つ聞くが、何故キングジコチューにとドメを刺さなかった?』

どうしてキングジコチューにとドメを刺さなかったと聞く。

『三種の神器、ミラクルドラゴングレイブの力があれば、完全に消し去る事も出来たはずだ。何故そうしなかった?』

ベールの質問にアン王女は答えることが出来なかった。

『そうか、お前の父親だから消せなかったんだな。自分勝手な奴め!』

ベールはキングジコチューは消せなかったのは父親だからだと推測する。

『国民を守るべき王族が、国民を犠牲にして憎しみを守るとは。流石親子、揃いも揃って最悪で最高のジコチューだ!』

『違う!』

ベールはアンを指差して叫んだ。その時、アンが胸を抑えて苦しみ出した。その理由はアンのプシュケーがジャネジーに染まりかけていたからだだった。

(このままではわたくしもジコチューに・・・!)

『楽にしてやろう』

ボールが指を鳴らそうとしたその時、アンは、自分のプシユケーを抜いた。
『な？？』

そして、そのプシユケーを二つに割った。

『何？？』

『父から受け取った愛、世界中の人々の笑顔を守る愛。ジコチユーと愛は表裏一体。そのどちららを選べばいいのか、わたくしには答えを出せません』

アンはプシユケーを見つめながら答えは出せなかつたと謝る。

『わたくしはその結論を、世界の行く末を……このプシユケーから生まれた二つの存在に託します』

アン王女は二つのプシユケーを手放す。

『こんな形で、あなた達に過酷な運命を背負わせてしまった、ふがないわたくしを許して下さい』

二つのプシユケーが光り、どこかへと飛んで行った。

『バカな……！』

『あれは……！』

「二つに分かれた王女のプシユケーです。その一つはキングジコチユーの元に流れ着いてレジーナに。もう一方はわたくし、円垂久里として生まれ変わったのです」

「じゃあ、残った肉体の方は？」

和也は残ったアン王女の肉体はどうなったのか問う。

「プシケを抜かれた王女の身体は、卵となって人間界へとたどり着いたのです」

「卵ってまさか……！」

「アイちゃん!？」

「二つの存在から……二つじゃ無くて三つの存在が生まれたのか……！」

亜久里・レジーナ・アイちゃんの三人は、アン王女のプシケと肉体から生まれた存在だった。

全てを見終え、晴夜達は現在のトランプ王国へと戻った。そこには既にジョーがいた。

「みんな、見えたようだね。アンと国王の真実が」

「はい。全て見えました……」

「信じられない……レジーナと亜久里ちゃんが元々一つだったなんて」

「アン王女が、こんなにも辛い運命をいたなんて……」

「でも、そう考えると腑に落ちる事もあるわ」

六花がそう言うのと、今までであったあらゆる謎を思い出す。

「ああ、レジーナがロイヤルクリスタルを欲しがったのも——」

「レジーナにパパとの思い出が無かったのも——」

「そして何よりも、ゴールドエンクラウンの力を使った事がレジーナがアン王女の分身である事さ」

「ミラクルドラゴングレイブが使えたのも、その事だったんですね」

そう、全ての謎の答えが、そこにあつた。

「もう王女様は蘇らないランスか〜？」

「もしかして、光と影が一つになれば、王女様は復活するんじゃない？」

亜久里とレジーナが一つなれば戻るかもしれないとラケルが言う。

「王女様が元の姿に戻る事は無いビィ……」

しかし、ダビィが二人はもう元の一つには戻れないと答える。

「それだけの想いで、決断されたの」

「やっぱ、認めなきやならないのか……」

龍牙と真琴が呟くと晴夜は亜久里に近づく。

「ありがとう、亜久里ちゃん。本当の事を教えてくれて」

「亜久里ちゃんの気持ちさがレジーナと決着をつけに来た意味が分かったよ」

晴夜が亜久里の気持ちさが分かったと言う。

「マナ・・・晴夜」

「でも、分かったからには、なおさら戦わせる訳には行かない!解決できる法則は必ず0.1%はきつとある!それを探そう!」

晴夜は戦わず助ける法則はあると話す。

「晴夜やろう!レジーナ、あなたも力を貸して」

「レジーナ・・・?」

マナがレジーナを呼ぶがレジーナはずっと下を向いていた。

「マナ・・・晴夜・・・アタシ、嬉しいの・・・」

レジーナの目から涙がポロポロ零れる。

「パパが・・・世界を滅ぼしても娘のアタシを救おうとしてくれた・・・」

するとレジーナの目が赤から元の青い色に戻る。

「レジーナの瞳が!」

さらに着ていた服の紫だった所が元の赤い色に戻った。

「レジーナ!」

「あなた達、そんなに大きな愛を貰った事がある・・・?地球とか宇宙とか、そんなものより大きな愛を貰った事、ある・・・?アタシだけよ、あるの・・・」

「レジーナ・・・」

「そんなアタシが、パパを捨てる訳なんて無い！アタシは最後まで、パパのために戦う！」

ミラクルドラゴングレイブを拾い、矛先を晴夜達に向けた。

「ダメだよレジーナ！」

「まだ、可能性が……」

マナと晴夜が叫んだその時、大きい揺れが生じた。

「地震か!?!」

「いや、あれは……!」

「遂に目覚めてしまった!」

遂にキングジコチューの封印が解かれてしまった。

「今行くよ、パパ!」

レジーナがキングジコチューの元に跳んで行く。

「やはり、レジーナとキングジコチューを倒すしかありません!」

「亜久里ちゃん……!」

「わたくしには、王族として生まれた者の責任があります!レジーナを倒し、キングジコチューを倒さない限り、トランプ王国の復活はありません!」

「本当にそれでいいの?」

「えっ?」

亜久里がレジーナとキングジコチューを倒そうとするが、真琴が本当にそれで良いのかと問う。

「王女様の想いを成し遂げようとするその気持ち、痛い程分かる。けれど、今の亜久里ちゃん、苦しそうだよ?」

「本当は、別の道があるって信じてるんじゃないかねえのか?」

「真琴・・・龍牙」

「危ない!」

突如黒い落雷が落ちて来るが、三人はジョーのおかげで難を逃れた。

「止めて!レジーナ!」

その落雷はレジーナが放ったものだった。

「止めないよ、マナ!」

「我が王国に必要なのは、私とレジーナだけ!消えろ!」

「避ける!」

更にキングジコチューが晴夜達に落雷を放つ。

「さあ行こう。人間共を滅ぼして、パパとレジーナ、二人だけの世界を作り上げるんだ」

「うん!パパの願いは、アタシが全部叶えてあげる!」

「キングジコチュー様」

そこへボールが10本のロストボトルが装填された黒いパネルをキングジコチューに渡す。

「あれは！まさか……」

晴夜は黒いパネルが既に10本装填してあつた事に驚く。

あの時、ボールが二人の決着の邪魔をした時、龍牙から盗んだらしい。

キングジコチューは黒いパネルを自分の身体へと取り込む。

「世界の壁よ……開け！」

キングジコチューは黒いパンドラパネルを身体に取り込んだその影響か、キングジコチューの前から小さなワームホールが作られた。

「あれが黒いパネルの力……」

そこにレジーナがミラクルドラゴングレイブを振り、ワームホールをさらに大きく開けた。

そして、その先の人間界へと赴いた。

「みんな、大丈夫かい!?」

「ええ……!」

「何とか……!」

キンググジコチューがワームホールを通り、レジーナ達と共に人間界へと向かった。

「キンググジコチューが!」

「人間界へ向かったシヤル!」

「今はレジーナ達を止めるしかない!そして、答えは出て無いけど、あたし達のありつた
けの思いを、全力でぶつけるしか無い!」

「ああ!みんなで見つけるんだ。二人の心を救う勝利の法則を!」

「晴夜とマナはまだ、レジーナとキンググジコチューを助けるといふ気持ちは消えてな
かった。」

「つたく、こんなやべえ時に無茶な実験が好きな相棒だ」

「マナと晴夜君らしい答えね」

「でも、それでいいと思います」

「ああ、その意見に俺も同感だ」

「うん」

「やりましょう。みんなを助けたるために」

「亜久里ちゃん」

マナは亜久里の方を向く。

「分かりました、行きましょう!」

マジカルラブリーパットを出現させ、晴夜達を光に包まれ、人間界へと向かう。

「この世界は、あたし達が守る！」

「行くぞ！これが最後の戦いだ！」

マジカルラブリーパッドによって晴夜達はクローバータワーの屋上へと現れる。

晴夜達四人はドライバーを装着し、ボトルを取り出した。マナ達四人はコミュニケーションを取り出し、ラビーズをセットする。

『ラビット！タンク！ベストマツチ！』

『覚醒！グレートクローズドラゴン！』

『ロボットゼリー！』

『デンジヤー！クロコダイル！』

四人はドライバーを操作し、晴夜と龍牙は前後からライドビルダーが展開し、和也と幻冬の下からビーカーと装置ケミカライドビルダーが現れる。

『Are you ready?』

「変身！」

「プリキュア！ラブリンク！」

「プリキュア！ドレスアップ！」

九人の体が光とランナー、液体に包まれ、姿を変える。

『鋼のムーンサルト!ラビットタンク!イエーイ!』

『Wake up CROSS—Z!Get GREAT DRAGON!Yeah!』

『潰れる!流れる!溢れ出る!ロボットイングリス!ブラア!』

『割れる!食われる!砕け散る!クロコダイルインローグ!オラア!へキヤー!』

『みなぎる愛!キュアハート!』

『英知の光!キュアダイヤモンド!』

『陽だまりポカポカ!キュアロゼッタ!』

『勇気の刃!キュアソード!』

『愛の切り札!キュアエース!』

『“響け!愛の鼓動!ドキドキプリキュア!”』

九人が変身を完了し、ハート達がいつもの決めポーズを決める。

「レジーナ!キングジコチュー!このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻して見せる!」

「さあ、レジーナ、キングジコチュー、実験を始めようか?」

キングジコチューとレジーナとの決戦が、遂に始まるうとしていた。

——果たして彼らに、二人を救う勝利の法則は導けるのか。

次回！Re・ドキドキ&サイエンス！

第54話 明日へのビルド、運命を賭けた最終決戦！

第54話 明日へのビルド、運命を賭けた最終決戦！

人間界のクローバータワー付近にキングジコチューが現れた事で、町中の人々がパニックに陥っていた。

トランプ王国でキングジコチューが復活し、黒いパネルの力を使い人間界へとワープして侵略を始めようとしていたのだ。

「キングジコチュー様、復活おめでとーございます。我々はこの日が来るのを心待ちにしておられました」

「調子いい事言っちゃって」

「やな感じ」

ベールがキングジコチューにお世辞を言ってるのが、イーラ達はやな感じと気に入らなかつた。

「これより、人間界を攻略する。刃向う者は全て消し去れ！」

「承知致しました。今日こそ邪魔なプリキュア共と仮面ライダーを始末して見せましよう」

キングジコチューの周りにトランプ王国から連れてきた大量のジコチュー軍団が現

れてくる。

「よろしいですね、レジーナ様？」

「当然よ。行きなさい」

「ハッ」

ベールがレジーナの前から去る。

「フン、素直じゃねーな」

「何の事？」

「別に」

すると今度はレジーナの元にイーラが近づき、素直じゃ無いなど言う。

「アタシはパパのために生きるって決めたのよ」

「ふーん、ならいいけど。でも、お前のプシユケー、萎れててみつとも無えぜ」

そう言うてからイーラも移動した。

その時、マスコミのヘリコプターがキングジコチューが現れたクローバータワー上空を旋回していた。

『大変な事態です！付近の住民は大至急避難を……！』

ヘリコプターに乗っていたレポーターが住民に避難をするよう上空から伝える。

『あら……？あれは一体……』

ヘリコプターに乗ったレポーターがハート達に気付く。

「さあみんな、行こう」

空中を翼を広げたエンジェルモードとなったハート達が強い決意を宿す瞳で、キングジコチューたちを見据える。

地上の方では最終フォームへと変身したビルド達四人もキングジコチューを見据える。

「行くぞー!」

ビルドが叫ぶと共に四人は走り出し、ビルドからグリスとローグに向けてUFOボットの円盤が二枚出現し、二人が乗り上空へと向かう。

ビルド達がジコチューを迎撃しながらキングジコチューの方へと向かう。

「ときめきなさい! エースシヨット! ばきゅーん!」

『クロコダイル! ファンキーシヨット!』

『プリキュア! スパークルソード!』

「はあくオラアアアアア!」

エースシヨット、ファンキーシヨット、スパークルソードを放ち、最後にクローズの放たれた炎のエネルギー波がジコチューを一掃する。

だが、それだけではジコチュー軍団は一向に減りはしなかった。むしろ、更に戦略を

増やし九人を潰しに現れる。

「とにかく、キングジコチューの所へ行こう！」

「ああ、こんな事すぐに止める！」

「とは言え、これじゃあ中々……」

無数とも思えるジコチューが向かって来るため、ビルド達はキングジコチューの元へとなかなか迎えなかった。

「泣き言を言っても始まらないわ」

「そうね。プリキュア！ダイヤモンドスワークル！」

ダイヤモンドスワークルを放って地上のジコチューを一掃すると、今度は上空からかなり巨大なカラスジコチューが向かってくる。

「邪魔すんな！」

グリスはブリザードナツクルを外し、ボトルをもう一度差し込む。

『ボトルキーン！グレイシヤルナツクル！ガチガチガチーン！』

グリスが円盤から飛び、グレイシヤルナツクルを繰り出しジコチューの妨害を防ぎ、吹き飛ばした。

『これは映画ではありません！今まさに起っている現実なのです！海から現れた巨大生物達を喰い止めるべく、五人の少女達と四人の謎の存在が必死に戦っているのです！』

へりに乗っているアナウンサーがその状況を町中に伝えていた。

『何者かは分かりませんが、ただ一つ言える事は、彼らは命がけで我々を、この世界を守ろうとしてくれているのです!』

そんな状況を、大貝第一中学校では晴夜達の担任の城戸が見ていた。

「先生!俺達も早く避難しないと!」

「そうしようと思つた所だ」

「あつ!あれ!キュアハートよ!」

「それに、仮面ライダービルドも!」

城戸のパソコンに付いたテレビに、以前文化祭で助けられた仮面ライダービルドとキュアハートが映し出される。

「僕達をいつも守ってくれるあの人は一体、何者なんでしょう・・・?」

当然、ビルドとハート達の正体を知らない十条は、彼らが誰なのかどうか考えながらそう呟いていた。

町中の人達が九人を戦いを見ている中、ビルド達はジコチューの多さになかなか先に進めずにいた。

「キリがありませんわ!」

「ホントに……!」

「こうなつたら、一気に行くしかない!」

ビルドが言うのとベールが現れて指から電撃を放つ。ビルドとハートはこれかわす。

「ベール!」

「よう、プリキュア共とライダー共よ。お前達との腐れ縁も今日が最後——のわっ!」

ベールが言いかけると剣の形をしたエネルギーと炎のエネルギーがベールの横を通り過ぎる。そして、クローズとキュアソードがビルド達の前に現れる。

「ソード! 龍牙君!」

「ここは私達に任せて、みんなは先へ!」

「お前から早く行くんだ!」

ビルドとハート、エースにキングジコチューの元へ先に行けと言う。

「お前達二人でこの俺を止められるのか?」

「いいえ!」

「そいつらだけじゃねえ!」

「僕たちもいる!」

「何……ギャース!」

グリスとローグが不意打ちでベールを殴るとロゼッタが放った四葉状のエネルギーがベールに直撃し、ビルの壁に叩きつけられる。

「二人ではありません!」

「まこぴーフアンを舐めるな!」

「僕達を入れて五人だ!」

「かずやん! 幻冬君! ロゼッタ!」

グリス、ローグ、ロゼッタもベールの前に現れ、クローズとソード共にビルド達の道を守る。

「わたくし達の思いは一つ!」

「さあ! 行ってください!」

「ここは、俺達が心火を燃やして通さねえよ!」

「ありがとう!」

この場をグリス達に任せ、ビルド・ハート・ダイヤモンド・エースの四人が先へ向かう。

「情けないわね。そんなんであいつらを倒せるの?」

「倒す必要など無い!」

「へっ?」

「奴らは自ら滅んで行く。そう、愛などと言う下らない幻想に縛られているせいだな」
ベールが彼らは自ら滅んでいくと言うが、マーモにはその意味がわからなかった。

その頃、先に進んだビルド達は更なるジコチューの群れが現れる。

「まだ、いるのかよ……」

「ここは、私に任せてハートと晴夜君、エースは先に行つて！」

「わかつた！行こう！」

「すみません！」

「頼む」

ビルド、ハート、エースの三人は先へと進み、ダイヤモンドは一人でジコチューの相手をする。

「煌めきなさい！トウインクルダイヤモンド！」

トウインクルダイヤモンドを放つて地上のゴリラジコチューを凍らせて砕く。

着地と同時に鳥ジコチューが口から光線を放とうとしていた。

だがそのジコチューは、突然消滅された。

「プリキュアを倒すのは、この僕だ」

そこにイーラが現れた。

「イーラ……前にもこんな事があつたわね」

「覚えてねーな」

「そう、残念」

「キングジコチュー様が復活した今、お前達に勝ち目は無えぞ。なのに何でまだ戦うんだ?」

「確かに厳しいけど、諦める訳には行かないから」

「そうか・・・それなら——!」

瞬間移動したイーラの拳から一撃が繰り出されるが、ダイヤモンドは両腕で防ぐ。

「お前だけは、ここで僕が倒してやる。キュアダイヤモンド!」

「いいわ。でも、あなたに私は倒せないわよ」

「なっ、それはどう言う意味だ?」

「知らないのなら教えてあげる。ダイヤモンドは、傷つかないのよ」

その頃、マーモの攻撃を受けたロゼツタが吹き飛び、グリスとローグが後ろに回ってビルの上の床に叩きつけられるのを防ぐ。

「ホントしつこいわね、アンタ達。この状況で何が出来るって言うのよ」

「分かりません。でも、みんなで頑張ればきつと道が切り開ける。そんな気がするんです」

「気がする？それだけ？」

「それだけで十分だ！」

「僕達にとつてはそれだけで可能性が広がる！」

「それがわたくし達の、カッチカチの絆なんです！」

そう叫び、両手にロゼッタウォールを展開させる。

「下らない！」

マーモが鞭を放つとローグが背中のマントを使いロゼッタを守ると、グリスがロボットアームで反撃に出る、マーモは両腕を使いその攻撃を防ぐ。

「その上、今日は俺達かなり燃えてんだよ！」

「いつも以上に！」

二人が言う等多数のジコチューが向かって来るが、グリスとローグはドライバーのレバーを回す。

『グレイシャルブレイク！』

『プライムスクラップブレイク！』

二人で同時にカウンターキックの衝撃波を放ち、ジコチューを一掃した。

一方、ソードが連続でボールに攻撃を仕掛けるが、次々とかわされる。

「どうしたキュアソード? そんなんじやこの俺は切れんぞ」

ベールが反撃に出て、ソードに攻撃しようとする。

「私が切るのは、あなたじゃ無い!」

そう言つてソードはベールの攻撃を避ける。

「何っ!?」

『ボルケニツクナツクル! アチャー!』

ソードが避けるのと同時にクローズがボルケニツクナツクルを放ちベールを吹き飛ばす。

「断ち切るのは弱さ! 切り開くは未来! 心を繋ぐ勇気の刃! それが私! 王女様から貰つた名前! キュアソードよ!」

「そして、こいつの手助ける相棒は、誰にも負ける気がしねえ! この俺、仮面ライダークローズだ!」

「ナマクラ共があ!」

ベールが怒りを感じ、クローズとソードに向かつてくる。

みんながジコチュー達を足止めしてる中、ビルドとハートとエースは先へと進む。

「みんな・・・」

「ありがとう……」

「晴夜！ハート！」

三人がキングジコチューの傍に辿り着くと、そこにはレジーナが待ち構えていた。

「レジーナ……」

「晴夜、マナ、あなた達は どうしていつも……アタシはもう、あなた達の顔なんて見たくないのに」

「言つたら、最高の法則を見つけて見せるって」

「……」

最高の法則を見つける、そう答えたビルドをレジーナは睨みつける。なんでそんなこと言えるの？見つけられるわけがないのに。と言わんばかりの、どこか辛そうな顔で。

それを見たハートも彼女に向けて口を開く。

「それに、約束だから」

「えっ……？」

「落ち着いたら、一緒にお父さんに会いに行こうって言つたじゃない。ちよつと予想外の形になつちやつたけど、今がその時だよ」

以前したレジーナの約束を今ここで叶えると言うと、キングジコチューに目を向ける。

「キングジコチューさーん!あたしの話を聞いて下さーい!」

「やかましいわ!」

ハートがキングジコチューに向けて叫ぶが、やかましいと返される。

「私の前から・・・消えろ!」

左手で薙ぎ払うと同時に突風が起こってビルドとハートとエースが吹き飛び、地面に叩きつけられてしまった。

三人が起き上がろうとするとキングジコチューは三人を踏み潰した。

「ほら見なさい。あなた達の声は、パパには届かないのよ」

ビルド達の声は届かないと言われると、キングジコチューの足が少しずつだが浮かび上がる。

「そんな・・・!」

三人はどうにか抑えて、踏み潰されていなかったようだ。

「例え、今は俺達の声が届かなくても、俺は諦めない!」

「何っ!?」

しかも、踏み潰されられるどころか三人はキングジコチューの足を持ち上げていく。

「少しは・・・!人の話を・・・聞きなさい!」

「あたし達は、みんなの笑顔を守りたいだけなんです!」

「守る？そんなちっぽけな力で何が守れる？」

「確かに、俺達の力はちっぽけで弱いものかもしれない。それでもかけがえのない人の笑顔を守って見せる！」

「この世界も……トランプ王国も！」

「レジーナも……あなたの笑顔も！」

「守って……みせる！」」

三人が叫ぶとビルドは片手でキングジコチューの足を抑えながら、ドライバーのレバーを回す。

『ワンサイド！Ready go！』

ビルドの右側にある有機物のボトルが光り出す。

『ジーニアスアタック！』

ビルドのジーニアスアタックで三人はキングジコチューの足を押し返した。

それを離れた所から見ていたイーラとマーモは驚く。

「凄え……アレを押し返すのかよ……！」

「だが何をした所でもう遅い」

ベールは一人冷静でいた。

「どういう事?!？」

「何が遅いんだよ!?」

「この世界はもう終わる。お前達もすでに知ってるだろ? トランプ王国が滅んだ日の事を」

『!?』

ベールの発言を聞いてクローズ達は思い出す。

トランプ王国が滅んだのは人がジコチューとなり、ならなかった人は命を落とし、その繰り返しでトランプ王国の滅亡を導いた。

「それまでは仲睦まじく暮らしていた国民達は恐怖の余り豹変し、自分だけは助かりたいと言う思いで醜い行動を取り、自らジコチューと化した」

その時の事をベールが語り始める。

「そして今、あの時と同じ事がこの世界にも起きようとしている。トランプ王国と同じように、この世界も愛を失うのだ」

もうすぐビルド達以外はジコチューになりトランプ王国と同じ運命を辿ると言った、

ベールは既に勝利宣言をしているような口調で高々と笑う。

「そんな事無い! お前は人の気持ちをわかってない」

「何っ?」

だがビルドはその言葉を否定し、その様なことにはならないと語る。それを聞いた

ベールは笑みを止め、どう言うことなのか疑問に思った。

「愛の力は、何にも負けないってあたしは信じてる。今だつてきつと、愛の力で支え合つてゐるよー！」

「そんな奴が一体どこにいる？」

「いるよ。確かに感じる。みんなの、ドキドキするような愛の鼓動をー！」

ハートが胸に手を当てて感じる。今この状況の中でも感じる愛の鼓動をー

その時、ベールの言う通り、自分だけが助かりたい、邪魔をするなど言つた人が現れてゐた。だが、そうでない人もいた。

「すいませーん！誰か手を貸して下さいーい！ケガをして、動けない人がいるんです！誰か手を貸して下さいー！」

逃げ遅れて怪我をしてしまった人を見つけた純は、誰か手を貸してくれないかと助けを求める。すると彼らの前に二階堂と桃田の二人がやって来た。

「おい！ケガ人はどこだー！」

「早くしないと逃げ遅れるっスよー！」

「先輩！ありがとうございますー！」

「すぐ案内しろー！」

「はい!」

「俺も手伝います!」

「私もだ!」

純達が怪我人を避難所に運んでいると、逃げていた二人の男性も手伝う。

「ありがとうございます!」

「困った時は助け合いつスよね!」

大貝第一中学の生徒が、必死に逃げ遅れた人達を助けていた。

大貝大学病院でも、マナの家族達が手を貸しながら病院内も混乱なく回っていた。

「大丈夫ですよ。すぐ助けが来ますからね」

「すみません、手伝って貰っちゃって」

「いえ、気にしないで下さい。こう言う時ですから」

健太郎達が病室にいた患者を励ます。

そして、四葉邸でもセバスチャンが救助した人達を病院へと運ぶ。

「皆様!お待たせしました!搬送が必要な方から、順番に救助を開始します!」

そこに、もう一つヘリが現れた。

「おーっほっほっ！この五星麗奈も、及ばずながらお手伝いさせていただきますわ」
そのヘリは五星財閥の所有するものだった。

ハートは感じていた。みんなの流れる鼓動はとても優しいもので、ジコチューになることない。

「ほら、聞こえるよ。愛の鼓動が」

「確かに感じる。誰かを思いやる優しい音色」

「決して希望を捨てない、優しい音色」

「互いに支え合い、響き合って——」

「ハーモニーを、奏でていきます」

ハート達のように鼓動は感じないが、みんなの想いはビルド達にも強く感じていた。

「みんなの優しいさの気持ち」

「俺達にも伝わる」

「みんなの想いが、俺達の心に響き」

「僕達の力となる！」

九人の戦う覚悟は更に強く、力を強く押してくれるものだった。

「下らん！ならばその愛の鼓動とやらを、止めてやる！」

キングジコチューが口元にエネルギーを溜め、光線を放とうとする。

『フルフルマツチ デース!』

ビルドがフルボトルバスターを取り出しフルフルボトルを差し込むと、虹色に輝くエネルギーが収束されていきトリガーを引く。

『フルフルマツチブレイク!』

フルボトルバスターから放たれたエネルギー砲はキングジコチューの光線を打ち消し、キングジコチューに直撃した。

「ぬおっ!」

「パパ!」

フルボトルバスターの攻撃を受けたキングジコチューが後ずさる。

「それだけは、絶対にさせない!必ず守りぬいて見せる!」

「小うるさい奴らめ!」

そう叫んだキングジコチューが起き上がる。

「これ程の力の差がありながら、まだ刃向おうとするお前達は恐れを知らぬのか!」

そう叫ぶが九人は動じず、恐れずにキングジコチューを見る。

「怖くはないわ!」

「俺達はあんたの本当の気持ちを知ってるからな!」

「ええ。エターナルゴルデンクラウンが教えてくれた」

「あなたは、レジーナさんのお父様ですから」

「そして、エースのお父さんでもある！」

「幻冬……」

「そう、だからこそ絶対に分かり合える！ハズなんです！」

「もういいわ」

レジーナが声が聞こえるとエネルギー波が九人に向けて放たれた。

「レジーナ！」

そこにミラクルドラゴングレイブを九人に向けたレジーナが現れた。

「どうしてもパパの邪魔をしようのなら、アタシが相手よ！」

そう叫んだレジーナはエネルギー刃を放ち、ハートに命中させて吹き飛ばす。

「ハート！レジーナ！」

ビルドが叫ぶとレジーナは更にハートにキックを繰り出してダメージを与え、崩壊したタワーに入る。

『ラビット&ラビット！』

『ビルドアップ！』

『紅のスピーディージャンパー！ラビットラビット！ヤベー！ハエー！』

ラビットラビットフォームとなったビルドはタワーの方へと向かう。

「ハート!」

「来ないで!」

すると、エース達に向けて光弾が放たれるが躲す。

「よそ見してる場合か?」

「忘れて貰っちゃ困るわね」

エース達の傍にイーラ達が現れる。

その頃、タワーの中に入っていったハートとレジーナ。中は煙で覆われていた。

「レジーナ!」

「やあああー!」

レジーナがミラクルドラゴングレイブをハートに振りかかる。ハートは腕を出して防ごうとすると、何かが当たり火花を散らす。

「晴夜!」

振りかかる瞬間に、ラビットラビットフォームへと変わったビルドがフルボトルバスターでミラクルドラゴングレイブの攻撃を止めた。

レジーナはそのままビルドとハートから離れた。

「何のつもり晴夜！アタシをバカにしているの!？」

ジーニアスからラビットトラビットフォームになった事に疑問があることを叫ぶと、ミラクルドラゴングレイブにエネルギーを溜める。

「邪魔しないでよー！」

レジーナの攻撃を受け、二人とも吹き飛ばれてしまった。

「何よ、もう終わり？こんな痛い目に遭っても、まだアタシやパパと話が出来ると思ってんの？」

レジーナは近づいてきて槍を二人に向けてると、ビルドがハートの前に出る。

「・・・どうしてやり返してこないのよー！」

「これが、俺の償いなんだ！」

「えっ!?？」

ビルドは償いだと言い、それを聞いたレジーナは驚く。

「あの時、俺はハザードトリガーを使ってその力が制御出来ずお前を傷つけた・・・」

だから、俺にはそのお前の痛みを受ける責任がある！」

ラビットラビットで現れたのは、レジーナを心の奥底まで傷つけたハザードトリガーを使用した自分への罪を償うためだと、その為にこのフォームで現れたと言う。

「何よ・・・そんな事・・・」

今さらそんな事だと言うと、ハートが起き上がったってレジーナに語りかける。

「あたし・・・レジーナとは戦わないよ」

「何だよ!」

「友達だから」

友達だからと言うと、レジーナは槍を二人から離す。

「友達との約束は、守らなきゃ」

「いい加減にして! そんな約束、もう意味なんて無い! アタシ達はもう友達なんかじゃ・・・!」

レジーナはミラクルドラゴングレイブをビルドとハートの顔近くに突き刺して叫ぶ。

「友達だよ」

「レジーナ、もう苦しむ必要ない。お前の苦しみは俺が、俺達がいくらでも聞くし、受け止めてやる」

「あ、アタシは苦しんでなんて・・・」

レジーナが言いかけるとハートが口を開く。

「レジーナ、泣いてたよね」

ハートとビルドは、レジーナがトランプ王国の惨劇の真実を知った時、涙を流していたことを思い浮かべた。

「あれは嬉し涙なんかじゃ無い。行き場を無くして溢れた悲しい涙」

本当の事を言われたレジーナは動揺を見せ、凶星だと言う事がハートとビルドは分かっていた。

「俺はレジーナのそんな顔を見たくない。俺はお前の笑顔が見たい。あの時、三人で町を歩いた時の笑顔を」

初めてレジーナと友達となり、一日中振り回されたが、その時の笑顔はとても優しいものだと感じていた。だから、そんな顔を見たくないと言語る。

「何で・・・何でよ・・・！何なのよ！アンタ達なんか、アタシの家族でも何でも無いクセに、他人のクセに！」

叫び終わるとハートがレジーナを抱き締める。

「好きだから。あたし、レジーナが好きだから。それだけじゃ、ダメかな？」

抱きしめながらハートはレジーナの思いを受け止めようとする。

「レジーナが好きだから、レジーナが愛するパパも好きになれる。分かり合いたい。だから、もう一度話そうレジーナ？あたと、あなたと、あなたのパパで」

ハートの言葉がレジーナの心に強く響く。

「レジーナ。もう一度話そう」

ビルドがレジーナに手を差し向ける。

「黙れえ！そんな戯れ言に耳など貸すなレジーナ！レジーナを……惑わすな！」

そう叫んだキングジコチューが口から光線を放とうとした。

「また、あれを撃つの！」

「お前ら避ける！」

キングジコチューはビルドとハートに向けて光線を放とうする。

「止めて！」

しかし、光線から二人を守ろうとレジーナが前に出た。

するとその時、レジーナの持つミラクルドラゴングレイブが輝き出す。

「槍が！」

「これは……」

光り出したミラクルドラゴングレイブがキングジコチューの光線を無力化し、槍の先端が紫色から黄色へと戻った。

「どうして……」

レジーナは槍を見つめていると槍から何かが出現した。それはエースのラブアイズパレットになって、更に変身アイテムに緑色の変身ラビーズが現れた。

「それって、パレットにラビーズ！」

「レジーナ！もしかしてなれるんじゃない！」

レジーナの手にも二つのアイテムが置かれた。すると、アイちゃんが三人の前に現れた。

「アイちゃん……」

「きゅぴー！」

アイちゃんはやる気だと感じ、レジーナもそれに気づき頷く。

「プリキュア！ドレスアップ！」

「きゅぴらっばー！」

アイちゃんから放たれた光はエースの時と違い緑色だった。

パレットにラビーズをセットし、エースと似た手順を取るとレジーナが緑色の光に包まれ、姿を変える。

「運命を変える切り札！キュアジョーカー！」

光から現れたレジーナの服装がエースより背丈が短い姿になり、頭の赤いリボンには銀の線が加わり、黒の服には緑色が混じり、髪色も深緑色へと変わった。

それを遠くから見ていたクロース達、全員も驚いていた。

「れ、レジーナが……！」

「プリキュアになった……!?？」

「こんな事が……」

「そんな馬鹿な・・・!」

「おいおい、どーなってるんだよ!?」

「あの子がプリキュアになっちゃったわ!」

「ま、マジかよ!?」

「新しいプリキュアの誕生なんて初めて見ました」

「それを言うなら俺もで、驚いて何も言葉が出ねえよ」

レジーナが新しいプリキュア——キュアジョーカーになった事に驚いていると、キンググジコチューの叫びを促す。

「何故だレジーナ! 何故お前がプリキュアなどに・・・! 何故私に逆らう!」

キンググジコチューの悲しみの叫びが自分に逆らうジョーカーに向ける。

「まさか、またお前の心に愛が芽生えてしまったと言うのか・・・!」

「パパ・・・うん、違う。そうじゃないよ」

キンググジコチューの発言にジョーカーは首を横に振る。

「愛は、最初からアタシの中にあっただよ。パパだってアタシ、パパの事大好きだもん」

キンググジコチューの事が大好きと言うとジョーカーはビルドとハートの二人を見て手を握る。

「でも、でもね——やつぱりマナと晴夜も好き！パパと同じくらい！どつちかなんて選べない位！マナと晴夜が好きなの！」

マナと晴夜が好きとジョーカーは叫ぶと二人は嬉しそうに呟く。

「レジーナ……」

「ようやく、本音が聞けたよレジーナ」

「ううん、今のアタシはキュアジョーカーよ」

今はキュアジョーカーと言うとビルドは手を頭に乘せて癖で自分の頭をかく。

「へへ〜ん♪最高だなー！」

口癖の最高だなとビルドが呟く、ジョーカーは笑顔で頷く。

一方でベール達は何がなんだかわからなかった。

「何だそりや……」

「それってある意味究極のジコチューじゃない」

「でもよ、アイツのプシケケ、すっかりピチピチのプルプルに戻ってやる」

イーラから見えるジョーカーのプシケケはピンク色だと語る。

「これっていけない事？」

今の自分のやっている事はいけない事なのかと二人に聞く。

「そんな事無いと思いますわ」

「大切なのはその気持ちに素直になれるかですよ」

「ああ、本当の気持ちにいいも悪いもねえよ」

「私も。前は女王様しか見えて無かったけど、今は、ここにいるみんなが大切に思える」
他のみんなも現れ、今のジョーカーの行動は決して間違いないと言う。

「黙れ！レジーナ！お前は私だけ見ていれば良いのだ！」

「そう思う気持ちは分かるわ。私も、その気持ちに覚えがあるから」

マナと真琴が仲良くなって羨ましいがっていた、あの時の自分と同じだとダイヤモンドが言う。

しかし、ダイヤモンドはハートとビルドを見ながら話し続けた。

「でも、好きな誰かを独り占めするよりも、好きな人が好きな人を、自分も好きになって、そうやって人の輪が広がって行く方が何か、いいじゃない？」

「それでそいつの事を知ればもつとそいつのが好きになって、人との繋がりが更に広がる」

クローズも、もう一人の相棒の晴夜と会って人の事を知れば繋がりが広がるものだと話す。

「黙れ黙れ黙れ！」

「もう、お止め下さい。人と人との繋がり、それが愛！愛の戦士たるわたくしの使命は、

あなたを倒す事では無く、愛する事だったと、ようやく分かりました」

エースもビルドとハートの姿を見て、自分が本当にするべき事は何かと気づく。

「そして、今にもそれが出来ます。何故なら、あなたはわたくしにとつても、お父様だから！ さあ！ 今こそ目を覚まして下さい！ お父様！」

「パパー！」

エースとジョーカーがお父さんと言うとキングジコチューの瞳に二人が映る。

「アン・・・レジーナ・・・」

その時、キングジコチューが苦しみ出した。

「何だこれは・・・！ この胸に湧き上がるこれは何だあ！」

キングジコチューが必死に胸を抑える。それがなんなのかビルド達は気付いていた。

「それだよ、キングジコチュー。気付いたか。いや、思い出してくれたか？」

「それが・・・！」

「愛だよ」

「認めぬ・・・！ 愛などいらぬ・・・！ 愛などあり得ぬ・・・！ 愛など・・・消し去つてくれる！」

苦しみながらもキングジコチューがハート達に向けて拳から攻撃を繰り返した。

「止めて！ パパー！」

だがその攻撃は外れ、ビルド達はすぐさま距離を取るようにして回避すると、すぐに集まった。

「今、キングジコチューの攻撃が鈍ったような・・・!」

「愛の鼓動が聞こえた! キングジコチューは、完全に闇に支配されている訳じゃない!

あの中には、まだ王様の心が残ってる! お願いラブリーパッド! 王様の心を見せて!」

ラブリーパッドが見せたキングジコチューの心には、国王が取り込まれていた。

「ここはキングジコチューの心臓・・・!」

「取り込まれてるんだわ・・・!」

「となると、体の中に入る必要があるって事か?」

ラブリーパッドを見ていくつか推測を立てる。

「けど勝利の法則は既に決まった」

ビルドが勝利の法則は決まったと言うとみんなが驚く。

「えっ? もう、出来てるんですか?」

「どうすんだよ?」

「それは・・・」

「それは・・・」

勿体ぶるように言うのとビルドはその法則を話す。

「あの中に突入すれば完成する」

「えっ？ええっ？？」

まさかのキングジコチューの中と聞いて驚く。

「よし！あたしも一緒に王様を助けに行く！」

「ええっ？？」

ハートもキングジコチューの中に入ると聞いてダイヤ達が驚く。

「正気かよ？？」

「本気かお前ら？？」

「冗談じゃないですよね？？」

「助けに行くってつまり……！」

「飛び込むって事ですか？キングジコチューの中に」

「いくら何でも無茶よ！無茶！って、止めても無駄よね……」

「出来るのですか、本当に？そんな事が」

「ああ！俺は二人の天才科学者の息子で弟だから……いける！勝利の法則は決まった！」

ビルドは、二人の科学者の弟と息子であるからいけると叫ぶ。

「それにあたしを誰だと思ってるの！大貝第一中学生徒会長！相田マナよ！」

ハートの正体はマナだと自分から話し、マナを知っている町の人達は、一斉に驚きの声を上げたのだった。

そして、ビルドが導いた勝利の法則とは――

次回! Re・ドキドキ&サイエンス!

第55話 王様を救え! ハザードの真の力

第55話 王様を救え！ハザードの真の力

キュアハートがマナだった事に、大貝第一中の生徒達は驚きを隠せないでいた。

「う、嘘でしょ!!?」

「あの子、生徒会長だったんすか!!?」

「道理で見覚えがあるハズだ……! 頑張れマナー! 俺がついてるぞー!」

「俺も応援するっす!」

「僕も!」

学校にいた生徒達が、ハート達を応援し始めた。

一方、避難所となった四葉邸では。

「これはもはや、四葉財閥の力を持つてしても隠し通す事は不可能……」

タブレット端末を見て、隠し通す事は不可能だと判断する。

「隠す必要など無い」

「旦那様! 奥様も一緒で!」

「一応聞くが、セバスチャンで間違い無いな?」

「はい、その通りです」

「プリキュアと仮面ライダーはこの世界を守るために必死で戦っているのだ、応援しよう。みんなで」

町の人達から、頑張れとエールを受け取る。

その声が聞こえると、キングジコチューが胸を抑える。

「何だこの不愉快な声は・・・胸の奥がムカムカするでないか・・・!」

「違う・・・これは、みんなが望む・・・」

「友達を、家族を、この世界を愛するみんなの声!」

みんなの声だと二人が叫ぶとキングジコチューはさらに苦しみます。

「愛を見失った悲しい王様!このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻して見せる!」

「さあ、王様!実験を始めようか!」

「黙れ!貴様達の声など全て消し去ってくれるわ!」

キングジコチューはそう言うのと雷を作り出してビルド達に向けて放たれた。だが、ビルド達は雷を躲すとキングジコチューの元へと飛び立つ。

「マナ、晴夜、お願い!パパを助けて!」

「ああ、必ずお前のお父さんの心を取り戻す!」

必ず助けると言っていてビルド達が向かうと、大量のカラスジコチューが囲むようにして現れ、更にベール達も現れた。

「まだいたのか!」

「しつこい人達ですね」

「俺はキングジコチュー様の忠実なしもべ」

「キングジコチュー様に立て付く者は、一人残らず排除してあげる」

立ちほだかるベール達に対し、ビルド達は大量のジコチューに立ち向かって行った。

「ソードハリケーン!」

「はあくはああああー!!?」

クローズがマグマのエネルギー波を、ソードがソードハリケーンをジコチューに放ちキングジコチューへの道を作る。

「集合!」

ハートがラブリーパーットを出現させるとラビーズをセットし、ビルドはフルポトルバスターのグリップを曲げ、ボトルを差し込む。

『タンク!』

ハートがハート型のエネルギー弾にジコチューを閉じ込め、掛け声と共に全てのジコチューを巨大なハート形のエネルギー体の中に集結させると、ビルドはフルポトルバス

ターに青いエネルギーを溜めていき、トリガーを引く。

「ハートダイナマイト!」

『フルボトルブレイク!』

フルボトルバスターが発射された中でジコチューに攻撃が決まるとハートは両腕を左右に開いた瞬間、エネルギー体を爆破させるハートダイナマイトを放った。

「ジョーカー!」

エースがラブリパッドにラビーズをセットすると、前に三つの鏡が現れる。

更にジョーカーがドラゴングレイブに力を溜める。

「プリキュア!ドラゴンズウインド!」

そしてミラクルドラゴングレイブから竜の姿をした竜巻、ドラゴンズウインドを放った。

「エースミラーフラッシュ!」

エースミラーフラッシュによってドラゴンウインドが増幅反射され、大量の鳥ジコチューを一掃した。

「すげえな!レジーナ!」

「今はジョーカーよ!おバカさん」

「なっ!? お前までバカって言うなよ!」

「うふふ！えつ、何？」

ジコチューが一掃してクローズのことをバカと小馬鹿していて、隙を突かれたジョーカーが、マーモの鞭に縛られてしまう。

「アンタ達！何すんのよ！」

「あらあら、何様のつもりかしら？」

「キングジコチュー様の娘と思ひ媚びへつらつて来たが、それも今日でおしまいだ！」

ベールがジョーカーに向けて指から光線を放つが、前に出たロゼッタがロゼッタリフレクションで防いだ。

「お友達には、指一本触れさせません！」

「てめえは引つ込んでろ！コラっ！」

グリスがベール達の前に現れ、ドライバーのレバーを操作した。

『シングルアイス！Ready go！』

グリスは左腕のロボットアームを向ける。

『グレイシャルアタック！バリーーン！』

巨大化したGBZデモリションワンでベールとマーモを捕まえて壁に叩きつけ、二人を気絶させると、ローグがスチームブレードでジョーカーを拘束していた鞭を切る。

「ジョーカー、大丈夫？」

「さあ、行きましょう」

「うん!」

その一方で、ダイヤモンドのダイヤモンドシャワーとイーラの光線がぶつかり合う。

「お願いイーラ!私達を先に進ませて!」

「キングジコチュー様はジャネジーの塊だぞ!その中に入ったらどうなるかお前でも分かっているだろう!?!」

「分かっている。だけど、晴夜君とキュアハートが行くって言うんだから、私も行かないきゃ」

ダイヤモンドシャワーの威力が上がっていき、イーラの光線を押していく。

「マナと晴夜君は、私の大切な友達だから!」

「友達・・・?!」

ダイヤモンドがラブハートアローの先端部を打ち鳴らすと同時に光線が凍り、粉々に砕け散った。

「困った時には手を差し伸べる、それが友達。あなたなら、分かってくれるはずよ」

イーラに告げてダイヤモンドはビルド達と共に先へ進んだ。

「何が友達だ!もうどうなっても知らねえぞ!」

イーラはそれだけを叫び、ビルド達にこれ以上何もしなかった。

そのままビルド達はカラスジコチューを協力し合いながら一通り片付け、キングジコチューの傍まで辿り着いた。

「さあつて、ここからだな」

「キングジコチューの体に入るには——」

「口からしかありませんわね」

「でも、あの口からどうやって中に入れて……」

みんながどうやってキングジコチューの中に入るのか悩む。

すると、ロゼッタが何か策があるようにみんなに告げる。

「わたくしが隙を作ります！」

ロゼッタがキングジコチューの隙を作ると叫ぶ。

「ロゼッタバルーン！1！2の！3！」

巨大なロゼッタバルーンが出て来ると同時にロゼッタが手を叩くと、巨大な何かが出て来て、こちらへと歩み寄って来た。

——それは、巨大なランスだった。

「きよ、巨大なランスだ？」

「「「ええ〜っ!?」」」

「で、デケえ・・・!!」

「あれアリなの!？」

みんなが巨大ランスも見て驚いている中、一人だけテンション上がっている人もいた。

「おお〜!何これ凄いいんだけど!こんなことも出来たの!?!テンション上がる〜!」

ビルドは頭を抑えながらテンションを上げながら叫ぶ。

「せ、晴夜?」

まあ、驚いてもしょうがない。ジョーカーはビルドのこの悪い癖を知らなかったようだ。

「あれは、晴夜の悪い癖なんだ」

「新しい物を見ると、テンションが上がっちゃうのよ」

クローズとソードが新しい物を見てテンションが上がってしまうのは、初めて見たジョーカーに説明した。

「な、何事シャル?」

「ら、ランスが・・・!!」

「お、お、大きくなったケル!」

「び、ビックリでランス〜!」

「「いるし！」」

「ほう、この私に立ち向かおうと言うのか。よかろう、来い！」

巨大なランスバルーンがキングジコチューに向かって走り出す。

「行つけえーっ！」

「パンチケル！」

シャルル達がそう言うのと、ランスバルーンがキングジコチューにパンチをかまそうとする。

「届かない……！」

だが動きを抑えられてしまい、その上リーチが短過ぎたので、攻撃が届かなかった。

「あれは……！」

「ビームだビィ！」

今度は額からビームを放とうとしたが、何も出なかった。

「「出ない！」」

「全然役に立たねえじゃねえか！」

グリスが突っ込みを入れるとチャンスを見つけたキングジコチューが、ランスの耳を噛みついて来た。

「「耳は！耳はダメ〜！」」

気持ちを察した三匹が同時に叫ぶ。

「さっ、今の内に!」

「ありがとう!ロゼッタ!」

しかし、ロゼッタとランスに引きつけられている間にキングジコチューに隙が出来た。

ビルド達はキングジコチューの口の中へ入って行く。

ビルド達は無事に中に入ることが出来た。

「よし、行くぞー!——ぐわあ!」

潜入するといきなり、ビルド達に向けて光線が飛んできた。

「なんだ!」

光線が飛んできた方向を見ると、そこにはロストボトルから生まれたキャツスルロス
トスマツシユがいた。

「スマツシユ!なんでここに!」

スマツシユが体内にいたことに驚くと今度はフクロウとクワガタのロストスマツ
シユ—ースタツグロストスマツシユとオウルロストスマツシユまで現れ、ビルド達に攻
撃しようとする。

だがグリストローグが前に出て、ビルド達をスマツシユの攻撃から守る。

「どうして、スマッシュが・・・」

「おそらく、黒いパネルを取り込んだ影響だろ、それが防衛システムのような形で現れたんだ」

ビルドが推測したことを説明すると、ロストスマッシュが三体集まり、今度は何体ものクローンスマッシュが現れ、ビルド達の道を塞ごうとする。

すると、 그리스 とローグが前に出る。

「ここは、俺達に任せろ」

「皆さんは、先に進んで下さい」

二人がスマッシュを引きつけビルド達に先に行けと言う。

「けど、この数は二人だけじゃあ・・・」

予想以上にスマッシュの数は多く、二人では危険だった。

「心配すんな、これくらい問題じゃねえよ」

「それに、王様が戻ればこれも消えるってことですよね」

「幻冬、かずやん・・・」

しかし、二人はスマッシュから引くつもりはなかった。

「わかった・・・頼むぞ」

「お願いね。かずやん、幻冬君」

「幻冬、どうかご無事で」

ビルド達はスマツシユを 그리스とかローグに任せ、先に進んでいくと、二人はスマツシユの方へと体を向ける。

「さあゝつて、幻冬・・・覚悟は出来てるか?」

「前にも同じこと言いましたよね」

ローグは初めて二人で一緒に戦った時と同じ会話だと思い出す。

「覚悟なら既に出来ています!」

あの時と同じ回答を迷わず叫ぶ。

「よく言った・・・行くぞおー!」

「はあああおー!」

グリスとローグはスマツシユの群れに二人で立ち向かっていく。

グリス、ローグ、ロゼッタのおかげでビルド達はキングジコチューの体内に入った。

「きゅび!」

「!」
「!」
「!」

ビルド達だけでなく、アイちゃんも一緒にキングジコチューの体内へと入って来た。

「アイちゃんも一緒にパパを助けたいのね!」

アイちゃんは笑顔で返すと後ろからカラスジコチューが向かって来た。
「ダイヤモンドスワークル!」

動きを止めたダイヤモンドがダイヤモンドスワークルを壁のように展開し、そこへと通過したジコチューが浄化される。

「幸せの王子と王女を助けるのがツバメの役目!ここは任せて先に行つて!」
「分かつた!」

向かつて来るカラスジコチューをダイヤモンドに任せ、ハート達は先へ進んだ。

中央部へと到着し、ビルド達が着地する。

「王様はあつちだよ」

ハートがマジカルラブリーパードで国王の位置を確認し、先を指差す。

「急ごう!」

すると、体内にもジコチューはおり、その数は多く、ビルド達を囲むようにして現れた。

「こんな所にまでジコチューがいつぱい!」

「それだけお父様はジャネジーに蝕まれている事です!」

王様の心が蝕まれていると推測すると、エースはラブキッスルージュを取り出した。

「エースショット!ばきゅくん!」

前方に向けてエースショットを放ち、道を作る。

そして先へと進むが、ジコチューが追いかけて来た。

「しつこいのよ!ドラゴンズウインド!」

ジョーカーがミラクルドラゴングレイブを地面に突き刺すと、そこから竜巻を放ちジコチューを吹き飛ばす。

だがそれでも数は多く、やられていないジコチューが追いかけて来た。

「このままついて来られては厄介です!」

追いつかれそうになったその時、クローズがジコチューに向かっていき、ナツクルを手を装備する。

『ボルケニック ナツクル!アチャー!』

クローズがボルケニックナツクルを繰り出し、追ってきたジコチューを吹き飛ばすと、ソードもジコチューに振り向く。

「ここは俺達が引き受ける!晴夜達は早く王様のところに行けえ!」

「龍牙、ソード」

「大丈夫。私達も後から必ず追いかける!さっ、早く!」

クローズとソードが前に出て、ビルド達の道を切り開こうとする。

「みんな！行くよ！」

「頼むぞ、龍牙！ソード！」

この場をクローズとソードに任せ、ビルド、ハート、エース、ジョーカー、アイちゃん
の五人は先へと進む。

「ここから先は、一歩も通さない！」

「通りたかったら俺達を倒して行くんだな！」

クローズとソードは追ってきたジコチュー達に向かっていく。

先に進んだ五人は、クローズ、ダイヤモンド、ロゼッタ、ソード、グリス、ローグの
助けもあり、遂にキングジコチューの心臓部へと到着すると、ビルドはドライバーから
ボトルを外し、変身解除した。

「ここが、キングジコチューの心臓……」

「このどこかに王様の本当の心が……」

晴夜達はキングジコチューの心臓部を見回す。

「ねえ、晴夜。どうやってパパを助けるの？」

「どうやって助けるのかと聞かれた晴夜はドライバーからハザードトリガーを外した。

「これで王様の心を救う」

ハザードトリガーで王様の心を取り戻すと言い出す。

「ハザードトリガーを・・・」

「でも、それ晴夜の作ったボトルがないとただの暴走装置でしょう」

ジョーカーの言う通り、フルフルラビットタンクボトルを使わなければハザードトリガーはただの暴走装置であることは事実だ。

「そんな事はない」

しかし晴夜は、ハザードトリガーはただの暴走装置ではないと言う。

「晴夜？」

——それは、昨晚の夜のことだった。マナに会った後、晴夜はそのまま四葉病院へと向かい父に会いにいった。

『父さん、白いパネル見つけたよ』

晴夜は白いパネルを拓人に見せる。

『そうか、ハザードトリガーを使ったのか』

拓人が言うのと晴夜は椅子に座って頷く。

『それで、聞きたいことがあるんだ』

聞きたいことがあると言うとハザードトリガーを取り出した。

『ハザードトリガーには、まだ別の機能があるんじゃないの?』

白いパネルの出現を見て、晴夜はハザードトリガーにはまだ他にも何かあると察していた。

『流石だな・・・確かにハザードトリガーにはただの暴走装置ではない』

拓人はハザードトリガーには別の使い道があると伝えた。

『本来ハザードトリガーは暴走装置ではない。人の心を浄化することが出来るんだ』

『人の心を・・・それってプリキユアでもその心を浄化するのは、難しいってこと?』

『ああ、おそらくハザードトリガーとお前のジーニアスポトルなら、それである人の心を救えるはずだ・・・』

『あの人・・・?』

拓人の言うあの人・・・それがわからなかった。

あの時、誰の心を浄化するのかわからなかったが、今ならわかる。父さんがハザードトリガーで取り戻したかった人、それはキングジコチューとなった国王だと。

「父さん、貴方が取り戻したかった心を俺が取り戻す!」

『マックス! ハザードオン!』

晴夜はトリガーを起動させドライバーに差し込むと、ジーニアスポトルを取り出し

た。

『グレート!オールイエイ!』

音声が鳴ると同時にキャップを正面に回してビルドドライバーに差し込む。

『ジーニアス!』

「くう!」

『イエイ!ガタガタゴットン!イエイ!ズツタンズタン!イエイ!ガタガタゴットン

!イエイ!ズツタンズタン!』

レバーを回すと、僅かながらも電力が出るがそれでも回し続け、特殊加工設備プラントライドビルダーGNが精製されていた。

『Are you ready?』

「変身!」

音声が流れ、白いボディになると同時にボトルに成分が注入され、プラントビルダーから射出された60本のボトルが全身に装填される。

『オーバーフロー!完全無欠のボトルヤロー!ビルドジーニアス!ヤベーイ!スゲイ!モノスゲイ!』

ハザードトリガーをドライバーに付けたまま、ビルドはジーニアスフォームへと変身した。

「さあ、実験を始めようか！」

五人は再び飛び立ち、国王の心を探そうとする。

「お父様！」

「パパ！」

その黒く染まった巨大プシケーの中に国王は取り込まれていた。

「ジャネジーが強まって行く……！気を付けて！」

すると、大量のキングジコチューの姿をしたジコチューが、五人を取り囲むようにして現れた。

「何者です！」

「我々はジコチュー細胞。キングジコチューの体に入り込んだバイキンを排除する！」

自らをジコチュー細胞だと名乗ると、口から五人に向けて光線を放った。

「させるか！」

ビルドが前に出てダイヤモンドのシールドを展開した。

「失礼ね！誰がバイキンよ！」

「お父様を返しなさい！」

「ハッ！そいつは無理だな！」

ビルド・ハート・エース・ジョーカーの四人が攻撃を仕掛ける。

「たあーっ!」

ミラクルドラゴングレイブから巨大な光線を放ってジコチュー細胞を一掃する。
「随分と物騒なものを持つてるじゃねえか」

すると細胞が集まって巨大化し、咆哮で四人を地面に叩きつけた。

「無駄だ無駄だ。ジャネジーで満たされているこのキングジコチューの体内で我々に勝てると思ってるのか?」

「勝つさ!」

「何!?」

ビルドがジコチュー細胞に勝つと叫ぶ。

「そのためにここまで来たんだ!俺達は国王を助けて!みんなの明日を作る!」
ビルドの発言にハート達も頷きジコチュー細胞へと向かって行く。

その頃、グリスとローグはキングジコチューの口の入り口ではロストスマッシュとクローンスマッシュの群れに挑んでいた。

「はあ、はあ・・・ようやく、クローンスマッシュが終わったな」

「でも、まだロストスマッシュが・・・」

二人でクローンスマッシュは全滅することは出来たが、まだキャッスル、フクロウ、ク

ワガタの三体のロストスマツシユが残っていた。

だが、 그리스とローグはここまでの連戦でかなり疲弊していた。

しかし、三体のロストスマツシユは容赦なく二人に襲い掛かる。

「ちよつとは、休ませろよ」

「もう、泣き言ですか、和也さんらしくないですね」

「へーん！言うようになったな！あの時は、すぐに弱音を吐くガキが！」

그리스はちよつと前までエボルトの強さに怖気付いた奴がここまで強い気持ちになつたと感心していた。

「幻冬、まだ行けるか？」

「もちろん行けます！」

二人が再びスマツシユに目を向けると、三体のロストスマツシユは二人を囲む。

キャツスルロストスマツシユが頭部の砲撃ユニットから二人に向けて光線を放つ。

だが、ローグのマントが 그리스を守るとオウルロストスマツシユに向けて跳ね返し、オウルロストスマツシユはキャツスルロストスマツシユまで飛ばされる。

『シングルアイス！Ready go！』

『グレイシャルアタック！バリーーン！』

그리스は巨大化した左腕のアームでスタッグロストスマツシユを捕まえ、キャツスル

ロストスマツシユに向けて投げ飛ばした。

「行くぞー!」

「はい!」

二人はドライバーのレバーを回し、高く飛躍した。

『Ready go!』

『グレイシヤル フィニツシユ!』

『プライムスクラップ ブレイク!』

グリスとローグはロストスマツシユにライダーキックを繰り出し、三体のスマツシユは二人の攻撃を受けきれず爆破した。

すると、スマツシユを倒した途端、二人は倒れこむ。

「やったぜ、まこぴー」

「晴夜さん、エース……のお父さんをお願いします」

二人は力を使い果たし、そのまま倒れこんだのだった。

一方、ダイヤモンドがカラスジコチューを抑えようと一人で戦っていたが、突破されてしまった。

「キュアダイヤモンド!」

「大……丈夫よmana達の所へは……行かせない！ラケル！」

「おうともさ！僕は、六花と一緒に最後まで頑張るケル！」

「見せてあげましょう、私達の底力！」

ダイヤモンドとラケルは決死の思いで立ち上がりジコチュー達に立ち向かおうとする。

「プリキュア！ダイヤモンドブリザード！」

カラスジコチューを引き寄せ、自分達をも凍らせるダイヤモンドブリザードを放つた。

（mana……晴夜君……後は任せたからね……）

更にソードとクローズの方もジコチューと必死に立ち向かう。

「閃け！ホーリーソード！」

『ミリオンヒット！』

大量のイカジコチューの触手を手刀で斬り裂き、クローズがミリオンヒットを、ソードがホーリーソードを放って浄化させた。

だが、それでもジコチューは消える様子もなくさらに増援が来るように二人に向かつてくる。

クローズはビートクローザーにボトルを差し込み、ソードはラブハートアローにラビーズをセットする。

『スペシャルチューン! ヒッパレー! ヒッパレー! ミリオンスラッシュ!』

「オラアアアア!」

「プリキュア! スパークルソード!」

次に襲い掛かって来たカラスジコチューの羽根をスパークルソードで撃ち落とし、ミリオンスマッシュが全て直撃し浄化させる。

「はあ、はあ、はあ・・・」

「くそつ、まだいるのかよ・・・」

流石に疲労も蓄積し、二人とも限界に近づいていた。

その隙にゴリラジコチューがソードに殴ろうとした。

だが、クローズがソードの前に出てジコチューの攻撃の盾となった。

「こいつは、アイドルなんだ! 傷つけさせねえ!」

「龍牙・・・」

「力がみなぎる! 魂が燃える! 俺のマグマがほとばしる!」

クローズは自分のフレーズを叫ぶとレバーを回し、高く飛躍した。

『Ready go!』

「もう誰にも！止められねえー！！」

『ボルケニツク アタツク！』

八体のマグマの竜がクローズの足へと収束されたライダーキツクを繰り出し、最後のゴリラジコチューを倒した。

「はあ、はあ、はあ・・・やったぜ」

「龍牙、大丈夫!？」

力を使い過ぎて倒れかけたクローズをソードが肩を貸して介抱する。

「ああ、早く晴夜達のところに」

「ええー！」

ソードはふらふらのクローズを支えながら、ビルド達を追いかける。

「いつも、守ってくれてありがとう」

「・・・お前を守るのは、当たり前だろ」

クローズの一言を聞いてソードの顔から笑顔が溢れる。

そして外では、ロゼッタがキングジコチューの猛攻をランスバルーンで抑えていた。

「これ以上はラブリーパッドが・・・！」

だが、ロゼッタの方は限界が近づこうとしていた。

「いいえ、この世界を守るために私達は!」

「負ける訳には行かないでランス〜!」

「プリキュア!ロゼッタリフレクション!」

ロゼッタリフレクションを発動させてキンググジコチューに向けて飛ばした。

「ぬんっ!」

キンググジコチューの拳がロゼッタリフレクションを貫き、割れるが、そこにロゼッタの姿は無かった。すると上から、ランスバルーンが降下しながら頭突きを放って、キンググジコチューの頭に命中させてよろけさせた。

「マナ・・・ちゃん・・・」

キンググジコチューが倒れると同時にランスバルーンが消え、ロゼッタがマナの名を言つて気絶した。

「お嬢様!」

セバスチャンは巨大なマットを地面に敷き、落ちてきたロゼッタを救った。

「お嬢様、あなたはよく頑張りました」

セバスチャンは彼女に頑張ったと告げ、ロゼッタを横にさせる。

その頃、キングジコチューの心臓部ではビルド達はジコチュー細胞に必死に抵抗し、国王のところまで行こうとする。

「お父様！」

「お願い！目を覚まして！」

エースとジョーカーが必死に呼びかけようとする。

「呼びかけても無駄だ。国王の魂は既に無い！」

「そんな事無い！あたしには王様の愛の鼓動が聞こえた！王様の魂は、確かにそこにある！」

ハートがハートシュートを放ちながら叫ぶ。

「国王は王女から病を助けるために魂を、プシユケーを闇に捧げた。貴様らが何度呼びかけようと、二度と目を覚ますような事は——無い！」

そう叫び、ハートシュートを握り潰した。

更に他のジコチュー細胞が集中して光線を放った。

するとその時、愛の鼓動が聞こえ、キングジコチューのプシユケーの色がピンク色になった。

「私の……家族に……手を出すな……」

「国王が目覚めた……!?笑わせるな。貴様が娘の命を救いたいと言うワガママを言わ

なければ、トランプ王国の国民達は平和に暮らせていた!王でありながら、どこまでも家族にこだわる貴様は、この世で一番自己中人間!全ては自分で撒いた種では無いか!

「違う!親が子供を助けたいって気持ちは、当たり前だ!そんなの、自己中でもなんでも無い!」

「何っ!?」

ビルドがフルボトルバスターをジコチュー細胞に放つ。

「家族ってね、凄いなだよ。どんなに落ち込んでる時も、励まし合ってキュンキュン出来る」

ハートが家族の凄さを語り始める。

「だからね、あたしはレジーナと亜久里ちゃん、アイちゃんをお父さんに会わせてあげたい。そのためなら、この命が燃え尽きるまで、あたしは絶対に諦めない!なぜならあたしは……!」

すると、ハートの胸が光り輝き出す。

「感じるシャル!キュアハートの鼓動がキュンキュン高まつてるシャル!」

「あたしはみなぎる愛!キュアハートだから!」

ハートの愛の鼓動が高まつた事によって放たれたピンク色のエネルギーが巨大化し、

ジコチュー細胞を消滅させた。

「さあ！晴夜達は今の内に国王様を！」

「ああ！」

「はい！」

「ええ！」

ビルドとアイちゃんを抱えたエースとジョーカーが国王の元へと向かう。

ハートの目の前にジコチュー細胞が再び一つに集まった。

「家族の愛だと・・・？笑わせるな。娘一人の命を救うために、国を滅茶苦茶にされたトランプ王国の民が、許すと思うか・・・！」

ジコチュー細胞がハートを呑み込もうとしたその時、横から攻撃を受けた。

その攻撃を放ち、ハートを救ったのはソードだった。

「愛に罪は無い。悪いのは、人を愛する心を利用したあなた達よ！」

ジコチュー細胞を指差して叫ぶと同時に、ジコチュー細胞が消滅した。

そして、ついに国王の黒く染まったプシケの前へとビルド達はたどり着いた。

「いいか・・・」

準備はいいかとビルドが後ろにいるエースとジョーカー、アイちゃんに尋ねる。

「はい・・・」

「晴夜……」

「きゅび」

三人は迷わず首を縦に振る。

「わかった。勝利の法則は決まった!」

ビルドが決め台詞を叫ぶとドライバーのレバーを何度も回しだす。

『ワンサイド!逆サイド!オールサイド!』

ビルドの60本のボトルが全て輝きだした。

『Ready go!』

ビルドの右手にエネルギーが収束されていき、ビルドは右手に収束されたエネルギーを基に国王の黒く染まったプシユケーにライダーパンチを当てる。

「くう!」

だが、あまりにも巨大な黒いプシユケーにビルドが押されそうになり、ビルドのライダーパンチを跳ね返されそうだった。

「「晴夜……?」」

(ハザードトリガー、お前はただの暴走装置じゃない……本当の力を見せろ!)

ビルドは負けじと、さらに力を入れライダーパンチを当て続ける。すると……

『ハザード フィニッシュ!』

音声が始り出すとハザードトリガーのメーターが回りだし、トリガーから光が放たれた。

すると、国王の巨大な黒く染まったプシケーターがピンク色になろうとする。

『ジーニアス フィニッシュ！』

「はあああああー！」

ジーニアスフィニッシュと音声が始り出し、ライダーパンチからエネルギーが注入されていくと国王のプシケーターは完全なピンク色になっていく。

そのまま、巨大な国王の黒く染まったプシケーターがピンク色へとなると、ビルドはそれから拳を離れた。

「はあ！はあ…やった…」

ビルドがプシケーターをピンク色に戻すと、力尽きそうになり倒れこもうとする。

「晴夜！」

クローズが現れるとビルドを支える。

「亜久里ちゃん！レジーナ！アイちゃん！行くんだ！」

ビルドに行けと言われた三人は頷き、国王の元へと向かう。

「パパ！」

「お父様！」

「ぱーぱー!」

ジョーカー・エース・アイちゃんが国王に手を差し伸べる。

「アンジュ……」

国王の身体にヒビが入り、顔の一部が砕け、目が見えるようになると、アンジュの姿が国王の目に入った。その手を掴んだ国王は解放され、三人の手によって救い出された。

キングジコチューのプシケから光が放たれ、全身がハートに包まれ、完全に消滅した。

「ぎ、キングジコチュー様が……」

「アイツら、ホントにやりやがった……」

同時にライダー達が戦っていたジコチューが消滅し、プシケとなった。

「一体何が起こったのでしょうか……?」

「プリキュアが、キングジコチューのハートに火を付けたんですよ!」

巨大なクレーターとなった場所で、マナと六花が目覚めます。

「パパ? ママ? おじいちゃんも」

その場には二人の家族がいた。

「よくやったな」

「マナ、見てたわよちゃんと」

頑張ったと家族のみんなが言っていると、マナ達の前にクローズに支えられたビルドが着地した。

二人は地面に足が付くとビルドは膝を折り、ドライバーからジーニアスポトルとハザードトリガーを外した。クローズもマグマナツクルをドライバーから外し、変身を解除した。

『桐ヶ谷君！上城君！』

そこにいた全員が二人がビルドとクローズだと知って驚いた。

「晴夜！」

マナが勢いよく晴夜を抱きしめると、これまた皆が驚くが、あゆみは嬉しそうに見ていた。

「やったんだね晴夜！」

「ああ、こいつのおかげだな」

晴夜はハザードトリガーを見つめる。

(やっぱり、暴走装置じゃなかったんだね)

ハザードトリガーの本当の力を引き出し、父の助けたかった心を取り戻すことが出来

た。

「マナ!晴夜!」

すると、変身が解けたレジーナが晴夜とマナを抱き締める。

「約束、守ってくれてありがとう。マナ、晴夜、大好き!」

二人の事を大好きと高々と叫ぶと、

「桐ヶ谷晴夜君……」

真琴と亜久里に支えられて国王が晴夜に近づく。

「レジーナの心だけでなく、私まで救ってくれてありがとう」

国王はレジーナと自分の心を助けてくれた晴夜に頭を下げる。

「俺は、ただあなたの心を救うきっかけに過ぎません。本当のあなたの心を救ったのは

三人の娘ですよ」

晴夜は亜久里、レジーナ、アイちゃんに国王の心を取り戻したと言う。

「それでも、君も私を救ってくれたありがとう」

国王はもう一度、晴夜に頭を下げる。

しばらくして、大貝第一中の生徒達が駆け付けた。

「みんな!」

「会長!よくぞご無事で!」

「大丈夫!?? ケガは無い!??」

「このっ! 心配かけさせやがって!」

「ゴメンゴメン」

生徒達はマナに駆け寄ると晴夜の腰に装着していたビルドドライバーに気づく。

「それって、まさか桐ヶ谷が!」

「仮面ライダービルドだったんですか!??」

生徒達にも晴夜がビルドだったとバレてしまった。

だがその時、シャルルが闇の鼓動を感じ取った。

「馬鹿め。闇は永遠に消え去る事は無い」

上を見上げると、そこにはベールがいた。

「ベール、アンタまだ・・・!」

「いい加減諦めろ! お前達の負けだ!」

晴夜が言うがベールは諦めるどころか笑っていた。

「キングジコチュー様、一万年の時を経て蘇ったあなたが随分みすばらしい姿になって

しまいましたね」

その手には、小さくなったジコチュー細胞があった。

「ですが、ご安心下さい。あなたの意志は、この私が受け継ぎます」

そう言うとベールはジコチュー細胞を口の中に入れた。

「これで俺はナンバーワン。人間界もトランプ王国も全て俺のものだ!」

ベールはナンバーワンと叫ぶが、急にベールが巨大なジャネジーに取り込まれてしまった。

「ジャネジーを取り込もうとして自分が取り込まれちゃ、世話無いじゃない」

「マーモ!イーラ!助けてくれ・・・っ!」

「無理だ、もう遅いよ・・・」

ジャネジーが固まってヒビが入ると同時に爆発し、そこからキングジコチューより禍々しい怪物が出て来た。

「間違いない・・・!奴だ・・・!かつてこの宇宙を支配していた巨大な力・・・!」

キュアエンプレスでさえ、消し去る事が叶わなかった闇の存在・・・!」

「いかにも。我が名はプロトジコチュー。一万年の時を経て、今蘇った!世界を再び覆い尽くし、全ての命を思うがままに支配してくれるわ!」

その怪物はプロトジコチューと名乗り、この世界の命を全て支配すると宣言する。

「そんな事、絶対に許さない!」

「私達が居る限り!」

「あなたの好き勝手にはさせません!」

「この命が燃え尽きるまで！」

「全力で戦い抜いて見せる！」

「アイツとの決着は、ここで付けるわ！」

「命を支配するだなんて事、させはしない！」

「てめえをぶつ倒す！」

「俺達が、お前を止める！」

「絶対にこの世界を守ってみせる！」

—— マナが、六花が、ありますが、真琴が、亜久里が、レジーナが、幻冬が、和也が、龍牙が、そして、晴夜の十人がプロトジコチューとの決戦を望もうとしていた。

「しかし……」

「大丈夫。あの子達を信じましょう。晴夜君、マナ達をお願いね」

マナの決意の目を見たあゆみは晴夜達に任せる事にした。

「ジヨーさん、セバスチャンさん、みんなを安全な場所へ」

「かしこまりました」

「さあ、急いで！」

二人が健太郎達を安全な場所へ誘導させた。

それを確認すると十人はプロトジコチューの方を向き構える。

「行こう。みんな!これがあたし達の最後の戦いだよ!」

マナが言うと五人はそれぞれラビーズをセットした。

「行くぞ!」

四人はドライバーを腰に装着し、変身アイテムを取り出してドライバーに差し込む。

『グレート!オールイエイ!ジーニアス!』

『ボトルバーン!クローズマグマ!』

『ボトルキーン!グリスブリザード!』

『プライムローグ!』

特殊加工設備プラントライドビルダーGN、マグマライドビルダー、アイスライドビルダー、プライムライドビルダーとワニの顎が下から出現。

四人の準備完了し、音声流れる。

『Are you ready?』

「変身!」

「プリキュア!ラブリンク!」

「プリキュア!ドレスアップ!」

十人の体が光り輝き出し、姿を変えようとする。

『完全無欠のボトルヤロー!ビルドジーニアス!スゲイ!モノスゲイ!』

『極熱筋肉！クローズマグマ！アーチャチャチャチャチャ　チャチャチャチャアチャア！』

『激凍心火！グリスブリザード！ガキガキガキガキーン！』

『大義晩成！プライムローグ！ドリヤドリヤドリヤドリヤ！ドリヤー！』

『みなぎる愛！キュアハート！』

『英知の光！キュアダイヤモンド！』

『陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！』

『勇気の刃！キュアソード！』

『愛の切り札！キュアエース！』

『運命の切り札！キュアジョーカー！』

「一二」響け！愛の鼓動！ドキドキプリキュア！「一二」

ドキドキプリキュアと名乗ると十人はプロトジコチューを見据える。

「心火を燃やしてぶっ潰す！」

「大義のための犠牲となれ！」

「今の俺たちは負ける気がしねえー！」

「この世界は、俺達が絶対に守る！さあ、実験を始めようか！」

今、十人の仲間が究極のジコチュー、プロトジコチューに立ち向かおうとする。

次回! Re・ドキドキ&サイエンス!
第56話 光と闇を続ける二本のボトル!そして…

第56話 光と闇を統べる二本のボトル！そして：

キングジコチューからジーニアスとハザードの力で国王を取り戻せた。

だがビルド達の前に、国王の心を闇に染めた張本人、プロトジコチューが現れた。

そして、激しい戦闘が行われ、町中では爆発が起こる。

六人のプリキュアと四人の仮面ライダーはプロトジコチューに押されていた。

プロトジコチューがビルを浮かせ、ビルド達を指差すとビルが彼らの前に飛んでくる。

『フルフルマッチブレイク！』

『ミリオンスマッシュ！』

ビルドとクローズのフルボトルバスターとビートクローザーから放った技が襲ってくるビルを壊すが、プロトジコチューは更に大量のビルを飛ばして来た。

『うわああああー！』

降って来るビルがビルド達を襲う。

すると、今度は指から大量の赤黒い光線を放った。

「ロゼツタリフレクシオン!」

それに対してロゼツタはロゼツタリフレクシオンを展開させ、みんなを守る。

「皆さん、続いて下さい!」

ロゼツタリフレクシオンを盾としてロゼツタが前に出て、ビルド達がその後ろについて行く。

「任せて!ホーリーソード!」

またビルを飛ばして来るが、前に出たソードがホーリーソードで真つ二つに斬り裂いた。

「ありがとうソード!」

それを見たプロトジコチューは、今度は先程よりも威力が増した光線を放つ。

「させないわ!」

ジョーカーがミラクルドラゴングレイブから光線を放ち、ぶつけさせる。

だがプロトジコチューの方がパワーは上で、ジョーカーが放つたのを打ち消した。

「ジョーカー!」

ジョーカーは余波で吹き飛ばされるが、グリスとロゼツタに救われた。

「ロゼツタ!かずやん!」

ダイヤモンドとローグ、エースが前方左右からプロトジコチューに向かって飛ぶ。

「トウインクルダイヤモンド！」

「エースショット！ばきゅくん！」

『ファンキーショット！クロコダイル！』

三人がファンキーショットとトウインクルダイヤモンドとエースショットを放つが、片手で止められる。

その隙にハートが攻撃を仕掛けようとしたその時、プロトジコチューからジャネジーが放たれてハート、ダイヤモンド、ローグ、エースの四人が吹き飛ばされた。

「みんな！このお！」

「このやろー！」

ビルドとクローズの二人がドライバーを操作し、プロトジコチューに向かっていく。

『ジーニアスアタック！』

『ボルケニックファイニッシュ！』

二人が同時にライダーパンチを放とうとした。

「愚かな、はあ！」

しかし、プロトジコチューは二人を簡単にはじき返し、二人も地面に叩きつけられた。

「うわあああああ！」

「晴夜！龍牙！」

「貴様らもだ!」

「[[[[?]]]]」

更にプロトジコチューは宙にいた四人も地面や壁に叩きつけられた。

ビルド達は壁に叩きつけられ、かなりの痛手を負った。

「流石に敵のボスだけあつて強え……!」

「みんな……大丈夫ですか……?」

「なんとかな……」

「大した事無いよ……」

「かすり傷ですわ……」

「全然、まだ行ける……」

全員深手を負ったが立ち上がろうとする。

「もー無理……」

だがジョーカーはもう無理だと言うと、後ろから倒れこむ。

「折れるの早っ!」

「さっきの威勢は!?」

「バカね、冗談よ。マナと晴夜が一緒なんだから、最後まで諦めたりしないわ」

ジョーカーが諦めないと言うと笑顔でビルドとハートを見る。

「ジョーカー……」

「もう、昔のワガママな女の子じゃないいな……」

「アタシだってプリキュアだから」

「へへーん！最高だな！」

ビルドが口癖を叫ぶと全員、気持ち揺らぐ事なく立ち上がった。

「行くよ、みんな！」

「ああ！勝利の法則は決まった！」

ビルド達四人はドライバーのレバーを操作し、四方を囲み高く飛躍する。

『『『Ready go!』』』』

『ジーニアスフィンニッシュ！』

『ボルケニックアタック！』

『グレイシャルフィンニッシュ！』

『プライムスクラップブレイク！』

四人が四方を囲むかのようにライダーキックを繰り出した。

だが、プロトジコチューは四人が放ったライダーキックを防ぐ。

「無駄。その程度で我を倒せない」

「それはどうか」

後ろの方ではハート達六人が構えていた。

「プリキュア!ロイヤルラブリーストレートフラッシュ!」

「プリキュア!ドラゴンスピニングアタック!」

プロトジコチューがビルド達四人のライダーキックを防御していて動けない隙に、ハート達六人が同時に技を放った。プリキュア達が決まるとビルド達四人もプロトジコチューから離れた。

しかし、プロトジコチューには効果は無かった。

「効かん!」

高速で移動して後ろを取り、パンチとキックで十人を攻撃し、全員が倒れる。

「消えろ!」

そう叫ぶと同時に、胸の口からビルド達に向けて光線を放った。

そこに巨大なクレーターが出来るとプリキュアと仮面ライダーが倒れていた。

仮面ライダーの四人は変身解除しており、和也と幻冬のビルドドライバーは破損して外れていた。

「六花、しっかりするケル!」

「ありす!かずやん!負けちゃダメランス!」

「真琴!龍牙!立ち上がって!」

「亜久里、レジーナ、幻冬、しっかりするきゅぴ！」

「マナ、晴夜。頑張るシャル！あなた達はみんなの希望シャル！あなた達が諦めたら、この世界はおしまいシャルよ！」

シャルル達が出来て気絶している晴夜達に必死に立つように呼びかける。

「心配するな。お前達の家族も仲間も、すぐに消し去ってやる。世界は、いや、この宇宙は全て私のものだ！」

高々と笑い上げながらプロトジコチューが全て自分のものだと呼ぶ。すると、ハートの手が動く。

「もう……何言っちゃってるかな……」

フラフラだがハートは起き上がって、プロトジコチューに話しかける。

「世界を独り占めしたら、確かに勝手に放題……けどね、たった一人の世界だったら、あなたは横入りも信号無視も出来なくなるんだよ」

「何っ？？」

「そう……自己中って言うのは、結局誰かに迷惑を掛けて振る舞う事。誰もいない世界では、あなたは自己中でいられなくなる！」

「黙れ！黙れ黙れ！この私に説教するとは！」

プロトジコチューはハートの目の前に近づき、拳を叩き込んで吹き飛ばす。

吹き飛んだハートはビルの壁に叩きつけられた。

「マナーー!」

意識を取り戻した晴夜が叫び、起き上がろうとし、外れたビルドドライバーを掴む。

「貴様こそ自己中だ!」

更に手から光線を放って命中させて吹き飛ばし、ビルを貫かせた。

「や、やめろ…!」

立ち上がろうとするが、ずっと続いた戦いの疲労と体から走る痛みのせいで思うように体が動かなかった。

「その生意気なプシユケー、この手で抜き取ってくれる!喰らえ!最強のジャネジーを!」

動きを封じたプロトジコチューがハートのプシユケーにジャネジーを注いだ。

「ダメよマナー!心を強く持つて!」

「プシユケーを渡しちやダメ!」

ダイヤモンドとジョーカーがハートにそう言うが、彼女には声は届かない。

「マナー!」

「マナーちゃん!」

ソード、龍牙、和也、ロゼッタもハートに呼びかける。しかし、プロトジコチューは

無慈悲にもジャンネジーを注ぎ続けた。

「止めて（ろ）ーっ！」

エースと幻冬が止める様に叫ぶ。だがジャンネジーの注入は止まらない。

そして遂にハートの胸のプシユケーが真っ黒に染まり、抜き取られた。

「遂に奪ったぞ。プリキュアのプシユケーを！これで世界は私のも——ぬおっ！」

その時、背中から攻撃を受けた。

「そいつはマナのもんだ！お前のもんじゃない！」

プロトジコチューが振り向くと、そこに居たのはドリルクラツシャーの銃口を向けた晴夜だった。

そのまま、ドリルクラツシャーのモードを変えて生身でプロトジコチューに向かっていく。

「人間が我に勝てると思うか！」

プロトジコチューが晴夜を振り払い飛ばす。

「晴夜……！」

振り払われ倒れるも、晴夜はドリルクラツシャーを支えとして再び起き上がった。

「まだ邪魔をするか……！」

「当然だ。俺はあいつを守るって決めたんだ！」

「貴様は何者だ!」

「天才科学者の息子と弟で……キュアハートを……マナを守り続けると決めた!」

仮面ライダー……桐ヶ谷晴夜だ!」

晴夜がマナを守ると叫ぶと、再びビルドドライバーを腰に装着した。

「無駄だ。貴様の持つている力では我には勝てない!」

奴の言う通り、プロトジコチューは現在、晴夜の最終フォームのビルドジーニアスの力を遥かに超えていた。

「そうかな……」

しかし晴夜は自信たっぷりの表情になってそう言うと、ポケットから父から預かった2本の白と黒のボトルを取り出し、その2本のボトルを振り始める。

——すると、晴夜の後ろから白と黒で書かれた数式が出現した。

「これは……」

「さあ、実験を始めようか……」

晴夜の戦う前のフリーズを言うと、ボトルのキャップの栓を回した。

『ロイヤル! シャドウ! ベストマッチ!』

ボトルから『R/S』と重なり浮かび上がるとドライバーのレバーを回し、スナップライドビルダーから白のアーマーと黒いアーマーが前後から出現した。

『Are you ready?』

音声が鳴ると晴夜は腕を出して構える。

「変身!」

変身と叫ぶとともにアーマーが晴夜の体と重なり、装着されると身体から煙に巻き上がる。

『光と闇は一つとなり!真の力へ! マジエスティロード! イエイ! イエイ!』

晴夜の体に重なったアーマーは普段のフォームなら左右対象となるはずが、今のフォームは二人のアーマーが混ざり合ったかのような灰色の姿へと変わっていた。

右の複眼は蝙蝠の羽をモチーフとなっていて色はハザードフォームの様に黒く、左の複眼は鳥の羽をモチーフとしたもので色はジーニアスフォームのスーツの様に白くなっている。

そしてビルドの背中から、複眼と同じく天使と悪魔を連想される白い鳥の羽と黒い蝙蝠の羽を模したエネルギー体の翼が広がり、プロトジコチューに近づいていく。

「ふん! そんなものが!」

プロトジコチューがビルドに殴り掛かろうとする。

だが、ビルドはプロトジコチューの拳を掴み、そのまま後ろへと投げ飛ばす。

「バカな・・・」

プロトジコチューが驚いてるとビルドは地面に落ちる寸前のハートを救い、みんなの前と降り立った。

「晴夜……」

「なんだよ、そのフォーム……」

「こんな、ベストマッチがあつたんですか?」

ビルドの新フォーム、その存在すらわからない形態を見て全員が驚く。

「マナを頼む」

ビルドがハートを地面に寝かせると上空のプロトジコチューを見据え、再び飛び上がる。

「貴様……」

「勝利の法則は、決まった!」

『フルボトルブレード!』

決め台詞を言うと、フルボトルバスターより更に大きくなった大剣がドライバーから出現した。ビルドはその武器を見つめる。

「……ありがとう」

ビルドはこのボトルと一緒に作ってくれたであろう父親に向かってお礼を言うと、フルボトルブレードを持ち、プロトジコチューに向かっていく。

「くられ、最強のジヤネジー！」

プロトジコチューがジヤネジーをビルドに向けて放った。

すると、ビルドはフルボトルブレードを前に出し、最強のジヤネジーを切った。

「バカな……」

プロトジコチューはビルドが自身のジヤネジーを切ったことに驚いていると、フルボトルブレードのグリップにボトルを差し込む。

『ラビット！』

ボトルの名称が鳴り響くとブレードのトリガーを引き、プロトジコチューの前と現れる。

「!!?」

危険を感じたプロトジコチューは、すぐさまビルドから離れる。

『フルボトルスラッシュ！』

赤いエネルギーを纏ったブレードが光り出すと、フルボトルブレードの剣が伸び、遠距離に離れたプロトジコチューに攻撃が届いた。

「バカな、我にこのような傷が！」

傷が出来たことに驚くとプロトジコチューはビルを持ち上げ、ビルドに向けて放つ。

『ゴリラー！ダイヤモンド！』

今度はゴリラボトルとダイヤモンドボトルを差し込む。

『ベストマッチスマッシュ!』

ビルドはブレードを横に切るように振る。そのブレードの一撃はゴリラのように一撃で全てを砕く威力だった。

そして、襲ってきたビルが全て砕け、煙の中から無数のダイヤモンドがプロトジコチューを襲う。

「はあああああーっ!!?」

プロトジコチューの上を取りビルドはフルボトルブレードを振り上げ、プロトジコチューを地面へと叩き込む。

「すげえ・・・」

圧倒的にビルドが優勢なことに龍牙達は驚く。

「貴様、許さん!」

プロトジコチューが起き上がりビルドの元へと向かうと、プロトジコチューは一つのプシュケーを見せる。

「それは、マナの!」

「貴様の守ろうとしているものも、これで終わりだ!」

「やめろおーっ!!」

プロトジコチューはハートのプシケューにジャネジーを注ぎ込む。

その時、ハートのプシケューの色が元に戻りかけた。

「これは……」

「何故だ！」

もう一度プシケューにジャネジーを注ぎ込み、また黒く染まるが、戻りかける。

また注ぎ込むが、今度こそ元に戻り、光り輝き出した。

そしてそのプシケューがプロトジコチューの手元から離れるとハートの元に戻り、彼

女は目を覚ました。

「マナー！」

ビルドが降り立ちハートの肩を掴む。

「心配掛けちゃったね」

「お前が、無事でよかった」

ハートが無事だったことに、ビルドは安心する。

「どうやら無駄な努力だったみたいね！」

「たとえ肉体が減びようとも、わたくし達の魂は、思いの力は不滅です！」

「お願いみんな、あたしに力を貸して！」

「「「ええ！」「」」」

みんなが頷くと、五人の胸のハートが光り出す。

「……私達の力をキュアハートの元へ!」

ダイヤモンド・ロゼッタ・ソード・エース・ジョーカーがハートに力を与える。

更にマジカルブリーパッド・ミラクルドラゴングレイブ・エターナルゴールデック
ラウンも力を与えた。

「キュアハート! パルテノンモード!」

そして、五人の想いと三種の神器が集うと、ハートのコスチュームに白いマント様の
パーツが装着され、左胸のハートから生える翼も強化、そこからマントと同素材のよう
な襟飾りが出現、コスチュームのピンク色もやや薄めのパールピンクに変わった。

こうしてキュアハートは、最終パワーアップフォーム・パルテノンモードへと変身を
遂げた。

「行くか?」

「うん!」

ビルドとハートは二人でプロトジコチューへと向かって行く。

「まやかしが……!」

プロトジコチューが拳から攻撃を繰り返すが、ビルドとハートは片手で止めると、そ
れから拳を掴み、投げ飛ばした。

プロトジコチューは地面に叩きつけられ、体勢を整えると同時にハートが飛ぶ。ハートとビルドの一撃が、プロトジコチューを吹き飛ばした。

プロトジコチューが連続で攻撃を繰り返すが、二人はこれかわす。

すると、今度は高速で分身し、二人の後ろを取ったプロトジコチューが腕から光線を放つ。

『タンク！フルボトルスラッシュユ！』

タンクボトルをグリップに装着するとブレードからタンクの青いエネルギーを纏い、ブレードで光線を切って爆発させる。そして、爆風の煙の中からハートが現れた。

「速いー！」

懐に飛び込み、キックを放って上空へ吹き飛ばす。

ハートは翼を展開して飛び、その時に起きた風圧で宇宙へと飛ばした。

ビルドもそのあとについていく。

「さっきまでのキュアハートとはまるで違う……！」

プロトジコチューがハートの今までとは違う強さを見て驚く。

その頃、地上の方にいたジョーと国王はただ見据えていた。

「キュアハートだけじゃない、暗夜君もさっきまでとは違う。一体あのボトルは？」

「あれのボトルは光と闇だ」

「博士!?」

後ろからパンドラボックスを持って晴夜の父：拓人が現れた。

「博士、光と闇とはなんですか?」

ジョーは拓人の言う、晴夜が使っている光と闇のボトルとは何かと聞く。

「私がジコチューの側にいたのは、あなたを救うためと新世界を作る為の法則、そして、プロトジコチューを倒す為の秘策を見つけたためだった」

「つまり、今のビルドは対プロトジコチューのビルドという事か?」

「その通り、あの2本ボトルはまさに人の心だ」

「人の心・・・」

人の心、それは誰もが持っている二つの心——

悲しみ、恨み、悪意、嫉妬、支配欲、憤怒、殺意、そして自己中心的な心、それが闇の心。

色んな人と手を繋ぎ合える愛情、例え衝突しあってもいつも協力し合える友情、常に歩み続けられる夢、誰かを思いやれる優しさ、そして自身の闇をも受け止める心、それが光の心。

「どんな人間にも、光と闇がある。けど、それを認め合い一つとなる時こそ、真の力が生

まれるんだ」

「光と闇・・・晴夜君は以前、ハザードトリガーの暴走で自分の中の闇を認め、どっちも受け入れたからこそあのボトルが使えたということですか？」

「いや、元々はあいつの、晴夜の名前から由来したものなんだ」

ジョーはそう推測するが、拓人はあの2本のボトルは晴夜からの由来だと言う。

「晴夜・・・晴れた光の世界、夜の闇の世界。二つの世界にも手を伸ばしてくれろ」

晴夜という名前の意味を語り、それがあの2本のボトルの由来だと話す。

「そしてプリキュアも、想いの力が人を強くする！誰かを守りたいと言う想いの力を持つつ女の子は、誰でもプリキュアになれる！そしてその力は、この宇宙を生み出したビツグバンにも匹敵するんだ！」

三人は空中で戦う二人を見上げる。

「ジオナサン。これを晴夜達の所に」

拓人がジョーにパンドラボックスをわたした。

「これを・・・」

「頼む」

「わかりました」

ジョーはパンドラボックスを持って、ビルド達の所へと向かう。

その頃、空中ではプロトジコチューが胸の口から光線を放つ。

『海賊! 電車! ベストマッチスマッシュユ!』

ビルドのブレードから放たれたエネルギー波が光線を相殺すると、ハートはかかと落としてプロトジコチューに放ち、地球まで落とす。

急降下したプロトジコチューは大気圏の熱で燃え、海に落下した。

そして、ビルドとハートも続いて降りてくると、海面からプロトジコチューが現れた。「確か、一万年前にもこの私に刃向う者がいた。倒れても倒れても、何度でも立ち上がって来る少女達……まさか……! 時代は繰り返すと言うのか……!」

ハートの姿が、一万年前のプリキュア——キュアエンプレスと重なった。

「だが、今回は少女だけじゃない。俺たちが居た!」

ビルドはドライバーのレバーを回し、更にフルボトルブレードにドライバーから抜いた2本のボトルを差し込む。

『ロイヤル! シャドウ! マジエステイ!』

フルボトルブレードに光と闇の色をしたエネルギーを纏う。

『Ready go!』

ドライバーから音声が鳴ると、ブレードに纏ったエネルギーが混ざり合い、それをプ

ロトジコチューに向ける。

『マジエステイファイニツシュ!』

「あなたに届け! マイスイートハート!」

「ぐおおおおお!」

突撃するプロトジコチューに向けて光と闇を纏ったマジエステイファイニツシュ、マイスイートハートを放ち、命中させる。

プロトジコチューに命中すると、ビルドドライバーに差し込んでいた光と闇のポトルから成分が消え、変身解除された。

「・・・えっ? うわあああー! 最悪だー!」

急な変身解除に、宙を保つてない晴夜が地面へと落ちそうになる。

「危ない!」

「うおっ!? ハート! サンキュー・・・」

ハートが晴夜を手を捕まえ、落ちるのを防ぎ着地すると、プロトジコチューが語り出す。

「そうとも、時代は繰り返す。人間にワガママで自分勝手な心がある限り、私は何度でも蘇る! そう、何度でもだ!」

「分かるよ。あたし達の中にもワガママな心はあるもの」

「何……だと……!?」

「ああ、誰かを妬んだり、何もかも嫌になって投げ出したくなる事だつてある。

けれど、そうやって悩むから、苦しむから、人は強くなれるんだ」

晴夜はかつてハザードトリガーの力に飲み込まれ、暴走したときのことを思い出しながら、プロトジコチューに自身の思いを語る。

「それに、たとえあたしが愛を見失つたとしても、あたしには一緒にいてくれる人と支えてくれる仲間がいるから、あたしは絶対に何度も立ち向かつてみせる!」

ハートは笑顔で言いながら晴夜を見て、後ろにいるみんなに振り向く。

「ほうく、なら見せてくれよ」

その時、プロトジコチューの体が何者かに貫かれた。

『!?』

「貴様……生きていたのか……」

その眩きを最後に、プロトジコチューは消滅した。

その貫いた腕と聞いたことがある声、皆は誰なのかすぐにわかった。

「エボルト!」

「よっ! 久しぶり〜」

プロトジコチューが完全に消滅し姿が見えると、そこには晴夜達四人の仮面ライダーが結束して倒した筈の仮面ライダーエボルがいた。

「そんな・・・」

「うそだろ・・・」

「エボルトがなんているんだ・・・」

「エボルトはみなさんが倒した筈では・・・」

「幻冬、本当に倒したんですか!?!?」

「倒した筈だよ。だって、あの時、トリガーを壊して晴夜さんがトドメを刺したはず・・・」

幻冬の言う通り、あの時ビルドのライダーキックが決まり、エボルは爆発したはず。

「それがどうして・・・」

「あんだ、確かやられたんじゃないの!?!」

倒した筈のエボルが何故ここに現れたのか晴夜達にはわからなかった。

「どうやって・・・」

「・・・お前らにやられた後、俺はアジトに戻った。その時、ベールの奴に不意打ちを食らってしまった」

エボルがあの時、四人にやられた後、更にベールにやられたと話す。晴夜達はそれを聞いて、あの時自分達はエボルトを倒せていなかった事を察した。

「だが、完全体となった今の俺にはエボルドライバーが破壊されない限り、遺伝子を自由に操れる」

エボルの説明を聞く限り、例えばライダーキックを食らって爆発したとしても、弱ったところにトドメを刺されたとしても、エボルトはエボルドライバーが破壊されない限り何度でも蘇るということだ。

「俺がそう簡単にやられると思っていたのか?」

「じゃあ、なぜもつと早く復活しなかった!」

復活出来るのなら、晴夜の言う通り早く復活することだって出来たはずだった。

「お前らが、キングジコチューとプロτζコチューを倒してくれるのを待ってたんだよ。

ありがたく思ってくれよ」

エボルの発言に龍牙が拳を強く握る。

「ふざけんなよ・・・仲間を見捨てたって言うのか!」

「勘違いするな。俺には仲間はいない。あいつらがどうなるうが俺が力を取り戻すため

の駒に過ぎん！」

エボルと一緒にいたジコチュー達は駒に過ぎんと発言すると、プロトジコチューから奪い返した黒いパネルを取り出す。

「さて、そろそろこの黒いパネルを使い、地球滅亡の時を迎えるか」

黒いパネルを見せながら話すと晴夜は歩き出す。

「だったら、今度こそお前を倒す！」

晴夜はエボルを倒すと言うとジーニアスポトルを取り出す。

「今度はこの前みたいに行くと思うなよ」

「あたしも戦う！」

「来るな！ マナ達は先の戦いで力を使い果たした筈だ！ ここは、俺たち仮面ライダーがやる！」

晴夜の言う通り、ハート達六人はエネルギーを分け与えたため力はまだ残っていない。

その証拠に、ハートのパルテノンモードは既に解除されていた。

晴夜だけでなく、龍牙、和也、幻冬も立ち上がり、エボルの前にドライバーを装着し構える。

『グレート！ オールイエイ！ ジーニアス！』

『ボトルバーン! クローズマグマ!』

『ロボットゼリー!』

『デンジャー! クロコダイル!』

四人は変身アイテムをドライブバーに差し込み、レバーを操作する。

『イエー! イエー! イエー! イエー! イエー!』

プラントライドビルダーGN、マグマライドビルダー、二人の下からピーカーとケミカライドビルダーが出現する。

『Are you ready?』

『変身!』

『完全無欠のボトルヤロー! ビルドジーニアス! スゲーイ! モノスゲーイ!』

『極熱筋肉! クローズマグマ! アーチャチャチャチャチャ ちゃちゃちゃちゃアチャア!』

『潰れる! 流れる! 溢れ出る! ロボットイングリス! ブラア!』

『割れる! 食われる! 砕け散る! クロコダイルインローグ! オラア! <キヤー!』

四人は再び仮面ライダーへと変身した。

「言つとくが、もうお前らに俺は倒せない。このパネルが俺の手にある限りな」

エボルは天に向かってエネルギーを放つと地上に向けて雷が放たれた。

「行くぞ！エボルト！」

四人は走り出すとエボルトに向かって行き、エボルにパンチやキックで攻撃する。だが、エボルは一瞬のスピードでビルド以外の三人を吹き飛ばした。

ビルドはボトルの力でエボルのスピードで付いて行こうとする。だが、今回のエボルのスピードはビルドのスピードよりも軽く上回っていた。

ビルドもエボルのスピードについて行けず、エボルの攻撃を受け続け倒れる。

「なんだよこの力……」

「前よりさらに強くなってる……」

「一体なんで……」

「ジーニアスボトルのおかげだよ」

「ジーニアスだと……」

エボルがジーニアスボトルのおかげだと答える。

「あの時、お前がジーニアスの必殺技を俺に放った時、俺の体にある感情が芽生えた」

「感情……」

「そう、俺には存在しない人間の感情だ！」

「人間の感情……」

エボルは前回の戦いでジーニアスフィニッシュを受け、人間の感情が芽生えたと話

す。

「俺にとつて人の感情など、ただの作り物に過ぎんかった。だが晴夜、お前の作った発明品にこんな力があるなんて最高だ〜」

エボルが人間の感情を手に入れて最高だと叫ぶ。

「そして、その感情をより深く知れば、上城龍牙のように更に強くなれると知った。

人間による怒りの感情が俺をさらに強くした!ハッハッハッハッ!」

エボルが高々笑っているビルドは起き上がる。

「だとしても、俺はお前を倒す!うおおおおお!」

「晴夜!あん?」

クローズが下を見るとビルドから落ちたハザードトリガーに目が映り、拾い上げる。

「あいつに出来て、俺に出来ない事はねえ!」

クローズがビルドでもトリガーを乗り来られたのなら自分にも行けると感じる。

「負けるわけにいかねえ!」

『マックス! ハザードオン!』

トリガーを起動させ、ドライバーに差し込むとドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

「はあくうおおおおお!」

クローズの体がマグマのように燃え上がりエボルに向かって行く。

『ボルケニツクファイニツシュ！ヤベーイ！』

「力がみなぎる！魂が燃える！俺のマグマがほとばしる！」

フリーズを叫びながらクローズがラツシュを繰り出す。

「もう、誰にも止めらねえ！」

クローズが叫ぶとエボルを吹き飛ばし、ダメージを与えた。

「ほう、まだ成長するか？」

「うるせえ！」

「だが、人間の感情を手に入れた俺もまた更に強くなる！」

エボルは高速スピードでクローズに攻撃し、クローズを吹き飛ばす。だが、今度はグリスとローグがエボルに向かって行く。

「今度はお前ら二人が相手か」

二人掛かりでエボルに攻撃するがエボルは余裕で二人の攻撃をさばく。

「だが、一番弱っているお前らに勝てるか！」

エボルはカウンターキックを繰り出し二人を吹き飛ばした。

二人が吹き飛ばされると、もう一度ビルドが立ち上がりエボルに向かっていく。

「主役のお出ましか！だが、お前には無理だ！」

エボルがビルドを離れると、また高速スピードでビルドを襲う。

「ライダーシステムは俺を復活させる道具に過ぎん! エボルドライバーの模造品などで勝てるわけないだろ!」

エボルの攻撃にビルドもなすべなく倒れる。すると、エボルはロストボトルを装填した黒いパネルをビルド達に見せる。

「ここまで来たお前達にいいものを見せやる!」

『オーバー・オーバー・ザ・レボリユーション!』

「いよいよ究極の力が手に入る!」

そして、黒いパネルを自らの体内に入れ、レバーを回した。

『Ready go! フィーバーフロー!』

すると、エボルの周囲に三つの円盤が現れ、それに囲まれるとエボルの体が液体へと変わった。

『フハツハツハツハハハ! フハツハツハツハツハツハハハハ!』

「なんだよあの姿…」

「これが、エボルト…」

円盤が離れ、姿を変えたエボルの姿に皆が驚く。

——その姿は、ライダーからまるで怪人のような姿へと変わっていた。

「これが俺の究極の姿だ！」

エボルトは黒いパンドラパネルを取り込み、赤いコブラの様な姿に姿を変えた。

「晴夜ア！お前にいいものを見せてやろう！」

エボルトが手を上げると、次の瞬間、ビルドだけが一気に宇宙まで移動していた。

「これは……」

「流星はライダーシステム、宇宙環境でも体力を維持できてるな」

「これが、黒いパネルの力……」

ビルドは黒いパネルが持つワープ能力に驚く。

「それだけじゃない、はぁー！」

エボルトが月を含め、近くにある星にブラックホールを出現させた。

ブラックホールは月と星を吸い込み、ジワジワと崩壊させ始める。

「星が……」

「感謝してるよ。お前の父親と兄貴には……そして、お前にもな」

エボルトが告げるとまた、一緒のうちに地上へと戻った。

「晴夜！」

「はぁ、はぁ、今のは……」

「!? あれ見て！」

ダイヤモンドが上を指差すと、全員が上を向く。

「そんな・・・」

「嘘だろ、先まであつたはずだ・・・」

「なんで、いきなり・・・」

「月がなくなっています」

空に先まであつた月が、ビルドとエボルトが現れた途端、月がなくなっていたのだ。

「まさか、月のエネルギーを吸収したのか・・・」

宇宙に連れて行かれて見せられた月や星を滅ぼしていた光景から察した。

すると、エボルトの体に変化が現れた。

「これで俺は更に強くなった。この力で全ての宇宙を俺が滅亡させ、更なる強さを得る
！」

エボルトの体が更に強化され、両肩に新たな武装——『エボルトイヴォイダー』が装着され、腕の部分——『エボルトイグラスパー』もさらに大きくなった。

「まずは、お前らの大事なものを消してやる！ハッ！」

エボルトは手から放たれた衝撃波をハート達六人に放つ。

ハート達は三種の神器を使いシールドを展開したが、簡単に破られる。

『!?』

その時、ビルドとクローズが彼女達の前に現れ、彼女達の盾となった。

「ぐう！ぐわあああー！」

エボルトの衝撃波をもろに受けた二人が強制変身解除し、倒れこむ。

「晴夜！」

「龍牙！」

ハート、ソード、ジョーカーが二人に駆け寄る。

「みんな！」

パンドラボックスを持ったジョーが晴夜達の前へと現れた。

ジョーは直ぐに変身解除して、倒れていた晴夜と龍牙に駆け寄る。

「これで、人間界……いや、地球を滅ぼせる！」

そう言うくとエボルトはドライバーのレバーを回す。

「キュアハート！晴夜！お前らに出血大サービスだあ!!」

『ブラックホール ブレイク!』

エボルトが上空に向けてエネルギーを放つと、上空から巨大なブラックホールが現れた。

「あれは、あん時の……」

龍牙がブラックホールを見て、あの時のブラックホールを思い出す。

だが、それはあの時とは比べものならないほど巨大なブラックホールで、手あたり次第に吸い込もうとする。

「な……!なんだよこれ!吸い込まれ……うわああああ!!」

「嫌だ!死にたく無い!死にたく無い!いいいい!」

「パパあああ!ママあああ!」

「助けてプリキュア!助けて仮面ライダーアアア!!」

「ハハハッ!いいぞ!もつと吸い込め!」

「そんな……町が……みんなが……!」

エボルトから出現したブラックホールに、町も人も何もかもを飲み込もうとする。その光景を、晴夜達はただ黙って見ている事しか出来なかった。

「いいねえ、その絶望に満ちた顔!お前達が忸怩たる思いを胸に、朽ち果てる姿を——ぐお!」

エボルトに向けてツインブレイカー、ネビュラスチームガンを放ったグリステとローグが前に出る。

「なめるなよ。コラッ!」

「まだ、諦めていない！」

グリスとローグが二人掛かりでエボルトに向かつていき、エボルトに攻撃をする。

「トリガーを壊せば！」

「お前の動きは止まる！」

二人は必死にエボルトに攻撃しトリガーに攻撃をしようとするだが、エボルトは二人の顔を攻撃し振り払う。

「お前ら二人のハザードレベルで止めれるわけないだろ！」

二人が起き上がるとグリスとローグの仮面が砕けていた。

「それでも、俺達は戦う！」

「自分達に出来ることを精一杯する！」

——それは、決戦が始まる前の日。和也と幻冬がソリティアから帰路で話していた。

「なあ、幻冬。お前、ラブ&ピースのために最後まで戦えるか？」

「どうしたんですか？」

「俺は、仮面ライダーになったことを宿命だと思ってる」

和也はロボットスクラッシュゼリーを取り出す。

「最初は、幼馴染のあいつらの為とまこびーの故郷を取り戻すために戦ってた」

「それは、僕ですよ」

幻冬もクロコダイルクラックボトルを取り出す。

「僕も最初はただ力を手に入れることと、友達を守ることしか考えていませんでした」
二人は最初は大した理由もなく仮面ライダーとなったと話す。

「けど、今は違う。俺も多くの人の明日を守るために戦う。仮面ライダーとして」

和也はボトルを強く握る。

「僕もその意見に同意です。僕も最後まで戦います。そして、平和になったトランプ王国をみたいです!」

「よし!じゃあ、やってるか!」

二人が決めた誓いを果たすため、二人は起き上がる。

「俺達が道を作る・・・」

「負けるわけにいかない!」

二人は同時に拳をぶつけると、エボルトが押し出された。

「馬鹿な、ハザードレベルが上がつてる・・・!」

グリスとローグの急激なハザードレベルの上昇に驚く。

「これで、最後だ……」

「心火を燃やしてぶっ潰す！」

「大義のための犠牲となれ！」

二人が叫ぶとドライバーのレンチを下ろす。

『スクラップファイニッシュ！』

『クラックアップ　ファイニッシュ！』

グリスとローグがエボルドライバーを目掛けてライダーキックを放ち、エボルトに直撃した。

「はああああー!!?」

二人はさらに押し込もうと力を入れる。

「無駄だ！」

エボルトは二人を衝撃波で吹き飛ばし、壁に打ち込まれ地面に落ちると二人はドライバーが破壊され変身解除された。

「くそー！」

「こんな、所で……」

二人が倒れるとダイヤモンド、ロゼッタ、エースが二人に駆け寄る。

「所詮、人間なんてその程度もんだ。ハツハツハツハツー!」
「わかってねえな・・・」

エボルトが高々と笑うと晴夜は起き上がった。

「どうした、怒りでハザードレベルが上がったか?」

「お前は、人間の事を何もわかっていない!」

晴夜が言ううと龍牙も起き上がり、二人はジーニアスボトルとマグマナックルを取り出す。

「俺達のライダーシステムは怒りや憎しみなんかじゃ強くなれない!守りたいという気持ちとそれを願う人達の思いが、俺達の力を何倍にも引き出してくれる!」

『グレート!オールイエイ!』

『ボトルバーン!』

「それが、仮面ライダーだ!」

二人はドライバーにボトルを差し込む。

『ジーニアス!』

『クローズマグマ!』

ドライバーのレバーを回すと、プラントライドビルダーGNとマグマライドビルダーが出現した。

『Are you ready?』

「変身！」

二人が叫ぶともに60本のボトルが装填されてビルドジーニアスに、ヴァリアブルマガマを頭上からぶちまけ、クローズマガマへと変身する。

『完全無欠のボトルヤロー！ビルドジーニアス！スゲイ！モノスゲイ！』

『極熱筋肉！クローズマガマ！アーチャチャチャチャチャ　チャチャチャチャアチャー
！』

「一人一人、ゆっくり始末してや・・・ぐう！」

近づこうとすると急にエボルトの歩みが止まる。

「これは、まさか・・・！」

エボルトトリガーから電流が流れ、エボルトが行動不能になった。

「やったぜ・・・」

「トリガーを止めれた・・・」

二人の先程のライダーキックがエボルトトリガーに命中し、エボルトの動きを止めたのだ。

「和也と幻冬君がくれたこのチャンスは無駄にはしない！」

二人のおかげでエボルトトリガーは故障し、エボルトの動きが止まっている隙にビルド

はドライバーのレバーを回し、高く飛躍した。

「これが人間の力だ!これが仮面ライダーだ!喰らえ、エボルトー!?!」

ビルドジーニアスの60本のボトルが更に光り輝く。

『Ready go!』

「ハアアアアアアアアアア!!?」

『ジーニアスフィンニッシュ!』

後ろのボトルから放たれた虹色のエネルギーが加速となりビルドのライダーキックを放ち、エボルトにダメージを与えた。

「ぐおおおおお!」

ジーニアスの影響かエボルトの体から取り込まれた黒いパネルが出現した。

「龍牙!」

「オラアアアアア!」

クローズが白いパネルを持ち、エボルトから出現した黒いパネルと合体させた。

「うおおおおお!」

ビルドはフルボトルバスターを持ちエボルトと繋がるパネルの線を断ち切り、合体したパネルは地面へと置かれた。すると、合体したパネルは光り出し、白いパネルに10本のロストボトルが装填した状態となった。

「晴夜——！」

ハートがパンドラボックスを持つとビルドもパネルを拾い、二人はすぐに近づく。

「新世界の扉よ。開け——！」

ビルドが黒と白が合体したパネルにパンドラボックスと合体させた。

すると、パネルから巨大な光の柱が出現し、ジーニアスボトルからも柱に向けて光が差し込まれていく。

「ジーニアスボトルが……」

すると、ジーニアスから光がどんどん薄くなっていき、遂にボトルから色が無くなった。

更に柱の光から裂け目が出現し、その先にあるものにビルド達は目を大きくする。

「あれって、まさか……」

「トランプ王国……」

その先には、崩壊した姿のトランプ王国があった。

ビルドは成分を無くしたジーニアスを外してフルフルボトルを差し込み、ラビットラビットへとフォームチェンジした。

「これは、どういうことだ……」

「二つのパネルの力で、王国を元に戻し、お前が存在しなかったことにする！それが、父

さんの考えた新世界だ!後は、あの裂け目の中にお前を放り込めば、全てが揃う!」

「そんなことが・・・」

「お前の持つエネルギーで、新世界は完成する!」

ビルドがエボルトに裂け目に放り込もうとする。

——すると、クローズがビルドに振り向き、ビルドを抑えてドライバーからボトルを外し、変身解除させた。

「何すんだよ・・・」

「龍牙・・・」

「俺にもエボルトの遺伝子が流れてる」

クローズはフルフルボトルを暗夜の方へと投げると一人、エボルトの方へと向かって行つてエボルトの体に捕まる。

「消えるのは、俺の方が都合がいい」

『!??!』

消えると言う発言をしたクローズに全員が驚く。

「ちよつと、何言つてるの・・・」

「龍牙、何するつもりだ」

「まさか、自分を犠牲にエボルトを・・・」

「やめてください！」

「バカなことはおやめなさい！」

「何考えてるのよ！」

「龍牙！やめて！私の歌を聞かずに消えるの！？ふざけないで！だから・・・やめて・・・
龍牙・・・」

「龍牙！よせー！」

「晴夜・・・みんな・・・ありがとうな！」

クローズはエボルトを捕まえたまま、人間界とトランプ王国の裂け目に飛んでいった。

「やめろ！やめろー！こんな所で俺がー！ッ！」

「一緒に世界のために仲良く散ろうぜ」

そして、クローズがみんなの前から姿を消す。

「龍牙・・・」

ソードはクローズが居なくなってしまうという事実を受け入れられず、泣き崩れてしまふ。晴夜はクローズに外されたフルフルボトルを拾う。

「あいつを連れ戻す！」

そう言うフルフルボトルをもう一度ドライバーに差そうとする。

『お前が行く必要はない・・・』

すると自分の中にいる兄の声が聞こえ、晴夜に行く必要はない告げる。

『彼の言う通り。エボルトの遺伝子を持つ彼が犠牲になることが新世界に繋がる』

「俺は決めたんだ。誰も犠牲にしない。それにあいつは相棒であり、俺の最高の友達なんだ」

『愚かだよ。そんな事で助けに行くなんて・・・けど、世界を救えるのはそういう人間かもしれない』

巧の声が途切れると晴夜はフルフルボトルを元の長さに戻す。

すると、ハートが晴夜の服の袖を引っ張る。

「マナ・・・」

「ねえ、あの裂け目に入って戻ってこれるの・・・?」

「それは・・・」

あの裂け目に入って無事に戻ってこれるかという保証はない、晴夜はその事を言うのが辛かった。

「大丈夫だよね!みんなで作り上げたビルドなら絶対に!」

晴夜はハートの方に振り返り、ハートを抱きしめる。

「晴夜・・・」

「絶対に戻って来る。龍牙と一緒に前やみんなの所に、絶対に！」

戻って来ると伝えるとハートも晴夜をギュッと抱きしめる。しばらくして、二人が離れる。

「お願い、あのバカを連れ戻して！」

キュアソードは願う、自身を犠牲にエボルトと共に姿を消した最愛の相棒を連れて帰ってくる事を――

「頑張つて、晴夜君」

「晴夜さんなら絶対に大丈夫です」

キュアダイヤモンドとキュアロゼッタは信じる、必ず自分たちの友と共に帰ってくる事を――

「必ず戻つてこいよ」

「龍牙さんと一緒に」

和也と幻冬――仮面ライダーグリスと仮面ライダーローグは知っている、彼なら必ず彼を助けることが出来ることを――

「君ならいけるはずだよ！」

ジョーは信じている、国王を救い出せた彼ならばきつと――

「私もあなたなら行けると信じています」

キュアエースは信じる、自身の父を助けてくれた、倒す事以外の方法を共に見つけてくれた彼を――

「アタシとパパの心を取り戻してくれた晴夜なら大丈夫!」

レジーナ――キュアジョーカーはわかっている、自身の心と父親の心を救ってくれた彼ならば大丈夫だと――

「約束だよ。絶対に戻ってきて」

キュアハートは約束する、必ず戻ってくる事を――

みんなが、それぞれが持つ願いを言うと、晴夜は頷いた。

ハートから離れると晴夜はパンドラボックスから放たれた光の柱へと向かい構える。

「変身!」

叫ぶとフルフルラビットタンクボトルを半分に割り、ドライバーに差し込む。

『ラビット&ラビット!ビルドアップ!』

『ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!』

ドライバーのレバーを回し続ける。

『Are you ready?』

巨大な金型とラビットラビットアーマーが出現し、ユニットが空中へパージされた。

金型が晴夜の体と重なり、金型が離れハザードフォームへと変身し、パージされたラ

ビットユニットを飛びながら装着し、着地した。

『オーバーフロー！紅のスピーディージェャンパー！ラビットラビット！ヤベーイ！ハ
エーイ！』

「待つてろ龍牙！」

相棒を助けるため仮面ライダービルド・ラビットラビットフォームは二つの世界の裂
け目へと向かって飛び立っていく。

次回！Re・ドキドキ&サイエンス！

第57話 二人が明日を創る最後の決戦！BE THE ONE

第57話 二人が明日を創る最後の決戦! BE THE

ONE!

エボルトと共に裂け目に行ったクローズを連れ戻すために、晴夜はもう一度ビルドとなり、裂け目の中に入って行った。

「龍牙!」

裂け目の中の地面ではクローズマグマから変身解除していた龍牙が倒れていた。

ビルドはすぐさま倒れていた龍牙に近づく。

すると、龍牙の目が開いた際に瞳が赤くなり、起き上るとビルドを攻撃した。

「なっ!? 龍牙!」

ビルドは龍牙の攻撃を避けると、攻撃を避けられた龍牙の体が突如、液状化しだす。

「エボルト!」

なんと、それは龍牙ではなく龍牙の体に乗っ取ったエボルトだった。

「残念だったな、龍牙は俺が吸収した」

「なんだと・・・」

エボルトは龍牙を取り込んで消滅を防いだと話す。

「あとはお前の力さえ吸収すれば、エボルトリガーは復活する。そうすれば、俺は全宇宙を統べる力を取り戻せる！」

今度はビルドの力をも取り込んで力を取り戻し、全宇宙を統べると叫ぶ。

「俺をここで倒さなければ、エネルギーは放出されない！二つの世界の救済も叶わず、お前の計画は水の泡となる！」

「新世界は必ず実現して見せる！」

ビルドはエボルトに向かっていく。だが、エボルトはビルドの攻撃を受けると簡単に振り払い、ビルドが倒れる。

「ジーニアスもマジエステイもないお前に何ができる！」

エボルトはジーニアスもマジエステイも失った今のビルドは敵ではないと言う。

「それでも、お前を倒す！」

だが、ビルドは諦めず起き上がり必死にエボルトを攻撃し続ける。

「今のお前に俺は倒せん！」

エボルトはビルドの拳を振り払い、カウンターパンチを繰り出す。

そして、エボルトが一方的にビルドに攻撃をする。最後に与えた次の一撃がビルドを吹き飛ばし、ビルドはなすすべもなく倒れて、強制変身解除してしまう。

晴夜が強制変身解除すると、エボルトが体を液状化し、石動総一郎の姿へと変わる。

「いい加減! 気づいたらどうだ! 桐ヶ谷晴夜は世界に存在すべき人間じゃなかった!」

「だまれ……!」

晴夜は起き上がって総一郎に擬態したエボルトに向かって走っていき殴りかかろうとする。だがエボルトは晴夜の殴りかかろうとした拳を掴む。

「お前が全ての元凶なんだよ!」

「なんだと……」

するとエボルトは、晴夜が全ての元凶だと言う。

「お前が仮面ライダーにならなければ、プリキュアの小娘どもに関わらなければ、こんな悲劇は起こらなかつた!」

「!?」

エボルトの発言で思った。何故、俺が仮面ライダービルドにならなければ、マナ達に出会わなければ、こんなことにはならなかつた……と。

しかし、晴夜はすぐにその理由を察した。

ハザードトリガーを無責任に使わなければ、暴走する事もなく友達を傷つける事もなかつた。

自分がフルボットの浄化を行わなければ、パンドラボックスからエボルトリガーは作

られることはなかった。自分がマナ達に会わなければ、彼女達がエボルトに傷つけられることはなかった。

あの時、自分がドライバーを手にしなければ、そもそもエボルトの力を取り戻すことはなかった。

「お前は、俺に作られた偽りのヒーローなんだよ！」

——『作られた偽りのヒーロー』。

兄の代わりで、エボルトに利用されるための存在、それが仮面ライダービルドの存在。

その言葉は、只の14歳の少年を何度も苦しめた言葉だった。

その事を思い出してる間に、エボルトは晴夜の拳を振り払い、更に衝撃波を放ち晴夜を吹き飛ばした。

晴夜が倒れると再び怪人態へと姿を変える。

「これで終わりだ、桐ヶ谷晴夜」

エボルトは晴夜にとどめを刺す為に近づこうとする。

「——ん！どうした……!? 体が動かない！」

するといきなり、エボルトの体から電流が発生し、エボルトの動きが急に止まる。

『何やってんだ……晴夜！』

「龍牙……」

晴夜は一体どうなっているのかと思っていると、エボルトの体から取り込まれた筈の龍牙の声が聞こえてくる。

『エボルトは俺がなんとかする!』

エボルトの中から晴夜に攻撃させないと龍牙が必死にエボルトを抑えようとする。

『なあ、晴夜。俺の顔を今どうなってる思う? 『くしゃっ』としてるんだよ』

「!?」

『くしゃっ』としてる。

その言葉は、まだ初めて出会って間もない頃にいた自分から言った言葉だった。

——それは、スマツシユに襲われた人を助けるために戦っていた時の事。

『ボルテック フィニッシュ!』

ラビットタンクのライダーキックが決まってスマツシユが倒れると、スマツシユから成分を抜き取った。

『もう、大丈夫だよ!』

襲われていた人を介抱すると、その人はビルドに助けられてくれてありがとうと言って、去っていった。

その人が去っていくとボトルを外し、スマツシユにされた人にも近づく。

『俺は・・・何を・・・』

『ちよつと悪い夢を見ていただけですよ』

スマツシユにされた人を介抱するとその人も去っていった。

すると、後ろから龍牙が近づき晴夜に尋ねる。

『なあ、なんでお前もマナみたいに、よくそんなに人助けするんだよ』

龍牙はこの時、誰彼構わずに人助けをする晴夜の行動がよくわからなかった。

『俺さあ、誰の力になれると『くしやつ』となるんだよ俺の顔。ライダーになった時はマスの下で見えないけど』

晴夜は誰かの力になれると『くしやつ』となると言う意味も、やはり龍牙にはよくわからなかった。

今、龍牙にはその言葉の通り『くしやつ』となると言う。

『お前は、俺にとってお前は相棒で最高のダチだから、生きていて欲しいんだ』

「龍牙・・・」

『これだけは言わせろ！』

龍牙が晴夜に何かを伝えようとする。

『誰がなんと言おうと、俺たちにとってお前は最高のヒーローだ!』

「そうだよ!」

龍牙が最高ヒーローだと晴夜に言うのと、後ろからマジカルラブリーパットの力で出現した向こう側が映し出されていた。

「マナ・・・みんな・・・」

「晴夜君、あなたは偽りなんかじゃない!」

「あなたのおかげで私の迷った心の扉を開けてくれたのです!」

「六花・・・あります・・・」

「あなたがいたからみんなと出会うことが出来たの!」

「あなたはどんなに辛くても苦しくても何度も立ち上がってきました!」

「まこぴー・・・亜久里ちゃん・・・!」

「お前がいたから、俺は仮面ライダーとして必要なことを知ったんだ!」

「あなたがいたから、戦う理由を僕も見つけられたんです!」

「かずやん・・・幻冬君・・・」

「エボルト! あなたは、晴夜があたし達と関わらなければこんなことにはならなかったって言ったけど。そんな事、あたし達は思ったことはない!」

「何・・・!?？」

「そうよ！晴夜がいたからアタシとパパは救われて、新しい道を見つけることが出来たのよー！」

「そして、晴夜がいたからどんなピンチにも立ち向かえた！誰かの笑顔を守るために、誰かの未来を守るために、誰かの明日を創るために！」

「みんな・・・」

「だまれえええーッ!!」

エボルトの叫びとともに衝撃波が弾け出し、龍牙を抑えようとする。

すると、エボルトの体から龍牙の銀色へと変わったドラゴンボトルが出てくる。

「龍牙は完全に封じた。もう、邪魔されることはない！」

龍牙を抑え込み、今度こそ晴夜にトドメを刺そうとする。

「最悪だ・・・意地でもお前を助けて、その顔見たくなくなっちゃったじゃないか・・・」

晴夜はエボルトから出てきたドラゴンボトルをもがきながら掴むと、再び立ち上がった。

「まだ、抗うつもりか」

「ヒーローが逃げるわけには行かねえからなく！」

晴夜はハザードトリガーを装着したビルドドライバを再び装着し、フルフルラビットタンクボトルを取り出し、振った。

『ラビット!』

キヤップ栓を回すと赤いランプが点灯し、ボトルを半分に割る。

「変身!」

その叫びと共に晴夜はボトルを差し込み、ドライバのレバーを回す。

『ラビット&ラビット!』

『ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!』

『Are you ready?』

晴夜は走り出すと巨大な金型とラビットユニットが出現し、ユニットが空中へパージされた。

『オーバーフロー!紅のスピーディジャンパー!ラビットラビット!ヤベー!ハエーイ!』

ハザードライドビルダーが重なり、ハザードフォームへとなって走り出すと、ラビットラビットアーマーが装着され、ラビットラビットフォームへと変身を完了した。

「待ってる龍牙!今助けてやるぞ!」

ビルドは再びエボルトに向かっていく。

「エボルト！確かに俺はお前に作られた仮面ライダーかもしれない！」

ビルドが攻撃をしながらエボルトに向かってそう言う。

「でも、この力を正しい事に使ってこれたのは、かけがえの無い仲間がいたからだ！」

叫びながら跳ね上がり、ビルドの拳がエボルトの顔に決まるとエボルトはバランスを崩した。

「みんなが、桐ヶ谷晴夜・・・仮面ライダービルドを作ってくれたんだ！」

六花にありす、まこびー、和也、亜久里ちゃんと幻冬君、レジーナ、いつも俺達が辛かった時に励ましてくれるマナ、そして、かけがえのない相棒・・・龍牙がいたからこそまで来れたんだ！」

ビルドの攻撃が次々と決まり、エボルトにダメージを与える。

「愛と平和を胸に生きていける世界を作る！その為にこの力を使う！」

「破壊こそ、全てだ！お前の言う正義など俺が壊してやる！」

「どちらの力が正しいか今証明して見せる！」

ビルドとエボルトがお互い向かっていく。

その頃、ビルドとエボルトの全宇宙を掛けた戦いを、ハート達はマジカルラブリーパットで見っていた。

「晴夜・・・」

ハート達は、ビルドとエボルトの戦いを、ただ見てる事しか出来なかった。

(あたしに何か出来ることは・・・)

ハートは、自分にも何か出来ることはないかと考えている。世界を守るために今必死になつて戦っている人に、自分に出来ることは・・・

「——あなた達にしか、出来ないことがある」

『!??!』

プリキュアの六人に、どこからか声が聞こえた。

「誰なの?」

「どこからですか?」

どこからか聞こえた声に六人は戸惑う。

「どうしたんだ・・・」

「何が聞こえたんですか?」

しかし、ライダーである二人には謎の声が聞こえなかった。

「和也と幻冬には聞こえないの?」

「私達にだけ聞こえるこの声は一体・・・」

六人にしか聞こえない声は何をもたらししているのか。
すると、六人の持つ三種の神器が光り出す。

「これは……」

「みんな！三種の神器を光の柱に掲げよう！」

ハートの提案に五人は頷き、ハート達六人は三種の神器をパンドラボックスの柱へと向ける。

すると、三種の神器は裂け目に向かって光り出した。

その頃、裂け目の中ではビルドは必死に攻撃を続ける。

ビルドはフルフルラビットタンクボトルを外し再び振ると、もう一度差し込む。

「ビルドアップ！」

『鋼鉄のブルーウオーリア！タンクタンク！ヤベー！ツエー！』

タンクタンクフォームへとフォームチェンジすると、タンクの腕のローラーが動き出し、エボルトの腕の強化部分を破壊しようとする。

「くう！離れろ！」

エボルトの強化した腕が破壊されるとその時、エボルトはビルドドライバーのフルフルボトルに攻撃し、ドライバーのフルフルボトルとハザードトリガーが外れて吹き飛ば

された。

「ツッ!? まだだ!」

『シユワツと弾ける! ラビットタンクスパークリング! イエイ! イエイ!』

今度はラビットタンクスパークリングを差し込み、ラビットタンクスパークリングフォームへと変わった。

右足のクロックフロツセイレッグから泡が噴出し、その勢いでエボルトに向かって飛ぶ。

そのままビルドのキックが決まると、エボルトもすぐさま起き上がり反撃に出た。

「ぐう!」

倒れ込むとエボルトは更に仕掛けようとする。

だが、ビルドはドリルクラツシャーを出現させ、エボルトの追撃を防ぐ。

『Ready go!』

ボトルを差し込み、ドリルクラツシャーが回転すると、エボルトの肩を目掛けて攻撃した。

「ぐおおお! このお!」

エボルトは右足に力を収束させ、ビルドのスパークリング目掛けて攻撃し、ドライブから吹き飛ばした。

『ラビットタンク！イエーイ！』

「ついに初期フォームか、答えが出たようだな」

初期フォームのラビットタンクへと変わり、エボルトは答えが出たと呟く。

「どうかな・・・」

するとビルドドライバーに差さっていたラビットボトルが金色へと変わる。

『ラビット！ドラゴン！ジャストマツチデース！』

フルボトルバスターを出現させ、ラビットとドラゴン、2本のボトルを差し込む。

「そんな攻撃が、効くと思っっているのか！」

「思ってるさ・・・！」

ビルドの右足のタンクローラーシユーズに搭載されているローラーが動き出し、エボルトに接近しようとする。それに対してエボルトは迎え撃とうと構えると、ビルドは直前に左脚部のクイックラッシュシュレックによるラビットの脚力を活かしてエボルトの攻撃を避け、高く飛び上がる。

『ジャストマツチブレイク！』

着地した瞬間、金と銀に纏ったフルボトルバスターの攻撃がエボルトに直撃した。

「俺と龍牙は最高の・・・コンビなんだよ！」

さらに強いエネルギーを纏ったフルボトルバスターがエボルトに更にダメージを与

える。

そして、その影響でエボルトから龍牙から離れた。

「龍牙——！」

ビルドが解放された龍牙に手を伸ばし、龍牙の手を掴む。

手を掴んだ瞬間、エボルトから爆風が発生して二人が吹き飛ばさせれると、ビルドは変身解除してしまう。

「龍牙——！」

「つたくよ、逃げろって言ったろ」

「相棒が居なくなると色々困るんだよ」

「貴様ら……！」

二人の耳に声が聞こえ、振り向くと爆風の中からエボルトが現れた。

「晴夜！龍牙！俺に作られたお前らが調子に乗るな——！！」

エボルトの姿が、月と星を吸収した事によって強化される前の姿へとなっていた。

「だが、お前らにはもう何も残っていない！」

しかし同時に、晴夜もフルフルボトルもスパークリングも失い、もう戦うボトルが無いとエボルトは言う。

もう彼らには、エボルトに立ち向かうすべはない。

「いいや、まだ残ってるさー！」

だが、晴夜はまだあると言う。

そして、金と銀のラビットとドラゴン、2本のボトルを見せる。

「お前、残ってるのは龍と兎だぞ、そんな組み合わせ無理に決まってるんだろ」

「そんなことはない」

龍牙は有機物同士のボトルではベストマッチにならないと言うが、晴夜はそんな事はないと首を横に振る。

——それは、拓人が渡したビルドとクローズのライダーカードによる父親から渡された最後の研究データからによるものだ。

『ハザードレベル7へと達した仮面ライダーのボトルは進化を遂げる』

ハザードレベル7。それは、晴夜のラビットと龍牙のドラゴンの2本のボトルことだ。

『進化したもう1本があれば、究極の化学反応を起こす……!?』

2本のボトルから起こる究極の化学反応と言葉に驚く。

『つまり、仮面ライダーが二人いなければならないということだ。ハザードレベル7以降なんて、ビルドのお前とエボルトの遺伝子を持つ上城龍牙しか考えられない』

巧が晴夜の中からそう言うとき……

『だから、ボトルを2本差せるように設計したんだ』

『何?』

晴夜は拓人がビルドドライバーに2本差せるようにした理由がわかった気がした。

だから、あの時拓人が言った——トランプ王国から自分を人間界へ戻すために最後に言った言葉……いや、名前を思い出す。

『いいか、晴夜! この世界と私達の世界を守る! その鍵を握るのは……上城龍牙だ!』

『上城……龍牙……』

『いつか、龍牙君が君の前に現れる! その時は、二人が世界を守るんだ!』

『父さん!』

そして「また会おう」と言う拓人の言葉を最後に、晴夜は魔法の鏡の中へと放り込まれた。

だが今なら、拓人がビルドドライバーを2本させるように作った意味がよくわかる。『実験と同じだよ。研究は一人じゃ出来ない、必ず支えてくれる仲間が、相棒がいる。』

そんな思いで2本差せるように作ったんだと思う』

——そして、今がその時だ。この2本のボトルなら……

「絶対にいける！俺とお前のボトルなら……！」

晴夜は2本のボトルを見つめながら握りしめる。

「こうなったら、二人まとめて死ねえーッ！」

エボルトはエネルギー波を二人に向けて放つ。

すると、光が二人の前に現れ、エネルギー波から二人を守った。

「これは……！」

「なんだよ……！」

「あなた達は、みんなの希望よ！」

二人に囁く声が聞こえた。そして、光が集まり人の形になっていく。

「誰……？」

「人なのか……？」

「お前は……まさか……？」

集まった光から姿を現われると、一人の女性が二人の前に立つ。

「キュアエンプレス！」

その女性を見たエボルトはキュアエンプレスと叫ぶ。

「この人が……」

「キュアエンプレス……」

かつてのメランのパートナーのプリキュアで、プロトジコチューとエボルトを封印した一万年前のプリキュアが、晴夜と龍牙を守った。

「貴様が何故ここに……」

「彼らはあなたを止める、最後の希望……」

エボルトに晴夜と龍牙の二人が最後の希望だと言うと、エンプレスが二人を向く。

「あなた達がみんなの希望になって……」

エンプレスが手を向けると2本のボトルと色を失くしたジーニアスが浮かび上がる。

「ボトルが……」

3本のボトルが回り出し、一つになろうとする。

そして、3本のボトルは一つとなると、その姿をボトル缶へと変え、晴夜の手に置かれた。

「キュアエンプレス……」

「頼んだよ！みんなのために！」

その言葉を最後に、キュアエンプレスは姿を消した。

彼女の居たところを見た後、晴夜は目を瞑り、そのボトルを握りしめる。

そして、エボルトに向く。

「さあ、最後の実験を始めようか……」

晴夜は決め台詞を呟き、ボトル缶——『クローズビルド缶』を振ると、兎の飛ぶ音と龍の鳴き声の様な音を響き鳴らせながら二人の周囲を数式を囲む。

『クローズビルド！』

そして、ボトル缶を差し込みドライバーのレバーを回す。ボトル缶は光り出し、ランナーファクトリー……特殊加工設備『L&Pスナップライドビルダー』が前後から出現した。

「……えっ?えっ?おおっ?何だよ!おい!?巻き込まれてるぞ!どうなってんだよ!」

ファクトリーは龍牙を巻き込んでしまい、前後のランナーが金と銀のアーマーが形成されいくと、アーマーは赤と青へと姿が変わる。

そして晴夜のドライバーから、彼らに問いかけるかのような音声が続き出した!

『Are you ready?』

「ダメです!」

「変身!」

「な!?」

ランナーは龍牙をも巻き込んだまま重なり。体から煙が現れ、ビルドマークが浮かび上がると変身を完了させた。

『ラビット! ドラゴン! Be The One! クローズビルド! イエイ! イエイ!』

「えっ?」

「あゝん?」

「これって……」

「もしかして……」

「合体しちゃった〜!」

まさか、二人が意識をも合体したまま変身してしまったことに、晴夜と龍牙は驚きのあまり絶叫していた。

『ええええええええっ!? 合体したー!』

その頃、人間界の方でも皆がかなり驚いていた。

今の彼らはビルド・ラビットラビットフォームとクローズの二つの外見を併せ持った

ような姿をし、ラビットの複眼は金に、ドラゴンの複眼は銀になっており、腰から下半身にかけてコート下の裾のようなローブ——『CBベクターローブ』が現れている。

「どうゆう事だ！晴夜、説明しろよ！」

「ちよ、ちよつと待って、これは流石に物理法則は超えてるだろ。えつと、えつと……」

まさかの、予想外のことに二人は慌てていた。

「何をごちゃごちゃしてやがるんだ！」

エボルトはそう叫びながら、合体した二人に向かって行った。

「はあ!? よくわからないけど、行くぞ！」

「つたく、しようがねえな！」

取り敢えず、合体してしまった事は後にして、二人はエボルトに向かっていく。

「最後の悪あがきか！」

ビルドとクローズの合体した姿・クローズビルドと、エボルトとの決戦が始まった。

「勝利の法則は……」

「今の俺は負ける気が……」

「「決まった（しねえ）！」」

だが呼吸が合わず、二人の攻撃はエボルトに当たるところか全く噛み合ってなかった。

「呼吸は合わせろバカ！」

「お前だよ！」

上手く身体を動かすことができなかつたことを二人で自分達の顔を叩きながら言い争っていた。

「ふん！弱い奴らほどよく吠えるとはこのことだな！」

「あん？」

「ふぎけ……」

「けるな——！」

今度は二人の呼吸が噛み合い、初めてエボルトに攻撃が決まった。

その頃、人間界では二人が合体して変身した事に驚いていた。

「マジかよ……合体って……」

「法則なんてとうに超えていますよね……」

「でも、なんか」

「お二人らしいと思いますけど」

「そうよね。あの二人」

「まさに、名コンビですわ！」

みんなは晴夜と龍牙は名コンビだと言う。

「行けえ！晴夜！龍牙！」

ハートとソードが二人にエールを送る。

だが、彼女達だけではない、町のみんまも二人にエールを送っていた。

「頑張れ！仮面ライダー！」

「世界を守って！」

「もう、あんたらしかいねえんだ！」

「負けるな！」

必死になって、二人を応援する。

「晴夜、龍牙君。君たちなら絶対にいける！」

拓人は二人なら絶対にいけると信じて、裂け目を見ていた。

そして、裂け目の方ではクロースビルドとエボルト、二人の激しいラッシュを繰り出し続け鎧迫り合いとなる。

「何故だ・・・ラビットとドラゴンはベストマッチじゃないはず・・・なのに、この力は一体？」

エボルトはベストマッチではないボトル同士が予想外の力を発揮したことに驚く。

「答えは簡単だ！俺と晴夜がベストマッチだからだ！」

クローズが叫ぶとエボルトを押し始める。

「くう！お前ら、本当にこの世界を救う価値があると思ってるのか！」

エボルトがクローズビルドに世界を救う価値はあるのかと聞く。

「今回の災いは全てが自分の欲望による、愚かな人間達によるものだ！」

トランプ王国の悲劇、ライダーシステムによるエボルトの復活、その全てが人間による欲望からだと言う。

「人間は不完全で弱い存在だ！そんな奴ら、守って何になるんだ！」

しかし、エボルトの問いかけに対してクローズビルドは仮面の下で笑いながら答える。

「わかってねえな！」

「不完全だから人間って言えるんだ！」

「何？」

「お前の言う通り……人間は不完全の存在かもしれない！でも、不完全だから自分に何が足りないのかを知って身につけて、また新しい発見をして成長していく、それが人間なんだ！」

ビルドが叫ぶとクローズビルドはエボルトとの鏖迫り合いを振り払い、次々とパンチ

が決まり、最後のキックでエボルトを吹き飛ばし、地面へと着地する。

「今の俺達は負ける気がしねえー！」

クローズの決め台詞を二人が叫び、ドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

クローズビルドは右足を地面を叩き、高く飛躍した。

「勝利の法則は、決まった！」

二人が一緒に決め台詞を叫ぶと音声がり響き、青と赤の二本の放物線が現れる。そして、クローズビルドはその放物線の上と進む。

「負けるか！」

エボルトもドライバーのレバーを回し、高く飛躍する。

『Ready go!』

クローズビルドとエボルトの二人が宙高く向き合う。

「ラブ&ピース フィニッシュ！」

『エボルテック フィニッシュ！チャオ！』

そして二人のライダーキックがぶつかり合い、周りから凄まじい程の衝撃波が発せられる。

「はあああああー!!?」

「くうーこんな馬鹿な・・・人間が・・・」

クローズビルドのキックがエボルトを押ししていた。そして遂にエボルトのキックとの衝突に勝負がついた。

そして、エボルトに二本の放物線が拘束した。

クローズビルドは滑るかのように加速し、拘束したエボルトにライダーキックがそのまま放物線の終着点に向かって滑り続ける。

「ぐおおおおお！」

「はあくはああああー！」

そして、遂に二本の放物線がエボルトの終着点へとたどり着き、突き抜ける。そして、二人のライダーキックを受けたエボルトが倒れかける。

「ぐうー忘れたか・・・俺は遺伝子を自由に操れる・・・何度でも蘇る！」

エボルトが遺伝子を放出しようとする。

「なっ!? 何故だ！」

だが、エボルトから遺伝子は放出されなかった。

「無駄だ! お前は遺伝子を放出出来ない！」

「なに、どう言うことだ！」

「このボトルはジーニアスボトルの力もある。それがどういう意味かわかるか？」

「ツ!? まさか……」

「そうだ……ジーニアスポトルの力でお前の遺伝子は一つの抗体となった。その影響でお前はもう遺伝子を自由に操られない!」

エボルトはもう遺伝子を自由に操られないと、ビルドは答える。

「バカな……滅ぶのか……この俺が……そんな事があつてたまるか! 人間があああーッッ!」

自身の末路を想像し、エボルトがそんな事実受け入れられるかと言わんばかりに叫ぶと、クローズビルドはフルポトルバスターを出現させる。

『ラストマッチデース! ファイナルマッチブレイク!』

「これで、最後だ……エボルトー!」

クローズビルドの放ったファイナルマッチブレイクがエボルトに直撃し、エボルトライバーを破壊させ、エボルトの体を切り裂く一撃を放つ。

「——やるじゃねえか、俺をここまで追い詰めるとは……」

そして、クローズビルドの攻撃を受けたエボルトの体が綻び始める。

「エボルト……」

「まさか、この俺が人間に敗れるとは……お前らの勝ちだ暗夜、龍牙……」

お前ら二人が創る世界を、見てみたかったな……」

エボルトは自身の受けた腹部の傷を、崩壊しつつある手で押さえながらどこか名残惜しいような口調で二人に向けて呟く。

「だが、新世界が出来ても俺のような奴は消えないぞ・・・!」

しかしエボルトは、自身のような存在は消えないと二人に向けて告げる。

「そんな時は、また戦ってやるよ!みんなを守るためにな!」

「ああ!俺たちは誰かの笑顔と明日を創る・・・仮面ライダーだ」

だかしかし、エボルトの発言に対して二人は、迷わずそう答える。

「例え、それが辛い道でも俺は・・・俺達はみんなを守り続ける!」

そんな二人の強い決意と覚悟が、エボルトに伝わった。

「そうか・・・どうやら、とんでもない奴らを作ってしまったな」

・・・だが、悪くねえ気分だ。チャオゥ!

口癖の『チャオゥ』を二人に告げると、エボルトの体が更に綻びを増す。

「ぐわあああああー!!?」

そして、エボルトの体は爆破し、今度こそ完全に何も残らなかった。エボルトドライバーも破壊された跡もあった。その姿を二人は静かに見届ける。

「終わったんだな・・・ようやく・・・」

「ああ、これで新世界へと繋がる」

新世界へと繋がる、ビルドはそう呟く。

「・・・ありがとうな・・・助けてくれて」

クローズはここまで助けに来てくれてありがとうと礼を言う。

「・・・当たり前だろ、相棒を見捨てるかよ」

それに対してビルドは照れ臭そうに言う。

「よし！帰るか！」

「おおー！」

クローズビルドが裂け目から出ようと飛び上がろうとする。

「おい・・・！」

「最悪だ・・・」

しかし、みんなの所へ帰ろうと上を見ると二人は驚く。

「裂け目が無くなってる！」

なんと、二つの世界を通じる裂け目が無くなっていた。

「どうすんだよ！俺たち帰れねえのかよ！」

「マジかよ！どうすれば・・・ええつと・・・」

二人が帰れないことに動揺する。すると、裂け目の中が光り出し、その光にクローズビルドも巻き込まれてしまう。

「うわあああー!!?」

二人は強烈な光に飲み込まれいく。

——果たして二人はどうなるのか。そして、みんなの元へと戻れるのか…

次回! Re・ドキドキ&サイエンス!

最終話 ベストマッチのコンビは永遠に!

最終話 ベストマッチのコンビは永遠に！

二つの世界の運命をかけたエボルトとの最後の決戦、晴夜と龍牙は二人のボトルとジーニアスボトルが一つとなった事でクローズビルドとなり、エボルトを完全に倒した。

だが、みんなの元へと戻ろうとした時、裂け目が無くなり、二人は強烈な光へと飲み込まれ、絶体絶命となった。

その時、クローズビルドが別の光に包まれ、光から飲み込まれるのを救い、光に包まれた二人を守る。

「な^ん? なんだよ……これ！」

「これは……」

いきなり現れた光に二人が驚く。

「——あなた達はまだここに来てはいけない」

「えっ？」

不思議な声が聞こえ、二人には待ってる人がいると告げる。

そして、光は二人を包んだまま上へと昇り、新たな裂け目が生まれ、二人は裂け目の

中から脱出した。

「あの声の人……まさか……」

「ああ……間違えねえ」

二人を助けてくれた声の人が誰なのか、晴夜達にはわかっていった。

その頃、人間界ではパンドラボックスから放たれた光の柱が消え、六面のパネルから色が無くなっていた。

「晴夜……」

「龍牙……」

彼女達は空を見上げていた。

「裂け目が……」

「消えてしまいましたわ」

「そんな……晴夜と龍牙は……まだあそこに……」

二つの世界を繋ぐ裂け目が無くなり、二人はもう戻ってこないと思ひ込んだ。

その時……

〈ペアアアーン!!?〉

衝撃波が発生し、みんなが伏せ、顔を上げると、更に大きくなった裂け目が出現し、そ

ここから大量の浄化されたプシケューが現れた。

「プシケューがあんなに・・・」

「おそらく、プロトジコチューに取り込まれたプシケューがエボルトが消えたことで解放されたのでしょうか」

プシケューは二つのパネルで繋がったトランプ王国へと向かっていく。

その影響か、王国は戻っていく。

だが、それだけじゃない。戻ってきたのはプシケューだけじゃなく、あの惨劇で命を落とした人達も次々と復活していった。

「おお、国民が！」

国王は国民が蘇っていくことに驚く。

「どうやら、晴夜と龍牙君はエボルトを倒したんだ！」

「これが、あなたが目指した新世界ですか？」

「いや、これはあの二人が導いた世界です」

拓人と国王は元のトランプ王国と、キングジコチューとエボルトによって大きな傷跡を残した人間界が戻っていく姿を見て、二人が導いたからだと告げる。

王国にプシケューが集まり、人も町も戻っていく。

——だが、二つの世界を救った二人は現れなかった。

夕方となり、マナ達は丘の方で元に戻った大貝町を見ていた。

「町と人は戻ったけど……」

「あいつらだけ……」

マナが上を見上げると、涙が溢れる。

「約束したじゃん……絶対に帰ってくるって……なんで……いつも……」

「マナ(ちゃん)……」

「二人も王女様も戻らない……二人が取り戻した……平和になったトランプ王国を確かめる事は出来ないの……!?!」

「真琴……」

晴夜と龍牙が戻ってこない事に、二人が悲しみにくれる。

その時、目の前が光で輝き出すと、そこに二つの影が見えた。

「えっ!? うわあああああ!」

光から晴夜と龍牙の二人が現れ、尻餅をつく。

「イテエエエエ……あれ? ここって……」

「どうやら、戻れたみたいだな……」

二人が辺りを見回して裂け目から戻ってこれたと言うと、二人が立ち上がる。

「晴夜……」

「マナ！」

振り向くと顔を下に向けていたマナが後ろにいた。

「あつ……えつと、その帰ろうとしたら裂け目がなくなつてそれで……」
そう言いかけるとマナが勢いよく晴夜を抱きしめた。

「よかつた！戻つてきてよかつた！」

泣きながら晴夜を抱きしめ続ける。

「ごめん、心配かけて……」

「ううん！約束を守つて無事に帰つてきてくれただけで凄く嬉しい！」

マナは涙を出しながら帰つてきてくれて嬉しいと告げる。

「最高の笑顔だな……」

マナの顔が今まで見た中で最高の笑顔だと呟く。

「おかえり、晴夜！」

「ただいま、マナ！」

晴夜は笑顔でただいまと言り返す。

「真琴……」

一方、龍牙が真琴に近づく。

「その・・・悪かったな・・・心配かけて・・・」

突然、真琴が龍牙の腹を思い切りパンチする。

「ぐはあ!」

龍牙が殴られた所の腹を抑える。

「何すんだよ!今、必死に謝ろうとしてるのによ!」

「謝るですって・・・」

真琴が龍牙の服を掴む。

「あんた!自分が犠牲になろうなんて!どれだけ迷惑かけるのよ!」

「ごめん・・・」

真琴は龍牙がエボルトと一緒に犠牲になろうとした行動に怒っていた。

「もう、あんな真似しないで・・・お願いだから・・・」

真琴は顔を下に向きながら目から涙が溢れる。

「わかった」

龍牙がそう言うと、彼女は溢れ出た涙を払い、顔を上げる。

「じゃあ、罰として誓いを立ててもらおうわ!」

「誓い・・・?」

「私のマネージャーになって!」

「えっ？マ・マ・マネージャー？？」

まさかの龍牙が真琴のマネージャーになってと言い出して全員が驚く。

なお、和也だけは羨ましそうな顔をしていた。

六花がある疑問を二人に尋ねる。

「でも、どうやって戻ってこれたの？」

「裂け目は無くなってたはずですよね……」

「どうやって戻ってこれたのだと聞くと、二人が戻ってきた場所が照らされ始めた。」

「「王女様！」」

「アン！」

「アンジュ！」

すると、照らされるようにアン王女の幻が現れた。

「やはり、俺と龍牙を裂け目から助けてくれたのはあなただったんですね」

晴夜は、あの時助けてくれたのはアン王女だと言う。

「ごめんなさいお父様、博士、ジョンサン。わたくしはもう、元の身体には戻れません」

「えっ？そんな……晴夜さん、新世界が出来れば、全部元に戻るんじゃないかなかったので

は……」

幻冬が近づき、新世界が出来ればアン王女も元に戻るはずと聞く。

「……戻るのはエボルトが起こした災いだけなんだ。そうなんでしょう、父さん」

「ああ……プロトジコチューを倒せばジコチューにされたトランプ王国の人々は元に戻る。だが、エボルトの介入はトランプ王国と、更に星々にいた人々の多くの命を犠牲にした。その人達を蘇るために私は新世界を作ろうと思いついたんだ」

もし、プロトジコチューだけを倒したとしても、エボルトが今まで起こして来た悲劇によって死んでいった物達は戻って来ない。だから拓人は新世界を作ることを決意したと言う。

拓人が言う新世界はエボルトが起こした悲劇を無かった事にし、全てを元に戻す事だと話す。

「けど、アン王女が三つに分かれたのは自分の意思……それは戻すことが出来ない運命……」

そして、アン王女は元に戻ることは出来ないとも話す。

「レジーナも亜久里も、多くの愛を知り、二つの命として成長したのです」

「心配しないで。パパの傍にはずっとアタシが付いているから!」

「わたくしは、あなたの思いを受け継いで行きたいと思えます!」

「ありがとう」

アン王女はジョーの方を見つめる。

「ジヨナサン、わたくしは幸せです。あなたにもたくさんのお愛を分けて貰いましたから」
「僕もだよ、アン」

「キュアソード、クローズ、あなた達には本当に辛い思いをさせてしまいましたね。けれども、あなた達が仲間を見つけてくれたおかげで、全ての問題が解決しました。心から感謝しています」

「王女様……俺は……」

「そんな言葉はいいのです！本当にもう元に戻れないのですか!?？」

「ごめんなさい。もう戻れないのです」

涙を浮かべた真琴はそう問いかけるが、アン王女はもう元には戻れないと告げる。

「あなたに涙は似合いません。笑って。そしてこの世界にあなたの歌を届けて下さい」

アン王女が言うが真琴は首を横に振る。

「無理です……！王女様のいない世界で、もう私は笑う事なんて出来ない……！」

真琴は笑う事など無理だと呟き、泣き崩れると同時に膝が地面につくが、龍牙も膝を折り真琴の手を握る。

「龍牙……」

「俺達はずっと一緒にいてやるよ！俺は、お前を守る仮面ライダークローズだ！」

そう言うとき真琴が龍牙に抱きつき、涙を流す。

「悲しまないで、ソード」

「王女様……」

「アンと呼んで、って言ったでしょ？わたくしの命の絆は、アイちゃんに引き継がれているわ。わたくしはいつも、あなたの事を見守っているのよ」

「王女様……」

真琴は龍牙から離れ、もう一度アン王女を見る。

「皆さん。手を貸してくれて本当にありがとう。桐ヶ谷晴夜君。あなた心から感謝しきれない程感謝しています」

「俺は、感謝させる程の事はしていません……むしろ、今回は俺の所為でもあるんです……」

——知らなかったとはいえエボルトの復活のためにボトルの回収に協力していた。

——ハザードトリガーの暴走で仲間を傷つけた。

——そして、作られた偽りの仮面ライダー……全て、自分が招いたことでもある。そんな自分は感謝されることはない。

「それでも、あなたはみんなの明日を創りました」

「アン王女……」

「あなたがいたからソードもクローズも新たな出会いを見つけ、成長しました。」

そして、あなたがいたからトランプ王国は元に戻ったのです！」

「アン王女……ありがとうございます！」

そう思ってくれて嬉しくなり、晴夜は涙が溢れる。

「皆さん。本当にありがとうございます！」

アンジュはお礼を言い、消滅した。そして、腰から外したビルドドライバーを見つめる。

「アン王女……俺は守ります。あなたが守ったこの世界を絶対に！」

これからもビルドとして戦いみんなを守ると誓い、晴夜はビルドドライバーをしまうと、眠っていたアイちゃんが目を覚まし、真琴の元へと飛んだ。

「アイちゃん……大好きだよ……！」

真琴はアイちゃんを抱き締めてそう言った。それを見てマナ達もアイちゃんの元に集まる。

そして、晴夜はクローズビルドポトルを見ようと取り出した。

だが、ポトルは既に3本に戻り、フルポトルは赤と青のラビットとドラゴンのポトルに戻っていた。ジーニアスポトルは色を失くしてたままである。

「ポトル、戻っちまったな」

「あれは、奇跡のフォームって訳か……」

クローズビルドは奇跡のフォームだと呟く。

「よかった。お前と合体するなんて二度とごめんだ!」

「はあく!?それはこっちの台詞だ!」

「今思ったでしょう」

晴夜が今思ったと言うと龍牙が突っかかる。

「じゃあさ、バカって十回言ってみて」

「あん?バカバカーカー科学バカー!」

「科学バカは余計だろ。てっか、何回言った?」

「三回」

「三回って、やっぱバカじゃねえか」

「だからバカってなんだよ!バカって!せめて筋肉つける!」

「なんで、筋肉つけなきゃなんねえの。ってか、真ん中で言ってるみたいだけどさ…」

「ああくん!もう、そう理屈っぽく言うのが科学バカなんだよ!」

「意味わかんねえし…」

いつもと変わらないこの二人のじゃれ合いの口喧嘩をみんなは面白そうに見ていた。

「ふん!」

「へへ〜ん♪」

二人が痴話喧嘩が終わると二人が笑い合う。

そして、お互いに手を出し上、下と順番に手を当てる。最後腕を上げハイタッチをする。

その時の二人の顔は『くしゃつ』として、今までにして最高の笑顔を見せる。

その様子を近くの家の屋根の上で、ネズミとなったベールの尻尾をマーモが摘みながらみていた。

「な、何をする！離せ！」

「こんなになっちゃって」

「情けねえなベール」

「まあいい。また一万年程眠りについて力を蓄えるさ」

「えー？また一万年眠るのかよ？・・・まあ、あいつらがいたんじやな」

イーラは穏やかな表情の晴夜達を見てそう言い。そのやり取りを最後に、ジコチュー達はどこかへと去って行った。

そして、夜となり。いつもの景色の見える場所へとマシンビルダーを止め、町を空に

浮かぶ星を見ていた。

すると……

『あの時、お前が導き出した法則は正しかったみたいだ』

心の中にいる巧の声が響き、二人の意識世界へと入り、晴夜がエボルトを裂け目に放り込み、導き出した法則は正しかったと呟く。

「父さんは、全てを戻して今日の事を心に刻むようしたかったんだと思う」

拓人はジコチューの悲劇をみんなに心に残し、これからの事を考え、元に戻すことだと話す。

「父さんの記述にはそんな記載はされなかったはず……」

「それは、必要なアイテムが揃わなかったからだ……」

晴夜が今の作った新世界に必要なアイテムがあったから出来たと話す。

「ツッ!? ジーニアスポトルか!」

巧がジーニアスポトルがキーマアイテムだと気づいた。

「ジーニアスポトルは元々パンドラパネルから作られたアイテム……黒と白のパネルとジーニアスが揃った時、物理現象を超えた法則が生まれる!」

黒と白のパネルとジーニアスポトルの三つが新世界を導き、二つの世界の救済に導いたと話す。

「だが、その影響で今どうなったか分かってるのか・・・仮面ライダーは・・・」
「全然、気にしてないよ」

「・・・強くなったな。お前と近くで、一緒に居れて楽しかったよ・・・さよならだ」
巧の声はさよならと言って晴夜の心の中から去っていく。

「晴夜!」

するとマナが現れ、走って晴夜に近づく。

「やっぱりここにいた!」

やはりマナには晴夜の行動はお見通しだった。そして、隣に入り一緒に町の景色を眺める。

「ねえ、晴夜は気にしてない?仮面ライダーの存在があたり達以外誰も覚えてないこと・・・」

「・・・」

——二つのパネルの力で新世界は誕生した。人間界とトランプ王国を守り、救済した。

だが仮面ライダーの存在は自分の関わりのあるもの以外、誰の記憶にも残らなかった。これもエボルトによる影響が無くなったからだと拓人は推測していた。

そして、今回のことはプリキュアの六人が世界を救ったと言うことになった。

「いいんだよ。俺たちはみんなの明日を創れただけで……」

晴夜は仮面ライダーの存在が忘れたことよりも、多くの人の明日を創れただけで十分だと言う。

「あたしは、忘れないよ。この世界を守ったヒーロー……仮面ライダーを!」

マナは晴夜の手を握りながら言う。

「ありがとう」

……やっぱり覚えてくれる人がいる、その事が何よりも晴夜には嬉しかった。

しばらくして、二人はマシンビルダーに近づき、ヘルメットを出現させるとマナに渡し、乗り込むとエンジンが走り出す。

「ねえ、そういえばこんな風にゆっくりして乗るのは初めてじゃない?」

「そういえば、乗るときは敵が現れて急いで向かうから、こんな風に落ち着きながら走るの初めてだな」

二人で落ち着きながらこんな風に走るの初めてだと語り合う。

「ねえ、あたし叶えたい夢があるの!」

「それって、総理大臣になる事——」

「ううん、それじゃなくてもう一つあるの!」

「もう一つって?」

「あたし、晴夜と結婚する！」

「そうか……えっ!!?」

結婚と聞いて驚いた晴夜は、思わずマシンビルダーを止めた。

「結婚って、俺と?」

「そっだよー!」

「あ、いや……いくらなんでも、気が早いとゆうか……」

晴夜はいきなり結婚しようと言われ、混乱していた。

「その……俺でいいのか? 科学の事になるとテンション上がっちゃうし、仮面ライダーだし……」

晴夜は自分はマナと結婚する相手としてはふさわしくないのかと思うが……

「関係ないよ! あたしは何事にも一所懸命取り組んでいる晴夜が大好きなの!」

「そうか……じゃあ、俺もマナの隣で居られるよう存在なれるよう頑張るよ!」

そう言われたマナは嬉しそうに晴夜の背中を抱きしめる。そして、二人は夜空の星の中を気持ちよく走り続ける。

それから、1ヶ月の時が過ぎた。

大貝第一中学校では、新学期が始まり、みんなの新たなスタートが始まろうとしていた。

「マナー！」

国王と二人に過ごすことにしたレジーナは大貝第一中学校に転入した。

「宿題でわからない所があるから教えて！」

「宿題は自分でやらなければなりません」

「ケチ！なら、晴夜・・・あっ！」

「マナー・・・」

「大丈夫！いつでも会えるから！」

大丈夫だと言ってマナーは空を見上げる。

町も人も全てが元に戻り、宇宙に浮かぶ月や星も、エボルトの滅ぼされた跡も無く、元通りに戻っていた。

——けど、大貝第一中学校には桐ヶ谷晴夜はいなかった。

場所が変わり神奈川の横浜。元々、晴夜は横浜に住んでおり、拓人とアメリカから戻ってきた母親と共に三人で暮らす事になり、横浜へと戻っていた。

「晴夜！急がないと遅刻するぞ！」

「大丈夫！すぐ行く！」

新しい学校と言うより、元の学校に戻る。そのためにブレザーの制服を着用していた。

「晴夜、本当によかったのか？」

拓人は晴夜は本当は大貝町に残りたかったのではないかと思ひ尋ねる。

「・・・寂しくないって、言えば嘘になるけど・・・マナに言われたんだ。」

『今は親と一緒にいられなかった時間を大切にしなきゃいけないよ』って

「そうか」

「それに、会おうと思えばいつでも会える！」

晴夜が言うとき計を見つめる。

「やべえ！じゃあ、行つてきます！」

鞆を背負い急いで学校へと向かう。

「4年間、見ない間に遅しくなつたな」

拓人は学校へと向かう晴夜を見送る。

黒と白のパネル、ジーニアスの力により新世界が出来上がり、その影響で人間界とトランプ王国は繋がり、トランプ王国は人間界への一つの国家となった。ジューはトランプ王国の初代大統領となり、拓人は明日からトランプ王国へと戻り研究者として、研究を続けることになり、今は残ったパンドラボックスの研究を行っていた。

そして、晴夜はこの横浜の学校へと到着した。

「桐ヶ谷晴夜です。お願いします」

「桐ヶ谷君、空いてる席に」

「はい・・・えっ!!?」

晴夜が空いてる席を探そうとすると、知ってる顔の奴を見つけ驚く。

「よっ!」

「幻覚を見てるのか・・・」

なんと、龍牙が横浜の学校にいたのだ。

そして休み時間となり、校舎裏へと龍牙を連れ出し事情を聞く。

「お前!なんでこの学校にいるんだよ!」

「ああ、実は俺お前の家の養子になったんだ」

「はあくくく!!?」

龍牙が桐ヶ谷家の養子となつたと聞き驚く。

「いやな、真琴のマナージャーになるには勉強が必要だろ。それで、博士がその辺のた
めを学ぶなら養子ならなにかつて」

こうなつた理由を晴夜に説明した。

「ええくく!それつて、お前と兄弟になるのか!」

「そんなわけねえだろ!養子は形なだけで、俺は上城龍牙のままだよ」

義兄弟にはならないと言われ、そこだけは助かつたと一息吐く。

「それに、お前一人ぼっちさせるのは、なんか寂しそうだなくつてよ!」

「お前・・・」

一人ぼっち、確かに今までいたみんなとは離れ離れなり、一人になることは本当は辛
かった。

「はあくく・・・最悪だく」

口癖の『最悪だ』と呟いて後ろの髪をかきはじめる。

「お前とまた一緒にいることにならなつてな・・・」

「はあくく!何が最悪だよ!なんか問題があるのかよ!」

「あるに決まつてるだろ。わざわざ大貝町から離れた横浜に来るなんてよ。」

でも・・・ありがとうな」

「へえん!このくらい問題ねえよ!それにお前といると毎日が楽しいんだよ!」

龍牙が言うのと腕を出し、晴夜も腕を出すとお互い気持ちよくハイタッチした。

「そんじや、先ずはお前のバカの頭を鍛えねえとな!」

「上等だ!真琴のマネージャーになるためなんだって・・・って、今バカって言った
ような!」

「突っ込み遅いんだよ」

また、二人の変わらない痴話喧嘩が始まった。むしろ、これがあるのが二人が最高の
コンビの証拠を表しているものだ。

「それと、これもやるからな」

「なんだよ、これ?」

晴夜が『ドキドキ&サイエンス』と書かれた資料を龍牙に渡した。

「もし、俺たちの記憶を一つのストーリーがあつたらどうなるのかなって思ってた
みたんだ」

「へえ」

龍牙がその資料を読み始める。

「さって、それじゃあ」

晴夜はボイスレコーダーを取り出し、スイッチを入れる。

「てえんさい科学者の卵、桐ヶ谷晴夜が来たこの町に正義のヒーローが現れた。」

その名は仮面ライダー！」

「自分の事を天才の卵と言うけど、ただの科学バカだろ」

「うるさいよ！ そう言うこいつはトランプ王国でボコボコにやられた上城龍牙！」

「俺はボコボコにやられてねえよ！」

「そう言ってワンワン泣いていたから、そんな奴を心優しく俺は拾ってしまったのだった」

晴夜と龍牙は、今までにみんなと過ごした記憶を語りながら、ボイスレコーダーに残そうとする。

——やはり、二人は誰にも真似できない、最高のベストマッチコンビである。

終わり

ドキドキ&サイエンス劇場版

ビルド&NEWSTAGE 2 withレジェンドライダー

ここは、妖精達が住む世界。ここでは妖精達が平和に楽しく過ごしていた。

「皆さーん！授業が始まりますよー！」

妖精学校の先生と思しき妖精が、ハンドベルを鳴らした。妖精達は授業を受けに、妖精学校へと向かい、席に着く。

「今日は、素晴らしい先生をお招きしました。プリキュアの妖精、タルトさんです！」

「ワイはタルト！フレッシュプリキュアの妖精や！」

妖精の先生が声をかけると、みんなの前に鼯の様な姿をした妖精ータルトが現れた。

「プリキュアの妖精だ！」

「すごいー！」

妖精達はプリキュア妖精であるタルトを見て感激していた。

「握手は順番、サインは一人一枚やでー」

他の妖精と握手したり、サインを渡す。

「ほな、これまでのプリキュアの活躍を紹介するでー」

二人の妖精は教卓に移り、リモコンのボタンを押すと。画面が映り、プリキュアとフュージョンとの戦いが映し出された。

「これはフュージョンっちゅう敵と戦ったVTRや」

「かつこいい〜！」

戦闘の映像を見て、妖精達はかつこいいと呟く子達が多い。

「ほな、ここで問題や。このプリキュアの名前は何だか分かるか？」

タルトはキュアドリームが映った所で一時停止させる。

『キュアドリーム！』

「ほな、これは？」

『キュアイーグレット！』

今度はキュアイーグレットが映し出される。

「ほんならこれは、何だか分かるか？」

そう言つて、風呂敷からミラクルライトを取り出してみんなに見せる。

「ミラクルライト」

『ミラクルライトー!!』

みんなが叫ぶ中、一人小声で言うエンエンという狐の様な姿をした妖精がいた。

「そや。このミラクルライトは、プリキュアはん達を応援する時に光らせるんや。使う時に気をつける事、みんなは知ってるか?」

「投げない、振り回さない、光を近くで当てない」

「投げたり振り回したり、光を近くで見たらアカン。よう覚えておいてやー」

『はい!!』

「次はコレや」

今度はプリキュアの変身アイテムを出した。

「あっー! リンクルン!」

「ココロパフュームだ〜!」

「そや、プリキュアのアイテムや。みんなよお知つとるやんか」

妖精学校の生徒がよく知っていることに関心する。

「このプリキュアについて書かれた教科書で、みんな熱心に勉強してますからね」

「ちよつと、見せてもらってもいいですか?」

「どうぞどうぞ」

タルトが先生からプリキュア教科書を受け取る。

「へえ・・・随分と詳しく書かれていますね」

教科書を見るとスマイルプリキュアまでのプリキュアについての名前や必殺技の特徴などを詳しく書かれていた。

「プリキュア！メタモルフオーゼ！」

「デュアル・オーロラウエーブ！」

タルトが持ってきた変身アイテムから目を離している隙に妖精達が勝手に変身アイテムを使おうする。

「あれ？変身出来ないよ？」

「これは本物や無い。本物はプリキュアが持つてるさかいな」

だかしかし、タルトが用意した変身アイテムは本物では無く、作り物だった。

「それに、変身ちゆうのはな、妖精だけでもプリキュアだけでも出来へんので。妖精とプリキュアが力を合わせて、初めて凄いパワーを生み出すんや」

プリキュアと妖精の凄いパワー、それはかけがえのない・・・

「凄いパワーなら俺にもあるぜ」

一人の妖精が自分にも凄いパワーがあると叫ぶ。

「グレル、参上！」

机の上に立っていた狸の様な姿をした妖精ーグレルが剣を持った。

「コラグレル！危ないから降りなさい！」

「プリキュアがいなくなつたつて、悪いヤツはこの俺がみんなやつつけてやる！」

机から跳躍し、剣を無造作に振り下ろした。

すると作り物の変身アイテムが飛んで、妖精達の頭に当たり、落ちたミラクルライトでタルトが前へと転がり、先生とぶつかつてしまふ。しかもそれによつて、リモコンのボタンが押され、スクリーンにフュージョンの姿が映し出され、これに驚いた妖精達は泣き出してしまつた。

「みんな、大丈夫かい？タルトさんも大丈夫ですか？？」

「ワイは平気や・・・プリキュアの妖精やからな・・・」

みんなは平気と聞き、とりあえず一安心する。

「グレル！タルトさんとみんなに謝りなさい！」

他の妖精達がグレルを睨みつける。

「ケツ！お説教なんて聞きたかねえよ！」

そこにチャイムが鳴り、グレルは走り去つて行つた。

「グレル！」

「まーまー先生。授業はここまでや。握手とサインしたるでー！」

他の妖精達がサインと握手を求めに行く中で、唯一エンエンだけ行かなかつた。

「行かないの？」

「ぼ、僕は……いいよ……」

そしてそのままため息を吐きながら、教室から出た。

その頃、教室を飛び出したグレルが下を向きながら歩いていた。

「何だよ、プリキュアプリキュアって！」

グレルが歩きながら不満そうにして剣を振り回す。

「プリキュア……いい……」

すると隠れてプリキュア教科書を読んでいたエンエンを見つけた。

「おい、エンエン」

グレルの声に驚いたエンエンが慌てて本を閉じる。

「ぐ、グレル……」

「お前またプリキュアの教科書なんか見てんのか？ そんなに気になるなら、さっきのプリキュアの妖精に色々聞いて来いよ」

グレルが聞くがエンエンは首を横に振る。

「話すの、怖いのか？」

「うん……」

「何が怖いのか、俺にはゼーんぜん分かんねえ」

くだらそうない方をし、グレルが寝そべる。

「お前、プリキュアの妖精になりたいのか？」

「僕なんか無理だよ・・・プリキュアの妖精になれるのは、妖精の中でもほんの一握りなんだし・・・」

「ま、そりやそーだな。お前みてえな弱虫になれるワケねえや」

グレルが言うのとエンエンから涙が溢れる。

「何で泣くんだよ！こんな事でいちいち泣くなよ！・・・つたく！」

涙目になったエンエンをグレルが手で涙を拭う。

「どいつもこいつもプリキュアプリキュアって、プリキュアなんて普通の女の子じゃねーか。変身出来なきやなーんにも出来ないのにさ」

『そうさ。プリキュアなんて変身出来なきやなーんも出来ないのさ』

グレルが叫ぶと突如、謎の声が聞こえた。

「何だ今の声？」

「ぼ、僕じゃないよ・・・」

『俺だ・・・』

「誰だ？」

「ま、待ってよ〜！」

謎の声に誘われるかようにグレルが走り出し、エンエンはグレルを追いかけた。

「どこだー！」

『どこだ』

声が出た場所のドアは『立ち入り禁止』と掲げられており、鍵が掛けられていたが、グレルはこじ開けようとした。

「だ、ダメだよ〜！ここは立ち入り禁止の部屋だよ！絶対に入っちゃダメだって先生が言ってたよ〜！」

「入っちゃダメだって言われると、入りたくなるな。どりやあつ〜！」

そう言つて石を叩きつけ、強引に鍵を開けた。

「おい！どこだー！」

『どこだ』

部屋の奥から声が聞こえた。

そこに置いてあったのは影水晶と呼ばれるもので、支えられていたものが倒れ、影水晶がグレルの傍に転がった。

そしてその水晶玉がグレルの影に沈み、その影が生み出された。

「な、何だ？」

「影が……！」

「お前……俺の影か？」

「——そうだ。俺はお前だ。だからお前の事は何でも分かる。先生やクラスのみんな、

あの程度の事で大げさなんだよ」

「だよな！俺は盛り上げようとしただけだったのにさ！」

「お前の言う通り、プリキュアなんかただの女の子だ。変身出来なきゃなーんにも出来ない。それを証明しようぜ！」

「面白そうだ！」

「お前聞いてたな？」

グレルの影から生み出された者——『フロントム』がエンエンの目の前に来た。

「エンエン、お前も来いよ。どうせ暇なんだろう？」

「え……？で、でも……」

「いいから……来い！」

「え、ちよ、ちよつと〜！」

無理矢理エンエンを連れて行き、自分の凄さをプリキュアに見せつけようと企ててい

る。

その頃、スマイルプリキュアが集まっているみゆきの部屋では、赤点を取ったみゆきの為に集まっていた。

「ぴかぴかピカリン！」

「ジャンケンポン！」

みゆきはパー、キャンディはチョキを出したので、キャンディの勝ちだった。

「負けたく……」

「勝ったクル！」

「だからどこら辺がチョキなん!?？」

普通に見ても、どこがチョキなのか分からなかった。

「みゆきさん、勉強中ですよ」

「今日はもうおしまいにしようよ。疲れちゃったよ」

「どりどり……35点！」

キャンディがチェックするとみゆきの数学のテストは35点だった。

「みゆきはもつと勉強した方がいいクル」

「う、うわわっ！」

慌てて自分の赤点だったテストを隠す。

「きや、キャンデイこそどうなの!!?女王様の勉強は！」

「そ、そりは……」

キャンデイはみゆきから目を逸らす。

「さては勉強を抜け出して来たね？」

「だって……お兄ちゃんが毎日勉強って厳しいクル！」

キャンデイは女王になる為の辛い日々を語り出す。

「ポップは真面目やかな」

「たまには息抜きしないと」

「それもそうですね。では、今日は終わりにしましょう」

「やったあ！」

その時、天井にゲートが作り出され、ゲートから手紙が降って来た。

「な、何や？」

「何これ？手紙？」

「妖精の学校からクル！」

「妖精にも学校があるんだ」

「あるクル。学校で勉強したり、友達を作ったりするクル」

「キャンデイ、開けていい？」

「もちろんクル」

手紙を開けると、顔を隠した妖精——グレルが映った。

『皆さん、こんにちは。俺達・・・あ、いやいや、わたくし達妖精学校でプリキュアと妖精の全員皆さんをお招きして、プリキュアパーティーを開きます！ぜひぜひ、ご参加下さいー！』

「行こう！妖精学校のプリキュアパーティーへ！」

その手紙は同じ内容で他のプリキュアの方にも来ていた。

そして、妖精学校へみんなは向かって行った。

その頃、ソリティアではドキドキプリキュアの四人と仮面ライダービルドこと、桐ヶ谷晴夜とクローズの上城龍牙が、二階でありすが取り寄せたお菓子でお茶会を開いていた。

店のオーナーのジョー岡田は、アイちゃんと一緒に外出していた。

「わあ~~~~！お菓子が一杯!!？」

「話題のスイーツをお取り寄せしました」

テーブルの上には、ドーナツやカップケーキなど色々なスイーツが置かれていた。

その内の一つ、気になったお菓子を晴夜は目をつけた。

「あります、この変わった色のキャンディーは何？」

ありすに茶色をしたキャンディーは何かと聞く。

「はい、それは大阪で一時期ブームを起こしたと言う禁断のスイーツ、納豆餃子飴です」

「え、納豆餃子飴……」

——納豆餃子飴と名前を聞いた瞬間悟った。100%通り越して1000%の確率

で、絶対不味い。

「ねえ、ありますはそれ食べた事あるの……？」

「ありませんわ」

「え？あ、そう……」

六花はこれを聞いた時、絶対に口に合わないだろうと思っていた。

しかし、次の瞬間……

「いただきます」

「俺も！」

「「ええっ!?」」

「食べる気なのか!?」

三人は真琴と龍牙の行動に驚いた。

「一体、どんな味がするのかしら・・・？」

「まこぴー、龍牙君、それは止めた方が・・・」

「止めとけ、絶対に味覚がおかしくなるぞ・・・」

真琴と龍牙が口に含んだ途端、真琴はあまりの不味さに気分を悪くした。

「まこぴー大丈夫!?？」

「凄い破壊力ケル・・・！」

一方の龍牙は何の問題がなく飴を舐めていた。

「おい・・・龍牙お前それ不味くないのか・・・？」

「ん?そんなに不味くねえぞ」

「「ええつ!?？」」

龍牙の味覚の恐ろしさにみんな驚愕した。

そこへシャルルから音が流れ出した。

「電話シャル」

近くに置かれていたティーカップから画面が現れ、そこから一人の妖精が映し出された。

「シャルル〜！」

「キャンディ！久しぶりシャル〜！」

「誰？」

「友達のキャンディシャル」

電話をかけてきた妖精はスマイルプリキュアの妖精キャンディだった。

「ところで、シャルルもパーティー来るクル？」

「何のパーティービィ？」

「プリキュアパーティークル！プリキュア全員が集まるクル！」

「プリキュア全員？」

「私達の他にも、プリキュアがいるんですか？」

「いっぱいいっぱいいるケル」

「へえ〜、プリキュアってそんなにいるんだ」

「俺も初めて知った」

「それは、お前はバカだから忘れてただけだろう」

「バカってなんだよ！バカって！せめて筋肉をつけろよ！」

二人のいつもと同じ痴話喧嘩が始まる。

「でも、パーティーがあるなんて聞いて無いでランス〜」

ランスの言う通りこっちはそんな招待状は来なかった。

「招待状、届かなかったクル？」

「来てないシャル」

「多分マナ達はプリキュアになったばかりだから、招待状が間に合わなかったんだケル」
「こつちに届かなかったとしたら、多分ラケルの言う通りだろうな」

キャンディは画面越しから晴夜と龍牙の姿を見て、シャルルに聞いた。

「シャルル、その二人の男の子は誰クル？」

「彼は桐ヶ谷晴夜シャル、それと上城龍牙シャル。」

彼らはプリキュアと一緒に戦ってくれる、仮面ライダーシャル」

シャルルが晴夜と龍牙をキャンディに紹介する。

「ねえ、そこにプリキュアさん、そこにいるの？おーい！」

マナが問うと画面から女の子が現れた。

「はーい！初めまして！星空みゆきですー！」

「キュアハッピークル！」

「こんにちは！相田マナです！」

「キュアハートシャル！」

二人は自己紹介すると、みゆきは晴夜の方を見た。

「ん？その君は？」

「桐ヶ谷晴夜！仮面ライダービルド！」

「ビルドって？」

「ビルドとは、作る、形成するって意味のビルドだ。以後お見知り置きを」

ビルドについて説明するとみゆきが目を輝かせた。

「マナちゃんも晴夜君達も、プリキュアパーティーにおいでよ！」

「うん！行く！パーティーで会おう！」

「面白そうだな、しかも他にも妖精いるなら見てみたいかも」

晴夜は自分の髪をかきながら言う。

「あ、こいつの悪い癖が始まった・・・」

マナと晴夜達もプリキュアパーティーへ向かう事になった。

その頃、パーティーが開かれる妖精界では。

「ありがとうございます」

「プリキュアの事なら、ワイらに任せてや」

学校の中を歩いていると、妖精学校の先生が立ち入り禁止の扉が開いていたことに気づく。

「っ！立ち入り禁止の扉が開いている!?？」

先生へ急いで中へと入る。

「な、無い！影水晶が無い！」

中に入ると、影水晶が無くなっていた事に気付いた。

「影水晶？何やそれ？」

「心の影を映す水晶玉です」

先生がタルトに影水晶のことを話す。

「自分の心と向き合うためのものなのですが、影水晶は心に影のある者を呼び寄せ、悪い事をさせようとそそのかすのです。はつきりと断れば大丈夫なのですが、もし影の言いなりになってしまったら・・・」

「もし言いなりになったら、どうなるんですか？」

「影は光を呑み込んで力を持ち、大変な事になってしまうのです！」

「邪魔すんな」

突如、タルトと先生の後ろに影水晶に封印されていたはずのファントムが現れた。

一方、プリキュアパーティに呼ばれていた先輩プリキュアが追われていた。

「ねえほのか！アレは何？！」

「分からないわ！」

「何で追いかけて来るの!?!?」

「知らないわよ!」

「この間もテストでトップ取ってたのに〜!」

「それ、関係無いでしょ!?!?」

なぎさとほのかがフアントムに追われていたが、そこにひかりが木に足を引つ掛けて転んでしまう。

「ひかりさん!」

フアントムが襲い掛かって来たが、ほのかが手助けしたため難を逃れた。

「てゆうか、こんなのあり得ない!」

「変身さえ出来れば・・・!」

どうやら既になぎさ達は変身アイテムを奪われてしまったため、変身出来なかったようだ。

様々な場所からフアントムが現れ、なぎさ達に襲い掛かった。

「やったぜ!捕まえたぞ!」

「なぎささ〜!」

「ほのかさ〜!」

「変身アイテムを奪つちまえば、プリキュアは何も出来ない!」

「どうしてこんな事をするメポ！」

「バカな事は止めるミポ！」

「うるさいなあ・・・」

メツプルとミツプルの口をテープで塞ぎ、下へと落とした。

ファントムに捕えられ、その中には他の妖精達と変身アイテムが捕まっていた。

「ブラック、ホワイト、ルミナスと・・・後は、スマイルプリキュアか・・・」

MHの勢のページに×をすると、既にいくつかのページのプリキュアに×が記され、残ったのはスマイルプリキュアだけだった。

「おい、誰か来たぞ」

「何っ?」

湖の辺りを歩いてたのは、みゆき達スマイルプリキュアだった。

「パーティー会場の湖ってどこ?」

「だーれもおらんね」

「スマイルパクトって事は・・・アイツらがスマイルプリキュアか」

プリキュア教科書を見てスマイルプリキュアと答える。

「変身出来なきやただの女の子だ。スマイルパクトを奪おう」

五人の変身アイテムスマイルパクトを奪おうと言い出す。

「そうだがレレル。アイツに行かせようぜ」

フアントムがエンエンを指差す。

「そうだな。エンエン、お前がスマイルパクト奪って来いよ。プリキュアの事知ってるし、上手く盗れるだろ?」

「ぼ、僕はいいよ……! 見てるだけで……!」

「今更何言ってるんだ。俺達がやつてるのを見てたのにお前は止めなかった。俺達と同罪だぞ。もう後戻りは出来ない。そうだろう?」

「俺達は仲間だ。な?」

「こんなヤツ放っておこうぜ、一緒にいたってつまんねえもん。俺とお前でアツと言わせてやろうぜ」

「そうすつか」

「ま、待って!」

「誰かいないのー!?!」

(嫌だけど……やるしかない……!)

涙目のエンエンがみゆき達に近づく。

エンエンが走り出して次第に近づくが、石につまずいて転がり、みゆきの股下を通り抜けた。

「あ！いた〜！」

「見つかった！エンエンのドジ！」

「チツ、使えねえヤツだな。俺に任せろ」

「こんにちは〜」

「かわいい〜ねえ、お名前は？」

なおはエンエンに名前を聞こうとしたが：

「ん？どした？」

「曲者〜」

後ろからのフロントムの気配に気付いたれいかの手ではたいた。

「チツ、見つかったか。スマイルパクト・・・よこせ！」

巨大化したフロントムが襲い掛かった。

「ここに隠れてて」

みゆき達はフロントムと戦う為に、森の中にエンエンを隠す。

「みんな、行くよ〜！」

みゆきの掛け声と共に五人共変身アイテムのスマイルパクトを取り出す。

『レディー〜！』

「[[[[プリキュア！スマイルチャージ！]]]]」

『ゴーゴー！レッツゴー！』

五人の体が光に包まれ、姿を変える。

「キラキラ輝く未来の光！キュアハッピー！」

「太陽サンサン熱血パワー！キュアサニー！」

「ぴかぴかぴかりんジャンケンポン！キュアピース！」

「勇気リンリン直球勝負！キュアマーチ！」

「しんしんと降り積もる清き心……！キュアビューティ！」

「……五つの光が導く未来！輝け！スマイルプリキュア！」

五人がプリキュアへと変身を完了し、全員が名乗りをあげる。

「あれがプリキュアの変身……」

「カッコいい……！……って見てる場合じゃ無い。」

変身しちやつたじゃんか！どうすんだよ……？！

襲い掛かったファントムをサニーが抑えて投げ飛ばす。

「スマイルプリキュア、コイツらの技は……キュアサニーは炎のボールを飛ばす！」

ファントムは吹き飛んでる間に体勢を整え、プリキュア教科書のページをめくる。

「プリキュア！サニーファイアー！」

「火には水を掛ければ消える！」

湖から水を掬い、サニーが放ったサニーファイアーを相殺させた。

「何やって!?？」

サニーを蹴り飛ばして距離を取り、ピースはフアントムに向かって跳んだ。

「プリキュア!ピースサンダー!」

ピースがピースサンダーを放つ。

「キュアピースは雷攻撃!」

森の中に飛び込み、ピースサンダーが木に当たって拡散された。

「嘘!?雷が散っちゃった!」

「プリキュア!マーチシユート!」

フアントムが着地したのを確認したマーチが、マーチシユートを放つ。

「キュアマーチは直球攻撃!」

網の姿となり、マーチシユートを跳ね返した。

「跳ね返された!?？」

「スツゲく俺の影!スゲく!プリキュアと互角に戦ってるぞ!」

「プリキュア!ビューティブリザード!」

ビューティブリザードが放たれた瞬間にフアントムが湖へと入り、湖は凍ったがフア

ントムは無傷だった。

「こつちこつち！」

「何やアイツ！めっちゃ手強いで！」

「あつ！プリキュア教科書を持つてるクル！」

「プリキュア教科書？」

「プリキュアの伝説や特徴や戦い方が色々書かれてるクル！」

「そんなものがあるの!？」

「今度はこつちから行くぜ！」

ハッピー達はフアントムの攻撃をかわす。

その攻撃で木がエンエンの方に倒れて来る。

「危ない！」

倒れる寸前でハッピーがエンエンを救った。

「大丈夫？」

「チャーンズ！」

ハッピーは背中からフアントムの攻撃を受け、転がりながら倒れてしまう。

「いただきー！」

ハッピーのスマイルパクトを奪い、変身を解かせた。

「みゆきー！」

「隙あり！」

気を取られてた隙に四人を吹き飛ばし、スマイルパクトを奪って変身を解かせた。

「みんな！」

「仕上げだ！」

フアントムが五人に向けて息を吹き出す。

「な、何やコレ!?？」

「動かない……！」

すると五人の全身が、結晶化して行く。

「お前達も水晶になって動けなくなるのさ。こんな風にな」

フアントムがテレビの姿となり、プリキュア達が水晶化した姿が映し出された。

「あれは……！なきささん！ほのかさん！ひかりさん！」

「咲ちゃん！舞ちゃん！」

「のぞみさん達も！」

「どういう事……!?プリキュアのみんなが……！」

「プリキュアパーティは、私達をおびき寄せる罠だったんですね……！」

「そういう事だ！」

騙されていたことがわかると茂みから泣いてる声が聞こえた。

「ごめんなさい……!ごめんなさい……!」

「えっ……?何で君が謝るの?」

エンエンが泣きながらみゆき達に謝り続ける。

「まさか……!いいよ。だからもう泣かないで。ね?」

みゆきはエンエンの気持ちを察し、笑顔で泣かないでと言う。

「お願いがあるの。この事を、ドキドキプリキュアと仮面ライダービルドにも伝えてくれないかな?」

みゆきはここに来るはずの晴夜とマナ達にこの最悪な状況を伝えて欲しいと頼む。

「え……?ドキドキプリキュアに仮面ライダービルド……?」

エンエンは誰のことなのかよくわからなかった。

「ドキドキプリキュアは最近誕生した新しいプリキュアで、それとね、仮面ライダーは私達の力になってくれる男の子だよ」

「新しいプリキュア……それに、仮面……ライダー……?」

「もうすぐここに来るから、マナちゃんに……キュアハートと仮面ライダービルドの桐ヶ谷君に伝えて。ちよつとピンチ、助っ人お願いって」

「で、でも僕……」

「お願いね」

笑顔で言うともゆき達は水晶になってしまい、エンエンはみゆきの伝言を伝えに行

く。
「みんな・・・待っててクル」

残ったキャンディはこの事を兄のポップに伝えに行こうと向かう。

「やったあ！プリキュア全員を捕まえたぞ！俺達つてすっげえ！」

グレルは上機嫌に叫ぶとスマイルパクトを拾う。

「本物の変身アイテムか。これ見たらみんなビックリするよな」

「ああ、みんながお前を見直す」

「俺、クラスのヒーローになっちゃうかもー」

プリキュアを捕まえ、グレルは浮かれていた。

「ああ。もう誰も俺達には逆らえない」

するとファントムは妖精学校から聞こえる声に耳を傾け、学校の方を振り向く。

「そうだ、学校壊しちゃおうぜ」

「えっ？」

ファントムが学校の方を見てそう呟くと、それを聞いたグレルは驚く。

「眩しいなあ」

太陽の光が鬱陶しいのか、ファントムが太陽に向けて自分の一部を投げつけた。

「おい！何したんだ！」

「眩しいから太陽を落として真っ暗にしちゃおうと思つてさ。ワイルドだろう？」
何がどうなつてるのかグレルにはわからなかった。

「もう戦えるプリキュアはいない。俺を邪魔できるヤツはいない」

「待てよおい！」

グレルからプリキュア教科書とスマイルパクトを奪い、妖精学校へと向かった。
フアントムが妖精学校に襲来し、学校を壊して行く。

「先生！」

「タルトさん！」

妖精学校の生徒が倒れた先生とタルトに駆け寄る。

「みんな・・・！！」

「早く逃げるんや・・・！！」

「ギャーギャーうるさいなあ。学校と一緒に妖精もまとめて消しちゃおう」

フアントムが逃げ出す妖精達を捕まえ、妖精学校に閉じ込めた。

そして逃げられないように、窓も出入り口も全て塞いだ。

「おい！やめろ！」

「何で？お前だつてこうしたかつたんだろ？」

フアントムはグレルもこうした方がいいんだろ？と言う。

「お前、思ってるだろ？学校なんてつまんない。誰も俺の事を分かってくれないって」

「お、俺は……！」

「お前の代わりに俺が壊してやる。つまんない学校も、分かってくれないヤツらも、俺が全部消してやる」

「や、やめろ！俺はそんな事思ってる無い！」

「嘘つけ！」

テープでグレルの口を塞ぐ。

するとフアントムが複数現れ、それを見たグレルは逃げ出した。

「ど、どうしよう……！どうすればいいんだろ!?？」

テープを剥し、グレルは叫びながら逃げる。

一方、みゆきからの伝言を伝えようと歩き続けるエンエン。

「無理だよ……僕にはそんな出来るわけ……」

そんなの無理だと自分に呟く。

「わっ！」

突然現れたマナに驚いたエンエンは腰が抜けた。

「こーんにちはー。あたし、相田マナ！よろしくね！」

マナが紹介する、しかし返事がなかった。

「おーい？」

「ビツクリしたんだよ。あ、俺は桐ヶ谷晴夜、よろしく！」

「何、ドサクサ紛れて紹介してるんだよ」

「ゴメンね、いきなり」

「私達は怪しい者ではありません」

「ところであなた、プリキュアパーティーの会場はこの辺りなの？」

「ぶ、プリキュアパーティー!?？」

パーティーの事を口に出すとエンエンは六人が振り向いてしまう。

「あつ！ちよつと！」

「どうしたあの妖精？」

そのままエンエンは逃げてしまった。

「うあああああ〜っ！」

するとグレルが現れ、ファントムに追いかけている様子だった。

「みんな、行くよ（ぞ）！」

「うん！」

「ええー！」

「おおー！」

晴夜と龍牙はビルドドライバーを装着し、ボトルを取り出し、ドライバーに差し込む。マナ達四人は変身用ラビーズをコミュニケーションにセットした。

『ラビッツ！タンク！ベストマッチ！』

『ウエイクアップ！クローズドラゴン！』

晴夜と龍牙はレバーを回すと、前後からスナップライドビルダーが出現し、アーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身ー！」

「プリキュア！ラブリック！」

『鋼のムーンサルト！ラビッツタンク！イエーイ！』

Wake up burning! Get CROSS—Z DRAGON! Yeah—!

「みなぎる愛！キュアハート！」

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

「陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

「勇気の刃！キュアソード！」

「「響け！愛の鼓動！ドキドキプリキュア！」」

「ドキドキ・・・プリキュア!??それにアイツらは!??」

六人は変身を完了するとファントムの突進をかわす。だが、ファントムはビルド達六人の姿に驚く。

「ドキドキプリキュア・・・載って無いぞ！それにアイツら何だよ！」

——ファントムは知らなかったようだが、ドキドキプリキュアは最近誕生したばかりで、プリキュア教科書には書かれて無かった。

そしてビルドとクローズもプリキュアでは無いので、プリキュア教科書には書かれて無かった。

「プリキュアなのに・・・どうして載って無いんだ！チッ！」

特徴を知らない相手と戦うのは危険だと感じ、ファントムが引き上げた。

「行った・・・」

グレルがホツとすると六人はグレルとエンエンに振り向く。

「ねえ君達、今の何？」

ハートの質問にグレルはハートから目を逸らす。

「何か知ってる事があるなら、教えてくれないか？」

ビルドはグレルが何かを知っているのだと感じる。

「あ、まだ名前言って無かったな。俺は仮面ライダービルド！作る形成するってビルドだ」

ビルドという名を聞いてエンエンはみゆきが言ってた仮面ライダーのことを思い出す。

（仮面ライダーって・・・キュアハッピーの言ってた・・・？）

エンエンが思ってる間にビルドが話を続ける。

「そして、こいつは仮面ライダークローズ、俺の助手な」

「誰が助手だ！」

助手と言うとクローズがビルドの肩を揺らす。

「だから、お前はいちいち食いつくんじゃないよ」

二人の痴話喧嘩に戸惑っていたグレルとエンエン、しばらくして二人がやってしまった事をドキドキプリキュアのメンバー四人とビルド、クローズに話す。

「そんな・・・」

「他のプリキュアが・・・」

グレルとエンエンがプリキュアパーティーはプリキュア達を誘き出し、罠にはめる物だと話す。

「つまりパーティーは、みんなをおびき出す罠だったって事か・・・」

ビルドが推測を立てると隣にいるエンエンが涙目になる。

「何だよエンエン！そんな目で見るなよ！言いたい事があるなら言えばいいだろ！言えよ俺のせいだって！」

「どう言う事だ？」

「まさかあの影、お前が!?？」

フアントムの影はグレルからのだとクロースは察し、尋ねる。

「あーあーそうだよ！俺が全部悪いんだよ！泣くなよこの泣き虫！泣くなつてば！」

グレルがエンエンに向かって叫ぶとエンエンが泣き出し、グレルも泣き出した。取り返しのつかない事をしてしまった。

「はい、そこまで」

ハートが二人に泣くのはそこまでと言う。

「泣きたくなる事って、あるよね。怒りたくなる事も、あるよね。でも、泣いたり怒ったりしても、楽しくないでしょ？楽しくない事は、辞めちゃおう。ね？」

ハートが言うのと二人の妖精は泣くのを堪える。

「今は泣いたり、怒る時じゃないどうすればいいか、それを考えるんだ」

「止めちゃおうって言われても、もうどうにも出来ないし・・・」

「それはあなた次第だよ。どうにも出来ないから諦めるか、どうにかするために行動するか」

「あたし達が協力するからさ」

「お前は本当はどうしたいの？」

ビルドに質問にグレルは迷った末に答える。

「アイツは・・・俺の影なんだ。こうなったのは俺のせいだから、だから・・・アイツを止めたい」

グレルは影を止めたいと言う。

「分かった。止めよう！お前の影を！」

グレルの覚悟が伝わると、エンエンの方へと振り向く。

「お前は、どうしたい？」

「えっ？」

「泣いている自分は好きか？嫌いか？」

「嫌い・・・」

ロゼツタがエンエンの涙を指で拭って尋ねる。

「では、どんな自分になりたいですか？」

「僕は・・・キュアハッピーみたいに笑いたい」

「ハッピーに会ったの？」

「うん……」

「何か言っていましたか？」

「ハッピーが：キュアハートとビルドに伝えてって『ちよつとピンチ、助っ人お願い』って」

エンエンはハッピー……みゆきからの伝言を伝えた。

「他にもやられたって事は……戦えるのは俺達六人か」

「分かった、伝言ありがとう。」

「ちゃんと言えたじゃない。言いたい事。」

「やれば、できるじゃねえか」

「あ、言えた！」

「……じゃあ、俺から一つ」

ビルドが膝を曲げ、何かを取り出し、エンエンに渡す。

「これは……」

エンエンに渡したのは炭酸飲料缶のようなボトルだった。

「もし、やばくなったらそれを俺のところに持ってきてい」

「どうして、僕に……」

弱虫の自分に何かを託したか意図がわからなかった。

その頃、ビルド達から退いたフアントムがドキドキプリキュアとビルド、クローズについて何か無いかとプリキュア教科書を開く。

「ドキドキプリキュア・・・やっぱ載って無いな。と言う事はあれは最近生まれたプリキュアか」

フアントムもドキドキプリキュアは最近出来たのだと察すると、教科書のページを更にめくる。

「プリキュア達は力を合わせて敵を倒して来た」

フアントムはこれまでのプリキュアの経緯を確かめた。

「じゃあ、二度と力を合わせられないようにしよう」

フアントムは木から起き上がり羽を広げ移動を開始し、妖精達や変身アイテムを隠す場所を探そうとする。

「(イヤ)にしよう」

妖精達と変身アイテムが入った入れ物を滝の中に沈めた。

「残るはドキドキプリキュア・・・それと赤と青のヤツとドラゴンのシルエットのヤツだけだな。アイツらを片付ければ邪魔者はいなくなる」

「——面白そうな事をしてるな。手伝ってやろうか？」

「ん？」

後ろを振り向くとそこから赤い魔法陣が現れ、指にリングを付けた男が現れた。

「誰だお前は？」

「俺は操真晴人、通りすがりの者だよ。何か文句があるのか？」

ファントムの前に現れた青年——操真晴人が手を貸そうかと持ちかける。

その頃、滝に投げられ閉じ込められた妖精達の中では、メップルとミップルが口を塞いでいたテープを剥す。

「メップル、ミップル達はどうなっちゃうミポ〜・・・？」

「あ、電話メポ！」

プリートフォンが鳴り出し、通信に出る。

「メップル先輩、お久しぶりケル！」

「ラケル！」

電話の相手はキュアダイヤモンドの妖精ラケルだった。

「はい、分かったケル！変身アイテムは妖精の滝に沈められてるケル！」

「プリキュア達に変身出来れば、きつと影の暴走を止められるでランス〜」

「変身アイテムを、取り戻すシャル！」

「みんなで助っ人しに行こう！」

変身アイテムの場所がわかり、アイテムを取り戻すべく六人が手を乗せる。

「ほら、お前達も」

「一緒に行くビィ！」

ビルドとダビィに言われグレルとエンエンも手を乗せる。

「エンエン、お前はどこかに隠れてた方が・・・」

「僕も行きたい」

エンエンはフードを取り、決意の目を見せた。

「それじゃあ行こうか！」

「変身アイテム、絶対取り戻すよ！ファイト！」

『オーツ！』

ビルド達は、変身アイテムを絶対に取り戻すと誓った。

妖精界の空が暗くなり、ファントムが周りを黒く染めていき、妖精学校の生徒達は怯

えていた。

「暗くなつて来た・・・」

「私達、どうなつちやうの？」

「大丈夫や。きつとプリキュアが来てくれる」

タルトがみんなにプリキュアが来ると励ます。

みんなの変身アイテムを取り戻そうとビルド達六人は森の中を走っていた。

「ドキドキプリキュア、見つけた」

だがそこにファントムが前に立ちはだかった。

「ダイヤモンド！ソード！」

「オツケー！」

ダイヤモンドとソードがファントムの相手をし、その隙にハートとロゼッタ、ビルドとクローズは先へ向かう。

「俺も六人に増えようつと！」

ダイヤモンドの飛び蹴りを受けて吹き飛んだファントムが体勢を整えて分裂し、六体となった。

『忍者！コミック！ベストマッチ！』

「ビルドアップ！」

スナップライドビルダーから形成された新たなアーマーがビルドの体に重なる。

『忍びのエンターテイナー！ニンニンコミック！イエーイ！』

ニンニンコミックへとフォームチェンジし四コマ忍法刀のトリガーを3回押す。

『分身の術！』

こちらも分身し、分列したファントムに応戦する。

「グレル！エンエン！行って！」

「ここは、俺達が止める！行けえ！」

ビルドとハートはエンエンとグレルに先に行くように言う。

「エンエン行こう！」

「うん！」

グレルとエンエンは先へと向かうと、ビルドはボトルを取り替える。

『海賊！電車！ベストマッチ！』

『Are you ready?』

「ビルドアップ！」

形成されたアーマーがビルドの体に装着された。

『定刻の反逆者！海賊レッシャー！イエーイ！』

海賊レッシャーフォームへと変身したビルドはカイズクハツシャーを構え、トリガーの弦を引つ張る。

『各駅電車、急行電車、快速電車、海賊電車、発車！』

カイズクハツシャーから放たれたエネルギーが放たれ、ファントムも後ずさる。

「お前達を倒せば、俺が新しい伝説だ！」

ファントムはさらに分身し、数を増やしていく。

「数だけ揃えても、俺達を止められると思うなよ！」

クローズがそう叫んでからドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

音声が発ると、クローズの背後から蒼いエネルギー状の龍——クローズドラゴン・ブレイズが現れた。

『ドラゴニックファイニッシュ！』

背後から現れた龍の吐く火炎に乗り、ライダーキックでファントムを蹴り飛ばした。

ビルドもカイズクハツシャーを振り続けファントムに攻撃する。

——しかし、どの攻撃もファントムの決定打にならなかった。

「くそ、キリが……!?」

視覚センサーから何かを見て、それにビルドが反応した。

「あの二人……くう！」

「あ、晴夜君どこ行くの！」

ビルドが何かを見て走って行ってしまった。

その頃、崖を走るグレレルとエンエン。だが、その途中で、グレレルの足場が崩れ落ちた。
「グレレル！」

エンエンが手を差し出し、その手をグレレルが掴んだが、エンエンの力では落とさず、済むのがやっとだった。

「エンエン、離せよ」

だがエンエンは首を横に振った。

「このままじゃお前まで……いいから離せ！」

「この世界をメチャクチャして、俺は悪いヤツなんだ！俺なんかもうどうなったっていいんだ！だから……手を離せ！」

「グレレルは悪いヤツなんかじゃない！」

「悪いだろ！俺は最低なヤツだ！」

「違うよ！だって……グレレルは僕に話しかけてくれたじゃないか！」

エンエンがグレレルと今までの一緒に入られた日々を語り出す。

「いつも……いつも話しかけてくれたじゃないか！僕は一人ぼっちじゃ無かった！グレルがいて、嬉しかった！」

グレルの今で居てくれたことが嬉しかったと叫ぶ。

「僕は……キュアハッピーみたいに笑いたい！グレルがいなかったら、僕は笑えないよ！」

「エンエン……」

力を振り絞って登ろうとするも、エンエンのいた足場にヒビが入って崩れ落ち、二人まとめて落ちてしまった。

『天空の暴れん坊！ホークガトリング！イエーイー！』

「大丈夫か？」

しかし、そんな二人をビルドが救った。

崖から落ちる姿を見たビルドがホークガトリングフォームでここまで飛んで来たのだ。

「ビルド！」

ホークガトリングフォームのビルドが落ちた二人を救い地面へと戻る。

「大丈夫か？」

ボトルを外し変身解除し、二人に大丈夫だと聞く。

「どうして、お前も俺を助けるんだよ……」

晴夜に自分で助けたのかとグレルが問う。

「俺は……自分の思い上がりで……こんな……こんな迷惑をかけたんだ！」

グレルが顔を下に向けながら言うと、晴夜が膝を曲げて語りかける。

「俺は、お前を責めないよ」

「えっ?」

「お前が、自分がいけないことをした自覚をしているなら、俺は責めないよ」

晴夜はグレルを責めないよと言う。

「お前はそのためにも、自分がやらなきゃいけないことを一生懸命やってるじゃないか

」

「?」

晴夜の言葉が心に響くと晴夜は起き上がる。

「それに、俺はお前らのそんな苦しい顔を見たくないな。どうせなら二人の笑顔が見たいな」

「なら、俺も笑顔にしてくれよ!」

晴夜の後を追ってきたファントムがここまで付いてきた。

すぐさま晴夜が前に出て二人を守ろうとする。

——すると、巨大な眼のような光が現れた。それを見たフアントムは晴夜達から離れる。

そこからオレンジのパーカーを被った、一人の人物の姿が現れた。

「なんだ？」

「誰だお前？」

「俺は、仮面ライダーゴースト」

「仮面ライダー……!?」

自分以外の仮面ライダーと名乗り晴夜は驚く。

「なら、お前も倒す！」

フアントムがゴーストに向かってくると、ゴーストは青い目ん玉の様なものーゴーストアイコンを取り出し、ゴーストドライバーに入れる。

『カイガン！ニユートン！リングゴが落下！引き寄せまっか！』

ドライバーから先と違ったパーカーが現れ、そのままゴーストに装着された。

フアントムが左手のグローブから発せられる引力に引かれ右手の斥力の力でフアントムを纏めて吹き飛ばした。

「くっ、一旦引くか……」

フアントムはゴーストの力に驚き一旦引いていく。

フアントムが姿を消すとゴーストは変身解除した。

「大丈夫？」

着物のようなジャケットを着た青年が駆け寄り、年は晴夜より四つくらい離れている感じだった。

「あなたは？」

「俺は天空寺タケル。仮面ライダーゴースト！」

「仮面ライダー……」

仮面ライダーゴースト：天空寺タケルが現れしばらくすると、空から大きなタカが現れた。

「みんな乗るクル！」

背中にスマイルプリキュアの妖精キャンディもいた。

全員がタカへと変化したポップの背中へと乗る。

「キャンディさん！ポップさん！」

「お願いです！妖精の滝にプリキュアの変身アイテムがあります！連れてって下さい

！」

「お願いします！」

「お兄ちゃん！」

「了解でござるー！」

ポップは加速し、急いで滝へと向かう。

「君が仮面ライダーの桐ヶ谷晴夜君クルか？」

「ああ！」

晴夜を見てキャンディを尋ねると首を縦に振り頷く。

「君も仮面ライダーなんだね？」

タケルがキャンディの質問と晴夜の腰につけているビルドドライバーを見て聞く。

「ええ・・・利用された仮面ライダーですけど・・・」

「利用された？」

この間の戦いでブラットスターク・・・石動総一郎が言った言葉を思い出すー

『お前は正義のヒーローを演じていたにすぎない！仮面ライダーごっこをしていただけなんだよ！』

——あの言葉が、今でも脳裏に蘇る。

「あそこだ！」

妖精が放り込まれた滝の前と到着した。

「皆の衆、しつかり掴まってるでござる！」

妖精の滝へと突っ込むが、水流で流されてしまい、ポップが背中からぶつかってしまった。
う。

元の姿に戻って流されてしまうが、グレルだけは耐え、何とか変身アイテムと妖精達を取り戻した。

岸上がりポップ達が変身アイテムが入ったガラスケースを叩いたりするが、割れる心配が無い。

「割れないでござる！」

「割れろ！割れろ！」

やはり割れる感じはなく、ガラスケースに晴夜が触れる。

「どうやら、ただのガラスケースではないな。おそらく、あの影の仕業だろ」

ガラスケースが割れないのは、ファントムの仕業だと晴夜が推測する。

「グレル、その剣で割ろう！」

「え？でもこれはおもちやの剣だ・・・」

「大丈夫だよ。その剣だつてきつと力を貸してくれるはずだよ！」

「その剣は自分で作ったんだろ？なら、自分が作った剣を信じるよ」

「分かった」

みんなの目を見たグレルが剣を構え、エンエンも剣を持った。

「わーれーろー!」

二人の放った一撃が、ガラスケースに直撃した。

すると、ガラスケースからは亀裂が入り亀裂は大きくなっていく妖精達を解放する事が出来た。

「割れたクル!」

「おかげで助かったメポ!」

「無事で良かったでござる!」

「あ、あの・・・ごめんなさい!」

「助けてくれてありがとうミポ」

「なぎさ達はどこメポ!?」

妖精達が自分達のパートナーはどこと聞く。

「ようやく来たか?」

そこに一人の青年が晴夜達の前と現れる。

「奴の仲間?」

晴夜が青年を見て警戒する。

「まさか、お前達が来るまでここを見張ってたんだ」

「えっ?」

「大丈夫だよ。あの人は味方だよ」

敵じゃないと驚くと一気に気が抜けた。

「お久しぶりです。晴人さん!」

「え? 知り合いですか?」

「仮面ライダーウィザード。お前達の希望だ」

タケルは彼が自身の味方である仮面ライダーウィザード・操真晴人だと晴夜に伝える。

「貴様ら〜!」

またフアントムの分裂した一部が現れた。そこへ晴人が剣のような銃——ウィザードソードガンを持ち、フアントムに向けて放つ。

「ここは任せろ!」

また襲ってくるフアントムに向けてウィザードソードガンを放った。

だが、それでも分裂し数を増やす。その時、晴夜もホークガトリンガーを持ちフアントムに放つ。

「早く君達が待っているみんなの所へ!」

「二人のやるべき事をやってこい!」

晴夜がホークガトリンガーを放ち、ファントムから妖精達を遠ざけて行かせようとする。

「わかったメポ！」

「ありがとうミポ！」

「晴夜・・・」

グレルとエンエンは心配するが急いで水晶化されたプリキュアの場所へと向かう。

太陽が黒く染まり、闇へと落ちて行く。ハート達五人は一向に減らないファントムの分裂に苦戦していた。

「うわあああー！」

ファントムの攻撃を受けついにクローズが変身解除してしまう。

「これがお前達のパワーか。大した事無いな」

ファントムが分裂し、また増えていく。

「「また増えた！」」

「相手は影！これじゃあキリが無い！」

「どうすればいいの!?」

「このままでは・・・」

「負ける気しかしねえ．．．」
流石にこのままではまずいと思う。

それは、妖精達を行かせたライダーの三人も同じだった。

「つたく、数多いな」

「ええ、これまでにないくらいに！」

「でも、まだ引けない！」

晴夜は諦めずホークガトリングを打ち続ける。

一方、三人のおかげでプリキュア達の元へと向かう妖精達。

メツプル達はポップに、他の妖精達はシロップの方に乗っていた。

「あつ！森が影に飲み込まれてる！」

森が影に飲み込まれ姿を変えようとしていた。

「ミツプル、行くメポ！」

「ミポ！」

「え？あの森へ行くのか？！危険過ぎるって！」

「プリキュアは、どんな時でも絶対諦めないメポ！」

「だから、パートナーのミツプル達も諦めないミポ！」

「流石プリキュアの妖精でござる！」

急いで結晶化したプリキュアのところへと向かう。

その頃、分裂したファントムにハート達五人は既に限界の様子を見せていた。

「お前達の実力はもう分かった。ドキドキプリキュアもお前らも終わりだ！」

「約束したんだ……！」

ハートは立ち上がる。

「は？」

「ハッピーと会おうって約束したから、絶対に会うんだ！」

ハッピーと会う約束を果たすためにハートはまだファントムに戦いを挑む。

「お兄ちゃん！スマイルパクトをみんなに届けてクル！」

「任せるでござる！」

キャンディ、グレル、エンエンは妖精学校の辺りで降り、ポップは変身アイテムを届けに向かった。

「あれ？シロップさん達は？」

届けに行く途中、下から巨大な腕が現れ、ポップに襲い掛かった。

「危ない！」

何とか逃げていたが、ついに捕まってしまった。

「お兄ちゃん！」

変化の術が解け、そのまま森の中に落ちて行った。

「もう・・・ダメだ・・・！」

ダメだと呟き地面へと膝を折るが：

「頑張れクルー！」

「キャンディさん・・・？」

「まだ終わって無いクルー！だから応援するクルー！頑張れクルー！ファイトクルー！」

キャンディの一言でグレールとエンエンは立ち上がる。

「あれは、キャンディはん？」

「グレール？」

「エンエンもいるぞ！」

妖精学校の窓から応援する三匹の姿が見えた。

「頑張れクルー！」

「頑張れー！」

「プリキュア！頑張れー！」

その姿を見てタルトも何かを感じ妖精のみんなの方を振り向く。

「みんな、ワイらが授業で言った事覚えてるか？変身つちゆうのは、妖精だけでもプリキュアだけでも出来へん。妖精とプリキュア、二つの力を一つにする事で、凄い力を得る事が出来るんだ」

タルトがこれまでのプリキュアの力について語り出す。

「気合いや！気合いや！気合いや！気合いやー！」

タルトの気合いが、ミラクルライトを呼び出した。

「ワイらも、プリキュアにパワーを送るんや！」

妖精達の手元にもミラクルライトが現れる。

「みんな、ちゃんと持ったか？」

ミラクルライトを持ったかと聞くと妖精達はミラクルライトをタルトに見せる。

「今こそ、プリキュアに力を与えるんだ！」

妖精達はミラクルライトを振りこの世界に優しい光が注がれていく。

ミラクルライトの影響か、ハート達五人も影響が出ていた。

「力が・・・！」

「湧いて来る・・・！」

「凄いですわ・・・！」

「まだ・・・戦える！」

「なんだよ・・・これ・・・！」

ハート達は起き上りまだ行ける感じがしていた。

その影響は、ファントムと戦っている仮面ライダー三人にもあった。

「これは・・・」

「なんか、魔力が上がった」

「なんだろう、力が湧いて来る」

ファントムと生身で戦っていた三人にも力が湧いて来ていた。

『テン！トウエンティ！サーティ！フォーティ！ファイフティ！シックスティ！セブン

ティ！エイティ！ナインティ！ワンハンドレッド！』

晴夜はホークガトリンガーのシリンドーを回した。

『フルバレット！』

ホークガトリンガーの百発の攻撃を繰り出し、ファントムの分裂した一部を消滅させた。

「やるねえ、晴夜君！」

「いいえ、二人に比べたらまだまだですよ」

二人が会話していると晴人が二人に近づく。

「それじゃあ、そろそろ行くこうか？」

晴人がリングを出し指にはめる。

『テレポート！』

リングの力がスキャンされると赤い魔法陣が出現した。

「あの、これって・・・」

「これが俺の魔法さ」

ウィザードリングを見せて晴人が言う。

その一方で、結晶化されていたプリキュア達が、元に戻って行き、パートナー達と再会した。

「デュアル・オーロラ・ウエーブ！」

「ルミナス！シャイニングストリーム！」

「デュアル・スピリチュアル・パワー！」

「プリキュア！メタモルフオーゼ！」

「スカイローズ！トランススレイト！」

「チェインジ・プリキュア！ビートアップ！」

「プリキュア！オープン・マイ・ハート！」

「レッツプレイ！プリキュア！モジュレーション！」

「プリキュア！スマイルチャージ！」

——身動きが取れなかったプリキュアが全員、ここに復活した。

「みんな！ありがとう！」

全員がハート達五人の前へと現れた。

「あの人達が・・・私達より先に生まれた先輩プリキュア・・・」

「あんなにいるの!?？」

「想像を超えた人数ですわ・・・！」

「間に合ったわね」

「だあああああつ！」

そこにファントムが襲い掛かるが、ハッピーの一撃がファントムを消滅させた。

「あなたがキュアハート？」

「うん、来たよハッピー、助っ人に！...って、今あたしの方が助けられちゃったけどね」

さらにそこに赤い魔法陣が現れたのは、そこから妖精達を逃すために戦っていた晴

夜、タケル、晴人の三人が現れる。

「晴夜（君・さん）！」「」

「クライマックスには間に合ったみたいだな！」

「遅えよ！」

龍牙が晴夜に近づく。

「少し太った？」

「太ってねえよ！」

晴夜と龍牙はいつも痴話喧嘩をする。

一方、フアントムと一緒にいる晴人を睨む。

「お前、俺を騙したのか！」

「ああ、ちよつとしたビックリつて奴さあ。サプライズ」

投げキスのようなモーションを見せられフアントムから怒り出す。

「許さん！」

フアントムが腕を伸ばし全員に襲いかかろうとする。

——すると、空から隕石のようなものが降り、フアントムの攻撃から全員を守った。

落ちてきた煙から人の姿が見えた。その姿はオレンジのジャケットを着ていた背の

高い男性がいた。

「鎧武！」

晴人が叫ぶと鎧武と呼ぶ男性はこちらに振り向いて近づく。

「遅れてすまなかつたな！」

「あなたは？」

「この人は葛葉紘太。俺達と同じ仮面ライダーだ」

「あの人も仮面ライダー・・・」

「彼は仮面ライダー鎧武。仮面ライダー同士みんな思いは同じなんだな」

「よろしくな、かわいい後輩！」

「どうして、ここがわかった」

「強い力を感じてな。気になって来てみたが、かなりやばい様子だな」

「紘太さんも一緒に戦ってくれますか？」

「当然だろ！」

「ありがとうございます！」

晴夜が頭を下げると四人はみんなの前に出て構える。

「奴ら・・・全員仮面ライダーか!?!?」

ファントムが四人の仮面ライダーを見て反応する。

「まあいい！俺が全員を倒して伝説となる！」

ファントムが叫ぶと無数の数のファントムが現れる。それを見て四人は構え、腰の方へと腕を置く。

『ドライバーオン！』

晴人とタケルはウィザードドライバー、ゴーストドライバーを出現させ、紘太と晴夜は戦国ドライバー、ビルドドライバーを装着する。

「さあ、この世界の希望を返してもらおう！」

フレイルムウィザードリングを取り出し、晴人は指にリングを嵌める。

「必ずこの世界の未来を俺たちが守る！」

『オレンジ！』

紘太はオレンジのロックシードを取り出し、錠前を開ける。

「この世界の命を繋ぐ！」

タケルはオレ魂アイコンを取り出し、アイコンを起動させる。

「この世界の笑顔と明日を創る！」

2本のフルボトルを数回振り数式が後ろから出現すると、キャップの栓を回す。

四人は妖精の世界を守る気持ちを抱き、ファントムに向けて叫ぶ。

「変身！」

ウィザードリングをドライバーに掲げる。

「変身！」

体を左右に大きく振った後、右腕を上にあげロックシードをセットしカッティングブレードをおろす。

『アーイ！バッチリミナー！バッチリミナー！』

「変身！」

オレ魂アイコンをドライバーに装填し、両腕を上にあげ、レバーを引く。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

「変身！」

2本のボトルを差し込みレバーを回し、ライドビルダーからアーマーが形成された。

『フレイム！プリーズ！ヒー！ヒー！ヒー！ヒーヒーヒー！！』

『オレンジアームズ！花道・オンステージ！』

『カイガン！オレ！レッツゴー！覚悟！ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！』

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ！』

「ここからは俺達のステージだ！」

「さあ、ショータイムだ！」

「命燃やすぜ！」

「さあ、実験を始めようか！」

四人の仮面ライダーが変身を完了し、名乗り上げそれぞれの決め台詞を叫ぶ。

「わあ〜！男の人のヒーローだ！」

仮面ライダーを見てピースが目を輝かせていた。

ハッピーが仮面ライダーに近づく。

「ねえ、終わったらみんなでパーティしようよ」

「チヨォーいいね!」

「楽しくなるからな!」

「それじゃあまずは・・・」

「うん!早く終わらせよう!」

「ここからは、俺達の番だ!」

プリキュアとライダー達の反撃が、今始まった。

三十三人のプリキュアと四人の仮面ライダーが、フアントムを圧倒していた。

すると、妖精学校に集まっていたフアントムが巨大化し、ブラック、ホワイト、ルミナスの元に跳んで来た。

ブラックの拳が、フアントムを吹き飛ばし、そこにホワイトが投げ飛ばし、フアントムを消滅させた。

「一時はどうなる事かと思ったよ。メップル、気をつけてよね」

「ブラックが油断するからメポ!」

「ちよつと何よ!あたしのせいだっの!?!」

「まあまあ二人とも・・・」

「また会えてよかったミポ！」

「いっぱい飛んで来たメポ！」

妖精学校からファントムが飛んで来る。

「私に任せて下さい！」

応援していたキャンディ達の前に柱を持った巨大ファントムが現れる。

「ビートソニック！」

ビートがビートソニックでファントムを消滅させるが、柱が落ちて来る。

だがパッションが蹴り飛ばし、危機は救われた。

「キュアパッション！キュアビート！」

「大丈夫？」

「あら？あなたはあの影と一緒にいた・・・」

「ギクツ！」

「あ、あの、グレルは反省してるんです！だからその・・・」

「精一杯望めば、あなたの望みはきつと叶うわ」

「「えっ？」」

「自分の気持ちをきちんと話せば、みんな分かってくれる。大丈夫、やり直せるわ」

「じゃ、またね。」

そう言うのと、パッションとビートは迎撃に戻った。

「何で・・・怒らないんだ・・・？」

「キュアパッションもキュアビートも、最初はプリキュアの敵だったんだよ」

「えっ？敵だったのにプリキュアになったのか？」

「うん。戦ってた相手と友達になったんだよ。」

「友達に・・・」

パッションとビートはかつての敵としてプリキュア達と戦った事があったのだ。

そこにまたキャンディ達の前に巨大ファントムが現れた。

「また来たクル〜！」

ファントムが息を吹き出し、プリキュア達がまた結晶化し始めてしまう。

「また・・・！！」

「ヤバイヤバイヤバイヤバイ！」

「くっ・・・！！」

「なんだよこれ!?？」

ライダー達も例外で無く、腕や足が結晶化して行く。

「アカン！みんな、応援や！」

『プリキュア！ライダー！頑張れー！』

妖精達の応援がミラクルライトに反応し、全員の結晶化が解ける。

「ブロッサム・シャワー！」

「皆さん！ありがとうございます！」

「サンキューベリーマツチ！」

「ピーチはん達も応援するで！」

『フレッシュプリキュアー！スイートプリキュアー！』

妖精達が必死に応援し、みんなの結晶化を防ぐ。

その頃、ウィザードがファントムの群れの中一人で戦っていた。その動きでファントム達を押していた。

「魔法の力見せてやるよ！」

ウィザードはフレイムドラゴンリングを指に嵌める。

『フレイム！ドラゴン！ボー、ボー、ボーボーボー！』

フレイムドラゴンリングをスキャンし、フレイムドラゴンスタイルになる。

『コネクト！プリーズ！』

コネクトリングをスキャンして現れた魔法陣からドラゴタイマーを取り出し、右腕に

装着する。

『ドラゴタイム！セットアップ！スタート！』

ダイヤルを半時計回りに回し、サムズエンカウンターを押すと起動を始めた。

その間にもウィザースwordガンで迎撃し、タイマーが青まで行った所にカウンターを押した。

『ウオータードラゴン！』

青い魔法陣が現れ、そこからウオータードラゴンのウィザードが出て来て、ガンモードのウィザースwordガンから弾丸を放った。

今度は緑まで言った所にカウンターを押した。

『ハリケーンドラゴン！』

今度はハリケーンドラゴンウィザードが出て来て、逆手に持ったソードモードのウィザースwordガンでファントムを斬り裂く。

最後は黄色まで行った所でカウンターを押した。

『ランドドラゴン！』

最後にランドドラゴンウィザードが出て来て、ソードモードのウィザースwordガンでファントムを斬り裂く。

『ファイナルタイム！オールドラゴン！』

四人のワイザードからドラゴンの力が一つとなった。オールドラゴンフォームへと変わる。

一方の鎧武も橙丸と無双セイバーを使いファントムを攻撃する。

「輪切りにしてやるぜ！」

二本の武器でファントムに攻撃すると、さらに分裂し、鎧武に向かっていく。

『パイン！』

鎧武はパインロックシードを取り出し、ドライバーにセットし、カッティングブレードを下ろす。

『パインアームズ！粉砕デストロイ！』

パインアームズが装着され、パインアームズの武器・パインアイアンを振り回しファントムを寄せ付けない。

『レモンエナジー！』

鎧武が、今度はゲネシスコアを戦極ドライバーにセットし、レモンエナジーロックシードを開錠する。

『ロック・オン！ミックス！ジンバーレモン！ハハーツ！』

ジンバーレモンアームズを装着した鎧武が、ソニックアローからエネルギーの弓矢を

連射して怯ませる。

『ロック・オン！オレンジスカッシュユ！』

ソニックアローにレモンエナジーロックスードをセットし、戦極ドライバーのカツティングブレードを1回倒す。

「セイツハーツ!!?」

鎧武の前にオレンジ・レモンの断面型エネルギーが現れ、そこに向けてソニックボレーを放った。

「まだ来るか、ならー！」

『カチドキ！オー！ロック・オン！』

カチドキロックスードを開錠しドライバーにセットしカツティングブレードを下ろす。

『ソイヤツ！カチドキアームズ！いざ出陣！エイエイオー！』

カチドキフオームへとなり後ろのカチドキ旗を引き抜く。

「行くぜえ！オラアアアア！」

カチドキ旗を振り回しファントムに攻撃する。

さらに、ゴーストの方も空中へと飛びながらファントムを攻撃し、地面へと着地する

と、アイコンを取り出す。

『カイガン！ベートーベン！曲名！運命！ジャジャジャジャー！』

レバーを引いて押し込み、ベートーベンゴーストを纏ってベートーベン魂になる。

「まだまだ！」

次にビリー・ザ・キッド眼魂のボタンを押しして起動状態にし、ゴーストドライバーに装填する。

『アーイ！バッチリミナー！バッチリミナー！』

ビリー・ザ・キッドゴーストが現れ、ファントムを攻撃する。

「この世界は必ず守る！」

『グレイトフル！』

今度はグレイトフルドライバーを装着し、操作する。

『ガツチリミナー！コツチニキナー！ゼンカイガン！ケンゴウハツケンキョシヨウニオウサマサムライボウズニスナイパー！ダクイヘンゲくく！！』

グレイトフルへとフォームチェンジし、武蔵と信長の三蔵法師のゴーストを出現させ共にファントムに向かっていく。

「拙者の出番だな！」

「お願いします！」

ゴーストと英雄の魂と共にファントムを次々と倒していく。

そして、ビルドもファントムの分裂をドリルクラッシャーで倒し続けていく、そこに不意打ちを受けてしまう。

「先まで、力が違う・・・」

先の不意打ちを受けて分裂したファントムとはパワーが違うことに気づいた。

「そこか・・・お前が本体か？」

このファントムが本体だとビルドが睨む。

「ちっ！気づいたか。けど、お前じゃあ、俺は倒せない！」

ファントムの本体が勢いよくビルドに向かってくる。だが、ビルドは左足を蹴り上げ高く飛躍して交わす。

「残念」

飛躍した時には既にファントムが後ろを取っており、そのままビルドを地面へと叩きつける。

「マジかよ、流石は影つてところか」

影は実体が無いから伸び縮みの部分がある。それがファントムにもある。

「これは、厄介だな・・・」

けど、ビルドは諦めず立ち上がった。

「まだ、やるのか？」

「当然、ヒーローが逃げるわけにいかねえからな！」

再びファントムに向かっていく。

そして、他の仮面ライダーやプリキュアが戦っているなか、龍牙だけが突っ立て見ていた。

「どうして……どうして、そんなボロボロになるまで戦うんだよ……みんな、バカばっかだ！」

何故、そこまでボロボロになって戦うのか龍牙にはわからなかったが……

「でも、悪くねえ……俺は……俺を信じしてくれる奴のために戦う！」

クローズドラゴンガジェットが龍牙の手に置かれドラゴンボトルを振るとガジェットに差し込む。

『ウエイクアップ！』

そしてドライバーにガジェットに差し込む。

『クローズドラゴン！』

レバーを回し、アーマーが形成された。

——そして、龍牙が叫ぶ！

『Are you ready?』

「変身!!?」

アーマーは龍牙の体に重なり装着され、音声 flowed。

『Wake up burning! Get CROSS—Z—DRAGON! Yeah!』

ハーフボデイのビルドと違い両方とも同じアーマーが体に装着され、さらに横に形成されたアーマーも装甲になりアーマーを纏い、頭部にドラゴンみたいな絵柄になった。

「俺は、仮面ライダー・・・クローズだああー！！！」

クローズが分裂しているファントムの一部をビートクローザーを使いただひたすらに切り続ける。

「おっいー！」

そこにグレルとエンエンがクローズの前に現れた。

「お前ら・・・」

「お願い、晴夜のところまで僕らを連れて行って下さい！晴夜にこれを渡したいの！」

「お前・・・それ・・・」

晴夜がエンエンに渡したのはビルドの強化アイテムのラビットタンクスパークリン

グだった。

その頃、ファントムの本体と戦っていたビルドはファントムの予想もつかない攻撃に翻弄される。

「つたく、引くくらい強いな」

「当たり前だ。俺は伝説になるんだ」

ファントムの方もかなり余裕の様子を見せ、かなり苦戦をしいられていた。

「晴夜！忘れもんだぞー！」

マシビルダーに乗ったクローズがビルドが現れ、クローズの肩にグレル、エンエンが乗っていた。

「晴夜！これを！」

グレルとエンエンがビルドにラビットタンクスパークリングをビルドに向かって投げた。

ビルドはそれをキャッチした。

「グレル！エンエン！龍牙！ナイスタイミングだ！」

「うん！」

「いけえ！ビルド！」

「こっちは任せろ！早くそいつを倒せ！」

クローズは再びファントムの群れに向かっていく。

「了解！」

ラビットタンクスパークリングを振り、その後ボトル缶のフタを開けると、中から泡が噴出する。すると後ろから数式や化学式が現れる。

「さあ、実験を始めようか！」

決め台詞を言うとボトル缶を掲げドライバーに差し込む。

『ラビットタンクスパークリング！』

レバーを回し前後からビルドマークのスナップライドビルダーが出現し、アーマーが形成される。

『Are you ready?』

「ビルドアップ！」

その掛け声と共にライドビルダーがビルドの体と重なり、泡を放ちながらドライバーから流れる音声が響く。

『シユワツと弾ける！ラビットタンクスパークリング！イエー！イエー！』

「勝利の法則は、決まった!!?」

仮面ライダービルド・スパークリングフォームへととなり、右のアンテナをなぞりなが

らもう一つの決め台詞を言う。

「こけおどしだ!」

スパークリングフォームとなったビルドに向かってくると、すかさずビルドもファントムに向かっていく。

その頃、スマイルプリキュアとドキドキプリキュアが別の所でファントムと戦っていた。

「お前達の攻撃はゼーんぶ知ってる。だから俺の勝ちだ!」

スマイルプリキュアとドキドキプリキュアの前に巨大ファントムが立ちはだかる。

先にマーチが先行し、ファントムの上を登る。

「プリキュア!マーチシュート!」

「マーチシュートは直球攻撃。芸がな——」

かわしたが、もう一発が頭に命中した。

「直球勝負、上等!」

無数のマーチシュートを作りだし、連続で放つ。

「今や!どおりやああああつ!」

サニーとファントムがラツシュを繰り広げる。

「プリキュア！サニーファイアー！」

放ったサニーファイアーがファントムを吹き飛ばした。

「カッチカチの、ロゼッタウオール！」

ファントムが口から光線を放つが、ロゼッタのロゼッタウオールがガードした。

「私達も行きましょう！」

「よろしく願います！」

「プリキュア！ビューティブリザード！」

「煌きなさい！トウインクルダイヤモンド！」

こちらも二人同時技でファントムを翻弄する。

「あのー・・・私達も一緒に戦いたいなー、なんて・・・」

「よろしく、先輩！」

「先輩・・・よし！先輩、頑張っちゃおうぞ！」

「閃け！ホーリーソード！」

「プリキュア！ピースサンダー！」

二人がピースサンダーとホーリーソードを放つ。

「何でだ？プリキュアの攻撃は全部知ってる！簡単に倒せるハズなのに！」

「私達を倒す方法など、教科書には載っていません！」

「私達のチームワークは、無敵なんだから！プリキュア！ハッピーシャワー！」
「あなたに届け！マイスイートハート！」

今度はハッピーシャワーとマイスイートハートが一つとなり、ファントムを倒した。
「決まった！ドキドキスマイルミラクルボンバー！」

「何ですか？それ？」

ファントム分身体はドキドキプリキュアとスマイルプリキュアが倒した。

一方、スパークリングフォームとなったビルドは本体のファントムを押している
た。

「なぜ、押されているんだ・・・！」

スパークリングの圧倒的なスピードについていけていなかった。

「はああ！」

ビルドは右腕のクイックフロッセイアームに付いている『Rスパークリングブレー
ド』から大型のエネルギー斬撃を繰り出し、スピードでさらにファントムを圧倒し、次
の斬撃で吹き飛ばした。

「なんで・・・なんで！」

押されているファントムからは焦りが見え始めた。

「どうやら、俺達の力をまだよくわかってなかったみたいだな」

「なんで、俺が……」

「まだわかってないのか？」

「何をだよ……」

「俺達仮面ライダーとお前の力の決定的な違いを教えてやる！」

ビルドが左足の『クイックフロツセイレッグ』にエネルギーを収束させ、それを推進力に右足の『ヘビーサイダーレッグ』でキックを繰り返す。

「俺達はな……!」

それに同調したか三人の仮面ライダーも……

「多くの人の希望になるために!」

インフィニティリングをドライバーにかざす。

『インフィニティー! プリーズ! ヒースイフドーボーザビユードゴーン!』

全身が強度を誇るアダマンタイトで覆われているフォーム、インフィニティフォームへとなる。

「そんなもんになった所で、無駄なんだよ!」

フロントムがウィザードに向けて拳から一撃を放つ。

だがウィザードは後ずさりすらしなかった。

「何なんだこの固さは……！」

インフィニティースタイルの全身を覆うアダマントストーンは、最高の硬度を誇っているのだ。

「フィナーレだ！」

アックスカリバーを出現させ、ハンドオーサーにタッチをする。

『ハイタッチ！シャイニングストライク！キラキラ！』

巨大化したアックスカリバーを持ちながら振り回すと高く跳躍する。

「イヤアアアア！」

アックスカリバーの必殺技、シャイニングストライクを放ちフロントムを消滅させた。

「誰一人、見捨てないために！」

『フルーツバスケット！』

極ロックシードを取り出し、カチドキロックシードへと差し込む。

『ロック・オープン！極アームズ！大・大・大・大・大・大・大・大・大・大將軍！』

全てのロックシードの力を持つ仮面ライダー鎧武・極アームズへとなる。

そして、極ロックシールドを回す。

『パインアイアン！イチゴクナイ！バナスピアー！マンゴパニツシャー！キウイ撃輪！影松！』

鎧武の後ろから他のロックシールドの武器が宙へと出現した。

鎧武は召喚した武器をフロントムに向けて放つ。

『無双セイバー！火縄大燈DJ銃！』

さらに無双セイバーと火縄大燈DJ銃を召喚して大剣モードへと変える。

『極オーレ！』

カッティングブレードを2回下ろす。

『セイハアアアアアア！』

複数のフルーツを模した虹色の斬撃をフロントムに放ちこちらも分裂したフロントムを消滅させた。

「世界の命を未来を繋ぐために！」

ムゲン魂アイコンを取り出し、ゴーストドライバーへと入れ、レバーを引く。

『ムゲンシンカー！アーイ！バッチリミナー・バッチリミナー・チョーカイガン！ムゲ

ン！KEEP・ON・GOING！ゴ・ゴ・ゴ！ゴ・ゴ・ゴ！ゴ・ゴ・ゴ！ゴ・ゴ・ゴ！ゴースト

！
』

無限の可能性を持つ力、『光のゴースト』の異名を持つ仮面ライダーゴースト・ムゲン魂へと変わった。

ガンガンセイバーを持ち、こちらも襲ってきたファントムを寄せ付けず、ナギナタモードへと変わる。

『ヨロコビストリーム』

オメガストリームの「喜」の感情を持つ必殺技をファントムに放つ。

それでも残り、今度はアローモードへと変える。

『タノシーストライク』

アローモードでオメガストライクの「楽」の感情を用いた必殺技を放ち。こちらにも分裂したファントムを消滅させた。

「愛と平和のためにこの力を使う！」

ビルドの強烈なキックを受けファントムも後ずさる。

「それが……」

「『仮面ライダーだ！』」

四人の仮面ライダーが同時に叫んだ。

「どいつもこいつも、何で邪魔するんだ!」

散らばっていた影が一つに集まり、巨大なクモを作り出した。

「邪魔を・・・するなあ!」

クモとなったファントムは強烈な光線を放った。

「自分勝手な事しちゃ、みんなの迷惑だよ!」

ファントムが放った光線をハート達はどうか防ぐ。

『プリキュア!ライダー!頑張れ!』

妖精達も必死にみんなを応援する。

「みんな!」

「行くよ!」

全プリキュアが集まり、力を一つに集中させた。

「ジコチューは・・・ダメーッ!」

三十三人のプリキュアの力によってファントムから放たれた力を相殺された。

「なんだと!」

その隙に、ウィザード、鎧武、ゴースト三人の仮面ライダーが高く飛躍し、同時にド

ライバーを操作する。

『チヨイーネ！キックストライク！サイコ〜！』

『ソイヤ！極スカツシュ！』

『イノチダイカンガン！チヨードイカイガン！ムゲン！オメガドライブ！』

「イヤアアアア！」

「セイハアアアアアアア！」

「ハアアアアアアア！」

フアントムに三人のライダーキックが四方向から決まりクモフアントムも消滅した。

だが、本体は脱出していた。

「残念だったな！」

『スペシャルチューン！』

それを見ていたクローズはロックボトルを差し込み、ビートクローザーのグリップを2回引つ張る。

『ヒッパレ！ヒッパレ！ミリオンスラッシュ！』

ビートクローザーから出たエネルギーがフアントムを捉えて拘束した。

「なんだよ・・・これ！」

「今だ！」

ビルドが既にファントムの前と現れドライバーのレバーを回し、ファントムがワームホールのような放物線が形成され、中に吸い込まれ拘束される。

『Ready go!』

ビルドはワームホールの中に入っていき、ライダーキックを放つ。

『スパークリングファイニッシュ!』

「ハアアアアアアアアア!!?」

「なぜだ、なぜだアアアアアアアア!」

そう叫びながら、ビルドのスパークリングファイニッシュを受け、ファントムは地面へと叩きつけられた。

「なぜだ・・・」

スパークリングファイニッシュを受け、先程よりも小さくなった姿となっていた。

「俺は凄いいんだ・・・どうして分からないんだ・・・!」

ファントムが叫ぶ中、ビルドは着地する。

「もうやめよう」

ファントムがグレルと同じ大きさに戻る。

「何で止めなきやならないんだ?俺は凄い。プリキュアだつて・・・仮面ライダーも倒せるんだ!」

「・・・」

「ファントムがそう言うのと、ビルドがファントムに近づき、スパークリングをドライブから外し、変身を解除した。」

「お前はプリキュアを倒して伝説になるって言ったよな・・・でも、戦って感じたんだ・・・本当の気持ちは違うんじゃないか？」

「何!?？」

「ああ、本当は倒したいんじゃない。俺はただ、プリキュアが羨ましかつたんだ。」

「人気があって、みんなから頼りにされてるプリキュアが、羨ましかつただけなんだ」「みんななかどうでもいいだろ。どうせみんなもお前の事なんか分らないんだから」

「俺の事なんか誰も分からない。確かにそう思ってた。でも、いたんだ。俺を悪いヤツじゃないって言ってくれたヤツが、いたんだ」

「グレルが晴夜の方を向くと、晴夜も頷いた。」

「俺もソイツの事を知りたい。話したり、一緒に勉強したりして、エンエンと、友達になりたい」

「グレル・・・」

「学校の間なども友達になりたい。笑ったり、泣いたり、ドキドキしたり、自分の知り

ない気持ち、一杯一杯知りたい。お前もそうだろ。だつてお前は、俺なんだから」

そう言つて手を差し伸べる。晴夜も近づき膝を折りファントムを見る。

「なあ、もしまた目覚めたら、その力を今度は別のことに使つてみるよ」

「別？何使うんだよ？」

「その力をに誰かの為にだよ」

「誰かのため・・・」

「誰かの力になつて、誰かの明日を守るために何度も立ち上がつて、誰かの為にその力を
使えよ」

「それで、どうなるんだよ？」

「ラブ&ピース！みんなが笑顔になるに決まつてるじゃないか！」

笑顔で堂々とピースサインにして言うと、周りが『しくん』となつた

「お前・・・それ恥ずかしくないのか？」

龍牙も変身解除し、晴夜の肩を叩いて言う。

「お前みたいな、力任せの筋肉バカに言われたくねえよ」

「はあく！何で俺が筋肉バカなんだよ！」

いつも通りに晴夜の肩を掴み何度も揺らす。

「あくもうだから、いちいち喰いつくじゃないの〜」

「だいたいお前だって、科学バカだろが！」

「科学バカ!? 俺は天才科学者の卵だぞ！」

『(自分の天才とか言えるところが凄い・・・)』

プリキュアは晴夜が自分の事を天才だと言るところが凄いと驚くが二人のまだ終わらない痴話喧嘩に笑って見ていた。

「お前ら、お人好しだな・・・でも嫌いじゃねえ・・・」

——『ラブ&ピース』

晴夜の言葉を聞いて、ファントムは笑って消滅した。

そして影水晶が、グレルの影から出て来た。

「あ、あの、みんなゴメン！」

今回の事件の事を責任があると感じ頭を下げて謝る。

「こんなの謝って済む事じゃないけど、でもゴメン！」

「あ、あのね、グレルはすつごく頑張ったんだよ！みんなを助けようって、本当に頑張ったんだ！」

「知ってるよ。見たもん。ね？」

「グレルは勇気あるね！あんな怖い影に向かって行くなんて！」

「で、でも、俺のせいで学校が・・・」

「グレル、学校は勉強する所だ。グレルがたくさん学んでくれて、先生は嬉しいよ」
「先生……」

「二人は根性あるな。将来はプリキュアの妖精になれるかもしれへんで」
「本当に？」

「俺みたいな妖精でも？」

「あたしだって、自分がプリキュアになるだなんて思わなかったよ」

「俺も仮面ライダーになるとは思ってたしな」

「だから君達も——」

「笑顔で頑張ればハッピーになれるよ！」

「出来ない可能性はゼロじゃない。お前らの勇気があれば可能性は広がる！」

「エンエン！俺、プリキュアの妖精になりたいぞ！」

「僕も！」

「一緒になろう！」

その後は、みんなで妖精学校の修復作業を始めた。

プリキュア達だけで問題で、晴人の魔法で元に戻った。

その後、プリキュアパーティは仮面ライダーの彼らを加えてを開いたのだった。そんな中、頭の悪いピンク勢は晴夜に数学や理科について教えてもらったが、言ってること

が複雑過ぎるためピンク勢はプロツサム以外理解不能に終わった。

そして、パーティも終わり、助っ人に来た三人の仮面ライダーとの別れの時間となった。

「どうやら、お別れみたいだな」

「皆さんのおかげで何とか出来ました」

「お前達もこれからの戦いが大変だな」

「けど、困難でも君達なら行けると信じてるよ！」

「ああ、必ずトランプ王国をキンググジコチューから取り戻してみせる！」

晴夜が三人に近づき、手を差し向けると三人と握手を交わす。

「どこの世界にも仮面ライダーがいる。それが全ての世界における勝利の法則だ！」

その一言で四人が笑って応える。

「またなんかあった時は……」

「ええ、その時は……」

「ああ！その時はまた……」

「また、一緒に戦いましょう！」

「その時は俺もだ！」

五人が腕を出し合い五人が拳を当てる。

「じゃあ、またな！」

「頑張れよ！」

「二人も王国を取り戻すために頑張つて！」

晴人は赤い魔法陣を潜り、紘太はクラックのチャックを開き、タケルはゲートを潜り三人は自分達の世界へと帰つていき、姿がなくなる。

「なあ、あの人は俺達とっては先輩ライダーなんだよな……」

「ああ、背中がでかく見えたよ」

数々の修羅場に立ち向かってきた三人は、晴夜と龍牙よりも経験の差なんてものでは測れないものだと感じていた。

「俺達、あの人はなれなかな……」

「あの人はなれねえよ」

晴夜は彼らと同じようになれないと応える。

「俺達には、俺達にしか出来ないものしかならねえよ！」

「ああ、そうだな！なら、俺は俺にしか出来ないものを見つけてトランプ王国を取り戻す！」

「へへ〜ん！最高の答えだな！」

二人が笑い合うと、お互いに手を出し上、下と順番に手を当てると最後腕を上げ気持

ちよくハイタッチをする。

「行くか？」

「おお！相棒！」

そのまま、二人はみんなのところへと戻りこれからの戦いに新たな気持ち向ける。

——そして、これが二人がベストマッチコンビとなった始まりでもあった。

終わり

未来へと繋ぐ結婚式

雨の強いある日、一人の少年が傘を立て歩いてきた。

少年は、初めてこの町に来て雨の中辺りを歩いてきた。すると、路地の曲がり角から同じように傘を持っていた少女とぶつかった。

「ごめん、大丈夫?」

少年は倒れた少女に手を差し伸べて謝る。

「ううん、こっちこそ急いで周りが見えてなかったよ。ごめんなさい!じゃあ、さよなら!」

少女はそう言うと、走って行ってしまった。

「そろそろ戻るか、ん?犬?」

その少女を見送った少年は、凄いスピードで走る白い大きな犬を見かける。

(飼い主を探してるのか?)

犬を見て少年はそう思うと、犬が走って曲がる所から車が出てくるのが見えた。

「!?危ない!」

少年が叫ぶが既に遅く、犬は車に飛ばされてしまった――

「ふあつ^{!!}?」

地下室の作りかけの発明品が置かれている作業机で眠っていた晴夜が目を覚ました。

「なんだ、夢か?」

——さっきのは、全て俺の夢だった?

そう晴夜は思い、眼を覚ます。

そして、次の日。

『ぶたしつぽ亭』の定休日に、マナはあゆみに呼び出された。

「マナ、ちよつと来てみて」

「何? ママ?」

部屋に入ったマナの目に映ったのは、白い、純白のウエディングドレスだった。

「ママ、どうしたのそれ!」

「服を入れ替えようと思ってね、押入れの整理をしてたら出て来たの」

「これ、ママのウエディングドレス?」

「ええ。でも元々は亡くなったおばあちゃんなの」

「おばあちゃんのこと？」

「パパと結婚する時に、ママがどうしてもって言ってね。これを着て式を挙げたんだ」
「へえー……ちよつといい？」

あゆみがマナにウエディングドレスを渡すと鏡に映る自分に重ねる。

「パパ、ママ、これあたしも着たい！ねえ、いいでしょ？」

するとマナは自分もこのウエディングドレスを着たいと言い出す。

「いい、いるのかそう言う人!？」

「いるの？」

二人は相手がいるのかとマナに聞く。

「嫌だなあ、その時が来たらの話ですよ」

「そうか……それは良かった……」

これを聞いた健太郎は気が抜けるようにして椅子に座った。

「でも、こう言うのって流行り廃りもあるし、レースだつてところどころほつれてるし、何よりウエディングドレスって一生に一度しか着られないものなのよ？」

「だからだよ！親子三代の思いを受け継ぐなんて、最高じゃない！」

「お前が着なければ着るがいい」

マナが最高だと言うと、後ろから宗吉が現れる。

「おじいちゃん」

「孫が着てくれたとなれば、お前のおばあちゃんも喜ぶじやろう」

「うん！」

マナは宗吉に着ることを認めてくれて感謝する。

「でも、あたしの未来の相手、誰だろ……」

『勝利の法則は決まった！』

『サンキューマナ！』

『——誰かの為に一生懸命なれる、どんな人でもマナは握手を交わして、多く人と繋がりを作るマナは凄いよ！俺なんかより最高に！』

(……って！なんであたし晴夜君のこと思い浮かべてるの!?)

「おはようございます」

将来の自分の相手を想像していると晴夜がぶたのしっぽ亭にやってきた。

「晴夜君！」

突如晴夜が入ってくると、マナはドキドキする胸を抑える。

「どうしたの？顔を赤いけど？」

「ううん！なんでもない！」

「宗吉さん、直して欲しい物があると言われてきたんですが？」

「おお、すまないね」

宗吉は直して欲しいプロジェクトを晴夜に渡す。

「このプロジェクトかなり古いですけど、何か思い出でも？」

「まあ、そんな所じやよ」

宗吉が言うと、晴夜がマナが持っていたウエディングドレスに目がいく。

「ん？それって、ウエディングドレスか？」

「うん、おばあちゃんとママが着てたんだよ。あたしもね、いつか絶対着るんだ！」

「親子三代でウエディングドレスを受け継ぐって、ロマンチックで最高だな」

「でしよでしよ！」

そして、次の日。

「ウエディングドレス？」

放課後、外の掃除をしていた六花、真琴、龍牙の三人に昨日のウエディングドレスの

話をしていて。

「うん。50年前に仕立てられたとは思えないぐらい真っ白でキラキラしてて・・・もう、

「キョんキョんだったよ」

目を輝かせながらマナはドレスについて思い出す。

「へえ、そんな前からのなんだ。で、マナはそれ着るって訳か?」

「そう!」

「意外ね、マナの将来の夢はてつきり総理大臣かと思っていたのに」

「六花、それはそれ、これはこれ。純白のドレスは乙女の憧れですよ」

予想通り聞いたマナのかわいい部分に満たされながら、六花は小さく笑みを浮かべた。

「ハッ、ウエディングドレスってのは、相手がいないと着られないってのをお忘れじゃありませんか?」

「そうそう」

するとマナ達の話聞いていた二階堂と桃田が会話に入ってきた。

「二階堂君、桃田君、それどう言う意味?」

「お前みたいな珍獣は、貰い手がいないって言ってるの。」

「そんな事言ったら珍獣に失礼ッスよ」

「それもそうか!」

二人がマナをバカにすると、龍牙が二階堂の服を掴む。

「ちよつと！」

同時に真琴も素早くホウキの先を二階堂に向けた。

「人の夢をバカにする事はねえだろ！」

「女の子の夢を笑うなんて許せない！そこに直りなさい！」

「まこぴー、龍牙君、ストップストップ」

マナに止められ龍牙と真琴は二階堂と桃田から離れる。

「男の子つてね、好きな人に構って欲しくて、わざといじわるしたりするのよ」

「「えっ？」」

「そ、そうなんすか？」

「ば、馬鹿！誰がこんなヤツ！」

「好きだからいじわるするなんて意味分からない！好きなら好きってはつきり言ったらどうなのー！」

「まこぴーの言う通りだよ！自分の気持ちははつきり言葉にして伝えないと！」

「はい？」

「だったら、おばあちゃん直伝のおまじないを教えてあげるよ！」

直伝と言うとマナが二階堂の手を握る。

「こうやって、手のひらにハートを描きながらお願いしますと、必ず願いが叶うんだよ」

二階堂の手のひらにハートを描きながら話す。

「・・・で、二階堂君は誰が好きなの？」

「だ、誰でもいいだろ！行くぞ桃田！」

「ああつ、待つて下さいよ！」

二人はゴミ捨てに向かった。

「うわあ、どうした？」

ゴミ捨てから戻ってきた晴夜が急いで走る二人を見て驚く。

「どうしたんだろう二階堂君・・・」

マナのこの一連の言葉に真琴はあきれ、首を振る。

「マナってああいうひとなのよ、昔から・・・」

「え？ 何なに？」

六花の言葉を借りるまでも無い。

——そう、これこそが幸福の王子、マナなのだ。

場所が変わって四葉邸の庭園では、晴夜達ライダー組を除いたメンバーでお茶会をしていた。

「まあ、そんな事がありましたの？」

今日学校であった事をありすに話していた。

「ウエディングドレスを着たいとか言ってる割に、恋愛関係には疎いよね、ウチの生徒会長さんは」

「どうせ疎いですよ」

「それにしても二階堂君は、とんだとぼっちりでしたわね」

「ありすは彼の事知ってるの？」

「はい、和也さんも二階堂君と小学校の時、同級生でしたから」

「そっか」

ありすと和也も小学校は同じだった事を思い出す。

「四人はそんな小学生だったんだビィ？」

テーブルの下でケーキを食べていた妖精達が四人はどんな小学生時代だったのかを聞く。

「今とそんなに変わらないわよ、マナは昔からおせっかい焼きだったし、わたしとありすとかずやんは毎日振り回されっぱなし！」

今と変わらずマナに振り回されていたと話す。

「ケンカの仲裁を買って出たり、捨てられた子犬を拾ってきたり・・・」

「里親が見つからなくて、結局自分で面倒をみたりしてね」

四人はいつも一緒におり、遊んでいたと犬を飼っていたと色々と話してくれた。

「犬を飼ってたランスか？」

「どんな犬シヤル？」

「名前は？」

「マロ！ 体は真つ白で、ふさふさのしつぽがぐるんと丸まってね、あたしが学校から帰つてくると、そのしつぽをブンブン振り回してお出迎えしてくれて」

嬉しそうにかつて飼っていた飼い犬のマロについて説明した。

六花とありすは、マナの表情に何かの気持ち——そう、マロとの別れについての感情が表れないかと心配するような視線を送った。しかし今日の彼女の目には悲しきなど、どこかに置き忘れてきたかのように一片の曇りも見当たらない。

「その犬は今、どうしてるの？」

触れずにいたことについて真琴が聞いてしまう。

「色々あつてね、今はもういないんだ」

「あ……ごめんなさい」

飼い犬マロの結末について悟つた真琴は、先の質問を詫びた。

「いいいいいよ、4年も前の話だしね」

マナは全然気にしている様子はなかった。

「それよりさー！もつと将来の夢とか話そうよ。昔の事じゃなくてさ」

「そうね」

「賛成ですわ」

「うん！」

悲しい話を変えようとこれからの未来について話そうと提案する。

「六花は結婚とか考えた事ないの？」

「あるわけないでしょ、わたしの夢はママみたいな立派なお医者さんになる事だもん。恋愛や結婚なんて、まだ考えられないわ」

「実はわたし、お見合いのお話は何度もいただいているのですが」

「「えっ！」」

「ありすが衝撃の事実を告白し、既にお見合いの経験すらあるというのだ。皆の視線はありすに集中する。」

「どういうことシャル!？」

「ランスも初耳でランス」

「さすがの妖精たちもこれにはビックリの様子。」

「早過ぎでしょ、いくらなんでも！」

「相手はどんな人？」

マナと六花もありすの見合い話に興味しんしん、身を乗り出してありすの次の言葉を待っている。

「色々ですわ、下は五歳から上は六十五歳まで」

ありすは涼しい顔でそう言うと、小首を傾げた。

「で、どうなったの？」

「しちやつたの？お見合い！」

二人がゴクリと唾を飲み込む。

「全てお断りしてます。わたしはまだまだ人として未熟ですし、なによりもこうして皆さんと過ごしている方が幸せで」

「そっか」

「そうだよね、結婚とかまだ早いよね」

中学生には背伸びし過ぎた言葉よって生まれた緊張はほぐれ、マナと真琴からは思わすホツとため息が漏れる。

「二人とも、ありすに先を越されたとか思ったんじゃないの」

六花のたしなめるような一言。こうして四人が揃うと六花は、すすんで冗談を言い、話の盛り上げ役に徹するようなどころがある。

「そんなんじゃないけど」

「でも気になるじゃない、この中で誰が一番早いか」

マナは無邪気な笑顔でそういうと、みんなの顔を見回した。

「わたしはマナだと思っただけ」

六花はさっきのフリのお返しとばかりに、一番近いマナを推す。

「いえいえ、真琴さんという可能性も」

「え？」

突然の言葉に、反応に詰まった真琴は思わず聞き返す。

「あるね、まこぴーはアイドルだし」

「芸能界で気になる人とかいないんですか？」

追い討ちをかけるように六花が今度は真琴に向けておどけてみせると、皆がそれに乗っかり、大げさで芝居がかった興味津々な視線を真琴に送る。

「いません！」

「あ、龍牙さんですか？」

「あ！——それは……」

龍牙の名が出て真琴は顔を真っ赤にして反論できなくなった。これは百点満点の反応だ。

その頃、晴夜と龍牙の地下室では……

「ヘクシヨン！」

龍牙がくしやみをしていた。

「風邪か？」

「バカは、風邪引かないって言うぞ」

「そうそう俺はバカだから風邪は……って！バカってなんだよ！バカって！」

「もう！いちいち喰いつくんじやないの」

「相変わらず、飽きねえなお前らのそれ……」

龍牙が晴夜の肩を揺ると、翼を持った一体のガジェットが現れて龍牙を攻撃し、晴夜から龍牙が離れると晴夜の手に置かれた。

「あつ！何だよそれ？」

「これは、俺が作った発明品『アトミックウイング』ガジェットだ」

晴夜が鳥モチーフのガジェットの名前を言う。

「凄いでしょう！最高でしょう！天才でしょうー！」

いつものフレーズを高々と叫ぶ。

「じゃあ、これ使つて変身できるのか？」

和也がそのガジェットで変身出来るのかと聞く。

「それが、このガジェットに合うボトルが見つからないんだ」

「ダメじゃねえかよ！」

龍牙が言うが、晴夜は黙々と何かを直していた。

「何、直してんだ？」

「ああ、宗吉さんに直して欲しくて頼まれて直してんの」

晴夜が今直しているのは宗吉のプロジェクトだと話す。

「本当、晴夜凄いやな」

「どうしたいきなり？」

「だって、そんなガジェットや武器作ったりできるからよ」

和也がガジェットや武器、更にフルフルビットタンクボトルまで作れる晴夜が凄い
言い出す。

「凄くないよ、父さんが教えられた事をただやってるだけだよ」

「でもよ、晴夜の親父さんってなんで科学者になったんだ？それだけの技術があるなら
発明家じゃねえのか？」

和也が言うのと、プロジェクトを直してた手を止め、晴夜が父親が科学者になった理
由を思い出そうとする。

「そういえば、父さんがなんで科学者になったのか聞いた事・・・あれ、聞いたような気

がしたような……」

「どうした？」

「悪い、忘れちゃった」

「忘れたのかよ！」

二人がガクツとなる時、晴夜は苦笑をして誤魔化す。

その頃、大貝商店街の片隅に今、轟音が鳴り響く。ここは大貝商店街の映画館だった。

「寂しくなるねえ」

「うちらが学生の頃は、ここで何本も映画をみたもんだよ」

「見たね、SF映画の二本立て」

「また一つ明かりが消えちまうねえ」

皆が一様に建物を見上げ、かつての姿、それぞれの記憶の中の姿を思い描く。

「仕方が無いよ、これも時代の流れってやつさ」

町の人達が思い出に浸りながら会話が進むと途中で雨が降り始めた。

「おっ、それじゃ」

雨が降ってきたため町の人達は映画館から離れていく。

——その時、とつぜんやってきた稲光によって映画館のまだらの壁面に巨大な影が浮

かび上がる。照らし出されたのは、さつきその場にいた誰もが気がつかなかったものの姿、それは傾いた映写機の傍らに立つ一人の男の影だ。

それ——いや、そいつはまるで経帷子のように真っ白な髪に、野獣のような体躯を持ち、そのそびえ立つような長身には、不思議な力がみなぎっている。

彼は黒い仮面の奥に隠れている鋭い眼光で町を見渡しながら、静かに語りだした。

「——人間はずるい生き物だ。物珍しいモノにはすぐに飛び付く癖に飽きたらすぐに忘れ去ってしまう。忘れられたモノたちの怒りと悲しみ、今こそ思い知らせてやる！」

その口ぶり、人間全体を指しての口ぶりから察するに、ただ分かるのは、彼が彼の言う人間の身勝手さに憎悪を抱いているということだけだ。

男はどこからか一本の古びたクラリネットを取り出すと、静かにリードに口を付け吹き始めた。悲しげに辺りの空気を揺さぶる短調の調べが辺りに広がり進んでいく。

傾いた映写機がまるで旋律に呼応するように震えだしたかと思うと、遂には浮き上がり、鉛色の空へと吸い込まれるように上昇をはじめたのだ。

それは、この映画館のように、この街のあちこちに捨てられ、忘れ去られた物たちが再び命を得、動き出した瞬間だった。

「わたしはまだ映るぞ……」

走査線が何本か駄目になったTVが言う。

「俺はまだ走れる！」

シヨックアブソーバーが軋み、シートに消えないシミを滲ませた車が言う。

「わしはまだ、時を刻む事が出来る」

一日に何分かズレ、時々目覚ましベルが鳴らない時計が言う。

「わたしたちだつて・・・」

元々顔の無いマネキンが言う。

「「「まだまだ使える！」」」

一つ、また一つと息を吹き返した忘れられたモノ達の声はいつしか、重なり合い、分厚い重唱となつてこの街、大貝町全体を揺らした。

その頃、大貝町から離れた都会の高速道路。

「いやあく、美味かつたー！ー！サンキューな！」

真琴の仕事の都合が空き龍牙は食事をご馳走になり、一緒に大貝町へと向かつていた。

「好きつて・・・言うタイミングを逃した・・・」

「うん？どうした、何一人でぶつぶつって言つてんだ？」

「えっ？んん！何でもない！」

龍牙は真琴の思いに気づかず、車は大貝町に到着しようとしていた。

「はっ！」

ゆるやかなカーブをいくつも越え差し掛かった頃、DBは慌ててハンドルを切って車を止めた。どこからか飛んできた落下物を避けるためだ。

「大丈夫？真琴！龍牙！」

DBは二人に声をかけるが、二人は上の方を見上げていた。

「ダビィ、あれ！」

「何？」

真琴に近づいた時、空の一点を指さした。

そこにはなんと、街中から浮かび上がった様々なガラクタ達か、吹き溜まりに集まる枯れ落ち葉のように、時に長く棚引き、時に密集し、その大きさを次第に拡大していた。

「一体何が起こってんだ？」

「ダビィ！龍牙！急ごう！」

「ええ！二人とも早く乗って！」

三人は急いで車に乗り込む。

一方、マナの部屋。

ここにも、どこからともなくあのクラリネットの悲しげな音色が聞こえてくる。

「はっ！ シャルル？」

かすかな震えるような木管の旋律に気がついたシャルルは目を覚ました。

すると、ウエディングドレスが微かな光を帯び、ヒラリはためいたかと思うと、まるでどこかに飛び去ろうとする。

「マナ！ マナってば！」

慌てたシャルルは急いで隣で寝ていたマナを揺さぶり起こす。

「くすぐりたいよ、シャルル」

「ねぼけてる場合じゃないシャル、ウエディングドレスが！」

シャルルは格闘のすえ、どうにかマナが起きると次の瞬間、服掛けから飛び上がったのだ。

「えっ？ あっ！ 待ちなさい！ あなたはあたしが着るんだから！」

反射的に飛び起きるとロフトから駆け降り、ウエディングドレスに飛び付いた。そのまま持ち主を振り切つて飛び去ろうとするウエディングドレスをしつかり抱きかかえて逃がさない。

「うあっ！ 出てっちやダメよ！」

ウエディングドレスにさえ、説得しようとする。

すると、いったんはマナに抵抗するかのように激しく身悶えしていたドレスだったが、ドレスから光を失うとやがておとなしくなった。

勿論、晴夜の地下室でも同じ現象が起きていた。

「待って！」

部屋中の道具や材料がこちらも急に浮かび上がり混乱していた。

「頼むからお前から逃げるな！」

晴夜は急いで掴もうとすると、机で直していたプロジェクターも浮かび上がった。

「あーそれはダメ！」

道具を置き、急いでプロジェクターを抑えようとするが、プロジェクターは反発し、晴夜から離れようとする。

「ダメー！これを直して待っている人がいるから！頼む！」

収まって欲しいと願うと、プロジェクターから光が無くなり、プロジェクターからの反発がなくなった。

「一体何だよこれ？」

そう呟くと上の方から音が聞こえ、晴夜は急いで地下室を出て外の様子を見に行く。

「これは……」

外の様子を見てガラクタが集まっているのを見ると晴夜はビルドフォンを取り出した。

『ビルドチェンジ!』

愛用のバイク『マシンビルダー』へと変わりヘルメットを出現させると、マシンビルダーに乗り込み急いで集まっている場所へと向かう。

その頃、ガラクタの集まった場所では多くの人が集まっていた。

「六花! かずやん! 大丈夫?」

六花と和也を見つけたマナが声を掛ける。

「いったい何事?」

「何が起こってるんだ?」

「あれは?」

上を見ると、集められたガラクタが巨大なクジラのような船になって宙に浮いていた。

「でっかいクジラケル」

ラケルが思わず叫ぶ。

——そう、ガラクタ達は夜空を泳ぐ邪悪なクジラの姿となって現れたのだ。

「わが名はマシユー」

空の高みをゆったりと泳ぐ漆黒のクジラの上に立つ人影がマシユーと自ら名乗り、月明かりを背後に語り始めた。

「オモイデの国の王なり！」

「オモイデの国？」

「そう、そこはお前たちに忘れられ、捨てられたモノたちの暮らす場所。マナ・・・お前を迎えに来た」

「えっ！」

マナは、はるか上空、遠くに見えるその男のシルエットにはもちろん見覚えなんてない。

「マナの知り合い？」

「いつ会ったんだよ？」

男の語り口では誰もがそう思ってしまう。六花も不思議そうにマナに聞いた。

「ううん！あのー！すいません！あなたと会ったことありましたっけ？」

とつさにマナが問い返す。どんな相手にも態度を変えない、マナらしさがまたも炸裂した。

「覚えていないというのか？ならば・・・お前たちもオモイデの中で暮らすがいい！時が止まり、静寂だけが支配する暗黒の世界で！」

覚えていないと言うのか、確かにヤツはそう言った。

語気を荒げ、ことさらマナとの関係性を強調する。

「マナ！」

「いったい何事じゃ！」

その時、外の騒ぎを聞きつけてパパとおじいちゃんが家から飛び出してきた。

「パパ、ママ、おじいちゃん。みんな来ちゃダメ！」

すると、クジラ型飛行船の内部から登場したのは大量のビデオカメラ達、それ一体一体から不思議な光線がほとばしり出てきた。それを浴びた街のみんなは見る見るうちにカメラの中に吸い込まれ、消されてしまった。

「どうなってるの？」

「おい、てめえ！何をした！」

次々と謎の光に吸い込まれ、消されていく人々を横目にマナが言う。周りから人々が居なくなり、あたりは不気味な静寂に覆い尽くされた。

「今すぐやめるシャル！」

まわりの状況をただ見ていることに煮やしたシャルルは思わず叫んだ。

「フッ！ さわぐ必要はない。これを見ろ！」

マシユーが指し示した先にはあの古めかしい映写機によって投影された映像が見て取れた、それはどこかに寝かされている赤ん坊の姿。

——誰だろう。そこにはクセっ毛の元気な女の子の姿があった。

「あれは・・・あたしだ」

それはマナ、彼女自身の姿だった。

「そう、これは彼らのオモイデ。人々はわすれられたモノたちの記憶と共にこのフィルムの中で生き続けるのだ。永遠にな」

映し出されたオモイデは、マナのパパのものらしい。

「あっ」

マシユーのするどい眼光が、再びマナを捉えた。

「そして次はきさまの番だ、相田マナ！」

街の人々を飲み込んだのと同じ不思議な光線がマナを襲う。

「マナ！」

「わあ!!？」

光線がマナに襲い掛かるとしたその時、マシンビルダーが現れた。

そして、ドリルクラッシュャーを取り出しカメラに向かって放つと全てを撃ち落とし、

ヘルメットを外しマナに駆け寄る。

「大丈夫か？ マナ！」

「晴夜君！」

「なんだ、あの男……」

マシユーが突然現れた晴夜を睨みつける。

すると、今度は四葉家特注のリムジンが現れると、リムジンからありすが現れた。

「みなさん、おケガはありませんか？」

「ありす！」

「みんな、大丈夫？」

そこにもう一台、車が止まる。DBと一緒に真琴と龍牙もどうやらこの危機を知り、駆けつけたようだ。

「まこぴー！ 龍牙君！」

「何だ、こいつらは」

どうやらマシユーが知っているのはマナだけらしく、他の連中については知らない用だった。

「どこのどなたか存じませんが」

「罪もない人達をまきこむなんて」

「てめえら、心火を燃やしてぶっ潰す！」

「絶対ゆるさねえ！覚悟できてるような！」

「みんな、行くよ！」

『うん！（おお！）』

「さあ、実験を始めようか！」

戦う前のフリーズを言うのとドライバーを装着し、三人がボトルを取り出し差し込む。四人はコミュニケーションにラビーズをセットする。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

『ウエイクアップ！クローズドラゴン！』

『ロボットゼリー！』

三人はボトルとスクラッシュゼリーを差し込み、ドライバーのレバーを回し、下ろした。

するとランナーとビーカーが出現した。

『Are you ready?』

『変身！』

『プリキュア！ラブリンク！』

七人が叫ぶと晴夜達の身体にスナックプライドビルダーとビーカーから形成された

アーマーが装着され仮面ライダーへ、マナ達の身体が光に包まれ、光から現れると四人はプリキュアへと変身した。

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ！』

『Wake up burning！Get CROSS—Z DRAGON！Ye a h—』

『潰れる！流れる！溢れ出る！ロボットイングリス！ブラア！』

『みなぎる愛！キュアハート！』

『英知の光！キュアダイヤモンド！』

『陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！』

『勇気の刃！キュアソード！』

『「響け！愛の鼓動！ドキドキプリキュア！」』

「愛を無くしたオモイデの王様！このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻して見せる！」

七人が変身を完了した。

「この俺の邪魔をしようと言うのだな。仕方が無い。出てこい、忘れられしモノたちよ」
マシユウが気合を込めると、クジラ型飛行船の船体の表面を形成していた忘れられたモノ達の一部が音を立てて剥がれ、中から三体の人形が登場した。

「ふんっ！ パープルバギー！」

「へっへっへっへっ！ シルバークロック！」

「フフ、マネキンカーマイン！」

現れた三体を見て、七人は構える。

「さあ、あいつらをたたきのめせ！」

両者は一斉に相手に向かって走り出した。

マネキンカーマインは頭上高く舞い上がり、全身を回転させ威力を増したドリルキックで七人に向けてを貫こうとする。

しかし、七人は後ろへジャンプし攻撃をかわし、マネキンカーマインは勢い良く地面に激突、足元に巨大な穴を穿った。

「それぞれそれぞれっ！」

次に、シルバークロックは自身の尖ったブーツを短剣がわりに、近くにいたビルドとハートに猛スピードの突きを仕掛ける。

ビルドがドリルクラッシュャーを出現させ、短剣を防ぐ。

その隙にハートも前後左右への素早いウィービングによってクロックに的を絞らせない。すると、シルバークロックの後ろから近づいたキュアロゼッタが腕を取り、地面へと豪快に投げ技を放った。

「これ、年寄りを大切にせんか！」

シルバークロックは、地面へと真つ逆さまに落下し土煙が天高く舞い上がり、グリスタインブレイカーにボトルを差し込む。

『シングル！シングルフィンッシュ！』

グリスタインから放たれた砲撃が命中し、シルバークロックを破壊した。

さらに、クローズとキュアソードがマネキンカーマインと交戦していた。

「こいつ……」

「さあ、空けるよー」

マネキンがクローズをドリルで貫こうとする。

「そいつはどうか？」

その時、ソードがドロップキックを放つ、見事にマネキンの胸部に命中し、敵は派手に後方へと吹き飛ばされた。

しかし、その直後のソードの隙を狙っていた者がいた。攻撃のチャンスをうかがっていたパープルバギーがキュアソードに突進をかける、そこに割って入ったのはダイヤモンドだ。

「きらめきなさい！トウインクルダイヤモンド！」

バギーはダイヤモンドの凍てつく波動をかわそうと周囲に円を描くように逃げま

わった。

「はははは！どこ狙ってやがる！」

しかし、氷の輪はダイヤモンドを中心に大きく円を描くようにつながり、逃げ場を失ったバギーは転倒し壁に激突するとバラバラになった。

しかしそこに、またしてもあのマシユウの奏でるクラリネットの音色が響き渡り地面に倒れ、バラバラになっていた忘れられたモノたちが再び動き出したかと思うと、次の瞬間には組みあがり、元の姿へと戻ってしまった。

「へへへへへ」

「再生した！」

不敵な笑みを浮かべ、元通りの姿となったバギーに思わず驚きの声を漏らす。

「こつちもかよ！」

マネキンカーマイン、シルバークロックの残骸も再生し元どおりになっていた。

「きらめけ、ホーリーソード！」

『ヒツパレー！ヒツパレー！ミリオンヒット！』

「オリアアアアアアア！」

クローズとソードが放つ技を食らい三体を再び粉碎する。しかし、それはクラリネットの音色と共に、すぐに元の姿へと再生をはじめてしまう。

「マジかよ……」

「駄目か……」

「このままじゃキリがありませんわ」

「こつちが不利になるぜ……」

「きつと、あのクラリネットが人形をあやつっているのよ」

ダイヤモンドが、マシユーに目を向けクラリネットの方を指し言った。

「つまり、あれを壊せば人形は止まる」

「やりますか!」

『うん（おお!）!』

マナ達の作戦は人形たちに再生の力を与えている元凶、クラリネットを潰し、まずは彼らの再生能力を奪うというもの、他の仲間達もすぐさまそれに同意する。

『Ready go!』

三人がドライバーのレバーを操作し高く飛躍すると、四人は手を上へと掲げて叫ぶ。

「「「ラブハートアロー!」」」

ハート達四人がラブハートアローを出現させる。

それと同時にビルド達三人はマシユーに向かってライダーキックの態勢に入る。

『ボルテックファイニッシュ!』

『ドラゴニックファイニッシュ！』

『スクラップファイニッシュ！』

三人がライダーキックをマシユーに放った。

「プリキュア！ラブリーフォースアロー！」

ラブハートアローの弓を大きく展開させ、台尻部分の引き金を引き絞り、前面にハート形のエネルギー体を生成される。

そして、ラブリーフォースアローをマシユーに向けて放った。

ラブリーフォースアローが決まるとライダーキックを放った三人は地面へと着地した。

「やりましたー！」

「どうだ！やってやったぜー！」

敵を仕留めた手ごたえを感じ思わずそう叫んだ。

——しかし、霧が晴れゆくと勝利の笑顔はすぐさまそれとは別の色、落胆の色によって塗り替えられる事となった。

『あっ！』

ライダーキックとラブリーフォースアローの攻撃を受けとめ、なおも余力を残したマシユーの姿を見せる。

「この程度の力ではおれをつらぬくことは出来ん！」

「引くくらいに凶太い奴だな」

「次はこちらから行くぞ！ イレブンファンク！」

力を込めると体中から光線を発し、七人必殺の一撃を繰り出した、上空で一本のエネルギーの支流となり、それはまるで生き物のように襲いかかり、土煙が吹き上がる。

土煙が晴れた時、そこにあつたのは巨大なクレーター。マシユーはクレーターの縁へと着地すると、満足げに深手を負い変身の解けた七人を見下ろした。

『ううっ！』

「なんだよ……この強さ……」

無力さに悔しさを滲ませながらマシユーを見つめる事しか出来ない。

「何も出来なかつた……」

「わたしたちが、まるで歯が立たないなんて……！」

真琴が言う、マナは痛む身体を引きずるようにしてどうにか姿勢をマシユーの方へと向けた。

「まだ立ち向かうのか？ 勝てる見込みも無いのに……」

「あきらめるわけないでしょ。パパやママ、おじいちゃん。みんなを返してもらうまでは……うう……」

「マナー！」

震える膝で立ち上がろうとしていたマナを支えようと晴夜が庇う。

「……ありがとう」

マナは顔を赤くしてお礼を言う、そんな姿を見てマシユーが晴夜を睨む。

そこに、聞き覚えのあるエンジン音が近づいてくる。それは――

「ん？」

次の瞬間、辺りに土煙が巻き上がりプリキュア達を覆い隠す。セバスチャンの運転するリムジンだ。煙幕を張り逃げるチャンスを与えようというつもりなのだ。

「脱出しましょう！ さあ早く！」

「セバスチャン！」

しかし、イレブンファングのエネルギーの脈流がありすのリムジンに襲いかかる。爆風と衝撃波に吹き飛ばされたセバスチャンをビデオカメラが襲う。

「セバスチャン！」

セバスチャンはマシユーの光線に絡め取られ、心配するありすの声も虚しくオモイデの国へと送られてしまった。

「あわてなくてもいい。この世界の人間たちは一人残らずオモイデの中に閉じ込めるのだから。そして次はお前達の番だ」

背後からそう語りかけるマシユーに振り返り言った。

「あたしたちは、絶対に諦めたりしない」

「それに、まだ実験は終わっていない！」

二人が叫ぶと他の五人の目からも光は失ってなかった。

「オモイデの中で永遠に暮らすがいい！」

マシユーがそう言った次の瞬間、集結したカメラが七人に向かって一斉に光線を照射し、

跡かたもなく姿を消した。

「フツッ！これでいい。さあ行こうこの世の全てを最高のオモイデで包み込むために」

マシユーと部下の人形達は巨大なクジラ型飛行船に乗り込み、この世のすべての人間達をオモイデの国へと送るべく、行動を開始した。

「マナー！」

クレーターのガレキから、吸い込まれなかったシャルル達が出て来る。

「行っちゃったビィ……」

「みんな吸い込まれて、僕達、これからどうすればいいケル!?」

「ありす〜！」

ラケルとランスが泣きそうな顔になる。

「泣いてもダメシャル！あたし達の力で、マナ達を取り戻すしかないシャル！」

「体に似合わず随分と勇ましいね」

「誰だビィ！」

シャルル達の前に現れたのは、頭に紫のバンダナを身につけた謎の妖精だった。

「——ガラクタ？」

「そう。長い人間間に愛され、使われてきた時計やら人形やらがいつの間にかホコリを被って忘れられ、修理される事も無いまま捨てられた。そう言う物の怒りや悲しみが凝り固まったのがあの連中さ」

シャルル達は謎の妖精から、マシュー達の事についての話を聞く。

「ソイツらが、何でマナ達を？」

「奴らは人間を思い出の世界に閉じ込めて、未来を奪おうとしてるのさ」

「そんなの許せないシャル！マナ達にはまだまだ輝かしい未来が待ってるシャルよ！それを奪う権利なんて、誰にも無いシャル！」

「シャルルの言う通りケル！」

「僕達の手で、ありす達を取り戻すでランス〜！」

「なら方法は一つ。あの子達は思い出と共に映画のフィルムの中に閉じ込められてる。それを奪い返して解放するんだね。」

「ちよつと待つビィ。どうしてそこまで知ってるビィ？あなた一体何者なんだビィ！」

「あたしの名はベベル。あのマシユーってヤツとは古い知り合いでね。」

あたしはただ、アイツが間違つた道に進むのを止めたいだけさ」

その妖精はベベルと名乗り、マシユーを止めたいと話した。

「だったら尚更シャル！あのクジラに突入して、マナ達を救い出すシャル！」

『くっくく』

シャルルはマナ達を助けたいというと、後ろから謎の音声が聞こえ振り向いた。

「なにケル？」

後ろから現れたのは晴夜の最新の発明品、アトミックウイングガジェットだった。

「これって、まさか晴夜が作った発明？一緒に来てくれるシャルか？」

アトミックウイングが首を縦に振り頷いた。シャルル達は晴夜やマナ達を救うために、船に突入する事を決めたのだった。

その頃、どこから流れる風のなかに優しい声が聞こえた。

「お目覚めかい？」

「ここは・・・？」

マナは自分の部屋で目を覚ます。

「あんたの部屋だよ。オムライスを食べながらコックリコックリやってたんで、運んで来てあげたんだ」

「そっか、あれは夢だったのか・・・」

「夢？」

「大きなクジラが出て来てね、パパやママやおじいちゃん達を映画の中に閉じ込めちゃうの」

「随分とはつきりしてる夢だね。でもいい加減起きないと、今度は夜に寝られなくなるよ」

「お、おばあちゃん!？」

そこにいたのは、マナが小学生の頃に亡くなったハズのマナの祖母——坂東いすずだった。

「失礼な子だねえ。人の顔見て驚くだなんて」

「だって、あたしのおばあちゃんはずっと前に天国に行ったはず・・・!」

「いつまで寝ぼけてんだい。顔でも洗つといで。あたしはお夕飯の支度をしに行くよ」

自分の姿を確かめるために鏡を見ると、小学生の姿だった。

机の上に置いてあったノートには自分の名前と『4年3組』と学年が書かれていた。

——つまりマナの思い出の世界は、今から4年前の世界だった。

「ただいまー」

「ママ……」

あゆみの声が聞こえ、すぐさま下に降りる。

「ママ！ママ覚えてるでしょ！あたし達映画の中に——！」

「マナ、荷物キツチンに運んでくれる？」

買い物帰りのあゆみと一緒にかけたの愛犬のマロが入って来る。

「マロー！」

マナはマロの姿を見て、抱きしめる。

「ちよつとマナ、どうしたの？」

「だってマロが生きてるんだよ！ズルいよこんなの……！嬉しいに決まってるじゃない……！」

マナはマロが生きていることに喜びながら涙を流す。

次の日、学校へ行く前に六花の家へ向かうが、別の人が住んでおり、学校では六花と

あります、和也を知っている者は誰一人いなかった。

(みんなはどこにいるんだろ・・・？早く、元の世界に戻る方法を探さないと)

急いでみんなを見つけ元の世界に戻らなければならぬと感じる。

『ぶたのしつぽ亭』へと帰宅するといえずが花に水をやっていると、マロが立ってワンワンと鳴いた。

「帰って来たようだね」

「ただいま！」

「お帰り」

「ああもうマロ！かわいいよマロ！」

マナは一瞬ためらったが、すぐに抱きしめた。

「その子はマナの足音が分かるみたいだよ」

「そうなの？マロはおりこうだね」

そう言うといえずはマロの頭を撫でる。

(おばあちゃん・・・いつも優しいおばあちゃん、それに大好きなマロ)

もう少し・・・一緒にいていいよね・・・？せつかくまた会えたんだもん)

まだこの世界に残りたいという気持ちだが、マナが抱いていた先までの気持ちよりも強くなった。

その頃、クジラの艦内の中ではマシユーがマナの思い出を見ていた。

「そうだ。そのまま思い出の中で暮らすがいい。そうすれば、辛い事や悲しい事は全て忘れ、永遠に笑顔で暮らせるようになる」

マシユーが言うのと、もう一つ気になっていた別の思い出の方に目を向ける。

その思い出の方では、一人の少年が目を覚まして辺りを見回す。

「……は……」

見覚えのある部屋の景色を見て少年は驚いて髪を抑える。

「どうした？何か珍しいものがあつたのか？」

少年の前に男性が現れ、少年の癖で髪を抑える事を知っていた。

「……晴夜」

「そんな……父さんなんで？」

ここは、晴夜の思い出の中、部屋のカレンダーを見ると4年前になっていることに気づき、姿も10歳の姿になっていた。

そして目の前には、トランプ王国で、今は行方不明の父——桐ヶ谷拓人がいた。

「どうして……（あの時、カメラに吸い込まれて、それで……）」

マシューに敗れて吸い込まれてからの記憶は覚えていたが、そこから後のことが全然覚えてない。

「それより、早く学校に行かないと遅刻するぞ」

「うん……（みんな、大丈夫か……）」

ずっと会いたいと思っていた父と、ようやく会えた。

——だが、晴夜はみんなの事が気になってしょうがなかった。

それを見ていたマシューは、必要に晴夜の思い出を見ていた。

「あの男……」

「前方に明かりが見えます」

マネキンがマシューに伝える。

「また人間が残っていたのか。あのタワーに向かえ！」

タワーに明かりが見え、船はそこへと向かった。

その頃、四葉タワーではシャルル達妖精が突入準備に入っていた。

「来たシャル！」

船が来たのを確認し、屋上に向かう。

「ダビィ！」

「ホントにその格好で行くケル？」

「私達のスピードじゃあのクジラに追いつけないしね」

屋上にはハン グライダーを装着していたDBがおり、妖精達がDBの服の中に入り、その横にアトミックウイングがいた。

「いいわね、行くわよ！」

タワーから飛び降り、グライダーの翼を展開させて風の力を利用し船へと飛び、船の上へと着地し、船内の中へと侵入した。

「罠だったか。まあいい。お前達は忍び込んだネズミを捕えろ！一匹残らずだ！」

「承知した」

「チツ、メンドクセーな！」

「お任せを」

クロツク達三体はシャルル達を捕えようと命を受け、捕えに向かう。

「見つかったシャル！」

警報が鳴る中を急いで移動する。

その途中で壁からマネキンが出て来て立ちはだかる。

するとアトミックウイングが前に出て、マネキンに攻撃する。

「流石、晴夜の発明品ケル！」

今度は後ろからマネキンが出現し後ろから襲ってきたが、DBの格闘術でマネキンを破壊した。

「凄いシャル〜！」

「これぐらいはね。行くわよ！」

マネキンを全て排除し、さらに奥へと向かう。

そして、シャルル達はフィルム保管庫へと到着した。

「これは？」

「映画のフィルムさ。この中に町の人の思い出が閉じ込められてるんだ」

「じゃあ、マナ達もこの中に……!?？」

「手分けして探すケル！」

保管庫へと到着し、手分けしてマナ達のフィルムを探す。

「見つけたわ！真琴と龍牙のよ！」

「こつちも発見でランス〜」

「僕も！」

ラケルとランスは六花とあります、和也の思い出を見つめる。

「マナと晴夜の思い出が見つからないシャル！」

——だが、晴夜とマナの思い出だけが見つからなかった。

「探し物はこれかな？」

「あれは！」

「マナの思い出！」

三体が現れ、シルバークロックが持ってたのはマナの思い出だった。

シャルル達はあっさりと捕まつて捕虜となり、マシユーのいるブリッジに連行された。

「晴夜の思い出はどこシャル！」

「このことか？」

なんと、晴夜の思い出はマシユーの手の中に握られていた。

「久しぶりだな、ベベル」

「マシユー、お前も元気そうじゃないか」

「フィルムを取り戻すためにわざわざ乗り込んで来るとは、相変わらず無茶な奴だ」

「いい子だからマナとあの少年のフィルムを返しな」

「捕虜の分際でよく言う」

フィルムを入れて映写機を回すと、幼い姿のマナと晴夜が映った。

「マナ！あたしの声が聞こえないシャル!?？早く目を覚ますシャル！」

「無駄だ。彼女達は完全に思い出に囚われている。見ろ、この幸せそうな顔を」

他にも六花、ありす、真琴、龍牙、和也が映し出された。

「六花！」

「ありす〜かずやん〜！」

「真琴・・・龍牙・・・！」

映し出された映像では五人とも笑顔だった。

「辛い現実を忘れ、いつまでも思い出の中にいられるとしたら、これ程幸せな事は無いだろう？」

マシユーが映像を見せ、全員幸せだと言うが：

「——だが、あの男だけ・・・」

映像に映る晴夜だけが、何か楽しいというか違和感があるような顔をしていた。

「何故だ！この男はなぜ笑顔ではない！」

「時間が止まったお前には分からないかもしれないね」

「何っ？」

「あの子達には無限の可能性が広がっているんだ！彼女達の未来を奪う権利なんて、お前には無いよ！」

「黙れ！」

マシユーが叫ぶとアトミックウイングが現れ、マシユー達に攻撃する。その隙にダビイが妖精の姿に戻るとロープがほどけ、その隙にベベルがマシユーの顔に飛びついた。

「時間が無い！アンタ達はこのスクリーンの中に飛び込みな！」

「え!?でも・・・！」

「早くお行き！」

ベベルに促され、シャルル達は七人がいるスクリーンの中に入った。

「何っ!?」

「思い出の中に入っちゃったじゃん！」

「そんな馬鹿な・・・！」

「奴らに何が出来ると言うんだ！」

「あの子達はきつと思ひ出の中から連れ出してくれる！お前の野望もこれで終わりだよ！

！
特にあそこの彼は自分で抜け出すハズさ！」

ベベルはスクリーンへと飛び込んだシャルル達は思ひ出の世界から戻ってくると信じ、そして、特に晴夜は自分の力で戻ってくると信じている。

「マナ……」

「えっ?」

「マナだけが、人間達だけが未来へ行く事は許さない!二度と現実の世界に戻りたくないようなようにしてくれよ!」

「マシュー……」

一方、その晴夜の思い出の中は父と居られたこの4年前の世界。いつも変わらず父親の研究や製作を隣で見て、出来たら触らせてくれた。

「すごい!やっぱり父さんは凄いよ!」

思い出の中とはいえ、やはり拓人の技術は晴夜の何歩も先を超える技術だと改めて確信した。

「お前も頑張ればこれくらい出来る筈だ」

拓人が晴夜の頭を撫でながら言う。

「その時は、父さんに見せてくれよ」

「……う、うん」

その言葉を聞いて一気に元気を失くすように頷く。

それから、しばらく経ち夏休みとなり、親戚が住んでる大貝町へと里帰りのため来ていた。

着いたら中を巡り、自分が4年後に使っていた地下室の扉を見つけると、手を伸ばし扉を開ける。

だが、中は荒れ放題の物置きで何もなかった。

「そうだよな……まだいるわけねえよな」

いつも扉を開けると中には龍牙や和也やマナ達がいる。

——やはり、ここは過去の世界と実感させられる。

そして、大人達がリビングへと向かい外を見ながら座り込む。

「晴夜、どうした。先からずっとから暗い顔で……」

「えっ? ううん! なんでもないよ」

何でもないと言いつつ、誤魔化す。

「ごめんちよつと、外行ってくる」

拓人に外に行ってくる言いつつ傘を持って出ていった。

外は雨が降るなか晴夜は町を歩いてこれから待っている事を紛らわそうとする。

(あと数日経ったら、父さんは俺の前から消えてしまう……)

傘を握り締めながら呟く。

そう、あと数日経った頃には拓人はトランプ王国へと飛ばされ、会うことが出来なくなる。それを知っている晴夜にとって辛い現実が待っていた。

同時刻、ぶたのしつぽ亭では臨時休業の看板が貼られていた。

「えっ!? おばあちゃんが!?」

「店の前でつまずいてね、病院に連れて行ったら足の骨が折れてるって言われて入院する事になったんだ」

健太郎の口からいすが骨折して入院したと告げられる。

「そんな・・・あたしも病院行って来る!」

「ママとおじいちゃんが付き添ってるから心配無いよ!」

「だけど・・・!」

「じゃあ、大貝病院の605号室だ! 気をつけて行くんだよ!」

「はい!」

傘を持っていすが入院している病院へ行こうとする。

「マロ! 今はダメ! 後でお散歩に連れてってあげるから!」

マロに後で散歩に連れて行く事を約束し、駆け足で病院に向かった。

雨が降る中傘をさしながら急いで祖父のいる病院へと向かう。

そして、十字路を曲がろうとする。

「!?」

曲がろうとすると傘をさしていた少年にぶつかってしまい二人とも尻餅をつく。

「ごめんなさい!大丈夫?」

少年はすぐに起き上がりマナに近づき手を差し出す。

「こちらこそ、ごめんな……!?」

少年の手を握り起き上がろうとすると、その顔を見て、何かを感じる。

「……晴夜君」

「もしかして、マナ……なのか?」

ぶつかったのは、偶然この日に親と大貝町に来ていた晴夜だった。

その様子をブリッジで見えていたマシユも驚いていた。

「なぜ、あの男の思い出とマナの思い出が!」

まさか、二人の思い出が重なるとは思わず、ひどく驚いた。

「どうやらあの子の過去をちゃんと調べなかったお前の失敗だな」

「だが、どの道変わらん!」

再会したマナと晴夜は祖父のいすずが倒れたと事情を聞き、一緒に大貝病院へと向かう。

「大げさなんだよマナは」

「でもおばあちゃん、最近転んだりケガしてばかりじゃない。あたし心配で・・・」

「マナの言う通りよ」

「お前もいつまでも若くないんだから気をつけないな」

「ずっと元気でいてよ。あたしが結婚するまで長生きしてよ・・・」

「モチのロンさ。約束するよ」

心配して抱き着いたマナの頭を優しく撫でる。

「一緒に来た君はマナの友達？それとも彼氏？」

「えっ!?」

するといすずがマナの隣にいる少年のことについて聞いた。

「えつとく・・・桐ヶ谷晴夜です。その・・・どうも・・・」

一緒に来た晴夜が挨拶して、しばらくして病院を後にした。

「マナ！晴夜！」

「シャルル！」

家に戻る途中でシャルルと再会する。

「良かった。もう会えないかと思ったよ」

「マナ、マナは帰らないシャルか？」

「シャルル……」

「現実の世界はとんでもない事になってるシャル！さあ、一緒に帰るシャル！」
「だけど……あたし、マロやおばあちゃんにお別れ言わないと！」

マナはそう言うのと駆け足で家へと向かう。

「別れ……父さん」

晴夜は『別れ』と聞くと思い出す。

——この世界から元の世界に戻る……それは拓人との別れでもある。

その頃、マナが家に着くと、前にパトカーが停まっていた。

「何……？」

急いで家の中へと入る。

「パパ、どうしたの？」

「……マナ、落ち着いて聞いて」

健太郎は暗い表情でマナに何かを告げようとする。

「実は、マロが逃げ出したんだ」

「えっ?」

「雨でよく見えなかったのかもしれないけど、横断歩道の真ん中で車にぶつかって……」
家の中には、冷たくなったマロが横たわっていた。

「すまない、パパがちゃんとマロを見て無かったから……」

健太郎が謝っていると晴夜もぶたのしっぽ亭へ到着し、犬小屋があったことに気づく。

「……切れてる。自力で切ったのか?」

マロの犬小屋のロープが切れたのを見て、自力でやったと察する。

「違うよ……」

「マナ……」

マナの声が聞こえ晴夜は中へと入ると横たわるマロの姿を見た。

(あの犬!? 確か4年前に車に轢かれた……)

晴夜は4年前に来た時、あの犬が車に轢かれたのをその場で見た事を思い出した。

そして、それがマナが飼っていた犬だと知り、衝撃が走った。

「あたしが……あたしがもつとマロを……」

『これで分かっただろう。未来には悲しい出来事がいっぱい待ち受けている。僕は、君

にこんな辛い思いをさせたく無いんだ』

「この声は……まさか……!?？」

『さあ、このままずっと思い出の中で暮らそう。嫌な事や、辛い事は何もかも忘れて。』

永遠に』

マナはマシユーのささやきに頷き、泣き崩れた。

「ダメシャル！そっちに行っちゃ行けないシャル！マナー！」

「戻ってこい！マナー！……なっ！うわああああ！」

「晴夜——！」

シャルルの叫びは届かず、マナの物語はここで終わり、晴夜は自分のまだ終わらない物語へと戻ってしまう。

その頃、ブリッジで物語が終わるのを見たマシユーが軽く拍手をした。

「これでいい。マナは永遠に僕の虜だ」

「本当にこれが、お前の選んだ結末なのかい？マナはこんな事ですまなくような子じゃない。いつも前向きで、周りを元気にするひまわりみたいな子だからね。きつと立ち直って戻って来る。あの子を慕う仲間もいるしね」

ベベルの言動は、まるで昔からマナの事を知っているようだった。

「仲間・・・？」

「ああそうさ。マナ達はきつとお前の思い通りにはならないよ」

「うるさい！」

マシユーがそう叫び、六花、ありす、和也、真琴、龍牙を映す。

「マネキンカーマイン、パープルバギー、シルバークロック、コイツらを始末して来い」

「だけどコイツら思い出の中なんだろう？放っておきやいいじゃねーか」

「奴らはプリキュアとライダーだ。万が一の事がある」

「人使いが荒いのう」

「やれやれだぜ！」

マシユーの命を受け三体は他のみんなの思い出の中に入って行った。

六花の思い出の世界——それはピアノの発表会の日だった。

（年に一度のピアノの発表会。いつも忙しいパパもママも、この日だけは、一緒にピアノを聞きに来てくれる）

「今日は六花の好きな食べ物、何でも食べさせてあげるよ。何がいい？」

「オムライス！」

「オムライスだな。よーし！それじゃパパが知ってる最高の洋食屋さん連れてってや

ろう」

「うん！（楽しい……。けれど、何か足りない気がする）」

ありすの思い出の世界——それは、初めて父の星児と出かけた日だった。

「くまちゃん、今日は何の日ですか？」

『今日はありすちゃんとパパの、初めてのお出かけの日だよ』

「それは楽しみですな」

くまのぬいぐるみに話しかけると父親の星児が車のドアの前に現れた。

「さっ、ありす。今日はお前の社交界デビューの日だ。素敵なレディになれるかな？」

「はい！お父様！」

車の窓を叩き、ドアを開ける。

「そんなものは置いておきなさい」

「はい、お父様」

ぬいぐるみを車の中に置き、と歩く。

（お父様と初めてのお出かけ。嬉しいハズなのに、何か足りない……。）

和也の思い出の世界——それは親子と一緒に出かけていた日。

「今日は父さんと母さんと一緒に出かけられるなんて、久しぶり！」

和也は二人の間に挟まれながら笑顔で歩いていた。

(でもなんだ、なんか心の中から何かを忘れてる)

和也が何かを忘れていると感じ出した。

——すると、六花とありすと和也は同じ時間について、すれ違うと、立ち止まった。

「どうした？ありす？」

「六花？どうしたの？」

「和也？なにしてる？」

家族から声をかけられても三人は顔を見合わせていた。

「あの！（会った事がある気がするけれど——）」

(思い出せない)

(忘れちゃいけない人達なのに)

「「あなたは、誰？」」

そう言ったその時、ラケルとランスが六花とありすの顔にぶつかり、二人が和也にぶ

つかってしまおう。

同時に三人は元の姿に戻り、周りの空間の色が緑色となって先まで一緒にいた家族がマネキンの姿になった。

「どう言う事？」

「私達、今まで何を・・・」

「確かマシユーって奴と戦って・・・」

「六花！」

「ラケル！」

「ありす〜！」

「ランスちゃん！」

「お前ら、助けに来てくれたのか？」

ラケルとランスはパートナーとの再会を喜ぶ。

「もう会えないかと思っただでランス〜」

「良かったケル！」

「そうか、私達思い出の中に閉じ込められて・・・」

「色んな事を忘れかけていたのですね」

「お前らが俺達に忘れてた心を取り戻してくれた」

三人がラケルとランスに礼を言う。

「さあ、一緒に帰るケル！」

「マナ達が待つてるランス〜」

三人は領き急いで脱出しようと試みる。

「そうは行かないじゃん」

「あなた達には永遠に思いつい出の中に留まっていたいただきます」

しかし三人の前にパープルバギーとシルバークロックが立ちはだかる。

「マナのいない世界なんて！」

「私達にとつて、何の意味もありませんわ！」

「必ず俺たち元の世界に帰る！」

三人は元の世界に戻るために、今一度戦おうとする。

「行くよ！ありす！かずやん！」

「はい、六花ちゃん！」

「オーケー！いつでもいいぜ！」

二人はラブリーコミュニケーションにラビーズをセットし、和也はスクラツシユドライバーを装着した。

『ロボットゼリー！』

スクラッシュロボットゼリーを差し込むと二体を指をさしながら構える。
「変身！」

「プリキュア！ラブリंक！」

三人が叫ぶと和也はレンチレバーを下ろし、ピーカーが現れるとその中で液体に覆われ、六花とありすは光に体が包まれる。

『潰れる！流れる！溢れ出る！ロボットイングリス！ブラア！』

「帰りましょう！私達の世界へ！」

「ええ。私達を待つ希望の世界へ！」

「俺たちが出会った世界に戻る！」

真琴の思い出の世界——プリキュアになる就任式の日だった。その後ろにはサポートになる龍牙の姿もあった。

（ここは・・・トランプ王国？）

（この光景は・・・）

「今日ここに、新たな伝説の戦士、プリキュアが誕生した事は大いなる喜びです。共に祝いましよう」

「王女様・・・」

「今日からあなたは、キュアソードと名乗って、トランプ王国の平和のために尽すので
す」

「光栄です。王女様」

「待てソード！これは……」

これは過去だと気づいている龍牙が叫ぶが、ソードは何の不安もなく式を行なっていた。

（これが私の思い出。確かに、プリキュアになれた喜びで満ち溢れていたし、何より、王女様のそばにいれるのが嬉しかった）

ソードはこの過去が嬉しかったとひと時だと感じていた。

（この平和な時が、ずっと続いていれば良かったのにー）

思い出の世界の誘惑に既に虜になってしまっていた。

「そんな事言っちゃダメだビー！」

「ダビー！」

「真琴！」

飛んで来たダビイの叫びと同時に空間の色が赤く染まり、龍牙が駆け寄る。

アン王女やトランプ王国の住人達がマネキンの姿になった。

「ここは真琴の思い出の中だビー！」

「現実のトランプ王国はキンググジコチューに滅ぼされてたんだぞ！」

「そんなの分かってる！」

「真琴……」

「私もう、あんな辛い思いはしたくない……！一人ぼっちになるのは嫌なのよ！」

「お前は一人じゃねえだろ」

声が届いて顔を上げると龍牙が立ちあがる。

「お前は一人じゃねえ！俺やダビィもいれば、晴夜やマナ達もいる！」

「マナ達もきつと元の世界に戻るために戦い続けてるビィ！あなたとの約束を果たすために！」

「約束……」

「そう、あなた達は誓ったビィ！トランプ王国に必ず平和をもたらすって！」

真琴はトランプ王国から魔法の鏡で二度目の脱出をした時、六人で必ず取り戻そう誓ったあの日を思い出した。

「ゴメンなさいダビィ。龍牙もありがとう！私、久しぶりに王女様の姿を見たものだから、ちよつと動揺しちゃったみたい」

「真琴……」

「やっぱお前はその笑顔がいいな」

「早く元の世界に戻る方法を探しましょう！」

「分かったビィ！」

「そうはさせない」

龍牙達がこの世界から脱出しようとする、マネキンカーインが龍牙と真琴の前に現れ道を阻もうとする。

「コイツは……！」

「私達をこの世界から出さないつもりだビィ！」

「だったら簡単だ！こいつをぶっ倒してここから出る！」

「ええ！行くよ！龍牙！ダビィ！」

龍牙はビルドドライブを装着し、クローズマグマナックルを取り出し、ドラゴンマグマボトルを差し込み、真琴はラプリーコミュニケーションとなったダビィを持ちラビーズをセツトした。

『ボトルバーン！クローズマグマ！』

『Are you ready?』

「変身！」

「プリキュア！ラブリンク！」

マグマライドビルダーと光に身体が包まれ、二人はクローズマグマ、キュアソードへ

と姿を変える。

『極熱筋肉！クローズマグマ！アーチャチャチャチャチャ　チャチャチャチャアチャー
！』

「愛を無くした悲しいカラクリ人形さん！このキュアソードが愛の剣で、あなたの野望を断ち切ってみせる！」

胸にスペードのマークを作りマネキンカーインに向けて言うと二人は同時に向かっていった。

その頃、晴夜は思い出の世界で苦悩していた。

あの時、マナの涙を見たその時から・・・

（4年前、あのマロって犬を止めていればこんなことには・・・マナから笑顔を奪われなかった・・・）

髪を両手で抑えながら、あの時気づけなかった事を自分を責める。

「どうした。ずっと顔を下に向けて」

拓人が部屋に入って来て晴夜の顔を上げる。

「ねえ・・・父さん」

「どうした・・・」

「もし……大事な人を失くして、傷ついた人がいた時、父さんならどうするの……」
拓人に今の気持ちの人がいた時どうするのかと質問する。

「さあな……それは、わからんな」

しかし拓人はわからんと呟く。

「でも、その人の事を心に刻み、前へと進むことが大事だな」

「心に刻む……」

「辛い事や苦しい事が過去にあつたとしてもそこから逃げず受け止める。それをいつまでも心に残し前へと進むことが未来へと繋がる」

「未来……」

晴夜はポケットの中に入っていたラビットとタンクのボトルを取り出す。

（そうだ……ここから未来に繋がるから、ライダーシステムは作られて、今みんなを守れるんだ）

「晴夜……これをお前に」

拓人は晴夜の手にかかを渡した。

「これは、ボトル……?」

それは白いボトルで、射手座の絵柄が記されていた。

「それは、父さんが作った最初のボトルだ」

この射手座モチーフのボトルは拓人が作った最初のボトルだと言う。

「晴夜、お前のこれからも射手座の放つ矢のように前に進むんだ！」

「父さん……」

拓人の言葉を聞いて、晴夜の目から涙が溢れ出ると晴夜はそれを拭う。

「父さん！俺行くよ！今どうしても笑顔を取り戻したい人がいるんだ！」

「なら行くんだ！お前のやりたいように！」

晴夜は頷き、家を出ようとす。

「最後に聞かせて……父さんはなんで科学者になったの？」

「……それは——」

拓人は晴夜に何故、科学者になったのかと打ち明けた。

「……最高だよ。父さん」

晴夜は玄関の扉を開き、走り出した。

（父さん、さよなら言わないよ。必ずあつちでまた会ってみせる）

今は行方不明の父親にもう一度会おうと決意し晴夜は走り出した。

その頃、 그리스、ダイヤモンド、ロゼッタの三人がシルバークロック、パープルバギーと交戦していた。

「このヤロー!」

グリスが両腕のツインブレイカーを振り回して攻撃するが、二体は飛んで避けた。

「お前らは二度と仲間には会えないまま、この世界で朽ち果てるのだ!」

「カツチカチの、ロゼッタウォール!」

ロゼッタがロゼッタウォールを発動し、シルバークロックの攻撃を防ぐ。

「しつこい!」

ダイヤモンドがラブハートアローを出現させた。

「プリキュア! ダイヤモンドシャワー!」

ダイヤモンドシャワーを放ち、足場を凍らせる。

「甘いじゃん! スパイクタイヤに改造済みじゃん!」

パープルバギーのタイヤにスパイクが出て来る。

「それ!」

両腕のタイヤを投げ飛ばし、ダイヤモンドを落下させる。

「キュアダイヤモンド!」

「よそ見は、いけません!」

気を取られた隙にクロックのカカト落としを受け、ガードするものの地面に落下した。

「ロゼッタ！」

「お前もじゃん！」

「甘い、ですぞ！」

タイヤと短剣が今度はグリスに襲いかかり、グリスが倒れる。

「マナって言ったか？」

「今頃ソイツも同じ目に遭っているでしょうね」

「マナ……」

「マナちゃん……」

「そろそろトドメと行こうじゃん！」

そう言うトドメとパープルバギーとシルバークロックが合体し、より強大なものとなった。

「ちよつと嘘でしょ……!?!」

突進を跳躍してかわすが、腕から放たれた火炎放射がロゼッタに向けて放たれる。

ロゼッタウォールを発動して防ぐが、粉々に砕かれてしまう。

「ロゼッタ！」

ダイヤモンドとグリスも腕からの一撃を受けて、ガードしたものの吹き飛ばされる。

「これで、ジ・エンド！」

三人にとどめを刺そうとする。

その時、どこから放たれた砲撃が合体した二人のバランスを崩した。

「「誰だ！」」

「誰だ！」

砲撃が放たれた方を見るとネビユラスチームガンを持ち、パープル色のクロコダイルがモチーフのライダーが現れた。

「仮面ライダーローグ……見参……」

「「幻冬（君）！」」

仮面ライダーローグが現れ、三人を守ったのだ。

「大義のための犠牲となれ！」

「ふざけるな！」

『ファンキーブレイク！クロコダイル！』

クロコダイルクラックボトルをスチームガンへと差し込み、蓄えられたエネルギーを放ち、合体したバギーとクロックが倒れる。

その隙に倒れていた三人が起き上がる。

「私達は……いつもマナに助けられて来た！」

「あいつの優しさが……俺達を勇気づけて来た！」

「今度は私達が、マナちゃんを助ける番ですわ！」

マナ助ける思いが三人に力を与え、起き上がる。

「行くよ、ロゼッタ！かずやん！」

「はい！」

「ああ！」

「貴様ら、許さん！」

起き上がった合体した二体がローグに向けて火炎放射を放つと、ロゼッタが前に出た。

「プリキュア！ロゼッタリフレクション！」

「プリキュア！ダイヤモンドブリザード！」

『チャージボトル！潰れなくい！チャージクラッシュユ！』

ロゼッタがロゼッタリフレクションで火炎放射を防いでる隙にダイヤモンドがダイヤモンドブリザードを放ち凍らせると、グリスの手がクマボトルの力で巨大なクマの手となり左右からぶつけるが受け止められる。

「ロゼッタリフレクション！ダブルクラッシュユ！」

そこにロゼッタリフレクションを左右から同時にぶつけた。

「今です！」

「かずやん！幻冬君！」

ダイヤとロゼッタの二人に言われ、 그리스とローグはドライバーのレンチを下ろす。

『スクラップフィニッシュ！』

『クラックアップ フィニッシュ！』

二人が同時にライダーキックを放ち、パープルバギーとシルバークロックを倒した。だが、これまでにダメージを受け過ぎ、力尽きて倒れてしまう。

一方、クローズマグマとキュアソードはマネキンカーマインと一進一退の攻防を繰り返す。

「ハアアア！」

ビートクローザーを振りかかるがマネキンのドリルで防がれる。

「相打ち!?？」

ソードがドロップキックを放つが、相殺された。

「こちらの技が読まれているビィ！」

「それなら……！ラブハートアロー！」

「なら、俺も！」

ソードがラブハートアローを出現させ、クローズはボトルをビートクローザーに差し込む。

「プリキュア！スパークルソード！」

『スペシャルチューン！ヒツパレー！ヒツパレー！ミリオンスラッシュユ！』

ラビーズをセットしスパークルソードを、クローズがグリップを引つ張りミリオンスラッシュユを放つ。

「マネキンカッター！」

しかしマネキンカーマインが放つたマネキンカッターで相殺され、爆風で吹き飛ばされて倒れてしまう。

「私がただのマネキンだと思ったら大間違いよ。これが私の本当の姿！」

この場にいた全てのマネキンを吸収し、巨大化した。

「マジかよ!!?！」

「何なのこれ!!?！」

「デカイビィー！」

腕に覆われたリボンがドリルのように回り、クローズとソードに遅いかかる。

何とかかわして近づくが、隙を取られて動きを封じられた。

「逃げて龍牙、キュアソード！」

なすすべもなくやられるかと思ったその時、「きゅびらっば〜！」と声が聞こえ、腕のリボンが花となり、クローズとソードは危うく難を逃れた。

「誰だ!?？」

「愛の切り札! キュアエース!」

「アイ!」

柱の上にキュアエースが立っていて、傍にはアイちゃんが浮いていた。

「美しさは正義の証! ウィンク一つであなたのハートを射抜いて差し上げますわ!」

エースは手でエースマークを作り、決め台詞を叫ぶ。

「キュアエース……」

「どうしてここに……?」

「愛は時空を越えるもの。さあ、立ちなさいキュアソード! クローズ! あなた達の心はまだ折れていないハズです!」

二人に指をさしながら叫ぶと二人は起き上がった。

「うおおおおお!」

クローズが一人向かっていた。巨大化したマネキンは攻撃を繰り出すとそれを避けながらクローズの拳を繰り出す。

「ぐう!」

「力がみなぎる! 魂が燃える! 俺のマグマがほとばしる!」

自身のフレイズを叫びながらクローズは全身のマグマを燃やしながらラッシュを繰

り出す。

「もう、誰にも止めらねえ！」

そう叫びながらクローズはドライバーのレバーを二度回す。

『Ready go!』

クローズの体がさらにマグマで帯び、後ろにマグマを纏ったドラゴンが現れる。

『ボルケニックファイニッシュ!』

「はあく……オリヤヤヤヤヤヤヤ！」

クローズから放たれたマグマのドラゴンがマネキンの右腕や一部に直撃し破壊した。

「ぐわああああ……貴様が現れなければ……」

残った片手で襲い掛かるが、エースは華麗にかわした。

「この程度の攻撃では、わたくしの心は痺れませんわ。お見せしましょう。本当の衝撃

と言うものを！」

エースはルージュを口紅を塗る

「ときめきなさい！エースショット！ばきゅん！」

両手持ちして頭上に掲げたラブキッスルージュを振り下ろし、エースショットを放つ

た。

「キュアソード！今よ！」

ソードは走り出しマネキンに向かっていく。

「閃け！アルティマソード！」

エースが動きを封じた隙にソードはアルティマソードを放つ。

「決めなさい！龍牙！」

クローズが既に空中へと飛躍していた。

『Ready go!』

クローズがライダーキックの態勢に入り、マグマのドラゴンが足に収束していた。

『ボルケニックアタック！』

クローズのボルケニックアタックのライダーキックが決まり、マネキンカーマインを

倒した。

「じゃあー！」

「やったわね！龍牙！」

二人は高々とハイタツチする。

「さあ、参りましょう。一刻も早くキュアハートを救うのです」

エースがマナを助けに行こうとする。

「このまま逃がしはしないよー！」

しかし、まだマネキンカーマインは動けていた。最後の悪あがきとして自爆し、ク

ローズ達を相討ちに持ち込んだ。

「エース、ソード、クローズ、しつかりするきゅぴ！」

爆発を受けたクローズとソードとエースは倒れてしまい、残されたアイちゃんだけが、所在なさげに二人の周りを飛び回っていた。

その頃、ブリッジから見える最後の映像もこれで途切れた、マシユーは静かに目を閉じる。

「我がしもべ共はよくやってくれた。これでもうマナはオモイデの中から出てくる事はない」

「それはどうかな」

マシユーの計画はこれで完成したと確信した時、声が聞こえると、スクリーンから晴夜が現れた。

「貴様、なぜここに・・・！」

「当然、マナを助けるためだ」

「何故だ！何故、貴様は思い出の中の誘惑にかからなかった！」

マシユーは晴夜が何故、思い出の誘惑に負けず、なお元の世界に戻ってこれたのかわからなかった。

「……俺は過去を受け入れた！」

「何……!?？」

「お前が見せた父さんとの思い出……父さんが居なくなつてから俺は悲しくて辛かつた……」

「だったら、尚更……！」

すると晴夜はビルドドライバーを取り出す。

「でも、どんな過去を受け入れて、未来に向かつて進んでいく!そして……必ず父さんを見つける！」

ビルドドライバーを装着し、ボトルを2本取り出し、数回振り始め、後ろからいくつかの数式や化学式が現れるとキヤップを回した。

『ラビット!タンク!ベストマッチ!』

兎と戦車のシルエットが浮かび、『R/T』と表示された。そして、レバーを回すと前と後からスナップライドビルダーが出てきてアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身!!?」

一度構えた後、両手を一度交差させてバツと広げると、アーマーが中央の晴夜に重なるように装着される。

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイー！』

仮面ライダービルド・ラビットタンクフォームへと変身すると、ドリルクラッシュャーを取り出しマシユーに振るが攻撃を防ぐようにバリアが阻む。

「硬いなく、なら・・・」

『タカ！ガトリング！ベストマッチ！』

タカとガトリングのボトルを取り出しキャップを回すとドライバーに差し込む。

「ビルドアップ！」

『天空の暴れん坊！ホークガトリング！イエーイー！』

ホークガトリングへとフォームチェンジを完了し、ホークガトリングアームを出現させる。

『テン！トゥエンティ！サーティ！フォーティ！フィフティ！シックスティ！セブティ！エイティ！ナインティ！ワンハンドレッド！』

空中へと飛びながらホークガトリングアのシリンダーを回した。

『フルバレット！』

ホークガトリングアの百発の攻撃が繰り返され、マシユーに張られたバリアも連続で撃ち続ける弾に耐えきれず破壊され、バランスを崩すとビルドも着地した。

「何故幸せの中からマナを連れ戻そうとする！」

「そんなの決まってるだろ・・・友達だからだよ」

晴夜は友達だから取り戻すと叫ぶ。

「俺達が辛くても苦しい時もマナの笑顔が俺達を助けてくれた」

——戦いが辛く、何度もピンチな時があった。

——ハザードトリガーで悩んでいた時も、マナのおかげで乗り越えられた。

「でも、あいつの大事な人が亡くなって辛い顔を見た時、俺は自分が最悪だ・・・って思った」

あの時、落ち込む彼女にどう言葉をかければいいのか、わからなかった。そして、マ口を助けられたかもしれないのに、できなかった。

「だから・・・マナから笑顔が消えた時は必ず俺がマナの笑顔を取り戻す！」

ビルドの強い決意を感じたベベルがビルドに向けて口を開く。

「ビルド！マナの思い出にはそのスクリーンを潜ればいける！」

「なっ！貴様！」

「サンキュー！」

後ろを向きホークガトリングガーの翼を高く広げ、マナの思い出の中へと向かおうとする。

「させるか！喰らえ！イレブンファング！」

イレブンファングの11本の牙がビルドに襲い掛かる。それを見て新たに2本ボトルを差し込む。

『忍者！コミック！ ベストマッチ！』

「ビルドアップ！」

ランナーから形成された新たなアーマーがビルドの体に重なる。

『忍びのエンターテイナー！ニンニンコミック！イエーイ！』

ニンニンコミックへとフォームチェンジし四コマ忍法刀を取り出し、4回トリガーを押す。

『分身の術！』

『隠れみの術！』

ビルドが何体にも分身すると周囲から煙幕が現れる。

「無駄だ！」

だが、イレブンファングは煙幕に隠れたビルドの分身に全て直撃させた。

「お前を・・・貴様をマナの元には行かせん！」

『ドローン！』

「な!?？」

直撃したビルドは全て分身していたものだと気づき驚く。

「どうやら、彼は無事に入ったようだね」

「ふん！だが、マナは既に僕の虜抜け出すことは出来ない！」

思い出の世界に入っても無駄だとマシユーは叫ぶ。

一方、変身解除し晴夜はマナを助けに思い出の世界へと入りこむに成功した。

「待つてろ、マナ！」

その頃、マナの思い出の世界では。

「みんな、夏休みの宿題はちゃんと進んでいますか？最後の方になってあわてないように」

オモイデはループし、また同じ登校日がやってきたのだ。

「ワン！ワン！ワンワン！」

「おかえり」

そして、甘い思い出がマナを出迎えてくれていた。

「ワン！」

マロの出迎え、少し複雑な気持ちでやりすごす、このマロも自分自身のオモイデの中であると気付いているからか…

「んっ?」

しかし、側に居たいはずは、彼女の心のわずかな変化を見過ごさなかった。

「マナ、帰らなくていいシャルか?」

部屋に戻ったマナにシャルルが言った。

「あたし、もうマロが死んじやった世界になんか戻りたくない。おばあちゃんだって、あたしのこと置いて天国にいつちゃうんだよ、元の世界に戻っても辛いことばかりだよ」

「マナ・・・」

マナの気持ちは分かる。家族を思う強い気持ちは誰にだってある。

「あたし、もう未来なんて欲しくない・・・」

「そんな事いつちやダメシャル! どうしてマロやおばあちゃんの分まで生きてみようつて思わないシャルか? マナは自分に甘えてるだけシャル!」

「いいかい?」

自分の部屋だからと油断して話しているところを見つかったと思ったシャルルは、そつとマナの陰に隠れる。

「おばあちゃん」

「友達を心配させちゃいけないよ」

いすずはマナにそう語りかけた。

——やはり、おぼあちゃんに隠し事はできないや。

そう感じたマナは……

「——あたし、折角おぼあちゃんやマロに会えたのに……でも本当はこんなところにいちゃいけないくて……どうしたらいいんだろうって……」

遂に現実とオモイデの間に揺れる複雑な思いを告げた。

言葉を待つ間、そうマナは恐れた。しかし、次の言葉は意外に早くやつてきた。

「お前のマナって名前は『愛』って字を書くだろう？」

「え？」

「困った人がいれば手を差しのべ、共に未来へ進もうとする気持ち、それが愛さ」

「愛……」

「目を閉じて、耳を澄ましてごらん。何が聞こえる？」

マナはおぼあちゃんに言われた通り目を閉じ耳を澄ます。

すると、聞こえてきた。マナを待っている友達の声が——

「「マナ（ちゃん！）！」」

「「マナ！」」

——六花が、ありますが、真琴が、龍牙が、和也が、彼女を待つ友が呼ぶ。

——彼らから聞こえる声が、マナのオモイデの壁が壊れようとしていた。

「これは……!」

マシューは立ちあがり、スクリーンから溢れだすマナを呼ぶ声に耳を傾ける。

「聞こえる。あたしを呼んでるみんなの声が!」

「そうかい……だったら行ってあげなきや。お前を待っていてくれるみんなのところへ」
「でも……あたし、おばあちゃんとも離れたくない」

「何を言ってるんだい。わたしたちはずっといつしよだよ」

「えっ?」

マナはいすずの顔を見つめる。

「愛は受け継がれるんだ、親から子へ、子から孫へ、わたし達が受け継いだ愛をお前も未来につなぐんだ。さあ、お行き。お前自身の明るい未来へ!」

「おばあちゃん!でも、どうすれば戻れるのかあたし、分からないの!」

何も言わずにマナの手を取る。しつとりと温かな感触が体全体に広がるようだ。

「教えただろ? 魔法のおまじない。手のひらにハートを描きながら祈るんだ」

——そうだった。魔法のおまじない、愛を受け取る唯一のやり方。

かつて教えられた通り、目を閉じて祈った。

「帰りたい、みんなの場所に。仲間が待っているあたし達の世界に！」

「マナ！」

「あつ！」

突然、声が聞こえ、温かな周りの風景が歪み、その隙間から現実からの風が吹き込んで一つの差し伸べる手が見えた。

「晴夜君！」

差し伸べる晴夜の手を掴むと元の姿へと戻り、次第にぼんやりしていく祖母の姿に向かっていた。

「おばあちゃん！また会えるよね」

「モチのロンさ！」

そういうと次第に周りの歪んだ背景と一体となり、マナと晴夜の目の前から姿を消した。

「マナ！」

「シャルル！」

シャルルはマナの肩につかまる。

「遅くなつてごめん」

「ううん！ありがとう！」

すると、アトミックウイングが彼らの前に現れ、現実への帰還する道筋へと案内する。
「行こう！みんなの所へ！」

「うん！」

マナはラブリーコミュニケーションにラビーズをセットし、晴夜はラビットタンクスパークリングを取り出し、ドライバーに差し込む。

『ラビットタンクスパークリング！』

ビルドの前後にビルドマークの形をしたランナーが出現し、アーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身!!？」

「プリキュア！ラブリンク！」

二人が叫ぶと形成されたアーマーが晴夜の体が重なり、マナの体が光に包まれた。

『シユワツと弾ける！ラビットタンクスパークリング！イエー！イエー！』

二人はラビットタンクスパークリングへ、キュアハートへと姿を変えた。

そして、その影響で思い出の世界が崩壊し、九人揃って元の世界へと戻り、マシユーの前へと現れる。

「どうして蘇って来た？折角甘いオモイデの中で永遠に生きる道を用意してやったと言
うのに」

「永遠なんていらない！」

「俺達はこの世界で生きる！」

——この世界でみんな歩む決意をしたことを、クローズとソードの二人が叫ぶ。

「困難でも心火を燃やし生き続ける！」

「未来へ続く道はけわしいかもしれないけれど」

「それでもわたしたちは前に進みたいんです！」

——小さかった自分と家族が一緒に過ごしたかけがえの無い時間よりも、未来へと進むことを、グリスとダイヤモンド、ロゼッタの三人は選んだのだ。

「つらく苦しい思いを味わったとしても、その分だけ強くなれる！」

「だから、日々人は強くなれる！」

——エースとローグの二人が信じてる唯一の道を叫び。

「愛をだれかに分け与えることが出来る！」

「そして、みんな未来へと繋がる道を求めてる明日を守る！」

愛のプリキュアとしてキュアハートが、明日を守る仮面ライダービルドが、マシユーに呼びかける。

「んんん．．．おのれ！」

しかし、そんな思い思いの口上はマシユーの怒りに火をつけたに過ぎなかったようだ。

全身に負のエネルギーをみなぎらせビルド達に戦いを挑もうとする。

その邪悪な姿は、オモイデに浸る事の安楽と停滞の功罪の具現化に他ならない。マシユーは全力でぶつかっていき姿かたちを変化させ、飛行船の上部へと昇っていった。

その姿は屈強な人の姿ではなく異形の、巨大な野獣の姿となって、彼を追って上部甲板へと上がり立ちはだかる。

「オモイデなどいらぬか？ふみにじられ忘れ去られたモノの思いなど必要ないというのか！」

巨大な狼に姿を変え、牙をむく獰猛な野獣の姿に思わずたじろぐ。

しかし、ハートだけはその姿に懐かしい面影を感じた。

——それは、マシユーの首輪で輝くハートのオーナメント。それは、彼女にとって忘れられぬオモイデ．．．

「あなたもしかして．．．マシユ．．．マロ？」

「マシユマロ・・・はっ!?まさか、あの時の!?」

「ビルドもそれを見て面影が似てることに気づく。

ハートもあの時、マシユマロを拾った事を思い出す。

「まあ」

「かわいい」

クラスメイトが持つ段ボールの中で、怯えた目であたりをうかがう真つ白な子犬の姿は思わず声を上げる。

「どうしたの?この犬」

「公園のすみで拾ったの。ずっと鼻をならしていたから放っておけなくて」

和也がクラスメイトの八嶋に聞くと、公園で拾ったと答える。

「捨て犬かなあ」

「首輪もついてないしきつとそうね」

「だったら里親になってくれる人を探さないとね」

「さすがはマナだな」

「名前はどうします?」

「真っ白でフワフワしてるからマシユマロ！略してマロ！」

マナは子犬に早速名前を付けると満面の笑みを披露した。

「略してって・・・マナ、自分で飼う気マンマンでしょ？」

「でも、素敵な名前ですわ」

「犬の方も気に入っているみたいだし」

六花とありすと和也は、マナの意見に賛同する。

「じゃあ、お前の名前はマロに決定ね」

マナはマロと名付けられたムク犬にむかって呼びかけた――

そして、今に戻り、戦いの火ぶたは切って落とされた。

強烈なタツクルがキュアハートを襲う。巨大な質量の突進に、追いかけられた空気がうなるような音を立てて寸前のところでそれを側転でかわした。

「うおおおおお！ガウ！」

マシユ・・・いや、マロの攻撃がハートを襲う、しかしキュアハートは今度は避けることをせず、両手で正面からマロの口蓋を受け止めた。

「マナ（ちゃん！）！」

ダイヤモンドと、ロゼッタがハートを気遣って叫びを上げた。

「そんな・・・マロ、どうして、ううっ！」

力を受け流し、マロの胴体の下へと逃れたハートはすかさず彼から距離を取る。

「うるさい！お前達全員ならくの底に叩きこんでやる！くらえ！イレブンファング！」

全身から11本のエネルギーの柱が空に向かって放たれる。九人は一斉に避ける。

そこへ再びマシユーの牙が襲う。

——しかし、両手を下げたまま一切守りの姿勢を見せない。鋭い牙がハートに襲い掛かる。

すると、ビルドが前に出てマシユーの鋭い牙をハートの代わりに肩口で受け止めた。

ビルドの肩から血が勢いよく迸り出る。

『晴夜（君・さん）！』

「晴夜君、何で・・・」

「ううう・・・」

しばらくしてマシユーはビルドから離れるとビルドは肩口を抑える。

「どうして庇った。なぜ避けなかった」

傷ついたビルドは肩口を抑え、そのビルドを介抱しているハート。

ビルドとハートの行動にうろたえたのかマロがそう聞く。

「俺は、お前を……君を助けられなかった！」

「何??？」

「俺が4年前……お前の切れたロープを掴んでいればこんな事にならなかったはずだ！」
——4年前、大貝町の外を歩いている時、必死にマナを探していたマロをあの時、轢かれる所を助けられたら、こんな辛い思いをマシユーにも、マナにもさせなかった。

「晴夜君……あたしもあなたの気持を受けとめなくちゃって思ったから」

先程、避けなかった理由をハートがマロに告げた。クローズ達は、ビルドとハートの行動をただ見守る他は無い。

「ああ……」

マシユーから後悔とも、憐憫ともつかないかすかなため息が漏れる。

「ごめんね、気がつかなくて。マロはあたしが帰ってくるとすぐに気づいてしつぽをいっばい振つてくれたのにな……」

「ああ……」

後悔と恐れ、マシユーは顔を上げ少し後ずさった。あの時自分を差し置いて行ってしまったマナと助けてあげられなかった晴夜を許そうとしているのだろうか。

『だまされるな。あの日お前の時間は止まってしまった。なのにそいつはお前を置き去りにして、自分だけ未来に進んでしまうつもりなんだ!』

「この声は？」

「どこから……」

すると周りから恐ろしげなこの声が聞こえてきた。

「それでも！あたしはマロの事、一生忘れない！」

「嘘だ！」

こじれたマシューの心はハートの言葉を跳ね除ける。

「嘘じゃない！ハートが……マナが嘘つかないことはお前が一番わかっているはずだ！」

ビルドの言葉に、マシューはその言葉を聞いて何も返す言葉がなかった。

「あたしね、あなたと過ごした時間は短かったけど、楽しい思い出はいっぱいもらったよ。ありがとう、マロ……」

「マナ……」

思わず噴出したマナの本心に、マロは彼女と過ごした楽しかった日々を思い出した。

「うう……ああ！ぼくは、ぼくは、どうしてこんな事を……」

その時、巨大な狼の姿をとっていたマシューの体がまぶしい光に包まれたかと思うと、元のマシューの大きさになり、ひざまずいた。

「どうなってるの？」

「何が起こったのか全くわかんねえ？」

マシユーの変化をクローズとソードが不思議そうにみつめる。

「manaの愛が、凍りついていたやつを溶かしたのさ」

「もう大丈夫だよ……ちゃんと元通り街の人たちもオモイデから解き放てば、きつとみんな許してくれるよ……」

ハートはやさしくマロに語り掛けた。

「ああつ……」

ハートに掛けられた許しの言葉に、ほんの少し明るい顔をのぞかせた。

「桐ヶ谷晴夜……君にも……すまなかった……」

ビルドの肩を傷つけたマシユーが謝る。

「気にすんなよ……これくらい、お前の苦しみに比べたら安いもんだよ」

「うらぎるのか？マシユー！」

顔を上げたマシユーの後ろ、そこにあつたのはあの不思議な旋律を奏で、忘れられたモノ達に力を与え、みんなを苦しめたクラリネットだった。

邪悪な力場に包まれ、宙の一点に浮かぶこのクラリネットこそが、マシユーをそそのかし、復讐の虜にまで変えてしまった張本人だったのだ。

「お前はちかつたはずだ、我らの無念を晴らすと。忘れられたモノたちの復讐を成し遂

げると！だからわたしはお前に力を与えたのだぞ、マシユー！」

「ちがう！僕の名前はマシユーじゃない！マシユマロだ！」

「だまれ！きさまら！もはやオモイデの中に閉じ込めるだけでは収まらん。未来を丸ごと消し去ってくれ！」

未来を丸ごと消し去る。そう言うときクラリネットは謎の燐光を放ち、クジラ型飛行船はまるで吸い込まれるようにクラリネットもろとも時空の彼方へ消えてしまった。

——そしてビルド達は足場を失い、地表に真つ逆さまだ。

『うあああああ！』

「どうなってるの？」

「あいつ！どこに行っただんだ！」

「やつは時空を越えて君達の未来をつぶすつもりだ！」

クラリネットの出口を知るマシユーが答える。

「そんな！」

どうにか大貝中学校の屋上へと着地した。しかし、無事に着地はしたものの、時空を超え未来へと行ってしまったクラリネットの暴走を止めるには一体どうすればいいのだろうか。

「変身が……」

「もう5分過ぎてしまったんだ」

そして、ここで長く続いた戦いにより、エースの変身がとけてしまう。

「晴夜君！大丈夫？」

マシユーの牙によってダメージを負い、傷口を気にしていたビルドにハートは駆け寄り気遣う。

「未来を消すってどういう事ですか？」

ロゼッタがマシユーに改めて聞いた。

「現在と未来はつながっている。連続する時空が崩壊すれば、やがては君達の存在するこの世界も消えてしまう」

マシユーの説明に皆が驚いた。未来が消えるということとは、遅かれ早かれこの世界も行き詰まり消えてしまうこと、ここ現代にいる自分たちにはそれを止める手立てはないということだ。

「どうすればいいのでしょうか」

「なんか、方法はねえのかよ！」

グリスが止める方法はないのかと聞く。

「やつを追いかけて止めるしかない」

「そんなの無理よ！わたし達には未来に行く方法なんか無いのよ！」

邪悪なクラリネットを追いかけて未来へ行き、それを倒し、時空の崩壊を止める。

現実主義者の六花でなくとも無理だと思っるのは当然である。

「行こう！ 未来へ！」

「ハート……」

ハートが何かを決心した表情で言う。

「——そうだ。まだ、勝利の法則はあるはずだ！あいつを……止めるんだ！」

ビルドもハートの決意に賛同する。

「晴夜君！あなた、そんな体で……それに仮に行けたとしても、戻ってこられる保証はどこにもないのよ！」

「それでも！行かないと。あたし達が守らないでだれが未来を守るっていうの？」

「キュアハート」

この一言にダイヤモンドの気持ちのすべてが詰まっている。

「行きましょう、未来へ」

「ああ、心火を燃やして行くぜ！」

「わたしたちの未来を守ろう！」

「俺達なら未来でも負ける気がしねえ！」

クローズ達四人もビルドとハートに同意する。

「アイちゃん、ナイス！」

「凄すぎなんですけど」

都合の良い、正におあつらえ向きのタイミングで現れたミラクルブーケライトの存在に様々な反応を示す。

「これがあれば未来に行けるのですか？」

「でも、これだけじゃ力が足りません」

「じゃあ、どうすれば？」

「皆で願うのです！プリキュアに力をと！プリキュアに力をと！」

「プリキュアに、未来に飛び立つ力を！」

「プリキュアに、力を！」

皆の思いがミラクルブーケライトに力を与え、巨大になった光に包まれ、肩口から血が出ていたビルドの傷が治って行くと亜久里はエースにもう一度変身した。

「行くよ！一緒に未来を守ろう！」

「俺達の手で、現在（いま）も未来も救うんだ！」

ビルド達九人は時空の扉を通り未来へと向かう。

無事に未来へと到着したビルド達。そこへ頭上高くから鐘の音が鳴り響く。

長い眠りから覚めたように身震いすると、体の動きを確認するようにゆつくりと起き上がった。

「ここが、未来……」

「みんな、大丈夫？」

ハートが皆に声をかける。

「ええ、なんとか……」

「寿命が縮んだけどな」

皆は起き上がったあたりを見回した。未来へ向かったはずだったが、辺りは現代と少しも変わらぬ見覚えのある風景が広がっていた。

「ここは、どこシヤル？」

ここは、四葉財閥所有の公園の一角にある小さな教会。時空を超えたはずなのにこの公園へとやってきてしまったのだろう。

「あれは？」

先ほどの鳩といい、鐘といい。今日行われているのは、間違いない、結婚式である。

教会のドアの前に集まり、新郎新婦を迎える一同。

その中に今より少し大人になった龍牙、和也、ありす、六花、真琴、そして亜久里と幻冬がいた。

——だが、晴夜の姿だけ見えなかった。

「わたしたちの未来……?」

（俺がない?）

未来の教会で行われている結婚式の最中だったのだ。参列しているメンバーから考えると結婚したのはどうやら身近な人物らしい。

「みなさまで新郎新婦をおむかえください」

係員の誘導により、道が開けられ割れんばかりの拍手が巻き起こる。一步一步歩き、現れた白衣の二人、そのうち一人にマナは見覚えがあった。

「あ……あのドレスは……!」

——そうだ、間違いない。マナが譲り受け大切に部屋に掛けられているはずのあのドレス。親子三代にわたって引き継がれたドレスだった。

「マナ……」

満足げな気持ちを含んだ声でマシユウが言う。

「そーれっ!」

ウエディングドレスに身を包んだマナが掛け声とともにブーケを投げると、時間が凍り付き、色のないセピア色の世界がやってきた。ここは、未来のはずなのに。これはオモイデの国で見たのとまったく同じだ。

「あれは？」

「クジラに足が生えてる」

忘れられたモノ達の集合体。邪悪なクジラがそこにあった。

「まるでタコさんですわ」

クラリネットの音が聞こえ、クジラでは無くタコになった船が教会へと移動していた。

「見た目で判断してはいけませんわ」

エースが言うと全員が構える。

「お前たちの未来など消し去ってくれる！」

クラリネットの音が聞こえると、タコの触手が結婚式の会場に向けて放った。

「そんな事はさせない！」

『マックス！ハザードオン！』

ハザードトリガーを起動させ差し込むとフルフルラビットタンクボトルを振り、栓を回しボトルを半分に分けた。

『ラビット！』

そのまま、ドライバーにボトルを差し込んだ。

『ラビット&ラビット！』

『ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！』

『Are you ready?』

ドライバーから金型が現れ、ラビットラビットアーマーも出現した。

「ビルドアップ！」

『オーバーフロー！』

体に金型が重なり、スパークリングからハザードフォームとなり、パージされたラビットユニットが装着された。

『紅のスピーデージャンパー！ラビットラビット！ヤベー！ハエー！』

仮面ライダービルド・ラビットラビットフォームへとなり足をゴムのように伸ばし触手の攻撃からみんなを守る。

「邪魔な仮面ライダーが！」

クラリネットの割れ鐘のような声が聞こえてきた。次の瞬間、巨大な触手が今度はビルドをめがけてまるで鞭のようになり、襲い掛かってきた。

ロゼッタがとっさにロゼッタウォールでクジラの触手を受け止める。

「今です！ハート！晴夜さん！」

ロゼッタは、ハートとビルドをクラリネットの元へと行かせようと叫んだ。

勢いよくクジラへと突進する。巨大な船体に何度か飛び乗りながら上部甲板を目指

す。

「オラア！」

グリスはダブルツインブレイカーで二人に放たれた触手を防いだ。

『ツインフィニッシュ！』『ツインブレイク！』

2本のボトルを両方に差し込み触手をはじき返した。

「ここは任せていけえ！」

しかし、次なる触手が迫りきて二人を薙ぎ払い地面の芝地へと落下してしまふ。

その後、クローズ達が船体へと攻撃を何度も叩き込むが、まったく効いている気配はなくこちらにも触手に薙ぎ払いを喰らう。

せまり来る触手に突破口を見いだせず再び芝生の上に座り込む。

「やっぱり、あのクラリネットを何とかしないと！」

「なら、あそこまで行くしかない！」

『フルボトルバスター！』

フルボトルバスターを出現させビルドとハートは再び敵に向かって走り出した。

他のみんなもビルドとハートを助けようと駆け出した。

「無茶よ！どうやって？」

「何か方法があるんですか？」

追いついて並んで走り出す。

ダイヤモンドの指摘はもつともだ、さつき最初に飛び込んだ時と状況は全く変わっていない。

クラリネットを破壊すること。一体、どんな策があるのだろうか。

「あのバケモノのどこにあるかもわからないのに」

しかも、あの広い船体の中からから小さなクラリネット一つを探し出すのは至難の業だ。

「ぼくにまかせて！」

「マロー！」

それは、再び生前の姿に戻ったマナの愛犬、マロの姿だった。マロは五人と並走すると、不思議な燐光を帯び語りかける。

「ぼくの鼻を使えばやつ居場所がわかるよ、ついて来て」

クラリネットのすぐそばに居た彼ならばそれが可能だ、その優秀な鼻を使えば。

ハートとビルドはマロに導かれるようにして走り出した。

「うん！」

ハートはうなずきそう言った。

「みんな、援護して！」

二人はマロを追ってクラリネットのところへと向かう。

「晴夜の判断は的確です。今は二人を信じましょう」

迫りくるクジラの大腕を受け止め、ビルドとハートの活路を開きながらエースが言う。

二人は寸前のところでしなる攻撃をかわし、更に上へと進む。

「えいつ！もう、勝手なんだから！」

「しつこいな……」

フルボトルバスターのトリガーを砲撃モードへと変わり、ボトルを差し込む。

『ラビット！フルボトルブレイク！』

赤いエネルギー弾が放ち攻撃を防ぐが、次の触手が二人に襲いかかる。

ダイヤモンドが捕まえようと近づいた触手をキックで薙ぎ払い二人を守る。

「仕方ありませんわ、マナちゃんですもの」

「行つて！キュアハート！」

「晴夜お前も行け！」

「ここは、心火を燃やして道を作つてやる！」

クローズにロゼッタとソード、グリスもビルドとハートを通すに徹する戦術をとる。

「みんな……」

甲板まであと少し、ビルドとハートはクジラの触手の上を猛ダツシユして、少しでも高い位置に上ろうと頑張る。

「ソード！活路を開きます」

「龍牙さん！僕達も行きましよう！」

「ええ！」

「おお！」

そこでエースとソードは連携技を思いつくくとローグがクローズに行こうと言う。

「プリキュアウルトラ！キーツク！」

『ボルケニツクアタック！』

『クラックアップファイニツシユ！』

エースがソードを振り回し、遠心力を利用して、全身刃と化したソードとドライバーを操作した二つのライダーキックが船体にぶつかり、左舷に大きな穴を穿った。

「今の内だ！行けえ！」

クローズとエースとソードが入り口を守る。

「こつちだマナ！晴夜」

開いた入り口はどうやらクラリネットへの近道になったようだ。マロはその中に飛び込みビルドとハートを呼んだ。

「ありがとう、みんな！」

「後は頼むよ！」

ビルドとハートは船体の外で戦いを続けている仲間たちに向かって叫び中へと入る。

「またこうして、マロと一緒に走れるなんてうれしいよ！」

「ぼくだって！」

（よかつた、二人に笑顔が戻って）

走り続けると迫りくる忘れられたモノ達の攻撃を次々かわしながら、いくつもの分かれ道を越え、マロとビルドとハートは飛行船の最深部へと進んでいった。

たどり着くとそこは、不思議な円筒状の空間だった。忘れられたモノ達の瓦礫で出来た、しかしそれまでの凸凹の道々と違い、滑らかな壁面が周囲を覆っている。

「ついにここまで入り込んできたか」

クラリネットの不協和音を含んだくぐもった声で言った。

「愛をなくした悲しいクラリネットさん！このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻してみせる！」

胸のハートマークを作りいつもの決め台詞を叫ぶと、三人に道を作ったクローズ達も合流した。

「みんな！行くよ！」

『タンク！』

フルフルボトルをドライバーから外し数回振り栓を回し、青いランプが出た瞬間半分
に割ってからもう一度ドライバーに差し込む。

『タンク&タンク！ビルドアップ！』

『ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！』

レバーを回すのと同時に小型のタンクユニットが現れ宙に浮かぶ。

「ビルドアップ！」

『Are you ready? オーバーフロー！』

ラビットラビットのアーマーがパージされ、タンクのユニットがビルドに装着され
る。

『鋼鉄のブルーウオーリア！タンクタンク！ヤベーイ！ツエーイ！』

「マジカルラブリーパッド！」「」

ビルドがタンクタンクフォームになると同時にハート達もマジカルラブリーパッド
を出現させる。

『フルフルマッチ デース！』

フルボトルバスターにフルフルボトルを差し込むと五人はキュアラビーズを詰め込
み、マジカルラブリーパッドの中央にそれぞれのシンボルマークを表したエネルギー

カードを出現した。

「『私達の力をキュアハートの元へ！』」

四人がエネルギーカードをキュアハートのマジカルラブリーパッドに送る。

四枚のエネルギーカードがハートのマジカルラブリーパッドの画面の上に載り、ハート形を描き、五枚のカードを合わせた強力なエネルギーカードを生成する。

「プリキュア！ラブリーストレートフラッシュュー！」

『フルフルマツチブレイク！』

巨大な青いエネルギー弾と五人の愛の波動がクラリネットに向けて放った。

だが、放たれた攻撃はクラリネットの作り出した一瞬の闇の波動によってかき消されてしまう。

「そんなものが効くものか！」

そう言い放つと、静かに演奏し始めた。するとこの巨大な空間のどこからともなく出現した忘れられたモノ達の遺骸が縦横無尽に襲い掛かる。

「えいっ！」

狭い空間での戦いに防戦一方となる。

すると、別方向から来る攻撃にハートのピンチを悟ったマロが体を犠牲にして攻撃を受け止めてた。

「マナー・ああっ！うっ…！」

受け止めるとハートの方へ体を向け、床に静かに横たわった。

「あ…マロ！」

ハートがマロに駆け寄り、ハートはとっさにマロを抱くと、また二人に襲ってきたがビルドがフルボトルバスターを放ち二人を守ると二人に駆け寄る。

「マロ、しっかりしろ！」

ビルドが話しかけるものの、マロの反応は既に薄い。

「マナ…！」

何度かの呼びかけの末、弱々しい声で大切な主人の名を呼んだ。

「大丈夫…！」

「でも…！」

するとマロがビルドを見つめる。

「ビルド…これを…使って！」

マロの体内から放たれた光が拓人から貰った射手座座が記されたボトルに当たり、ボトルが金色へと変わる。

そして、ビルドの手へと置かれた。

「これは…！」

「君と君の父親との思い出からだ．．．」

するとアトミックウイングガジェットが後ろに現れ、振り向いた。

「いけるか？」

ビルドが聞くと、ガジェットは頷いた。

「マロ、使わせてもらおうぞ！」

ビルドは立ち上がりボトルを強く握りしめる。

「さあ、実験を始めようか」

『マックス！ハザードオン！』

トリガーを起動し、フルフルボトルを外しガジェットに金色のボトル——サジタリア
スボトルを差し込む。

『アトミックサジタリアオ！』

ドライバーのレバーを操作すると、タンクタンクアーマーが外れ後ろから金色のサジ
タリアスのユニットが現れた。

『Are you ready?』

「ビルドアップ！」

ハザードフォームに金色に輝くパージされたサジタリアスアーマーがビルドに装着
した。

『オーバーフロー！金色に輝く翼！アトミックサジタリアス！ヤベーイ！カガヤーケ
！』

「勝利の法則は、決まった！」

ハザードフォームに黄金の輝きを放つサジタリアスのユニットが装着され、後ろには翼——『ゴールドアトミックウイング』が装着されていた。

「すげえ……」

「あのガジェット、こんな姿になるのかよ……」

アトミックウイングが新たなビルドのフォーム、『アトミックサジタリアス』へとなつたことに驚いた。

「こけ脅しだ！」

無数のカメラがビルドに襲いかかるが翼を広げてかわし、ドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

『ハザードフィニッシュ!』

ビルドの右手に黄金に輝くエネルギーが溜まって行く。

『アトミックフィニッシュ!』

高速拳となったライダーパンチが一瞬にして全てのカメラを破壊した。

「速い……」

目にも止まらない高速拳は誰にも捉えなかった。

一方、ハートには分かっていた。マロと自分にとって、これが最後のお別れになることを。

「そんな顔しないで。会えないと思っていたマナにもう一度出会えたんだ。もう思い残す事はないよ……戦って！ぼくのぶんまで」

マロはそう静かに別れの言葉を言い終わると、ぐったりとその身を床に落ちつけた。すると再び不思議なことが起こった。真っ白なマロの亡骸が突如輝きだしたかと思うと、その体のちようど真ん中、心臓のあたりから何やら光り輝くものが生まれ、こちらに向かって飛び出してきたのだ。

マロの毛並みそっくりの真っ白なプシユケーをそつと抱きしめる。すると、プシユケーと一体となったキュアハートの体が輝きを放ち始めた。

「これは……！」

巨大なエネルギーの放出と共にキュアハートの体が徐々に空中へ持ち上がっていく。

まぶしい輝きの向こうにかすかに見えるのは、長く伸びた流れるようなフリルスカート、フリルのスリーブ。そして連なるハートのティアアラ。

「何……!」

忘れられたモノ達の憎しみの化身、クラリネットもこの未知のエネルギーの爆発には驚きを隠せない様子。

「キュアハート・エンゲージモード!」

マロとマナの愛が作り出した新しいフォーム。キュアハート・エンゲージモードに変身を遂げたハートは、胸の中でブーケへと姿を変えたマロの魂を天へと返すと、誓った。「マロ、見ててね。あなたの思いをもてあそんだあいつをあたしはゆるさない!」

ブーケを解放したキュアハートは、手の中にあつた光を大きな光の弓矢へと変えた。「人々に忘れられたモノたちが生まれ続ける限り、わたしは不死身だ!」

クラリネットが叫ぶとビルドも隣に現れる。

「それでも、大切にしてくれる人はいる!けど、みんなの未来を壊そうとするお前を絶対に許さない!!」

『フルボトルアロー!』

ビルドの前にフルボトルアローという、カイゾクハッシャーとは違った新たな弓矢が現れた。

『アトミックサジタリアス!』

アトミックウイングガジェットを差し込み弓矢の弦を引くと徐々にエネルギーが溜

まっっていく。

クラリネットは忘れられたモノ達の最後の叫びを、その運命の絶叫を響かせながら、ビルドとハートを迎え撃つ。

「それでもわたし達はあなたに勝つ！」

「俺達の未来へと繋がれえー！」

『アトミックブレイク！』

ビルドとハートは、渾身の力で弓を引く。弓の張力が最大に高まり、二つの放たれた弓は巨大な光となり、一直線にクラリネットめがけて飛んだ。

「ぐあああああああああああああー！」

クラリネットは断末魔の叫びを上げ、次第にその闇の力場を薄くしていった。

辺りが開いた窓に洗いざらしのカーテンがはためく、白で統一された室内に、その子はいた。

「でかしたぞ、あゆみ。元気な女の子じゃないか」

「名前はとうするんじゃ？」

その場にいた年配の男性が、生まれた赤ちゃんは名前はなにかと聞く。

「いやあ・・・それがまだ・・・」

散々考え悩んだ末、いまだに名前を決められていなかった父親は、少しバツの悪そうな笑みで頭をかく。

「なんだい、まだ考えてなかったのかい？　しょうがないね」

「そんなこともあるうかと思つて、わたしが考えておいたよ。愛と書いてマナ。相田マナというので、どう？」

「マナか・・・いいですね！」

「愛がみなぎつてきそうな名前ね」

母親も、自分の母親がつけた名前に賛成した。

「きつとお前みたいなおせっかい焼きな人間になるよ」

「あんだ、一言多いよ！」

皆が優しいまなざしでマナの名を呼ぶ。赤ちゃんはそれを聞いて嬉しそうに笑った。

——こうしてマナと名付けられたこの赤ちゃんは、生まれて最初に出会った人間である父や母、祖父、祖母。つまり家族から、愛という言葉を受け取ったのだ。

「元の世界にもどつたみたいね」

元居た大貝町、九人が到着し高台から街を見下ろしていた。そして空から降り注ぐ幾千筋もの輝き。

「あの輝きは……」

「どこに向かつてるんだ……」

「帰って行くんですわ。オモイデにとらわれていた人々のたましいが……」

要塞の保管庫に収められていた街の人々のオモイデのフィルムは、現代の大貝町へと降り注いだのだ。皆がその光景を眺める。

「マナ、それ……」

「マロだよ、最後まであたしを守ってくれたんだ」

晴夜がアトミックウイングに差していた金色になったサジタリアスのボトルを見ながらマナの手の内にあるプシユケーを見る。

「ありがとう、お前のおかげだよ」

それは、力を放出し、天へと帰っていったマロのプシユケーだった。魂が抜け石化した姿となつてまで、彼はこうしてマナを守ろうとしたのだ。

「あんたのおかげでマロの魂は救われた。礼を言うよ」

謎の妖精ベベルは知り合いというマロのプシユケーを連れて元居た場所へと帰っていくという。一人一人と握手し、別れの挨拶を済ませたベベルはマロのプシユケーを引

き連れ、ゆつくりと空へと浮かび上がる。マナは、マロのプシユケーに最後のお別れをした。

「マロ！」

「この子のたましいはわたしが連れて帰るよ。今度こそ道に迷わないようにね」

「あの・・・！」

しかし、晴夜がベベルに待ったをかける。

「こいつも、連れて行って下さい！」

アトミックウイングを連れて下さいと言う。

「こいつもマロのプシユケーを守りたいみたいです」

アトミックウイングガジェットが頷く。

「わかった。よろしく頼むよ」

『くっくく』

ガジェットは鳥の様な鳴き声を響かせながらわかったと頷きマロのプシユケーの隣につく。

「あの・・・またマロと会えますか？」

「モチのロンさ！」

「えっ！」

ベベルの言葉にマナはハツとした。

——モチのロン、それは忘れるはずもない。あのマナの祖母の口癖だったからだ。

「これからは時々、空を見上げてマロの事を思い出してやるといいよ」

別れ際にベベルは言った。

「おばあちゃん……！」

「えっ?」

マナのつぶやきに皆が振り返ると、マナの目から涙があふれ出していた。マナはあらためて気づいたのだ、あの夏、自分が失った大切な家族、マロとおばあちゃんの愛の大きさに。

「ありがとう、マロ。ありがとう、おばあちゃん。また、会おうね!」

空を見上げると龍牙が晴夜に近づく。

「いいのかよ?あのボトルとガジェットがあれば……」

「いいんだよ。あいつが行きたいと思っただから行かせてやったんだよ」

ガジェットを託した事を後悔していなく、龍牙も相変わらずだと呟く。

「そういえば、未来で晴夜さん何でいなかったんでしょう?」

「幻冬が未来で何で晴夜がいなかったと言う。」

「あの中にいませんでしたから?」

「忘れてたとか？」

「それは、ないでしょう」

「ねえ、そういうえばマナの相手も見えなかったよな？」

六花が言うようにそういうえばマナの相手も見えなかった事に気付く。

『まさか・・・』

龍牙達が晴夜の方を見る。

果たしてマナの結婚式の相手は誰だったのか、それは謎のままだった。

——それから、しばらくして。

仮面ライダーエボルとキンググジコチューへと最終決戦へと向かった頃、晴夜とマナはお互い告白し付き合い始め——

「——おっと失礼。ここからは第39話の先を見ていない皆様にとっては、未来のお話、でしたね。先まで読みすぎました・・・」

終
わ
り

ドキドキ&サイエンス! last science編

第0話 ビルド&NEWSTAGE3

ここは、妖精界の妖精達の学校、妖精学校である。ここの生徒は皆、未来のプリキュアの妖精になろうとしている妖精が多い。

「二人とも、近頃よく頑張ってますね」

そんな中、教室で先生が二人の妖精：グレルとエンエンを褒める。

「まーな。なんてったって俺達の夢はプリキュアの妖精になる事だから。な」

「頼もしいですね」

このグレルとエンエンは、かつて妖精学校で起きた事件を引き起こした二人だった。

ファントムと呼ばれる存在にプリキュアと数人の仮面ライダーによつて事件が解決して以降、プリキュアの妖精になると言う夢を持ってすっかり頑張っていた。

「実は、君達に頼みたい事があります」

「頼み?」

「最近、新しいプリキュアが誕生しました。その名も、ハピネスチャージプリキュア!」

「ハピネスチャージプリキュア?」

先生はハピネスチャージプリキュアと言う新しいプリキュアが誕生した事を二人に話す。

「分かっているのは名前だけ。そこで、君達二人でこの教科書のために新しいプリキュアの事を調べて来て欲しいのです」

調べて欲しいと頼み、二人にプリキュア教科書を渡す。

このプリキュア教科書にはドキドキプリキュアまで書かれている。

しかし、今はプリキュアだけではなく、名前と写真だけで数人だが、仮面ライダー達も追加されていた。

その中でも、『仮面ライダービルド・仮面ライダークロース』は妖精学校の生徒みんなが注目していた。

ビルドとクロースこと、『桐ヶ谷晴夜・上城龍牙』はフアントム、プロトジコチュー、さらには、最強の生命体・エボルトを倒した為、既に妖精界では人気なのだ。

「お、俺達が?」

「そんな重大な事を?」

「頑張り屋の君達を見込んでの事です。それに、プリキュアの傍にいれば、学校で学べない事も色々学べるでしょう。行ってくれますか?」

「行ってきまーす!」

グレルとエンエンは、ハピネスチャージプリキユアを調べるために、人間界へ向かった。

しかし、ある日の夜、一人の女の子がクマの姿をした怪物に迫られる夢を見ていた。襲われそうになったその時、怪物——悪夢獣は掃除機で吸い込まれた。

「大丈夫？」

少女が上を見ると、母親とその子供と思われる妖精がいた。

「悪い夢を見たんだね。でももう大丈夫。悪夢は僕のお母さんが食べちゃったから」

「あなたは？」

「僕はユメタ。ようこそ！夢の世界へ！」

その妖精がユメタと名乗ると、周りの荒地が花畑へと姿を変えた。

「君へのプレゼントだよ。全部あげる」

「本当？？」

ユメタがそう言うと、シャボン玉に入ったお菓子やおもちやが少女の近くに浮かぶ。

「ねえ、僕と友達になってくれる？」

「うん！遊ぼうユメタ！」

ユメタと少女は一緒に走っていった。

「遊びなさい。楽しい夢の中で。永遠に」

ユメタの母親——マアムが微笑みながらそう言った。だが、これが大きな事件の始まりだった。

その翌日。

ここは、横浜の桐ヶ谷家。外には自作で二人で作り、出来た研究室がある。今は仮面ライダービルドとクローズの新たなアジトの場所である。

「よし、直った!」

「お、直せたのか?」

机には、フルフルラビットタンクボトル、クローズマグマナツクル、ラビットタンクスパークリングが置かれていた。

「天才科学者の卵ですから!」

カッコつけて言うあいからわずだなど呆れる龍牙。今机に置かれているのはプロトジコチューとエボルトの戦いで壊れたボトルと武器。あれからしばらくして、ようやく完璧に直す事が出来た。

「さって、そろそろソリティア行くか？」

「おお！」

今日はみんなとソリティアでお茶会する約束しているので、これから大貝町にあるソリティアへ向かう。

すると、部屋に流れていたテレビのニュースの方に目がいく。

『多くの子供達が眠り続ける事件が・・・』

「またか。なんか、最近多くねえか？」

「眠り続ける子供達の事件か・・・」

テレビに映っていたこの事件に晴夜達は、何やら不信に感じていた。

一方、ソリティアでは二匹の妖精が見えた。

「ここがソリティアか・・・」

「うん。ドキドキプリキュアのみんなが集まる場所だね。それと、ビルド達もここにいらって」

グレルとエンエンは、ソリティアの前に来ていた。

「みんな僕達の事覚えてるかな？」

「覚えてるに決まってるんだろ。だって友達じゃないか」

「でも・・・」

「勇気出せよ！お前は晴夜と会って勇気を持つてるようになったじゃあねえか！」

以前の事件の時に晴夜はエンエンにスパークリングを渡し、『ヤバくなったら俺の所まで持つて来い』と言った。エンエンとグレルはその時、怖いけど勇気を持つて晴夜にスパークリングを渡すことが出来た。それ以来勇気を持つ大切さを学んだ。

「うんー」

突然ドアが空き、亜久里とアイちゃんがグレルとエンエンを見つめていた。

「こんにちは」

「こんにちはは〜」

アイちゃんの可愛さに二匹はメロメロになった。

「こんにちはは、妖精さん。何かご用ですか？」

「妖精？」

二階にいたマナ達が見る。

「あつ！グレルだ！」

「エンエンも久しぶり！」

同時に、バイク音が聞こえ、ソリティアの前に一台止まる。それはマシンビルダーに乗った晴夜と龍牙で、二人もソリティアに着いたようだ。

「あれ！グレルにエンエン！」

「久しぶりじゃねえか！」

「晴夜！」

エンエンが晴夜に飛び込んだ。

「久しぶりだな、エンエン」

「うん！晴夜！僕、あの時、君のおかげであれから勇気出せように強くなれたよ！」

あの事件がきっかけで、エンエンは強くなれたと晴夜に言う。

「そうか！でも強くなれたのはエンエン、お前だよ！」

「うん！」

晴夜に笑顔で言うと、晴夜達はソリティアに入る。

「新しいプリキュア？」

「ハピネスチャージプリキュア？」

「ああ。最近生まれた新しいプリキュアだ」

グレルが新しく誕生したハピネスチャージプリキュアについて話す。

「あたし達の後輩か〜」

「どんな子達なの？」

「俺達もそれを調べに来たんだ」

「でも、どこにいるか分からなくて・・・」

「新しいプリキュアの妖精、リボンなら知ってるシャル」

エンエンがどこに行けばハピネスチャーゼプリキュアに会えるのかと悩んでいると、シャルルが新しいプリキュアのパートナー妖精である・リボンを知っていると話す。

「えっホントか？」

「連絡取って貰えるかな？」

「任せるシャル！」

シャルルがコミュニケーションへと姿を変え、連絡を取ろうとする。

「本当シャルルって、知り合い多いんだな・・・？」

「そういや、晴夜！お前あの伝説のプリキュアでも倒すこと出来なかったプロトジコチューとエボルトを倒して、今妖精界はお前に注目してるんだよ！」

グレルが妖精界でプロトジコチューとエボルトを倒し、トランプ王国を取り戻したビルドの事が話題となっていることを教えた。

「そうか。でも、エボルト達を倒せたのはマナや龍牙、みんなのおかげだよ！」

「晴夜……」

そう言われたマナが晴夜を見つめる。

「はーい！そこまで！」

六花が二人の間に入った。それもそのはず、晴夜とマナは今は付き合っているため、ほつとくと、色々と面倒な事になる。

「ねえマナ、この妖精達は誰？いつ知り合ったの？」

そこにレジーナがマナにエンエン達について質問をして来た。

「グレルとエンエンって言ってね、妖精学校の生徒なんだよ」

「妖精学校？」

「プリキュアの妖精になるために勉強する学校だよ。シャルル達もここを卒業したんだ」

二人と会ったのは、まだ六人で戦ってた頃で、妖精学校でプリキュアパーティーを開くって聞いて行ってみた時だった。ファントムと戦ったりして色々あったが、その後はみんなで妖精学校を直して助っ人に来た先輩ライダーと一緒にプリキュアパーティーを開いたのだ。

それから数日後、待ち合わせ場所でリボンを待っていた。

「早く会いたくないよ！楽しみ過ぎて胸のキュンキュンが止まらないよ！」

「そんなに焦らなくても、もうすぐ会えるよ」

ありますが時計を見ると約束の時間を過ぎていた。

「でも・・・少し遅いですわね」

「約束の時間過ぎたけど・・・」

「もしかして時間忘れてるとか？」

「そんな事は無いと思いますが・・・」

亜久里がレジーナにそう言うと、大型モニターに流れたニュースに全員が目を移す。

『次は、子供達に広がる謎の現象についてです。数日前から、幼い子供達が眠ったまま目覚めないと言う謎の現象が起きています。病院で調べても異常は無く、原因は不明との事です。眠り続ける子供達は日を追って増えています』

街頭のモニターでは、眠り続ける子供達についてのニュースをやっていた。

「子供達が眠り続ける・・・？」

（・・・でも、何で子供と限られるんだ？）

ここに来る前に見たニュースでも思っていた事だが、晴夜は子供と限られているのが

気がかりだと考えていた。

「シャルル〜！こつちですわ〜！」

すると、後ろから声が聞こえた。

「あつ！リボンシャル！」

するとリボンが驚いて尻を打った。

「大丈夫？」

「あつ、はい！」

マナが茂みの中に首を突っ込み、大丈夫かと尋ねる。

「初めまして。妖精のリボンと申します。時間に遅れてゴメンなさい・・・実はトラブルが起こりまして・・・」

「トラブル？」

「ちよつとマナ！」

「早く！茂みから出ろ！」

「街中の茂みに首を突っ込むなんて、一流のレディのする事ではありませんわ！」

マナが茂みに顔を突っ込んでいるといつの間にか周りから騒がれていた。

それからしばらくし、リボンの案内で、晴夜達はハピネスチャージプリキュアのいる

大使館へと向かい、到着した。

「めぐみ！起きて！めぐみ！」

ソファでキュアプリンセスの白雪ひめが、眠り続けているキュアラブリーの愛乃めぐみの頬を引っ張ったり無理矢理目を開けようとするが、彼女には何の反応も無かった。

「——と、このように。うちのめぐみがソファでうたた寝したまま、全く起きなくなってしまったのです……」

「なるほど……確かにトラブルだね……」

リボンが事情を説明し、その様子を晴夜達は見ていた。

「この二人が新しいプリキュアか？」

「みたいだな。でも、今のこの状態って……」

だが今の彼女の状態は、彼らにとってどこか見覚えがあるような状態だった。

「これって、ニユースで言ってたのと同じじゃない？」

「えっ？」

今のめぐみ状態はニユース出ていた子供達の現象と同じだと感じた。

「子供達が目覚めないと言う、不思議な現象が起こっているのです」

「それで、全然目を覚まさないって……」

めぐみの今の状態がそれと同じだと説明する。

「じゃあこのままめぐみ起きないの!?!?」

「ちよつと待って」

ひめがどうしようとして狼狽していると、上から髪色の青い男性が降りてきた。

「あの人は?」

「彼はブルー。地球の守り神です」

「神様!?!?マジで・・・神の会うの二度目だ」

神と聞くと晴夜は、以前ファントムとの事件で会った仮面ライダー鎧武・・・あの人も今は宇宙の神様だと聞いていた事を思い出した。

そのままブルーはめぐみの頭に手を触れる。

「微かに妖精の力を感じる」

「妖精の・・・?」

めぐみから微か程度だが妖精の力を感じるとブルーが言う。

「それって、この現象は妖精が引き起こしているんですか?」

「おそらく・・・みんな、めぐみの夢の中へ入って、調べてくれないか?」

「夢の中へ・・・」

「そんな事が出来るのですか?」

「こちらのブルー様は、地球の神様であらせられますわ。それ位お茶の子さいさいですわ」

リボンが説明するとみんな『へえ』と感心する。

「では行くよ。鏡よ鏡、みんなを夢の中へ！」

ブルーの力によって、晴夜達は夢の中へと向かった。

すると、グレルとエンエン以外の妖精を除いた全員が上から落ちていた。

「うわああああ!!?ぐふう！」

先に晴夜と龍牙が落下し、その上からほかのメンバーが降ってきて、そのまま下敷きとなった。

「いって・・・」

「みんな、重いからはやく降りてくれ！」

「彼女を重いなんて言わないで！」

「違うよ！何人も乗ってるから重いんだよ！早く」

晴夜がマナにそう言うのとみんなが晴夜と龍牙の上から降り、二人もようやく立ち上ると上からブルーの声が聞こえた。

『めぐみや子供達に何が起こっているのか、見て来ておくれ』

「もー！神様いきなり過ぎるわー！」

ひめが怒鳴ると、みんなは辺りを見回す。

「ここは・・・」

「ここが、夢の世界か・・・」

そこは、まるで一つの島の様に広い場所だった。

「亀が空を飛んでる!?!」

「美味しそうなスイーツ!・・・では無くて、雲に乗っています!」

「なんて素敵な世界ですの!」

いつの間にかマナは雲に乗って遊んでおり、まるで孫悟空のような姿だった。

「ちよつとマナ!」

「アタシにも乗らせてマナ!」

「もう、晴夜君止めてーって・・・無理か」

こんな、科学で測れない世界。晴夜が黙っているわけがない。

「おおく!すごい!これが夢の世界!科学でも計れない世界!最高だ!テンション上がる!」

髪を押さえながらハイテンションとなりながら走り出す晴夜。

「この世界の構造どうなったのかな?この成分はどうなったのかな?テンション上が

るく！ウオー！あれもー！ー！」

なんだか、この世界で一番生き生きしてるような様子だった。

龍牙達はいつ見ても相変わらず。まあ、同然こうなるか、と思っていた。

一方のひめはどうなってるのこの人、という風に見ていた。

「・・・あの人大丈夫なの？」

「いつものことよ」

「あいつはただの科学バカなんだ・・・」

新しい発見をするとハイテンションとなるのは、晴夜のいつもの悪い癖だとひめに説明すると、上の方を見た。

「いたー！おーい！」

フグの上に乗って楽しんでいたためぐみを見つけた。

「あれ？ひめー！やつほー！」

ひめ達に気付いて手を振ったその時、滑ってフグから落ちてしまう。

「危ない！」

落ちそうになった所をマナが救い、ハピネスチャージプリキュアとドキドキプリキュアのピンク同士が出会った。

「こんにちは！初めまして！」

見事にハモった二人は笑い合った。

「助けてくれてありがとう！あたし、愛乃めぐみ！」

「あたしは相田マナ！」

「よろしくね！」

これも見事にハモると、そのまま地面へと着地する。

「もーめぐみ！何のんきに遊んでるのよ！」

「だって、ここすつごく楽しいんだもん！そこらのお菓子も食べ放題なんだよ！」

「マジ!? 夢みたい！」

「夢ですわよ……」

リボンに突っ込まれるていた。一方、龍牙とグレルとエンエンに晴夜に駆け寄る。

「なあ、おい！そろそろ……ってダメか……」

「この成分はどうなってだろ♪どんな物理から……いや、最高だなく♪」

戻ろうと言おうとするが、晴夜の目はまだ調べたいと訴えている。すると、エンエンが一人の少女と遊んでいる妖精に目がいく。

「ねえグレル」

「お、何だ？」

「あそこにいるの、ユメタじゃない？」

「ホントだ！おーい！ユメター！」

「グレル！エンエン！どうしてここに？僕の事覚えてるの？」

ユメタと言う妖精は、グレルとエンエンの友達だった。

「え？当たり前だろ。俺達友達じゃないか！」

「友達・・・？」

友達だと聞いたユメタは後ろへ下がろうとする。すると、後ろの何かに当たった。振り向くとどつから取り出したのか、なんかの計測器を持った晴夜がいた。

「グレルとエンエンの知り合いか？」

自分の世界から戻ってきた晴夜が尋ねるとマナ達も駆け寄る。

「ああ。コイツはユメタ。前に妖精学校の同級生だったんだ」

「へえ、俺は桐ヶ谷晴夜よろしく！」

自己紹介するとエンエンがユメタについて話す。

「ユメタは夢の妖精、バグなんだよ」

「バグは悪い夢を食べてくれるって言うけど、本当なの？」

「悪い夢って食べても美味しくなさそうね」

「食べるの？」

ひめがユメタにそう聞くと頷いた。

「うん。でも僕はまだ悪夢を食べられないんだ。怖くって・・・」

「そっか、俺達と同じだな」

「えっ?」

「僕らはプリキュアの妖精になるために勉強中なんだ」

「お互い頑張ろうぜ!」

二人が話していると、一人の少女が目映る。

「ん?」

「? マナ、どうしたの?」

「あの子・・・ニュースで映ってた」

ユメタとかくれんぼをしていた少女が、先程ニュースで見た子と同じだと言う事にマナが気付く。

「えっ?と言うことは・・・」

「ここにいる子供達は・・・まさか現実で眠り続けている子供達の意識なのか?」

「マジかよ・・・!」

この夢の世界にいた子供達は、全員現実で眠り続けている子供達の意識だった。

「ねえ! 教えてくれないか!」

「おいユメタ! これどう言う——!」

晴夜とグレルがどう言う事かと言おうとしたその時、突如竜巻が晴夜達の周りに発生した。

竜巻が消えると、そこは先程の場所とは違う荒れ地だった。

「な、何事!?!」

「俺達、場所を移動されたのか?」

「子供達は!?!」

「子供達はみんな遊んでいるわ」

マナ達の前に、掃除機に乗ったユメタの母親、マアムが現れる。

「あなたは!?!?」

「私は夢の妖精マアム。ユメタの母親よ」

「ユメタの……」

「お母さん……?」

「もしかして、あなたが子供達をこの世界に……?」

「あそこはユメタと子供達の大事な夢の世界。勝手に入ってはダメよ。さあ、そこから出ておゆき」

目の前に巨大なドアが現れて開く。

「子供達を残しては出て行けないよ!」

「何故子供達を夢の世界に閉じ込めているの!?？」

「私はユメタの夢と笑顔を守りたいだけ」

「ふざけないで！アンタの考えてる事は、ジコチューそのものよ！」

「邪魔する者は許さない！」

マアムはそういうと彼女の尻尾の掃除機から、悪夢獣が出て来た。

「何か凄いの出て来た！」

「私が吸い込んだ悪夢よ。さあ、痛い目に遭いたくなかったら、出ておゆき！」

「言ったでしょ！子供達を置いては行けないって！みんな！行くよ！」

マナの声とともにドキドキプリキュアのメンバーが構える。

「[[[[プリキュア！ラブリンク！]]]]」

「[[[[プリキュア！ドレスアアップ！]]]]」

ラブリーコミュニケーションとラブアイズパレットを操作して、体が光り輝き出し、姿を変え

ようとする。

「みなぎる愛！キュアハート！」

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

「ひだまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

「勇気の刃！キュアソード！」

「愛の切り札！キュアエース！」

「運命の切り札！キュアジョーカー！」

『響け！愛の鼓動！ドキドキプリキュア！』

六人が久々に並んで名乗りをあげる。

「プリキュア・・・あの子達が・・・」

「誰だろうと、ユメタの笑顔を奪う者は許さないわ！悪夢！」

まず始めにハートが攻撃を繰り出し、回し蹴りを放ってロゼッタの方に吹き飛ばす。

「ロゼッタ！」

「はい！」

背中にロゼッタウオールを叩きつけ、攻撃をこれで防ぐ。

距離を取って跳躍し、全身を回転させてロゼッタに向かって飛んだ。

「危ない！」

「プリキュア！ロゼッタリフレクション！」

「プリキュア！スパークルソード！」

ロゼッタがロゼッタリフレクションを展開して防いでいる間に、横からソードがスパークルソードを放った。

すぐさま近づいて後ろを取り、蹴りを繰り出して上へ吹き飛ばした。

今度はダイヤモンドが攻撃を繰り返し、隙を見つけて両脚で首を抑えて回転し、悪夢獣を地面に叩きつけた。

「これも喰らいなさい！」

上からジョーカーがミラクルドラゴングレイブから大量の衝撃波を放った。

「カッコいい〜！」

「私達の出る幕は無さそうね」

「めぐみさんとひめさん、ドキドキプリキュアが頑張ってくれば、自分達は戦わなくていいって思ってたよね？」

「ギクッ！」

「凶星かよ……」

「呆れましたわ……」

「まあ、これなら俺達も戦う必要もないか」

戦わなくてもいいと思っていたためにツツコミながらも、晴夜と龍牙も変身する必要がないと呟く。

「ときめきなさい！エースショット！ばきゅ〜ん！」

と言ってる間にエースショットが命中し、悪夢獣が消滅した。

「凄い……」

「流石、エース！なあ、晴夜！・・・晴夜？」

（なんだ・・・あの落ち着いた表現・・・何かあるのか？）

悪夢獣が消されてもマアムは動揺した顔を見せなかった。

「流石はプリキュアね。でも・・・！」

だが、倒した悪夢獣が復活してしまった。

「倒した悪夢が！」

「復活するなんて聞いて無いわよ！」

「そういう事か、どうりで余裕ある訳だ！」

それを見て、晴夜と龍牙はまずいと感じ出す。

「まずいな、仕方ない俺達も！」

「おお！」

「悪夢を倒せるのはバクだけよ！出ておゆき！」

晴夜達二人がドライバーを装着しようとした瞬間、晴夜達が立っている地面が開いた。

「ちよ、まだ・・・最悪だ〜！」

全員が落ちていき、現実世界に強制帰還してしまった。

残されたのは、グレルとエンエンが持っていたプリキュア教科書だけだった。

「プリキュアが来た……」

「大丈夫よ。ユメタにはお母さんがついてるわ。ユメタの大切な友達、大切な場所、大切な夢、必ず守ってあげる」

そう言いながら、彼女は優しくユメタを抱きしめる。

その頃、晴夜達は夢の中から大使館へと戻っていた。

「疲れたー……」

「あんな夢を見た後じゃね……」

「これからどうする？」

「子供達を放っておくわけには行かないわ」

「しかし、夢の世界でどう立ち向かえばいいのか……」

「倒しても復活するんじゃないや、どうしようもねえな」

皆が悩んでいると、マナが立ち上がる。

「マナ？」

「応援を呼ぼう！プリキュア全員に連絡を取って、力を貸して貰おうよ！」

そう言うのと、それを聞いていたグレルとエンエンが焦り出す。

「ま、待ってくれ！プリキュア全員と仮面ライダーでユメタをやつつけるのか!??アイ

「ツは悪い奴なんかじゃない！」

「…そうだね。グレルとエンエンの友達だもんね」

「それに、これからどうやってあの夢の世界で、次はどう戦うか勝利の法則を決めねえとなー！」

「子供達をどう助けるか、ユメタ君とどう話すかみんなで考える。そう言う事よね」

「そう言う事！」

「ふーっ……」

グレルとエンエンがホツとした表情を浮かべる。

「大丈夫、みんなで何とかしよう！」

「そっか！そうだな！」

「よろしくお願いします！」

「今日はもう遅い。決行は明日にしよう」

「じゃ、明日のためにおおもりご飯特製スタミナ定食でも食べますか！」

「え?!? 何それ?!? あたしも食べたい！」

「私達は帰るの」

「ええーっ、そんなー」

既に時間は夕方を回っていたので、決行は明日にする事となった。

晴夜と龍牙は親戚の家に泊まるとしたが、生憎留守のため、結局はマナと真琴の家に泊まるために大貝町に戻り、グレルとエンエンは大使館の方に泊まると言った。

大貝町のマナの家へと到着した。

「ごめんな、泊めてもらって」

「ううん。気にしないで！それより早く！早く！」

マナは晴夜の腕を引っ張り、一緒にぶたのしっぽ亭へと入る。

その夜、夢の世界。ユメタを含めた子供達が眠ったのを確認したマアムは宙に浮かび、プリキュア教科書を開いた。

「MHプリキュア！スプラッシュスタープリキュア！プリキュア5・・・そして、ドキドキプリキュア！」

上空を円が囲むように何十の数の檻が現れた。

「ゆっくりお眠りなさい。プリキュア！」

マアムは自分の力によって、プリキュア教科書に書かれていた全てのプリキュア達を夢の世界へと閉じ込めた。

「プリキュア、戦いなど忘れて安らかに、永遠におやすみ」

その様子をたまたま目を覚ましたユメタが見ていたが、雲の布団の中に隠れて見なかつた事にしたのだった。

(・・・この仮面ライダーって、誰なのかしら。この教科書に書かれているのは、何人が挙げられているけど名前と仮面を付けた姿だけで顔がないから、眠らせられない・・・まあ、例え来ても悪夢の餌食にしてあげる)

マアムの手によつて、仮面ライダー達とハピネスチャージプリキュア以外が永遠の眠りについてしまった

そして、翌日・・・

「晴夜！晴夜！」

「うっ・・・ふわあ、何シャルル・・・？」

「晴夜・・・マナが起きないシャル・・・」

「そっか・・・えっ!!？」

すぐに起き上がり寝ているマナを揺する。だが、マナは気持ち良さそうに寝ていて反応がなかった。

「マナ……まさか……」

晴夜のビルドフォンから着信音が流れた。

「龍牙！」

『大変だ！真琴が寝たまままで一向に起きねえんだ！』

真琴も同じだと知り、おそらく六花にありすも……

「とりあえず、昨日の大使館に行くぞ！」

『わかった』

電話を切り、急いで着替えを終え大使館へと向かう。

「シャルル、行つてくる」

「頑張るシャルル！晴夜！」

晴夜はマナの部屋を後にして外に止めてあるマシンビルダーへと乗り込みヘルメットを被る。

（マナ、必ずお前とみんなを助ける！）

マシンビルダーに乗り、エンジンを走らせ、晴夜は大使館へと向かった。

しばらくし、晴夜と龍牙はハピネスチャージプリキュアのいる大使館へと到着した。

「となると、昨日の戦いで落としたプリキュア教科書を使い、君達以外を全員眠らせた」

「そういう事になります。幸い、あの教科書には俺達の事はあまり書かれてたかったから助かりました」

晴夜がこの状況の悪さをみんなにわかりやすく説明した。

「子供達と先輩を助けるために、もう一度夢の中へ行こう！」

「ああ、俺達四人で行こう」

「俺も行く！」

「僕も！」

「グレル、エンエン・・・」

グレルとエンエンも一緒に行こうとする。

「子供達もプリキュアもユメタも、このままにはしておけない！」

「分かった、一緒に行こつ！」

「でも、まともに行っても勝てないわ」

「なら、二手別れて行動しよう」

「それならあたし達は二人だね」

忍者のプリカードを取り出して見せる。

「何だそのカード？」

「プリカードって言ってるね、色んな服を着てその力を使う事が出来るんだよ」

「へえ、そんなことが出来るのか・・・よし行こう！もう一度夢の世界へ！みんなを助け出そう！」

別れるチームはハピネスチャージ&グレル・エンエン組とビルド&クローズと二手別れて行動することになり、再びブルーの力で夢の世界に突入した。

めぐみ達は気付かれないようにこっそり移動する。

「いい方法ってコレ？」

「見つからないように忍び込む。そう言う時は忍者でしょ！」

めぐみが自信を持って言う。

「全く、懲りない子達ね」

だが、すぐにマアムに気付かれてしまった。

「見つかるの早っ！」

「どうして・・・!？」

「言ったでしょ。ここは夢の妖精バグの世界。侵入者はすぐに分かるわ！」

「見つかったならしょうがない！プリキュアのみんなはどこ！」

「プリキュア達は甘く幸せな夢の中、それぞれが思い描く最高の夢の中で、楽しく過ごしているわ。プリキュア達はもう目覚めない。大人しく出て行った方が身のためよ」

「ユメタのお母さん！ユメタに会わせてくれ！」

グレルとエンエンがユメタに会わせてと頼む。

「あなた達は？」

「僕達、妖精学校で一緒だったユメタの友達です！」

「友達？ユメタから聞いた事無いわ。それに今まで一度も、ユメタに会いに来た事も連絡した事も無い」

「そうだけど……」

「ユメタに会わせて下さい！ちゃんと話が見たいんです！」

「ユメタには他に友達がいるわ。あなた達は必要無い！」

マアムはそう言うのと尻尾の掃除機から、悪夢獣が出て来た。

「さあ、出ておゆき！」

「そんな脅しには屈しません！だってあたし達、プリキュアだから！」

めぐみが変身アイテム、プリチェンミラーを取り出して言う。

「プリキュア……？教科書に書いてあったプリキュアは全員捕らえたハズ……」

「あたし達は新しいプリキュアです！ひめ！行くよ！」

「何かこうなる気はしてたわ……」

二人はプリキュアに変身し、悪夢獣に立ち向かった。だが……

「あなた達、弱過ぎるわ」

あつさりやられ、めぐみ達は牢屋に閉じ込められてしまった。

「だったらもう一度・・・あれれ・・・？」

もう一度変身しようとするが変身出来なかった。

「その中では変身出来ないから、大人しくしてなさい。後で他の二人もそこに入れてあげるわ」

そう言い、マアムは晴夜達の元へと向かった。

「もう最悪！」

「大丈夫だよ！こんなあたしのスーパーパンチで！」

と言つてめぐみが牢をパンチするが・・・

「いったあゝっ！」

「大丈夫、めぐみ？」

牢に向かってパンチを繰り出す、逆に自分のダメージが大きいただけだった。

「無駄だよ」

そこに昨日会ったユメタが現れた。

「ユメタ！」

「夢の世界では、僕のお母さんが一番強いんだ」

この世界では母親のマアムが一番強いと話す。

「ユメタ！もうやめるんだ！」

「こんな事しちやいけないよ！」

「お前だつて分かつてるだろ？！？こんな事は良く無いって！」

グレルとエンエンの二人は、ユメタに間違っていると訴える。

「どうして・・・？」

「えっ？」

「悪夢を食べて、子供達に楽しい夢を見せるのが僕らバグの役目、でも・・・子供達は夢から目覚めると、夢の事なんて忘れちゃう。どんなに仲良くなっても、僕の事だつて忘れちゃうんだ」

しかしユメタは、夢が覚めるとみんなは自分の事を忘れちゃうと話す。

「そんなの・・・辛過ぎるよ」

自分の事を忘れちゃうと言うと暗くなった表情をする。

「そうしたら、お母さんがみんなを夢の中に留めてくれたんだ。友達がずっと一緒にいてくれる、永遠に楽しい夢が続くんだ。僕も楽しいし、みんなも喜んでるみんな幸せだよ？何がいけないの？」

「そ、それは・・・」

グレルはユメタの気持ちを考えると、どう言えばいいか言葉に詰まる。

「友達なら放っておいてよ」

牢から去ろとすると、めぐみが口を開く。

「友達だから、放っておけないんだよ」

「この子達はね、友達のあなたを放っておけないって言うから一緒に来たんだよ」

「ユメタ・・・」

「心配してなんて頼んでないよ!」

ユメタは持っていたプリキュア教科書を牢へと投げ飛ばし、どこかへと行ってしまった。

その頃、別行動の晴夜と龍牙は夢の世界で楽しく遊んでいる子供達を龍牙が双眼鏡で見ている。

「いねえな・・・」

どうやらユメタ達やプリキュア達は、昨日の場所にはいなかったようだ。

「どうやら、あそこにいるのは子供達だけみたいだな」

「じゃあ、みんなはどこにいるんだ・・・別の場所とか?」

龍牙も離れた場所から様子を見ながら、プリキュア達は別の場所にいるのかと晴夜に聞く。

「分からない。けど少なくとも違う場所って言うのは確かだろう」

龍牙の言う通り、違う場所なのは確かだと晴夜が言うと、龍牙は頭を書きながら気になつていた事を口から漏らす。

「それにしてもみんな、どんな夢を見てるんだろ？」

「それぞれが思い描く最高の夢の中で、楽しく過ごしているわ」

「!?？」

声が聞こえ振り返ると、晴夜と龍牙もマアムに見つかってしまった。

「見つかったか！」

「ここは夢の妖精バグの世界。侵入者はすぐに分かるわ」

「お前だろ！みんなを夢の中に閉じ込めてんのは！」

龍牙がマアムを指差して叫ぶ。

「大人しく、みんなを解放してくれないかな？」

「プリキュア達は甘く幸せな夢の中よ」

「幸せな夢の中・・・？」

「ええそうよ。自分達の夢が叶った世界。プリキュア達はもう目覚めない。大人しく出て行った方が身のためよ」

「はいそうですかって言っ出て行くバカがどこにいるんだよ！」

「いや、お前はバカだろ」

龍牙がマアムに向かってバカって言うのと、バカはお前だと晴夜が突っ込む。

「だから！なんで！バカ何だよ！バカって!!」

龍牙はいつも通り晴夜の肩を勢いよく揺らす。

「こんな時に喰いつくんじゃないよ」

晴夜と龍牙のいつものやり取りが始まると、マアムは額から汗を垂らしながらも自身の尻尾を掴む。

「変な子達ね・・・いいわ、あなた達には痛い目に遭わせてあげるわ!」

そう言うのと彼女は尻尾の掃除機から悪夢獣を出す。

「はあく最悪だ・・・やるしか無いようだな」

晴夜は自分の変身アイテムである2本のフルボトルを取り出し、ビルドドライバーを装着した。

「やっとかよ！待ちくたびれたぜ!」

龍牙もビルドドライバーを装着すると、そこへ彼の変身アイテムのクローズドラゴンが現れ、ドラゴンボトルを差し込む。

晴夜はフルボトルを龍牙はクローズドラゴンをドライバーに差し込む。

『ラビット！タンク！ベストマッチ!』

『ウエイアップ！クローズドラゴン！』

ボトルを差し込みレバーを回すと、前後のスナップライドビルダーからアーマーが作られた。

『Are you ready?』

「変身！」

その掛け声とともに晴夜と龍牙の体にアーマーが装着された。

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ！』

Wake up burning! Get CROSS—Z DRAGON! Yea h!』

二人が久々に仮面ライダーへと変身した。

「あなた達！まさか、仮面ライダー!?!」

二人がビルドとクローズになるのを見て、仮面ライダーなのかと言う。

「プリキュア教科書に書かれていたのを見たわ。あなたがビルドでそっちがクローズね。」

あなたの事は良く知ってるわ」

「そう、作る形成するって意味のビルドだ！以後お見知り置きを！」

ビルドは初めて戦う人によくやる自己紹介を済ませる。

「さあ、早く子供達とみんなを戻すんだ！」

「悪いけど、あなた達に構ってる暇は無いの。悪夢よ！その二人に痛い目を遭わせなさい！」

悪夢獣が襲い掛かると同時に、マアムはどこかへと向かった。

「コイツらは倒してもすぐに復活する！倒さずにやり過ぎすぞー！」

「つまり、ぶっ飛ばしてやればいいんだろー！」

『ビートクローザー！』

クローズがビートクローザーを構える。

「まあ、そういうことー！」

ビルドもドリルクラツシャーを取り出す。

それを見て悪夢達がビルドとクローズに襲いかかる。

ビルドとクローズは武器を構え、悪夢達に攻撃する。

「ハアア！」

「オラア！」

二人の攻撃が命中するが、ダメージを受けてもすぐに立ちあがる。

「やっぱりダメか・・・ならー！」

「ああー！」

ビルドとクローズは武器を一度捨て、同時にドライバーを回す。

『Ready go!』

放物線が悪夢達を拘束し、ビルドとクローズが高く飛びライダーキックを構える。

『ボルテックファイニッシュ!』

『ドラゴニックファイニッシュ!』

「はああああああつ!」

「オリヤあああああつ!」

ビルドとクローズがダブルキックを繰り出し、悪夢獣を命中させた。それでも、数ま
だ多い。

「仕方ない……」

スパークリングを取り出し、ビルドはドライバーに差し込む。

『ラビットタンクスパークリング!』

レバーを回すとビルドのライダーズクレスト型のスナップライドビルダーが出現し、
アーマーが形成された。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

『シユワツと弾ける!ラビットタンクスパークリング!イエー!イエー!』

ラビットタンクスパーキングへとフォームチェンジした。

「キリがない！動きを止めて前に進むぞ！」

「わかった！」

クローズは、ビートクローザーを出し、ロックボトルをセットし、グリップを引っ張る。

『スペシャルチューン！ヒットパレー！ヒットパレー！ミリオンスラッシュユ！』

ロックボトルの力で、悪夢達を拘束した。

その隙に、ドリルクラシャーにボトルを差し込み、同時にドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

地面へと向かってドリルクラッシャーを放つ。

『ボルテックブレイク！』

カブトムシのツノが拘束し、動けない間に二人は悪夢達から逃げる。

「それで晴夜、これからどうするんだ？」

「とりあえず、めぐみ達と合流しよう。多分あっちも見つかっただろうし」

ビルドフォンを使って連絡を入れてみた。

それから、しばらく経った後。ビルドとクローズを見失い、元の場所へと戻るとユメ

タが現れた。

「お母さん……」

「ユメタ、どうしたの？」

「あの……」

「なあに？」

「ううん……」

ユメタは自身の母になにかを言おうとしたが、やめてしまう。

「何にも心配しなくていいのよ。お母さん、あなたのためなら何でもするわ。悲しみから、危険からも守ってあげる」

ユメタは母親の愛情を感じる。すると、マアムは何かを感じる。

「また誰かが悪夢を見ているわね。行かなくちゃ」

「お母さん大丈夫？ 疲れてるんじゃない……」

「疲れてても行かなくっちゃ。悪夢をやつつけるのがバグの役目だもの。ユメタは友達と遊んでなさい。いいわね？」

マアムは息子にそう言うと、悪夢の退治に向かった。

その頃、どうにかして牢屋から出ようとめぐみとグレルとリボンが牢を引っ張るが、

ピクともしなかった。

「世の中そんなに甘くないってこと」

「おかしいなー……こう言う時はみんなで力を合わせれば開けられるハズなのに」

「ユメタ……」

牢の近くに落ちていたプリキュア教科書をエンエンが拾うと、中から何かが落ちて来た。

「これは……鍵？」

それは牢の鍵だった。

「マジ!?」

その鍵でめぐみ達は無事、牢屋から出る事が出来た。

「あの子、このために来てくれたんだね」

「何だ、凄くいい子じゃん」

「ユメタ……」

そこにめぐみのキュアラインから着信音が鳴った。

「晴夜からだ」

電話の相手は晴夜からだった。

『無事か?』

「大丈夫。ちよつとドジっちゃつて牢屋に閉じ込められちゃったけど。でも、ユメタ君が鍵をくれたおかげで出られたよ」

『こつちは悪夢を片付けた。と言つても気絶したりしただけだな』

「そつか、気絶なら完全に倒した事にならないから、再生もしないよね」

『とにかく、一度合流しよう』

「分かった。じゃあ後でね」

そう言つて電話を切った。

「急いで晴夜達と合流しよう」

「うん」

めぐみ達は晴夜達との合流に向かったのだつた。

その頃、ユメタが一人湖を眺めていた。

「やつほー!」

ユメタがめぐみの股下を通り過ぎると、いきなり挨拶されて驚いた。

「き、君は!?」

「あたし、愛乃めぐみ!改めてよろしくね!」

めぐみが自己紹介すると、後ろから晴夜が現れた。

「よう、また会ったね」

「君は……」

「桐ヶ谷晴夜、仮面ライダービルドだ！以後お見知り置きを！」

「仮面ライダービルド……！君が……！」

ビルドの聞いて驚くと後ろからグレルとエンエンが現れた。

「よう」

「鍵、どうもありがとう」

「二匹は渡してくれた鍵を返す。」

「ありがとう。みんなを助けてくれて」

「お前、悪い奴だと思ってたけど、結構いい奴だな！」

ユメタは振り向いて晴夜達から離れる。

「早く出て行きなよ。お母さんに見つかつたらもう知らないよ」

「お前を放つて出て行けるかよ！」

「ねえユメタ、覚えてる？妖精学校辞める時に君が言った事」

エンエンはユメタが辞める時に言った言葉を言おうとする。

「君はこう言つたんだよ。『僕には将来の夢がある。だから夢を叶えるために学校を辞める。』って」

その時の言つた事を言われると言葉に詰まる。

「お前の夢は、子供達を閉じ込める事じゃないだろ！」

「君の本当の夢は何！」

「僕の夢は……」

自分の夢を言いかけようとする、何かを思い出し、言うのをやめた。

「ダメだよ！僕には無理だったんだ！」

「そんな事無いって！」

「諦めずに頑張り続ければ、きっと夢は叶うよ！」

「どうやったつても叶わないんだよ！楽しい夢の中で過ごした方がいいじゃないか！プリキュア達だって夢の中で楽しんでるよ！」

眠っているプリキュアのみんなも楽しい夢を見ていると言う。

「じゃあ見に行こうよ。プリキュアのみんなが夢の中でどうしてるのか、見てみようよ」
「そうだな、みんながどんな夢を見ているのか気になるしな」

ユメタが案内で滝の辺りで各々のプリキュア達の夢を見る晴夜達。

プリキュア達の夢は教師、医者、マンガ家、作家、女優と様々だった。

「夢色々だね」

「見てる側だと面白いな」

「真琴は歌姫かく！（しかも、俺が真琴のマネージャーになってる）」

「やっぱり、マナは総理大臣かく」

「ほら、プリキュアだっていい夢を楽しんでるじゃないか」

夢の中は確かにみんな楽しそうな表情で、笑顔に溢れていた。

「それでも無さそうだよ」

「えっ?」

「ほら」

晴夜がある人物の夢を指差した。それはキュアドリームこと夢原のぞみの夢、教師になつた夢だった。

「花の色はうつりなりけりな・・・えつと・・・何だっけ?」

次の文が分からず、慌てていたその時だった。勝手に手が動き、全文を書き終わると同時に拍手が起きた。

「——今のは私の力じゃありません。これは都合のいい夢ですね。私の将来の夢は、学校の先生になる事です。夢を叶えるためにはもつともつと勉強しなくちゃいけません。こんな風に本当に教壇に立てるように、頑張ります！楽しい夢をありがとう！」

のぞみの夢の世界にヒビが入った。

「夢は叶えばいいってものじゃない。だつて夢は、なりたい自分になることだから。だ

から、自分の力で頑張らなきゃ！」
のぞみの夢が壊れようとしていた。

「どうして?」

不思議に思うユメタに、晴夜が膝を折りながら話しかける。

「まやかしの夢だからだよ。みんなもおかしいって思い始めて来たんだな」

他のみんなも気づいてるはずだ、これが夢なんだと。

「あなたにもあるんでしょ? 頑張って叶えたい夢」

「でも・・・僕には・・・」

未だに迷ってる様子のユメタにひめが語りかける。

「私、あなたの気持ち分かるわ。このままじゃダメだって分かってるけど、怖くて勇気が
出ない。私もそうだったから。」

「今は違うの・・・?」

「今は友達がいるから」

ひめがそう言うときひめが微笑む。

「お前にもいるじゃねえか。友達」

龍牙がグレルとエンエンを指す。

「ユメタ、お前の本当の夢を目指して頑張ろう!」

「僕達、力になるからー！」

ユメタに言うグレルとエンエン。そして、晴夜もユメタに伝える。

「ユメタ：俺もさ、マナや龍牙、六花、あります、まこぴー、和也、幻冬君、亜久里ちゃん、レジーナと出会ってなかったら、今の俺はなかったと思うんだ」

「えっ!?？」

「教科書には書かれなかったらしいけど。」

俺はな、『エボルト』って言う敵に作れた、偽りのヒーローなんだ」

「偽りのヒーロー……」

「何それ……」

「どういう事なの、偽りのヒーローって？」

偽りのヒーローと言うことに知らない三人。その事を語る。

「ただ、利用されるだけの存在それが仮面ライダービルドの存在なんだ」

ボトルの回収、ビルドの成長、ライダーシステムの開発、すべてはエボルトを復活させるために利用された事だと話した。

「でも、みんなと会えたから。作り物のヒーローだった俺を、本当のヒーローだって言ってくれた。そのおかげで今自分がなりたいたいものが見えたんだ」

龍牙を見ると、龍牙も微笑む。

「けど、お前は俺とは違う。お前は自分でなりたいたいものがある。だから、お前なら出来る」

「僕に出来るの・・・？」

「出来ない確率はゼロじゃない、その夢を叶えるために頑張ってるんだろ！」

晴夜がユメタに、夢は叶えられると語ると：

「ユメタ！」

「お母さん・・・」

そこにママムが急いだ様子でこちらに来た。

「無事で良かった・・・ユメタ、こっちへいらつしやい」

だが、ユメタは行くのを躊躇した。

「どうしたの？さあ、おいで」

ユメタはママムの方へ行かず、晴夜とめぐみ達の後ろに隠れた。

「・・・あなた達、ユメタに何を言ったの！」

「俺達は何も言ってます。ユメタは自分の意志で踏みとどまって、選んだんです」

「とぼけないで！悪夢よ！私の息子に悪い事を吹き込むあの子達を呑み込みなさい！」

尻尾の掃除機から悪夢獣が出て来た。

「ホント、随分とタチが悪いな！言葉で言ってもわからないようだな」

龍牙はビルドドライバーを装着する。

「グレル、エンエン。ユメタを連れて離れてろ」

晴夜がそう言うのと、ビルドドライバーにハザードトリガーを付けた状態で装着した。

「分かった！」

「行くよユメタ！」

グレルとエンエンがユメタを連れてここから離れる。

「行くぞ」

晴夜が言うのと、それぞれの変身アイテムを出す。

『ラビット！ラビット&ラビット！』

『ボトルバーン！クローズマグマ！』

晴夜と龍牙はフルフルボトルとマグマナックルを取り出し、差し込むと晴夜の前後から金具と赤いユニット——ハザードライドビルダーとラビットラビットアーマーが、龍牙の方は大きいナックル——マグマライドビルダーが後ろに現れた。

『Are you ready?』

「変身！」

『変わるルン！』

「プリキュア！くるりんミラーチェンジ！」

全員が変身を完了させて、音声と名乗りが響く。

『オーバーフロー！紅のスピーディージャンパー！ラビットラビット！ヤベーイ！ハ
エーイ！』

『極熱筋肉！クローズマグマ！アーチャチャチャチャチャ　チャチャチャチャアチャー
！』

「世界に広がるビッグな愛！キュアラブリー！」

「天空に舞う蒼き風！キュアプリンセス！」

「ハピネス注入！」

「幸せチャージ！」

「ハピネスチャージプリキュア　！」

全員の変身が完了すると、悪夢達が襲いかかる。

「行きなさい！」

四人も走り出し、悪夢達に戦いが始まる。

ビルドはラビットラビットの特徴である素早さと、フルボトルバスターを持ち悪夢達に攻撃する。

「はやー！」

「早いし、手足伸びるし、やばくない!？」

ビルドのラビットラビットフォームの能力に驚くハピネスチャージプリキユア。驚いている間にビルドはフルボトルバスターのグリップを曲げ、一本のボトルを取り出す。

『スパイダー！フルボトルブレイク！』

フルボトルバスターの一撃を放ち、悪夢達を蜘蛛の糸で止める。

「最悪な状況になるかもしれないけど、覚悟はいいか？」

「任せな！こんなのザコの群れだろ！」

「バッチリ！」

「ここまで来たらやるつきやないでしょ！」

「よし、行くぞ！」

四人は散らばり悪夢達を迎撃する。

「ラブリー！パンチングパンチ！」

ラブリーがパンチングパンチを連続で繰り出して怯ませた所に、拳から一撃を放つ。

「プリンセスカッター！」

プリンセスがプリンセスカッターを放ち、悪夢獣を斬り裂く。

「更にプリンセス！ゲンコツツインマグナム！」

両拳からゲンコツツインマグナムを放って近づけさせないようにする。

そして、クローズは悪夢獣を圧倒的な強さだった。

「うおおおおお！オラア！」

クローズは向かってくる悪夢獣達をただひたすら殴り続ける。

「しやあ！オラオラオラオラ！」

ドライバーのレバーを何度も回す。

『Ready go!』

クローズの体がマグマの炎を纏う。

『ボルケニックファイニッシュ！アチャー！』

ボルケニックファイニッシュで数体の悪夢獣達を吹き飛ばした。

「あいつを取り戻すまで、負けられるか！うおおおおお！」

クローズはさらに悪夢達に攻撃を仕掛ける。

「ハア！ホラア！」

ブレードモードのフルボトルバスターを振り続け、悪夢達を応戦する。

ビルドはフルボトルバスターのモードを変える。

『マグネット！フルボトルブレイク！』

悪魔獣を一箇所へとマグネットボトルの磁力で集めるとフルフルボトルを外し、さらにボトルを振り、ボトル栓を回し、タンクのシルエットが現れる。

『タンク！タンク&タンク！』

後ろから現れたタンクタンクアーマーが悪夢達に砲撃し、ユニットがパージされ装着する。

「ビルドアップ！」

『オーバーフロー！鋼鉄のブルーウォーリアー！タンクタンク！ヤベーイ！ツエーイ！』

タンクタンクフォームとなったビルドはフルボトルバスターをキャノンモードにして、

ボトルを4本を入れる。

『タンク！ガトリング！ロケット！ジェット！アルティメットマッチブレイク！』

青いエネルギー弾を放ち悪夢達を全員吹き飛ばす。

だが、それで悪夢達はさらに向かってくる。

「まだいるな……」

ドライブバーからフルフルボトルを外しフルボトルバスターに差し込む

『フルフルマッチデース！フルフルマッチブレイク！』

ビルドの足が戦車のローラへと変わり、青いエネルギー弾を移動しながら放ちながら、さらに悪夢達を吹き飛ばす。

『ラビット！ラビット&ラビット！』

そしてもう一度、ラビットラビットへとフォームチェンジし、フルボトルバスターのモードを戻し悪夢達に向かっていく。

「たとえ今は押していても、悪夢には敵わないわ」

マアムは慌てている様子ではなかった。

一方、他のプリキュアの夢の世界では……

「パンが全部焼けてる……。失敗ゼロ……。毎日お客さんがいっぱい……。？嬉しいけど、絶対おかしい！」

「花が枯れない……。これは現実ではありませんね」

さらに、プリキュア達の夢にヒビが入る。

「またプリキュアの夢にヒビが……。！」

「みんな作られた夢から出ようとしてるんだよ！」

「こんな夢は絶対におかしい！みんなそう思ってるハズだ！」

「どうしてわざわざ……。甘い夢の中で楽しく過ごしていればいいのに……。！」

マアムがどうして夢の中に居ようとしなかったのかと、プリキュア達に疑問を抱いていると……

「まだ！わかんねえのか！」

「俺たちは夢を叶えるためいつも努力している！けど・・・あんたのは違う！」

「それは、誰かに作られた夢じゃ、心の底から楽しめないわよ！」

「あなたの言っている夢は、夢を見せているというだけの悪夢だ！現実の夢と寝てる時に見る夢は、違うんだよ！」

『フルフルマッチデース！フルフルマッチブレイク！』

ビルドはフルボトルバスターに再びフルフルボトルを差し込み、フルボトルバスターにエネルギーを纏う。

「ハアアアア！」

近づいて来た悪夢獣をフルボトルバスターを回転斬りし迎撃する。

更に、夢の方でも・・・

「確かに、現実楽しい事だけじゃありません。嫌な事や辛い事もたくさんあります。でも、そう言う事から目を逸らしていたら、ダメだと思っんです」

「上手く出来なくて落ち込む事もあるし、自分が情けなくて泣く事もあります！でも！」
「涙を乗り越えたら、きつと強くなれる！」

「失敗しても大丈夫！やり直せばいいんだよ！何度でも！」

更にみんなの夢にヒビが広がっていく。

だが、荒れ地で戦う四人は息が乱れ始める。流星にここまでの連戦に限界が見えた。

「痛い目に遭いたくなかったら、大人しく言う通りにしていた方が賢明よ！」
マアムが叫ぶと同時に悪魔獣を更に出す。

「みんなを解放してくれるとありがたいんだけどな！」

諦めずビルドはフルボトルバスターで立ち向かう。

「まだまだ全然行けるぜ！真琴達を取り戻すまではな！」

感化されクローズも向かい、何度も殴り飛ばす。

「痛い目に遭うと分かっても！見て見ぬフリなんか出来ないよ！」

「ラブリーはやつと出来た友達なのよ！悪夢になんか奪われてたまるもんですか！」

ラブリーとプリンセスも必死になって悪魔獣達に立ち向かう。

その頃、他の夢の方でも影響が現れた。

「あたしは自分に嘘をつきたくない！あたしの夢は、この情熱は誰にも消せない！」

「自分の描いた夢だから、自分の力で羽ばたきたい！」

「大事な事だから直球勝負！自分の足で走らなきゃ！」

「自分の夢の種を育てられるのは、自分だけだしね！」

「私は、私のメロディをみんなの心に響かせたい！」

「私は、みんなと一緒に笑いたいな」

「私には友達がいる。自分一人では難しい事でも、友達がいれば必ず乗り越えられます」

「こんなのじゃない、本当の世界でみんなに歌を届けたいその時、近くであいつに見て欲しい」

「いつも一緒にいる彼が隣にいないなんて！全然キュンキュンしない！」
夢のヒビがまた大きく広がっていく。

その頃、現実の世界での大貝町で・・・

「幻冬！」

「和也さん！」

仮面ライダーグリスと仮面ライダーローグの沢田和也と柴崎幻冬がいた。

「どうなってんだよ。帰ってきたら六花にありす達がずっと眠てるってよ・・・」

「やっぱり・・・亜久里ちゃんもなんです」

「晴夜と龍牙の奴も来てるはずなんだが、どこに行ったんだ？」

二人が話していると一台の黒いリムジンが二人の前に現れ、ドアが開くと中から晴夜の父、拓人が現れた。

「晴夜の親父さん」

「二人にこれを渡しに来た」

拓人はアタッシュケースの中を開ける。

「これって……」

「俺達の……」

中に入っていたのは、あの決戦の日に壊れたスクラツシユドライバーとビルドドライバーだった。

一方、夢の世界ではビルド達は多勢に無勢。悪夢達相手に全員が疲れが見え出した。「はあはあ……まさかまだまだ出て来るなんてな……」

フルボトルバスターを地面に付け、ビルドも膝を下り、息が乱れるのが激しくなった。「これ、数十体以上はいるよね？」

「もー！どんだけ出てくんのよー！」

倒しても倒しても数が消えるどころか寧ろ増えている。

「この状況、ファントムの時とほとんど同じなんじゃねーか……？」
じわじわと悪夢達がビルド達を囲む。

「どんなに頑張ったって、あなた達に勝ち目は無いわ」

「……まだ分かんねえだろー！」

「ああ！俺達はまだ帰れねえんだよー！」

ビルドとクローズが立ち上がる。

『ミリオンヒット!』

クローズもビートクローザーで悪夢獣達に攻撃する。

「この状況でもまだそんな事が言えるの?」

「悪いけど、俺達は諦めが悪いんでね!それに・・・ヒーローが逃げるわけにはいかねえからな!」

『ラビット!フルボトルブレイク!』

ビルドもフルボトルバスターの光弾を放つ

「龍牙がまだいけるか?」

「たりめえだ・・・」

「うおおおおお!」

二人は諦めず、悪夢獣を迎撃する。

その様子を遊んでいた子供達がビルド達と悪夢獣が戦っていたを見ていた。

「あれって・・・!??」

「そうだよ・・・あれ!??」

子供達は、悪夢獣に追われていた事を思い出して泣き出した。

「聞こえる!」

「子供達の声が!」

「行かなきゃ！それに晴夜達を助けなきゃ！」

子供達の泣き声を聞いたプリキュア達が夢から出ようとする。

だが、それだけじゃない・・・

「今の・・・！」

「声が聞こえた・・・！」

声が聞こえ二人が顔を合わせ頷くとアタツシユケースの中にあるドライバーを掴む。

「使わせてもらいます！」

二人は走り出した。その時、二人の走る先に光の渦が現れた。

その少し前にブルーの力によって、子供達と妖精達の手元にミラクルドリームライトが現れた。

「子供達よ、妖精達よ、みんなに頼みがある。君達を、プリキュア達を夢の世界から救うために、みんなの応援が必要だ」

「このミラクルライトでプリキュアとライダーにパワーを送るんだ！」

「それじゃあ行くぞ（よ）！」

『プリキュアー！ライダーー！頑張れー！』

グルルとエンエンがミラクルドリームライトを振ると、子供達も振り出した。

「ミラクルライトの力か！これなら！」

「ああ、イケるぜ！」

ミラクルライトの力でパワーが増していく。だが、それだけじゃない。二人のボトルにも変化が現れた。

「ラビットボトルが・・・」

「俺のドラゴンも」

二人のボトルが金色と銀色・・・二人はハザードレベル7へと変わった。

そして、プリキュア達の夢の世界が壊れ、現実の方で次々と目を覚ます。

「鏡よ鏡、目覚めたプリキュア達を夢の世界へ！」

ブルーの力により彼女らの窓から夢の世界へと繋ぐ。

みんなはその中に入っていく。

「デュアル・オーロラ・ウェーブ！」

「ルミナス！シャイニングストーリーム！」

「デュアル・スピリチュアル・パワー！」

「プリキュア！メタモルフオーゼ！」

「スカイローズ！トランススレイト！」

「「「チェインジ・プリキュア！ビートアップ！」」」

「「「プリキュア！オープン・マイ・ハート！」」」

「「「レッツプレイ！プリキュア！モジュレーション！」」」

「「「「プリキュア！スマイルチャージ！」」」」

「「「「プリキュア！ラブリンク！」」」」

「「「プリキュア！ドレスアップ！」」」

彼女達、プリキュアの全員が光の中で変身を完了していく。

そしてビルドやラプリー達を囲んでいた悪夢獣が、まとめて吹き飛ばされ、周りには多くのプリキュアが集まっていた。

今ここに、全てのプリキュアが集まったのだった。

「子供達を泣かせたのは！」

「あなた達ね！」

ブラックとホワイトが悪夢獣にそう叫ぶ。

「先輩プリキュア来たー！」

「凄っ！」

ラプリーとプリンセスの二人が驚いてると、ビルドとクローズが膝を折る。

「ふう、助かった」

「正直、危なかった」

「つたく、おっせーよ！危うくやられちまうトコだったんだぞ！！？」

「ゴメンね。遅くなっちゃって」

「遅くなつてゴメンね晴夜」

「いや、目が覚めてよかった」

「ここからはあたし達も加勢するよ！」

「ああ、本場はこれからだ」

「おお！」

ビルドとクロローズは再び立ち上がる。

「わあ〜！それ！ビルドとクロローズの新しいフォーム！」

目を輝かせビルドとクロローズをピースが見ている。

「ラビットトラビットとクロローズマグマね」

ルージュとサニーがクロローズマグマに近づく。

「クロローズマグマ、同じ赤ねえ」

「なんか、うちらと気が合いそうやな」

「そうか」

クロローズが二人と話していると、何か冷たい視線を感じ振り返る。

「ソ、ソード……いや、これは……」

「龍牙……あなた……」

冷たい視線、いや嫉妬の視線がソードから放たれたものだ。

「それにしてもここはどこ?」

荒れ地の場所を見回す。

「あれは悪夢の怪物!ここは夢の中の世界だよ!」

「何だ夢かー。夢ならいつか」

「夢の世界が悪夢に支配されてしまったら、見る夢全て悪夢になってしまいます!」

「ええ!!?」

「眠るのが怖くなってしまいますわ!」

「悪夢達よ!プリキュア達とライダー二人を捕まえなさい!」

マアムが悪夢達を指示する。すると、彼らの前に大きな光が放たれた。

「待ちな!」

「ライダーは二人じゃない!」

声が聞こえ後ろを振り向く。

「和也、幻冬君!なんで!」

「お前ら二人で何楽しんでんだよ、コラッ!」

和也が二人の頭を叩く。

「水臭いですよ！二人共！」

「けど、お前らのドライバーは・・・」

龍牙が言うのと、和也と幻冬はスクラッシュドライバーを二人に見せる。

「晴夜の親父さんが急いで直してくれた」

「ここから、僕達も加勢します」

二人を見て晴夜は髪をかく。そして、笑顔で言う。

「お前ら・・・最高だな！」

それを聞いた二人は、ロボットゼリーとクラッククロコダイルボトルを取り出す。

『ロボットゼリー！』

『デンジャー！クロコダイル！』

「変身！」

和也と幻冬から巨大なビーカーが現れ、和也の方には黄色い液体を纏い。幻冬には紫の液体から巨大なワニの口のようなものまで出現し、その後二つのビーカーが割れ、姿を変えた。

『潰れる！流れる！溢れ出る！ロボットイングリッド！ブリアー！』

『割れる！食われる！砕け散る！クロコダイルインローグ！オラア！へキヤー！』

「心火を燃やして、ぶっ潰す！」

「大義の為の犠牲となれ！」

ラブリーとピースが感激しながら仮面ライダーを見た。

「仮面ライダーもキターッ！」

「新しい仮面ライダーだ！」

「ミューズと同じ小学生も仮面ライダーなの……」

グリスとローグも変身を完了し、共に並べ立つ。

「みんな！行くよ！」

三十八人のプリキュアと四人の仮面ライダーが悪夢獣との決戦が、今始まった。

全員が走って行き悪夢獣達に向かっていく。

「呆れる程たくさんいるわね！」

「あたしに任せて下さい！プリキュア！くるりんミラーチェンジ！チェリーフラメンコ！」

ラブリーが三枚のプリカードを重ね合わせてプリチェンミラーのトレイにセットし、ミラーボールを下から上へ回す。

ラブリーがチェリーフラメンコにフォーラムチェンジする。

「プリキュア！パッションダイナマイト！オ・レ！」

フラメンコダンスを舞いながらラブプリブレスを叩き、パッションダイナマイトを放って悪夢獣を一掃した。

「おおうっ！」

「カッコいい！」

「ラブリー達はプリカードってカードを使って、様々な力を使う事が出来るんだ」

「それじゃあ私も！」

「プリンセス！上だ！」

ビルドはフルポトルバスターで落ちてくるヤシの実を撃ち落としたりした。

「え？おわっ！危なっ！」

「空にもあんなにいっぱい！」

空にも大量の悪夢獣が飛んでいた。

「よくもやろうとしたわね！プリキュア！くるりんミラーチェンジ！シャーベットバレエ！」

プリンセスが三枚のプリカードを重ね合わせてプリチェンミラーのトレイにセットし、ミラーボールを下から上へ回す。

プリンセスがシャーベットバレエにフォームチェンジする。

「プリキュア！アラバスクシャワー！」

バレエを舞いながらラブプリブレスを叩き、雪花状の光の粒を下降させてアラベスク
シャワーを放った。

命中した悪夢獣が、バレエの舞姿のまま凍った。

「おおっつ！こっつちも凄い！」

「でしよ！」

話してる間に悪夢が後ろから攻撃しようとする。

『Ready go!』

ビルドが高くジャンプし、ライダーキックを放とうと足が伸びた。

『ハザードフィニッシュ！ラビットラビットフィニッシュ！』

そのまま伸びた足を縮んでその勢いで悪夢獣を吹き飛ばす程の勢いのライダーキックを放った。

「油断大敵だよ」

「流石晴夜！」

「イーグレット！行くよ！」

「ええ！」

ブルームとイーグレットが跳躍し、コンビネーションで悪夢獣を蹴散らす。

「私達も負けてられません！マリン！行きましょう！」

「やるっしゅー！」

ブロッサムとマリンも悪夢獣を蹴散らす為に構えた。

「集まれ！二つの花の力よ！プリキュア！フローラルパワー・フォルテツシモ！」

「今年も決まったっしゅー！」

見事に決まり、マリンはドヤ顔を作った。

「プリキュア！シューティングスターー！」

ミルクイローズが周りの地面を沈め、そこにドリームがシューティングスターを放つて一掃する。

「よーし！私も！プリキュア！ハッピーシャ——！」

ハッピーがハッピーシャワーを放とうとしたが、足を引っ掛け、代わりに頭突きが悪夢獣に命中した。

「プリキュア！ファイヤーストライク！」

「プリキュア！マーチシュート！」

ルージュとマーチがハッピーの周りにいた悪夢獣に向けてファイヤーストライクとマーチシュートを放つ。

「決まった！ハッピーヘッドアタック！」

「ナイス直球勝負！」

「あはは・・・」

「キュアピース！私達も行きましょう！」

「ええ！」

レモネードとピースの前に土中から大量の悪夢獣が現れ、二人に向けてロケット弾を放った。

「嘘っ!?？」

『シングル！シングルフィニッシュ！』

ロケット弾を全部、後ろから放たれた攻撃とグリスによつて全て相殺された。

「どうよー！」

「全弾命中！流石ね！」

後ろからアクア・サニー・ビューティ・グリスが射撃とシングルフィニッシュを放ったからだった。

だが、そこにまだ残ったミサイルが落ちてきた。

同じ頃、クローズとソードが高く悪夢を飛び越えビートクローザーのグリップを引く。

『ヒッパレー！ヒッパレー！ミリオンヒット！』

「はあっ！」

クローズのミリオンヒットとソードの手刀がミサイルを切り裂いた。

「龍牙君とソード凄い！」

「決めるよ！メロデイ！」

「オツケー！」

「プリキュア！ラブサンシャインフレッシュ！」

「駆け巡れ！トーンのリング！プリキュア！ミュージッククロンド！」

ピーチとメロデイが必殺技を放つ。

「プリキュア！仮面ライダー！みんなまとめて消えなさい！」

だが、マアムの力によって周りの地面が消え、下のマグマに落ちてしまう。

「きゅびらっば〜！」

だがアイちゃんらの力によってマグマが魚の群れになって、みんなを救った。

「ナイスきゅびらっば〜！」

「アイちゃん凄い！」

「ならば出でよ！メカ悪夢！」

今度はメカ悪夢が現れ、ブラックとホワイトに向けてロケットパンチを放つ。

「だああああああっ！」

しかし、ブラックがカカト落としで動きを狂わせる。

「たあああああつー！」

更にホワイトがパンチを掴み、メカ悪夢に向けて投げつけて命中させ、最後にブラツクがもう一度カカト落としを放ち、頭部を凹ませメカ悪夢は爆発した。

だがメカ悪夢を操縦していた悪夢獣は小型艇で脱出し、後ろを向いていたムーンライトとエースを見つけて狙いを定め、ドリルを回転させて突撃する。

『クロコダイル！ファンキーショット！』

ムーンライトとエースの手刀が、小型艇を真つ二つに切り裂き、ローグがライフルモードにしたネビュラスチームガンを放つ。

「わたくし達の寝首をかこうなど、百年早いですわ。アデュー」

「流石」

投げキッスと同時に小型艇が爆発し、悪夢獣が消滅した。

だが、またメカ悪夢が現れた。そこにグリスはダブルツインブレイカーを出現させて、メカ悪夢達を攻撃する。

「速攻！」

グリスが叫びながら、攻撃をする。

「攻略！」

グリスはダブルツインブレイカーにボトルを合計4本差し込む。

「撃破！誰が俺を満たしてくれんだ！クラッ！」

『シングル！ツイン！ツインブレイク！ツインフィニッシュ！』

グリスのダブルツインブレイカーの技が命中し、グリスの周囲のメカ悪夢全てを撃破した。

「どうだ！」

そして、次にローグにメカ悪夢が襲いかかる。

「数が多くても！」

ローグはダイヤモンドボトルを差し込む。

『ディスプレイボトル！潰れな〜い！』

ダイヤモンドボトルの力でダイヤモンドを放ちながら、メカ悪夢を攻撃し、メカ悪夢達を集める。

「この世界から、みんなを助ける！」

ローグはドライバーのレバーを下ろす。

『クラックアップフィニッシュ！』

ローグの足からワニの顎型のエネルギーが出現し、メカ悪夢達を掴みながら、砕いていく。

グリスとローグにより全てのメカ悪夢は破壊された。

「プリキュア・・・ライダー・・・いくら悪夢を出しても打ち碎かれる・・・これがプリキュアとライダー・・・」

悪夢獣と戦い、悪夢を消滅させるプリキュア達とライダー達を見たマアムが呟く。

「でも負けられない！ユメタを守らなきゃ！」

疲弊しても尚、みんなに向かつてくる。

「ラブだね。ユメタ君を守りたいって言うあなたの気持ち、とつてもラブだね！お母さんの愛情でユメタ君は優しい子になったんだね」

疲弊していたマアムの傍に、ラブリーとプリンセス、ビルドが着地する。

「何が言いたいの？」

「ユメタは子供達を閉じ込める事を、望んでいるとは思えないんだ！ユメタはちゃんと自分で頑張れるくらい強い！信じてあげて下さい！」

「何を言ってるの？ユメタの事は母親の私が一番良く分かってるわ！だからユメタの幸せを考えて、夢を叶えて——！」

「本当にそれが、ユメタの望みなのか？」

「えっ？」

「違うな。それは、ユメタの夢じゃなくて、あなたの夢だ。我が子を守りたくて、守り過ぎてユメタを閉じ込めている！」

「お黙り！」

そう叫んで悪夢獣を出し、ラブリー達に襲い掛かろうとする。それを見ていたビルドはフルボトルバスターを構える。

「お母さん！もう止めて！」

するとユメタがビルド達の前に出て、自分の力で攻撃を防いだ。

「ユメタ！」

更に尻尾が掃除機に変化し、悪夢獣を吸い込んだ。

「ユメタ……！あなた悪夢を……！」

「お母さん、ゴメンなさい……！僕が弱虫だからいつも心配かけて……お母さんにこんな事させて！」

「何言ってるの、いいのよ。あなたを守るためならお母さん何だって——」

「守ってくれるのは嬉しいよ！でも、子供達には将来の夢が、未来がある！僕のためにみんなの未来を犠牲に出来ないよ！辛くても、苦しくても、僕は自分の力で頑張りたい！

プリキュアや仮面ライダーみたいに！」

ユメタの言葉——息子の本音を聞いたマアムは驚きを隠せなかった。

「ユメタ……お母さんはあなたの悲しむ姿を見たく無かったの……ただあなたを守りたくて……それが……間違ってたの……？」

その時、悪夢獣が応援してる子供達のいる場所にハンマーで叩きつけて来た。

「おい、アイツら、子供達のいる場所を狙って．．．！」

「あの妖精、一体何を考えているんだ．．．!?」

「子供達に手を出すなと教えたじゃない！」

「じゃあ、なんで！」

マアムがハンマーで叩いていた悪夢獣を吸い込もうとするが、既に疲弊状態だったため、吸い込む事が出来なかった。

「お母さん！」

「悪夢を．．．吸い込めない．．．」

「力を使い過ぎたんですわ！」

更に悪夢獣は空を雷雲に変え、周りにあつたサンゴなどを消滅させた。

ブルームとイーグレットが悪夢獣を倒すが、すぐに再生されて反撃されるがかわした。

一方、ビルドがフルボトルバスターを放ち寄せ付けないようにする。

「くそっ！キリが無い！」

だが、それでも復活しキリがない。

「何度倒しても蘇って来る！」

「私達のカじや浄化出来ないって事・・・!?？」

『ボルケニツクナツクル!アチャー!』

ボルケニツクナツクルでクローズが殴り飛ばしてもやはり直ぐに復活した。

「マジかよ・・・倒しても復活するんじや、意味無えじやねえか!」

「今までよりタチが悪い気がするぜ・・・!」

「このままじや・・・」

完全には悪夢達に囲まれるのは時間の問題だ。

「どうすりゃいいんだよ・・・!?？」

「これじゃキリが無いぞ・・・」

「何か方法は!?？」

「バク力だ!バク力なら、悪夢をやっつけられる!」

だから、僕が行く!」

「待ちなさいユメタ!行っちゃダメよ!危ないわ!」

ユメタがプリキュア達とライダー達の所へ向かおうとするが、マアムに制止される。しかし、それでも彼の決意は変わらなかった。

「でも僕はバクだ!お母さんいつも言ってるじやないか!悪夢をやっつけるのがバクの役目だって!悪夢をやっつけて、みんなの夢を守らなきや!」

「行かせて！お母さん！お願い！」

「ユメタ・・・行つてらっしゃい。お母さんここで見てるわ。しっかりね」

「うん！」

ユメタはグレルとエンエンと共に先へ進み、ラブリー達もすぐさまユメタ達を追いかけた。

ユメタ達が見えなくなった所でマアムは、涙を流したのだった。

先に進む途中で悪夢獣が襲い掛かるが、ラブリー達が同時にパンチを繰り出し、悪夢獣を消滅させる。

（怖いけど、プリキュアがいる！仮面ライダーがいる！）

「ユメタ！もうすぐだ！」

「頑張つて！」

「うん！（友達がいる！僕は一人じゃない！）キュアハート！僕の力を受け取つて！」

「ユメタ君！」

尻尾の掃除機からバグの力が放たれ、ハートの中に取り込んだ。

「あなたに届け！マイ・スイート・ハート！」

ユメタの力を受け取ったハートが近づいて来た悪夢獣にマイ・スイート・ハートを放つと、悪夢獣が再生しなかった。

「悪夢が消えた!」

「プリキュアのみんな!」

全てのプリキュアにもユメタの力が加わった。

『プリキュア! コラボレーションパンチ! ニューステージ!』

ピンクチームのプリキュア達がコラボレーションパンチ・ニューステージを放ち、悪夢を一掃した。

「凄すごい! つて、ラブリーもちやっかり混じってたし!」

プリンセスが横を見ると、いつの間にかラブリーがいなかった。

「もしかしたら・・・龍牙! 銀のボトルを!」

「えっ? おお!」

クローズが銀のドラゴンボトルを投げ渡すと、ビルドはもう一つ金色へと変わったラビットボトルと今は色をなくしたジーニアスボトルを取り出す。

「ユメタ! この3本のボトルにお前のバクの力を合わせてくれ!」

ラビットとドラゴン、ジーニアスの3本のボトルをユメタに見せる。

「僕の手・・・」

「お前の力が奇跡を起こすんだ!」

3本のボトルを見てユメタは顔を上げた。

「うん！」

決意を決めたユメタは、そのままビルドが3本のボトルを上へと投げる。

「届いて、僕の力！」

ユメタから放たれた光が3本のボトルに当たると、3本のボトルが回り出し、一つになろうとする。

そして、3本のボトルは一つとなり、ボトル缶へと姿を変え、ビルドの手に置かれた。「それ！」

「クローズビルド缶！」

それは、エボルトとの決戦の時に起こった奇跡のボトル『クローズビルド缶』だった。

「まさか……」

このボトルを見てこれから何が起こるのかを、クローズは考えがついた。

「さあ、実験を始めようか……」

ビルドは決め台詞を呟き、ボトル缶を振ると周囲を数式、化学式が現れた。

「な、何この訳のわからない式は！」

「「「出た！訳の分からない計算式！」「」」」

フアントムの時に見せらせてピンク勢の大半は正直言っただけが嫌い。

そんなことを思ってる間にクローズビルド缶のボトルの缶を開けた。

『クローズビルド!』

そして、ボトル缶が差し込みドライバのレバーを回す。ボトル缶が光り出すと、ランナーファクトリー『L&Pスナップライドビルダー』が前後から出現した。

「これって、やつぱり……」

ファクトリーはクローズを巻き込んでしまい、前後のランナーが金と銀のアーマーが形成されいくと、アーマーは赤と青へと姿が変わる。

『Are you ready?』

「ダメです!」

「変身!」

「な!?」

ランナーはクローズをも巻き込んだまま重なり、体から煙が現れビルドマークが浮かび上がると。変身を完了した。

『ラビット!ドラゴン!Be The One! クローズビルド!イエイ!イエーイ!』

「やつぱ、俺達……」

「合体しちゃった……」

ビルド・ラビットラビットフォームとクローズの二つの外見を併せ持ったような姿を

し、腰から下半身にかけてコート of 裾のようなローブが現れた。

二人だからこそその特別なフォーム・・・クローズビルドだ！

「うわあ〜！凄いい！合体した！」

「何これ、凄すぎなんだけど！」

ピースとマリリンがクローズビルドを見て感激したような表情だ。

「ねえ、これって二人意識が共有なの？」

「凄い・・・」

「何がどうなってるんや？」

「合体しただけでも・・・驚いてるのに・・・」

二人の合体した姿にどう言葉にしていかわからなかった。

「あれは二人の奇跡の変身！」

「クローズビルドよ」

ハート達は二人の奇跡の変身、クローズビルドだと話す。

「カッコいい・・・」

ユメタがクローズビルド見てカッコイイと呟く。それに対して・・・

「お前、二度とやらねえ言ったくせにまたやるのかよ！」

「しょうがねえだろ！ジーニアスとマジエステイが使えねえから！他に無かったんだよ

！」

「この科学バカ！」

「うっせえ！筋肉バカ！」

合体したせいで一人で痴話喧嘩をしている。

「悪夢~~~~！」

そこに悪夢達が襲い掛かろうとする。

「あゝもう！後だ！行くぞ！」

「つたく、しようがねえな！」

悪夢を見てクローズビルドが高く飛び上がり、悪夢へと向かっていく。

「悪夢~~~~！」

「はあ！」

悪夢の攻撃を避けるとそのまま投げ飛ばした。

「オオラア！」

さらにキツクを繰り出し、悪夢を吹き飛ばす。それだけじゃない、バグの力も加わったクローズビルドは一撃で悪夢を消滅させる。

すると、さらに今度は悪夢達の群れが大量に現れた。

徐々に悪夢獣を追いつめて行くが、いきなり全ての悪夢獣が地面に潜った。

「地面に消えました！」

「何するつもり？」

すると地面から一つとなった悪夢が下から現れた。

「でっかくなっちゃった！」

そしてそのままクローズビルドとプリキュア達を閉じ込めた。

「ここは一体!？」

「なーんかやな感じ・・・」

その嫌な感じは的中し、巨大な悪夢獣がプリキュア達を踏み潰そうとした。

それをみんながなんとか躲す。

「何あれ!？」

「とにかく早く倒して、外に脱出しないと!」

「プリキュア! ピースサンダー!」

ピースサンダーが命中すると同時にドリーム・ルージュ・レモネードが足に攻撃し、腕からの攻撃はミルキーローズとマーチが同じく攻撃して受けるのを防ぐ。

「危ない!」

後ろから攻撃を受けそうになるが、ミントとロゼッタがバリアを展開して防ぐも、余りのパワーに碎かれてしまう。

「あの大きな腕が厄介だわ！」

「バランスを崩して、隙を作りましょう！」

「合点承知！」

「プリキュア！ピンクフォルテウエーブ！」

「プリキュア！ブルーフォルテウエーブ！」

プロツサムとマリンがピンクフォルテウエーブとブルーフォルテウエーブを悪夢獣の足元に放って転倒させる。

「はあ!!」

すると、どこからか黄金のラビットラビットアーマー・ベストマッチラビットを召喚すると、クローズビルドが後ろ足に着地すると同時に蹴り上げて高く飛び上がり、フルボトルバスターを出現させる。

『ラストマッチデース！ファイナルマッチブレイク！』

「これでどうだ！」

そのままフルボトルバスターの斬撃を放つ。すると、ホワイトとブラックが走って向かってきた。

「プリキュアの美しき魂が！」

「邪悪な心を打ち砕く！」

「プリキュア！マーブルスクリュー！マックス！」

ブラックとホワイトがマーブルスクリュー・マックスを放ち、巨大悪夢獣を倒した。

その頃、悪夢ドームの外では子供達を守るためグリスとローグが戦っていた。

「此処が夢の中だつてんなら……こいつで行くか！」

スクラッシュドライバーを外し、ビルドドライバーへと付け替えると、グリスブリザードナツクルがグリスの手元に出現した。

『ボトルキーン！グリスブリザード！』

ドライバーにナツクルを差し込むと冷気が一面に漂い、グリスの足を膝上まで凍結させながらブリザードライドビルダーが出現。

『Are you ready?』

大量の液体窒素のような液体——ヴァリアブルアイスをぶちまけられ、和也を氷塊状態に。後ろから氷塊をアイスライドビルダーが押し割り、変身が完了する。

『激凍心火！グリスブリザード！ガキガキガキ！ガキーン！』

水色の氷を印象づけるような冷気を周囲に纏ったグリス、腕にロボットアームを装着したグリスブリザードとなった。

そのままロボットアームで悪夢獣の群れを必死に殴り続ける。

「オラア！どうした！こんなもんか！」

グリスはドライバールのレバーを一回転させる。

『シングルアイス！』

グリスはロボットアームを悪夢獣達に向ける。

『グレイシャルアタック！バリーーン！』

巨大化した左腕のアームで捕まえ、悪夢獣達を地面に叩きつける。

「これで終わりだ！心火を燃やしてぶつ潰す！」

グリスはレバーを回し、音声が鳴る。

『シングルアイス！ツインアイス！』

2回以上レバーを回し高く飛躍する。

『Ready go！』

グリスの繰り出すキックが吹き荒れる吹雪を纏う。

『グレイシャルフィニッシュ！バキバキバキ！バキーン！』

冷気を纏ったライダーキック。悪夢を粉砕する程の勢いを繰り出し、悪夢を吹き飛ばした。

「しゃあ！どうよ！見てくれた！」

だがしかし、振り向いた時には誰もいなかった。

「つて、誰もいねえのかよ！」

その一方、ログもビルドドライバーへと付け替える。

『プライムログ！』

プライムログボトルがログの手元に出現すると、ボトルを分けドライバーへと差し込む。

『ガブツ！ガブツ！ガブツ！ガブツ！ガブツ！ガブツ！』

ドライバーのレバーを操作すると、金色に輝く線『プライムライドビルダー』がログの周囲を囲み、ワニの顎が下から出現した。

『Are you ready?』

金色のパイプ線がログの体に纏わりつき、それをワニの顎が砕く。

『大義晩成！プライムログ！ドリヤドリヤドリヤドリヤ！ドリヤ！ドリヤ！』

背中に純白のマントを纏い胸元には、歯車とログを象徴する鰐の口が組み合わさったライダーズクレストが記された姿、プライムログとなった。

「大義のための犠牲となれ！」

そう言うログはドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

ローグは高く飛躍し、ライダーキックの態勢に入ろうとする。

『プライムスクラップファイニッシュ!』

ローグが悪夢達に噛み付くように両脚で挟み蹴りを繰り出す。そのまま噛み付いた足で蹴り飛ばした

すると、ドームの中から三体の悪夢獣を作りだし、妖精達と子供達のいる所に向かって飛んで来た。

「ユメター!」

「危ない!」

「グレル!エンエン!」

「(絶対に守るんだ!僕らの友達を!)」

「不味いぞ!」

「グレル!エンエン!」

ドームから見えたクローズビルドが助けに向かおうとするが、間に合わない。

すると、グレルとエンエンのミラクルライトが光り、巨大な光が三匹の妖精を包み込み悪夢獣を消滅させた。

「これは・・・」

その時、光の中ではグレルとエンエンの前に一人の少女の影が見えた、

「君は誰？」

「私は坂上あゆみ。プリキュアよ」

「プリキュア……！でも、教科書に君の事は……」

「僕、先生から聞いたがあるよ。たった一度だけ変身した幻のプリキュアがいるって！」

「幻のプリキュア……？」

「私にはパートナーの妖精がないの……」

あゆみの服の胸には、スマイルプリキュアのキュアデコルが付いていた。

「私もあなた達と同じように友達を……プリキュアの皆を。そして、今、一緒に戦ってる仮面ライダーを助けたい！力を貸して！」

「うん！」

グレルとエンエンはあゆみの手を握る。

「「みんなの思いを守るために心を一つに……」」

すると、グレルとエンエンの宝石とあゆみのキュアデコルが光る。

すると、光の球体は上へと上昇し、そこから白い姿を纏ったプリキュアが現れた。

「想いよ届け！キュアエコー……？」

かつて誕生した幻のプリキュア、キュアエコーが再び誕生した。

「キュアエコー！」

「僕らのプリキュア〜」

「グレル！エンエン！本当だね！諦めずに頑張ればいつか夢が叶う！」

二人にとって初めてパートナーとなるプリキュアと出会えた。

「世界に響け、みんなの想い！！プリキュア・ハートフルエコー！！」

エコーから放たれた巨大な光が夢の世界を包み、空の色を青い空へと変え無数の悪夢獣を浄化していく。

「ドームが破壊された・・・」

それだけではなく、囲っていたドームも崩壊していき、その崩壊したドームの上を見上げるとそこには何かがいた。

「あれもプリキュアか？」

「あんなのいたか？」

「あれは？」

「あゆみちゃん・・・いや、キュアエコー！」

「キュアエコー」

「みんな！今よ！」

巨大な悪夢のドームが崩壊すると悪夢達が集結し、今度は巨大なタコの姿となった。

「何じやありや!!?」

「巨大タコのようなだな」

「デカイ！でも！」

「絶対負けないんだから！」

全プリキュア達が一斉に走り出し、攻撃をかわして跳躍する。

プリキュア達が足に攻撃し、ラプリー達も攻撃するが反撃を受けてしまう。

だが、ドキドキプリキュアが二人を救った。

「大丈夫？」

「私達がついてるから、安心して」

「大船に乗ったつもりでいなさい」

「プリキュア五つの誓い」

「愛する事は守り合う事」

「ですわ」

「力を合わせて、まだまだ行くよ！」

「オッケー！」

全プリキュア達のコンビネーションが悪夢を圧倒する。

しかしそれでも、決定打にはなれず、逆に足で動きを封じこまれてしまう。

「捕まえた〜！」

悪夢タコの触手がプリキュアのみんなが捕まってしまった。その時……

『フルボトルブレード!』

そこへ、フルボトルブレードを持つクローズビルドが現れ、グリップにラビットボトルを差し込む。

『ラビット!フルボトルスラッシュ!』

赤いエネルギーを纏ったブレードが光り出し、フルボトルブレードの剣が伸びた

「ハアア!」

タコの触手を攻撃し、プリキュアのみんなを離れた。さらにフルボトルブレードにボトルを差し込む。

『ニンジャ!コミック!ベストマッチブレイク!』

クローズビルドが分身し、悪夢獣の足を全て切り落とすと、そのままフルボトルブレードを捨てた。

『フルボトルアロー!』

さらにドライバーから弓状の武器、フルボトルアローを出現させる。

『クローズドラゴン!』

クローズドラゴンをフルボトルアローに装填し、弓の弦を弾く。

『クローズファイニッシュ!』

ドラゴン状のエネルギーを纏った矢が悪夢獣を怯ませた。

そのままさらに悪夢獣へと飛び、キック、パンチと繰り出し、今度はクローズドラゴン・ブレイズに酷似した銀色のエネルギー体・ベストマツチドラゴンを召喚するとブレスを発射させ、悪夢獣をぶっ飛ばした。

「凄い……これが、仮面ライダー……」

ユメタがクローズビルドに強さに見とれると、クローズビルドは地面へと降りる。

「今の俺達は負ける気がしねえ！」

クローズの口癖を叫ぶとドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

赤と青と放物線が悪夢獣を拘束し、高く飛び放物線の上へと滑り込む。

「勝利の法則は決まった！」

『Are you ready?』

その言葉を叫ぶと同時にクローズビルドはキックの体勢へと入る。

「ドリーム&マツチ フィニッシュ!!?」

そう叫んで悪夢獣ヘライダーキックをぶつけた。

「うおおお……!はぁ……!!?」

さらに押し込もう力を入れる。

「「「仮面ライダー!!? 頑張れ!」」」

子供達がライトを振りながらクローズビルドを応援する。

「行けえ! 晴夜(さん)! 龍牙(さん)!」

「「「いけえ!」」」

「「はあああゝはあー!?!」」

クローズビルドの力が上がり、さらに押し込もうとし、放物線のゴールへと向かって滑っていく。

「あ、悪夢~~~~!」

ついにゴールを通過し、クローズビルドがタコ悪夢獣を貫いたライダーキック: : ドリーム&マッチファイニッシュが決まり、悪夢獣は消滅した。

「「「やったー!」」」

タコ悪夢を倒し、子供達は悪夢から解放された。クローズビルドは子供達の前へと着地した。

「「悪い夢は終わったよ」」

クローズビルドは子供達にそう告げる。

そして子供達は皆、現実で目を覚まして親と再会したのだった。

夢の中での事は全て忘れていたが、それで良かった。

その様子をマアムとユメタは水晶から親と子供の再会している姿を見ていた。

「親にとつて、我が子を失う程の悪夢は無い。悪夢を食べるバグが、悪夢を見せていたなんて……。バグ失格だわ」

「お母さん、僕、将来の夢があるんだ」

「えっ?」

「自信が無くて言え無かったんだけど、ずっと思ってたんだ。どんな怖い悪夢にも立ち向かって行くお母さんは凄いつて。だから僕は将来、お母さんみたいなバグになる!も一度自分の夢を叶えるために頑張るんだ!」

その後、他のプリキュア達とギリス、ローグは先に現実世界に帰り、残ったのはハピネスチャージプリキュアの二人とキュアエコーと妖精達、晴夜と龍牙だけだった。

「夢から目覚めれば、みんな僕の事を忘れる。でも、それでいいんだ。楽しい夢を見て、今日一日頑張ろうって思ってくれたらそれで」

「俺は忘れないぞ。お前の事、絶対に忘れない」

「離れ離れになっても友情は消えないわ。心が繋がってる限り、ずっと友達よ」

「僕、教科書に書くよ。新しいプリキュア、ハピネスチャージプリキュアの事、僕達の

パートナーになってくれたキュアエコーの事。そして、夢の中でみんなの夢を守ってくれているユメタって言う妖精がいる事、みんなに伝えるからね」

「グレル・・・エンエン・・・」

「また会おうね」

「俺達は永遠に友達だ！」

そんな三人を見てプリンセスはもらい涙を流す。

「プリンセス、もらい泣きし過ぎですわ」

「だって・・・だって・・・永遠の友達って・・・！」

「世界にラブがいっぱいだね！これにて幸せハピネス！」

二人が言っていると晴夜が近寄る。

「ユメタ。お前のおかげだ。ありがとうな」

クローズビルド缶からまた3本に戻ったボトルを見せて、ユメタにありがとうと言
う。

「ううん。僕からありがとう。」

それと、晴夜。僕は晴夜は本当の正義のヒーローだよ！」

「そう思ってたって嬉しいよ」

晴夜はユメタの頭を撫でる。

「じゃあ、帰るか。みんなの所へ」

「おお！」

二人も二人を待つてゐる人、仲間の元へ帰ろうとする。

「晴夜！龍牙！ありがとう」

「またな」

別れを告げ、晴夜と龍牙もハピネスチャージプリキュアとキュアエコーと共に現実の世界へと戻る。

この小さなひと時の事件も晴夜と龍牙、ベストマッチコンビが解決し、プリキュア教科書に新たなページが書かれた。

——だが……これがさらに最悪な事態の戦いの始まりである事を、

この時は……まだ誰も知らなかった。

おわり

第1話 動き出した陰謀

「何が起こった!」

現在、日本から少し離れた位置に位置する国である、トランプ王国と呼ばれる王国の研究室。

そのこの研究員の室長となった晴夜の父である桐ヶ谷拓人と、トランプ王国初代大統領・ジョー岡田ことジョナサン・クロンダイクの二人が研究室に駆けつける。

するとサイレンが辺り一面に響く研究室は酷く荒らされおり、研究室で働く研究員が何人が倒れていた。

拓人は一体何があったのだと、倒れていた数人の内の一人から問い掛ける。

「侵入者です! 数本のロストボトルと二つ目のハザードトリガー、ビルドドライバーが盗まれました!」

「なっ!? パンドラボックスは!」

「パンドラボックスは無事です!」

ジョーはパンドラボックスが盗まれ無かったことにホッとする。

「しかし、何故箱ではなく、ボトルとドライバー、トリガーを狙ったのでしょうか?」

「何か、不吉な事が起きなければいいが……」

あのエボルトの戦いでエネルギーを多く失つてもなお、強大な力を持つパンドラボックスを盗まず、ビルドドライバーとハザードトリガー、ロストフルボトルを狙った犯人の意図を、拓人は読む事が出来なかった。

そして、どこかわからない部屋に何かの人数が映像を見ていた。

それは、ビルドとクローズの戦闘映像だった。

「仮面ライダービルド……60のボトルを使いこなし、いくつかのフォームを持つ。

なかでも、スパークリング、ラビットラビット、タンクタンクの特異なフォームもいくつかある」

ビルドのこれまでの戦闘映像を見ながら一人の男がビルドの戦闘、戦い方を説明していた。

「仮面ライダークローズ……ボトル一本で変身可能のライダー、格闘戦に強く武器も使う時もある……」

ビルドに続いてクローズの説明をしていると、男と同じ部屋に居た一人の少年がクローズの戦闘映像をじっと見つめ、血が滲む程に強く拳を握る。

「クローズ・・・上城龍牙！」

「……………そういえば、君と彼は浅からぬ因縁があったね」

男の近くで顔を歪ませる少年は、クローズの変身者である上城龍牙の事を知っているようだった。

「私達が狙うのは、ビルドのハザードトリガー。クローズのグレートクローズドラゴン……………」

手始めにまずは、彼女らに協力してもらおう」

男性がビルドのハザードトリガーと、クローズのグレートクローズドラゴンが狙いだと話しながら映像の操作を行う。

すると今度はフュージョンの時に戦ったプリキュアオールスターズと、キングジコチューの戦いでドキドキプリキュアの映像が映し出される。

「彼女らプリキュア達を我々の配下とし、ビルドとクローズを墮とす！」

「了解！」

男性はプリキュアオールスターズを配下すると言いだすと、少年を含んだ数人が頷きながら行動を開始しようとする。

「おい、ドキドキプリキュアは俺にやらせろ」

すると少年が、ドキドキプリキュアは自分にやらせろという。

「好きにしたまえ、むしろ君は彼女を自分の物にしたいだろ？そのための力を手に入れたからね」

それを聞いた男が口元を歪めながら去っていくと、少年はビルドドライバーを取り出し強く掴み、映像から流れた変身解除した龍牙を見る。

「上城龍牙……キュアソードはお前から離す！そして……この男……」

龍牙への怨言を放っていると、次にビルドから変身解除した桐ヶ谷晴夜の映像を睨む。

「お前らは仮面ライダーに相応しくないぞ」

仮面ライダーは、人を支配させるためにあるんだよ」

少年は机に置いてある道具を掴むとそれを映像に向かって投げ、晴夜と龍牙が映し出されたスクリーンを壊した後、ドキドキプリキュアを狙いに向かった。

「所詮、お前らは偽りの仮面ライダーに過ぎねえ……」

その頃、ドキドキプリキュアのメンバーは楽しく歩いていた。なかでもマナと真琴は上機嫌に歩いていた。

「マナとまこぴー、待ちきれないって顔ね」

「仕方ありませんわ。明後日、晴夜さんと龍牙さんが来るんですもの」

「二人に会うのは、この前の事件以来ですから」

この間の子供が眠り続ける事件があり、一人の妖精の暴走を止めるため仮面ライダーとプリキュアがその事件を解決させた。

余談だがその時、事件解決の為に来てくれたグレルとエンエンはキュアエコー・坂上あゆみと一緒にいることになったらしい。

「だつてー！この間から会ってないから楽しみでしようがないもん！」

この前の事件ではマナを含んだプリキュアは眠らされていたため、マナは晴夜の時間があまりなかった。

その為、彼女は晴夜と過ごす時間を楽しみにしていた。

「そんな急かさなくても明日には会えるわ」

「そう言つて、真琴は龍牙に会えると一昨日から楽しみでしようがなかったビィ」

「くっくっくツツツ!!?ダビィ！」

ダビィに本音を言われた真琴は顔を赤くして怒る。

そんな二人の姿を見た六花達は、早く明日が来ないかと急かしている彼女らに思わず笑みを浮かべる。

「もう、二人とも」

「かわいいですわね」

「愛が強すぎていいですわね」

そのまま帰路を歩いていると、五人の前に黒服を纏った少年が立っていた。

「お前らがドキドキプリキュアか？」

「あれ・・・？」

「あなた誰？」

マナが声をかけると少年はあるものを取り出し、それを見た五人は目を大きくしながら驚く。

「ビルドドライバー!?!?」

「なぜ、あなたがそれを」

「皆さん、あの方は本気ですわ!」

『ビルドドライバー!』

『マックス! ハザードオン!』

少年はビルドドライバーを腰に装着するとさらに、少年は懐から取り出したハザードトリガーを起動させると、サソリ型のガジェットが手に置かれた。

『パルロスコピオン!』

『Are you ready?』

ガジェットをボトルに差し込み、セットするとドライバーのレバーを回す。

すると前後にハザードライドビルダーが現れ、更に後ろの地中から緑色のサソリ型ユニットが出現した。

「変身」

ビルダーが重なりハザードフォームへととなると、緑色のサソリ型ユニット——『パルロスコーピオンアーマー』が装着された。

『オーバーフロー！真縁の一撃！パルロスコーピオン！ヤベー！』

「——俺こそ、仮面ライダーパルロ」

緑のアーマーで、両腕のアームにサソリの鋭い爪を模した『PSデスシザークロー』を装着。肩には『PSレッガシオルダー』、背中にはサソリの尻尾を模した伸縮装備『デススティングヴァイパー』を付けた姿を持つライダー、仮面ライダーパルロと名乗るライダーがそこに現れた。

「さあ、お前ら大人しくついてきてもらおうか？」

手を曲げてこつちに来いというジェスチャーを行うパルロを見て、マナ達五人は構える。

「みんな！」

「「「ええ!!?」」」

マナが言うのと四人はコミュニケーションとラビーズを取り出し、亜久里の後ろにアイちゃんが現れる。

「プリキュア！ラブリンク！」「」

「プリキュア！ドレスアップ！」

マナ達四人は光に包まれ、亜久里はアイちゃんから出現したラブアイズパレットにより炎に包まれと五人が姿を変えた。

「みなぎる愛！キュアハート！」

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

「陽だまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

「勇気の刃！キュアソード！」

「愛の切り札！キュアエース！」

「響け！愛の鼓動！ドキドキ！プリキュア！」「」

「愛をなくした悲しい仮面ライダーさん！このキュアハートがあなたのドキドキ、取り戻してみせる！」

五人が名乗りを上げ、いつもの決め台詞を言う。

「アイちゃん！和也さんとレジーナ、幻冬にこの事を伝えてきて下さい！」

「アイ！」

今度は後ろからソードがラブハートアローを持った状態で現れた。

「スパークルソード！」

ソードの必殺技、無数の剣を放つスパークルソードをパルロに向けて放つ。

「ふん！そんなもんか！」

パルロは後ろの尻尾を前へと出し、振り回すとソードのスパークルソードを相殺した。

「嘘でしょ!?!？」

「なら、私が・・・ラブキツスルージュー！」

エースがラブキツスルージューを出現させるとそれを自分の口へと塗り、前方に生成したハート形のエネルギー体が生成される。

「ときめきなさい！エースショット！ばきゅくん！」

両手持ちして頭上に掲げたラブキツスルージューを振り下ろし、エースショットを放った。

「こんなもん！」

パルロは腕の爪を伸ばし上と掲げると、エースの放ったエースショットを真つ二つに分け直撃を防ぎ、ついでにダイヤモンドに凍らせられた氷も破壊した。

「そんな程度か、お前らの実力は・・・」

「みんな！」

「うん！」

「ええ！」

ハートがコミュニケーションにセットして円を刻むと、マジカルラブリーハープが現れた。

更にマジカルラブリーハープを爪弾くと、五人の背中から翼が生えエンジェルモードへと変わった。

「[[[[プリキュア！ロイヤルラブリーストレートフラッシュ！]]]]」

ハートがマジカルラブリーハープの弦を爪弾くと、空中で組み立てた陣形の中央から、ロイヤルラブリーストレートフラッシュを放たれた。

「ふん！」

『Ready go!』

『ハザードフィニッシュ！』

しかしパルロはドライブバーのレバーを回し、必殺技の準備をした。

『パルロスコーピオンアタック！』

腕のパーツから放たれたエネルギーが、ロイヤルラブリーストレートフラッシュを相殺した。

「そ、そんな・・・」

まさか、ロイヤルストレートフラッシュをも相殺されてしまったことに五人は驚く。

「やはり、仮面ライダーの力は凄い・・・この力で俺は全てを手に入れる！」

「あなた、仮面ライダーの事何もわかってないわ！」

「なんだと・・・？」

「仮面ライダーは何かを手に入れるためのものではありません！」

「誰かの笑顔と未来を守り続け！」

「多くの人の望む明日を創ってあげられるために力を使う！」

「愛と平和をみんなの胸に掲げて生きていく世界を作る！それがあたし達が知ってる仮

面ライダーだよ！」

ハート達が自分達が知ってる本当の仮面ライダーを語る。しかし・・・

「くだらない！そんなの仮面ライダーじゃない！」

「何ですって！」

「その仮面ライダーって、ビルドとクローズの桐ヶ谷晴夜と上城龍牙だろ？」

パールはビルドとクローズの事を知っていた事を知り、ハート達の顔が警戒心で更に

歪む。

「愛と平和の世界を守る・・・そんなの仮面ライダーじゃない！仮面ライダーは自分の為に使うものだ！」

やはり、作られた偽りの仮面ライダーってわけか……」

作られた偽りの仮面ライダー、その言葉に反応したハートが叫ぶ。

「違う！ 晴夜は偽りなんかじゃない！ いつも優しく、どんな人でも手を伸ばしてくれ、あたしにとつて最高の正義のヒーローよ！」

——そう、ビルド……晴夜は敵だったレジーナ、キングジコチューに変えられた王様、それ以外の人や妖精を敵味方に関係なく手を伸ばして、救ってきた。

「そうよ！ 龍牙もバカでいつも身勝手だけど……誰かの人の為に精一杯に戦って、その人の笑顔を守ることができる人よ！」

龍牙も誰かの為に必死になって戦い誰かのための力になろうとする。

——それが、あいつの一番いいところだから。

「そんな二人から見れば、あなたの方が偽りですわ！」

エースがパルロに叫びながら指を指すと、パルロは下を向き握り拳を強く握る。

「うるさい！ 俺が……俺が本当の仮面ライダーだ！」

本当の仮面ライダーと叫ぶと、パルロはドライバーのレバーを何度か回す。

『Ready go!』

それに連動する様にパルロの腕の爪がかなり伸び始め、エネルギーが収束されていく。

『ハザードファイニッシュュ!』

『パルロスコーピオンファイニッシュュ!』

パルロは伸びた爪から放たれた技をドキドキプリキュアの五人に向けて放った。

『きやああああー!』

爪のから放たれた無数の一撃が五人に命中し、五人共地面へと倒れる。

「マナ!大丈夫シヤルか?」

「六花しつかりするケル!」

「ありす!」

「真琴、亜久里!起きるビィ!」

「お前らは邪魔だ!」

妖精達が五人に声をかけるが、五人共さっきの技をもろに受けたせいで気を失っていた。

パルロが倒れた五人に近づき、エース以外の四人のコミュニケーションケースを外すと、シャルル達四人が入ったコミュニケーションケースを放り投げる。

「「みんな!」」

「其処へアイちゃんから連絡を聞き、急いで来た和也ら三人が駆け寄ろうとする。

すると、何処からか放たれた攻撃が三人を吹き飛ばした。

「なんだよ急に……」

「何処から……」

「一体何があつたと疑問に思っている、そんな三人の前に二人組の男が現れた。」

「邪魔しないで頂きたいな」

「パルロ、早くその女達を連れて行け！」

突如現れた二人組の内、一人の男はトランスチームガンから煙幕を放ち、周囲を眩ませる。

「マナ！みんな！」

レジーナが彼女達の名を叫ぶが、煙幕が晴れた頃にはハート達五人の姿はなかった。

「てめえら……六花にありすを何処にやった！」

「まあ、簡単に言えば私達のアジトですね」

「そこで、俺達の計画が始まる」

「計画……？」

「マナ達を拐って何をするの？」

レジーナが二人組の男にマナ達の行方を聞く。

「その事を話す理由は貴方達にはありません」

「どうせ、お前ら負けるんだしよ！」

二人の上から目線の台詞を聞いた和也達は、彼らを睨みつけながら怒りを露わにする。

「ふざけやがって、舐めたことを後悔させてやる！コラっ！」

「流石に舐めすぎですな僕たちを！」

「アイちゃん！行くよ！こんな奴ら早く倒してみんなを助けに行こう！」

「きゅびー！」

アイちゃんも気合いを入れると、二人は拓人に修理してもらったスクラツシユドライブを装着する。

『ロボットゼリー！』

『デンジャー！クロコダイル！』

二人はドライブバーにゼリーとボトルを差し込み、レンチを下ろした瞬間、三人は高々と叫ぶ。

「変身！」

「プリキュア！ドレスアップ！」

「きゅびらっばー！」

和也と幻冬から巨大なビーカーが現れ、和也の方には黄色い液体を纏い、幻冬には紫の液体から巨大なワニの口のようなものまで出現し、その後二つのビーカーが割れると

その姿を変えた。

レジーナはアイちゃんから放たれた緑色の光から、パレットにラビーズをセットし、手順を取ると緑色の光が包まれ姿を変える。

『流れる！潰れる！溢れ出る！ロボットイングリス！ブラア！』

『割れる！食われる！砕け散る！クロコダイルインローグ！オラア！へキヤー！』

『運命の切り札！キュアジョーカー！』

三人は仮面ライダーグリス、仮面ライダーローグ、キュアジョーカーへと変身した。

「心火を燃やして！ぶっ潰す！」

「大義のための犠牲となれ」

「さあ、あなたの運命をここで断ち切ってあげるわ！」

三人が戦う前のフレーズを叫ぶ。

「では、私達も」

「ああ、兄貴！」

すると二人はローグと同じスチームガン——ネビュラスチームガンを取り出し、歯車の様なものが付いたボトルらしき物を差し込む。

「!? あれって、僕のと同じ銃……」

『ギアエンジン！ファンキー！』

白いチェック柄のスカーフを巻いた坊主の男がトリガーを引くと今度は隣の方へと渡し、青っぱいチェック柄のスカーフを巻いた短髪の男もボトルらしき物を差し込む。

『ギアリモコン！ファンキー！』

「潤動!!」

二人が同時に叫ぶと、黒い霧が二人を包み込む。

すると二人の前にギアが現れ、二人に向かって纏わり付いていった。

『エンジンランニングギア！』

『リモートコントロールギア！』

霧が晴れて見えたその姿は、かつてビルド達が戦ったブロス達と全く同じ姿だった。

「俺がエンジンブロスで、兄貴がリモコンブロス、どっちと相手したい！」

「どっちでもいい！さきつとそこを退け！」

「はあああ！」

「そうか、二人同時がいいか！」

グリスとローグ、ジョーカーはリモコンブロス、エンジンブロスへ向かっていく。

同じ頃、横浜の図書館では仮面ライダービルド・桐ヶ谷晴夜と仮面ライダークローズ・上城龍牙が勉強会を開いていた。

「・・・夜・・・晴夜！」

「えっ!??どうした?」

「どうしたじゃねえよ、ここわかねえんだけど」

ボツとしていた晴夜に龍牙が声をかけると晴夜が反応し、龍牙のわからない問題を見る。

「ああ・・・つて、ここの問題、テストで出た所だろー!バカ!」

「バカつてなんだよ!バカつて!」

バカという言葉で始まる相変わらざるの二人のやり取りは今も変わっていない。

「てか、お前今マナの事を考えてだろ!」

「ん!??・・・それは・・・」

どうやら凶星みたいだ。鞆の中には何かプレゼントらしきものが入っていた。

「お前もまこぴーのことを・・・あつ!」

まこぴーの名前が晴夜の口から出ると、周りの人達が二人を見ていた。

「バカやろ、真琴の名前を簡単に出すなよ・・・」

「わりい・・・」

「まあ、実際早く会いけどな、あいつに」

二人の心は早く大貝町に行きたい気持ちで、頭がいつぱいいつぱいだった。

「さあ、続きやるぞー！」

「はいはい……」

二人は気持ちを切り替えて再び勉強へと目を向けるが、二人の心では早くみんなに会いたい気持ちに向いていた。

だがその時、外から悲鳴が聞こえた。

「なんだ……」

「行くぞ」

椅子から立ち上がり、二人は図書館の外へと出る。二人は聞こえた方へと向かっていくと、その光景に二人は目をかつ開いて驚く。

「スマツシユ!?」

なんとそこには、何体ものスマツシユが暴れていたのだ。

「どうゆうことだよ！スマツシユはもう作れねえはずだ！」

龍牙の言う通り、スマツシユはエボルトが消滅した影響で作られるはずはない。「とにかくみんなを助けるぞー！」

「おおー！」

二人は別れて助けに向かっていく。

龍牙は公園で逃げていた子供達を庇い、ドラゴンボトルを振りながらスマツシユに拳

を繰り出す。

「お前ら、早く逃げろ！」

龍牙に助けられた子供達は急いで逃げていく。

子供達がいなくなったタイミングを見計らいビルドドライバーを装着し、クローズドラゴンガジェットが手に置かれ、ボトルを一回振り、クローズドラゴンをガジェットに変え、差し込む。

『ウエイクアップ！クローズドラゴン！』

そしてドライバーにガジェットに差し込む。レバーを回し、ランナフアクトリーからアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身！」

拳を手に当てながら構えるとスナップライドビルダーから形成されたアーマーは龍牙の体に重なり装着され、煙が吹き荒れると音声 flowed。

『Wake up burning! Get CROSS—Z—DRAGON! Yeah!』

「じゃあ！行くぜ！」

ドラゴンがモーターフのライダー、仮面ライダークローズへと変身し、スマッシュユへと

向かっていく。

晴夜もスマツシユから周りの人を逃すとビルドドライバーを装着した。

その時、逃げ遅れた親子を見つけ、助けに入った。

「大丈夫ですか？」

「は、はい」

「ありがとう、お兄ちゃん」

晴夜は笑顔で女の子の頭を撫でる。

「早く逃げて下さい」

親子が逃げていくとスマツシユへと振り向く。

「さあ、実験を始めようか？」

ビルドドライバーを装着し、ボトルを2本取り出して数回振り始め、後ろからいくつかの数式や化学式が現れるとキャップを回した。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

兎と戦車のシルエットが浮かび、『R/T』と表示された。そして、レバーを回し前と後のライドビルダーからアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身!!？」

一度構えた後、両手を一度交差させてバツと広げるとアーマーが中央の晴夜に重なるように装着される。

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイー！』

二本のボトルにより変身する科学の力で戦うライダー・・・仮面ライダービルドへと変身した。

その頃、謎の部屋に一人残った男性がビルドとクローズが今スマッシュと戦っている映像を見ていた。

「よし、彼らを足止めできたか」

「ボス、連れてきたで」

「案外簡単な仕事だったわ」

後ろから黒服を纏った男性と女性が現れた。

さらに驚く事に、後ろにはMHからスマイルまでのメンバーが全員気を失って捕まっていた。

「あら、あの子はまだ？」

「今、ボス兄弟に迎えに行かせた」

「仮面ライダーのくせに頼りならやっちゃな〜」

「頼りないとはなんだ」

パルロが現れ、ドキドキプリキュアのメンバーを三人に見せる。

「ほう〜、流石仮面ライダーといったところか」

男性が言うのとパルロはガジェットを外し変身を解除した。

「当たり前だ。俺は本物の仮面ライダーだからな」

「本物を言うには、あの二人を倒してからちやうんかな〜？」

もう一人の男性が少年の肩を叩いて、今戦闘中のビルドとクローズの映像を見届ける。

クローズの方はビートクローザーを出現させ、スマッシュに斬撃を繰り出す。

「よし……あつ!? 危ねえ!」

公園の遊具に隠れていた男の子を見つけたクローズは、その子を庇う為にスマッシュの攻撃の盾となった。

「くう! 早く逃げろ!」

「う、うん……」

クローズに助けられた子供は急いで公園から離れる。

「このやろー!」

クローズが起き上がるとクローズドラゴンガジェットを外し、グレードドラゴンエボルトルを差し込むとクローズドラゴンのガジェットの色が変わった。

『覚醒!』

クローズドラゴンの起動スイッチを入れ、ドライバーに差し込む。

『グレードクローズドラゴン!』

グレードクローズドラゴンと音声が鳴り、クローズはドライバーに差し込みレバーを回す。

『Are you ready?』

クローズの前後から違うライドビルダーが出現し、クローズの体へと重なる。

『Wake up CROSS! Get GREAT DRAGON! Yeah!』

グレートクローズへとフォームチェンジし、スマッシュに向けてラッシュを繰り出しスマッシュを吹き飛ばした。

「しゃあ!オラオラオラオラ!」

クローズはドライバーのレバーを何度も回す。

『Ready go!』

『グレードドラゴニックファイニッシュ！』

背後から現れたドラゴンがクローズの右足にエネルギーが溜まり、高く飛躍してライダーキックをくらわせた。

一方、ビルドはドリルクラッシュャーでスマッシュを圧倒していた。

「はあ！ほおら！」

ドリルクラッシュャーを使いこなし、スマッシュを寄せ付けなかった。

「さあ、これでファイニッシュ！」

そう言うビルドはハザードトリガーのスイッチを押した。

『マックス！ハザードオン！』

トリガーを差し込み、フルフルラビットタンクボトルを振り、赤いランプの出た瞬間と共に栓を回した。

『ラビット！』

フルフルボトルを半分に割りドライバーにボトルを差し込んだ。

『ラビット&ラビット！ビルドアップ！』

『ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！』

『Are you ready?』

ハザードライドビルダーとラビットのユニットが出現し、ユニットが空中へパージされた。

「ビルドアップ！」

ビルダーがビルドの体と重なり、金型が離れるとハザードフォームへと変身し、パージされたラビットラビットアーマーを飛びながら装着し、着地した。

『オーバーフロー！紅のスピーディジャンパー！ラビットラビット！ヤベーイ！ハエーイ！』

ラビットラビットへとフォームチェンジを完了し、フルボトルバスターを出現させた。

「はあー！」

フルボトルバスターを放ち、スマッシュを後ずさる。

その際にフルボトルバスターのグリップを曲げ、砲撃モードへと変える。

『ラビット！パンダー！タカ！ミラクルマツチデース！』

3本のフルボトルを差し込み、フルボトルバスターに巨大な赤いエネルギー弾が収束されていく。

『ミラクルマツチブレイク！』

トリガーを引き赤いエネルギー弾が放たれ、命中したスマッシュは破壊された。

「どうかな？」

「全然、大したことない。二人もやはり偽物の仮面ライダーに過ぎない」

パルロの変身者は二人のことは大したことないつぶやく。

「さあつて、そろそろ始めようか……」

すると男性が倒れているプリキュア達に近づく。

「我らの配下へとなって貰おうか？」

男性から赤いエネルギーが収束されていく。そして、男性はそのエネルギーを衝撃波としてプリキュアに向けて放った。

「さあ、起きてもらおうか？」

男性が言うのと、気絶していたプリキュアが起き上がる。

「諸君、これを見て貰おう。」

この二人が、君達の倒す真の敵だ」

男性はプリキュア達にビルドとクローズの映像を見せると、プリキュア達に向けてビルドとクローズが倒す敵だとふっかける。

『わかりました』

するとプリキュア達が膝を折って跪き、命令を受け入れた。

「さあ、始めようか・・・ビルド、クローズ殲滅計画を始動する」

それを見届けた男性が、ビルドとクローズを殲滅すると宣言した。

その頃、横浜でスマツシユを殲滅したビルドとクローズが合流すると、二人は変身解除した。

「なあ、一体何が起こってんだ？」

「わかんねえよ、クローンスマツシユみたいだけど、スマツシユを作れる技術はエボルトが消えて、もうないはず」

エボルトがいない新世界を作った影響でスマツシユは作られない世界を作ったはず、だからスマツシユは製造できない。

「何か嫌な予感がする・・・」

晴夜には何か良くない事が起ころうとしていると予感した。

「とりあえず、みんなに伝えようぜ」

「そうだな、父さんにも」

二人が話していると一台の黒いリムジンが二人の前に現れた。

「あれは・・・」

リムジンのドアが開くと中から拓人とジョーが現れた。

「父さん……」

「ジョーさんも、なんかあつたんすか?」

急いで二人に駆け寄り、何があつたのかを尋ねる。

「実は君達に頼みがあるんだ……」

「頼み……」

——今日の戦いが、二人にとって最悪な敵との、新たな戦いの始まりだった。

次回! Re. ドキドキ&サイエンス! I a s t s c i e n c e !

第2話 計画始動、壊された平和

第2話 壊された平和

横浜でスマツシユを撃退した晴夜と龍牙だったが、晴夜はもう誰も作れない筈のクローンスマツシユがどうして現れたのかという疑問が残った。

だがそんな時、トランプ王国の大統領になったジョー岡田と研究室室長の桐ヶ谷拓人が二人の前に現れた。

「頼み……」

「俺達に頼みって、何すつか？」

「とりあえず、ここでは話しづらいし場所を変えよう」

頼みがあると語るジョーと拓人に言われるがまま、二人はリムジンに乗せられる。

しばらくして、近くの喫茶店へと到着した晴夜達は中へと入り込みテーブルへと座る。

「それじゃあ、本題に入りましょうか？」

「俺達の頼みについて」

晴夜達二人がジョーと拓人の頼みについて尋ねると、二人は難しい顔して晴夜と龍牙

に話す。

「実はな、数日前にトランプ王国にある私の研究室が襲われたんだ」

「研究室が!?!」

晴夜が襲われたと聞き驚いていると、拓人がその時の状況の写真を晴夜と龍牙に見せる。

「これは……」

「ひでえ……」

二人は研究室が酷く荒らされている写真を見て、この惨劇を生み出した犯人に対して強い怒りを感じた。

「これをやった犯人は……」

「まだ、捕まっていない」

「それに、その犯人はビルドドライバーと二つ目のハザードトリガーを盗んだんだ」

「ビルドドライバーに……ハザードトリガーを……!?!」

「奪われたのトリガーとドライバーだけじゃない、ロストボトルも数本盗まれた」

「ロストボトルまで!?!」

ドライバーとハザードトリガーだけでなくロストボトルまで盗まれていたと聞いた晴夜は驚愕の声を上げ、龍牙は驚いて何も口から出なかった。

「パンドラボックスは？」

晴夜は一番重要なパンドラボックスは無事か二人に聞く。

「そつちは何故か手を出さなかった」

「えっ!？」

「よかつたくくな、晴夜!・・・晴夜?」

パンドラボックスは無事だと聞き龍牙は一安心するが、晴夜は疑問があるような顔をしていた。

「おかしいと思わないか？」

「何がだよ？」

「普通なら、巨大な力をまだ秘めているパンドラボックスを盗む筈。

だがそいつらはパンドラボックスを狙わず、よりによつても俺達みたいにハザードレベルが3以上ないと使えないビルドドライバーと、俺やお前しか制御出来ないハザードトリガーを狙った」

「：言われてみればそうだよな」

晴夜の考えを聞いて、この盗み方はおかしいと龍牙も感じ出した。

「それに何故犯人はロストボトルを狙った。あれは人間には危険なボトルのはずだ」

「その通りだ。ロストボトルは黒いプシユケーと融合し、ロストスマツシユへとなる。」

だが、人間のままであれを体内に取り込むと細胞変異を起こし、死に近いことになってしまう」

拓人も何でロストボトルを盗んだのかという晴夜の考えには同意のようだ。

しかし拓人の説明を聞いて、晴夜も犯人の意図が読めなかった。

「それで、奪われたロストボトルは何本ですか？」

「奪われたボトルは4本だ」

「一つはプロトタイプのスコーピオン、残る三つはハサミ、ゼブラ、そして、コブラだ」

「コブラ・・・」

「コブラか・・・」

コブラと聞き、二人はあの男を思い出す。

晴夜を仮面ライダーとし、龍牙の中に自身の遺伝子を埋め込み、二人を自らの計画のために利用し、この世界を・・・全宇宙を破滅へと導こうとした。最悪の相手を・・・

「エボルト・・・」

エボルト。奴はかつて一万年前のプリキュアに封印された謎の種族の存在、一万年経ち封印が解けた後、力を取り戻すために晴夜と龍牙を利用した。

だが、晴夜と龍牙が合体した『クローズビルド』となりエボルトは消滅し、二人に名残惜しいような事を言う最期を迎えた。

「なあ、まさか、エボルトが復活したとか……」

「それはない」

晴夜はこれはエボルトではないと言う。

「ああ、いくらコブラボトルを盗んだとはいえ、エボルトにしては強引過ぎる」

拓人も同じく、これはエボルトによる仕業ではないと晴夜に同意する。

「それに二人がエボルトが存在しない世界を作ったじゃないか」

「ええ」

ジョーの言う通り、晴夜はパンドラボックスを使ってエボルトの存在しない世界を作り、王国を救済させた。

「さあつて、そろそろ本題に入ろう」

二人が真剣な表情で拓人を見る。

「二人で、研究室を襲った犯人を捕まえて欲しいんだ」

「「えっ？」」

ジョーは二人に犯人を見つけて欲しいと頼み込む。

「なんで、俺たち？」

「トランプ王国の警備隊でもいいんじゃない？」

「そうだけど、二人は仮面ライダーだし……むしろ、安心だし！」

「それに、二人はベストマッチコンビだろ！」

「・・・」

二人に言われ、晴夜と龍牙がお互いの顔を見る。

ベストマッチコンビ、いつから二人がそんな関係になったか言われるようになったのかは、あんまり覚えてないけど二人が最高のコンビなのは本当だ。

「どうする、相棒？」

龍牙が聞くと晴夜が顔を下に向ける。

「はあく最悪だ」

大きく溜息をつくとき晴夜は、口癖の『最悪だ』と呟いて顔を上げる。

「仕方ないけど、愛と平和のために頑張ります」

「相変わらずだなくお前・・・まあ、付き合うけどよ」

二人は拓人とジョーの頼みを受け入れた。

「なあ、明日真琴やマナ達にも会いに行くしよ一緒に探して貰おうぜ」

「おお、バカのお前にしては冷静な判断だな」

「そうそう、バカだけど冷静・・・バカ・・・バカっていたなバカって！」

「気付くの遅いでしょう」

バカの一言で二人の相変わらずのやり取りが始まり、二人が笑って見ていた。

その時、晴夜のビルドフォンから着信音が聞こえてきた。

「シャルル？」

着信相手はマナのパートナー妖精シャルルからだった。

「シャルル、どうした？」

晴夜が電話に出る。

「晴夜、マナが……みんなが……」

「えっ？」

それからシャルルから電話の内容を聞き、晴夜は呆然と立ちすくむ。

「それで、かずやんにレジーナ、幻冬君は……」

「晴夜、シャルルがどうしたんだ？」

「向こうでも何かあったのか？」

「晴夜君、みんながどうしたんだ？」

三人が聞くとしばらくしてビルドフォンを耳から離す。

「なあ、どうしたんだよ。おい！」

「マナが……まこぴーや六花達が拐われた」

「さ、拐われた……」

マナ達が拐われたと聞き、龍牙も動揺する顔を隠せなかった。

「プリキュアのみんなが拐われた。まさか……」
「……まさか、この誘拐も今回の事件と関わっているのか。」

いや、まさかそこまでは……」

拓人はドキドキプリキュアの誘拐が研究室を襲った犯人と同じだとにらむ。

「なあ、それで真琴はどこに連れて行かれたんだ！なあ、晴夜ー！」

「わかんねえよ！」

晴夜は龍牙が抑えていた腕を振り払う。

「それに、かずやんにレジーナ、幻冬君もみんなを助けに行こうとしたら、返り討ちあつたらしいんだ！」

「マジかよ……」

まさか、仮面ライダーとキュアジョーカーである、和也とレジーナ、幻冬までやられたと聞きこれまた驚く。

「とりあえず、ソリティアに行こう！多分みんなそこに居るはずだ！」

急いでテーブルから立ち上がり急いで車へと乗り込み、大貝町にあるアクセサリーショップ『ソリティア』へと向かう。

「みんな！」

「大丈夫か……!?!」

二人がソリティアに到着し、中に入ると中には怪我で傷だらけの和也にレジーナ、幻冬がおり、妖精達が人間の姿に変身し看病していた。

「よう、晴夜に龍牙」

「久しぶりです」

二人がみんなのところへと駆け寄る。

「本当にマナ達が拐われたのか……？」

晴夜が聞くとみんな顔を暗くして頷く。

「誰が……誰が拐ったんだ！」

和也の腕を掴んで龍牙が叫ぶ。

「やめて、龍牙！かずやんもみんな怪我してるのよ少し落ち着いて！」

「落ち着いてられるかよ！真琴が！」

暴れる龍牙をDBが抑える。

「レジーナ、一体何があったんだ？」

「わからない……あたし達が来た時には、みんなやられていて、目の前に変な仮面ライダーがいたの……」

「仮面ライダー……」

ドキドキプリキュアを倒したのが仮面ライダーと聞き驚く。

「その、仮面ライダーは緑色でサソリみたいな感じでした」

「サソリ……!?まさか……」

サソリと聞いた晴夜は、プロトロストボトルのスコープピオンのボトルだと推測する。

「俺達はみんなを助けようとしたんだけど……」

「そしたら今度は違った二人組が現れて邪魔してきた……」

「二人組?」

「エンジンブロスとリモコンブロスだ」

「えっ!?」

その言葉を聞いて、その二体は以前に龍牙達三人が倒したはずだと驚いていた。しかも前に倒した個体はロボットだったはず。

「恐らく、変身用ボトルを使用したんだろう」

すると拓人が変身用のアイテムで変身したのだと予測する。

「リモコンブロス、エンジンブロスは本来ならネビュラスチームガンによる変身も可能だが、奴らはその事を何故知っているんだ」

「僕達、そいつらを倒してみんなを助けに行こうとしたんです。けど……」

「……」

「俺達、奴らに負けた……」

「そんな……」

キングジコチューにエボルトと戦ってきた三人が負けるなんて、不思議としか言いようがない。

——それは、みんなが連れ去られた後、仮面ライダーパルロが消え、二体のブロスに三人が向かっていった出来事。

「オラア！」

ツインブレイカーをブロス達も振るうも、難なく躲された。

「和也さん！」

今度はローグがスチームブレードを振るうが、これも躲される。

「二人共どいて！」

ジョーカーがミラクルドラゴンブレイブを持ちブレイブに光が包まれた。

「行けえ！」

ドラゴンブレイブから放たれた光がブロスへと向かっていく。

「ふん！」

するとリモコンブロス、エンジンブロスが「ギアトルクガントレット」の装着された

腕から巨大なギアを出現させた。そのまま二人から放たれたギアが、ドラゴングレイブから放たれた光を相殺した。

「そんな・・・」

三種の神器の一つであるミラクルドラゴングレイブの力すら、プロス達には通用しなかった。

「全くこの程度とはがっかりです」

「ああ、プロトジコチューを倒した奴らと聞いて歯応えがなさ過ぎるぜ」

「このヤロー！調子乗ってんじゃねえぞ！」

『ツインブレイカー！』

もう片方の腕からもツインブレイカーを出現させ、ダブルツインブレイカーとなった。

『『ビームモード！』』

ツインブレイカーをビームモードに変え、二体のプロスに向けてビームを放つ。

すると、エンジンブロスが前に出て来ると、その手にはスチームブレードを持っている。

「はんー！」

スチームブレードでグリスの放ったビームを切り相殺していく。

「くそっ!」

『アタックモード!』

今度はアタックモードへと変え走っていく。

「これでどうだ!」

ツインブレイカーをエンジンブロスに向かって振る。

だが、エンジンブロスはその動きを見切りツインブレイカーの攻撃を避けた。

「なっ!?!」

『エレキスチーム!』

スチームブレードの蛇口をひねり電撃を纏うと、カウンターでスチームブレードを振るい、グリスを吹き飛ばす。

「和也さん!は!?!」

ローグが振り向くと、リモコンブロスがスチームガンをこちらを向けて放とうしていた。

『クロコダイル!ファンキーショット!』

こちらにもスチームガンにクロコダイルクラックボトルを差し込み、エネルギーを溜め発射した。

だが、リモコンブロスが放ったエネルギー弾の方が、ローグが放ったエネルギー弾よ

りも威力が強かった。

「うわあああああああ！」

跳ね変えてきたエネルギー弾が直撃し、ローグとその場にいたジョーカーを吹き飛ばした。

「なんだよ、コイツら……」

「強いというより……」

「なんか、嫌な感じがする……」

グリス達はプロス達の強さに戦慄していた。

「でも、必ず倒す！」

「ええ！絶対に進む！」

「みんなを助ける！」

「プリキュア！ドラゴンズウインド！」

ミラクルドラゴングレイブから放たれた竜巻が発生し、プロス二体を囲みの動きを封じる。

「今よ！かずやん！幻冬！」

竜巻の上からグリスとローグが高く飛躍していた。

「行くぞ！幻冬！」

「はいー！」

『スクラップファイニッシュュ！』

『クラックアツプファイニッシュュ！』

二人がドライバーのレバーのレンチを下ろし、足にエネルギーを纏いブロス達にライダーキックを喰らわせようとする。

「やはりそう来ましたか」

「面白くねえ奴らだな」

「!？」

しかし、ブロスはこれを読んでいた。

リモコンブロスとエンジンブロスはお互い近づきあい巨大なギアを出現させ、ブロス達はギアをライダーキックへ放とうとした。

「これで、ジ・エンド！」

そして、ブロス達が放ったギアがライダーキックを放とうとしたキックを跳ね返した。

「かずやん！幻冬！」

「まさか、読まれたのか？」

「でも、なんでこっちの技がわかったんだ」

「兄貴、そろそろ決めようぜ！」

「ええ、もう終わりにしましょう」

その後、一方的に攻撃を受け三人は限界を向かい、ボロボロになっていた。

「ここは、一旦引きましょー！」

ローブの起点によりスチームガンを周囲に放ち、三人の周りを煙が囲みブロス達から逃げた。

そして、現在の状況に至る。

「そこまで、強かったのか・・・」

「くそッ！俺達が入れば！」

「龍牙・・・」

「悪い・・・晴夜、龍牙・・・俺達がもっと早く来てればみんなが拐われることはなかった・・・」

「でも、和也達が早く来てもあの仮面ライダーを倒せていたかどうか・・・」

「そういえば、マナ達はその仮面ライダーと戦ったんだよな」

「すごく強かったケル」

「ありす達の技が全然通用しなかったでランス」

「それと・・・その仮面ライダーは晴夜と龍牙がビルドとクローズだって事を知ってた

シャル」

「俺達を知ってた？」

「そんなはずは……」

新世界を作った影響で仮面ライダーの存在はここにいる全員とプリキュアのみんなとしか知らないはず、他の人がその事を知っているはずはない。

「その仮面ライダーこうも言っていたわ、『俺は本物の仮面ライダーだ。愛と平和を掲げる仮面ライダービルドとクローズは所詮偽りの仮面ライダー』だって」

「偽り……」

「あの仮面ライダー、その事を言ってたの……許せない。」

アタシが断ち切って……うっ！」

「レジーナ、無理するな」

「でも……晴夜の事をまた偽りだって……」

「晴夜」

「大丈夫だよ。俺は作られたヒーロー、何言われても大丈夫だよ」

「晴夜……」

偽りのヒーロー、エボルトの為に作られボトルの回収、計画の手助けそれが仮面ライダービルドの存在、それが作られたヒーローという由来でもある。

『いやああああー!!』

その時、外から高い悲鳴が聞こえた。

「なんだ」

「町の方からだ!」

「まさか……」

「龍牙、行くぞ!」

「おお!」

二人がソリティアを出て、急いで町の方へと向かう。

「僕たちも」

「やめなさい。君たちの怪我では二人に足を引つ張るだけだ」

拓人が三人も行くこうとするのを止める。

「大丈夫、二人を信じよう」

拓人とジョーに言われ、三人は仕方なく待つことにした。

その頃、町の方へと到着した晴夜と龍牙。町の中は壊されて部分もあり、周りの人達が必死に逃げていた。

「これは……」

「来ましたか」

声が聞こえ、振り向くと町の中に同じ服を着ていた二人組の姿があった。

「よかったぜ、今度は本命が来てくれてよ」

この発言、まるで二人をおびき寄せせる為のものだと聞こえた。

「てめえらが、かずやんやレジーナをやったのか?」

「ええ、前座にしてはかなりやりましたが・・・」

「俺達の敵じゃなかったな、兄貴」

「てめえら、許さねえ!」

突つかかろうとするが晴夜が腕を出して止める。

「何者だ、お前らは?」

「はじめまして、私達はプロス兄弟、私がガイ」

「俺は弟のライだ」

二人組は兄弟で、プロス兄弟と名乗った。

「マナやまこぴー達は今どこにいるんだ!」

「その問いに答える必要はないですよ。桐ヶ谷晴夜」

「!?なんで、俺の名前を・・・」

「お前だけじゃない、そいつは、上城龍牙だろ」

「俺達のことを知ってるのか？」

「ええ、貴方達の事は全て調べています」

「俺達のボスの狙いは、お前ら二人を落とす事だからな」

「俺達を落とすだと・・・」

ブロス兄弟のボスは、二人を落とすの狙いだと言う。

「そんなことのためにお前らは、マナ達を連れていたのか！」

「まあ、そういう事だな」

「・・・許せねえ、そんなことで真琴を・・・みんなを・・・

てめえらは、俺らが絶対ぶっ飛ばさねえと気がすまねえ！」

「ハッハッハッハッ！許さないって？上城龍牙、君はもつと許されないことをしたんですよ」

「んだと・・・」

「兄貴、そろそろ話は終わりして早く潰そうぜ」

「そうですね、あなた方とこれ以上話すことはありません」

ガイはそう言うのと、此処から立ち去ろうとする。

「ふざけるな！こつちにはお前ら聞きたい事がある！」

「聞きたければ、私達を倒す事ですな」

「まあ、無理だけどな」

そう言うところライはネビュラスチームガンを取り出し、ボトルの様なもの——ギアエンジンを差し込む。

『ギアエンジン！ファンキー！』

トリガーを引いたライは、今度は隣の兄へとトランスチームガンを渡し、ガイはギアリモコンをスロットに差す。

『ギアリモコン！ファンキー！』

「潤動!!？」

二人が同時に叫ぶと黒い霧が二人を包み込み、彼らの前にギアが現れて二人に向かう。

『エンジンランニングギア！』

『リモートコントロールギア！』

二人がエンジンブロス、リモコンブロスへと姿を変える。

それを見て二人はドライバーを装着し、ブロスへと向かって行く。

「龍牙、行くぞ！」

「おお」

二人はボトルを出し、龍牙はガジェットにボトルを差し込込み、そして二人はドライ

バーへと差し込む。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

『ウエイクアップ！クローズドラゴン！』

二人はドライブバーのレバーを回し、前後にスナップライドビルダーが出現すると、アーマーが形成された。

『Are you ready?』

『変身!!』

『鋼のムーンサルト ラビットタンク イェーイ!』

『Wake up burning! Get CROSS—Z—DRAGON! Yea h!』

二人が構えて叫ぶとアーマーが体に装着され、体から煙が吹き荒れる。

『ほうく、これがビルドとクローズですか』

『まあ、俺達兄弟の相手ではないけどな』

二人が構えるとお互い走りだし、戦いが始まった。ビルドはエンジンブロス、クローズはリモコンブロスと戦っていた。

『海賊！電車！ベストマッチ!』

ボトルを差し替えてレバーを回し、スナップライドビルダーからアーマーが形成され

る。

『Are you ready?』

「ビルドアップ！」

叫ぶと共にアーマーがビルドの体と重なった。

『定刻の反逆者！カイゾクレッツシャー！イエーイ！』

右側は海賊船とコート、左側は遮断機と信号機を模していた『カイゾクレッツシャー』へとフォームチェンジした。

『カイゾクハッシャー！』

弓矢と電車の弦がモチーフの武器『カイゾクハッシャー』を出現させ、弓矢の弦を引く。

『各駅電車！急行電車！快速電車！海賊電車！……発車！』

カイゾクハッシャーから放たれたエネルギー弾がエンジンブロスに向けて放たれた。

「ふん！」

スチームブレードでエネルギー弾を相殺した。

「なに…?!」

エンジンブロスが一気に詰め寄り、ビルドの前でスチームブレードを振り抜きビルドを倒れさせる。

クローズとリモコンブ羅斯は格闘戦が続いていたがクローズが距離を取る。

『ビートクローザー!』

ドライバーからロングブレード『ビートクローザー』を出現させる。

『ヒツパレー!』

クローズはビートクローザーのグリップを引つ張る。

『スマッシュヒット!』

ビートクローザーの溜まったエネルギーをリモコンブ羅斯にぶつけた。

だが、リモコンブ羅斯はビートクローザーによる攻撃を受け止めた。

「うそだろ!?!」

リモコンブ羅斯の腕のギアが回ると、その腕をクローズに向けて放ち、クローズが倒れこむ。

「おいおい、この程度かよ」

「がっかりですね、この程度の実力とは……」

倒れる二人を簡単に圧倒し、あざ笑うかのように見下す。

「まだまだこんなもんじゃねえ!」

クローズが起き上がるとクローズドラゴンガジェットを外し、グレートドラゴンエボルボトルを差し込みクローズドラゴンのガジェットの色が変わった。

『覚醒！』

クローズドラゴンの起動スイッチを入れ、ドライバーに差し込む。

『グレートクローズドラゴン！』

グレードクローズドラゴンと音声が届き、クローズはドライバーに差し込みレバーを回す。

『Are You Ready?』

クローズの前後からスナップライドビルダーが出現し、クローズの体へと重なる。

『Wake up CROSSER! GET GREAT DRAGON! Yeah!』

グレートクローズへとフォームチェンジし、走ってリモコンプロスに向かっていく。

「オラァ！」

「くう！力が先までとは違う・・・」

青い炎を纏ったクローズの拳がリモコンプロスを後ずさる。

エンジンプロスもスチームブレードを振りビルドを追い詰めようとする。

「だったら、こっちも！」

ハザードトリガーを取り出しスイッチを押した。

『マックス！ハザードオン！』

トリガーを差し込みフルフルボトルを取り出して数回振り、青いランプの出た瞬間と共にキャップ栓を回した。

『タンク！』

フルフルボトルを半分に分り、ドライバーにボトルを差し込んだ。

『タンク&タンク！ビルドアップ！』

『ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！』

レバーを回すのと同時に小型のタンクユニットが現れ、周囲を囲みながらエンジンプロスに攻撃し、タンクユニットは宙に浮かぶ。

『Are you ready?』

「ビルドアップ！」

ハザードライドビルダーが現れてビルドの体と重なり、ハザードフォームへととなり宙へ飛び、浮かぶタンクのユニットがビルドに装着される。

『オーバーフロー！鋼鉄のブルーウォーリア！タンクタンク！ヤベーイ！ツエーイ！』
全身が青色に染まったフォーム、タンクタンクフォームへフォームチェンジを完了した。

「はん！そんなもん！」

エンジンプロスがパンチを繰り出す、ビルドは腕を出してその攻撃を防御した。す

ると、ビルドの腕の戦車のローラーが動き出す。

「くうー！」

エンジンプロスの拳にダメージを与え、ビルドから離れた。

「みんなを・・・manaを返してもらおう！」

『フルボトルバスター！』

ビルドドライバーからフルボトルバスターが出現した。

「ふうんー！」

フルボトルバスターのグリップを曲げて砲撃モードへと変え、エンジンプロスに向けて放ち続ける。

エンジンプロスも避け続けるが、避けるので精一杯の様子だった。

「ふざけるなー！」

「くうー！」

ビルドはフルボトルバスターでエンジンプロスのスチームブレードの攻撃を受け止めた。

「俺達兄弟はどんな事でもして生きてきた！」

リモコンプロスの方もスチームガンをクローズに放ち続け、クローズは必死に避ける。

「我々兄弟は、生きる術なら他人を蹴落とし常に強くなってきた！」

「全てあのお方のためにな！」

「あのお方・・・？」

「私達はそうやって今まで生きてきた！」

二人が言い終わるとクローズがビートクローザーをエンジンブロスに振るう。

「だから・・・だからって、人を拐って、関係ねえ人達を巻き込んで傷つけていいわけねえだろ！」

「オラァ！」

罅迫り合いを制し、ビートクローザーによる攻撃が決まった。

「俺は他人を傷つけて、誰かを蹴落としてまで生きようとは思わねえ！」

一方のビルドはフルボトルバスターにフルフルボトルを差し込む。

『フルフルマッチデース！』

フルボトルバスターでエンジンブロスを払いのけると構える。

『フルフルマッチブレイク！』

青いエネルギーを纏ったフルボトルバスターの斬撃がリモコンブロスを吹き飛ばした。

「俺達のこの力は支配するためにあるんじゃない！多くの人を守り続け明日を作るためにある！」

フルフルボトルを外してもう一度振りラビットの赤いランプが光った瞬間にキャップ栓を回す。

『ラビット！』

フルフルボトルを半分に分り、もう一度ドライバーにボトルを差し込んだ。

『ラビット&ラビット！ビルドアップ！』

『ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！』

『Are you ready?』

ラビットユニットが出現し、ユニットが空中へパージされ、タンクユニットがビルドの体からパージされた。

「ビルドアップ！」

宙へとパージされたラビットユニットを飛びながら装着し、地面へと着地した。

『オーバーフロー！紅のスピーディジャンパー！ラビットラビット！ヤベーイ！ハエーイ！』

ラビットラビットへとフォームチェンジし、高く飛躍し、ビルドの右足が伸びブロス達を蹴り飛ばした。

「なんだよ、これ・・・」

「なぜ、ここまでの力の差が・・・」

二人の強さに驚いてる間にビルドが宙から着地した。

「こつちは、三人の思いを引き継いでいるんだ!」

「だから、負けるわけにはいかねえ!」

二人がドライバーのレバーを何度も回し高く飛躍した。

『『Ready go!』』

『ハザードフィニッシュ! ラビットトラビットフィニッシュ!』

『グレートドラゴニックフィニッシュ!』

二人が同時にライダーキックをプロス達に喰らわせ、プロス達二体は勢いよく飛ばされ倒れる。

「こいつら、許さねえ!」

「やめなさいライ!」

頭に血が上った様子のエンジンプロスが起き上がると、リモコンプロスが彼を止めた。

「何でだよ! こいつらは・・・」

「今のままでは、私達は彼らに勝てません。一度退きましょう」

「ちっ!」

「大丈夫ですよ、次は彼らが苦しむ番ですから」

「・・・ああ、そういえばその通りだな兄貴」

「俺達が・・・」

「苦しむ・・・」

「では、また機会があれば会いましょう。桐ヶ谷晴夜、上城龍牙」

「っ!?待て!」

「逃げんのか!」

「最後に一つ、次はあなた方は追う立場ではなく、追われる立場となるのです」

「えっ?」

リモコンブロスがスチームガンを周囲に放ち、煙幕を広げ姿を隠す。

煙が晴れた時には、そこにブロス達の姿はなかった。いないのを確認すると、二人はドライバーからボトルを抜き変身を解除した。

「くそっ!!あいつら、逃げやがって!真琴・・・」

「龍牙・・・(マナ、お前は無事なのか・・・)」

二人はプリキュアのみんなが無事なのか気になっていた。

(次は俺達が苦しむ番ですから・・・か・・・何を企んでいるんだ。あいつら、それに『あの

お方』って……」

その頃、プロス兄弟は謎の暗い部屋へと戻っており、一人の男性の前で跪いていてた。

「ただ今戻りました」

「ご苦労、二人をおびき出しくれてありがとうございます」

男性はプロス兄弟に礼を言う。

「おい」

仮面ライダーパルコの少年が近づいてくる。

「なんで、上城龍牙と戦っていた。あいつを倒すのは俺だ！」

ガイの服を引っ張ると、急に怒鳴りつく。

「そうでしたら、早く来れば良いものを貴方が鈍いですよ」

「てめえ！」

「やめたまえ」

男性がやめろと言うと少年はガイを離す。

「それで、ビルドとクローズと戦ってみてどう感じた」

「ええ、最初は大事なことない思っていました、二人の強さは戦う度に成長し、レベルが上

がるのは感じました」

「ふん！あんな偽りの奴ら負けるとは」

「偽りと言つても彼らの力は本物ですよ」

「案外、お前よりも強いかもなく本物の仮面ライダーさん」

「なんだと・・・俺は、本物の仮面ライダーだ！あんな奴らに負けるかよ！」

「口だけじゃなければいいがな」

「てめえ・・・！」

「ああ、もうやめかいな」

少年がブロス兄弟を殴ろうとすると違う男性と女性が現れ、仲裁する。

「それで次はどうするの？」

「安心したまえ、次の手は用意してある」

指を鳴らすと後ろから黒いローブを被った集団が現れた。

「手始めに彼女らに手伝ってもらおうじゃないか？」

「ほんま、ボスの考えはエグいですな」

「これを見せられたらあの坊や達相当シヨックだわね」

「それがこちらの狙いだ。まずはあの二人の精神を絶望へと導いてやらなければならぬ」

「おい！」

少年が男性に声をかける。

「クローズを・・・上城龍牙を落としめるのは俺だ。それだけは邪魔するなよ」

「いいだろう、好きにしたまえ」

「さあ、本格的に始めようではないか、ビルド・クローズ殲滅計画を」

男性のその発言によりローブを被った集団が行動を開始した。

（待ってろ、上城龍牙お前を倒して証明してやる。俺が貴様よりも強い、本物の仮面ライダーだとな！）

そこから離れた所で、彼らと同じ黒い服を纏いマゼンタ色の二眼レフカメラを手に持った青年がこつちを見ていた。

「はあく、この世界にまた危機が訪れたみたいだな」

そう言いながらその青年は、首にぶら下げた二眼レフカメラのシャッターを下ろした。

「本物の仮面ライダーか・・・どうする」桐ヶ谷晴夜

青年は桐ヶ谷晴夜の姿を思い浮かべながら、その様子をただじつと見ていた。

その頃、ソリティアへと戻った晴夜と龍牙は、みんなにブロス兄弟を退けた事を話す。

「プロス達を退けさせた！」

「流石、晴夜と龍牙！」

「流石、ベストマッチコンビですね」

「退けさせたけど、あの二人はまだ本気じゃなかったと思う」

「どうしてケル？」

「勝ったんじゃないでランスか？」

「わからないけど・・・あの二人の後ろにはもっと巨大な何かがいるみたいなんだ」

晴夜は彼らの口調からして、まだ何か大きな存在が後ろにいるのは確かだと感じていた。

「もしかしたら、キュアハート達を連れ去った仮面ライダーとかですか？」

「いや、その可能性はない。和也君達の意見から聞くに、その仮面ライダーはプロス達と同じ立場の地位の存在」

拓人はその仮面ライダーが一番大きい存在ではないと睨む。

「となると、その三人よりも高い地位におり、指示を出してる人物がいると？」

「おそらく・・・」

「父さん」

晴夜が拓人に近づく。

「今回の事件は繋がってると思うけど……」

「それって、研究室が襲われたのと真琴達が連れ去られた事も関係しているのかよ？」

晴夜は今回の全ての事件は、同一犯によるものだと睨んでいた。

「おそらくですけど……まだわからない。それに……（追う立場から追われる立場になる……どういう事だ？）」

「それで、これからどうすんだよ？」

「研究室を襲った犯人が同一犯なら、おそらくみんなもそこにいる可能性もある」
簡単に推測はつくが、確証かどうか不明だった。

「明日から行動開始しよう。とりあえず、まずはみんなが居そうな場所を探そう」

「なら俺は明日トランプ王国に行く。あそこはお前より俺の方が詳しいからな」

「わかった。じゃあ俺は大貝町辺りを探す。何か痕跡があるかもしれないからな」

「俺も行く。お前らばっかやらせる訳には行かねえ、ぐう！」

「アタシも、イタツ！」

「まだ、怪我が酷いんだ。俺達だけ行ってくるよ」

それを聞いた三人が暗い顔になる。

「すいません、力になれなくて」

「気にすんなよ、ちよつと休んでろよ」

「でも、僕たちだけ……」

幻冬が言いかけると龍牙が幻冬の頭を撫でる。

「怪我が治ってから手伝ってくれよ」

「はい！」

「晴夜！シャルルも一緒に連れてて欲しいシャルル！」

いきなりシャルルが近づき一緒に行きたいと叫ぶ。

「シャルル……」

「マナを取り戻したいシャルル！」

「シャルル……わかったよ。一緒にマナをみんなを探そうシャルル」

「ありがとうシャルル！」

「龍牙、私も明日一緒にトランプ王国に行くわ！」

「ダビィお前……」

「私も大切なパートナーを取り戻したいの。お願い」

「ああ、一緒に真琴を取り戻そうぜ！」

「ええ！」

「ラケルのランスはここで和也達と一緒に居て三人を看病してくれる？」

「任せるケル！」

「大丈夫でランス！」

「じゃあ、明日から行動開始だ！」

『おおお!!』

みんなが腕を上げて叫ぶ。

「マナちゃんが居なくてもしつかりみんなをまとめる。逞しい存在になりましたね晴夜君は、そうは思いませんか博士」

ジョーが言うのと拓人は首を横に振る。

「いえ大統領、あいつが大きくなるのはまだまだこれからですよ」

拓人は晴夜はまだまだ大きくなるのだと期待していた。

(待っててみんな、必ず助けてみせる)

その時、ソリティアのドアが開く音が聞こえた。

「ん？」

「誰か来たの？」

みんなでドアの前に現ると目を驚く。

「メップル先輩！」

「ミップル先輩！」

「他のプリキュアの妖精もどうしてここに？」

第3話 追われるビルド

ブロス兄弟を退けさせた晴夜と龍牙はその翌日、みんなを探すために行動を開始した。

晴夜は、愛用のバイクマシンビルダーを飛ばしていた。だが、走っていたのは大貝町ではなく、音楽の溢れる加音町だった。

「ここにも手がかりなしか？」

バイクから降り辺りを歩き回るが、やっぱり手がかりになるようなものはなかった。

「ごめんニャ・・・晴夜に手伝って貰ってすまないニャ」

スイートプリキュアの妖精ハミイが晴夜に謝る。

「気にすんなよ、ハミイ。今は響さんや奏さん達を探すのが大事だろ」

「晴夜、ありがとうニャン！」

ハミイを慰めるとビルドフォンから着信音が流れる。

「龍牙、どうだった？」

電話の相手は別行動で探している龍牙からだった。

「いや、こっちは手がかりなしだ」

現在、龍牙はスプラッシュスタープリキュアのいる町、夕風町へと着ていた。
——何故、二人が違う町にいるのかは、昨日までに遡る。

昨日の夜、二人が連れ去られたドキドキプリキュアのメンバーを探そうと話していた時、ソリティアに他のプリキュアの妖精達が現れた。

『みんな、連れ去れてしまった!』

「「えっ? ええええええええええ!!」」

プリキュアオールスターズの全員が連れ去られたと聞かされ、二人はかなり驚いた。

「みんな本当に捕まったの?」

晴夜が問いかけると、メツプル達はその時の状況を説明する。

「男が現れていきなり……」

「それで、変な姿に変身してほのか達がメポ……」

「こっちは女性が現れたココ!」

「そいつも変身してみんなを襲ったナッツ!」

「変身したって、まさか……そいつも仮面ライダーに!」

「いや、なんか違ったロップ……でも黒いボトルを持っていたロップ」

龍牙が仮面ライダーがやったのだと睨むが、シロップは違うと言って、代わりに黒いボトルを持っていた事を話す。

「黒いボトル!? 父さん、それって……」

「恐らく、ロストボトルを使ってロストスマッシュに変身したんだろう」

「でも、ロストスマッシュは人間がなったら死ぬ可能性もあるんだろう?」

「それなのになんで、使っても平気だったんですか?」

「犯人の実体を掴めない限り、私からは何も言えない」

ロストスマッシュのことを聞いた和也と幻冬が拓人に説明を求めますが、拓人は分からないと話す。

「どうして、みんなを連れて去るの……」

(……そういえば、あの二人が言ってたな。俺と龍牙を落としめるって、それと関係しているのか?)

「どうした、なんか俺についているか?」

「いや、何でもない……」

晴夜はロス兄弟の『次はあなた方は追う立場ではなく、追われる立場となるのです』というセリフに何かあると睨む。

「でもよ、こんな簡単にみんな連れ去られるなんて、おかしくねえか?」

「それだけ相当な実力あるか、それとも・・・」

「それとも?」

「みんなの事を研究して来たか、だ」

「それって、犯人達はみんなの動きとか技が見切られていったとか、そういう事か?」

「それだけじゃない、犯人はみんながどこにいるかも把握していた。かなり周到な準備をしていたかもしれない」

勿論、これだけのことを出来る実力を持ち、計画的に行えた事から後ろにいるのはかなりの策士がいるって事にもなる。

「お前もそう思うか?」

晴夜の推測に気づいた拓人が話しかけると、晴夜が頷く。

「で、どうする?」

「決まってだろ。みんなの手がかりを探そう」

晴夜はプリキュア達の手掛かりを探す為に、彼女達が住んでいる町を隅々まで探すつもりでいる。

「俺達で他のプリキュアのいた町に向かうんだ。もしかしたら、犯人に関する手がかりが残っているかもしれない」

「手がかりか・・・」

「見つけられるの・・・?」
「やるしかない」

そして翌日、二人は朝早くから行動を開始した。

晴夜はシャルルと共にマシンビルダーで龍牙はダビイの運転により行動を開始した。
龍牙は最初にサンクルミエール市に行つて希望ヶ花を回り、今は夕凧町へと来ていた。

「これから、ダビイと次の町に行く」

『了解、俺は次に四つ葉町に行つて次は若葉町に行く。その後、大貝町を探すつもり』

一方の晴夜は加音町、四つ葉町、若葉町と回つて探していた。

「わかった。俺も次の町に行つたら、トランプ王国に行つてみる」

龍牙は携帯を耳から離すと電話を切る。

「はあく、中々見つかんねえもんだな」

「仕方ないわよ、地道にやりましょう」

「こっちはダビイが人間の姿となったDBが運転しながら手がかりを探していた。

「すまないラツピ」

「迷惑をかけてしまって申し訳ないチョピ・・・」

龍牙の肩からスプラッシュユスタープリキュアの妖精、フラッピとチョッピが現れる。

「気にすんなよ。俺達だつてみんなを探してるんだ。このくらい構わねえよ!」

「ありがとうラッピ! (チョピ!)」

一緒に探してくれて感謝感激というような顔をする妖精達だった。

「さあ、次へ行きましょう!」

DBが言うのと車に乗り込もうとする。

「!」
「!」

その時、二人同時に声をかけられ龍牙が顔を上げる。

「ん? 俺か?」

そこには、赤と青の髪色をした姉妹が立っていた。

「あなた、この町の人じゃないわね」

「もしかして、咲と舞を拐った犯人!」

「えっ?! ちよ、ちよつと、待って俺は・・・」

「!」
「!」

フラッピとチョッピが前に出て姉妹に向かって違うと叫ぶ。

「フラッピ」

「チョッピ!」

「彼は咲と舞を拐った犯人じゃないラツピ！」

「咲と舞を一緒に探してくれてるチツピ！」

「えっ!？」

二人が説明すると二人が龍牙を見る。

「え、えつくと……あ、あくあ、こゆう事は晴夜が得意なんだよな……

俺は上城龍牙、仮面ライダークローズだ」

「仮面ライダー……」

「クローズ……」

龍牙は二人に仮面ライダーの事とプリキュア達と一緒に戦った事があることを話し、今回の事件を追っていることも話す。

「ごめんなさい、私達の勘違いで」

「知らなかったとは言え、謝るわ」

二人が龍牙を疑った事を謝る。

「気にすんなって、お互い大事な奴がいなくなると焦っちゃまうからな」

自分も真琴が連れ去られて聞いて、焦っていたを思い出す。

「自己紹介がまだだったわね、あたしは薫」

「私は満。よろしく、上城君」

「龍牙で構わねえよ」

誤解が解けたおかげで、なんとかわかってもらえた様子だった。

「咲と舞を探しているなら、あたし達も協力するわ!」

「うん!今度は私達が咲と舞を助ける番だから!」

「今度は……ってどうゆう事だ?」

聞いてみるとかつて二人は、ダークフォール戦士だったという。

けれど、それに抗ったことでアクダイカンに追放され、薫と満は二度に会うことが出来なかったはずなのに、咲と舞が二人を必死に連れ戻してくれた事を話す。

「私達になって、まだマシよ」

「今、辛いのは二人の家族だよ……」

「家族……」

二人が連れ去られた事により二人の家族も深く心配していると話す。

「家族か……いいよな」

「えっ?」

「俺は、両親が小さい頃に亡くなったから、あんまり親の顔を覚えてねえんだ……」

龍牙は元々は、真琴と一緒に暮らしていた孤児だった事を二人に話す。

「けど、辛くねえよ!俺には友達って言うもつと大事なものがあからな!」

「うん！」

「私達も同じよう！」

同意すると龍牙は薫と満の話聞いて、自分にも似たような経験がある事を思い出す。

「俺もあいつに何度も連れ戻されたな・・・」

「あいつって？」

「俺の相棒だよ！最高の相棒だ！」

エボルトに自分が人間じゃないと言われ、そのショックで心が折れそうになった時、お前は人間だと言ってくれた。

身体を乗っ取られ危険な事を承知で自分の命をかえりみずエボルトから助けにくれた。

新世界のために犠牲になろうとしたのに、追いかけて助けに来てくれた、どこまでもおせっかいな奴。

「桐ヶ谷晴夜って言うんだ」

「桐ヶ谷・・・晴夜」

「いつか、会わせてよ」

「ちよつとイかれた科学バカだけだな」

龍牙がそう言うのと二人が笑い出す、それにつられて龍牙も妖精達も高々と笑い合う。

「それじゃあ、私達もこっちで頑張って手がかりを見つけるわ!」

「そっちも頑張って、もう一人の相棒を見つけてね!」

「おお!ありがとうな!」

薫と満は去っていき、一緒に探すのを手伝ってくれと言っていた。

「さあ、行きましよう!」

「ああ!気合い入れて行くぜ!」

龍牙も車の助手席に座り込み、DBの運転による搜索の再開が始まった。

一方、四つ葉町についた晴夜は四つ葉ストリートへとやってきた。

「ここも、手がかりなしか?」

晴夜は四つ葉ストリートの中を歩き回るが手がかりになるようなものはなかった。

すると、元氣よく走る子供達の姿が目映る。

「賑やかところだな」

ストリートの中を歩いていた晴夜が周りを見て、みんなが笑顔で幸せそうな顔をしていた。

「そうだ!桐ヶ谷はん!ちょっと休憩でいいところがあるんや!」

フレッシュプリキュアの妖精タルトが晴夜にいいところがあると言う。

「いいところ?」

「こつちやさかい!」

案内されるストリートの広大な芝生の所へとやってきた。

「タルト先輩まだシャルか?」

「もうすぐやで!」

「どこに連れて行くんだよ?」

タルトに案内されると、ワゴンタイプの改造車が置いてあり、色とりどりのドーナツが並べられていた。

「()か?」

「()や!」

「あくら、かわいい男の子ね!」

すると黒いサングラスをかけた男性が近づいてきた。

「()、怖い()」

それを見た晴夜とシャルルは思わず怯えてしまう。

「うちのドーナツ食べきなさいよ!」

「は、はい()、いいいただきます(怖くて、断れねえ())」

サングラスの男性に勧められて晴夜はドーナツを口にする。

「え、うそ、美味しい過ぎる！」

すると、ドーナツの味が美味しい事に驚く。

「美味しい！シヤル！」

シヤルルもご機嫌の様子だった。

「貴方達見ない顔だけど、ここに来たの始めて？」

「ええ、ちよつと用があつてここに。あ、俺は桐ヶ谷晴夜です」

「この店長のカオル。よろしく！」

「どうも。このドーナツ美味しいです！」

「ありがとう」

カオルがそう言うと、ストリートのステージの方を向く。

「でも、あそこにあの子達が来ないと一日が来ないって感じなの」

あそこでいつも踊っている四人の姿を思い浮かべる。

「・・・見つかりますよ。絶対に！」

（この子、いい目してじゃない！）

カオルはそんな晴夜の目を見て、何か良いものを感じた。

「ご馳走さまでした。代金は？」

「いいわよ。払わなくても」

「えっ？でも・・・」

「美味しいって言ってくれたお礼」

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらいます」

「また、来てよね」

「ええ、また来ます！」

カオルにお礼を言っつて、晴夜は去っていった。

「どうや、ええ所だろ」

「ああ、ありがとうタルト！」

晴夜はタルトにお礼を言っつて、止めてあるマシンビルダーの元へと走る。

「いい少年ね。これからの成長が楽しみな子ね」

カオルはそんな晴夜を、ドーナツのリング状の窓穴から見ていた。

その頃、大貝町・ソリティアでは、和也、レジーナ、幻冬の三人がいた。

「あいつら、大丈夫かな？」

「ねえ、アタシ達も行こうよ！」

「駄目だよ。君達の怪我は今治りかけてるんだ。無理するときじゃないよ」

人間の姿へと変身したココこと、小野田コージとナッツが三人の怪我の看病をしている。

「でも、晴夜さんと龍牙さんばかり探させて僕達は、ここで待ってるしか出来ない……」
「焦る気持ちはわかるが、今は直す事に専念するんだ」

「君達の力は絶対に必要になる」

二人に言われると和也が幻冬の肩を優しく叩く。

「怪我直したら、今度こそきつちりあのプロス達に借り返そうぜ！」

「和也さん……」

「俺もお前もレジーナもまだ本気出してねえ！今度こそ心火を燃やしてぶっ潰す！」

「はいー！」

和也に喝を入れられた事で、幻冬にいつも明るさが戻った。

「そして……奴らぶっ潰したら俺が、まこぴー!!の救出に俺が颯爽登場する！」

『かずやん、ありがとう助けてくれて！』『気にすんな、俺はまこぴーのためなら例え火の中水の中……現れるぜ！』

また、叶わね自らの妄想世界に入り込む。

「和也さん……落ち着いて……」

「そして、お互い見つめ合い最後は……ぐふう！」

いきなり和也が倒れると後ろでミラクルドラゴングレイブを持ったレジーナがいた。「かずやんは、しばらく大人しく寝てて！」

ミラクルドラゴングレイブで頭を叩き和也を気絶させたみたいだ。

「それに・・・真琴さんは、龍牙さんのことが・・・」

これ以上言うとうと和也の心が精神的に病んでしまうのかと思い、口を紡ぐ。

その頃、若葉町へと着いた晴夜はメツプルとミツプルの案内で三人が戦っていた場所へと訪れる。

「ここなのか？」

「そうメツポ！」

「ここで戦ったミツポ！」

二人が言うとうと晴夜は辺りを見回す。

「なんか、わかるシヤルか？」

「いや、まだわからない」

「ひかり見つからないの？」

ポルンが泣き目になりながら晴夜に問う。

「ん？」

地面の下に何か光るものを見つけた晴夜が、膝を折ってハンカチでそれを拾う。

「バッチ?」

ビルドフォンを取り出し、バッチの写真を撮ると拓人に電話をかける。

「父さん!」

『晴夜何かわかったのか?』

「うん、若葉町でなぎささん達が戦った所にバッチが落ちてたんだ」

『バッチ?』

「今そつちに送る」

晴夜はビルドフォンを操作し、その画像を拓人に送る。

『これは・・・』

「父さん、何か知ってるの?」

『トランプ王国の議員のバッチだ』

「えっ? そんな人が何で?」

『わからない、とにかくこつちで調べて見る。お前も気をつけろ!』

「何かわかったシャルか?」

「このバッチ、トランプ王国の議員が付けている人のらしいんだ」

『えっ!?!』

その言葉を聞いた妖精達は、驚きの声を上げた。

一方、晴夜から連絡をもらった拓人は、大統領の部屋にいるジョーの元へと訪れる。

「こちらの国家議員が今回の事件に絡んでいる！」

「ええ、晴夜から連絡があり若葉町という場所でのこの国の議員バッチが落ちていたと連絡が」

「確かにこれはこの国の議員バッチ」

「それなら、研究室の警備に掛からずに済んだ事を頷ける」

「失礼します」

二人がこの事件についての仮説を立てていると、そこに一人の女性が入って来る。

「岸波君どうしたのかね？」

彼女は岸波涼香、拓人の研究室の研究員の一人である。

「所長、それと大統領に先程重要な連絡を受けました」

「重要な連絡？」

「そんな予定はなかったはずだが？」

「その内容を話してくれないか？」

拓人とジョーは彼女に連絡の内容を確認しようとする。すると・・・

「ええ、それはあなた方二人の排除との連絡です」

「なっ!？」

涼香の後ろから三体のクローンスマッシュが出現した。

「これは・・・」

「岸波さん・・・まさか、君が!」

「ええ。貴方の息子さんとお友達が必死に探しているグループの一人です」

なんと、涼香は拓人達が探していたグループのメンバーの内の一人だったのだ!

「では、この間の研究室を狙ったのも、まさか・・・」

「ええ、私が研究室の位置と警備システムをダウンさせたからですよ」

「君達の狙いはなんだ!なぜ、マナちゃん達プリキュアを全員を拐う必要がある」

「教えて差し上げましょうか」

自分達の計画が順調で気分がいいのか、涼香は二人にプリキュア達を狙った理由を話そうとする。

「私達は所長の息子とある遺伝子を持った子供を絶望させること、それが私達の狙い」

「まさか、晴夜君と龍牙君を!」

「何故、あの子にそんな事をする!」

「所長、大統領、これ以上は話せませんね！」

そう言うのと涼香はクローンスマツシユに指示を出して拓人達を襲わせようとする。

「貴方達の命をここで貰います」

「そう上手く行く思わない方がいい」

拓人は四コマ忍法刀を取り出す。

『隠みの術！』

四コマ忍法刀のトリガーを押すと、刀から煙幕が現れて周囲を隠す。

「なっ！」

『火遁の術！火炎切り！』

煙幕の中で炎を纏った四コマ忍法刀の火炎切りがスマツシユに繰り出され、スマツシユを後ずさりさせる。

「逃げられたわね・・・」

煙幕で隠れた隙に拓人とジョーは危機から脱出した。

それを確認した涼香は携帯を取り出し、誰かに連絡を入れ、報告を行っていた。

「所長と大統領は逃がしましたが、大統領の不在は作りました」

一方、大貝町へと戻った晴夜はシャルル以外の妖精達をソリティアへと戻し、ラケル

「そんな、お姉ちゃん！」

姉が走り出し、鞆でスマツシユを攻撃したがスマツシユは何も堪えず、簡単に払われる。

「お姉ちゃん！」

声が聞こえたスマツシユが弟の方へと向き、襲おうとした。

姉が弟の最悪の状況を想像した次の瞬間、マシンビルダーが現れスマツシユの攻撃から子供を守った。

そのまま、晴夜はドリルクラツシャー・ガンモードにし、スマツシユに向けて放った。

「もう、大丈夫だよ！」

マシンビルダーから降りた晴夜は助けた子供に駆け寄る。

「誰なのお兄さん？」

「天才科学者の卵だよ！」

「大丈夫！ありがとうございます！」

「今のうちに早く！」

二人が晴夜に礼を言つて去つていった。すると、後ろから手拍子の音が聞こえた。

「いやゝあ、ホンマに人の悲鳴が聞こえると即参上、カッコえねなく！」

拍手をしながら太った姿で黒い服を纏った男性がスマツシユの後ろから現れた。

「誰だ？お前？」

晴夜はその男性にドリルクラッシュシャーを向ける。

「武相なやつぢやな。僕は 斗賀野光臣、トランプ王国で議員をやってるもんや」

「(斗賀野光臣・・・どこか聞いた名前だな。) トランプ王国の議員がスマッシュと一緒に
ておかしいだろ」

「何者シャルか？」

「本当に議員ケルか？」

「怪しいでランス〜！」

三匹の妖精が指を指すと斗賀野はいきなり笑い出した。

「ハツハツハツハツ、流石見破れてもうったな〜」

そう、僕は議員じゃない。今回の事件の組織、ブラッドのメンバーや！」

「ブラッド、それがお前達の組織の名前か？」

「そう思つて貰つて構わないわ」

「みんなは・・・マナは無事なんだろうな！」

「さあ、それは教えられんわ〜ハツハツハツ！」

光臣は笑いながらそう言っている為、マナの安否については教えてくれる様子は無さ
そうだ。

「お前……」

「その前に、自分の事を心配せえよ」

斗賀野の後ろで待機していたクローンスマッシュ達がジリジリと晴夜に近づいてくる。

それを見た晴夜はビルドドライバーを腰へと装着した。

「シャルル達は離れてろ」

シャルル達三人は晴夜から離れる。

「さあ、実験を始めようか！」

手には既にラビットボトルとタンクボトルが握られていた。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

ボトル差し込み、ラビットとタンクのシルエツトが浮かぶと『R/T』の文字となる。

そのままレバーを回し、前後からプラモデルの様なファクトリー・スナップライドビルダーが形成されると赤と青のアーマーが作られていく。

『Are you ready?』

「変身！」

構えて叫ぶと共に二つのアーマーは晴夜の身体と重なり、重なった瞬間体から煙が上がっていく。

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイー！』

晴夜は仮面ライダービルドへと姿を変えた。

「やりにいな！」

スマッシュがビルドへと向かってくる。ビルドはドライバーからドリルクラッシュャーを出現させ、手に取り迎撃に出る。

「よう撮つといてやるで、君の戦いを」

後ろからカメラを搭載したドローンが現れた。

ビルドはドリルクラッシュャーで攻撃を繰り返しながらスマッシュを寄せ付けない。

「一気に行くしかない！」

ビルドはハザードトリガーを取り出し、スイッチを押した。

『マックス！ハザードオン！』

トリガーを差し込みフルフルボトルを取り出し数回振り、赤いラビットのランプの出した瞬間と共にキャップ栓を回した。

『ラビット&ラビット！ビルドアップ！』

『ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！』

『Are you ready?』

ハザードライダービルドとラビットユニットが出現すると、ラビットのユニットが空

中へパージされた

「ビルドアツプ！」

ハザードビルダーがビルドの体と重なり、ハザードフォームへと変化する。そして、宙へとパージされたラビットユニットを飛びながら装着し、地面へと着地した。

『オーバーフロー！紅のスピーディジャンパー！ラビットラビット！ヤベー！ハ
エーイ！』

ラビットラビットフォームへとフォームチェンジし、スマッシュへと向かっていく。

「勝利の法則は決まった！」

ビルドがラビットラビットの脚力を利用して高く飛躍し、足と腕を伸び縮みさせながらスマッシュを押ししていく。

「行けえ、晴夜！」

「エボルトを倒した晴夜ケル！」

「これくらい余裕でランス！」

三匹の妖精が見ても、ビルドの優先は揺らぐことはなかった。

「ええで、もつと戦ってくれほしいわ」

光臣はビルドが戦いを見てもつと戦ってほしいと呟く。

その頃、トランプ王国の大統領部屋に一人の男性が座り、その横に岸波涼香の姿もあつた。

「諸君、いよいよ計画を始めようではないか」

巨大なスクリーンが出され、映像が流れる。

「君達の標的は彼だ」

現在、大貝町で戦っているビルドの戦闘映像が現れた。

「彼は仮面ライダービルドは、私達すべての敵だ！」

男性はビルドがすべて敵だと告げる。

「彼はエボルトに作られた仮面ライダー。そんな彼が、その力を未だにこのように悪用している！」

そしてビルドに対する話を続ける。

「見たまえ！このように罪のない人々が彼に苦しめられている！」

次の映像からは、ビルドが人を傷つけて破壊している映像を見せる。

「こんな、最低の存在、桐ヶ谷晴夜を許してはいけない！」

男性は地面へと強く足を叩き叫ぶ。

「今ここに、ビルドの殲滅を宣言する！ビルド殲滅するぞ！」

「殲滅！殲滅！殲滅！殲滅！殲滅！殲滅！殲滅！殲滅！殲滅！」

ローブを被った集団も続くように殲滅と叫び、狂ったようにとにかく殲滅と叫び続ける。

「ビルド殲滅計画・・・始動！」

「「「わかりました！」」」

黒いフードローブを被った集団が敬礼し、行動を開始した。

「おっと、君達は待つて欲しい」

男性が二人のローブを被った二人に待ったと声をかける。

「君達二人には、別の仕事をしてもらう」

何か考えがあるのか、男性は二人に別の仕事をしてもらうと言う。

その頃、ビルドはスマッシュの戦いに決着がつきそうな様子だった。

「さあ、終わりにしようか！」

フルフルボトルを外しもう一度振り今度はタンクの青いランプが光り、キャップ栓を回す。

『タンク！』

フルフルボトルを半分に割り、ドライバーにボトルを差し込んだ。

『タンク&タンク！ビルドアップ！』

『ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！』

レバーを回すのと同時に小型のタンクユニットが現れ、周囲を囲みながらスマッシュに攻撃し、タンクユニットは宙に浮かぶ。

『Are you ready?』

「ビルドアップ！」

ラビットユニットがパージされてハザードフォームへととなると、ビルドは宙へ飛び上がって浮かぶタンクのユニットがビルドに装着される。

『オーバーフロー！鋼鉄のブルーウオーリア！タンクタンク！ヤベー！ツエー！』

全身が青色に染まったフォーム、タンクタンクフォームへフォームチェンジを完了し、フルボトルバスターを出現させる。

『フルフルマツチ デース！』

フルボトルバスターにフルボトルを差し込みスマッシュへと向ける。

『フルフルマツチブレイク！』

青いエネルギー弾が放たれスマッシュは跡形もなく爆破した。

「ふう〜、一丁上がり！」

「流石、晴夜シャル！」

三匹の妖精達がスマッシュを倒したビルドに近づく。

「あ、それよりあいつは……」

スマッシュとの戦いで忘れており、辺りを見渡すが既に斗賀野光臣の姿はなかった。

「あのやろくどこ行った……あれ？」

ビルドが後ろを見ると、黒いフード被った三人がいた。

「何か？」

その人物達がフードを上げて顔見せると、ビルドはホツとした。

「なぎささん、ほのかさん、ひかりさん無事だったんですね」

なんと、フードを被ってたのはMHの三人だった。

「他のみんなは……」

ビルドが近づくと三人はフードを脱ぎ捨てた。

それを見たビルドは驚いた。いつもの変身後の姿なのに、服が闇の様な色、一色に染

まっていたからだ。

「えっ、なんですかその色？」

「晴夜、おかしいシャル！」

「なんか、様子が変ケル」

「目の色も変でランス」

ランスの言う通り三人の目の色はいつもと違い、光を失っている様に見えた。

次回！Re・ドキドキ&サイエンス！last science！
第4話 クローズへの卑劣なパルロの罠

第4話 クローズへの卑劣なパルコの罠

いきなりプリキュアのみんなに襲われたビルド。だが、一斉に来たために溢れかえり、ビルドは下を潜り抜けていた。

「なんで、こんな事に・・・」

みんなの足を必死に潜り抜けようと腕を使って前へと進む。

「はあ、はあ、はあ・・・」

ようやく、潜り抜けて群れの中から脱出した。

「晴夜、大丈夫シヤルか？」

「ああ、色々とツツコミたいことがあるけど・・・」

起き上がって群れの様子を見ると、まだ脱出した事には気づいてないみたいだ。

「今のうちに・・・」

逃げようとする、いない事に気づかれみんながこつちへと振り向く。

「うそおおおおおー！！」

こつちに振り向かれて急いで逃げ出す。

「「「待てー！！ビルドオー！！」」」

プリキュア達は一齐にビルドを追いかける。

「なんで逃げるはめになるシャルか！」

「僕たち、みんなを探していた方なのにケル！」

「どうしてランス〜！」

「とにかく今は、逃げるぞ！」

四人は必死に逃げることにしか頭になかった。

プリキュア達から逃げていると今度は上から何か放たれた。

「今度はなんだよ……」

走りながら上を見上げると、上にはフレッツシユプリキュアとスマイルプリキュアがの姿があった。

「うそ……」

「マーチシユート！」

「ピースサンダー！」

「うそ！打ってきたし！」

それを見たビルドは走りながらフルフルボトルを外し、もう一度振りながらラビットの赤いランプが光った瞬間にキャップ栓を回す。

『ラビット！』

フルフルボトルを半分に割り、もう一度ドライバーにボトルを差し込んだ。

『ラビット&ラビット!ビルドアップ!』

『ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!』

『Are you ready?』

ラビットラビットアーマーが出現し、ラビットのユニットが空中へパージされ、タンクアーマーのユニットがビルドの体からパージされた。

『ビルドアップ!』

宙へとパージされたラビットユニットを飛びながら装着し、地面へと着地した。

『オーバーフロー!紅のスピーデージャンパー!ラビットラビット!ヤベー!ハエー!』

ラビットラビットフォームのスピードと脚力を活かしピースサンダーを交わすと、フルボトルバスターで追ってくるマーチシユートを落とす。

『仕方ない、こうなったら・・・』

走りながらフルボトルバスターにボトルを一本差し込む。

『スパイダー!』

スパイダーボトルを差し込んだフルボトルバスターのエネルギー弾をみんなに向けて放とうとする。

『フルボトルブレイク!』

そしてフルボトルバスターからエネルギー弾が放たれた。

「ビートバリア!」

しかし、フルボトルバスターのエネルギー弾をビートのバリアで防がれた。

「シルバーフォルトウェイブ!」

「スーパクリング・シャワー」

ムーンライトの銀色のエネルギー弾と、ミューズの金色のシャワーがビルドに向けて放たれた。

「ちょ、ちょっと待ってくれ!」

フルボトルを外し、別のボトルに差し替える。

『忍者! コミック! ベストマッチ!』

レバーを回し、前後から黄色と紫のスナップライドビルダーが出現させた。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

ファクトリーから生成されたアーマーがビルドの体と重なった。

『忍びのエンターティナー! ニンニンコミック!』

『分身の術!』

ニンニンコミックへとフォームチェンジし、四コマ忍法刀を操作し数人に分身した。しかし、放たれた攻撃は分身したビルドに直撃した。しかし……

『ドローン！』

当たったのは全て分身だった。本物の方は何処にも姿がなかった。

その頃、ビルドは四コマ忍法刀でなんとか難を逃れ、身を隠していた。

「はあくなんて、こんな事に……」

いきなり追われて訳が分からないが、取り敢えず一休みと思い、一息つく。

すると、ビルドフォンから父からの着信音が鳴り出す。

「父さん。どうしたの？」

『お前の読み通り。やはり議員の中に犯人がいた』

「それは知ってる。先そいつに会ったから」

『それだけじゃない、トランプ王国の博士の研究者にも犯人グループの一人がいたんだ！』

「えっ？」

ジョーの一言を聞き、敵が議員だけで無いと知ってかなり驚く。

『その所為で、王国から追われた為にこちらとしても、今は逃げるのが精一杯だ……』

「・・・だったら、今から俺が言う場所に行つて欲しい!」

晴夜は二人にある場所について話すと、電話を切る。

「はあく、これからどうしよう・・・」

晴夜が下を向きながら、これからどうすればいいのかと呟く。

「おっ!?!」

振り向くとそこには二匹の子犬がいた。

「あくあく、天使ちゃん」

ビルドフォンのカメラ機能で子犬の写真を撮る。疲れた晴夜の心を癒しとなる。

「こつちおいで、いいよ俺が行くよ。撮るよ・・・あつ」

写真を撮ろうとするとゴミ箱の影から顔が出たため、探していたプリキュアのみんなにばれてしまった。

「俺ってバカ・・・」

隠れていたゴミ袋をみんなに投げつけ、晴夜は起き上がる。

「もう〜いい加減にしてくれー!」

叫びながら言う。癒しから一転また逃げるハメとなる。逃げながら晴夜はもう一度ビルドとなる。

「あああー!助けて!」

悲鳴を上げながらプリキュアのみんなから必死に走り逃げ続ける。

そのまま走り続けるとどこかのサッカースタジアムへと来てしまった。

ビルドは自慢の高い脚力を使い高くジャンプし、そのままスタジアムの観客席へとジャンプした。だが、振り向くとまだみんなはしぶとく追いかけてくる。

「どこまで、付いてくるんだよ」

「ふふふん」

耳元から何かに囁かれたのに気づいて。見るとそこには和也、幻冬、レジーナに他の妖精達がいいた。

「俺達に内緒でなに楽しいことしてるだよコラっ！」

「かずやん達なんで、ここに」

「晴夜さんのお父さんから連絡があつたんです」

「みんな、晴夜を狙ってるって！」

「はあ？なんで？」

言ってる間に二人はスクラッシュドライバーを装着する。

『ロボットゼリー！』

『デンジャー！クロコダイル！』

二人がドライバーにスクラッシュゼリーとクラックボトルを差し込み、レンチを下ろ

すと、三人は高々と叫ぶ。

「変身！」

「プリキュア！ドレスアップ！」

「きゅぴらっば〜！」

和也と幻冬の下から巨大なビーカーが現れ、和也の方には黄色い液体を纏い、幻冬には紫の液体から巨大なワニの口のようなものまで出現し、その後二つのビーカーが割れ、姿を変えた。

レジーナはアイちゃんから放たれた緑色の光から、パレットにラビーズをセットし、手順を取ると緑色の光が包まれ姿を変える。

『流れる！潰れる！溢れ出る！ロボットイングリス！ブラア！』

『割れる！食われる！砕け散る！クロコダイルインローグ！オラア！へキヤー！』

『運命を変える切り札！キュアジョーカー！』

仮面ライダーグリス、仮面ライダーローグ、キュアジョーカーへと変身し、プリキュアのみんなへ向かっていき、抑える。

「皆さん、どうしたんですか！」

「目を覚まして！」

「まこぴー以外になびくわけにいかねえ！」

だが三人が説得すらみんなに届かず、後ろにいるビルドにしか目に写っていない。
「邪魔しないで欲しいわね」

その時、スタジアムの階段から一人女性が近づいてきた。

「誰だ？」

「岸波涼香、元はあなたのお父さんの研究員の一人よ」

その名前を聞いて、拓人とジョーさんを襲った犯人の一人だと思い出した。

「これは、お前達の仕業か、なんでこんな事をした！」

「ビルド殲滅は私達の計画は大事な事なのよ！」

涼香はそう言うと、黒いシザーズのロストボトルを取り出し、栓を回した。

すると、涼香の体が液体状化し、ボトルと一つとなった。そして、シザーズのロストスマツシユへと姿を変えた。

「マジかよ……」

ビルドは涼香が、ロストスマツシユへとなったことに驚く。

「行くんだ！」

グリスがビルドに行けと叫ぶ。

「なんでこんな事になったか原因を調べろ！」

「早く行ってください！」

「みんなを早く元に戻す方法を見つけて！」

「わかった！」

「ここは三人と妖精達に任せて、ビルドはマシンビルダーでこうなった原因を調べるために一度横浜の現在のアジトへと戻る。」

「どうしたシャル？」

「調べたいことがあるんだ！もしかしたら、犯人についてもわかるかもしれない」

外に設置された新たな研究室へと向かう。すると、そこにローブ被った三人の姿があり、晴夜を見るとローブを脱ぎ捨てた。

「亜久里ちゃん！」

「六花！」

「ありす！」

それは、同じように黒い服へと染まったダイヤモンド、ロゼッタ、エースの三人だった。ラケルとランスが近づこうとする。

「待つシャル！」

「ダイヤモンドシャワー」

いきなり、四人に向けてダイヤモンドシャワーを繰り出してきた。

「最悪だ・・・」

眩くといきなり三人が同時に襲ってきた。

晴夜はそれを避けると急いで研究室の中へと入るが、三人も研究室の中へと入ってきた。そのままダイヤモンドが晴夜に殴りかかる。

「ちよつ、六花・・・タイム！」

晴夜は避けながらダイヤモンドに呼びかける。

「ビルド殲滅！」

今度はエースが晴夜に攻撃してくる。

「おわっ！ 亜久里ちゃんもストップ！」

エースの攻撃を避けると、今度はロゼッタが関節技で晴夜を掴み、地面へと叩きつけて拘束した。

「ギブ、ギブギブギブ！ ありすギブ！」

晴夜はギブと言いながら必死に床に設置したスイッチを起動させた。

すると、部屋からガスが流れ出た。それにダイヤモンド達が驚いた隙に関節技から逃げ、研究室の外へと脱出した。

「どうなってるんだよ・・・」

疲れ果てた晴夜がドアへともたれつく。

その頃、晴夜が追われていることなんて知らない龍牙とDBはトランプ王国へと訪れていた。

「久しぶりね、この感じ」

「ああ」

トランプ王国の中を回ると、本当に全部が元通りになっているのがわかる。

「本当に全部取り戻せたんだな」

「ええ、貴方達を取り戻したのよ」

DBが言うともう一度賑やかなトランプ王国を見回す。

「龍牙君？」

すると、一人で何人もの子供連れの女性が龍牙に話しかける。

「シスター！」

龍牙がその女性の事をシスターと呼ぶ。

「龍牙、お兄ちゃん元気」

「おお！毎日が大変だけだな」

龍牙は話しかけてきた子供達と応答する

「真琴お姉ちゃんは一緒じゃないの？」

「違うだろ、今はソードだろ！」

「いいでしょうどつちでも！」

子供達がそんな会話をしていると、シスターと呼ばれた女性はある事が気になり、龍牙に問いかける。

「真琴ちゃんはどうしたの？」

「あつ、それは・・・」

しばらくして、龍牙とDBはシスターと子供達が暮らす孤児院へとやってくる。

「ここは、小さい頃に龍牙と真琴がお世話になった場所でもある。」

「ここが龍牙と真琴がいた施設なのね」

「ええ、あの二人はここで育ったたんです」

龍牙は子供達と一緒に外の庭で話をしていた。

「龍牙お兄ちゃん、今何やっての？」

「今やりたいことが決まったから、それに勉強中だよ」

「龍牙お兄ちゃんが勉強、似合わない！」

「本当にやってんだよ。凄え面倒くさい科学バカに教えられてるんだよ」

「「科学バカ？誰なのそれ？」」

龍牙は子供達に晴夜のことを話す。

その後、龍牙は孤児院の外に置かれた慰霊碑の所へとやってきて、そこへ手を合わせ

ていた。

「ただいま。母さん、父さん」

「ここ、龍牙の家族の慰霊碑なの？」

後ろからDBが近づいてきて、龍牙の家族の慰霊碑だと気づく。

「ああ、俺が生まれて4歳頃には亡くなったんだ」

慰霊碑の上から龍牙が水をかける。

「俺の両親、二人共もトランプ王国の警備兵らしくてな・・・」

そんな時、任務の事故で亡くなったって聞いたんだ。

俺は、ガキだったからその時の事は口でしか聞かされなかった」

子供の頃、龍牙は家族を早くに亡くしたと、ここにくる前に話していたことを思い出す。

「身寄りの無い俺は、ここに引き取られた」

「周りが知らない奴ばつかで、誰も信用できなかった」

初めてここに来てからは、いつも一人で誰にも心も開くことがなかった。

「でもよ・・・ここであいつの歌を始めて聞いたんだ」

孤児院の庭の方を見つめると、ここにいた事を振り返る。

いつも一人でいた時、偶然聞こえた声に龍牙は惹かれた。

孤児院の庭でいつも歌っていた真琴を見て、家族を失った心が癒されるのを感じて話を話した。

「それが、貴方達の最初の出会いだったのね」

「ああ、あいつの歌が、一人ぼっちだった俺を助けてくれたんだ」

真琴の歌のお陰で親を亡くした悲しみから助けてくれたと話す。

「でも、あいつはキュアソードになって、俺より凄え存在になっていた」

「でも、貴方は真琴をサポートするためにクローズになったんでしょ」

「最初は、そんなつもりはなかった」

クローズになる気は最初はなかったと話す。

「でも、今は違うぜ！俺は仮面ライダーになった事をよかったて思ってるぜ！」

龍牙は仮面ライダーになった事がよかったと言う。

「晴夜にマナ、かずやんに六花、ありすにも出会えて俺、仮面ライダーになった事を感謝してるんだ！」

持っていたビルドドライバーとドラゴンボトルを取り出して見つめる。

「一人ぼっちだった俺にこれだけ仲間が・・・友達が出来たことに感謝してるんだ」

仮面ライダーへとなった事が自分の世界を広げられるきっかけになった。

「あつ、でも俺が仮面ライダーになれたのはエボルトの遺伝子のおかげもあるんだよな」

龍牙の身体は生まれる前にエボルトの遺伝子が組み込まれ、普通の人間とは遺伝子構造の違いがある。だが、その遺伝子がエボルトに全て奪われ変身出来なくなった事があった。

「でも、貴方はエボルトの力に頼らず、自分の力で成長してきたはずよ」

DBの言う通り、龍牙はエボルトに奪われた遺伝子から構成されているエボルトドラゴンボトルを奪い、自分の力でエボルトとは違う新たな力を手に入れた。

「そうかもな・・・」

これまでのクローズの成長も、エボルトの遺伝子だけのおかげじゃないかもしれない。俺の誰かを守りたいって思いが、俺を強くさせてくれたんだと感じる。

「その事を教えてくれたのは、あいつだ」

最初はただ、真琴を守ることしか頭なかった。

でも、ここで晴夜と出会って誰かを守る優いさを教えてくれたおかげでもある。

「さあして、続き行くか？」

「ええ！」

「その前に向こうでも何か掴んだか、聞いてみよぜ」

龍牙が携帯を取り出し、晴夜に電話をかける。

『龍牙か！』

その声を聞いた時、晴夜の声がかなり焦っている様子を見せた。さらに電話越しから何か騒つている声が聞こえた。

「どうした、なんか騒がしい声が聞こえるけど……」

『みんながいきなり俺達の前に現れて襲ってきた』

「はあ？何言つてんだよ？」

『こつちが聞きてえよ……』

しばらくすると、ざわつき音が聞こえなくなつた。

『六花にありす、亜久里ちゃんまでおかしくなつて……』

「待つてろ、俺も直ぐに……」

その時、施設の庭から爆発音が聞こえた。

「なんだ……悪い、また後でな！」

『おい、龍……』

電話を切つて庭の方へと走っていく。

庭に入つて行くと、そこにはスマツシユが二体おり、暴れまわっていた。

「スマツシユ！どうしてここを！」

「龍牙君、これつて……」

「シスター！早くみんなを！」

「ええー！」

龍牙はシスターに子供達を任せる様に言うと、スマツシユのもとへと走ってドラゴンボトルを振るとスマツシユを殴り飛ばし、逃げ遅れた子供達を守った。

「逃げろー！」

龍牙に逃げろと言われ、子供達は急いで逃げていく。

「龍牙ー！」

「ダビイもみんなを頼むー！」

「わかったわ、みんなこっちへー！」

D Bとシスターが孤児院の子供達を外へ逃がそうと誘導する。

子供達が居なくなると龍牙はビルドドライバを腰へと装着し、クローズドラゴンガジェットにドラゴンボトルを差し込む。

『ウェイクアツプ！クローズドラゴン！』

そしてドライバにガジェットに差し込む。そしてレバーを回すと、スナツプライドビルダーからアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身ー！」

拳を手当てしてから構えるとビルダーから形成されたアーマーは龍牙の体に重なり

装着され、煙が吹き荒れると音声が流れた。

『Wake up burning! Get CROSS—Z—DRAGON! Yea h!』

クローズは施設を破壊するスマツシユに向かって走っていく。

「ハッ！ヤア！」

得意の格闘戦で二体のスマツシユを押ししていく。

「この場所を、絶対傷つけさせねえ！」

ビートクローザーを取り出し、グリップを二回引く。

『ヒッパレー！ヒッパレー！ミリオンヒット！』

ビートクローザーで前、後ろとスマツシユに攻撃し、それを受けたスマツシユは爆発した。

「よしー！」

スマツシユを倒した龍牙はドライバーを外し、変身を解除した。

「調子良さそうだな。上城龍牙」

「誰だお前・・・？」

龍牙の前に黒い服を着た少年が近づいてくる。

「俺の事を覚えてないようだな！」

「俺はユウヤ・・・ファレノ・ユウヤ」

少年は自分の事をユウヤと名乗った。

「お前、あいつを探してるんだってな・・・剣崎真琴を」

「真琴を・・・なんで、お前がそんな事知ってるだよ！」

「なんで、知ってるんだろうな」

「まさか・・・お前が・・・」

「へえ、意外と察しがいいんだな」

龍牙は目の前にいる少年が真琴達を拐った敵のメンバーだと察すると、ユウヤと名乗る少年は余裕そうな顔で笑いながら呟く。

「そうだ、俺がドキドキプリキュアを倒した、仮面ライダーだ。本物のな」

「本物・・・なんだっていい！真琴達は何処にいる」

「さあな、そこまで話す義理はない」

「てめえ・・・！」

龍牙を無視し、ユウヤは辺りを見る。

「しかし、こんな所を守るために力を使うなんてな」

「何が言いてえんだ！」

「仮面ライダーの力をまるでわかっていない。そうゆう事を言ってるんだよ」

「てめえ……許さねえ！」

龍牙はもう一度ビルドドライバーを腰へと装着し、グレートエボルドラゴンボトルを取り出し、ガジェットに差し込むと、クローズドラゴンはグレートクローズドラゴンガジェットへと形状を変えた。

『覚醒！』

龍牙はグレートクローズドラゴンの起動スイッチを入れ、ドライバーに差し込む。

『グレートクローズドラゴン！』

グレードクローズドラゴンと音声が届くと、龍牙はドライバーに差し込みレバーを回す。

『Are You Ready?』

龍牙の前後にビルダーが出現し、クローズの体へと重なる。

『Wake up CROSS! GET GREAT DRAGON! Yeah!
!』

「この時をまってたんだよ。上城龍牙！」

ユウヤもクローズに変身した龍牙を見て、歓喜しながらビルドドライバーを装着した。

『マックス！ハザードオン！』

ハザードトリガーを取り出しトリガーを起動させ、サソリ型のガジェットのスコーピオンガジェットが手に置かれた。

『パルロスコーピオン！』

ガジェットにスコーピオンロストボトルを差し込み、ドライバーのレバーを回す。

『Are you ready?』

レバーを回し終わると前後にハザードライドビルダーが現れ、更に後ろから緑色のユニットが出現した。

「変身」

ビルダーが重なってハザードフォームへとなり、パルロスコーピオンアーマーが装着された。

『オーバーフロー！真縁の一撃！パルロスコーピオン！ヤベー！』

両腕のアームに鋭い爪を模したライダー、仮面ライダーパルロが現れた。

「うおおおおおー！」

「ふん！」

お互い変身を完了し、同時に走り出す。

「オリヤヤヤヤヤヤ！」

「ハアアアアア！」

二人の拳がぶつかり合い、火花を散らす。

その頃、アジトから出てきた晴夜がマシンビルダーに乗り込み、どこかへ向かおうと
していた。

「龍牙の奴、どうしたんだ？」

いきなり電話を切られ、もう一度龍牙へと掛け直そうとする。すると、いきなり足元
から火花を走った。

「まさか……」

後ろを振り向くと、さつき催涙ガスで眠らせたダイヤモンド達三人がもう起き上が
り、晴夜を追いかけてきた。

「「ビルド……殲滅……」」

「やべえ！」

晴夜はマシンビルダーのエンジンに火をつけて急いで三人から逃げる。

「なんで、こども追われるんだよ！」

マシンビルダーを飛ばし、必死になって逃げる。

その一方で、クローズとパルコの戦いがお互いにパンチやキックを繰り返しながら攻

撃している。

「おいおい、こんなが実力しかないのにエボルトを倒したなんてな」

パルロはまるで余裕な発言をする。

「うるせえ！」

クローズが一回、パルロから距離を取るとドライバーのレバーを握る。

「オラオラオラオラ！」

レバーを回し続けると、後ろから青い龍『グレイブドラゴン』が出現した。

『Ready go!』

クローズの右手の拳に青い炎のエネルギーが溜まっていく。

『グレートドラゴニックフィニッシュ！』

グレートクローズの青いエネルギーを纏ったライダーパンチを受け、パルロが後ずさ
せる。

「ふん、この程度か！」

だがクローズのライダーパンチを受けてもパルロから余裕は消えなかった。

「てめえ、真琴をなんで拐った！」

クローズがパルロになぜ真琴を拐ったのかと聞く。

「お前が悪いんだよ！上城龍牙！」

「んだと・・・！」

するとバルロはクローズが悪いと言い出す。

「お前がクローズにならなければこんな事にはならなかったんだよ！」

「何言ってるんだよ！」

バルロの言っていることがクローズにはわからなかった。

「俺は、トランプ王国で戦士の一人なんだよ！」

バルロはトランプ王国の戦士の一人だと言う。

「その中でも、俺の家はトランプ王国内でも有名な貴族の息子だ」

「貴族の息子なら、俺となんの関係があるんだよ」

貴族の息子であるバルロにクローズである龍牙と、どのような因縁があるのかわからなかった。

「忘れたか、プリキュアのサポートになる為の人材を見つける。ライダーテストがあった事を」

「それって・・・」

その事を聞いて思い出した。拓人とアン王女がプリキュアのサポートのする為の計画、それは、仮面ライダークローズの資格者を見つける為でもあった。

「俺はその中でもダントツのトップだった。あの時点では俺が仮面ライダークローズに

相応しいはずだった……だが、クローズになったのは貴様だ！」

あの時、仮面ライダーになったのはユウヤではなかった。

そして、トップで無かった筈の龍牙が仮面ライダークローズに選ばれた事を酷く妬んでおり、彼はその事実が許せなかった。

「許さない。俺からクローズをキュアソードを奪ったお前を許さない！」

「俺は……クローズを真琴を奪ったつもりはねえ。俺はあいつを……守りたいからこの力を手に入れた。けど、今はあいつだけじゃねえ……もつと多くの人を守るためにこの力を使っている！愛と平和のためにな！」

「愛と平和を守る……プツ、ハツハツハツハツハツ！」

クローズが『愛と平和を守る』と口にする、パルロが高々と大笑いする。

「何が、おかしいんだよ！」

「やはり、わかってないなお前は。仮面ライダーの力を！」

パルロが突如、クローズに向け仮面ライダーの力をわかつてないと言う。

「仮面ライダーは他人を支配し、権力を手に入れ、全てを思うがままにする為の力だ！愛と平和なんてくだらないもののためにあるじゃない！」

「お前……くだらねって言ったな。俺達が目指しているものを……」

『ビートクローザー！』

くだらないと言われるとクローズはビートクローザーを出現させ、強く握りしめる。

「絶対、許さねえ！うおおおおおー！！」

ビートクローザーを振り上げ、パルロに攻撃しようとする。

「ふっ！」

パルロから声が溢れると上からローブを被った人物が現れ、クローズのビートクローザーの攻撃を何かで受け止めた。

「な！？この武器……」

ローブを被った者が持っていた武器を見て驚く、それは『ラブハートアロー』だった。驚いてる間にローブ被った者はクローズを払いのけ、パルロから離す。

「お前……なんで、それを……」

何故その者がラブハートアローを持っているのか問い掛ける。

「パルロに手は出させない！」

「その声……お前……!?」

そう叫ぶとその人物はローブを脱ぎ捨てた。

その姿は他のプリキュアと同じように黒く染まった姿に目の色も変わったキュアソードだった。

「ま、真琴……お前」

「ホーリーソード！」

「!?うわああああ！」

クローズに近づくといきなり無数の剣の技、ホーリーソードがクローズに向けて放たれた。無防備だったクローズはホーリーソードをもろに受けてしまった。

「ま、真琴、お前どうしてそいつを……」

「クローズ、このパルロに捧げる愛の剣があなたを断ち切てあげるわ！」

クローズが起き上がるとソードが胸にスピードマークを作り、決め台詞をクローズに向けて言い放つと、クローズが心配になったDBが戻ってきた。

「キュアソード!?何を言ってるの！」

「どうしたんだよ……俺だ、龍牙だ!わかんねえのか真琴!」

クローズが必死に語りかけるが、キュアソードの手刀がクローズの顔へと向ける。

「仮面ライダークローズは私達の敵……上城龍牙、あなたは私達の敵よ!」

「嘘だろ……」

クローズが動揺していると後ろからパルロがソードの隣へとよる。

「これでわかったか、上城龍牙、キュアソードは俺のモンだ!」

「お前……真琴に何をした!」

「何もしてない、彼女が自分の口で言ったんだよ」

「ふざけるな！真琴はこんな事を言うわけねえじゃねえか！」

「馴れ馴れしく知ったような事を言わないで偽物の仮面ライダー！」

「えっ!？」

「真琴！今の発言は絶対言っちゃいけない！」

「うるさわね！」

ソードはそう叫ぶと手刀の斬撃をDBに向けて放った。

「ダビィ！やめろ真琴！」

ダビィに攻撃し終わると、ソードは冷たい殺気をクローズへと向ける。

「これが真実だよ、上城龍牙。所詮、お前とあの桐ヶ谷晴夜は偽物の仮面ライダーに過ぎないんだよ。お前らはエボルトのおかげで仮面ライダーになれただけの、ただの作り物に過ぎないんだよ」

エボルトのおかげで仮面ライダーなれた作り物。

「ーその通りだ。あいつの遺伝子のおかげで仮面ライダーになれたのは事実だ。」

けど……

「俺の事は、いくらでもバカにしてくれても構わねえ。エボルトのおかげって言うのも間違ってるねえ……」

下向きながらもクローズは、エボルトのおかげでライダーになれたと言うのを否定し

なかった。

「けどよ、あいつを・・・晴夜を偽りって言った事は許せねえ！」

クローズはそう啖呵を切ると、ドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

『グレートドラゴニックアタック!』

後ろから現れた龍がクローズの拳に向けられたと同時に、蒼いオーラを纏った拳がパルロに向けて放たれ、パルロを吹き飛ばした。

「あいつは・・・桐ヶ谷晴夜は偽りじゃねえ！」

晴夜は偽物じゃない。そう叫んで起き上がったパルロにパンチを何度も繰り出す。

「いつも、他人ために必死になって戦って、敵だった奴にも手を差し伸べる。本物ヒーローなんだよ！」

クローズが叫び続け、次のパンチを決めようとする。その時、横からキュアソードが現れパルロを守る。

「なっ?!真琴!?!」

キュアソードを目の前に現れた事で、クローズは攻撃を止めた。

「バカだな」

「スーパクルソード!」

今度はほぼ至近距離でスーパクルソードを放ち、クローズにかなりダメージを与えた。

「真琴……」

起き上がろうとすると、攻撃してきたキュアソードを見つめる。

「待ってろ、絶対助けてやる!」

クローズはビートクローザーにロックボトルを差し込む。

『スペシャルチューン! ヒッパレー! ヒッパレー! ヒッパレー!』

ビートクローザーのグリップを三回引つ張り、エネルギーが溜まる。

『ギガスラッシュ!』

「うおお……オリヤヤヤヤヤヤ!」

ビートクローザーから収束されたエネルギーがバルロに向けて放とうする。だが、まともやキュアソードがクローズの前へと現れる。

「真琴……」

クローズがビートクローザーを振ろうとしたその時、キュアソードとの思い出を振り返ってしまう。

「真琴……俺には、出来ない」

ビートクローザーをキュアソードの前で止めてしまった。

「なんだ、攻撃出来ないか！やはり偽物だな」

パルロがクローズを嘲笑うと、ドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

『ハザードフィニッシュ！パルロスコーピオンアタック！』

パルロの後ろの尻尾がキュアソードを巻き込んでクローズに攻撃しようとする。

「!?真琴！退け！ぐわあ！」

今のは避けられた筈なのに、キュアソードを逃がそうとして避ける間がなかった。

「どうした？先まで威勢はどうしたんだ上城龍牙」

ここうなると見越していたような感じで挑発し、口笛を吹いた。

「くう！真琴を盾にしやがって！汚ねえマネしやがって・・・」

「勘違いしている。俺のモノなんだから俺のために戦うのは当然だろ」

「真琴は、てめえの道具じゃねえ！」

「黙れ、偽物が説教すんじゃねえよ！キュアソードやれ！」

パルロの命令にキュアソードが頷く。

「ソードハリケーン！」

マジカルラプリーパットから放たれたソードハリケーンがクローズを囲み、無数の剣を放ち続ける。

「くそっ!」

「これで、終わらしてやるよ上城龍牙!」

『Ready go!』

バル口のPSデスシザークローがかなり伸び始め、エネルギーが収束されていく。

『パルロスコーピオンフィニッシュ!』

バル口の伸びた爪から放たれた技がクローズの胸へと当たり、クローズを簡単に吹き飛ばされた。

「ぐわああああー!」

吹き飛ばされたクローズがそのまま転がり込んで倒れると、クローズは強制変身解除されてしまった。

すると、倒れている龍牙にキュアソードが近づき、龍牙のドライバーを強引に外した。

ソードがそれをバル口に持っていかうとする。すると、ソードの足が止まる。

「・・・えせ、返してくれ・・・」

「何」

キュアソードに小声で叫ぶ龍牙の声が聞こえ、振り向く。

「ま、真琴・・・なんで」

「あなたは、邪魔なのよ。クローズ」

名前ですら呼んでくれない。その絶望感に追いやられ龍牙はそのまま気を失う。それを見てパルロがシザーークローを龍牙に向ける。

「これで終わりだ。上城龍牙」

その爪で龍牙に突き刺そうとする。するとパルロの足元が火花を散らした。

「!？」

「へえ、中々面白い事をしてるんだね」

飛んできた方を見ると、そこから右手に銃のような形をしたものを握った青年が近づいてくる。

「その君、そのお宝をこちらへ渡したまえ」

手の平を出して、青年は龍牙のビルドドライバーを渡せという。

「誰だ、お前は」

「僕のことを知らないとは悲しいね、まあ、あえていうなら通りすがりの仮面ライダーかな」

青年は通りすがりの仮面ライダーという。

「さあ、そのお宝をこっち渡してくれないか？」

「いい加減にしろ、これは本来俺のものだ！」

「はあ、仕方ないねえ、実力行使と行くよ！」

そう言うのと銃を一回転させ、一枚の絵柄のついたカードを取り出す。

『KAMEN RIDE!』

青年は手に持っていた銃にカードを差し込んで、銃を空の方へと向けた

「変身!」

青年——海東大樹が叫ぶと同時にトリガーを引いた

『DIEND!』

トリガーを引くと銃口から紋章を浮かばせて、3色のシルエットを体に重ねるとスーツに変化させた。更に10枚のプレートが頭部に装着されると、仮面ライダーディエンドへと変身した。

「何!?!」

パルロが驚くと、ディエンドとなったライダーはまた違うカードを差し込む。

『ATTACK RIDE!BLAST!』

トリガーを引くと銃が一緒にいくつも光弾が放たれ、キュアソードが持っていたピルドドライバーに当たり、ディエンドの元へと飛んだ。

「お宝は貰っていくよ!」

「なっ!?!」

「ついでにこの少年君もね!」

「報告があります」

「バルロが上城龍牙からグレートクローズガジェットを手に入れたと報告がありました」

ガイとライが、クローズの変身アイテムグレートクローズドラゴンを手に入れた事を報告する。

「上城龍牙はどうした？」

「バルロによると謎の人物が現れ、上城龍牙を連れ去り逃げていったとの連絡があり、ビルドドライバーもその男の手に渡ってしまったと」

「そうか．．．だが、まずは、一つ目の鍵を手に入れたか。残るは．．．」

映像から流るビルドを見て変身解除した晴夜の姿を見る。

「彼の持つハザードトリガーのみか」

「ビルドドライバーはどうなさいますか？」

「彼から頂くとう」

男は晴夜が持っているビルドドライバーを見て、それを頂くという。

すると、部屋から仲間の斗賀野光臣が現れた。

「あのガキの居場所わかりましたで」

晴夜の居場所を知らせると、男は感心したような表情を浮かべる。

「ほう…流石、桐ヶ谷巧の弟、感が鋭いな！」

それを見ていた男が椅子から起き上がった。

「さあつて、では行こう。君の彼氏…いや、元彼氏かな？」

隣でローブを被った人物に話しかける。

「いえ、彼は…ビルドは敵です。勘違いしないでください」

「そうか、それならいい。では、最後のピースを持つ少年の元へと向かおう」

男とローブ被った一人が、晴夜の元へと向かおうとしていた。

次回！Re・ドキドキ&サイエンス！last science！

第5話 破滅を呼ぶライダーの降臨

第5話 破滅を呼ぶライダー降臨

クローズズがパルロに破れ、デイエンドに連れされた一方で：

「くう、やべえ……」

「数が多すぎる……」

「みんな……」

スタジアムでは、グリス、ローグ、ジョーカーの三人と妖精達が、シザースロスとスマッシュと黒く染まったプリキュア達を抑えていた。

「諦めんな！晴夜が何か見つける筈だ……」

「はい（うん！）！」

三人は必死にみんな晴夜の所へ行かない様に、懸命にみんなを動きを抑える。

「面倒ねえ……全員、ビルド殲滅の前にそいつら片付けなさい」

「……了解しました……」

シザーススマッシュの指示でプリキュアのみんなは更に力を入れ、強引にでも三人を押し込もうとする。

「ちよ、ちよっと……」

「つ、強すぎて……」

「抑えきれない……」

三人も後ずさりながらも力を入れて持ち堪えようとする。

すると、グリスがシザースマッシュの方へと向く。

「だったら……」

『ローズ!』

ツインブレイカーにローズボトルを差し込むと、ツインブレイカーを向ける。

『シングルフィニッシュ!』

ツインブレイカーから出されたバラの茎が放たれ、プリキュアの身体を拘束した。

「幻冬! ジョーカー! みんなの動きを止めてあのスマッシュを倒すぞ!」

グリスが二人に指示を出す。

「そうかなら……」

ローグもネビュラスチームガンを取り出し、マグネットボトルを差し込む。

『マグネット! ファンキーアタック!』

ネビュラスチームガンを自分の方向とジョーカーのいる方向へと放つ。

「ジョーカー! 退いてください!」

全員に直撃し、マグネットの引力によってプリキュア達は引き寄せられていき、身動

きが取れなくさせた。

「ありがとう！幻冬！」

「行くぞ！」

三人はシザーススマツシユへと向かっていく。

「プロス達にも勝てなかったあなた達で、私に勝てるつもりかしら？」

「行くぜ！」

「覚悟しろ！」

「みんなを元に戻して！」

三人がシザーズに向かって飛びかかると、シザーズは腕からハサミ状のエネルギーを複数生成し、一斉に射出し、三人に命中した。

「「うわああああ!!」」

命中した三人は観客席からスタジアムのグラウンドまで吹き飛ばされ、地面へと叩きつけられ三人は強制的に変身解除してしまった。

「いってえ・・・」

「みんな、大丈夫・・・」

「ええ、なんとか・・・」

「なんや、もう終わってるやないか」

後ろから同じ犯人グループの仲間である斗賀野光臣が現れた。

「まあ、でも参加さしてもらおうで！」

光臣もロストボトルを取り出した。

「あれって！」

「ロストボトル……」

「まさか、あいつも……」

ゼブラのロストボトルを見て驚くと光臣はロストボトルの栓を回した。

すると光臣の身体もシザーズロストスマツシユになつたのと同様に液状化し、ロストボトルと一つになると、ゼブラロストスマツシユへと姿を変えた。

「ああ!!こいつだメポー！」

「この人がみんなの前に現れて拐っていたミポー！」

あの時、MHのメンバーを襲い拐っていたのは、斗賀野光臣だとメツプルとミツプルが叫ぶ。

「てめえか、こんな事をしたのは……」

襲った犯人だと知り、和也が怒りを感じる。

「なんで……晴夜さんを狙うんですか！」

幻冬が何故晴夜を狙っているのかを問う。

「あの小僧が最後のピースを持つてるからだ」

「最後のピース・・・何のことだ？」

和也にはゼブラスマツシユの言う、晴夜が持つ最後のピースとは何かわからなかった。

「その為に、あの坊やにまず絶望感に落とす必要があるのよ」

「その手始めにこの子達に協力してもらったつてわけ」

ゼブラが後ろで拘束されているプリキュア達を指す。

「そんな・・・そんなことのために晴夜を絶望させるなんて許さない！」

「うるさいやつちやな！」

ジョーカーはそう叫ぶと、鬱陶しく感じたゼブラロスマツシユがこつち向かって突進して来ようとする。

「ちよつと！待ったああああー!!」

その時、大きな声が聞こえ上を向くと、三人と妖精達の前に大きな光が発せられ、そこに人影が四つ見えた。

「世界に広がるビッグな愛！キュアラブリー！」

「天空に舞う蒼き風！キュアプリンセス！」

「大地に実る命の光！キュアハニー！」

「夜空にきらめく希望の星！キュアフォーチュン！」

「ハピネス注入！」

「幸せチャージ！」

ラブリーとプリンセス、ハニーとフォーチュンの二人一組となって、声をそろえる。

「ハピネスチャージプリキュア！」

「ハピネスチャージプリキュアの皆さん！」

「どうしてここに……」

説明しよう！ハピネスチャージプリキュアは、ドキドキプリキュアの次に誕生した新しいプリキュアで、この間の子供達が眠り続ける事件の中、晴夜と龍牙達仮面ライダーらと共に、事件解決させた間柄なのだ！詳しくは第0話をご覧ください！

「晴夜君とお父さんとジョーって人に頼まれて来たの！」

「ピンチだから助けに来て欲しいって」

トランプ王国から追われた二人は、晴夜の指示でハピネスチャージプリキュアがいる大使館へ行くように連絡した。どうやら、無事について応援を頼んでくれたようだ。

「ここは、任せてよー！」

ハニーがやる気満々で言うと、ラブリーが辺りを見回す。

「ねえ、ところで、晴夜君は？」

晴夜がこの場に居ないことに気づく。

「今、こうなった原因を調べるために別行動中だ！」

「そういえば、龍牙君もいないけど？」

「龍牙も今は他のみんなを探していないの……」

和也とレジーナが晴夜と龍牙がいない理由を話す。

「なんや、まだプリキュアって他に居たんか？」

「でも、新人じゃ相手にならないわよ」

シザーズが和也達を吹き飛ばしたハサミのエネルギー体をいくつも作り、ハピネスチャージプリキュアへと向けて放った。

だが、四人はその隙に高く飛びシザーズの攻撃を躲した。

「今度はこっちから行くよー！」

ラブリー達の反撃が始まる。

「ラブリーー！ハートリストラクション！」

「プリンセス！弾丸マシガン！」

ラブリーは振り上げた両手に光のエネルギーを溜め、ハート型のエネルギー弾を連射すると、プリンセスが連続パンチで拳からエネルギー弾を無数に射出し、シザーズとゼブラに放ち続ける。

「ハニースーパーソニックスパーク！」

動けない隙にハニーがクローバー型のエネルギー弾を連射する。

「フォーチュン！今だよ！」

ハニーの後ろからフォーチュンが現れた。

「フォーチュンスターバースト！」

フォーチュンの手のひらから星形のエネルギー弾を放たれ、シザーズとゼブラが後ずさり倒れさせた。

「やるやないか〜」

だが、ハピネスチャージプリキュアの技をまともに受けてもゼブラとシザーズが起き上がった。

「でも、これを相手に出来るかしら」

シザーズが指を鳴らすと後ろから拘束が解けたプリキュアのみんなが集まってきた。「先輩達どうしたんですか……！」

先輩プリキュアの変わりようにラブリーは驚く。

「あいつらの仕業だ……」

和也がシザーズとゼブラを指す。

「晴夜を絶望させるために、みんなにあんな事を……」

「そんな・・・酷い・・・」

プリンセスは晴夜を絶望させるために、こんな風にみんなを変えた事が許せなかった。

「とりあえず、ここは、一度退きましよう！」

フォーチュンが今の現状を見て一度退いた方がいいと提案する。彼女の言う通り、今のまま戦つても勝ち目はないに等しい。

「でも、先輩達が・・・」

「気持ちにはわかるけど・・・今は一度退こう」

先輩プリキュアを置いて退くことにラプリーは納得がいかない様子だったが、プリンセスに言われ不満があつたが受け入れる。

「わかりました。なら・・・」

幻冬がネビュラスチームガンを取り出し、周囲に向けて煙幕を張る。

「皆さん、今のうちに！」

和也達は煙幕の中に姿を隠す。晴れた頃にはそこには誰もいなかった。

「逃げたみたいだね」

「まあええ、奴らじゃもう何も出来ない。ボスの所戻るでえ。あの小僧の居場所を見つけてある」

「なら、こつちも向かいましょう。行くわよ！」

シザースとゼブラ達はボスと呼ぶ男がいる場所へと向かう。

その頃、晴夜は『東都科学研究所』へと来ていた。

ここは、以前までは父の拓人と兄の巧、そして、叔父の石動総一郎がこの研究員だった。

今は廃棄の予定の場所ではあるが、まだ使えるコンピュータはありそうだった。

「よし、まだ使える」

晴夜はまだ起動できるパソコンを見つけ、キーボードを操作する。

「晴夜、ここに何をやる気でシヤル……」

「そもそも、勝手に使つていいケルか？」

「ダメなんじゃないんで、ランスかく？」

「非常時だから、後で怒られた時に謝ればいい！」

無茶な理屈を言うもんだと三匹が顔を合わせる。そうしてる間に晴夜は研究ファイルの記録から何かを探し始める。

「どこだ……どこにある……」

必死に研究室の研究ファイルを開く、閉じると繰り返し、何かを探していた。

「あった」

次に開いたファイルを見て探していた研究ファイルを見つけた。

「これシャルか？」

シャルル達もパソコンの画面に目を向けると、そのファイルを開いた。

その研究ファイルは四年前の『遺跡発掘レポート』と書かれていた。

晴夜はスクロールを回し、下へと動かす。そこに記録されていた。発掘チームのメンバーを見る。

「やつぱり・・・何処かで見えたことがある顔の人達だと思った・・・」

その発掘チームのメンバーは、リーダーに叔父の石動総一郎、サブに斗賀野光臣、岸波涼香の姿があった。そしてもう一人副リーダーの・・・

「流石にカンが鋭いな」

「「だ、誰シャル！（ケル！）（ランス！）」

声が聞こえて妖精達が振り向くと、遠くから足音が聞こえ、こつちに向かってくることに気づく。

研究室に現れたのは、斗賀野光臣、岸波涼香らと同じ黒い服装を着ており、歳は晴夜よりも数十歳くらい上に見えた。

「伊能・・・賢也」

晴夜達の前に現れたのは、パソコンの画像に映されている発掘チームのメンバーの副リーダー、伊能賢也だった。

「……四年前、伊能賢也は若手の発掘チームの副リーダーだった……けど、あなたは何者だ。エボルトと何の関係がある……？」

晴夜は伊能賢也はエボルトと繋がりとがあると睨んでいた。

「流石だね。天才科学者桐ヶ谷拓人の息子で、その兄・桐ヶ谷巧の弟でもあるね」

「答えになってない、何者だお前？」

「察し通り、私は……俺はこの世界の人間じゃない、エボルトと同じブラッド帝国のものだ」

「ブラッド帝国……」

「かつて、俺達もエボルトと同じように一万年前にキュアエンプレス達との戦いで敗れた種族の生き残りだ」

それを聞いて、かつてアン王女が言っていた、エボルトは世界を破滅させる種族の王にあたる存在、それと関係があると睨む。

「つまり、アンタ達もパンドラボックスに封印されていたのか？」

「いいや、俺達は封印される直前に逃れることが出来た……そして、一万年の月日が経ち、俺達は目覚めた……」

一万年前の封印を逃れ、一万年の時間が経ち目覚めたと話す。

「俺達は、まずこの世界へと飛ばされ、パンドラボックスに封印されたエボルトを見つけるためにこの世界へとやってきた」

彼らはパンドラボックスを見つげるためにここに来たと言う。

「だが、肝心のエボルトの置かれた場所が分からなかった・・・」

「けど当時、遺跡の研究をしていた父さんの研究チームに入りパンドラボックスの所在を掴もうとした・・・」

「流石、鋭い推測力だね。その通り君のお父さんの元で情報を集め、パンドラボックスをようやく見つけた」

「そして、その時のチームリーダーだった総一郎叔父さんは、エボルトに身体を支配されたのか・・・」

「そう・・・そして、俺達はエボルトの後ろ盾になるために行動していた」

「後ろ盾・・・何をした」

「まず、トランプ王国の崩壊とプロトジコチューの解放の際に、国王に解放させるよう仕向けたのは俺達だ」

あの時、国王を唆してプロトジコチューの封印を解く様にさせたのは、伊能賢也によるものだと言った。

「なんだと……」

「それだけじゃない、他にもエボルトの遺伝子を持つ上城龍牙の監視も行った。

そして……桐ヶ谷巧の排除も」

「兄さんの排除……どうゆう事だ……兄さんは自殺したんじや」

桐ヶ谷巧……二年くらい前にエボルトにやられ。その後、エボルトライバーの情報を防ぐために自ら命を絶った筈だと聞いていた。

「そうか、君は真相を知らないだったね」

「真相……」

「まあ、そうだろう、エボルトにすら教えなかったからな……君のお兄さんは自殺したんじゃない、俺達で消した」

「えっ?」

なんと、巧の死は自殺ではなく、他殺だと知り驚く。

「エボルトが甘くてね。エボルトライバーの隠した場所を教えてくれないなら始末すべきだったのに……」

「まさか、兄さんの部屋に火を付けたのは……」

「ああ、俺だよ」

伊能が巧を殺したと告白する。

「あの時、様子を見に行くために俺は彼の部屋を訪れた」

それは、二年前・・・晴夜の兄、巧はエボルトを自分の部屋へと呼び寄せてそこで倒そうとした。だが、ドライバーをすり替えられ、エボルトに倒されてしまった。

『あつ・・・ああああ・・・伊能・・・』

エボルトが去って行き、巧が倒れているところに伊能賢也が現れると、何か書かれたメモを渡す。

『そこに・・・エボルトドライバーがある・・・早く移送するんだ！』

伊能にエボルトドライバーを移送して欲しいと頼む。

『わかった・・・これでお前の役目も終わりだ』

そう告げて巧の肩を叩くと、手から炎が作られ部屋の中へと放つ。すると、部屋の中一帯が燃え上がる。

『伊能・・・まさか・・・君も・・・』

『ああ、俺もエボルトと同じブラッド帝国の生き残りだ・・・』

巧に自分がエボルトと同じと答える。この時、巧は人に裏切られたと感じた。

『エボルトドライバーの情報をありがとう。これまで、スマッシュの開発、カイザーシステ

ムのデータ感謝してるよ。けど、これでさよならだ』

巧の部屋を出ると、さよならと告げて去っていった。

『もう・・・絶対・・・絶対に人を信じない!』

人を信じない、そう叫んで巧は死んでいった。

「あんた・・・人の命を奪って何も感じなかったのか・・・」

「所詮は人間、短い命。なんだろうと邪魔するものは始末する。何か間違っているか？」

「お前・・・!」

そのことを聞かされ思い返す。あの時、自分の体の中にいた巧があそこまで人を信用しなかった訳も。

「だがそのおかげで君は俺に感謝すべきだと思うけどな・・・」

「何だと・・・」

「君を仮面ライダーに選んだのは俺だぞ」

「何・・・」

「本来なら、君の兄である桐ヶ谷巧に仮面ライダービルドとなってもらうはずだったが、生憎、始末してしまったから変わりを立てる必要があった。そこで・・・君を選んだ」

伊能が晴夜をビルドに選んだ理由を語り出す。

「君の持つ知識、技術は桐ヶ谷巧と比べても同じ程はある。まさに桐ヶ谷巧のコピーと言っていい程に。だから、君を選んだ。つまり、仮面ライダービルド、偽りのヒーローの発案者は、この俺だ」

ビルドの発案者は自らだと晴夜に明かす。

「それだけじゃない。君がトランプ王国へ二回目に飛ばされた時、あそこにいた上城龍牙と遭遇させたもの、こつちががした事だ」

龍牙との出会いすらこいつらの計画の一部だと言い、話を続ける。

「その後、君と上城龍牙は良いように成長していった・・・」

しかし、予想外なことに、君はジャネジーで染まった国王を救い、復活したプロトジコチューを倒し、最後はエボルトも倒している」

国王の救出、プロトジコチューにエボルトの撃破は伊能達の予想を遥かに超えたものだった。

「正直、君がここまでやるのには、驚かされた。そして、激しく怒りを感じた」

「怒りだと・・・こつちは、お前らの怒りで一杯になりそうだけだな」

「こつちは、エボルトがいなくなつて、今まで準備した計画が全て水の泡となつた」

晴夜が怒りを感じていると言うが、伊能はエボルトがいなくなつたために計画が水の

泡となったと話す。

「だから決めた。俺達だけで新たな計画を始め、エボルトの意思を継ぐとな！」

「そんな計画、俺が止める！」

「出来ないよ。君には絶対に」

伊能が指を鳴らすと後ろからローブを被った人が近づき、後ろにはガイ、ライのブロス兄弟の姿もあった。

「・・・くるか」

晴夜はビルドドライバーを装着し、構える。すると、ローブを被った者がローブを脱ぎ捨てる。それを見て晴夜は目を大きくして驚く。

「マナー！」

それは、他のプリキュアと同じように黒く染まった服に目から光をなくしたキュアハートだった。

「やれ。キュアハート」

「はい、伊能様」

ハートが伊能の命令に従い、こっち向かってくる。

「ハアアアア！」

「!？」

ハートが晴夜にパンチしようとし、晴夜は紙一重で躲した。

「マナ！お前……」

「マナ、どうしたシャル！やめるシャルよ！」

二人が呼びかけるがハートからの返事はなかった。

「ふん！ハアアアアア！ヤッ！」

「くう！」

そのままハートはパンチやキックを繰り返し晴夜を追い詰めようとする。

「やめてくれ！マナ！」

避けながらハートにやめるよう、晴夜は訴える。

「ビルドは世界の敵！」

しかし、ハートは攻撃を止めようとする気配を見せなかった。

「どうしたんですか？戦わないんですか、それとも……」

「戦えないか？甘い奴だな」

ブロス兄弟は晴夜がハートとは戦えない事を知りながら挑発してくる。

「……三人とも捕まってる」

妖精達が晴夜にしがみつくとタカとガトリング、2本のボトルを取り出してドライブバーへと差し込む。

『タカ！ガトリング！ベストマッチ！』

ボトルを差し込むとハートの攻撃を避けて窓の方へと向かって走り出し、ドライバーのレバーを回し、前後からスナップビルダーが出現、アーマーが形成されると音声が続いた。

『Are you ready?』

「変身！」

ホークガトリンガーを窓に向かって放ち、飛び込もうとした瞬間、二つのアーマーが合体し、晴夜の体へと装着された。

『天空の暴れん坊！ホークガトリング！イエーイー！』

ホークガトリングへとなり、飛んで行こうとするがその際の爆風の所為で上手く飛べず地面へと激突する。

「晴夜！大丈夫シヤルか！」

「ああ……」

打ち所が悪かったかすぐには起き上がれた。

「ラケル、ランス、二人は一度みんな所に行くシヤル！」

「でも……」

「早く行くシヤル！」

「・・・わかったでランス」

ラケルとランスは急いで二人から離れていく。

「ツ!? 晴夜!」

「!?」

起き上がり、周りを見るとプリキュア達がこつちへと向かってくるのが見えた。

「[[[[ビルド・・・殲滅・・・ビルド殲滅・・・]]]]」

前の方からたたくさんのプリキュアがビルドに迫ってきていた。

「[[[[ビルド・・・殲滅・・・殲滅・・・]]]]」

横からはシザーズとゼブラが、彼らの後ろからダイヤモンド達三人が現れた。

「みんな・・・」

後ろから研究室から外に出てきた伊能とプロス兄弟、そしてキュアハートが現れ、完全に退路を断られた。

「伊能オーーーーー!!!」

ビルドは叫びを上げ、ハザードトリガーを取り出しスイッチを起動させた。

『マックス! ハザードオン!』

トリガーを差し込みフルフルボトルを振り、赤いランプの出た瞬間と共に栓を回した。

『ラビット!』

フルフルボトルを半分に割りドライバーにボトルを差し込んだ。

『ラビット&ラビット!ビルドアップ!』

ドライバーのレバーを回しながら走り出す。

『Are you ready?』

ハザードビルダーとラビットユニットが出現し、ユニットが空中へパージされた。

『ビルドアップ!!!』

ビルダーがビルドの体と重なり、金型が離れてハザードフォームへと変身し、パージされたラビットユニットを走りながら装着した。

『オーバーフロー!紅のスピーディジャンパー!ラビットラビット!ヤベェイ!ハエーイ!』

ラビットラビットへとフォームチェンジし、伊能賢也へ向かって拳を振ろうとした。その時、ハートが伊能の盾になろうと前に出た。

「マナ・・・」

その時、上から何かが現れ、ビルドの拳を受け止めた。

「!?!」

「こんな力しかないのに、仮面ライダーかよ。弱すぎだな」

現れたのは、クローズを倒した仮面ライダーパルロだった。その横には、キュアソー
ドの姿もあった。

「まこぴー……伊能！みんなを元に戻せ！」

「ハツハツハツハツハツ……！」

ビルドは皆を元に戻すように言うと突然、伊能は周りに響くくらい大きな声で笑い出す。

「何がおかしい！」

「お前、天才科学の血を引くくせにわからないのか」

「んだと……」

「君は誤解しているが、俺達は彼女らに何もしていない。仮面ライダーを殲滅しようとしてるのは彼女らの意思なのだよ」

「……ふざけるな、そんなわけ……」

「ないと思いたいだろうが、これが現実だよ。彼女らは自分の意思で君らを倒そうとしている」

伊能はこれはみんなの意思によるものだと言う。

「自分達のエボルトによって作られた者、そのような存在を彼女らは敵視するのは当然のハツ」

「・・・そんな・・・」

「と、ゆうことだ、わかったか偽物さん！」

パルロが反対の腕をビルドの腹を思い切り殴った。

「かあ!？」

ビルドはバランスを崩し、殴られた所を抑える。

「ハアアアアア！」

「はあ!？」

その際に、ブルームとイーグレットがビルドに向かってダブルキックを放とうしたが、ギリギリで躲した。

「「殲滅・・・殲滅・・・」」

「ビルド殲滅・・・ビルド殲滅・・・」

「六花！ありす！亜久里ちゃん！まこぴー！」

ビルドが呼びかけるも、みんなから殲滅と言う言葉は消えなかった。

「頼むから・・・みんな・・・目覚ましてくれよ・・・」

下を向いてしまうとパルロがビルドを掴み上げる。

「いい加減、現実を認めろよ。みんなわかってんだよ。お前らは偽物の存在だつてな！」

「ぐはあ!？」

パルロはビルドの顔を払いのけるかのように殴り、ビルドが倒れる。

「いいか、覚えておけ。仮面ライダーは、本物の俺と奴だけでいい！お前は消えろ！」

「あ……ああああ……」

あまりのショックで、もう立ち上がることもすら出来ない。

「おいおい、小僧まだ寝るにはあかんで」

「ビルドちゃんには、まだまだ絶望してもらわないと」

シザーズとゼブラが腕を掴み、強引にもビルドを起こす。

「晴夜を離すシャル！」

「邪魔や！」

シャルルが助けようとしたが簡単に払いのけられる。

「シャルル……」

「いい気味だなく桐ヶ谷晴夜」

「今まで一緒に戦って守ってきたものが真実を知り振りかかる。現実とは恐ろしいですね」

ブロス兄弟がいい気味だとビルドを哀れむ。

「……くう……」

「これで、終わりしてやる……」

「待て」

パルロがトドメを刺そうとすると伊能が止めた。

「トドメを刺すのは君じゃない、彼女だ」

伊能はそう言つて、後ろにいたハートを見る。

「キュアハート、トドメを刺してあげなさい」

「わかりました」

「ちっ！仕方ない……」

パルロが退くとハートがラブハートアローを持ち、ラビーズをセットするとビルドに向かつて弦を引く。

「やめろ……やめてくれ……頼むから……もう……やめてくれ……」

「ハートシュート」

だが無情。嗚呼、あまりにも無情。ハートにはビルドの声が聞こえず、ハートシュートがビルドに向かつて放たれた。

「マナアアアアー……!!」

絶望感に苛まれたビルドが叫ぶと、ハザードトリガーのメーターが逆回転を始めた。

「来たか……」

メーターが逆回転するとビルドの前に黒いエネルギー体の渦が作られ、ハートシュー

トと衝突した。

「うわああああああ!!」

その影響で大きな爆発が起こりビルドがそれに巻き込まれ吹き飛ばされ、強制変身解除で倒れた。

ハートが倒れた晴夜の前に現れ、足で晴夜の体の向きを変え、晴夜に装着されたビルドドライバーを外した。

そのまま持つて行こうとすると晴夜がハートの足を掴む。

「マナ・・・」

だが、ハートが晴夜が掴んだ腕を足で振り払った。

「晴夜！しつかりするシャル！晴夜！」

シャルルは晴夜を心配するが、ハートは歩き続ける。

「マナ！こんな晴夜を見て何も感じないシャルか！」

シャルルが言うがハートは振り向かず伊能の元へと歩く。

「伊能様、これを・・・」

ハートがハザードトリガーを装着したビルドドライバーを渡す。

「ようやく手に入れた・・・最後のピースを・・・破滅を呼ぶ力をー！ー！」

伊能はハートに渡されたビルドドライバーを装着した。

『マックス ハザードオン!』

今度は龍牙から奪ったグレートクローズドラゴンにコブラロストボトルを差し込む。

『グレートクローズドラゴン!』

グレートクローズドラゴンを差し込み、レバーを回す。

「変身」

『Are you ready?オーバーフロー!』

ドライバーから出てきたパイプ線がシザーズとゼブラと接続され、取り込まれようとしていた。

『Wake up CROSS-Z! Get GREAT DRAGON!ブラブラブ

ラブラブラア!』

ヤベーイ!』

変身を完了させた伊能の今の姿は、龍のような複眼、ブラッディチェストアーマーにある胸部のコブラの意匠と黒いマントー『BDベクターマント』・金の装飾が付いたブーツを纏い、ブラッドスタークと何処か似たような印象を見せるものとなった。

「遂にこの時が来た」

伊能ー仮面ライダーブラッドは倒れていた晴夜の方を向く。

「桐ヶ谷晴夜、お前の人生もここで終わる」

ブラッドの手からエネルギーが収束されていく。

「さらばだ……」

晴夜に向けて放とうとした次の瞬間、謎のカードがブラッドの前へと現れ、発射を防いだ。

「なるほど、これが狙いだったというわけか」

首に二眼レフカメラをかけ、彼らと同じように黒い服を着た青年が現れ、晴夜の前へと出る。

「誰シャル？」

「誰だお前……ブラッド帝国のものではないな」

それは、以前にも晴夜の前に現れた仮面ライダー……門矢士だった。

「悪いがコイツをやらせるわけには行かない」

士が前に出て、晴夜をやらせないと言う。

「俺の今回のするべき事はコイツを守ることみたいだから……」

後ろで倒れている晴夜を見て話す。

「俺はお前らの中に潜入し、何をやろうとしていたのかを気になってな。いろいろ調べさせてもらった……その手始めに、このガキともう一人の方のガキの心を絶望へと導くことが、お前らの第一の計画って事だろ」

「そこまで知っていたとは何者だ、貴様……」

ブラッドが問うと一枚のカードを見せた。

「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ。変身!」

カードを腰に装着したドライバーに差し込み、サイドハンドルを操作した。

『KAMEN RIDER! DECADE!』

九つの影が一つになると数枚のプレートが現れ、その頭部を縦に貫きはめ込まれ、黒とマゼンタの世界の破壊者・仮面ライダーデイケイドとなった。

「さって、行くか」

デイケイドがブラッドに向かっていく。二人の攻撃が繰り出し続け互角のように思えたが、ブラッドがやや押していた。

「つたく、吸血鬼には、吸血鬼だな!」

バックルから別のカードを取り出し、ドライバーへと差し込む。

『KAMEN RIDER! KIVA!』

今度は吸血鬼がモーターフのライダー・キバへととなると、またさらに違うカードを差し込む。

『FORM RIDER! KIVA BASSHAA!』

キバの仮面と右腕が緑色に変わり、手には専用武器『バツシャーマグナム』を装備し

た。

それをブラッドに向けて放ち、ブラッドを後ずさると、今度は地面に向かって放つ。「くうー！」

ブラッドが顔を上げると、デイケイドと倒れていた晴夜の姿はなかった。

「ちっ、逃げたか・・・」

逃げたと思うとブラッドは変身解除した。

「だが、これで計画の第一段階はクリアされた！これで、世界の終わりへと向かう」

ビルドドライバーとハザードトリガーを奪われた晴夜は、果たしてどのようにして立ち向かうのか。

次回！Re・ドキドキ&サイエンス！last science！

第6話 もう一人のビルドの世界

第6話 もう一人のビルドの世界

それは、ハピネスチャージプリキュアと一緒に夢の世界で戦いが終わり、目を覚ましたマナに会いに行った時。二人はいつもの景色が見える丘へとやってきた。

「ねえ、あたしの夢を見たらしいね」

「えっ? いや、その興味本位でつい……」

夢の世界、マナや他のプリキュアの夢をユメタという妖精の案内で見せてもらった。

興味本位で見ってしまった事は事実なので、晴夜は気まずそうに眼を逸らす。

「彼女が永遠の眠むりについてしまったのに、その彼女の夢を見るなんて……!」

「(ゴ)めん……」

頬を膨らませながらわざとらしく怒るマナに、悪いと感じた晴夜は彼女の夢を勝手に見たことを謝ると、彼女は怒ったような表情から一変してクスリと笑う。

「嘘だよ」

「なんだよ……驚かせんなよ」

晴夜は嘘だと聞いてなんか力が抜けた後は、みんなが来るまでの話の話をしながら、今の学校でのことを話す。

「明日には・・・向こう帰っちゃうんだよね」

マナは明日には、戻ることを口にするると少し暗くなる。

「うん・・・向こうの学校でももうすぐ新学期が始まるから」

「そうか・・・また、しばらく会えないんだ・・・」

「マナ・・・」

帰ってほしくない、そんな顔を見せると、晴夜はすぐに口を開く。

「大丈夫。また、すぐに会いにここには来るよ」

「晴夜・・・うん、待ってる」

それを聞いて、マナの顔から笑顔が戻った。

「お父さんとは、ちゃんと時間作れるの？」

「まあ、向こうはトランプ王国だから話す機会が少ないけど、家に居る時は、なるべく時

間作ってる」

「本当に？」

怪しいなあって顔をするマナに何も言い返す言葉なかった。すると、髪につけていた髪

飾りが取れた。

「ああっ・・・」

「よつと」

その髪飾りを晴夜がなんとかキャッチした。

「はい」

「ありがとう」

晴夜から返してもらい、手に置かれた。

「取れやすくなつたのその髪飾り？」

「うん。ちよつとね」

そう言つてマナは髪飾りをもう一度付け直す。

「ねえ、晴夜は見てみたい夢はないの？」

「なんだよ。いきなり・・・」

「いやあく、晴夜あたしの夢を見たつて言うから、晴夜はどんな夢を見ているかなつて
」

今回の事件で経験したからか、晴夜もどんな夢が見たいのか気になつていた。

「夢かく、目標にしている夢ならあるけど、見てみたい夢か・・・」

頭を悩まして考えると、頭に手を置く。

「あんまり、わかんないや・・・」

しかしよく分からないと苦笑しながら、癖で髪を書き始める。

「見てみたい夢は探せばあるかもしれないし、面白いけど・・・」

そう言いかけるとマナの顔を見る。

「俺は見るんじやなくて叶えたいんだ」

「あっ・・・うん！そうだね」

「叶えられるよう、頑張るよ。絶対」

「うん。待つてる・・・」

そして、マナは笑顔で待つてると晴夜に告げた。

だが、再び会いに行った日。彼女は敵となつて晴夜を襲い、晴夜からビルドドライブとハザードトリガーを奪つていった。

「うっ、うっ・・・やめてくれ・・・」

「晴夜・・・」

うなされる晴夜をシャルルが心配しており、隣に座っていた門矢士はじつと見ていた。

（相当な、精神的なダメージを受けたな・・・）

「あ・・・あああ・・・」

晴夜はうなされながら夢を見ていた。

そこでは自分が必死に何から逃げていた。それをずっと繰り返されていた。

『頼む……もう、やめて……』

逃げながら、追つてくる者達に止めると唄える。

『『『殲滅！殲滅！殲滅！殲滅！』』』

襲っているのは、昼間に追いかけてきたプリキュアのみんなだった。

『はあ、はあ、はあ……』

息が切れ走るのも辛くなり、歩き前を向くと今度はドキドキプリキュアのメンバーが前へと構えていた。

『みんな……』

冷たい眼差しでこっちを見るみんなに、晴夜は足がすくむ。

『ビルド殲滅が世界の為』

『ビルドは私達の敵』

『世界の愛を奪うもの』

『みんなを傷つける』

『エボルトに作られた、偽りの存在』

『マナ……やめてくれ、もうやめて……』

震えながら、晴夜は頭を抑え下向きながら言うのをやめてくれと訴える。すると、周

りからみんなの姿が消えた。

『いいザマだな。桐ヶ谷晴夜。傑作だな〜』

『信じた者達に裏切られる、あまりにも惨め結果ですね』

ブロス兄弟が現れ、晴夜の心をさらに落としめる。

『可愛そうなく、ビルドちゃん』

『けど、これが現実や受け入れなきやあかんで〜』

今度は岸波涼香と斗賀野光臣が現れ、さらに影に落とす。

『やめろ・・・やめろおおおー！』

やめろと叫ぶと今度はフェルノ・ユウヤが目の前に現る。

『やめろ、これが現実だよ。エボルトに作られた偽物が！』

偽物。その言葉が、心を強く蝕む

『所詮、君は桐ヶ谷拓人と巧のコピーでしかない』

『!?!』

後ろを振り向くと伊能賢也がいた。

『君のような空っぽな存在は誰かのコピーでしかない』

「——はあ!?!」

そして晴夜はいきなり目を覚まし、疲れきった表情で起き上がる。

「はあ、はあ……ここは……」

周りを見ると何処の漁船に近い感じの船の中にいるのだと察した。

「晴夜！よかつたシャル！」

シャルルが勢いよく晴夜に抱きつく。

「シャルル……ごめん心配掛けたな……」

心配を掛けたことを謝る。

「ようやく、目を覚ましたか……」

声が聞こえ振り向くと隣で座っている士に気づく。

「あなた……確か……」

晴夜は以前、士と戦い、最後に話をした事を思い出す。

「あなた前に俺の前いきなり現れた……通りすがりの仮面ライダー」

「門矢士だ。そつちは覚えなくてもいい」

「この人が晴夜を助けてくれたシャルよ」

「別に助けたわけじゃない、自分のするべき事をしてるだけだ」

「俺は、確か……」

自分の身に起こった事を振り返る。伊能達に囲まれ、ハートにハートシユートを打た

れたのを思い出し、腰に装着していたドライバーがなくなっていることに気づく。

「シャルル、俺のドライバーは……」

「……それは」

「奴らが奪っていたぞ、暴走装置も一緒にな」

言いすらそうなシャルルを見て、土がドライバーとハザードトリガーを取られたと晴夜に話す。

「……やっぱりか」

何となくだが、気を失う前にハートがドライバーを外し去っていくのは覚えていた気がする。

「晴夜が気を失っている間に、晴夜のドライバーを使って伊能が仮面ライダーに変身したシャルよ」

「そうか……」

「あ……あ……」

今の晴夜はドライバーが取られたよりも、みんなに一方的に責められるのが一番の苦痛だった。

「しかし、見事に奴らの思うがままに動いたな……」

「どうゆうことです……」

士は晴夜に伊能達の思うがままに動いていたと告げた。

「奴らの狙いは最初からお前を倒すことじゃない、お前のあの暴走装置が狙いだっただ」

「えっ？ハザードトリガーを？」

そしてハザードトリガーが狙いだと明かす。

「奴らはお前にあのトリガーのマイナスのパワーを引き出すのが狙っていた。そのために彼女達にお前を襲わせ、精神的に追い詰めようとした」

プリキュアのみんなを使い、晴夜を追い詰めさせようとしたのが狙いだった。

「そして、お前は彼女達に裏切られたと精神的に思い込み、絶望視した時にトリガーは逆回転を始めた」

あの時、ハートシユートが打たれた時、目の前に出現したエネルギー体の渦は、その前兆とも言えるものだった。

「後はお前のドライバーとお前の相方が持っていたガジェットで条件はクリアされ、あの仮面ライダーが誕生した」

「相方・・・まさか、龍牙も！」

相方のガジェットと聞き龍牙も狙われたのだと思い、士に問う。

「ああ・・・おそらく奴もやられたんだろう。ガジェットを持っていたのが証拠だ」

ガジエットを伊能が持っていた時点で龍牙もやられたことになる。

「それでも・・・俺はあいつらの思うがままに動いてしまったって事ですか？」

「まあ、そういう事になるな」

晴夜は立ち上がり船から出ようとする。

「どこに行く？」

士がどこに行くかと問い、晴夜は足を止める。

「決まっています。伊能達の計画を止めてくるんです」

「やめとけ、行ったところで無駄死にするだけだ」

「それでも、行かないと・・・」

行こうとすると、フラつき出す。やはりさっきの攻撃がまだ体から抜けてないようだ。

「晴夜、無理シャルよ」

「その妖精の言う通りだ」

シャルルと士が無理だと言っても、晴夜は行こうとする。

「はあく・・・はつきり言うぞ、今のお前じゃあ、ブラッドどころかあのパルロってライダーにも勝てないぞ」

「!？」

勝てないと告げられると晴夜は足が止まる。

「それは、ビルドドライバーが無いからシャルよ！」

「今からまた作って用意します。それで……」

「いや、例えお前がドライバーがあるにしろなにしろ、今のお前自身が戦う事を恐れている」

ビルドドライバーがあつたとしても、晴夜は戦いを恐れていると告げる。

「そんな……俺が……恐れてる」

「戦うのがいやなんだろ、プリキュア達と……」

「……」

その言葉が来た瞬間、晴夜は無言となる。

「この先、お前がブラッド達と戦うのなら、あのプリキュア達は容赦なくお前を攻撃する」

「そんな……」

また、晴夜の元に殲滅という二文字が降りかかるだろう。

「ブラッドを倒すなら、まずは彼女達を倒すしかない」

「それは……」

わかってる、ブラッドに辿り着くには避けては通れない道であることは……

「だが、お前は彼女らを傷つけたく無い、一方的にまた彼女達から罵声を受けたく無い。違うか？」

「……」

晴夜は又もや黙りだす。

「凶星のようだな」

「あんたに……何がわかるんだよ……」

「晴夜……」

「あんたに何がわかるんだよ！」

晴夜はいきなり土に向かって叫び出す。

「俺は……あんたみたいに本物の仮面ライダーじゃない……エボルトと伊能に利用されるために作られて……」

そして、土の服を掴みながら言い続ける。

「何も知らず……奴らに手を貸していた……それに、やつぱり偽りなんだよ、俺の存在……はあッ!」

言いかけると土の目に押され、服から手を離す。

「……すいません……」

掴んだ事を謝ると晴夜は顔を下に向けて船から出て行く。

「晴夜……」

「ごめん……一人にしてくれるか……」

そのまま、外で雨が強く降り続ける中、晴夜は項垂れながら去っていった。

「はあく、全くガキは面倒くさい……」

土は掴まれた服を直しながら、面倒くさいと呟く。

「だが、お前の気持ち俺にはわかる。俺にも似た経験があるから……」

かつて、土にも今の晴夜と同様に似たような経験があるから、本当は気持ちちはわかる。

「本当に今の晴夜じゃ、みんなを助けられないシャル？」

シャルルは本当にみんなを助けられないのかと質問する。

「ああ、間違いなく今のままではブラッド達に勝つのは不可能だ」

「そんな……」

「だが……あいつが覚悟を決めるならあるいは……」

「覚悟って……みんなと戦うシャルか!？」

「まあ、そういう事だな……」

みんなと戦うことはパートナー妖精としては、避けた事だ。

「さあつてと……」

土も起き上がると傘を持ち、漁船の外へと出る。

「どこ行くシャルか？」

「どちらにせよ、あいつを何とかしないとイケない」

「晴夜をどうするシャル？」

「とりあえず、奴に会わせてみるか……」

傘を開いて、晴夜を探しにへと出かける。

その一方、強く冷たい雨が降り続ける中、晴夜はただどこへ向かえば良いのか分からずただ歩くしかなかった。

「俺の全部は全て……作られたものなのか……」

今までの思い出も、みんなとの出会いすら作りものだったと思い込まされながら、歩き続ける。

『その通りだよ……』

「えっ!？」

何処からか、声が聞こえ顔を上げる。

辺りを見るとここは、兄……桐ヶ谷巧との二人の記憶世界だった。

「兄さん……」

「久しぶり……」

そこに居たのは、もう晴夜の中から去ったはずの桐ヶ谷巧だった。

「どうして……」

「不甲斐ないお前を見てね。なんか、戻ってきた……」

晴夜の不甲斐ないさを見て、一時的に戻ってきたと言う。

「今でも、後悔してるよ……あいつに……伊能にエボルドライバーの在りかを話したことを……」

伊能にエボルドライバーのありかを教えた事を後悔していると語る。

「お前が今までの力は、全て奴ら用意してしたものだ……上城龍牙との出会いも……」
「……だよね」

やっぱり、龍牙との出会いも伊能達が仕組んだものだった。

「けど、お前と上城龍牙はその作られた力で明日を創ったんだろ」

「えっ?」

「お前、まさか……上城龍牙以外との出会いも全部用意されたものだったか?」

「それは……」

「お前は、僕とは違う……」

先に巧が口を開き、少し驚いた。

「お前は、人を信じ、不可能を可能にした。違うか?」

人を信じる事で不可能を可能にした。それはいつも自分が思っている事だ。

「キングジコチューとなった国王を救った。光と闇の二つを受け入れてプロトジコチューを、上城龍牙と二人でエボルトを倒した！」

「それは……」

「あれも作られたから出来たことなのか……」

「違う……」

それははつきりと言える。あれはみんなと出来てやった事、キングジコチューを助けたのも、プロトジコチューとエボルトを倒せたのも、全部用意されたものじゃない。みんなと作り上げたものだ。

「だったら、やって見せろ。不可能を可能にする。お前の力で奴ら計画を止めて見せろ！そして、お前のパートナーとの出会いは最高ものだと示して見せろ！」

巧の拳が晴夜の胸に当たる。

「僕の弟ならこれぐらい出来るはずだ……晴夜」

そう告げて目を開くと、そこには誰もおらず降りつづける雨が当たるだけだった。

「兄さん……」

胸に手を当てて呟く。

『お前は僕のコピーじゃない。その事を証明して見せろ』

すると再び、巧の声が聞こえた感じがした。

「コピーじゃないことを証明して見せろ……」

巧から聞こえた言葉が呟いて言う。

「よう／＼少しは気分が良くなつたか？」

後ろを振り向くと傘をさしていたら門矢士がいた。

そのまま二人は近くのトンネルの中へと入り、士は晴夜にタオルを渡す。

「随分と濡れたな。なんか、気分良くなつたか？」

「そんな気分が良くなるわけ……」

「そうか……」

「あの……」

晴夜が士に声をかける。

「今の俺は……どうすればいいんですか」

これからどうすればいいのかと士に尋ねると、ため息を一息ついて話す。

「まあ、どちらにせよ、このまま奴らの計画を野放しにするわけにはいかない。ここはまだと確実にこの世界は滅びの道を辿る」

「そのためには……みんなと……マナと戦わなければならないと言うんですか……」

「ああ」

「わかってます。計画を止めると言うことは、みんなと戦わなければならない。けどビ

ルドドライバーも取られて・・・今の俺には・・・」

「わかっている。彼女達とは戦いたくない、そして、ドライバーもないから仮面ライダービルドとしても戦う力もない」

今の晴夜はビルドドライバーもハザードトリガーも失い、止めるどころか戦う力が無い。

「確かに、ドライバーないからビルドにも変身も出来ない、今のお前じゃ何も出来ない・・・今から作るんじゃない間に合うわけがない」

士の言うことも最もだ。今から新たな作っても間に合うわけがない。早くても一ヶ月は掛かる。

「そこでだ・・・」

士が手を振るモーションを取ると晴夜の周りに灰色のカーテンが現れ、晴夜を飲み込む。

「なんだ、これ・・・」

カーテンを叩くが壊れる感じはしない。

「だから、お前は奴に会って来るんだ」

「奴、誰にです?」

「もう一人のビルド・・・」

「えっ……」

もう一人のビルドと告げるとオーロラカーテンは前へと進み、オーロラカーテンが消えた頃には晴夜の姿はなかった。

「晴夜が消えたシャル！どこに行ったシャル？」

シャルルは士に何処に晴夜をやったのかと問う。

「会わせてやったんだよ。もう一人のビルドがいる世界へな」

「？どうゆうことシャル？」

「まあ、どちらにせよ。全てはあいつ次第だな」

そう呟き、晴夜がいなくなった跡を見る。

「さって、そこのお前ら、相手か？」

士が後ろにいる方へ声を掛けるとリモコンブロスとエンジンブロスが士に向かってきた。

「お前らが、俺の相手をしてくれるのか？」

「桐ヶ谷晴夜は何処だ？」

「話して頂ければ命を貰います」

ブロス達は士を始末するつもりの様子だ。

何処の世界に殺されると知っていながらペラペラと話す馬鹿がいるんだよ。

「お前は離れてろ」

シャルルは離れてろと言われ、土から離れると、土は白いバツクル——デイケイドライバーを装着し、横に装備されてるライドブツカーから一枚のカードを向ける。

「変身!」

カードを腰に装着したドライバーに差し込み。サイドハンドルを操作した。

『KAMEN RIDE! DECADE!』

九つの影が一人となり数枚のプレートが現れ、その頭部を縦に貫きはめ込まれ、黒とマゼンタの仮面ライダーデイケイド となった。

「行くぞ」

デイケイドはエンジンブロス、リモコンブロスへと向かって走っていった。

その頃、土に灰色のカーテンに取り込まれた晴夜は…

「ここは……」

晴夜が目を開くと、そこはさっきまでいた大貝町とはかけ離れた場所へと立っていた。た。

「どこだ……」

辺りを見回すと今までいた場所とは景色も街並みも違った。

「大貝町でないし、横浜って感じもしない……」

少なくとも今まで自分が知っている場所ではなかった。

「一体、どこだよここは……」

辺りを歩いて見るが知らない場所が多く足を止める。

(そういえば……言ってたなもう一人のビルドつて)

カーテンに包まれた時に士に言われた事を思い出す。とりあえず、龍牙かレジーナ達に連絡しようとビルドフォンで電話をかける。

「やっぱり、繋がらないか……」

ビルドフォンで掛けるが龍牙達と連絡は取れない。しばらく歩き続けると、噴水広場へと来ていた。

「はあくこれからどうすればいいんだよ……」

みんなとの連絡もつかない、何処なのかわからない場所で、方向すらもわからない事に翻弄されていた。

「さあさあ、寄つてらっしゃい！見てらっしゃい！今日は新商品も入った！ちよつとイかれた天才物理学者作った作品がいっぱいあるよ！」

そこへ、客寄せの声が聞こえ、晴夜はそこへ振り返る。

「なんだろう、天才物理学者って……」

気になって声が聞こえた方へと向かう。

そこでは、若い男女が二人で何かを売っていた。

「ねえ、もう普通にも働けるのにまだやってるの?」

「うるせえ、あいつがまだ続けるって言うんだ仕方ねえだろ」

二人が話していると一人の小さな男の子が商品を見る。

「おお、僕いいところに目をつけるね。それは今日は新商品だよ。その名も『蜘蛛型ペットロボ二号』!」

「こんなもん絶対売れる訳ねえじゃん! バカー!」

商品を説明すると、子供に売れるわけないじゃんと言われ、子供は去っていった。

「はあく、ガキイイイイ! ツテエ!」

青いジャケットを着た若い男性がその子供に向かって叫ぶと後ろの女性に頭を叩かれる。

「イツテエ! 何すんだよ!」

「そんな対応で、買ってくれるわけないでしょ!」

痴話喧嘩を始めると、晴夜はそこに置かれた商品に見覚えがある。

「あそこに置いてあるの、まさか・・・」

商品を見て何かを感じ、晴夜はお店に駆け寄る。

店の方は、女性方の方へと客寄せが変わっていた。

「はあく、なんでお前のように上手く出来ねんだ……まあ、それ以前に売れるだなんて思ってたねえけど……」

「あゝ」

晴夜が商品を握つてが二人に声を掛けるて、男性が近づく。

「おお！お兄ちゃんお目が高いね！それは新発明品！その名も……」

「これ……ボトルとかもさせますか……？」

「「えっ？」」

晴夜はこの商品はガジェットではないかと思ひ、ボトルは差せるかと聞くと二人は驚いた顔をした。

「どうして、その事を知っている」

「持つてるからです……」

ポケットからラビットとタンクのボトルを見せる。

「どうですか……？」

「お前、これどこで手に入れた？」

「手に入れたって言うか……その……」

「お前、誰だ。まさか……エボルトの知り合いか？」

「えっ!? エボルトを知ってるんですか!？」

エボルトを知っているのかと聞くと広場の先から悲鳴が聞こえた。

「なんだ・・・」

悲鳴が聞こえた方を見ると多くの人がスマッシュから逃げ寄せ、こっちへ走ってきた。

「スマッシュ!?! なんで、ここに!！」

(こいつ、スマッシュの事も知ってたのんかよ)

男性は晴夜がスマッシュを知っていたことにも驚く。

「由依! 周りの奴らを逃がさせろ!」

男性は女性の事を由依と呼ぶと、女性は逃げて行く人を誘導する。

「わかった! 皆さんこっちです!」

男性の方はスマッシュへと向かっていき、生身で戦いを挑む。

「ふう! オラア!」

男性の繰り出した拳がスマッシュを後ずさりした。

「あの、パワー・・・」

男性のパワーを見て何か見覚えがあると感じた。そして、次に見せられたものに目を大きくする。

「ツ!?ビルドドライバー!」

その男性はビルドドライバーを腰へと装着し、クロースドラゴンが手に置かれドラゴンボトルを差し込む。

『ウエイクアップ!クロースドラゴン!』

そしてドライバーにガジェットに差し込む。レバーを回し、スナップライドビルダーからアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身!」

拳を手当てたから構えるとビルダーから形成されたアーマーが男性の体に重なって装着され、煙が吹き荒れると音声流れた。

『Wake up burning!Get CROSS—Z—DRAGON!Yeah!』

「仮面ライダー・・・クロース・・・」

男性が龍牙と同じ仮面ライダークロースへと変身し、そのままマッシュを圧倒していた。

だが、そこに逃げ遅れていたさつき商品を馬鹿にした子供の姿があった。

「はっ!?危ない!」

危険を感じた晴夜は咄嗟にラビットボトルを振り、一瞬のスピードで子供をスマツシユから遠ざけた。

「大丈夫？」

「お兄ちゃん・・・ありがとう」

「息子を庇って助けてくれてありがとう」

「早く逃げて下さい。ここは危ないです」

男の子は母親が連れて行くと、晴夜にお礼を言つて去っていく。

「あいつ・・・」

クローズは晴夜を見て誰かの面影を感じた。そして、晴夜はスマツシユの方へと向かいドリルクラツシャーをガンモードにしてスマツシユに向けて放つ。

「おい！お前、なんでその武器持つてんだよ！」

「えっ？あの・・・自分で作ったからですけど・・・」

「マジかよ・・・」

攻撃を受けたスマツシユが起き上がり、油断していたクローズに襲いかかるが、難なく防御する。

「お前、よくそれ作れたな・・・」

クローズが呟くと、スマツシユを自分から離す。

「しゃあ！オラオラオラオラ！」

そしてドライバーのレバーを何度も回す。

『Ready go!』

『ドラゴニックファイニッシュ！』

背後から現れたドラゴンがクローズの右足にエネルギーが溜まり、高く飛躍してライダーキックをくらわせた。

直撃したスマッシュはそのまま爆破し、残骸が残った。すると、晴夜を包んだ灰色のカーテンが現れ、スマッシュの残骸を包んで消えていった。

「消えた……」

消えた事はさておき、晴夜はクローズに変身した男性に近づく。

「あの、もしかして……今の仮面ライダークローズですか？」

「お前、それも知ってるのかよ……」

クローズも知ってることにも男性は驚く。

「お前、マジで何者だ」

「桐ヶ谷晴夜。その、仮面ライダー……ビルドです」

「ビルド!?お前が……どうゆう事だよ」

ビルドと言うと急に混乱し出し、どうしたと思ひ込む。

「とにかく、あいつに聞いてみるか・・・」

「あの、あなたは・・・」

「俺は、万丈龍我。仮面ライダークロースだ」

男性は万丈龍我と名乗る。

「お前がビルドつてのは、よくわかねえけど・・・悪い奴じゃないっていうのはわかるぜ！とりあえず、来いよ」

晴夜は龍我に案内され、歩き始める。

しばらく歩き続けると、どこか工場のような姿勢がいくつもある場所へとやってきた。

「ここは・・・」

「俺たちのアジトみたいところだ」

アジトと言う一つの工場の前へと到着し、万丈が扉を開ける。

その中は、いくつも何かを作った跡が見られる光景だった。でも、その技術に晴夜は目を奪われていた。

「おお、おかえり、万丈」

そこに机の上で何かを作っている男性がおり。手には、はんだごてと鉛を持ってい

た。

「万丈、どうしたのその子は？お前が子供なんて連れてくるなんて」

「さつき、マーケット所で会ったガキでな、中々見所がある奴なんだ」

「へえ〜」

「あの・・・」

晴夜は男性にもラビットとタンクのボトルを見せる。

「これ・・・わかりますか？」

「これ・・・」

それを見て男性はボトルを握る。

「・・・同じボトル・・・こんな子がどうして？まさか・・・」

男性は引き出しから何かを取り出した。それは、ビルドドライバーだった。

「ビルドドライバー・・・」

男性はラビットとタンクのボトルを差し込む。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

ドライバーから兎と戦車のシルエットが浮かび、『R/T』と表示された。

「本物だ・・・」

ボトルが本物だと呟くと、男性の髪の毛が上がる。

「君は一体……」

「桐ヶ谷晴夜……仮面ライダービルドです」

「ビルド！お前が……どうゆうことだ？」

「あの、あなたは……？」

「桐生戦兔。俺も仮面ライダービルドだ」

「ビルド……あなたが、もう一人のビルド……ここは、まさか……平行世界」

もう一人のビルド、桐生戦兔とクロース、万丈龍我との出会い。

士の言う、彼がもう一人のビルドとはこのことだと気づくのは、ある意味必然だった。

次回！Re・ドキドキ&サイエンス！last science！

第7話 受け継ぎしビルドの意思

第7話 受け継ぎしビルドの意思

「あなたが・・・もう一人のビルド・・・ここって、もしかして平行世界」

「平行世界って、じゃあ、お前も違う世界から来たのか？」

「それって・・・アパレルワールド！」

ガクツと二人がなると、戦兎が万丈の頭を叩く。

「パラレルワールドだ！バカ！」

「バカってなんだよ！せめて筋肉つけろよ！」

痴話喧嘩を始める。だが、二人の痴話喧嘩を見ていた晴夜は、自分と相棒との痴話喧嘩の光景を思い出させた。

「あれ・・・」

すると晴夜は急にフラつき出し、目もぼやけ出し倒れた。

「おい、大丈夫か？」

倒れたことに気づいた戦兎が、晴夜の赤くなつた顔を触る。

「こいつ、すごい熱だ！」

「マジかよ！早くこっちに寝かせろ！」

万丈が晴夜を抱えて晴夜をベットに横にさせる。

「戦兎、万丈、ご飯持ってきたよ」

そこにバスケットを持った一人の女性が入ってきた。

「美空！丁度いい手伝ってくれ！」

「えっ？どうしたのその子？」

美空と呼ばれた女性はベットで横になっている晴夜に気づき、晴夜の顔を触る。

「すごい熱・・・なんなのこの子？」

「広場であつたガキだよ。こいつ仮面ライダービルドだつて言うんだよ」

「はあ？どうゆう事？」

「彼も以前会つたパラドと同じ平行世界から来たんだ！」

「でも待つてよ！こんな・・・まだ子供が仮面ライダー!?しかも・・・ビルドつて・・・」

万丈と戦兎の話を聞いた美空は、晴夜の歳を考へてライダーなんてあり得ないと不思議と思つていた。

その頃、晴夜がいた世界・・・

そこでは、門矢士がデイケイドに変身し、エンジンブロスとリモコンブロスと戦つて

いた。

「中々やりますね」

「だが、俺達が優勢だぜ！」

「どうかね」

自信満々に戦いを繰り広げるプロス達に対して、デイケイドはライドブツカーから一枚のカードを取り出し、ドライバーへと差し込む。

『ATTACK RIDE! SLASH!』

ライドブツカーがソードモードへ変わり、刀身にエネルギーを纏わせると分身し、一振りで数太刀の斬撃を浴びせる。

「まだまだこれからだぞ」

『ATTACK RIDE! BLAST!』

別のカードを差し込み、ブツカーをガンモードと変えると、銃口を分身し発射され弾丸のエネルギー弾の掃射を浴びせ、それをモロに受けたプロス達は倒れた。

「残念だがお前らじゃあ、俺には勝てない」

ライドブツカーからさらにカードを取り出し、ドライバーに投入してハンドルを左右から押す。

『FINAL ATTACK RIDE! DE DE DE DECADE!』

音声流れるとプロスとの間にカードが並び飛びあがる。するとカードもななめ一直線に並び、飛び蹴りの体制に入るとカードに引かれるよう、標的にめがけ一直線に降下した。

「ふう！はあく、タアアアー!!」

カードの中を通り過ぎながらエネルギーを蓄えたキックはプロス達に叩きこまれ、プロス達は変身解除した。

「おのれ……」

「……は、一度退きますか」

スチームガンを周囲に放ち、プロス兄弟は逃げていった。

デイケイドは彼らがいなくなるのを見てドライバーのハンドルの左右を引き、変身を解除した。

「逃げ足は相当早いな」

士が呟くとシャルルが晴夜がいなくなった場所を見つめる。

「晴夜……」

「心配するな、奴なら戻ってくる。たぶんな」

「たぶんってなんシャル！いい加減シャルよ！」

「慌てても奴は戻ってこないぞ。あのガキがどうにかしないと何も起きないぜ」

士の言うことも最もだが、どうにも説得力に欠ける発言である。

「それより、あいつの仲間の場所はどこか知ってるか？」

他の仲間の居場所がどこかシャルルに尋ねる。

「……ここから離れたぴかりが丘にある大使館……そこにみんないるシャル」

「なるほど、よし行くか」

「行くってどこにシャル！」

「そのぴかりが丘って所に決まってるだろ」

「マイペースシャル……」

マイペースな士にシャルルは振り回され、そのまま士をぴかりが丘へ案内する。

同じ頃、トランプ王国での孤児院の施設では、パルロとキュアソードにやられた龍牙がうなされていた。

『くそ……はあ、はあ……』

パルロに無すすなく倒れ、近くからさらに爆発が聞こえた。

それは、多くのプリキュアの攻撃を受け倒れていく相棒だった。

『晴夜……晴夜アーーーーー!!』

相棒の名を叫び、龍牙は目を覚ます。

「はあ!？」

「龍牙、気がついたのね」

「ダビィ……俺は……」

DBに支えられ、龍牙が起き上がる。

「パルロにやられて気を失って倒れていたのよ」

「……夢を見たんだ……晴夜が……真琴やマナにみんなに襲われている夢を見たんだ……」

「……」

「晴夜はどうなったんだ？あれから何か連絡があったのか？」

連絡はなかったかとDBに聞くと、言いずらそうな表情になった。

「……さつき、和也達から連絡があったの……探していたプリキュアのみんなが晴夜を襲い出したらしいの……」

「えっ……」

「晴夜は何かの手がかりを探しに行ってから連絡はないわ。和也達はハピネスチャージプリキュアのみんなが助けに来てくれたおかげで今はぴかりが丘に姿を隠してるって……」

「よし、俺達も行くぞ」

DBに支えられながら、龍牙もぴかりが丘へ向かおうとする。

「待ちたまえ」

すると声が聞こえ、龍牙が振り向くと男性が立っていた。

「あんたは・・・」

「失礼な少年だね。せっかく助けてあげたのに」

助けてくれた。それを聞いてパルロから助けてくれたのかと察した。

「・・・もしかして、パルロから助けてくれたのアンタなのか？」

「海東大樹。通りすがりの仮面ライダーを追う者さ」

海東は一枚のカード——ダイエンドのライダーカードを見せて龍牙に名乗る。

「礼ならいらぬよ。それと、これ代金ね」

「それ、俺のボトル!？」

海東が持っていたのは、龍牙のグレートドラゴンエボルボトルだった。

「貴重なお宝を頂いたよ」

「返せよ!」

龍牙がボトルを取り戻すために海東に突っかかるが、余裕で躲される。

「落ちてきたまえ、こっちは返してあげるよ」

そう言ううと海東は何かを投げ、龍牙はそれをキャッチした。

「俺の・・・ドライバー」

それは龍牙のビルドドライバーだった。

「ドラゴンは？」

ドライバーに差し込まれてあるはずのクローズドラゴンがなかった。

「ドラゴン・・・ああ、あのドラゴンロボットならキュアソードだけ、彼女が持っていたよ。あれも貴重なお宝だった」

「真琴が・・・」

なんとなくだが、覚えている。龍牙の、自身のドライバーを外したキュアソードの姿を。

「それと、これ！」

すると海東はまた何かを投げ渡す。龍牙が手に取ったそれは、まるでクリスタルのように光り輝いており、キャップ部は白銀色で中央にはクリアブルーで縦に∞の様な文字が描かれているボトルだった。

「ボトル・・・」

「クリスタルボトル、それは大した価値のないお宝だ。君にあげるよ」

「クリスタルボトル・・・あれ？」

龍牙はクリスタルフルボトルを見て顔を上げるが、既に海東大樹の姿はなかった。

「……どこ行つたんだ？」

「龍牙……あの人……」

「わかねえ……とりあえず、かずやん達のところへ行くぞ」

二人は急いでぴかりが丘にいる仲間のところへと向かった。

その頃、別の世界で熱を出した晴夜が石動美空に看病されていた。

「うっ……うっ……」

「どうだ、美空？」

「熱はそんな大したことはないみたい。でも、体にある傷は少し酷いみたい」

「何かと戦つていたのか？」

戦兎はそう推測すると、美空は目の前で寝込んでいる晴夜の体にできた酷い傷の治療を行う。

「うっ、うっ……やめてくれ……」

するとまた晴夜の口から、何かうなされていような声を漏らす。

『……みんな……かずやん！幻冬君！レジーナ！』

うなされるながら晴夜は和也達が倒れ、傷つけられている夢を見ていた。

そして、相棒の龍牙までもがパル口とブラッドに傷つけられていた。

『龍牙・・・龍牙あああー!!』

すると晴夜の前にブラッドが現れる。

『全ては君が招いた結果だよ。君と関わったから彼らはこんな事にならなかった』

『・・・俺は、俺は・・・う、うわあああああ!』

みんなと関わらなければ、こんなことにはならなかったと自分を責めこむと晴夜は、自身の頭を抑え、発狂した。

「・・・大丈夫・・・大丈夫?」

だがその時、何処からか声が聞こえ、目を開く。

「あ・・・ああ・・・・・・マナ」

「マナ?」

ぼやけていて最初は相田マナかと思ったが、違う人だった。

「はあ!?! すいません! あっ!」

起き上がろうとすると体の傷が痛み、力がうまく入らなかった。

「無茶しない方がいいよ」

「あなたは？」

「石動美空。戦兔の仲間だよ。よろしく」

「石動……！（俺の叔父さんと同じ苗字）」

「起きたか？」

美空の苗字が自分の叔父と同じだと思っていると、戦兔が晴夜に近づく。

「俺は……どうして……」

「お前、ここに来た後熱が出ていきなり倒れてんだよ。覚えてないのか……」

戦兔がそう尋ねるが、晴夜には戦兔と万丈の痴話喧嘩を見ていた後の記憶が無い。

「すいません……迷惑をかけて」

「気にするな、改めて自己紹介するけど、俺は桐生戦兔、仮面ライダービルドだ」

「仮面ライダークロース。万丈龍我だ」

「桐ヶ谷晴夜です。一応、仮面ライダービルドです」

「ねえ、桐ヶ谷君。仮面ライダーって言うけど、君歳いくつ？」

「えっ？14歳ですけど……」

晴夜の歳を聞いて、三人共目を見開き驚く。

「若ッ！そんな歳でライダーやってんのかよ！」

「その……色々あって……」

「まあ、それは置いて。とりあえず、君はこことは違う平行世界の人間から来た人間だと思っただけ、違うか？」

「ええ、たぶん．．．いや、そうだと思います。俺はある人こっちに飛ばされてここに来たんです。その人に言われたんです。もう一人のビルドに会ってこいって」

「俺に．．．？話変わるけど、桐ヶ谷君。君は一体どんな世界から来たんだ」

自分に会いに行けと言う言葉に疑問を抱きながらも、戦兎は晴夜からどんな世界から来たんだと聞く。

「俺の世界では、仮面ライダーは俺の他に四人居て、仮面ライダーとは違った子達と一緒に戦ってたんです」

「違った子達？」

「プリキュアって女の子達なんです」

「プリキュア？しかも、女の子!？」

「ええ．．．これが一応写真です」

戦兎達がまたもや驚いていると、晴夜は持っていたビルドフォンからみんなと一緒に戦った写真を見せる。

「なんか、凄えな．．．戦うのって男ばつかだと思ってたからよ」

「平行世界は、色々あるからわからない事だらけだから．．．」

でも、この子達どうやって変身してんだ？ライダーステムみたいに科学か？」

「科学というより、妖精の力です」

「よ、妖精!？」

晴夜は取り敢えず、プリキュアの変身の説明をわかりやすく三人に話した。

「どういうことか、さっぱりわかねえ・・・」

「・・・つまり、妖精と変身する子の思いが重なる事で変身することが出来る」

「まあ、そういう事ですね」

「変身すれば、妖精の持つ力が増大し、巨大なパワーが生まれることもある」

晴夜の説明に戦兎は理解出来たようだ。

「でもなんか、みんな格好が凄えな・・・」

万丈はプリキュアの姿を見て、凄えと呟く。

「でも、妖精なんてすごく興味がある！」

戦兎が髪をかくと髪の毛の一部が逆立ち出す。

「この一緒にいる女の子達が桐ヶ谷君の仲間なの？」

テンション高く興奮している戦兎をスルーしながらも、ドキドキプリキュアと一緒にいる時の写真が多く、その姿を見て仲間なのかと美空が聞く。

「仲間・・・」

「どうした?」

「今は・・・」

晴夜は話した。今はブラッド帝国と言われる組織に狙われ、プリキュアのみんなが晴夜に襲いかかってきた。初めは自分を逃がすために仲間が逃してくれた。

でも、敵の罠にかかりビルドドライバーとハザードトリガーが奪われてしまった。その時、気絶していた自分をこの世界へと送った謎のライダーに助けられたと語った。

「酷い……そんな事が・・・」

「こいつを絶望させるために全員で襲わせる。ガキにそこまでやるのかよ・・・」
「相当・・・善悪がはつきりしてるな」

戦兎達がブラッド帝国に怒りを感じていると、晴夜は戦兎に口を開く。

「あの、俺からも聞いていいですか?」

「うん?」

「桐生さん達は、エボルトやスマッシュを知ってるんですか?」

「戦兎でいいよ。晴夜」

晴夜は広場で万丈がエボルト、スマッシュと言ってたので、何か知っているのかと考
えていた。

「俺達の世界はスカイウォールという三つの壁によって日本は三つに分かれたんだ」

「三つに・・・」

「それをやったのが地球外生命体、エボルトだ。」

俺と万丈に美空、それに他の仲間と一緒に奴と戦い、エボルトを倒し・・・この新世界を作った」

「新世界？それってパンドラボックスと黒と白のパネルとジーニアスポトルで作った世界のことですか？」

「知ってるのか」

「俺も相棒と同じ事をしたんです」

元の世界でも同じことをした事があると戦兎に話す。

「俺の世界は、エボルトは異世界の生命体だったです。俺達は滅亡した異世界を救うために戦兎さん達と同じような方法を取ったんです」

その時の影響で成分を無くしたジーニアスポトルを見せる。

「ジーニアスポトル・・・」

「でも、もう成分は無くなつて使えないですけど・・・」

「そうか・・・とりあえず、今日はここに泊まれよ。その体じゃあ、今日はもう動かない方がいい」

「えっ？でも、迷惑なんじゃ・・・」

「気にすんなよ。ゆっくり休め」

結局この後、ここの戦兎の研究室で一夜を過ごした。

その頃、大使館で身を隠している和也達と妖精達はこちらもここで一晚を過ごすことになった。和也や幻冬に関しては怪我がまだ完全に治ってなく、看病されていた。

「いつてえええ．．．もつと優しい頼む」

「文句を言わず！黙ってなさい！」

「は、はい．．．」

キュアフォーチュン、氷川いなおに看病され、ひめは幻冬からなぜこんなことになったのかと尋ねる。

「それで、なんでみんなが急に．．．」

「わかりません。でも、あのスマッシュになった人達は晴夜さんを落とすしめるためにとは言っていました．．．」

幻冬はシザースとゼブラのスマッシュ達が言っていた事を話す。

「大丈夫．．．」

「うん．．．でも、晴夜が心配で．．．」

「ねえ、飴舐める？」

「ありがとう……」

レジーナはゆうこからの飴をもらう。

「あれから晴夜から連絡はないの？」

「ああ、原因を探りに行ったきり……何の連絡もねえ……」

「もしかして……その桐ヶ谷君はもう……」

「そんな事はありません！晴夜さんは大丈夫です！何か情報を掴んで戻ってきます」

いなおは最悪の状況を思い浮かべたが、幻冬は晴夜が無事だと信じていた。

「信じよう！晴夜はこの間の事件だつて解決出来たんだもん！」

めぐみも晴夜は無事だと信じていた。

「龍牙の奴も、無事だといいいんだけどな……」

連絡のつかない龍牙も無事だと、和也は信じている。

「とりあえず、君達はゆつくり休んだ方がいい」

色々と問題が残ったまま、彼らの長い1日が過ぎつていった。

そして、ビルドの世界へと飛ばされた晴夜も1日が経った翌日。晴夜は机で作業をしていた戦兔に話しかける。

「おはようございます」

「おお、おはよう。熱の方は大丈夫か？」

「ええ、もう大丈夫です」

「そうか・・・」

晴夜の体の調子が安定していると分かると、再び戦兎は机に体を向ける。

「万丈さんは・・・」

「ん？デート」

「へえ・・・ええええ!？」

デートと聞いて驚いたが、戦兎さんを見て何かを思った。

「あの、実は気なっていたんですけど・・・」

「どうした？」

「戦兎さんは、科学者なんですか？」

「ただの科学者じゃない。天才物理科学者だよ」

戦兎は髪をくるりと回し、自慢気に言う。

ちなみに「天才」の部分のアクセントは「てえ→んさい←」である。

「天才・・・俺の父さんと死んだ兄さんも科学者だったんです」

晴夜は自分の家族が科学者である事を話した。

「じゃあ、晴夜も科学者を目指してるのか？」

「ええ、一応・・・」

「なら、試しにやってみせてくれ」

そう言うのと戦兔は自身の道具を晴夜に渡す。

「えっ？でも、それ売る商品なんじゃ・・・」

「お前の腕を見せてみる」

晴夜は戦兔から出された道具を握り、今作っていた商品に手をかける。

「へえ、中々上手いもんだな」

晴夜の器用な道具の使い方に戦兔が関心する。

「父さんや兄さんのやっていた事を、見よう見真似で覚えてただけです」

そこから、いつもの癖で必死になって机に向かう。

「なあ、俺も聞きたいんだけど、お前は何の為にライダーやってんだ？」

戦兔はふと、何のために仮面ライダーをやってるんだと聞くと、晴夜は口を開く。

「・・・最初は叔父さんからビルドドライバーを貰って、スマッシュからみんなを守るために戦ってました。そこからずっと一人で戦ってました。」

そんな中、俺が転校して初日にキュアハート・・・マナに会ったんです」

「キュアハート・・・お前の写真によく写っていたあのピンクの服で金髪の髪の子のことか？」

戦兎はビルドフォンによく一緒に写っていた写真が思い出す。

「ええ、俺がエボルトに偽りのヒーローで利用されるだけの存在で、兄さんの代わりだつて告げられ、何度も心が折れて立ち直れなかつた時、いつも励ましてくれたんです……」

でも……」

そのマナも他のみんなからも偽りのヒーロー……エボルトに作られた存在だから、敵だつて言われたことを思い出す。

「でも奴らの計画にはまり、ビルドドライバーを盗まれた」

「はい……それで、わかんなくなつたんです……自分が、何の為に戦つていたんだつて……」

「……似てるな」

戦兎は今の晴夜を見て、何か面影を感じた。

「俺もエボルトに作られた仮面ライダーだ」

「え、戦兎さんも……」

戦兎も同じだと聞き、それに驚く。

「俺の本当の名前は葛城巧……桐生戦兎はエボルトが付けた名前なんだ」

「葛城巧……本当の名前があるなら、なんでそつちを名乗らないですか？」

本当の名前があるのに、何でそつちを名乗っていないのかと気になっていた。

「こつちでの俺は、ライダーシステムとスマッシュの開発を行った、悪魔の科学者なんだ」

「悪魔の科学者……」

それを聞いた晴夜は、父の行なっていたライダーシステムの開発と、兄の行なっていたスマッシュの開発を、一人でやっていたのかと驚くが、それよりも彼が『悪魔の科学者』と呼ばれていたことの方に驚いていた。

「その後、エボルトの計画を知った俺は、エボルトを倒そうとしたんだ。けど、簡単にやられて、エボルトに今までの記憶を消され今の顔を変えられたんだ」

「変えられた……ん？」

壁に貼られたポスターに目が映り、それに近づくと、

一つは黒髪の格闘家の万丈さん。そして…

「ツナ義一さん……戦兎さん!？」

そのバンドの中に戦兎の姿があり、これまた驚いた。

「佐藤太郎。俺はそいつの顔に変えられたんだ。その後、エボルトにビルドドライバーを渡され、仮面ライダーになったんだ。」

でも、利用される偽りのヒーローだと俺も言われて、何のために戦うのかわからなくなった。けど、あいつが思い出してくれた」

戦う理由が見えなくなつて迷つていた時、万丈に言われたことが支えになつた。

『誰かの為に戦う！誰かの明日を守るために戦う！それが出来るのは葛城巧でも、佐藤太郎でもねえ！桐生戦兎だけだろうが！』

その言葉が、今も戦兎の心の支えとなつている。

「みんなを守つて明日を創つて、愛と平和のために戦う。例え、どれだけの人に嫌われても、存在を否定されても俺には戦うことでしかみんなを守ることができねえからな」

「嫌われても……否定されても……」

戦兎の言葉を聞いて、自分より高い存在だと実感する。

「俺は……情け無いです……みんなに殲滅や……これがみんなの意思だつて言われて……そのせいで仲間や……友達にも迷惑を掛けてるだつて……だから、俺はみんなの前から消えなきゃならないんだつて……」

あの時、一斉に殲滅と言われ、晴夜はどうすればいいのかわからなかつた。

ただ、周りの言葉に押しつぶされそうになつた。

「お前、本気でそう思つたのか？」

「えっ？」

「この写真からのお前とこの子と他の子達と一緒にいる時、みんないい笑顔で最高じゃねえか」

「・・・」

「それに、みんなお前が偽りだって最初に言われた時、冷たい視線を向けられたのか？」
「!?」

ある事を思い出した。初めてエボルトに偽りのヒーローだと言われた日のことを…

『叔父さんに、晴夜君は偽りじゃない、本物の正義のヒーローだってことを証明しよう！』

『マナ・・・ああ！今、最高にそう思っている！』

その時、彼女は——マナは自分を偽りじゃないって言ってくれた。

「(そうだ・・・偽りって事を知ってもみんなは俺と一緒にいてくれた・・・) バカだな・・・自分が知ってるものを信じられないなんて・・・」

晴夜は肝心なことを思い出し、癖で髪をかく。

「どうやら・・・答えが出たようだな」

「はい・・・戦兎さんに会えてよかったです。俺も・・・自分が信じなければものを信じますこれからも・・・」

晴夜の目を見て、もう大丈夫だなと感じた。

「そうか、ならこいつが必要だろ」

引き出しから何かを取り出し、それを晴夜に渡した。

それは、ビルドドライバーと色を取り戻したジーニアスポトルだった。

「ビルドドライバーにジーニアスポトル・・・」

「予備に作ったもう一台と、成分が抜けたジーニアスポトルに成分を戻しておいた。お前の自由に使え」

「いいんですか!?!」

「ああ、お前の守るべきものに使え。それと・・・これ!」

すると戦兎はもう二つ程、何か晴夜に渡す。

「これは・・・」

それは、黒色のウオッチのような形をしたデバイスだった。

「そいつは、お前に預ける」

「預けるって・・・」

何のためにも思うと戦兎が晴夜の肩に手を乗せる。

「それをいつか、ある奴に渡してくれないか?」

「誰にですか?」

戦兎は渡せと言うが、正直言つて誰に渡せばいいのかわからなかった。

「その時、こう伝えてくれないか？過去の俺によろしくなって」

「過去の戦兔さん……？」

「いづれ分かるよ」

すると戦兔のビルドフォンから着信音が流れた。

「万丈……どうした」

『戦兔！すぐ来てくれ！』

いきなりの万丈の電話に出ると、その後聞かれた内容に驚く。

「えっ？それ本当かよー！」

「どうしたんですか？」

その後、二人は万丈が指示した場所へとやってきた。それを見て晴夜は目を見開く。

「スマツシユ!?!」

それは何体ものスマツシユが町の中を大暴れしていた光景だった。既に万丈が一人でスマツシユと戦っていた。

「またか……」

「またって……新世界が出来たからもうスマツシユは作られなくなったんじゃないんですか？」

「正確にはそうだったんだが、最近になってクローンスマッシュが現れたんだ」

「誰かがまたスマッシュを開発したって事ですか？」

「おそろくな・・・手伝ってくれるか？」

「はい。泊めてもらった恩はここで返しますよ」

そう言うのと晴夜は戦兎の横に並ぶ。

「さあ、実験を始めようか？」

「同じこと言うのかよ」

二人が同じ決め台詞を言い、それを聞いた万丈が呆れると、三人はビルドドライバーを装着した。

『『ラビット！タンク！ベストマッチ！』』

『ウエイクアップ！クロードドラゴン！』

ドライバーにボトルを差し込み三人はドライバーのレバーを回し、スナップライドビルダーが出現、アーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身!!」

『鋼のムーンサルト ラビットタンク イェーイ!』』

『Wake up burning! Get CROSS—Z—DRAGON! Yea

h!』

構えて叫ぶ三人の体にアーマーが装着され、体から煙が吹き荒れる。

「しゃあ!」

「行きますか!」

「はい!」

三人は勢いよくスマッシュの方へと走り勢いよく向かっていく。三人はパンチやキックを繰り返し出し、スマッシュを攻撃する。

「まだいるな。なら、これで行くか?」

戦兎は違うボトルを見せると、こっちも違うボトルを見せる。

「俺も行きますよ」

『海賊! 電車! ベストマッチ!』

『忍者! コミック! ベストマッチ!』

二人が同時にボトルを差し替えレバーを回しランナファクトリーからアーマーが形成される。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

『定刻の叛逆者! カイゾクレッシャー! イエーイ!』

『忍びのエンターテイナー！ニンニンコミック！イエーイ！』

戦兎ビルドはカイゾクレッツシャー、暗夜ビルドはニンニンコミックへとフォームチェンジし、カイゾクハツシャー、四コマ忍法刀を持ちスマツシユに向かつていく。

『分身の術！』

ニンニンコミックフォームのビルドが分身し、スマツシユに四方から連想攻撃を繰り出した。

『各駅電車！急行電車！快速電車！海賊電車！…発車！』

スマツシユが弱つてる隙にカイゾクレッツシャーのビルドはカイゾクハツシャーを引き、エネルギー弾が三体のスマツシユに向けて放たれ破壊された。

「おおー！流石、ビルドが二人いると凄え・・・」

二人のビルドの息の合ったコンビネーションにクローズは驚く。

「まだまだいますね」

「じゃあ、次はこれだ！」

『ライオン！掃除機！ベストマッチ！』

『パンダー！ロケット！ベストマッチ！』

二人は再びボトルを差し替えてレバーを回し、スナップビルダーからアーマーが形成される。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

『たてがみサイクロン!ライオンクリーナー!イエーイ!』

『ぶっ飛びモノトーン!ロケットパンダ!イエーイ!』

今度は戦兔がライオンと掃除機のボトル成分を取り入れたライオンクリーナー、晴夜はロケットとパンダのボトルによるロケットパンダへとフォームチェンジした。

そして二人が同時にドライバーを回す。

『Ready go!』

まずはライオンクリーナーの吸引力によりスマッシュを引きつけさせ、ライオンの尻尾が捕獲した。そこへロケットパンダが放物線で囲い、スマッシュへと向かう。

『ボルテックファイニッシュ!』

二人の腕の爪がスマッシュに直撃し、こちらも撃破した。

「俺も負けてられねえ!」

クローズはビートクローザーを出現させ、ボトルを差し込む。

『スペシャルチューン!』

ボトルを差し込んだら、クローザーのグリップを二回引つ張る。

『ヒッパレ!ヒッパレ!ミリオンスラッシュ!』

ビートクローザーから出たエネルギーが残りのスマッシュを捉えて拘束した。

「行けえ！」

「行くぞ！晴夜！」

「はい！」

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

「勝利の法則は決まった!!」

二人はラビットタンクへと戻り、仮面の右のアンテナをなぞり上げながら右手を広げて、勝利の決め台詞を叫ぶとドライバーを回す。

『Ready go!』

二人のビルドから化学式の放物線が出現しスマッシュを挟む。そしてジャンプし、二人のビルドが図表に飛び乗るとスマッシュに向かって滑り降りてくる。

『ボルテックフィニッシュ！』

二人が同時に放ったボルテックフィニッシュが決まり、スマッシュは全て破壊した。それを確認し、三人は変身を解除した。

「どうやら、迷いは吹っ切れたようだな」

「はい、俺がやらないといけないことがわかりました」

すると晴夜のポケットが光りだし、それが何なのかを確認した。

「ロイヤルとシャドウのボトルが……」

それは、プロトジコチューの戦いで一度だけ使ったロイヤルとシャドウのボトルだった。

「そのボトル……」

「これは、俺の父さんが作ってくれたものなんです」

ロイヤルとシャドウのボトルは父が作ってくれたものだと言ふ話す。

このボトルは人の心……光と闇を表すものだということも。

「決心が出来たなら、早く元の世界に帰らねえとな……」

「あ、そういえば……でも、どうやって？」

その時、晴夜は肝心なことを思い出した。どうやって元の世界に戻ればいいのか考えてなかつた事を。

「私が連れて行こう」

そこに不気味なコートとハット、眼鏡をかけた年寄りの男性が現れた。

「あなたは……」

「私は鳴滝。はじめまして桐ヶ谷晴夜君、私は君の味方だ」

「味方……あなたが元の世界に連れてくれるんですか？」

「ああ、君は彼を倒す逸材になるかもしれないからね」

眼鏡とハットを身につけた男性——鳴滝が手を挙げると、目の前に灰色のカーテンが現れた。

「灰色のカーテン……士さんと同じ……」

「さあ、行くんだ。君がやらなければならぬ事のために、元の世界へ戻るんだ」

「戦兔さん！万丈さん！ありがとうございます！」

「あつ！ちよつと待つてくれ……」

晴夜は戦兔と万丈にお礼を言い、オーロラカーテンを潜つて自分の世界へ戻ろうとすると、戦兔に呼び止められる。

「えっ？どうしたんですか戦兔さ——」

「ほらよ！」

「ぶわっ!？」

晴夜は自身の顔に向かって投げ渡された布のような物を取つて見てみると、それはさつきまで戦兔が着ていた筈のベージュのトレンチコートだった。

「やるよそれ、結構似合うと思うぜ？」

「えっ、戦兔さん……でも、これって——」

「お前も俺と同じビルドなんだから、服装も一緒じゃないと、俺みたいなてえんさい科学者にはなれないぞ！」

「なーにがてえんさい科学者だよ、お前は只の自意識過剰でナルシストな科学バカだろ」
「うるさいよ！そういうお前は筋肉とプロテインだけが取り柄のバカの世界チャンピオンだろうが!!」

「バカの世界チャンピオンってなんだよ!?!どうせならボクシングの世界チャンピオンにしてくれよ!」

「そういう問題じゃないでしょ」

そんな戦兔と龍我の痴話喧嘩を側から見ていた晴夜は思わず笑みを浮かべると、そのトレンチコートを着てみる事にした。

「あの……どうですか?」

「ん?……おお!似合ってるじゃん!流石もう一人のビルド!」

「いや、確かに似合ってるけど、あのコートだとちよつとデカくねえか?サイズ合ってるから結構ぶかぶかだぞ」

「おいバカ!こう言う時はそういう事言うんじゃないよ!」

「あー!またバカって言った!バカって言う方がバカなんですー!!」

「そう言うお前はその三倍バカって言ったから、お前の方がバカなんですー!!」

一度止めた痴話喧嘩を再び始めながらも、晴夜はそんな二人は何処か楽しそうに見える、矢張りこれこそが二人が最高のコンビの証拠を表しているものだと言うのがわかる

気がした。

「それじゃあ……行つてきます！」

「ああ……頑張れよ！」

「向こうの敵と、ちゃんとケリつけろよ！」

「はい！お二人もお元気で！」

そのまま、鳴滝が作ったカーテンを潜り、晴夜は元の世界へ向かう。

晴夜の姿が見えなくなるとオーロラカーテンは消え、鳴滝の姿も無くなっていた。

「中々、根性もあるガキだったな」

「ああ、あいつなら絶対にやれる。そんな気がするな、俺は……」

「さつて、俺達もこれから頑張らねえとな」

「スマツシユが何処から現れたか、幻さんと調べねえとな」

そして二人は、これからやらなければならないことを始めるために、行動に出たのだった。

次回！Re. ドキドキ&サイエンス！last science！

第8話 帰還の天才少年

第8話 帰還の天才少年

晴夜がビルドの世界に行っている間。同じ時間帯、大使館に身を潜めていた和也達……

あれから丸一日経ったが、晴夜と龍牙から連絡はなかった。

「レジーナ……」

ベランダに居たレジーナが和也が声をかける。

「かずやん……」

「晴夜と龍牙が気になってるのか？」

「うん……全然連絡がないから……」

レジーナは、二人が無事か心配で落ち着かない様子だった。

「アタシ、何も出来ないな……いつも、マナや晴夜が助けてくれたから……」

敵だった自分を晴夜とマナは助けてくれた。そして、自分の父親を晴夜が救ってくれた事があった。それに自分も答えようとしたが、結局は……

「信じようぜ、あいつらならいつだってピンチを乗り越えていたろ」

「かずやん……そうね。アタシ達が信じないとね」

二人が話している、街の方から爆発音が聞こえた。

「なんだ……!」

「もしかして……」

「何かあった!」

「凄い音が聞こえたけど!」

めぐみやひめ達も爆発音が聞こえたのか、ベランダへ現れた。

「とにかく、行くぞ!」

急いで和也達は大使館を出て、爆発があった場所へと向かう。

それからしばらく経った後に、龍牙が大使館へと到着し扉を開ける。

「博士!」

「龍牙君、ダビィ、無事だったのか!」

「はあ、はあ、み、みんなは……」

「君が来る少し前に街の方で爆発があつてね」

「今、みんなそこに行つたところだよ」

ブルーとジョーは龍牙にみんなの向かつた先を教えた。

「そんな事より今まで、どこに行つたんだ?」

「後で話す……それより、博士あのドライバーあるか……」

龍牙が「あるドライバー」はあるかと拓人に尋ねる。

その頃、和也達はぴかりが丘の町の広場にやって来た。

「スマッシュ！」

町に着くとスマッシュが暴れていた。それを見てめぐみは皆んなに呼びかける。

「みんな行くよ！」

『ロボットゼリー！』

『デンジャー！クロコダイル！』

二人はドライバーにボトルを差し込み、レンチを下ろした。

「変身！」

「プリキュア！ドレスアップ！」

「プリキュア！くるりんミラーチェンジ！」

「プリキュア！きらりんスターシンフォニー！」

『流れる！潰れる！溢れ出る！ロボットイングリッド！ブラア！』

『割れる！食われる！砕け散る！クロコダイルインローグ！オラア！へキヤー！』

「運命を変える切り札！キュアジョーカー！」

「世界に広がるビッグな愛！キュアラブリー！」

「天空に舞う蒼き風！キュアプリンセス！」

「大地に実る命の光！キュアハニー！」

「夜空にきらめく希望の星！キュアフォーチュン！」

「ハピネス注入！」

「幸せチャージ！」

ハピネスチャージプリキュアはそれぞれ二人一組となって、声をそろえる。

「ハピネスチャージプリキュア！」

二人の仮面ライダーと五人のプリキュアが、現れたクローンスマッシュユへと向かっていく。

「ラプリービーム！」

ラプリーが目からビームを放ち、まずスマッシュユを破壊した。

「プリンセストルネード！」

「ドラゴンズウインド！」

ジョーカーとプリセスが猛烈な風と竜巻を起こしてスマッシュユをひるませる。

「リハビリには足んねえぞ！」

その隙にグリスがドライバーのレンチを下ろす。

『スクラップファイニッシュ！』

グリスの左右の肩のパーツから黒いヴァリアブルゼリーが発射され、ライダーキックの態勢に入る。

「オリヤヤヤヤヤヤ！」

グリスから放たれたライダーキックがスマッシュを破壊した。

「これで終わりです！」

『クラックアップフィニッシュュ！』

ローグもドライバーのレバーを下ろし、スマッシュへ飛んでスマッシュを挟み、全てスマッシュは破壊した。

「へエ〜意外ににやるもんだね」

スマッシュが破壊されると、そこに龍牙を倒したフェルノ・ユウヤが現れた。

「まあ、お前らを倒せば障害は消える」

『マックス！ハザードオン！』

ハザードトリガーを取り出しトリガーを起動させ、サソリ型のガジェットのスコーピオンガジェットが手に置かれた。

『バルロスコーピオン！』

ガジェットにボトルを差し込み、ドライバーのレバーを回す。

『Are you ready?』

ハザードライドビルダーが現れ、後ろから緑色のユニットが出現した。

「変身」

ビルダーが重なってハザードフォームへとなり、パルロスコーピオンアーマーが装着された。

『オーバーフロー！真緑の一撃！パルロスコーピオン！ヤベー！』

両腕のアームに鋭い爪・デスシザークローを持つ緑色の仮面ライダー、パルロがグリス達の前に現れた。

「あの時、仮面ライダー！」

「じゃあ、あいつが・・・」

「そう、マナ達を襲った仮面ライダー・・・」

「気をつけて下さい。奴は一人で全員を倒したんです」

パルロが現れ七人が構える。それを見たパルロが腕を上げると・・・

「先輩達！」

後ろからプリキュア5、ハートキャッチ、スイートそして、ドキドキプリキュアのメンバーが現れた。

「なんか、こっちに向かってくる感じだけど・・・」

「来るからにはこちらでも覚悟が必要だわ！」

「でも、先輩達と戦うなんて……」

「さあ、行けえ！」

パルロの指示でドキドキプリキュア以外のメンバーはハピネスチャージプリキュアと交戦に入る。

「みんな……あつー！」

グリスにキュアダイヤモンドとキュアロゼッタがグリスに襲いかかる。

「六花、ありす……やめてくれ！」

必死にグリスはダイヤモンドとロゼッタの攻撃を必死に受け流す。

「真琴さん、亜久里ちゃん……」

そしてローグ。こっちはソードとエースの連携に苦戦、いや攻撃出来なかった。彼はただ受け続ける事しか出来なかった。

「エースシヨット」

「うわあああああ！」

エースシヨットを至近距離で受け、ローグが変身解除してしまった。

「幻冬ー！」

それ見てグリスが二本のツインブレイカーにボトルを差し込む。

『『シングル！ツイン！』』

そしてグリスはツインブレイカーを放とうする。

「うっ！」

だが、彼には幼馴染のダイヤモンドとロゼッタにツインブレイカーを向けられなかった。

「ダイヤモンドシャワー」

「しまった！」

躊躇してしまった際にグリスの足が凍らされてしまった。

「ロゼッタリフレクション」

ロゼッタリフレクションが二つに割り、それを手に取り武器として振るい始め、グリスを攻撃し出した。

「あ・・・ああ・・・」

攻撃を受けたグリスも、かなりのダメージを受けた。

「かずやん！」

「幻冬君！」

「みんなやめて！」

ハピネスチャージプリキュアも訴えるが、やめるどころか更に激しく攻撃してくる。

「ビートソニック！」

「サンシャイン・ダイナマイト！」

「ミルキイローズ・ブリザード」

「一斉に技を放たれ、ハピネスチャージプリキュア全員に直撃した。」

「みんな！マナ！お願いもうやめて！」

「こつちもキュアハートに呼びかけるが、ハートはやめるどころかささらに攻撃を仕掛け、等々受けきれずジョーカーが飛ばされた。」

「レジーナ！大丈夫か！」

「龍牙!？」

そこへ間に合った龍牙が現れ、ジョーカーを助けた。

「龍牙……遅えぞ」

「悪い……真琴……」

「上城龍牙、やはり来たか」

パルロが龍牙の前へと現れた。

「パルロ……てめえを倒す。そうしねえと俺の気がすまねえ！」

「ふん！クローズドラゴンを失ったお前に何が残ってるんだ」

「まだ、俺にはこいつがある……」

龍牙は後ろから青いドライバー……スクラッシュユドライバーを見せる。

「スクラツシユドライバー……そんなで、俺に勝つてるのか？」

「……うるせえ！」

『スクラツシユドライバー！』

スクラツシユドライバーを装着し、ドラゴンスクラツシユゼリーを取り出して差し込んだ。

『ドラゴンゼリー！』

龍牙の周りに巨大なビーカー出現し、龍牙は高々と叫ぶ。

「変身！」

レンチを下ろすとセットしていた袋が潰れ、龍牙の周囲をビーカーが囲むと青い液体が注入され、ビーカーが割れて彼の姿が変わる。

『潰れる！流れる！溢れ出る！ドラゴンインクローズチャージ！ブラア！』

龍牙はスクラツシユドライバーで変身するフォーム、クローズチャージへと変身した。

「うおおおお！」

腕にツインブレイカーを装着し、そのままパル口に繰り出そうとする。だが、パルコの前にソードが立つ。

「真琴……くう！」

ビルドドライバーとハザードトリガーが奪われた、その事を聞いた一同は有り得ないって顔をした。

「あんた・・・許さない・・・」

ドラゴングレイブを強く握り、ジョーカーが怒りを感じた。

「なんで、そんな事するの!」

「何が目的なの!」

「話す必要はない」

ラブリーとプリンセスが何故なのか問うが、パルロは答えなかった。

「てめえ、許せねえ・・・晴夜を・・・」

クローズのその想い、他のみんなも同じ気持ちだ。

「ふん! 奴はドライバーもハザードトリガーも奪われた。さらに、今ここでお前達は俺に破れ・・・その時、奴が来た時、もう奴に何も残ってない! まあ、来るはずも無いけどな」

そう言ってドライバーとトリガーも奪われた晴夜が来るはずもないと嘲笑う。

「馬鹿か、お前・・・」

「何・・・」

「あいつは、絶対来る・・・必ずな!」

「ああ、その通りだ」

「あなたは桐ヶ谷晴夜を何もわかってない」

「晴夜に甘い考えは捨てなさい！」

一緒に戦ってきたクローズ達は、当然来ると信じていた。

「何故だ・・・あの偽物君が来るんだ？」

その考えに、パルロは理解できなかつた。当然である、何故なら…

「あいつが俺にとつて最高の相棒だからだよ！」

相棒だから絶対来るとクローズが答える。そう、彼らは理屈で信じているわけではない。

仮面ライダーの意味を勘違いしている・・・いや、そもそも仮面ライダーという名前の「真の意味」が分かってない、理解しようとしていない今のパルロには、一生理解出来ないであろう。

何故なら彼は仲間だから、己の信じた正義の為に戦つて来たから。そして、たとえ彼は自身の心が折れていたとしても、龍牙達は必ず立ち上がつて来るだろうと信じている。彼は、仲間達に心無い事を言われたから、裏切られたから、心が折れたからという事実だけで終わる人物ではない。そんな事実など、彼にとつては最早「廊下に落ちたゴミ屑」と同じくらい価値の無いものだ。

それが、今まで桐ヶ谷晴夜という人間が、桐ヶ谷晴夜という仮面ライダーが築き上げて来た、鉄よりも固い“信頼”だった。

すると……

「おいおい、滅茶苦茶おいしい所じゃねえか」

どこからか、聞き慣れた声が聞こえた。

「この声……」

「やっぱり……」

「来た!」

戦場の中、灰色のオーロラのようなカーテンが横切り、そこに一人の少年が姿を現わす。

「晴夜!」

「よう、帰って来たぜ」

ビルドの世界から答えを導き出した晴夜が戻ってきた。

「バカやろ……お前はいつも遅えんだよ!」

クローズは仮面の底で涙目が出て、晴夜が戻ってきたことに喜ぶ。

「晴夜!」

「来るならもつと早く来てよ!」

「ラブリー!プリセンス!久しぶり!」

晴夜はラブリーとプリセンスを見て久しぶりと言う。

「あの人が……」

「桐ヶ谷晴夜……」

初対面のハニーとフォーチュンは晴夜の登場に驚く。

「どうやら、無事に戻ってこれたな」

さらにそこへ、晴夜をビルドの世界へと送った張本人である門矢士も現れた。

「晴夜！」

そして一緒にいたシャルルが晴夜に飛びつく。

「シャルル。ごめん、心配かけたな。もう大丈夫」

大丈夫と言うと士が晴夜に近づく。

「もう一人のビルドには会えたか？」

「ええ、あの人のおかげで思い出しました俺が信じるものを……そして、覚悟も……」

「そうか……じゃあ、後は頑張りな。俺は見学させてもらう」

「そんな……戦わないシャルか？」

「安心しろ……奴の目を見ればわかる」

士は晴夜から離れ、戦いの見学を始める。晴夜はパル口達に体を向ける。

「パル口……伊能はどこだ？」

「偽物君に話すことはないよ。ビルドドライバも失った今のお前に勝ち目はない」

「どうかね……」

晴夜はパルロに、あつちの世界で貰ったビルドドライバを見せる。

「何……だが偽りの仮面ライダーが俺には勝てないんだよ」

パルロは自分には勝てないと言うが……

「わかつてねえな、お前じゃあ、こいつには勝てねえよ」

「なんだと……」

「なぜなら……こいつが仮面ライダーだからだ！」

クローズは晴夜を指を指し、こいつが仮面ライダーだから。パルロとは根本的に違う、真の仮面ライダーだからだと強く叫ぶ。

「こいつがベルトを巻いてるのはお前のように支配するためでも！誰かを屈服しようとするためじゃねえ！」

パルロと晴夜との違いを言い続ける。

「多くの人の希望を未来を創るためだ！誰かの為に戦う、誰でも手を差し伸べる！誰かの明日を守って明日を創る。それが出来る……仮面ライダービルド……桐ヶ谷晴夜だからだ！」

クローズが晴夜が何故ビルドドライバを巻き続けてきたのか、そのことを強く叫

ぶ。

すると、晴夜が自分の頭に手を当てる。

「はあく、最悪だ……毎度毎度、お前にさすられちゃうなんて……」

相変わらずこいつには、自分の心をさすられてしまう発言だと呟くと、晴夜が前に出た。

「パルロいや……フェルノ・ユウヤだっけ？お前、俺の事をわかってないから教えてやる」

「何……」

「俺は偽物じゃない……俺は、ナルシストで自意識過剰な正義のヒーローだってな！」

「……!？」

その言葉を後ろから聞いていたキュアハートが頭を抑えると、何かが頭の中から流れる。

『自意識過剰な正義のヒーローの復活だ!』

「晴……夜？」

彼女は自分の頭から流れる、目の前に居る桐ヶ谷晴夜が言った言葉が脳裏をよぎった事に、その言葉がどこか聞き覚えのある様な気がした事に違和感を抱いた。元論、パルロはその事実には気づいていない。

「どつちにしろ偽物だ！ここで倒す」

パルロが言うと後ろにいたプリキユア達が晴夜へと向かってくる。それを見て晴夜はビルドドライバーを装着し、顔から笑顔が溢れる。

「さあ、実験を始めようか？」

そう言うのと懐からボトルを、ラビットとタンクのボトルを取り出し、数回振り始めると後ろからいくつかの数式や化学式が現れ、キャップを回した。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

兎と戦車のシルエットが浮かび、『R/T』と表示された。そして、レバーを回してその後からビルダーが現れると、アーマーが形成された。

『Are you ready?』

その音声と共に晴夜は構える。

「変身！」

構えた後、両手を一度交差させてから広げると、アーマーが中央の晴夜に重なるように装着される。

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイー！』

赤い目からピンと兎の耳のような形状、青い目から戦車のような姿。

多くの人の明日を創り未来へと繋ぐ仮面ライダー・・・仮面ライダービルドへと変身

した。

「勝利の法則は、決まった！」

ビルドは右のアンテナをなぞり上げながら右手を広げて、決め台詞を言った。

「行けえ！」

パルロの指示でプリキュア達が一斉に襲いかかる。

「はっ！」

ビルドはラビットの脚力を活かし高くジャンプして躲し、タンクの足で地面を割りながら着地した。それを何度も繰り返す。

「逃げてばかりかい、偽物君」

「シューティング・スター」

キュアドリームが突進し、それを見てビルドはドリルクラッシュャーを出し防御した。そして、何人ものプリキュアに囲まれていた。

「終わりだ」

「たしかに・・・そうだね。残念だけど、今周りにいる皆さんは退場を願うよ」

「何・・・」

「周りを見ろよ」

ビルドの周りを囲っていた地面はヒビが入っていた。そして、先程ビルドが着地して

割れた地面が繋がった。

「ごめんね」

また、ビルドがラビットの脚力で高くジャンプした。そして、ヒビが繋がりがあった事で円状に地面が破壊され、落とし穴となった。

「バカな……」

「凄い……」

「さっきの逃げていたジャンプはこの為の布石だったのね」

さっきのジャンプはこの為の布石だった事にフオーチュン達は驚く。

だが、そこにクローズ達と戦闘していたダイヤモンド達四人がビルドへと向かってきた。

「エースショット」

エースショットがビルドに向けて放たれたが、ギリギリで躲した。

「みんな……ごめん」

四人から離れ、違う二本のボトルを取り出しドライバーに差し込む。

『オクトパス！ライト！ベストマッチ！』

ボトルを差し替えドライバーのレバーを回すと新たにビルダーが出現し、新たなアーマーが作られた。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

新たなアーマーが重なり、ビルドに装着され、音声が流れる。

『稲妻テクニシャン! オクトパスライト! イエーイ!』

タコと電球がモチーフのオクトパスライトへとフオームチェンジした。ビルドは右肩にあるタコの無数の足をムチのようにして使い、近づけないようにする。

その隙にドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

右側のアーマーから黒い墨が発射され、みんなの目をくらませる。

『ボルテックフィニッシュ!』

ダイヤモンド達が墨で周囲が見えずにいた隙に、先程用意した落とし穴へと落とす。

「貴様!」

今度はパルロがビルドに向かってきた。

「次はこいつだ!」

『ウルフ! スマホ! ベストマッチ!』

違うボトルを差し込みドライバーを回し、ビルダーから新たなアーマーが形成される。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

再び新たなアーマーがビルドへと装着された。

『つながる一匹狼! スマホウルフ! イエーイ!』

スマホとオオカミがモチーフで、左腕にはビルドフォンを模した『ビルドパッドシールド』という大型の盾を装備した、スマホウルフへとフォームチェンジした。

「じゃあ、これだ!」

『ビルドパッドシールド』から出現したアイコンを受けたパルロが後ずさる。

「無駄だ。ハザードトリガーを使ってる。俺のほうがハザードレベルは高い!」

パルロがドライバーのレバーを握り、思いっきり回す。

『Ready go!』

腕のPSデスシザークローが伸び、黒い強化剤によって力が蓄えられる。

『パルロスコーピオンアタック!』

パルロの腕のパーツから黒いエネルギーが放たれた。それと同時にビルドもドライバーのレバーを回す。

『ボルテックファイニッシュ!』

自身の周囲に映写したスマホのアイコンの中を狼の幻影に走らせ、パルロのエネルギー

ギー波を相殺した。

「貴様！」

「晴夜、これも使え！」

クローズが二本のフルボトルをビルドへ投げ渡した。

「サンキュー！」

そのボトルをドライバーを差し込む。

『ドラゴン！ ロック！ ベストマッチ！』

再びビルダーから新たなアーマーが形成されていく。

『Are you ready?』

「ビルドアップ！」

その掛け声とともにビルドに新たなアーマーが装着された。

『封印のファンタジスタ！ キードラゴン！ イエーイ！』

「よりによって、ベストマッチかよ！」

クローズは自分が渡したボトルがベストマッチだったことに驚く。

「くう！ キュアハート！」

危機を感じたパルロはキュアハートと呼びかけ、ガードベントしようとする。

だが、キュアハートは頭を抑えて動かなかった。

「何……」

『Ready go!』

よそ見をしている間にビルドがパルロを鎖で拘束し、右手から強力なエネルギーを溜める。

『ボルテックファイニッシュ!』

放たれた火炎弾がパルロに打ちかまされ、パルロを吹き飛ばした。

「馬鹿な……なぜ、こんなにも……」

まさかのバザードトリガーも無しで、己と渡り合うビルドのここまでの強さに驚く。

「知らないのか? ビルドドライバーの最大の特徴はハザードレベルじゃあ、測りきれない強さがあるって……」

「このことは、かつてエボルトに教わったことだ。」

「己……」

「これで、フィニッシュだ!」

一本のボトル缶を取り出し、数回振って缶を開けビルドドライバーに差し込む。

『ラビットタンクスパークリング!』

音声が届り響き、ドライバーのレバーを回し、前後からビルドマークのスナップライドビルダーが出現し、アーマーが形成された。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

アーマーがビルドの体に装着され、アーマーから無数の泡が弾け、音声が響く。

『シユワツと弾ける! ラビットタンクスパークリング! イエイ! イエイ!』

パンドラボックスの残留成分から作り出したフォーム、ラビットタンクスパークリングへとフォームチェンジした。

「ラビット・・・タンク・・・スパークリング・・・」

ハートはラビットタンクスパークリングを見て、また脳裏に何かがよぎった。

『おお! 成功だ! ラビットタンクがこのボトルの成分に合うんだな! サンキューマナ!』

その時、手を握られた事が頭からよぎる。

ビルドは左足から泡——『ラビットバブル』を噴出しながらエネルギーを溜め、そのまま一瞬のスピードでタンクの『インパクトバブル』をまとった右足がパル口に繰り出され、パル口はバランスを崩した。

「くう!」

「はあ!」

さらに左足に力を入れスピードを上げ、パル口を翻弄する。

「なぜ、押されるんだ……!」

スパークリングの圧倒的なスピードについていけていなかった。

「はああ!」

ビルドのRスパークリングブレードの大型のエネルギー斬撃を繰り出し、スピードでさらにパール口を圧倒し、次の斬撃で吹き飛ばした。

「なんで……なんで!」

押されているパール口からは焦りが見え始め、ビルドに殴りかかるがビルドはその拳を掴み握力を入れパール口の拳をどかす。

「言ったはずだ。勝利の法則は決まったって!」

ビルドがさらにキックを入れパール口を吹き飛ばす。そして、ドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

そのまま高く飛躍し、キックの態勢に入る。

『スパークリングフィニッシュ!』

「ハアアアアアアアア!!」

ビルドの右足が無数の泡を纏い、パール口にスパークリングフィニッシュを放つ。

「ぐううう……ぐわあああああ——!」

スパークリングファイニッシュを受けたバルロはかなりの深手を負い、強制変身解除された。

「バカな・・・ハザードトリガーを使ってないのにこの強さは・・・」

ビルドも着地するとドライバーをボトルが外し変身を解除した。

「これが、俺の・・・桐ヶ谷晴夜が導き出し答えだ！俺は迷わない！

例え、周りが・・・世界から否定されようとも俺は、俺は戦う！そして、お前達の計画を止める！そう、伊能に伝えとけ！」

そう叫ぶとハートが晴夜の前に現れた。

「行かせない・・・うっ！」

ユウヤを庇おうと前に出たハートだが、また頭を抑え出す。

「仮面ライダー・・・ビルド・・・晴夜は・・・あつ！」

「マナー！」

「どけ！」

晴夜がハートに近づこうとすると、ユウヤは起き上がりハートを退かし前に出た。

「桐ヶ谷晴夜！覚えてろ！上城龍牙の次はお前だ！」

晴夜に指を指し、龍牙の次に倒すと言う。

「残念だけど、お前じゃ龍牙を倒せないよ」

「ふざけるな・・・弱い負け犬が吠える偽物コンビが！」

偽物のコンビ、そう言われると晴夜が微笑する。

「ふふっ・・・」

「何がおかしい・・・」

「先から吠えてるの君だと思っよ。フェルノ・ユウヤ」

「なっ・・・くっっ！」

それを聞いたユウヤは動揺したのか、ビルドに受けた傷を押さえる。

「だせえな・・・」

「言い返す言葉が何も出ませんよ」

「あたしよりもメンタル弱いかも」

「言い返す言葉もないわね」

返す言葉もなくユウヤは晴夜から離れる。それを見て和也達も微笑する。

「・・・くそッ！行くぞ！」

ユウヤがブロスと同じネビュラスチームガンを周囲に放ち、プリキリア達と共に逃げ
ていった。

「大丈夫か？」

倒れていた龍牙に近づき、手を差し出す。

「おっ」

その手を掴み、龍牙は起き上がった。

「お前……なんか変わった？」

龍牙は今の晴夜を見て、着ているベージュのトレンチコート以外で何か変わったかと問う。

「そうか……ちよつと、会ってきた人がいるんだ」

「会ってきた？誰に？」

「いずれ話すよ。あつ！そうだ！」

晴夜があつちの世界で渡された、黒いウォッチのひとつを取り出した。

「これ」

それを龍牙へと渡した。

「なんだよこれ？」

「お土産」

何のことか龍牙は分からず、晴夜から貰ったウォッチを見つめる。

そこへ木の陰から、晴夜をこつちの世界へと戻した鳴滝が様子を見ていた。

「それでいい。桐ヶ谷晴夜」

「鳴滝……」

士が鳴滝に近く。

「デイケイド……」

「感謝するぜ、あいつをこっちの世界に戻してくれてよ」

「君に感謝してもらう必要はない……私は彼が君を倒せる逸材になると思ってたに過ぎん。これで失礼するよ。おのれ、デイケイド！」

オーロラカーテンが出現し、鳴滝は姿を消した。

「鳴滝……お前は何がしたい……」

すると、鳴滝が消えた途端、周りに凄い地震が起り出した。

「な、何この揺れ！」

「震度が強すぎる！」

「なんだよ！これ……」

「みんな、何かに掴んでしゃがめ！」

晴夜が言うとうみんな近くの椅子や柱に掴まり地震が治まるのを待つ。

「止まった……」

「なんなの、今の揺れ……」

「……ん？みなさん、何かこっちに来ますけど……」

幻冬がそう言つて全員振り向くと、一体のドローンが現れた。

「ドローン……」

ドローンが目の前で着地すると、ドローンから映像が流れた。

『やはり、現れたか桐ヶ谷晴夜君』

「伊能……」

そこから現れたのは、晴夜のビルドドライバーを奪い、仮面ライダーブラッドとなった伊能賢吾だった。

『明日、ここに来た前、そこで決着つけようじゃないか世界の命運を掛けて……このパンドラ城でだ！』

映像から、かつてエボルトが作り出したタワーの様な建設物を連想させる建物、パンドラ城の姿を見せる。先の揺れはこれを誕生したための揺れだった。

「パンドラ城……」

パンドラ城。そこが、ブラッドとの決戦の舞台であった。

次回予告！

ついに始まるパンドラ城での最終決戦……

グリス達は外でプロス兄弟率いるオールスターズを止めようと必死に奮戦する。

ラブリー「先輩達はみんな助ける……！」

グリス 「絶対ここから先は行かせねえ」

ローグ 「絶対に通させない！」

彼らは必死になって後を追わせないようにする。

そして、シーザスとゼブラのロストスマッシュへ戦う仮面ライダーデイケイド。

デイケイド 「ここから、あいつらの道は邪魔はさせない・・・」

晴夜と龍牙の進む道を守るために戦う。

そして、龍牙もキュアソードと戦う覚悟を決め、新たなガジェットを手に取る。

「・・・力を貸してくれ」

『ドラゴン！クリスタル！』

『クリア！』

『クリスタルクローズバースト！』

『Are you ready?』

「変身！」

『Burst up! GET CRYSTAL CROSS—Z—DRAGON! Ye

ah!』

新ガジェットによる新たなクローズが、キュアソードとパルロに挑む。

そして、晴夜も・・・

『ラビット！ロイヤル！ベストマッチ！』

『Are you ready?』

「変身！」

『光輝くスピーディウオリアー！ロイヤルラビット！イエーイ！』

新フォームとなったビルドが、キュアハートの暴走を止める。

そして、仮面ライダーブラットのいる最上階へ向かう。

そこで待ってる最後の決戦のために・・・

「さあ、最後の実験を始めようか・・・」

第9話 決戦前夜…それぞれの覚悟

ドキドキ&サイエンス!last science外
伝：プロジェクト・ビルド

「久しぶりだな、エボルト。調子はどうだ?」

その声が、俺が石動総一郎に憑依してから初めて聞いた、同胞の声だった。

「んっんっ……イマイチだな、まだこいつの体が馴染んでないからな」

「その調子だと、かなり調子が良い様だな……」

俺たちは今、パンドラボックスが封印されていた洞窟内にいる……えっ?今は伊能賢也だって?そいつの隣には仲間の……今は斗賀野光臣と岸波涼香だって?そうか。

まあ、俺たちはキュアエンプレス達との戦いで敗れたわけだが、何とか奴らから逃げて来れたこいつらと感動的な再会を楽しんだ。

「何言ってるやエボルト……今の俺たちの周りに、感動的な雰囲気の流れとるか?流れえへんやろ?何人間みたいな事言つとるんや」

「おいおいおいおいおい。光臣、こう言うのはいい雰囲気が一番なんだよ。折角の雰囲気を壊すなよ。」

「雰囲気も何も、私達にはそもそも人間の感情が無いんだから。それよりも早く帰らな

い？

「ここ土埃すごい立ってんだけど？」

「おいおい涼香…余韻ぐらいつかせてくれよ。一万年ぶりに外に出られたんだからよ。」

「そんなものよりも、今は俺たちの使命の方が大事だ。アンタの余韻とやりに付き合っている暇はない」

「オーマイガー、お前もかよ伊能。全く、仲間が冷たくて泣きそうだぜ。」

「まあ、こいつらの言う通り、さっさとここを出て俺のドライバーを取り戻さないとな。」

——トランプ王国滅亡まで、後4年。

「……何？しくじった？どう言う事だエボルト」

横浜のとある喫茶店、俺と伊能は顔を合わせていた。

「ああ俺とした事が、パンドラボックスを使ってトランプ王国に行こうとしたが、そんな時桐ヶ谷拓人と箱の取り合いになっちまってよく。そんな時にうっかりあの箱にあるワーブ機能を作動させちゃった。お陰で奴らは俺を置いて楽しい楽しい異世界旅行だ」

ぜ」

俺とした事があんなドジをこくとはな・・・ちよつとばかり油断しちまった。

しかも、そんな時に発生した光を偶然その研究所に居たガキ供が浴びちまった。幸い、そのガキ四人はその場に残り、パンドラボックスの光の影響で記憶は消えていたが、当分はトランプ王国に行けそうにないな：

まったく、こんな事なら東都科学研究所に持つて行かず、さつさと使うべきだったな。
「・・・まあ良い、こつちはこつちで何とかしてくるから、お前はお前のやるべき事をやれ」

「悪いなく今の俺には、お前達のようにトランプ王国を行き来出来ねえからなあ」

取り敢えず、パンドラボックスと俺が飛ばした細胞の一部の搜索はこいつらに任せるとして、俺は何をしようかな？

・・・よし、まずはあの光と、それを浴びたガキどもについて調べるか。

——トランプ王国滅亡まで、後4年。

「エボルト、お前に良い知らせと面倒くさい知らせがある」

おい伊能、良い知らせは兎も角、何だよ面倒くさい知らせって。

「・・・良い知らせから頼む」

「お前が飛ばした遺伝子を見つけた。それと、パンドラボックスからパネルを一枚取り出して持って来た」

伊能はそう言つて俺の目の前に風呂敷を取り出した。

俺がその風呂敷の中身を除くと、そこには土産屋に売つてある饅頭の箱、そしてその箱の下に緑のパネルが見えた。

「おおゝ悪いなあ。・・・さてと、面倒くさいお知らせを頼む」

「遺伝子がお前の記憶を無くしてトランプ王国のガキとして悠々と過ごしている。そしてパンドラボックスの力の殆どが抜き取られていた」

「フワアイジャパニーズピープル」

「誰が日本人だ」

さてと、冗談はさておき。伊能が渡してくれたタブレットの情報曰く、俺が封印される前に飛ばした俺の遺伝子生命体はトランプ王国の世界を周り、とある女に憑依した。

だが、その生命体はその女ではなく、体内にいた赤ん坊に憑依してしまった。

そいつが俺の遺伝子生命体である上城龍牙である。そして、そいつが生まれた時にその生命体は俺の力と記憶を失ってしまった。

そしてパンドラボックスについてだが、当時トランプ王国に飛ばされた拓人は、俺が

一部だけでも復活した事をその地に住む国王と話し、その国王の相談でアイツらが研究中だった「地球上のエレメントを取り入れたボトル」というものを応用して、俺の力をボトルに詰め込み、60本精製させたらしい。しかも肝心のボトルは、そのうちの数本は成分が抜けちまつてるときた。

「まったく面倒なことをしてくれたねえ、あのヤロー」

「それでどうする？何か考えているのか」

「まあ、無いでもないが」

あの後総一郎の記憶を覗いて調べてみると、拓人には二人の息子が居て、しかもそのうちの一人、桐ヶ谷巧は父親並みの天才らしい。そこで伊能と俺で何とか上手くまる込めて、俺たちの為に利用して貰おう。

「成る程、わかった。シナリオとしてはあの研究に残されていたそのパネルを使って研究をする、と言ったものにしておくか……俺は桐ヶ谷巧がそう行動するように促し、ボトルの成分を集めるための研究、ついでに俺たちの力になるシステムを作って貰おう」

伊能はそう言って喫茶店から出ていった。さてと、俺も行動するかくつと、そう言えば背中が痒いな。ん？なんか細長いのあるかな？無いなあ……誰も見てないよな？

「よつと、こうして、こうやってくつと出来た」

俺は持ってたタブレットを孫の手の様にして背中をかいた。あ、あ、く気持ちく。

——トランプ王国滅亡まで、後3年。

それから俺たちは、桐ヶ谷巧を利用して計画を進めた。

奴は良い様に動いてくれた。あれからあのパネル・・・ここではパンドラパネルと言おう。

パンドラパネルの力を使ってあのガス——今で言うネビュラガスを利用してボトルの成分を集める為、スマツシユという怪人を一度作つてからその怪人を倒し、それからボトルでその怪人の成分を吸収するという方法をとつた。その中で効率的にスマツシユにする為にスチームブレードというものを開発した。

ああ、それともう一つ。奴はスチームブレードと並行してトランスチームシステムを開発した。巧曰く、トランスチームシステムは防衛システムとして作つたと言つていた。まあ、あの後俺が良い様に使うんだけどな！

ちなみにトランスチームシステムは元々、アイツが開発していたカイザーシステムを元に行っているらしい。巧が言うには、二人の人間が合体することで強大な力を得るといふものだったが、人類には早すぎたという理由で開発を断念したらしい。

・・・カイザーシステムか。これは、利用できるな・・・

——トランプ王国滅亡まで、後2年。

伊能達が遂にエボルドライバーを見つけ、持って来てくれた。

だが、キュアエンプレス達の戦いで俺のドライバーは破損していた。仕方ないので俺は破損していたエボルドライバーの修理を巧に任した。

全く、人間ってのは本当に愚かだねえ。自分が直しているドライバーが地球滅亡のトリガーだと知らずにいるなんて。

このままエボルドライバーの修復を待つばかりである。

「・・・なくんて思っていた時期が、俺にもあったよ」

まず話さなきやならない事が、トランプ王国に飛ばされた拓人についてだ。

トランプ王国で新しいプリキュアの誕生の時、アン王女が一人では心配だと思い、奴に一人サポートできる者を付けたいと言ってきた。そう、それがライダーシステムだった。

完成させたライダーシステムを拓人は俺の遺伝子生命体である龍牙に託した。アイツは幼少の頃から新しいプリキュア、キュアソードの親友らしく、さらに奴の作ったガジェット「クローズドラゴン」が龍牙の心と同調した。

さて、ここで問題。このライダーシステム、元々はとあるアイテムを元に開発されたらしい。その元にされたアイテムというのがそう、俺のエボルドライダーである。

いや、この辺は別に良い。なんの問題もない。問題はここからだ。

その時、トランプ王国にいた拓人から送られたビルドドライバーとトランプ王国でのデータが送られた。

そのデータにはそのエボルドドライバーと俺の正体について記されており、このことで巧はすべてを知ってしまった。お陰でエボルドドライバーの修理は中断された。

そして真実を知った巧は、俺を倒そうと部屋に呼んだ。

「アンタと上城龍牙は、異世界の生命体エボルトなんだろ！この世界を滅ぼすのが目的だどー！」

「父親の送られた資料を読んだのか〜」

「アンタには、すっかり騙された！だから、こっちも手を打った！」

「それで、どうするつもりだ〜？」

「当然、アンタと上城龍牙の二人を倒す！」

巧がビルドドライバーを装着し、ゴリラボトルとダイヤモンドボトルを取り出し、差し込む。

『ゴリラ！ダイヤモンド！ベストマッチ！』

そのままレバーを操作し、音声流れ出した。

『Are you ready?』

「変身!!?」

巧が叫ぶが、当然ドライバーから何も出現しなかった。

「残念だったな、それは偽物だ」

「すり替えたのか!!?」

「人間ごときに、俺がやられるわけないだろ。お前が直してくれたエボルドライバーはどこにある?」

「誰が教えるか! お前の計画にこれ以上加担するつもりはない!」

「そうか、残念だが知られたからにはしょうがない。ふうん!」

「ガア!」

俺はブラッドスタークの腕から伸びたスティングヴァイパーで巧の胸を貫き、奴は倒れた。

「つたく、面倒な事させやがて、チャオ〜!」

俺はそう言って巧の部屋を後にした。

だが俺は知らなかった。俺がコイツの部屋を去って、伊能がエボルドライバーの場所を知り、殺す為に来るその間に巧は「ある細工」をしていたことを。

それについては、コイツを殺すことになった伊能さえ、知らなかった。

「……くそっ！こんなはずじゃあ……ッ！」

奴に胸を貫かれたが、僕はまだ生きている。

しかし、それを知った奴はエボルドライバーの場所を吐かせようとする為にまた来るだろう。ビルドドライバーが何処にあるかわからない以上、今の僕には戦う術がない。

だから僕は、体を捨てることにした。

僕は這いずりながら部屋にあったパソコンを立ち上げ、とあるプログラムを作ることにした。

このプログラムは賭けだ。エボルトがこのプログラムについてのフェイク情報を読み、ビルドドライバーの最終調整として、保険として前もって作っておいた僕の人格データプログラムを移植する様に仕向ける。

今、僕が行なっている作業は今の自分の記憶——エボルトの正体と上城龍牙の存在、エボルトにやられた事で僕が部屋に火を着けて自殺するという記憶のデータプログラムを研究所にあるパソコンに送る為のものだ。

もしかしたら、エボルトはこの最終調整と評した僕の人格プログラムを見つけない、見つけたとしても移植せずに削除するかも知れない。

それに、仮に移植したとしても僕は復活出来るのかは、今の僕にはわからない。

それでも、僕はいずれ復活出来ると信じて、記憶のデータを送り続ける。

そして、自身の最期の記憶データと、「エボルトを倒した後に、龍牙を倒す為にする筈だった最終調整」と書いたメモと言う名の遺言を研究所のパソコンに送り終えた僕は、途中まで修復したエボルトドライバーをどうするかを考えていると、研究仲間の伊能賢也が現れた。

「あつ……あああああつ！……伊能……」

彼の姿を見た僕は、すぐにエボルトドライバーの場所を書いたメモを渡す。

「そこに……エボルトドライバーがある……早く移送するんだ！」

伊能にエボルトドライバーを移送して欲しいと頼む。

——だがそれは間違いだったと、この後すぐに理解した。

「わかった……これでお前の役目も終わりだ」

伊能はそう告げて僕の肩を叩くと、手から炎が作られ部屋の中へと放つ。すると、部屋の中一帯が燃え上がる。

「伊能……まさか……君も……」

「ああ、俺もエボルトと同じブラッド帝国の生き残りだ……」

伊能は自分がエボルトと同じ生命体だと答える。

この時、僕は彼に裏切られたと察した。

「エボルドライバーの情報ありがとう。これまで、スマツシユの開発、カイザーシステムの詳細感謝してるよ。けど、これでさよならだ」

そのまま僕の部屋を出ると、さよならと告げて去っていった。

「もう……絶対……絶対に人を信じない！」

もう人を信じない、そう叫んだ僕は、奇しくも自殺する時に決めていた方法で死んでいった。

——僕の死に目を最期に見届けたのは、母親でも弟でも、ましてや父親でも無かった。僕はまだ起動中のパソコンのカメラに死に目を写されながら、この世から去っていくのだった。

——トランプ王国滅亡まで、後1年。

「……エボルト、何をしている」

「ん？……何って、ビルドドライバーの最終調整だけど？」

「それは見ればわかる。問題なのは何故それをお前が行なっているのか、と言う事だ」

なあくに、桐ヶ谷巧の後釜としてビルドドライバーを弟の桐ヶ谷晴夜に使わせようと

するついでに巧のパソコンを見ていたら、ドライバーの最終調整っていうのがあったから、お兄さんの代わりにやってやろうと思ったただけだ。

「最終調整? 何故それをお前と戦う前に組み込まなかった。怪しいと思わないのか?」

「んんん・・・まあ、多少はな? だがアイツが死んだ今、そんな事なんでも良いさ。安心しろ、コイツの最終調整程度で俺たちの計画は倒れないさ」

「だと良いんだが・・・」

「それよりも伊能! トランプ王国滅亡計画は順調か?」

「ああ、アン王女が不治の病に倒れ、絶望の淵に立たされた国王に王女を助ける方法を与えたら、まるで砂漠でオアシスを見つけたかのような顔になった。まあ、その方法というのがエターナルゴールデンスクラウンだとを教えたら、直ぐにその表情は消えたがな」

そりやそうだろう? 何せあの王冠は今や、プロトジコチューを閉じ込める為の錠前だからな」

もしあの王冠を使うってなったら、プロトジコチューの封印を解かなくちゃならねえからな」

「だがそれも時間の問題だ、直ぐにでも国王は封印を解く。というわけで、お前にはこれからトランプ王国に行つて貰う」

「りよーかい! ようやく龍牙と融合出来るのか? 楽しみだな」

そう言つて俺たちは、研究所から姿を消したのだった。

——トランプ王国滅亡まで、後1日。

「おお、アン！気が付いたか！」

「お父様……」

あの後、我々の予想通り。国王は王冠の知識を使い、アン王女の病を治した。そしてアン王女が意識を取り戻し、国王は嬉しそうな表情となつた。

——そろそろだな。

『聞こえたぞ……闇の鼓動を……自分勝手なよこしまな願い』

「誰だ!?」

突如聞こえた闇の声の囁きが、国王に迫る。

『最愛の娘を救うために禁忌を犯し、世界を破滅へと導く……!』

これぞまさに究極のジコチュー! 貴様こそ、私の器に相応しい!』

そして彼らの前に現れた闇が、国王を取り込んだ。

「お父様!」

「国王様、どうされました!」

る。

全く、何を怒ってんだよ。俺はただ、トランプ王国の住民をここの研究所から掻っ払ってきたパンドラボックスの力で好戦的にして、殺し合いをしてもらっただけだろ？
・・・もしかして、お前達の先輩をうっかり殺しちまったことを根に持つてんのか？
『人間つてのは愚かな生き物だよ。』

元々仲良く暮らしてきた国民達がこんな大惨事になった程度で恐怖の余り豹変し、自分だけは助かりたいと言う思いで醜い行動を取り、自らジコチューと化した。

そして救助活動とかに協力的だった国民達も、俺がちよいと好戦的にしただけで国民同士が疑心暗鬼になって、ジコチューになる前につて殺し合ったんだからなく』

「貴様アアアアア!!」

『まあまあ落ち着けよく地獄に行っても、あんな面白い殺戮ショーは見られねえぜ?』
「貴方の所為でしょうがッ!!」

あくあ、駄目だこりゃ。全然聞いてねえやコイツら。そう思った俺はスチームブレードのバルブを回して地面に向けて放った。

『アイススチーム!』

『よつと!』

「!?!」

すると地面が凍りつき、コイツらの足も凍っちまった。そう簡単には動けそうにないな。

「なに・・・これ！」

「くっ！うう・・・」

『さて、少しは落ち着いたか？』

「黙れツ!!」

あれま、足は凍つても、まだ頭は冷えてなかった様だな。

「殺してやる・・・お前を、絶対・・・殺してやるツ！」

『ほうく、威勢の良いこと言うねえく俺に一度も攻撃を当てられなかったお前がが？』

「うあああああああああああ!!!」

『煩い女だなくだがそれでも、俺を倒そうとする姿勢。お前の様な執念深い人間は嫌い

じゃねえぜ！フツハツハツハツハツハ!!』

俺はそう言いながらこの女の肩を叩き、慰めた。

「やめろ！その子に触るなツ！」

『ああくわかつたぜ。ホイ!』

あの女の言われた通り、俺はこの女から離れる。

するとどう言うことでしょうか！さつき俺が肩を好意的に叩いていた女が苦しんでい

るではないか!

「いぎやアアあああああああああああ
!!!??」

「ツ!?どうしたの!何があつたの!?!」

『なあくに、ちよいと強力な毒を打ち込んでやったただけだ。後数分でコイツは死ぬぜ?』
「なっ!?!」

『さてと、この毒は俺しか治せないがどうする?お願いしますって頼み込むか?それとも俺を倒して毒を消すか?勝てない相手を倒せる自信があるなら、受けて立つぞ?』
「ぐっ!.....うう」

血反吐を吐きながら苦しんでいるこの女にそう語りかけると、女は俺を睨みつける。
しかし、すぐに痛みと恐怖が湧き上がってきたのか、涙を流しながら何かを呟き出す。
「.....して下さい」

『んく?なんだつてく?聞こえないなく、言いたいことがあるなら、はつきり言いな』
「治して.....下さい.....私は、まだ死にたくない.....ッ!」
「えっ.....」

女は、家族の顔を思い出しているのか、それとも恋人の顔を思い出しているのか、屈辱的な顔でそう言つて命乞いしてきた。

その様子を見ていたら別の女も、予想外の答えに驚きを隠せないでいた。

『あれだけ他人を心配しといて、いざ自分の番が来たらやっぱり自分の命が惜しいか。

フツツ、やっぱり最高だよ！俺はお前の様な人間が大好きだ！』

そして俺は、この女にハグをした。それと同時に女の体が消え始める。

『・・・吐き気がするくらいにな』

「えっ？なんで？なんで、消えているの、私・・・」

『ああ、そうそう。言い忘れていたが、本当は数十秒で死ぬ毒なんだよ、俺が打ち込んだのつて。こりゃあ、もう間に合わねえなあ』

「そんな・・・いやだ、いやあああああああああああああああ………！！」

・・・さてと、女が一人消滅してようやく静かになったところだが、あつちの女はどうだ？

「どうして、どうしてあの子を、殺したの・・・」

残った女は、虚ろな顔でそう問いかけてきた。

『さあ？何でだろうな？』

「・・・あああああああああああああ！！！！」

っ?!おいマジかよ、コイツ気合だけで凍っていた地面を砕きやがった。正直びつくりだ。

「ハアアアアア!!」

『ぐお!?!』

しかもさつきよりもパワーが上がっていると来た。これは、ちよいと面倒だな。するとコイツはコミュニケーションってやつを操作すると、俺に手をかざして来た。

「プリキュア! グレイブインパクト!」

『グアああああアア!!』

すると予想以上の衝撃波が放たれ、俺は倒壊した建物に頭から突っ込んだ。

「はあ、はあ、はあ……これで……」

ブラットスタークが突っ込んでいった建物が崩れていくのを見届けた彼女は、二人のプリキュアの仇は取れたと思い、安堵の息を吐いた。

『終わりって言いたいのか? だとしたら、随分能天気だなあ〜』

「!?!」

だが、終わってなかった。彼女はすぐに周りを見渡すが、スタークの姿は見当たらない。い。

何処にいるんだと叫びながら探していると…

『こつちだ』

声が聞こえ、直ぐにそちらに顔を向けた。

——ドスッ

「・・・えっ」

しかし、彼女が気付いた時には、腹をスチームブレードで貫かれていた。

そしてそれを確認したスタークはスチームブレードを抜き、直ぐにプリキュアから離れた。

『あの程度でやられると思うなよ〜それじゃあ、俺は龍牙を探しに行くぜ。チャオ♪』

その言葉を最後に、スタークは彼女の元を去って行った。

——もうじき、目的の上城龍牙が来ることを知らずに。

——トランプ王国滅亡まで、後57分。

さてと、結論から言おう。トランプ王国は俺たちの予想通り滅亡した。

ただ、予想外なことに。あの後、予定通り龍牙と融合しようとしたが、奴のハザードレベルはまだ俺と融合できるほど無かった。だから、俺は奴を生かして成長するのを待った。

龍牙を伊能と斗賀野光臣に託した後、俺は桐ヶ谷晴夜を仮面ライダーにする計画を進めた。

それとエボルドライバーについてだが、やはりまだ俺のドライバーは未完成だった。

そんなわけでドライバーの修理は桐ヶ谷拓人に託す事にした。初めは拒否していたが、断つたら晴夜を始末すると話したらあっさり承諾した。

伊能は修理が終わつたら始末しろと言っていたが、俺にはまだそのつもりはない。アイツは裏切りの可能性を考えている様だが、そんな時はそんな時だ。裏切るまで使い潰してやるよ。

・・・そういえば、晴夜と拓人以外にもあの光を浴びて体質が変化し、ハザードレベルが常人よりも上がったガキが二人いたな。アイツらも仮面ライダーにするか？まあ、ゲームプレイヤーは多い方が燃えるから良いか！

それにしても、あの光がネビュラガスの様に人間の体質を変える力を持つてたなんて驚きだったなあ。名付けるなら、ネビュラ光線か？

「何だこれ・・・？」

俺は学校から帰って地下室に入ると、そこには謎のケースがあった。

ケースを開けてみると、そこには赤いボトルと青いボトル、大量の白いボトル、そして黒いナニカのデバイスがあった。

「これは・・・ん？」

それらを取り出すと、ケースの奥に何やら説明書らしきものも入っていた。

「何々・・・『プロジェクト・ビルド』？」

そこには興味深い内容が書かれていた。

このデバイスは『ビルドドライバー』という名前で、仮面ライダービルドに変身するのに必要な道具らしい。

変身時はビルドドライバーに2種類のフルボトルと呼ばれるアイテムを装填する。

フルボトルを振ることで内部の成分が活性化しより力を発揮する。

また、変身していない状態でも、活性化させて持つていればフルボトルの効果を使用することができる。

ボトルの特性に応じて各部の色や形状、装備を変化させる機能を備えているため、敵や状況に適したボトルを選択・使用することで戦いを有利に進められる。

また、最も相性の良いボトルの組み合わせは「ベストマッチ」と呼ばれており、ベストマッチフォームは最大限の戦闘能力を発揮する。

そして、ビルドが戦うのはスマッシュと呼ばれる怪物。

スマッシュの正体は、姿を変えられた人間。スマッシュを倒し、ボトルにスマッシュの成分を採取させると無事に元の人間の姿へと戻れる。吸収したボトルは浄化することによってビルドが使うアイテムになる。

そして説明書の最後にはQRコードが描かれており、俺はそれを読み込むと携帯に新

これから晴夜は、スマツシユだけでなくジコチユーとも戦い、ビルドを強化せざるを得ない状況に陥るだろう。嗚呼、楽しみだなあ
「さあ、プロジェクト・ビルドの始まりだ」

——地球殲滅まで、後9ヶ月。

完

第9話 決戦前夜：それぞれの覚悟

絶望の底から蘇り、新たな覚悟を決めた晴夜。桐生戦兔に託されたビルドドライバ―を持ちプリキユア達と戦う覚悟を決め、ビルドに変身し、仮面ライダーパルコを退けさせた。

その後、撤退したパルコはパンドラ城へと戻っていった。

パンドラ城、城内ではプロス兄弟と伊能達三人がいた。

「ああ、ビルドにコテンパにされたみたいやな・・・」

「うるさい！油断したただけだ！」

「でも、あなたはあの偽物君に負けた。本物の仮面ライダーが聞いて呆れるわね」

「くうー！」

斗賀野と岸波に痛いところを突かれ、ぐうの音も出なかった。

「しかも、ビルドはハザードトリガーも使わずにあなたに勝ったと・・・」

「大口叩いた割には、このザマとはな」

「うるさい！・・・次は勝つ・・・」

ユウヤはブロス兄弟にそう言い返し、次は勝つと宣言した。

「期待してるよ……パルロ。さって……」

伊能が椅子から立ち上がると外を見る。

「いよいよ仮面ライダーと残りプリキュアがここに来る。その為に万全の準備を取ろう。」

そして……世界の滅亡を始めよう。このパンドラボックスで！」

部屋の台座には、王国から奪ったパンドラボックスが置かれていた。

その頃、大使館へと戻った晴夜達は門矢士から伊能達の計画とその狙いを明かされた。

「世界の滅亡……」

「つまり、彼らは世界の滅亡を求めていると……」

「ああ、だいたいそんな感じだ」

士はコーヒーを手に取り、計画の内容を話している。

「だいたいって……なんかいい加減だな。あんたの説明」

「奴らの国は一万年前にあるきっかけで滅び、残った奴らは秘めた力を手に入れたときれている。」

それで世界を滅亡をさせる為に、色々企んでいるらしい」

「コーヒーが苦かったのか砂糖を入れ、話を続ける。」

「でも、どうやって世界の滅亡させるの?」

「パンドラボックスを使うんだとき」

「パンドラボックスを?」

「元々、パンドラボックスは奴らの国が作った物らしい。ニガツ・・・」

「パンドラボックスのことを話しながらコーヒーを啜ると苦いと呟き、またさらに砂糖を入れる。」

「奴らは箱の力を自由に使えるらしい、だが、実際にはまだそうするには時間がかかるらしい」

「つまり、まだその時までには、時間があるってこと・・・」

「まあ、そう言う事だ」

「その時が来るのはいつかね?」

「ブルーはいつ計画が始まり、世界の滅亡が始まるのかと尋ねる。」

「奴らの予定していた計画では、明日だとき」

「明日?」

「たった明日しかないの?」

「それで準備が完了するだとき」

明日と言うとみんな驚いてる中、門矢士は冷静にコーヒーを飲む。

「マジかよ……」

「明日……」

「そんな……先輩の皆さんは敵になっちゃうし……」

「戦力的にもこつちが不利……」

いおなの言う通り、数からしたらここにいるメンバーと門矢士を合わせても十人。

対して向こうはドキドキプリキュア以降のプリキュアオールスターが全て敵と言う、かなり不利な状況にある。

「あたしは諦めない！」

「めぐみ……」

「だって、先輩達も世界を救えるのも私達しかいない！それに、ここにいるみんなとやればいける気がする！」

だがそれでもめぐみは諦めず、ここにいるみんなとならいいけると言う。

「そうね。めぐみの言う通り」

「うん」

「確かに、ここでやらないと先輩の皆さんも世界を守れないわ」

ハピネスチャージプリキュアの四人は、明日の戦いの覚悟はあるようだ。

「和也さん」

「言わなくてもわかるさ。俺もマナや六花やありす、まこぴーも取り戻すさ」
「僕もです。亜久里ちゃんを絶対に！」

和也と幻冬も、不利とわかっていても戦う覚悟を決意した。

「・・・あれ？晴夜は？」

レジーナが辺りを見回すと、晴夜と龍牙がいないことが気づいた。

一方、大使館のとある部屋を研究室へと変え、晴夜は龍牙が貰ったと言うボトルを調べていた。

「なんか、わかったのか？」

龍牙が聞くと、晴夜が机に置かれたボトルを掴む。

「このボトルは、ハザードレベル7のボトルだ」

龍牙が海東から貰ったボトルはハザードレベル7のボトルであると言う。

「それって・・・俺達の龍と兎の・・・」

以前、何度か晴夜と龍牙のボトルが金色と銀色へと変わった現象、その時のボトルと同じだと言うことだ。

「ああ・・・けど、今の俺達のボトルはハザードレベル7には達成していない・・・」
ハザードレベル7ボトルは稀に起こる奇跡のボトル。だが今の二人のボトルはまだその域に達していない。

「もう一度・・・ハザードレベル7になれば事か・・・」

龍牙はかつて銀色になったドラゴンボトルを思い浮かべながら、まだ青いドラゴンボトルを見つめる。

「・・・とにかく、このボトルを最大限に生かす、クローズの新アイテムを作る」

「そんなの出来るのかよ・・・」

龍牙がそう言うのと晴夜はパソコンを操作し、新型ガジェット的设计図を見せる。

「クローズドラゴンをベースにした新ガジェット。これを開発する」

「・・・新しいドラゴン」

设计図を見る限り、クローズドラゴンとは形がかなり違う新ガジェットだった。

「なんとか明日までには、間に合わせる」

晴夜はすぐに作業にかかる。

「晴夜。その開発は私が引き受けよう」

そこへ拓人が現れ、新型ガジェットの開発を引き受けると言う。

「お前、明日のために体力を回復させることが大切だろ」

「でも……」

「今は、ゆっくり休みなさい」

「……わかったよ」

晴夜はそのまま椅子から離れ、部屋から出て行く。

「おい？どこ行くんだよ？」

龍牙も後を追うと、晴夜はそのまま大使館の外へと出て行く。

「おいってばー！」

「ちよつと行きたいところがあるんだ……後で戻ってくる」

晴夜はそう話すとビルドフォンを取り出し、ライオンボトルを差し込む。

『ビルドチェンジ！』

愛用のバイク『マシビルダー』を出現させると、そのまま乗り込み何処かへ走って

いていた。

「あいつ……」

「龍牙……晴夜どこ行つたの？」

エンジン音に気づき、レジーナも出てきた。

それから、マシビルダーを走らせると晴夜は大貝町へと到着し、いつもの場所へと

到着した。

「……ごめん……俺がまた、今回も引き起こして……」

「やっぱここか？」

すると声が聞こえ、晴夜は咄嗟に後ろを振り返る。

「龍牙……レジーナ」

「お前、いつも何があるところに来るような」

二人は、晴夜がここにいるのだとわかっていたようだ。

「あ……やっぱいいいな。ここから見える景色！」

龍牙が体を伸ばして呟く。

「何一人で謝ってんだよ……」

「……」

「今回の事件が自分のせいだと思ってるの……ふざけないで！」

レジーナは自分を責めている晴夜に、そう叫ぶ。

「こうなったのは、お前の所為じゃねえよ……あいつらが勝手にやってるだけで、それを俺達が止める。だろ？」

「龍牙……」

「お前、あの時……エボルトが最後に言ったこと、わすれてねえだろな？」

それは、二つの世界の裂け目で戦っていたエボルトと決戦…

『…新世界が出来ても、俺のような奴は消えないぞ…!』

あの戦いでエボルトは最期に、自分のような存在は消えない二人に向けて告げる。

『そんな時は、また戦ってやるよ!みんなを守るためにな!』

『ああ!俺たちは誰かの笑顔と明日を創る…仮面ライダーだ。』

例え、それが辛い道でも俺は…俺達はみんなを守り続ける!』

そう晴夜と龍牙は告げて、エボルトは『チャオ』と名残惜しそうに言いながら消滅していった。

「俺達はみんなの明日を創るために…プロトジコチューをエボルトを倒したじゃねえか…それは間違っていたと言うのかよ?」

「そうよ。晴夜がいなかったらパパだって助けられなかったわ」

二人に言われる。そのまま晴夜は前へと進み、手すりに手を置いて「はあく」と軽く溜息を吐く。

「最悪だ…」

口癖の最悪だと言う。これを聞いて二人が笑う。

「二人の言う通り、俺が仮面ライダーになったのは、エボルトや伊能達のおかげかもしれない……けど……」

晴夜はそう呟きながら、ラビットと坦克のボトルを取り出す。

「みんなの明日を守りたいって思いで俺は仮面ライダーになる事を決めたんだ」

あの日、叔父から……エボルトから渡されたドライバーを握った時から決めたんだ。「例え、偽りだとしても……この力で俺はみんなを元に戻す。だから、一緒に戦ってくれ」

「おお！」

「うん！」

二人が手を伸ばし重ねる。晴夜もその手に重ねる。

「お前ら覚悟は決まったか？」

覚悟が決まったかと後ろから門矢士が現れた。

「士さん……あなたに聞きたいことがあるんです」

それに気付いた晴夜が、士に聞きたいことがあると尋ねる。

「あなたは、この世界の人間じゃない……パラレルワールドから来た。違いますか？」

「なんだよ。アパレルワールドだって……」

アパレルワールドと言い、晴夜がガクツとなる。偶然にも、龍牙の言葉はあつちで万

丈が言っていたのとおんなじ台詞だった

「パラレルワールドよ」

「はあく……つたく」

やつぱり、まだまだバカだと思い、髪をかくとパラレルワールドについて話す。

「この世界には、パラレルワールド。平行世界と呼ばれるものがいくつかが存在している」

「平行世界？」

「例えば、俺や龍牙は出会ったこの世界があれば、中には俺や龍牙が出会うこともない世界もある」

「どういうことかわからねえ……」

晴夜の説明を聞いても龍牙とレジーナにはさっぱりわからなかった。

「その通りだ」

「マジ!?!」

「俺はこの世界の人間じゃない」

この世界の人間じゃないと聞き、二人は驚く。

「何故、そう思った」

「あなたが俺を別の世界に送れたのと、鳴滝って人からだいたいこの事を教えてもらいました」

「なるほど・・・ああ、俺は世界を自由に行くことができる」

「じゃあ、どうしてこの世界に二度も来たんですか？」

「最初にお前に会ったのはこれのためだ」

一枚のライダーの記されているカードを見せる。

「ビルド？」

そこに記されているのは仮面ライダービルドだった。

「そして、今回はこの世界を見定める必要があると思つてな」

「見定める・・・」

「ちよつと、なんであんたがそんなことする権利があるのよ！ジコチューなの！」

「だいたいあんた何者だよ？」

レジーナと龍牙がそう尋ねると、士はその問いに答える。

「俺か？俺は世界の破壊者だ」

「世界の・・・破壊者・・・」

「明日の戦いにお前らが負け、この世界が滅亡した時は、俺はこの世界を破壊する」

明日の戦いに晴夜達が負けければ世界を破壊すると言う。すると、晴夜が士に近づく。

「そんなことはさせません」

そんなことさせないと晴夜がホークガトリンガーを向ける。

「みんなの心を取り戻して、伊能達の計画を止める……そして、もしあんたがこの世界を破壊しようとした時は、俺があんたを倒す」

「ほう、おもしろい」

しかし、晴夜はすぐにホークガトリンガーを下ろす。

「けど、伊能達を止めるにはあなたの力も必要です。だから……明日の戦い手を貸して下さい」

「いいだろう。お前らの覚悟を見せてもらおうか」

「それに、あなたは世界を破壊しない」

「何故、そう思う？」

「あなたは通りすがりの仮面ライダーだから」

「……会えたか？もう一人のビルド……桐生戦兔に」

「ええ、会いましたよ。戦兔さんが俺が忘れかけていた事を……信じるものを思い出させてくれました」

「そうか」

「晴夜……」

士は今の晴夜を見て、自分よりでかく見えた気がした。一瞬だけだが。

「お前はどうか……こいつのように戦う覚悟は出来ているのか？」

「俺は・・・俺は・・・真琴とは・・・戦えねえかもしれねえ・・・」

だが龍牙は、真琴とは戦えないと言う。

「あいつは・・・俺にとつて晴夜と同じくらい大事な相棒なんだ・・・だから・・・」
「なら、お前の思いをぶつけて見ろよ」

迷いが見えていた龍牙に、士はそう伝える。

「思いを・・・」

「お前の伝えたい思いを、どうやったら伝わるのか考えたらどうだ？」

「俺の思い・・・」

「まあ、あとは自分で考えな。お前のやり方を見つけてな」

(俺のやり方・・・)

「そうすれば、意外と伝わるかもな」

士はそのまま一人で先に帰って行く。

それからしばらくし、晴夜達も大使館へと戻る。

そして、晴夜は拓人の元に現れ、手伝おうとした。

「父さん」

「休めと言つたら」

「明日まで時間がない。二人でやればすぐに出来るよ」

道具を取り、一緒にクローズの新アイテムを作る。

「それに、このガジェットに改良を加えたいんだ」

操作し、ガジェットの設計図から改良の部分を見せる。

「なるほど・・・確かにこれならボトルの力を限界まで引き出せる。

・・・だが、一か八かの勝負だぞ」

「龍牙ならこのクローズの新アイテムを使えるはずだ・・・俺はあいつの可能性を信じている」

このクローズの新アイテムは龍牙が使えると信じていると、晴夜は話を変える。

「ねえ・・・父さん。聞きたいことがある・・・どうして俺達は仮面ライダーになれたの？」

「何故・・・そんなことを・・・」

「もう一人のビルド・・・桐生戦兎さん達は、スマッシュの成分のネビュラガスによる人体実験で仮面ライダーになれたって言うんだ・・・」

「だから、もしかして俺達四人の体にも・・・ネビュラガスが・・・」

「それは違う」

かつてジコチューゲームの際にエポルトに言われた事と、戦兎の世界での話を聞いて

て、ネビュラガスが自分たちの体にあると晴夜が推測すると、拓人は人体実験とは違うという。

「晴夜・・・お前や巧、和也君、幻冬君が仮面ライダーなのは、人体実験を受けたからではない。」

パンドラボックスの光を浴びたからだ」

「えっ?」

「四年前の実験室で近くにいた君達四人はパンドラボックスの強烈な光を浴び、人間のハザードレベルがライダーシステムに順応出来るほどになったんだ」

あの事件に実験室の外にいた晴夜と兄の巧、そしてその時偶然、和也と幻冬もあそこになっていたと語る。

「じゃあ、四年前の実験場でのエボルトの事件があそこにいた。俺や兄さんだけでなく・・・和也や幻冬君を巻き込んだ」

「あの二人には、申し訳ないと思ってる・・・」

あの事故が息子だけでなく、和也と幻冬を巻き込んでしまった事を後悔していると：

「それは違うぜ。晴夜の親父さん」

「和也、幻冬君」

拓人は声が聞こえた方を向くと、ドアの入り口に和也と幻冬が立っていた。

「僕は仮面ライダーになれて良かったと思っと思っています」

幻冬がクロコダイルクラックボトルを取り出す。

「そりゃあ、戦いは辛いですけど・・・大切な人を守るためには、どうすればいいか学べたんです」

「俺は仮面ライダーになった事を宿命だと思ってる・・・」

「宿命・・・」

「最初は、なんでこんな力が俺にあるのかわからなかった・・・」

けど、幼馴染のあいつらと再会して、戦ってる事を知ってわかったんだ。

この日のためにこの力が来たんだってな・・・

だから、巻き込まれだなんて思ってたねえよ。寧ろ感謝してる」

「お前ら・・・」

二人が言うのと晴夜が引き出しを開け、そこから二つのアイテムを見せる。

「これ・・・」

それは、この前の事件の後、故障した筈のブリザードナツクルとプライムローグボトルだ。

「ブリザードナツクル」

「プライムローグボトル」

「これを渡す前に俺からの頼み聞いてくれるか・・・最後まで、一緒に戦ってくれ」
「当たり前だ！」

「覚悟は出来てます！」

二人は迷わず答え、ブリザードナックルとプライムローグボトルを掴む。

「みんなの笑顔を取り戻しましょう」

「LOVE&PEACEの為にもな」

「ああ！最高だ！」

「晴夜、時間もない。急いで完成させるぞ」

「うん！」

二人は急いでクローズの新アイテムの完成へと向かう。

そして翌朝、みんなが気持ちよく眠っていたその時・・・

〈ドカアーーーーン!!?〉

朝からお約束の爆発音が大使館中に響きわたる。

「な、何、何、爆発!?」

「桐ヶ谷君の部屋のところかよ！」

ひめ達は急いで晴夜がいる部屋に全員がやってくる。

部屋を見ると周りには数多くの方程式が書かれた紙が散らばっていきなり、そこに晴夜が立っていた。

「完成した！クローズのパワーアップアイテム！その名もくくくクリアドラゴンガジェット！」

クローズドラゴンと似た白いドラゴン型の新ガジェットを見せ、『クリアドラゴン』と名付けた。

「凄いでしょう！最高でしょう！天才でしょう！」

久しぶりにハイテンションでお決まりのフレーズを言う。

「久々に見たな・・・いつもの・・・」

「あれいつもやってるのか・・・？」

「何か完成するたびにやってるってマナから聞いたことあるけど・・・」

「テンションが昨日より数段上ねえ・・・」

「本当に科学バカだね・・・」

ひめは晴夜を見て科学バカと言うと、晴夜が龍牙に近寄る。

「龍牙」

そして、龍牙に新ガジェットを渡す。

「お待たせ」

「サンキュー」

受け取るとガジェットを見ると一つ気になった。

「ん？これ？ボトル二本させるのか？」

クローズドラゴンと違い、ボトルを差すスロットが一つじゃなく、二つになっていた。「ああ・・・お前が貰ったクリスタルボトルとドラゴンボトルがハザードレベル7に達したらな」

晴夜はクリスタルボトルを見せ、説明する。

「ハザードレベル7・・・」

龍牙はポケットからまだ青いドラゴンボトルを取り出して見る。

「それで変身出来れば、クローズマグマを超えるかもしれない・・・どうする？」
それを使うかどうか龍牙に尋ねる。

「・・・わかった。やってやるよ」

新ガジェットクリアドラゴンを使うことを決めた。

「じゃあ行こうか！みんなを助けに！」

『あああ!!？（うん!）』

みんな大使館を出て、決戦のパンドラ城へと向おうとする――

「待て」

——前に、士が龍牙に待てと言う。

「そのボトル。誰から貰った」

「ああ・・・海東つて奴が俺に・・・」

「海東だと・・・あいつここに来ているのか・・・」

海東の名前を聞いた士は、その人物に対する良い思い出がないのか、思わず顔を顰める。

「知り合いなんですか？」

「・・・ただのコソ泥だ」

「コソ泥？」

「どうでもいい。行くぞ」

士が行くぞと言うと、二人もつられて一緒に向かう。決戦の地へと・・・

朝日が天まで登った正午、パンドラ城に十人の戦士達が現れた。

そこへ一体のドローンが十人の前に現れた。

『来たね。諸君』

「伊能・・・」

そこからパンドラ城の中にある伊能の映像が流れる。

『ようこそ、パンドラ城へ。私はこのパンドラ城の最上階いる。ここまで来た前、そこで全て終わらせてあげよう。ただし・・・君達がここまで来ればだが・・・』

ドローンが高く上空すると、パンドラ城の入り口にはクローンスマツシュにガーディアン。そして、洗脳されたプリキュア、その先頭にブロス兄弟が立っていた。

晴夜達が来たのを確認した弟のライがネビュラスチームガンにギアエンジンを差し込む。

『ギアエンジン！ファンキー！』

今度は隣にいる兄のガイへとネビュラスチームガンを渡し、ガイはギアリモコンを差し込む。

『ギアリモコン！ファンキー！』

「潤動!!？」

二人が同時に叫ぶと黒い霧が二人を包み込み、周りにギアが現れると二人に向かう。

『エンジンランニングギア！』

『リモートコントロールギア！』

二人はエンジンブロス、リモコンブロスへと姿を変える。

それを見て十人は自分の変身アイテムを取り出す。

『ラビット！タンク！ベストマツチ！』

『DECAD E!』

「運命を変える切り札！キュアジョーカー！」

「世界に広がるビッグな愛！キュアラブリー！」

「天空に舞う蒼き風！キュアプリンセス！」

「大地に実る命の光！キュアハニー！」

「夜空にきらめく希望の星！キュアフォーチュン！」

「ハピネス注入！」

「幸せチャージ！」

「ハピネスチャージプリキュア！」

全員が変身を完了し、並び立った。

『やれ』

伊能の命令と共に、スマッシュとガーディアン、プリキュア達、プロス達が一斉にビルド達に向かって襲いかかる。

「行くぞー！」

そして、ビルドの掛け声とともに全員が走っていく。

——今、最後の決戦の鐘が鳴る。

次回！ Re. ドキドキ&サイエンス！ Last science！
第10話 引き裂かれるコンビ：ビルドVスクロース

第10話 引き裂かれるコンビ…ビルドVSクローズ

ついに始まったパンドラ城で行われる最後の決戦。五人の仮面ライダーと五人のプリキユアがまさに世界の命運をかけて戦っていた。目指すは、全ての元凶である。

仮面ライダーブラッドを倒すため、パンドラ城の中へ入ろうと外の敵を応戦していた。

「はあーヤアー！」

ビルドは向かってくるクロインスマッシュやガーディアンをドリルクラッシュャーで迎え撃つと、一度、距離を取る。

『タカ！ガトリング！ベストマッチ！』

タカとガトリングのボトルを取り出しキャップを回すとドライバーに差し込む。

「ビルドアップ！」

『天空の暴れん坊！ホークガトリング！イエーイ！』

『ホークガトリングガー！』

ホークガトリングへとフォームチェンジを完了し、ホークガトリングガーを出現させ、翼を広げ高く飛び上がる。

ビルドは翼で飛びながら地上のスマッシュを放ちつつける。

「ハア！」

すると、宙を飛べるスマッシュがビルドに向かってくる。

『テン！トウエンティ！サーティ！フォーティ！ファイフティ！シックスティ！セブンティ！エイティ！ナインティ！ワンハンドレッド！』

空中でホークガトリンガーのシリンダーを回すと、ビルドの宙の周囲が球体のフィールドが形成され、スマッシュをその中におびき寄せる。

『フルバレット！』

ホークガトリンガーの百発の攻撃がフィールドの内に繰り出され、スマッシュを全て破壊した。

そして、クローズとグリスマも二人で応戦している。

『シングル！シングルフィンッシュ！』

二人のツインブレイカーが放たれた砲撃がガーディアンを怯ませる。

『シングル！ツイン！』

今度はクローズが二本のボトルを差し込むとガーディアンへ走っていく。

『ツインブレイク！』

「オラアアアアアアアア！」

ツインブレイカーでガーディアン達を頭上へと上げる。

「かずやん！」

「おお！」

『デイスチャージボトル！潰れない！チャージクラッシュ！』

クマボトルの力によりグリスの手が巨大なクマの手となった。

「くらえ！」

巨大なクマの手の攻撃が、ガーディアンを両手で挟みガーディアンが爆破した。

「しゃあ！」

「この調子で行くぜ！」

二人は更にスマッシュやガーディアンへと向かっていく。

そして、ローグとジョーカーも・・・

「こんな所で、足止めされてたまるか！」

「みんながアタシを助けてくれたように、今度はアタシがみんなを助ける！」

ジョーカーがミラクルドラゴングレイブの矛先を向ける。

「プリキュア！ドラゴンズウインド！」

巨大な竜巻を生み出し、スマッシュ達の動きを封じる。

『クロコダイル！ファンキーショット！』

トドメにローグが「ファンキーショット」を放ち、スマッシュを撃破する。

「先輩達を利用して世界を滅亡だなんてさせない！」

「ラブリー！パンチングパンチ！」

そしてラブリーがパンチングパンチを連続で繰り出して怯ませた所に、拳から一撃を放ちスマッシュを爆破させる。

「プリンセスカッター！」

今度はプリンセスがプリンセスカッターを放ち、スマッシュとガーディアンを斬り裂く。

「フォーチュン！スターバースト！」

フォーチュンが手のひらから星形のエネルギー弾を放つ。

『ATTACK RIDE！BLAST！』

ディケイドはブツカーをガンモードと変え、銃口を分身し発射されると、弾丸のエネルギー弾の掃射を浴びせてスマッシュを破壊した。

すると、後ろからガーディアンが不意打ちで砲撃を放つ。

「ちっ、面倒な奴らだな」

『ATTACK RIDE！SLASH！』

今度はソードモードへ変わり。刀身にエネルギーを纏わせると分身し、一振り回数太

刀の斬撃を浴びせ撃破した。

「やはり、スマッシュやガーディアンでは、無理なようですね」

「やっぱ、あいつらの方がいいか」

すると、ブロス兄弟の後ろから何十人もの黒い影が現れた。

「やっぱ来たか……」

「みんな……」

それは黒い色へと変わったプリキユアオールスターズだった。

「六花、ありす……」

「亜久里ちゃん……」

「先輩……」

「やるしかないの……」

「でも……」

「やっぱり……」

「おい、来るぞ」

『!?』

グリスやログ、ラブリー達が戦いたくないと思っているとデイケイドに声をかけられ、一斉に向かってきた。

「サニーファイア」

「ファイアストライク」

最初はビルドにサニー、ルージュの二人が攻撃を仕掛ける。

『ハリネズミ！消防車！ベストマッチ！』

「ビルドアップ！」

『レスキュー剣山！ファイヤーヘッジホッグ！イエーイ！』

二人の炎の攻撃を見て、ファイヤーヘッジホッグと変わった。

「炎のなら、消化だ」

消防車のアーマーの左腕のホースを発射し、二人の技を消化すると、ボトルを取り替える。

『ローズ！ヘリコプター！ベストマッチ！』

『Are you ready?』

「ビルドアップ！」

『情熱の扇風機！ローズコプター！イエーイ！』

新たなアーマーが装着されてローズコプターとなり、背面から取り外したバトローターブレードを掌に装備すると、ドライバーのレバーを回す。

『Ready goo!』

レバーを回し終わるとバトローターブレードが回転する。

『ボルテックファイニッシュュ!』

そのまま突撃しようとする。しかし、ロゼッタ、ミントがバリアを作りビルドの攻撃を跳ね返す。

「なら、これで!」

『トラ! UFO! ベストマッチ!』

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

『未確認ジャングルハンター! トラユーフォー! イエーイ!』

今度はトラとUFOがモチーフとなったトラユーフォーとなり、再びドライバーのレバーを握る。

『Ready go!』

『ボルテックファイニッシュュ!』

巨大なUFO型のエネルギーを出現させ、UFOに乗ったまま突撃し、バリアを破壊し地面へ着地した。

しかし、今度はアクア・ベリー・ビューティ・ダイヤモンドの四人がビルドを囲んでいた。

「サファイアアロー」

「エスポワールシャワー」

「ビュートイーブリザード」

「トウインクルダイヤモンド!」

四人が同時にビルドに向かって技を放つ。

『クジラ! ジェット! ベストマッチ!』

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

『天駆けるビッグウェーブ! クジラジェット! イエーイ!』

今度はクジラジェットとなり、地面へ向かって腕を叩いて水の障壁を作り、四人の技を無効化した。しかし、それでもビルドの周りは彼女達に囲まれてしまう。

「仕方ない・・・」

ラビットタンクスパークリングを取り出して数回振り、缶のプルタブを開けるとビルドドライバーに差し込む。

『ラビットタンクスパークリング!』

音声で鳴り響き、ドライバーのレバーを回し、前後からランナーが現れビルドマークのスナップライドビルダーが出現し、アーマーが形成された。

『Are you ready?』

「ビルドアツプ！」

ビルドの体にアーマーが装着され、無数の泡が弾けると、音声が響く。

『シユワツと弾ける！ラビットタンクスパークリング！イエー！イエー！』

スパークリングへとフォームチェンジし、カイゾクハツシャヤを手に持ちビルドが構える。

その一方、ディケイドが初代プリキュアのブラックとホワイトと交戦していた。

「ほお〜こいつらが初代プリキュアか〜」

ディケイドがブラックのホワイトの攻撃を避けるとカードを取り出す。

「なら、これで行くか」

『KAMEN RIDER! KUGA!』

「なんだよ・・・あれ・・・」

「他のライダーに変わった・・・」

赤いライダーで、古代の力を使い戦う仮面ライダークウガとなるのを見て、別の姿となったディケイドにビルド以外全員が驚く。

「初代には、初代の力ってな〜」

そう言っているとブラックとホワイトがクウガとなったディケイドに襲いかかってき

た。

しかしデイケイドは簡単に躲す。

「やはり、操られているならこの程度か……」

二人の攻撃を避けると新たなカードをいれる。

『FORM RIDE! KUGA RISING!』

するとデイケイドは、マイティフォームの強化した姿『ライジングマイティフォーム』となった。

『FINAL ATTACK RIDE! KU KU KU KUGA!』

「ダアアアアア!」

ブラックとホワイトに力を溜めた右足でカウンターキックを放ち、二人を吹き飛ばした。

「ハアアアアア!」

今度はブルームとイーグレットがクウガに向かってダブルキックを放とうとしたが、ギリギリで躲しした。

「次は2世代目か、ならこっちは……」

また違うカードを取り出しドライバーに差し込む。

『KAMEN RIDE! AGITO!』

「また、変わった……」

「なんでもありなの……」

今度はクウガとは少し似た金色のライダー、仮面ライダーアギトへとなり、ブルームとイーグレットに応戦する。

ビルドがカイズクハツシャーを振り回し、寄せ付けないようにする。

「やつぱり、スパークリングじゃあこの数はきついかな……」

ハザードトリガーがないからラビットラビットとタンクタンクは使えない。それにスパークリングだと決定打がない。そんなことを考えていると、後ろからピーチ、ブロスラム、メロディ、ハッピーの四人が不意打ちを受ける。

「うわあー！」

攻撃を受けビルドが倒れる。それを好機にプリキュア達は、さらにビルドに攻撃を仕掛ける。

「!?」

『隠れ身の術!』

その時、周囲の煙幕がビルドを隠すと、一つの影がビルドを守った。

「ツ!? 父さん!」

守ったのは、ニンニンコミックフォームのビルドへ変身した父・拓人のビルドだった。

「晴夜！ここは私達に任せ、お前は行くんだ！」

「でも……」

すると、さらに黒いコウモリの姿をした人物が四人に突撃し、ビルドから遠ざける。

「お前は……」

「ナイトローグ……」

それは、かつて敵として現れたナイトローグだった。

「誰が……」

クローズは、誰が変身しているのかと考え込む。

「久しぶりだね。晴夜、龍牙君」

「その声……」

「もしかして……石動叔父さん」

ナイトローグから聞こえたのは、エボルトに体に乗っ取られていた叔父の石動総一郎の声だった。

「あんたが、なんで……」

あのエボルトとの戦いの後、目を覚ましたと聞いていたが、正直ここに来たのは驚いた。

「……俺には、お前達に謝らなければならない」

「え？」

その言葉を聞いたビルドとクローズは何故かと思った。

「エボルトに支配されていたとは言え、君達二人を利用した…だから、ここで君達二人の役に立ちたいんだ」

「・・・叔父さん」

「さあ、行くんだ！」

ビルド（拓人）とナイトログが二人を守ろうと前が出る。

「ありがとう」

ビルドが起き上がると城への扉へと走る。

「行くぞ、龍牙」

「おお！」

ビルドとクローズの二人が先へと走り出す。

「行かせない」

「六花！」

ダイヤモンドがビルドとクローズを追いかけ殴りかかろうとする。

すると、ダイヤモンドの前にまた誰かが現れた。

「お前は・・・」

「よう、久しぶりだな」

「イーラー！」

現れたのはかつてビルド達の敵として何度も戦ったジコチューのイーラーだった。

「てめえ、なんで……」

「まさか……あんた……」

また、誰かをジコチューにしに来たか、それともブラットに手を貸していると全員が警戒する。すると、イーラーはダイヤモンドの方を振り向く。

「こいつには、借りがあるから早く行け」

「えっ?」

なんと、ビルドと戦うのではなくダイヤモンドと戦おうとする。すると、イーラーは何かを取り出した。

「お前それ……?」

「ああ!それ、アタシの!」

それはかつてキュアジョーカーになる前までにレジーナが使っていた二つ目のエポルドドライバーだった。

『エポルドドライバー!』

そのエポルドドライバーを自分の腰へと装着した。

『コウモリ！発動機！エボルマツチ！』

ボトルを二本差し込むと、レバーを操作し、ドライバーから無数のパイプ線——ペインライドビルダーが現れた。

『Are you ready?』

「変身！」

イーラの体にパイプ線が一瞬に集まり、姿を変える。

『バットエンジン！フツハハハハハハハハハハハハハハハハ！』

そしてイーラは、紫・白・黒の3色。額のコウモリ状の角や胸・肩より煙突の如く伸びるパイプなど、ナイトローグを彷彿とさせる意匠が各部に見られる姿・・・仮面ライダーマッドローグに変身した。

「マッドローグ・・・」

「早く行けえ。後、手を貸してやるのは今だけだ」

「サンキューな」

「ふん！」

「邪魔よ」

だが、ダイヤモンドはすかさずビルドに向かっていく。だが、マッドローグがダイヤモンドの拳を掴む。

「お前の相手は僕だ」

マッドローグはダイヤモンドを止め、ビルドから離す。

二人はそれを見て、急いで城への扉へと走り出す。それを見たエンジンブロスがスチームブレードを持って、ビルドとクローズに振りかかる。

「させるか！」

グリスのツインブレイカーが攻撃の盾となった。

「晴夜！龍牙！お前は中に行け！」

「かずやん！」

「先輩達は私達が止めるから晴夜と龍牙は早く！」

「けど、この数は……」

「あなたが早く倒せばそれだけ、こっちも早く終わるの！」

「だから、早く中へ入って！」

「私達だって、ただじゃあ、やられないわ！」

ハピネスチャージプリキュアがオールスターズのみんなを足止めし、二人を行かせようとする。

それを見てグリスがエンジンブロスを振り払う。そして、ドライバーのレンチを下ろす。

『スクラップファイニッシュ！』

肩パーツから放たれエネルギー液が防壁となり二人の道を作る。

「今だ！」

「早く行ってください！」

「晴夜！龍牙！行って！」

ローグとジョーカーがリモコンブロスとエンジンブロスを抑える。

「わかった」

「頼むぞ！」

二人は急いで扉の前へと走る。

「土さん！来てください！」

「やれやれ、しょうがないな！」

ダイケイドも戦闘していた相手を振り払い、二人と共に扉へと向かう。

「扉があるぞ！」

「強行突破だ！」

ビルドはスパークリングを外し、ボトルを差し替える。

『ゴリラ！ダイヤモンド！ベストマッチ！』

「ビルドアッブ！」

『輝きのデストロイヤー！ゴリラモンド！イエーイー！』

ゴリラモンドへとなり、ドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

『ボルテックファイニッシュ！イエーイー！』

ダイヤモンドを作り、サドンデストロイヤーでダイヤモンドを砕くとチリとして放ち、扉へ攻撃すると最後にゴリラの腕で扉を壊す。

「行くぞ！」

三人は城の中への潜入に成功した。

「逃すか！」

「オラア！ここから先は行かせねえ！」

グリスがエンジンブロスに後を追わせようにする。

「ライ！邪魔を——！」

「ハア！」

ローグがスチームブレードを振るい、リモコンブロスの前に出る。

「あなた達の相手は晴夜さんや龍牙さんじゃなく、僕達です」

「ラブリー達はみんなを頼む」

「こいつらは僕達に！」

「この前の借りを返すわ！」

「わかった！」

「二人共負けないで！」

ハピネスチャージプリキュアはプリキュアオールスターズを抑えに向かい、三人にブルース兄弟を任せろ。

「邪魔すんなよ！負け犬の仮面ライダーが！」

「こんな間の俺達とは一味違うぞ！コラッ！」

「ほう、では見せてもらいましょうか？」

「ここで、貴方達と決着をつけます！」

「行くぜ、幻冬、レジーナ」

「もちろん。いつでも！」

「うん。いいよ！」

三人がブルース兄弟との戦いが始まる。

そして、現在、城の中では外と同じようにスマッシュやガーディアンが妨害として出現していた。

『各駅電車、急行電車、快速電車、海賊電車——発車！』

カイゾクレツシヤーへとフォームチェンジしたビルドがカイゾクハツシヤーを放ち、スマツシユを爆破した。

『スクラツプブレイク!』

ツインブレイカーに蓄積したエネルギーを解放し、ガーディアンを倒す。とりあえず一通り倒すと三人は変身を解除する。

「ここが、パンドラ城の中か……」

「なんか、前にエボルトが作った遺跡と似てるな……」

以前にもエボルトが作った遺跡のような感じに似ていた。

「土さん。伊能はどこにいるんですか……」

「おそらく、この城の一番広い部屋……王の部屋って所だな……」

おそらくそこに居ると言い、とりあえずそこへと向かう。

「とにかく、時間がない。早く上に行こう」

晴夜が上へと続く階段へと向かう。

「おい!待ってよ……あん?」

すると、龍牙が何かの機械を発見した。その機械にはエネルギーが溜まっており、今にも放たれようとしていた。

「ツ!??晴夜!危ねえ!」

「えっ!? うわあ!」

晴夜に光線が放たれたのを見て龍牙が晴夜を押し、代わりに光線を受けてしまう。

「ぐわああああ!」

「龍牙!」

晴夜はすぐに起き上がり、龍牙に駆け寄ると光線を放つのが終わった。

「・・・」

「龍牙・・・大丈夫・・・ぐう!」

いきなり、龍牙が晴夜を殴り飛ばした。

「ビルド・・・殲滅・・・」

すると、龍牙の瞳が赤い色へと変わった。

「どうやら、さっきの光線を受けた影響だろ」

「そんな・・・」

自分の所為で龍牙はと思い込む。

その様子を伊能が見ていた。

「やはり、まだ体の中に眠るエボルトの遺伝子に反応したか。計算通りだ」

あの攻撃は最初から晴夜ではなく、龍牙を狙いエボルトの遺伝子に反応させるのが狙

이었다。

「龍牙！おい！目覚ませ！」

晴夜が叫ぶがm聞こえてる感じはなかった。

『さあ、戦え、クローズ！』

伊能のその声が聞こえたのか、龍牙はスクラツシユドライバーを取り出す。

『スクラツシユドライバー！』

スクラツシユドライバーを装着し、ドラゴンスクラツシユゼリーを取り出し差し込んだ。

『ドラゴンゼリー！』

龍牙の周りに巨大なビーカー出現した。

「変身……」

レンチを下ろし、青い液体が注入されるとビーカーが割れると姿が変わる。

『潰れる！流れる！溢れ出る！ドラゴンインクローズチャージ！ブラー！』

龍牙はクローズチャージへと変身した。

「やるしかないようだな」

向かってくると思い、デイケイドドライバーを装着し、デイケイドのカードを取り出す。

「変し……」

「デイケイドへ変身しようとする士の腕を、晴夜が掴み変身させるのを止める。

「あいつを止めるのは、俺の役目です」

「お前に救えるのか？」

「あいつは……俺がハザードトリガーで暴走した時やエボルトから俺を助けてくれた……だから、今度は俺があいつの本当の心を取り戻す」

龍牙を取り戻すのは、自分の役目だと言う。その晴夜の目を見て士はカードを下ろす。

「……いいだろう。任せたぞ」

晴夜に任せ、士は二人から離れる。

「龍牙……行くぞ」

スパークリングを数回振り、上に掲げるとビルドドライバーに差し込んだ。

『ラビットタンクスパークリング!』

音声が鳴り響き、晴夜はドライバーのレバーを回すと、前後からランナーが現れてビルドマークのスナップライドビルダーが出現。アーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身」

腕を広げ、構えると。アーマーが晴夜の体に装着され、無数の泡が弾け、音声が響く。
『シユワツと弾ける！ラビットタンクスパークリング！イエー！イエー！』

ビルドはスパークリングへ変身し、ドリルクラツシャーとカイゾクハツシャーを持つ。
つ。

「うおおおおお！」

「・・・」

ビルドのドリルクラツシャー、クローズのビートクローザーがぶつかり火花を散らし出す。

二人の武器の衝突は互角の展開だ。

「くうー！」

一度ビルドが離れ、カイゾクハツシャーのトリガーを引っ張る。

『各駅電車！急行電車！快速電車！・・・』

それを見てクローズが二本のボトルをツインブレイカーに差し込む。

『シングル！ツイン！』

ツインブレイカーにエネルギーを溜める。

『海賊電車！発車！』

『ツインファイニツシユ！』

二人の武器から放たれたエネルギー弾がぶつかり合う。

「くう！」

「・・・」

二つの衝突に、二人が風圧で後ずさる。

「・・・強い・・・流石だな、龍牙。でも・・・！」

『スペシャルチューン！』

「!?？」

『ヒッパレー！ヒッパレー！ヒッパレー！メガヒット！』

ビートクローザーにエネルギーを溜めるのを見てビルドは四コマ忍法刀の出現させ、

ドライバーを回す。

『Ready go!』

『火遁の術！』

四コマ忍法刀に炎とスパークリングの泡を纏った。

『火炎切り！』

四コマ忍法刀とビートクローザーがぶつかり合う。二つのぶつかり合ったエネルギー

ギーにより二人の手から武器が飛ぶ。

二人が武器を落とすと、ビルドとクローズはドライバーのレバーを握る。

『Ready go!』

二人が高く飛び上がりライダーキックの態勢に入る。

『スパークリングフィニッシュ!』

『スクラップブレイク!』

二人のライダーキックがぶつかり合った。

「はあああああー!!?」

「・・・」

だが、クローズの方がややビルドのキックを押ししていた。

「ぐわああああ!」

クローズのライダーキックがビルドのライダーキックを押し退け、ビルドに直撃すると、地面へと落ち、ビルドの方が変身解除してしまった。

「あ・・・あああ・・・」

『辛いな。相棒に裏切られるのは』

「伊能・・・」

アナウンスの声のように伊能の声が響く。

『無駄。君の力は所詮、桐ヶ谷巧のコピーに過ぎない』

伊能が晴夜は所詮、兄のコピーでしかないと言う。すると、晴夜は起き上がり何かを

眩く。

「……うるせえ」

『何……』

「うるせえって言ったんだよ！」

晴夜がうるせえと言いきり上がると伊能が黙り込む。

そして、晴夜はクローズの方を振り向き、少し笑っていた。

「龍牙……やっぱ、凄えよ。俺の想像していた強さを超える……本当に、会った時から驚かされるよ……だからこそ、お前じゃなきゃいけないだ……俺の相棒は……」
晴夜が言うトスパークリングボトルをドライバーから外し、ポケットからロイヤルとシヤドウのボトルを取り出す。

「龍牙……お前が闇に堕ちたなら、俺も闇からお前を救う」

ロイヤルボトルをしまい込む。すると、ホルダーにあるタンクボトルに変化が現れた。

「ボトルの色が変わった……」

なんと、タンクボトルが青からブロンズ色のボトルへと変わった。

「ハザードレベル7ってやつか……」

どうやら、ハザードレベル7へと変わったと見られるタンクボトルを握りしめる。

「龍牙……お前を取り戻す。この身を掛けて！」

晴夜はブロンズ色のタンクボトルとシャドウボトルを振る。すると、後ろから黒い文字で書かれた方程式が現れた。

「さあ、龍牙……実験を始めようか？」

二本のボトルの栓を回す。

『タンク！シャドウ！ベストマッチ！』

ボトルを差し込みドライバのレバーを回すと、スナップライドビルダーから黒と銅色のアーマーが形成される。

『Are you ready?』

「変身……」

その声とともに、アーマーが晴夜の体に重なった。

『深き闇パワーウオリアー！シャドウタンク！イエーイ！』

銅と黒が混じったような、ハザードフォームとはまた違った姿。複眼の銅色のタンクのような複眼には緑色のラインが刻まれ、黒い鎧を纏ったビルドとなり、変身が完了する。

次回！Re.ドキドキ&サイエンス！last science！

第11話 お前じやなきやダメなんだ…

第11話 お前じやなきやダメなんだ…

晴夜達はパンドラ城へと仲間の協力により侵入することが出来た。

だが、城の罠にかかりビルドとクローズ・・最悪の対決が始まった。クローズの強さにビルドは一度は敗れるが、銅色へと変わったタンクボトルとシャドウボトルを差し込み、新たなビルドのフォームを生み出した。

「なんだ…あのビルドは…」

伊能は黒く鎧を纏ったかのような新たなフォームへと変身したビルドを見て、パットを操作し、急いで調べる。

「該当データなし」

データにもない未知のフォームに少し戸惑いの様子を見せる。

「だが、あのボトルから感じられるのは…ジャネジー」

しかし、シャドウボトルからジャネジーが感じられらと言う。

「へえ、ジャネジーってことは、あの坊や自滅のつもりかしら」

「これであの小僧がジコチューとなってくればこつちのもんや」

「人間が、自らジャネジーを受けるとは愚かな事だ」

く。
三人はビルドがシャドウボトルの影響でジコチューになり、自滅の道を選んだと眩

一方、映像の向こう側のシャドウとタンクのボトルで変身したシャドウタンク……だが、まだ変身してからビルドが動こうとしない。

「(ハ)は……」

晴夜が目を開けると、何も無い暗い場所へと移り変わっていた。

「お前の心だよ」

声が聞こえ後ろへ振り返ると、そこには同じ姿、同じ格好をした自分が立っていた。

「お前は……」

「俺はお前だ」

同じだと言うもう一人の自分、それは心に眠る闇の自分だと晴夜は考えた。

「俺はお前の中に眠る闇……」

「俺の中に眠る……」

すると、晴夜（闇）が晴夜の中にあるピンク色のプシュケーに目を向ける。

「さあ……俺のジャネジーを受け入れ、闇で全てを壊せ！」

晴夜（闇）の指から放たれた黒い光線が晴夜のプシキューに当たる。しかし…
「何……？？」

だが、晴夜のプシキューは染まるどころか少しも変化が見られない。

「染まるわけではないだろ。お前は俺なんだから……」

「なんだと……？？」

「父さんも言つてたろ……どんな人間にも光と闇がある。その事をジコチューと戦つていて気づいたんだ」

半年も前のジコチューの戦いは学んだことが多かった。

人間の中にある心、光と闇。その両方がある。そして、その両方を受け入れ認め合う時、本当の強さが生まれる。

「だから、俺は光も闇も全部受け入れる。もちろんお前も……」

晴夜は闇の自分に手を差し伸べる。

「また、仲間や愛するものを裏切られてもか？」

今回のようにまた裏切られてもその思いを貫き通せるのかと自分に問う。

「……戦兎さんに会つて俺も決めんだ……例えば、どれだけの人に嫌われても、存在を否定されても俺は戦うだつてな。そして……この後、俺が進む道……そこにある大事な人を取り戻す」

その強い晴夜の決意の目に圧倒され、晴夜（闇）が後ずさる。
「……いいだろ。力を貸してやる」

だがその言葉を聞き、晴夜（闇）は晴夜の差し伸べた手を握る。

「だが、忘れるな。お前が少しでもそこから離れ時、俺のジヤネジーがお前を染める」
「ああ」

そう言った瞬間、晴夜（闇）が消えていく。

そして、再び目を開けると城の中で目の前にはクローズが立っていた。

「行くぞ、龍牙」

『フルボトルブレード！』

ビルドはその手にフルボトルブレードを持ち、それを見てビートクローザーでクローズがビルドへと向かっていく。

そして、フルボトルブレードとビートクローザーが衝突したが、一撃でビートクローザーをクローズの手から飛ばすと、クローズがレンチを下ろす。

『スクラップブレイク！』

今度はツインブレイカーでビルドに攻撃してくる。だが、フルボトルブレードで受け流し、そのままカウンターでクローズを怯ませる。

「ほお〜」

それを見ていた士は感心している。

だが、別の部屋で見ていた伊能達は目を見開き、驚いていた。

「バカな・・・ジャネジーの力をコントロールしている!」

「あり得へん!人間が何故そんな事が!?」

「まさか・・・いや、違う。奴は桐ヶ谷拓人と巧のコピーに過ぎない!そんなことが・・・」

ジャネジーの力をコントロールしているビルドに伊能達三人が驚いてる。

だが、見ていた士は驚いていると言うより、当然な顔をしている。

「コピーじゃない。これはあいつがここまで戦って強くなっていた心の強さだ」

キングジコチュー、プロトジコチュー、エボルト。それらの戦いを通して学んで強くなっていた、晴夜自身が強くなったからだ、*“人間の上っ面”*だけしか観ていない伊能達が覗いているであろうカメラに向かって呟く。

その後、戦況はビルドの方がクローズを押ししていた。ビルドはタンクボトルを外し、フルボトルブレードに差し込む。

『タンク!』

フルボトルブレードに銅色のエネルギーを纏う。

『フルボトルスラッシュ!』

「はあああああ!」

フルボトルブレードの斬撃を放つ。斬撃を受けたクローズは後ずさるが耐えていた。
『タカ！ガトリンググ！』

タカとガトリンググのボトルを差し込む。

『ベストマッチスマッシュ！』

フルボトルブレードから放たれた小さく細かな斬撃を飛ばす。

「!?？」

その斬撃を受けたクローズは耐えきれず倒れる。

「!?？あつ……あああ……」

ビルドの攻撃を受け倒れていたクローズが急に頭を抑え苦しみなあげ声を漏らし始める。

「龍牙、聞こえるか？」

「うううう……あああ!!？」

ビルドがクローズに声を掛けるが苦しみの所為でビルドの声が聞こえていなかった。それでも、ビルドはクローズに必死に声を掛け続ける。

「龍牙……俺はお前に感謝してるんだ」

「!?？」

その言葉が聞こえた時、クローズの苦しみが止まった。

「お前は・・・俺にとつて最高の相棒で・・・友達なんだ！」

相棒であり、コンビでもあるクローズは・・・龍牙はかけがえのない友達だと言うと、クローズに近づく為歩き出す。

「お前と会う前までの俺は・・・本当の親友言える奴がいなかった・・・そして、お前と初めてトランプ王国で出会った」

——あの日のことは今でも忘れない。トランプ王国に飛ばされ、砂漠で倒れていてそこで声を掛けられ、最初に会ったのはこいつだ。

「それから、仕方なくお前と一緒に暮らしたな。バカって言葉の一つから俺とお前はいつも・・・喧嘩しちまう・・・」

——バカと言うと、こいつは反応していつも俺の肩を揺する。

「けど、俺は嫌いじゃないかった。お前と出会えてよかった！」

——例え、その出会いが計画の一部でも、こいつ出会った事は一度も後悔していない。「お前は、俺が迷ったり、ピンチなつた時いつもお前の言葉や行動が俺に勇気をくれたんだ」

父さんがスマッシュを作った時、エボルトに乗っ取られた時、自分をいつも助けてくれた。そして、今回。ビルドとして戦ってきた本当の理由・・・忘れかけていた事をこいつは何度も思い出させてくれ、そして、勇気をくれた。

「俺がここまで来れたのは・・・お前が俺の支えだったんだ龍牙！」

「あつ・・・！あああああー！」

「だから・・・お前じゃなきやいけないんだ。俺の最高の相棒は・・・お前だ」

「!?？」

その一言が、クローズの苦しむ動きを再び止めた。

「また、喧嘩しようぜ・・・龍牙」

ビルドはそう言つて、クローズに手を差し伸べる。

「・・・晴夜・・・」

「・・・龍牙」

クローズの口からビルドの名前を呼ばれた。

「・・・晴夜・・・頼む・・・やってくれ・・・」

「・・・わかった」

ビルドはクローズの意思を聞き入れ、フルボトルブレードにロイヤルとシャドウのポトルを差し込もうとする。

「龍牙・・・お前の命賭けるぞ・・・！」

『ロイヤル！シャドウ！マジエステイ！』

差し込むとドライバーのレバーを回し、フルボトルブレードに光と闇の色をしたエネ

「早く、目覚ませ！筋肉バカ！」

中々目を覚まさない龍牙を見て、晴夜は目から涙が出そうになる。すると・・・

「・・・うつせな・・・寝れねえだろ・・・科学バカ・・・」

龍牙が目を開き、筋肉バカと叫んだ晴夜に向かつて科学バカと言う。

「バカ・・・寝てる場合かよ・・・」

晴夜はすぐに目から流れそうになる涙を拭う。

「バカってなんだよ・・・バカって・・・」

二人はいつもと同じやり取りを始める。

「プツ・・・ハアハアハアハアハアハア！！？」

そして、二人は笑顔で高々と笑い合う。笑い終わるとお互い立ち上がり、お互いの手を掴む。

「サンキュー・・・相棒」

お礼を言われると晴夜は髪をかき、照れ隠しする。

「・・・前に言つたろ。お前に何かあれば俺が全力で止めるってな」

あの時の二人の約束・・・『何かあったときは必ずそいつを全力で止める』。

クローズチャージやハザードフォームになった時、二人が最初に交わした約束だ。

「ヘッ・・・！」

「フツ・・・!!」

〈パンツ!〉

二人がお互い微笑すると腕を上げお互いにハイタッチを交わす。

ベストマッチコンビの復活だ。

「どうやら、上手くいったみたいだな」

見ていた士が二人に近づく。

「お前、意外とやる時はやるんだな」

士が晴夜の方を見て言う。その時・・・

「ビルドちゃんく、クローズちゃんく」

いきなり二人を呼ぶ声が聞こえ三人が振り向く。

「今度は私達と遊びましょう」

「暇だったからウズウズしてたんや」

シーザスとゼブラ、二体のロストスマッシュが現れ、こちらへと向かってくる。

「ここから、俺がやる。お前から先に行け」

士が二人の前に出て、一人のロストスマッシュと戦おうとする。

「ふざけんな。あんた一人でやらせるか! まだ・・・くう!」

戦おうとするが、さっきのダメージがまだ体に少し残っていた。

「お前ら、こんな奴ら相手にしてる暇は無いだろう」

二人にはまだやらなければならぬことがある、その事を知っているから士は二人を先に行かせる。

「ガキはただ前だけ見て進め。振り返らず前だけ向いている」

「士さん・・・わかりました」

「・・・ありがとうございます」

士に任せて二人は上へと向かって走り出す。

「待ちなさい！」

ロストスマツシユが二人を追おうとするが、士が前に出て二人の先に行かせようとならない。

「悪いが、ここからはあいつらの道だ。邪魔はさせない」

「あのガキなんで、洗脳から解け、ジャネジーの力も使ってなんでジコチューにもならへんやー！」

ゼブラスマツシユは何故晴夜がジコチューにならなかつた。その上何故龍牙は洗脳から抜け出せたと問う。

「お前ら何もわかつてなかつた」

「何ですって・・・」

「あの二人は切つて切れない絆があるんだ」

あの二人には切れない絆があると言う。

「それはお前らじゃあ、絶対に切れないあの二人の強い絆だ！それがわからないお前らなんて、何にもわかつてない。ただのセコくて汚い存在だ！」

「人間風勢が！」

「下等な存在が偉そうな事を言うな！」

士の説教に二人が感化され、彼に向かつて人間風勢と怒鳴る。

「下等かどうか？今にわかる」

「何や！お前一体!!？」

ゼブラスマツシユが士に向けて指を指し問う。

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えおけ！」

お決まりの台詞を叫び、ディケイドドライバーを装着し、横に装備されてるライドブツカードから一枚のカードを向ける。

「待ちたまえ」

そこへ士の前に一人の男性が現れ、手に持った銃で二体のスマツシユに向けて放つた。

「海東」

「やあく、土。久しぶり〜」

現れたのは龍牙からドラゴンエボルボトルを盗んだ海東大樹だった。

「なんで、お前がこの世界にいるんだ？」

「君がこの世界のお宝を独り占めするかと思つて来たただだよ。まあ、いいお宝が手に入ったけど」

海東は龍牙から盗んだドラゴンエボルボトルを見せる。

「相変わらずだな」

それを見た土は、相変わらず泥棒やつてるんだなと思う。

「まあ、これより価値のあるお宝はあの二人の絆かな〜」

ドラゴンエボルボトルより価値のあるもの、それは晴夜と龍牙。二人の絆かもしれないと呟く。

「だとしたら、そのお宝壊させない」

「なら手を貸せ」

「いいだろう。でも足は引つ張らないでね」

「こつちの台詞だ」

海東もデイエンドの変身カードを取り出す。

『『KAMENE RIDE!』』

「変身！」

二人がカードをドライバーに差し込む。

『DECADE!』

『DIEND!』

九つの影が一人となり数枚のプレートが現れ、その頭部を縦に貫きはめ込まれ、黒とマゼンタの仮面ライダーデイケイド、黒と青の仮面ライダーデイエンドとなった。

「行くうか、士！」

「はああ！」

デイケイドとデイエンドが二体のロストスマッシュと戦闘を始めようする。

デイケイドのライドブツカーをソードモードにして振る。そして、デイエンドの銃撃でサポートと二人の息のあった連携がスマッシュを翻弄する。

「こつちが優先だな」

「まだまだ行くよ。士！」

二人がさらにロストスマッシュに攻撃を仕掛ける。

一方、士と別れた晴夜と龍牙は城の中を進み最上階へと目指すため、再び、ビルドとクローズへと変身した。

「フウ！ハア！」

「オラアアアアア！」

二人が襲いかかるスマッシュとガーディアンを倒し続ける。

『テン！トウエンティ！サーティ！フォーティ！ファイフティ！シックスティ！セブンティ！エイティ！ナインティ！ワンハンドレッド！』

ビルドがホークガトリングへと変身し、ホークガトリングのシリンドラーを回した。

『フルバレット！』

『スクラップブレイク！』

ホークガトリングの百発の攻撃が繰り返すと、クローズがそこにライダーキックを放ちスマッシュとガーディアンを撃退し、上へ上へと進み最上階の手前まで来た。

「ここが最上階の手前……」

「もうすぐか……」

一度変身解除し、上へと続く階段を探す。すると、上へ上へと続く階段を見つけた。

「あれか、行くぞ」

「ホーリーソード」

「……」

階段へ行くこうとした次の瞬間、斬撃が飛んできて、咄嗟に躲した。

「今のは……」

晴夜は斬撃が飛んできた方へと振り向く。

「真琴……」

斬撃を飛ばしたのは、キュアソードだった。

「あなた達をここから先に行かせるわけにはいかない。ここで私があなた達を切る」

「まこぴー……やるしかないのか」

晴夜はボトルを取り出すと、龍牙が前に出た。

「ここは、任せろ……お前は上に行け」

龍牙がキュアソードと戦うとし晴夜にさつきに行けと言う。

「でも、相手はまこぴーだぞ……お前……」

戦いづらいつと思いつ自分が戦おうかと言おうとする。

「……あいつを助けるのは俺だ」

「龍牙……」

「それに、さつきの借りを返させてくれ」

さつき操られて晴夜を攻撃した借りを返すためだと言う。龍牙の覚悟を受け入れた。

「わかった……」

晴夜はキュアソードは龍牙に任せる。

「取り戻せよ。お前の大事なものを」

「お前もな！」

龍牙が拳を晴夜に向ける。

「ああ・・・」

晴夜も拳を出し、二人が拳を当てる。

「待ってるぞ」

晴夜は上へと続く階段へと進む。

「行かせない」

ソードが先に進む晴夜に攻撃しようとする。

「やめろ！」

しかし、龍牙が飛び込みソードの攻撃を止める。

「邪魔よ！」

「ぐう！」

龍牙を蹴って自分から離し、晴夜に攻撃をしようとする。だが、既に晴夜の姿はなかつた。

「あなた・・・」

「真琴・・・」

蹴られた龍牙が起き上がるのを、ソードは冷たい眼差しで龍牙に向けられる。

「いい気にならないで。偽物の仮面ライダー」

「・・・」

「あなたが仮面ライダーなれたのは、自分が持ってた遺伝子のおかげに過ぎないだけよ」
「そうかもな・・・」

エボルトの遺伝子のおかげそれを否定しなかった。龍牙が自分の掌を見つめる。

「俺の体に巡る血や肉は半分はエボルトのおかげだ・・・」

「この体から流れる力はエボルトが俺に与えたものだ。」

『お前の体に流れる血は俺と同じ世界を滅ぼす力だ！』

…その言葉は、今も思い返すことがある。

「世界を破壊する力・・・確かに俺は偽りの仮面ライダーかもしれないねえ・・・でも、逆を
考えればそれは守る力にだってなる！」

「だから・・・？」

「だから・・・だから、俺は俺自身を信じる！例えそれが作られた力だとしても・・・そ
の力でお前を・・・世界を守る！愛と平和の為にな！」

「!?？」

『例えそうだとしても……俺がアンタと同じ力を持っていても俺は、仮面ライダーだ……アンタが世界を破壊させるために力を使うなら……俺はこの力を愛と平和のために使う！それが、俺が信じた仮面ライダーだ！』

「何よ……今のビジョン……」

今、思い出したフラッシュバックにソードの記憶をよぎらせ、ソードが頭を抑える。

「なあ、真琴……」

「だから……なんでそんなに馴れ馴れしのよ！」

馴れ馴れしいと叫ぶソード。すると、龍牙は腰に装着されていたスクラッシュドライバーを外し、ビルドドライバーを取り出す。

「お前、覚えてるか？俺がクローズに初めて変身した日のこと……」

「そんな記憶はないわ」

「そうか……あれは、お前がプリキュアに選ばれて初めてジコチューと戦った日だったな……」

その思い出は、今も忘れもしない、二人にとって始まりの日のことだった。

『私は……アン王女に仕えるプリキュアよ！』

その時龍牙は、苦戦しているソードを壁の陰から見てることか出来なかった。

『ソード……俺は……』

あの時は、まだ仮面ライダーの力もなく、ただの無力でも何も出来なかった。そんな時だった……

『博士……』

後ろからアタッシュケースを持った拓人が現れた。

『君が、彼女を助けたいならこれを使ったまえ……』

アタッシュケースの中にはドラゴンボトルとビルドドライバーが入っていた。

『俺は……あいつを……あいつを助けてえ!』

迷わずドライバーとボトルを持ち、そのままボトルを振り、ボトルの力を纏った拳がジコチューを殴り飛ばした。

『龍牙……あなた何でここに……早く逃げなさい!』

『うるせえ!お前ばつかりに戦わせるかよ!』

『私はアン王女に認められたプリキュアよ!あなたみたいな市民に戦わせるわけにはいかないわ!』

『そんなことはどうでもいい!俺は……みんなを傷つけるあいつを倒すだけだ!』

『龍牙……』

ジコチューが起き上がり、攻撃をしてきた龍牙に突撃しようとする。そこへ、クロードドラゴンが現れ、火炎の粒を放ちジコチューを怯ませる。

『一緒に戦ってくれるのか……』

『♪♪♪』

クロードドラゴンが頷き、龍牙の手に置かれた。

『力を貸してくれ……』

ドラゴンボトルを数回振り、クロードドラゴンをガジェットに変え、差し込む。

『ウェイクアップ！クロードドラゴン！』

レバーを回すとスナップライドビルダーからアーマーが形成され、龍牙が叫ぶ。

『Are you ready?』

『変身!!?』

アーマーは龍牙の体に重なって装着され、音声が流れた。

『Wake up burning! Get CROSS—Z—DRAGON! Yea h—!』

『俺は……俺は……クロードだッ!』

これが初めてクローズとなった日となり、アン王女からもキュアソードのサポートになるように命じられ、ソードもクローズがサポートとなるのを認められた。

「それからしばらくすると、キンググジコチューに王国を崩壊されて、お前と別れたな：でも、再会したお前が新しい仲間と一緒にいた・・・」

「そんなこと、知らない・・・」

ソードは知らないと言うが、龍牙は話を続ける。

「そして、晴夜と会った・・・マナに六花、あります、次にアイちゃんやかずやんに幻冬、亜久里にレジーナとも出会って、俺の世界は大きく変わったんだ」

龍牙が言うとソードは頭を抑え続ける。

「だから、そんなこと覚えてないし、知らないって言ってるでしょ！もう、何なのよ！あなたは！」

叫びながら手刀の斬撃を龍牙に向けて放った。

「くうー！」

咄嗟にビートクローザーを取り出し、ソードの攻撃を受け流す。

「そんな言葉で私を惑わせようだなんて・・・あなたをここで切る」

ソードの冷たい眼差しが龍牙に向け、戦闘体勢となっていた。

「そういえば、俺とお前、一度も真剣勝負したことなかったな……」

前に何回か二人で模擬戦をした時は、彼女も自分も、何処か甘さが出ていて、本気でやり合ったことがなかったと思いつい出しながら、龍牙はビルドドライバーを装着した。

「なら俺も覚悟を決めるぜ！」

龍牙は黒いボトルとオレンジ色の形をしたナツクル……マグマナツクルを取り出した。

『ボトルバーン！』

「……行くぜ」

ナツクルのグリップを上と上げ、そのままドライバーに差し込む。

『クローズマグマ！』

ナツクルを差し込み、ドライバーのレバーを操作すると、後ろから巨大なナツクルの形状をしたマグマライドビルダーが作れていき、後ろへ完成された。

『Are you ready?』

その音声が鳴り響くと、龍牙は拳を手に当て構える。一度を目を閉じる。

「変身！」

そこから流れ出た溶岩『ヴァリアブルマグマ』が龍牙の体に掛かり、流れ出た溶岩からヤマタノオロチのような八体の龍が現れ固まる。そのままナツクルが前へ動き固まっ

た溶岩は砕け、そこに変身し現れた。

『極熱筋肉！クローズマグマ！アーチャチャチャチャチャ　チャチャチャチャアチャー
！』

全身がマグマのようにオレンジ色な姿に肩には龍のようなモチーフと後ろに羽まで装着され、晴夜に名付けられた『クローズマグマ』となった。

「はあく…行くぜえ！」

クローズマグマとなったクローズがキュアソードに向かって走り出す。

「はあああああああ！」

「うおおおおお！」

クローズマグマの拳とキュアソードの手刀が衝突した。

仮面ライダークローズとキュアソードの対決が、今始まるうとしていた。

次回！Re. ドキドキ&サイエンス！last science！

第12話 想いを込める…輝け、クローズの光！

第12話 想いを込める：輝け、クローズの光！

昔々、今からほんの少し前の時まで遡る事数年前。トランプ王国に一人の少年がいた。

少年の家は、トランプ王国内でも有名な貴族で、その家の息子である彼は常にトランプ街道を走っていた。

そんなある日、少年のもとに新たな転機が訪れた。

トランプ王国がプリキュアのサポートになる為の人材を見つけるテストを始めたのだ。

当然少年も受けることになり、いつもの様に親の期待に応えるため、そのプリキュアのサポートの相手であるキュアソードとお近づきになる為にダントツのトップになったのだ。あの時点では、彼がクローズの力を手にするのに相応しい人間だったはずだった。

しかし、クローズの力を得たのは、テストでは下の下にいた筈の上城龍牙だった。キュアソードの隣に何時もいたのも、上城龍牙だった。

それ以来、彼の人生が狂い始めた。

常に期待の目に溢れていた両親、使い人達、周囲の目が、失望に変わった。

行動はいつもと同じであったが、なんであんなのに負けたのだ、散々期待させておいてこの始末か、と言わんばかりの目で見るようになった。

そして少年の心には、常に上城龍牙への嫉妬心で溢れていた。

どうしてあんなのがクローズの力を得たのだ、なんでみんなあいつにばかり期待をするのだ、なんでキュアソードはあいつの隣にいるのだ、どうしてそんなに笑っているのだ、俺と一緒にいた時は一度も笑わなかったくせに、なんでそいつの隣では笑うのだ。

少年は、自身の心が黒く染まりつつある事に気付かず、いつもそんなことを考えていた。

そんな屈辱に満ちた日々を過ごしていた少年の下に、また新たな転機が訪れた。

「彼は本当なら、クローズの力を得ることはなかった。本当なら、君が本物の仮面ライダーになる筈だった」

その男は、彼に真実を教えた。上城龍牙の体にはエボルトと言う異世界生命体の細胞が入っており、それによってクローズ——仮面ライダーの力を得たと言う。

ふざけるな。なんだそれは。それじゃあ、俺はアイツに嵌められたのか？

アイツのせいで、俺は名誉も栄光も、クローズの力も、キュアソードも奪われたと言うのか？

「そうだ。彼はエボルトによって作られた、偽りの仮面ライダーだ。彼は仮面ライダーの力を何も理解していない。ライダーの力は、全てを支配する為の力なのだ。そして、君がライダーになったのなら、君は真の仮面ライダーへとなれる。どうだい？ 私のもとで働かないか？」

少年は有無を言わず、それに応じた。

自身の心が、真っ黒に染まっていることに気付かないまま、少年は男とその仲間達の下で行動を共にしていた。

キュアソードを我が物にする為、上城龍牙に復讐するために、彼は踏み超えていけない線を超えてしまった。

その少年の名前は、ファレノ・ユウヤ。後の仮面ライダーパルロである。

パンドラ城、キュアソードが晴夜と龍牙の前に立ちあはだかつたが、龍牙が彼女は任せてほしいと言い、晴夜は一人パンドラ城の上へと向かっていった。

「龍牙……」

階段を走り続ける晴夜、すると、スマッシュとガーディアンが晴夜の前に現れた。

『ラビット！ タンク！ ベストマッチ！』

「変身!」

『鋼のムーンサルト!ラビットタンク!イエーイ!』

晴夜はすぐにビルドへと変身し、ドリルクラッシュャーでスマッシュユとガーディアンを迎撃する。

「邪魔だ!」

『Ready go!』

ボトルを差し込み、ドリルが回る。

『ボルテックブレイク!』

回り出したドリルクラッシュャーの攻撃で全て倒し、ボトルを外し変身を解除した。

「必ず来いよ……」

下にいる龍牙に来いよと呟いた晴夜は、再び走り出す。

その頃、城の外の方ではハピネスチャージプリキュア、マッドローグ、ナイトローグ、ビルド(拓人)がプリキュアオールスターズに応戦していた。

「うわああああ!」

「義兄さん!うわあ!」

キュアブラックとキュアホワイトの攻撃を受けたビルド(拓)とナイトローグが倒れ、

強制変身解除された。

「流石の私も歳だな・・・」

「桐ヶ谷さん！石動さん！大丈夫ですか？」

「ああ、ありがとう。でも、俺達では、ここが限界だ・・・」

MHからスマイルプリキュアがハピネスチャージプリキュアや拓人と総一郎を囲む。

「桐ヶ谷さん達は下がっていて！」

「ここからは、私達が！」

「すまない」

ハピネスチャージプリキュアはオールスターズへと向かって突撃した。

「プリキュア！くるりんミラーチェンジ！チェリーフラメンコ！」

「プリキュア！くるりんミラーチェンジ！シャベツトバレエ！」

「プリキュア！くるりんミラーチェンジ！ポップコーンチア」

「プリキュア！くるりんミラーチェンジ！パインアラビアン！」

ハピネスチャージプリキュアがプリカードを使い姿をかえ、応接に出る。

その一方で、マッドローグがキュアダイヤモンドに圧倒されていた。

「ダイヤモンドシャワー」

「うおお・・・このお！」

マッドローグはダイヤモンドシャワーを受け、一步も動けないでいた。

一方、グリスはロゼッタとリモコンブロスに翻弄されていた。

『シングル! ツイン! ツインファイニッシュ!』

グリスの二本のツインブレイカーがリモコンブロスに放たれた。

「ロゼッタリフレクション」

「くう!」

「よそ見は危険ですよ」

ツインブレイカーで放つ攻撃は全てロゼッタに防がれ、そこにリモコンブロスがカウ
ンターを仕掛ける。

「あります・・・(味方としてはこんなにも凄い盾が敵となると・・・)」

そして、ローグとジョーカーは・・・

「ヤアアアアア!」

エンジンブロスのスチームブレードとドラゴングレイブがぶつかり合い、ローグは
エースの攻撃を避け続け防御していた。

「亜久里ちゃん! やめて! こんなのに」

「命乞いはいいので、本気で戦いなさい!」

エースの次のパンチを受け止め、ローグがエースから距離を取る。

「なら、僕がこの一撃で止める！」

ローグはそう言つてスチームガンにボトルを差し込む。

『クロコダイル！ファンキーショット！』

「エースショット」

二人が放つた技はぶつかり合い相殺された。

「!?？」

相殺された際にエースがローグに腹にキックを入れた。

「あ……ああ……あ、亜久里……」

受けた攻撃を抑えるローグ。他のみんなもみんな必死に奮闘するが、流石に多勢に無勢みんなには疲れが見え始める。

その頃、城の中ではクローズとキュアソードが激しくぶつかり合っていた。

「うおおおおお！」

「はあああああああ！」

お互いに繰り出すパンチ、キックと繰り返す衝突。クローズマグマが力の上のはずだが、互角の展開を見せていた。

「流石だぜ……真琴」

「遊びは終わりよ。スパークルソード!」

ラブハートアローから無数の剣・スパークルソードを放つ。

『Ready go!ボルケニックブレイク!』

それに対しクローズはドライバーを二回回し、クローズの右手からマグマのドラゴンが放たれ、スパークルソードの剣を打ち落としたりした。

「なんですつて……」

今度はマジカルラブリーパットを出現させた。

「ソードハリケーン」

今度は剣の竜巻、ソードハリケーンを放ちクローズを囲む。

『Ready go!ボルケニックファイニッシュ!』

「はあくはああああああ!!?」

ドライバーを三回回したクローズの体からマグマが溢れ出しそこから炎の衝撃波を放ち、竜巻の剣を打ち消した。

「そんな……!!?」

「はあ!」

次に繰り出されたクローズの拳がガードしたキュアソードの体勢を崩し、壁まで追い込んだ。

一方、その音が下にいるデイケイドとデイエンドにも響いた。

「なんだ……」

「どうやら、ドラゴンの少年君の方だね」

「何故、そう思う?」

「カンだよ」

デイエンドと彼の推測に耳を傾けるデイケイドの二人も、二体のロストスマツシユに少し苦戦していた。

「さって、そろそろ本気で行くか?」

「そうだね。士!」

だが彼らはそう言い合うと、再びデイケイドとデイエンドはロストスマツシユへと向かっていく。

その頃、クローズとキュアソード……

「……どう言うつもり……」

「……」

クローズが放ったボルケニツクナツクルが壁の方へと外していた。すると、ナツクルをキュアソードから離れた。そして、クローズは変身解除した。

「なんで、やめるのよ……」

まだ勝負も着いていないのに、変身解除したクロースに不信感を感じたソードは不機嫌そうな表情で問いかける。

「あんた……ふざけないで！私を舐めてるの！」

「俺が……お前に思いを伝えるにはこれしかねえんだ……だから……」

龍牙が離れると後ろから何かを取り出した。

「何を……」

「歌ってくれ……」

「えっ?」

そして、それをソードに頭にかけて。かけたのはいつもコンサートで使う劍崎真琴のインカムだった。

「俺はお前の歌が聞きたい」

「私は……歌なんて……歌……」

歌と聞くと、ソードの記憶から自分が歌っていた日々を思い出してきて、頭を抑える。

「思い出せよ。お前の夢を！」

「私の夢……うっ！」

また、強烈な記憶がフラッシュバックのようにソードの頭をよぎらせる。

「俺は知ってるお前の夢を!」

「私の夢……」

——それは、二人が教会で出会い始めてから話した幼い頃の記憶。

『なあ、なんでお前歌うんだよ。毎日……』

『……ママとパパが歌が好きでそれでかな……いつか、それで……』

『それで……?』

『届けたいんだ……私の歌をトランプ王国や天国にいる……』

その幼い日の記憶がずっと龍牙の頭に染み付いていた。

「いつかみんなに自分の歌を届けたい。トランプ王国のみんなやアン王女、そして、天国にいる両親にも自分の歌を届けたい。それがお前の夢じゃなかったのかよ!」

「っ!?」

「思い出せ……お前は歌うプリキュア!キュアソードだ!」

「ツツツ!?」

歌うプリキュア……その一言が多くくの記憶が頭の中から溢れる。

『こいつ役に立つ役に立たないの理屈で歌って来たんじゃないよ!こいつは歌の好

きで、みんなに届きたいそんな思いで歌ってたんだけだから歌って来たんだ！」

『こいつは、アイドルなんだ！傷つけさせねえ！』

「あ……ああああああ！」

「真琴！」

崩れ落ちたソードを見た龍牙がすぐに庇う。すると、ソードは抑えていた腕を下ろした。そして、膝を折って下を向くと、キュアソードの服が黒から元の紫色に戻った。

「……龍……牙……」

「真琴！俺の名前……」

ソードの口から龍牙の名前が聞こえ、すぐに駆け寄る。

「龍牙……私は……」

「戻ったのか……」

「……ごめんなさい私……あなたと晴夜を……」

「気にすんなよ。俺も晴夜もみんなを恨んじやいねえよ」

恨んでいないと言うとソードの目から涙が溢れた。

「龍牙……龍牙アアアア……?」

ソードが勢いよく龍牙に飛びつくと涙を流した。

「ああくん！ああくん！ごめんなさい！私……私達……」

「泣くなよ。俺や晴夜が悪いように思うじゃねえかよ……それと、悪かったな。お前が危ない時にすぐに行けなくて……」

「うん、うん……」

泣き止むように言うが中々泣き止まないソードに龍牙はこのまま、泣き止むのを待った。

「貴様ら……」

しかし、後ろから声が聞こえ二人が振り向く。

「上城龍牙……貴様!」

「てめえ……」

仮面ライダーパルロのユウヤを見て龍牙は構える。

「……仮面ライダーパルロ……」

「よくも……キュアソードを……」

「パルロ! てめえだけは俺が倒す!」

「やってみろよ! 偽物が!」

ユウヤがビルドドライバーを装着した。

「待って龍牙! ここは……」

ここのまでの戦いで龍牙はかなり体力が減っている。ソードは龍牙と共闘しようと持

ち掛けるが…

「あいつとはケリをつけたいんだ」

「龍牙……」

「それに……俺はお前を守る仮面ライダーだ。だから……」

「龍牙……わかったわ。絶対勝ってね！」

「おお！」

ユウヤとの決着は龍牙に任せ、キュアソードは龍牙から離れる。

「今度こそ、お前の命を貰う」

「やれねえな。俺達を待ってる奴がこの先に待ってるんだよ！」

龍牙はマグマナックルを再び取り出す。ユウヤもスコープオンガジェットが手に置かれ、ハザードトリガーのスイッチを押す。

『マックス！ハザードオン！』

『パルロスコーピオン！』

ガジェットをボトルに差し込み、ドライバーのレバーを回す。

『Are you ready?』

ハザードライドビルダーが現れ、後ろから緑色のユニットが出現した。

「変身」

ハザードビルダーが重なってハザードフォームへとなり、緑色のユニットが装着された。

『オーバーフロー！真緑の一撃！パルロスコーピオン！ヤベー！』

向こうが仮面ライダーパルロになると、龍牙はマグマナックルをビルドドライバーに差し込む。

『ボトルバーン！クローズマグマ！』

ナックルを差し込みレバーを回すと、マグマライドビルダーが作れていき、後ろへ完成された。

『Are you ready?』

その音声が届き響くと、龍牙は拳を手に当て構える。

「変身！」

『極熱筋肉！クローズマグマ！アーチャチャチャチャチャ　チャチャチャチャアチャー！』

こちらにも、クローズマグマへと変身完了させた。

「うおおおおお!!?」

クローズとパルロ、お互いに走り出し拳を繰り出す。

「はあ！」

「ぐう！」

クローズの拳がパルロを後ずさる。

「このお！」

「うわあ！」

今度はパルロの爪がクローズを引つ掻く。

「足りねえな！」

しかしクローズはそう叫ぶとビルドドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

「力がみなぎる！魂が燃える！俺のマグマがほとばしる！」

『ボルケニックファイニッシュ！アチャク！』

マグマのように燃える炎を纏った拳をフリーズを叫びながらクローズは全身のマグマを燃やしながらラツシュを繰り出す。

「もう、誰にも止めらねえ！」

最後の一発を受けたパルロは吹き飛ばされ、壁へと激突した。

「やった！」

ソードが喜んでいるが、壁へと激突したパルロは起き上がる。

「そんなもんかい？」

「これで決めてやるよー！」

今度はドライバーのレバーを二度以上回す。

『Ready go!』

クローズの体がさらにマグマを帯び、後ろにマグマを纏ったドラゴンが現れる。

『ボルケニックブレイク!』

「はあく……オリヤヤヤヤヤヤヤー！」

クローズから放たれたマグマのドラゴンが放たれた。

「今だー！」

クローズが技を放った次の瞬間、パルロが背中中の尻尾をクローズへと飛ばした。

「あつ……!」

「龍牙!」

パルロの伸ばした尻尾はクローズに刺さり、ボルケニックブレイクが失敗に終わってクローズがヨロヨロとなって膝を折った。

「な、なんだ……これ……!」

「効いたろ、この尻尾は相手の神経を一時的に麻痺させられることが出来るんだよ」

「汚ねえ手だな……相変わらず……!」

「ふん……偽物がそんな事を言うな!」

「ぐうー！」

そのままクローズはパルロのキックを顔面に受ける。攻撃を受けたクローズは必死に起き上がろうと試みる。

（くそ……体に力が……入らねえ……）

神経が麻痺がまだ続き、体が思うように立ってない。

「今度こそ、終わりにしてやる」

パルロはドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

パルロの腕の爪がかなり伸び始めエネルギーが収束されていく。

『パルロスコーピオンフィニッシュユー！』

パルロは伸びた爪から放たれた技がクローズの胸へと当たり、クローズが簡単に吹き飛ばされた。

「ぐわああああー！」

吹き飛ばされたクローズがそのまま転がり込んで倒れるとドライバーが強制解除となりクローズの変身が解除されてしまった。

「龍牙ー！」

ソードが急いで彼に駆け寄るとする。

「来るな!」

だがそんな彼女に『来るな』と叫ぶと、龍牙はなんとか起き上がった。

「俺は・・・まだ大丈夫だ・・・」

起き上がったものも龍牙はかなり疲弊していた。それでも、龍牙はパル口とまだ戦う気であった。

「これが、本物の仮面ライダーの力だ・・・偽りのお前達とは違う。全てを支配する力だ・・・」

パル口が言うと龍牙がフツと笑う。

「わかってねえな・・・」

「何・・・」

「仮面ライダーは支配するためにその力があるんじゃないやねえ・・・愛と平和のためだ!」

「それがくだらないって言ってんだよ!愛だの平和だの!そんな事のために力を使って何なるんだ!トランプ王国の崩壊で、それを見たはずだ・・・」

「そうだな・・・俺もあいつと会わなきゃ意味ねえって思ったかもな・・・」

確かにあの悲劇の日、あの光景を見て愛と平和だなんて何もかも意味がないって思った。

けど・・・

「・・・あいつは・・・」

それでもそれを信じ、キングジコチューに変えられた国王を取り戻し、トランプ王国を元に戻した。そして、誰かの為に戦う強さと誰かの為に明日を創る大切さを全部教えてくれた大切な相棒と出会った。

「だから・・・それを知ってる俺は、お前に負ける気がしねえ！」

すると、龍牙の持っていたドラゴンボトルが銀色へと変わった。

「ボトルが銀色に・・・」

それ見た龍牙はドラゴンボトルを強く握りしめる。

「パルロ、見せてやるよ。俺と相棒の力をな・・・愛と平和を胸にかける俺達は誰にも負けねえんだ！来い！」

龍牙が腕を上げるとそこへ、白いドラゴンが龍牙の前に現れた。

「新しいドラゴン・・・」

そのドラゴンは、晴夜の新発明『クリアドラゴン』ガジェットだった。そのガジェットは龍牙の手に置かれると、クローズドラゴンのようにガジェットへと変わった。

「・・・力を貸してくれ」

龍牙はシルバードラゴンボトルを数回振るとガジェットに差し込む。

『ドラゴン！』

さらに、次に海東大樹から貰ったクリスタルボトルを差し込む。

『クリスタル!』

二本のボトルを差し込み、真ん中の起動スイッチを押した。

『クリア!』

その音声が届いた時、そのガジェットをビルドドライバへと差し込む。

『クリスタルクローズバースト!』

ガジェットを差し込み、ドライバのレバーを回すと、龍牙の周りをクリスタルのように光り輝く発光増強剤『キラメキクリスタルリキッド』がパイプに流し込まれ、新たなランナファクトリー『C&Cスナップライドビルダー』が囲った。

『Are you ready?』

「変身!」

囲ったランナーが龍牙の体に一斉に重なった。

『Burst up! GET CRYSTAL CROSS—Z—DRAGON! Yeah!』

一斉に重なったランナーから煙を吹き上がり変身完了させると、その姿に二人が驚く。

「何だこの…クローズは…」

「綺麗・・・」

純白の色に染まったクローズに、水晶のような翼を備え、さらにクローズの両方の腕が鋭いブレードとなった。

「仮面ライダー・・・クリア・クリスタルクローズだ！」

クローズが名付けた新たなクローズの新フォーム『クリア・クリスタルクローズ』がパルロの元へと走る。

「っけ脅しだ！」

パルロは腕の爪を伸ばし、クローズに仕掛ける。

「はあー！」

それに対してクローズはその爪を掴んだ。

「何？？」

パルロの爪を掴んだまま放り投げた。

「バカな・・・さつきより早い・・・」

そして、クローズの水晶のような光り輝く翼が大きく羽ばたく。

そのままクローズはパルロに向かって高速なスピードでパルロに攻撃を当て続ける。

「速い・・・」

クローズが繰り出す攻撃は目では捉えきれないほど早く、そのスピードはビルドのラ

ビットラビットフォームのスピードを遥かに超えていた。

攻撃を終えるとクローズは地面へと着地し、パルロはクローズの攻撃を受け、パルロは膝を折った。

「バカな……俺が……偽物の中に……」

「いい加減にしなさいよ!」

「なんだと……こいつは、エボルトの遺伝子を持った……いわば、化け物だろが!」
パルロはソードに、エボルト遺伝子を持ったクローズは化け物だと叫ぶが…

「龍牙は偽物でもなれば、化け物なんかじゃない!」

「真琴……」

「龍牙は、確かにバカでいつも後先考えずに突っ込むし、人には迷惑かけるし……」

「…褒めてるより……バカにしてないか……って、なんでお前までバカってなんだよ! バカって!」

「でも、優しくして、誰かのために必死になって戦う。私が知っている。上城龍牙……仮面ライダークローズ!」

「つたく、なんか照れるじゃねえか……」

それを聞いたクローズは照れ臭そうに呟く。

「確かに俺の中には、エボルトの遺伝子がまだある……でも、俺には守りたいものがあ

る」

クローズは今後ろにいるソード、先に進んだ相棒、外で戦っている仲間を思う。

「だから、それがある限り俺は負ける気はしねえ……うおおお！」

クローズの翼がより光り輝く。そして、ドライバーをレバーを回す。

『ドラゴンバースト！』

『Ready go！』

クローズが一瞬のスピードでパルコの懐へと飛び込んだ。

『ドラゴニックアタック！』

「何？？」

『ドラドラドラドラドリアー！』

白いエネルギーを纏ったパンチがパルコに決まった。

「あああ……貴様、これでも……」

腹を抑えながらも、パルコが後ろの尻尾を飛ばした。それを見たクローズはドライバーのレバーを回す。

『ドラゴンバースト！クリスタルバースト！』

『Ready go！』

クローズはパルコの尻尾を掴んだ。

『クリスタルブレイク!』

すると、クローズの翼が光り出した。

『ガキガキガキガキガキーン!』

「なっ・・・力が・・・抜ける」

クローズにテイルデスステイングを掴まれていると、パルロからエネルギーが吸われていくのを感じ始めた。

「くう!」

パルロは尻尾を戻し、クローズから離れた。

「これで終わりにする・・・今の俺は、負ける気がしねえ!」

今度はドライバーのレバーを三度回した。

『ドラゴンバースト!クリスタルバースト!アルティメットクリアバースト!』

『Ready go!』

「負けるか!!?」

『Ready go!』

パルロもドライバーのレバーを回すとお互いに高く飛び上がり、両者がライダーキックを放つ態勢へと変わった。

『クリスタルドラゴニックファイニッシュ!』

『パルロスコーピオンフィニッシュ!』

クローズとパルロのライダーキックがぶつかり合い、両者のライダーキックは周りを
どんだん破壊していった。

「うおおおお!!?」

「くう・・・まだ・・・あああ」

「オリヤヤヤヤ!!?」

『ギラギラギラギラギラーン!』

クローズのライダーキックがぶつかり合いにより威力が増していく。そのままク
ローズは加速し、パルロのライダーキックを押し退けパルロへと直撃した。

「アツ!?!:あああ・・・」

クローズのライダーキックを受けたパルロのビルドドライバーが体から外れ、それ
よってパルロが強制変身解除となり、クローズが地面へと着地した。

「何故だ・・・何故・・・貴様に俺が・・・」

「俺には守りたい奴がたくさんいる」

「そして、愛と平和のために戦う」

「愛と平和・・・なんで、そんなことの為に戦う・・・」

「だよな・・・俺も最初はなんでこんな恥ずかしい事言ってるんだよなって思った」

まだ、晴夜達と出会って間もない頃、あいつはいつも仮面ライダーとなつて関係ない人を助けていた。

「その時・・・あいつが言ったんだ」

『俺さあ、誰の力になれると『くしやつ』となるんだよ俺の顔、ライダーになつた時はマスクの下で見えないけど』

「くしやつとだと?」

ユウヤには誰かの力になれると『くしやつ』となると言う意味がよくわからなかった。

「ああ。そんな時、思ったんだよ・・・こいつには逆立ちしたつて勝てねえんだつてな」

「あいつはいつも、他人の為に必死になつてる。誰かの笑顔を明日を守りたい。たったそれだけの事があいつの力になるんだ」

「誰かの為・・・」

「だから、あいつは作られたヒーローじゃねえ。本物の正義のヒーロー。仮面ライダービルドだ」

「正義のヒーロー・・・」

「あいつと話してみろよ。最高の科学バカだぜ♪」

「俺にも、あんなのが居れば．．．もしかしたら．．．」

その言葉を最後に、ユウヤは気を失ってしまった。

それを見た龍牙はソードに駆け寄る。

「真琴。大丈夫か？」

「うん．．．」

「戻ってよかったぜ」

「ごめなさい．．．私．．．」

「本当気にすんなよ。相変わらずくそ真面目だな」

「ちよつと！何よくそ真面目って．．．」

ソードが怒鳴ると龍牙がクラクラと倒れかける。

「龍牙！」

ソードが龍牙の体を支える。

「大丈夫だ．．．ちよつと．．．やりすぎた．．．」

思ったより先のクローズの変身が体への負担が大きかったらしい。

「俺はお前のマネージャーになるんだぞ。これくらい問題ねえよ」

「龍牙．．．」

「これで、あの時の．．．犠牲になろうとしたこと許してくれるか．．．」

龍牙が以前、エボルトと共に道連れになろうとした事を許してくれるかと問う。

「さあ、早く晴夜の所に・・・」

龍牙は晴夜の進んだ階段へと向かう。

「龍牙・・・こっち向いて」

「ん？」

龍牙が振り向く。そして・・・。

「んっつっ!?」

なんと、ソードが龍牙の唇を奪った。何が起こったのか龍牙は驚いて目を大きく開く。

「お礼よ・・・後、もう許しています」

「おお・・・」

龍牙は固まったまま、咄嗟のハプニングにしばらく動けなかった。

その頃、晴夜は一人、最上階へと到着した。

「伊能・・・」

「よくここまで来たねえ・・・」

扉の前に伊能が立っていた。

「もういいだろ。みんなを解放しろ」

「そうはいかない。君はエボルトを倒し全てを壊された。そして、あの方が我々に力を……」

「あの方……」

「それだけじゃない、エボルトが我々を裏切ったきつかけを作った君には恨みがあ
る……」

「エボルトが裏切った……?」

伊能の言う『あの方』と、エボルトの裏切り。どう言うことなのか考えていると……
「これ以上は話すつもりはない。皆を解放したければ、戦いで決めようじゃないか?」

『マックス ハザードオン!』

ハザードトリガーを起動させ、ドライバーに差し込むと今度は龍牙から奪ったグレートクローズドラゴンにコブラロストボトルを差し込む。

『グレートクローズドラゴン!』

グレートクローズドラゴンをドライバーに差し込み、レバーを回す。

「変身」

『A r e y o u r e a d y ? オーパーフロー!』

『W a k e u p C R O S S — Z ! G e t G R E A T D R A G O N ! ブラブラブ

ラブラブラブア! ヤベーイ!」

伊能が二人の変身アイテムからなった仮面ライダーブラッドへと変身した。それを見て晴夜はジーニアスボトルを取り出す。

「戦兎さん。貴方が取り戻してくれた力・・・今こそ使います」

『グレート! オールイエー!』

ジーニアスボトルが光りだし音声が届き響くとボトルの真ん中のキャップを回し、腕を高々と上げドライバーに差し込む。

『ジーニアス!』

ジーニアスと鳴り響く音声と共にドライバーのレバーを回す。

『イエー! イエー! イエー! イエー! イエー!』

音声とともにレバーを回し晴夜の周りから加工設備プラントが作られていき、何本ものボトルが晴夜の後ろを囲み、再び音声が鳴る。

『Are you ready?』

晴夜は人差し指を頭の上に当てる。

「変身」

晴夜が叫ぶと共にビルドマークが晴夜の胸に出現し、白いボディが装着され同時に後ろを囲むボトルに成分が注入され、プラントから射出された六十本のボトルが全身に

装填される。

『完全無欠のボトルヤロー！ビルドジーニアス！スゲーイ！モノスゲーイ！』

こうして晴夜は、六十本のボトルの力を使うことが出来る、兄が完成させた最強のビルド・ビルドジーニアスへと変身した。

ビルド対ブラッド・・・全てを解放するための戦いが始まろうとしていた。

次回！Re・ドキドキ&サイエンス！last science！

第13話 安っぽい救世主：最後の決戦へ

第13話 安っぽい救世主…最後の決戦へ

クローズが変身した新たななるフォーム、クリア・クリスタルクローズがパルロを倒した。

一方、晴夜は伊能のいる最上階へと辿り着き、ビルドとなってブラッドとの戦闘を始める。

「はああああ〜!」

ダイヤモンドボトルの力を纏ったビルドの拳をブラッドに向けて放つ。

「ふう!」

ブラッドはその攻撃を鮮やかに躲した。

「!?」

ビルドは躲されるとすぐ様、ライトボトルの力でブラッドの目の前で光り、目を眩ませた。

「くう!」

「うおお!」

ビルドは連続で攻撃を繰り返し続けるが、ブラッドはビルドの攻撃を躲し続け、カウ

ンターを放つ。

「はああああ！」

「うわああああ！」

カウンターを受け続けたビルドは追い詰められ、地面へ倒れる。

「くう……ジーニアスが通用しない」

仮面ライダーブラッドの前には蘇ったジーニアスフォームがまるで通用せず、ビルドは思わず仮面の下で歯をくいしばる。

「そのボトルの戦闘データはエボルトと戦ってきた記録から検証した。そのフォームが君の最強のフォームだと言うこともね。残念だが、俺の相手では無い」

「くそ……」

以前のエボルトとの戦いでジーニアスの特徴は読まれていた事を察し、どうすれば勝利の法則を導けるのだと考え始める。

「さらに、これはどうかな？」

ブラッドが腕を掲げると、ビルドの周りにスクリーンが一斉に現れた。

「これは……？？」

スクリーンから映像が現れたその数分前、外で戦っていた 그리스 達は……

「うわああああー！」

「きゃああああー！」

エンジンブロス、リモコンブロスとキュアロゼッタの前に、和也とレジーナは変身解除してしまった。

「くそっ……」

「また……ダメだった」

蹴きながら和也はスクラッシュユドライバーを掴む。

そして、ローグとマッドローグも……

「あああああ!!?」

二人もエースとダイヤモンドの前に何も出来ず、攻撃を受け続けた事で変身解除まで追い込まれてた。

「亜久里ちゃん……」

「本当……これがあいつかよ……」

倒れた三人はドライバーを取ろうとしてももう一度変身しようとするが、プリキュア達に完全に囲まれ、変身する要地がなかった。

「……までかよ……」

「和也ー！」

「幻冬君！」

ハピネスチャージプリキュアは和也達を助けに行きたいが、プリキュアオールスターズが行手を阻み、助けにも行けない。

すると、外のみんなの前にスクリーンが多数現れ、それを見て敵の動きが止まった。

「何……」

「おい、あれ……」

イーラが顔を向けながらスクリーンに映っていたものに驚く。

「晴夜さん！」

そこにはブラッドと苦戦しているビルドの映像が映っていた。

「『殲滅！殲滅！殲滅！殲滅！殲滅！』」

それ見たプリキュア達はビルドに向けて、殲滅と叫び出す。

「なんだよ……いきなり……」

イーラは自分の知らないプリキュア達の光景に啞然とするが、この光景に見覚えがある和也と幻冬、レジーナは直ぐに察した。

「まさか……」

「また、晴夜を落とす気か！」

この前のように晴夜を精神的に追い込むのが狙いだと気づく。

「当然だろ」

「いくら乗り越えても、こびり付いた言葉は抜けないものですよ」

「晴夜……」

映像から流れる言葉は、城の中にいるビルドにも聞こえていた。

「……」

「ハツハツハツハツハツ！辛い！辛いだろう！桐ヶ谷晴夜ア!! 一方的に敵意を向けられ、折角守ってきてやった彼女らに裏切られる。まさに悲劇のヒーローだよ!」

ブラッドは愉悅に浸りながらスクリーンに映る光景とビルドを見ており、ビルドもただ黙って聞いている事しか出来なかった。少なくとも、ブラッドにはそう見えていた。

だが……

「うるせ……」

「…何?」

「いい加減!うるせえんだよ!殲滅、殲滅つてよ!」

うるせえと叫ぶと、ビルドは立ち上がる。

「例え、存在が否定されても……嫌われても……それでも、俺は……俺は戦うしかないんだ!!?」

そう叫んだビルドから金色の衝撃波が放たれ、その衝撃波はスクリーンを超え、洗脳されたプリキュア達を怯ませた。そして、スクリーンの映像が消えると同時にホルダーにあるラビットボトルが金色へと変わった。

「何!?？」

「バカな……」

予定外な事にプロス兄弟が驚いていると、それを見ていた和也達は笑みを浮かべる。

「残念だったな。晴夜はお前らが考えてるほど、甘い奴じゃないんだよ」

「あの人は、何度倒れても、その度に強くなって立ち上がる」

「そんな晴夜を、あたし達は信じてる」

「きゅぴー!」

晴夜の想いが通じたのか、和也達もまだ戦う気持ちを取り戻し、起き上がった。

そして、中にいるビルドもブラッドに再度挑む。

「ならば、今度こそ!」

ブラッドがパンチを繰り出す。

——が、ビルドはその拳を掴んだ。

「何?!?!」

「さあ・・・実験を始めようか?」

そのまま掴んだままドライバーのレバーを回し、ビルドの右側の装填されたボトルが光り出した。

『ワンサイド!』

光り出したボトルのエネルギーは右腕に収束されていく。

『Ready go! ジーニアスアタック!』

ビルドのライダーパンチが決まり、ビルドの拳からブラッドの体に注入されていく。

「なっ?!?!」

注入されたエネルギーが危険を察知し、すぐビルドから離れる。

「ぐわあ!これは・・・」

ビルドが注入したエネルギーにより動きが止まったその隙に、ビルドはドライバーのレバーを二度回した。

『ワンサイド!逆サイド!』

左側の無機物のボトルが光り出し、右足にエネルギーが収束されていく。

『Ready Go! ジーニアスブレイク!』

音が鳴ると同時にビルドのキックが放たれ、ブラッドを壁へと激突させた。

「ああああああ……ッ！」

「お前は……俺がビルドする！」

ビルドが叫ぶと、ドライバーのレバーを回した。

『ワンサイド！逆サイド！オールサイド！』

「勝利の法則は決まった！」

右上をなぞりながら決め台詞を言い、ビルドの六十本のボトルが光り出し、ビルドとブラッドの周囲を数式と方式が囲む。

ドライバーから虹色に輝くグラフの放物線が現れブラッドを拘束した。

『Ready go!』

「はあー！」

ビルドが高く飛躍し、放物線を乗るように勢いよくブラッドに向かってライダーキックを放つ。

『ジーニアスファイニッシュ！』

「はあああああ!!?」

ジーニアスファイニッシュを放とうしたその時……

「ハートシュート」

「えっ?ぐわああああ!!?」

後ろから放たれた攻撃を受け、ビルドのジーニアスファイニッシュは無効となる。

ブラッドの拘束は解除され、晴夜の姿に変身解除し、ジーニアスポトルも飛んできた方に転がった。

「ビルド……」

「マナ……」

キュアハートがジーニアスポトルを拾うと、ブラッドは体に着いた塵を払いながら立ち上がる。

「良くやった。キュアハート」

「はい」

すると、ブラッドは部屋の方へと戻ろうとする。

「待てー！」

追いかけてようと晴夜が起き上がる。

「これは、私からのサービスだ！」

振り返ったブラッドが指を鳴らすと、辺りの場所が形態変化を起こした。

すると部屋が、どこか見覚えがある形へと変わってくる。

「これは……」

変化が止まると、上には青い空、そして見たことのある街の風景と、ビルドの後ろに

バーに差し込む。

『タンク！シャドウ！ベストマッチ！』

ボトルを差し込みドライバーのレバーを回すと、ランナファクトリーから黒と銅色のアーマーが形成される。

『Are you ready?』

「変身！」

『深き闇パワーウオリアー！シャドウタンク！イエーイ！』

病む終えなく晴夜はシャドウタンクへと変身した。

フルボトルブレードを出現させると、いきなりラブハートアローで攻撃を受ける。

「!?」

ギリギリの所でフルボトルブレードで攻撃を地面へ受け流す。そこへ、今度はラブハートアローを振り、ビルドに攻撃する。

「・・・マナ」

ビルドはフルボトルブレードで受け止めると、ハートの顔を見つめる。

「・・・」

ハートが力を入れフルボトルブレードで支えるビルドを押し込もうとする。だが、ビ

ルドの方はどこか力を出しきれないように見えた。

「くう……っ! (そうか、シャドウボトルは闇のプシケーの力……プリキュアだと相性が悪いんだ……)」

どうやらシャドウボトルではキュアハートが相性が悪く、ボトルの力を出しきれなかった様だ。

「だったら……」

それを察したビルドが彼女の攻撃を抑えながら、片方の腕を使ってボトルを外し、二本の別のボトルを取り出した。

『ラビット! ロイヤル! ベストマッチ!』

金色のラビットボトルともう一本は光のボトル・ロイヤルボトルを差し込み、レバーを回すとランナフアクトリーが現れ、ハートが離れた。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

スナップライドビルダーが重なり、ビルドの体にアーマーが纏われた。

『光輝くスピーディウオリアー! ロイヤルラビット! イェーイー!』

白いラビットラビットの複眼を持った頭部と、ラビットラビットのボディに黄金のラインが刻まれたボディ、後ろには白いマントを纏った姿——ビルド・ロイヤルラビット

へと変わった。

「……」

「……行くぞ……マナ！」

ビルドがフルボトルブレードを構え、キュアハートへ走っていく。

だが、ハートはハートシユートを連弾でビルドに向けて放つ。

「!?」

咄嗟に避けると、そのままビルドはハートのハートシユートの攻撃を避け続ける。

『ロイヤル！フルボトルスラッシュ！』

ビルドはフルボトルブレードにロイヤルボトルを差し込み、フルボトルブレードから

白いエネルギー体を放ち、ハートの手からラブハートアローを離させた。

「!?」

「今だ！」

ビルドはフルボトルをドライバーから外し変身を自ら解き、ハートの下へと走る。

「!?」

ラブハートアローを気にしていたハートは晴夜に気づくに少し遅れた。そのまま晴

夜は飛び込みハートを強く抱き締めると、勢いよく二人共倒れた。

「ツツ!? 離せ！離せ！」

「ごめん！」

彼女に背中を何度も殴られると、晴夜はごめんと謝る。

「俺が近くいかなかったのが、悪かった。もつとお前の側に入れば……」

もつと早くお前の所に行ければ、こんな顔をさせなかった……」

晴夜は泣きながらハートに謝る。側に居てあげられなかった事、危険な目に合っていたのに直ぐに助けに行けなかったを謝罪する。

「お前から笑顔が消えたのは……俺の所為だ……ごめん」

「……離せ……離して……」

晴夜の言葉を聞いて抵抗をやめると、ハートからも涙が溢れる。

「覚えてる……お前と初めて会ったこの場所？」

このクローバータワーは、二人が最初に出会い、初めて知り合った場所……

「ここは俺達が始めて出会い、ここから全ての始まりだった」

ここで、キュアハートとなったマナを見て、晴夜はビルドだと打ち明けた場所……

二人の運命が動いた場所だ。

「ここから、俺は変わられた。お前のおかげで……一人で戦っていた俺に、初めて一緒に戦ってくれる仲間が出来た。」

そして、六花にありす、まこぴーと出会い。トランプ王国で龍牙に会って、アイちゃ

んにレジーナに和也、亜久里ちゃん、幻冬君……

いつの間にかこんなに仲間が……友達がいた。

そして、俺はお前が好きになった」

「私を……好きに……」

その言葉がハートの心を揺さぶり、ハートの目から涙が溢れる。

「そして、戦兔さんに思い出してくれた。俺が信じるもの……」

——いつも笑顔で落ち込んだ時、苦しかった時はどんな時も、みんなを支える彼女に、

俺は心惹かれ、こいつを守りたい……この笑顔を守りたいと決めたのだ。

「だから、どんなお前になっても……俺はマナを信じる」

「……せ……い」

「なぜなら、俺は……相田マナが好きだから！」

「っ!!?」

その時、ハートの記憶から、頭から何かのフラッシュバックが起こる。

「あ……あ……あ……あああああ……」

その時、彼女は頭の中で十二かに締め付けられるかのような痛みが襲われ、頭を抑えながら苦しみの声を上げる。

「大丈夫！」

晴夜は強くハートを抱きめしめ、大丈夫と声をかける。

「俺が、俺がお前を守る！絶対！」

「！」

その時、晴夜の守るといふ言葉が、ハートの脳裏に残っていた記憶を呼び覚ます。

『まだ邪魔をするか・・・！』

『当然だ。俺はあいつを守るって決めたんだ！』

——それはプロトジコチューと戦ってた時、彼女の心にまで聞こえた、晴夜の叫び声だった。

『貴様は何者だ！』

『天才科学者の息子と弟で・・・キュアハートを・・・マナを守り続けると決めた！仮面ライダー・・・桐ヶ谷晴夜だ！』

晴夜はマナを守ると誓い、プロトジコチューと戦った・・・

彼が心の奥底から言い放った台詞は、ハートがプロトジコチューにプシケを抜き取られていた時でも、彼女の記憶に根強く残っていた。

彼はいつも優しく、どんな時にも必死になって、誰かの為に力を使う晴夜の姿が、

ハートの頭から、どんどん記憶が溢れてくる。

(そうだ……あたしの大切な人……胸がキンキンする……晴夜……)

黒く靄のかかっていた記憶が晴れ、本当の記憶を思い出すと、服が元のピンクに戻り、ハートは晴夜の方へと倒れる。

「マナ!? おい!」

晴夜が焦りながら揺さぶると、ハートが目をひらく。

「……晴夜……」

「元に戻った……」

元の彼女に戻った事に安堵した晴夜が、強くハートを抱きしめる。

「……ありがとう……晴夜、助けられちゃった……」

「良かった……」

「安心したのか、晴夜はハートを見つめる。

「晴夜……ごめん」

ハートがごめんといいかけると、晴夜は手を広げて待ったと伝える。

「待って。謝る前に言わせて。」

「……お帰りマナ♪そして、ただいま!」

「お帰り晴夜♪」

ようやく本当の彼女と出会い、本当の意味で再会する事ができ、ここまで来ることができた。

「晴夜、これ」

ハートが持っていたジーニアスポトルを晴夜に返す。

「ありがとう」

晴夜はジーニアスポトルを手取る。

すると、ビルドドライバーに差ししていたロイヤルとホルダーのタンクボトルが光り出した。

「「えっ?」」

すると、ハートの持つマジカルラブリーパットが光り出し、二人の頭上へ向けて光を灯す。

「マジカルラブリーパットも・・・」

そこへ、ジーニアス、ロイヤル、シャドウの三本のボトルが回りだす。

「ボトルが・・・」

強烈な光が辺り一面に巻き起こり、気づくと三本のボトルが一つのボトル缶へと変わっていた。

「ボトルが・・・一つになった」

晴夜の手に置かれたボトルはクローズビルドみたいに、一つになって誕生していた。

「感じる……このボトルから……」

晴夜はそのボトルを触れると、たったそれだけでそこから何か、凄い力を感じた。

「行こう」

ボトルを握りしめ、晴夜はブラッドの扉を開く。

「伊能！」

晴夜が扉を潜ると、パンドラボックスを横に置いていたブラッドがいた。

「来たか……」

晴夜が現れると隣にハートがいる事に気づく。

「ほうく、キュアハートを取り戻したか」

「もういいでしょ！他のみんなの洗脳を解いて！」

ハートが外にいる他のプリキュアの洗脳も解いてと言う。

「洗脳を解いて欲しいのなら……私を止める事だ」

「止めるさ。こんな戦いを、俺が止める」

「もはや止めることは出来ない！君を消せば、もはや、我らの計画を止めるものはいな

い」

「やってみなきゃわからない」

晴夜はそう言いと、ビルドドライブを腰へと装着した。

「無駄。君は偽りのヒーロー！誰かの代わりでしか無い君では……」

「晴夜は偽りじゃないよ」

晴夜を偽りのヒーローとあざ笑っていたブラッドに、ハートはそんな事はないと彼の言葉を真正面から叩き斬る。

「晴夜は、誰にでも優しく誰かの為に力を使い、明日を作ってきた。そんな晴夜に、みんな助けられてきた」

「マナ……」

晴夜は彼女の名を呟き、ハートの前に出る。

「確かにお前の言う通り、俺は偽りだ。エボルトやお前に利用され仮面ライダーになった……でも、そんな俺を信じてくれる人達がいる」

マナに龍牙、外にいる和也達が、こんな自分を信じている事を目の前にいる男に向けて言い放つと、

「だから、俺は……みんなを守る！」

晴夜は三本のボトルが作り出した、新たなボトル缶を取り出す。

「なんだ……そのボトルは……」

驚くブラッドに晴夜はボトル缶を振り、晴夜とハートの周囲を虹色に書かれた数式が

困む。

「さあ、実験を始めようか？」

決め台詞を言い、ボトル缶の蓋を開けてドライバーに差し込む。

『メサイアニックビルド！』

“メサイアニックビルド”と名付けられたボトルを差し込みレバーを回すと、スナックプライドビルダーが形成されて灰色のアーマーが作られると、アーマーの色が黒の混じった青と白へ変わった色へと変わる。

『Are you ready?』

「変身！」

構えて腕を開き、アーマーが晴夜の体に纏われ煙を上げる。

『光と闇を超え世界を守る！真の姿！メサイアニックロード！イエー！イエー！』

黒い蝙蝠の羽がモチーフの複眼と白い羽モチーフの複眼を含め、黒っぽい青と白のアーマーが全体に纏われてたような姿へと変身完了すると、ビルドを中心に強烈な光の波長が出現した。

「な、なんだこれは……」

「なんだろ……優しい力が伝わってくる……」

ビルドから発せられた波長はハートからは優しい力を感じる。

その波長は、外にいるものまで流れた。

「なんですか・・・これは・・・」

「なんだこの・・・変な気分は・・・」

城から発生した波長を受けたブロス兄弟がすこし苦しみ出す。だが、和也達には癒しをくれるような波長に感じる。

「この感じは・・・」

「優しくて・・・温かい」

「力が奥から湧いてくる」

「なんだか、とても気持ちがいい」

「不思議・・・」

「優しい何かが流れて来る・・・」

「晴夜・・・」

波長から発生する力が和也達に伝わっていると、その波長を受けたプリキュアオールスターズは頭を抑え苦しみ出す。

「「「ああああ・・・!?」「」」」

すると、彼女らの体から何か赤黒いオーラが出ていくのが見えた。

「エースにダイヤモンド、ロゼッタから・・・」

「何かが抜けていく・・・」

「見て！先輩達の服が！」

ラブリーが言うのと確かに、あの波長を受けた所為か、赤黒いがどんどん出ていくと、周りのプリキュア達の服が元に戻ろうとしていた。

「うううう・・・あれ？」

「私達は一体・・・」

「何故、このような所に・・・幻冬」

エース達に名前を呼ばれ、和也達はすぐに近寄る。

「戻ったのか？」

「元に戻ったの!?？」

「何?？」

「どういことですか・・・何が・・・」

ダイヤモンドとロゼッタは洗脳されていた時の記憶が曖昧なのか、何かあったのかわからずにいた。

「私達・・・」

「確か・・・変な人に会って・・・」

「そこから先が……」

どうやら彼女達も、洗脳されていた間の記憶はなくなっているようだった。

その時、スクリーンが再び現れた。

「「ビルド！」」

するとそこから、新しい姿へと変わったビルドが映し出された。

「新しいビルド……」

「やっぱり、晴夜だったんだ」

「晴夜がみんなを元に戻したんだ」

新たなビルドの誕生がみんなを元に戻したんだと、此処にいる皆がすぐに察した。

「そんな……」

「なんで……」

ブラッドの洗脳が解かれ動揺するプロス兄弟の前へ、和也と幻冬が現れた。

「みんながもどったなら！ここから本気だ！」

「ええ！この時を待ってました！」

二人はビルドドライバーを装着すると、和也はブリザードナックル、幻冬はプライムローグボトルを取り出した。

『ボトルキーン！グリスブリザード！』

『プライムローグ!』

冷気が一面に漂い和也の足を膝上まで凍結させ、アイスライドビルダーが出現し。金色に輝く線が幻冬の周囲を囲み、ワニの顎が下から出現した。

『Are you ready?』

「変身!!?」

和也は後ろから氷塊をアイスライドビルダーが押し割り、幻冬は身体に巻き付いたプライムライドビルダーをワニの顎が噛み砕き、変身が完了する。

『激凍心火! グリスブリザード! ガキガキガキ! ガキーン!』

『大義晩成! プライムローグ! ドリヤドリヤドリヤドリヤ! ドリヤー!』

二人はグリスブリザード、プライムローグへと変身した。

「本気だと……」

「それはこちらの台詞です」

リモコンブロスとエンジンブロスはお互いにギアを取り出し、ネビュラスチームガンを取り出す。

『ギアエンジン!』

エンジンブロスは自身のギアエンジンをスチームガンに差し込むと、トリガーを引かないままリモコンブロスにスチームガンを渡す。

『ギアリモコン!』

するとリモコンブ羅斯は差してあつたギアエンジンを抜き、自身のギアリモコンを差し込んだ。

『ファンキーマッチ!』

ネビュラスチームガンから新しい音声が響き渡ると、ブ羅斯兄弟は互いにスチームガンを握り、息のあつたタイミングでトリガーを引いた。

「潤動!!?」

『フィーバー!』

その時、リモコンブ羅斯とエンジンブ羅斯の周囲にエンジン音と電子音と共に現れた歯車が、彼らの身体と重なるように一つとなった。

『パーフェクト!』

「——ヘルブ羅斯、完了」

それは、かつてグリス達がロボットだった時に倒したヘルブ羅斯となり、二人の前に現れた。

「そう来たか……」

「……決着を着けましょう!」

二人も戦闘態勢に構える。

「行くぞー！幻冬ー！」

「はいー！」

グリスとローグが勢いよく、ヘルブロスへと走っていく。

その頃、パルロを倒した龍牙とソードも波長に気づいた。

「晴夜か・・・」

「急ごうー！」

「ああ」

二人も急いで最上階のある部屋へと向かう。

一方、新しいビルドをスクリーンで見っていた拓人達は・・・

「晴夜・・・まさか・・・」

「義兄さん、まさか・・・」

「かつてのトランプ王国の1万年前の戦いの歴史。その時のブラット帝国の戦い・・・その最中、キュアエンプレスの前に一人の男が現れたと言う、伝説がある」

ジョーはトランプ王国に伝わる、資料が少ないために真偽が疑わしかった言い伝えを

総一郎に語り出す。

「一人の男……その伝説は、その男は突如として現れ、その手に剣を持っていたと……」
「そう、その男はブラッド帝国との戦いから、その一振りで終わらせたと……その名を……
メサイア……」

「メサイア……救世主」

「奇跡が……起こったのか……」

拓人が総一郎とジョーに、今のビルドが伝説の剣士と同じだと話し。それが今、ビルドの身に起こっているのだと考える。

そして、ブラッドの前に誕生した新たなビルド、マジエステイの姿が優しく地球の色に近いオーラを纏った姿へと変わった。

「ば、バカな……その姿は……あの時の……剣士」

ビルドを見て過去の誰かと重なるように見えたのか、ブラッドが怯えを見せた。

「綺麗……優しい光が世界を包まれている感じ……」

ビルドがドライバーにあるボトルを見つめ、ボトルに手を置く。

「ボトルから伝わる……メサイア？……救世主って意味か？」

「救世主……」

「救世主か……名付けるなら、メサイアニックロードビルドかな」

「バカな……そんな事はあり得ない！」

先程の余裕な感じから豹変し、狼狽え始めたブラッドがビルドに向かって突撃し、パンチを繰り出してきた。

だがビルドは手を広げ、それを受け止めた。

「!?？」

「ふうん！」

ビルドは気合いでブラッドを吹き飛ばし、壁へと激突した。

「くう……貴様……！」

(凄い……これが……)

今の自分の力に驚き、ビルドは声が出なかった。だけど、これで……

「伊能……お前を……ビルドする！」

「やってみろ！」

二人は飛び上がり、上空で互いにラッシュを繰り出す。

「はああああ！」

「うおおおお！」

パンチ、キックとお互いに負けじと競り合う。

「くう！ならば！」

ブラッドが前回とどめを刺そうとした光弾を作り、ビルドに向けて放った。
『フルボトルブレード・バースト!』

だがビルドは、より力を蓄積されたフルボトルブレード：フルボトルブレード・バーストへと変化した武器を握り、光弾を一刀両断で切り裂いた。

「なっ!?」

ブラッドが驚いている間に、ビルドはボトルを挿し込む。

『ラビット! タンク! ベストマッチバースト!』

金と銅が混ざり合うようにフルボトルブレードを纏う。

「はあ!」

「うおお!?」

そのまま巨大な斬撃を放ち、防御に構えたブラッドを後ずらせる。

「伊能! これで決める!」

ビルドは剣を向け、決着をつけようと試みる。

「……この世界に何の価値がある……」

するとブラッドが突如、この世界に何の価値があるかとビルドに問う。

「この世界は、醜い人間達による争い、暴力、裏切りと言う、あらゆる悪意に満ちている。

そんな世界に、何の価値がある! こんなくだらない世界の救世主になりたいのか?」

ブラッドがこの世界に蔓延る悪意について語り、ビルドに世界を守る救世主になりた
いのかと問い。再び光弾を放つ。

「違う」

だがビルドは光弾を振り払うと、フルボトルブレードを向けて叫ぶ。

「この力は、救世主になるための力じゃない！世界を……みんなと生きるこの世界を守
る力だ！」

そしてこの力は、世界を守るためだと強く叫ぶ。

「この世界は、お前の言う通りかもしれない。でも、俺は人の持つ可能性を信じる！俺
は、みんなと生きるこの世界を守り抜く。そのために戦う！」

フルボトルブレードにさらにエネルギーが蓄積され、エネルギー体によって姿を変え
たフルボトルブレードがさらにエネルギーを増していく。

「行くぞ……」

ビルドはドライバーのレバーを数回回すと、フルボトルブレード・バーストをブラッ
ドに向け蓄積された剣へのエネルギーを放とうする。

『Ready go!』

「メサイアニック！フォトンバースト！」

フルボトルブレード・バーストから巨大なエネルギーの塊の一撃が、ブラッドに向け

て放たれた。

「うおおおおお！」

ブラッドも右手に貯めたエネルギーを放ち、ビルドが放ったエネルギー体とぶつかる。

「うおおおおお！」

「はあくはあああああー!!?」

ぶつかり合うお互いの攻撃は攻防一体だった。

「晴夜……」

その光景を見ていたハートが目を瞑り、ビルドに願う。

そして、外にみんなもその様子を見ていた。

「「晴夜（君・さん・桐ヶ谷君）」」

全員がビルドを信じ、彼の名を叫び出す。

「くう……はあああああー!!?」

するとその声に連動するように、フルボトルブレードのエネルギーがより大きくなった。

「何?？」

巨大となったエネルギーはブラッドのライダーパンチを跳ね除け、そのままブラッドはそのエネルギーに包まれた。

「ぬうおおおおお!!？」

競り合いとなったメサイアニックフォトンバーストの一撃がブラッドを直撃、ブラッドが巻いていたビルドドライバーはブラッドの腰から外れた。

「あ” ああああああ”!!？」

変身解除され転がるように倒れ、外れたベルトからハザードトリガーとクローズドラゴンが転がって落ちていた。

「はあ、はあ、やった・・・」

ブラッドと決着が決まり、やったと呟きながらフルボトルブレードを下に向け、ビルドの方も強制変身解除となった。

次回! Re・ドキドキ&サイエンス!

第14話 二人の最後の変身! 二人はBE THE ONE!

第14話 二人の最後の変身！二人はBE THE O NE！

ジーニアスボトル、ロイヤルボトル、シャドウボトルの三つのボトルが融合したメサイニックビルド。救世主と名付けられたビルドは仮面ライダーブラッドとの戦いに決着をつけた。

「はあ、はあ……」

「あつ……」

ブラッドがビルドに倒され変身解除すると、ビルドも力を使い過ぎた影響かボトルが三本へと戻り、変身解除となる。

「晴夜！」

ハートは変身解除して膝を折る晴夜に急いで駆け寄り、晴夜を支える。

その頃、ビルドから放たれた。メサイニック・フォトンバーストによる振動が下で戦っていたデイケイドとデイエンドも気付く。

「あつちは片付いたようだな」

「じゃあ、こっちも・・・」

二人が互いに二枚のライダーカードを取り出す。

『FINAL ATTACK RIDE! DI DI DI DIEND!』

『FINAL ATTACK RIDE! DE DE DE DECAD!』

ドライバーに装填すると、ディケイドの前方からカードのエネルギー体が出現した。

「ハア!」

「ハア! ヤアアアアア!」

ディエンドが青緑色の光のカードがディエンドドライバーの銃口から渦を巻くように伸びて、ロストスマッシュをロックオンし放たれ。それを受けたスマッシュ達が怯むとそのまま、カードを潜り抜けるディケイドによるライドブッカーの剣が決まる。

「あああああ!!?」

ディケイドとディエンドの攻撃によりロストスマッシュが変身解除された。ディケイドは二人の体内から排出されたロストボトルを拾う。

「フン!」

ディケイドが二人から取り出されたロストボトルを掴むと、拳に力を入れて破壊した。

その頃、外ではヘルブロスとなったブロス兄弟にグリスブリザードとプライムローグが戦闘を繰り広げた。

「おい！どうした！」

グリスが頭突きでヘルブロスを怯ませた。

「終わりか！」

追い討ちをかけるようにロボットアームを繰り出し、殴り飛ばした。

「バカな・・・私達が・・・ありえない！」

「オラァー！どうした！こんなもんか！」

グリスはドライバーのレバーを一回転させる。

『シングルアイス！』

グリスはロボットアームをヘルブロスに向ける。

『グレイシャルアタック！バリーーン！』

巨大化した左腕のアームで捕まえ、ヘルブロスを地面に叩きつける。

「ありえな・・・ありえない！」

起き上がったヘルブロスは巨大な歯車を出現させ、後ろにプリキュア達に放つ。

「っ!? てめえ！」

「洗脳が解かれた彼女達の不要です！」

「させない!」

だが、ローグが前に出てマントで攻撃を跳ね返した。

「バカな・・・あれを跳ね返すとは・・・」

「こんなの、さつきまでのエースショットに比べたら大したことない!」

『クロコダイル!ファンキーショット!』

ローグはネビュラスチームガンを放ち、ヘルブロスを怯ませた。そして、グリストローグが二人で並ぶ。

「覚悟はいいな!心火を燃やしてぶつ潰す!」

「大義のための犠牲となれ!」

二人はドライバーのレバーを回し、高く飛躍した。

『『Ready go!』』

『グレイシャル フィニッシュ!』

『プライムスクラップ フィニッシュ!』

「はああああああ!!?」

「ば、バカなあああ!」

ヘルブロスに二人のライダーキックが決まり、ヘルブロスは変身を解かれると元の二人に分裂し、ブロス兄弟のギアも破壊された跡が見られた。

それを見て、グリスとローグもボトルを外した。

「よっしや！ やったぜ！ どうよ！ 見たか！」

ハイテンションで和也が勝利を喜び、後ろにいるみんなに振り向く。

「…あれ？」

だが和也がそこに目を向けると、さつきまでいたプリキユア達がドキドキとハピネス以外しかないなかった。

「いや〜年下でそこまでやるんなんて私感心したよ〜」

マリリンが勢いよく幻冬の肩を叩いて褒める。

「はあく、ありがとうございます・・・」

幻冬はお礼を言っていると、ミントとアクア、ベリーも彼の下に駆け寄る。

「さつきの攻撃からみんなを守ったの凄いわ！」

「ええ！ とても素晴らしいわ！」

「冷静に相手を見ていた貴方はよかったわ」

「ど、どうも」

褒めていたのはさつきのヘルブロスの攻撃からみんなを守った幻冬だけだった。

「え〜!? なんでも幻冬・・・」

「む〜・・・」

囲まれている幻冬にエースが少々ご機嫌斜めである横で、和也はなぜ幻冬だけ褒められているのか納得がいかなかった。

「俺が一番頑張ったつもりだけど・・・」

「かずやん。私達は見えてたから」

「とても、かつこよかったですよ。和也さん」

「まあ、良かったじゃん」

六花達がそんな和也をフォローしていると：

「ああああ・・・」

「!??!」

あれだけ攻撃を受けた筈のプロス兄弟達が起き上がる。

「あいつら・・・」

「まだ、やる気ですか」

二人がドライバーを構えるが、洗脳されたプリキュアとヘルプロスとの連戦でこれ以上はきついついと感じていた。

「何故です・・・」

「・・・え?」

ガイがそう呟くと、幻冬は様子のおかしい二人に疑問を抱いた。

「止めをさせよ．．．敗北は死！」

「殺せ！早くしろ！」

すると彼らは、敗北した自分達にトドメをさせると言ってきた。

「バカか？」

「!?？」

「俺達は他人命を取るために戦ってるわけじゃねえよ」

「自分達が守りたいものと失ったものを取り戻そうした。それだけです」

二人にトドメを刺さない理由を語ると、ブロス兄弟は尻を地面につけて項垂れた。

そして、最上階にいる晴夜とハートの前によく龍牙とソードが現れた。

「晴夜！ハート！」

「大丈夫か？」

「ちよつと、飛ばし過ぎた．．．」

龍牙が肩を貸し、晴夜はフラフラのままだが起き上がる。

「なあ、あの光なんだ？なんか、優しい光って言うか．．．」

龍牙にもあの時、発せられた光の波長に気づいていた。

「あれは、メサイア．．．救世主って意味だっけ」

「なんだと?」

伊能は確かに今、模造品と言った。

その言葉を聞いた晴夜は、まさかと脳裏に嫌な予感が過ぎる。

「ふうん!」

『エボルドライバー!』

「エボルドライバー!?」

なんと伊能が腰に巻いたのは、エボルトが使っていたエボルドライバーだった。

「どうして、エボルドライバーを!?」

「簡単さ、私も持っていたのだよ。最後の切り札を!」

最後の切り札と叫ぶ伊能。すると、彼の瞳が赤く染まった。

それに反応するかのようにロストスマッシュから元に戻った岸波、斗賀野も瞳が赤くなる。

「アツハツハツハ! ついにこの時が!」

「今こそ! 一つになるで!」

笑い合う二人の体が液化化した。

「なんだ?」

士は突然の事に目を丸くさせると、液状化した二人はそのまま上へと向かう。

そして、液状化した二人は伊能に取り込まれた。

すると、伊能の体内からコブラの姿を連想する龍の様な絵柄が描かれた赤いボトルが生成された。

「今こそ一つになる時だ!」

『マックスハザードオン!』

ハザードトリガーを起動すると、腰にエボルドライバーに装着し、体内から生成されたボトルのキャップ栓を回して、ボトルをグレートクローズドラゴンに差し込む。

『ブラッドドラゴン!』

「ブラッドドラゴン」と鳴り響くと、その音声に合わせてグレートクローズドラゴンがジェットをエボルドライバーに差し込む。

『エピオン!』

すると、伊能の周囲からマッドローグのようなパイプ線が大量に出現した。

『Are you ready?』

「ハツハツ・・・変身!」

パイプ線は変身の叫び声と共に巻きつくくと、一斉に飛び散った。

『Wake up e pionn! Get BRAD DRAGON! フツハツハッハツハツハツハ!』

『ヤベーイ!』

「これは・・・」

そして、そこに出現した伊能の変身したライダーの姿が、ライダースーツのカラーが血のようなワインレッドになり、背中には翼を模した形状の装備が見えた。

「これが私達の真の姿・・・エピオン。仮面ライダーエピオン!」

「仮面ライダー・・・エピオン」

新たなライダー、仮面ライダーエピオンが誕生した。

エピオンはドライバーからハザードトリガーを外し、それをパンドラボックスに入れる。

「なんだあれ?」

トリガーが放り込まれると、パンドラボックスの中のエネルギーが反応し出した。

「「うわああああ!」」

そのエネルギーは衝撃波となり晴夜達を吹き飛ばした。

すると、パンドラボックスから天に向かってエネルギーが放たれ、その下から地球のマグマのようなものが現れた。

「パンドラボックスが・・・」

「これで終わりだ。エボルトが成し得なかった事を、私がやる!」

「エボルトがやらなかった?」

「それよりあのパンドラボックスの光は何なの?」

「あれは地球のエネルギーだ」

ソードが疑問を口にした時、パンドラボックスから放たれたエネルギーは地球のエネルギーと言う声が聞こえ、晴夜達は後ろを振り向く。

「ユウヤ」

そこにいたのは仮面ライダー・パルロのフェルノ・ユウヤだった。

「地球のエネルギーってどういうことだ?」

「お前のハザードトリガーの逆回転した悪意の力をパンドラボックスに注ぎ込み。その力でパンドラボックスのエネルギーは地球の核に貯まった。後はそれを破壊すれば、地球は終わりだ!」

「なんだって!」

「哀れな桐ヶ谷晴夜よ。自分の甘さを永遠に呪うがいい。ハッハッ・・・」

エピオンはそれだけを言い残すと、パンドラボックスが作り上げた地球の地中へと飛び立った。

「どうやったたら、止められるの!」

「それは・・・」

ソードがどうすれば止められるのだと聞くが、ユウヤは言いづらそうだった。

それは苦難の事だと言わんばかりに。

「奴らは地球の核を破壊すればと言った。なら、その前に奴らを倒す・・・それが勝利の法則だ」

だが晴夜が導いた勝利の法則・・・それは核を破壊される前にエビオンを倒す事だと語る。

そう言うと、晴夜もパンドラボックスが作り上げた穴の方へと向く。

「一人で行くつもりじゃねえだろな・・・」

龍牙も起き上がり、晴夜に一人で行くつもりかと問う。

「俺も行くぜ」

龍牙が言うと二人は頷く。

「待つて」

するとハートが晴夜の腕を掴んだ。

「・・・今度は、ちゃんと帰ってこれるの・・・?」

その言葉に晴夜は、前に新世界の裂け目に向かった時に危うく帰れなくなってしま

所だった事を思い出し、どう返せばいいかわからず口をしかめる。

「やだよ。晴夜がまたいなくなるなんて」

「マナ……ごめん。でも、俺は……俺達は行かないきやいけないんだ……」

「晴夜……」

「決めたんだ……もう、迷わないし振り返らない。お前やみんながいるをこの世界を守るために戦う」

「でも……」

ハートから涙が出ると晴夜はコートのポケットから何かを取り出すと、それをハートに見せた。

「これ……」

「これって……」

彼の手に置かれたそれは、ハート型の髪飾りだった。

「その……似合うかなって……」

「晴夜……」

「約束するよ。もう約束は破らないし、お前を守る為にずっと一緒にいるって……だから……」

「わかった……でも……約束して……」

約束してと晴夜に尋ねる。

「私のところに帰ってきて・・・キュアハートの・・・相田マナとして・・・わがままを聞いて・・・」

その約束に、晴夜は何の躊躇いもなく答える。

「うん。約束する。絶対に戻ってくる・・・お前のところに」

いつも優しい笑顔を見せて、戻ると約束する。

そして、ソードは龍牙が行くことを止めなかった。

「行くんでしょ」

「ああ」

「そう」

ソードは龍牙の答えを聞くと、彼女は龍牙に抱きつく。

「ま、真琴・・・！」

「少しだけこうさせて・・・」

「・・・おお」

ソードにいきなり抱きつかれ驚くが、龍牙はソードの頼みを聞き入れる。

「なあ、戻ったら頼み聞いてくれるか？」

「頼み・・・」

「お前の歌、聞かせてくれ！」

龍牙が笑いながらそう言うと、ソードは笑みを浮かべながら

「わかったわ。龍牙だけの独占ライブをしてあげる！」

「ああ、楽しみしてるぜ！」

その様子を階段の下から、士と海東が見ていた。

「いいね。若いくって……」

「まあ、ガキだからな」

「士も夏メロンちゃんを大事にしなよ」

「夏みかんだ！」

こっちはこっちで何やら話していた。

そして、晴夜と龍牙は穴へと構えると、ビルドフォンを取り出し、ライオンボトルを差し込みビルドフォンを投げる。

『ビルドチェンジ！』

晴夜の愛用のバイク『マシンビルダー』、晴夜の戦いを支えてくれた相棒でもある。

二人はヘルメットを被り、マシンビルダーに乗り込む。

「行くぞ……」

「ああ……」

エンジンをかけ回りだすとマシンビルダーは地球核へとエピオンとの決戦へと走る。

「晴夜……」

「龍牙……」

彼女達は彼らの帰りを信じ、二人を見送る。

すると、城から地震と振動音が鳴り響く。

「城が崩れるぞー！」

「早く逃げるよー！」

士と海東が逃げる様に促すと、ハートは自身のパートナー妖精であるシャルルが居ないが為に、晴夜と一緒に全力で戦えない自分を恨みながらも、大切な彼が無事に帰って来ることを祈る。

「絶対帰ってきて、晴夜」

そしてそれだけを呟くと、全員は城からの脱出を始める。

その頃、地球核へと突入した晴夜と龍牙はマシンビルダーを飛ばし、急いでエピオンを探す。

「おい！あれ！」

「エピオン!」

追いついた晴夜と龍牙のマシンビルダーはエピオンの先へと回り、エピオンの前へと止まるとヘルメットを外し、マシンビルダーから降りる。

「来たか? 子供とはいえ、流石は仮面ライダーか」

「お前を倒す。絶対に!」

「もはや、パンドラボックスは我が力となった……貴様らでは何も出来まい」

「そんなの、わかねえだろ」

「俺と晴夜には不可能なんてねえんだよ!」

二人はビルドドライバーを装着し、晴夜はロイヤルボトルとラビットボトル、龍牙はクリアドラゴンにボトルを差し込み構える。

「子供が身の程をしれ! はああアア!!」

エピオンは強烈な殺気のオーラを二人に向けて放つ。

「うっ!」

「すげえ……殺気……こんなの初めてだ……」

エピオンから発せられた殺気はこれまでに感じたことがない程の強烈なプレッシャーで、二人が今まで戦ってきた相手、エボルトにも引けを取らないほどだった。

「けど……負けるかよ!」

「ああー！」

晴夜と龍牙はビルドドライバにボトルとガジェットを差し込む。

『ラビット！ロイヤル！ベストマッチ！』

『クリスタルクローズバースト！』

差し込み終わるとドライバを回し、二人の周囲にライドビルダーが形成され、アーマーが形成されていく。

『Are you ready?』

その音声と共に二人は叫ぶ。

「変身！」

『光輝くスピーディウオリアー！ロイヤルラビット！イエーイ！』

『Burst up！GET CRYSTAL CROSS—Z—DRAGON！Ye
ah！』

晴夜はビルドラビットロイヤルに、龍牙はクリスタルクローズへと変身し、エピオンへと突撃する。

「はああああ！！？」

ビルドのフルボトルブレードとクローズのパンチがエピオンに決まった。

「!?？」

だが、二人の攻撃はエピオンの持つ巨大な大剣に阻まれていた。

「その程度か……はぁ!」

「うわぁぁぁぁ!!?」

一瞬のエピオンの斬撃はビルドとクローズを吹き飛ばし、二人は壁へと激突した。

「早い……」

「マジかよ……」

フルボトルブレードを支えにビルドは起き上がると、クローズも必死に起き上がる。

「マジで……ジコチューやエボルトよりも強え……」

同じブラッド帝国の二人とパンドラボックスの力をモノにしているのか、エピオンは

今まで二人が戦ってきた数々の敵を超えていた。

「だけど……俺達は仮面ライダーだ!必ずあいつを止めれる!」

フルボトルブレードを持ち、ビルドは構える。

「あぁ!俺達は負けない!俺達は仮面ライダーだ!」

二人の負けないと強い気持ちだが、二人を奮い立ち上がらせた。

「行くぞ!」

「おお!」

二人は再び飛び上がり、エピオンへと向かっていく。

「身の程しらずが」

エピオンが大剣を突きつけようとする。

『シャドウ！フルボトルスラッシュ！』

ビルドは闇のオーラを纏ったフルボトルブレードを振り、エピオンから放たれた初撃を防いだ。

「もらった」

だが、エピオンが伏せがれてもすぐさま次の動作に入り、ビルドにカウンターを放とうする。

『ドラゴニックアタック！』

「オラアアアア！！？」

そこへ、クローズのライダーパンチが決まりエピオンを吹き飛ばした。

「今だ！」

『ロイヤル！シャドウ！マジエステイ！』

「くらえ！」

『マジエステイフィニッシュ！』

横切りでビルドのフルボトルブレードから放たれたエネルギー波の攻撃で、エピオンは壁へと吹き飛ばされた。

「やったか……」

壁へと激突したが、爆煙で倒せたかは見えなかった。

「!?」

突如、爆煙からビルドに向けて赤い斬撃が飛んできた。

「晴夜!」

エネルギーの斬撃がビルドに向かって放たれ、クローズがレバーを回す。

『クリスタルブレイク!』

「うおおおおお!!?」

クローズが前に出て、突如して放たれたエネルギーを吸収しようとする。

「くう……」

だが……クローズの羽がエネルギーを処理し切れず、オーバーヒートを起ころうと
していた。

「吸収しきれねえ……」

余りにも巨大なエネルギーに、クローズはその力を吸収しきれなかった。

「うわああああ!」

そして、とうとう羽も限界へと達し、クローズが吸収しきれないエネルギーが直撃し
た。クローズは地面へ倒れ、変身解除となって倒れる。

「龍牙！うおおおお！」

『タンク！フルボトルスラッシュ！』

ビルドがタンクボトルを差し込み振り続ける。だが、剣筋が見えてるエピオンには簡単に避けられる。

「終わりだ」

「うわああああ！！？」

エピオンの巨大な大剣から放たれた一撃がビルドに決まり、ビルドも龍牙の元へ飛ばされ晴夜も変身解除へと追い込まれた。

「ああああ……」

「くう……」

変身解除した二人は受けた部分を抑え、立つことすら辛く感じていた。

（っ、強い……）

（こんなに……強えなんて……）

「所詮は子供が歯向かうなんて、無駄だったな」

エピオンは自身の本来……いや、ひよつとしたらそれ以上の力に軽く酔いながら、晴夜達を嘲笑う。

「無駄なんかじゃない……」

「だが、無駄じゃない。その一言を呟くと、晴夜は起き上がった。」

「何故そうまでして立ち上がる」

エピオンには晴夜がどうしてここまで必死なのかわからなかったが、晴夜はそれを察したのか、笑みを浮かべながらエピオンに理由を語ろうとする。

「わからないか・・・だったら、教えやる!俺はこの世界が好きなんだよ!」

「好きだと?こんな弱い世界が?」

「確かに人間は弱いさ。弱いけど・・・それでも、みんなと力を合わせれば弱い力は何倍にも強くなれる!」

「そうだ!」

必死に力を振り絞った龍牙も起き上がった。

「人間には無限の可能性があるんだ!」

「ああ、二人ダメなら・・・」

「四人で!四人がダメなら・・・」

「六人で!六人で足りなければ・・・」

「八人!十人で!」

「俺達はどうやって絆を作り、今日まで戦ってきた!」

「ここまで支えてくれた、みんなの思いがあれば不可能を可能にする!」

「その思いがある限り、俺達は戦う！」

「それでお前に……」

「俺達は……お前に勝つ！」

その時、二人の思いに反応したかのようにドライバーからラビットとドラゴン、そして、懐にあるジーニアスの三本が光り出す。

「なんだ……」

「これは……」

二人のドライバーからボトルが外れ宙へと浮かぶ。

そして、ボトルは三本が一つになろうと回りだし、回り終わるとボトル缶となり、晴夜の手に置かれる。

「クローズビルド……」

それは、二人が奇跡によって現れるクローズビルドボトルだった。

以前と違い、今回は二人の思いからこのボトルが誕生した。

「結局、俺とお前は……最高のコンビってわけか」

「ああ……俺とお前がいる。それだけで出来ない事はない！それが俺達の勝利の法則だ」

二人がお互いに顔を合わせて前へと進み、再びエピオンに挑む。

「貴様ら、まだ抗うというのか!」

「当たり前だ!」

「何度だつて抗つてやるよ!俺達は仮面ライダーだ!」

「仮面ライダー……」

「覚えておけ!ここにお前を倒す、最高のベストマッチコンビの仮面ライダーがいるんだとな……!」

「「さあ、最後の実験を始めようか!!?」」

晴夜と龍牙は一緒にクローズビルド缶を前に出し、叫ぶ。

「行こうぜ、晴夜。これがこの戦いの最後の!」

「ああ……最後の!」

晴夜はクローズビルドボトルを数回振る。二人の周囲に数式が現れると同時に晴夜はボトル缶をフタを開き、ボトル缶をドライバーへと差し込む。

『クローズビルド!』

ボトル缶を差し込んだ晴夜は、そのままドライバーのレバーを回す。ボトル缶が光り出してランナーファクトリーが前後から出現すると、前後のランナーが金と銀のアーマーが形成され、赤と青へと姿を変わり、それと同時に二人は走り出す。

『Are you ready?』

「変身!!?」

二人が走った同時にランナーが二人と重なり、二人の身体が一つとなって体から煙が現れると、ビルドマークが浮かび上がり、変身が完了した。

『ラビット! ドラゴン! Be The One! クローズビルド! イエイ! イエイ!』

ビルド・ラビットラビットフォームとクローズの二つの外見を併せ持ったような姿をし、腰から下半身にかけてコートのようなローブを装着した姿。

二人の奇跡の変身・・・クローズビルドへの変身を完了した。

「うおおお!」

クローズビルドは宙へと飛びビートクローザーを出現させ、エピオンの大剣とぶつかり火花を散らす。

「はああ!」

「くっ・・・貴様・・・」

エピオンも負けじと力を入れる。

「はああ!」

クローズビルドとエピオンの攻撃の反動で、二人が離れた。

『フルボトルバスター!』

今度はフルボトルバスターを出現させ、砲撃モードへ変え構える。

『フルフルマッチデース!フルフルマッチブレイク!』

「はあああああ!」

フルフルボトルを差し込み、赤と青のエネルギー弾を放ち続ける。

「うっ・・・」

エピオンはブラッドソードを盾として防ぐ。

「はあ!」

動けない隙にフルボトルバスターのモードを変えて攻撃し、エピオンからブラッドソードを落とした。

「なっ!」

「オリヤヤヤ!」

ブラッドソードを落とした隙にクローズビルドがパンチを繰り出した。

「調子に乗るな!」

エピオンは腕から鞭のようなものを出現させ、クローズビルドのフルボトルバスターを落とした。

「くっ・・・まだまだ!」

クローズビルドは鞭を掴み、それを利用し引き寄せると、エピオンにもう一度パンチ

を繰り出しぶつ飛ばした。

「ふん！」

するとエピオンは龍の様に巨大で忌々しい姿のコブラを出現させ、頭の上に乗り込む。

「はあ！」

それを見たクローズビルドは銀色のドラゴンを出現させ、こちらも頭の上に乗り込む。

現れたドラゴンとコブラは何度もぶつかり合い、お互いに口から攻撃し合う。

「何故！そこまで戦う！」

「俺達には待つてくれる人達がいる！」

「その人達のために！だから・・・」

『フルボトルブレード！』

「お前を倒す！」

『ロイヤル！シャドウ！マジエステイ！』

光と闇のエネルギを纏うフルボトルブレードを手に持ち、エピオンへ向けられた。「ほごくな！貴様らは所詮は利用される、子供に過ぎん！」

エピオンもブラッドソードでフルボトルブレードに応戦する。二本の剣はぶつかり

合いとなり、二人の手から離れた。そのまま肉弾戦と変わり、両者鏖迫り合いとなる。

「貴様ら二人が行った過ちを関係ない人が知れば、お前達はただの世界を危機に陥れた存在!誰もお前達は認めない!ここで私を倒し。彼女ら以外は、誰も君達を感謝することない!」

「わかつてねえな!」

「誰かに感謝されるでも、認めて貰えるなんて理由じゃない・・・俺達はそんなことのために戦ってきたじゃない!」

「では、何故だ!何のために戦う!何がお前達を動かすんだ!」

「そんなもん、決まってるだろ!」

その時晴夜は、以前のマシユー事件で思い出した自分の原点の記憶——父が言った言葉の頭に浮かべるのだった。

『最後に聞かせて・・・』

思い出の世界に捕らわれたマナを助ける為に家の玄関を開きかけると、晴夜は思い出したかのように振り返り、父に問いかけた。

『父さんはなんで科学者になったの?』

父がどうして科学者になったかを知らなかった晴夜は、ずっと気になっていた疑問を

聞き出すと、拓人は笑みを浮かべながら口を開いた。

『・・・それは、LOVE&PEACEだ!』

『えっ?』

『父さんは、愛と平和の為に科学者になったんだ!』

『・・・最高だよ。父さん』

父は晴夜にピースサインを作ってそう語ると、それを聞いた晴夜は玄関の扉を開き、彼女を助ける為に走り出した。

そしてその言葉が、彼が戦い続けるが為の理由になった。

それを忘れないために、今を必死に生き、必死に戦ってきた。

それが、父の願いであり、己の永遠の夢だから。

「俺達が戦うのは愛と平和の為だ!」

「愛と平和・・・そんな叶わぬ願いの為に、戦うと言うのか!」

「そうかもな!ラブ&ピースがこの世界で脆い言葉かなんて知っている!それでも、唄うんだ!俺達が少しでもそんな世界に行けるように努力して、多くの人がそれを胸に生きていける世界を守る!そのために俺達は戦い続ける!」

「そんな思いは、私のような存在が何度もぶち壊すぞ!」

「そんな事は俺達がいる限り何度でも抗ってやる!」

二人はエピオンの罅迫り合いから再び戦闘に戻る。クローズビルドはパンチとキックと繰り出し、エピオンも同じように対抗する。そして、一度両者が離れる。

「俺達がみんなの明日を作る!その思いは誰にも撃ち碎けない!」

その言葉を言うときクローズビルドの体が光り輝きだす。

「なんだと・・・!?」

「うおおおお!!」

クローズビルドの体が光を放ち、その姿が変わろうとする。

その時、クローズビルドの左右の体の色が、ビルドのフォームが金色へ、クローズのフォームが銀色へと姿を変える。

「クローズビルド!ゴールデンシルバーフォームだ!」

「なっ!?」

「行くぞ!!」

クローズビルドはさつきまでとは比較ならないスピードで攻撃を繰り出した。

重いパンチから放たれる一撃は、エピオンにかなりのダメージを与える。

「何故だ・・・何故こんな力が・・・人間に・・・」

「その理論は一つ・・・」

「何故なら俺と晴夜は最高の……」

「コンビだからだ！」

クローズビルドが勢いよくパンチを繰り出す、エピオンは防御の構えでなんとか防いだ。

「コンビ……そんなものに……」

意味は無い。エピオンはそう言いかけるが、その前にもう一発パンチを放ったクローズビルドが叫び続ける。

「そんな事ない！相棒が友達がいる。それは人と人の最初の繋がりになれるんだ」

「最初は嫌いかもしれないが、段々とそいつの事を知って、次第に好きになっていく！」

「迷った時、苦しくなった時……」

「そんな時に一緒にいる仲間が入れば一緒に乗り越えられる」

「それが、俺達の絆だ！」

さらにパンチを繰り出してエピオンを怯ませ、最後にキックを放ち離れると、クローズビルドはドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

すると、二人の着地点にどこからか金色となったベストマッチラビットが出現した。ベストマッチラビットは足を後ろへ向け、クローズビルドを後ろ足に着地させると同時

に蹴り上げた。

「はあ!」

クローズビルドの右足に青い炎が纏われると、そのままエピオンに直撃。地上へと上げていくと、背後にベストマッチドラゴンが現れてブレスを発射した。

「なんだ!何故こんな事が!?!」

「今の俺達は負ける気がしねえ!オリヤヤヤヤ!」

クローズビルドのキックはそのまま地上へと向かっていく。そのまま二人は、エピオンを地球の地中に行く為の穴から引きずり出した。

そして、エピオンが地上へと現れると、クローズビルドも続いて現れた。

「勝利の法則は決まった!」

『Are you ready?』

仮面のアンテナをなぞり上げて手を広げると、ドライバーから決め台詞を叫ぶ音声が鳴り響き、金と銀の二本の放物線が現れ、エピオンを拘束した。

そして、クローズビルドはその放物線の上と進む。

『Ready go!』

「ラブ&ピース・・・フィニッシュ!!?」

滑るかのように加速したクローズビルドが放ったライダーキックが、そのまま放物線

の終着点で拘束したエピオンに向かって滑り続ける。

「ぐうおおおおお！」

「はあああああー!!?」

そして、遂に二本の放物線がエピオンの終着点へとたどり着き、彼の胴体を突き抜ける。

「ぐわああああー!!?」

クローズビルドが突き抜けると、エピオンは苦しみの声を高く上げた。

「馬鹿な、こんな子供二人に・・・」

「・・・」

「そうか・・・エボルトが貴様らに執着した。理由がわかったよ・・・うわあああああ

!!?」

エピオンはそう叫ぶと体が爆破し、跡形もなく散った。

エピオンの爆破したその下には晴夜と龍牙から奪ったハザードトリガーとクローズドラゴンが落ちていた。

——そして、パンドラボックスの光の柱も無くなり、地球の核へ穴も消えた。

次回! Re. ドキドキ&サイエンス! last science!

最終話
訪問者・・・
未来へ

最終回 訪問者：未来へ

ブラッド帝国・・・仮面ライダーエピオンとの戦いから半年が経った頃、晴夜は三年生へと進級していた。

あの戦いの後。プリンセスプリキュア、魔法使いプリキュアと新しいプリキュアと共同に多くの事件もあったが、みんなの協力もありなんとかなった。

その後も、新しく仮面ライダーとして現れた時見ソウゴと明導ゲイツ、HUGつとプリキュアのみんなとティードと名乗るクライアス社の奴を倒した。

その事件から3日過ぎたある日・・・

俺はいつものように自分の家の外の研究室で発明とビルドドライバーのメンテナンスをしていた。

その時、扉の方から音が晴夜の耳に届いた。

「龍牙か？帰って・・・」

研究室の扉を開く音が聞こえてた為振り向くと、そこにいたのは龍牙ではなかった。

「久しぶりだな。桐ヶ谷晴夜」

その顔は、いつになっても決して忘れもしない人。

雰囲気が以前会った時に比べて少し暗くなったかもしれないが、間違いない。

仮面ライダーディケイド・・・門矢士だ。

「ソウゴ達から聞いていましたが、またこの世界に来ていたんですね」

「ほう、あいつに会ったのか？」

「ええ」

この人と会うのは半年振りだ。

あの時は、この人と・・・桐生戦兔さんに教わる事が多かった。

「それで、今度はこの世界に何の用ですか？」

「この世界の時空が乱れ出した」

「えっ？」

「原因が分からないが、おそらくクライアス社って奴らが何かやってるかもしれない」

「クライアス社・・・」

「この世界で影響を受けないのはお前だけ・・・手伝ってくれないか？」

「わかりました・・・士さんには恩があります。協力しますよ」

こうして俺は、士さんに協力する事を決めた。

「それで、俺はどうすればいいんですか？」

協力するのは良いが、俺は士さんに何をすればいいのかと問う。

「調べたいのは四つ……一つはクライアス社の社長と……スウォルツって奴の正体……二つ、ツクヨミという奴の過去と素性だ」

「ツクヨミって……」

確かその子は、この前のティードの事件でソウゴ達と一緒にいた少女で、彼女はプリキユアでもなければ仮面ライダーでもない筈だ。

「……スウォルツとツクヨミが、あの世界の奴らと同じとは限らんから……」

「……えっ？なんか言いましたか？」

「……いや、何でもない、こっちの話だ。」

三つ……はぐたんって赤ん坊だ」

「……」

ツクヨミの事を考えていたせいで聞いてなかったが、はぐたんの名が出た事でさっきの言葉の疑問は頭の隅に追いやられた。

「その様子は、何か感づいているのか？」

「はぐたん。あの子はただの赤ん坊ではないと思います。なんとなく、アイちゃんのように特別な赤ん坊ではないかと思っています」

「最後は……」

「時見ソウゴ……」

「ソウゴを……」

「今回の時空の乱れは、時見ソウゴが関係している。それをクライアス社の奴らが利用している」

「あのソウゴが……」

こうして、晴夜は門矢士と共にクライアス社について調べてる事にした。彼はどうしてもこの世界を守ると決めていた。あの戦いから……

——その理由を語るには、今から半年前に遡る必要がある。

ブラッド帝国との決戦を行ったあのブラッド城での戦いで、彼らは大事な人を取り戻した。そして、仮面ライダーエピオンとの決着も付けた。

「ラブ&ピース……フィニッシュ!!?」

「ぐうおおおおおおー!」

「はあああああー!!?」

ゴールデンシルバーフォームへとクローズビルドへと進化し、二人が叫んで放つたらイダーキツクはエピオンを貫きこの戦いの終止符を打った。

二人はその後、エピオンの爆破した下に落ちていた、晴夜自身のビルドドライバー、ハザードトリガーとクローズドラゴンを拾う。

「終わった……」

「やったな……でも……」

「……」

二人が変身アイテムを拾うと、二人はそのまま地面へ倒れた。

「晴夜!」

「龍牙!」

二人が地中から現れる姿を見たハートとソードが駆け寄ると、二人は強制変身解除となり、クローズビルドボトルも三本のボトルへと戻ってしまった。

「晴夜! 龍牙!」

「二人ともどうしたんですか?!?」

和也と幻冬も駆け寄るが、二人は倒れたまま何も言わない。

「晴夜！晴夜！」

「龍牙しつかりしなさいよ！龍牙！．．．龍牙．．．」

ハートとソードは必死に二人を揺すり声をかけ続ける。しかし、二人はうんともすんとも言わない。

しかしその時．．．

「がああゝ、がああゝ．．．」

「「「「えっ？」」」」

二人から出た声に、一同が驚愕した。

「今、がああゝって．．．」

「もしかして．．．」

ブラックとホワイトがもしかしてと思ったが、そのもしかしてである。

この二人は、ただ気を失って倒れたのではない。

「ふふう．．．凄いでしょゝむにやむにや．．．最高でしょゝ、天才でしょゝ」

「ちよつとこれ．．．」

「うん．．．」

「今の俺は．．．負ける気が．．．しねえー！！？」

「間違えないようね」

「「「「寝てる!!?」」」」」

二人は疲れきって、ただ眠っているだけだった。

「やつぱ．．．ただのガキか」

「もうく食べられねえよ」

「さあゝ実験を．．．」

辛かったのはほんの数日だったが、全てをやりきた二人の顔は満足そうに笑って寝ていた。

それから二人は運ばれて、しばらく眠り続ける．．．

『——んっ．．．』

その時、晴夜が目を覚ました。しかし．．．

『いっは．．．っ?』

目を覚まして起きてみると、どこかわからない荒野にいた。

『声．．．』

奥の方からも声が聞こえてそっちへ向かう。

『これは．．．』

その光景に、晴夜は目を大きく広げながら驚いた。

『はああ!』

『デリヤヤヤ!』

『タア!』

『オリヤヤヤヤ!』

そこにいたのは、多くの怪人達と戦っている18人の戦士だった・・・

そう、彼と同じ……いや、幾たびの修羅場を潜り抜けた仮面ライダーがいた。その数は分かる限りで18人。

『ゴーストに鎧武、ウィザード・・・知らない仮面ライダーまで、なんだここは・・・』
会ったことのある彼らも、共に戦っている。何故こんな現状となっているのかと、晴夜は混乱してわからなかった。

その時・・・

『タイムマジン!』

『うおお!』

いきなり巨大なロボットが晴夜の前へと現れた。

「ロボット・・・」

そのロボットのコクピットの入り口のようなものが開き、そこから一人降りてきた。

「仮面・・・ライダー・・・」

その人物の姿は、まるで金属製の腕時計がモチーフになっているかのようで、銀の鎧部分にはマゼンタと黒が混じり、アンダースーツは黒。額には「カメン」の文字が刻まれてあり、複眼にあたる部分はマゼンタの「ライダー」と書いてあった。

『君の力は、ここに ある よう？』

その仮面ライダーは、ビルドの顔の描かれていた時計型のデバイスを見せた。

『!??!』

そのデバイスは、あつちの世界で桐生戦兔から預かったデバイスと同じだった。

『ビルドー！』

「アーマータイムー！」

ビルドと発声したウオッチをドライバーに装填するとロックを解除し、ドライバーを回す。すると、前から『ビルド』という文字が現れ、ビルドのようなアーマーも出現した。

『イエエー！ー！』

そのまま陰から飛び越え、体にアーマーが装着される。

『アーマータイムー！ベストマッチー！ビルドー！』

「ビルド」と描かれた複眼が設置されると、両肩に赤と青のフルボトルのような大型デバイス、右腕には大型のドリルが装備されていた。

『行くよ』

そのままビルドの武装を纏ったライダーは、ライダー達が戦っている中に飛び込んでいった。

『はああ！』

謎の仮面ライダーは、一人で向かってくる怪人を寄せ付けなかった。しかも、他のライダーが戦っている怪人までも相手にしていた。

『ヤアアア！』

腕につけられたドリルが次々と決まっていく。しかも、その戦い方がまるでビルドそのものようだった。

『決めるよ！』

二つのウオッチを起動させ、ドライバーを回転させる。

『フィニッシュタイム！ビルド！』

グラフの放物線が現れると怪人達を拘束し、放物線へと乗り込み加速する。

『ボルテックタイムブ레이크！』

『オリヤヤヤヤヤ！』

そのまま滑りつづけ攻撃して行くが怪人を倒しきる。しかし、その所為でライダー達まで巻き添えを喰らっていた。

『誰だ？なんで、俺の力を？』

怪人がいなくなったの見て、晴夜が謎のライダーに何故ビルドの力を持っているのだと問う。すると何を思ったのか、謎のライダーはドライバークラウオッチを外す。

『知りたい？』

変身前の姿は、晴夜と同じくらいの少年だった。その少年は見覚えのない制服を着ており、同じ年である筈なのに、若い感じが掴めそうになかった。

『俺は……仮面ライダージオウ！時見ソウゴ！』

『時見……ソウゴ……？』

『全ライダーの力を集める魔王に……なるんだってさー！』

時見ソウゴが晴夜にそう告げると、そこで彼の意識は途切れた……

——だが意識が途切れるその前、一瞬だけ彼の後ろに、5歳程年上に見える、彼そっくりの男性が映った様に感じた。

「うとうとう……」

目を開けた時、広い部屋のベッドに寝ていた。

起き上がろうとすると、手に何か握られている感触があった。

「マナ……」

その方向を見ると、ベッドの横の椅子で手を握っているマナの姿があった。

「……ただいま」

寝ているマナにただいまと呟く。

「ん……」

するとマナの目が動き、そのまま目が開くとマナが目を覚ました。

「おはよう。マナ」

目を覚まして晴夜がおはようと言う。

「おはよう。晴夜」

お互いにおはようと言いつ返す。

「ねえ?ここは?」

「あたしの家だよ」

「ええ!!?」

「ここはマナの家『ぶつたのしつぽ亭』で、ここはマナの部屋だったらしい。

「なんで……ここに?」

「晴夜と龍牙君。あの後倒れて寝ちゃった事覚えてないの?」

「そういえば……」

思い返せばあの後、エピオンを倒し奪われたハザードトリガー、クローズドラゴンガ

ジェットを拾った所までは良かったが、その後には達成感を感じたのは覚えていた。

しかし、クローズビルドから変身解除してからの記憶がない。

「他のみんなは？」

「みんな、元に戻ったよ。みんな晴夜にありがとうだって」

あの時、ジーニアスとロイヤル、シャドウ三本のボトルの融合したメサイアニックフォームでみんなを元に戻ったと知る。

「近いうちに、みんな晴夜にお礼を言いに来るって」

「そうか……」

「晴夜……本当に今回はごめんね」

マナは今回の事件で、晴夜と龍牙を傷つけたのだと頭を下げる。

「良いってそんなの。もう謝らなくても」

晴夜は頭を下げなくても良いと言う。

「みんな本心じゃなくて操られていたからしようがなかったって、わかってるから」

「ううん。それでも、あたしは晴夜に向けて攻撃したり……偽りだって言っちゃった……」

えっ？

マナが言いかけると、晴夜は彼女の頭を撫でる。

「もういいよ。マナの気持ちは十分だよ。俺はいつものマナとこうして会えて最高だ」

「晴夜・・・うん〜♪」

笑顔でマナも晴夜の事を抱きしめ返した。それからしばらくして、二人が離れるとマナはあの時、決戦前に晴夜からハート型の貰った髪飾りを渡した。

「晴夜、付けさせて・・・」

「うん・・・下手くそだったらごめん」

晴夜はマナが手で止めている髪の毛の部分に髪飾りをつける。

「どうかな？」

「ありがとう。晴夜」

付けてあげるとマナは笑顔で返し、晴夜も笑顔で返す。

「あつ？あの人は・・・」

その頃、ぶたのしっぽ亭の下のレストランの方では・・・

「うくん。うまい」

士が一人ご馳走になっていた。彼はあの後、晴夜をここまで運んでくれたようだ。

「：：：そういうえばお前、あの娘と一緒に居なくて良いのか？あいつ、お前のパートナーだろ」

するとふと思い出したかのように、士は何処かに出かけようとしているシャルルに声を掛けて、ようやく戻ってきたマナと一緒に居なくて良いのかと聞く。

「…確かに、本当は心配した分まで、マナと一緒に居たいシャル．．．でも、それは晴夜の方が強いシャル。だから、しばらくは二人きりにしてあげるシャルよ」

「．．．そうか」

シャルルの話を聞いた士はそれだけ言うと、シャルルが何処かに散歩に行く様子を横目に再び料理に手をつける。

それからしばらくして、晴夜とマナが降りてきた。

「ようやく、目が覚めたか？」

晴夜が士に近づく。すると、ぶたのしっぽ亭の扉が開く音が聞こえ、そこに現れたのは、仮面ライダーパルロのユウヤだった。

「お前は．．．」

「桐ヶ谷晴夜．．．お前に話がある」

「．．．いいよ」

「晴夜．．．」

「大丈夫」

心配するマナを安心させながら、戦う意思があるのかと警戒してボトルは手に握ったまま、晴夜は彼の話を聞く為に外へ出る。

その頃、真琴の住むマンションの方では龍牙も目が覚めていた。

「うめえ〜！」

その後、龍牙、真琴、DBの三人は近くのファミレスへと向かい。こちらで龍牙が元気の良い食欲振りを見せるのだった。

「すいません！パスタとポテト追加で！」

「…あんだ、まだ食べるの？」

真琴がテーブルの上を見ると、既にオムライスやハンバーグなどかなりの量を食べていたのか、大量の皿が積み重なっていた。

「いいんだよ。昨日まで色々とおったから飯が喉を通らなかつたんだよ。いただきます

！」

「もう〜・・・」

そのまま真琴は、龍牙の空腹が満たされるのを待っていた。

一方で、六花、ありす、和也の三人は、和也の農家の実家の近くにある、四葉家が管理しているマンションに来ていた。

「こちらへどうぞで」

三人の一緒について来たプロス兄弟のライとガイは、そのまま部屋の中へと入る。

「悪いな。ありす用意して貰って」

「いいえ。今回は和也さんにも恩があります。これくらいお礼をさせて下さい」

「でも、かずやんもあの二人を自分の農家で雇うなんてね」

「なんか、あの二人を助けてやりたいって思ったんだ」

元々は人間であり、ブラッド帝国では伊能達と一緒にだった。だがその伊能がいなくなり、いく宛もなかった二人を、和也は自分の家の農家で働く代わりに家を見つけやると言ったのだった。(ありすのおかげだけど) ちなみに二人の使っていたネビユラスチームガンは拓人に渡り、彼の手に預けられた。

「ありがとうございます。カシラ!」

「この御恩、消して忘れません!カシラ!」

そしてプロス兄弟はと言うと、初めて会った時の死んだ様な目でなく、清々しいくらいの笑みを浮かべ、ハイライトを大きく輝かせながら和也を「カシラ」と呼ぶ。

「ああ・・・あのな、カシラって言うのはやめてくれないか・・・普通に和也かかずやんでいいから・・・!」

「いいんじゃない。カシラでも!」

「和也さんには似合ってますよ」

「えええ・・・」

二人は和也への恩があるためか、それから彼をカシラと呼ぶようになった。

そして幻冬とレジーナは、亜久里の住む円家にいた。

「お二人共どうぞ」

亜久里が二人にホールケーキを用意してくれた。

「わあ〜」

「美味しいそう〜食べてもいい!」

「はい。迷惑をかけたお礼です」

「でも、僕は何も・・・」

今回、彼女らを洗脳から解放したのは晴夜であり、自分は晴夜と龍牙が敵を倒す時間稼ぎの為にみんなの相手をしていただけ。それにあの時、早く来ていればこんな事にはならなかったのではないかと幻冬は自覚していた。

「いいえ、あなたも晴夜さんと同じ頑張っていました」

「亜久里ちゃん・・・うん」

そう言ってくれるだけで幻冬は嬉しかった。

「あつ!そうですわ。私が食べさせてあげます!」

「えええええ!!?」

すると亜久里が食べさせてあげると言われ、流星にそれは幻冬にとつては初めて体験だった。

「私ではダメですか？」

「あ、いや・・・そうじゃなくて・・・その・・・」

幻冬は顔を赤くしながら目を逸らすと、亜久里は頬を膨らませながら彼の顔を片手で掴んで自分の顔の方に向ける。

「うによ!」

「・・・まさか・・・お姉さまの方がよろしいのですか!?!」

この前の戦いで亜久里よりも年上のプリキュアの皆に褒められていた事を思い出し、彼女は年上に食べさせて貰うのが良いのかと聞き出した。

「ち、違うよ!そんな事・・・」

「では、何故ですの!幻冬!」

「だから・・・」

「じゃあ、あたしが貰う。あん!」

「「あつ!?!」」

亜久里がフォークで突き刺していたケーキを、横からレジーナが食べてしまった。

「レジーナ!!?!」

「いいんじゃない。味は同じなんだから」

「そう言う事ではありません!」

亜久里は幻冬に食べさせてあげる筈のケーキを横から食べたレジーナに激怒だった。

(はあく……良かったのか残念だったのか……わかんないや)

「アイ〜!」

「アイちゃん。一緒に食べようか?」

「アイ!」

亜久里とレジーナが口喧嘩しているのを見ながら、幻冬はアイちゃんを抱っこして膝の上に乗せながら亜久里の作ったケーキを食べていた。

その頃、ユウヤに声をかけられた晴夜は外のベランダの方で話をしていた。

「お前に聞きたいことがある……何故、偽りの仮面ライダーとエボルト達に言われながらも、お前はライダーとして戦い続けた」

ユウヤは何故、偽りの仮面ライダーと言われ、利用されている存在でありながらも戦い続ける事が出来たのだと晴夜に聞く。

「……簡単だよ。みんなを守りたかったから」

晴夜はみんなを守りたかったのだと述べた。

「エボルトによって作られたヒーロー……利用される存在。確かに何度も言われたし、戦う理由も失いかけた時も沢山あった。でも……」

——その度に、戦う理由を思い出せてくれるみんながいた。作られた存在、ハザードトリガーの暴走、エボルトの計画を知らず手伝っていた……それでも、俺にはマナが龍牙、士さん、戦兔さんにみんなが俺が本場に守りたいものを思い出させてくれた。「ラブ&ピース……愛と平和の世界を守る為に戦う。それが俺が戦う理由。それはエボルトでなければ伊能でもない。俺が最初からずっと思っていた事だ」

「ラブ&ピース……」

ユウヤはプロトスコープピオンロストボトルを取り出す。

「そんな世界は……ただ綺麗如だと。ずっと思っていた」

トランプ王国の崩壊によるジコチューの支配。

彼はあの現場を見て、そんな世界は無理だと。力による支配が絶対だと感じた。

「けど、お前がブラットの時に見せたあの姿に……」

だが晴夜の変身したメサイアニックフオームを見たユウヤは、彼から発生したあの光の粒子がとても優しいものである事を感じていた。

「桐ヶ谷晴夜。お前の唄う綺麗如が、どこまで叶うのか見せて貰う事にする」

「えっ?」

「だが、この世界の最強の仮面ライダーは必ず俺がなってやる。但し、今度はお前達の言う正義のヒーローとしての…な」

そう言つてユウヤは晴夜から去つて行く。

「正義のヒーローか…」

「よかつたね。晴夜の考えがわかつてくれて」

「うん」

彼なら今度こそ、正義の仮面ライダーになれるかもと晴夜は思う。

「おい」

晴夜がユウヤの後ろ姿を見ながらそう感じていると、土が晴夜に声をかける。

「お前に、仮面ライダーの真実を話しておく必要があるな」

「仮面ライダーの真実？」

仮面ライダーの真実と聞いたマナは、それはどういう事だと思ひながら耳を傾ける。

「仮面ライダーは、お前達プリキュアとは違う逆の力から誕生したものだ」

「逆？」

「仮面ライダーとは、怪人のなり損ない。悪から生まれたものだ」

「!?」

それを聞いてマナは、改めて考えてみれば晴夜達が仮面ライダーになれるのは、ス

マッシュユになるネビュラガスと同じ力があるからだと思いつ出した。

「だから、何ですか？」

「晴夜？」

だが晴夜は、仮面ライダーは悪から生まれた力と聞いても、動じる気配はなかった。

そこにいた晴夜は、偽りのヒーローである事を思い悩んでいる面影が、何処にも無かった。

「例え、ライダーの力が悪から生まれたとしても・・・俺は、俺達はみんなを守るためにこの力を使う決めて仮面ライダーになる事を選んだ！」

悪から生まれたものだとしても、彼は最初からずっと愛と平和の為にこの力を使ってきた。それが、彼が目指す仮面ライダーである。

「ふん。そうか」

士はその言葉を聞くと後ろを振り向き、歩き出した。

「桐ヶ谷晴夜。お前の見極めは合格だ」

「えっ？」

士は晴夜は合格だといい、灰色のカーテンを作り出した。

「待っててください！もう行くんですか？」

「俺はこの世界の人間じゃない。用が済んだら出て行く」

「……土さん」

「まあ、また機会が会った時は、今回の借りとして一緒に戦ってくれよな！」

後ろを向いたまま手を振り、土はオーロラカーテンの中へと入って行き、また別の世界へ歩み出した。

「……」

晴夜は戦兔から託されたビルドドライバーを取り出した。

(戦兔さん、土さん。ありがとうございます)

心の中で桐生戦兔と門矢士にお礼を言う。

「……マナ。もしかしたら、俺が仮面ライダーの所為でまた今回みたいに迷惑をかけることになるかもしれない。だけど……」

「晴夜」

マナは晴夜に飛びつき、二人はそのまま倒れる。

「……マナ」

「大丈夫。あたしは晴夜から絶対に離れない」

「!?」

「晴夜は晴夜！ビルドはビルド！関係ないよ。どんな時でも一緒に乗り越えようみんなで！」

「マナ……うん」

晴夜は目から、少しだけだが嬉しい涙を流した。

「晴夜」

「ん……」

そのまま、彼らは倒れたまま口付けを交わした。

——こうして、彼は決めた。

どんなに蔑まれ嫌われても、大好きなこの世界を守る為に、仲間と愛している彼女を守り続けると、そう決めた。

そして、この世界に危機が訪れた今回。彼はこの世界に現れた門矢士と共にクライアス社を中から調査していた。

「よし……ここまで来れば！」

この日、晴夜は門矢士とクライアス社に潜入し、クライアス社のコンピュータから彼らの計画を調べていた。

「これは……」

そこに記載されてあるのは、スウォルツとツクヨミの関係。そして、彼らが狙うマ

ザーの力を持つ存在についての情報だった。

「スウォルツとツクヨミが別の世界から……」

スウォルツとツクヨミは、こことは違う平行世界から現れた存在である事がわかった。

そして何より晴夜の目を焼き付けたのは、クライアス社が探しているマザーの力を持つ少女……キュアトウモローだった。

「この顔……」

その少女の顔を見た晴夜は、何処か見覚えのある顔だった事に気付いた。

「!?もしかして……」

〈パタン!〉

その時、コンピュータールームの扉が開く音が聞こえ、後ろを振り向く。

「侵入者を発見!」

そこに人型のロボットのようなのが現れた。

「カッシーンって奴か……」

そのロボットは、このクライアス社の会長であるオーマジオウの部下でもある、ロボットのカッシーンであった。

「確認。仮面ライダービルド。桐ヶ谷晴夜。我が魔王の邪魔をするなら排除する!」

カッシーンが識別センサーで、目の前の人物が晴夜である事を確認すると、手に持つ三又槍を晴夜に向けて振り抜く。

「さあ、実験を始めようか?」

晴夜は咄嗟に躲しながらビルドドライバーを装着し、ボトルを二本取り出すと数回振り始め、後ろからいくつかの数式や化学式が現れるとキャップを回した。

『ラビット!タンク!ベストマッチ!』

兎と戦車のシルエツトが浮かび、『R/T』と表示された。

そしてレバーを回し、前と後のビルダーからアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身!!?」

一度構えた後、両手を一度交差させてバツと広げるとアーマーが中央の晴夜に重なるように装着される。

『鋼のムーンサルト!ラビットタンク!イエーイ!』

赤くピンと伸びた兎の耳のような形状の複眼を持つアーマー、青い戦車のような形状をした複眼を持つアーマー……それが一つとなり、体から煙が吹き上がり仮面ライダービルドへと変身した。

ビルドとなり、すぐ様ドリルクラッシャーで反撃に出る。

「ふうー！」

ドリルクラッシャーとカッシーンの持つ武器がぶつかり、お互いに譲らない攻防を見せる。

「はああー！」

「なっ……ん？？」

カッシーンの突きにより、ビルドのドリルクラッシャーが吹っ飛ばされた。

そのままカッシーンはビルドに攻撃するが、ビルドは咄嗟に腕を出して防ぐ。

「桐ヶ谷晴夜！何故、貴様は何故！我が魔王の邪魔をするー！」

「……こんな世界に……させない為だ！」

ビルドはカッシーンを片方の腕で振り払う。そして、ラビットボトルを外してボトルを握るとラビットボトルを金色へと変える。

そして、ホルダーに装着されたロイヤルボトルを取り出し、振り出すと背後から白で書かれた数式が現れる。

『ラビット！ロイヤル！ベストマッチ！』

金色のラビットボトルとロイヤルボトルを差し込み、レバーを回すと前後から白と金のスナップライドビルダーが現れた。

『Are you ready?』

「ビルドアップ！」

『光輝くスピーディウオリアー！ロイヤルラビット！イエーイー！』

白いラビットラビットの複眼とボディはラビットラビットのボディに黄金のラインが刻まれ、後ろに白いマントを纏った姿、ビルド・ロイヤルラビットフォームとなった。

「はああ！」

フルボトルブレードを持ち、そのままカッシーンを押し込もうとビルドが反撃に出る。

「うおおー！」

フルボトルブレードの剣技を使つて攻撃を繰り返し続け、カッシーンを吹き飛ばした。

「この世界には、明日はない。だからこそ、明日を迎えられる世界を作る。それが仮面ライダーだ！」

『ラビット！フルボトルスラッシュ！』

フルボトルブレードの剣を伸ばして遠距離から攻撃し、カッシーンの持つ武器を手から落とさせた。

「ぬわああああ！」

「悪いけど、勝利の法則は決まった！」

変わらない決め台詞を叫び、フルボトルブレードにロイヤルボトルを差し込む。

『ロイヤル！フルボトルスラッシュユ！』

白いエネルギー量を纏いフルボトルブレードでカッシーンに攻撃し、カッシーンを戦闘不能にさせる。

「…やり過ぎたな。他に気づかれる前に今のうちに出るか」

変身解除して、急いでクライアス社を出ると、土との合流地点に向かう為に晴夜は走る。

晴夜が土と共に行動を共にしているのは、彼がこの世界の仮面ライダーとして、世界の明日を創るため。

——それが過去でも未来でも、彼は世界の愛と平和のために戦う。

——そんな世界を守り続ける彼の戦いは、終わる事はない。

次回！Re. ドキドキ&サイエンス！

特別編 仮面ライダークローズ&春のカーニバル！

特別編2 仮面ライダービルド&みんなで歌う！奇跡の魔法！

特別編 仮面ライダークローズ&春のカーニバル！前半 戦

「お遊びは終わりだぜエエエ!!ヒヤッハハハハハ!!」

時は遡る事、約一万年前——プロトジコチューとエボルトが封印された時代。

そんな遙か昔の時代で、荒れ果てた土地の上で全身を赤く染めた蜘蛛のような姿をした怪物が、古代日本の巫女装束をモチーフにしている水色と赤いコスチュームを身につけた二人の少女をエネルギー状の糸で拘束し、背中から生えた蜘蛛の足状の鍵爪で二人を串刺しにしようとしていた。

だがその時、彼女達の前に一人の男が現れて蜘蛛の足を切り裂き、物言わぬ亡骸になる筈だった二人を救った。

それに気付いた怪物はさつきまで高まらせていた感情を萎えらせると、斬撃が飛んできた方へと顔を向ける。

「……誰だ、お前？」

怪物の視界に映った男は、見方や角度によっては白銀に輝いて見える白い鎧を纏い、右手には普通の片手剣とは違う巨大な剣が握られていた。

「私は……弱き者に勇気を与える者」

「カツコつけるなよ!」

赤い蜘蛛の怪物は怒り心頭のまま白い剣士へと向かって、瞬時に作り出した針状の赤いエネルギー塊を無数に放つが、その進路を妨害するかのようには怪物の目の前に巨大な剣が現れて、彼の殺意が籠った攻撃を防ぐ。

「グウオオオオー……ッ!」

怪物が見上げるとそこから、人型に近い姿を持った体にトゲトゲしい鱗や牙の様な角を生やした赤い竜が、背中から生えた2枚の大きな翼を羽ばたかせながら現れた。

「何だお前はあ……? 邪魔するなア!」

怪物は背中から蜘蛛の足を再び展開するとそれを巨大な竜に向けて放つが、竜は巨大な剣を振るって怪物の鉤爪を打ち払い、更に口から炎を吹き出す。

たまらず避ける怪物だったがしかし、そこには既に白い剣士が待ち構えていた。

「フッ!」

「ぐツ!? ……て、テメエ……俺のドライバーを……ッ!」

白い剣士の放つた素早い剣筋は、怪物の腰に装着していたワインレッドや藍色に金という派手なカラーリングのデバイスを破壊。

怪物はそれに驚きつつもカウンターで剣士の腹部にエネルギー針を放って距離を取

るが、怪物の体が剣士の攻撃を受けた事でふらついた隙に更なる攻撃を仕掛ける。「これで終わりだ！」

そう言つて白い剣士は自身の持つ剣を『ガシヨン!』という音と共に展開させると、それによつて生じた刃の隙間から青緑色のエネルギーを巡らせながら輝く剣を地面に突き刺す。

すると地面から白い電流が発生し、デバイスを破壊されたことによつて弱体化を起こした怪物に直撃させる。

「ぬうお!?…………ツ、お前ら…………許さん……………覚えてろオオオツ！」

それを受けた赤い怪物の身体は、まるで封印されるかの様に一枚の石版へと変化した。

怪物の姿が石版に変わったのを最期まで見届けた白い剣士は、腹部に刺さったエネルギー針を引き抜きながら、赤い怪物との戦いの未死んだ様に眠る二人の少女の間である緑髪の少女を打倒せんと、無数の怪物が彼女に猛威を振るっている所へと顔を向ける。

「…………残りは、アイツらか。」

…………私が来るまで、二つの怪物を封印し、満身創痕の中よく戦つてくれた。あとは任せろ」

剣士は患部にエネルギーを当てて焼灼止血しながら少女達にそう言い残すと、彼女らを赤い竜に任せてもう一人の少女が戦っていた怪物達のところへ行き、奴らをあつという間に一掃した。

全ての怪物達が剣士によって撃破されたのを確認した巨大な赤い竜は、すぐに石版を球体のバリアで包んで持ち上げる。

『こいつは俺が、誰にも手を届かない場へと封印する。後は頼むぞ』

「ああ……頼む」

その球体を持ったまま赤い竜が飛び立っていくと、白い剣士もその後を追おうと試みる。

「待って!」

するとそこへ、白地にピンクの装飾が施された巫女装束をイメージさせるコスチュームを身につけた緑髪の少女…キュアエンプレスが現れた。

「……助けてくれて、ありがとう」

「……礼には及ばぬ」

エンプレスは白い鎧を纏う剣士にお礼を言うが、男はそれだけを言い残すと巨大な剣を握り直し、すぐ様彼女の前から去ろうとする。

「ねえ、名前教えて?」

しかし満身創痍の中、ブラッド帝国から自分達を助けてくれた彼に対してお礼の言葉しか言えていないエンプレスの心には申し訳なきだけが広まり、せめてこの活躍を残すために名前だけでも聞こうと呼び止める。

「……………私の名は…………アマー…………メサイアと名乗っておこう」

それに対し、一度本名らしき名を言いかけるも直ぐに口をつぐんだ白い剣士は、エンプレスに向けて自らを『メサイア』と名乗り去って行く。

「……………また会える？」

「……………運命に抗う力が、残っていればな…………」

キュアエンプレス達を助けた、巨大な剣を持った白い剣士。

彼がどこで生まれ、どこから現れ、何のために戦うのかは未だにわからない。

しかし、この剣士はトランプ王国の隠れた伝説の剣士として語り継がれる事となるだろう。



それから時は一万年後の21世紀。

一万年の時を得て復活したブラッド帝国が、伝説の戦士・プリキュアを洗脳した。

それに立ち向かう為、仮面ライダー達はプリキュア達の洗脳を解放し、世界の滅亡をかけた仮面ライダーブラッドもとい仮面ライダーエピオンとの激戦を繰り広げ、遂に彼

らは平和を取り戻した。

それから世界を救った二人の仮面ライダーは、その内の一人が住む家の隣に作られた研究室にいた。

「此処の声はマナに喋ってもらって、この辺は真琴に喋ってもらうとして、エボルトの声はどうすつかなあ……イーラ達の声優も見つかってないし、ブラッド帝国の戦いの台本も作らなきゃならないし……はあく……」

その中で何かの台本片手に疲労のため息を漏らす少年、桐ヶ谷晴夜。

彼はブラッド帝国との戦いの中で桐生戦兔からビルドドライバーを貰い、伝説の剣士『メサイア』の力を受け継いだ、仮面ライダーの一人であった。

そんな彼の居る部屋の中では様々な資料が存在しており、晴夜の近くにはボイスレコーダーが一台置かれていた。

「よしっしや……ここでの登場シーンはこうだ!」

そのボイスレコーダーに向けて無駄に元気な叫び声をあげる茶髪の少年は、晴夜の相棒であり親しき友でもある、異世界の生命体エボルトの遺伝子を持った戦士、仮面ライダークロース。

又の名を――

「俺はトランプ王国最後の戦士にして、プロテインの貴公子……上城龍牙だあ!」

今二人は研究室で、自分達のこれまでの記録をまとめた内容計画『ドキドキ&サイエンス』の収録を行っていたのだ。

「……よし。今のセリフ、丸々カットな」

「……はあああ?!?なんでだよ!ここは俺の登場シーンだろうが!」

「お前はサブキャラだから、主役の俺より目立ったら駄目だろうが!」

「はあ〜ツ?!?」

龍牙は手に持った台本を机に叩きつけながら難儀を表すが、対する晴夜は龍牙では主役にはなれないと暗に言っていた。

「あとその『プロテインの貴公子』って台詞、第8話のあらすじ紹介でも言ってたんだからもうちよつと控えろよ。使い回しだと思われるだろ」

「良いじゃねえか別に!ていうかそれ言ったら、お前の『てえんさい科学者の卵』とかの部分なんか毎回言ってるじゃねえか!」

「俺は良いんですう〜!何故なら主人公ですからあ〜!!」

相変わらずのように痴話喧嘩をする光景から、普通に仲が悪いように見えてしまうが、これこそ二人しか出来ない『ベストマッチコンビ』の証拠でもあった。

「……しっかし、平和だな〜」

「だな〜」

だがここしばらくは目立って大きな事件もなく、あれ以降戦うことの無い二人はこの落ち着いた日常に安らぎを感じていた。

「試しに今度のフリマで、これでも売ってみるか?」

「んあ? 新しいガジェットか?」

「ああ! 名付けて蜘蛛型ペットロボ!」

そう言つて晴夜が取り出したのは、先程彼が気分展開がてら完成させた蜘蛛型のガジェットだった。

「名前そのまんまじゃねえか。てか、売れるのかよ?」

「売れるよ! これはクロースドラゴンよりも——」

「晴夜——! 龍牙君!」

「ハルモニアのカーニバルに行かない?」

「……ハルモニア?」

二人が他愛も無い会話をしているとそこへ、『ドキドキ&サイエンス』収録の為に呼んでいた相田マナと剣崎真琴の二人が研究室の扉を開き、晴夜と龍牙にハルモニアへのカーニバルへ行かないかと誘っていた。



そこは、とある海沿いの陸地に近い島にあると言われる、有名な進学校であるノーブ

ル学園。その全寮制の学園は、50年前に「望月ゆめ」という元絵本作家によつて建設されたと言われている。

校風としては「生徒の自主性」を強く重んじ、伝統と風紀を守るための厳格なルールがあるとされているが、生徒達がルールを破らない限りは大体の事が学校側から認められていく為。数多くの有名人を排出して来たエリート学園としては、比較的自由度の高い分類に入る学園であるとも言える。

ちなみに学内では男女共同で参加する交流イベントも多彩となっている。

そんな学園にある庭園から、楽しそうな歌が大きな声で奏でられていた。

「はーるーの♪おーがわはー♪♪さーらさーらいくよー♪」

庭園には二人の少女と二匹の小動物が存在しており、その歌の源はその内の一人の少女の口から響いていた。

その少女の名は春野はるか。

栗色の髪をお団子ヘアに纏めた彼女には、遙か過去の時代に大いなる闇を封じた神姫の力を継承した『プリンセスプリキュア』としての姿を持っていた。

そんなはるかのかの歌う「春の小川」を、その隣で青緑のロングヘアの一部から伸びる三つ編みを揺らす少女が笑いながら聴いていた。

「楽しそうね。はるか」

その少女、海藤みなみが楽しそうに歌っているはるかを探ねると、彼女は先程よりも嬉しそうに振り向いて応える。

「だって！3人でお買い物ですよ！楽しくないわけじゃないじゃないですか！」

どうやらはるかは、みなみともう一人の友達と一緒に買い物に行ける事をとて嬉しく感じたらしく、そのおかげで思わず歌を歌っていたらしい。

「きーしの♪すみれや♪れんげの花に♪」

「パー♪パー♪パー♪パー♪パー♪」

そんなはるかの歌を聴いて、長くフワフワした耳のようなピンクの髪の毛が羽ばたくように動かし、『ロイヤルフェアリー』と呼ばれる子犬の様な妖精・パフも踊りを加えながら、彼女に続くように「春の小川」を歌っていた。

「パフはダンスも上手ロマ〜♪」

薄紫のインコの様な姿をした妖精にしてパフの兄・アロマは、そんなパフを暖かい目で見守りながら見惚れてしまっているのであった。

彼ら兄妹は『ホープキングダム』と呼ばれる国からやって来ており。絶望の魔女によつて夢も希望も失われてしまった王国を取り戻すために人間界に訪れた二匹は、プリンセスプリキュアの後継者である三人の少女と共にホープキングダムを救う為、12本のドレスアップキーを集めているのだ。

それはそうと、この兄妹全然似てないな。

「フンフン♪フン♪——パフ？」

「ろ、ロマ!? ロマロマ~~~~」

しかしパフは踊りに夢中で自身の長い髪を誤って踏んでしまい、転んだ拍子にアロマを下敷きにしてしまった。

「パフ……ごめんパフ」

「ごめ~~~~ん!」

パフがすぐに離れて兄に謝っていると、ここに居ない少女の声が聞こえた。

みなみが振り向くとそこから、リボンで長い茶髪を整えたツリ目の少女、天ノ川きららが急いでこちらへ向かって来ていた。

どうやら遅刻していたらしく、息を整えながらはるか達に遅れてきてしまったことを謝罪する。

「遅くなっちゃった……って、はるはる何歌ってんの？」

「きらちゃん」

はるかもきららが来た事に気付いて振り向くと、彼女がはるかの歌を聴いて何かを思い出していた。

「あつ。もしかして歌のテスト？」

「え?.....歌の.....テスト?」

.....あ~~~~~っ!!??」

はるかきはきららの言葉を聞いてきよんとしていると、突如何かを思い出したのか大きな声を出す。

「?」

「しよぼくん.....」

それを聞いた二人は首を傾げる、はるかは急に落ち込み始めた。

「どうしよう!すっかり忘れてた.....来週の歌のテスト」

どうやらはるかは、来週に行われる歌のテストの事をすっかり忘れていたようだった。

「おうた歌うの、いやパフ?」

「さつきは、あんなに楽しそうに歌ってたロマ」

「鼻歌とテストじゃ全然違うの。」

クラスメイトのみんなの前で歌うなんて:緊張しちゃうよ~:」

アロマを乗せて歩くパフは、さつきまで歌っていたはるかを見て尋ねるが、本人は人前で唄うことになれていないせいとか、クラスメイトの前で歌う事を考えると自信を持ってなくなってしまう事を告白する。

「テストくらいで大げさ。あたしがランウェイを歩くときだって、そこまで緊張しないよっ。」

するときはらは呆れた表情を浮かべ、自分がランウェイで歩いている姿を想像させながらはるかにそう答えていた。

「うっ……に、人気モデルにそれ言われちゃうとなあ……」

はるかきはきららの言葉を聞いて落ち込むが、みなみはそんな事はないとフォローをする。

「ふふっ♪そんなに気負うことないわ。心を込めて大きな声で歌えば大丈夫よ」

「あっ……は、はい……」

みなみに励まされたはるかだったが、まだ自信がないのか憂鬱にため息を吐くばかり。

そんな中、パフは「はるか、おうた歌ってパフ」と言っただけでも元気付けようとする。

「い、いいよ……今から練習しないとね」

はるかきはパフの言葉を聞いて少し元気になると早速、歌の練習を始めようと気を取りなおす。



同じ頃、東京都練馬区の何処かに位置する街『ぴかりが丘』にある、ブルースカイ王国の大使館の居間では……

「はくくくるが来た来た♪ポカポカわっしょい♪お花も蝶々も♪踊るよダンシング♪」
濃いピンク色の髪をポニーテールにした少女・愛乃めぐみが元氣よく歌っていると、そんな彼女の歌を聞いていた白雪ひめ、大森ゆうこ、氷川いおなの3人は静かに聞き入っていた。

「ポカポカわっしょい!」

するとひめがめぐみの歌につられるように、シアンのロングヘアを揺らしながら歌っていると、隣に座っていたゆうこはクスクスと笑っていた。

「めぐみちゃん、ずいぶん楽しそうに歌ってるね」

「うん♪またまた春が来たから、ウキウキしちゃって♪」

「そういえば、幻影帝国を倒して初めての春休みだもんね」

ゆうこが当時の事を思い出しながらそう語る、『幻影帝国』というキーワード。

それはかつて「世界を最悪の形に変えて、全人類を不幸にする」をスローガンに、世界中で怪物『サイアーク』を暴れさせていた悪の組織である。

元々は『アクシス』と呼ばれる禁断の箱に封印されていたのだが、とある理由からその箱が開けられてしまった事を起点に、彼らを封印していた国『ブルースカイ王国』は

あつという間に乗つ取られてしまった。

そしてハピネスチャージプリキュアによって上層部が撃破、もとい和解を果たすまで大規模な悪事が行なわれ、ブルースカイ王国を含めた様々な国が彼らによって支配されていた。

「うんうん！今日はスプリングパーティーだよー！」

ちなみに彼らによって支配されていたブルースカイ王国は、此処で大喜びしながらめぐみと歌っていた、ブルースカイ王国の王女でもあるひめの故郷でもあった。

「それじゃあ、一緒に歌おう！」

「うん！」

様々な苦難や後悔の末、幻影帝国によって支配されていた故郷が自身の仲間達の活躍によって解放されたひめの喜びは、今の姿を見てわかる通り、めぐみとデュエットを組んで相当嬉しい事だということを表すかの様に歌うのだった。

「二人とも、浮かれすぎ」

「でも、こんなに楽しい春なんて久しぶりですわ」

「二人とも、よほど嬉しいんだぜ」

いおなは楽しく歌うめぐみとひめを見て呆れているが、リボンとぐらさんの言葉に同意する様に柔らかい笑みを浮かべる。

「みんなくお茶が出来たわよ」

「あつ！お姉ちゃん」

するとドアを開ける音と共に、いおなの姉である氷川まりあが人数分のティーカップセットと紅茶を入れたティーポットをお盆に乗せて居間の部屋に入ってきた。

「今日はさくらんぼの紅茶よ」

「やったー♪」

「私、それだーい好きー♪」

まりあの紅茶が出来た事を聞きつけためぐみは真つ先に手伝いに入った。

「桜もウキウキ♪幸せパंक〜♪ああしてこうして、やり放題〜♪」

「めぐみちゃん達、楽しそうね」

そしてめぐみは、まりあの持つて来たティーカップセットを手に取り、歌いながら順序よく置いていった。

その様子を見たまりあは、彼女を微笑ましい笑みを浮かべながら話しかける。

「だって、今日はとつても楽しみで〜♪」

「こつちまで歌いだしそうなくらい」

ゆうこもまりあと一緒に紅茶を淹れる準備をしながらめぐみの話を聞き、自身もそんな楽しそうな友達につられて歌い出した欲求に駆られている事を話す。

「春だからって、浮かれすぎるのもどうかと思うけど……」

「うふふ♪それほど、歌うのが好きなのね」

いなおはそんなめぐみを見ながら浮かれ過ぎだと呟くが、姉は浮かれ過ぎる程にワクワクが止まらないのだなと思っていた。

「春♪ウキウキ♪♪」

「ねえねえ！あの歌をもう一回聞かせて！」

「うんいいよ♪では、僭越ながら。愛乃めぐみ！みんなのアンコールに答えるべく、今一度歌を歌っちゃいまーす♪」

「イエーイー！」

まりあによって全員分のお茶が注がれると、めぐみは気分良く歌っていた歌にアンコールがかかり、アンコールをかけたひめの掛け声と共にもう一度歌う事となった。

「コホン…はるはるはるはるの！」

同じ頃。はるかさはさつきとは違って、やや緊張して張っている声で歌う。

「はるはるが来た来たー♪」

「おーがーわーはー！」

「ポカポカわっしよい♪」

めぐみは陽気に楽しく歌って、同じ時にはるかも歌いだしたその時、二人が歌っていた場所の空から、手紙らしきものが舞い落ちてきた。

「え？」

めぐみ達が突然舞い落ちてきた手紙を掴み取り、同じくはるかも咄嗟に舞い落ちてきた手紙を手にとって、全員が首を傾げながらも手紙を見てみると、手紙の裏には2匹のドラゴンが顔を見合っている絵に、『Invitation Letter』という文字が書かれていた。

「い、イン?……」

「インビテーション。招待状という意味よ」

「招待状?空から?」

「こ、これは!!」

「ロマー！」

はるか達が何処からの招待状なのかと思っていると、同じ様にその招待状を見たパフとアロマはひどく驚いていた。

「これは、ハルモニアの国王様からの招待状ですわ」

「「ハルモニア？」」

ブルースカイ王国のリボンは驚きながらも、この手紙が何なのかをめぐみとゆうこ、いおなに説明していた。

「……………」

「ひめは前にお勉強をしたはずですわ！」

「あはははは……そうだったっけ？」

目を逸らしながらそう呟くひめの姿を見る限りすっかり忘れていたようだったので、ぐらさんはひめへの復習を兼ねて解説を続ける。

「ハルモニアは、1年中お祭りをしている妖精の国なんだぜ」

「1年中お祭り!?! 楽しそう♪」

「それにしても、どうしてそのハルモニアから招待状が？」

「しかも、その王様からのだなんて……」

めぐみは毎日の様に祭りをしているという国だと聞いて、なんて楽しそうな国だと目

を輝かせる。

対するゆうこといおなは突然の事に疑惑を抱くも、すぐさま「心配ご無用だぜ」と語るぐらさんと共にリボンが寄り添う。

「ハルモニアから招待される事は、本当に名誉ある事ですわ」

「そうなの!?!」

「散々教えましたわ!」

そんなに凄いなの!?!?と驚くひめと、本当に覚えてないんですね!と怒るリボンを横目に、いおなはハルモニアの招待状を見ながら「そんな凄いものが届くなんて……」と実感を湧けずにいた。

「まさに、ハンバーグの中に半熟卵が入っているくらいラッキーなことだね♪」

「あのね……」

いおなは相変わらず食べ物で例えようとするゆうこに呆れるも、まりあはそんなゆうこを見て笑っていた。

「ハルモニアの春のカーニバル!?!」

「そうロママ」

「パフ♪」

アロマとパフからハルモニアの事を説明を聞いたはるかの顔は、既に抑え切れぬ程の満面の笑顔で包まれていた。

「むむむむむむむ……行きたー……い!!!」

そして、我慢に我慢をしてきて気持ちを一気に爆発させた両者の叫び声は、遠く離れていても尚、見事にハモるのであった。

ちなみにこの招待状は、プリキュアオールスターズそれぞれに送られていた。

「妖精の国ハルモニア。そのお祭りの中でも春のカーニバルは……最高のお祭りなんだ
ロマ♪最高の歌とダンス！それを目当てにみんな、世界中から集まるロマ♪」



同じくハルモニアから送られた招待状の存在を知った晴夜と龍牙、和也、幻冬のライダー四人も、四葉邸へと場所を変えた。

「ハルモニアのカーニバル……」

「面白そうじゃねえか！」

「俺も歌ってみるかな〜！」

「でも、これって招待されてるのプリキュアですよ。僕達が行っても大丈夫何ですか

「？」

晴夜たち三人は未知の国で繰り広げられるカーニバルに期待を膨らめますが、幻冬の言う通りあくまで招待されているのはプリキュア。全くジャンルの違う戦士である仮面ライダーである晴夜達が、そのカーニバルに参加してもいいのかと質問する。

それに対してマナは大丈夫!と言って、晴夜達も参加しても大丈夫だという事を伝える。

「問題ないでしょ。これまでみんなと関わっているんだから、ハルモニアだって許可してくれるわ」

「それに皆さんも会えますし、この前の事件の事で話せるんじゃないやありませんか?」

六花に続いてありすの言うこの前の事件とは、勿論ブラッド帝国との戦いの際にプリキュアのみんなが洗脳されて晴夜達と戦った事を指すのだが、此処では詳しい内容はすでに把握していると判断して省略する。

「いいじゃねえか!行こうぜ!」

閑話休題。ありす達の言葉を聞いた龍牙は、ハルモニアで祭りを楽しむ事を心待ちにしていた。

「だな。なんか、最高なものが観れるかもな!」

「やったー!もうキュンキュン〜♪」

そんな龍牙と同じく祭りを心待ちにする晴夜に、マナが勢いよく彼の腕にしがみつ

く。
「もう、マナつたら〜」

「晴夜と一緒にに行けるのが余程嬉しいんですね」

（う、羨ましい……）

好きな人と一緒に行けるその喜びに歓喜するマナに、幼馴染二人はそれぞれ嬉しく微笑み。もう一人の幼馴染である和也は仲睦まじくイチャつく二人を見て、自身と永遠のアイドルであるまこびーとの関係が一向に発展せず、それどころか龍牙に遅れを取っている事実を再確認しながら羨ましそうにしていた。

「幻冬。あなたは私の近くにいますよ」

「えっ?」

そんなかずやんの心情は置いといて、亜久里は幻冬の袖を掴みながら近くににいる様

に言い。それを聞いた本人はなんで近くにいなければならないのだと問おうとするが、亜久里は異論は認めんと言わんばかりに顔を近づける。

「私が貴方を守る為です。い・い・で・す・ね〜っ!」

「は、はい……」
今にも亜久里と鼻がくつつきそうな距離感にドギマギしながらも、有無を言わせぬ雰

困気に萎縮する幻冬からは、どこか満更でもない笑みがこぼれていた。

それよりも、何故垂久里がこんな事を言っているのかというと、ブラッド帝国の事件に洗脳されたプリキュアを解放した後のヘルブrossの戦闘時にプリキュアを守った行動が高く先輩プリキュアに評価されて、彼女らからちやほやされたからだ。

身も蓋もないことを言えば、要するに嫉妬心から生まれた行動である。

というわけで晴夜達仮面ライダーも、ハルモニアの春のカーニバルへと向かうことになった。

「……あれ?でもハルモニアって、何処にあるのかしら?」

一方で、みんなが春のカーニバルで大騒ぎする中、レジーナはマナから取った招待状を見ながら、そもそもハルモニアは何処にあるのかと疑問に思っていた。



「春の♪カーニバル♪最高の♪歌とダンス♪ふふっ♪」

はるかにはアロマの説明を聞いただけでも嬉しさとウキウキに酔い浮かれて、鼻歌とダンスをしながら楽しみにしていた。

しかし、木陰からはるかを見ている者がいる事をはるか達は知らない。

「その春のカーニバルにプリキュアと妖精を招待したいと、この招待状に書いてある口マ」

「妖精達もパフ？」

「へえ、面白そうね。どうする？」

「行く行く！ー！ー！絶対！行く！ー！ー！！」

きららが聞くと、はるかとは真つ先に近寄って興奮しながら即答で答えるのであった。

「王様に招待されて、歌とダンスを楽しむ♪」

「それも素敵ナプリンセスへの第1歩だよー♪」

「ええ。それに、歌のテストの良い勉強になるかもしれないわね」

「うっ。うう……！！」

はるかには招待されて歌とダンスを楽しむと同時に、自分達の課題であるプリンセスへの道の第1歩だと示し、気合と楽しさを全開にしながらウキウキと身体を揺らす。

だがそんな中、招待状の内容をしっかりと見直していたみなみの一言で、一気に消沈してしまう。

「はあ〜」

「もう、さつきまで楽しくしてたのどこに行ったのよ〜？」

「だって…」

「よーし！そうと決まれば！ハルモニアに出発ロマー！ー♪」

再び憂鬱な雰囲気纏うはるかだったが、祭りに行けばそんな気持ちも吹き飛ぶと判

断したアロマは早速ハルモニアへ行こうと張り切る。

しかしある事に気付いたみなみは、招待状を持ったまま周りを見渡していた。

「でも……この招待状には、地図も何も書いてないわよ?」

そう。招待状には、ハルモニアまでどうやって行くべきかが書いていないのだ。

「「えっ?……え……え……え……!?!」」

「えー……えー?!?それじゃあ、これどうやって行くの?」

そしてブルースカイ王国大使館にて、同じくその事実気付いたひめも同様に大声でシャウトしていた。

「う……ん」

「この招待状……地図も何も書いてないけど……」

「どうしたら行けるの?」

めぐみ達4人は招待状を前にして悩み、場所は変わってはるか達も同じ状況に陥って困惑を露わにしていた。

「言われてみれば、確かに書いてなかったロマ」

「そ、そんな……!せっかく、招待されたのに……」

せっかく楽しんでいたハルモニアへどうやって行くべきなのかわからないと、はる

かは青ざめた表情で意気消沈する。

「うう…」

めぐみもはるかと同じく気持ちになり、天井へ向けて大きく息を吸って――

「ハルモニアまでは、どうやったら行けばいいのー！！」

二人は見事に息ピッタリ、同じ言葉をハモるのだった。

『心配いらぬわ。その招待状が、ハルモニアまで案内してくれますわ』

「…え？」

だがその時、どこからともなく大声で叫んでいたはるかに加えて他二人と二匹の耳に何者かの声が聞こえ、三人はすぐに辺りを見渡すも周りには自分達と二匹以外には誰もいなく、木々が風に揺れる音だけが聴こえていた。

「……きさらちゃん、何か言った？」

「え？言つてないけど？」

「それじゃあ、みなみさん？」

「いいえ…でも、この招待状が？」

さつきの声に疑問を持ちながらも、三人は招待状を再度見渡した。

「ふふふ。心配しなくても、もうすぐわかるわよ」

同時刻、ブルースカイ王国大使館にて、まりあが困り果てるめぐみにそう言っただけで忠告する。それと同時に招待状が突如光り出し、招待状が光の球体となって空へと打ちあがって地面へと着地する。そして光が弾けると同時に招待状は変化——はるか達の前には2頭の馬付き豪華な馬車が現れ、めぐみ達の前には大きな5羽のツバメが現れた。

「おおおおお!!」

「なんぞ!」

「つばめさん?」

「招待状が…」

めぐみ達は突如招待状かた変化した5羽のツバメに驚くも、これでお祭りに行けると喜びながらツバメに乗ってハルモニアへと向かった。

「はあ~~~~♪」

はるか興奮するも、すぐさま馬車へと乗り込む。

招待状から変化した馬車をはるか達が乗った事を確認すると、馬車をリードする2頭

の馬が走り出して空を待つて走り出すのだった。

はるかには2頭の馬の手綱を握つて、馬車をハルモニアへと直進させる。

他のオールスターズも招待状から乗り物へと変化して、それぞれハルモニアへと向かう。

当然晴夜達も…

「すげえ！招待状がカメラになるなんてー！最高だー！最高だー！」

招待状が変化したことにハイテンションの晴夜は、いつもながら科学で測れないようなものが起こると髪をかいて興奮していた。

そんなこんなで晴夜達は二手に分かれ、2頭のウミガメに乗りながらハルモニアへ向かう。

◆ ◆ ◆
そこは、海に囲まれた島国。

地球上にあるのか、異世界にあるのかは不明だが、半島のような外観となつていて土地の空には、複数の虹が常に出ていた。また島の上には王族が住まう城のほか、大きいドーム状の施設が建設されている。

この島こそ、歌とダンスの国・ハルモニア。

この妖精の国では愉快な事に、1年中音楽祭が行われている。

だが今日開催される『春のカーニバル』は特に最大級の規模を誇る祭りである為か、辺り一面には風船が空を覆いつくさんとばかりに散りばめられ、妖精の姿をしている街の住人達も楽しく、忙しく、今回の祭りの準備に取り掛かっていた。

しかし…

「……というこつた。理解してくれますよね? 国王様」

ハルモニアの王様らしき、王冠を被った灰色の長髪とヒゲを生やした長身の男が、鯨のような細長い髭を生やした人相の悪い尖った耳の男と一緒に屯している、首に赤いスカーフを身に付けて額にDと一本眉、丸い口髭が書かれた顔にサングラスを付けた戦闘員らしき藁人形「ドロボーン」が大量に威嚇されていた。

「あ、ああ……こつ」

「……は、春のカーニバルは、ハルモニアの守り神に歌とダンスを捧げる祭り。」

そのカーニバルを中止したら、どんな災いがあるか…」

「守り神だと? バカバカしい!」

その隣で自身の娘——ピンク色のドレスと白色の長い手袋を着用したハルモニアの王女が怯えているのを見ながら、王様は何とか説得して彼らに立ち去ってもらおうとする。

しかし男は王様達の忠告も聞かず、剣を突きつけて黙らせた。

その剣を突きつけている男・オドレンは、王様が黙ると持っていた剣を鞘へと戻して話題を変える。

「まあ、安心しな。カーニバルは予定通り開催してやるよ！俺様がこの国を盗んだことを祝う最高のカーニバルをな！

「アニキーーーーー!!」

するとそこへ、タヌキの尻尾を付けた小柄な男・ウタエンが、招待状と鎖で縛られた宝箱を持ったまま慌ててオドレンの元へと駆けつける。

「大変っす!!」

「どうした?」

「こいつら、春のカーニバルにプリキュアと妖精を招待してるっすよ!」

「え!?マジで?」

ウタエンの話の聞いたオドレンはさつきまで自信満々だった表情から少し焦りだし、相方の持つ招待状を見ていた。

「参ったなあ……なんで、よりにもよって、こんなタイミングで……」

「とりあえず、逃げるっすか?『何言ってやがる!』——もが!」

ウタエンは不安そうに逃げるかどうか聞いていると、オドレンに丸めた招待状を口に

放り込んで拍子に転ぶ。

そしてプリキュアが来ることを知ったオドレンは不安になるどころか、逆に自信满满になっていた事にウタエンは疑問を抱いていた。

「上等じゃねえか!これはプリキュアどもを、まとめてつぶすチャンスだぜ!」

「ええ!?!」

「ふふふふ……さあ来い!プリキュアども!楽しいカーニバルの始まりだー!ー!ー!ー!!」

プリキュアを返り討ちにしてやると意気込む相棒に驚愕するウタエンを他所に、悪知恵を働かせるオドレンの不吉な笑いが城内に響き渡る。

『面白そうな事してるな〜♪』

そんな陽気で不吉な笑い声を遮る様に、何者かが愉快そうに呟いた声がオドレンの近くで響き渡る。

「ん?………お前、何か言ったか?」

「えっ?俺は何も言っていないですよ?」

「……まあいい、行くぞ。お前らはそいつらを牢にでもぶち込んでおけ!」

オドレンは急に聞こえた不気味な声を気にしたが、気のせいだと判断した二人は気にせずドロボン達に王様達を捕らえさせる。

『いいねえ〜……このまま待つていれば、俺が殺り損ねたプリキュア供を滅ぼす事が出来るってんだ』

しかし、此処にいる奴らは愚か、ここに訪れるであろうプリキュア達も知らなかった。さつき彼が聞いた声が、この地に災いを引き起こす存在だという事を。

「うーし、とーちゃーくー！」

「うえるかむ、とうー、ハルモニアあ〜〜！」

その頃、何も知らない晴夜達は無事にハルモニアへと訪れていた。

晴夜達は先に降りて大はしやぎする龍牙とレジーナを見ながらハルモニアの地に足を付けると、ウミガメが光を発すると元の招待状に戻ってしまった。

「うおお!?今度は元に戻ったぞ! 一体どんな仕組みなんだこの手紙?」

……よし、ここは一度バラして——『させねえよ科学バカ!』うわばきツ!!?」

「……………マナ。晴夜には絶対に持たせられないから、代わりに持つてて」

「あはは……………うん、わかったよ六花」

帰る時にも使うであろう招待状を色々弄ろうとする晴夜にドロップキックを喰らわせる龍牙を背景に、六花はキックを喰らった衝撃で手放されて宙を飛ぶ招待状を手に取り、その招待状を彼女から渡されたマナはそれを大事に仕舞う。

その後、色んな屋台を見て回ろうと走っていったレジーナを追いに行った和也達と別れた晴夜と龍牙、マナ、真琴の四人がハルモニアを見て回っていると、この街は既にお祭りムードになっており。妖精達が春のカーニバルの飾り付けを行なっているのを見ているだけでも、彼らがとても楽しそうなのが伝わってくる。

「へ〜……ここがハルモニアか〜!」

「色んな奴がいるな……おい見ろよ晴夜、あそこで上半身裸の上に赤いジャケットを着ている男が妖精達の前で踊ってるぞ! しかもあっちではピエロがジャグリングをやってるな!」

「みんなすつごく楽しそ〜♪」

「流石、一年中お祭りをしている妖精の国って言われるだけはあるわね」

妖精達以外にも、ここに招待されたであろう人間のエンターテイナーもいる事を確認したりして四人がハルモニアを見て回っていると、プリキュアオールスターが集まっている場所を見つける。

その中で見覚えのある人物がいる事に気付いたマナは、その人物に向けて手を大きく振りながら声を上げる。

「めぐみ! ひめ!」

「晴夜! 龍牙! マナちゃん! 真琴さん!」

そして自分達を呼ぶ声が聞こえた二人……めぐみとひめは晴夜達の方へと振り返り、四人も彼女達の元へ駆け寄った。

「久しぶり。えつと〜……」

晴夜がめぐみ達に挨拶していると、初めて見る顔……はるか達プリンセスプリキュアの方を見る。

「ごきげんよう」

「えっ？あつ……どうも、ごきげんようです」

するとはるかから普段の生活では受けない慣れない挨拶をされた晴夜だったが、とりあえずごきげんようと返す。

「私達はプリンセスプリキュア」

「俺は桐ヶ谷晴夜。よろしく」

「俺は上城龍牙だ」

「私は相田マナ。キュアハートだよ」

「劍崎真琴、キュアソードよ。よろしく」

軽く自己紹介を済ませたはるか達は、マナと真琴がプリキュアだと気付くが、その隣に居る晴夜と龍牙は何者なのかと疑問に思っていた。

ここに招待された人物のほとんどが女の子である為、男の子がここにいるのは珍しい

…というか確実に浮いている。居心地悪く無いのかな？

「晴夜君達もプリキュアなの？」

「俺と晴夜…あと2人いるけど、俺達はプリキュアじゃなくて仮面ライダーって言ってるんだ」

「「仮面ライダー？」」

「簡単に言えば、プリキュアと一緒に戦う存在かな。」

今日はマナ達に便乗して、カーニバルを見学に来たんだ」

晴夜ははるか達に仮面ライダーの存在についてそう説明するが、正確には仮面ライダーはプリキュアと一緒に戦う為の存在ではない。この世界ではある意味大体合っているが。

再び閑話休題。何者かの足音が自分達の方に近づいていることに気付いた全員が顔の向きを変えると、そこには足音の主であるオドレンとウタエンの二人が立っていた。

「よく来やがっ——ごうんっ…おいでくださいました。プリキュアと妖精の皆様」

「あなた達は？」

「私はハルモニアの大臣、オドレンと申します」

「おいらはウタエンっす！みんな来てくれてありがとうっす!!」

初対面な二人に対してゆうこが尋ねると、オドレンは冷静になって自己紹介。ウタエ

ンも続いて自己紹介をする。

「こちらこそ、お招きいただきありがとうございます」

「カーニバル、すつごく楽しみです♪」

「私も!!ハルモニアのお祭りの中でも、このカーニバルはすごすごく有名なんですよ!」

「それを今から見られるなんて…幸せハピネス♪」

目の前に居る二人が大臣とはほぼ遠い盗賊だなんて知る由もないプリキュアメンバー…上からみなみ、はるか、ひめ、めぐみは、この国で行われるカーニバルを楽しみにしていると伝える。

そんな彼女達の様子を聞いたオドレンは「それなのですが…」と言い、ワクワクの絶頂にいたはるか達は一体どうしたのかと疑問符を浮かべ、いなおは「ですが？」と彼の言葉を反服していた。

「プリキュアの皆様に、1つお願いがあるのです」

「…お願い?」

「プリキュアの皆様もステージに上がって…」

「歌って踊ってほしいっす!」

オドレンの口からお願いがあると聞き、プリキュアメンバーは何をするのかと頭を傾

げていると、オドレンとウタエンは彼女達に顔を近づけてそう叫ぶ。

それを聞いたプリキュアメンバーが『えっ?』と困惑の言葉をこぼす中、真っ先に驚いたのはプリンセスプリキュアの一人であるはるかだった。

「なんで!?!どうしてなんですか?」

「元々春のカーニバルは、まあ…なんやかんや色々やってたんですが……

今回はなんと!妖精達へとの感謝祭なのです!」

納得いかないはるかに対してオドレンは少々難しい表情を浮かべた後に語られた言葉に、首を傾げていたプリキュアメンバー全員が驚いてしまう。

「妖精達への——」

「感謝祭?……………ジトー……」

すると、ひめは真っ先に隣にいたリボンを見つめていた。

「な、なんですの!?!その目は!!」

「え?あつ、いや〜……いつもありがとうって思ってるよ……心の中で」

ひめは一点の曇りもない清しい目でリボンを見るが、どうも怪しかったのでそれを聞いたリボンは怪訝そうにしていた。

「……思っているだけじゃ伝わらないっすよ。感謝の気持ちは外に出して欲しいんっす」

そんなひめの姿に何か思うところがあつたのか、ウタエンは彼女に近付いてそう優しく説きかける。盗賊のくせに、人付き合ひに関しては何となくしっかりした考えを持つてゐるらしい。

「はあああああ♪」

めぐみはそんな彼の話を聞いて妖精達の事を思うと、リボンやぐらさんを加えた妖精達に伝えたい気持ちを膨らませていた。

「ねえ！どうする!?歌って踊っちゃおう?」

「勿論♪リボンとぐらさんには、すぐ〜くお世話になつてゐるからね!!」

同じく妖精達への想いを募らせたひめからの突然の誘ひにめぐみは即刻乗っかり、ステージに上がつて歌つて踊る事を決めたのだつた。

「そうね。感謝の言葉を表現するのは大事な事よね」

「ご飯を食べる前は、いただきます、食べた後は、ご馳走様」

「それじゃあ!歌の練習しないとね!」

「うん!行こうひめ!」

「感謝の〜♪気持ちを一〜♪歌つて踊つて♪ババババ〜♪」

「……歌うのは、まだ早いわよ?」

いおなとゆうこからも賛同を得たひめとめぐみは、早速ステージの上に立つ事を想定

しながら肩を組んで楽しそうに歌っていた。

いおなが既にステージに上がっている気になっている二人に呆れている姿を見ながら、龍牙は笑みを浮かべながら真琴の隣に移動して、同じくステージに上がる気満々な彼女の肩を叩く。

「歌なら真琴の出番だな！」

「うん！このハルモニアと妖精達に私の歌を届けるわ！」

「よし！あたしも張り切って頑張らなきゃ！」

「「え」っ」

張り切る真琴を見たマナも張り切って歌おうとするが、それを聞いた晴夜と龍牙と真琴は変な声を漏らしながら硬直する。

「ん？どうしたの三人共？」

「え、あ……うん！大丈夫！なんとかなる……だろ？」

「は、え……あー、うん。そうだな」

「うん！なんとかなるなる！」

（多分ね……）

真琴なら大丈夫だと思おう晴夜と龍牙だったが、微妙な表情を浮かべながら心中で呟く真琴を含めて、張り切るマナには不安しかない。

「ヤバいつす。あいつは一番ヤバいつす!」

「ふん。それなら、俺の最強伝説がより素晴らしい結果になるじゃないか」

しかし、オドレンは晴夜の事を聞いても焦っている様子はなかった。

「ど…どうします?」

「パフとアロマには、日ごろの感謝を伝える良い機会だわ」

他のプリキュアメンバーが次々と参加を希望する中、はるかはみなみときららに参加するかどうか尋ねると、みなみは既に参加するという答えを出していた。

「で…でも…私、ちゃんとできるかどうか…」

「はるはる、こういうことは上手か下手かなんて関係ないよ」

「うう…」

「きららの言うとおりロマ。僕達の為に頑張ってくれる、その気持ちが嬉しいんだロマ」

きららの言葉に戸惑うはるかに、アロマが肩の上に乗って励ます。

「パフ、はるか達のお歌とダンス見たいパフ!」

更にパフが嬉しそうにして、はるかに歌とダンスを見たいと言い出していた。

「アロマ…パフ…」

期待してくれている二人に対して、人前で歌う自信のないはるかは申し訳がたたなかったが、そんな彼女を元気つける様にみなみときららが檄を飛ばす。

「ねっ。二人もこう言っているんだし」

「パフとアロマに楽しんでもらえるように頑張りましょう」

「……はい！」

そして二人に励まされたはるかにはパフとアロマの期待に応えるべく、春のカーニバルで歌って踊る事を決意するのだった。

「よーし！やる気満開！春野はるか歌って踊っちゃいまーす!!」

「感謝のー♪気持ちを一♪歌って踊って♪ババババ〜ン♪」

めぐみとひめ、そしてはるかはやる気と気合満々にするのだった。

「まこぴー！私達も負けないよう！きゅんきゅんに頑張ろうー!!」

「ええ！もちろん！（マナは頑張りすぎないようにね……）」

みんながやる気全力全開になっているのに対して、晴夜はオドレンとウエタンの事がずっと気になっていた。

「晴夜？どうした？」

「いや、何か変な人だなんて……」

ファントムにエボルト、ブラッド帝国の戦いで妖精界で名前が知れ渡っているとは聞いていたけど、あんなに動揺されるとは思っていなかった。

感じる限り、何かを隠しているのか、それとも……

(カーニバルか……面白い事をするんだな)

そんな中で晴夜達のいる庭園を、青いスライム状の液体が不穏な考えを構築させながら観察していた。

そして晴夜達はカーニバル会場へと向かい、多くの妖精達が期待に満ちた表情で空中に浮かぶ観客席に座っている中、四人は人間専用の観客席へと座る。(後、ドロボーン達も団体になって観客席に座っていた。なんでそこにいるんだお前ら)

客席に座った龍牙が会場を見渡していると、此処の天井からは太陽の光が差し込み、晴れた天気、綺麗な夜空、虹のかかった大空といった、その場に合わせた雰囲気が出るようになっていいるデザインが描かれていた。

また司会席の周りにはプリキュアオールスターズが歌う為に用意したステージがあり、ステージの真ん中あたりには13個の各プリキュアの紋章があり、その中央には巨大なドラゴンの紋章が描かれた。

「うわあ……すごい……こんな綺麗なステージ、見るのは初めてです……」

観客席でプリキュア達が踊ったり歌ったりするであろうカーニバル会場を見ていた幻冬は、テレビなどでしか見たことがないステージ舞台を始めて生で見、その盛大さに思わず感動していた。

「ヒヤッホッホーイッ!!まこびー!うららちゃんー!」

「……それ、何処から持ってきたんですか?しかも、真琴さん以外のグッズまで……」

だがそんな彼を現実に引き戻す様に放たれた大声を聞いた幻冬が横を見ると、隣ではアイドルグッズフル装備の和也が、右手に四色のペンライト、左手にはアイドル衣装の真琴の写真が貼られた応援うちわを振って応援していた。

相変わらずドルオタ全開の和也に、それを見た幻冬は呆れた目でそう呟いていた。

「おおーもうすぐだなー!」

「えっ……うん」

そして龍牙が真琴達の登場を心待ちにしながら晴夜に声をかける中、隣に座っていた晴夜は何故か一人、司会をしているオドレンとウエタンをじつと見ていた。

「んあ?……おい晴夜、あいつらがどうかしたのか?」

「まあ、何となくな……」

晴夜がああ二人に何かを感じる中、ステージと入り口の間から光る橋が出現すると共にブザーが鳴り響き、カーニバルが始まる合図が観客席に知らされる。

『これより、プリキュアオールスターによる春のカーニバルを開幕を致します』

『わあ—————♪』

妖精達の拍手が喝采すると、オドレンとウタエンが先ほど出現した光る橋を渡って妖

精達に手を振る。

「司会を務めますのは私、オドレンと——」

「ウタエンっす!」

『ドロボーン♪』

そしてドロボーン達も、司会席に向けて歩くオドレンとウタエンに拍手を贈り始める。

妖精とドロボーン達による拍手喝采と興奮を全身に受けたオドレンとウタエンは、普段盗賊として活動する中では決して受けることはないであろう感覚に、司会席の上で立ちながら清々しい気分を満喫するのだった。

「いやいや〜どうもどうも〜!……拍手っていいものだな。クセになりそうだぜ」

「普段は隠れてコソコソしているっすからね」

「むっ!人をコソ泥みたいに言うな!」

「あいた!!」

余計な事を言われて腹が立ったオドレンは、取り出したハリセンでウタエンをたたいて地面に叩きつけた。

「つたく……えー、それでは改めまして。

プリキュアオールスターズの入——場——!です!!」

『わぁー—————♪』

観客達の歓声と共に音楽が流れ始め、更に観客の頭上から巨大なスクリーンが現れる。

そこから“キュアブラック”と“キュアホワイト”、“シャイニールミナス”といった3人の名乗りシーンと共に、最初のプリキュアである“ふたりはプリキュア”のメンバー、なぎさとほのか、ひかりの三人が入場する。

『歌わないなんてありえない！断然ダンシング！ふたりはプリキュアMAX Hea
rt！』

妖精達からの歓声が高くなると、なぎさが手を振って返事をするのだった。

『ぶっちゃけ、はっちゃけ、ときめきパワーで歌もダンスも絶対調なり！ふたりはプリキュアSplash☆Star！』

続いてウタエンの解説と共に入場する咲と舞の二人は少し照れるが、互いを落ち着かせて手を振って返事をする。

次にのぞみ、りん、うらら、こまち、かれん、くるみのプリキュア5も入場。

『今日は歌にダンスにがんばっちゃうぞ〜！けっぺい！Yes！プリキュア5!!』

オドレンがそう言ってYes！プリキュア5の紹介をし終えると、入り口からフラッシュプリキュア、ハートキャッチプリキュア、スイートプリキュア、スマイルプリキュア

アの4組が続々と現れてきた。

みんなが入場と共に観客席にいる妖精達を見渡して、嬉しそうに手を振ったりアピールを

していた。

『春のカーニバルでもキュンキュンさせてくれるんすよね?モチのロン』

『ドキドキ!プリキュア〜!』

次にウタエンの解説と共に現れたドキドキ!プリキュアメンバー。

六花と真琴が手を小さく振り返す中、レジーナは全員に見えるようにあっちこつちに大きく振っていて、最後にマナが大きく手を振るのだった。

『さあ、みなさんお待ちかね。幻影帝国の魔の手から世界を救いやがった。この人達に登場していただきましょう』

『お腹いっぱい幸せチャージ!妖精のみんなにハピネス注入!無敵だワツシヨイ!ハピネスチャージプリキュア!』

『わぁー~~~~~♪』

めぐみ、ひめ、ゆうこ、いおなのハピネスチャージプリキュア!とウタエンが叫ぶと、妖精達とそれを暖かく見守るまりあの歓声と共に入場する。

誇らしくめぐみは大きく手を振り、妖精達からの歓声も更に高くなる。

『そしてそして！彼女達が新たな平和のカギになるのでしょうか？満を持しての登場です!!』

オドレンの言葉と共に変身BGMと共に名乗りシーンが映し出されたのは、新しく誕生したプリキュア“Go!プリンセスプリキュア”である。

『妖精の皆様、ごきげんよう！我らが戦うプリンセスは今日は歌って踊っちゃおうですよ！強く！優しく！美しく！Go!プリンセスプリキュア!!』

ウタエンに紹介されて、堂々としているきららとみなみだが…

「うう…」

はるかだけがガチガチに緊張していて、冷や汗もびっしやりとかいていた。

「わぁー……」

「プリンセスプリキュア……」

妖精達は新しく誕生したプリンセスプリキュアに歓声がどんどん高まると同時に、はるか緊張もドンドン高まっていた。

「こ、こんなにくさんのお客さんなんて聞いてないよ〜!」

予想以上観客の多さに、ただでさえガチガチに固まっている緊張が更にガチガチになつていたはるか、ついには首を何度も振って「むむむ無理無理！絶対に無理——!!」とシャウトしていた。

「やる気満開はどうしたのよ?」

「うう~~~~~だつて~~~~~」

『観客席の皆様、そしてプリキュアと妖精の皆様』

はるかがきららの言葉に項垂れている間に、各プリキュアが立つ14のステージが一齐にライトを浴びながらプリキュアオールスターズが勢ぞろいすると、オドレンとウタエンは客席に顔を向けながら観客席にお辞儀をする。

『今日は心行くまで、プリキュアオールスターズによる歌とダンスをお楽しみください』
観客の妖精達が興奮で拍手喝采を浴びせている間。トップバッターで歌とダンスを披露するプリキュア組は準備万端だった。

『それでは、最初の一曲目にいきましょー!』

オドレンの掛け声と共に、いよいよカーニバルが始まった。

ステージでプリキュア達の歌とダンスが始まり会場は活気が上がるのは勿論。それぞれの想いは輝ける光のごとくに輝いていて、はるかはその感動していた。

そして彼女達の歌とダンスがある程度区切りがつけた後、はるかはみなみに自身が感じた感想を思うがままに伝えていた。

「すごいステージだったね!みんなキラキラ輝いていた♪」

「ええ。次の曲が楽しみね」

「あたし達も負けてらんない!!ぬぬぬぬぬぬ!」

「き、きさらちゃんが燃えている!」

きさらも先ほどの歌とダンスを見て負けていられない意地と闘志に火が付き、目に炎を灯す彼女の闘志にはるかは思わずたじろいてしまう。

一方で、客席に座る龍牙達も盛り上がって応援していた。

「凄え!みんな凄え!なあ、晴夜!——あれ、晴夜?」

龍牙は彼女達の姿に興奮しながら晴夜が座っている筈の席に視線を向けるが、いつの間にか晴夜の姿が消えていた。

「あいつ、どこに行っただよ?」

龍牙が晴夜の姿を見回していたその頃、その消えていたご本人はカーニバル会場を出て城の中へと入っていた。

(何か変だ……大臣にしても、たった二人でこれだけのカーニバルを動かせるわけがない。そして、何故このハルモニアの国王達がいらない)

晴夜はこのカーニバルに不審感しかなかった。

というのも、大臣というあの二人が変に怪しく胡散臭い。そして何より、プリキュア達を招待した筈の国王達が姿を出さない。

そんな感じで城の中を回っていると何かに気付いたのか、急に曲がり角に体を隠して曲がり角の向こう側をチラッと覗いてみる。

そこには扉の前に立つ二体のドロボーンがいた。

「あれは……」

扉の前に立つ二体を怪しいと思った晴夜は、ドリルクラッシュャーを取り出す。

『スパイダー!』

そしてスパイダーボトルを差し込みドロボーンの前に飛び出すと、彼らに向けてトリガーを引いた。

『!?!』

いきなり蜘蛛の糸を放たれたドロボーンは吹っ飛ばされ、何が起こったのか分かぬまま蜘蛛の巣に拘束されてしまう。

「地下室……」

ドロボーンを退かすことが出来た晴夜が扉を開くと、そこは地下室だった。

念のためにビルドドライバーを装着し、警戒しながらそのまま下に降りる。

「これは……」

そのまま地下に降り終えた晴夜の目に移った鉄格子から、この地下室が牢屋だという事を知ると、そこには三人の人物が中に閉じ込められていた。

「大丈夫ですか？」

「……君は？仲間か？」

牢獄の中にいた男性……ハルモニア王国の国王は晴夜を見て、オドレン達の仲間かと警戒する。

「僕は、桐ヶ谷晴夜です」

「桐ヶ谷晴夜……おお！じゃあ君が、噂の仮面ライダー……」

「はい、そうです。このハルモニアの国王ですね」

晴夜はこの人が国王と思いを声をかけると、国王はそうだと首を縦に振る。

そして彼からハルモニアのカーニバルがあのだ二人に乗っ取られた事と、その二人の正体について聞かされた。

「じゃあ……あいつらは……」

「頼む！早くしないと！この地が……」

「わかりました。とにかく今はまだここにいて下さい」

晴夜は国王にそう言うところを出て、急いで会場へと急ぐ。

一方、ステージを終えたプリキュアオールスターズは舞台裏の廊下へと移動していた。

「私達の歌とダンス、どうだった？」

「すつごく良かったメポ♪みんな、ありがとうメポ♪」

「まあ」

「お礼を言うのは、私達のほうよ」

「ふたばが私達を見て緊張していかないか心配です……」

「大丈夫だつて、つばみよりは緊張してないよ」

「もう、えりかつたら……!」

「おや、妖精の皆様。ちょうど良かった」

メップル達がなぎささとはのかとひかりに歌とダンスの感想を伝え、つばみとえりかは楽しそうに雑談していると、そこへオドレンが現れてメップル達に会えた事を嬉しそうにしなながら近づいていった。

「あちらの部屋にお飲み物を用意してあります。プリキュアの皆様はお疲れでしょうから、取ってきてあげては？」

「もちろんメポ」

メップルがオドレンの提案に応えようと、他の妖精達もそれに続いてそれぞれのパートナーの為に飲み物を取ってくる為に走り出すのだった。

「わあ、ありがとうございます!」

「あたし冷たくてシユワシユワしたやつねー♪」

「それなら、私達も行くよ」

「そうだね。行こ行こ！」

えりかが炭酸飲料を注文している近くで、のぞみとみゆきも妖精達と飲み物を取りに行こうとするが、オドレンが彼女達の前を阻んで制止させてしまう。

「お？」

「……いえいえ。妖精の皆様もきつと、何かお礼がしたいと思われているはずです。そのお気持ちをくんでみてはどうでしょうか？」

「そっか…それもそうだね」

「ふっ……」

プリキュアが妖精達と一緒に行く都合が悪いのか、オドレンがそう言って促す。

彼の話を聞いて、それもそうだなと一同は納得していく中、オドレンは思い通りに事が進んでいることに不適な笑みを浮かべていた。

「次のステージが始まるっす!! ぞいた! ぞいたー!!」

「わっ!」

「きゃっ!」

すると、ウタエンが大慌てで走り出して来てプリキュア達の間を通り抜けると、直ぐに何処かへと走り去って行くのだった。

「ビツクリした…凄く慌ててたけど、なにかあったのかな？」

「ううん、これが普通なんだよ。舞台裏ってバタバタしてるんだよ」

「へえ〜」

「ラブさん詳しいのね」

「はい。ダンスする時に舞台裏覗いてますから」

「そっか」

ラブの話から先程の慌てている訳を知ると、次のステージが開幕しようとする合図のブザー音が鳴った。

「次のステージが始まるよ。行こう！」

「よーし！みんなをいっぱい応援しちゃうぞ！行ってーい♪」

「こうしてはいられません！早速、行きましょう」

なぎさとのぞみ、つぼみ達は次のステージに供えてメップル達が待つのを後にして、席に急いで戻るのだった。

「……ウタエン…やったか？」

そして全員がステージへと向かった事を確認したオドレンは、この場に誰もいない事を確認すると、どこかへ去っていった筈のウタエンが段ボール箱を持って走ってきた。

「楽勝つすよ。どわっ!!」

ウタエンが躓き、その拍子でダンボール箱が散乱してしまう。

そのダンボールの中から飛び出したものを見てみると、プリキュア5のキュアモ、スマイルプリキュアのスマイルパクト、フレッシュプリキュアのリンクルン、ハートキャッチプリキュアのココロパフューム、ハピネスチャージプリキュアのプリチェンミラーといった、プリキュア達の変身アイテムが転がっていた。

「あっ!」

「バカ!!」

オドレンはすぐさまウタエンの元へと駆け寄ると、すぐに変身アイテムをダンボール箱へと戻した。

「誰にも見られてねえな?」

「たぶん……あっ!!」

するとウタエンは真っ先にこの画面へ指を指した。

……おい、こつち見んな。何普通に第四の壁を超えてきてんだよ。

「ヤバイっす!こつちを見ているやつがいるっすよ!アニキ!」

「うん?……げっ!!シーーッ!」

こちらに向けられた視線に気付いたオドレンは、すぐさま人差し指に口を添えて黙っておくように指示を出した。

しまい、体がよろめきだした。

「……こいつが、エボルトの選んだガキの一人か」

振り向くとそこにいたのはドロボーンで、棒のような物を持っていたのが見えた。

「よくやった！オラァー！」

「くうー！」

態勢を崩された所にオドレンが晴夜を蹴り飛ばし、晴夜の懐からビルドドライバーとジーニアスポトル、開発中の蜘蛛型ペットロボが落つこちてしまう。

「……み、みんな……」

「ガキが邪魔しやがって！おい！こいつも牢へ連れて行け！」

「う、うつす！」

オドレンの命令で、ウエタンが気絶した晴夜を国王が閉じ込められた牢へ連れて行く。

「お前も良くやったな。アツハツハツハーハー！」

オドレンは晴夜を気絶させたドロボーンの肩を叩いて機嫌よく会場へと戻ると、そのドロボーンはビルドドライバーと彼が開発した蜘蛛型ペットロボを拾う。

「フン。こつちこそありがとうよ、俺をあそこからだしてくれて。」

「……………それにしても、この姿はイマイチしつくり来ない……………」

そのドロボーンは晴夜が落としたクモ型ロボットを手に取っていじりながらそう言う、全身が青いオーラに包まれ、全身に赤いスーツを纏った青年の姿へと擬態する。

「うーし、こつちの方がクールだよなア?」

そして手に取ったクモ型ロボットを軽く握ると、次の瞬間ロボットは赤く変化し、青年は蜘蛛ロボットにそつとキスをした。

そんな出来事をつゆ知らず、カーニバルはさらに進んでいった。

「おっ!真琴達だ!」

「まこびー!まこびー!L・O・V・E!まこびー!」

「亜久里ちゃん!レジーナさん!頑張れ!」

龍牙達はマナ達の出番になったので応援すると、そのまましばらくして無事にマナ達のステージも無事に終わった。

「ふふふ♪楽しかったね♪」

「本当だよ〜♪ここでアイスが出ればもつと最高なのに♪」

「アイスって…」

「ふふふ」

「こつちです。ささ、どうぞ〜」

マナと六花、咲と舞の2組が雑談をしていると、ウタエンが飲み物がこつちにあると妖精達に伝えると、フロルが先頭に行つて妖精達は嬉しそうに駆け寄るのだった。

『わぁー~~~~♪』

妖精達はウタエンの元へと駆け寄り、付いて行くのであった。

「あたし、喉カラカラなんだくあたしも行くー!」

「それなら、私達も——」

「だ、ダメつすよ」

レジーナと咲も飲み物と聞いて、カラカラになった喉を潤す為に追いかけてようとすが、ウタエンが真つ先に止めるのだった。

「な、なんでよ〜〜」

「ああ……皆様にはお伝えしておりませんでした、妖精の皆様もプリキュアのみなきんに何かお礼がしたいそうなので」

「お礼……ですか?」

「そんな事は聞いてないけど?」

オドレンの急な言葉にやよいや舞達は戸惑うが、マナ達は真つ先にその意味を察して納得していた。

「確かに。ラケル達つてそういう所があるから、ありうるかも」

「うんうん♪シャルル達も隅に置けないね〜♪」

マナ達の推測を聞いた咲達も、次第に納得してゆくのがあった。

「そうだね。ここはフラッピ達のがままにも付き合っただけだよ」

「ええ。今日は妖精みんなを感謝しなくちゃいけない日だものね」

「うん…」

「それでは、ごゆっくりカーニバルをお楽しみください」

「席はこちらです」

Splash☆Starの二人が仕方ないと呟き、やよいがどこか不安ながらも取り敢えず納得する中、オドレンとウエタンがシャルル達を連れて行こうとする。

「ん？これ……晴夜のジーニアスポトル！」

だがマナが六花達と移動していると、反対の方に何か落ちていっているのに気付いた。

その何かを拾ってみると、それは晴夜しか持つていない筈のジーニアスポトルであった。

「晴夜……もしかして……」

それを拾ったマナは何か晴夜の身に何か良くない事があったのではと、会場に姿がなかった理由を察して不安を露わにしていた。

その一方、会場にいる龍牙も中々晴夜が戻らない事に違和感を感じ出していた。
「かずやん。俺、ちよつと晴夜探してくる」

近くに座っていた和也に幻冬とここにいてくれと頼み、龍牙も会場を出て晴夜を探そうとする。

「龍牙？」

そこへ真琴が現れ、何処かに行こうとする龍牙にどうしたのかと問いかける。

「晴夜が戻らねえんだよ……」

「晴夜が？じゃあ私も探すわ」

「いいのかよー！」

もうステージも終わったので時間が空いていた真琴は、龍牙と一緒に探すと言う。

そのまま二人は会場を出ていき、城の中へ入って晴夜を探そうとする。

「それにしても、なんで晴夜がいなくなったの？」

「わかんねえよ。いや……あの司会のあいつらを見てから、何か様子が変わったような……」

龍牙の言う通り、真琴もあの司会のオドレンとウエタンに会ってから晴夜の様子がおかしいと感じていた。

あの二人なら何か知っているかと龍牙が考えていたその時、二人の前にエネルギー弾

が放たれた。

「真琴!」

爆風で二人が倒れると、すぐさま龍牙は真琴に駆け寄る。

「大丈夫!それより!」

両者無傷だった事を安堵しながら二人は放たれた方を向くと、全身赤色のスーツを纏った青年がこつちに向かってきた。

「てめえ!誰だ!」

あんな攻撃を出来たのを見て只者じゃない敵と判断した龍牙は構える。

それに対して、誰かと聞かれた青年は口元を吊り上げながら龍牙を睨みつける。

「俺かあ?俺はくくキルバスツツ!ブラッド帝国の……王だ!」

「ブラッド帝国だ?!」

キルバスを名乗った男の口からブラッド帝国と聞いた龍牙は、すぐさまビルドドライバーを装着。自身の手置かれたクロースドラゴンガジェットに、一振りしたドラゴンボトルを差し込む。

『ウエイクアップ!クロースドラゴン!』

そしてドライバーにガジェットに差し込むとレバーを回し、ランナフアクトリイからアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身！」

拳を手に当てながら構えると、スナツプライドビルダーから形成されたアーマーは龍牙の体に重なり装着され、煙が吹き荒れると音声 flowed。

『Wake up burning! Get CROSS—Z—DRAGON! Yea h!』

ドラゴンがモーターのライダー、仮面ライダークローズへと変身した龍牙は、キルバスへと向かっていく。

次回! Re. ドキドキ&サイエンス!

特別編 仮面ライダークローズ&春のカーニバル! 後半戦

特別編 仮面ライダークローズ&春のカーニバル!後半戦

クローズへと変身した龍牙がブラッド帝国の王と名乗る男・キルバスに戦いを挑む一方で、行方が知れなくなった晴夜を、一人の少女——相田マナが必死に探していた。

「はあ、はあ……晴夜、どこなの……?」

「マナー!」

彼女はステージ裏に落ちていたジーニアスポトルを握り締めながら晴夜を探しに走り続けていたが、其処へキュアブラックのなぎさが息を整えながら呼びかけて来た。

「なぎささん、どうしたの!?? なんか焦ってるみたいだけど……」

「うん、実は……」

そして彼女が探している晴夜は今、何処にいるのかというところ——

「——うっ……うう……?」

「桐ヶ谷君」

「国王……(ト)は……牢屋……?」

キルバスの不意打ちが原因で、盗賊であるオドレン達に捕まってしまった晴夜は、目が覚めると牢の中に居たのだった。

なんで此処にいるんだと驚いていると、オドレンとウエタンの正体を見抜いて問い詰めたようとした際に背後から何者かによる攻撃を受けた事を思い出す。

「大丈夫です。すぐに……!?」

晴夜はすぐに牢から脱出すべく、コートに仕舞っておいたビルドドライバーを取り出すそうとするが…

「フルボトルとビルドドライバーがない！」

「えっ!？」

持っているはずのロイヤルとシャドウ以外のフルボトルと、ビルドへと変身するためビルドドライバーが無くなってる事に気付いた。

「……まさか」

あの時、不意をつかれ気を失わされたときにボトルとドライバーを奪われてしまったみたいだ。

「くそおッ!」

ボトルとビルドドライバーがなければ、彼は武器を出す事は愚か変身することも出来ない。

今の晴夜はただの無力な少年でしかなく、鉄格子を強く握りながら叫ぶことしかできなかつた。

そしてクローズへと変身した龍牙は、謎の敵キルバスに向かって鋭い拳のラツシュを繰り出すも、キルバスはまるでダンスでもしているかの様な巧みな動きで躲し続ける。

「くそお!」

「ふう〜!……攻撃を受けてばかりじゃつまらないなあ……ならア〜?」

「それは!」

そう言つてキルバスは、自身を取り出したモノを見てクローズと真琴が驚いている姿を見ながら、晴夜から奪つたビルドドライバーを腰に装着する。

『ラビット!タンク!ベストマッチ!』

そしてまたもや晴夜から奪つたラビットボトルとタンクボトルをドライバーに装填すると、ドライバーから兎と戦車のシルエットが浮かび。二つのシルエットが『R/T』というマークに変化すると、そのままレバーを回してスナップライドビルダーを前後に出現させながらアーマーを形成する。

『Are you ready?』

「変身!!?」

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイー！』

そして形成されたアーマーに身を包まれながら、キルバスは仮面ライダービルド・ラビットタンクフォームへと変身した。

「なんで、てめえがビルドに……」

「ンツン〜、まあまあだなア〜……ハア！」

「っ!？」

クローズがなんでビルドに変身出来たのかと驚いている間に、キルバスの変身したビルドの先制攻撃がクローズの顔面に炸裂し、クローズは後ろへと倒れる。

「龍牙……こんな時に、ダビィが居れば！」

真琴は苦戦するクローズを見て戦おうとするが、パートナーのダビィがドリンクを取りに行つてしまつて現在ここにいないので、変身することが出来ない。

「くう……真琴！お前はダビィを探せ！」

「はあ！」

クローズはドリルクラッシュャーによる攻撃を繰り返すビルドに、ビートクローザーで応戦しながら真琴にダビィを探す様に叫ぶ。

「早くしろ！こいつは何とかする！早く行け！」

「……わかった！龍牙、待ってて！」

真琴はクローズに言われた通り、急いで自分のパートナーの妖精を探す為に走り出した。

「いいね〜！なかなかのもんだなあ〜！」

「お前……それは晴夜のもんだろ！」

ビルドドライバーの力を気に入ったのか悦びながた武器を振るうキルバスに、彼の言葉に怒ったクローズがドリルクラッシュャーを弾き飛ばして、キルバスが変身したビルドを後ずさせる。

そしてクローズが連続でラッシュを繰り返し、最後に放ったパンチでビルドの顔面を殴り飛ばした。

「どうだー！」

「……う〜むう………どうにもしっくり来ないなあ」

クローズは自信満々にキルバスが変身したビルドを見入るが、キルバスは何事もなかったように起き上がり、何かの違和感を感じながらボトルを取り外すと、後ろへ放り投げて変身を解除した。

「こいつを試してみるかあ〜！」

「それは、晴夜の試作品……」

そう言ってキルバスが手に出したのは、晴夜がここに来る前に見せた蜘蛛型ペットロ

ボと名付けた試作品のガジェットだった。

しかしその色は最初に見せてくれたカラーリングと違い、赤く変色していた。

「ハハハ……フウンッ！」

『キルバススパイダー！』

キルバスは自らの力で生成した赤いボトル『キルバススパイダーフルボトル』を口ポットに挿すと、そのままガジエットの脚を上げながらドライバーに装填してレバーを回転させる。すると前後に赤いクモの巣のようなランナーが形成される。

『Are you ready?』

「変……身！」

『スパイダー！スパイダー！キルバススパイダー!!』

変身の眩きが放たれると同時にランナーが重なって、中心の空間がキルバスの姿と一緒に歪んだと思うといきなり蜘蛛の脚が出現し、それがキルバスの身体を覆いながらアーマーを形成。

そのまま顔と胸部装甲が前から見たクモのような意匠となり、腕や脚等に真つ赤な毒が泡立っているかのような模様が見られ。肩や腰にはクモの脚のような飾りが付いた姿となった真つ赤なライダー、仮面ライダーキルバスへの変身を遂げる。

「マジかよ……」

その光景を目にしたクロースは、ビルドからいきなり違うライダーとなったキルバスに、あの時戦ったエピオンとは比べ物にならない程の威圧感を感じた。

「さあ……全てを滅ぼす前菜として、先ずお前から壊そうかア!」

晴夜が捕まり、龍牙がキルバスと戦っているその頃。プリキュア達が歌って踊るカーニバルの方は順調に進んでいた。

「御疲れ様です。妖精のみなさんには飲み物を用意してまーす」

「では、御先に失礼して」

「すぐ戻ってくるから待っていてくれ」

そんな中、リボン達妖精達はウタエンに呼ばれ、飲み物を取りに先に行っていた。

「私〜♪メロンソーダね♪」

それを聞いたひめは飲み物はリボン達に任せて、手を振って見届けた。

その後スイートプリキュアとハピネスチャージプリキュアのステージが終わり、満面の笑顔と達成感に満ちた表情で戻ってきた。

「最後は確か、はるかちゃん達よね?」

「みんなまで応援してあげましょう」

「うん!」

「いや〜みなさん、お疲れ様です。とても貫禄のあるステージでした」

ゆうこといおなとめぐみがプリンセスプリキュアの出番を楽しみにしていると、オドレンがスイートプリキュアとハピネスチャージの元にやって来ていた。

「ありがとうございます」

「コンクールみたいで緊張したけど、音を楽しめば、ありがとうございますの気持ち伝わるかなって」

「そうか。響ちゃんってピアノ上手なんだよね」

「うん、私の伴奏で歌ってみる？」

「いいの!?!うわぁー♪楽しみだな〜♪」

「私も♪すご〜く聞きたーい♪」

響がピアノを得意としている事を聞いためぐみとひめが楽しそうに会話している光景を見ながら、オドレンは会話に夢中になっている響の懐にあるキュアモジュールに手を伸ばそうとした。

「おいー!」

「うお!!」

しかしそこへ和也が現れ、オドレンの右手首を掴んだ。

「和也? オドレンさんも…」

「なんでここにいるの?」

響とエレンがなんで此処にいるんだと驚いていると、和也と一緒に居た幻冬が前に出て口を開く。

「晴夜さんと龍牙さんが中々戻られないので、探しに行こうとしてたんです。

そしたら……」

どういう訳か二人が観客席に戻らないと話しながら、幻冬も同じくオドレンを睨みつける。

「おい、その手はなんだ?」

「手?」

「その手って?どんな手?」

和也は響に向けて伸ばしてた手を掴みながら、さっきの手はなんだと問うがしかし、オドレンは何の事かと誤魔化そうとする。

だがライダーとして幾千もの戦いを繰り広げ、日々畑を守る為に害獣・害虫の動きを常に監視する和也の目は誤魔化せなかった。

「とぼけんな。さっき、響の懐に手を伸ばして何をしようとしてたんだ!」

「え!?!」

「や、やだなくさただ声をかけようとしただけですよ?」

凶星を突かれたオドレンは手を振り解き、和也から離れながら後ろへと下がる。

「何で声かけるのに、わざわざ手を伸ばす必要があるんだ。しかも、モジュールに触ろうとしてたじゃねえか！」

さっきのオドレンの動きが不審に思っていた和也から睨まれたオドレンは、冷や汗を垂らしながら誤魔化そうとしていた。

「オドレンさん！」

「ギクツ!!」

だがオドレンを更に追い詰める様に、なぎさと咲、のぞみ、ラブ、つぼみ、マナのピンクチームが駆け寄って来ていた。

「遅すぎ！なんで見てくれなかったのよー！」

ピンクチームを見かけたひめは自分達のパートで彼女達を見かけなかった事を思い出しながらそう怒る。だが彼女達が非常に心配そうな表情でオドレンに詰め寄って来ている様子を見ためぐみは、ただ事では無いと判断して「どうしたの？そんなに慌てて」と聞く。

そしてそんな彼女達を見てまさかと思ったオドレンは、自身を睨み付ける幻冬を押しどけながらマナ達に近づく。

「……これはみなさん。どうなさいましたか？」

「飲み物を取りに行ってくれたシャルル達が戻らないの!それに晴夜もないし……!」

「みんなで手分けをして探してるんだけど、見つからなくて」

「「「ええっ!?」」」

「オドレンさんは、みんなを見かけなかった?」

マナと咲の口から、妖精達(と晴夜)が行方不明になっている事を知ったハピネスチャージプリキュアとスイートプリキュア、和也と幻冬が驚くが。妖精達が見かけない事にもう気付いたかと焦りを感じながら、オドレンは更に詳しく聞こうと近寄ってくるみゆき達を相手に「い、いえ…」と額に汗を流しながら否定する。

「マナ!みんな!大変!龍牙が……」

「まこぴー……」

だがキルバスと戦う龍牙の助けを求めに来た真琴を見た和也は、さっきまでのシリアスな表情から一変して目にハートマークを浮かべながら、一目散に彼女の前へ近寄って行った。

「まこぴー!さっきのステージ!さい……」

「そのけ!そのけ……!」

すると和也の言葉を遮る様に、ウタエンが大きなダンボールと風呂敷を担ぎながら

走って来た。

「そののけ！そののけ！オイラが通るっすよ！」

「ウタエンさん！待って！」

「ストーツプ！」

「オイラは急に止まれないっすー！どわああ!!」

「ああ…」

ラブとのぞみ止めようとするも、ウタエンは止まり切れずに転んでしまい。その拍子にダンボールの中身をばら撒き、オドレンは顔に手を置きながら声を漏らした。

そしてウタエンが転んだ拍子にはばら撒かれた中身を、驚きながら目にしたプリキュア一同。

そこには、各プリキュア達が持っていた筈の変身アイテムが散らばっていた。

「これ、プリキュアの変身アイテム！」

「何であなたが持つてるですか！」

「あ、ああ…こ、これにはワケが…」

「その後ろの袋は何？」

「!?? こ、これもまたマズイっす！」

和也と幻冬に追求されるウタエンがなんて誤魔化せばとオロオロしていると、真琴に

ウタエンの背負っている大きな風呂敷の中で、ナニカが慌ただしく暴れている事を指摘される。

「ひめ〜〜」

袋の異変に気付いたウタエンは必死に袋を抑えようと乗しかかろうとするも、風呂敷からリボンの声が聞こえたひめは「リボン!？」と驚愕しながら彼女の名を叫ぶ。

「みんなの声が…どうして!？」

「さっきの部屋に入ったら、こいつらがいきなり…」

『ええ!？』

「しかも、みんなの変身アイテムを盗んで!!」

「何だと!？」

幻冬は何故リボンが袋の中にいるのかと呟いていると、更に袋の中からはぐらさんの声まで聞こえる。ぐらさんとリボン曰く、オドレンらによってこの袋の中に閉じ込められてしまったらしく、その上彼らはプリキュアの変身アイテムまで盗んでいったと言う。

それを聞いた和也は、響だけでなく他の変身アイテムまで盗んでいた事に驚く。

「あなた達、一体何ですか!？」

「〜ツ!このバカ!なにやってるんだ!？」

「すみませんっすー！」

「とにかく逃げるぞー！」

幻冬に何者か追求されたオドレンとウタエンが散らばったアイテムを一生懸命拾うと再びダンボールに詰め、妖精達が入った風呂敷を担ぎ。更にウタエンはすかさず懐から紫色の玉を取り出すと地面に叩きつけ、煙玉による煙幕を起こしてその場から逃走しようとする。

「ゲホツゲホツゲホツ！クソっ、何処だあいつらー！」

「残りのプリキュアの変身アイテムも頂戴したっすー！」

和也達がウタエンの放った煙幕に咽せていると、ウタエンらはドサグサに紛れてプリチェンミラーとフォーチュンピアノ、スマイルパクトにキュアモジュールを持ち去って逃げていた。

「ツッ!? 待ちやがれ！」

和也達が変身アイテムを持って逃げた二人を追いかけに行つたその頃。春のカーニバルのステージでは、はるか達“GO!プリンセスプリキュア”の3人が歌とダンスの準備を整えてステージに堂々と立っていた。

「ふう〜……」

はるかとはさっきまでのオロオロしていた表情とは違い、めぐみ達からのアドバイスを思い出し、ここに集まってきている妖精達の為にと覚悟を決めた表情を浮かべて意気込んでいた。

「大丈夫、大丈夫……歌とダンスの力を信じて……え?……うん?」

しかしはるかはその意気込みの為、自分の緊張が更に酷いものになっている事に気付いていなかった。だがそれを見たらとみなみは、はるかの緊張を解くべく詰め寄る。

「はるはるならできるよ」

「心を込めて大きな声」

「——うん!!」

きららとみなみがアドバイスを送り、はるかの緊張が解けて覚悟を決めようとした時

…

「うわああああああ!」

空からクロースが何者かに攻撃を受けて飛ばされて来たかのように、はるか達がいるステージの上に現れた。

「くそお……」

「龍牙君?何?」

「何があったの……?」

キルバスから攻撃を受け続けた為に、クロースが強制変身解除となってしまう中。突如ステージにいきなり現れた龍牙を見たはるかとみなみは、彼の身に何があったのか頭の処理が追いつかずいた。

「待てー！ー！ー！！」

「！！！！」

だがそんな彼女達を更に混乱させる様に突然めぐみの大きな声がステージ中に響き、三人は思わず声のした方へと顔を向ける。

「はっ……はっ……はっ……はっ……！！」

「うへっ……うへっ……うへっ……！！」

そこには、プリキュアの変身アイテムを詰めた袋を持ったオドレンと、妖精達を閉じ込めた鉄格子の檻を風呂敷で包んで担いでいるウタエンが、めぐみ達に追いかけられている光景が映っていた。

「あれって……オドレンとウタエン?」

「みんな?」

「ど、どうしたんですか?」

はるか達はこういう状況なのか把握できず困惑していたが、ステージ上にやって来た

ひめやめぐみはオドレンとウタエンが何をしでかしたのかを説明する為に口を開いた。

「そいつら、私達みんなの変身アイテムを盗んだの!」

「リボン達も、その二人に捕まっているの!」

「ええ!」

「どういう事なの!!」

はるかときららが驚愕する中、みなみにどう言う事だと問いかけられたオドレンとウタエンの口から、衝撃的な事実を突きつけられる。

「はあ……はあ……そいつらの言っていることは、本当さ!」

「オイラ達はハルモニアの大臣でもなんでもないっす」

『ツ!?!』

「あんた達、何者なの!?!」

きららがハルモニアの大臣じゃないと告白したオドレンとウタエンの正体を真っ先に問いかけると、二人は立ち止まって不敵に笑っていた。

「ふっふっふっふ……聞いてもいいのかい? 俺様に心まで盗まれちまっても知らねえぜ?」

「知るかよ! 何者だ、お前ら!」

カッコつける様に言うオドレンに龍牙が突っ込むも、二人は気にせず話を続けた。

「空に輝く太陽も！」

「水面に揺れる月すら盗む！」

「七つの海をまたにかけ！」

「世界のすべてを手に入れる、無駄にイケメンな憎いやつ！」

その名も神出鬼没の大盗賊、オドレン！」

「その相棒、ウタエンっす！」

オドレンとウタエンのかっこよすぎる(?) 決めポーズに、観客席に座ってた妖精達は驚愕していた。

「いや〜決まったな」

「練習した甲斐があったっすね〜」

いや練習してたんかいお前ら。

「盗賊?!」

「私達を騙していたのね！」

「そういうこと。この国を盗んだついでに成りすましていただけさ」

「この国を盗んだ? どういうこと!」

はるかが驚き、みなみが自分達を騙していたオドレンらに怒りを抱いていると、国を盗んだと語った彼の言葉を聞いたきからはどう言う事だと追求。

「言葉の通りだよ、ハルモニアは既にこのオドレン様の物つてわけだ」

「えらくくい人達は全員、牢屋行きっす!」

「そんな…」

「なんてことを…」

「この国が盗賊に乗っ取られていたなんて…」

めぐみといおなどひめが今のハルモニアの現状に驚愕を露わにする中、オドレンとウタエンの正体を知った観客席からは、妖精達の怒りと不満によるブーイングの嵐が起きていた。

「チツ…うるさいお客様どもだぜ。この国は俺様の物”って聞こえなかったのか?」

オドレンはそんなブーイングにも怯まず、懐からゲームのコントローラーキーを取り出して次の悪巧みを始めようとしていた。

「行くぜ!大回転!!」

オドレンがコントローラーキーのボタンを押して作動すると同時にカーニバル会場自体が揺れ出し、彼女達は突然の地響きに思わずよろけてしまいそうだった。

するとカーニバル会場が高速大回転を始め、高速大回転が止まると壁が先までの空の太陽も透き通る、明るいガラス構造とは裏腹に、薄暗く不気味な怪物や植物が彩る、まったく楽しくない物へと変貌。更に反転したカーニバル会場の周囲にはイバラの蔦が張

り巡らされて、誰も近づけないように施されてしまう。

「ふふふふ」

反転した壁にオドレンは大満足だが、龍牙達全員の他に妖精達はそうはいかない。

「わっ！なんだよ、このステージ！」

「何ですか！ここは！」

「この会場は、お前らを閉じ込める巨大な檻だ！」

「観客もお前らも、二度とここから出られないっすよーん♪」

どうやらこの趣味の悪いステージは妖精達やはるか達を閉じ込める物らしく、ウタエ
ン曰く観客を含めた全員はもう二度と出られないらしい。尚、このカーニバル会場はオ
ドレン達が夜鍋して作ったものらしい事が、彼ら自身の口から語られた。

「そんな?」

「なによ！それ！」

「そんな事させないわ！はるか！きらら！変身よ！」

「はい！」

「わかってる！」

事態の重さを知ったみなみはとつきにはるかときららへ変身する様に叫び、三人はま
だ奪われていないドレスアップキーとプリンセスパフュームを持って変身しようとす

る。

「させるか!ドロボーン!!」

「「あつ!!」」

だがその変身を阻止するようにドロボーン3人が上から降りてきて、はるか達の前で阻んで怯ませた。

「隙アリ!!」

「「ああつ!!」」

はるか達が怯んだ隙を突いて三叉の杖を取り出したオドレンにプリンセスパフュームは奪われてしまい、プリンセスパフュームを奪ったオドレンは高笑いをしていた。

「ふふふふ……あーっははははは!!これで全てのプリキュアの変身アイテムが、俺様のものになったというワケだ!」

変身アイテムと妖精を奪ったオドレンは勝利宣言したかのように高々と笑う。

(フフツ……面白いね〜こいつ。もう少し遊ばせてやるかア〜?)

そんな中クロースを追って来ていたキルバスはステージ舞台の上にある、プリキュア達やオドレンらが座っていたひな壇型ステージと一緒に設置してある木の上で、この状況を面白いと眩きながら楽しんでいた。

「まだ、終わってねえ!」

オドレンがプリキュアへの勝利を確信している中、龍牙はキルバスから受けたダメージを振り切ると、力を振り絞って叫びながら起き上がる。

「ここには、まだ仮面ライダーがいる！」

龍牙が仮面ライダーがいると叫ぶと、後ろから和也と幻冬も隣に揃う。

だがオドレンは目を細めながらその光景を嘲笑う。

「ああ〜？ たった三人で、何が出来るってんだあ？」

「確かにここには三人しかいません。でも……」

「そんなのは関係ねえ！ 俺達はお前達から、この国を取り戻す！」

「それにあいつがここに居るなら、絶対に諦めねえ！ この国を救える為に最後まで戦う

！

それが俺達、仮面ライダーだ！」

龍牙と和也と幻冬はビルドドライバー、スクラッシュユンドライバーを手に取り、オドレン達と戦う覚悟を見せる。

「あーっはははははは!! あーっはははははは!!」

「うわっ！」

「「ドロッ！」」

オドレンは全員から奪ったアイテムを詰めた袋をウタエンやドロポーンに当たりそ

うになるのも気にせず振り回して、何かを始めようとしていた。

「はははは!!見よ!俺様の新しい姿を——!!」

何をするのかと警戒する三人がドライバーを腰に装着してボトルを構える中、オドレンが袋を持って叫ぶと、変身アイテムを詰めた袋が突如光り出し。激しい閃光と共に彼の体が光に包まれていき、確信を得たオドレンは口をニヤリと歪めながら笑う。

「世界はゼーんぶ俺様のもの!悪いこと大好き!!キュアシーフ!!」

「……はあ?」

「……えっ?」

「キュアって……あの……」

そうしてオドレンがスポットライトを浴びながらキュアシーフと名乗ると、三人は気が抜けたかのように口をぽかんと開けながら彼を見つめる。

「……あれ?」

「——あん?何も変わってねえぞ」

それもそのはず。オドレンの姿は至って何も変わっておらず、オドレンが変身しようとしていた光景を高みの見物していたキルバスもそう眩いていた。

「ど、どうして何も起こらねえんだよ?」

どうして何も起こらないと叫ぶオドレン。

すると変身アイテムと閉じ込められた妖精の声が出た風呂敷の袋から…

『ミスマツチ!』

「ん?」

「はあ?」

「ミスマツチって……」

『ミスマツチ!ミスマツチ!ミスマツチー!』

ミスマツチという音声が流れると同時に、袋にある変身アイテムと妖精が姿を変えた。

「一体何が………な、何だこりやああ!」

オドレンが風呂敷の中を改めて確認すると、変身アイテムが石に変わっており、更にはその中にカード型の機械が入っていた。

「はああ!」

「な、何だてめえら!」

動揺するオドレンの背後から、プリキュア5のパートナーで人間体に変身しているココとナッツが現れ。はるか達や他のプリキュア達の変身アイテムを取り返して彼女達に渡した。

「ココ!」

「のぞみ。遅れてごめん」

ココがのぞみに駆け寄ると、龍牙がカード型の機械を拾う。

「……何だよこれ？」

「俺だって、一体何が起きてんのか訳わかんねえよ！」

捕まった妖精が現れたかと思うと、急に風呂敷の中のものゝ石に変わり。更に袋の中からこんな物が現れ、龍牙は何が何だかわからなかった。

「そもそも！お前なんかが変身できるわけないメポ!!」

声が聞こえて全員が別方向を向くと、そこにはプリキュアの妖精達に変身アイテムを持って立っていた。

「メツプル！」

「みんな無事だったの！」

なぎさやほのかを筆頭に、プリキュアのみんながパートナーの妖精を見て、直ぐに駆け寄り無事で会ったことに喜んでいた。

「どうやって脱出したの？」

「晴夜が助けてくれたんだ」

「晴夜が！」

だがのぞみはどうやって脱出したのかを疑問に思っていると、ココは晴夜が助けてく

れた事を説明した。

それは少し遡る事、晴夜がキルバスの所為で牢屋へと送り込まれる少し前。

晴夜は国王から事情を聞き、まずは妖精達の救出を試みた。

『急がないと！待たせたら怒られるっす！』

そんな中晴夜はダンボール箱に変身アイテムを詰めて走るウエタンを見かけ。後を追っていると彼が部屋に変身アイテムをしまい、そのままカーニバル会場へと戻っていくのを確認して部屋の扉へと近づく。

『あそこか……はあ！』

ドリルクラッシュャーで鍵穴を破壊し、扉を開けた。

『みんな！大丈夫！』

『晴夜！』

『助かったミポ！』

晴夜が中でメップルやミップルといった、縄に縛られて捕まった妖精達と変身アイテムを見つけると、みんなの縄を紐解いて変身アイテムを取り返した。

『間に合って良かったよ』

晴夜はみんなにオドレンとウエタンの正体を話し、このカーニバルを開催した本当の

国王が今捕らえられている事を話した。

『なんやと！あいつら盗賊やと！』

『早くみんなに伝えに……！』

『いや、ここでみんなの所へ戻るのやめた方がいい』

タルトやメツプルが早く伝えようとするが、晴夜はここで戻るとオドレンとウエタンは恐らく言い逃れし、しらを切るやもしれないと判断していた。

『そこでこれを使おう』

そこで晴夜は、コートからカード型の機械をいくつか見せた。

この機械は以前に晴夜がクリスマス風の風景を見せる為に開発した立体映像を改良し、カード型にした機械である。

『これを使って、あの二人の計画が思い通りに進んでいると思わせるんだ』

後は晴夜の計画通り開放された妖精達が新たに連れ来られた妖精を開放し、立体映像によりいかにも捕まったと見せておき、二人がみんなの前でボ口を出す機会を伺っていた。

「で、でも、こゝ、声が……」

そこへウエタンは、ならばあの時間いたりボンらの声は何なのだと呟く。

「その声は録音だ。振動がすると声が出るようにしていたらしい」

今龍牙が持っている機械には録音のボイスレコーダーがあり、衝撃により声が出るように開発したとナッツは聞いていた。

要するにあの時ウエタンが転んだ衝撃により、二人の声が鳴ったのだ。

「そ、そ、それじゃあ……桐ヶ谷晴夜と会った時は……」

「あ、あ、あ……あの、ガキイイイイイ……!!」

つまり、晴夜に正体を知られたあの時から既に妖精達と変身アイテムは奪い返されていたというわけで、それを察したウエタンとオドレンは深いショックを受けた。

「あいつ……俺達に内緒にカツコつけやがって!」

龍牙はそんな一連の流れを見ながら、相棒ながら手際の早いことだと知る。

「それにそもそも、変身できるのは伝説の戦士プリキュアだけロマ!!」

「なに……!!」

更にアロマから聞かされた驚愕の事実にも、オドレンのヒゲがピロピロ笛の如く横に伸びた。

「そんな事も知らずに盗んじまったのか?」

「しかも、こんな大掛かりな事までして……」

「……あっ!?お前らもしかして、バカか!!」

それを始めから知っていた龍牙達は、オドレンが本気でプリキュアに変身しようとしたのかとぐらさんやリボンを筆頭に皆んな呆れ。更には馬鹿の代名詞と（晴夜に）称される龍牙からバカと言われ、生き恥をかいた彼の心はさらに傷つく。

やめてあげてえ！オドレンのライフはもうゼロよ！

「そ、そそそ…そんなことは、勿論わかっていたぜ？」

知らなかったのを何とか誤魔化そうとするオドレンだったが、さつき変身しようとした事実から、彼の代弁は言い訳にしか聞こえなかった。

「アツハツハツハツハツハー……こりや傑作だア〜!!」

するといきなり何処からか大きな笑い声が聞こえ、その場にいた全員が声の聞こえた方へ顔を向けると、蜘蛛をモチーフにした様な姿をした赤いライダー……仮面ライダーキルバスが木の上で腹を押さえながら爆笑していた。

「な、何だお前は……？」

「ああ〜？……ああ。そういえばテメエ等には、まだ名乗ってなかったなア」

オドレンに何者かを問われたキルバスは彼らの前に降りると、自らの存在を明かす。

「俺の名はキルバス！ブラッド帝国の王だ！」

「ブラッド帝国！」

「エボルトとエピオンと同じ……」

ブラッド帝国と聞き、はるかときらりの三人以外は直ぐに動揺し始めた。

「ブラッド帝国って、私達を操って晴夜君を襲ったあの人達と同じ……」

「晴夜君と龍牙君の二人で、彼らは全滅したんじゃ……」

なぎさとかれんの言う通り、晴夜と龍牙の合体『クローズビルド』でエボルト、エピオンとブラッド帝国の野望は打ち砕き、残党はもういないはず。そう思われていた。

「……ふうん、あいつら滅んだのか。」

……ああ、何もわかってないア HOW 共に言っておくが。俺が封印されていたのは、このハルモニアだったのさ」

「……で!? どうやって封印を解いたの!」

マナがどうやって封印を解いたのかと聞くと、キルバスは仮面の下で笑みを浮かべながらオドレン達を見つめる。

「そおくれえくはあくなく! そいつらが、俺を封印した宝箱の鎖を引き裂いたおかげさア!」

「何!? ……あつ! お前?」

「あつ! ああああ……!」

それを聞いたオドレンは、この国に来て国王達を捕らえた時にウエタンが何やら鎖が巻かれた宝箱を持っていた事を思い出した。

あの宝箱こそが、かつてこの地に住む守り神によって、キルバスを閉じ込めていた石版から大きく姿を変えた、強力な封印の遺物だったのだ。

「感謝してるぞ〜！俺をあそこから出してくれてよォ〜！」

冷たく低い声でかつ嘲笑う様に礼を言うキルバスに、オドレンとウエタンはなんて事をしてしまったのかと腰が引けていた。

「封印されていたって事は、あなたも一万年前の戦いでキュアエンプレスに、エボルトと一緒に……」

真琴の口からエンプレスによって封印されたのかと聞かれると、キルバスから愉悦そうな笑い声が収まると同時に、何かを必死に堪えているかのように震え出した。

「……違う……俺を封印したのは……」

キルバスの絞り出すような眩きと共に浮かび上がるは、今でも昨日の事に思い出す、忌々しくも封印された時の記憶。

自身が太古のプリキュアを追い詰めた際に現れた、あの白い鎧と巨大な剣を持つ剣士によって――

「――全て！あの剣士イ！！」

あいつが邪魔したせいで！人間界も！トランプ王国も！全ての並行世界も！何もかも滅ぼし損ねたア！気分良く全てを滅ぼそうとしていた俺の心と絶対的なプライドを

メサイアから受けた苛立ちを治すために、ハルモニアを滅ぼすと宣言したキルバス。それを聞いたオドレンはドロポーンに命令を下す。

「……………ふん！」

だがキルバスは少し落ち着いた感じで右手を上げると、手から赤いオーラをドロポーンに飛ばす。するとそれを受けたドロポーンの動きが止まってしまい、オドレンはどうしたのかと更なる焦りを見せる。

「お、おい!どうした!」

「そいつらの体内に俺の遺伝子を与えた。つまり、そいつらは俺の駒だ!」

「な、なにいいいいいいー!」

オドレンとウタエンは自分の配下が他人に盗まれたことで、数による有意差までもが逆になってしまった。

「さくらくにイ〜」

「!?? 何これ……………キヤアアアアアアアア!」

「うわああああああああ!!」

「ああ!!」

「みんな!!」

更にキルバスは左腕を地面に向け同じようにオーラを飛ばすと、めぐみ達の下から液

状の物質が現れ、彼女達を巻き添えにみるみると姿を変えていく。

『ううう……！』

そして液状だった物質：キルバスの遺伝子はプリキュア達を拘束する不気味な肉塊の柱へと変化し、幸いにも捕まらずに残ったはるか達三人と龍牙達ライダー組（ついでにオドレンとウタエン）は、目の前で上半身のみ出して苦しむプリキュアオールスターズを黙って見ている事しか出来なかった。

「どうだあゝ俺の力はあゝ？名付けて『プリキュア柱』！これでプリキュア共は何も出来ず、俺に滅ぼされるのを心待ちにするって訳だア!!」

それを見た妖精達はプリキュアが捕まったという絶望で顔を大きく歪め、龍牙達はキルバスの力がたった一人でこの国を滅ぼす程の戦力を作り上げられる、エボルト以上の異常な力を持っていると感じていた。

「さあゝて、滅ぼすとするかあ！歌だのダンスだの下らない事をしている、こんなつまらん国をなア！」

「!？」

「下らなくねえー！」

キルバスの歌やダンスが下らないと言う発言に、はるかがシヨックを受ける中、龍牙が今の発言を取り消せと言わんばかりに叫ぶ。

「歌やダンスがあるから！笑顔になれるし、元気も沢山湧いてくるんだ！」

彼にとつて歌は、大切な存在を守るきっかけをくれたもの。

それは、かけがえのない出会いや仲間、相棒にも巡り合わせてくれた。

だからこそ龍牙は、それを侮辱したキルバスを許すことなどできなかった。

「だから、俺はここで妖精達を笑顔にする！いつらを！この国を守る！」

(龍牙……)

「お前一人じゃねえだろ」

「僕たちもです」

守ると言う龍牙の言葉に感化し、和也と幻冬だけでなく、後ろにいるみんなも気持ち
は同じだという事を表す様に覚悟を決めた表情となる。

「私！歌う!!」

「え？」

「なにっ？」

「あん？」

「だって…歌とダンスの力を信じてるから!!」

突然のはるか言葉にみなみときからは勿論、オドレンとウタエンも驚き。キルバス
は何を訳の分からない事を言ってるのだと呆れていた。

「はるはる……」

きさらはさつきまでの表情とは違うはるかに、驚愕するばかりだった。

「めぐみちゃん、言つてたよね？」

「「え？」」

「歌には、凄い力があるんだって！」

はるかは今まで見てきたプリキュア達の歌とダンスを見て、歌には常識だけでは理解出来ない、強く凄まじい力が秘められているのだと思えていた。

「『ダンスも踊れば最強』だって……私達の先輩達はどんな困難にも、前を向いて諦めずに立ち向かってきた」

みんな、それぞれの想いが違つていても決して怯えず、諦めなかつた事を想いを込めて歌つていた。

そんなはるかの言葉を聞いたみなみときさらは、彼女の話聞き続けた。

「だから……だから……私！歌いたい!!」

だからこそはるかは大きな決心と勇氣を持つて、自分の口から歌いたいと言ひ出す。

「「うん」」

そしてみなみもきさらも、はるかの言葉を聞いて立ち上がり、今すべき事をする為にステージに立ちあがるのであった。

『私達は♪普通の女の子♪』

はるか歌い出すと、みなみときからも寄り添う。

『だけど、何か出来ること♪あると思う♪』

『心には♪ヒミツのドアがある♪』

『開くなら♪今こそ♪その時♪』

『ぐう!なんだ……これは……』

するとはるか達の歌を聴いていたキルバスが急に苦しみ始め、プリキュアオールスターを拘束する肉塊の柱が崩れ始めるが、はるか達は気にせず歌い続ける。

『『嵐が吹き荒れても♪風向きを変える♪勇気のチカラ♪信じている♪』』

そして光が会場を覆いつくした時、はるか達はプリンセスプリキュアへと変身を遂げ、肉塊の柱が完全に崩壊してめぐみ達を自由にしていった。

『『イマココカラ始まる♪ココロのミラクル♪』』

それに連呼する様に、プリキュアオールスターズも変身を完了してフローラ達の声に反応し、上がってくるステージと共にそれぞれ配置しに行った。

『『運命も♪未来も♪切り開くー♪』』

ラブリー達ハピネスチャージもフローラ達に寄り添う。

『辛い♪時に♪グッと頑張るのは』

『いつも♪あきらめない背中見てたから♪』

『花のように♪笑うみんなのため♪』

『駆けつけて♪寄り添い♪支えたいそれぞれは蕾でも♪夢の種抱いて♪』

『『花を咲かせる♪いのちなの…』』

『イマココカラ始まる♪イノリはパワフル♪』

『涙さえ星になる♪きらきらり!』

『BELIEVE♪ココカラ始まる♪ココロのミラクル♪運命も♪未来も♪切り開く————♪あなたも♪わたしも♪未来へ繋がる』

『ね・が・い♪なの————♪』

プリキュアオールスターズが揃った声は、華麗なるフィナーレを飾るのであった。

「すげえ〜!マジ最高〜!」

「プリキュア〜!最高だぜ〜!」

「みんな!とてもかっこいいです〜!」

龍牙達や妖精達はプリキュア達の歌に、感無量で拍手や声援を贈る。

「こ、これが…歌とダンスの力……………」

「どどどど…どうするんっすか?アニキ!」

「どうするも、こうするもねえだろ!」

その近くでは、キルバスに捕まったプリキュアオールスターを歌とダンスで解放した光景を見たオドレンとウエタンの二人が、改めて歌とダンスの力を痛感していると、キルバスは胸を押さえて片膝をついていた。

「ぐうお……！何だ！この胸を締め付ける感覚は……」

歌を聴いて苦しみ始めたキルバスは、その原因は何か気付くことができず、更なる苛立ちを表していた。

——貴女は、エンプレスには勝てない！

その時、キルバスの脳裏に蘇ったのは、キュアエンプレスの仲間であるキュアマジシャンの台詞だった。

——何言ってるんだア？プロトジコチューとエボルトの封印に力を使い果たしたお前らに、俺が負けるんでもいいってえのかア？

——確かに今の私達には、力はほとんど残ってない……

それでも諦めない限り、私達が……エンプレスが負けることは無い!!

次に蘇ったのは、現実逃避でもしている様な精神論を語るキュアプリーステスの言葉。

キルバスはその言葉を嘲笑い、心底見下しながら彼女達を殺そうと牙を剥いた。

そのまま俺は二人を悠々と返り討ちにして虐殺するという結末——は、来なかった。

なんとあの小娘どもは在ろう事か、自身と——遊びで戦っていたとはいえ——ほぼ互角の戦いを繰り広げたのだ。

繰り返し言うが、あいつらはプロτζコチューとエボルトの封印で体力を使い果たしていた。

それなのに……互角？

エボルト相手に苦戦してた雑魚ども相手に、アイツよりも強い俺と互角に渡り合うのだ……？

その事実を理解した瞬間、俺は遊びで戦う事をやめて半分ほど本気で戦った。

ちよいと本気で戦った時、奴らは何も出来ずに地に伏せた。俺と戦っていた時にもかかりギリギリだったのだろう、実際アイツらには指を動かす力すら残って無かった。

だが俺の中には、僅かながらも『屈辱感』があった。

今まで行って来た戦いは、いつも俺のワンサイドゲームだった。

だからこそ、エボルト以外の戦いは何時も遊びだった。

だからこそ、エボルト以外の相手に本気で戦う事には、確かな屈辱感があった。

しかし、それだけならまだ良かった。たったそれだけの屈辱なら、ほんの数日程度で忘れることができた。

——私は……弱き者に勇気を与える者。

問題は突然俺の前に現れた、白い剣士の存在だった。

奴との戦いは、互角なんてものじゃない。

俺は本気を出す暇もなく一方的に奴らのペースに乗せられ、俺のエゴルドライバーが破壊され、挙げ句の果てに封印までされた。

この時点で、俺のプライドは木っ端微塵に砕かれていた。

プリキュアから受けたちっぽけな屈辱感、この敗北を機にどんどん肥大化していった。

「———どいつもこいつも、俺をイラつかせやがってえええエエエエエエエ!!」

『Ready Go!』

思い出したく無かった記憶を蘇らせてしまったキルバスは、過去の苛立ちを抑えきれぬままレバーを回転させると、手から放出したクモの糸で妖精達の座る観客席を拘束する。

『わあああああ?!』

「なっ!?!」

「一体何を——!」

和也と幻冬の驚愕を他所に、キルバスは複数の観客席をステージの中央にまとめると、背中から巨大な蜘蛛のかぎ爪を4本出現させる。

「ま、まさか……! やめろおおお……!!」

「こんな最低な国を——いや! この星も、そして宇宙も、すべて破壊してやるッ!」

『キルバススパイダーフィニッシュ!!』

龍牙はキルバスが何をしようとしたのかを察するも時すでに遅く、キルバスは背中から展開したクモの脚で観客席を叩き潰してしまった。

「あ……ああ……っ。妖精達が……」

「……で、テメエ……よくも……ッ!」

キルバスによって妖精達がいた観客席が破壊され、観客席の残骸を見て妖精達の末路を想像してしまったフローラは膝を床につけて涙を流し、龍牙はキルバスの非道な行いにかつて無い程に怒りの炎を燃やした。

「……クッ、フッフ……ハッハッハッハッハ!!」

見たかお前らア! お前らの言う歌の所為で、この国の妖精共は死んだア!! 見たか小娘エ! 雑魚どもが死んだのは、全部お前が最低な歌を歌ったからだアアアアア!! フッハッハッハッハッハッハッハ!!

「——一体いつ、妖精達が死んだの?」

「……アア? 何言って……!?!」

だがブラックの眩きがキルバスの耳に届き、機嫌の良い笑い声を上げていたキルバス

の目に映ったのは、プリキュア達に抱きかかえられた、キルバスに怯えながらも何事もなかったかの様に無傷の妖精達だった。

「うえええ!?お、お前ら、いつの間にそいつら連れ出してたんだよ!」

「それは、キュアパッションのおかげだよ」

驚きのあまり二度見しながらも妖精達が無事だった事に安堵する龍牙に、キュアピーチが救出した妖精を床に下ろしながらそう語った。

では解説しよう!キュアパッションにはパートナー妖精であるアカリンの力を借りて瞬間移動できる能力があり、転移できる距離に一切制限がない上、他者や物体を強制的に転移させることも可能なのである。

この力はパッションの体力を消耗する為に1日に無制限に使える回数は限られてはいるが、数十人のプリキュアを連れて観客席にいる妖精達を助けに行つて元の位置に戻る分には問題ないので、キルバスの蜘蛛の脚が観客席を叩き潰す前に妖精達を救出する事が出来るのだ。

しかしパッションの瞬間移動能力を知らないフローラや龍牙達だと、突然移動した驚きで判断が遅れてしまう可能性があったので、彼女の力がある程度把握していたハピネスチャージ以前のプリキュア達だけで救出する事になってしまった。

「よ、良かった……」

「……またかよ……貴様ら人間どもは、何度俺の機嫌を損ねれば……あゝあーっ！
イライラする!!」

「——キルバス！貴女はこの国を、私たちの歌を、最低と言った！」

フローラが安堵しているのを他所に妖精達が無事だった事を知ったキルバスは、かつてメサイアによつてプリキュア二人を殺し損ねた事を思い出して再びイライラしていると、ラプリーが前に出てそう叫んだ。

「だけど龍牙君やフローラが言った通り、歌やダンスがあるから私達は笑顔になれるし、元気も沢山湧いてくる！どんな困難にも、前を向いて諦めずに立ち向かつて行ける！」

だからこそ！今此処に私達プリキュアと仮面ライダーがいる限り、私達に元気をくれるこの国と歌が——ハルモニアとフローラの歌が最低だなんて、もう二度と言わせない!!」

「このお……お前ら！やれエー！！」

キルバスの命令によりドロポーンが一斉に向かい、ステージにいるプリキュアと客席にいた妖精に別れて襲い始める。

「かずやん、幻冬。キルバスは俺が倒す」

「わかった。他は任せろ」

「僕達はみんなをサポートします」

「いや、テメエらの相手はコイツらだ!」

キルバスは龍牙に任せ、和也と幻冬がプリキュア達のサポートをしに行こうとする。

それを察知したキルバスは、プリキュアオールスターを拘束する柱を形作っていた無数の肉片を液体状に変え、ある怪物を作り出していった。

「こいつは……」

「スマッシュユ!」

「なあに、お前らの記憶から生み出した只のコピーさ!」

キルバスは自らの遺伝子で作った柱の肉片を使い、何十体ものスマッシュユを生み出したのだ。

そしてスマッシュユが散らばってプリキュア達と妖精達を襲いにいった光景を見た和也と幻冬は、キルバスの生み出したスマッシュユの応戦へと向かう。

和也と幻冬がその場から離れると、キルバスの視界には龍牙だけが映っていた。

「さあ、第二ラウンドと行こうぜ!」

『ポトルバーン!』

「面白い……!じゃあ、今度こそ!その生意気な口を潰してやるよ!」

苛立ちを必死に抑えながら処刑宣言を放つキルバスに対し、龍牙はオレンジカラーのナツクル型変身アイテム『クロースマグマナツクル』を取り出すと、ドラゴンマグマボ

トルを装填したナツクルのグリップを上げてドライバーに差し込む。

『クローズマグマ!』

マグマナツクルを差し込みレバーを操作すると、後ろから巨大なナツクルの形状をした坩堝『マグマライドビルダー』が作れていき、龍牙の後ろへと完成された。

『Are you ready?』

その音声で鳴り響くと龍牙は拳を手に当て構え、一度目を閉じる。

「変身!」

そして龍牙の叫びが響き渡ると、坩堝から流れ出た溶岩『ヴァリアブルマグマ』が彼の体に掛かり、流れ出た溶岩からヤマタノオロチのような八体の龍が現れる。

『極熱筋肉!クローズマグマ!アーチャチャチャチャチャ　チャチャチャチャアチャア!』

そのままナツクルが固まった溶岩を砕くと、全身が溶岩を想起させるメタリックブラックとオレンジの装甲に、胸部や両腕、両脚、両肩には龍の頭部モチーフの装甲、後ろには羽が装着されたフォーム、『クローズマグマ』となって現れた。

「龍牙!私も戦うわ!」

「ソード」

そこへ更にソードも参戦し、クローズの横に並んだ。

「今回はあなたと晴夜だけじゃない。私達も一緒にいる」

「おう！頼むぜ！」

「ええ！」

「俺はいいぜえ！まとめて相手をしてやる！」

クローズとソードは一緒に走り出し、キルバスへと向かって行く。

「よし、いく——んあ？なんだこの花卉……ッ!?？」

だが彼らの目の前に赤い薔薇の花弁が横切り、なんだ今のはと思う頃にはクローズとソード、キルバスの周りには無数の薔薇の花弁が視界を覆う程に飛び交っていた。

「——あれ？どこだ此処……」

そして気が付いた頃には、クローズ達はカーニバル会場から大きく離れた原っぱの上に立っていた。

「……どうなってるんだこれ……オイ、テメエら何しやがった」

「そんな事、俺が知るかよ！それより行くぞソード！」

「えっ?……ええ、わかったわ！」

ソードはこの時、此処から離れた所に赤い髪の少女と赤い人型のドラゴンがいる事に気付いたが、瞬きした瞬間にはその二人の姿は消えており。気の所為だと思ふ事にした彼女はクローズと一緒に、キルバスへ挑みに行った。

今ここに、ハルモニアの明日を掴むための、ブラッド帝国の王であるキルバス達との戦いの火蓋が切られたのであった。

『——さて、俺と君に出来ることは、此処までだ。後はこの者達に任せよう』

「そのようですわね。……ありがとうございました。わたくしに、彼女達の歌とダンスを見れる様にしてくれて……」

ハルモニアの城の上で、赤い縦ロールの少女が、赤いドラゴンに向けてお礼を言うていた。

だがそこに居た両者は、どういうわけか半透明になっており、いまにも消えそうになっていた。

『……お礼はいい。今の俺では、絶望に囚われた君を助けられない……』

あの怪物を倒す手助けをする為に、精神体として無理矢理目覚めさせた君には、申し訳ない事をした』

「それでも、わたくしの故郷を救ってくれようと奮闘する彼女達の歌とダンスを、一時的とはいえ見れるようにしてくれて……本当に、感謝しかありません」

『……この時の記憶は、本当の意味で君が目覚めた時には全て忘れているだろう。

それだけは、覚えといってくれ……紅城トワ』

少女が頷くと次の瞬間には、少女の姿は完全に消え去っていた。

残った赤いドラゴンは、キルバスと戦っている二人の戦士達に目を向けた。

『……頼むぞ。俺とメサイアの奴が成し得なかった事を、今此処で成してくれ……』

プリキュア、そして仮面ライダーよ……』

ドラゴンの応援する様な呟きが放たれると、彼の姿も消え去り、その場には大きな風だけが残っていた。

「キュアフローラ！こんなステージ壊しちゃおう！」

「うん！」

場所は戻ってカーニバル会場。プリキュア達は妖精達の避難をリボンとぐらさんに任せ、悪趣味なステージを破壊しようと言うラブリーの掛け声にフローラが頷くと、二人は真っ先に壁に向かって飛び上がる。

「はああああああ!!」

ラブリーとフローラのキックが壁を突き破り、外へ出る為の出口を作る。

「この国の本当の王様達がどこかに囚われているハズよ！」

続けてGo!プリンセスプリキュアとハピネスチャージプリキュアが二人の突き破った壁へと飛び込んで行く中、マーメイドは本物の王様が何処にいるかを考えてい

た。

彼女達に課せられた最初の目的が決まると、トウインクルはウタエンの言葉を思い出していた。

——えらくいい人達は、全員牢屋行きつす。

「そうだ！牢屋！」

「牢屋って言つてたから、きつと！お城の中だよ！」

王国の女王としてお城暮らしをしていたプリンセスが、城内に国王達が閉じ込められた牢屋が有るはずだと話すと、ハニーはそれに頷きながら「探しに行こう！」と叫んだ。「私も行く！もしかしたら晴夜もそこに！」

「急ぎましょう！」

マーメイド達が本物の王様達を助けに行こうとすると、ハートもおそらく晴夜もそこへ閉じ込められていると思ひ、彼女達と共に向かう。

『ワァー—————!!!』

だがそこへ、スマツシユとドロボーンがマーメイド達の頭上から攻まり寄ろうとしていた。

「はああ！」

しかし向かつてくるところにダイヤモンドやロゼッタという、ハートの幼馴染二人が

一気に吹き飛ばし道を作る。

「ハート。あなたの大切な人を見つけて！」

「あなた達の後ろは、私達が守ります」

「みんな……」

ダイヤモンドとロゼッタのおかげでスムーズに王様達の救出に行ける事を感謝しながら、ハート達は牢屋の場所を目指して走って行った。

そして別の場所では。ドロボーン達はブラックとホワイト相手にしても怯まずに大勢で立ち向かっていた。

「だだだだだだだだ!!」

だがブラックは次々と向かってくるドロボーン達をパンチで応戦し、次々と吹き飛ばしていく。

「ふっ！はっ！たああああ！」

ホワイトはドロボーン達の頭を踏み台にして踏んでいき、着地すると回転蹴りでドロボーン達を蹴散らしていた。

「きゃっ！ああ……」

しかしルミナスはドロボーン達に囲まれて攻撃を仕掛けられて、避ける事で手一杯な

彼女はピンチに陥っていた。

「ルミナス！」

ブラックとホワイトが叫ぶと、横から誰かがすり抜けていくとドリームがルミナスの周りにいたドロボーン達を逆立ちからの回し蹴りで吹き飛ばしていき、次々と蹴散らしていく。

「大丈夫？」

「はい」

「ドリーム！ありがとう！」

そしてプリキュア5は次々と迫ってくるドロボーン達を、次から次へと蹴散らしていった。

すると何かが頭に浮かんだブラックは、ある事をホワイトに聞いた。

「ねえ、ホワイト！こんな時、何ていうんだっけ？」

「え？」

「ほら、みんなで力を合わせるってやつ……」

「1人はみんなの為に。みんなは1人のために」

「うん！それ」

ブラックの言いたい事をようやく理解したホワイトは、ブラックにその言葉を思いだ

させると、言いたい事を思い出した彼女はドリームに向けて口を開いた。

「ここは、私達が食い止めておくから」

「みんなは、あの子達の非難をお願いね!」

「ああ…YES!」

ドリームは意外な事を言われて思わず戸惑うも、すぐ様理解すると了解したのだった。

「あわああー!?」

「あ、アニキー!」

「待ってやコラア!」

一方で、オドレンとウエタンを襲い掛かっていたスマッシュ達を、和也がボトルの力で殴り飛ばし、オドレンとウタエンの前に幻冬が和也と共に立ちはだかる。

「みんなが楽しんでいたカーニバルを、亜久里ちゃん達から大切な物を奪ったあなた達を、僕は許しません!」

「けど、お前らにはここでの事を償って貰う必要があるからな」

『スクラッシュドライバー!』

和也と幻冬はスクラッシュドライバーを装着し、ロボットゼリーとクラッククロコダ

イルボトルを取り出す。

『ロボットゼリー!』

『デンジャー! クロコダイル!』

「変身!」

和也と幻冬から巨大なビーカーが現れ、和也の方には黄色い液体を纏い。幻冬には紫の液体から巨大なワニの口のようなものまで出現し、その後二つのビーカーが割れると同時にその姿を変えた。

『潰れる! 流れる! 溢れ出る! ロボットイングリス! ブラア!』

『割れる! 食われる! 砕け散る! クロコダイルインローグ! オラア!』

「心火を燃やして、ぶっ潰す!」

「大義の為の犠牲となれ!」

グリスとローグへと変身し、二人を襲おうとした一団へ向かっていく。

「おりゃ!」

「オウオウオウ! ハア!」

「ぐあ!」

場所はカーニバル会場から少し離れた所が変わって。クローズはキルバスに連続の

パンチを与えようとするが、キルバスはそれを全て避けて反撃のパンチを食らわせていた。

「どうしたあ?…ハあ!」

「ぐっ……!おらア!」

「ハハハハッ!」

「がっあ!!?」

キルバスはクローズにパンチを決めようとするが、クローズはそれを受け流し。今度はキックを決めようとするも、逆にキルバスから反撃のパンチを喰らってしまう。

「はああ!」

「おっと……今度はお前かア!」

後方へと飛ばされたクローズと交代する様に、今度はソードがキルバスに挑もうと前に出た。

「タアアア!」

キルバスはソードが繰り出す手刀とキックを躲し、ソードは後ろへ下がりがクローズへ声を掛ける。

「龍牙!立ちなさい!こんなのに負けるあんたじゃないでしょ!」

「ああ……たりめえだ!」

ソードに感化されクローズが起き上がる。

「どうやら、少しは楽しめそうだな」

キルバスは向かつてくる二人を見てまだ楽しめると呟くとその時、地表が酷く揺れ始めた。

「な、なんだ!?!」

「今度は何!?!」

「ほお……あいつがお怒りのようだなア!」

クローズとソードは謎の揺れに狼狽えるが、キルバスはこの揺れの原因が何か知っている様だった。

一方で隠し通路を見つけたプリンセス達は、本物の国王と王女と晴夜が捕らえている牢屋へと辿り着いた。

「居た!」

「晴夜!」

ハニーらが牢屋への扉を開けると、其処には鉄格子を蹴る晴夜とそれを座って見ていた国王と王女、大臣がいた。

「みんな……」

「あなた達は…」

「私達、国王様達を助けに来ました!」

「王様! 王女様!! 晴夜!」

プリキュア達が助けに来たのを見て一安心し、牢を破壊して貰った晴夜達は直ぐにそこから脱出した。

「御怪我はありませんか?」

「ハニーキャンデイはいかがですか?」

「私達プリキュアが来たからには、もう安心ですからね!」

「ああ……ありがとうございます」

マーメイドやハニー、プリキュアの言葉に王女は安堵するがしかし、牢を出てすぐにキルバスの生み出したクローンスマッシュが三体現れた。

「スマッシュユ!」

スマッシュユを見て晴夜は構えようとするが、ビルドドライバーがない為に何も出来ずにいた。だがそんな晴夜の悔しい心情を察したハートは、懐から青いアイテムを取り出した。

「晴夜! これ使つて!」

「っ! これは、スクラッシュドドライバー……!」

実はここに来る前、龍牙が自分のスクラッシュドライバーを晴夜に託してくれており。ハートはそのスクラッシュドライバーとドラゴンゼリーボトルを見せ、龍牙の想いを受け取った晴夜はそれを手に取る。

「龍牙！借りるぞ！」

『スクラッシュドライバー！』

晴夜が此処にいない龍牙に礼を言いながらスクラッシュドライバーを腰に装着し、ドラゴンスクラッシュゼリーを取り出して差し込んだ。

『ドラゴンゼリー！』

晴夜の周りに巨大なビーカーが出現し、それと同時に「変身！」と高々と叫ぶ。

そのままレンチを下ろすとセットしていた袋が潰れて、晴夜の周囲をビーカーが囲むと青い液体が注入され、ビーカーが割れて彼の姿が変わる。

『潰れる！流れる！溢れ出る！ドラゴンインクローズチャージ！ブラー！』

晴夜はスクラッシュドライバーで変身するフォーム、クローズチャージへと変身した。

「スクラッシュドライバーの変身は初めてだけど……何とかするよ！」

『ツインブレイカー！』

「はあ！」

クローズチャージャー夜はツインブレイカーを装着すると、スマッシュに向けて放ち怯ませる。

「たあ!はああ!」

スクラッシュドライバーでの変身は初めてだったが、それなりに戦えていた晴夜はビルドの時と同じ戦い方でスマッシュを追い詰める。

「よし!」

『スクラップブレイク!』

「ハアアアアア!」

クローズチャージャー夜はドライバーのレンチ型レバーを下ろすと音声がり出し、クローズの右足に青色のエネルギーが溜まり、スマッシュに向けてキックを放ち撃破した。

「ふう〜」

慣れないスクラッシュドライバーの変身だったが、何とか撃破は出来た。

その近くで国王は、プリキュア達に春のカーニバルはどうなったのかを聞いていた。

「カーニバルは!?カーニバルはどうなりました!?!」

「騙されてたとはいえ…途中までは、順調だったんです」

「それが、あの変な盗賊と赤い奴がめちやくちやに!」

「なっ!?!なんですと!あ、ああ……っ!」

「お父様！」

「なんとということだ……」

国王はマーメイドとプリキュアから、オドレンとウタエンに加え、キルバスが春のカーニバルをめちやくちやにした事を聞くと嘆き始め、今にも崩れ落ちそうになつた。

「どうしたのですか？」

王女に支えられながらなんとか立っていられる状態の国王に、ハニーは尋常ではない様子を感じ、どうしたのかと尋ねてみた。

「春のカーニバルは、ハルモニアの守り神に捧げる御祭りなんだ」

二人から聞いた話では、守り神はとても大きなドラゴンらしく、先ほどから王城に飾られている守り神であるドラゴンのモニュメントや、紋章に描かれているドラゴンの絵がその証拠である。

「普段は温厚な神様なのですが、それはもう歌とダンスが大好きで……」

「カーニバルが盗賊によって汚けがされたと知れば……どれだけ御怒りになるか……」

古来、この守り神によってハルモニアはどんな災厄にも守られてきたと言われる。

その守り神は歌とダンスが大好きなのだが、もし歌とダンスが汚される事があればハルモニアは滅亡すると言われている。

故にハルモニアの国民達は、この古の通りに歌とダンスを守り神へと捧げて、国を守り続けてきていた。

「とにかく。急ぎましょう!」

ここにおいては拉致があかないと判断した晴夜達は、国王と一緒に牢を出て外へと急いで向かう。

その頃、大きな揺れが起こったハルモニアに大きな影が覆い尽くされたかと思うと、その影は物凄いスピードでハルモニアの上空を通り過ぎていった。

その影の正体——ハルモニアの守り神のドラゴンは怒りを剥き出しにしながら山に降り立ち、その全貌を明らかにするのであった。

「あ、あれは……」

「なにあれ——!つかデカすぎでしょ!!」

ブロッサムやマリオンといったプリキュア達がオドレンのカーニバル会場の支柱になつていたイバラの蔦を消滅させたことで、趣味の悪いカーニバル会場を破壊したのもつかの間。近くの島に聳え立つ山へ降り立った青紫色のドラゴンは、怒りに満ちた目でハルモニアを睨みつけていた。

「ああ……!」

守り神は片翼だけでもハルモニアなどすっぽりと覆いつくせる程の大きさで、ラブリーと一緒にステージを破壊していたフローラは、かつてない程の脅威と強大な力を感じ取っていた。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

雷鳴を響かせながら暗雲に覆われた空を背景に、守り神の咆哮が強烈な衝撃波となつて突風を引き起こし、ハルモニア中に爆風が覆われていく。

『ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

「うっ!!」

フローラとラブリー、クローズチャージ暗夜、プリキュア達は突風に吹き飛ばされないように持ち堪えるが、あくまでも踏み止まるので精一杯だった。

『わあああああああ!!』

グリス、ローグ、妖精達も同じく吹き飛ばされないように瓦礫を縦にして免れているが、持ち堪えるのも時間の問題だった。

「どわーーーーー!!」

オドレンとウタエンも吹き飛ばされないように踏ん張るが持ち堪えられず、そのまま吹き飛ばされてしまう。

「いいなア〜〜!もつと暴れろオ!」

守り神の咆哮を天空に轟かせる光景を見て、キルバスは守り神の暴れ様に歓喜の声を上げる。

「崇拜する守り神によりこの国が滅びる!正に皮肉!最っ高じゃねえかア!」

「させるかよ!」

「そんな事はさせない!」

クローズがキルバスへ向けて突進し、ソードも叫びながら後に続く。

「あいつらが何とかする!そして、俺とソードがお前をここで倒す!」

此処でキルバスを倒す。そんな決意を固めるソードはキルバスに手刀を繰り出すが躲され、クローズのマグマを纏った拳が繰り出される。

「人間風情が、俺を倒すだと……!」

だがキルバスはクローズの拳を掴み、そのまま後ろへ放り投げる。

「俺をエボルトや他の奴らのように、倒せると思うなア!」

自身を倒すと言った事に怒りを感じたのか、倒れるクローズをキルバスは踏みつける。

「あッ……うああっ……!」

「龍牙!」

ソードはキルバスにキックをかましてその赤い足からクローズを離させると、踏みつけられた部分を押さえながら咳き込む彼を背にしながら赤い仮面ライダーを睨み付ける。

「倒せるわ！私達は絶対に負けない」

「ふん。ならやってみせろオオー！」

「きらめけ！ホーリーソード！」

自身に向けて啖呵を切るソードを侮蔑しながら接近するキルバスに、彼女はホーリーソードの斬撃を放つ。

「そんなもの——！」

『ヒッパレー！ヒッパレー！ミリオンヒット！』

「オリアアアアアアア！」

余裕にホーリーソードを躲したキルバスだったが、避けたタイミングでクローズがビートクローザーによる攻撃を繰り返す、キルバスを後ろへのけぞらせた。

「つっ……人間が！調子に乗るなよオオーッ！」

キルバスは二人に受けた攻撃に怒り出し、クローズとソードに更なる牙を向ける。

一方。ハルモニアの守り神が現れて、何があつたのかと状況が飲み込めないでいたプ

リキユア達は…

「どわっ!」

「どへっ!」

「みんなー!ー!ー!ー!ー!ー!」

オドレンとウタエンが吹き飛ばされた場所からプリンセスの声が出て、振り向くとハート達にクロースチャージになった晴夜が国王様と王女様を連れて走ってきていた。

「マーメイド! トウインクル!」

「大丈夫!? 怪我はない?」

「は、はい!」

「でも、急にあんなでっかいドラゴンが現れて…」

マーメイドらに怪我はなかったかと心配されるフローラを横に、ラプリーはそう言いながらみんなと再度守り神を見ると、守り神は喉を鳴らしながら此方を睨んでいた。

「あのドラゴンは、ハルモニアの守り神だ!」

「「ええっ!」」

「カーニバルを汚された怒りで我を忘れてしまっているのです! プリキュアの皆様! どうか守り神を止めてくださいっ!」

「このまま暴れられては、ハルモニアが滅んでしまいます!」

『ええっ?!?!?』

そこへクロース暗チャージ夜からドラゴンの正体を聞かされたフローラとラブリーは驚きのあまり二度見していると、遅れて前に出た国王と王女から今のままではハルモニアが守り神によって滅んでしまう事が語られた。

「止める方法はないのですか?」

「ええ…歌とダンスを披露してくれば、守り神もごきげんに……」

「でも、ステージは……」

フォーチュンは何か方法はないかと聞くと、国王は歌とダンスを披露すれば怒りは静まると語る。だがマーメイドの言う通り歌やダンスを披露しようにも、ステージは既に壊してしまった為、とても歌とダンスを披露できる状態ではなかった。

さらにクロースとソードはキルバスに挑む中、徐々にキルバスとの差が生まれて来ていた。

「オラオラア!どうしたー!」

ソードがキルバスの連続パンチを必死に躲し続けていると、キルバスに受けたダメージから復帰したクロースはドライバーのレバーを二度回しながら「どけええ!」と叫び走って来た。

『Ready go!』

『ボルケニックブレイク!』

「はあく……オリヤヤヤヤヤヤ!」

身体中にマグマを帯びたクロースは後ろからマグマを纏ったドラゴンを出現させると、ドラゴンの形をした巨大なマグマ弾をキルバスに向けて放った。

「そんなもん!」

だがキルバスはスピードを上げてマグマのドラゴンを躲し、クロースへと迫るとドライバーからドリルクラッシュヤーとカイゾクハッシュヤーを出現させる。

「そらよオツ!」

「ぐわああーッ!」

そのまま必殺技を放って無防備になったクロースに、ドリルクラッシュヤーとカイゾクハッシュヤーの攻撃を放ってクロースを強制変身解除させてしまった。

「龍牙!」

駆け寄って来たソードに支えられながら、龍牙は戦う為に再び起き上がろうとする。

だが今の龍牙の体には複数の生傷が刻まれ、骨の至る所にはヒビが入り、激痛で立つことすら困難な状況にあった。

(ト)で、負けられるかよ……

俺は真琴を……ここにいるみんなを守るんだろ！」

それでも龍牙はそんな激痛を無視し、ハルモニアをキルバスの破滅の手から守り、平和な明日を作る決意を胸に立ち上がるうと、懐からクリスタルボトルを取り出す。

「二人で何、カッコつけてるの……！」

「えっ？」

しかしソードが真剣な表情でそう語りかけながら、龍牙の持つクリスタルボトルを彼の手と一緒に握り掴む。

「私は……私達は、あんた達仮面ライダーに守られるだけの存在じゃないわ……」

あなた達と一緒に、戦う為にいるのよ！」

「っ！」

「だから、今度は私が龍牙を守る」

彼女は龍牙へ向けて一緒に戦うと言いながら彼の手からクリスタルボトルを放させると、今の尚淡く輝くボトルを握り締めながら胸に当てる。

「龍牙。あなたと晴夜はいつだって、守りたいって思いでここまで来れた。」

だから私も、あなたやこの世界に生きる人を守りたい！」

するとソードの強い思いに連動したのか、クリスタルボトルが強く光り出した。

「これは……」

ダビィが目にしたこの現象は、今まで新しいラビーズやロイヤルクリスタルが現れた時に出現した現象と似ていた。

光が収まるとソードの手に水晶のように輝き、蒼いドラゴンの頭部の型をした宝石がはめ込まれたキュアラビーズが置かれた。

「ラビーズに変わった……!」

「マジかよ……」

クロースはクリスタルボトルがラビーズに変わるのを見て、初めて起きた現象に驚いていた。

「ダビィ! 行ける!?」

「任せるビィ!」

「クリスタルラビーズ! セット!」

ソードはコミュニケーションにクリスタルラビーズを嵌めると、眩い光に彼女の身体が包まれていく。

「キュアソード! クリスタルモード!」

蒼く輝く光からソードが現れると、やや薄めのパールパープルへと変わったコスチュームにクリスタルの様に輝くドラゴンの翼とクロースに似た銀のファイヤーパターンが刻まれた装甲が身に付けられ。腰には銀色に輝く透明なローブ、紫の髪には蒼いメツ

シユ、背中に白いマントといった装備パーツが装着されていた。

「ふん。高々が綺麗になったから何だ!」

しかしキルバスからすれば、クローズにすら劣る雑魚がピカピカ光っているだけ。

何も問題ないと判断したキルバスの放ったドリルクラッシュャーが、クリスタルモードへと変身したソードの身に降り掛かる。

「はあ!」

だがそんな彼の予想に反し、ソードは収納状態のラブハートアローから光刃を生み出すと、キルバスの殺意の籠った攻撃を受け止めた。

「何だと!」

「まだまだよ!」

さつきまで相手にすらなっていなかった雑魚に攻撃を受け止められたキルバスが驚愕した隙に、ソードはラブハートアローから伸びていた光刃を消すと自身の左手に青い炎を纏い、そのままキルバスの腹部にきつい一撃を与えた。

「がはあ!」

キルバスは腹部を抑えながら後ろへ下がりが、ソードを睨み付けるとカイゾクハツシヤーを構える。

『各駅電車!急行電車!快速電車!……海賊電車!発車!』

カイゾクハッシャーからエネルギー弾が放たれると、ソードは光刃を伸ばしたラブハートアローにラビーズをセツトする。

『プリキュア!ドラグニツククリスタルスラッシュユ!』

ラブハートアローから大きいクリスタルの斬激を放ち、カイゾクハッシャーのエネルギー弾を切り裂くと、キルバスへ向かってラブハートアローを握る。

「チッ!」

「はあああああ!」

キルバスは慌てて躲したが、そこへソードがキルバスの懐に入り、ラブハートアローから生み出された巨大な光刃を繰り出してダメージを与えた。

「すげえ……」

自分の持つボトルがあそこまで巨大な力を秘めている事にも、それを扱うソードが凄まじい力で戦っている事にも驚く龍牙の口からは、彼女への称賛の言葉しか出なかった。

「ぐう……プリキュア……一万年経っても俺の邪魔するかア!」

『グウオオオオオオー!』

だがキルバスがあれだけの攻撃でくたばる筈もなく、プリキュアという存在に三度怒りを抱きながら起き上がるとその時、守り神の雄叫びが三人の耳に大きく響き渡る。

「ああ〜……けど、あいつがこのままこの国を滅ぼせば、お前達は何も守れなかったことになるけどなア〜！」

守り神の姿を目に映しているキルバスの脳裏には、ハルモニアは自分が滅ぼしたかったなあという落胆の思いと、このまま守り神が滅ぼしてくれれば楽だなあという打算が浮かんでいた。

「……それはどうかかな」

そんな愉快そうに笑うキルバスに、龍牙は彼の思い通りに事が進まない事を確信していた。

何故ならあそこには、自分達と一緒に戦う仲間がいる。

ならば必ず、彼ら彼女らはあの守り神の怒りを鎮めてくれる。

「何、笑ってんだよ！」

「龍牙！危ない！」

そんな龍牙の笑みに気付いたキルバスが変身解除して生身の彼に向けて、観客席を破壊した時と同じ蜘蛛の足を地面から出現させて迫ってきた。

「はあ！」

だが間一髪でジェットボトルの力で飛んで来たグリスとローグの二人が放った、ツインブレイカーとネビュラスチームガンの光弾によりこれを阻止し、龍牙の前に現れた。

「かずやん、幻冬」

「遅れたな」

「ソードさん。早くあの守り神のところへ!」

二人は晴夜から、守り神の怒りを鎮めるにはプリキュア全員の協力が必要だと連絡を受け、ソードにこの事を伝えに来たのだ。

「でも……」

だが相手はクローズマグマになった龍牙すら歯が立たなかった化け物、たとえ二人で戦うとしても苦戦は必須、最悪殺されてしまうという心配がソードの心中で浮かんでいた。

「行け!こいつは俺達で倒す!早く!」

「……」

それでもソードは龍牙の言葉を信じてキルバスを龍牙達に任せ、急いで守り神の元へ跳んでいった。

「行かすかよ!」

「オラア!」

グリスがソードの妨害をしようとしたキルバスの前に現れ、攻撃を繰り返して注意を自分に向けた。

「龍牙さん。あなたは少し休んでいて下さい！ここは僕らが！」
更にローグも加勢し、グリスと共にキルバスに応戦する。

一方で現れた守り神は怒りで我を忘れ、口から火の玉を放ってプリキュア達に攻撃を始めていた。

「まずい！」

「ッ！晴夜!!」

これを危機と感じ取ったハートは、クローズチャージにジーニアスポトルを投げ渡す。

「おう！サンキューマナ！」

『Ready go!』

ハートにお礼を言いながら紛失したと思っていたジーニアスポトルを受け取ったクローズチャージは、ジーニアスポトルをツインブレイカーに装填する。

『レッツファイニッシュ！』

ツインブレイカーの砲身部分「レイジングビーマー」から放たれた虹色の砲撃は、守り神が放った火の玉を撃ち落としした。だがそれでも守り神は攻撃の数を増やし、複数の火の玉を放ち続ける。

「ぐっ……！……！……！……！……！……！……！……！……！……！……！……！」

やはりツイインブレイカーで放った力だけでは守り神をどうにかする事が出来ず、ジーニアスポトルでビルドに変身出来れば、勝利の法則を導けるのにと思い悩む暗クロスチャージ夜。だが此処にはジーニアスポトルはあっても、ビルドドライバーが無いので不可能だった。

「止めなきや……」

その中でフローラは決死の覚悟を決めると、守り神への想いを伝える為に、飛び交う火の玉を避けながらも立ち向かう。

「怒りを静めて……守り神様！」

「あたし達の気持ちは、守り神様と一緒にです！」

次々と放たれる火の玉に、フローラと続く様に立ち向かって行ったマーメイドとトウインクルと一緒に跳びながら避け、三人は必死に守り神に想いを伝えようとしていた。

「歌とダンスが……大好きなんです!!」

フローラは守り神に必死の叫びを込めるが、再び守り神の口から炎の豪球が放たれた。

「あつ……！」

巨大な豪球を前に固まってしまおうフローラ達であったが、間一髪でラブリーとプリン

セスとハニーが彼女達を抱えて炎の豪球から救った。

フローラ達を助けたラブリー達は安全な場所へと着地すると、金属音と共にフローラ達の腰から何か……ドレスの形をした変身アイテムにして、ホープキングダムに代々伝承されてきた鍵形の宝具・ドレスアップキーが零れ落ちていた。

「あつ……このキーは……」

ラブリーは落ちたキーの音を聞いて振り向き拾うと、同じ様にプリンセスとハニーが落ちたドレスアップキーを持ったのを見て決意を固める。

「このキーは……歌とダンスの力で生まれた」

「私達プリキュアの想いの結晶」

「歌とダンスが好きな神様なもの」

そして、ラブリー達はフローラ達にこのドレスアップキーを渡す決意をするも、プリンセスプリキュアは少し戸惑っていた。

「私達が……」

フローラらは自分達がそんな大きな事ができるのだろうかと不安になっていたが、後ろにはプリキュアオールスターズが揃って見守っていた。

「みんなの想いを、守り神様に伝えよう」

『うん!』

全員が想いを伝える為、その想いを届ける手伝いをする為に、ラブリー達ハピネスチャージプリキュアはその想いを伝えようと、フローラ達プリンセスプリキュアにドレスアップキーを授けようとする。

「お願いね」

「…うん」

そのままラブリーからフローラへ、プリンセスからマーメイドへ、ハニーからトウインクルへドレスアップキーを託されると、彼女達はそれぞれそれを握り締める。

プリキュアオールスターズの強い意志と、決して崩れない想いを込めたドレスアップキーがフローラ達を立ち上がらせ、守り神に立ち向かう勇気を湧かせた。

「エクステンジィー」

フローラはプリンセスパフュームにドレスアップキーをキーモードにして挿入すると、プリンセスパフュームから光が放たれる。

その光は周囲の炎を掻き消し、彼女達を中心に放たれた光の輝きに、守り神は躊躇して目を見開かせる。

「あっ…」

足音がして振り向いてみると、後ろにはプリキュアオールスターズが後ろへ回っていた。

それは、全員の想いをフローラ、マーメイド、トウインクルに託すかのようにオールスターズの体から光が発し。オールスターズから発せられるの光に反応するが如く、ドレスアツプキーからも同様に光を発した。

「私達全員の力！受け取って！」

「大丈夫！きつとできるよ！」

「だって！あたし達——」

『プリキュアだから!!』

ブラックを始めとしたあらゆるプリキュア達の願いを一つに纏めた想いを託され、同時に後ろから支えてくれている事に嬉しさを感じたプリンセスプリキュアの三人は、前を向いて怒り狂う神を見据える。

「モードエレガント！プリマヴェーラー！」

フローラ達はオールスターズと想いを一体化させた新たなキー、『オールスターズドレスアツプキー』を差し込む。

そしてプリンセスパフュームを振り掛けると光の粒子が噴出し、彼女達の周りで舞っていた粒子は三人のスカート部分から徐々に光で包んでいった。

「「はあー」」

プリキュアオールスターズからも再び光が発せられたフローラ達は、モードエレガン

ト・プリマヴェーラとなった。

光が守り神に直撃した所を見届けると、フローラ達を加えたプリキュアオールスターズは想いを込めて手を合わせると、合わせた手を開くとハートの光を作り出していた。

「プリキュア! レインボートルネード!!」

三人同時に叫ぶと光は膨張していき、やがてハルモニアをも包んでいく。

その光はとても暖かく、光に包まれた守り神は此処で初めて、彼女達の想いを受け取ってくれた。

『思い出して……守り神様。歌とダンスって……すごく楽しいものなんだよって』

フローラが込めた想いに、守り神は我に返っていった。

そして、守り神の目にはプリキュア達が披露したそれぞれの歌とダンスが浮かび上がり。それによって怒りが静まり、穏やかで優しい目と変わっていくのだった。

「良かった……!?!」

晴夜はプリキュア達の思いが守り神の心を元に戻す姿を見届けると、突如彼の持つジーニアスポトルが光りだし、何処かへ飛び去ってしまった。

その頃、守り神の怒りをおさめたがキルバスの攻撃に 그리스 と ローグ は限界を迎え変身解除となった。

「く、くそお……」

「ここまでなんて……」

変身解除した二人にキルバスは息の根を止めようと腕を前に出す。

「手こずらせやがって！下等な種族が！」

「やめろおー……」

龍牙の制止も虚しく、キルバスが二人にトドメを刺そうとしたその時。フローラ達の守り神を癒す想いに共鳴するかのように、龍牙の持つドラゴンボトルが光り出すと、ドラゴンボトルはシルバーとなったハザードレベル7へと進化した。

「今度は何だー！」

すると今度は和也と幻冬を助けんと、どこからともなく飛んで来た二つの何かはキルバスにぶつかると龍牙の元へ飛んでいき、龍牙の頭上からその何かの正体である2本のボトルが現れた。

一つは晴夜の持つジーニアスポトル。

もう一つは以前まで持っていたが、ブラッド帝国の戦いで奪われたドラゴンエボルポトル。

「……晴夜のボトルに、何でこれまで……」

どうしてこのボトルが此処に、という龍牙の素朴な疑問が解消する前に、二つのボト

ルと咬合する様にドラゴンボトルも宙へ浮かぶ。

その三本が集まって回り出しながら融合し始め、かつて晴夜の手の上でクローズビルドのボトルが生み出された時の様に、龍牙の手の上に一本のボトル缶が生まれた。

「新しいボトル……」

形はジーニアスポトルとほぼ同一だったが、色は宇宙を思わせる黒と青色となっており。

更に龍牙は手に持ったボトルから、エボルトの力が込められている事を本能的に察知していた。

「晴夜……（俺の中にあるエボルト遺伝子……確かに世界を破滅させる力……」

けど、俺は……キュアソードをこの世界を守る仮面ライダー……クローズだ！）
……………うおおおおお！」

決意を固めた龍牙は叫びながら立ち上がり、生み出されたボトル『マッスルギヤラクシーボトル』を起動させる。

『マツチョー！フイバー！』

ボトルのスイッチを起動し、そのままドライバーに装填する。

『マッスルギヤラクシー!!』

それと連動してドライバーから待機音が鳴り、そのままレバーを回転させる。

『ブラアツ！チャオ！ブラアツ！チャオ！ブラアツ！チャオ！』

そしてスナップライドビルダーから2つのアーマーが形成される。

『Are you ready?』

「変身ツ!!」

『銀河無敵の筋肉野郎！クローズエボル!!パネーイ！マジパネーイ!!』

スナップライドビルダーがアーマーと共に龍牙の体に重なり、龍牙は仮面ライダークローズエボルに変身を遂げる。

「龍牙……」

「その姿は……」

それを見た和也と幻冬は、今のクローズの姿にある面影——龍牙に自らの遺伝子を植え付け、自らの野望を果たそうとした、仮面ライダーエボルのフェイズ4であるブラツクホールフォームの姿と重なって見えた。

「こいつはいい！俺の力になる！最高のエネルギーになりそうだ!!」

「ふん！はあ！」

キルバスはクローズに向かって殴りかかるが、クローズはキルバスのパンチを受け流し、キルバスの顔と胸にパンチを繰り返してダメージを与える。

「ぐおお!?……ちい！オラア！」

「はっー!」

「何?!ぐわあ!」

クローズはキルバスのキックと連続パンチを避け、そのままキックで吹っ飛ばした。

「成る程……ならば!こつちも本気を出すまで!」

しかしクローズの方が押し始めている事を感じたキルバスが本気を出すと言うと、擬態として生成したスマッシュやドロポーンに仕込んだ遺伝子を自分の体に戻し始めた。

「ハッハッハア……さあ、行くぞオオオオオオ!!」

「はあ!」

本来の戦闘力へと戻ったキルバスと、新しいフォームに変身したクローズは空中に向けて飛び上がる。

「ふっ!はっ!」

「デアッハッハア!ホッホホウ!ハア!——ぬうん!」

「くっ!ぐあ!」

キルバスとクローズは空中で高速のパンチラッシュを繰り広げるが、キルバスに押しきられたクローズは地面に叩きつけられてしまう。

「ハッハッハア!!残念だったなあ?俺の方が上だ!ハア!」

『Ready Go!』

キルバスはレバーを回転させ、手から放出したクモの糸でクローズエボルを拘束する。

「なっ!」

「デアアア!!」

『キルバススパイダーフィニッシュ!!』

キルバスはクローズエボルを引き寄せるとそのままオーバーベッドキックを決めて、クローズエボルを大きく吹っ飛ばしダメージを与える。

「がっ……ぐっああ……!」

「龍牙!」

「龍牙あ!!」

クローズがぶっ飛ばされた光景を見た和也と幻冬、そして戦場へと戻ってきたソードが、倒れるクローズに近づこうとする。

しかし、クローズは腕を上げて来るなど言わんばかり立ち上がる。

「……前の俺は、自分の為に戦ってた……」

ソードを守る為に戦っていた自分にとって、自身と関係ない者の為に戦うなんて考えはなく、ただ自分とサポートする彼女の為に戦う。

ただそれだけの為に、上城龍牙はクローズとして戦い続けて来た。

「でも……あいつが教えてくれたんだ……」

誰かの力になりたいと思う正義を……

誰かに手をさしのべる優しさを……

誰かを守る為の勇気を……誰かの為に戦う強さを……!

俺のヒーローが……教えてくれたんだ!!」

クローズはこんな自分をここまで導いてくれた、自分の為に戦う『クローズ』では無く、誰かの為に戦える『仮面ライダークローズ』にしてくれた、もう一人の相棒の顔を思い浮かべる。

「愛と平和を胸に生きている俺は……負ける気がしねえ!!」

『クローズサイド!』

そう叫びながら仮面ライダークローズは立ち上がり、レバーを回転させる。

『Ready go!』

ドライバールの音声と共に、クローズエボルの背後に『クローズドラゴンブレイズ』が召喚される。

『マッスルフィニッシュ!』

「おりゃあ!!」

「ぐおおああ!!」

クローズの右手から放たれたアッパーと共にクローズドラゴンブレイズはキルバスに食らいつき、天高く打ち上げる。

「ぐあっ!! ああ」

『クローズサイド! エボルサイド!』

『Ready go!』

『ギヤラクシーフィニッシュ!!』

「てやああ!!」

「ぐわああ!!」

レバーを更に回転させると、エボルのようにブラックホールを生成して自らをキルバスの頭上にワープさせる。

そのままキルバスを引き寄せ、キルバスにパンチを食らわせて地面に叩きつける。

「龍牙!」

「おお! これで終わりだ!」

『クローズサイド! エボルサイド!! ダブルサイド!!!』

『Ready go!』

「おりやややや!!」

「はああああ!!」

「がっ!?? はあッ!」

クローズはソードが横に並んだのを確認するとレバーを急速回転させ、ソードと共に高く飛び上がってキルバスへ向けてライダーキックを食らわす。

「な、なんでだア!なんでこの俺がッ!人間……如きにイイツ……!?!」

『まだわからないか?』

その時、自身の敗北を信じる事は出来ないキルバスはクローズの背後から、思いかけない男を見かけた。

『人間だから、お前を倒せたんだよ……チャオ!』

クローズの背後から仮面ライダーエボルの幻影が現れると、キルバスに向けて冥土の土産代わりに、そう静かに告げた。

『マッスルギヤラクシーフィニッシュ!!』

「てりやあああッッッ!!」

「ぐわあああああ!!」

クローズはそのままキルバスを吹っ飛ばし、必殺技を食らったキルバスは断末魔を上げる。

「そうか……くう……ッ!」

キュアソード……上城龍牙……! エボルトオオオオオオオ!!」

そして最期にキルバスはソードとクローズ、そして今は亡きエボルトへの怨念を叫びながら爆発四散し、彼の持っていたビルドドライバーは見事に破壊された。

「はあ……はあ……！」

キルバスを倒したクローズは力を使い果たし、元の龍牙の姿へと変身解除された。

するとマツスルギヤラクシーフルボトルが再び三本に戻り、ドラゴンボトルは龍牙の手の内に戻り、残った二本は何処かは何処かへ去っていった。

「やったぜ……！」

これまで蓄積したダメージによって、既にギリギリだった身体に限界が来て倒れかける龍牙に、ソードは駆け寄って彼を支える。

「龍牙。お疲れ様！」

「おお、お前もな」

「えっへへ〜」

ソードと龍牙はお互いに顔を合わせ、笑顔でやり切ったと笑い合っていた。

晴夜も龍牙の元へ向かおうとしたその時、意外な人物に会っていた。

「ジーニアスボトル……！」

「面白かったよ。やっぱり気に入ったよあのドラゴン君」

「あなたは……海東大樹さん」

ジーニアスボトルが晴夜の元へ戻ったのならば、ドラゴンエボルボトルは今の持ち主である海東大樹の元へと戻っていた。

「この国のお宝を盗もうと思ったけど、もうないみたいだね」

相変わらずコソ泥をしているのだと、晴夜は呆れながらそう思った。

しかし龍牙に力を貸してくれた事は事実なので、晴夜は海東に頭を下げて礼を言う。

「龍牙に力を貸してくれて、ありがとうございます」

「……ドラゴン君に伝えておきたまえ、今日だけだからってね」

海東はハルモニアには価値のあるお宝はもうないと呟くと、灰色のカーテンを作りまた別の世界へと去って行った。

これで事件が全て解決したハルモニアに、国王と王女が仮面ライダー四人とプリキュアオールスターズを呼び出していた。

「プリキュアの皆様、本当にありがとうございます」

「盗賊に国を乗っ取られ……皆様に大変なご迷惑を御掛けして申し訳ございません」

国王と王女は今回の事件を深く反省し、プリキュア達にお辞儀をするも、プリキュア達は全く気にしていなかった。

「どうぞ、顔を上げてください」

「お二人が謝る必要などございませぬ」

「そうですよ！悪いのは……!!」

「ひい!!」

マーメイドとフォーチュンの言葉に同意したプリンセスは、オドレンとウタエンの方を向いて睨み、みんなも一斉に向きを変えて睨みつける。

盗賊二人にはもはや、どこかに失くしてしまった帽子を探す気も、プリキュア達に反撃する意志もなく、ただの無力な盗賊となってしまうていた。

そもそもプリキュアに反抗する力があつたら、プリキュアの変身アイテムを盗む必要もない訳だし。

「良くないと思うな……こういうの多勢に無勢って言うんだよ?」

「そうっす！弱い者いじめ」反対っす!」

「あんたた——」

「グオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「ひいひいひいひい!!」

プリンセスが怒りのあまり小言を言おうとするが、守り神に咆哮を放たれた二人はすぐさま土下座をして、体を固くするのだった。

「守り神様は何と?」

一方で国王はその咆哮の意味を悟り、プリンセスプリキュアにあるお願いを語る。

「どうやら、守り神様は楽しみにしていたプリンセスプリキュアの皆様のステージをご覧になりたいそうです」

それは、守り神からプリンセスプリキュア達の歌とダンスの披露をして欲しいとの要望であった。

「ええ?! 私達の?」

フローラは意外な展開に驚いてしまうも、王女様はニツコリと笑みを浮かべると、彼女達に近寄って「どうか、歌とダンスを披露してくださいませんか?」とお願いする。

「いい、いいのですか?」

マーメイドは恐る恐る尋ねるも、国王もニツコリと笑って「勿論でございます」答えるのであったが、それは国王や守り神の願いだけではなかった。

「ステージに上がって♪」

「私達だって、プリンセスプリキュアのステージを楽しみにしてたんだからー♪」

「みんな、楽しみにしてるよ♪」

「私達も、あなた達の歌とダンスを早く見てみたい」

ハピネスチャージプリキュアを始めとしたプリキュア全員が、プリンセスプリキュア

の歌とダンスを早く見たいと待ち焦がれていた。

「やるしかないみたいだよ?」

「みんな…」

フローラはあまりの事に上手く言葉を返すことができないが、プリキュア全員が自分達の歌とダンスを楽しみにしている事だけはハッキリと分かった。

「行きましよう。フローラ、トゥインクル」

「はい!」

プリンセスプリキュアの歌とダンスは、遅れながらも再び開催されるのであった。

カーニバルステージは無事に成功し、守り神もハルモニアの人達も大盛り上がり。

その光景を、晴夜と龍牙は嬉しそうに見届けた。

「やったな。相棒」

「今日は俺が主役だよな?」

晴夜は龍牙の問い笑って返しながら彼のスクラッシュドライブを渡し、龍牙はそれを受け取る。二人はいつものようにお互いに手を出して上、下と順番に手を当てると、最後に腕を上げてハイタッチをする。

「……あつ、悪い。お前のビルドドライバー壊しちゃった」

「問題ないよ。まだあのビルドドライバーがあるから」

龍牙は晴夜のドライバーを壊してしまった事を謝るが、実は彼には二つ目のビルドドライバーがあった。

ひとつはキルバスに奪われた、これまでの戦いの中で使い続けたビルドドライバー。もう一つは。精神が崩壊しかけた時に門矢士によって連れて行かれ、そこで出会って憧れの存在となった人……桐生戦兎から託されたビルドドライバーが、晴夜の研究所の金庫に眠っていたのである。

その後はカーニバルも終わり、みんなそれぞれ帰るべき場所へと帰った。

晴夜達がマナの家全員が泊めて貰う事になったその夜。龍牙は一人外へ出ると、そこに真琴がいた。

「真琴……」

「どうしたの?…龍牙も眠れないの?」

「まあな」

二人は外にあった椅子に座ると、彼らの空間に沈黙が広がる。

「——ありがとうな」

そんな沈黙を破ったのは、龍牙だった。

「えっ?」

「ずっと、言いそびれたからな」

彼女は幼い頃に両親を亡くして一人だった自分に、初めて仮面ライダーとして守るきつかけをくれた。

いつも自分の事を気にかけてくれた。どんな時でも彼女がいたから、今日のキルバスの戦いにも勝つ事が出来た。

故に龍牙は、幼馴染の真琴にお礼を言うのだ。

「私もよ。ありがとう」

彼は自分がどんなに辛かった時も、いつも近くに寄り添ってくれた。

歌をやめる時も、操られて彼を襲った時も、諦めず熱い心でいつも助けてくれる、かけがえのない存在。

故に真琴も、幼馴染の龍牙にお礼を言うのだ。

「これからもよろしくね。私の最高の仮面ライダー」

「へへへ……おう！任せろ！」

龍牙が笑ってそう答えながら拳を出すと、真琴も拳を出して彼の拳に当てて応える。

——もしかしたらこの二人は近い将来、今よりもずっと親しい仲になるのかも知れない。

彼らがその事を知るのは、案外そう遠くない未来になるだろう。

次回！Re・ドキドキ&サイエンス！

特別編2 仮面ライダービルド&みんなで歌う！奇跡の魔法！

それに気付いた少女が振り向くと、きちんとした身なりの銀髪老婆が近づいていた。
「あつ!せんせい」

女の子は老婆を「せんせい」と呼ぶと、落ち込んでいた顔から嬉しい顔となつて駆け出して行き、老婆のスカートに抱き締める。

「また歌っていたのかい?」

「うん!でも、せんせいみたいにうまく歌えないの……」

「ふふ。そうかい、そうかい」

老婆もまんざらでもない柔らかい笑みを浮かべながらそう答えると、晴天の下で心地よく吹く風を見上げる。

「今日も頑張ったね。子守唄を聞かせてあげるから、こっちにおいで」

「うん!」

女の子は素直に答えると、老婆は女の子に子守唄を聴かせる為に座り込む。

「それじゃあ、さっきの歌を歌うから。よくお聞き」

「うん!」

座り込んだ女の子が老婆の膝の上で横になると、老婆はとても心地よい歌を歌い始めた。
た。

『瞼閉じれば……夢の森♪』

『遊んでおいで♪夜明けまで…』

彼女の歌を聴いていた女の子は眠気が襲い始めたのか、次第に目を細めて始めた。

『棘の陰に♪迷つても…』

『つなぐこの手が♪』

『道しるべ…♪』

うとうととしていた女の子の意識は段々と薄れ、瞼を閉じていき――

「――はっ!?!」

現実に戻されたかのように目を開けると、一人の女性が起き上がっていた。

その女性は赤紫色のゴシックロリータドレスを身に纏い、赤紫の肩までかかったロングヘア。頭にはハサミの如く2つに割れたハートのカチューシャが、彼女のトレードマークである事を表す様に大きく着いていた。

「また、あの夢か…」

赤い瞳を持った女性は先程の夢を見たせいか、人形のように整った顔には冷や汗が垂れていた。

すると彼女が居る部屋の扉が重たく開き、そこから虎のような模様と尻尾を持った馬

が紳士服を着て姿を現し、女性に向けて礼をする。

「おはようございます。ソルシエール様」

二足歩行で歩く馬は、主である女性「ソルシエール」に向けて挨拶を済ませる。

そしてソルシエールも、彼の挨拶に先程の冷や汗を拭うと、キリツとした目つきへと変えて毅然と振る舞うのだった。



ハルモニアにて発生した盗賊二人による最悪の事態をプリキユアオールスターが制し、ブラッド帝国の王を名乗る存在・キルバスによる天災から龍牙の変身したクローズエボルとソードのクリスタルモードが阻止してから、数ヶ月の時が過ぎた。

季節は再び春へ移り変わり。桜が咲き、商店街をピンクの花びらが舞い彩っていた。

大勢の人々で賑わう町中には、二人の少年の姿があった。

「もう春だな〜」

そう呟く少年は、仮面ライダービルドである桐ヶ谷晴夜。

「ふあ〜あ……俺は気持ち良くて眠いけどな……」

隣で欠伸を漏らすのは晴夜の助手……もとい最高の相棒、仮面ライダークローズである上城龍牙だ。

「なあ、花見の場所どこだ?」

「ええくと、この並木道の先だと思っけど……」

晴夜が貰ったメモを見ながら、二人はある場所へ——仲間であるドキドキプリキュアのみなどと約束した、お花見の会場へと向かっていた。

その時、桜の木を歩く家族や友達など色んな人達を見て、晴夜は嬉しいそうしていた。

「へへっ……やっぱいいよな」

「相変わらずだな。お前は……まあ、それがお前のいいところか」

彼らにはこういう当たり前の日常を守り、その為にこの人間界を守っていく使命がある。

故に愛と平和を唄う仮面ライダーとして、彼らはこれからも戦って行くのだ。

……文面が終盤みただけど、まだまだ序盤です。

その頃、桜が満開になっている春の街路樹にて。

「見て！パンケーキだよ！美味しそう♪あつ、アイスクリームだ！」

「クッキー乗せて食べたいモフ〜！」

アイスクリームやパンケーキのお店をキラキラと輝かせた紫色の瞳で見渡す、光の加減によつては金髪に見える明度の高い小麦色の髪を持った少女が存在していた。

これだけなら「色んなお店に目を向ける好奇心旺盛な女の子」だけで終わるのだが、

肩にかけたカバンに入れているクマのぬいぐるみが表情を変えながら喋っていると言
う、常人からすればあまりにも奇妙な光景が映っていた。

「ちよつと!」

だがそんな彼女とぬいぐるみを窘めるように止める、魔法使いのようなどんがり帽子
をかぶった、マゼンタの瞳と紫色のロングヘアを持った少女がいた。

「みらい、忘れてない? 私たちの目的」

「え? おほほ♪」

みらいと呼ばれた少女は紫髪の少女に人差し指で頬を押して念押しされ、それがくす
ぐつたのか笑ってしまふ。

さて此処で、この二人と一匹(?) について簡単に話そう。

このみらいと呼ばれた少女——朝日菜みらいはひよんな事から、この世界の裏側にあ
る『魔法界』からやってきた「魔法つかい」のリコ(みらいの頬を突いている紫髪の少
女の事)と出会った事で、ふたりは魔法界の伝説に語られる「魔法つかいプリキュア」へ
と大変身。

それと同時に、みらいの持っているテディベア・モフルンがなんらかの因果により、み
らいが持ってたリンクルストーン・ダイヤの力で命が宿り、人語を話すようになったの
だ。

こういった色んな結果の末、みらいはリコと共に魔法界の魔法学校に通う事になっている。

そんな中二人は、魔法学校の校長からとある調査をして欲しいと言われた。

彼曰く。ナシマホウ界——つまり人間界には、魔法界の人々ですら知らない知らない不思議な現象が多く寄せられており、プリキュアの事に大きく関わっている可能性が高いとの事。

「え〜と……それで私が持ってた、ダイヤモンドの元になったリンクルストーンについて調査する様に、校長先生に言われて……」

「そうよーだからこそ、この世界を調査して、立派なプリキュアになるのよー」

リコは人間界での不思議現象について調査し、伝説の魔法使いの名に恥じぬプリキュアになる為、そして校長先生の期待に応えるよう張り切る。

「あれ？モフルンは？」

しかし此処でみらいは、自分のバッグの中にいたはずのモフルンが居ないことに気づいた。

「えつと……あーあそこー！」

リコが指さした先を見ると、丁度モフルンが路地裏に入っていく所だった。

「ちよつとーどこ行くの!？」

「あまい匂いがするモフ〜」と言って何処かへ行こうとするモフルンを、二人は慌てて追いかける。しかしモフルンよりも体の大きい二人にとつて、狭くて進みづらい裏路地を通るのは一苦勞があつた。

「クツキー……モフ……モフ……!!」

「わっ……!!?」

「あつ!」

それでようやく追いついたと思つていると、モフルンが一人の少女の顔面に抱き着いたせいでその少女諸共倒れそうになっているというハプニングが起こつていた。

「キュアアップ・ラパパ!浮きなさい!」

それを見たリコは魔法でモフルンを浮かばせ、少女から離れさせる。

「ごめんなさい!モフルンのせいで!」

危うく少女を反転させて頭を打たせてしまふところだった事を謝ろうとするみらい。

だがモフルンに突進された少女とその友人と思われる少女3人は、先程の現象は勿論、みらいが手に持っているぬいぐるみだと思つていたモフルンが喋つた事にも驚いていた。

「ぬいぐるみが、喋つてる!?!」

「一体、どういうことなの?」

け寄ったみなみ達の言葉さえ聞こえていなかった。

その時、はるかから出て来た黒いオーラが離れると空中で球体となり、どんどん膨らんでいった。

「何あれ!?」

「あつ…」

「はるか!」

その拍子にはるかが疲れ切った顔で倒れこむが、みなみとトワがすぐに駆け寄ってはるかを支える。そして突然出現した球体からは無数の触手が落下してきて、その衝撃で周囲に砂埃が舞った。

その球体を見える位置にいた晴夜と龍牙も、町の異変に気づいた。

「何だよあれ?」

「気圧による大気変化か?」

龍牙が驚いて顔を歪めている横で、気圧による変化ではないかと冷静に分析する晴夜。

しかし先までそのような様子もなかった事から、何やら嫌な予感を感じた晴夜はビルドフォンを取り出し、ライオンボトルを差し込んでビルドフォンを投げる。

『ビルドチェンジ!』

するとビルドフォンは晴夜の戦いを支えてくれた、もう一つの相棒でもある愛用のバイク『マシンビルダー』に変化。

「飛ばすぞー！」

「おおー！」

二人はヘルメットを被るとマシンビルダーに乗り込んで、バイクのエンジンをかけて謎の球体が浮かぶ所へ向かう。

だが晴夜達と同じように、その球体を目にした二人の人物がいた。

「あれは？」

ひとり、一枚のパンツをぶら下げている棒を手に持った男性。

「なんだよあの黒いもん？」

もうひとり、とある学校の屋上からそれを見ていた教師姿の男性。

この二人との出会いが、これから始まる戦いの中で、晴夜の新たな出会いをもたらすものだと言う事は、まだ彼らすら知らない。

一方で球体が現れた所には、はるか達が手や腕で顔を隠し、砂埃が治まった時に視線を戻した。

「あれは!?」

球体だった場所には、漆黒の衣装を身に纏い、角付きの仮面をつけた女の化け物が現れた。

「『デイスピア!?』」

それはかつて、プリンセスプリキュアが激闘の末に倒した絶望の魔女『デイスピア』。しかしデイスピアの胸には元々ある筈の鍵穴ではなく、全く別の紋章が施されていた。

「そんな!? 一体なぜ!?」

だがまだその事に気付いていないみなみ達が何故と驚く中、デイスピアは三日月型の赤い斬撃波を放ってきた。

その斬撃によって街が破壊され始め、デイスピアの破壊活動に恐れをなした人々が逃げていく中。それを見たはるか達は、目の前に現れたデイスピアに怯まず前を向いていた。

「みんな! 行くよ!」

すると彼女達は、これまで共に戦ってきた自分自身の力の源であるアイテム、『プリンセスパヒューム』と『ドレスアップキー』を取り出し構えた。

「『プリキュア! プリンセスエンゲージ!』」

かつて、何度も行ってきた変身フェーズを繰り返す4人。

彼女達の力をモデルとした、ピンクとブルー、イエロー、レッドといった4色の光を纏ったワンピースへと身に纏いながらドレスアップキートをプリンセスパフュームへ挿入してロックオンさせると、容器内からそれぞれの色のエネルギー状の液体が満タンになったパフュームは閃光を発し。プリンセスパフュームから光の粒子を放出させると、舞い上がって回転する体を光で包んでいきながら、彼女達はその姿を変えていく。

「咲きほこる花のプリンセス！キュアフローラ！」

一人は花のように舞い。

「澄みわたる海のプリンセス！キュアマーマイド！」

一人は海を泳ぐ人魚姫のごとく舞い。

「きらめく星のプリンセス！キュアトウインクル！」

一人は自分自身を星にたとえて美しく構え。

「深紅の炎のプリンセス！キュアスカーレット！」

一人は不死鳥のごとく燃え盛る炎で、美しさと強さを証明する。

最期にドレスアップキートをチェーンで繋げて着地すると、彼女達はゆつくりと顔を上げてその姿を象徴させながら、プリンセスプリキュアとしての名乗りを上げる。

「強く！」

「優しくー!」

「美しくー!」

「GO!」

「[[プリンセスプリキュア!]]」

「さあ、お覚悟は、よろしくて?」

プリンセスプリキュアとなったはるか達を見て、みらいとリコは目を輝かせて見つけたと思った。

「ツ!その恰好つて、ひよつとしてあなたたちってプリキュアだったの!」

「詳しい話はあとで!今はデイスピアを!」

「は、はい!リコ、私たちも!」

「ええ!」

フローラ達が現れて感激すると、二人はリンクルストーンダイヤを構えた。

「キュアアップ・ラパパ!ダイヤ!」

二人が同時に呪文が首に飾っているペンダントに反応すると、モフルンの胸に2つのリンクルストーンが1つに融合されたダイヤがセットされ、みらいとリコがモフルンと手を繋いで輪を作る。

「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ!」

そして呪文の掛け声に合わせて生まれた光が、二人の体を覆って別の衣服へと変化していった。

「ふたりの奇跡！キュアマミラクル！」

「ふたりの魔法！キュアマジカル！」

「魔法つかいプリキュア！」

「たああああっ!!」

変身を終えた二人が、フローラ達5人に迫っていた鳶の触手の群れを破壊した。

「うわっっ！あなた達もプリキュアだったの!？」

ミラクルとマジカルが爆発の中から現れたのを見て、目をキラキラと輝かせるフローラ。

「はい！私たちは——」

「魔法つかいプリキュアです！」

「そうなんだ！私たちは——」

「ッ！危ない！」

フローラが二人に自己紹介をしようとしたと話しかけようとするも、そんな余裕さえ与えずに攻撃を仕掛けてくるディスプレイア。

すると、一台のバイクに乗った二人の少年が六人の前に現れた。

「はあ!」

運転している彼の手の持つ銃が、ミラクル達に襲ってきた触手を撃ち落とす。

「えっ?」

「誰?」

マジカルとミラクルの唖然とした眩きを他所に少年が銃を下ろすと、バイクに乗った二人はヘルメットを外した。

「晴夜君! 龍牙君!」

「久しぶりフローラ、マーメイド、トウインクルと・・・新しいプリキュアかな?」

「おい。あいつが起きてきたぞ」

バイクに乗って現れた少年こと晴夜は、魔法使いプリキュアと初対面のスカーレットに新しいプリキュアなのかと聞くが、龍牙の言う通り銃撃を受けて倒れていたデイスピアが起き上がる。

「自己紹介は後ね。今は、あいつを倒すよ」

「じゃあ! 久々に暴れるぜ!」

二人がバイクから降りると六人の前に出て、ビルドドライバーを腰に装着した。

「さあ、実験を始めようか?」

晴夜は戦う前の決め台詞を言うと、赤と青の二本のボトルを取り出し数回振ると、彼

の後ろからいくつもの数式が現れた。

「うわー……」

「スゴ……」

「わかりせんわ……」

晴夜と初対面であるミラクルとマジカル、同じく初対面のスカーレットが謎の現象に驚いていると、晴夜は二本のボトルの栓を回してドライバーに差し込む。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

『ウエイクアップ！クローズドラゴン！』

ドライバーから兎と戦車のシルエットが浮かび、『R/T』と表示された。

隣では龍牙がクローズドラゴンガジェットにドラゴンボトルに差し、そのままドライバーに装填する。

そしてレバーを回し、前と後からプラモデルのランナーのような物が出て来て、そこから二つのアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身!!?」

一度構えた後に両手を一度交差させて広げると、二人の身体に生成されたアーマーが重なるように装着される。

その姿は赤い目からピンと立った兎の耳のような形状、青い目から戦車のような形状が一つとなり。もう一方は、全身が龍がモチーフな形状で更にアーマーが装着される。

そして、二人の体から煙が吹き上がった。

『鋼のムーンサルト!ラビットタンク!イエーイ!』

『Wake up burning!Get CROSS—Z DRAGON!Yea h—!』

「じゃあ!」

「行きますか!」

二人が揃ってビルドとクローズへと変身し、ビルドが複眼のアンテナをなぞり上げる。

「変身した!」

そしてミラクルとマジカルが、知らない二人がビルドとクローズに変身した事に驚く中、その知らない二人が構えてデイスピアへと向かっていく。

「よつと!」

それに気付いたデイスピアが二人に攻撃を仕掛けると、ビルドが兎の脚力で高く飛び上がって、彼女の攻撃を避ける。

「行くぜ!オラオラオラオラ!オラア—!」

そこに意表を突いたクローズが青い炎を拳に纏いながら連続でラツシュを繰り出し、
デイスピアを怯ませる。

「タァー！ヤァー！」

さらに飛び上がり着地したビルドが左、右とキックを繰り出した。

「凄い……あの2人は……」

ミラクルは二人の呼吸の合った連携攻撃を見て、目を輝かせていた。

「プリキュアなの？でも、男の子だし……」

マジカルは二人の力をプリキュアと同じ……否、それ以上ではないかと思い。二人の
正体は何者かと疑問が浮かんでいた。

「あの二人はプリキュアじゃないよ」

「えっ？」

「あの二人は仮面ライダー」

「ビルドとクローズ。私達の仲間だよ」

その問いに答えるべく、フローラがミラクルとマジカルに近付いてそう語りかけ、
マーマイドとトウインクルも同じ様に近付いてそう語る。

「あれが桐ヶ谷晴夜と上城龍牙……」

「仮面ライダー……」

「はあー!」

「オリヤヤ!」

スカーレットとミラクル、マジカルが仮面ライダーの戦いを目に焼き付ける中、ビルドとクロウズの武器がデイスピアに攻撃を繰り返し、デイスピアを押し込む。

「又ウオオオ…」

しかし、デイスピアも簡単には倒れない。やはりプリンセスプリキュアの最後の敵だっただけはある。

「なら、実験開始だ!」

だがビルド達も、それで引き下がる程彼らも弱くない。

ビルドは二本のフルボトルを取り出し、数回振りながらボトルを差し込む。

『タカ!ガトリング!ベストマッチ!』

ビルドはベストマッチである事を確認するとレバーを回し、前後から現れたパイプ線から橙色と銀色のアーマーが形成される。

『Are you ready?』

『ビルドアップ!』

二つのランナーが合体して体から蒸気が噴き上がると、音声 flowed。

『天空の暴れん坊!ホークガトリング!イエーイ!』

『ホークガトリンガー!』

背中にタカのような翼『ソレスタルウイング』が出現し、タカとガトリンガーを模したアーマーを纏った姿になると、ドライバーから小さなガトリンガーの銃『ホークガトリンガー』が形成された。

「変わった!」

「凄い。まるで鳥のように空を飛んでいる」

ホークガトリンガーへとフォームチェンジしたのを見て驚くミラクルとマジカルの視界には、背中の翼を広げて空中をタカのような動きで飛び回ってデイスピアを翻弄する光景が映る。

そのままビルドは、ホークガトリンガーのシリンドラーを回した。

『テン! トウエンティ! サートゥーティ! フォーティ! フィフティ! シックスティ! セブントゥー! エイティ! ナインティ! ワンハンドレッド! フルバレット!』

空中に球体のフィールドが形成され、その中におびき寄せられたデイスピアはフィールド内で全弾命中させられ、かなりのダメージを食らった。

「おお! 晴夜! 流星だな!」

クローズがビルドを称賛するとビルドが地面へと降りる。

「まあ、これが主役の力ですから!」

「はいはい……勝手にやっつてろ」

だが相変わらずのナルシストぶりを見せるビルドに、クローズは呆れる。

すると油断してたビルドの腕に何かが巻きつき、尖ったものをビルドの腕に突き刺した。

「うっ!? な、何が……ヴァアアアアアア!」

「晴夜ツ!」

「晴夜君ツ!」

瞬間ビルドが何かに苦しみ始め、唐突に地面に倒れて悶えるビルドの姿を見たクローズとフローラは驚愕を露わにする。

だがデイスピアはそんなの関係ないと言わんばかりに、ビルドとクローズに攻撃を仕掛ける。

「あぶねえ!」

その攻撃を見たクローズはビルドを抱きかかえて間一髪の所で回避し、二人がデイスピアから少し離れるとフローラ達が駆け寄って来た。

「晴夜君! どうしたの!? 大丈夫!」

「どうなっているの……確か今、彼の腕に何かが巻きついた様な……」

『アゝあ……仕止めソコナつまツタかアゝ! セツカク邪魔者をシマツできると思った

ノニなア〜〜!』

フローラがビルドの心配をし、マジカルがビルドの身に何があったのかと疑問視していると、デイスピアの真下から目と口の部分に穴が開いている、麻袋で出来た人形がそう叫びながら現れた。

「……もしかしてお前が、晴夜を!」

『ぴんぽんぴんぽんぽん! ソウダよ〜〜! そいつが俺たちの邪魔ヲするカラ、オレ達の放った毒へびちゃんんで眠つテ貰うコトにしたんだア〜! 頭いいだろオ〜。』

そういうワケでデイスピア様、ヨロシクお願いしま〜〜す! キヤキヤキヤキヤ!』

人形はそう言つて自身の腕に巻きついた毒蛇…ビルドの腕を噛んで毒を盛った蛇と戯れながら後ろに下がると、デイスピアが毒に侵されて動けなくなったビルドに向けて触手を放つて攻撃を仕掛ける。

「ツ! ……龍牙君、晴夜君をお願い。私達はデイスピアと、貴女達は彼をお願い!」

「うん、わかった!」

プリンセスプリキュアの四人は魔法使いプリキュアの二人に麻袋の人形の相手を任せると、一斉に飛び上がつて真つ直ぐデイスピアに向かい、彼女が放った鳶の触手の上を伝つて走り出す。

対するデイスピアは鳶の上を伝つていく彼女達の邪魔せんと鳶の一斉攻撃を行うが、

スカーレットはスカーレットバイオリンを手取る。

「プリキュア!スカーレットフレイルム!!」

「プリキュア!ミューティアハミング!!」

スカーレットフレイルムの炎が向かってくるデイスピアの蔦を焼き払い。それに続く形でトウインクルのプリンセスロッドから発せられた無数の星が、デイスピアに集中攻撃を行う。

「はああああ!!」

「っ!」

更にフローラとマーメイドが同時パンチを放ち、デイスピアは咄嗟に防いで自身の影に襲わせるも、二人は怯まず攻撃をしながら反撃をしかける。

「はあく〜!」

「あああ…」

『隙ありイ!』

ミラクルとマジカルがプリンセスプリキュアの華麗かつエレガントな戦いぶりに感動をしていると、麻袋の人形がそんな二人に向けて毒蛇を放って毒を盛ろうとする。

「うわっ!とと…こうしちやいられないわ!」

「私たちも行くわ!」

それに気付いたミラクルとマジカルは咄嗟に毒蛇を避け、プリンセスプリキュアに遅れを取らない為にも跳び上がると……

「はあああああ!!」

『おべロオオ!!』

息の合ったコンビネーションキックを放ち、麻袋の人形を吹き飛ばす。

「よし……このまま——ん?」

「頭に何か——」

麻袋の人形が吹き飛んだ拍子で地面を転がるのを見て更に攻めようとするミラクル達だったが、二人は自分達の頭に何かが乗った事に気づき、頭に手を置いて確認しようとする。

『キチキチキチキチ——!』

「——ウビヤアアアアア!」

そして手に取って見てみると、ミラクルの手には脚をわちやわちやと動かす大きめの蜘蛛が、マジカルの手には無数の脚をワサワサと動かすこれまた大きい百足が動いていた。

当然これを見た二人は、虫が苦手かそうじゃないか関係無く、変な声で叫びながら驚く。

その様子を目にしたデイスピアはフローラ達から標的を変えて、彼女自身を守つていた影を二人に向けて放つ。

「あああああ!!」

デイスピアの影による攻撃を食らってビルに叩き付けられたミラクルとマジカルの二人を更に追撃しようと、デイスピアは鳶の触手を放つが、フローラ達がとっさにフロローをかけてローズトルビヨン、バブルリップル、ミーティアハミング、スカーレットフレイムで援護をしていた。

「しっかり!」

「は…はい!」

「援護は任せて!」

フローラ達のフォローもあって、なんとか立ち上がるミラクルとマジカル。

『くくウギギギ!コレいじよう有利なコウドウはさせないヨオーツツ!ウバアアア!!』

「きやあ!? 何これ…虫!」

「ちよ!? こつち来ないで!」

だがそんな彼女達の動きを妨害せんと、麻袋の人形は口から黒い何か——スズメバチや毒蛾といった無数の毒虫を吐き出し、フローラ達とミラクル達の周りを飛んで行動を

制限させる。

「フローラー……ちくしょう……どうすりゃいいんだよ……」

このままではデイスピアの集中砲火を喰らうことは想像に難しく無く、クローズは直ぐにでも援護に行こうとするが、彼の近くには敵の毒を食らったビルドがいる。

今は辛うじて変身は解除されていないが、いつビルドの変身が強制解除されてもおかしくない状況。そんな彼を置いてフローラ達と戦いに行けば、動けず守る者もない彼は敵にとつて格好的。そんなビルドを置いて戦いに向かう程、クローズは非情にはなれなかった。

するとクローズのドライバーに装填してあったクローズドラゴンが彼から離れ、ビルドの腕に噛みついたのだ。

「おい！何してんだよお前……ッ！」

突然のクローズドラゴンの行動に驚くクローズだったが、クローズドラゴンが何かを吸い出し初め、それに比例してビルドから聞こえていた呻き声が無くなりつつあった。

「う、うう……龍牙？俺、何があつたんだ？」

「晴夜！毒は大丈夫なのかよ!？」

そしてついにビルドが何事もなかったかの様に起き上がり、それを見たクローズはビルドに毒は回ってないかと心配する。

対する起き上がったビルドも、毒に侵されたはずの自分の身にあつたのかと考えていると、自身の周りを飛ぶクローズドラゴンを見てある事を思い出した。

「……確か前にこいつを調べた時、クローズドラゴンには毒を解毒する機能があつた筈……そうか、だから俺の体に回っていた毒も消えたんだ」

「そうか、よかつた……たつく！油断するからだよ！」

「(ズ)……(ズ)めん、(ズ)めん」

ビルドは油断していた事を謝ると再び高く飛び上がり、デイスピアと戦っていたフローラ達の元に飛んで行く。

『海賊！Ready go！』

『ボルテックブレイク！』

ビルドは麻袋の人形が放った毒虫を見ると、ドライバーを介して召喚したガンモードのドリルクラッシュャーに海賊フルボトルを装填して、フローラ達の周りを飛んでいた毒虫に向けて水流を放った。

「フローラ、俺の代わりにありがとう！後は俺に任せて！」

「晴夜君、毒取れたんだ！よかつた！」

フローラがビルドを侵していた毒が消えた事に安堵すると、ビルドがフローラ達と交代する形でホークガトリンガーを空中で動きながら弾丸を放ち続け、デイスピアの動き

を止める。

「これでフィニッシュかな！行くぞ！龍牙！」

「おおー！」

ビルドが地上へと降りるとラビットタンクフォームに戻り、クローズはビルドと共にドライバーのレバーを回して足にエネルギーを集約させていた。

『『Ready go!』』

ビルドから化学式の放物線が出現し、デイスピアを挟む。更にはクローズの背後から、蒼い炎の龍のエネルギー体『クローズドラゴン・ブレイズ』が現れる。

そして二人は飛び上がり、ビルドは放物線を滑り込むように加速し、クローズは後ろの龍の吐く火炎に乗り、二人同時にライダーキックをした。

『ボルテック フィニッシュ！イエーイ！』

『ドラゴニックフィニッシュ！』

「はあああああゝ!!? はあ！」

ビルドとクローズのダブルキックが決まり、二人のキックを食らったデイスピアが倒れ込むとその動きを止めた。

「うわあゝー！」

「あんなあつさり……」

だが唐突に、ビルドとクローズ、プリキュア達の耳に何者かの歌声が聴こえてきた。

『……アレ?』

「歌?」

「この声、どこから?」

声の主を探そうと周囲を見回すフローラやビルド達だったが、その主は見つけられない。い。

だがその時、今度はデイスピアの胸の結晶が明滅すると次第に光を失い、同時にデイスピアも活動を停止した。

「と、止まったロマ」

モフルンと一緒に看板の陰に隠れていた、はるか達のパートナー妖精であるパフとアロマが顔を出すと、アロマが率直な感想を述べながら驚く。

しかし彼らが歌声の主を探していた時、唐突にデイスピアが黒い球体となって、どこかへと消えていった。

「消えた?」

「いや、呼び戻されたって感じだな」

クローズの感想にビルドはそう言いながら麻袋の人形を睨みつけると、人形は焦った様な動きで周りをキョロキョロしていた。

『……………サイならー！』

「あつ！逃げた！」

流石に1対多数では勝てないと察したのか、麻袋の人形はビルド達に背を向けると一目散に逃げていった。勿論ビルドは追おうとしたが、そう決めた頃には麻袋の人形はとつくに姿を消してしまっていた。

だがとりあえずは周囲を見回して敵がない事を確認すると、ビルドとクローズはポトルをドライバーから外し変身を解除した。

その晴夜と龍牙は、はるか達4人にパフ、アロマ、みらいとリコ、モフルンを入れ、人気がない公園に集まって自己紹介や話をしていた。

「改めて、魔法使いプリキュアの二人と紅城トワさん。」

俺は桐ヶ谷晴夜、又の名を仮面ライダービルド。

ビルドとは、作る形成するって意味のビルドだ。以後お見知り置きを」

「俺は上城龍牙。仮面ライダークローズだ。よろしくな」

晴夜がビルドの自己紹介する時のいつもの口癖を言い、龍牙も自己紹介を済ませる。

そんな中で、みらいとリコがはるか達に立派なプリキュアになるためのアドバイスを貰おうとした時、はるか『他のプリキュア』という単語を聞き、驚きを露わにする。

「と、と言う事は、私たち以外に40人以上プリキュアが居るって事ですか!??」
「すごくいい!」

先輩プリキュアの多さに驚くリコとみらいを見てはるか達が笑っていると、ふと何かを思い出したみらいは晴夜の前に走って近寄る。

「あの、桐ヶ谷さんの力のあれは何ですか!」

「晴夜で良いよ。歳はみんなと同じだから」

「じゃあ、晴夜。あの力は何なの? 仮面ライダーって言うみたいだけど……」

「そもそも、仮面ライダーって何?」

敬語じゃなくて良いと言われたリコにいきなり呼び捨てされた晴夜は特に気にせず、みらいに聞かれた質問に答える形でビルドドライバーとフルボトルを見せる。

「この『フルボトル』って言うボトルを二本使って、ビルドドライバーに装填して変身する、それがビルドなんだ」

ビルドドライバーに二本のフルボトルを見せながら、これを装填してドライバーのレバーを回す事で変身出来ると話す。

その後は今日プリキュアのみんなと花見を行う事を話し、みらい達をお花見に来ないかと誘う。もちろん二つ返事オーケーとなった。そこで本題となった。

「あの赤黒い敵、はるか達は知ってるみたいだったけど、どういう敵なの?」

晴夜はさつき戦ったデイスピアの素性を知らない為に、はるか達からデイスピアについて教えてもらう。

「あれはデイスピア。私たちが以前戦っていた敵のリーダーです。

でも、確かに私たちはデイスピアを倒したはずなのに……」

みなみの話を聞いた晴夜は、はるか達の動揺を見ながらある推測を建て始めた。

彼女達にとつてデイスピアは、自分がかつて倒してきたプロトジコチューやエボルトほどの強敵である筈。それならばもつと苦戦するはずだと気付くと、彼はデイスピアの正体のある程度察した。

「……俺の仮説を言っても良いかな？」

「仮説、ですか？」

「何か、わかったのか……？」

「……そのデイスピアは、コピーみたいな存在なんじゃないかな？」

トワと龍牙が首を傾げながら聞く中、晴夜はあのデイスピアはコピーだと推測していた。

「話から聞く限り、デイスピアははるかを覆っていた影から実体化していた。

例えば、誰かがはるかの影を媒体にデイスピアを作り出した。

或いは、はるかかの記憶から一番苦戦した敵の姿形をコピーした……とか」

みんなの話を聞いて、はるかを覆った影から現れたという状況から推理した晴夜は、本来のデイスピアの動きと強さにおける疑問を裏付ける。

「確かに、それなら納得できるけど……」

「でも、一体誰がそんな事を……」

『お呼びで?』

みらいがそう言いかけたその時、全員の耳に聞きなれない声が響き出した。

それに気付いた一同は辺りを見回していると空の色が変わり、上空から黄色い魔法陣が現れた。

「またなんか出てくるのかよ!」

龍牙が悪態をついていると、魔法陣の中から馬のない戦チャリオッツ車らしきものに乗った、人型

の馬が現れた。

「お出ましか!」

黒色のスーツを着て同じく黒のシルクハットをかぶっていた馬を見た晴夜は、ドリルクラッシュャーを向ける。

「はじめまして。私、魔法の伝道師『トラウーマ』と申します」

「まさか、さつきのはあなたが!?」

「さつきの人形も……!」

はるかさがさつき出現したデイスピアを呼び出したのかと、みらいはデイスピアと一緒に現れた麻袋の人形も彼が召喚したのかと睨む。

「まさか。あれは我が主、魔女『ソルシエール』様の力です。

それとあの麻袋人形は、私の仲間が毒蛇や毒虫を麻袋に詰め込んで作った使い魔ですよ」

「『ソルシエール』?……一体何が狙いだ」

「伝説の戦士、プリキュアの涙。それが狙いです」

ソルシエールという名前を聞いた晴夜が聞くと、トラウーマが狙う物である『プリキュアの涙』を差し出せという。

「え?」

「涙?」

(涙?それが狙いなのか……?)

はるかやみらいは漠然とした答えに疑問を抱くが、敵の意図がわからない晴夜はそれどころではなかった。

「どうでしょう?涙をソルシエール様に渡してくだされば、あなた達を傷つけない事を御約束しますが?」

「えっ?」

「さあ、怖い目に遭いたくなければ……」

「よくわかんねえけど、お前らの思い通りにさせねえ!」

トラウーマはプリキュアの涙を出す様に交渉するが、龍牙がビルドドライバーを装着しながらボトルを出すすと、晴夜もボトルを二本取り出す。

「みんな!行くよ!」

それには続くようにはるかが叫ぶと、各々がそれぞれのアイテムを取り出して構える。

「!プリキュア!プリンセスエンゲージ!」

「!キュアアップ・ラパパ!ダイヤ!」

「!ラビット!タンク!ベストマッチ!」

「!ウエイクアップ!クローズドラゴン!」

「!変身!」

『鋼のムーンサルト!ラビットタンク!イエーイ!』

『Wake up burning! Get CROSS—Z—DRAGON! Yeah!』

全員変身を完了し、トラウーマへと構える。

「ソルシエール様。交渉決裂です」

『涙を渡せ!!』

交渉は失敗に終わったと判断したトラウーマが空に向かって語ると、空中から出て来た液体が女性の顔となってビルド達の目に焼き付ける。

「!?!」

「あれがソルシエール」

「うしー!いくぜー!」

「お、おい!」

あの女性がトラウーマの言うソルシエールなのかと思っていると、いきなり突撃していくクローズに、慌ててビルドも後を追う。

「申し訳ございませんが、仮面ライダーはご退場をお願いします」

しかしトラウーマはそう言うと、謎の液体が入ったフラスコをビルドとクローズに投げつける。

「こんなもの!」

クローズは弾き返そうとするとフラスコが二人の前で爆破し、それに怯んだ二人は態勢を整えるべく地面へと着地した。

「ゲボツ、ゲボツ!なんだこれ……」

「ゲボォー……あれ?」

だが爆破の煙幕が晴れると、どう言うわけかクローズとビルドに変身していた二人が

変身解除されていた。

「どう言う事だよ晴夜!!」

「わからねえ……なんで変身解除に?」

二人が変身解除させられて戸惑っている、液体がハサミ状に変化して8人の動きを止め、彼ら彼女らを飲み込んで黒い液体と共に消えてしまった。

しかしその時、偶然近くにいた二つの人影も巻き込まれる様に飲み込まれていたが、トラウーマは特に気付いていなかった。

「ああ!!」

「みんな消えちゃったモフ!」

ミラクルとマジカルや他のプリキュア・仮面ライダーが何処かへ連れ去られた事を証明する様に、モフルンに装着していたリンクルストーン・ダイヤが消えてしまう。

「ブヒヒヒン!他愛も無い。おや?」

トラウーマはプリキュア達を呆気なく捕まえた事に鼻で笑うと、晴夜が消えた場所に近づいてそこに落ちていたボトルを拾った。

それは、自己中な闇の力を持つボトル……シャドウボトルだった。

「これは、思わぬ収穫ですね」

トラウーマが拾ったシャドウボトルを満足そうに見ながらその場を後にする。

「ああ……」

「追うロマー！」

「うん！」

「あつ！モフ」

アロマとパフはすぐに宙に浮かび上がろうとすると、モフルンは何かを見つけた。

それは晴夜だけの持つ特別なボトルの内のもう一個である、光の力を持ったフルボトル『ロイヤルボトル』だった。

「これ、晴夜のモフ」

モフルンはロイヤルボトルを拾うとアロマとパフの2人の足を掴んで宙に浮かび、トラウーマを追いかけに行ったのだった。

◆ ◆ ◆

「——ラクル……ミラクル！」

「——う、ううん……晴夜、君」

その頃、トラウーマに飛ばされたキュアミラクルはいつの間にか気を失っていたが、彼女と一緒に何も無い土地で倒れていた晴夜が先に覚醒し、彼によるミラクルを呼ぶ声によって目を覚ました。

「よかった。目が覚めたみたいだね」

何とか目を覚ましたミラクルがゆっくりと立ち上がってあたりを見回すと、建物の屋上の様な光景が辺り一面に広がる世界が映っていた。

「晴夜君……ここって、一体……」

それに、マジカルや、フローラ達は？」

「ごめん。俺も目が覚めた時には、周りには誰もいなくて」

「そんな……！」

それを聞き、改めて周囲を見回すミラクル。

一方で晴夜はビルドドライバーを確認する為、ドライバーのスロットにボトルを差し込んでみる。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

「問題、ないか……じゃあ何で、変身解除されたんだ？」

一応は反応しているので、ドライバーの故障というわけでは無い筈。

それなら何故、トラウマの攻撃を受けて変身解除となったのか。

その答えは、今の晴夜にはわからなかった。

一方、龍牙とマジカル。二人は濃い霧が辺り一面を覆う、枯れ木が覆い茂る林の中で立ち往生していた。

「(っ)は……?」

「どこなんだよ……」

だがマジカルはミラクルとはぐれた事でそれを気にする程の余裕がなく、宛もなく枯れた森林を彷徨う。

◆ ◆ ◆

晴夜達が散り散りとなっている頃、空に浮かぶソルシエールの屋敷ではトラウーマが戻って来ていた。

「流石はソルシール様。見事な御手並み」

「……」

トラウーマはプリキュア達を散り散りにバラしたソルシエールの手際の良さを褒めるが、ソルシエールは無言だった。

「この調子なら、目的達成も間近です!!」

「……」

トラウーマはプリキュア達の記憶から、沢山の苦しめられてトラウーマとなっている強敵を呼び起こし。先ほど具現化させたディスプレイ以外にもプリキュアを苦しめた強敵をも蘇らせ、プリキュアを捕らえる為に出撃をしている事を思い浮かべながらそう叫ぶ。ソルシエールは先程の歌声を聴いてから、ずっと無言だった。

「さあ！秘薬の調査を始めましょう！」

「……」

「……」

トラウーマは秘薬の調査を始めようと張り切るが、ソルシエールは無表情の無言だった。

流石のトラウーマも冷や汗を垂らし始める。

「なんだ？」

「クスリともしませんね」

「薬なだけに……」

『ぶっ……く、薬なだけにクスリともしない……プププッ！』

ソルシエールの洒落を聞き、近くにいた麻袋の人形が笑っていると、それに気付いたソルシエールが冷たい目で人形を見る。

「……ああ、居たのね。それはそうと、アイツは何処？さつきからずつと見当たらないけど……」

『ぶひひひひ……あつ、ソウソウ。＼アノお方＼ナラ既にプリキュアを捕まえる為と、かめ……かめ、かめかめかめーかめー……亀ライターを討伐しに行きマシターよ？』

「……仮面ライダーだ。しかし……ブヒヒヒン！彼らが動いたとなれば、仮面ライダー

の命はもう無いですな!まあ、遊びだけで済めば幸運ですけどねえ……

それではソルシエール様、薬の調合を始めましょう!」

トラウーマはそう言つてヘビーメタルな音楽と共に踊りだすと、薬の入ったフラスコが宙に舞つて踊りだす。

「ハンビラ♪ビラビラ♪ビラ♪ビラ♪シャバステ♪パピヤ♪」

トラウーマの動きに合わせてフラスコもぐるぐる回つて、麻袋の人形もそれ釣られる様にフラスコと踊りだした。

「『ハンビラ♪ビラビラ♪ビラ♪ビラ♪シャバステ♪パピヤ♪』」

踊りだすトラウーマが鍋の前にまでくると、トラウーマ専用の台にソルシエールが秘薬の材料を乗せて、秘薬の調合が開始された。

「鍋に♪グツグツ♪湯を沸かし♪」

最初に禍々しい色をした調合液をお鍋たつぷりに入れ、よく煮込む。

「放り込むのは♪ドラゴンの爪♪猛毒サソリの粉末^{こな}少々——♪」

次にドラゴンの足を鍋に入れ、喋るビンの中に詰めた猛毒サソリの粉末を少し入れてかき混ぜ、棒から取り出して鍋に放り込む。

『『炎ノダンス♪カキ回ス——♪』』

「あ・と・は♪」

イタズラ好きな鍋の炎がダンスをするように飛び跳ねて、仕上げに取り掛かる。

「プリキュアの涙さえあれば——♪」

ミラクルとマジカル、フローラ、マーメイド、トウインクル、スカーレットのマリオネットが天井から出現すると、それらは華麗にダンスを披露。

麻袋の人形もノリノリに体を動かし、さつき作ったビルドとクローズのマリオネットを動かしながらダンスを披露する。

「最強魔法のエキスが完・成♪」

『『WOW!!』』

フラスコが華麗にくるくる舞うと鍋に集まり、まるでファンファーレのように前祝をして吹き上がる。

するとスポットライトがソルシエールに当てられ、彼女は哀愁と怒りを漂わせながら胸に手を当てる。

「胸を震わす……この痛み……秘薬があれば、願いは叶う♪」

「ようやく世界を♪無にできるウー——♪」

『『…世界を無に?』』

「あつ……いえいえ、独り言——♪」

『『あ・と・は』』

一瞬トラウーマの本性らしき言葉が溢れるも、彼女と一匹は特に気にすることもなく。ソルシエールとトラウーマ、麻袋の人形のダンスと共に、薬品の入った容器たちが踊りだした。

「『プリキュアの涙さえ♪あればー』」

「死んだあの女に♪会うことができるー』」

「『ビビビビーーン!』」

『キヤキヤキヤキヤ!』

『ハンビラ♪ビラビラ♪シャバステ♪パピヤ♪』

『アノお方の悲願が達成デキルウ♪』

『ハンビラ♪ビラビラ♪シャバステ♪パピヤ♪』

「憎い、あの女に会って♪」

鍋の炎は舞い踊り、マリオネットも激しく踊りだした。

『ハンビラ♪ビラビラ♪シャバステ♪パピヤ♪ハンビラ♪ビラビラ♪シャバステ♪パピ

ヤ♪』

「つらい想いを……ぶつけない」

「『プリキュアの涙さえ、あればー♪夢が、かーなーうー』」

二人と一匹はプリキュアの涙を手に入れ、願いを叶えると言う。

ソルシエールの誰かに会いたいという願い。麻袋の人形が語る「あのお方」。そしてトラウーマがこぼした『世界を無にする』とは一体……？

◆ ◆ ◆
「はあ……」

その頃龍牙とマジカルは、今いる方角もわからないまま歩き続けていた。

マジカルにいたってはミラクルへの心配で溜息ばかりが漏れている。

「そんなため息すんなよ。ミラクルには絶対会えるって」

「こんな方角もわからない場所で、なんでそんな事言えるの？」

龍牙はマジカルを元氣つけようとするが、彼女の言う通り、こんな調子では晴夜やミラクルと合流は出来ない。

「もう……誰か出てきてよ……！！？」

流星にこれだけの時間が経っているのだから、誰かいないかと思つたマジカルだったが突如、地面が激しく揺れて思わず立ち止まりながら辺りを見渡した。

「何か近くにいる……」

「うおおおおおおお！！」

龍牙が辺りを見渡すと地面が突如割れ、そこから茨が飛び出すと、飛び出た茨の中からデイスピアという、よりもよつて今一番出会いたくない相手が姿を現した。

「出たあああああつ!!!」

「来い!」

唐突な襲撃に驚くマジカルに、咄嗟に龍牙はすぐに逃げるように促しながらマジカルの手を引いて駆け出す。が、デイスピアの触手は容赦無く二人めがけて殺到する。

「——お困りですか?」

「見ればわかるでしょっ!?……っつて、え?」

「今の声……」

何者かの声が聞こえると、今度は龍牙とマジカルが逃げる先で桃色の光が生まれ、そこから6人の人影が現れた。

だが今の声は、龍牙にとっては聞き慣れた声だった。

「また出た〜〜!」

「いや……大丈夫だ」

誰なのかわかっていた龍牙はそう言ってマジカルを落ち着かせると、二人の前に6人の女の子が姿を現わした。

「みなぎる愛! キュアハート!」

「英知の光! キュアダイヤモンド!」

「ひだまりポカポカ! キュアロゼッタ!」

「勇気の刃！キュアソード！」

「愛の切り札！キュアエース！」

「運命の切り札！キュアジョーカー！」

「一二響け！愛の鼓動！ドキドキプリキュア！」一二」

「う、嘘?!? じゃあ、この人たちって……」

「ああ、俺達の仲間だ」

龍牙はこれまでの戦いに試練を共に乗り越えた仲間だと、マジカルに大丈夫だと声をかける。

「龍牙、なんでここに？」

「……ねえ、晴夜は一緒じゃないの？」

「あ……さつきまで一緒だったんだけど、変な馬野郎のせいで別れちゃってな」

「そんなく……」

ソードは何故こんなところに龍牙が居るのだと聞き、ハートはいつも龍牙と一緒にいるはずの晴夜がいない事にちよつとガツカリな様子を見せる。

「……龍牙？その子は？」

「ああ、新しいプリキュアのキュアマジカルだ」

「……………ふうん」

「あれ？和也と幻冬は？」

ソードは疑っているような目で龍牙を見るが、そんな視線に全く気が付いていない。ご本人は、同じ仮面ライダーである和也と幻冬の姿がなかった事に疑問を抱いていた。

「ああ……それが……」

「ん？」

二人の事で先に口を開いたダイヤモンドの方を向いた龍牙は、彼女が言いづらそうな様子で難しい顔をしてた事に更なる疑問を浮かべていた。

「実は、ここに来る前に……」

エースは二人が此処に居ない理由を語るべく、自分達が龍牙とマジカルに合流する一時間前に遡って説明を始めた。

『みんな！急いでここを出よう！』

涙をよこせとトラウマに交渉され、こっちへ飛ばされたハート達一行。

この空間から脱出すべく、他のプリキュアと合流を試みた彼女達は急いで走りながら辺りを見回す。

『かずやん！早く！』

『待てよ!』

『……和也さん。その荷物、置いたらどうですか?』

ジョーカーは離れた所にいる和也にそう言つて急かすが、彼は今一人で多くの荷物を持っていた為に走れずにいた。

彼の持つ荷物には、今日のお花見のために昨晩の夜から丹精込めて作った、みんなに食べてもらおうお弁当が入ったがあり。両手にある風呂敷は勿論、背中のリュックにも入っている。

だがそのお陰でグリスになる為に使うスクラツシユドライバーを装着する事も出来ず、彼の前を走る幻冬は置いて行つたほうが早く走れるのではないかと暗に言う。

『バカやろー!これは今日、みんなに喜んでもらう為に作ったもんだぞ!』

それを聞いた幻冬は、それは多分自分に対する他のプリキュアへの好感度を上げる為でもあるのではないかと感じていた。

『何としてもこいつは守り抜いて……あつ!』

だが運命が悪戯をする様に風呂敷から一つ箱が落ちてしまい、和也は追いかけてようとする。

『和也さん!そこは……!』

『えっ?』

しかし幻冬が気づくとそこには落とし穴があり、それに気づいた和也は避けようとしたが間に合わなかった。

『和也さん!』

幻冬は急いで駆け寄り、和也の腕を掴んで助けようとした。

『——あつ、やつぱ無理』

だが彼の貧弱小学生ボディが、あの大量な荷物を持つ和也を持ち上げられるわけが御座いません。

『うそおおおお——ん!』

『幻冬!』

『和也さん!』

そのまま二人は和也の作った弁当箱を追いかける形で、落とし穴に落ちていつてしまった。

恐らくだがあの二人は既に、敵に捕まったには違いない。

「……捕まったあ!?!」

「ええ、多分……」

龍牙はソードに應える形でクローズドラゴンを手にとると、ドラゴンボトルをひと振りしてガジェットに変えたクローズドラゴンに差し込む。

『ウエイクアップ!クローズドラゴン!』

そしてドライバーにガジェットに差し込むとレバーを回し、ランナファクトリーからアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身……!——あれ?」

そしてファクトリーが龍牙の体に重なるうとした瞬間、ランナファクトリーの形成したアーマーが突如として消えてしまった。

「えっ?」

「何で変身しないの?」

「しないんじゃない?出来ねえんだよ!」

龍牙はもう一度レバーを回してアーマーを形成させるが、何故か龍牙の体に重なるうとした瞬間に消えてしまう。

「はあ?!? マジでどうなってるんだよ……!」

ビルドドライバーからの反応はあるのに仮面ライダークローズになれないという現象に、龍牙はどういう事なのかと頭を悩ませていた。

一方ミラクルと晴夜は、この空間にマジカルがないかと辺りを探し続けていた。

もしこの場が晴夜かミラクルのどちらか一人だけだったら流石に心細くなり、不安になっていただろうが、幸いにも一人ではなかったのでそういった事は起こらなかった。

「だ〜れも居ないな、こ〜」

晴夜はミラクルと誰かいないかと周囲を見回しながらビルドフォンもかけてはいるが、圏外なのかやはり繋がらない。

「そうだね……あつ。あれは？」

魔法の箒を使って空から探そうかと考えていたミラクルが空を見上げると、頭上で何かが光ったのに気づく。

「流れ、星？」

晴夜もミラクルの方を向いてから、彼女の視線を追って自分も視線を上に移す。

「ツ！あれって、まさか……ミラクル！しゃがめ！」

ミラクルの見つけた流れ星が真つすぐこっちに落下していることに気づいた晴夜は、目を凝らして見ていたミラクルにしゃがめと言いながら急いでしゃがむ。

次の瞬間、二人が立っていた場所に何かが落ちてきた——否、攻撃して来た。

そして砂煙が晴れた先に立っていたのは、鳥のような黒い翼と赤い髪を持った人型鳥

人の敵だった。

「あれは、スイートプリキュアの——確か……『ノイズ』だったな」

「知ってるの？」

「響さんから聞いた事があるんだ」

『ラビット! タンク! ベストマッチ!』

以前にスイートプリキュアのメンバーから。過去にメイジャーランドを襲い、世界中の音を消し去ろうとした哀しみの結晶がいたと聞いた事を思い出し、晴夜はビルドドライバーを装着しながらポトルを装填した。

『Are you ready?』

「変身!!?」

そしてレバーを回して前後のライドビルダーからアーマーが形成されると、両手を広げながらアーマーを装着しようとする。

「——えっ? 変身出来ない!?」

だが龍牙と同じく、晴夜も仮面ライダーに変身することが出来なかった。

「晴夜君! 避けて!」

「!?!」

ドライバーが故障はないはずなのにと狼狽える晴夜はミラクルの声に気づき、応急措

置としてラビットボトルを振ってスピードを上げながら躲した。

「くそお！ならー！」

変身出来ないのなら生血で戦うしかないが、とりあえず対抗するためにドリルクラッシュャーを構えて敵の攻撃に備える。

その時、上空から桃色、青色、黄色、紫色の物体が飛来し、ノイズに命中して弾き飛ばした4人の少女が現れた。

「世界に広がるビッグな愛！キュアラブリー！」

「天空に舞う蒼き風！キュアプリンセス！」

「大地に実る命の光！キュアハニー！」

「夜空にきらめく希望の星！キュアフォーチュン！」

「ハピネス注入！」

「幸せチャージ！」

「ハピネスチャージプリキュア！」

二人一組となって声を揃えながら現れたのは、ブラッド帝国の時にも協力してくれたハピネスチャージプリキュアの四人だった。

「ラブリー！プリンセス！みんな！」

「晴夜、久しぶり！」

「晴夜君の知り合い?」

この前の春のカーニバルぶりの出会いに二人は軽く挨拶を済ませると、ミラクルは初めて聞くプリキュアに目を丸くする。

「大丈夫?」

「え? うん」

ラブリリーがミラクルに手を差し伸べると、倒れていたミラクルを立ち上がらせる。

「あなた、新入りね?」

「は、はい! キュアミラクルです!」

「よろしくミラクル」

プリンセスとハニーに頭を下げるミラクルを見ながら晴夜が「ミラクル。彼女らはハピネスチャージプリキュア。簡単に言えば、君たち二人の先輩かな……」と言っている。『先輩』と言う単語を聞いたプリンセスは嬉しそうにドヤ顔を浮かべていた。

「先輩……ああ、先輩って良い響きだな」

自分の後輩ができたことを喜んでるようだった。

ラブリリーは晴夜とミラクルの事情を聞き確信を持つと、ミラクルに顔を向けて口を開いた。

「じゃあ、一緒に探そうよ! あなたのパートナー」

「……うん！」

ミラクルは会ったばかりながらも、ラブリーの力強さと心強さを感じて安心し強く頷く。

「それより、あなたは どうして変身しないの？」

「いや……しないじゃなくて出来ないんだ」

だがその横で、敵がいたのに何で変身しないんだとフォーチュンに言われた晴夜は、自分も変身が出来ない理由がわからないと答えていた。

晴夜が変身出来ない理由を考えていた頃。龍牙とマジカルは、ハート達と一緒にディスプレイアとの戦闘を繰り広げていた。

しかしディスプレイアは龍牙やハート達よりもマジカルをしつこく襲い、マジカルは何とか振り切ろうとしていた。

「何で私ばかり〜！」

「はあっ！」

必死に逃げていたマジカルをディスプレイアの触手が捕らえるが、龍牙のビートクローザーが触手群を切り裂いた。

「敵は、マジカル狙いですわ！」

「こつちに引きつけないと!」

触手群と戦いながらも、敵の動きを観察していたエースとジョーカーが叫ぶ。

「了解! フォローするよ!」

ハートはそう言つてマイスイートハートを放ち、デイスピアの攻撃をかき消した。

そして今の爆発で発生した煙の中から、左右両方に飛んで2方向から攻撃する。

「スパークルソード!」

「ダイヤモンドシャワー!」

二人の攻撃がデイスピアに命中し、動きを封じた。

その隙にデイスピアの頭上に回り込んでいたハートが、続けざまに技を放った。

「ハートダイナマイト!」

ハートのマジカルラブリーパットから放たれた必殺技を喰らい、小規模な爆発をして

から更に大規模な爆発をして倒れるデイスピア。

「どうやったたら、こんなに強く……」

ハート達の戦いぶりに驚嘆しているマジカルは、どうすれば自分もこんなに強くなれ

るのかと憧れを抱き始めていた。

「なれるよ」

「え?」

「愛さえあればね」

すると驚いていたマジカルの隣にはいつの間にかキユアハートがおり。ハートは彼女の肩に手を置き、そういつて彼女は手でハート型のマークを作るのだった。

「でも晴夜君への愛の方が、もの凄く強いけどね〜？」

「そ、それは、本当です……」

「……どういこと？」

だがダイヤモンドとハートの掛け合いを聞き、晴夜がどうしたのかと小首を傾げる。

「ふふっ……晴夜さんとハートは、付き合ってるのです」

「……………えええええー……ツツツ!!??」

そんなマジカルの疑問を解消すべく、ロゼッタの耳元から投下されたプリキユアと仮面ライダーとの恋愛事情を聞き、マジカルはシャウトしながら驚く。

所変わってミラクルと晴夜、ラブリー達のいる場所。

建物と建物の間の狭い通路を走って逃げるミラクルだが、彼女の背後にノイズの赤黒い稲妻が命中してしまい。彼女の足元が爆発して足場が破壊されたことで、ミラクルは重力に従って暗い底へと落下する。

「ああああああつー！」

「ミラクル!」

晴夜は建物の屋上から落ちるミラクルをラビットボトルを振り、スピードを上げて追いかける。間一髪で追いついた晴夜は腕を伸ばして、ミラクルの腕を掴もうとする。

「晴夜君!」

ミラクルも晴夜の手を掴むが、今のライダーにすらなれない生身の晴夜では彼女を持ち上げるのは困難に近かった。これ程まで龍牙の筋トレに付き合わず、ジムに行かなかった事を後悔した事はなかった。

「くう……ううッ! (早く持ち上げないと……)」

「晴夜! ミラクル!」

ラプリーは直ぐに助けへ行こうとしたが、落下したミラクルを追尾しようとしたノイズに阻まれて助けに行けない。

晴夜は力を振り絞るが段々と握力が無くなっていき、もう腕が限界だと思ったその時。自分やラプリー達でも無い、別の何者かがミラクルの手を掴むのを見た。

「えっ?」

「絶対に助ける! この手が届く限り!」

晴夜が振り向くと、そこには自分よりずっと年上の青年がおり。誰だと思いつつも青年と一緒に力を振り絞り、一緒にミラクルを持ち上げる。

「はあ、はあ……ありがとう晴夜君。それと、えつと……」
「あなたは？」

ミラクルが晴夜と一緒に助けてくれた青年にお礼を言おうとしたが、名前が分からず言い淀んでしまい。晴夜と一緒に持ち上げてくれた青年に名前を尋ねる。

「俺は火野映司。君と同じ仮面ライダーだよ」

その青年は火野映司と名乗り、晴夜と同じ仮面ライダーであると名乗る。

「どうしてここに？」

「たまたま、あそこに居てね。あの黒い光を見て着いたら、液体に飲まれてここにいたんだ」

どうやらデイスピアが現れた際、映司もあそこへ向かっていたらしく。トラウーマがこっちの世界に晴夜達を引き込んだ時には、彼も偶然近くにいた為に一緒に巻き込まれてしまった模様。

「……映司さんは、今変身出来ますか？」

「……ごめん。俺も今は……」

自分ではサポートすらまともに来ないと悩んでいた晴夜だったが、映司が仮面ライダーならば変身してもらい、みんなと協力しながらノイズを倒せると思った。

しかし彼曰くライダーになっていたのはかなり前の事で、今の映司はライダーに変身

出来ないと言語る。

「さつきからミラクルばかり」

「ミラクルが狙われてるみたいね!」

「ツ!来るよ!」

そんな中、ハニーとフォーチュンはミラクルばかりに攻撃を集中させている状況を見て、敵の狙いがミラクルである事に目を付けていると、映司の警告通りノイズの放った赤黒いエネルギー弾が四方から群がってきた。

「させるか!」

『タンク!』

それにいち早く反応した晴夜は、タンクフルボトルをドリルクラッシュャーに装填してエネルギー弾を放ち、エネルギー弾をノイズ諸共撃ち落として直撃させた。

「今だ!」

「了解。決めるよ!」

ノイズへの攻撃チャンスだとラブリー達に声を掛け、それを見たラブリー達も頷く。

「愛と!」

「勇気と!」

「命と!」

「星の光を！」

「「「聖なる力に！プリキュア！」」」

「スターライト！」

「スパークリング！」

「ブルーハッピー！」

「ピンキーラブ！」

「「「シュートツ！」」」

4人の力を混ぜ合わせた一撃、『プリキュア・スターライト・スパークリング・ブルーハッピー・ピンキーラブシュート』がノイズに命中し、大爆発を起こした。

「星よ！」

「命よ！」

「勇気よ！」

「愛よ！」

「「「天に帰れ！」」」

そう言つて頭上に手をかざす4人の真下では、ひと際大きな爆発が起こっていた。

「す、すごい」

「でも。相変わらず技名長いなく……それはそれで良いけどね」

しており、ハニーが「なんかあの人も仮面ライダーらしいよ？」と答えていた。

『ルラララル〜♪』

「…歌？」

「この歌……」

「さっきの歌だ」

するとデイスピアとの戦いでも聴こえていた歌声が、映司や晴夜、ミラクル達の耳に飛び込んできた。

声がする方を向くと視線の先には、少し離れた屋上の屋根の隅に腰掛ける少女の姿が見えた。

「子供？」

「だよね……」

しかし一瞬の瞬きの後、気づいたときには子供の姿は消えていた。晴夜達は慌てて周囲を見回すが、あの子の姿はどこにもなかった。

「うわあああああつー！」

その時、倒れていたはずのノイズが復活した。

これにはラブリーとフォーチュンも驚きを露わにしていた。

「まさか！」

「そんな……」

「うん？」

するとハニーは懐に何か違和感を抱き、ぽっけに手を突っ込んで手探りしてみた。

「ぐおおおおおおお！」

ノイズはそのままミラクルに向かって突撃し、それをラブリーとプリンセスが咄嗟に受け止める。

「やっぱり！」

「ミラクルを狙ってる！」

「ラブリー！プリンセス！」

「——ミラクル、晴夜君、映司さん。あなた達は先に行つて」

「え？」

ミラクルはノイズを受け止める二人を心配するが、ハニーが真っ先に助けに行こうとするミラクルに制止をかける。

「歌よ。あの訴えるような歌が、きつとあなた達を導いてくれるわ」

「ここは任せて」

「すぐに追いかけるから！」

「えへっ！大丈夫バイバイ！どーんと任せて！」

「……………わかった!」

ラブリー達四人がこの場は自分に任せて歌の聴こえる所へ行くようミラクルに促し、それを承諾したミラクルは晴夜と映司と一緒に足を運ぼうとする。

「それと、これも!」

「?……………これは?」

だがミラクルを引き止めるようにハニーが何かを投げると、ミラクルは思わず掴んで手を開く。

それは、包みに入った五つの飴であった。

「特製のハニーキャンディよ! パートナーに会えたら、食べさせてあげて!」

「うん!」

「……………わかった」

「じゃあ後で会おう。必ず」

「がんばってね! 先輩!」

ミラクルは笑顔で頷くと、他二人と共に歌が聞こえる所へ急いで走り出した。

「「「はああああああああ!」」」

「うおおおおおおおおお!」

三人の姿が見えなくなった事を確認したラブリー達は、こちらを睨み付けるノイズと

対峙すると、彼らの歌の聴こえる所へ行く道順を守るべく勇敢に立ち向かっていった。

「ああああああッ!?」

しかしノイズはそんな彼女達を侮辱するが如く、逆にラブリー達を抱え込んで上昇していく。

「くう……!?!」

「くくくく……」

ノイズに抱え込まれたラブリー達は如何にかして抜け出そうとするが、ノイズの頭部が赤く点滅を始めたのを見てまさかと思いは始める。

「まさか!」

何かを察知して驚愕の表情を浮かべるラブリー達を見たノイズは不敵な笑みを浮かべると、ノイズの体から激しい発光が巻き起こった瞬間、ラブリー達を巻き添えに空中で大爆発を起し、彼女達の悲鳴と爆音を木霊せる。

「まだ立てるなんて……!」

「しつげえにも程があるだろ!」

一方のマジカルとハート達は、これまでのハート達七人の攻撃に加えて、ここに来る前にビルドとクローズと戦った時のダメージが蓄積している筈にも関わらず、その猛攻

を受けていたデイスピアはしつこく立ち上がっている事に戦慄していた。

「……マジカル。ここは私たちに任せて、先に進んで」

「そんなー！」

このままでは拉致があかないと判断したダイヤモンドは、マジカルにこの場を任せて先に行つて欲しいと話す。だがマジカルからすれば、七人で戦つて此処まで苦戦させるデイスピア相手に一人でも抜けて仕舞えば、更なる苦戦を強いられると思つていた。

「来るんでしょ？お花見」

「え？行く、けど……」

「ハート！あなたも行つてー！」

マジカルにはるか達とお花見に行くでしょと聞きながら、自分も仲間と此処に残ろうとしていたハートに、ソードがマジカルと一緒に رفتつてと叫ぶ。

「えっ？でも……」

「ああ、マジカルと行け！それと、晴夜に会つたらこう言つてくれ！

今日はお前にいいところ譲つてやる……つてな」

自身もマジカルと一緒に行くように伝えられたハートの中に不安が過ぎりそうになるも、龍牙から自分の代わりに晴夜達の助けになつて欲しいと頼み込んだ。

もし仮にここでマジカルと一緒に رفتつても、今の自分では足手纏いにしかならないと

身を持って理解している。だからこそ今はハートにマジカルを任せ、自分は此処で敵を食い止めるのが一番最適な役目だと龍牙は考えていた。

「ぬうおおおおお！」

『ボドルバーン!』

「オラア！」

マジカルとハートにそう話している間にこちらへ突撃して来たデイスピアを見た龍牙は、マグマナツクルにマグマドラゴンボトルを装填し、炎を纏った一撃を繰り出した。

「頼むぜ!ハート!マジカル!」

「また後でね」

また後でねとジョーカーを始めとしたみんなが笑顔で言うのと、ハートとマジカルも頷く。

「ええ!必ず!」

「また後でね〜!」

「頼むわよ!ハート!マジカル!」

デイスピアの相手を龍牙やソード達に任せると、6人の想いを知って不安だった想いを和らげたマジカルはハートと一緒に走っていった。

「頼むぜ!簡単にやられるなよ!」

「龍牙さん！無理しないでください」

ロゼッタは生身で戦おうとする龍牙に、クローズへ変身出来ないなら無理して前に出なくていいと案じるが、龍牙は口角を上げながら手を握りしめる。

「関係ねえよ。例えば変身出来なくても、俺は仮面ライダーだ。」

みんなと一緒に最後まで戦う覚悟なら、ガッツリあるぜ！」

例え生身でも最後まで戦うとみんなに伝えると、彼の覚悟を受け取ったダイヤモンド達は此処から離れるように言うのをやめて承諾するように頷き。デイスピアが起き上がったってきた事を確認した龍牙は、ナツクルを装着しながら次の攻撃に構える。

「うおおおおっ！」

「あっ！」

「ああっ！」

するとデイスピアは鳶で龍牙達の手足と体を雁字搦めにし、一同の動きを完全に封じてしまった。

「このやろー！くそおおー！」

龍牙は必死にもがいて引き千切ろうとするが、ライダーの変身すら出来ない今の彼に敵の鳶を引き千切る事など出来るはずがなく、そもそもプリキュアですら脱出出来ない程の強度を持つ鳶を引きちぎる事は、普通のクローズでも困難に近い。

それでもなんとか出ようとする、デイスピアの頭にある冠が両端から中央へと点滅し始めていく。

「うう……これは……」

「あいつ、自爆するつもりよ!」

「ええっ!?!」

「ふふふふ……」

その異変を見たダイヤモンドは、相手が自爆テロをしようとしている事をみんなに伝えるが、今気付いてももう遅いと言わんばかりにデイスピアは笑い声を辺り一面に響かせる。

『きゃあああああああああ!!』

そしてデイスピアが自爆すると、爆発は導線の役割をしていた蔦へと伝線。龍牙とドキドキプリキュアを巻き込んだ大爆発が発生した。

更にハートとマジカルは爆発音が聞こえて後ろを振り返ると、デイスピアの爆発によつて生じた爆風と爆炎が、大きく離れていた筈の二人に迫る勢いで追って来ていたのだった。

『ロケットオン!』

「!?!」

だがそこへディスプレイが作り上げた爆発とは違う、電子音とロケットの様な噴射音が聞こえてきた。

どこからかと思いながら二人が見回すと、左から凄い勢いのまま現れた何かが二人を巻き込み、爆発距離範囲内から離してくれた。

「うわああああ！ととと……」

「助かったの……？」

「間に合つてよかつたぜ」

森を抜けて爆発した場所を見据えながら、無事に脱出した二人は声の聞こえた方に振り向く。そこにはグレーのスーツを来たリーゼントの男性がおり、腰にはドライバーのような物を巻いていた。

「俺は仮面ライダーフォーゼ！如月弦太郎！全ての仮面ライダーと友達になる男だ！力になるぜ！」

「仮面ライダー……」

「フォーゼ？」

二人を助けてくれたのは、仮面ライダーフォーゼを名乗る如月弦太郎という男性。

彼のおかげでひとまず危機を乗りきったが、龍牙とドキドキプリキュア、ハピネスチャージプリキュアはノイズとディスプレイの自爆に巻き込まれてしまった。

一方で、晴夜達はマジカルや龍牙達の搜索を続けると、何やらビルのような建造物を見つけた。

「行ってみましょう」

「うん」

晴夜と映司の二人が入ろうと試みるが、ミラクルが来ない事に気付いて振り返る。

「ミラクル? どうしたの?」

晴夜が近づいていみると、彼女の表情が少し暗かった事に気付く。

「……ごめん。なんか、マジカルがいないと怖くて……」

そういう彼女の心には、「キュアマジカルであるリコが此処に居ない」という、ぼつかりと空いた穴が存在していた。

彼女にとってマジカルは、これまでプリキュアとして一緒に戦ってきたパートナー……晴夜でいう所の、龍牙やマナと同じくらい大切な存在。

不安そうなミラクルを見た晴夜は、きつと二人がプリキュアとして一緒じゃなかった事は、多分これが初めだと考えていた。

「確かに不安だよね……」

すると彼女の心の傷を案じながら映司が口を開き、ミラクルに近づく。

「今まで一緒だったのに、急に目の前からいなくなるって……正直に辛いよね」
「映司さん……?」

相棒が近くないと辛いよねと声をかける映司の哀しそうな顔を見たミラクルは、映司が自身の手を見つめていることに気付き、彼女は映司の手のひらへと視線を向ける。彼女の目には、前は鷹の絵柄が刻まれていたであろう、半分に割れた赤いメダルがあった。

「でも、絶対に会いたいと君が信じれば、きっと会えるさ」

だが映司はミラクルの肩に手を置き、マジカルにはまた直ぐにでも会えると彼女を励ます。

「……はいー!」

「うん」

「行こう。ミラクル」

三人はビルの中へと入ると、階段を上がり拾い会議室のような部屋を見つける。

中を見るとかなり荒らされている様子ではあるが、もぬけの殻で人のいる気配はない。

「マジカル! いる!?」

「……やっぱり誰もいませ——!」

「ツ!? 晴夜君! ミラクル!」

「えっ?」

だが既にこの部屋には誰かいると気付いた晴夜と映司。

晴夜はドリルクラツシャーを構え、映司はミラクルを守る様に前に出ている。

「よく気付いたなア〜〜! クレイジ〜ボ〜〜イズ?」

「戦い慣れしてるよね〜この二人〜」

「魔法使いのプリキュア……は、まだまだひよっこようだ……」

エキセントリックな喋り方に、間延びした田舎弁風の話し方、寡黙的な声からして三人いるのだと思い、晴夜もどこから来るかと警戒する。

すると暗い会議室から明かりが灯され、気づくと声の正体である人物がそこにいた。

「まじかよ……」

三人と想っていた考えとは裏腹に、そこにいた存在は余りにも予想外だった。

そいつは紫のカラーリングの胸から竜の様な頭が生えており、肩から生えたもう二つの蛇の頭部は腕に巻きついていていた。

「あ、あなた達は一体……」

「フン……それをお前達に、教える義理は——」

「俺達はアジ・ダハーカ! 古より封印されていた者だ!」

「……………そういうことだ」

アジ・ダハーカと名乗る三つ首の竜の怪人。おそろくさつきの声も、三つの首から発した声のようだ。

「オメエらゝが、仮面ライダーとプリキュアゝだべかゝゝ?」

「ヒヤツハアアアアアハハハハハッ!! イイねゝ! こんな所まで来るなんて、やっぱりコイツら最高に狂った奴らだぜエエエ!」

「大人しく……涙を寄越せ」

右首や左首、中首と言った三つ首のからは、言葉を話す口調がそれぞれ違っていた。おそろく首によって性格が違うのだろう。

「何故、涙を求めている理由なんだ!」

映司がアジ・ダハーカに、何故プリキュアの涙を求めているのかと聞く。

「そんな事、お前達に言う必要——『知らねえだよおゝ! でもさゝトラウーマが手に入れろつてゝゆゝゝだよゝゝ』……」

「でもよゝゝ。クレイジーガールゝの涙にはゝよおゝゝ? ファンキーな力があるつてゆゝらしいぜエゝゝ?」

「えっ? 私?」

「何だよそれ!」

「アレでねえ〜か〜? 飲むと力が湧いてくる様なやつとかさ〜?」

「そりゃー当然! クレイジーガール共の絶望の象徴的な奴だルオオオ!」

「…………お前達が知る必要は…………無い」

「…………あの、すみません。せめて答えは統一して下さい…」

各頭部によって全く違う答えが返ってくるので、ミラクルは頭が混乱しそうになって処理が追いつかずにいた。

「こうなったら、無理矢理にでも聞き出すだけだ!」

『ラビット! タンク! ベストマッチ!』

『Are you ready?』

「変身!!? ……くそお! 何で変身出来ない!」

晴夜は再びビルドに変身する為にボトルを装填し、レバーを回してアーマーが形成させるとポーズを決めるが、やはり変身することが出来なかった。

「あぁ〜! やつぱり、トラウーマの秘薬が効いているだね〜」

「秘薬? ……あつ!」

右首の口から秘薬と聞き。晴夜はここへ飛ばされる前にトラウーマから、フラスコに入った液体をかけられた事を思い出した。

「むう……………その術は…………対象者の力を、一途弱めるらしいな…………」

「弱める……まさか……！」

今度は中首から力を弱めると聞き、その対象が晴夜の体のハザードレベルを指しているのではないかと思っていた。

ハザードレベル。それはネビュラガスの耐久力をいくつかの段階に分けたもの……なのだが、ネビュラガスとは違った方法でライダーシステムを扱う晴夜や龍牙の場合は、単純にライダーへと変身出来る数値を表す。

レベル次第ではライダーシステムやトランスチームシステムなどの装備を扱えるようになるのだが、ハザードレベル3以下だとライダーに変身することすら出来ない。

即ち、秘薬によってハザードレベルが下げられてしまったと言うのなら、晴夜と龍牙がライダーに変身出来ない理由も証明できる。

「……けど」

だが晴夜はハザードレベル3以下と聞かされても動揺せず、ドリルクラツシャーを構える。

「晴夜君……」

ライダーに成れずとも戦う覚悟を見せた晴夜にミラクルは驚き、映司は仮面ライダーとしてどんな状況であろうと戦う覚悟を持っているのだと感じ取っていた。

「お前達の企みは、必ず止める！」

映司がソルシエール達の企みを止めると宣言すると、それを聞いたアジ・ダハーカの左首は爆笑しだした。

「アツヒヤヒヤ……ッ！その小娘はともかくよオウ？変身も出来ねえくお前達クレイジーボーイ二人に、何が出来るってんだア……?!？」

「……図に乗れるのも、此処で終わりだ……フッ！」

アジ・ダハーカは変身出来ないと嘲笑いながら映司を見ると、彼の体からはるかの記憶からデイスピアが現れた時と同じ様に影が現れた。

「現れるー！グリードー！」

アジ・ダハーカの左首が「グリード」と叫ぶと、映司の体から影が飛び出され。晴夜達の前にライオンの鬣の様なドレッドヘアや鋭い爪と牙を生やした猫の怪人、シヤチをモチーフにした頭部や吸盤の並んだ脚部に加えて青いマントを羽織った女怪人、サイの角や象の鼻と牙などを模した顔に屈強な上半身を持った怪人、クワガタの顎の様な角や昆虫の複眼を持つ頭部と右手には鉤爪が生えた虫の怪人が現れた。

「映司さん。大丈夫ですか？」

「!?これは……」

「グリード……」

「お前の記憶から具現化したものだくくよー！」

アジ・ダハーカは映司の記憶を読み取り、そこから過去に戦った強敵達……800年前の錬金術師達によって欲望から誕生したメダルの怪人『グリード』を呼び出したのだ。「おっつと、お前にはこいつだっけなア!?」

晴夜達の前にグリードであるカザリ、メズール、ガメル、ウヴァの4体が並ぶと、更にアジ・ダハーカの左首はもう一体のグリードを呼び出す。

そのグリードを見た映司は、思わず自分の目を疑った。

「……アंक」

そこに居たのは、羽の生えた腕部や猛禽類を思わせる爪を持った赤い鳥型のグリード。

それはかつて、映司と一緒に同じ時を過ごし、時にぶつかり合い、何度も協力し合ってきた相棒のような存在——アंकだった。

「……貴様ら家畜どもに、我々が手を出す価値など……メダル一枚分すら、無い……」
「そう言う事……そんなじゃあ、やれ!グリードオ!」

アジ・ダハーカの右首の命令により、五体のグリードが一斉に三人に向かってきた。晴夜はカザリとウヴァ相手に四コマ忍法刀で応戦し、ミラクルはメズールとガメルの攻撃を躲し続ける。

そして、映司はアंकと…

「映司さん！使ってくださいー！」

晴夜はドリルクラッシュャーを投げ渡し、映司は咄嗟に受け取る。

「うっ……」

しかし右半分に金髪状の装飾があるアंकの顔を見た映司には、迷いがあった。

いくらコピーのアंकだとわかっていても、どうしても頭の片隅に大切な存在を攻撃してはいけないと命令が下り、彼を傷つける事が出来なかった。

「あ、ああああ……」

「アツヒヤヒヤー！やはりコピーだとわかってても、そいつには攻撃出来ないかア〜！」
左首のアジ・ダハーカが映司を煽り、映司は避けるも遂にアंकの腕に捕まり締め付けられる。アंकは更にビルに打ちつけて穴を開けてると、映司をその穴に落とそうとするが、映司はアंकの腕を退かそうとする。

「アंक……」

その時、彼の腕を触って映司は思い出す。

彼に出会って、これまで記憶と彼のおかげでグリードとの戦いやメダル集めに巻き込まれて振り回されていた事を。

「どんな形であれ……俺は……」

けど、映司は彼との出会いを後悔したことはない。寧ろ楽しかった事が多かった。

そんな彼を、彼は傷つける事が出来なかった。

「……………うっ……………あああつ!?」

「!?」

すると映司の顔を見た途端、アंकが苦しみ始めた。

そのままアंकは映司を離し、苦しみながら辺りを歩き回ると足を踏み外し、破壊した場所から落ちてしまう。それを見た映司は追いかけるように飛び降りた。

「映司さん!」

急いで助けに行こうと試みるが、二人もグリードを相手しており身動きが取れなかった。

「ぬうおおおおおお!」

飛び降りた映司は腕を伸ばし、アंकの腕を掴もうとする。

「お前が俺の記憶から生まれてたもので、本物のアंकじゃなくても!」

今ここにいるアंकは自分の記憶から生まれたコピーで、本物ではないことは、映司が一番わかっている。

「この手で掴めるのなら……………俺は迷わず掴む!」

それでも彼は掴む自分の手が届く限り、掴み続ける。

そんな気持ちを抱きながら映司はアंकの腕を掴むと、彼の持つ形見のコアメダルが

光り、そのメダルがアंकクの体内に入る。

それと同時にアंकクが態勢を直し、背中から生えた赤い翼を羽ばたかせながら、その手を握ったまま二人は地上へと降りた。

「アंकク……」

「映司。相変わらずボロボロだな!」

聞き慣れた口調を聞いた映司が突然の事に驚きながらも、右腕の赤い腕と金髪の生えた顔を見て、彼にとって決して忘れる事のできない存在だと言う事を改めて確認。

ここにいるのは自身の記憶から生まれた、偽者ではなかった。

今此処で映司を見るのは間違いなく、本物のアंकクだった。

「お前のせいだろ」

「知るか」

目の前にアंकクがいるという事実には、映司の瞳からは涙が出そうとなるが、今は泣く時じゃないと堪える。

「今日だったかもな。お前に会える奇跡の日!」

「はあ? 何言ってるんだ?」

「……詳しく説明してる暇はないんだ」

映司がアंकクとの再会を果たした一方で、晴夜とミラクルはグリッドに立ち向かう

が、変身出来ない晴夜では歯が立ったなかつた。

「くうー！」

「晴夜君！」

「フン。変身出来ない癖に、よく頑張るな……」

変身出来ないと煽るアジ・ダハーカだが、ドリルクラツシャーを支えてとして晴夜は立ち上がる。

「けど……？変身出来ない只のガキのお前には、何もできないようー！」

アジ・ダハーカに気を取られていた晴夜とミラクルが周りの状況に気づくと、既にグリードがこちらを完全包围しており、二人の逃げ場は失っていた。

「……グリード、やれ……」

一斉に向かつてきて万事急須と思ったその時、二人に仕掛けようとしていたカザリの背中を誰か貫いていた。

「!？」

「……ん？」

グリード達は現れた男に攻撃を仕掛けるが、その者は攻撃を躲してカウンターで攻撃を当てるとグリードの体内からメダルを零れ落とした。

「言つたら。お前達の企みは止めるって！」

「ちゃんと今日のアイスを寄越せよ」

「わかってるって!」

そしてグリードを攻撃した張本人であるアंकが、映司に後でアイスを寄越すように言いながら並んでいた。

「……………ハアアアアア!? オイ、どうなつてんだよオオオオオオ!! 何であいつがクレイジーボーイと仲良くつるんだよオオオオオオ!!!」

「……………文句があるなら、この術を教えた小娘と…………トラウーマに言え」

アジ・ダハーカの左首と中首が言い合っている中。ビルの外へ落ちたはずの映司とその隣に並ぶアंकを見た晴夜とミラクルは、一体二人に何があつたのかと驚きながら考えていた。しかしそんな事考える暇もなく、グリード達は二人に襲いかかる。

「グリードは俺達に任せて! 君達は先に行つて」

「…はい。ミラクル!」

『ビルドチェンジ!』

晴夜とミラクルはこの場を映司とアंकに任せて先へと向かう為、晴夜はビルドフォンを取り出すと愛用バイク『マシンビルダー』へと変え、ミラクルにヘルメットを被せる。

「捕まってる!」

「うん」

マシンビルダーを走らせ、二人はここから出る為にビルの外へ向かう。

「……………グリード……………早く始末しろ……………ッ！」

アジ・ダハーカの中首は晴夜とミラクルを追う為、グリード達に映司とアंकを倒せと命令する。

「行くよ……………アंक！」

「映司」

アंकが3つのメダルを投げつけると、映司は三色のメダルを手にしながら。かつてアंकから受け取った、これまでの戦いを乗り越えたドライバー『オーズドライバー』を腰を当ててベルトを巻き付けた。

そのまま2枚のメダルの内、赤い鷹のメダルにはオーズドライバーの3つの枠のうち右枠、バツタが刻まれた緑のメダルは左枠に投入。最後にトラの顔が刻まれた黄色のメダルを取り出すと真ん中の枠に投入した。

3枚のメダルが投入されると、右サイドに携帯しているオーズキャナーを握ってバツクル部分を傾け、スキャナーを握って構えた映司はオーズキャナーを右からスライドさせる。

「へキイン！キイン！キイン！」

「……変身！」

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ、タトバ、タトバー！』

オースキャナーの響く音と共に顔と胸、足のそれぞれに5枚のオーラメダルが回転した。

顔に赤のメダル、胸に黄のメダル、足に緑のメダルが覆い。胸にメダルが覆うと胸から腕にかけて『トラボデイ』。足はバッタの後脚をイメージさせる『バッタレッグ』。顔はタカの翼をイメージさせる『タカヘッド』になった。

「はあぁーっ！」

「……」

こうして仮面ライダーオーズへの変身を遂げた映司は、グリードへ向かって戦いを挑む。

それを見ていたアジ・ダハーカは苛つきながらも、その場をグリードに任せて去って行った。

晴夜がマジカルを乗せてバイクを走らせる中、弦太郎に助けられたハートとマジカルは森を抜けてミラクルを探し続けていた。

「マジカル。大丈夫？」

「ええ……問題ないわ」

心配そうにそう聞くハートに問題ないと言うマジカルだったが、相棒であるミラクルが近くにいない彼女の表情からはミラクルの時と同じく、一人では不安だという事が目に見えていた。

「無理すんなよ」

「えっ?」

「ダチが近くにいなえと、やっぱり不安だろ?」

だが弦太郎はそんなマジカルの気持ちに汲み取り、彼女に元氣良く声をかける。

「ダチが近くにいるって、どんだけ心強いかわかる。」

俺もダチのおかげで、ピンチを乗り越えてきたからな」

弦太郎はこれまで『仮面ライダーフォーゼ』として、仲間とどの様に戦いを乗り越えて来たかを話した。

勿論時には仲間との友情が揺らいだり、衝突することは多々あったし。挙げ句の果てには裏切られたり酷い仕打ちを受けたり一度は殺されたり、知らなかつたとはいえ友を傷付けてしまつて後悔した事もあつた。

だがその度に彼は仲間と仲直りしたり、認め合つたり、後腐れなく許したり改心させたりして来た。

そして弦太郎が築き上げてきた友との信頼が、何度も彼をピンチから救ってくれた。

「だからよ。ダチが近くいねえで不安なら、本音を言ったほうがいいぜ」

「……会いたい……ミラクルに早く会いたい!」

「よっしゃ!じゃあ早く行こうぜ!」

マジカルの本音を聞いた弦太郎とハートは、覚悟を新たにしたマジカルと共に向かうとする。

「ぐう!!?」

しかしその時、弦太郎の体を影が覆った。

弦太郎の影から四体のもの影が解き放たれると、みるみるとその姿を怪人へと変えて現れた。

「ゾディアーツ!」

おそらくさっきの影は弦太郎の過去の記憶から、〃ゾディアーツスイッチ〃と呼ばれる星座の力が込められたアイテムを使って変身する怪人『ゾディアーツ』を生み出したのだろう。

マジカル達の目の前に現れたのは金の刺繍が入ったクロークをまとっている、ゾディアーツの中で特に〃ホロスコープス〃と呼ばれる上位級ゾディアーツである、スコピオンとヴァルゴ、リブラ、レオの四体だった。

だが弦太郎は一切怯むことなく、二人の前に立ちながらゾディアーツを見据えていた。

「成る程、これが俺の記憶から生まれたって奴か。ならここは俺に任せろ」

「えっ？一人でなんて無理よ」

「心配するなよ。俺は教師だ、生徒であるダチを守る為にいる。

ここに居る俺のダチは、全員俺が守る」

そう言つてフォーゼドライバーを取り出して腰に当てると、自動的に装着されたフォーゼドライバーに装着している四つのスイッチの手前にある各ボタン『トランスイッチ』を順番に押しに行き、それに連動してバックル中央の液晶画面『ステイタスマニター』が光り出した。

『3・2・1……!』

「変身!」

フォーゼドライバーから流れるカウントダウンに合わせて、ドライバーの右に付属した『エンターレバー』を引く。

弦太郎がポーズを決めた瞬間、フォーゼドライバーから煙が噴射され、頭と足に出現した巨大なサークルが弦太郎の体を覆い尽くす。

「宇宙キター……!!」

『アストロスイッチ』の力を引き出した弦太朗は、仮面ライダーフォーゼへと変身を完了する。

「仮面ライダーフォーゼ!まとめてタイマン張らせてもらうぜ!」

そう決め台詞を言いながらフォーゼが走り出し、ゾディアーツに先制攻撃を繰り出した。

「ここは俺が何とかする!お前らは行け!」

「はい!行こう!マジカル!」

「ええ!」

オーズとフォーゼといった、二人の仮面ライダーにより晴夜とミラクル、ハートとマジカルは歌の聴こえる場所へと向かう。

しかし、ソルシエールとトラウーマの作り出した敵はまだいる。

果たして彼らは、それを乗り越える事が出来るのか。

次回!Re. ドキドキ&サイエンス

特別編2 仮面ライダービルド&みんなで歌う♪奇跡の魔法!後半唱

特別編2 仮面ライダービルド&みんなで歌う♪奇跡の魔法！後半唱

晴夜達やミラクル達が離れ離れになっていたその頃。トラウーマの後を追っていたモフルン達は、ソルシエールの居る屋敷へと着いていた。

「ぬきあし…さしあし…しのびあし…」

先程トラウーマの馬車から忍び込んできたモフルン、パフ、アロマの三匹は、屋敷の廊下を慎重に抜き足差し足忍び足で慎重に歩いていった。

「捕まったプリキュアを捜すロマー！」

「変装も完璧。パフ♪」

オマケにサンガラスや付けヒゲを装着して、本人達にとつては変装だと思いついでいるらしいが、こんな所で変装してもあまり意味が無いことには気付いていない。

「こつちにクツキーの匂いがするモフ」

「モフルン、今はそんな時ではないロマー」

「クツキーは後回しにするパフ」

「そんな事を言っても、こつちにクツキーの匂いがして気になるモフ。」

それに、クツキーの匂いと一緒に甘い匂いがたーくさんするモフ!」

「ロマ!?!」

甘い匂いが沢山すると聞き、初めに会った時にクツキーと言いながらはるか顔面に飛びついた事を思い出したアロマは、もしかしたらと思いつながら考えを纏める。

モフルンの言う甘い匂い。これまでのモフルンの行動を整理すると、つまりそれは捕まっているプリキュア達の事ではないかという考えが脳裏によぎった。

事実。モフルンにはプリキュアに関わるアイテムや人物を嗅覚として感知する力も持ち、モフルンはそれを「甘い匂いがする」と表現する。ただのお菓子の匂いと区別できないためお世辞にも精度は高いとは言えないが、その能力はみらい達のリンクルストーン探しの手掛かりとなっている。

「お兄ちゃん、どうしたパフ?」

「その甘い匂いというのは、きつと捕まっているプリキュア達ロマ!」

パフが変な声を出した兄にどうしたのかと聞くと、アロマはモフルンが言う「甘い匂い」を辿っていけば、はるか達と出会える事を説明する。

「モフ?」

「本当パフ!?!」

「間違いないロマ!モフルン!甘い匂いを辿るロマ!」

「任せるモフ」

アロマはモフルンの匂いを頼りにプリキュア達を探そうとする。

「ああ、そこ。段差があるから気をつけて」

張り切つて探しに行こうとしたその時、モフルン達へこの先の道に段差があると伝え
た者がいた。

「親切にありがとうモフ」

モフルンは前方に階段の段差がある事を教えてくれた者に、お礼を言いながら振り向
くと…

「どういたしまして」

そこには笑顔のトラウーマがいた。

「「……………」」

「……………」

「「うわああああああああああ!!」」

誰にも見つからない様に行動したと思つたら、とつくに見つかつていたと言う状況を
目の前にいるトラウーマを見てようやく気付いた三匹の叫び声は、館の外にまで響き渡
る。

「助けてー（モフ・パフ）ツツ!!」

「逃がしませんよ!!」



三匹がトラウーマから逃れる為に全速力で逃げ続けているその頃。洋館らしき物が立ち並ぶ場所へと到着したミラクルと晴夜は、マシンビルダーから降りてヘルメットを外しながら辺りを見る。

「……また、さつきとは違う場所か?」

先のビル一つしかなかった所とは違い、いくつもの建物がある所へと着いたとはいえ。この空間の中はどうなっているのかと頭を悩ませる晴夜。

「…ねえ、晴夜君。このバイク、晴夜が作ったの?」

ミラクルもバイクのシートから降りると、ビルドフォンから変形したマシンビルダーを見ながら、これを作ったのは晴夜かと聞く。

「えっ?そうだけど?」

「すごいね!ワクワクもんだ!」

フルボトルの力を使っているとはいえ質量保全の法則を無視した発明品に、ミラクルは目を光らせながた晴夜に顔を近づける。

「でも、ミラクルとマジカルだって魔法の箒で空とか飛べるでしょ?」

「そうだけど、晴夜みたいなバイクだって凄いわよ!」

……あれ？でも、免許とかどうしてるの？」

「ん？免許なら持つてるよ」

そこでふと、バイクは普通なら高校生以上ではないと免許証を持つてないのと思つたミラクルだったが、晴夜は着ているコートからライセンスを見せた。

「四葉財閥のおかげで特別免許証を貰っているんだ」

「凄く！あれ？」

「ミラクル？……ん？」

二人がマシンビルダーについて会話していると、建物の隅っこで縮こまっている妖精らしき姿を見つけた。

「妖精？」

妖精を見た晴夜はマシンビルダーをビルドフォンへと形態を戻し、懐へと仕舞い込む。

「あ、あの——」

「ルルルルル~~~~~！」

ミラクルが声をかけたは良いものの、相手の妖精は声を上げて泣き始めてしまった。

「わあああつ！お、脅かしてごめんね！私、キュアミラクル！」

ミラクルが背を向けて泣く妖精の警戒心を解くために自己紹介すると、『キュア』とい

う単語に反応した妖精は泣き止み、ミラクルと晴夜の方に振り返る。

「プリキュアルル?」

「あれ? お前……ルルン!」

「……晴夜ルル〜!」

そこにいた妖精は、一番最初のプリキュアであるキュアブラックとキュアホワイトの仲間・シャイニールミナスのパートナー妖精である『ルルン』であった。

「ブラック達を助けてルル〜!」

「まさか、なぎささん達が……『通りま〜〜す!』……ん?」

泣きながら晴夜の胸に飛びつくルルンに、晴夜達はなぎさ達プリキュアオールスターのメンバーまでもがトラウーマ達に捕まってしまったのではないかと思っているとピンク色の少女が二人、ドップラー効果が聞こえる勢いで通り過ぎて行った。

「通りま〜〜、まあルルン! 無事だったんですね! 晴夜君もお久しぶりです!」

二人が通り過ぎ、更にもう一人が通り過ぎたかに思ったが、二人の前に戻ってきてルルンを心配していた。

「ほら急いで〜!」

困惑するミラクルと晴夜がそのピンク色の少女に声をかけるよりも先に、更にもう一人のピンク色の少女がビルドとミラクルの後ろを通り過ぎ。「あなた達も早く!」と

言って走り去る少女を、ミラクルとビルドの二人は訳が分からずポカンとしていた。

「今のプロツサムにメロディ、ピーチにハッピー？『グウオオオオオー！』 ツ?!」

突然背後から咆哮が響き振り返ると、そこには6本の腕に蝙蝠の翼を生やした紫色の化け物が、腹部に付いた大きい口と一緒に大声を出していた。

「プロトジコチュー!?!」

その敵はかつて晴夜が初めてマジエステイロードへと変身した際、ハートと一緒に戦ったジコチューの親玉・プロトジコチューが立っていた。

「おりやあああああつ!」

そこへ先ほど二人の前を通り過ぎた少女たちが現れ。壁を走って加速すると、プロトジコチューの側面からダブルキックをかまして吹き飛ばした。

「次来るよー!」

「ええ!?!」

すると今度は建物の影から、灰色と紫色という二対の羽を持った獣人のような姿の敵——かつてプリキュア5が戦った敵、戦闘形態の姿となった『エターナル』という組織の館長が飛び出してきた。

「あちよおおおつ!!」

エターナルがミラクル達に襲い掛かるが、金髪ツインテールの少女とピンクポニー

テールの少女が殴り飛ばした。

二体の敵を一掃した、四人のピンクコスチュームを身に纏った少女がミラクル達の前に降り立つと、それぞれ名乗りを始めた。

「ピンクのハートは愛あるしるし!もぎたてフレッシュ、キュアピーチ!」

「大地に咲く一輪の花!キュアブロッサム!」

「爪弾くは荒ぶる調べ!キュアメロディ!」

「キラキラ輝く未来の光!キュアハッピー!」

「1」4人揃って、——プリキュア!「2」

「……あー、何だって?」

「揃ってないルル」

名乗る部分がちや混ぜで聞き取れずに疑問符を漏らす晴夜に、突っ込むルルんと、「え〜」と困惑気味な表情のミラクルがその場に居た。

一方、霧と枯れ木の森林地帯を抜けたマジカルとハートは、今度は荒れた岩石地帯の大地の上を走っていた。

「マジカル〜!」

だがその道中、前方から先ほどまで一緒だったフローラ達4人が現れた。

「よかった。無事だったのね?…ハート!」

「ミラクルと晴夜、龍牙は、一緒ではないの?」

「龍牙は……」

一度別れた三人はどうしたのかと問うスカレットに、マジカルはここまで来るまで龍牙と二人になってミラクルと晴夜を探していたがデイスピアが再び現れた事。ハート達と出会いながらデイスピアに応戦し、マジカル達を探すために龍牙達が時間を稼いでくれた事。更に二人の危機へ仮面ライダーフォーゼの如月弦太郎が現れ、ここまで導いてくれた事を話した。

「そうだったんだ。なら、一緒にミラクルと晴夜君を探そう!」

「ありがとう」

新たに合流したフローラ達の前で少しばかり安堵してか、笑みを漏らすマジカル。

「無駄だ」

だが唐突にそんな声が響いたかと思うと、6人の前に新たな敵——ハッピー達と戦った巨大なピエロ姿の皇帝・ピエロのコピー体、キュアブルーム達と戦った黒と緑のボディに白髪と巨大な角を持った男・ゴーヤーンのコピー体が現れた。

「きた」

「涙を渡せ!」

ハートが身構えていると、ピエーロとゴーヤーンの背後に黒いオーラ纏ったソルシエールが出現した。

そして晴夜とミラクル達が戦っていたプロトジコチューとエターナルの背後にも、黒いオーラを纏ったソルシエールの立体映像らしきモノが現れていた。

「あれがソルシエールの姿……」

「ここに飛ばされる前では顔の形しわからなかつたが、此処でようやく姿を見せた。」

「先ほどお前たちを逃がしたプリキュアに仮面ライダーは、既に私が捕らえた」

その言葉に愕然とするミラクルと、晴夜達が居る場所とは違う所でも同じく愕然とするマジカル。その瞬間二人の頭には、自分たちを逃がしてくれたラブリー達、龍牙とダイヤモンド達の別れ際の再開の約束が浮かんでいた。

「みんなが……」

「もう殆どどのプリキュアが……」

「捕まっちゃって事!？」

「そんな……」

「早く助けないと……みんなが危ない!」

同じく仲間達が既に敵の手の内にある事を聞いたプロツサム、メロディ、ミラクル、

「アホかーーーーー!!」

しかし檻の中に閉じ込められているというのに、こんな事をしていない場合ではないと、マリリンが真つ先にツツコむのであった。

「なにが『オ・リ』よ!プリキュア大ピンチっしょ!揃いも揃ってとっ捕まっぺー!」

「マリリン、落ち着いて……」

『ソウ言う時ハ、三秒数エテ十引くノガ一番デスわ』

ホワイトが荒ぶる気持ちを抑えるようにするマリリンを宥める。

「無念だわ……」

「しかも、他のみなさんも捕まっていたなんて……」

『残☆念☆無☆念』

フォーチュンとエース達はせっかく時間稼ぎをしていたのに捕まっぺしまい、申し訳ない気持ちと残念な気持ちが一杯になっていた。

「みんな!気持ちはわかるけど。まずは先の事を考えましょう」

「早く、ここから抜け出す方法を考えましょう」

『ソナナコト言つて良いノカナア〜ダ〜グ〜ラ〜ス?』

そんな中でホワイトとフォーチュンがみんなに冷静な気持ちでいるように促す。

「くそお！こんなところにいる場合じゃ……」

「こんなもん！ボトルがあれば！」

龍牙は隣で何度もタツクルしながら檻を破ろうとしており、和也も何度も檻を蹴っていた。

「そんな事してもダメですよ……」

そもそも僕達の変身アイテム……みんなと一緒に取られたんですよ……」

だが幻冬の言う通り、プリキユアでも出れない檻を生身で破れるはずがなく。その上この檻へ捕らえられる前に気を失っていた際、トラウーマによって龍牙達のビルドドライバーにスクラツシユドライバー、更にはフルボトルまで全て没収されてしまった。

「だいたいかずやん！何ですぐに捕まったんだよ！」

『ソウダソウダ〜！』

「俺か？俺のせいなのかよ！お前まで変身出来ないようにされて、何も出来なかったじゃねえか！」

『この役立たズ〜！』

「やめてください！こんな所で！」

『クローズウ！グリスウ！ヤメルオ!!』

「だあああうるせえええ！お前は俺たちの手の届かねえトコで煽ってんじやねえよ!!」

龍牙と和也の喧嘩を止めようと幻冬が仲裁しようとするも、トラウーマに捕まったプリキュアと仮面ライダーを見に来た麻袋の人形が野球観戦のコスチュームを着たままフオームフィンガー片手に煽っていた為、龍牙らの怒りは更に強くなっていた。

「……ねえ、貴方。晴夜達が今どうなっているか知らない？」

『鼻でスパゲティ食ったら教えてヤルヨ。マア、ソモソモ此処にスパゲティなんて無いけどナア！キャキャキャ！』

「……無駄よサンシャイン。あいつに何を聞いても、こんなふざけた返答しかして来ないわ」

ダメ元でサンシャインが晴夜達に着いて質問するが、ムーンライトの言う通り麻袋の人形に声を掛けても煽るだけしかして来ない為、他の者は彼に質問する事とづくに諦めていた。

『トラウーマです。みなさん、尋問の時間です』

すると檻の外に設置された放送機からトラウーマの声が聞こえ、尋問を始めると言う。

「無駄だよ！私達は絶対泣いたりなんかしない！」

『威勢がいいですね、ブラックさん。』

私は今、取り込み中ですので……私の人形が御相手をします」

ブラックの叫びを聞いていたトラウーマは今、パッドを持ってモフルン達を捜し求めていて忙しい為、彼本人の代わりに牢屋からトラウーマの形をしたマリオネットが糸に吊るされて降りて来る。

「おい！俺達のドライバー返せ！」

トラウーマが声だけとは言え現れたのを見た龍牙は、彼のマリオネットに向かってドライバーを返せと叫ぶ。

『残念ながら、あなた達のドライバーはこちらで預らせて貰います。』

特にあなたのドラゴンボトルは……』

「何だと！しかも、俺のボトルを！」

しかし、ドライバーに加えて自分の分身のボトルとも呼べるドラゴンボトルまでも返さないと言われ、龍牙は檻の鉄棒を強く握りしめる。

『それでは……』

まず最初の尋問は、感動的な人形劇作戦から始まった。

『ママーーーーー！』

『ウマキチ……やっと会えた』

内容は離れ離れの親子が会おう、よくある定番のお話だった。

「すず(ず)ちゃんーく良いお話…」

「でも、泣いちゃダメよ…!」

『オロオオオーン!よがっだネエー!!』

定番でも感動の再会には涙が潤うも、それでもなんとか耐え凌ぐプリンセスやダイヤモンド達。ちなみにプリキュア達と一緒に人形劇を見ていた麻袋の人形も、目からムカデや毛虫を涙を流す様に動かしながら感動していた。ついでにそれを見たマーチは絶叫し掛けていた。

涙を流さない事を確認すると今度は玉ねぎを用意し、包丁を持った人形が現れた。

『うわー!?!』

そのまま人形は微塵切りにした玉ねぎをプリキュア達に浴びせていく。

「た、玉ねぎが」

「こつちに飛んでくる〜」

「あかん!玉ねぎはアカンって!」

「野菜を粗末にすんな!」

ソードやジョーカーサニーが微塵切りにした玉葱を浴び悶え、野菜農家である和也は食べ物を粗末にする相手に怒りを抱いていた。

『ア、ソレじゃア。微塵切りにしたタマネギは此方ガ美味しくイタダキマーす』

『えっ』

そう言つて麻袋の人形は口から無数の毒虫を出すと、プリキュア達の方へ飛んで行つた玉葱を食べに行つた。大量の毒虫にプリキュア達は阿鼻叫喚しながら玉葱の破片を急いで払い落とし、足元で玉葱を食べる蜘蛛を刮目したマーチは氣絶した。

これでも泣かないのならと、今度は七輪で秋刀魚を焼いた際に出た煙を浴びせ始める。

「こほっ！こほっ！……煙で涙を出そうという作戦ですね」

「煙い〜〜」

「うう〜〜こりゃあ、たまらん……」

幻冬の言う通りトラウーマは七輪から発せられる煙で涙を流させようとしますが、ドリームやプリンセスを始めとした彼女達も絶対に泣かないと頑なに決意する。

そしてトラウーマは痺れを切らし、最後の切り札を出した。

『僕、スカンク』

「あ、あれって……もしかして……」

「あれは！確かスカンクといつて——」

パッションの口から白と黒の動物の名を聞いたみんなは、ぞつと青ざめた表情を浮かべる。ついでに麻袋の人形も表情を固める。

「ま、まさか……」

ホワイトの懸念通り、そのスカンクは尻尾をおっ立てて力みだす。麻袋の人形は真っ先に逃げ出した。何しに來たんだこいつ。

『それだけはやめてー！ー！ー！ー！ー！ー！?』

『さあ!この匂いに耐えられますかね!!ふひひひ♪』

『うわわわわわわわわわ!!』

スカンクは尻尾を立てると、龍牙達ライダー組とプリキュア達に向けて狙いを定める。

「うわっ!うわっ!やめ!やめ!やめ!」

『うわああああああああああああ!!』

ブラック達はやめるように叫ぶがしかし、スカンクが全員の言葉を耳にすることなく、スカンクのケツから強烈なガスが噴出されるのであった。

『うう~~~~~……』

あまりにも強烈なスカンクのガスに、みんなは目に渦巻きやバツテンを浮かべたり、白目になって臭い匂いに鼻をつまんでいた。

「みんな!絶対に涙を出しちゃダメよ!」

「さもないと、私達の涙で何か恐ろしい事に使われてしまう!」

「助けが来るまで……頑張るっしゅーーーーー!!」
『うん!!』

「晴夜!早く何とかしてくれー!」

トラウーマに酷い目に遭わされたみんなにホワイトとブラック、そしてマリンが啖呵を切るも、牢の外でまだ無事な仲間が早くここへ来て助けてくれる事を、龍牙達を加えたプリキュア達は願うしか無かった。



外で無事な仲間達は、ソルシエールが生み出したコピーと戦い続けていた。

洋館のある空間では晴夜、メロディ、プロツサムの三人がプロトジコチューを相手している間に、エターナルにミラクル、ピーチ、ハッピーの三人が応戦している。

「やああああっ!」

両サイドから同時に仕掛けるミラクルとハッピーの二人。

だがエターナルは攻撃を片手で受け止めると、手から放つ黒い波動で二人を吹き飛ばした。壁に激突しながらもめげずに再び突進するミラクルに、エターナルはそれを待っていたと言わんばかりに彼女に向かって黒い波動を撃ち出す。

「ミラクル!」

『火遁の術! 火炎切り!』

晴夜は火炎切りでプロトジコチューの腕を弾くと、ラビットボトルを振りながらミラクルとハッピーを庇うように彼女の前に飛び込む。

「ぐうー！」

腕を振りかぶったエターナルの攻撃を食い止めた晴夜、しかし変身していない今の晴夜では長くは持たない。

「晴夜君!!」

「やめてえええっ!」

ミラクルとハッピー、晴夜を助けるべく横サイドから攻撃するピーチだが、その攻撃さえも受け止めるエターナル。しかしビルドはその隙を見てホークガトリンガーを構えると、それを見たエターナルは離れた。

「はあ、はあ……」

「晴夜!大丈夫!」

「ああ……ありがとう」

何とか耐え凌いだ晴夜だったが、やはり生身の戦闘ではプロトジコチューのような敵にはかなりきつい。それでもまだ戦うと決意する。

一方のマジカルとハート、プリンセスプリキュアのいる森でも戦闘が開始された。

『ぬおおおつー!』

トウインクル、マーメイド、スカーレットがピエーロと戦っている近くで、フローラ、マジカル、ハートはゴーヤーンと戦っていた。

「ツー」

するとフローラ達と戦っていたゴーヤーンは、近くにあつた岩をバッドのように振り回し始めた。

振り抜かれた棍棒の標的はマジカルだった。

「危ない!」

咄嗟にマジカルを庇うべく、ハートが彼女の前へ飛び込んだ。

「ぐうつー!」

「きやああああつー!」

何とかハートが腕を盾にして受け止めようとするだが、空中で踏ん張りが聞かないことに加え、圧倒的質量を前に力を抑えきれず、マジカルと共に吹き飛ばされる。

その時、上空から新しい別の人影が現れると、寸前の所でハートとマジカルを支えた。「間に合つてよかった」

そう言つてマジカルとハートを安全な場所に一時避難させた、若草色が入つた白い服装を着てサイドポニーに淡いピンク色のリボンを身に付けた少女の背中を見たフロー

ラとハートは、笑みを浮かべながら少女の登場を喜んだ。

「思いよ届け!キュアエコー!」

今此処にいる彼女こそ、かつて普通の少女だった人物がパートナー妖精と変身アイテムの力を借りずに、ただ純粋な想いの力だけで覚醒した特殊なプリキュア、キュアエコーである。

「ハート、大丈夫?!」

「うん!大丈夫!ちよつと腕が痺れちゃっただけだから」

「さあ、立って。あなたも一緒に」

ハートがエコーに支えられながら起き上がると、エコーは仰向けに倒れているマジカルを促す。

「……無理……もう、無理」

「…マジカル」

だがマジカルは、ここまで導いてくれたプリキュアと仮面ライダーが捕まった事で、半ば絶望感に陥ってしまった。

そんな彼女の元にハートが腕を抑えて歩み寄る。

エターナルの猛攻の前に押されていたミラクルは、繰り出されるラツシュを防ぐので

精一杯。何とかジャンプして距離を取るが、回り込まれたエターナルのキックで上空へ打ち上げられそうとなる。

「ミラクル！」

そしてエターナルがミラクルを追撃すべく、両手を彼女に向かって突き出したのを目撃した晴夜が前に出ると、ドリルクラツシャーと四コマ忍法刀を盾にしてミラクルを守ろうとする。

「ぐあああああつー！」

間一髪ミラクルを守る事が出来たものの、エターナルの猛攻の前に晴夜の持つ二本の武器が砕け散り、地面の上を何度もバウンドさせながら吹き飛ばされてしまう。

「げほお……ミ、ミラクル！」

受け身を取ってダメージを最小限に抑えて起き上がった晴夜は、倒れているミラクルに歩み寄って怪我はないかを確認した。

「……敵うわけ、ない、あんな怪物に」

取り敢えず大した怪我は無いように見えたが、ミラクルの目には輝きが失われ。見事な戦いぶりを見せるプリキュア達や生身でも必死に戦う晴夜に比べて見劣りする自分の姿に不甲斐なさを感じ、更には強敵達の猛攻を前に何故こんな目に遭わなくてはいけないのかと心が折れそうになり、その心を絶望で濡らしながら項垂れていた。

「そんなの——」

だがハート達の前で己の非力さに弱音を吐きながら戦意を喪失させたマジカルと、
「無理——」

今この場で膝をついたミラクルの心が折れそうになっている要因は、身も心もボロボロになったから。という事実だけでは無かった。

隣にパートナーの居ない二人の頭に蘇るは、今朝彼女達が決めていた『二人で立派なプリキユアになる』という目標。

だが今、ミラクルとマジカルは遠く離れている。

互いに心を支える柱を失った二人は、そんな目標を達成させる事など無理だと、こんな相手に勝てつこないと後ろ向きな考えが浸透し始めていた。

「無理じゃないよ！」

しかしミラクルとマジカルと同じ様に離れている筈の晴夜とハートの声が、絶望によつて崩れ始めようとしていた心を支える様に、同時に重なった。

「俺にも無理だと思ったことや、もう戦いたくないって思ったことがあった！」

けど、俺は……」

「あたし達は……絶対諦めない！」

たとえ、仲間が近くにいなくても……あたし達は繋がっている！」

晴夜とハートはあプロトジコチューとエボルトとの戦いの戦いを境に、いつも離れていることが多かった。

それでも二人は互いに離れていても、いつでも思いは繋がっていると信じている。

「晴夜君は、何で戦うの……」

「何で……」

同時に彼らの言葉は、変身することも出来ないのに何で晴夜は戦うのかと、何でそこまでボロボロになってもハートは戦うのかと、ミラクルとマジカルはそれぞれの疑問を抱いていた。

「諦めないで最後まで戦うの！きつと晴夜も！だつて……」

「俺は……俺達には、戦う理由がある……」

だが彼女ら彼らの戦う理由などたった一つ、たったひとつの「言葉」だけで十分であつた。

「ラブ&ピース。それだけの為に戦っているから！」

その言葉が物凄く脆く、いかに弱い言葉だとしても、そんな世界を導いて守る為にプリキュアと仮面ライダーは存在している。晴夜とハートは強くそう語つた。

「そうです！それが、晴夜君の覚悟なんです！」

「その思いは、私達も同じ！」

「それがいつも、私達を助けてくれた」

「晴夜も、私達も……その思いを胸に、何度も立ち上がってきた」

此処に居るプロツサムやハツピー、メロディ、ピーチの四人も、彼がどんな逆境にも辛い言葉をぶつけられ、心が折れそうになっても、その度に立ち上がる事を知っている。

そしてまた、プリキュア達も同じ様に何度辛いことがあっても立ち上がってきた。

「……だから、俺は諦めない!」

四人のプリキュアが並んだのを見てた晴夜はビルドドライバーを装着し、顔から笑顔を溢れさせる。

「さあ、実験を始めようか?」

そう言つて懐からラビットとタンクのボトルを取り出し数回振り始めると、後ろからいくつかの数式や化学式が現れ、キャップを回したボトルをドライバーに装填した。

『ラビット!タンク!ベストマッチ!』

ドライバーに兎と戦車のシルエットが浮かび上がり、レバーを回すと共に前後からアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「変身!」

その音声と共に晴夜は構えた後、両手を一度交差させてから広げると、アーマーが中央の晴夜に重なるように装着される。

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイー！』

煙が晴れるとそこには、赤い目から伸びたピンと兎の耳のようなアンテナと青い目から戦車の大砲のようなアンテナが伸びた、赤と青のアーマーを纏った姿が現れた。

「勝利の法則は、決まった！」

多くの人の明日を創り、未来へと繋ぐ仮面ライダー・仮面ライダービルドへと変身した晴夜は、右のアンテナをなぞり上げながら右手を広げて決め台詞を言い放った。

「へ、変身……出来たの」

ミラクルはトラウーマの秘術により変身出来なくされていた晴夜が、再び仮面ライダーへの変身を遂げた光景に目を大きくする。

「なんだと……」

『……………コリヤてえへんだ。アノ方に伝えナイト……………』

この光景を杖を介して見ていたソルシエールも、影で隠れて見ていた麻袋の人形も驚く。

「晴夜君がビルドに……………」

「変身出来た！」

「でも、どうして変身出来るようになったの?」

変身完了したビルドがプロトジコチューとエターナルを見つめる姿を目にしたピーチとハッピーは、晴夜がビルドへと変身した事に喜びを感じていたが、メロディは何故唐突に晴夜がビルドに変身出来たのか分からなかった。

「詳しい説明は省くけど、さっきまでの俺はビルドに変身するのに必要な数値であるハザールレベルが足りなかったんだ。

けれど俺は、これまで戦いの中で幾度もなくハザードレベルを上げてきた。

ミラクル。これが俗に言う、諦めない強い思いつて奴さ」

確かに晴夜のハザードレベルは3以下にされてしまっていた。

だがこれまで生身でも尚戦い続けていた影響で、ハザードレベルの上昇条件である感情が高まり。そのおかげでハザードレベルがライダーシステムの必要条件値に達し、再び仮面ライダービルドへの変身を可能にしたのだ。

「さてと、説明はこれくらいにして。みんな、後は俺に任せて。はああ!」

ビルドがエターナルとプロトジコチューに向かって走り出し、対する二体もビルドに攻撃を仕掛ける為に拳を振りかぶった。

「はあ!」

ビルドはラビットの脚力を活かし高くジャンプして躲し、地面へと降りると右足をエ

ターナルに繰り出す。

「ぐううー！」

繰り出したタンクのローラが回り腹部にダメージを与え吹き飛ばすと、ビルドの背後にプロトジコチューが現れた。

『ゴリラ！ダイヤモンド！ベストマッチ！』

一瞬驚くも、直ぐにゴリラボトルとダイヤモンドボトルをドライバーと装填。レバーを回して前後から茶色と水色のアーマーを生成した。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!!?」

二つのアーマーが装着されると、体から蒸気を出しながら音声 flowed。

『輝きのデストロイヤー！ ゴリラモンド！ イエーイ！』

左側の複眼と右腕はゴリラがモチーフ、右側の複眼と左手はダイヤモンドがモチーフの姿であるゴリラモンドフォームへと変わる。

「くうー！」

ビルドはゴリラの腕を模したパワーナックル『サドンデストロイヤー』を前に出してプロトジコチューの攻撃を耐えると、左拳の『BLDプリズムグローブ』にある機能を使ってプロトジコチューの前にダイヤモンドを出現させる。

「はあああああー!」

右手のサドンデストロイヤーで振り払ってダイヤモンドを砕くと、飛び散ったダイヤモンドをプロトジコチューに直撃させて吹き飛ばした。

「晴夜君……」

そんなビルドの戦いを見たミラクルは、あれだけ傷つきながら変身すら出来なかったはずなのに、諦めないで挑み続けて再変身を果たしたという事実を受け取り、折れかけていた心の柱が元の形状に戻っていくのを感じた。

「ミラクル。何度だって躓いてもいいんだよ」

最初に会った時に立派なプリキュアになると言ったミラクル達の言葉を、ビルドは自分なりの答えで語る。

「どんなに偉い人に会って学んだって、すぐ立派になれないよ。立派なった人も何度も躓いて、それを乗り越えて、人はその度に強くなっていくんだと俺は思うよ」

彼も又、何度も躓いて今の自分を見つけた。

彼が語った言葉は、若くして仮面ライダーとして戦い続け、その中で負けたり苦しんだり絶望すること多くあったが、その度に仲間が彼を支え、ここまで来れた晴夜だからこそ言える言葉だった。

マジカル達のいる場所では、マーメイド達がゴーヤーンとピエロと戦っており、ハートとフローラとエコーの三人がマジカルに駆け寄る。

「でも、私……足を引つ張つてばかり……」

「なんだって最初から出来るわけじゃないよ」

自分のせいでみんなに迷惑をかけている思い詰めるマジカルに、ハートは彼女と同じ目線で話しかける。

「えっ……？」

「どんな事も一つずつ覚えて、前に進む事が大事なんだと思うよ」

「最初から何でも完璧にこなせる人間なんてなかなかいない。最初は失敗するのが当然かもしれない。」

でも、ただ失敗するだけじゃダメ。次に自分の何が足りないのかを理解し、自分の力に変える必要がある。

「だから、今は自分に出来る事をしよう」

「だからこそハートは、今自分に出来る範囲内で精一杯頑張る事が大事だと語る。」

「私に出来ること……」

「約束したでしょ。一緒にお花見に行こうって」

「きつと来るよ。ミラクルも」

「晴夜と一緒にね」

ハートの話を聞いてマジカルの折れかけた心に変化が訪れたのと同時に、少しずつ目の輝きを取り返し始めたマジカルへと言い放たれたフローラとエコーの言葉に、最初に交わした約束を守る事こそが今自分の出来る事であると理解した。

そしてハートは、彼が必ずミラクルと一緒に来てくれるだろうと信じていた。

場所が変わってビルドとミラクルの方は：

「ミラクル！」

ルルンがミラクルの腕を掴み、涙目になりながら叫ぶ。

「ミラクル達が頑張らないで、誰がみんなを助けるルルン！」

ルルンの涙を漏らしながら放つ言葉に、ミラクルは立ち上がる。

「うん！こんな所で立ち止まってるわけには、いかないんだ！」

「私には、助けたい友達が居る！」

同じように、ハート達の励ましによって徐々に立ち直っていったマジカルも、その足でしっかりと地を踏み締める。

「みんなと行くんだ！」

「みんなとお花見に！」

「だから!!」

今、絶望を乗り越えた二人の少女が立ち上がる。

「私たちは戦う！」

ミラクルとマジカルの振り切った絶望は再び闘志へと変わり、それを乗り越えた上で手にした希望をその瞳に宿した。

「晴夜君！」

「ああ！これで勝利の法則はできた！」

戦意を取り返したミラクルを目にしたビルドは一本のボトル缶を取り出し、数回振って缶を開けるとそれをビルドドライバーに差し込む。

『ラビットタンクスパークリング！』

ドライバーのレバーを回して前後からビルドマークのスナップライドビルダーが作

られると、ビルダーから新しいアーマーが形成された。

『Are you ready?』

「ビルドアツプ!」

ビルドの叫びと共にアーマーが彼の体に装着されると、アーマーから無数の泡が弾けた。

『シユワツと弾ける!ラビットタンクスパークリング!イエイ!イエーイ!』

そしてビルドは通常のラビットタンクフォームに白が加わってトリコロールになったギザギザとした装甲を持つ、パンドラボックスの残留成分を利用して作り出した『ラビットタンクスパークリング』を使って変身した姿、ラビットタンクスパークリングフォームへとフォームチェンジした。

「うおおおおお!」

「はあ!」

ビルドがスパークリングへとチェンジした頃、マジカルとハート達はゴーヤーンへの反撃を開始すべく、エコーがゴーヤーンのパンチを受け止めると彼の拳を押し返して体勢を崩したた。

「はああ!」

「タアアア！」

次にハートの右足から繰り出されたドロップキックが決まり、マジカルが一瞬ふらついてガードを崩したゴーヤーンにアッパーを咬まして上空へと吹き飛ばす。

「ハート！」

「任せて！」

マジカルが宙に浮いて身動きが取れないゴーヤーンにトドメを刺すように言うと、既にハートがラブハートアローを構えて準備していた。

「プリキュア！ハートシューター！」

ラブハートアローから放たれた一撃でゴーヤーンを倒すと、残るピエロがマジカルを狙う。だがマジカルは冷静に後ろへ下がると、後ろにある木の棒を掴んで鉄棒の大車輪の如く何度も回転する。

「はあああああ！」

マジカルが回転で遠心力を付けてピエロの足を掴み投げ飛ばした。

「どうやらもう大丈夫だね」

「ええ!!」

もう大丈夫だと返したマジカルにハートは笑顔を浮かべ、トウインクルに「さつきまでは別人じゃん」と言わしめるほどの力強い反撃を見せたマジカルの心の変化に応える

べく、プリンセスプリキュアはドールハウスの様なアイテム『プリンセスパレス』と『ロイヤルドレスアツプキー』と呼ばれる特殊なドレスアツプキーを取り出した。

「ドレスアツプロイヤル!!」

そのままロイヤルドレスアツプキーを挿し込んだプリンセスパレスの力によって、ロイヤルドレスに変化したプリンセスプリキュア。

「響け、遙か彼方へ!!プリキュア!グランプランタン!」

「きげんよう」

プリンセスプリキュアの合体技『プリキュア・グラン・プランタン』を受けたピエーロは、有無を言わず浄化されていた。

「やったー!」

「マジカル!」

ピエーロが浄化されたのを確信したマジカルは、喜びが冷めぬうちにハートが差し出して手にハイタッチをする。

三度場所が変わりビルドとミラクル達の方は、ミラクル達が連携攻撃で相手を攪乱していた。

「プリキュア!ダブルパンチ!」

ミラクルとピーチによるダブルパンチが炸裂した。

「プロサツム！メロディ！ハツピー！」

「「はい（ええ・うん）！」」

プロツサムとメロディとハツピーの三人が連続パンチを叩き込み、エターナルの動きを抑えたのを見ていたビルドはタイミングを計っていた。

「今だ！」

三人がエターナルから離れたのと同時に、ビルドは左足から『ラビットバブル』を噴出しながらエネルギーを溜める。そのまま一瞬のスピードでタンクの『インパクトバブル』をまとった右足がエターナルに繰り出してバランスを崩した。

「はあ！はああ！」

さらに左足に力を入れてスピードを上げ、プロτζコチューをスパークリングの圧倒的なスピードで翻弄しながら腕にあるRスパークリングブレードの大型エネルギー斬撃を繰り出し、二度目の斬撃で吹き飛ばした。

「やった！」

「晴夜君！凄いです！」

ピーチとプロツサムがビルドのスパークリングで一気に形成逆転となったと喜ぶも、すぐにプロτζコチューがビルドの前に現れると反撃を仕掛ける。

『海賊ハッシャー!』

対するビルドはドライバーから海賊ハッシャーを呼び出して手に持ち、攻撃を受け止めて振り払うと、斬撃攻撃を繰り出してプロトジコチューにダメージを与えながらトリガーを引つ張る。

『各駅電車!急行電車!快速電車!海賊電車……発車!』

海賊ハッシャーから放たれたエネルギー弾によりプロトジコチューを吹き飛ばすと、今度はエターナルに目を向けながらドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

そのまま高く飛躍してキックの態勢に入ると、エターナルの周囲にワームホールの様な凶形を出現させてその中に拘束した。

『スパークリングフィニッシュ!』

「ハアアアアアアアアア!!」

ビルドが右足に無数の泡を纏いながら、エターナルに向けてスパークリングフィニッシュを放つ。

「ぬうわあああああー!」

スパークリングフィニッシュによって放たれたライダーキックにより、エターナルは建物へ叩きつけられた。

「やった！」

「イエーイ！」

何とかエターナルとプロトジコチューを行動不能に出来た事を喜ぶミラクルとメロディだったが、プロツサムは戦闘を終えて息を切らすビルドに寄り添って心配する。

「はあ、はあ……」

「晴夜君。大丈夫ですか？」

「……レベルを徐々に上げてきたから……少し休んだら大丈夫」

ハザードレベルを生身で戦いながら上げて変身出来るまでのレベルに戻したとはいえ、ビルドはそこまで行く為に体力をかなり減らした。

「それよりもここを出て、まずは捕まったみんなを……」

『ルララララ〜♪』

「?……また、この歌……」

それでも捕らえられた仲間の救出を行おうとしたビルドの耳に、三度目のあの歌が聴こえる。晴夜と彼女達が歌声に耳を傾けていると、再び何かの落下音と共に新たな敵が彼女達の前に現れた。

ミラクル達の前には、ラブリー達の戦ったレッドとブラック達が戦ったジャアクキング。

マジカル達の前には、ブロッサムたちが戦ったデューンにピーチ達が戦ったメビウス。

ソルシエールから生み出された四体のコピーが現れた。

「くう……まだやるのか」

新たな敵が現れ、ビルドはまだ体力が戻っていないがやるしかないと思い、ハザードトリガーとフルフルラビットタンクボトルを取り出した。

「晴夜とミラクルは先に行って!」

「えっ!」

「二人はあの歌を追ってください!ここは私達が食い止めます!」

「けど、みんなの体力だって……」

だがピーチ、ブロッサム、メロディ、ハッピーの四人がビルドとピーチの前に出て、二人に先に行つてと言う。

だがそれに異論を唱えるはビルド。確かに自分の体力は満足に戦える程残っているとは言えないが、それは四人だって同じ。そんな状態で戦うなど、ビルドからすればあまりにも無謀に思えた。

だが四人はそんなの関係ないと言わんばかりに、四体いるコピー態の敵に立ち向かうとしていた。

「そんな問題ないよ。あの時のあんたが、私達を助けてくれた時に比べたらね」
「私達は、晴夜君に助けてばかりじゃないよ」

フアントムにより固められた時、マダムに眠らされた時、ブラッド帝国に操られ襲つてしまった時も、ビルドは諦めずみんなを救つてくれた。

だけどプリキユア達は、仮面ライダーに助けられればかりの弱者ではない。

事実。此処ではない世界……仮面^{本*}面^のライ^のダー^のが^リ存在^{キユア}しない^の世界^界では、フアントムとの戦いも、マダムを通して起こった戦いも、彼女達のみで解決出来たし。仮面ライダーが居なくとも彼女達が力を合わせさえすれば、どんな敵でも立ち向かえる。少なくとも、彼女達を知る者達はそう信じているであろう。

「わかった……ミラクル」

四人の気持ちを組み取ってドライバーからボトルを外し変身解除すると、晴夜はルルンを抱きながらミラクルに歌の聴こえる所へと行くように促す。

「あの……」

「大丈夫です！後でいきましよう！お花見に！」

「……はい！」

晴夜とミラクルは二体の敵をハッピー達に任せ、歌の聴こえる方へと向かう。

何度も場所が変わり、ハートとマジカルのいる方でも新手的敵に苛まれていた。

「マジカルは先に行つて。歌の聴こえるほうへ」

「そんな……」

エコーが先に行く様に伝えるが、一人で行くなんて出来ないと言おうとするマジカル。

「大丈夫。あの歌声は貴方達を呼んでいるようだった」

「マジカル」

「また後で会おう！約束！」

「……ええ！」

だがエコーとフローラとハートの言葉を聞いたマジカルは自分がやるべき事を理解すると、みんなと必ずまたあとで会おうと誓い、歌の聴こえる方へと向かった。

「……手つ取り早くいきましよう」

だがモフルン達を追いかけていたトラウーマがパットでその様子を確認すると丁度、晴夜とミラクルとマジカルの三人が戦線から離脱したのを見て、パットを操作して四体のコピーにある機能を働かせた。

「何ですか？」

一方現場では、ブロッサムが彼女達の前に現れた強敵達の瞳が赤くなったのを見て、何か起こるのでないかと予測すると、その予測通りにレッドとジャアキングが同時に爆発した。

『シャチ！ウナギ！タコ！シャ・シャ・シャウター！シャ・シャ・シャウター！』

「はああー！」

だが彼女達の前に誰かが現れて前に立つと、何かを回して爆風をかき消した。

「てめえら！早くしろ！」

一体誰が現れた。という疑問を覚える前に現れた金髪の男性に早く離れろと言われ、プリキュア四人は爆心地から離れた場所まで移動する。

「アंक、ありがとう！……大丈夫？」

アंकと呼ばれた金髪の男に案内されたハッピー達四人の前に、手に持った鞭のような武器を回して盾を作り、彼女達を爆発から防いだ人物が現れた。

「仮面ライダー？」

「オーズ。仮面ライダーオーズ！よろしく！」

それは黒と青のアーマーを纏い、腕には二本の電気鞭『ウナギウィップ』を持ち、脚部にはタコの吸盤がついた『シャウタコンボ』に変身した仮面ライダーオーズが、アジ・ダハーカが召喚したグリードのコピーを撃破し、この場に登場したのだった。

「晴夜君とミラクルは？」

「大丈夫。二人なら先に行きました」

ハッピーが二人は無事だと伝え、それを聞いたオーズは一安心した。

ハッピー達の前にオーズが現れたの頃、ハートとフローラ達の所ではデューンにメビウスがエコー達を巻き込んで爆発していた。

『シールドオン！』

「させるねえよ！」

だが逃げられないと思ったハートとエコーとフローラ達の前には、ゾディアーツを撃破した後にロケットモジュールでここまで飛んできた仮面ライダーフォーゼが、スペースシャトル型の巨大なシールドを左腕に召喚した状態で現れた。

「弦太郎さん！」

「よう！遅れてすまねえ」

爆発直前にシールドのアストロスイッチでシールドモジュールを出し、みんなを守ったフォーゼはゾディアーツとの戦後である事を感じさせぬ程の余裕を見せていた。

「ふう……ここまで逃げれば大丈夫モフ」

一方で、トラウーマから逃げ続けていたモフルン達はどこかの部屋へと入り、トラウーマから何とか逃げ切れたと思ひ安堵した。

「……………ん？」

『……………ギ？』

だが三匹が入ったそこは、ソルシエールの部屋であった。

「回れ右ロマー！」

モフルン達は逃げようとしたが……

「逃がしませんよ」

「「わああああああああああ!!」」

逃げようとした道の前にはトラウーマが立っており、三匹は彼によつて逃げ道を阻まれてしまった。

同じ頃、晴夜とミラクルは歌の聞こえる方へと向かう。しかし、その途中でまた歌が聞こえなくなつてしまった。

「歌が聞こえなくなつた……」

「じゃあブラック達には、もう会えないルル？」

歌が聞こえなくなつたと呟くミラクルと泣きそうなルルを見て、晴夜は「もう少し

この辺りを探そう」とルルンが泣くのを堪えらせる。

「ルラララ……ルルラ……」

「ミラクル」

すると泣き出しそうなルルンを落ち着けるためにか、キュアミラクルが歌い始めた。

「ラララララー♪」

「……その歌、落ち着くルル」

「そうだな」

ミラクルが歌い続ける歌は、遠くにいたマジカルの耳にも届いていた。

「……ミラクル?」

そしてミラクルの歌と協調するが如く、同じように歌いだすマジカル。

「ルララララララトララララララリラララー♪」

二人が互いの存在を知らせるかの様に歌い続ける。

すると空から光が現れ、何かを感じた晴夜達はその光に飛び込んだ。

「やっと会えたね!もう離れない♪なんか、前よりキラキラしてるね!」

「さあ手をつなごう!想いはずっと!」

光に飛び込んだ先で宇宙のような空間に出たミラクルはマジカルと、マジカルはミラクルと満を持して邂逅していた。

遂に再会を果たしたミラクルとマジカルは、今の気持ちを歌で伝え合いながら手を繋ぐ。

「無事でよかった」

「当たり前でしょ！楽勝よ！」

ミラクルとマジカルの二人が再会に喜んでいると、ルルンを抱いていた晴夜は光り輝く鏡を見つけ、その光り輝く鏡に三人は飛び込む。

そして鏡が割れるとその中からミラクルとマジカルと晴夜が飛び出し、その先には部屋の主であるソルシエールと、その部屋の隅でトラウーマに追い詰められて居たモフルンとアロマとパフが怯えていた。

「魔女ソルシエール！」

「プリキュアのみんなを返してもらおうわ！」

「ミラクル！マジカル！」

マジカルとミラクルが現れた事で安心したモフルン達が、直ぐに三人の元に駆け寄る。

「モフルン！」

「よかった！無事だったんだね！」

マジカルとミラクルがモフルンとの再会に喜ぶと、晴夜はソルシエールとトラウー

マ、ついでに何故か一緒に居る麻袋の人形に視線を移す。

「あんたが魔女ソルシエールか」

「そう言うお前が、桐ヶ谷晴夜……仮面ライダービルド」

「変身出来ない君が、良くここまで来れましたね」

『……………アノ、トラウーマ様。アイツ実は…………』

「後にしろ。今お前の話を聞く気は無い」

ビルドドライバーを装着しているが、トラウーマはまだ晴夜が自分の秘術が効いていると思っているようだ。麻袋の人形もそれを指摘しようとしたが、当のトラウーマは彼の話の遮ってしまっていた。

「言っておくが、もう助けは来ない…………」

その言葉を聞き、ミラクルとマジカルもソルシエールの方に視線を向ける。

「お前達以外のプリキュアと仮面ライダーは、既に私が捕らえた」

「ソルシエール。みんなを解放して」

「ならば、涙を渡せ」

「変身出来ない君なら、ここは言う通りしたほうがよろしいですよ」

『……………イヤ、ダカラ。アイツもう既二…………』

ソルシエールは捕まったみんなを解放したければ涙を渡せと言うが、晴夜は目的がわ

からないのに涙を渡すには不安があるため、誘いに乗るわけにはいかなかった。
「やるしかないか」

話し合いで解決したかったが、ソルシエールは力尽くでも奪う様子。そんな思いを胸に晴夜はルルンをアロマとパフに預けると、ハザードトリガーのスイッチを押した。

『マックス！ハザードオン！』

起動させたトリガーをドライバーにセットし、フルフルラビットタンクボトルを振ってフルフルインジケーターに赤いランプが出ると共にセレクトイングキャップを回した。

『ラビット！』

そのままボトルを半分に分けてドライバーに差し込み、ドライバーのレバーを回した。

『ラビット&ラビット！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！』

『Are you ready?』

すると巨大な金型『ハザードライドビルダー』とラビットラビットアーマーが出現し、ラビットのアーマーユニットが空中へ跳んでパージされた。

「変身！」

『オーバーフロー!紅のスピーディージャンパー!ラビットラビット!ヤベー!ハ
エー!』

変身の叫びを放つと同時にハザードライドビルダーが晴夜の体と重なり、金型が離れてハザードフォームへと変身しビルドはパージされたラビットのユニットを飛びながら装着した。

「何ですと!変身した!」

『……ダカラ恥カク前に、教えてアゲヨウと思つタノニ』

「うわあ〜!」

「凄いわね。その変身」

「ラビットラビットフォームな。このフォームはみんなで作り上げたものなんだ」

マジカルラプリーパットを継承する試練の中でハザードトリガーを克服する為にみんなで編み出した姿『ラビットラビットフォーム』へと変身したビルドは、赤い装甲を輝かせながらミラクルとマジカルの真ん中に並び立つ。

「涙をもらうぞプリキュア。何としてでも!」

そう叫んでソルシエールが振り下ろした杖の先端にある黒い水晶が怪しく輝き、上方に割れた巨大なハートが現れて降りてきた。

ビルドは素早いスピードでハートのハサミ攻撃を回避したが、ミラクルとマジカルは

攻撃に巻き込まれてしまい、元のみらいとリコの姿になった。

「ミラクル！マジカル！はあっ！」

ソルシエールは液体エネルギーのハサミを生み出してビルドに向けて放つが、ビルドは足を伸ばしハサミをはじき返し、ソルシエールを止める為に前へと突っ込む。

「プリキュアでないお前に、用はない」

だがビルドにハサミを弾かれたのを見て、ソルシエールは杖から魔力で作った紫の電流を放つ。

「フルボトルバスター！」

それに対してビルドはフルボトルバスターを呼び出すとそれで電流を防ぎ、そのまま彼女が持っている杖に向かって叩き込もうとする。

「……ハア！」

しかし何処からともなく紫の斬撃が飛んできてビルドに直撃。

謎の攻撃を受けたビルドの前に現れたのは、オーズと共に出会った古のファントムである魔獣、アジ・ダハーカだった。

「アジ・ダハーカ……」

『アジ・ダハーカ様アア~~~~~！よくおアイデア下さいマシたあ~~~~!!』

ビルドはアジ・ダハーカに警戒心を侍らせながら、アジ・ダハーカの登場にテンシヨ

ンを高まらせている麻袋の人形を見て、彼奴こそがトラウーマから聞いた麻袋の人形を作ったと言う主人なのかと思っていた。

「オメェ、まじで変身してでねえか〜?」

「ヒヤツハアアア!これは面白くなりそうだなあ、クレイジーボーイ!」

「フン……………こいつから聞いた通り、変身能力を取り戻したか……………まあ良い。

仮面ライダービルド、とやらの力……………見させて貰おう」

自身の周りを飛んでいたスズメバチから視界を外して紫の双剣を構えたアジ・ダハカはビルドに狙いを定めると、彼に向けて三つの首から一斉に紫色のエネルギー弾を放った。

「ふう!」

ビルドは高く飛び上がり攻撃を躲すと、フルボトルバスターを振り上げアジ・ダハカに攻撃するが、アジ・ダハカも手に持った剣でフルボトルバスターを抑える。

「くう!……………みらい!リコ!こいつは俺が止めるから、ソルシエールは頼む!」

アジ・ダハカをビルドが抑えているうちに、みらいとリコにソルシエールを頼むと
言う。

「……………小僧が……………凶に乗るな……………!」

「!?!」

中首が再びエネルギー弾を放とうとしたのをビルドはすぐに察知し、右足を伸ばし地面を蹴りながら頭の上を飛び越え、アジ・ダハーカの背後へ回って着地した。

「なら、これならどうだ!」

フルフルボトルをドライバーから外し、数回振って青いランプが出た瞬間半分に割つてからもう一度ドライバーに差し込む。

『タンク&タンク!ビルドアップ!』

ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!』

レバーを回すのと同時に小型のタンクタンクアーマーが現れ、アジ・ダハーカの周囲を囲みながら攻撃する。

『Are you ready?オーバーフロー!』

「変身!」

攻撃を終えてユニットが宙に浮かぶとラビットラビットのアーマーがパージされ、タンクのユニットがビルドに装着される。

『鋼鉄のブルーウォーリア!タンクタンク!ヤベェイ!ツエーイ!』

全身が青色に染まった戦車の力を持ったフォーム、タンクタンクフォームへとフォームチェンジを完了した。

「はん!そんなもん!」

「ッー待てー!」

アジ・ダハーカの左首が中首の制止を聞かずパンチを繰り出す、ビルドは腕を出してその攻撃を防御した。すると、ビルドの腕部『ファイトマイトガントレット』にある戦車のローラー『ブルータンクローラー』が動き出す。

「くうー!」

履帯での装甲削りを披露された事でアジ・ダハーカの拳にダメージを与え、ビルドから離れた。

「モフルン!」

「もう一度変身よ!」

「も、モフー!」

「「キュアアップ・ラパパ! サファイア!」」

モフルンは二人の気持ちを汲み取って近づき、二人はモフルンの手を握り叫ぶと二人は青い光に包まれ、今度は青を基調とするギリシャ風の衣装を纏った『サファイアスタイル』と変身する。

「何の真似だ」

そしてソルシエールはまたハートを出してきた。しかし2人は一房を水色のリボンで編み込んだポニーテールとストールをひらめかせながら、海で泳ぐ様に飛び上がった

回避する。

「!?」

「飛べるのか!?!」

「はあ!」

「くっ…」

驚くソルシエールとトラウーマを前に放った2人のパンチは防がれたが、ソルシエールを少し後ろへと仰け反らせた。

「はあ!」

ソルシエールは再び割れたハート型のエネルギーを作るとそれを飛ばし、ミラクルとマジカルを捕らえ爆発させた。その一撃で、再び二人は変身解除まで追い込まれてしまった。

「二人共!?!」

「よそ見すんじゃないエエエ!」

「ちっ!」

二人がソルシエールに一方的にやられているのを見て、助けに行こうとするビルドだったが、こちらもアジ・ダハーカに手を焼いていた。

「終わりですね」

「……いや」

「キュアアップ・ラパパ!」

トラウーマが勝利を確信するも、ソルシエールは警戒心を解く事は無く。彼女の懸念通りみらいとリコは三度立ち上がり、基本フォームであるダイヤスタイルへと変身する。

「ほう?最初に拝見した時よりかは、何かが違う……」

「伝わったのよ」

「?!」

だが最初にプリキュア達を監視していた時に見た姿とは何かが違う事に気付いたトラウーマがそう呟くと、何かを語り出したマジカルを見てソルシエールは眉をひそめる。

「みんなの思いが伝わったの」

「そう」

「どんな時でも、希望を捨てないって!」

「だからわたしたちは……」

「絶対に諦めない!」

絶対に行こうと誓ったお花見の約束。

捕まったみんなを取り戻すという誓い。

どんな敵が現れても、諦めずに戦い続ける勇氣。

ここに来るまでに多くのプリキュアと二人の仮面ライダーに出会い、そして一緒に戦った事で、ミラクルとマジカルは多くのことを学び、二人の気持ちはより強くなっていた。

「よし……俺もー！」

それを見たビルドは仮面の下で笑顔を浮かべながら、二人の諦めない気持ちがより強くなったと感じると、アジ・ダハーカの反撃を開始する。

『マグネットー！』

まずはフルボトルバスターにマグネットボトルを装填し、アジ・ダハーカへ向けて放った。

「ぐうお！何、だと……！」

「う、動けねえ……！」

『ラビットー！ラビット&ラビットー！』

銃弾を食らうとマグネットボトルの持つ磁力の力で体がくっ付き、アジ・ダハーカは動きを止めた。

動けない所で再びラビットラビットへとフォームチェンジし、ドライバーのレバーを

回す。

『ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!』

『Ready go!ハザードファイニッシュ!』

ビルドが高くジャンプしてキツクの態勢に入ると、彼の足が脚部の『ジャンプチャンプレガース』に搭載された次元伸縮バネ『デイメンションスプリンガー』の影響で伸びた。

「「伸びたー!」」

『何デ伸びタ!?』

『ラビットラビットファイニッシュ!』

伸びた足が縮んで、その勢いでアジ・ダハーカを吹き飛ばす程の勢いのライダーキツクを放ち、この部屋の外へ吹っ飛ばした。

『ウビヤアアアアアア!?アジ・ダハーカ様アアアアアア!!』

「馬鹿な!今の彼に、あれほどの力は……」

部屋の外へぶっ飛んでいった主人を見た麻袋の人形の叫びが響き渡る中。トラウーマはビルドの力は今大きく抑えられて本来の力は出てない筈なのに、アジ・ダハーカを押ししていたという事実には酷く驚いていた。

「見積もりが甘かったな。俺達仮面ライダーも諦めない気持ちで戦い続ける限り、自分

でも思いがけない程に力が溢れ出るんだ」

だが強敵と戦い続けて来たからビルドからすれば。例え自身の力を抑えたところで、自分達が諦めない限り抑える力など軽く跳ね除けてしまふ、更なる力を呼び覚ます為の布石でしか無かった。

「黙れ……黙れ！」

ミラクルとマジカルの強い瞳を見て、ソルシエールは割れたハートを二人に飛ばした。

しかしそれを二人は難なく押し返した。

「プリキュアトルネード！」

二人は手を繋ぐとそこから竜巻を生み出し、ソルシエールを吹き飛ばした。

「くっ……おのれ」

『ルララララ〜♪』

竜巻を受けて尚、立ち上がるソルシエール。まだ戦おうとする彼女を前にミラクルとマジカルは構えると、またまたあの歌が聴こえた。

今度の歌は、今までの中で一番ハッキリと響いていた。

「くっ……止めろ！そんな歌など聴きたくもない！」

「ソルシエール？どうして？」

歌が聴こえた途端にソルシエールの様子が変わり、その事にビルドは如何してだと聞く。

するとこの場にピンクの服を着て、ハートのカチューシャを身に付けた幼い少女の姿が現れた。突然出てきた少女を見て、ソルシエールに誰なのかを問おうとするマジカル。

「あの子は一体……あなたは、知っているの?」

「お前たち……想いは伝わると言ったな。だが私の思いは伝わらなかった!」

「何これ?」

「あれは……」

ミラクルとマジカルが幼い少女の姿を目にしていると、歌を歌っていた女の子と一人のお婆さんが居る光景に移った。

「かつて私は、ある魔法使いに拾われ、弟子になった」

そしてソルシエールは語り始めた。何故自分が悪の道へと進んでまで、プリキュア達の涙を入手しようとしたのか。

「あれが昔の?じゃあ、さっきの歌は……」

「あの女に聞かされた子守歌だ」

「子守歌?」

本棚で埋め尽くされていた部屋とは別の場所に立っていたビルドが、今見ている少女が昔のソルシエールだと知り。ミラクルはソルシエールの口から今まで自分たちを導いた歌が彼女と一緒に居たお婆さんが歌ったとされる子守唄であると知らされる。

「彼女は自分の後継者を探していた。だから私は必死に修行をした。」

だが……あの女は私を認めなかった！

私の魔法がいくら上達しても、究極の魔法を覚えてくれなかった！それどころかいつまでも子供扱い。子守歌で寝かしつけようとする始末だ。そして結局……」

ビルド達は彼女の辛そうな顔を見て、あの魔法使いのお婆さんがソルシエールを遺して他界した事を悟る。

「なぜ教えてくれなかったのか、私の記憶の中に答えは無かった」

「ですから、亡くなった人を一時的に呼び戻す魔法が必要なのです」

「そうだ……寄越せ！プリキュアの涙を寄越せ！」

ソルシエールはトラウーマの語る『死者を呼び出す魔法』を完成させるべく、プリキュアの涙を寄越せと再びミラクルとマジカルに向けて割れたハートの形をした魔力の塊を放つ。

「晴夜!?!」

しかしビルドか前に出て腕を構え、彼女の攻撃を防ぐ。

「ぐうー!あなたは……あなたは先生を恨んでいるのか?」

ビルドはソルシエールに何故先生を恨んでいるのと質問する。

「当然だ!あの女は私の努力を踏み躪ったのだ!」

私は……見捨てられたのだ!」

「そんな事ないよ」

ソルシエールの先生への憎しみを感じたミラクルとマジカルは、ソルシエールに対して彼女の先生の子守唄を歌ったのかを語る。

「考えてみて♪憎しみを滾らす前に♪」

「考えてみて♪子守歌はなぜ、歌ったの♪」

「歌ったのー♪」

「あなたに……♪あなたに……♪」

「だから……♪それは……♪」

三人が歌いながら話し合う様子に、ビルドは出番なしと思い後ろへ下がる。

麻袋の人形は突然の光景に困惑しながら「何故歌う?」と疑問に思ったが、そんな事より自身の主人が心配なのでそっちに向かった。

「先生はあなたのことを♪とても愛していたはず♪」

「いや……♪そんな訳が無い♪」

「いえ……♪愛してなきや歌わないわ♪」

「歌わないわ♪」

「ルララララララララララ♪」

「子守歌は♪」

「ララララララララララ♪」

「大事な人♪」

「守るため♪」

「歌うもの♪」

「歌うの♪ルララララララララララ♪」

「闇の中でも♪」

「ララララララララララ♪」

「怖がらずに♪」

「「安らかな夢♪見れたのはなぜ?♪」」

「考えてみて♪先生はなぜ歌ったのー♪」

ミラクルとマジカルは自身の考えを歌にしながら、先生がなんの為にソルシエールへ子守唄を歌ったのかを思い出して欲しいと語る。

「私達、あのメロディーを口ずさむと、二元気が出たわ。あなたもそうだったんでしょ?」

「小さい時の話だ……それに、やはりおかしいでは無いか!

愛していたのなら何故、究極の魔法を教えてくださいなかつたのだ!?」

「それは……」

「分からないけど……」

子守唄を歌うと元気が出ると語るマジカルの言葉を、完全に否定することは出来なかつたソルシエール。だがそもそも愛してるのならば、何故究極の魔法を教えてくださいなかつたのだと叫ぶ。その答えはマジカルとミラクルにもわからない。

「それは……もしかしたら、あなたの為だからだよ」

「なんだと……」

するとビルドは自分の憶測上での答えであるものの、あの子守唄に込められた彼女の先生の言葉を代弁しようとする。

「きつとあなたの先生は、本当の意味であなたに魔法を理解して欲しかったかもしれない」

「魔法を理解……だど?」

ソルシエールの口から語られた話は、彼女が本当に先生から認められたくて頑張っていたのだと感ぜられる。

だからこそ、そんな姿を目にしたビルドはある人物と重なって見えた。

——何で……父さんばかり……僕だつて……

(似てるな。兄さんに……)

そのある人物——晴夜の兄である桐ヶ谷巧は、父である拓人に何時も引け目を感じていた。

これはのちに兄の知り合いから聞いた事だったが、兄は父が余りにも偉大だった為に、父の研究と比較されて、時には親の七光りと馬鹿にされ、自分の研究が認めて貰えない事が続いていたらしい。

思い悩んでいた兄は父の呪縛から解き放たれようと、父以外にも母や弟にすら距離を置き始め、遂には家族を置いて家を出ていった。

晴夜は兄との思い出を育むことは愚か、彼が抱いていた苦悩を知らぬまま生き別れたのだ。

皮肉にも彼の苦悩と本当の想いを知ったのは、父がトランプ王国に転移した事で行方不明になり、エボルト達の悪事を知らぬまま協力していた兄が殺された後だった。

「あなたは先生に認められたい気持ちで、ずっと魔法の鍛錬していたんですね……?」

「そうだ。けど、あの女は私の努力など見ていなかった……」

「そうじゃないよ」

「そうじゃない……だと?」

「先生は、あなたが魔法を誰かに認めて貰うための道具にしているから、教えなかつたんだよ」

誰かに認めてもらいたい、それは人が誰しも何かをやる上で起こり得るもの。

認めもらう為には人々はどんな努力も惜しまず、自分の力を証明したいと必死になる。

「けど……どんなに認められなくても、心からそれが好きでいる気持ちを忘れちゃいけないんだ!」

「ッ!?!」

だが例え認められる為とはいえ、それを道具にはしてはいけない。

それが好きでいる気持ちを忘れずにいる事こそが、大事なんだとビルドは思う。

だからビルドは、自分の兄もいなくなる前にそう思い直し、自分達の下へ戻って欲しかった。

だからその願いを叶えられなかった晴夜は父の計画を知った時、エボルトの犠牲になった兄を救済し、また家族全員で暮らそうと、エボルトによつて犠牲になった人々を復活させるべく新世界を創造した。

…にも関わらず、兄はエボルトではなくブラッドことエピオンに殺されていた事で、最後の最後で蘇ることはなかつた。

晴夜にとって兄を蘇らせられなかった事は、これからも彼を蝕むであろう後悔のひとつになるだろう。

「先生もあなたにその事を思い出して欲しかったから、究極の魔法を教えなかったんだと、俺は思う」

だからこそソルシエルには、兄の巧の様に悪い意味で外れた道を歩いて欲しくなかった。

「魔法を楽しむ、気持ち……」

ソルシエルはビルドの話聞いて。初めて魔法に触れた事をなかなか出来ないで挫けそうになった事もあったけれど、上手くいくと先生も自分も笑っている姿を思い出した。

『先生はあなたの才能に嫉妬していたのですよ』

次の瞬間。先生が亡くなって絶望していたソルシエルの前に、トラウーマが現れた所へと切り替わった。

『誰……?』

『弟子に追い抜かれるのが嫌だから、魔法を教えなかったんですよ』

『まさか、そんな……』

『さもなくば、先生はあなたをお嫌いだったのでしょう』

トラウーマが先生は自分が追い抜かれるのが嫌で、ソルシエールが嫌いになったのだと彼女本人に語り。「先生は自分の才能に嫉妬した上に、嫌っていたかも」という一言にシヨックを受けたソルシエールの心を表す様に、頭のハートが割れたところで映像は終わった。

(あの言い方……)

ビルドはさっきの映像に映ってたトラウーマの発言に何やら不吉さを感じていた。

そして先生が弟子に越えられるのが怖くなって嫌ったと思っているソルシエールに向け、ミラクルは「そんな訳ない！」と叫びかけていた。

「思い出してみて！幼いあなたを、あんな素敵な笑顔にしてた先生だよ！」

「しかし、もう先生の顔も声も思い出せないのだ………」

だが今となっては当時の事を思い出せないと返したその時、こけたモフルンが背負っていた壺に入っていた魔法の杖がこぼれ落ち、先端にあるリンクルストーン・ダイヤの形をした部分が輝き出した。

「ミラクルライトか……？」

その壺の中身を見たビルドがミラクルライトと眩くと、『ミラクルステッキライト』と呼ばれるステッキが光りだし、ソルシエールの曖昧になっていた先生との思い出を確かな物へと蘇らせた。

『棘の影に♪』

『先生！私が知りたいのは、子守歌なんかじゃないの！究極の魔法を教えてください！先生ってば！』

『迷っても……♪』

そして子守歌を歌いながら、先生はソルシエールの手を取った。

『つなぐこの手が♪道しるべ♪』

ソルシエールの手を取った先生。その顔は優しく微笑んでいた。

「先生……何故なの先生！何故、究極の魔法を教えてください！先生!？」

私はこんなに一生懸命にやってるのにどうして！私は……

聞いているの!？先生ってば!」

何度も語りかけて先生は答えてくれない。

本当に晴夜がさつきソルシエールに放った言葉も、所詮只の仮説に過ぎない。

それでも彼女が先生に愛されてきたという事だけは、ハッキリとしていた。

「やめて……もう、やめて……」

「ソルシエール……」

「うっ……ううっ……」

「……どうやら嫌われていたというのは、私の思い違いだったようですね」

ソルシエールが涙を流す横で『思い違い』と呟くトラウーマに、ビルドは彼がまるでソルシエールの先生に会った事があるような言い方をしている事に気付く。

「私は、ただ…先生に褒めて貰いたくて…だから、凄く頑張って…」

「分かっております」

そんなソルシエールの姿を見て、ミラクルは何と目に涙を浮かべていた。

「何で、あなたがうるうるしてるのよ」

「だって、だって…」

先生との記憶を思い出したソルシエールが涙を流し始め。彼女を見て貰い泣きしたミラクルの頬わ伝って涙が落ちると、ミラクルのお腹の辺りで『ピチャン』という音が響いた。

「プリキュアの涙。いただきました」

ミラクルが下を見るといつの間にか小瓶を持ったトラウーマがおり、小瓶の中にはミラクルが流した涙で波紋を作り出されていた。

「ソルシエール様。実は、プリキュアの涙は先生と会うための物ではないのです」

「……え？」

「何ですって!?!」

「…そういう事か」

理解が追いつかず呆気にとられるソルシエールに、驚愕を露わにするマジカル達。

だがビルドは先の映像にあつた言動から、トラウーマがソルシエールを唆して何かを企んでいると気付いていた。

「どっ、どっ、どっ！」

「……そもそも。ソルシエールに先生が彼女を嫌いだつて吹き込んだのも、そこから生まれたソルシエールの『想いを先生にぶつきたい』つて願ひも、プリキュアの涙を手に入れるために起こつた。

この戦いも全部、黒幕はお前だつたんだろ！トラウーマ！」

「く、くく、くくく、ハハハハハハッ！」

ビルドが黒幕はお前だと問いただすと、唐突に笑い出すトラウーマ。

「見事な推理ですよ。天才科学者の卵にして、あの伝説の剣士『メサイア』の力を持つ桐ヶ谷晴夜君」

トラウーマは自らが真の黒幕であると明かし、それどころか晴夜が伝説の剣士の力を持つていることすら知っていた。

「その通りです！私は以前、ソルシエール様の師匠であつた先生によつて力の大半を封印られてしまいましたね。

必要だつたんですよ。その封印を解くために、プリキュアの涙が！」

「それで、先生への不安を残していたソルシエールに近づき利用したのか!」

「すべては、私の力を復活させるためです、よ!」

晴夜の追求にトラウーマがそう叫びながら蹄で床にあつた魔法陣を踏むと、その魔法陣が赤く光りだし。眼帯で隠されていた左目に描かれた魔法陣に、プリキュアの涙によつて完成した秘薬が流れ込んでいった。

「来たあ!来た来た来たあ!」

そして、どんとどんと巨大化し始めるトラウーマ。

「大きくなるロマ〜〜!」

「くっ!このままだと天井が崩れる!」

「早く外へ行きましょう!」

ミラクル達はこの部屋から出るためにモフルン達妖精を抱いて急いで出て行こうとすると、ビルドがソルシエールに声をかける。

「ソルシエール!あんたも!」

ビルドは手を伸ばすが、ソルシエールは膝を折つて下を向いたまま動く様子がない。

やがて瓦礫が散乱し、彼女の姿が見えなくなった。

「くう!……みんな、集まって!」

ビルドはソルシエールが無事であることを願うと、ここから逃げようとするミラクル

達を呼び止めて集まる様に叫ぶ。

「えっ？ 晴夜君？」

「どうするの！ 早くしないと！」

こんな時に集まっつてと言うビルドに疑問を抱いたミラクルに、ここを早く出ないと押しつぶされてしまうと叫ぶマジカル。

しかしビルドは冷静に、このピンチを切り抜ける秘策がある事を説明する。

「今からこれを使って、ここから脱出する」

そう言っつてミラクル達に、全てのボトルの成分を含んだ最強のフルボトル『ジーニアスボトル』を見せて構える。

『グレート！ オールイエー！』

ジーニアスボトルが光りだし、音声が鳴り響くとボトルの真ん中のキャップを回して、腕を高々と上げドライバーに差し込む。

『ジーニアス！』

『イエー！ イエー！ イエー！ イエー！』

ジーニアスと鳴り響く音声と共にレバーを回し。晴夜の周りから加工設備プラントが作られていくと、そこから何本ものボトルが晴夜の後ろを囲んでいった。

『Are you ready?』

「ビルドアップ!」

叫びと共にビルドマークが晴夜の胸に出現。白いボディーが装着されると同時に後ろを囲むボトルに成分が注入され、プラントから射出された六十本のボトルがビルドの全身に装填される。

『完全無欠のボトルヤロー!ビルドジーニアス!スゲイ!モノスゲイ!』

こうして晴夜は、六十本のボトルの力全てを使うことが出来る、かつて兄が完成させた最強のビルド『ビルドジーニアス』へと変身した。

「はあ!」

ビルドの体に装填されている六十本のボトルが全て光り出し、ミラクルとマジカル、モフルン達を囲む。

「な、何なの?この魔法?」

「魔法じゃないよ。これが俺の力……科学の力さ」

囲まれた光はバリアのようになり、降ってくる瓦礫からみんなを守る。

「とにかく二人はモフルン達を連れて、外に出るんだ!」

ビルドが瓦礫を防いでいる間にミラクルとマジカルは妖精達を連れて、ソルシエールの屋敷から脱出させた。

「よおし、俺も!」

「「待て！仮面ライダー！」」

『オレ達の事ヲ忘れてんジャネエー！』

「!？」

二人が妖精達と脱出したのを見てビルドも脱出を試みようとするが、制止する様にアジ・ダハーカが麻袋の人形と再度ビルドの前に現れた。

「また、お前らか……」

ビルドは流石に今はこいつらと相手をしてる場合ではなのだが、戦うのならば仕方ないと思っていた。

「お前のような……小僧に……」

そして中首は首元に青筋を作り、怒っていた。

ビルドのようなただの青二才の子供に吹き飛ばされた……即ち力比べに負けたという事実は、壁にぶつかつた後呆気にとられて放心状態になってしまふ程、彼らにとって耐え難いものだった。

「しかも……『また、お前らか……』だと……う？」

……貴様は、私達を……何だと、思っているんだ……ッ！」

だが中首の怒りを助長させるものは、負けたと言う事実だけでは無かった。

彼にとって一番許せない事……それは『自分が下に見られる事』。

封印される前の古の時代、彼らは常に頂点に立っていた。

そんな彼らにとつて人間は、自分達の食糧である『家畜』。家畜たる人間達は自分達に恐怖し、黙つて食われる事だけを心待ちにしていた。

そして自身を封印した魔法使いでさえ、その命を削つてまで弱体化させた上で封印させると言う、『格下が自分達格上を必死に倒す』といった構図であつた。

「許さん……………絶対許さんぞ家畜どもがア!!私達を下に見た、貴様だけは……………ッ!

貴様を生き殺しにした後、油でじつくり茹でて、足先からじわじわと喰らつてやる……………!

必ず貴様に、生き地獄を味あわせるぞ…覚悟しろ……………ッ!!」

だがビルドが自分達に言つた言葉は、『格上あるいは同列が自身達に言う言葉』。

自身と同じ種族が言うならば、最悪長年生きた熟年の魔法使いならばまた許容できた。

しかしビルドは、自身の一割も生きていない若造にして、道具が無ければ何も出来ない家畜の代表格たる人間。

そんな者から下に見られたと言う事實は、普段は寡黙で知性的な中首でさえ我慢出来るものでは無かつた。

「……………ッ!」

「バットガイ……」

「あなたに力をあげましょう」

そんな怒りに燃えるアジ・ダハーカへ、闇の力を未だに解放中のトラウーマが力をあげようと言う。

「おめえ、プリキュアの涙つてのは、お前の力を復活させるもんだべか？」

「つまりはよ、オ、俺達も、その涙があればア、」

「……封印される前の、力を……取り戻せるのか？」

『アア……アジ・ダハーカ様の悲願でアル、本来の力を……』

オイビルドオ！さっきアジ・ダハーカ様ガぶつ飛ばサレタのは、大昔の魔法使いに封印された所為で本調子じゃナカッタからダ！

今のコノ方の力ハ本来の半分以下！本来のノ力を取り替えシタラ、オマエなんかイチコロなんダゼ！』

このアジ・ダハーカもトラウーマと目的は同じだったようだが、プリキュアの涙により力が戻るとは考えてはなかった模様。

「涙によって解放されるのは私の力だけです。ですので、あなた達は……」

だがプリキュアの涙で力が戻るのはあくまでトラウーマ自身だけだと話すと、トラウーマはあるものを二つ見せた。

巨大な三首龍と言うべき姿へとなる。

「これは……」

「「さあ、小僧！」」

形態変化が終わると三つの首が口を開き、そこからビルドに向かって紫の炎が一斉に放たれた。

その頃。脱出したミラクル達は魔法の筈の上で、崩壊していくソルシエールの屋敷を見つめていた。

「なにこれ……」

「空間が……」

しかし屋敷の崩壊と連動する様に、ミラクル達がいるこの世界の空間も壊れ始めた。

「うわああああああ！」

そして鏡でも割れたかの様な音が響くと、遂に空間の崩壊によって周りの世界が屋敷と一緒に爆発し、ミラクルとマジカルに加えて妖精達も爆発に巻き込まれてしまった。

◆ ◆ ◆

とある町道にて、二人の親子が歩いていた。

買い物の為に外へ出ていた母親は物が詰まったエコバック片手に、自身の手を掴んで

スキップしている娘を微笑ましく見ていた。

「……ねえママ、あれなあに?」

だが明るかった空が突然闇に包まれ、娘は暗くなった空を不安そうに見上げていた。

母親はと言うと、黒く染まった空に現れた巨大な魔法陣から黒煙と共に何かが落下してきている事に気付いたが、それに続くかのようにミラクルとマジカルが落下して来た事までは気付かなかった。

「うわああああ!」

「ヤバイ!ヤバイ!落ちる!」

一方ミラクルとマジカルは、爆発で魔法の筈がどつかに飛んでってしまった状態では宙を保っていられず危機感を覚えた。

しかし、彼女達の落ちていく先に二つの円盤が現れた。

「それに乗るんだ!」

「!?!」

その声に従い、ミラクルとマジカルはその円盤に乗り込む。

「浮いている……」

「!?!モフルン達は……」

「ミラクル！マジカル！」

マジカルがモフルン達はどこに行ったのかと辺りを見渡すと、後ろの方からモフルンの声が聞こえる。

「晴夜（君）！」

二人が振り返ると、そこにはモフルン達を抱えるビルドがいた。

とにかく一度整理を知るため、森林公園がある地上へと降りる。

「ありがとう」

「今の晴夜が出したの？」

「うん。間に合ってよかったよ」

それでは読者の皆に、ここまでの経緯を説明する。

アジ・ダハーカがビルドに火炎放射を放ったあの時、ビルドは咄嗟にライトボトルの力で目を眩ませると、ローズとロックの力で口を塞ぎ発射を防いだ。

その隙に外へと出てミラクル達を見つけ後を追いかけたビルドは、一緒に落とされた二人に向けてUFOボトルの力で二つの円盤を渡し、自分は空を飛べるボトルの力で宙を保ちつつモフルン達を救出した。

「うわあ〜！凄いや〜」

「晴夜。あんた何者なの？」

二人より長く戦っていたから戦い慣れしているとは聞いていたが、流石にビルドの手際の良さには驚く。

「俺?俺は……てえんさい科学者の卵にして仮面ライダービルド、桐ヶ谷晴夜だよ」

自分の事を天才科学者の卵というビルドに、ミラクルとマジカルは頭にクエスチョンマークを浮かべながら沈黙を生じさせる。

「……それよりも来るよ」

「「さつきはよくもー」」

ビルドが魔法陣の方を見ると、魔法陣からビルドを逃して追いかけてきたアジ・ダハーカが怒りを露わにしながら現れた。

「クレイジーボーイ!このおー!」

左首は口の中で複数の毒虫や毒蛇などを召喚すると、それをビルド達に向けて放ってきた。

「させるか!」

『フルフルマツチデース!』

ビルドがフルボトルバスターを取り出してフルフルラビットタンクボトルを装填すると、フルボトルバスターから虹色に輝くエネルギーが形成されていく。

『フルフルマツチ ブレイク!』

ビルドがトリガーを引き、虹色に輝くエネルギー弾が毒蛇と毒虫に向けて放って撃ち落とす。

「マジカル！」

「わかつてるわ！晴夜はあいつを！」

「ああ！」

ミラクルとマジカルは残った毒虫達を倒す為に向かう。そしてビルドはアジ・ダハカを抑える為に飛び立つ。

「おのれ……ッ！ペッ！ペッ！ペッ！」

今度は真ん中の首が毒弾をビルドに向けて放つ。

ビルドはアジ・ダハカの攻撃をフルボトルバスターで撃ち落とすか躲すを繰り返す、そのまま接近する。

「調子に乗るんでねえぞ！」

右首はそう言っ顔を動かすがしかし、右首が向いたのはビルドではなく町の方だった。

「な、何を！」

「ここうするだ〜よ！」

右首は紫色のエネルギーを口内に貯めると、高出力の炎をビームの如く町の方にいる

人々に向けて放った。

「ッ!?」

「バカやろオ!」

ビルドはすぐにボトルの力で高速スピードの移動を行い、一瞬にして地上にいる人達の前に回り込むと、ダイヤモンドボトルの力でシールドを作り紫炎のビームから町の人を守る。

「ぐうう!」

ビームの攻撃を耐えるビルドだったが、追い討ちをかけるように真ん中の首が毒弾をビルドに向けて放つ。

「うわああああ!」

シールドの外を狙って放った毒弾が直撃し、ビルドの体が傾き出す。

「くう!」

それでも耐え続けるが、体から力が抜けていくのを感じた。おそらく、さっきの毒弾が体内を巡っているかもしれない。

(このままじゃ……)

ここで引いたら多くの人が被害を受けるそれは避けたい。しかし毒がビルドの体を巡り、限界が近づいてきていた。

「あなたに届け！マイスイートハート！」

「!?」

しかしビームは別に放たれたものにより、かき消された。

「晴夜！大丈夫！」

「もしかして……マナ」

ビルドの限界の危機に来てくれたのは、彼にとって大切な存在であるキュアハートだった。

「無事だったんだ……うううう！」

「晴夜！無理しないで！」

「だ、大丈夫……すぐに……」

ビルドはジーニアスボトルの力で、アジ・ダハーカから受けた毒弾の毒をすぐに解毒した。

「はあ、はあ……」

しかし、幾ら解毒しても体にそれなりにダメージは残る為に、一度変身解除する。

「ちっ……！まだ生きて、いるか！」

中首が毒を受けてまだ晴夜が無事だと知ると、アジ・ダハーカはまたしても口から毒虫に毒蛇を放つ。

「プリキュア!ピンクフォルテウエーブ!」

「プリキュア!ハッピーシャワー!」

「プリキュア!ハートフルエコー!」

だが三つの光が晴夜の前に現れ、毒虫達を浄化した。

「お待たせしました!」

「晴夜君!大丈夫!」

ブロサツムにハッピー、ピーチ、メロディ、エコーの五人も現れた。

「オメエらしく!何でここにいるんだくよ!」

「残ったクレイジーガールは、捕まってるんじゃないのかよオ!」

右首と左首は現れた四人を見て、コピー達の爆発で捕まったのではないかと騒ぐ。

「チツ……ならば、纏めて始末するのみ!」

「そんなことはさせない!」

そこへフローラが現れてパンチを繰り出し、アジ・ダハーカは腕を前に出して防ぐ。

「「ハアア!」」

その隙にアジ・ダハーカの背後に、マーメイド、トウインクル、スカーレットといった三人のトリプルキックが炸裂した。

「他のみんなも無事だったのか!」

「プロサツム！ハッピー！」

「ハート！エコー！みんな無事だったの！」

ミラクルとマジカルはみんなが無事だと知ると、晴夜に駆け寄る。

「晴夜君！」

「あなた大丈夫なの！」

ハートに支えられながら片膝を折って座っている今の晴夜は、ここまで生身の戦闘と変身による連戦による疲れ、毒の攻撃によりかなり体力を減らしていた。

「大丈夫だよ……少ししたらもう一度戦うよ！」

まだ立つのは辛いが体力が少しでも戻り、次第にもう一度戦うつもりらしい。

「後輩が無理すんなよ！」

「それにライダーは、君一人じゃないよ！」

だがそんな晴夜の前に、仮面ライダーフォーゼと仮面ライダーオーズの二人が現れた。

「映司さん……それと……」

「俺は仮面ライダーフォーゼ！お前の先輩ライダーで、ダチになる男だ！」

弦太郎は胸に手を当てて、拳を晴夜に向けて自己紹介する。

同時に晴夜は、ハート達が無事な理由を理解した。きっとこの二人が、みんなを守つ

てくれたのだと。

晴夜達がプリキュア四人と仮面ライダー二人と対峙していると、マジカルが魔法陣から出て来た黒煙の正体に気付いた。

「なんなの、あれ……?」

「無に……すべてを無に……」

黒煙の中からは、ソルシエールの屋敷を取り込んだのか、建物上部からは漆黒の巨大なウマの頭が生え、下部には複数の足がある。言うなれば、要塞と馬が合体したかのような姿……トラウーマ本来の姿である『闇の王』が現れた。

闇の王は体の壁面から突き出た砲台で闇のエネルギーを放つと、その闇によって町がとりこまれていき、人々は慌てて逃げだす。

「町が闇に飲まれてる……」

「みんな、行くよ!!」

ミラクル達が闇の王の暴挙を阻止すべく動き出す中、残った屋敷の一部に取り残されたソルシエールは闇の王を止めようとした。

「やめろトラウーマ!! なぜこんなひどいことを……」

「ひどい? 貴様がそれを言うのか!?」

「何!?!」

「自分がやってきたことを思い出すがいい！」

ソルシエールはトラウーマ……否、闇の王の言葉を聞き。自分のやっていたこと……自分の願いを叶える為にプリキュアと仮面ライダーを襲ったを思い出し、彼女達彼らを傷つけた事を後悔した。

「私といたいどこが違う？どこが違うというのだ！」

闇の王の言葉に、ソルシエールは言い返すが見つからなかった。

だが彼女が犯した『罪』という変わらない事実に対し、真っ向から否定する者が居た。
「違うー！」

晴夜が闇の王とソルシエールに向けて違うと声を上げて叫ぶ。

それに対してオーズとフォーゼも変身解除し、闇の王を睨みつける。

「やれやれ、あなたも物好きですねえ。桐ヶ谷晴夜君、如月弦太郎君、火野映司君」

「どういう意味だ。何が言いたんだよ」

晴夜がそう問いかけると、アジ・ダハーカが闇の王に並んでソルシエールを塵屑を見る様な目で見下す。

「フン………そこに居るソルシエールは、お前達にひどい事をした。

そんなクズ、助ける価値もないだろ……」

「正しく文字通り、バッドガールと俺が呼ぶだけはあるよなあ〜？」

「そ、それは……」

「そいつは私達と同じ、他人を傷つけ利用した、言わば私と同類。

あなた達にとっては、倒すべき敵ではないのですか？」

その言葉に反論しようとしたソルシエールだが、彼女には出来なかった。

自身には、彼らの言葉に反論する資格など無いと理解しているが故に。

「いや、それは違うな」

「何……？」

だが弦太郎を始めとしたライダーやプリキュア達から見れば、ソルシエールとトラウマには決定的に違うものがあつた。

「ソルシエール。確かにあなたは自分の思い違いで、みんなを傷つけたかもしれない……」

晴夜の言う通り、確かにソルシエールは人々を傷付けたという罪を犯した。

「けど彼女は、先生に認めて貰う為に、ずっと一人で頑張ってきた。でも、先生との間に齟齬があつたせいで、小さな不安が生まれた。

それは、先生は自分を愛していたのか？ っていう、小さな疑問だった」

「あんたはその答えが見えなくて、迷っていたはずだろ？」

だが映司と弦太郎を始めとした全員は、彼女の行動は先生を想うが故に起こった事だ

「俺達はこの手で明日を掴む為にもー!」

「お前なんかには、絶対負けない!」

例えどんなに強大な敵でも、敵の数が多くても。仮面ライダーは、この世界の自由と明日をもたらす為にも、絶対に退かない。退く訳にはいかないのだ。

『そうだよ』

「……えっ?」

「晴夜?」

突然、覚悟を決めた晴夜の耳に女性の声が聞こえた。

「みんな〜!」

今度はみんなの耳に幼い子の声が聞こえ、上を見上げるとそこから一人の妖精が現れた。

「はーちゃん!」

「はーちゃん?」

それは『はーちゃん』と呼ばれる、頭周辺に5つの花飾りを身に付け、背中から4枚羽を生やした女の子の妖精だった。

その妖精は晴夜に近づくと、「あなたがせいや?」と聞きかけた。

「そうだけど……」

「それよりはーちゃん！今までどこにいたの？」

実はミラクル達二人が人間界でプリキュアについて調べる際、はーちゃんも連れて行くこうとしていたが、どういうわけかはーちゃんの姿がなかったらしく。その理由をマジカルは聞こうとしていた。

「この人が、はーちゃんを呼んだの」

そう言うはーちゃんの後ろには一人、鳥の様なモノと一緒に誰かがいた。

「久しぶりだね。ビルドの坊やにマナ」

「ベベル……」

「お、おばあちゃん……」

紫のバンドナを身に付けたそれは、かつてビルド達の前に現れたマシューと呼ばれる存在によって皆が思い出の世界に囚われていた際、シャルル達と共にマナ達を救う手伝いをしてくれた妖精にして、マナの祖母の魂そのものでもある存在、ベベルだった。

「久しぶりだね。坊やに、これを返しに来たんだよ」

「……アトミックウイング」

久しぶりの再会に微笑みながらそう語るベベルの背後から現れたのは、マシューと未来を守る為に使用したアイテム『アトミックウイング』。

「この子はずっと、マシューの心を守ってくれた。」

そのマシユーから、今度は君を守って欲しいと言われたのさ」

あの世に居るであろうマシユーの想いを受けつつ、晴夜は翼を羽ばたかせて近寄るアトミックウイングを掴む。

「あの闇を払うには、君とその子じゃないと出来ないからね。

……頼むよ。みんなを……マナを守る……仮面ライダービルド」

「ベベル……ああ」

ベベルから託されたアトミックウイングを手に取り、晴夜は起き上がり前へと進む。

「映司さん、弦太郎さん。行きましょう!」

「おう!任せろ!」

「ああ。俺達仮面ライダーは助け合いだからね」

「……マロ。君も一緒に戦ってくれ」

マシユー……マナの飼い犬だった『マシユマロ』の想いも詰まったガジェットを握る晴夜。

近くに居なくても一緒にいる、そう思わせてくれると信じながら。映司や弦太郎と一緒に闇の王を見る。

「行くぜ!」

弦太郎は全てスイッチの集合体である、上部に大きな装置が付いた青いスイッチ『コ

ズミックスイッチ』を取り出す。

「映司……これを覚え」

そして映司の横にアंकが現れると、彼の体内から二つのコアメダルと更にもう一枚のコアメダルを投げ渡した。

「アंक……それが、お前のやりたいことなんだな！」

三つの赤いメダルを手にとってアंकの意思を受け取った映司は、笑顔を浮かべたアंकに同じく笑顔で返ししながらお互いに笑い合っていると、三人は変身の準備を終えて並び立つ。

「さあ、闇の王。実験をはじめようか〜！」

『マックス！ハザードオン！』

いつもの決め台詞を言いながら、晴夜はハザードトリガーのスイッチを入れて起動するとドライバーのビルドポットに装填。アトミックウイングガジェットに金色のポトル『サジタリアスフルポトル』を差し込む。

『アトミックサジタリアオ！』

映司はアंकから授かったタカ、クジャク、コンドルの三つのコンボの赤いコアメダルをドライバーに入れる。

3枚のメダルが投入されるとバックル部分を斜めに傾け、スキヤナーを握ると構えと

フォーゼは右足と左足と左腕のモジュールデッキの色が銀となり、アストロスイッチのナンバープレートがあるスイッチングラングが付いた胸部装甲が目を惹く、コズミックエナジーをバリア状に纏ったお蔭で全体的に青くなつた姿『コズミックステイツ』。

ビルドはハザードフォームに黄金の輝きを放つサジタリアスのユニットが装着されたフォーム、『アトミックサジタリアス』へと変身を完了する。

「勝利の法則は、決まった！」

ビルドが決め台詞を叫び、三人はアジ・ダハーカと闇の王へと挑む為に飛び立った。「まだ来るのか……！」

アジ・ダハーカの左と右の二本首が口中で何かを溜め込むと、そこから再び毒虫達が現れた。

「今の我々の前では、そんなモノこけ脅しだ！」

無数の毒虫がビルド達に襲いかかるが翼を広げて躲し、ドライバーのレバーを回す。

『Ready go! ハザードファイニッシュ！』

ビルドの右手に黄金に輝くエネルギーが溜まって行く。

『アトミックファイニッシュ！』

高速で放たれたライダーパンチは、一瞬にして全ての毒虫達を破壊した。

「速い……」

エコーの目にも止まらない高速拳は、アジ・ダハーカの視界に捉えられる事なく喰らい続けた。

「おい！あのクレイジーボーイ、なんかさつきよりも強いぜ!!?」

「こうなつたら、また町を狙うだよ!」

左首がビルドの予想以上の速度に驚いていると、右首がまた町の方にビームを放とうとした。

「させるか！ハアツ!」

「オラア!」

だがそこへ右首に突撃したオーズは背中に孔雀を模した羽を展開して光弾を放つ『クジャクフェザー』を右首に向けて発射して怯ませ、更にフォーゼがロケットに柄とレバーがついた大剣型モジュール『バリズンソード』をブーストモードのまま右首の顔に叩き込み、ビーム発射を防いだ。

「凄……」

「これが仮面ライダーの力……」

ミラクルとマジカルは全力で挑む三人の仮面ライダーの力を目の当たりにしていると、ハートが祖母であるベベルに近づくと、

「おばあちゃん！私も何か出来ない!?？」

そして今戦っているビルド達を見ながら、ハートはビルド達の力になりたいと叫ぶ。「あたし、ずっと晴夜に守ってもらってばかり……」

ブラッド帝国事変の時に操られた自分を、彼は傷つきながらも諦めず助けてくれた。だが対するハートは助けて貰っているばかりで、いつも晴夜に何も返せていない。

「守られてばかりじゃダメなの！私も晴夜を……みんなを守りたい！」

守られてばかりじゃない、一緒に並んで前に進みたいという彼女の決意を見せるハート。

「マナ。それはあの子も同じはずだよ」

そんな彼女にベベルが近づき、ハートの手を握る。

「あの子もマナとみんなを守りたい！その思いで今戦ってるはずだよ」

ベベルはそう優しく語りながら、アジ・ダハーカと戦っているビルドを見つめる。

『フルボトルブレード！』

「はああ！ハア！」

ビルドのフルボトルブレードと、アジ・ダハーカの両手に持つ剣がぶつかり合っていた。次の一撃でビルドが一旦アジ・ダハーカから離れる姿を目にしていたベベルは、ハ

トに視線を戻すと彼女の名前を呼ぶ。

「マナ。お前はその思いを、どう強くするんだい?」

「あたしの思い……(あたしは、晴夜とみんなを……大切なものを守りたい!」

だから……)」

ハートが自分の想いを心の中で呟くと、ビルドのホルダーにある二本のボトルが光りだした。

「ラビットボトルとロイヤルボトルが……」

ビルドのボトルホルダーで光ったラビットボトルとロイヤルボトルは、勝手にビルドの元を離れてハートの方へと飛んで行った。

「晴夜のボトル?」

ハートは手に収まった二つのボトルを握ると、二つのボトルは一つとなつてより一層強く光り出す。そして光が収まると、彼女の手には白い兎型の宝石の形をしたラビーズ『ロイヤルラビーズ』が現れていた。

「新しいラビーズ……シヤルル!」

「わかったシヤル!」

「ロイヤルラビーズ!セット!」

ハートはロイヤルボトルから変わったロイヤルラビーズをコミュニケーションにセットする

と、眩い光でハートの身体を包んでいく。

「キュアハート！ロイヤルモード！」

そしてキュアハートの格好が、やや薄めのパールピンクのコスチュームに、羽と兎の耳を足した様な金の線が追加された白っぽいマフラー。ハートの髪飾りと一緒に金の兎型の髪飾りを付けた姿へと変わった。

「変わった……」

「何だか、ビルドに似てるような……」

キュアハートがロイヤルモードへと変身を遂げた光景を目撃したミラクルとマジカは、その姿が何処と無くラビットラビットになったビルドを連想させるモノになった事に、驚きを隠せなかった

「おばあちゃん！」

「言っておいで！」

「うん！」

新しい姿になったハートはベベルに笑みを浮かべながら、地面を蹴り上げて飛び立った。

「おのれ……！ならば、もう一度苦しめ！」

一方ビルド達と戦っていたアジ・ダハーカは、三つの首から同時にビルド達に毒の弾

を放つ。

「危ない!」

「来い!」

オーズとフォーゼがフローラ達の前に出て躲すように促し、フォーゼがエコーの手を握り飛んで躲した。

「!?」

ビルドもすぐ様躲そうとするが、毒弾の一つが直撃しかける。

「はあ!」

もはやこの距離では防御すら間に合わないと思ったビルドの前にハートが現れると、手を弾に向けている広げて気合で吹き飛ばしビルドを守った。

「ハート……その姿」

「晴夜のボトルの力だよ」

ハートがビルドのボトルの力だと言うと、自身が持つラビットボトルとロイヤルボトルから誕生した新しいキュアハートである事に気づくビルド。

「愛を無くした悲しいドラゴンさん!このキュアハートがあなた達のドキドキ!取り戻して見せる!」

そして彼女は胸の近くまで手で作ったハートマークを移動させながら、いつもの決め

台詞を叫ぶ。

「小娘が……邪魔をするな！」

「ハート！」

「大丈夫！見てて！」

アジ・ダハーカが手に持つ剣で攻撃を仕掛けるも、ハートは落ち着いた様子で地面を蹴って剣を避ける。

「何!？」

翼を羽ばたかせて空を飛んでたアジ・ダハーカは、今の自分よりも高い場所にハートが強靱な脚力を持って跳んでいることに驚くも、気を取り直して紫の火炎弾を無数に放つ。

だがロイヤルモードになったハートはラビットの力で強化された脚を活用し、空気そのものを連続で蹴ることで空気を足場にして空を高速で飛んでいた。

「タアア！ハア！」

彼女は宙の上を走る様に火炎弾を避けると、そのスピードのまま移動してアジ・ダハーカの懐に入って腹部を右脚で放ったキックを直撃させる。

更には中首へアッパーを喰らわせ、アジ・ダハーカをダウンさせた。

「凄え……」

ロイヤルラビットで変身している時の力と同じくらい、あるいはそれ以上のスピードを見せつけるハートの力に、思わずビルドも絶賛。

「うぐう……どういう事だ……私達が封印される前に君臨していた時代には、貴様らの様な奴らはいなかった……」

それなのに……貴様らの何処に、そんな力を秘められているというんだ……!」

アップパーを喰らったアジ・ダハーカはと言うと、ダウンから立ち直りながらハートの突然なパワーアップを苛立ちの籠った目で睨み。只の家畜である筈の人間が、何故ここまで力を得たのだと疑問視していた。

「当たり前でしょ! 私達は貴方達と違って、皆んなと未来へ生きているんだから!」

「……なんだと?」

「ああ、ハートの言う通りだ。俺達人間は色々な歴史から成功や失敗を沢山学び、何度転んでも常に進化続けた。その中で人の価値観も、大きく変わっている。

それに比べて、過去の失敗から何も学ばず、過去の価値観ばかりに縋っているお前らなんか、俺からすれば『時代遅れの蛇野郎』だ!」

「『ほげげエ!!』」

だがビルドにとつて、かつて魔法使いによつて封印されても尚人間を警戒せずに侮り続けたアジ・ダハーカは、今も進化し続けている人間に勝てるわけが無いと考えていた。

「プリキュア！仮面ライダー！」

「ウオオオオオオオ！」

アジ・ダハーカと戦う仮面ライダーとプリキュアに叫びかけるソルシエール。

だが遂にアジ・ダハーカとの戦いの均等を崩さんと闇の王の攻撃が始まり、大砲から放たれた闇のエネルギーによってミラクル達やビルド達が吹き飛ばされそうになる。

「やめろ！」

ソルシエールは闇の王を攻撃するが、今の彼女の魔法では闇の王に通用しなかった。

「無駄だ。もはやお前には何もできん」

「くっ……」

「どうするモフ？」

「このままじゃ世界の終わりロマー！」

モフンやアロマ達が慌てふためく中、闇の王は更に世界を闇で覆うとしていた。

「私は………いつたい………どうすれば……」

そして倒れたキュアミラクル達も立ち上がろうとするが、既に何時間も戦い続けていた為に彼女らの体は限界を迎えていた。

「くっ………早くしないと」

「はやく………みんなを………」

パワーアップしてようやくアジ・ダハーカと闇の王と戦う事が出来ているビルドとハートも、すぐに闇の王を倒さないといけない事を理解しつつ。ここまでの戦いで徐々にガタが始めていた。

「晴夜!クソオ!」

「こんなところにいるわけいかねえ!」

「このお!このお!」

それを残骸となった屋敷にある牢屋から外の様子を見ていたみんなは格子を突き破ろうとし、外で戦うビルド達に加勢に行きたい気持ちが抑えられなかった。

「寝てる場合じゃないのに……!」

「ルラララ……ルルラ……♪」

なんとか立とうとするマジカルの横で突然、ミラクルが歌いだした。

「ミラクル……」

「ララルルラ……♪」

「なぜ……?なぜこんな時に、歌っているの?」

ソルシエールは突然あの子守唄を歌い出したミラクルに困惑したがその時、彼女は館

でミラクル達が言っていた言葉……あの子守唄を聴くと元気が出るという言葉思い出した。

「ルルルラララ……ララルルラ……」

何かを察したマジカルもミラクルと歌いながら立ち上がるとしたが、体力の限界だけは誤魔化しきれず再び倒れてしまった。そんな様子を見たソルシエールは……

「もう一度……」

しかし限界を迎えつつある体に鞭を打ち、ミラクルとマジカルは歌い続けた。

「瞼、閉じれば♪夢の森……遊んでおいで♪夜明けまで……」

それに代わる形で、ソルシエールも歌い始めた。

「茨の影に……♪迷っても……つなぐこの手が……」

「うん？何の真似だ？」

「道しるべ……♪」

闇の王が唐突に奏でられた歌に疑問を抱くが、ソルシエールは更に歌い続けた。

「耳をすまして……♪星の鈴……♪鳴らしてごらん……」

「ああ……なんか……」

「あったかい……」

「気持ちが悪く……」

そして彼女の歌を聞いていると、ミラクルやマジカル、オーズ達の体が仄かに光りだし、気づいた頃には心が落ち着いていくことを感じた。

「瞬きで……♪闇の獣に、追われても……」

「体力が……それに……」

だが彼女の歌う子守唄の効果はそれだけでなく、グリードやホロスコープスの戦いで疲労を重ねたオーズやフォーゼを含めた、皆が付けたこれまでの戦いの傷を癒している。プリキュア達の体力も、ビルドのハザードレベルも全開になるほどの回復を見せていた。

「プリキュアー!」

するとモフルンが背負っていたミラクルステッキライトの入っていた壺から、光が放たれた。

「みんな、その光は……」

「魔法の杖だ〜!」

ミラクルがミラクルステッキライトの光に驚き、はーちゃんが喜びを露わにしていると、何かを思いついたアロマは。パフやルルンと一緒にミラクル達へステッキライトを手渡した。

「みんなもプリキュアと仮面ライダーを助けるために、杖を振ってほしいアロマー!」

アロマの言葉に同意したミラクル達は、モフルン達から受け取ったミラクルステッキライトを手取る。

「行くモフー！」

「「プリキュアア！プリキュア！仮面ライダーー！」」

「あの光は……」

闇の王がステッキライトの光で僅かに怯む中。妖精達がミラクルステッキライトを振ると屋敷の中にある、龍牙達やプリキュア達を閉じ込めた牢屋が光り出した。

「お願い……」

ミラクル達プリキュアも、妖精達に続いて振り続ける。

すると、屋敷に保管されていた龍牙達のドライバーが浮き始め、そのまま檻へ向かい彼らの元へ戻っていった。

「俺達のボトルとドライバー……」

「戻ってきたのか……」

「とにかく、僕達もいきましよう！」

「「おおー！」」

三人は戻ってきたドライバーを手に取り、各自腰へ装着。龍牙はクローズマグマナツクル、和也はグリスブリザードナツクル、幻冬はプライムローグフルボトルを取り出す。

『ボトルバーン!クローズマグマ!』

『ボトルキーン!グリスブリザード!』

『プライムローグ!』

龍牙達がドライブバーにナツクルやボトルを差し込むとレバーを操作。マグマライドビルダー、アイスライドビルダー、プライムライドビルダーとワニの顎を下から出現させる。

『『Are you ready?』』

『「変身!」』

『極熱筋肉!クローズマグマ!アーチャチャチャチャチャ ちゃちゃちゃちゃアチャアチャア』

!』

『激凍心火!グリスブリザード!ガキガキガキガキーン!』

『大義晩成!プライムローグ!ドリヤドリヤドリヤドリヤドリヤ!』

三人が変身を完了するとその光と同時に、檻の部屋を吹き飛ばし。元々半壊していた屋敷が完全に崩れて爆風の中から、プリキュアオールスターズにクローズとグリスとローグという三人の仮面ライダーが現れた。

「龍牙!みんな!」

みんなが解放されると一箇所に集まり、他のメンバーとの再会を喜ぶ。

「ソルシエール、ありがとう！」

ビルドのお礼にソルシエールは笑顔になると、破壊された屋敷はステージへと変化。

スポットライトを浴びたソルシエールの衣装の色が白や桃色といった優しい色に変化し、カチューシャにある割れたハートの飾りはふたつのハートへと変わった。

「小僧……小娘……共……」

「何人いても同じだ！」

アジ・ダハーカと闇の王の二人は思い通りにならないとイラつき始め、闇の王は砲台からニンジン型ミサイルを放った。

「よし！みんな！行こう！」

全員がミサイルを避けるように飛び立ち、闇の王とアジ・ダハーカへと向かって行く。

「来るんじゃないかエエオオオオオ！」

それを見たアジ・ダハーカの三つの首は、プリキュア達に毒弾を放つ。

「はあく……はあああああ！」

その全てをクローズの拳から放たれた炎でかき消すと、ローグはライフフルモードにしたネビュラスチームガンにクロコダイルクラックボトルを差し、グリスはブリザードナックルをドライバーから外してボトルをもう一度差し込む。

『クロコダイル！ファンキーショット！』

『ボトルキーン!グレイシャルナツクル!ガチガチガチーン!』

ローグのスチームガンから放たれた砲撃と、ブリザードナツクルから繰り出されたグリスのパンチで、アジ・ダハーカにダメージを与えた。

「どうだあああ!」

「……図に乗るなど、何度も言わせるなアアアアアア!」

度重なる攻撃に、中首が激昂しながらグリスに攻撃をしようとする。

「和也さん!」

しかしラブハートアローを持ったロゼッタが四葉クローバー型のシールド『ロゼッタリフレクション』を作り、グリスを守る。

「タアアアアア!」

その隙にエースとジョーカーのダブルキックが、アジ・ダハーカの真ん中の首を攻撃した。

「和也さん。大丈夫ですか?」

「おお。サンキューな」

「早く倒してお花見に行こう!」

「はい!」

「幻冬!来ますわよ!」

ジョーカーとエースがログと話をしている間に、アジ・ダハーカが再び起き上がるのを見たクローズ達は構える。

「睨みれば、夢の森♪遊んでおいで♪夜明けまでー」

一方、ソルシエルは歌い続けた。

そんな中で、闇の王が放たれたミサイルをキュアブルームとキュアイーグレットが撃ち落としていた。

「ここから反撃開始だよー」

「ええー」

プリキュア達と仮面ライダーはアジ・ダハーカと闇の王の攻撃を難なく対処し、徐々にこちらへ形成が逆転しようとする。

「闇の獣に、追われても♪怖がらないで♪そばにいる……」

闇の王は無数にある足でミラクルとマジカルを踏みつけようとしたが、二人は何とか踏ん張る。

「なんの……これしき!!」

ミラクルとマジカルが闇の王を投げ飛ばし、更にビルドとハートがダブルパンチで攻撃を仕掛けた。

「力があふれてくるわー!」

「そうか……究極の魔法は、あの歌なんだよ」

ソルシエールが歌う子守唄を聴いてからと、力が回復したり勇気が湧くようになってくる事に気付いたマジカルとミラクルは、この歌こそが究極の魔法であることを知る。

「ソルシエールの先生は、既に教えてくれたんだ」

「ああ。この歌が、俺達の力になっている」

ソルシエールの先生は彼女を嫌ってたから、究極の魔法を教えなかった？

彼女が心から魔法が好きでいる気持ちを忘れぬ為に、究極の魔法を教えなかった？

とんでもない。ソルシエールの先生は既に、彼女へ究極の魔法を教えていたのだ。

子守唄自身が究極の魔法である事を教えなかっただけで、ソルシエールは既に究極の魔法を習得していたのだ。

この事実を知ったハートはソルシエールに笑みを浮かべ、ビルドは自身の仮説が半分外れていたと悟りつつも何処か安堵した様子を見せていた。

その時、ミラクルステッキライトの光が突然あふれだした。

「何パフ？」

「魔法の杖が飛んでいくロマ!?!」

アロマの言う通り、ミラクルステッキライトは何処かへと飛んでいく。

ステッキライトがばら撒かれた先には、この人間界に住む世界中の人々の手があつ

た。

「みんな！応援してほしいロマー！」

「みんな、歌に合わせて杖を振って！」

ミラクルステッキライトが渡っていた人々の耳にアロマやはーちゃん達の声が聞こえ。みんなはその声の通りに今戦ってるいるプリキュアと仮面ライダーに応援を送る為、ミラクルステッキライトを振る。

その影響によりみんなの動きは格段に上がっていき、アジ・ダハーカも闇の王と同じくミラクルステッキライトの光とソルシエールの歌により苦しみ始めた。

「な、なんだべ……」

「ファンキーに……気持ち……」

『ボルケニックアタック！』

苦しみ出して隙だらけのアジ・ダハーカにクローズのライダーキックが炸裂し、アジ・ダハーカは地面を横たわる。

「ち、ち、力が……」

その際にクローズは、アジ・ダハーカの体内にあった二本のボトルを掴む。

「返して貰うぜ！」

ライダーキックを受けたアジ・ダハーカから、クローズはシャドウとドラゴンのボト

ル二本を取り戻した。同時にその影響で、アジ・ダハーカも力を取り戻す前の最初の大きさに戻った。

「後は任せたまよ！」

「決めてやれよ！」

フローラとクローズに決めろと声をかけられたビルドとハート、ミラクル、マジカル、オーズ、フォーゼは闇の王へと向かう。

「歌は魔法！（魔法！）」

その時、耐えきれなくなった闇の王がソルシエルにミサイルを放つ。

「くうー！」

だがソルシエルの前にアंकが現れ、ミサイルを彼女から守る様に体を張って受ける。

「アंकク！」

「うるせえ！早く決めろ！」

「……わかった！」

オーズがアंकクのやりたいことを察しながら、ビルド達は闇の王の元へ向かい続ける。

「はああー！」

更なるミサイルがソルシエールと彼女を守るアंकの元へ飛んで行くも、エコーがミサイルをかき消してアंकを守った。

「大丈夫ですか？アंकさん？」

「アंकだ！間違えるな！」

アंकは助けて貰ったことにお礼を言う事はなく、寧ろ何処ぞのおでん好きな医者と同じ間違った呼び名をしたエコーに文句を言っていた。

「茨の影に、迷っても♪つなぐこの手が、道しるべ♪（歌が流れてくる♪）」

だが二人のおかげで、ソルシエールは無事に歌え続けていた。

「一緒に歌えば、不思議な力が沸き上がる♪歌は魔法……♪」

ソルシエールの歌の力を受けたミラクルとマジカルの二人は、ダイヤスタイルをベースにコスチュームの裾や袖丈が長くなり、背中には翼が生えた姿『スーパモード』へと姿を変えた。

「究極の魔法——♪」

「私達は繋がってる！」

「私達プリキュアと仮面ライダーの思いの力を、受けてみなさい！」

ミラクルとマジカルに力を与えるために、全てのプリキュアが二人に集まる。

そしてビルドとオーズとフォーゼは、闇の王の攻撃を躲しながら至近距離まで近づい

てきた。

「いけえ!晴夜!」

「君が決めるんだ!」

「弦太郎さん……映司さん……はい!」

フオーゼとオーズの二人がビルドにそう叫びかけると、ビルドに最後のトドメを刺させる為に前へと出る。

「うおおお!」

「はああ!」

フオーゼは外装を展開させて刀身を露出させスラッシュユモードにしたバリズンソードの斬撃を放ち、オーズは左腕に付属した手甲型エネルギー解放器『タジャスピナー』でエネルギー弾を放ち続け、ビルドを守りながら道を作る。

『ロケットオン!ドリルオン!』

「世界中のダチを守るために!」

「ライダーロケットドリルキック!」

そのままの勢いでフオーゼは右腕にロケットモジュール、左足にドリルモジュールをセッティングして体制に入る。

「この手で掴み続ける。世界を守る為に!」

『スキヤニングチャージ!』

更にオーズがオーズスキヤナーをドライバーに翳すと、彼の足が燃え盛る猛禽類のようなツメ『コンドルレッグ』へと変形した。

「セイヤチャー!」

オーズのダジャルコンボによるライダーキック『プロミネンスドロップ』とフォーゼの『ライダーロケットキック』が闇の王に炸裂し、それによつて彼の砲撃砲が破壊されると、プリキュア達がミラクルとマジカルに力を注ぐ作業を終えた。

「フルフル・リンクル!」

「黒き獣よ」

「闇の世界へ! 帰れ!」

闇の王の砲撃砲を潰されたのを見ながらミラクルとマジカル達が技を放つと同時に、ビルドは残つた本体を見据えながら翼を広げてドライバーのレバーを回す。

『Ready go!』

右足に黄金に輝くエネルギーが溜まって行くと、闇の王に向けて飛んで行こうとする。

「この家畜どもがアアアア!」

しかしアジ・ダハーカが立ち上がると、手に持った双剣にエネルギーを溜めながらビ

ルドの妨害をしようとする。

「プリキュア!ロイヤルハートフィンニッシュ!」

そんな彼を守らんと、キュアハートは白いハートのエネルギーを足に纏って、アジ・ダハークに向かってキックを放った。

ハートの必殺技に気付いたアジ・ダハークはエネルギーを溜めた双剣で返り討ちにしようとしたが、彼女はそれすら打ち碎いて双剣と共にアジ・ダハークを貫いた。

「ぐわああああ……滅ぶのか……こんなところでエエエエー!」

ハートの放ったキックに貫かれたアジ・ダハークの体は、彼らの断末魔と共に消滅した。

「行つて!晴夜!」

「ああ!行くぞおおお!」

『ハザードフィンニッシュ!アトミックフィンニッシュ!』

黄金のオーラを全身に纏ったビルドのライダーキックは闇の王に直撃。ビルドのライダーキックが闇の王の突き出した体に直撃し、そのまま勢いを増してどんどんめり込んでいく。

「はあああああああ!」

「ぬわあああああ!」

そして黄金のオーラを纏ったビルドのライダーキックとミラクルとマジカルの放った技の光は、弱った闇の王の体を貫いて下半身を消滅させた。

「やったのかしら……」

闇の王の顔がある体の方は地上へと落ち倒されると、ビルドとオーズとフォーゼの三人がプリキュア達の元へ戻ってきた。

（空が戻らない……）

「……晴夜？」

「ごめん。もう一仕事してくる」

しかし空の色がまだ暗いと気づき、闇の王の力がまだ残っているのではと睨んだビルドは、ハートにそう告げると一人闇の王の倒れた場所へ飛んで行った。

「あ……あああ……」

闇の王が居ると思われる所へ降りるとそこには、生きてはいるが既に身動きすら取る事も出来ない闇の王がおり、ビルドが闇の王を睨みつけながら近づく。

「終わりだな……トラウーマ」

「……き、さ……ま」

「お前は今日までソルシエルを利用し、みんなの記憶を利用した。

「このまま、自分の罪を悔いていくんだな」

それだけを告げて、ビルドはみんなの元へ飛び立とうとする。

「……………ふん。まさかとは…思うが。この私が、素直に反省すると……………本気で思って、いるのか?」

すると闇の王はビルドを前にそう口語し、それを耳にしたビルドは足を止めた。

「……………確かに今の私は、動く事すら出来ない……………」

……………だが私は、腐つても闇の王……………!

仮にこの場で消滅したとしても、必ずや貴様らの恨みを募らせながら、復活してやる……………それこそ、何百年、何千年かけてでもな……………!

そして私は再び、この世を闇で覆ってやる……………フハハハハ!」

闇の王の言葉を聞いて更なる怒りを抱いたビルドは、同時にこの町の人々を飲み込もうとしたあの惨状を思い出す。

「……………お前は……………お前という奴は……………ッ!」

全く反省の色が見えない闇の王にトドメを刺すべくフルボトルアローを構えるが、躊躇いがあるのかビルドの手は僅かに震えていた。

——自分の甘さを永遠に呪うがいい。ハッハッ……………

瞬間。彼の脳裏にかつてエピオンに言われた事が浮かび上がり、それがビルドの判断を鈍らせてしまう。

「フハハ……あぐう………ハハハ」

「……」

更に苦しみながらも笑い声をあげる痛ましい姿を見せる闇の王の前で悩んだ末……

「ハハハ……っ!?!」

ビルドは闇の王の体に少し触れると、手から闇の王へ何かを注ぎ込んだ。

「……俺の力を少し分けてやる。二度と悪さをするなよ……」

少しでも悪さしたら、俺は何処でも飛んで行つて、今度こそお前を倒す」

なんと彼は闇の王に、自らの力を注ぎ込み助けたのだ。

ビルドにとってこいつは許せない存在である事など、頭の中では何よりわかっている。

敵に情けをかけてしまう優しさは、敵から見れば只の甘さでしかない。

けれど彼にとって、抵抗出来ない相手を此処で消滅させてしまうのは何か間違っていると感じた。故にビルドはいずれ後悔すると分かっている、闇の王を助けてしまった。

これに驚いたのは、当然闇の王だった。自分は彼らと戦った敵の筈。それなのに何故ビルドは敵の私を助けたのかと、全く理解出来ずにいた。

「な、何故だ……何故、私を……」

「さっさとこの世界から出て行け!……そしてひっそりと生きて、命のありがたみさを

学ぶんだな」

しかし命のありがたみを学ぶ様に語るビルドを見て、闇の王はたったそれだけのために生かしたのかと呆れながら。さつきまでの苦しそうな笑みから、何処か柔らかい表情で皮肉げな笑みを浮かべていた。

「……命の、ありがたみさ……か。甘い男だな……君は。」

……後悔するぞ、その選択を選んだ事を……」

きつと後悔するだろう事を告げる闇の王の言葉を背中で受け止めたビルドは、無言のまま仲間達の元へと飛んでいき。みんなはビルドが戻ってきたのに安堵する。

『マツタく、アナタは実に甘いデスネ〜』

「うがアアアアー!?!」

『!?!』

すると突如闇の王の断末魔が聞こえ、それを聞いた全員が何が起こったのかと驚いて視線を向ける。そこには麻袋の人形が闇の王を破れた腹部から出した無数の毒蛇や毒虫で包み込み、今にも飲み込もうとしていた。

「……お前……俺達を倒しに来たのか」

『キヤキヤキヤキヤ! マサかく、オレ達がお前達に勝テル訳無いダロオ?』

ダ〜カ〜ラー! この弱った闇の王ト、アノ方の分身とも言えるオレ達を生贄ニ〜! 再び

「足りねえ!このまま俺達の意識を保つ程の力がア—!!」

このままじゃあどちらにしろ、また消滅しちまうよオ—!!」

「ならば—やる事はただ一つだよ!」

だが復活するために使ったエネルギーで殆どの力を使い果たしてしまったのか、今のままでは直ぐに消滅してしまう事を感じ取ったアジ・ダハーカは、背中から生やした翼を広げて飛び上がると、残された力の全てを使つて紫色の巨大なエネルギー塊を作りあげた。

「仮面ライダービルドオ!このまま我々と共に、消えて無くなれエエエ—!!」

そして自分達に屈辱を与え続けたビルドへの怨言を放ちながら、自分達を倒したハートへの怨みを晴らすべく、直ぐにでも消滅する自分達と道連れにすべく、ビルドに向けて紫色のビームを放った。

「晴夜(君)!」

「桐ヶ谷晴夜!」

「晴夜!」

ビルドに向けて放たれたビームを見て、彼の名を叫ぶハート達。

『アトミックサジタリアス!』

対するビルドは既に手に持っていた『フルボトルアロー』を構えると、アトミックウイングガジェットを差し込み、弓矢の弦を引いてエネルギーを徐々に溜めていった。

「……………うあああああああ—————!!」

『アトミックブレイク!』

遂に弓の張力が最大に高まり、ビルドの悲痛な叫びと共に放たれた矢は巨大な光となり、アジ・ダハーカが放ったビームを飲み込んで一直線にめがけて飛んでいった。

「ツ!ま、不味い……………すぐに抑え—————!?!」

アジ・ダハーカは自身達が放ったビームを上回る光を見てすぐに抑え込もうとするが、どういうわけか光の矢を抑え込もうとした自身の体が突然動かなくなってしまうのだ。

(な、何が起きただ……………!体が……………動かねえだよ……………!)

「……………ふ、巫山戯るなア!俺達は、この世の頂点ツ!テメエらは、下劣な家畜ツ!」

「私達を足蹴にした、貴様ら家畜どもは……………此処で殺されるべきなんだあ—————!」

(—————いいえ。殺されるのは、貴方達の方ですよ)

金縛りにあつたような感覚を覚えた刹那。怒りの叫びを奏でるアジ・ダハーカの背後に、喰われて消滅した筈のトラウーマの声が聞こえ、後ろを振り向くと自身を羽交い締め固定したトラウーマの幻が居る事に気付いた。

と思ひながらも。闇の王を改心させられなかつた事については、後味の悪さだけが残つていた。

ビルドが復活したアジ・ダハーカにとどめを刺したのを見て、ミラクルとマジカルはソルシエールの元へ行く。

「……本当にすまなかつた」

「いいよ。もうあなたの思ひは伝わつたから」

「思ひ……もし許されるなら……先生がやつていたように、私も子供たちに魔法が伝えるような仕事をしたい……」

「いいね」

「頑張つて」

彼女は先生のように子供に魔法を教えたいと言ひ、彼女なりに前へ進めることが出来たのだとミラクルとマジカルは思へた。

新たな道を歩もうとしたソルシエールはというと、偶然目に映つた黒いシルクハット——トラウーマの遺品を静かに手に取り。恩人の想いを捏造して自身を騙したというか恨めしい思ひと、先生が死んで絶望した自分に生きる意欲を湧かせてくれた感謝の思ひが混じつた、複雑そうな目で見つめていた。

（……トラウーマ。来世はきつと、誰かを正しい道へ導く者になる事を——）



そして戦いは終わり、約束通りお花見が始まった。

「クッキーおいしいモフ!」

「アイスもな!」

「モフルンとアंकは結局そればかりロマ」

アंकは妖精達と一緒に菓子やアイスを食べながら、お花見を楽しんでいた。

「今〜私の〜♪願い〜事は〜♪」

「和也! いいぞ!」

「和也様! 頑張ってください!」

「この、大空に〜! 翼を広げ〜!」

「次は私が歌う!」

こちらは和也がカラオケで『翼を広げて』を熱唱していた。(以外と上手かった)

「弦太郎さん、先生何ですか!」

「おう! 天高の教師だぜ!」

弦太郎が胸に手を当てて教師と言うと、のぞみも教師を目指していることを話す。

「映司さん。世界を旅してるんですよね?」

「うん。色んな世界を回って、いつか本当の意味であいつに会いたいんだ」

つぼみと映司が話をしながら、妖精達とアイスを食べるアंकを見る。

「世界中回っているのなら、写真とかありますか？」

「いいよ」

「うわあ〜！」

世界を渡る映司の話に興味深々のつぼみ達は写真などを見て、映司の話をもつと聞きたなくなった。

「さあ、改めてプリキュアの徹底調査よ」

「ワクワクもんだね〜♪」

みらいとリコは今日ここに来た目的の為に早速、なぎさたちに聞いた。

「あの皆さんはどんな魔法が使えるんですか？」

「魔法？」

「みらいちゃんトリコちゃんとはちちゃんは、魔法が使いちゃうんだよ」

魔法と聞いて首を傾げるのか達には、はるかがみらい達二人とはーちゃんが魔法を使えると言うと、一気に注目的になった。

「見せて！」

「俺も見てえ！」

「なあ！俺にも見せてくれ！」

「はいはい、みんな順番に………つて、うわあああああー!?」

マナが仕切ろうとするも、一斉に集まりさらに大騒ぎになった。

「あれ?」

だがそんな中、マナは一人複雑そうな表情の晴夜を見た。

「晴夜?どうかしたの?」

「………実は………」

晴夜はマナにあの時、闇の王へ最後の最後に自分の力を渡して助けてしまい、それが結果的にアジ・ダハーカの一時的な復活を遂げさせてしまった事を話す。

「やっぱり甘いのかな………俺」

「そんな事ないよ」

晴夜は甘いのは優しいさから生まれたものであると、マナは理解している。

だがその心を持っていたから、レジーナとキングジコチューとなった国王の心を取り戻し、トランプ王国を取り戻せた。

「だから晴夜は、私の知ってる優しいあなたでいて」

「マナ………」

「あつ!そうそう、これ返すね」

晴夜はマナのおかげで少しだけ気持ちを落ち着かせると、彼女からラビットとロイヤ

ルの二本のボトルを返して貰った。

「うん。ありがとう……俺、マナと出会えてよかった」

「あたしも晴夜と出会えて、最高にキュンキュンしてる！」

「マナ……」

桜の花びらが舞散る木の下で、晴夜とマナはお互い見つめ合う。

「相変わらず、お熱いですね」

「!?!」

六花に声をかけられ振り向くと、何故かみんなの注目がこつちに移っていた。

それからお花見が終わると晴夜は映司、アंक、弦太郎の三人に別れの挨拶する。

「映司！次会う時は、もつとアイス寄越せよ！」

「わかってるって！」

「ふん。じゃあな」

映司の記憶のコピーとして現れたアंकの体が光りだすと、トラウーマが消えた影響で徐々にその存在を薄れさせていった。

「アंक……」

アंकは笑って消えていくと、そこには割れたタカのコアメダルが落ちており。映司

はそれを拾って、いつか出会える明日を改めて想っていた。

「お別れみたいだね」

「はい。本当にありがとうございました」

アंकとしばしの別れを終えた映司が振り向いてお別れだねと伝えると、晴夜は頭を下げて協力してくれたことに礼を言う。

「お二人のおかげです」

「言ったはずだよ。ライダーは助け合ってた」

「ライダー同士、お前とはダチだ！ほれ！」

「え？」

弦太郎は笑みを浮かべながら、晴夜の拳を数回打ち合わせて友達の印を行った。

「何ですか？」

「友達の印だ！また、会おうな！」

「成る程……良いですね」

そうして、映司は世界を回ってアंकのコアメダルを復活させる為に旅を続け。弦太郎は自分の学校で待つ生徒達の元へと戻っていった。

晴夜は二人を見送りながら、今までに出会った晴人や紘太、タケル、戦兎、士とはまた違う、大切な部分を学べたと感じていた。

「……俺はあなた達のように、なれないかもしれないけど……」

必ず、この世界を守り続けます」

例え自分の甘さが弱点だとしても、人を信じ、自分を信じる心を忘れず。

この思いのまま、みんなを守りたいと晴夜は決意を固めるのだった。

「——おやおや、こりゃあ珍しいお客さんが来ているね。何しに来たんだい？」

そんな想いを募らせる晴夜の姿を離れたところでベベルが見守っていると、自身の下辺りで彼らの姿を手を持ったトイカメラで写真を撮っている男性を見かけ、彼にそう話しかける。

「……さあな。俺はただ、また此処で時空の歪みがあつて来てただけだ……」

その男性……門矢士はカメラを構えながら、ベベルを見据えていた。

「それより気になるのは、お前の方だ。」

俺の情報が正しければ、その身体は『正体を明かさないう事』を条件に構築されている。だが既に正体が知られているお前が、タダで此処に来れる筈がない。

……誰が手を回した？」

「ふふふ……実は私にも、よくわかってないんだよねえ……」

ただ……フルーツの香りを漂わせる神様から、またこの姿を借りる事が出来たってこ

とだけはわかる」

「フルーツの香り、神…………成る程、だいたいわかった」

ベベルの話から、何処そのミカンの神様を思い浮かべた士。

一方のベベルは、目の前の男が神様について何か知っているのかと思つたが、別に特別知りたい訳でないので気にしない事にした。

「…………さてと。マナの元気な顔も見た事だし、そろそろ帰るとするよ」

「…………そうか」

「ねえ、旅人さん。またこの世界に来る事があつたら、マナと坊やに色々手助けしてやつてくれないか？」

「…………それは、これからのあいづら次第だな」

「ふふっ…………それじゃあ、頼んだよ」

手助けして欲しいと言う頼みを聞いた士は、晴夜達に手を貸し続けるかどうかは彼ら次第だとベベルに返し。士の答えを聞いたベベルは笑みを浮かべ、そのまま天へと帰っていった。

「…………ウイザードや鎧武、ゴーストの次は、オーズとフォーゼか…………」

案の定、『ジオウの世界』との融合が近づいている…………いや、もう既にある程度融合しているな…………だとすれば、本来の流れと違っているのも頷ける」

彼は色々なライダーが二度に渡って晴夜達に手助けをした事実と、二度目の訪問時に知った『メサイア』の存在、今回のアジ・ダハーカと麻袋の人形の登場を見て、別の世界との融合とそれによる時空の歪みを察し始めていた。

「……そのうち、また見に行くか。」

プリキュアの世界との融合で、この世界がどうなるのかを、オーマジオウがどんな道を辿るのかを見る為にも……な」

そして、月日が流れる――

「パパ！ママ！」

ピンクのパーカーとスカート、スパッツを着ており、レッドピンクの長髪をミドルツインテールで留めている少女が走っていた。

「イリア」

二人は約束通りに結婚し、一人の女の子を授かった。それがこの子、晴夜とマナの――

人娘の桐ヶ谷イリア。

「イリア!お帰り!」

マナは大事な愛娘をぎゅつと抱きしめる。

「イリア。今日はお誕生日に紹介したい子がいるんだ」

「なにになに?」

「この子シャル!」

後ろから濃いピンク色でウサギと犬を足して二で割った様な姿をしている妖精がいた。

「はじめまして!ルルアと申します!」

それは、イリアのパートナーなる妖精“ルルア”である。

G o t t o n e x t g e n e r a t i o n ……

ドキドキ&サイエンス! After story編

仮面ライダークロース&キュアソード! 最高と最凶の
タツグ! その1

時は20XX年。人々はそれなりに平和な日々を過ごしていた。

その間、世間ではヴァンパイアハンターが主人公の漫画が大ヒットを記録して社会化現象を起こしたり、新型ウイルスが蔓延したりして沢山の人を苦しめたが割と早く鎮火したり、ウイルスの影響で人手不足になった社会で多くの人型ロボットがお仕事の手伝いをし始めたり、とにかく時代が移り変わり続けた。

「おい!やべえ!逃げろ!」

「何だよこいつ!? 強すぎだろ!」

「だから言ったんだよ!コイツに喧嘩売るなってよオ!」

そんな時代の中、何処にでもいるようなチンピラ不良達を、一人の少女が無手であるにも関わらず無傷のまま返り討ちにしていた。

「ふん!弱いのにでしゃばるな!このクズ!」

一房の三つ編みに青いメツシユが入つてゐる茶髪のショートヘアで、白いTシャツの上
に青いジャージを羽織り、ロングスカートを身に付けた強気な少女が舌打ちをしながら、
チンピラ共に向けて唾を吐いてゐると、人気のない公園に一人残つてゐた彼女の
元へ一人の同年代の少女が走つて向かつていた。

「マユー！」

不良少女をマユと呼ぶ少女は、ピンクのパーカーとスカート、スパッツを着ており、
レッドピンクの長髪をミドルツインテールで留めていた。

「イリア……」

二人はどうやらお互い知り合いのようで、その後マユは床に置いておいたスポーツ
バックを持ち、イリアと呼ばれた少女に引つ張られる形で『桐ヶ谷』と書かれた表札が
ある家によつてきた。

「ただいまー」

「……お邪魔します」

玄関を開いて靴を脱ぎ、家の地下室の階段を降りてドアを開くと、いくつもの機械の
資材や道具がある研究室の様な部屋へ入つていった。

その部屋は、スパナやドライバーは勿論溶接機といった工具が机の上に乱雑してお
り、それ以外の所にはいくつもの使用法不明な機器が置かれていた。

そのせいか、部屋の壁に飾られている、まるでオカルトシヨップとかで売られている様な、何かを装填する為のスロットが設けられた一枚のいびつな四角形を形作っている白いパネルは、特に強い存在感と違和感を露わにしていた。

「はあ……マユ、なんでまた喧嘩したの？ いい加減にしないと、また学校で……」
「あいつらが先にやってきたのを、ちよつと返り討ちにしただけだし」

作業椅子に腰掛けたイリアは階段の上に座っているマユを見ると、また不良達と喧嘩していた友達の心配をしていたが、当の本人は馬耳東風。そつぽを向いてチューイングガムを膨らませながら素っ気ない言い方をする姿にため息を吐く。

「マユ、そんな事しているとあなたのお母さんとお父さんに……」

「二人は関係ないでしょ！」

「ごめん……」

「……どうせ、あたしは……」

そう言つて親の事を引き合いに説得しようとするが、ツンツンしていた態度から一変して急に怒り出したマユに思わず謝つてしまい、2人の間に気不味い空気が漂い始めた。

——カッ！

「「えっ——」」

その時、壁に置かれた白いパネル：ホワイトパンドラパネルが光を放ち始めた。光は悲鳴をあげるイリアとマユの二人を、いとも簡単に飲み込んでいく。そして光が収まる頃には、二人の姿は何処にも見えなくなっていた。



「やばい！遅刻だ!?!」

「まったく！お前があんな時間まで実験するからだろ！」

「だって早く完成させたかったんだよ！お爺ちゃん、お婆ちゃん！行つてきます！」

とある民家にて、慌てて学校の支度をする二人の青年：桐ヶ谷晴夜と上城龍牙の姿があった。

横浜の中学を卒業し、大貝町の高校への進学を期に春に大貝町へと戻ってきた二人は、中学二年の時にお世話になった母の実家にあつた研究所も兼ねた地下の部屋から出て、母型の祖父母に挨拶をすると、二人は家を出て全速力で走っていった。

「おはよう！」

「晴夜君！龍牙君！」

「おはよう！二人とも！」

しばらくして、大貝町の中で一番有名な公立高等学校：大貝高校へ無事に到着して教室へと向かった二人に近づいてきたのは、背中まで伸びていたロングヘアをポニーテールにした菱川六花と2年前と比べて少し長髪になった相田マナの二人だった。

「晴夜……！」

「うわあ！レジーナ！」

そして相変わらぬ御転婆っぷりを見せる女の子、レジーナは勢いよく晴夜の背中に飛びつき、背中から受けた衝撃で廊下にキスをしそうになるもなんとか踏みとどまっていた。

そんな彼女にマナが注意をしていると、六花がふと思い出した様に龍牙の方へと顔を向ける。

「そういえば、まこぴーから連絡あった？」

「ああ、明日にはこっちに戻るってよ」

「本当に？ やったー！」

この高校には五人の仲間であるキュアソードの剣崎真琴も通っている。

今はアイドルとしてコンサートツアーの最中で今は学校にはいないが、もうすぐ帰ってくると思っていたマナはウサギの様にウキウキと飛び跳ねながら嬉しそうにしている姿を、晴夜は笑って見ていた。

「そろそろ、ホームルームが始まるから行こう」

『うん（おおー）！』

晴夜達はホームルームが始まる前に急いで教室へ向かった。

——仮面ライダービルドとキュアハート。

二人の戦士が仲間と共に繰り広げた戦いから、2年の月日が流れた。

来月には二年生への進級を控える五人以外に。彼らの仲間である四葉ありすは麗奈と一緒に、お金持ちが集まる有名な高校へと進学。沢田和也は推薦で農業専門高校へ入っていた。

その日の帰り、晴夜達はいつもの通での帰り道を通る中、懐かしい場所を横切っていた。

「大貝第一中学校・・・」

「そういえば亜久里ちゃんと幻冬君も、もうすぐここに通う事になるのよね」

「いよいよ、幻冬君に亜久里ちゃんも中学生か」

「なんか、感無量って感じだな」

そこは去年までマナ達に通っていた学校で、晴夜と龍牙にとつてもみんなと通った思い出が沢山ある場所でもあった。

今は小学6年生の亜久里と幻冬の二人もあと一ヶ月すればあの学校に通う中学生になるのかと、時間の流れの速さにしみじみしていた晴夜達。

(ん〜……折角のパーティーだから、なんかプレゼントとか用意した方がいいよな〜)

問題は何を渡すかって話だが……チョコ味のプロテインキーロとかで良いか?)

「あ、そうそう。龍牙、後で地下室に來いよな」

「あ?…おう、わかった」

そんな彼らを横目に、さっきまでマナ達と次の休日に真琴のお帰りパーティーをする予定を立てていた龍牙が彼女にあげるプレゼントについて考えながら帰路に着いていたが、道中で晴夜から地下室に呼び出されていた。

相棒の言う通り地下に赴いた龍牙は、いくつかの発明品が詰め込まれた段ボール箱を受け取った。

「ほいこれ!俺が作った試作発明品ね!」

「……………うん。で、なんだよこれ?」

「売ってきて」

「はあ?なんで俺が?」

「頼む。今月の所ちよつとピンチなんだ。今日大貝町のフリーマーケットだろ。頼むよ!」

「てめえの小遣い稼ぎかよー」

今日の大貝町で行われるフリーマーケットで、晴夜が作ってきた試作品を売ってこいと言われた龍牙。高校生になってからさらに試作品を多く作り出した所為で、資金不足となったのだと話す晴夜に少々呆れていた。

「てかコレ、売れるのかよ?」

「売れるに決まってるだろ!例えばほら、このクモ型ベットロボット2号とか!」

「オイオイオイ、何不謹慎なもん作ってんだよ!ハルモニアの件でこのガジェットに何一ついい思い出ねえのに、なんでまた新しいの作ってんだよ!」

「いいから行きなさい!これもマネージャーになる為の勉強になるからさ!」

「しようがねえくな・・・今度、飯奢れよな!」

以前作ったガジェットと何が違うのかとため息を吐きながらも、龍牙は渋々と試作品などが入った段ボールを持ち上げると、仕方なくフリーマーケットへと向かう。

そんな彼の姿を見ながら晴夜はコーヒーを入れようとしていると、地下室に飾ってあった白いパンドラパネルに異変が起こり始めた。

「ん?」

何かの違和感を感じ取った晴夜が後ろにあったパネルを見ると、後ろにある白いパネルから青色の液体が漏れ始める。

「——ここが、エボルトが倒された世界かア〜」

白いパンドラパネルから現れた液体は、謎の物体に驚いた晴夜の体に飛びつく。

晴夜の身体を一瞬のうちに包み込み、すぐに離れたその液体は徐々に人の姿へと変わっていき、晴夜の姿へと完全に擬態した。

「お前の記憶と体をコピーさせて貰った」

「なっ！何者だ？！」

「オウオウ、この声を忘れ……あくそっぴいあ、お前には自己紹介してなかったなあ……んじゃ改めて、俺は『キルバス』。エボルトとは昵懇の仲でねえ、あの時の借りを返すついでに、あいつが俺から奪ったパンドラボックスを取り返しに来た」

キルバスと名乗った人物に晴夜は即座にドライバーを構えようとするが、キルバスは瞬時に毒を撃ち込んで変身を阻止する。

「ぐっああ!!」

晴夜がキルバスに撃ち込まれた毒にもがき苦しむと、彼が倒れた拍子に落ちたテレビのリモコンが反応して、画面にダンサーの映像が映った。

それを見たキルバスの全身が再び青いオーラに包まれると、テレビに映ったダンサーと同じ姿に擬態し直した。

「んああ〜……やっぱこんなクソ餓鬼の身体なんかより、こっちの方がクールだなあ〜」

！」

そう言つてキルバスは白いパンドラパネルを壁から取り外すと、晴夜のビルドドライブバーを拾い上げる。

「さあ・・・エボルトを狩るかア！」

「晴夜！」

一瞬にして悶え続ける晴夜の前から去つて行つたキルバスと入れ替わるように、真琴のパーティについて話し合おうと晴夜の住む家に来ていたマナとレジーナの二人が地下室に現れた。

「これは・・・レジーナ！」

「えい！」

「ぐっああ・・・っ！」

「大丈夫晴夜！何があつたの!？」

レジーナは机に置いてあつたジーニアスフルボトルを掴み取り、晴夜に差し込む。

そしてジーニアスフルボトルの浄化機能によつて毒を解毒して一命をとりとめた晴夜に、マナは何があつたのかと問う。

「き、キルバスが・・・」

「えっ……?」

「早く、龍牙に……」

そんなこともつゆ知らず、大貝町の公園には二人の少女が周りを見回していた。

「何処なの、ここ……?」

「あっ……あれ見て!」

少女が見回す中、もう一人の少女が近くの電柱の貼られたポスターに目を向ける。

そのポスターにはスーツを着た初老の男性が描かれており、下に『より良い未来へ』という文字が刻まれていた。

「……この人って確か、3年前に癌で死んだ町長だった筈よね……?」

「……もしかして、ここは過去なの?」

「それって……もしかして!」

それを見て何かに気づいたミドルツインテールの少女は目を輝かせると、そのまま何処かへ走り出していった。

「あ、おい!何処行くんだよ!『寄ってらっしゃい!見てらっしゃい!』ッ!」

それに気付いた茶髪のショートヘアの少女は彼女を追いかけようとしたが、大貝町のフリーマーケットにやって来た龍牙が商品を並べていた姿を見て、思わず足を止めた。

「今日はちよつとイカれた天才科学者の卵の発明品がいっぱいあるよ!」

一人の少女が睨む様に見てる事にまだ気づいてない様子の龍牙が大声で客寄せしている、小さな男の子が彼の前に置いてある商品を見る。

「おお、僕いいところに目をつけるね。それは今日は新商品だよ。その名も『蜘蛛型ペットロボ二号』!」

「こんなもん絶対売れる訳ねえじゃ〜ん!バカー!」

「ハアアアアア? もういつべん言ってみろやガキイイイイイイ!」

龍牙が商品を説明するが、その子供は売れるわけないじゃん馬鹿にする様に言い、龍牙の怒りの叫びを聞きながら走り去っていった。

「ったく・・・」

「そんな態度と接客だと誰も買ってくれないわよ。おバカなお兄さん」

だからこんなの売れるわけねえんだよと頭をかいてるところへ、帽子とサングラスをかけた女性が声をかけた。

「誰が馬鹿だよ! って、お前・・・」

「声ですぐに気づきなさいよ」

女性がサングラスを外し素顔を見せると、そこにはコンサートツアーから帰って来ていた真琴がそこに立っていた。

「まッ……いつ、帰ってきたんだよ」

「つい先よ。ほら、あそこにダビイもいるわ」

思わず人が居るところで彼女の名を言いかけた龍牙が小声で彼女に話をしながら後ろを振り向くと、そこにマネージャーのDBへと変身している真琴のパートナー妖精であるダビイがいた。

「そんな事より、そんな態度じゃ売れないわよ」

「……まず、これが売れると思うか？」

龍牙がシートに敷いている商品を見て売れるかと聞くと、真琴は首を傾げながら「確かに無理かも」と思った。

フリーマーケットでこんな使い道もよくわからない機械を買う人がいるとすれば、それは余程の物好きくらいだ。

「あの……」

「……んあ？何だいお嬢ちゃん？」

そんな風に考えていると二人の前に、スポーツバックを肩にかけた茶髪ショートヘアの少女がやや吊り目な顔で近付き、龍牙が売っていた蜘蛛型ロボットを指差した。

「……この蜘蛛のロボット、ドラゴンの奴は無いの？」

「……はあ？なんでそこでドラゴンが出て……ちよつと待ってろ」

少女に問いかけたその時、龍牙の携帯から電話着信音が入ってきた。

「なんだよ晴『逃げる!龍牙!』…あ?」

すぐに電話を出ると晴夜からいきなり逃げろと伝えられた龍牙は、困惑した様子を見せながら電話に耳を傾ける。

「何言ってるんだよお前、いきなり逃げろとか……」

『あいつが……キルバスが復活した!』

「……は?」

それを聞き、二年前に倒したはずのあのキルバスがまだ生きていたのかと驚き、一瞬なんの冗談かと思いかけていると……

「見いつけたぞオ……エボルトオオオオオ!」

「ツ!」

「え、誰?」

「……なにあの変人」

テレビに出たダンサーの赤い服に身を包んだ男性がジワジワとこっち近づいてきた。

そしてそれを見た龍牙は、彼から浮き出る殺気とオーラの感じから、晴夜の言っていたことが真実であるとすぐに理解した。

「キルバス……」

「っ!? そんな、だって・・・あの時・・・!」

キルバス：それは、一万年前に封印された異世界生命体にして、ブラッド帝国の王。

だがハルモニアと呼ばれる王国で開かれたプリキュアのカーニバルにて、ある盗賊にその封印を解かれたキルバスは、地球殲滅の前にハルモニアを滅ぼそうとした。

しかし、プリキュア達が披露した歌とダンス、龍牙が覚醒したクローズエボルと真琴のソード・クリスタルモードによって倒された・・・筈だった。

「ハッハッハア!!お前らのその顔を覗けただけで、異世界中に潜んでた俺の遺伝子をかき集めた甲斐があったってもんだぜエ!」

だからこそ、真琴は目の前にいる男がキルバスだという事を、信じる事が出来なかった。

「おい!あれダンサーの・・・!」

「柿崎だよね!」

「……………少しうるさいなア〜」

だがそれを知らない周りの人は今キルバスが擬態している姿を見て、有名ダンサーだと騒いでいた。

キルバスはそれを鬱陶しそうな顔でうるさいと呟くと、手から赤いエネルギー弾を作り出した。

それに気付いた真琴がキルバスにやめると、龍牙が外野に逃げると叫んだ時には、もう既にキルバスは光弾を放っていた。

「え——」

——そして運悪くその光弾に直撃した男性は、一瞬にして物言わぬ肉片になった。

爆風に巻き込まれた周りの人は、阿鼻叫喚の合唱を奏でた。

飛ばされて怪我をしただけの人もいれば、これまた運悪く瓦礫などが頭に直撃して血を流し気絶した人、またある者は慌ててその場から逃げ出していた。

（——あ、アイツ……やりやがった。人をまるで、虫を殺すようにッ！）

そんな地獄のような光景を目にした少女は、まるで周りを飛ぶ蚊に向けて殺虫剤をぶちまける様に光弾を放って人々を傷付けたキルバスに、怒りをも上回る恐怖を抱いた。

「てめえ……真琴！」

「ええ！ダビィ！」

対する龍牙はキルバスの暴虐に怒りながらガジェットにボトルを差し込み、そのままドライバーに差し込み構える。同じく怒りを滾らせる真琴は、コミュニケーションにキュアラビーズをはめ込む。

『ウエイクアップ！クローズドラゴン！』

『Are you ready?』

「変身！」

「プリキュア！ラブリンク！」

龍牙の体にライドビルダーが重なり、真琴の身体が光に包まれる。二人は仮面ライダークローズとキュアソードへと姿を変える。

『Wake up burning! Get CROSS—Z DRAGON! Yea h!』

「勇気の刃！キュアソード！」

「クローズ・・・キュアソード・・・！」

クローズとキュアソードが変身完了した姿を見た少女は二人の名を、まるで初めからわかっていたかの様につぶやいていた。

「そうだよなあ・・・そうだよなクローズウ！キュアソードオ！それでこそ、殺しがいがあってもんだア!!」

一方のキルバスは狂った様な笑みを浮かべると、足元に転がっていた蜘蛛型ペットロボ二号を手にとって力を注ぎ込み、赤いガジェットへと変貌させる。

『ビルドドライバー！』

『キルバスパイダー！』

そして晴夜から奪ったドライバーを腰に巻きながら自らの力で赤いボトル『キルバス

スパイダーフルボトル』を生成しガジェットのスロットに挿すと、そのままガジェットの脚を上げながらドライバに装填してレバーを回転。

前後に赤いクモの巣のようなランナーが形成される。

『Are you ready?』

「へえん…しんツ！」

『スパイダー!スパイダー!キルバススパイダー!!』

眩きが放たれると同時にランナーが重なって、中心の空間がキルバスの姿と一緒に歪んだと思うといきなり蜘蛛の脚が出現。それが身体を覆いながらアーマーを形成し、そのまま血の様に真つ赤な姿、仮面ライダーキルバスへと変身した。

「だから不謹慎だつて言っただよ…ハア!うりや！」

晴夜の作った蜘蛛型ロボがまたキルバスの変身アイテムへと変貌したのを見て、クローズがそう眩きながらパンチを繰り出していたが、キルバスは相変わらずに余裕で躲す。

「いっちよー！」

背後を取ったソードが放った手刀をキルバスが後ろへジャンプして避けるも、その着地点にはクローズが待ち構えていた。

だがキルバスはクローズの繰り出した拳を掴み、悠々と攻撃を止めた。

「よう！あん時は驚いたぜ！まさか、生きていたとはなア〜！」

「はあ？」

「エボルトオ！その中にいるんだろオオオツ！」

するとキルバスがクローズ……もつと言えば彼の中にいるナニカに向け、エボルトが
いると言い出した。

「何言ってるんだ！エボルトはもう三年前からいねえよ！」

クローズは振り払おうとするがキルバスは離そうとはせず、手からエネルギー弾を作り出し至近距離で放った。

「うわああああー！」

直撃したクローズは地面を勢いよく滑りながら吹き飛ばされ、その影響で変身解除した龍牙は直撃部位を抑える。

「龍牙！はああー！」

「おつと……今度はお前かア！」

後方へと飛ばされた龍牙を助けようと、今度はソードがキルバスに挑もうと前に出たが、キルバスはソードが繰り出す手刀とキックを躲しながらドライバーのレバーを手
取る。

『Ready go！キルバスパイダーファイニッシュ！』

様子で驚いていた。

「箱は完成した。貴様の力で、パンドラボックスの復活だア——！」

現れたパンドラボックスにテンションを上げるキルバスだったが、龍牙が立ち上がったのを見て鬱陶しそうに拳を繰り出した。

「アア？」

「ふっ！はあ！」

だが突如、龍牙の目が赤く光ったかと思うと、キルバスの攻撃を受け止めそのままパンチで吹っ飛ばした。

「龍牙……いや、違うッ！」

それを目にしたソードは、今あそこでパンチを繰り出した彼が、龍牙であつて龍牙ではないと感じ取った。

そして彼から浮き出るそのオーラを、彼女はこれまで一秒たりとも忘れた事はなかった。

やがて龍牙の体から出現した紅いオーラは一つにまとまり。二人にとって——いや、誰も彼もが決して忘れることの出来ない、これまで戦ってきたモノの中で断トツに邪悪な怪人が姿を現す。

『——よっ！相変わらず馬鹿みてえなツラしてんなあ、龍牙あ？』

「エボルト!」

幾つもの人々の人生を引つ掻き回し、暗夜と龍牙を私利私欲の為に仮面ライダーとして利用し、自らの復活と世界の滅亡を目論んだ揺るぎ無き外道……エボルトが、今ここに復活の産声を上げた。

「やっと現れたかあ……会いたかったぞオ!!」

仮面ライダーとしての力を取り戻す為に使っていた力であるブラッドスタークの姿をしたエボルトにキルバスは連続で殴りかかると、エボルトもといスタークはそれを受ける寸前で避ける。

『……ハア。俺は……会いたくなかったよ!』

スタークは反撃として回し蹴りを食らわそうとするが、キルバスはそれをしやがんで避けると、手元に出現させたカイゾクハツシャーをスタークに突き付ける。

そのままカイゾクハツシャーをゼロ距離でスタークに食らわせ、大きく後退させた。

「デアアア!!」

『ぬうん……てやああ!』

「オオオオオ?」

続く様にカイゾクハツシャーを降りかかるが、スタークは高い反射神経で避けた。

『ハアアア!』

「ヌオオ!!」

本来の力から大きく弱体化したとはいえ、ブラッド帝国の一員としてキルバスを大きく後退させる程のパンチを喰らわせると、スタークは龍牙達の居る所へとバックステップをする。

「何がどうなってるんだよ!!」

『話は後だ……ずらかるぞ!』

「え、ちよ、何であたうグツ!?」

スタークがそう言って手元に生成したスチームガンで煙幕を放出し、龍牙とキュアソード、更に一緒にいた少女を（腹パンで黙らせながら）巻き込んでその場から姿を消した。

「……何をしようと無駄だ。お前は、俺から逃れられない」

煙幕が晴れ、エボルト達を見失ったにも関わらず全く悔しがる様子を見せないキルバスは、新たに作り出したパンドラボックスを掴む。

しかし此処でキルバスは、手元にあるパンドラボックスにある違和感を抱いた。

「ん、ん〜?……ハハハッ! エボルトの野郎、俺に一杯喰わせるとは、相変わらずセコい弟だなア!」

そう言って彼はパンドラボックスに力を入れると、石の様な表面が赤い肉片の様なも

のに変化し、風船が割れるが如く木っ端微塵に破裂した。

どうやら今此処にあるパンドラボックスは、エボルトが煙幕を張って彼らの姿を見失った隙に突貫で作った偽物だった様だ。

それでもなお悔しがる様子を見せないキルバスはホワイトパンドラパネルを体内に収納させると、腰に装着していたビルドドライバーを外し、後ろへ投げ捨てた。

まるで、もう使う必要が無いと言わんばかりに。

龍牙とソードの二人がキルバスの戦闘からエボルトと共に離脱した一方で、晴夜、マナ、レジーナは龍牙の元へ向かっていた。

「龍牙の奴、電話に出ねえ……」

そして晴夜は走りながら龍牙らに電話をかけ続けるが、連絡は一向に取れなかった。

「早くしないとまこぴーもー!」

「ああ、早く龍牙とまこぴーを探さないと!」

急ぐ三人だったが、マナの妖精シャルルがコミュニケーションに変わり連絡が入った。



「——牙……………龍牙……………龍牙！」

「あ……………ああ……………真琴。ここは…何処だ？」

自分の名を呼ばれ続けた龍牙が目を覚ますと、キルバスの戦闘から逃れた龍牙と真琴、ベンチで横たわる少女はよくわからない場所へと連れて来られていた。

『ここは以前、伊能達と使っていた実験場だ』

「エボルト！」

此処がどこなのかと思っていると、龍牙と真琴の耳に声が聞こえ。振り返るとそこには、引き続きブラッドスタークの姿になっていたエボルトがいた。

「なんで、お前が…生きてるんだ…ッ！」

『忘れたのか？俺が遺伝子を操れるのをよ』

「けどお前のその力は、最後の戦いの時に無効にしたはずだ」

『ああ、確かにアレのせいだ、俺は最終的にお前と晴夜に倒された。

だが晴夜の奴に切り離れた直前、お前の体内へ俺の遺伝子をほんの僅かばかり忍ばせたんだ』

エボルトが遺伝子を自由に操れるのは知っている。しかしそれはクローズビルドと最後の戦いで無効したはずだと話す龍牙に、スタークは龍牙の体内に潜り込ませた極小の遺伝子が、自身が撃破されて新世界が創造された後も残っていた事を指摘する。

『だが所詮は残骸みてえなモン。あんな状態じゃあ復活なんか出来るわけねえし、遺伝子を操れる訳でもねえ。このまま何もなければ、復活する筈もなかった。』

それが、今回の新たなパンドラボックスの誕生で覚醒したってわけだ』

そして、自分が今回新たに生まれたパンドラボックスの影響で復活したのだと話す。

「あの、キルバスって奴……あなたの兄らしいわね。しかも、ブラッド帝国の王だったんでしょ」

『ああ……今思い出して虫唾が走るぜ!』

スタークはベンチに転がる石を一つ掴み投げ、語り出した。キルバスとの関係について。

『お前ら、2年前にキルバスから聞いただろ?』

あいつはな、俺達の国『ブラッド帝国』を滅ぼした謀報人だ!』

次回! Re. ドキドキ&サイエンス!

仮面ライダークロース&キュアソード!最高と最凶のタッグ! その2

仮面ライダークローズ&キュアソード！最高と最凶の タッグ！ その2

『ただいま……』

——あたしは、いつも一人だった。

家に帰っても、父親はおろか母親すらいない。

あたしの家族は、いつも世界を回っている。

アイドルとして歌を奏でる忙しい母と、その母をずっと一緒に支えている父。

——その2人の娘が、このあたしだった。

『マユのお母さんってアイドルなんだろ！スゲーよな！』

『うん！私もあの歌大好きなんだー！』

ある時。周りはあたしの母を、羨ましいと口々に言う。

あたしはその言葉に『ありがとう』と言いながら、笑って頷くしか無かった。

——でもあたしは、いつも親にただいまと言ったり、一緒にご飯を食べたりする周りの方が羨ましかった。

『ごめんねマユ。いつもひとりにして……』

『ううん。マユ、ヘーキだよ……ごはんすききらいしないでたべれるし、ちゃんとあさおきれるもん』

別にだからと言って、愛されてなかったわけじゃ無い。

寧ろ両親はあたしをすごく愛しているし、あたし自身も別に嫌いって訳でも無い。

『……みんな、ママパパといっしょ。なのにマユは……』

ただ愛される時間が、他の人より少なかっただけ。

だから、周りの人が家族と楽しそうにしているのを見る度に、あたしはそれが少し羨ましくて仕方がなかった。

『何だよアイツ!? あれで女かよ!』

『女にしては身体能力おかしすぎだろ!』

そんなある日。馬鹿な男共から友達を守ろうとしたが、必要以上に相手をぶちのめしてしまい、それ以降皆から自身の持つ過ぎた力に怯えられた。

自分の体流れる呪われた血が、普通の人から浮いた存在であると実感させられた。

——だから自分は嫌われるべき存在なのだ、そう思うようになった。

「ううう……」

夢の中であの事を思い出していたあたしはふと目を覚まし、辺りを見渡すと写真で見

たことがある二人の男女と、ワインレッドの姿をした怪人がベンチに座っていた。

『キルバスは俺達の世界……ブラッド帝国の王だった』

ワインレッドの怪人：ブラッドスタークの姿をしたエボルトによつて連れて来られたこの施設内で、彼はキルバスと名乗った存在との因縁を語ろうとしていた。

『でもアイツは破滅型の快樂主義者でねえ。破壊衝動に駆られて、ついに自分で自分の世界を滅ぼしちまった……』

「!？」

話を聞いていたあたしは何を言っているのか理解できず、全く話に付いて行けなかったが、同じくその真実を知らなかった二人……龍牙と真琴は酷く驚いていた。

『俺は命からがら、ブラッド帝国からアイツの持ち物であるパンドラボックスを持ち去り、伊能達と別の世界へと脱出した。そんで着いた先が、お前らの住む世界だったわけだ』

曰く。自分達はブラッド帝国から逃げ、後にトランプ王国——と言っても、一万年前の時点ではまだトランプ王国は建設されてなかったから、正確にはトランプ王国が生まれるであろう世界——へ現れたのは偶然だったと語る。

……トランプ王国って、確か父さんとママの——

『だが奴は、あの世界へと逃げた俺達を追いかけてきた』

そこから先の話は、かつてあの人から聞かされた、一万年前に起こったという戦いの話通りだった。

『キルバスは世界を滅ぼそうとしたが、俺はそれより先にパンドラボックスを利用して、キルバスより強くなろうと目論んだ。』

だがそこへキュアエンプレス達が、人間界で撃退したプロトジコチューのジャネジーを封印しにトランプ王国の世界へ現れていた。

俺はアイツらと死闘を繰り広げ、後一步のところまで持ってきたパンドラボックスに封印された。

そしてキルバスも、突如として現れたっていう謎の白い剣士『メサイア』によってハルモニアへ封印。他の奴らは命辛々逃げたが、そんな時出来た傷を癒すために一万年もの間眠りにつくことになった。

そして、今の奴の狙いはこのパンドラボックスだ……』

「けど、箱はトランプ王国にあるし、エネルギーだって伊能達の時に全部使い切った……」
そう言つてエボルトは、さっきの戦いで盗み出したパンドラボックスに手を置く。

だが龍牙と真琴は、新世界を作った時と伊能達との決戦で、箱に込められてた力は全て使い切つたと晴夜の父から聞かされていた為、その事をエボルトに指摘する。

『残念だが。パネルが一つでもあれば、ブラッド帝国の王族はそこから新たなパンドラ

ボックスを生み出せる。それにエネルギーだつて再生は可能だ。

後は、一定のエネルギーさえあれば復活する・・・」

しかしエボルトからパンドラボックスが更なる力を持っているのだと聞かされ、それを聞いた龍牙らは言葉に詰まる。

『この施設の地下に、キルバス攻略の糸口がある。ついでだから色々教えてやるよ』

そう言つてエボルトは立ち上がり、工場に向かおうとする。

しかし立ち上がった直後急によるけ、その場に座りこんでしまう。

『うつ・・・』

「おい?どうしたんだよ」

『まだ、無理か……仲良くしようぜ、相棒おく!』

エボルトはそう呟くと再び赤色のオーラに変化し、なんと龍牙の中に入り込んでしまったのだ。

「ちよ・・・ちよつと・・・!」

「ええええええー!!」

エボルトが勝手に龍牙の体の中に入り込んだのを見て、それに慌てる龍牙と真琴。

「うお!?!おい!何勝手に人の身体に入つて来んだよ!オイゴリア!出ねえと殴るぞ!」

龍牙は自分の体を叩いて追い出そう試みたが、エボルトは全く出てくる様子を見せな

かった。

「いいから出て行け! エボルト! はあ——!」

「龍牙……あつ」

「あん? ……あつ」

二人が後ろへ振り返ると、一緒に連れてきてしまった女の子……つまりあたしが目を覚ましてたことに気付き、二人はさっきのを見られたのだと思い沈黙した。

「……」

あたしはじつと二人を見ていると、二人は変な人だと思われているのかと判断したのか知らないけど、取り敢えずって感じであたしに声をかけた。

「大丈夫か? お前?」

「ごめんなさい。巻き込んだじゃって……私は——」

「劍崎……真琴だよね」

「ええ。そうよ」

劍崎真琴はあたしに体が大丈夫かと尋ね、更に巻き込んだ事を謝罪しながら名前を言うおうとすると、あたしは直ぐにこの人の名前を呟いてしまった。

ついまだ名乗っても無い名を言ってしまったって不審に思われて無いかと不安になったが、劍崎真琴は誰もが知るトップアイドル。

そんな存在がサングラスを掛けずに素顔を晒してるので、わかって当然かと納得した彼女が全く不審に思っただけの様子を見て、あたしは少し安堵する。

「俺は上城龍牙だ」

「あなた名前は？」

上城龍牙も名を名乗ると、あたしの名前を尋ねて来たので、仕方なく名を名乗ろうと口を開いた。

「あたしの名前は……マユ。上城マユ」

「上城？へえ、あなた龍牙と同じ苗字なんだ」

「……まあ」

上城マユ。その名を聞いた二人は上城龍牙と同じ名字だった事に驚いたみたいだが、特に気にした様子を見せない。

——まあ、そんな反応だろうね。あたしも同じ立場だったら、同じ反応してただろうし……

そんな考えを浮かべるあたしの心情に気付かぬまま、二人はエボルトに連れてこられたこの施設に視線を向ける。

「それで真琴、龍牙。これからどうするの？」

「入ってみるしかないか……」

キルバス攻略と言ったエボルトの言葉を信じるのに不安がある龍牙と真琴、ダビィだが、今はここに入り情報を得るのが得策だと考えた龍牙達は、パンドラボックスを持ち運びながら施設の中へと入っていった。

『(あの娘・・・成る程。面白い事が起こっているようだなあ〜)』

しかし上城龍牙の体内に入ったエボルトが、あたしが隠してる“何か”を察知したような言い草を、唯一人コソコソと呟いているの事に。龍牙達は愚か、あたしすら知らなかった。



「遅かったか・・・」

フリーマーケットの会場へと向かっていた晴夜達は、和也と六花、亜久里、幻冬と合流して到着した頃には、既に惨劇を物語る光景が広がっており。テントの他に焼け焦げた商品、タンパク質らしき物の塊が黒焦げになって地面に転がっていた。

「ひでえ・・・」

「あつ!大丈夫ですか?」

和也は足元に転がる人形を拾い、幻冬が頭に血を流して倒れている人に声をかけて介

抱していた。

「本当にキルバスなの？」

「あいつはハルモニアで倒したはずケル！」

「奴もエボルト達と同じブラッド帝国、遺伝子が無事なら再生出来るはずだ」

エボルトと同じブラッド帝国ならキルバスも遺伝子を自由に操れるのだと考える。おそらく、ハルモニアの戦いでは完全に倒しきれていなかったのだ。

「晴夜！これ……」

すると何かを見つけたレジーナが持つてきたのは、キルバスに奪われた晴夜のビルドドライバーだった。

「ここにキルバスが……でも、何でこんな所にドライバーが……」

キルバスがここに現れて龍牙達と戦ったのだと睨みつつ、何故こんな所にビルドドライバーが捨ててあったのかと疑問に思う。

「皆さん！」

「ありす！」

そこへ黒いリムジンの車が現れ、四葉ありすと執事のセバスチャンが車の中から出て来て駆け寄る。

「キルバスが現れたと聞きましたが、龍牙さんと真琴さんが何処にいるか分かりますか

？」

「いや、何度か龍牙に電話をかけたけど、返事は来なかった。まこぴーにも連絡がつかない」

「そうですか……お二人共無事だと思いますが……」

「皆さん。こちらをご覧ください」

ありますが二人の無事を信じつつも、連絡がない事に不安を抱いていると、セバスチャンがパソコンの画面を開く。全員がこの会場の監視カメラに残っていた記録映像に視線を集中させると、そこにはキルバスが周りの人達に攻撃を行った姿と、龍牙がクロースへ、真琴がキュアソードとなって応戦していた場面が映っていた。

二人は必死に奮戦したがキルバスには敵わず、キルバスが倒れた龍牙の手をホワイトパンドラパネルにかざすと、そこから新たななるのパンドラボックスが現れた。

その後の映像はパンドラボックスから現れた影響による衝撃の所為なのか、途切れてしまった。

「何だよ……あのパンドラボックス」

「わかりません……これも、ブラッド帝国の力なんでしょうか……」

「あの者はエボルト達と同じ存在。あのような事が出来ても不思議はありませんわ」

「考えても今はわからないわ。とにかく、龍牙とまこぴーを見つけなさい」と

和也や幻冬、亜久里らは新たに現れたバンドロボックスに動揺を隠せない。

だが六花の言う通りその事は後にし、晴夜達はひとまず龍牙と真琴を見つける事が優先だと行動を開始した。



その頃、龍牙と真琴はエボルトに連れ来られた施設に入り、地下へと向かっていた。

「どう思う?」

「どうって? キルバスのことか?」

「それもあるけど、エボルトよ」

その道中真琴は倒した筈のキルバスが再び現れた事、そして龍牙の体にいたエボルトが復活した今の状況を龍牙はどう考えているのか聞く。

「まだ、よくわかねえことだらけだし…正直、今は早くキルバスが倒すのが一番だつて俺は思う」

「龍牙…珍しく冷静ね」

「珍しくねえだろ…俺だつてな。少しは頭は使えるつの一!」

そんな二人の会話を、マユをじっと見つめていた。

(・・・変なの、こんな光景……………)

「——なあ、姉貴はいいのかよ?」

(・・・だって……………)

彼女は心中でそう呟いていると、急にスポーツバックの中に潜む何かマユに囁く。その何かはマユに二人の会話に混ざらなくなっていくのかと問いかけるが、彼女は何か思う所があるのか、バックの肩掛けを強く握りしめて下を見下ろしていた。

そのまま三人が歩き続けていると、まるで何も無い殺風景な地下へと降りたつた。

「(ハハ)は?」

「何もないわね」

『そりやそうだ』

すると龍牙の中から赤いオーラが出現し、スタークが再び姿を表す。

『ここはトランプ王国を滅ぼす、ずっと前からあつた実験場所だからな』

スタークは真琴からパンドラボックスを取り上げると、殺風景な部屋の中で唯一残っていた置き台の上において手を翳す。

その瞬間、さつきまで何も無かった部屋から一転して、様々なコンピューターや機材がある研究室へ早変わりした。

「これは……………」

『ここは、トランプ王国に攻め入る前に伊能達が研究していた研究所だ。それも俺が見られる前から』

そこでこれがそんなに使われたレポートだ、と言ってスタークが見せたのは、多くの文字列が書き込まれたレポート用紙だった。

「上城龍牙・・・」

「はあ?」

マユがそのレポートに龍牙の名前が書かれていたのを発見し、それを聞いた龍牙は頭にクエスチョンマークを浮かべながら首をかしげる。

「なんで龍牙の名前が?」

「どういうことだ?」

真琴も続いてレポート用紙を手に取ると、そこに書かれていたのは全て龍牙に関するデータばかりだった。

内容は、『人間の遺伝子にブラッドの遺伝子が融合して生まれた存在』。『この実験場は俺を見つけると平行して、お前の生体調査をしていた。』

俺達はお前の動向を監視するため、地下にこの研究室を作った。

そして俺はお前のハザードレベルを上げるために様々な試練を与えた。ジコチュー
供の戦いにライダーテスト、お前の親を消したのも・・・』

「待てよオイ……何でそこで、俺の親が……」

スタークの話の黙って聞いていた龍牙だったが、彼の口から自身の親を消したと聞かえ、どう言うことかと問い詰める。

『そのままの意味だよ。お前の親が死んだのは任務事故じゃない、伊能達がお前を産んだ親のデータを取るために消したんだ。』

……ああ、死んだといえ。キュアソード、俺が殺したお前の先輩方は元気してるか？確かそのうちの一人が……キュアブレイズやらキュアブレイドやら、そんな名前だった筈だが……?』

「ッ!?!」

「あなた……そんな事を……それに、殺したってアンタ……!」

『おいおい、やったのは俺じゃないぞ?伊能だ。まあ、どちらにせよ結果は同じだがな。』

んでキュアソードの先輩方は、パンドラボックスの力で好戦的にしたトランプ王国の住民が披露してくれた殺戮ショーに不満があったらしくてなあ。それで怒ってきたアイツらを返り討ちにしたんだが……どうだ?ちゃんと生き返ってるか?』

「()の……ッ!」

「()の野郎……ッ!」

真琴が言いかけた直後、龍牙は痺れを切らしてスタークに殴りかかる。

龍牙の渾身の一撃を受けたスタークは倒れたが、何事もなかったかのように起き上がって愉快そうに笑い声を漏らし始める。

『……フフフツツ。やっぱりお前は、挑発し甲斐があるなあ』

「なんだと!?!」

『拓人先生が言ってたよ、人体の神秘によって生まれたお前は俺を凌駕する力を持つて
るってな』

「俺のハザードレベルを上げる為に、ここに呼んだのか？」

親の話をして、目の前で死んだアイツ……キュアグレイブの話をして……俺の感情を
高ぶらせる為にツッ！」

『勘違いするな！俺が欲しかったのは、俺とお前の遺伝子のデータだ』

そう語りながらスタークは立ち上がると、先ほどデータを集約したドラゴンエボルポ
トルを取り出す。全員の視線がボトルに集中する。

『こいつがキルバス攻略の鍵を握る……』

「それは……」

『今は俺と組んだ方が、得策だと思うけどねえ?』

スタークはキルバスを倒すため、龍牙と真琴に共闘を提案したその時。

「——まさか、俺よりも人間に協力するとはなあ?」

全員が声のした方を向くと、そこにはいつの間にか立ち聞きをしてたキルバスが階段を下りて来ていた。

「キルバス……」

「ここまで来るなんて」

「けど良い話を聞いた……!上城龍牙にエボルトの遺伝子が宿っていたことは知っていたが……まさかそれが……オリジナルを超える程の力だったとはなア?」

キルバスの登場に龍牙達は強い危機感を感じ構える。

それに対し、不敵な笑みを浮かべるキルバスは体内に手を突っ込んで何かを取り出すと、彼らにその取り出した物を見せる。

「それは……」

「エボルトドライバー……!?」

それは、ビルドドライバーの原型となったドライバー……エボルトドライバーだった。俺がなぐぐぐんの為に、パンドラボックスを作り出したと思う?」

それはなあく……あのクソツタレ野郎に破壊されたこのドライバーを、パンドラボックスのエネルギーを使って復元する為だア!」

『エボルトドライバー!』

かつて龍牙達を苦しめたそれを見た二人は驚愕し、キルバスはパンドラボックスの力

と自身の遺伝子によつて復元されたエボルドライバーを腰に装着する。

『キルバスパイダー!』

更にキルバスパイダーフルボトルをキルバスパイダーガジェットに挿すと、それをエボルドライバーに装填。レバーを回転して前後に歯車を模したリングと赤いクモの巣のようなランナーを形成させる。

『Are you ready?』

「変…身!」

そしてランナーがキルバスに重なり、周りでリングが回転する事により複雑に歪んだ彼の背後から禍々しい形状の蜘蛛の脚が出現。それがキルバスを回っていたリング諸共抱き抱える様に、或いは捕食しようと覆い被さりながらアーマーを形成していく。

『スパイダー!スパイダー!キルバススパイダー!』

そのままリングの破片らしきものを撒き散らしながら出現したキルバスの姿は、クモのような意匠を持つ仮面と胸部装甲に加え、仮面ライダーエボルの様に天球儀を彷彿させる腕・脚装甲等には毒々しく泡立った様な模様が見られ。肩や腰にあるクモの脚がより鋭利な形になっていた。

「感謝するぜエ〜?俺にこの力を、また使おうと思わせた事をよオー……!」

仮面ライダーキルバスは新たななる形態……赤と黒の2色カラーのみだった

ビルドドライバー版
フエーズ0から金色のコントラストが入ったフエーズ1へと進化を遂げる。

「マジかよ……」

「この威圧感……今までに感じた事はないわ」

「あの時とは比べものならないビィ!」

エボルドドライバーによる変身を見た龍牙達は後ろへ下がると、守る者がいなくなったパンドラボックスへと近づいたキルバスは、「ハアアア!」と叫びながらパンドラボックスの上に手を翳す。

すると持っていたホワイトパンドラパネルにエネルギーが流れ、パネルが長方体へと折り畳まれるように形を変えた。

「これにお前達のエネルギーを集めれば、最高のパンドラボックスが出来上がる!」

『……ドライバーを復元する為だけにパンドラボックスを作るんざ、ハナから思ってたかったが……お前の望みはなんだ?』

キルバスが生成した白い長方体…パンドラロボットを見たスタークは、そんな物を作り出して何をしたいのか問う。

対するキルバスは、何処か気だるそうに腕をダランとしながら口を開いた。

「ハア……俺はお前と違って、この世に何の未練も無い!」

この箱の力で、全ての平行世界にビックバンを引き起こし……全てを滅ぼすツ!!

全ての世界と心中して無に還るなんて、最ツ高じやねーかアア!!」
「こいつ……狂ってる……」

まるで使い飽きたおもちゃをゴミ捨て場へ投げる様に全平行世界と心中しようとするキルバスに対し、あまりにも人間の思想や倫理観からかけ離れた彼の狂った行動理念に、マユは恐怖を抱かずにはいられなかった。

「……が、そオーのオー! まア! えエ! にツツツ!!」

全平行世界と心中すんのは、俺をコケにしたキュアソードオ! 上城龍牙ア! お前らを消した後だがなアアアア!」

『……どうする? お前達の敵は俺か? それともこいつか?』

スタークの共闘に、龍牙と真琴は互いに前に出てその答えを叫ぶ。

「……今だけだからな!」

『OK、良いだろう! だが俺が擬態でいる間、お前はクローズマグマとクリスタルクロズを使えない』

「だったら! 真琴!」

龍牙は真琴にクリスタルボトルを投げ渡すと、スクラツシユドライバーを取り出して腰に装着する。

「こっちだ!」

『ドラゴンゼリー!』

ドラゴンスクラツシユゼリーを差し込んだ龍牙の周りに巨大なビーカー出現し、クリスタルボトルを受け取った真琴と共に高々と叫ぶ。

「変身!」

「プリキュア!ラブリンク!」

『潰れる!流れる!溢れ出る!ドラゴンインクローズチャージ!ブラア!』

二人はクローズチャージ、キュアソードへと変身し、スタークと共に地下から外へと移りながらキルバスへ戦いを挑む。

「お前達が徒党を組んでも、無駄だあ!!」

キルバスはそう叫びながらドリルクラツシャーで連続に斬りつけ、二人を吹き飛ばす。

「っ! ダビィ!」

「任せるビィ!」

「クリスタルラビーズ!セット!」

バックステップでダメージを軽減させたソードは、クローズから授かったクリスタルボトルを握り、ボトルをラビーズに変えようと、コミュニケーションにクリスタルラビーズを嵌める。

それと同時に、彼女の姿が眩い光に包まれていく。

「キュアソード！クリスタルモード！」

蒼く輝く光から、やや薄めのパールパープルへと変わったコスチュームにクリスタルの様に輝くドラゴンの翼とクローズに似た銀のフアイヤーパターンが刻まれた装甲。腰には銀色に輝く透明なローブ、紫の髪には蒼いメッシュ、背中に白いマントといった装備パーツが装着されたソード……キュアソード・クリスタルモードは、前に出てムーンサルトキックを繰り出した。

「——遅えンだよ……オラァー！」

「ッ!?!」

だがしかしッ！子供の投げたボールを避ける様に蹴り技を躲したキルバスは、ドリルクラッシュャーをソードに向けて振り翳し。収納状態のラブハートアローから光刃を生み出したソードと、ドリル状の刃で交わる結果となった。

「くぅ……パワーも前より上がっている……！」

「どうしたあ……こんなもんかア！」

「ソードー！」

今はまだ耐えているがキルバスのパワーには敵わず。ソードは膝を折って押し込まれており、今にも頸を絶たれようとしていた。

それに対してクローズはツインブレイカーのビームモードを放ち、その隙にソードはキルバスから距離を取る事が出来た。

「ハツハツハツア!次はアーーーオマエかあ!!」

「ぐあツ!」

だがその御返しと言わんばかりに、牽制をしたクローズへと標的を変えたキルバスがドリルクラッシュャーの斬撃を喰らわせた。

「龍牙!」

『ええい!世話の焼ける相棒だぜ!オラアツ!!』

スタークはさらなる追撃を受けようとしていたクローズを助ける様に、キルバスの背後に向けてキックを不意打ち気味に喰らわせる。

「グヒヤヒヤハツハハツ!貧弱貧弱ウーーー!」

俺がお前にイ!一度でも勝てたことがあつたかよオーーー!」

「ぐああつ!」

「エボルト!くそツ、オラアアア!」

…が、スタークとしての姿ではキルバス相手では余りに力不足で、彼の攻撃は不発に終わり、そのままキルバスの反撃を受けてしまう。

クローズはビートクローザーで奇襲を仕掛けるもドリルクラッシュャーで受け止めら

れ、ビートクローザーを弾き飛ばされた。

『頂きーはあー!』

「オツホホホウ!!」

だがスタークは弾き飛ばされたビートクローザーを拾い上げると、そのままスライディングをしながらキルバスの足元に斬りかかるがしかし、後ろの方へ飛ばれて避けられてしまう。

「ああ! テメエ、何人の武器勝手に使ってるんだよ!」

『お前の物は俺の物!』

「俺のもんだ!」

「ちよつと!?? そんな事してる場合じゃないでしょ!

きらめけ! ホーリーソード!

武器一つで言い争いを始めるクローズとスタークの二人を注意すると、入れ替わるように今度はソードがキルバスにホーリーソードの斬撃を放つ。

「無駄無駄無駄ア!! 俺をあの時と同じと思っただかア!?? マクヌケがあアア!!」

「きやあツ!」

…が、しかし! キルバスが目にも捉えられない速度で避けると手からクモの糸を放ち、ソードの動きを封じ込めた。

「何、これ!? 動けない!」

「真琴! ハアーツ!」

彼女は引きちぎろうと腕に力を入れたが、糸の強度が高いのか抜け出せないでいた。クローズはツインブレイカーのビームをキルバスに向け連続で放ち続けるが、矢張りキルバスには一撃も当たる事なく接近を許してしまう。

「そんなものがアーツ! あたるかよー!」

「ぐわああ!」

「龍牙つ!」

『……チツ。オイ役立たずの歌姫様、そこで大人しくおねんねしてな』

「誰が役立たずよ!」

最後にドリルクラッシュヤーの一撃を受け、クローズも倒れてしまった。

それを見たスタークは拘束されたソードの肩を叩きながら、ビートクローザーを構える。

『昔より更に強くなつたみたいだな!!』

「当たり前だア! お前達がトランプ王国で胡座をかいていた間、俺はいくつもの世界を狩つて来たんだからなあ!!」

ビートクローザーで斬りかかろうとするスタークの攻撃を躲しながら、キルバスは自

分との力の差を指摘しながらビートクローザーを奪い取って斬りかかる。

『ぐっ…アア……ッ!』

「ハア!フフフハア!」

キルバスはドリルクラッシュャーとビートクローザーを投げ捨てると、ドライバーのレバーを回しながらスタークの周囲を高速で移動し黒いクモの糸で巻き付ける。

『な——っ!』

「ハツハハアア——!!グッバーイ!エエエポルトオオ!!」

『Ready go! キルバススパイダーフィニッシュ!』

そして糸を巻き付け終わるとスタークの前で動きを止め、背中から無数に出現した紅蓮の触手でスタークを滅多刺しにした。

『ぐあああ——…ッッ!』

キルバスの技をもろに受けたスタークの体は綻び始めるかのように消滅し始め、青い液体を血液の様に撒き散らしながらその場に倒れこんだ。

「エポルト!」

『——とんだ、誤算だったなあ……このボトルを、晴夜に渡せ!』

スタークはクローズにドラゴンエポルトを投げ渡し、クローズは地面に落ちたそれを拾って受けとる。

『あとは頼んだ……チャ——』

スタークは何時ものフレーズを言いかけた直後に完全消滅し、消滅の際に残っていたオーラが全てキルバスの持つパンドラボトルへと回収された。

「ハハハハ……アハハハハ！」

「死んだ……?」

「てめえ……!」

キルバスは歓喜の声を上げ、マユは消滅したスタークを見て呆然と眩く。

スタークが消えたのを見たクローズは再び挑むも、キルバスは嘲笑うかのようにツインブレイカーの攻撃を躲した。

「ウツシヤアアアツ!」

「があ!」

そして隙を突いたキルバスの膝蹴りがクローズの腹部にめり込み、そのまま髪入れぬまま顔をサマーソルトで蹴り飛ばされる。

キルバスはそのまま地面に着地すると同時にクローズへ歩み寄り、ドリルクラッシュャーで斬りかかってソードの元まで飛ばした。

「龍牙!」

倒れるクローズに糸によって動けないソード。マユは二人が手も足もない状況に歯

ぎしりするが、キルバスは何も仕掛けてこない彼女に興味を持つことはなく、そのままソードの方へと歩いていく。

やがてソードの前まで迫り着くと、キルバスは彼女の顎を掴み無理やり上を向かせる。

そして次の瞬間、彼女に頭突きを喰らわせた。

ゴシヤアつという鈍い音が響くなか、ソードは額から血を流しながら白目を剥き、脳震盪で気絶しそうになった。

「あ、あぐ……」

「やめろオオオオオ!!?真琴に手を出すなアアアアア!!」

「うるせえ蜥蜴だなア……黙れ」

「があっ——ッ!?!」

止めようとするクローズを、キルバスは振り向きざまに彼の腹部を叩き蹴る。その衝撃で地面に大きめの亀裂が入り、クローズは仮面の下で血反吐を吐き出す。

(姉貴……このままだとやばい!……こうなったら姉貴が!)

ふと、キルバスに対し無意識に恐怖を抱いて動けずにいたマユが、スポーツバックからの声に反応すると彼女はバッグの中を開き、そこから何かのキラクターの顔が付いた携帯端末の様なデバイスを視界に入れた。

「遅くなってすみません。ですが話は後です。まずはこの状況を打破するのが先ですか
ら」

「まこぴーの顔にこんな傷付けやがって……行くぞオラァ!」

何でこんな所にいるのかと言うクローズ達の問いにそう話すローグは、グリスと共に
キルバスに向かって走り出し、エースとロゼッタも彼らの後に続く。

「邪魔者が増えたな……だが無意味ツ! テメエらは俺にとつちやあ、取るに足らねえ虫
ケラなんだよオオオオオ!!」

「ハツハア!! 虫ケラかどうかは、やってみなきや分かんねえだろオ!?!」

キルバスは接近してきたローグとグリスに回し蹴りを放ち、対する二人は同時に跳躍
して攻撃を回避した。

「オラァオオオオオツツ!!」

「はあオオオオオツツ!!」

「ヌルい! テメエらの攻撃はヌル過ぎて、欠伸が出そうだぜオオオオオ!」

グリスとローグはキルバスに向けて同時にパンチを放つが、キルバスは両手で二人の
拳を受け止める。しかしそこでキルバスは、グリスの腕にあるツインブレイカーに二本
のボトルが装填されている事に気づく。

「かかったな阿保が!」

『ツインブレイク!』

「ぬおオツ!」

その二本のフルボトル——ロックとローズのボトルの力で出来た鎖と茨による二重拘束によって動きを封じられ、一瞬だけキルバスの身体が硬直した隙を突いてローグがネビュラスチームガンの銃口を腹部に密着させた。

「この距離なら、避けるどころの騒ぎじゃないよな……喰らえ!」

『ファンキーアタック!』

「チイツ!!」

ローグは引き金を引き、フェニックスボトルによる炎状のエネルギー弾がキルバスに命中した。

「ハアッ!」

「ぐああっ!」

キルバスはそのまま後方へと吹き飛ばされ、そこへエースが一気に接近すると腹部を攻撃し、更にロゼッタの放ったキックが腕に直撃した。

「——なんてな♪ウラツシャ————!」

「ぐっ!」

「ぐわあ!」

だがキルバスがこれで倒せるわけがなく、そのままエースとロゼッタは腕と脚をそれぞれ掴んで投げ飛ばされ、赤いオーラを纏ったパンチによる反撃を受けた 그리스とローグが後ろへ下がる。

「久々の戦いだつてのに……半端ねえな」

「ここは一旦引いた方が良さそうですね……!」

「異議なしですわ!」

「お二人共、動けますか?」

キルバスの力を見て退却を選んだ一同は、ここから離れるためにネビュラスチームガンを取り出したローグは周囲に煙幕を放出させる。

「行くわよ!」

「来い!」

「えっ?」

クローズはマユの手を引いて煙幕に入らせる。

そしてキルバスの目の前で煙幕が晴れると、そこには既に誰も居なかった。

だがキルバスは一ミリも気にした様子はなく、エボルトのエネルギーを吸収したパンドラボトルを持って再び地下に向かった。

そしてパンドラボックスにパンドラボトルを入れるが、一瞬だけエネルギーが放出さ

れたのみで何も起こらずに、不発に終わった。

「これじゃ宇宙を滅ぼせない……………上城龍牙アア!!」

世界を破壊するエネルギーが足りないと知ったキルバスは、一度は興味を失った龍牙のエネルギーを手にしようと、新たな行動を決意した。



「まこびー!龍牙君!」

「無事でよかった!」

キルバスから逃れた龍牙達は、頭部に酷い傷を負った真琴の手当をしつつ、ソリテイアへと到着した。中には晴夜、マナ、六花、レジーナもおり、みんな二人が無事だった事に安心する。

「その子は?」

レジーナは龍牙の後ろからついてきたヤンキー風の少女をみて、彼女は誰なのかと尋ねる。

「上城マユ…………俺達が巻き込んだ奴なんだ」

龍牙はマーケットでキルバスの襲撃に巻き込んで連れてきてしまったと説明しながら

ら、晴夜にエボルトから消滅前に託されたドラゴンエボルボトルを渡した。

「これは……」

(……姉貴。あれってイリアの……)

(うん。昔の写真見たことあるから間違いない)

「どうしましたの?」

「……あ、いえ。なんでもありません」

マユはドラゴンエボルボトルを受け取った晴夜と、その近くで晴夜を見ているマナを見て、バックの中にいるナニカと小声で話していると、亜久里が話しかけてきたことに驚きながらも慌てて誤魔化した。

「大変です!」

「セバスチャン?」

「どうかしたんですか?」

するとそこへ慌てた様子でセバスチャンが現れ、ありすと六花はどうしたのかと疑問符を浮かべる。

「皆さん!早くテレビを!」

「テレビ?」

幻冬がソリティアに置かれているテレビのリモコンを手に取り、電源を入れた。

『こちら町外れの廃工場にきています』

映し出された映像には、さっきまでキルバスと戦っていた場所が映っていた。

『先ほどこの工場でダンサーの柿崎氏が目撃されたとの情報が入り……あつ!出てきました!なにやら箱のような物を持っております!』

アナウンサーが工場の様子をリポートしていると、工場から擬態姿のキルバスが現れると再びライダーへと変身し、アナウンサーとカメラマンの前に向けてエネルギー弾を投げつける。本物の柿崎氏への熱い風評被害とバッシングが確定した瞬間であった。

『えっ?きやああ!!』

『うわああ!!』

アナウンサーは一目散に逃げ出し、カメラマンもカメラを捨てて逃げ出す。

『仮面ライダー!プリキュア!この星を滅ぼされなくなかったら、俺とお前が最初に会った場所に来い!お前らのエネルギーが回復する明朝まで待とう!精々力を蓄えときな!!ハハハハハハ!!』

キルバスはカメラ越しに仮面ライダーとプリキュアへそう告げ、それを最後にエネルギー弾でカメラを破壊した。

「ふざけやがって」

和也はノイズしか映らなくなったテレビの電源を切り、キルバスの発言に怒りを感じ

出した。

「でも、勝てる保証はあるケル？」

「大丈夫でランス！」

「キルバスには一度勝ってるシャル！」

「アイ〜〜！」

シャルル達は、キルバスには一度ハルモニアの戦いで勝ったことがあるから大丈夫だと言うが……

「でも、真琴のクリスタルラビーズの力はキルバスに通用しなかったビィ……」

これを聞いて全員が動揺した。ハルモニアの戦いではキルバスにはクリスタルラビーズによる力で勝利に貢献したが今回のキルバスの力は以前より強くなっている。

「いや、キルバスの攻略法は残っている」

その時、晴夜の口からキルバスの攻略法はまだであると語られ、一同は晴夜の方を一斉に見る。

「本当かよ！」

「どうすればいいの？」

「龍牙の中にあるエポルトの遺伝子を、最大限まで増幅させるアイテムを作れば……今のキルバスにも勝てるかもしれない……」

「エボルトの力……」

晴夜がドラゴンエボルボトルを解析し、そこから調べたキルバスの特性より弾き出された答えとして、エボルトの遺伝子を最大限に生かすアイテムが必要だと語る。

「龍牙。俺は今から、かつてお前がキルバスを倒した時に変身したつて言う姿……『クローズエボル』になる為のアイテムを作る。手伝ってくれ」

「……ああ、当然だ。今回も、アイツをぶっ飛ばしてやるよ!」

次回! Re. ドキドキ&サイエンス! After story

仮面ライダークローズ&キュアソード!最高と最凶のタッグ! その3

仮面ライダークロース&キュアソード！最高と最凶の タツグ！ その3

「ああああ！ぐつああああ!!ぐつ!!」

体の至る所に取り付けられた機械コードによって、俺の身体に激痛が走る。

痛みには慣れているはずなのに、それでも尚思わず悲鳴を上げてしまうほどの痛みだ。

だけど俺は耐えた。この痛みを乗り越えれば、奴を倒せるキツカケを得る事が出来る。

しかしこのキツカケは同時に、俺達の首を絞める事になるだろう。

何故ならこの方法は、復活させてはいけない奴を復活させてしまうからだ。

だから、これは賭けなのだ。

もし成功すれば奴を……キルバスを倒せれるかもしれない。

だが失敗すれば、地球が滅ぶ。

——いや、それだけじゃない。最悪この宇宙が……全ての平行世界が消滅する可能性だってあるのだ。

そうならない為にも、今ここで全てを出し切らないとダメなんだ。

例えばそれが、命を削るような結果になるうとも……

「があああアアアツツ！」

そう決意した瞬間、目の前に広がっていた世界が真っ赤に染まる。

同時に俺の細胞の隅々まで強制活性化していたとある遺伝子……エボルト遺伝子が目覚めた、ような感覚を覚えた。(その時、俺の目が赤く光っていた様だが、鏡を見たわけじゃないからそれが本当かどうかは分からない。)

そう感じたかと思うと、俺の体から赤いオーラが浮かび上がり始め、それらがやがて一つの塊になり、それが俺から離れる様に飛び出した。

「エボルトー！」

飛び出したオーラは床に着地すると、やがて形を人型のものへと変えていき……仮面ライダーエボルトとなったエボルトが姿を現した。

改めて復活を果たしたエボルトは立ち上がると、俺の中のエボルト遺伝子を活性化させていた自称天才科学者……桐ヶ谷晴夜を見て笑みを浮かべていた。

「よっ！晴夜、久しぶり〜！随分デカくなったなあ〜！」

三年ぶりに再開した晴夜に対して、いつものテンションで挨拶するエボルトだが、晴夜達は警戒した構えを取る。

まあそれもそうだ。何しろ俺達を散々利用して、最終的に殺そうとした相手が復活したんだ。普通に考えて、警戒しない方がおかしいってもんだ。

「お前を蘇らせたのは、キルバスを倒すためだ」

晴夜は睨みつけながらそう言うと、エボルトは笑いながら答えてきた。

それはまるで、自分が再び復活する事を確信していたかのような口振りだった。

「だろいな・・・けど、協力するかどうかはお前ら次第だ」

エボルトの言葉に、全員が苦渋に満ちた顔で奴を見ていた。

そりやそうだ。一度は敵として戦ってきた相手が味方になるって言われても、信用できる訳がない。

「今は、キルバスを止めるのが最優先だ」

だが、今はそんな事言ってる場合ではない。とにかく今は、コイツの力が必要だ。

晴夜はそう言ってエボルトに協力を惜しみ、他のメンバーも同じ様に協力する覚悟を決める。

「……フツツ、OK！いいだろう！ただし一つ、条件がある」

「条件？」

するとエボルトは、協力するには条件が必要だと言い出す。

「晴夜、キュアハート。お前らは手を出すな。ここで留守番している」

何とエボルトはキルバスと戦うために協力する条件として、晴夜とマナへ戦いには参加しない様にと言い放ったのだ。

「はあ!？」

「なんで!？」 何で晴夜とマナが、留守番しなきゃいけないのよー!

当然その条件に和也達は反発し、レジーナはその理由を聞く。

「じゃあ、この話は無しだなあ〜」

だが、エボルトは理由について答えるつもりはないらしく、彼らに背を向けて立ち去ろうとする。

「待ちなさい!まだ話は・・・『わかった!』:マナ?」

エボルトを呼び止めようとした亜久里だったが、突然大声を上げたマナはエボルトの条件を受け入れようとする。

その事に誰もが驚くが、エボルトは面白そうに笑いながら振り返る。

「ほう? 随分あっさり決めたじゃないか」

「・・・今のあたし達には、キルバスを倒す手段が無い。

でもキルバスを倒さないと、あたし達の住む大貝町:いや、この地球だけじゃなくて、妖精界や魔法界が無くなっちゃうの。

だからお願い、力を貸して欲しいの!」

エボルトに向かって頭を下げながら頼み込むマナ。

その表情はとても真剣で、とても出まかせをついてるようには見えない。

……正直、今の状態でキルバスを相手にするのは厳しい。だがキルバスはこのままだと、全ての平行世界を破壊してしまうかもしれない。

そうならないように、キルバスの暴走を止めなければならぬ。

そしてその為にも、エボルトの力が必要なのだと決意をしたのだ。

「マナ……わかった。俺達は手を出さない」

「よし。交渉成立だ」

エボルトの条件を受け入れた晴夜とマナは、キルバスの戦闘に参加しないことを約束した。

「……あ、そうそう。晴夜とキュアハートを留守番させる理由を知りたかったよなあ？」

「? え、ええ……」

するとふと、エボルトがレジーナの方を見ながら何かを思い出した様な口調で話し始める。いきなり話しかけられたことに戸惑いながらも、とりあえず返事をするレジーナ。

するとエボルトは、ニヤリとした笑みを浮かべた。

「別に大した理由じゃねえよ。ただ、他の仲間が必死に戦っている中で高みの見物しか

できねえなんて、お優しいお二人さんにとつちやあ辛い事だろ？

要するに、何の意味もない、ただの嫌がらせだ」

そう言い放つとエボルトは再び歩き出し、そのまま実験室にあるソファの上に寝転がり始めた。

そんなエボルトの態度を見て、俺達は怒りの感情を抱くと同時に、どこか清々しい気持ちになつていった。

——ああ、やつぱりアイツは、あの時から何一つ変わっていない。どこまでいっても、清々しいほどに救いようの無いクソ野郎なんだ、つてな。

「……どうして僕達が、こんな奴を……」

ふと、仲間達の中からそんな呟きが聞こえ。それに同意するように、その呟きを耳にした他の仲間達も顔を下へ向け、エボルトだけが愉快そうに笑っていた。

そういう俺……上城龍牙も、どうしてこうなってしまったんだと、少し前までの記憶を振り返った。



「エボルトの力……」

時刻は午後の夕暮れ時。龍牙達は晴夜から、キルバスを撃破する為の方法を教えて貰っていた。

ドラゴンエボルボトルを解析した晴夜曰く。特定したキルバスの特性から弾き出された答えによれば、キルバスを倒すにはエボルトの遺伝子を最大限に生かすアイテムが必要らしい。

「勿論危険も伴うし、最大の問題点もある」

「……一体、何が起ころのですか？」

亜久里達は不安の表情を浮かべながらも、晴夜の話の話を静かに聞いた。

「——エボルトが、本来の力を取り戻す可能性がある……」

『ツ!?!』

仲間達が驚きの声を上げる中、晴夜は淡々と説明を続けた。

晴夜の予想では、龍牙の体内に残るエボルトの遺伝子を最大限に引き出せば、キルバスの撃破に必要なマッスルギャラクシーボトルを製作する事が可能となるが、それによりエボルトが実体を持った状態で復活する恐れがあるという。

「エボルトが復活したら、また二年前と同じことに……」

和也の言う二年前、それはエボルトがパンドラボックスの力でこの世界を破滅させようとした事変の事。六花達は、エボルトの復活はあの悪夢のような出来事が再び起ころ

かもしれないと不安を募らせる。

「そんなことさせねえ!」

しかし龍牙は、エボルトを再び野放しにする気はない。そう叫んだ。

「エボルトは、俺が何とかする!」

復活しても必ずエボルトをなんとかしてみせると、強い眼差しで力強く宣言した。

「何とかって……あのエボルトよ!龍牙君だけでどうにか出来るの?」

だが六花の言う通り、二年前の戦いでエボルトを倒して世界の明日を守れたのは、晴夜と龍牙の二人が変身した『クロースビルド』という奇跡があったからこそで、二度目の戦いでも必ず勝てるという保証は無い。

ましてやエボルトを一人でどうこう出来るかと言えば、難しいと言わざるを得ない。

「けど……俺がやらなきゃ……頼む!」

それでも龍牙は、エボルトの遺伝子を保有している自分からこそ、それを狙って現れたキルバスを止める責任があると、己の手でエボルトを倒さなければ気が済まないと言いつ張る。

この事態は自分が招いたものだからだと、そう責任を感じているが故に、自らその役を買って出たのだ。

「バカじゃないの!」

だがそんな龍牙の決意を批判するように、マユが声を上げた。

「まるで、自分達しか地球を守れないみたい……前に立ってみんなを守る、救いのヒーローのつもり?」

「あ?お前、何怒ってんだよ……」

「あんたらがそうやって必死こいて戦っても、誰も『あなた達が助けてくれた!』だなんて思っていない。そうでしょう?」

「……それでも、俺達は戦う。」

お前の言う『救いのヒーロー』として、戦う責任って奴があるんだ」

「……………ハア。訳わかんない」

そう言い残した彼女は部屋から立ち去り、その場に残った龍牙達は互いに顔を見合わせる。

「何でしょうか……あの子?」

「こう言った状況なので、仕方ありません」

「まあ、赤の他人が私達の話聞いていたら、何様だつて思われたのかもね」

「……とりあえず、これから準備するよ」

「頼む……」

自分達が世界を守らなければならないような言い草に、何様のつもりだと感じたのか

もしれない。そう思った彼らは気を取り直し、新たなアイテムを作る準備を始めようとする。

「……マナ。お願いがあるんだ」

「えっ?」

そんな中晴夜は、準備を始めようとするマナに声を掛け、何かを伝えていた。

その頃、研究室を飛び出したマユは近くの川の見える場所で一人座り込み、町の景色を見ていた。

「……なんで」

どうしてあんな事を言ってしまったのだろうか、涙を一粒流しながら後悔しながら呟く。

「私は……」

「……マユちゃん、大丈夫?」

すると自分を呼ぶ声が聞こえ、振り向くとそこには心配そうな顔で見つめているマナの姿があり。マユはその姿を見て慌てて頬を伝っていた雫を拭い、どうしてここに来たのか問うと彼女は笑って話しかける。

「晴夜が貴女に一つ聞きたいがあるって……マユちゃんは、どこの世界から来たの?」

「!?」

マナの口から出てきた質問に、マユは思わず目を大きく開いて驚く。その反応を見て、本当だったんだと確信を持つ。

「やっぱり、この世界の人じゃなかったんだ」

「……ど、どうして……?」

「さあ? そう思ったのは晴夜だけだから、彼に聞いてみないと……」

それで、どうなの? 言いたくないなら、無理に言わなくても良いけど……」

晴夜だけが感じ取った違和感の正体を知りたく、教えて欲しいと頼んできたマナに対し、マユは視線を横へ向けて黙り込んでしまう。

そんな彼女の姿を見て、どこから来たかどうかはひとまず置いておき、今は別の質問に切り替える。

「じゃあなんで、みんなにあんな事言ったの?」

「……だって、あいつ強いし……手も足も出なかった……あたし、何も出来なかった」
先ほどの戦いで、自分はキルバスに対して何も出来ず、ただ見ているだけしかできなかった。それが悔しくて、怖かった。

彼女の心には、そういった感情が存在していた。

彼女にとって『恐怖』は、今まで生きてきた中で一度も経験したことのない、未知の

感情であった。

これまではどんな暴漢や不良が襲い掛かっても、誰一人として自分には勝てず、拳一つで全てを返り討ちにして来た。だから彼女は『恐怖』という感情とは無縁であり、常に自分の方が優位で、強いと思っていた。

「……………あんな奴、敵うわけない……」

だがキルバスに対しては、戦わずとも勝てる気がしなかった。

なまじ相手の強さを直感的に理解出来るが故、余計にそう感じてしまったのだ。

そのせいで己の自信は粉々に打ち砕かれ、絶望感すら抱いた。

「——それでも、諦めないよ」

「えっ……………」

だがそんなマユの言葉を聞いても、マナは表情を変えずに微笑む。

彼女の言葉を聞いて声の方へと顔を向けたマユの目には、優しい笑みを浮かべているマナの顔が映った。

「これまで私達は、強い相手と戦ってきた」

ジコチュー達、エボルト、ブラッド帝国……他にも数え切れないほどの敵と、多くの仲間達が命懸けで戦い、勝利して来た。

一度は勝てないと思つた相手にも何度も挑んで来た。諦めず、戦い続けてきた。

「だから、もう一度信じて、龍牙君とまこぴーを。

私も、晴夜も、みんなが信じている。絶対にキルバスを止められるってね」

「・・・」

マナはそれだけを伝えて晴夜達の元へ戻り、マユは一人座り続けるとポケットの携帯電話が鳴り出す。

「……イリア、お目当ての物は見つかった？」

『うん！今ね、『殲滅の天使』の初回限定Blu-rayBOXを見つけたよ！これはもう買うしかないよね！』

呆れ顔で電話に出ると、嬉しそうな声で友達……イリアがそう語り出し、彼女は興奮しながら喋りだす。

「そ、それは良かったね……」

『ウイヒヒヒヒヒ!! やっぱり思った通り！此処は私達のいた世界の過去だったんだ！過去に来たってなら、元の世界ではもう売っていないグッズとかいっぱいあるかも!! この時代のお金が無いと買えないのが不便だけど……じゃなくて！』

マユ、今どこにいるの？家電屋のテレビで、私達が最初に居たフリマがヤバいことになってるってニュースが流れてて……』

「イリア……あのさ」

『ん?どうしたのマユ』

「……………何でもない。じゃあ、また後で」

『あ、ちよ!マユ』

「……………何やってんだろう、あたし」

イリアの言葉を無視して切ったことで声を無くした携帯を片手に、寝転がって独り寂しく空を見上げた。

しばらくして日が沈んだ頃。晴夜家にある実験室では、体に複数の機械のコードを取り付けて座る龍牙が、離れた位置に立つ晴夜達を視界に入れていた。

「あの……………これ本当に、大丈夫ですか?」

「心配するなって、死ぬ事は絶対に無いから。……………死ぬほど痛いけど」

不安げに尋ねる幻冬に対し、晴夜は笑いながら答える。最後に聞こえた呟きが気になったが、それ以上は聞かないことにした。

「……………なあ龍牙、やつぱり『しゃあ!』っ!」

「うお!? びつくりした…」

叫び出す龍牙に驚く和也のいる光景を見て、準備はいいのだと捉えた晴夜は取り付けた機械コードの起動スイッチを入れ、エボルト遺伝子が潜む龍牙の細胞組織が強制的に

活性化し始める。

「ツツ!!ぐあああ!!ぐつ!うああー!ー!ー!ツ!」

体の中で暴れまわる激痛に、龍牙は顔を歪めて叫ぶ。やがて全身から血管が浮き上がり始め、脂汗が滲み出る。

「まだだ……耐えろよ……龍牙っ!」

「あああ!……あたり、まえたツ!」

気絶する事すら出来ない激痛に苦しむ龍牙の姿を見ながら、晴夜は機械コードと繋がった操作パネルにあるダイアルの調整を行い。それに合わせて龍牙の細胞に潜むエボルト遺伝子が更に活性化し、比例して龍牙の苦しみに満ちた叫びが強くなっていく。

「……晴夜君!このままじゃ、龍牙君が保たないわよ!?!?」

だが悲痛な叫び声を上げる龍牙を見て、不安の色を隠せずにいる六花は思わず晴夜にそう訴える。

「ぐああツ!……いいから、続けろツ!辞めんじゃねえぞ、晴夜ア!!」

しかし尚も苦痛に苛まれながらも、龍牙は決して弱音を吐かずに叫ぶ。

「ぐあああー!ー!」

「……本当に、馬鹿じゃないの……っ!」

マユは入口から声を震わせながら、その光景を見つめていた。

そして苦しむ龍牙の姿を見ていると、彼女の中にある感情が生まれ始める。

(「なんで、そこまで出来るんだよ……」)

先ほどまで感じていたキルバスへの恐怖や絶望感など忘れ、ただ目の前で苦悶している龍牙が、仲間の為に……いや、顔も知らない赤の他人の為に命懸けの戦いを繰り広げようとしている事に、彼女の中で何か動き始める。

「まだだ……！俺は、ぜってえに……耐え抜いてやる……絶対にイイイ!!」

彼女の中で消えかけていた魂の灯火は徐々に、黄金色へと点火しつつあった。

しかし彼女はまだ、その事に気付かない。



そして迎えた翌朝、キルバスは最初に表れた公園のベンチでキルバスパイダーにキスをしながら待っていた。

「来たか……」

やがて足音の聞こえる方へと視線を向けると、八人の男女がキルバスへ向けて歩み寄っていた。

「それでエーこのパンドラボックスの糧になる準備は、出来てるのかア?上城龍牙ア……」

「……ああ。テメエをぶっ飛ばす準備なら、とっくの昔に出来てるよ」
「ふっ……ハハハハッ！面白い……」

キルバスは赤い上着を脱ぎながら立ち上がり、再びキルバススパイダーフルボトルにキスをした。

「お前の力で、最高のパンドラボックスを作ろうウ……ッ！」

そしてそう言うキルバスパイダーにボトルを差し込み、エポルドライバーへ装填する。

『キルバススパイダー！』

『Are you ready?』

「へええん、しいん！」

歯車を模したリングと赤いクモの巣のようなランナーが重なってキルバスの体が歪み、背中の辺りから出現した蜘蛛の足が覆いかぶさると同時にアーマーになる。

「存分に暴れられる場所に、案内してやろう……ハアッ！」

仮面ライダーキルバス・フェーズに変身したキルバスはパンドラボックスに手を翳すと、周囲にクモの巣のような亀裂が入り、採石場のような場所へと変わる。

「この星も……そして世界も……全て！破壊してやるッ!!」

「上等だ……世界の平和は、俺達を守る！」

キルバスが両手を広げて世界の滅亡を宣言する中、龍牙は拳を力一杯に握り締めながら宣言した。

全員はそれぞれドライバーやコミュニケーションを取り出し、ボトルやラビーズをセットする。そして龍牙はドラゴンボトルを握り、それを数回振って銀色のボトル：シルバードラゴンボトルへ変える。

『ドラゴン！クリスタル！クリア！クリスタルクロスバースト！』

『ボトルキーン！グリスブリザード！』

『プライムローグ！』

龍牙達がドライバーにそれぞれクリアドラゴン、ブリザードナックル、プライムローグボトルを差し込むと同時にレバーを操作し、C&Cスナップライドビルダー、アイスライドビルダー、プライムライドビルダーとワニの顎を出現させる。

『Are you ready?』

『変身！』

『プリキュア！ラブリンク！』

『プリキュア！ドレスアップ！』

八人が叫ぶと共に彼ら彼女らの体が光に包まれ、姿を変える。

Burst up! GET CRYSTAL CROSS—Z—DRAGON! Ye

ah!」

『激凍心火! グリスブリザード! ガキガキガキガキーン!』

『大義晩成! プライムローグ! ドリヤドリヤドリヤドリヤ! ドリヤー!』

「英知の光! キュアダイヤモンド!」

「陽だまりポカポカ! キュアロゼッタ!」

「勇気の刃! キュアソード!」

「愛の切り札! キュアエース!」

「運命の切り札! キュアジョーカー!」

クローズとソード達、キルバスとの決戦が幕を開けた。

「良いだろう! それではまず始めに、お前らにハンデをやるう!」

キルバスはそう言いながら自分の体内の遺伝子を放出し、放出された遺伝子が集まると、一つの巨大な姿へと変貌した。

全身が黒い装甲で包まれたその姿は15mくらいの巨体で、巨大な腕には鋭い爪が生えており、背中にはミサイルポッドが設置された、正に兵器と言っても過言では無い怪物が産声を上げていた。

「な、何これ……」

「デカすぎる……」

「これはお前らの知るスマツシユの記憶から作り出した『デストロイスマツシユ』!」

コイツは俺の遺伝子から直々に作ったから、今の俺はちよつとだけ弱体化している。丁度いいハンデマツチだろオ?」

「デストロイスマツシユ・・・」

「ハンデマツチだと……舐めやがって……!」

「さあ〜コイツツ、ショータータイム!」

キルバスが手を上げながらそう叫んだ瞬間、デストロイスマツシユのミサイルポッドからミサイルが一斉発射され、戦いの幕が上がった。

「……は任せろ!」

「龍牙さんとソードはキルバスを!」

「行くわよ!」

クロース達に向けて放たれたミサイルをすぐ様全員が飛び上がって回避し、着地すると同時にクロースとソードにキルバスの相手を任せると、ジョーカーがミラクルドラゴングレイブを手を持って先陣を切る。

「はああ!」

ジョーカーの放ったミラクルドラゴングレイブの一撃が、デストロイスマツシユの胸部部分に命中する。しかし……

「そんな……!?!」

「効いてない……ッ!」

デストロイスマツシユの装甲には、傷一つ付いてなかった。

攻撃を加えた筈なのにダメージが無い事に驚くジョーカーだが、すぐに後ろへ飛んで距離を離す。

『荳? 蛹ヶ谿九i 纏壹? 纏] 谿コ 纏励※ 纏? k 纏くく!!』

だがそれよりも早くデストロイスマツシユからパンチが放たれ、それによってジョーカーが吹き飛ばされそうになる。

「ジョーカー!」

間一髪ロゼッタがデストロイスマツシユの前に出て、ロゼッタリフレクションを作り出しジョーカーを守る。

「ッ!? こ、この力、は……!」

しかし思っていた以上に威力が高かったのか、ロゼッタは膝を着いて押し込まれそうになってしまう。

「オラア!」

それを見たグリスが咄嗟に相手の腕をパンチし、攻撃の軌道逸らしてロゼッタとジョーカーを救う。しかしデストロイスマツシユはすぐ様第2波として腕を上げ、今度

は三人諸共叩き潰そうとする。

「こつちだ!」

ローグはネビュラスチームガンを放ち、自分に引きつけようとする。

その狙い通りデストロイスマツシユはローグに向かつて拳を振り下ろし、巨大な拳をローグはスライディングしながら必死に避ける。

「ロゼッタ! ジョーカー! 大丈夫か?」

「はい! ありがとうございます」

グリスがロゼッタ達の無事を確認すると、ローグがダイヤモンドのいる場所へと引きつけた。

「ダイヤモンドさん!」

「ええ! プリキュア! ダイヤモンドシャワー!」

ダイヤモンドはラブハートアローを手に持ち、必殺技を放つ。放たれた無数の氷の飛礫は、デストロイスマツシユの手足を凍らせた。

「ラブキッスルージュ!」

その隙にエースがラブキッスルージュを出現させると、それを自分の口へと塗り、前方に生成したハート形のエネルギー体が生成される。

「ときめきなさい! エースショット! ばきゅ〜ん!」

両手持ちして頭上に掲げたラブキッスルージュを振り下ろし、エースショットを放った。

それはデストロイスマッシュに命中し、大爆発を起こす。

「どうですか!」

「やったかしら……」

「——いえ……駄目ですわ……!」

ダイヤモンド達が敵の撃破を期待するが、エースがそう呟くと同時に巨大な腕が爆煙を振り払い、それによって煙が晴れた先には傷一つ付いていないデストロイスマッシュの姿があった。

「そんな……」

「嘘でしょ……!」

「なんて頑丈なの!?!」

「あれだけの攻撃を受けても、無傷だと言うのですか……!」

ダイヤモンド達が驚愕する中、デストロイスマッシュは掌にある砲台らしき穴から光線を発射して、全員を攻撃する。

「うっ!」

「きゃあ!」

「ぐう!」

「ぬお!」

「はあああ!」

光弾を受けて倒れるグリス達だったが、すぐ様起き上がると、デストロイスマツシユへと再び向かっていく。

そしてクローズとソードの二人は、キルバスとの攻防を繰り返していた。

「ハアツ!」

「オラツシヤアアアア!!」

「ぐああ!」

クローズはキルバスの攻撃を避けながら、キルバスの腹部目掛けて蹴りを放つ。しかしその攻撃も防がれてしまい、逆にキルバスに腕を掴まれてしまい、投げ飛ばされてしまう。

「はあー!」

地面を転がるクローズに代わってソードがキルバスへ接近し、キックによる連続攻撃を繰り返す。

しかしキルバスはソードが繰り返したキックを余裕で躲し、ソードの背後を取るとそ

のまま殴り飛ばす。

だがソードは相手のパンチをギリギリ受け流し、地面に足を付けると同時にそのまま突っ込んでパンチを繰り出した。

「龍牙！」

「おう！ハアッ！」

そこで今度はクローズがクリア・クリスタルフォームの特性である超スピードを使って、キルバスへキックによる高速攻撃を仕掛けた。それに対してキルバスも蹴りで応戦し、互いに一步も譲らない攻防を繰り広げる。

だがここでクローズがキルバスの首に回し蹴りを決め、一瞬怯んだ隙に繰り出されたパンチがキルバスの顔面に当たった。

「ハッハア！効かねえなアアア！」

だがキルバスは全くダメージを受けた様子を見せず、逆にクローズの横腹に強烈な蹴りを叩き込む。

それによりクローズは吹き飛び、口から血を流しながら地面を転がる。

しかし、そのタイミングでキルバスは手から糸を飛ばし、それをクローズの腕へと巻き付けた。

「ぐわっ！」

キルバスに引っ張られるクローズ。だがクローズはその反動を利用してキックの反撃を仕掛け、キルバスを吹き飛ばした。

「おらあー!」

吹き飛ばされたキルバスへ更に連続パンチを決めようとするも、キルバスは空中で体を立て直し。クローズの攻撃を片手のみで全て受け流し、地面へと着地する前に再び蹴撃を見舞わせる。

その一撃によつて、またもや吹き飛ばされるクローズ。それを見たソードはすぐさま駆け寄り、援護しようとする。

「ハツハツハツハツハ！そんなもんかあ?」

高笑いしながら二人に挑発するキルバスは、エボルドライバーからカイゾクハツシャーを生成すると、電車型攻撃ユニット『ビルドアロー号』を引いてエネルギーをチャージしながら攻撃しようと構える。

それを見たソードとクローズはすぐに立ち上がり、その場から離れようとした。しかし二人が離れようとするよりも早くユニットを離すと、そこから強力な電車型エネルギー体が発射され、二人の足元に着弾して爆発する。

その衝撃により二人は大きく吹き飛び、距離が大きく離れてしまう

「だったら……これで終わりだ!」

「龍牙！」

そうしてキルバスが一人ずつ仕留めようと、クローズに海賊ハツシャーを振り下ろそうとしたが、振り下ろされた瞬間に突如クローズの背中から赤いオーラが出現し、キルバスの攻撃を受け止める。

「くっ……あつ……ウツ……なん……だと!？」

『久しぶり……でも無いか……!』

クローズの体から離れたオーラが一つに集約され、人型の姿となっていくと、そこに仮面ライダーエボル・フェイズーとなったエボルトが姿を表す。

「でやあ!」

「ウオオオオツ!」

クローズを助ける為、仮面ライダーエボルの姿で現れたエボルトはキルバスに回し蹴りを食らわせて吹っ飛ばし。そのまま拳を振るい上げ攻撃を仕掛けるが、キルバスも負けじと拳をぶつけ合って相殺させる。

「生きてたかあ……エボルトオ!!」

「フツフツフ……お陰様でなあ」

キルバスは自分の攻撃を防いだエボルに苛立ちを感じながら、嬉しそうにそう叫ぶ。対してエボルは冷静な態度で笑みを浮かべるが、苛立ちを隠そうともしない声でそう嫌

味を飛ばす。

やがてエボルが殴り合いに押し負けてクローズらの方へと吹き飛ばされると、二人の方へ顔を向けて軽快に声を掛けた。

「ハツハツハツ! やっぱ、俺だけじゃ無理だなあ………やっぱ、お前らと一緒に戦った方が良さそうだア!」

「……エボルト、裏切つたらただじゃおかねえぞ!」

「信用無いねえ………楽しくやろうじゃねえか、相棒お!」

「相棒じゃねえ!」

「いい加減にしなさい! 行くわよ!」

「よし、やるかあ!」

エボルの手を押し退けたクローズと一緒にキルバスに攻撃を仕掛け、エボルも愉快そうに笑いながらそれに加勢した。



「………ねえ。どうして、二人は行かないの?」

晴夜とマナの二人と研究室に残っていたマユは、二人は何故龍牙達と一緒に行かない

のかと尋ねる。

「あいつに、来るなって言われたから？」

彼女の言うあいつとは当然エボルトの事であり、昨晚エボルトがキルバスを撃破する条件として晴夜とマナの二人に『お前らは手を出すな。ここで留守番している』と告げた事を思い出した。

「それもあるが、奴を倒すのに必要なアイテムを作るには、どっちみち時間が必要だ。

その為に俺がここに残って、奴を倒す秘策アイテム……マッスルギヤラクシーフルボトルを完成させなければならぬんだ」

「その秘策アイテムが完成すれば、キルバスに勝てるの？」

「わからない」

「……ハア!？」

晴夜の話聞いたマユは勝てるかどうか質問するが、彼は首を横に振った。

「そもそも、龍牙達がキルバスに勝てたのは。龍牙がクローズエボルに、まこぴーがクリスタルモードになった事を考慮しても、あいつがビルドドライバードで変身した……いわば『不完全体』だったからだ。

そして今、エボルドライバードで変身した最も『完全体』に近い力を得たキルバスを相手にしたら、勝てる可能性は低いだろう……」

「なら、何の為に作ってる訳!？」

「…だけど、何も準備しないで挑むよりかは勝機は高い。でしょ? 晴夜」

晴夜の言葉が無責任に聞こえたマユは怒りを露わにするも、それを落ち着かせながら彼女の肩に手を置くマナ。その表情を見て、晴夜は頷いて答えた。

「ああ……それに、エボルトと協力するより勝率の高いクロースビルドに変身出来るか出来ないか分からない以上、仮に俺がジーニアスフォームに変身したとしても、俺達が万全の状態で挑んだとしても、勝てる確率が低い相手だからな。

だったら単体での戦闘能力が高いエボルトと、俺とマナを天秤にかければ。エボルトに協力してもらった方が勝率は高くなる。それだけの話だ」

「それは……そうかもしれないけど……!」

「落ち着けよ。ほれ、飴やるから」

晴夜の説明を聞いたマユは納得しかけるも、それでもエボルトに協力を仰いだ事にはやはり不満がある様子。そんな彼女にポケットから取り出したイチゴ味のキャンディを差し出すと、マユは無言で受け取って口に入れ頬張った。

「でも、変な感じだよね。エボルトと一緒に闘うなんて」

「そうだね……」

ふと呟かれたマナの言葉を聞き、晴夜は思い返す。

三年前に世界の運命を懸けて戦った敵である、エボルト。

晴夜自身を仮面ライダーとして成長させて、龍牙に植え付けられたエボルト遺伝子を使い、自らの本来の力を取り戻す為に利用した存在。

そんな宿敵と一緒に戦う事になるなんて、ほんの少し前までは思ってもみなかった。しかし、キルバスという共通の敵が現れた以上、四の五の言っていられない状況である事もまた、事実なのだ。

「……あの人、自分の家族がエボルトって奴に殺されたんだって……」

「……みたいだな。龍牙に聞いた」

「普通、色んな人を殺した様な相手と協力だなんて、考えられないでしょ。」

ましてや、自分の家族を殺されたらさ……

それでも貴方達は、あんな奴と一緒に戦うっての？」

だが彼女は人の命を何とも思っただけそうなのと協力する晴夜達や、両親を殺され恨みを抱かずにいられない筈の存在と手を組んだ龍牙の考えが理解できず、思わず疑問を口にしてしまう。

「結局アンタもあの人達も、自分が助かることしか考えてないでしょ……」

「違う。そうじゃないよ」

救いのヒーローだのなんだの言っているけど、所詮は自分さえ良ければそれでいいと

いう考えを持つ者ばかりだと口にする、それを否定する様に晴夜がマユの言葉へ反論をする。

更にそこへマナが彼女に向けて、諭すように語りかけた。

「……あのね、マユちゃん。私だって、本当は怖いよ。」

沢山の人を犠牲にしてきた様な、悪い人と一緒につて考えるだけでさ……」

「えっ?」

「でも、それでも私は、この世界を……みんなを守りたいんだよ。」

だから今は怖くても、立ち向かうんだ。皆が幸せになれる未来の為に」

「……」

「勿論、俺も同じ気持ちだよ。」

俺は、俺が守りたいと願うものを守るだけ。

それは他の奴らも、龍牙も、同じだ」

マナに続き、晴夜もマユに語る。自分達が、龍牙がどんな思いで戦っているのかを。

「確かに、初めて会った時のあいつのままだったら、そうだったかもしれない……」

特に初めて出会った時の龍牙は、自分の為やキュアソードを守る事しか頭になかっ

た。

「けど、今のあいつは……」

だが彼は一緒に戦う内に、己自身や身内だけでなく、みんなを守る為に、明日を作る最高の仮面ライダーとなった。

そして今も、彼はその想いを貫き通そうとしている。例え、悪魔の手を借りる事になろうとも。

そんな事を思っていると研究所内に巨大な音が大きく響き渡り、音源であるポトル生成装置を兼ねたレンジの扉が開く。

「出来た！マッスルギヤラクシーフルポトルッ!!」

凄いでしょ！最高でしょ！天才でしょー!!」

「久々だねー!」

晴夜はハイテンションな声で叫びながら、レンジから出来上がった大型のフルポトルを取り出し、髪を『ピョン』とはねさせて興奮しながら高く掲げた。

「……それで、どうすんの？アイツに来るなって言われてるけど、行くの？行かないの？」

「いや、エボルトの事だ。これを届けに行っただけでも『約束を破ったから、取引は無しだ』って裏切りかねない」

「そっかあ……」

「だから……悪いけど、龍牙にこれを届けて」

てしまっていた。

「和也さん！」

「幻冬！」

そのまま地面へ勢いよく落ちた和也の元にロゼッタ達が駆け寄り、心配の声をかける。

「まるで歯が立たない……！」

「どうなってるんだ……！」

「今までのスマッシュとは、レベルが違う……ッ！」

一方でダイヤモンドは先程までの戦いを思い出し、焦りを含んだ声を漏らすと、それについてデストロイスマッシュによって変身解除された和也と幻冬も、悔しげに呟いた。

「当然だ！こいつはあくまで俺の擬態……つまり！今の俺とほぼ同じ存在ッ！」

お前ら人間……いや、猿ごときが勝てる相手じゃねえんだよ！」

これまでに巨大な姿をした相手とは何度か戦ってきた一同だったが、目の前にいる巨大怪人はただデカイだけではない。

キルバス自身が、自らの細胞から生み出したというデストロイスマッシュは、硬い。

そう、兎に角硬いのだ。

例え人数の有利があるとはいえ、これまで何度も強力な攻撃を放ってきた彼等の攻撃が通用しない。それどころか、傷一つ付けられていない。

その事実が全員の心に重く押し掛かり、思わず顔を俯かせてしまう。

「それでも、負けないッ!」

「ダイヤモンド!」

だがそれでも諦めずに立ち向かうダイヤモンドだったが、デストロイスマッシュは容赦なく彼女に向けテレフォンパンチを放とうと拳を振り上げた。

それを見たロゼッタは、ダイヤモンドへと繰り出されたパンチを受け止めようと、前へ飛び出てロゼッタリフレクションを展開する。

「辟。鬧?」「鬧?」「鬧ッ!」

「うわああああああ!」

だがロゼッタの展開したバリアは意図も簡単に破壊されてしまい、守ろうとした筈のダイヤモンド諸共、吹き飛ばされてしまった。

「六花!ありす! あがッ……くそがあ……」

その光景を見て和也が立ち上がろうとするも、既に体力の限界だったのか、膝を着いて苦しそうな表情を浮かべ、立つことの出来ない己を呪った。

「ヤアアア!」

「いっちょよー！」

そしてエースとジョーカーは、デストロイスマツシユの左右から挟み込む形で攻撃を同時に仕掛けるも、デストロイスマツシユは二人の攻撃を巨大な腕で難なく防ぎ、そのまま背後に搭載されたミサイルが二人に向けて発射された。

「うわあああああ！」

ミサイルが直撃した二人はそのまま吹き飛んでしまい、バランスを保てないまま地面に打ち付けられ、更にその衝撃で全身に痛みを感じながら悶え苦しむ。

「お前らッー！」

「ッ!? 龍牙!」

仲間の心配をする二人を尻目に、エボルはキルバスに圧倒されて踏みつけられていた。

「エボルトオ! 忘れたかア? お前は一度として、この兄に勝ったことが無いということをお!!」

キルバスはカイゾクハッシャーとドリルクラッシャーの二刀流でエボルを締め上げると、エボルの身体から肉体が軋む音が鳴り響き始めた。

「ぐうつ……!」

「はあ! ハッハッハッハア!」

そしてトドメと言わんばかりにエボルの体を両断するように斬り裂き、大きなダメージを食らったエボルはそのまま膝を着くと、そのままうつ伏せで倒れ込んでしまった。

「ウオオオオオオッ!」

「ハツハツハツハツ……!ハアアッ!」

仲間が次々と倒れていく姿を見て、怒りが爆発した龍牙（エボルトはクソ野郎なので全く可哀想とは思っていない）はキルバスの背中目掛けてパンチを仕掛けるが、キルバスはそれを見透かしていたかのように攻撃を避け、そのまま連続で斬りつける。

「ドルウアアアアアッ、ハアア!」

「ぐわあ!あつ……!」

そのままカイゾクハツシャーとドリルクラッシュシャーを振るって、最後に放った強烈な一撃を受けたクロースは地面へ倒れる。

だが自身の名を呼びながら駆け寄るソードの声を聞き、なんとか起き上がろうとするクロース。

「ハハハハッ!いよいよ、あの時のリベンジがア……」

いやッ!この際、復讐だの何だの、そんなくだらない事はもうどうでも良い!!

俺は貴様らを一匹残らず鬺り殺してエネルギーを得る!そしてエ、全平行世界と心中するッ!!」

「く、くそお……」

早くも勝利宣言するキルバスの言葉を耳にし、悔しげな声を上げながらもかろうじて立ち上がったクローズ。

しかし、クローズとソード以外の面々は既に再起不能同然の状態で、エボルトの方はまだ戦えるだろうが万全の状態では無い。かと言って残った二人だけでは、キルバスとデストロイスマッシュの前ではあまりに無力だった。

だがその時、戦場に突如バイクのエンジン音が聞こえ、一同は敵味方関係無く音の鳴る方へ顔を向ける。

「あれは、晴夜のバイク……」

その音が鳴った方向にある光景を目にした龍牙は、音の正体が晴夜がずっと愛用しているバイク『マシンビルダー』だと気付く。

しかしそのバイクの乗った一人の人物は、フルフェイスのヘルメットを被っているの
で誰かまでは分からないが、体格からして晴夜ではない事は確かだった。

「フーン！」

だがキルバスは誰だろうが関係ねえと言わんばかりに光弾をぶん投げて、マシンビルダーの進行先の地面を爆破させてバランスを崩させる。

それによってバイクに乗っていた人物はシートから投げ出されてしまい、その弾みで

フルフェイスヘルメットが外れ、その素顔が露わになった。

「マユ!」

「くっ、うっ……!」

その正体は、マツスルギヤラクシーフルボトルを届けに来たマユだった。

落下の衝撃で身体に強い衝撃を受けた所為で顔が苦痛で歪んでおり、それでも何とか立ち上がって再び龍牙達の元へ向かおうとする。

「ハッ、あの時の雑魚か……やれ!」

だがそんな彼女を見て、キルバスは不敵に笑みを浮かべながらデストロイスマツシユに命じ、デストロイスマツシユは手の砲台から放ったビームをマユに浴びせようとする。

「だぁー!ー!ー!ッ!クソがアアアアア!!やっぱり来るんじゃないやなかつたよバカやろオオオオオ!!!」

自身へ向けて放たれたビームに気付いたマユは、必死に脚を動かして逃げようとするが、気付くのが早かろうが遅かろうが、今の彼女の脚力ではデストロイスマツシユのビームから逃げ切れる確率はゼロに等しかった。

その事を直感的に察した彼女は、こんな所に行こうと思った己自身に向けて悪態を吐きながら、これから訪れるであろう結末に思わず涙した。

「やめろおお！」

「な……ッ!？」

だがそんな結末は許さんとばかりに、マユの前に走って現れたクローズがレバーを回す。

『クリスタルブレイク！ガキガキガキガキーン！』

「うおおおおお!!?」

するとクローズの背中にあるクリスタルの翼『クリスタルパイロウイング』が光り出し、その翼に搭載された、敵の攻撃と力を吸収して、それを自身の力として集束させる機能を使ってビームのエネルギーを吸収し、その力をブーストさせて攻撃を跳ね返そうとした。

しかし、これまで受けたダメージの蓄積で『クリスタルパイロウイング』の機能が正常に作動せず、本来なら処理できる筈のエネルギーを処理し切れず、オーバーヒートを起こそうとしていた。

「閃け！ホーリーソード！」

だがソードがデストロイスマッシュの顔面めがけて技を放って怯ませ、ビームを中断させる事に成功する。

おかげでオーバーヒートは免れたが、本来翼へ行つてクローズの力へ変える筈だった

エネルギーが龍牙の肉体へとダイレクトに流れて行ってしまう。不純なエネルギーを受け取った代償として、強制変身解除した彼の身体には火傷に近い症状が現れてしまっていた。

「ぐうツ、ふう……大丈夫か……？」

「う、うん……」

「龍牙！マユも大丈夫か？！」

ソードは敵のビームを腕二本で防いだ龍牙と、狙われたマユに大丈夫かと心配するも、親指を上げて大丈夫だと示す龍牙と、大した怪我もないマユを見て一安心する。

そして龍牙は皮膚の痛みによる表情の変化に耐えながら、ソードの手を借りて立ち上がる。

「嬉しいねエ〜！まだそんな力があるとはなあ!!」

「……晴夜のアイテム……出来たのか？」

キルバスが立ち上がった龍牙とソードを見て愉悦そうに歓喜する中、龍牙はマユが目的にもなくこんな所に来るはずがないと考え、次に自身の強化アイテムを届けに来たのだと当たりをつけて、彼女に問い掛ける。

「でも、その体じゃ！」

「いいから貸せ！」

龍牙の問いを肯定するように懐から取り出したマッスルギヤラクシーフルボトルを手を持つマユだったが、今の彼の状態を見て使用は困難と思つた彼女はそれを止めようとす。

しかしそれでも龍牙は彼女の持つボトルを渡す様に言い、彼女は渋々だが彼に完成したマッスルギヤラクシーフルボトルを手渡す。

「おいおい。今のお前がそいつを使つて、勝ち目あるのか？」

そこへ、キルバスから受けたダメージを少しでも回復しようと寝転がっていたエボルトの嘲るような声が聞こえ、龍牙は振り返つて睨みつける。

だがエボルトの言う通り、今のキルバスはハルモニアで戦つた時とは比にならぬ戦闘能力を保有しており、今ここで晴夜の完成させたマッスルギヤラクシーフルボトルでクローズエボルトに変身出来たとしても、奴に勝てる見込みは未だに薄い。

「うるせえ！こうなつたら、一か八かだ！」

『マツチヨオ！フォーバー！』

それでも龍牙はマッスルギヤラクシーフルボトルを使用する事を決め、ボトルのスイッチを起動するとそのままドライバーに装填し、レバーを回転させる。

「づつ…ぐああああッ！」

「龍我！」

「大丈夫…!?!」

だが今の身体で変身するには無理があつたようで。ドライバーからはスナツプライドリルダーの代わりに電流が流れ、変身失敗した龍牙はダメージを負つて倒れる。

ソードは咄嗟に龍牙に駆け寄り、マユは身を案じるように呼び掛ける。

「最後の悪あがきは終わったようだなア?フツフフ……」

そしてクロースエボルに変身する事すら出来ない龍牙に、キルバスは嘲笑うように見下しながら近付く。

「フハハハハ……ッ!」

だがその時、突如倒れて寝ていたエボルが笑い始め。それに反応して龍牙達の視線が一斉にエボルへ集まり、同じく反応したキルバスの動きが止まる。

「……何がおかしい?」

「いやア……違うんだよキルバス。『やつぱり、人間じやこの辺りが限界か……一瞬でも期待した俺が馬鹿だったよ……!』って、思っただけだ……」

自身を嘲笑つたのだと思つたキルバスが不機嫌気味に弟へと問うと、エボルはフラつきながら起き上がり。進行方向を塞ぐように立っていた龍我に近づくと、彼の顔を見つめて残念そうな様子を見せたかと思うと、彼を押し退けてキルバスの方へと近付いていった。

「キルバス：今更だけど俺も仲間に入れてくれないか？」
「……アア？」

突然エボルがキルバスと共に戦おうと申し出た事に、龍牙達は驚きの声を上げる。

それを聞いたキルバスは「なに訳のわからないを」といった感じで首を傾げるが、和也達はエボルトの裏切りに怒りを爆発させ、しれつとしてゐるエボルへと怒鳴り付ける。

「エボルト！てめえ！」

「裏切ったのか！」

「そんな!?？」

「やっぱり騙してたの!？」

「少しは信じてたのですが！」

「やはり……あなたは敵だったという訳ですか！」

「……人を批判する暇があるなら、もう少し抗ったらどうだア？でない」と――

皆が揃って非難する中、エボルはマユの前へ高速移動すると、彼女の首を締め上げ、持ち上げる。

「ぐあ、あ”つ……!!」

「こくなるからよお〜」

「マユー!」

それを見て血相を変えて叫ぶ龍牙とソード。同じくそれを見て愉快そうに爆笑するキルバス。

和也達は助けようとするが、エボルはマユの首を掴む手に力を入れると、苦しみ悶える彼女をまるで人質にする様に見せつける。

「ハア……全く、失望したよ。人間が、これ程弱い生き物だったとはなあ……」

「ふざけるな!みんなは……俺が救う……!」

エボルは地に伏した彼らを見てがっかりしたようなジェスチャーを行うが、それでもまだ諦めていない龍牙が立ち上がる。

「おいおい。お前じゃ無理だろ?なんせ今のお前は、そのボトルを使って変身する事も出来ねえんだからなあ」

「……ッ!」

エボルの言葉に、龍牙は思わず息を呑む。

エボルトの言う通り、今の龍牙は変身どころか立つのもやつとの状態であり、とても戦える状態ではない。

キュアソードはまだ戦えるだろうが、キルバスに加えてエボルトまで相手にすれば確実に勝ち目はない。

「これでも、お前らには期待してたんだがなあ……実に残念だ。

本当に、残念だ……なっ！」

「うあ、がつ、あ、ああ……」

エボルはそう残念そうに呟くと同時にマユは締め上げられ、彼女の口からは苦しさに塗れた声が漏れる。

その時、龍牙とキュアソードの脳裏には、トランプ王国で起こった惨劇がフラッシュバックし。自分達の力不足が原因で、目の前で仲間を……身近な人を……大切な人を失ってしまった時の絶望感を思い出す。

『いいから、早く逃げて……奴に、出会う、前……に……』

『龍牙……、私……何も守れなかった……』

（あの時と同じだ……また俺は、何も守れずに失うのか……う？）

（嫌だ……！私もう、何も失いたくない……！）

何も守れず、自分だけ生き残りたくないッ!!）

龍牙とソードは、心の中で強く叫んだ。

すると二人の身体に力が溢れ出し、全身に赤いオーラが纏わりつく。その現象に和也達とキルバスは疑問符を浮かべるが、エボルだけはその現象が何なのかを知っていた。

「させねえ……ようやく、胸張ってヒーローになりたいって、言える様になったんだ！

「ここで、終われるかよッ!!」

「もう……誰も悲しませない!絶対にッ!!」

もう、あんな悲劇を起こさない。みんなを絶対に守る。

その強い思いを、硬い決意と共に叫ぶ。

その時、龍牙の持つシルバードラゴンボトルとソードのラビーズが光り出した。

「うるせえなア……神経が苛立つ」

——それと同時に、エボルの指先から放たれた赤黒いビームが、ソードの胸を貫いた。

「あつ——」

「ま、ま………真琴オオオオオオオ!?」

それによりソードが膝を折って崩れ落ち、龍牙は思わず絶叫する。エボルは倒れて血反吐を吐くソードを見下ろしながら、静かに語りかける。

「悪く思うなよ。呪うなら、仮面ライダーなんかと関わった、己の運命を呪うんだなあ」

「カヒュー……カヒュー……!」

エボルの問いに対し、ソードは何も答えない。何も答えられない。ソードは今にも消え入りそうな意識の中、自分の命の終わりを感じていた。

(あー………何だか、疲れたな……)

エボルの一撃により、ソードの命は風前の灯火であった。

しかし彼女は死への恐怖ではなく、ただ漠然とした虚無感を感じているだけだった。

(結局私は、何も守れないで死ぬのかな……)

ソードは自身の弱さを嘆き、そして後悔する。

もつと強ければ、こんな事にはならなかったのではないか？

もつと賢い選択があつたのではないかと……

そう自問する中、ソードはふと、自分がこれまでの人生を思い出していた。

(そういえば私……今まで、ずっと誰かに助けられてばかりだったなあ……)

女王様やダビィ、マナに晴夜、そして……龍牙。

私はいつも、みんなに支えられてきた……

だから、今度は私がみんなを助ける番だつて思つて、頑張つて来たけど……やつぱり

ダメだつたみたい……

ごめんね、みんな……本当に、ゴメン……)

そう思い、ソードはゆつくりと目を閉じようとした。だがその時——

「真琴ッ！死ぬんじやねえッ!!真琴オオオオオオ!!」

突然聞こえた声に、ソードは思わず目を開く。

そこには、必死の形相でソードに向かって叫ぶ龍牙の姿があつた。

「俺が必ず助けるから、諦めんな!!頼む、生きてくれ!!」

「り、龍牙……」

ソードは目に涙を浮かべ、震える声で彼を呼ぶ。

(……そうよ、剣崎真琴。心臓を貫かれたから何?痛みがあるから何?

苦しみを感じる事が出来る。なら、私は生きているじゃない……

それなのに、勝手に諦めて死のうとしてるなんて……

バカよ、私。本当に、大馬鹿だわ……!)

そう思った瞬間、彼女の胸の奥に熱い何かが込み上げてくる。それは彼女の心に火を付け、再び立ち上がる力を与えた。

(私は、諦めない……諦めたくない……)

このまま、何も成せないまま死ねないっ!

龍牙の為にも、マナ達の為にも、

私は絶対に……諦めないッ!!)

ソードは自分の血で濡れた胸に手を当て、ラビーズを握りしめる。

すると龍牙が持っていたクリスタルボトルが輝き始め、蒼いドラゴンの頭部の型をした宝石がはめ込まれたキュアラビーズがソードの手の中に置かれた。

「…………ふっ、解ってるじゃない」

その光景を見て微笑むと、ソードは唾然とする龍牙に向けてサムズアップをする。

そんな彼女を見たキルバスは何をしようが無駄だと言わんばかりに溜息を吐き、エボルトはマユの首を絞める手を緩めながら何かを期待するような目で見つめていた。

「……ああ、そうだな。プリキュアってのはそういう奴だよなあ、キュアソードオー！」
「ま、待て！お前はもう動くな！死ぬぞ?!」

「そうだビィ！これ以上動いたら、出血のし過ぎで死んじゃうビィ?!?!」

エボルトの言葉を聞いたキルバスは「だから何言ってるんだお前は」と呆れ果てるが、逆に龍牙とダビィはその行動を止めようとする。

だがソードは。首を横に振った。

「大丈夫。ゲフツ……もう決めたの……私は、みんなの為に戦う。」

この命を賭けてでも、守りたい人がいるから」

「真琴……」

「準備は良い……?ダビィ!!」

「待つビィ!!今変身したら『クリスタルラビーズ！セット!』ソード!!」

ソードはコミュニケーションに無理やりクリスタルラビーズを嵌めると、クリスタルラビーズが赤黒く輝き始め、それに連動して彼女から零れ落ちた大量の血が結晶となって宙に浮かび上がった。

そしてそれがソードの傷口に集まり、みるみると塞いでいく。

「ぐうううう……!!」

「おお! 凄えじゃねえか、おい!」

「これが……プリキュアの力……!!?」

「いや、違うね。これは……フフフ……」

ソードの驚異的な回復力を目の当たりにして驚く龍牙とキルバスだが。その一方でエボルは、ソードが今使っている力が自分と同じ物だと確信し、口元を歪ませる。

一方、ソードは苦痛に耐えながら立ち上がり、そして叫んだ——否、吼えた。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

瞬間、彼女を中心に爆風が吹き荒れ、それを間近にいた龍牙とエボルト（に掴まれているマユ）、キルバスは腕で顔を庇いながら飛ばされないように踏ん張る。

そして離れたところで倒れていた和也達は、風圧に耐えながらソードの方へと視線を向けた。

「きやあ!!? な、なんて力!」

「な、何が起きたんだ!」

「わ、わかりません……ですが、ひとつ言える事があれば……」

ソードの変貌ぶりに驚き戸惑う和也と、その様子を見ていたダイヤモンド達。

「ツー…そんな事を…!!?」

「まあ、まさかこんな結果になるなんて、俺の方も完全に予想外だったけどなア!」

エボルの説明を聞いて激昂する龍牙、対するエボルはマユを投げ捨てながら頭を抱えて笑い声を上げた。

一方のキルバスは、自分が与えた傷が完全に癒えて復活したソードの姿を見ると、彼女の持つ凄まじいエネルギーに気分を良くする。

「ハツハツハツハツハア!これは面白い!上城龍牙に匹敵しかねないエネルギー!これをパンドラボックスに注ぎ込めば——」

「——キルバス」

歓喜の声を上げるキルバスの言葉を遮り、新たなる変身を遂げたソードが冷たい声で彼を呼ぶ。その顔には先程までの余裕の無かった表情ではなく、激しい怒りが込められた鋭い眼光が宿っていた。

「まずお前から血祭りにあげてやる」

「はあ?」

そう言うや否や、ソードは先程とは比べ物にならない速度で突進した。

彼女の言葉に呆気にとられたキルバスは反応が遅れ、ソードから貰ったリアットを喰らって、その先にあつた崖へ目掛けて衝突。大きいクレーターを作る様にめり込ませ

た。

「ぐうおおお!?」

「ウオオオオオオオオ!」

「キイイイーークソがああ!!」

フリアットを受けたキルバスが痛み——それこそ、ここまで龍牙達がまともに与えられなかったダメージ——に悶えている隙に、ソードは右手に蒼い炎を纏わせた。

「がアアツ!」

そしてそれをキルバスの顔面に向けて放つと、崖が土砂崩れを起こすレベルの爆発を起こした。

「うわっ!?!」

「きゃあ!」

巻き起こる爆風から身を守る為、和也達は地面に伏せる。

そして爆煙が発生すると、その中から激しい音と共にソードが飛び出し、それを追う様にキルバスが姿を現す。

「——復讐なんざ、もうどうでも良いと思つたがア……」

それはそれとして、貴様には!…この世に生まれた事を後悔させながら! 惨殺処刑してやるウツ!!」

「ぐおおおおおー！！！！」

ソードは更に追撃を仕掛けようと、足に力を込める。

するとその時、彼女の背後から蜘蛛の脚が出現し、不意を突かれたソードはその攻撃をモロに受けてしまう。

「ガアー！！」

「ハツハア！！後ろがガラ空きだぜエ！！」

「チイツー！」

ソードは舌打ちしながらキルバスから離れ、距離を取る。

そして自分の後方に目を向けると、そこにはキルバスの分身体とも言えるデストロイスマツシュが居た。

デストロイスマツシュは彼女へ向けて巨大な腕を振り上げるが、その前にソードが胸元へ向けて跳び上がり、脚に力を入れる。

「ぶっ飛べ」

「ッ！！」

ソードは空中で体を捻らせると、右足に蒼い炎を集中させる。そしてそれを解き放ち、デストロイスマツシュの胸部へキックを叩き込む。

キックを叩き込まれたデストロイスマツシュには、それでも傷一つ付くことは無かつ

た。

無かったが、その代わりデストロイスマツシユの硬い装甲には、大きな凹みが生まれていた。

「蝌……!?!」

遠くへ蹴り飛ばされたデストロイスマツシユを見ながら、ソードは無言のまま着地すると、再びキルバスの方へ向き直る。

一方でキルバスは驚愕していた。自分にダメージを与えた事や、デストロイスマツシユをぶつ飛ばした事だけでは無い。今のソードの攻撃力が、先程までとは比較にならない程上がったからだ。

(なんだ、あの力は? 何故あれ程の力が出せる?)

先程のラリアットは、確かにキルバスへ大ダメージを与えるには十分過ぎる威力だった。

だがこの状況で一番重要なのは、この短時間の間に、ソードは更なるパワーアップを遂げている事だった。

「……どうい原理か知らんが、まあ良い。

お前がエボルトの力を得ようが、俺には勝てない。

もう、さつきまでの様に行くと思うなよ」

「――殺す」

余裕を見せるキルバスに対し、ソードは今もなお怒りに満ちた表情を浮かべたまま眩く。

そんな彼女にキルバスは鼻を鳴らすと、全身から赤黒いオーラを放出させた。

「なら俺は、さつきより本気で行くぞ。お前も、出し惜しみするなよ?」

「――お前を、殺す」

キルバスの言葉に応える様に、ソードが地面を砕きながら跳んでいった。

凄まじき姿へと変貌したソードとキルバスが戦闘を繰り広げる中、龍牙はエボルから解放されて地面に転がったマユに近づく。

「大丈夫か?」

「けほっ、えほっ・・・うん」

龍牙が差し出した手を取り、立ち上がるマユ。だが立ち上がった瞬間、彼女の身体はふらつき、倒れそうになる。

それを咄嗟に支えた龍牙は直ぐに彼女を抱き抱え、ソードを変貌させた原因であるエボルトの方を見る。

「おい、エボルト。お前さつき、アイツにテメエの遺伝子を埋め込んだって言ったよな。

どういう事……」

「……ハザードレベル、5.2」

「……………は？」

「なんだよ、それ」

「あの女……キュアソードの、さっきまでのハザードレベルだ」

「ハザードレベル……まさか、俺達と同じ……ッ!」

「ああ。お前から仮面ライダーと同じ、怪物の身体となった証拠ってワケよ」

エボルの言葉を聞いた途端、龍牙は驚愕に満ちた顔を浮かべ、同時にキルバスと戦う彼女の姿を見た。

今のソードは先程までとはまるで違う、圧倒的な力を得ていた。

キルバスとの戦闘を開始してから、既に数分が経過していたが、未だ彼女はその攻撃を止める様子は無かった。

「ガアアア……!」

だが技を駆使して戦っていたさっきまでと打って変わって、今は咆哮を撒き散らしながらキルバスの顔面に向けてがむしやらの拳を振るっており、対するキルバスからの反撃は避けることなく受けていた。

「オラアッ!!」

「グオオツ?!ーウガアアアア!!」

それでも攻撃の手を止める事なく、取り憑かれた様に戦い続ける彼女の姿は、まるで獣そのものと言っても良いだろう。

その様子を見たエボルは呆れた様な声を出しながら、龍牙に話し掛ける。

「全てを滅ぼす程の力を持つ……ある世界では『ブラッド族』やら『星狩りの一族』やらと呼ばれた俺達の遺伝子と、ライダーの力を持ったクリスタルボトルの力が上手い具合に作用したお陰で、今のキュアソードはキルバスと戦える程度には強くなっているみたいだなあ〜！」

…とはいえ、ベースが貧弱な人間であるあの女が、あんな力を制御できるわけがねえ。

恐らく、暴走してるんだろうな。かつてのお前みたいに」

「ツ?!」

エボルの発言に、龍牙は思わず息を呑む。

かつて自分がエボルトの力を抑えきれなくなった時と同じ状況に、ソードも陥つていくという事に気が付いたからだ。

「けど安心しろよ。まだ自我は残ってるみてえだからなあ」

「……」

「だが、それも時間の問題だ。いずれ理性を失った状態で、単純かつ力任せに暴れ回るだ

けの獣になる。そうなれば、後はキルバスに狩られるだけだ。

まあ俺としては、あのままキルバスと戦って死んでくたばろうが、関係無いけどな」

「…………ふざけんな」

エボルの言葉を聞き、龍牙は低い声で呟くと、彼の方へ振り向いた。

「お前の勝手な都合で、これ以上アイツを苦しめるんじゃないか」

「ハツハハハ!!そう言われても、お前はもう何も出来ねえじゃねえか!

キルバスとはロクに戦えねえ。新しいボトルを使いこなせねえ。

このままだと、キュアソードは死ぬぜ?

お前が助けたいと思った女の未来が消えていく様を見届けるか?」

「…………それを決めんのはお前じゃねえ。俺だ!!」

そう言つてマッスルギヤラクシーボトルを再び構えると、龍牙はソードと戦うキルバ

スの方へと顔を向ける。

「いいかエボルト。キルバスをぶっ飛ばしたら、次はお前をぶっ飛ばす。覚悟しとけよ」

「やれるもんならやつてみるお」

「…………はあ、ハア…………真琴、今行くからなッ!!」

『マッスルギヤラクシー!!』

エボルを睨みつけた後、龍牙はマッスルギヤラクシーボトルをドライバーに装填し

た。

「ああッ!?ぐつ、ぐうう……………うおおおおお！」

その時、龍牙の身体から今まで彼が経験してきた中で最も強い絶望的な痛みが走り、再び倒れそうになってしまう。

これでまたさっきの出来事の繰り返しになるな、と溜息を漏らすエボルだったが次の瞬間、龍牙は地面に倒れそうになる前に踏み止まり。雄叫びを上げながら、ドライバーのレバーを握り締めた。

「……………なんでだよ。なんでそこまでして、戦うんだよッ！」

だがそんな中、マユが悲痛に満ちた表情を浮かべて龍牙に問い掛けた。

「どうして、そんなボロボロになってまで戦おうとするの!?!もう良いじゃん!無理しないでよ!!」

マユの言う通り、今の龍牙は戦うにはあまりにもダメージを蓄積しすぎており、さっきだつて立ち上がるのがようやくやくだったのだ。

なのに何故、彼は立ち上がるろうとしてているのか。

——それはただ単に、ソードの事を想っているからではない。

龍牙の心の中に、ある一つの思いがあったからだ。

「決まってるんだろ……………俺が……………クローズだからだ」

「はあ……?」

「俺が!仮面ライダー、クローズだからだッ!!」

『ブルア!チャオ!ブルア!チャオ!』

「ん?……フツ……フフフフ」

エボルは龍牙がドライバーのレバーを回転させて変身しようとする光景を見ると、笑みを浮かべながら自らを赤い粒子に変え、彼のもとへ向かって行った。

『Are you ready?』

「変身!!」

そして龍牙の前後に展開されたスナップライドビルダーに加え、エボルが自身の力で生成した「EVBHライドビルダー」らしきものを展開。

その二つのビルダーが龍牙の身体に重なり、割り込んで来たエボルトと共に、あの姿へへと変身していく。

『銀河無敵の筋肉ヤロー!クローズエボル!パネーイ!マジパネーイ!!』

「つ、ついに……」

「変身した!」

遂にクローズエボルへと変身した事に驚く和也達。するとクローズがマユの方へと顔を向け、静かに口を開く。

「お前も、見ておけ」

「え？」

「これが……俺達の未来を守る為の、戦いだ」

それだけ告げると、クローズは目の前でキルバスと戦っているキュアソードの元へと向かった。

「うおおおー!!」

「ッ!？」

一方キュアソードと戦っていたキルバスは、突然背後から聞こえたクローズエボルの叫びに気付くと、咄嗟に後ろを振り向く。

しかし既に遅かった。キルバスが振り返った時には、すでにクローズは彼の懐に入り込み、拳を構えていたのである。

「オラアアッ!!」

「グハッ!!……クウ」

キルバスの腹部に強烈な一撃を叩き込むと、そのまま彼を押し退ける様にして吹っ飛ばす。

「テメエ……またその姿かよ！忌々しいその姿を、俺の目の前に出しやがって！」

「お前こそ、また俺たちの前に出て来やがって、タダで済むと思うなよ」

「ほぎけ!!」

キルバスは再びドリルクラッシュヤーを構えると、今度は一気に駆け出して、クロースに向かって斬りかかった。

だがクロースは慌てる様子も無く、右手に装着したクロースマグマナツクルで受け止めると、キルバスを思いつき蹴り飛ばした。

「ぐあつ!?……チイ、舐めんじゃねえぞ!!」

「そつちが先にやった事だろうが!!」

再びキルバスとクロースエボルの戦闘が始まる。そう思ったその時、暴走したキュアソードが二人の元に突っ込んできた。

「ウガアツ!!」

「フンツ!!」

「ツ!?!」

しかしそれを予測していたのか、キルバスは同時にその場から離れ、暴走するキュアソードの攻撃を回避。一方でクロースエボルの方は、逆に暴走したキュアソードの攻撃を受け止める。

「うおお!!」

「ぐつ!?!」

しかしパワーは、限界ギリギリのクローズより暴走したキュアソードの方が上であり、彼女は両腕に纏わせたエネルギー刃をクロー状に変形させると、それで何度も連続でクローズエボルを切りつける。

「ぐああッ!!ど、どうしたんだよ真琴ッ!俺は味方だ!敵じゃ無い!!」

「ウガアッ!!」

「クソッ!おい、聞けよッ!」

クローズの声にも反応せず、ひたすら攻撃を続けるキュアソード。そんな二人の姿を見て好機と思ったキルバスは、彼に攻撃を仕掛けようとする。

「ハハハ!今度こそ死ね、上城龍牙!!」

「ッ!?しまった!!」

「フッ……」

キルバスがドリルクラッシュヤーを構えると、キュアソードがクローズからキルバスへと標的を変え、エネルギー状の剣を作って振り上げる。

「がアアアアアア!!」

「ヒヤヒヤヒヤヒヤッホーウ!!」

二人の刃が交じり合って火花を散らせる中、クローズは息を整えながらゆっくりと立ち上がった。

『フフフ……キュアソードはどんな獣に近づいて来ている。』

お前とキルバスの区別が付かなくなってきたのが、その証拠だ』

「はあ、ハア……お前に反応してる、だけかも知れねえだろ……てか、なんで俺の中に入ってきてんだよ!出て行けこの野郎!!」

『おお怖い』

龍牙の体内に居るエボルの言葉通り、今のキュアソードは完全に理性を失いかけており、自分と敵の区別が出来ていない。だがそれでも、彼は諦めなかった。

「負けるか……絶対に……こんなところで……終われるかよ!!」

『待って待て。今キュアソードの前に行ったら、また敵と間違われて切り刻まれるぞ?』

「ハア!? だったら、どうしろってんだよ!」

『……ンン、そうだな。』

こうなったらいつそ、パンドラボックスの力を使ってみたらどうだ?』

『パンドラボックス……? ああ、あれか』

エボルの提案を聞き、一瞬何を言っているんだコイツと思いつつも、台の上に鎮座されているパンドラボックスに目を向ける。

『あのボックスには、キルバスに吸収された俺のエネルギーが眠っている筈だ。』

それを遺伝子が活性化した今のお前が使えば、どうなるか試してみたく無いかなぁ

？』

「……」

それを聞き、クローズは思った。

確かに、エボルトの言う事は一理ある。このままソードを暴走させたまま戦つても勝機は無いし、何より体力的にキツイ。

ならば、賭けに出るしか無さそうだな。

「……分かった。やってみようぜ」

そう答えると、クローズはキルバスの作ったパンドラボックスの元へと向かう。

だがそれに気付いたキルバスはソードの腹部を蹴り上げて離し、すぐにクローズに向かって斬りかかる。

「させねえよー！」

キルバスがドリルクラッシュャーを振り下ろすも、クローズは瞬時にマグマナツクルで受け止め、罅迫り合いになる。

「お前エ……俺のパンドラボックスに、何しようってんだア〜？」

「テメエには、関係ねえだろー！」

「あるねエ！お前の中に居るエボルトは、何しでかすか分からねえからなア!!」

そのまま二人は激しく刃とプラスチックをぶつけ合う。

ふとキルバスは、先程まで戦っていたキュアソードが襲いかかって来ない事に違和感を抱く。

「チィ!アイツ、どこ行きやがった!?!」

『ボルケニツクナツクル!』

「オラア!!」

「ぐあつ!?!」

キルバスがキュアソードの姿を探している隙を突いて、クローズはシルバードラゴンフルボトルを装填したマグマナツクルの、銀色の光と漆黒の闇を纏った強烈な正拳突きでキルバスの腹を思いっきり殴りつける。

「ぐうっ……貴様ア……!…ンン?」

キルバスは怒りに震えながらクローズに向かってドリルクラッシュシャーを構えようとする。しかしその時、地面に大きめの穴が掘られている事に気付き、不思議に思う。

(これは……一体なんだ?)

次の瞬間、パンドラボックスの近くから『何か』が居るような気配を感じ取り、そこに視線を向けた。

「うゝアアアアアアアアア!!」

「な、何イ!?!(じ、地面掘って出て来たア!?!)」

その時、台の近くから突如として土まみれのソードが飛び出し、パンドラボックスへ手を伸ばし始める。

そして彼女はその手でパンドラボックスに触れると、体内にあるエボルト遺伝子が、パンドラボックスに入っているエボルトのエネルギーと反応し始める。

「ッ!?!ぐ、グウオオッ!!」

彼女の苦痛な叫び声と共にパンドラボックスから紫色の光が放たれると、彼女の身体がパンドラボックスから離れる様に弾かれる。

そして地面を転がる彼女の手には、一枚の紫色のパンドラパネルが握られていた。

(な、なんだあのパネルは!?!箱の内部にあるエボルトのエネルギーと、アイツのエボルト遺伝子が反応したのかア!?!だとしても、なんであんな風に……)

自身の知らないアイテムが出て来たという事実キルバスが疑問を抱いていると、ソードが苦しそうな表情を浮かべながら立ち上がる。

「くっ……ぐうっ……」

「おい、大丈夫か!?!」

『心配してる暇はねえぞ龍牙ア!お前が今無駄にした1秒1秒が、アイツの命を奪う事になるんだぞ!!』

「ッ!?!」

エボルの言葉を聞き、クローズはすぐにソードの元へ駆け寄る。

だがその刹那、謎の現象に関する思考を放棄したキルバスもまた、ソードの方へと向かって行く。

「それが何かは知らねエがよオオオー！とりあえずそのパネルを箱に戻せばよオ、何も問題ねえよなアーーー!!」

『たつく！こういうトコが、キルバスの厄介な所だぜ！』

切り替えが早いってのは、その分行動に移る判断力が高いとも言えるからなあ!!』

「言ってる場合かよ!!?」

『クローズサイド！エボルサイド！』

エボルの言葉にツツコミを入れながらも、クローズは走りながらドライバーを3回程回して必殺技の待機状態に入る。

「来るかア！ならこつちも、これで決めるぜエ!!」

キルバスもまたドライバーのレバーを回し、全身の装甲に赤黒いオーラを纏わせる。

『Ready go!』

『キルバススパイダーファイニッシュ！』

『ギャラクシーファイニッシュ！』

「オリヤアツハアアア!!」

「はあああーっ!!」

キルバスが蜘蛛の巣状に広がった赤いオーラをドリルの様に脚へ纏った急降下キックをクローズへ向けて放ち、クローズは漆黒の螺旋状エネルギーを纏った拳でキルバスの技を迎え撃とうとする。

「——なんてな。今お前に構ってる暇は、ねえんだよ」

「はあーっ?」

二つの攻撃が激しくぶつかり合うと思ったその時、キルバスの目の前にブラックホールが出現。その中を通ったと気付いた時には、キルバスはソードから大きく離れた地面へ向けてキックを放っていた。

『成る程! 確かに単純な力比べじゃあ、負けんのは俺らの方だ。ならいっそ、遠くに飛ばして時間稼ぎすれば良いって事か! お前にしては考えたじゃねえか龍牙あ〜!』

「ハアツ、ハアツ! 何が『しては』だよ! 一言余計なんだよお前は!」

激しく息を漏らしながらクローズがエボルトに向けてそう叫ぶと、頭を抑えて苦痛な表情を浮かべるソードに向けて足先を向け、地面を一気に蹴り飛ばす。

(後はあのパンドラパネルを使えば良いだけだろうけど、問題はどうか使うかだ! アイツも、さつきから様子がおかしいし……)

『オイ龍牙ア!! 考え事は後にしろ! お前の身体も限界に近いんだろうが!』

「ぐうっ!!」

エボルの声で我に返ったクローズは、すぐにソードの元へ向かう。

するとその時、ソードが突然苦しみ出し、辺りをしっちゃんかめっちゃん破壊しながら暴れ始めた。

「ぐあああつ!ぐううううう!!」

「な、なんだ!?!急に苦しみ出して……どうなってんだ!?!」

『どうやらパンドラパネルから流れた俺のエネルギーの影響で、完全に限界を迎えた様だな。まあ俺からすれば、十分もった方だと思いがな』

どうやら紫のパンドラパネルから発せられたエネルギーによってソードの理性が完全に焼き切れてしまったらしく、彼女はそのまま自身へ向けて走って来るクローズに拳を向けようとする。

「ぐっ!ぐあああつ!!」

「チイツ!」

クローズは咄嗟にマグナツクルを構え、ソードのパンチを受け止めようとする。

しかし次の瞬間、ソードは拳に炎を纏わせ、マグナツクルごとクローズを吹き飛ばした。

「ぐあああつ!!」

「がアアアアアアア！」

更に追い討ちをかける様に口へ光を集結させ始めたソードは、クローズ目掛けてビームの様な蒼い火炎放射を放つ。

「口からビームとか……ゴジラかよお前!」

そう吐露しながら咄嗟にブラックホールを出現させて、彼女の放った火炎放射を飲み込んだクローズだったが、遠くからキルバスがこちらに向かって来ている事に気付き、焦り始める。

「よくも俺を謀ったなア……りゅ、う、が、く……んツッ!」

(ヤバい……このままだと、二人まとめて殺される!)

どうする!!? どうすれば良い!!? 晴夜なら、この状況をどうする! どうすれば……!)

前方からは暴走したキュアソード、後方からはキルバス、他の味方は満身創痍。

オマケに自分はダメージの蓄積で、クローズエボルの力を持ってしても、これ以上のキルバスとの戦いは危険な状態となっている。

八方塞がりの状況下、クローズは必死に打開策を考えながら、思わず視線を地面に向ける。

そこには、戦闘の余波で荒れ果てた地面と、自身の腰に装填されたドライバーとマッ

スルギヤラクシーフルボトルが映っていた。

(……………このボトル、使えないか?)

ふとある事が脳裏を過ぎった直後、クローズはすぐさまドライバーからボトルを取り外し、ソードへ向けて：いや、彼女の手にあるパンドラパネルへ走り始める。

『どうした龍牙あ!ボトルを外してあの女に特攻とか、正気か?!?』

「俺はいつだって正気だ!それにもうこれしかねえんだよ!上手くいくかは分からねーけどなあ!!」

エボルトの言葉に叫び返ししながら、クローズはソードの元へ辿り着く。

そして手に持っていたマツスルギヤラクシーボトルのセット部分を、彼女の持つパンドラパネルへと直接刺し込んだ!

クローズは、何故自分がこんな行動を取ったのか、全くわからなかった。

だが何故か、こうしなければという確信にも似た思いが心の底から沸き上がり、気付いた時には行動に移していたのだ。

極限の状況下において研ぎ澄まされた彼の第六感が、彼の生存本能へそうする様に訴えかけていたのかもしれない。

そして彼の第六感に頼った行動は、彼自身とキュアソードの運命を決めた。

マツスルギヤラクシーボトルを刺し込まれた紫のパンドラパネルは、エボルト遺伝子

を最大限まで活性化させる機能で激しく反応。

それにより、パンドラパネルは紫から蒼色へと変色。

やがて、灰色へと変わった。

「——りゅ、う、が……ッ！」

「真琴オー……ッ！」

瞬間、パンドラパネルを中心に灰色の竜巻が発生し、その発生源の近くにいたクローズとキュアソードに凄まじい風圧が襲い掛かり、二人を惨殺しようとしていたキルバスは咄嗟にその場から離れる。

「な、何だアレは……」

「この光景、何処かで……」

その光景を見ていた和也達は、以前見た事がある様な感覚を覚え、思わず眩く。

そして、思い出した。

その光景は、かつてエボルトが始めてエボルトリガーを起動させた際に発生した、黒い竜巻と類似していることに。

やがて激しかった風圧が止むと、その中心地には変身解除した龍牙と、彼から護られる様に抱きかかえられたキュアソードの姿があった。

「ぐっ……ハア、はあ……一体、どうなったんだ？」

「・・・分からない……でも、多分だけど……」

突然発生した暴風に戸惑う龍牙に、理性と意識を取り戻したソードがそう言うのと、手の中に何かがある事を感じ取った二人が『それ』を見てみる。

そこには、赤と黒で彩られたエボルトリガーらしきモノが握られていた。

「これは……エボルトリガー?」

「いや違う。オイエボルト、何だよコレ……!」

『おそらく、龍牙とキュアソードの中にある俺の細胞と、マツスルギヤラクシーボトルの機能が上手い具合に作用した影響で、俺のエネルギーの込めたパンドラパネルが全く新しいアイテムへと変化したんだだろうなあ。』

具体的な理屈は知らんが……まあ、ジーニアスボルトと金のラビットボルトと銀のドラゴンボルトがフュージョンして、クロースビルドに変身する為のアイテムが生まれんだ。それと似た理屈だろうよ。

エボルトリガーとは違う、血の色で塗られたエボルトリガー。

それこそが、俺の力……いや、ブラッド帝国の者の力そのもの……

さしずめ、*「ブラッドトリガー」*といったところか?」

「……どういう意味?」

『まあ、簡単に言えば。コイツを使えば、それなりの実力者なら *「ブラッド帝国の王族」*

の仲間入りって訳だ』

「……つまりコイツを使えば確実に、キルバスに勝てるって事か？」

『まあ、出来なくは無いだろうな。万全の状態なら、って条件はつくが……』

エボルトの説明を聞いて、龍牙はブラッドトリガーを握り締めながら、希望が見えてきたと言わんばかりに口元が緩み始める。

だが次の言葉を聞き、龍牙とソードはどういう事だと首を傾げた。

『いいか？ さっきのクローズエボルトの変身は飽くまで、怒りでハザードレベルを上げて無理矢理なっただけだ！』

もしそれを龍牙、お前が今の状態で使ったら、最悪……死ぬぞ？』

「……はあ？」

『いいか。コレは茶化しじゃねえ、マジだ。』

そもその話、このトリガーに込められてるエネルギーは、ハッキリ言って俺の予想を超えている。だから膨大な力が秘められているこのトリガーの負担に、お前の身体が耐えられない事は目に見えている。さっきあの程度の程度の遺伝子で暴走したキュアソードは、勿論論外。最悪使用直後に即死だ。

だからこそ、コイツを使うってなれば、それこそ文字通り『死ぬ気』で変身しなきゃならねえだろうなあ？

……コレを聞いても、まだ使おうと思えるかあ?』

エボルトの言葉を聞いた二人は、暫くの間沈黙する。

だが、やがて龍牙はニヤリと笑いながら、ブラッドトリガーを強く握りしめ、言った。
「はっ……みんなを助けられんなら、それも案外悪くねえかもな!」

「……龍牙」

『……………』

その言葉に、ソードは驚きに満ちた表情を浮かべるが、エボルトは無言のまま龍牙の姿を眺めていた。

(まあ、そうなるわな。

なんせお前は、俺も呆れる程の大馬鹿野郎にして、俺が認めた最高の偽善者だからなあ〜)

そう心の中で呟いたエボルトを他所に、覚悟を決めた龍牙はブラッドトリガーを握り締めると、気合を込めた声で叫んだ。

「いくぜええー……ッッッ!」

その叫びと共に龍牙は、遂にブラッドトリガーの機動スイッチを押した。

『マックス! オーバー・ザ・ハザードオン!』

「がっ、がアアアアアアアア!」

「龍牙!？」

ブラッドトリガーを起動させると、龍牙の身体へ蝕む様な激痛が走り、思わず膝を折って手をついてしまう。

ソードは慌てて駆け寄るも、龍牙は彼女の前に手を出して制止させ、自力で立ち上がった。

「……………ッ、飽き……………らめねえ……………俺は仮面、ライダー、なんだッ！」

此処でへタレたら、真琴に……………晴夜につ、顔向け出来ねえだろうがよオオオオ！」

『マッスルギヤラクシー!』

口や鼻から血を出そうが、目が充血しようが、龍牙は構わずブラッドトリガーをビルドドライブバーへと差し込み、再び取り出したマッスルギヤラクシーボトルを振ってドライブバーに装填させた。

『ブルアア!チャオオ!ブルアア!チャオオ!』

そのままドライブバーのレバーを勢い回していくと、無数のパンドラボックスの様な物質がハザードドライブビルダーの様に出現していく。

『上城龍牙……………死ぬ気で、いけるかあ?』

『Are you ready?』

「んなの、聞くまでもねえだろがよオオッ!!」

『フツハツハツハツハツハ！上等だ相棒！一緒に地獄まで、相乗りしようぜエー！』

『フィーバー・ザ・エボリューション！』

龍牙とエボルトの掛け合いの後、パンドラボックスを模した『ブラッドライドビルダー』が勢い良く合体して黒い柱へと変貌すると、柱がドス黒い竜巻を起こすほどの大回転を始める。

そして同時に、内部では龍牙に禍々しいオーラを纏った装甲が装着されていく。

「ぐううああああああつ!!」

『銀河無敵の筋肉ヤロー！クローズエボル！』

柱の内部で龍牙の奏でる激痛の絶唱が木霊する中、やがて柱が赤黒く光り輝くと、小型の黒い立方体を飛び散らせながら爆発し、それは現れる。

『パネーイ！マジパネーイ!!』

その姿は、クローズエボルとほとんど変わらなかった。

『フツハツハツハツハツハハハハ……!!』

しかし色はまるでブラッド帝国の者共の証と言わんばかりに、水色とピンクのカラーリング部分が血の様に真っ赤に染まっていた。

「グオオオオオオオオツ!!——俺がッ！」

『フフフツ……俺達があ!』

「クローズエボルだッツツツ!!」

新たなる姿、仮面ライダークローズエボル・ブラッドへと変身した龍牙は叫び声を上げ、その中にいるエボルトも高らかに叫ぶ。

その姿を見守っていたキュアソードは、死ぬ気で戦うことを決めた龍牙と共に戦う覚悟を決めた。

そして遠くに避難していたマユの心には、龍牙と真琴は戦っているのに何もしないで突っ立っているだけの自分に対し怒りを覚えると共に、黄金の炎が宿り始めた。

次回! Re・ドキドキ&サイエンス! After story

仮面ライダークローズ&キュアソード! 最高と最凶のタッグ! その4

仮面ライダークローズ&キュアソード!最高と最凶の
タッグ! その4

仮面ライダークローズエボル・ブラッドとなつた龍牙を見て、ずっと彼らの行動を見ていたキルバスは満足げに笑い声を漏らした。

「ククク……ハツハツハツハハハハ! いいぞオ!

俺の力を高める、より最高のエネルギーになりそうだな!!」

興奮するキルバスがクローズエボルとソードに迫つて来る中、キュアソード……否、キュアソード・ギャラクシードラゴンモードはクローズの隣に立ち、共に戦う彼と同じくファイティングポーズを取る。

「——龍牙……ううん。クローズ、エボルト、行ける?」

『『当たり前だツ!!』』

「そう。なら……生き残りましょ、最後まで」

ソードの言葉に応じた二人の声が重なると、キルバスはクローズとソードに向かって殴りかかる。

だがソードはキルバスのパンチを受け流し、その隙にクローズはキルバスの顔と胸に

パンチを繰り出しダメージを与える。

「オラア！」

「はっ！フツ！」

「チイ！」

クローズの攻撃を腕でガードしながら、キルバスはもう片方の手で反撃を仕掛けるが、それを察知したソードは咄嗟に避けるとすぐ様エネルギー状の短剣を生成し、投げつける。

一方、攻撃を避けられてしまったキルバスは舌打ちをすると、短剣を叩き落としながら今度はソード目掛けて蹴りを放つも、彼女はその攻撃を回避し、逆にキックを繰り出す。

「ふっ！やあぁー!!」

「グツ!？」

「ハアアアツ!!」

ソードの強烈な回し蹴りを受けたキルバスは吹き飛ばされるも、すぐに起き上がって体勢を立て直す。

「……アア、イライラする。怒りが、治らねえ……だが」

「……ッ！」

そう言つてキルバスは宙を引つ掻く様に手を振るうと、全ての指先から出て来た赤黒い糸が二人に向けて放たれた。

「不思議と、楽しくなつて来たア!ギャハハハハハ!」

キルバスが高らかな笑い声を上げると同時に、二人は素早く回避行動を行う。

二人が居なくなつた場所には斬撃の跡が残り、それが更にキルバスの感情を昂らせる。

「ハアアアアアーッ!!」

そして彼は雄叫びを上げて再び駆け出すと、今度は両腕を広げて勢いよく振り下ろした。

すると、彼の動きに合わせて地面が隆起し、そこから巨大な岩石が飛び出して来た。

「…………ツ!!」

それを見た二人は急いで横へ跳ぶ事で、どうにか避けたが、その際の衝撃で砂埃が舞う。

「アツハツハツハツハツハツハツハツハ!コレだよコレ!

戦いつてのは、イラつきながら戦うもんじゃねえ!楽しみながら殺り合うモン何だよオ!!

だからさア、もつと、俺を楽しませてみるよオオ!!」

キルバスは狂喜乱舞しながら叫ぶと、両手を勢い良く合わせる。

すると大地から無数の鍵爪が出現し、それらは一斉にソードとクローズの方へと向かって行く。

「ちいっ!!」

『ボルケニツクナツクル!』

迫りくる大量の鍵爪にクローズは舌打ちすると、ドラゴンマグマボトルを装填したマグマナツクルの表面部にある「ドラゴニツクイグナイター」を長押しすることで必殺技を発動させ、迎撃態勢を取った。

「はああああっ!!」

一方のソードは、襲ってくる鍵爪に臆する事なく突っ込み、手に持ったエネルギー状の剣を振り回して次々と破壊していき、クローズもドラゴン型の炎を纏ったパンチで次々と粉碎していく。

「フツハツハツハツハツハ!! いいぞオ! 最高だア!!」

それでこそ! 壊し甲斐があるつもんだア!!」

そんな二人の戦いぶりを見てキルバスは歓喜の声を上げ、更なる攻撃を仕掛けようとする。

「すげえ・・・」

「……ちよつとエース。コレ、私達入る余地なくない?」

「ええ、そうかも知れませんがジョーカー……少なくとも今は、目で追う事しか出来ませんからね」

その頃離れた場所で戦いを見守る和也達は、キルバスとクローズ&ソードの戦いを目の当たりにして、思わず感嘆の言葉を口にしていった。

そんな中、幻冬がクローズ達の後ろを振り向くと、ソードに殴り飛ばされた筈のデストロイスマッシュが背後から迫ってこようとしていた。

「クローズ! ソード! 危ないっ、後ろからっ!」

幻冬が叫んで危機に気付かせようとした時、クローズとソードの背後に一人の女の子……マユが立っていた。

「セイリユン!」

「待ってたぜ! 姉貴イ!」

マユが『セイリユン』と声を上げると、彼女の後ろから小さな影が現れた。

そして舎弟の様な喋り方で接し、口に棒突きキャンディをタバコのように啜えた、青っぽい色の小さいドラゴンの様な妖精は彼女の隣に並ぶ。

「妖精ツ!?」

「なんで(ハハ)……」

「行くよ！セイリユン！」

「ああ！心が滾るリユン！」

突然現れた妖精に驚く一同。しかしそんな彼らに構わず、セイリユンと呼ばれた妖精は、その姿をマナ達が使うコミュニンの形へと変化させる。

「プリキュア！ラブリンク！」

『L・O・V・E！』

そして彼女は蒼いラビーズを取り出し、ラブリーコミュニケーションへ【L・O・V・E】という文字を描く。

するとマユの髪が青く染まり、前髪の方に金のメツシユが入る。更には袖が肘まで伸びたオープンスペンサーを模した蒼い服を白いサラシの上に羽織ったヘソ出しコスチュームになり、他にも白い指ぬきグローブを身に付け、スカートには炎の模様が刺繍、脚には青いサイハイブーツを履いていた。

「蒼き炎の拳！キュアサファイア！」

変身を終えたマユこと『キュアサファイア』は、目の前にいるデストロイスマツシユに向かって走り出す。

「プリキュア……」

「まさか、あの子が……」

「あいつは任せてッ! オツラアアー! シャツッ!!」

それを見ていた和也達と、キルバスと戦っていたクロースとソードは『キュアサファイア』を名乗る全く知らないプリキュアに変身したマユを見て驚く一方、当の本人は飛び上がってデストロイスマツシュへと突撃する。それを見たデストロイスマツシュはパンチを繰り出す、彼女は攻撃を見切つて躲した。

だがそれだけでは終わらず、続けて繰り出したミサイルの嵐がサファイアに襲いかかる。

「天へ逝け! 悪滅龍斬!」

すると彼女は両腕を広げ、掛け声と共に無数の炎の剣を生み出し、デストロイスマツシュの放ったミサイルへ飛ばす。

それにより、サファイアに被弾するはずのミサイルは、全て当たる前に空中爆破してしまった。

更にはミサイルの爆破で周りの視界が悪くなった所に、続いて背後から足元へと放たれた投剣がデストロイスマツシュの膝辺りへと命中し、まるで膝カックンの様に脚を下って体勢を崩した。

「おっシャアッ! いくわよ、『抜刀劍蝶龍』!」

バランスが崩れたのを見たサファイアは釘バットを模した棍棒:『抜刀劍蝶龍』と呼

ばれる棍棒を手元に呼び出し、デストロイスマツシユの胸辺りに出来た凹みに向けて叩きつけた。

しかし、デストロイスマツシユには傷一つ付かない。

「なんて、装甲……」

「無駄だア！そんな攻撃で、俺の擬態を倒せるかア!?」

キルバスはクローズ達と戦いながら、そんな攻撃ではデストロイスマツシユの体には傷一つ付かない傷つかないと嘲笑う。

「なら、これでどうよー」

しかし、サファイアは蒼い竜の顔が意匠されたラビーズ『サファイアソードラビーズ』を取り出すと、それを抜刀剣蝶龍にあるグリップエンド状のダイヤルにセットした。

「ブツ潰れる、東方蒼帝！」

すると彼女の持つ棍棒に蒼炎が纏われ、先程攻撃した所へと複数回攻撃を繰り返して始めた。

「よせ！お前の力じゃ無理だッ！」

「……いえ、待つて下さい！あそこは……」

和也は攻撃を止めるように叫ぶが、何かに気付いたロゼッタはある事に気付き、同時にダイヤとエースも彼女の意図に気付いた。

「ハッハア!無駄だとわかってるのに、諦めの悪い女だなア!!」

キルバスは相変わらず余裕綽々な態度で戦いを見ていると……

「辟。闇?□纏」 纏ヲ……纏ゆー?」

「アア?どうしたってんだ……何イ!??」

デストロイスマツシユの様子がおかしくなっている事を看破したキルバスがデストロイスマツシユの体を見ると、サファイアが攻撃し続けている所から亀裂が入り始めていた。

「嘘だろ……俺達でも作れなかったヒビを、アイツの体に!」

「パワーアップしたソードでも、凹みを作るのが限界だったのに……」

それを目撃した和也と幻冬は、何故デストロイスマツシユの装甲にヒビを入れる事が出来たのかと驚愕の声を上げる。

だがダイヤモンド達は、彼女がどうやってヒビを入れたのか理解していた。

「あれは恐らく、全く同じ場所に攻撃し続ける事で、ダメージを蓄積させてヒビが入ったのでしよう」

「ええ。オマケにあそこは、ジョーカーやエース、かずやんと幻冬君、ソードの攻撃を受け続けている」

「まさに『水滴石穿』……例え小さい力でも、積み重なれば強大な力になる。これが彼女

が見出した、奴の攻略法という訳ですわ！」

ダイヤ達がサファイアの行動の意味を理解する中、デストロイスマツシユにヒビを入れた彼女は「ある事」を教えてくれた彼女の姿を思い出していた。

『どんなに硬い鎧でも同じ場所に狙って攻撃すれば、どこかで大きな一撃になるって。パパが教えてくれたんだ』

「ハハッ！あの科学オタクのうんちくも、たまには役立つじゃない！」

さあ、行くわよ——抜刀！」

そう言って彼女は、抜刀剣蝶龍のグリップエンドにあるダイヤル部分を回した。

すると棍棒の上が鞘のよう外れ、その中に収納されていた刀を出すと、ラビーズを再びセツトする。

「ハア————……ッシ！」

すると刀身が蒼い炎を纏い始め、彼女はまるで居合抜きのようなポーズを取ると、デストロイスマツシユに向かって駆け出した。

「細切れにぶった斬れろ！青龍偃月ッ！」

刀からドラゴンの姿を形作った炎が出現すると、そのドラゴンがデストロイスマツシユに喰らいつき、身体の亀裂を更に大きく広めた。

更には敵を攻撃し終えた炎のドラゴンが刀身に取り込むと、その亀裂の中心へ向けて

蒼い炎の斬撃を繰り出した。

「纏エ纏薙d纏ワロー!?!」

攻撃を受けたデストロイスマツシユの体は斬撃を受けた場所を中心に更なる大きさの亀裂を広げ、やがて上下真つ二つに別れると、そのまま爆破した。

「オイ……………おいおいおいおいおいおいおいおい!なんであんな糞雑魚なんかにかけてんだよ!?!」

この結果にはキルバスも驚き、自分の分身でもあるデストロイスマツシユが倒された事に憤慨していた。

「おい!余所見すんな!」

「あなたの相手は、私達よ」

そんなキルバスの前にクローズとソードが、拳を握りしめてながら立ち塞がる。

「なーにが『俺の相手は私達よ』だア!その減らず口、今すぐ黙らせてやるよ!!」

キルバスは怒りに任せるように叫ぶと、目の前にいるクローズとソードに向けて走り出し、二人の懐に飛び込んだ。

「オラアツ!」

「はあっ!」

「フンツ!」

二人は左右に分かれるように避けると、挟み込む様にパンチを放つが、キルバスが両サイドの脇下辺りから展開した蜘蛛の脚によって防がれてしまう。

「くそ……なんて硬さだ！」

「だったら、これはどう!?!」

ソードは両腕に作り出した炎のエネルギーで作られた剣で斬りかかるが、キルバスは4本ある蜘蛛の脚を駆使してソードの攻撃を防ぎ続ける。

「ハツハア！そんなチンケな攻撃じゃ、俺を倒す事は出来ねえよ！」

「でしようね！でも貴方の注意を引くことは出来る！」

「何言つて……ッ！」

その言葉に疑問を持った瞬間、周りからの妙な気配を感じたキルバスが辺りを見渡すと、ナイフの形に固定化された炎のエネルギーが無数に存在していた。

彼女はキルバスが巨大な炎の剣に集中している隙に、密かに小型の炎状の剣を生成して大量に出現させていたのだ。

「喰らいなさい！オールスペースソード！」

ソードが広げた手をギョツと握り締めながらそう叫ぶと同時に、無数の炎の刃が一斉に襲い掛かり、キルバスの体に突き刺さり始める。

「ぐう……この程度で、俺がやられるかってんだ！」

だがキルバスは体からオーラを放出する事で身体に刺さった全ての剣を弾き飛ばすと、今度はソードとクローズの方へ両腕を向ける。

そして手のひらにオーラを集結させ、そこから無数の鋭い針のような物を大量に射出した。

「うわつと!?!」

「危ない!」

咄嗟に避けた二人だったが、その内の一本が運悪くクローズの肩に突き刺さってしまった。

「痛つでえ!」

「ちよつと、大丈夫!?!」

「ああ、大丈夫……夫!」

心配して声をかけたソードであったが、クローズは肩に刺さった針を抜いて捨てる。それを見て彼女は出血の具合を確認するが、肩からは血が出るところか既に傷がふさがっていた。

「ほう、自動修復機能か。流星はブラッドの力を得ただけはある様だなア。

だが龍牙あ?随分と息が乱れているが、まさかもうバテてるんじゃないだろうなア?」

「ハッ……大きなお世話だ。なんなら、漸く体が温まってきた所だよ」

「へえ、そうかい。だったら、その体の芯まで熱くなるくらい焼き尽くしてやるよお！」
キルバスは両手から更に大量の針を発射してくるが、二人はそれを何とか回避し続ける。

だがその際に二人の距離が離れてしまい、先ずは体力限界のクローズから始末しようと狙いを定め、腕を振り上げた。

それに気づいたクローズはキルバスの拳を片手で掴んで止め、対する自分はもう片方の手で殴りかかるも、キルバスもまた片手のみで受け止める。

更には互いの力が拮抗してしまい、両者は一歩たりとも動けずにいた。

(コイツ……なんて馬鹿力だ！)

キルバスはクローズの握力を遥かに上回るパワーで、クローズを徐々に押し込んでいく。

このままではキルバスに押し負けてしまう。ソードがそう思って助けに向かおうとするも、地面から出現した蜘蛛の脚が行く手を阻む。

ならばとソードは再び炎のエネルギの剣を作り出して斬りかかるが、蜘蛛の脚は上手くガードして防ぎ切っていた。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

「アツヒヤツヒヤツヒヤツ……」

ソードが攻めあぐねている中、クロースとキルバスの足元の地面がクレーターの様に亀裂が走り、踏ん張るたびにどんどん陥没していく。

このまま押し潰そうとしたその時、キルバスは自身の腕の異常に気付いた。自分の腕が、震え始めていたのだ。

何故この俺の腕が、震え始めているのだ？

俺が、コイツに恐怖しているか？否、違う。

この星の気温で、寒気がしているから？否、それも違う。

この震えは、まるで重い荷物を長時間持ち続けた人間の腕の様ではないか。

そしてその人間の腕が震え始める条件として当てはまるのは、持ち切れない荷重に腕が耐え切れないか、体力が非常に消費し始めているから。

その瞬間！キルバスは自分の腕が震え始めた原因に気付いた！

（コイツ、吸い取ってやがる！俺のエネルギーをッ！）

クロースエボル・ブラッドの機能の中には、クリア・クリスタルクローズの時にも使っていた、エネルギーの吸収能力が備わっている。

それは相手のエネルギーを吸収して相手の体力を奪うだけでなく、失い始めていた自身の体力を回復させる効果を発揮させていたのだ。

その事に気が付いたキルバスが慌てて腕を引つ込めようとするが、それよりも先にクローズがキルバスの手を更に力強く握り、その場から逃げられない様にする。

「ハアツツ！」

「オラアツ！」

その間、蜘蛛の脚を駆逐し終えたソードがキルバスへと飛び掛かり、ある程度体力を奪う事に成功したクローズはキルバスの腕をいきなり離して一瞬のみバランスを崩させ、二人はそのままダブルキックで吹っ飛ばした。

「うおっ、グッ……いいだろう！ならばこちらも、本気で前らを潰すツ!!」

しかし体力を奪われ、それによってクローズとソードの方が押し始めている事を感じたキルバスが本気を出すと言うと、肉片として残っていたデストロイスマッシュの遺伝子を自分の体に戻し始めた。

「ハツハツハア……さあ、行くぞオオオオオオ!!」

「はあ！」

本来の戦闘力へと戻ったキルバスと、クローズエボルとソードのコンビは空中に向けて飛び上がる。

「ふっ！はっ！」

「デアアツハツハア！ホツホホウ！ハア！——ぬうん！」

「くっっ!ぐあ!」

クローズとソードはキルバス相手に、空中で高速のパンチとラッシュを繰り広げる。

「キルバス!アンタには聞きたいことがある!」

「何のために、ブラッド帝国を滅ぼした!」

その最中、ソードとクローズはキルバスにそう問いかけた。

彼らは気になっていたのだ、何故ブラッド帝国の王であるはずのキルバスが、自らの手で自分が生まれた国を滅ぼしたのかを。

それを聞いたキルバスは、高笑いしながら答えた。

「ハッ……ハッハッハッハッハッハッア!」

お前ら、そんなくだらないことが聞きたいのかあ?」

「くだらない?」

「そんなの、俺が滅ぼしたかったからさ!」

「ハア!」

『……だろうなあ』

これを聞いてクローズやソードだけでなく和也達も驚き、エボルトのみが予想通りだと言わんばかりに溜息を漏らす。

「俺はなあ、あの有象無象共と共に、いろんな世界をぶっ壊して来た。」

だが何かが足りねえと思った。だから考えたんだよ、一体俺が何を壊し足りないんだらうってな」

そう言いながらキルバスは、自分がブラッド帝国を滅ぼすに至った経緯を語り出す。「そこでふと思った。いつも色んな奴らを滅ぼして来た俺達の世界……ブラッド帝国を滅ぼしたいってなあ！」

いやあ〜今思い出しても楽しい気分になれるぜえ？あんな綺麗な花火は、生まれて初めて見たからよお！

そもそも、生きてる奴なんてのはいずれ滅ぶ！それが早かった！たったそれだけだろオ!？」

それを聞いたクローズとソードは、あまりの衝撃で言葉を失う。

確かにエボルト達ブラッド帝国の者達は、色んな世界を滅ぼして来たのだろう。

だからハツキリ言って、そんな彼らが滅んだとしても同情の余地があるはずも無く、それどころか自業自得という感想しか出てこない。

だがキルバスの場合、ただの気まぐれで、仲間達が住んでいた世界を滅ぼしたのだ。

その余りにも身勝手すぎる精神に、二人は怒りを通り越して呆れ果てていた。

そんな彼らの様子など知ったことではないキルバスは、クローズとソードに拳を振り

下ろして地面に叩きつける。

「ぐあつ!」

「きゃッ!」

「ハッハッハアツ!! 残念だったなあ? 俺の方が上だ! ハア!」

『Ready go!』

キルバスはそう言ってドライバのレバーを回転させ、手から放出したクモの糸でクロースとソードを拘束する。

『龍牙(君・さん)! まこぴー(真琴さん)!』

「デアアアアアアアアハッハッハハハハハハハハッツ!!」

『キルバススパイダーフィニッシュ!』

キルバスはクロースとソードの二人を引き寄せると、そのまま赤黒いオーラを纏った脚でオーバーベッドキックを決めようとする。

「はあぁアアアアアアアッ!」

だがサファイアが刀で十字斬りの斬撃を放ち、クロースとソードを拘束していた糸を切り刻む。そしてキルバスの蹴りは空振りし、爆風を発生させるだけに終わった。

「——何が『滅ぼしたかった』よ。何が、『楽しい気分』よ・・・」

ふざけんな! このクズが!」

「……………屑。この俺がかあ?」

キルバスは自分を睨みつけ罵倒してきたサファイアを見て、彼女の言葉を復唱する様に呟く。

「ハツハツハアツ!!面白い事を言うじゃねえか小娘エエ!!」

「うるさい黙れ!」

キルバスの言葉に対して怒鳴り返すと、サファイアは抜刀剣蝶龍を構えて再び攻撃を仕掛けた。

「クズだからクズって言ったんだよ!アンタのような脳が腐ってるような初めてだよ!クズ!クズ!クズ!」

「小娘が…・・・激昂するんじゃねえよ」

キルバスにクズと何度も言うサファイアに全員が驚くも、罵倒された本人は気にせず4本の蜘蛛の脚でサファイアを攻撃し始める。

「くっ!」

「おい、大丈夫か!?!」

攻撃された事でダメージを負ったサファイアに、クローズは心配の声をかける。しかし、彼女はクローズの声が聞こえない程に激昂しており、キルバスに向かって叫んだ。

「アンタは最低最悪のクズ野郎だ!絶対に許さない!私がここで倒す!」

「クズ野郎ねえ……だつたら……? そんな風に戦う力があんのに、あん時コイツらと戦わなかったのは、どこのどいつだア……?」

「……え」

「戦う力があるくせに、臆病風に吹かれてぼーっと突っ立てただけの小娘は、何処の誰だろうなあ……?」

「あ……そ、それは……」

キルバスにそう言われ、サファイアは自身の弱さを思い出してしまふ。

「ハツハツハアツ!!俺が『クズ野郎』ってなら、テメエは『ろくでなしのゴミカス女』だなあ!?! ハツ!ハツハツハツ!!ア……ハツハツハツ!!」

「……」

キルバスの言葉で、自分があの時何も出来なかつた事を思い出してしまつたサファイアは、悔しさの余り俯いて黙ってしまふ。その様子を見て、キルバスは高笑いしながら話を続ける。

「ハツハツハア……!!まあいい!俺には関係無いことだからなあ!」

俺にとつて大事なのは、全ての世界と心中する事ツ!そしてお前らを滅ぼすことだけだあ!ヒヤアツハ……!!」

「……ろくでなしなんかじゃ、ないわ」

「……………あ？なんか言ったか？」

キルバスが叫び終わると同時に、ソードがポツリと眩いた。

「だってこの子が本当にろくでなしなら、わざわざ臆病風に吹かされたって貴方の前に現れて、龍牙の変身アイテムを持って来てくれたりしない！」

この子がいたから、彼は貴方と渡り合える程の力を手に入れた！」

ソードがそう叫ぶと、キルバスは呆れた表情を浮かべる。

「ハッ。そんなもん、所詮誰でも出来る餓鬼のお使いだろオ？」

すると今度はクローズは口を開き、キルバスに反論する。

「確かに、ただのお使いなら誰でも出来る。」

だがなあ！ここは戦場だ！一歩間違えば死ぬ、戦いの場だツ！

こんな所にまでお使いするには、それ相当の勇気がないと出来ねえ！誰でも出来るわけじゃねえ!!

それに、コイツはかずやん達でも倒せなかったデストロイスマツシュをぶつ潰した！そんなこいつが、『ろくでなし』だなんて言われる資格はねえ！

それをテメエの理屈だけで、勝手に『ろくでなし』とか『所詮』で片づけんなツツ！」
サファイアはそう叫ぶクローズの姿を見て、脳裏に“ある人物”から教えられた言葉がよぎる。

『人の価値を決める権利は、誰にもないぜ?みんな同じに見えて、色んな人がいるからな』

その人物は、自身の親友と同じくらいかそれ以上の変人で、だけどとても優しく、自分の事を気にかけてくれる人だった。

「ええ、龍牙の通りよ!」

「テメエのくだらねえ理屈で、これ以上何も滅ぼさせやしねえ!」

ソードとクロースはそう言うて起き上がり、サファイアの隣に並ぶ。

「あいつら……きつと」

「ここに居たら絶対……」

そう言うて頭に浮かべるのは二人にとつて、かけがえのない親友……

「誰かの平和を胸に生きている俺は……!」

誰かの力になりたいと思う正義と優しさ、勇気を教えてくれた相棒である晴夜。

「みんなへの愛の為に戦っている私は……!」

いつもみんなを優しく導き、どんな時でも前向きに笑みを浮かべ続けるマナ。

「負ける気がしねえ(ない) ツツ!!」

そんな二人の存在を思い浮かべながら、クロースはレバーを勢いよく回す。

その間、ソードは光の剣を生やした収納状態のラブハートアローを構えて斬りかかっ

た。

キルバスはソードの斬撃を受け止めるも、続けて放たれた短剣による一撃を受けて一瞬怯む。

『クローズサイド!』

『Ready go!』

ドライバーのレバーを回し終えたクローズの背後に、紅蓮の焰を纏う『ブラッドクローズドラゴン・ブレイズ』が召喚される。

「サファイア、合わせろ! ヤアアア!!」

「ツ…言われなくても! おりゃあ!!」

『マツスルフイニッシュユ!』

ソードとサファイアがパンチを繰り出す動作を構えると、クローズドラゴンブレイズの口から開き、同時に二人のパンチを放つ動作と共に三つの炎が放たれた。

「ここ、コイツは…ツ!」

「おっと、逃がさないわよ!」

キルバスは咄嗟に横へ跳んで避けようとしたが、短剣を両手に持ったソードによって足を地面に縫い付けられ、すぐさまその場を離れたソードと違い逃げられなくなる。

そのままクローズとサファイアの攻撃が直撃すると、凄まじい爆発と一緒に爆煙が巻

き起こった。

「まだだ! 畳み掛けるッ!」

『クロースサイド! エボルサイド!』

炎の弾を受けて足を折り体勢を崩しているであろうキルバスの方を見ながらクロースがレバーを更に回転させていると、ソードとサファイアがそれぞれ剣にパワーを纏わせて構えていた。

『ギャラクシーフィニッシュ!』

「ぐう! テメエ……ッ!?」

クロースは懐に入り込んで殴りかかろうとした姿を見たキルバスは、素早く後ろへと下がって攻撃を回避しようとする。

しかしクロースの姿が突然消えた事に驚くと、突然背後から襲い掛かった衝撃に驚きの声を漏らした。背後を振り向いたキルバスの視線の先には、拳を突き出しているクロースの姿があった。

「コレは……ワープ能力かア!」

「当たり前だッ!」

かつてエボルトも使用していたワープ能力を発動させてい

たクロースを見て、キルバスは驚愕しながら目の前にいる敵へ殴りかかる。

だがクローズは再びワープ能力を発動させ、キルバスが攻撃を外した後すぐに下の方へと現れて、黒いブラックホールの様なオーラを纏った強力なアッパーカットを叩き込んだ。

「オラア!!吹っ飛ばえッ!!」

アッパーを受けたキルバスはそのまま上空へと打ち上げられると、空中で身動きが取れずにいる所へソードとサファイアが剣を構えて突撃する。

「はあああああッ!!」

「いつけえええー!!」

「チイイッ!舐めるなア!!」

キルバスは舌打ちをしながらなんとかソードとサファイアの剣を受け止めようとするも、二人を押し退ける事が出来ないまま地上に叩き斬られてしまった。

「グッ!……この俺が、押されてるだオオ?」

キルバスはそう呟きながら立ち上がると、地面を踏み砕いて衝撃波を放ち、二人は吹き飛ばされてしまう。

「認めるか……認めるかよオオオオオオオオオオオオオオ!!」

クローズとサファイアが着地すると、起き上がったキルバスが怒りの雄叫びを上げる。その声には今まで以上の殺意と憎悪が込められており、まるで別人の様に感じられ

た。

「もういい! テメエら全員ブツ殺してやるツ! 死ねエエ!!」

キルバスは全身から禍々しいエネルギーを放出しながらドライバーのレバーを回し始めると、紫色のオーラが彼の体を包み込み、背中には鋭い刃状がついた八本の脚が生えていた。

「……ソード、サファイア。いけるか?」

「ええ、勿論」

「言われなくても!」

クローズの言葉に対して横に並んだ二人が答えると、クローズは仮面の下で笑みを浮かべながらレバーを急速回転させた。

『クローズサイド! エボルサイド! ダブルサイド!』

『Ready go!』

そして必殺技の準備を終え、ソードとサファイアと共に高く飛び上がると、キルバスへ向けてライダーキックを食らわせようとする。

「無駄だアアアツ!!」

一方のキルバスは自身の前に禍々しく光る赤黒い糸の集合体を槍の様に放ち、三人のライダーキックを防ぐ。

「何やっても、無駄なんだよオ！ 無駄無駄無駄ア！ 俺に勝つ事は出来ねえんだよオ!!」
「それはどうかしら？」

「ハアっ!? どういう事だよッ！」

キルバスは自信満々に叫ぶが、ソードの言葉を聞いた瞬間に何かを感じ取ったのか、表情を変えた。

「あなたは確かに強いけど、今のあなたの力じゃ私達に勝てないってことよ！」

「黙れエ！ お前らがいくら足掻こうが、テメエらの敗北は決まってるだろうがア！」

「いや、違うなッ！ 敗北が決まってるのは、テメエの方だキルバス!!」

サファイアの台詞に反論するキルバスだったが、クローズが逆に否定しながらキツクの威力を上昇させる。

「「だりやあああー！ ツツツ!!」」

それによって束になった糸はバラバラに引き裂かれ、三人のライダーキツクはキルバスが咄嗟に前へ出した8本の蜘蛛の脚で受け止められるも、それも徐々にヒビが入り始めた。

「な、なんでだア！ またこの俺がッ！ 人間……如きにイイツ……!？」

『あの時も言っただろ？』

少しずつ、しかし確実に己の運命が定まりつつある中で、いずれ訪れる自身の敗北を

信じられずにいたキルバスは、クローズとソードの背後からエボルトの幻影を目撃していた。

『人・間・だ・か・ら、お前を倒せたんだよ……チャオ!』

『ブラッドフィニッシュ!』

そしてキルバスに向けて冥土の土産代わりに、再びそう静かに告げた。

『マッスルギヤラクシーフィニッシュ!』

『二てりやあああツツツ!!』

「ぐわあああああ!!」

クローズとソード、サファイアはそのまま蜘蛛の脚を粉碎しながらキルバスを吹っ飛ばし、ライダーキックを食らったキルバスは断末魔を上げる。

そのままキルバスは地上へと落下し、身体中から罅しい量の血を流して倒れた。

「ぐふッ……人間、だから……なんだってんだよ……」

何だってんだよオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

ソードとクローズ、サファイア、エボルトへの怨念を叫ぶキルバスには、エボルトの『人間だから自分を倒せた』という理由がわからなかった。

しかし、クローズとソードの隣にいるサファイア、その後ろにいる和也やダイヤモンド達の姿を見て、彼は思わず笑い声を上げた。

「フツ……クツ……ハッハッハッ!!……そうか、そういう事か……ッ!」
キルバスは突然大声で笑うと、体中の傷口から流れる血を眺めながら、納得した様に
呟く。

「人間は、弱い生き物だ。」

だからこそ、その弱点を補おうとする知恵と強かさを持つている。

生き恥を晒そうが生き残ろうとする必死さが、どの生命体よりも強い。

それが、全ての平行世界と心中しようとした俺との違い。

それが、生き残ろうと抗い続けた人間の強み、か……

ほんのすこしだけ、理解^{わか}った、ぜ……」

その言葉を最期に、キルバスは爆裂霧散した。

それによりキルバスが作り出したパンドラボックスと、そのパンドラボックスから生成されたブラッドトリガーは分解され。パンドラボックスは元のホワイトパンドラパネルへと戻り、周囲の空間も元の公園へと戻りつつあった。

「……いいえ、キルバス。貴方は最後まで、何も分かっっていない。」

人間だからとか、関係ない」

そう呟くソードの姿は、いつの間にか元の剣崎真琴としての姿を取り戻していた。

「仲間と一緒に笑い、励まし、競い合う。」

そんな風に明日を過ぎさせる世界を守りたい。

俺たち人間がお前を倒せた理由は、それだけだ」

クロースはそう言ってマッスルギヤラクシーボトルを外すと、突然身体中に襲い掛かった激痛でぶっ倒れた。

元の姿に戻った龍牙が倒れたのを見た真琴とマユは、ダビィやセイリユンと一緒に慌てて駆け寄る。

「ちよつと、龍牙。大丈夫?！」

「あつ……クソツ。身体が、滅茶苦茶いてえ……」

『だろぅなあ。あんな身体で無理矢理変身したんだ。ポロポロになって当然』

真琴に抱き起こされながらも苦しそうな表情を浮かべる龍牙に、エボルトが倒れた龍牙の体からフェーズ1の姿で出現しながら、呆れた様子でそう言う。

「でも、これで終わりだ。アイツの気配が微塵も感じられない今、キルバスはもう二度と復活する事は無い」

「……マユに手を出したのは、俺のハザードレベルを上げて変身させる為だったのか?」

「フフツ、礼には及ばない……」

「誰が言うか!」

龍牙の言葉に不敵な笑みを見せるエボルトだったが、そう怒鳴る龍牙に肩を竦めなが

らため息をつく。

「それで、あんたはこれからどうするの?」

その中で真琴はエボルトにそう質問すると、彼は少し考える素振りを見せる。

エボルトはキルバスを倒す目的の為、龍牙達に協力してくれた。だが当のキルバスがいなくなった今、もう協力関係ではない。

真琴が今後について尋ねるのも、当たり前前の事であった。

「そうだなあ……ぶらりと、コーヒー豆栽培でもするかなあ〜!」

出来たら飲ませやるよ。チャオ♪」

だが彼は今の所、特にやりたい事も対立する気も無いらしく。いつもの口癖を言つて赤黒いオーラに包まれると、空へと向けて飛んで行き、あつという間に去つて行つた。

「飲まねえし、二度来るんじゃねえ」

そして龍牙は小さく呟くと、マユが二人に近づく。

「龍牙、真琴、お疲れ様……」

「ええ……」

「ああ。お前も、ありがとよ……」

三人はお互いに微笑むと、龍牙は痛みに耐えつつ起き上がり、真琴も立ち上がつてから和也達の元へと歩いて行つた。



とある建物の物陰に、去っていった筈のエボルトが隠れて自分の手を見つめていた。

「まあ・・・仕方ねえよなあ〜」

「…………晴夜達を散々傷付けた、貴方らしくないね」

そこへ晴夜とマナが現れ、溜息をついていたエボルトにそう言った。

「…………何の事だあ?俺は別に、何もして無いぞお?」

二人の姿を目に入れたエボルトは不自然な程の笑顔を見せながら、惚ける様にそう答える。

「しらばつくれるつもりならそれでも良いけど、俺達は分かってるんだよ…………」

「あ?」

エボルトは怪しげに首を傾げるが、真剣な表情の二人を見てしらばつくれが通用しないと分かるや否や、観念した様にため息をついた。

「…………はあく…………ホント、面白みのねえ奴になつたなあ〜晴夜ア…………」

俺はただ、俺が作り上げたものに磨きをかけた・・・それだけだ」

「その結果が、自分の体を保っていられなくなるような事になつてもか?」

エボルトの体の異変に気付いていた晴夜がそう問い詰めると、本人は自嘲気味に笑う。

「あの変身、側から見ても相当の負担が掛かっていた。

いくら龍牙でも、あの消耗した身体では最悪死ぬ可能性があった筈だ。

……だが、龍牙は死ななかつた。そこから考えれば、お前が何をしたのかはある程度察しはつく」

「へえ……流石は、天才科学者の息子だけあるなあ……」

晴夜の推理に感心した様子を見せた後、エボルトは両手を広げながら大袈裟にため息をつく。

晴夜の推理通り、クローズエボル・ブラッドの変身の為にボロボロになった龍牙の身体を、エボルトは自身の遺伝子を操る能力と自らの細胞を使って死なない程度に回復させていたのだ。

しかしその代償として残された力の殆どを使い果たしてしまい、更には強大な力を生み出す為に自身の遺伝子を多く消耗させてしまい、自分の存在を保っていられなくなっているのだ。

「だが、俺の遺伝子がある限り、俺の存在は残る……あいつらの娘にもな」

龍牙と真琴。そしてマユの姿を思い浮かべ、自分の存在は残ると言う。

「じゃあなく。お前らも、精々抗ってみせろよお……チャオ!」

その言葉を最後に、エボルトは完全に消滅する。

後に残ったのは、確かにエボルトがいたという痕跡だけであった。

次回! Re. ドキドキ&サイエンス! After story

仮面ライダークロース&キュアソード!最高と最凶のタッグ! その5

仮面ライダークローズ&キュアソード！最高と最凶の タッグ！ その5

「…んじゃあ一息ついた所で、マユ。お前は誰なんだ」

キルバスを撃破し終えた龍牙は、先程から気になっていたことを目の前にいる少女マユに訊ねた。

すると彼女は一瞬イタズラが親にバレた子供のようにビクツとするが、すぐに観念したようにため息をつく。

そして、ゆっくりと口を開いた。

「私は・・・上城龍牙。あんたの娘よ」

「なーーーーッ!!」

「む、む、娘ええええええ!!」

「まあ〜♪」

「まさか……で、で、で……でも、それが本当なら、なんで!」

「まさか、タイムマシンですか!」

それを聞いた和也は口をあんぐりと開け、ショックのあまり意識を遥か彼方へとぶつ

飛ばし。六花は驚きのあまりに声を上げ、ありすは何故か嬉しそうに微笑み、真琴も自分の耳が信じられないと言わんばかりに絶句し、幻冬と亜久里は啞然としていた。

そして、当人である龍牙本人も驚愕の表情を浮かべていた。

それもその筈。彼は子供を作った覚えは愚か、そもそも結婚すらしていない。なのに突然現れたこの少女が自分の娘だと言われても、素直には信じられなかったのだ。

「ハア……白いパンドラパネルの所為。って言えばわかる?」

龍牙が疑問を口にする前に、マユと名乗る少女はめんどくさそうな顔をしながら、そんな事を言い出した。

それを聞いた真琴達は、キルバスから取り返したホワイトパンドラパネルを改めて見つめると、まさかと呟く。

確かに、かつて平行世界と平行世界を融合させて新世界を創り上げる要因となったこのアイテムならば、時空を超える事も不可能ではないかもしれない。

「あたしは別に、行きたくてこの世界に来たわけじゃない。」

でもある日、友達の部屋に飾られてあった白いパンドラパネルが光り出したの。

どうしてこの時代に飛ばされたのかはわからないけど、そのおかげであなた達と会えたって訳」

どうやら本当にマユは時を超えてやって来たらしい。

だがそれでもまだ納得出来ない部分があるらしく、今度は和也が彼女に質問する。それは彼女がここに来た理由ではなく、彼女のもう一人の親についてだった。

「な、なあお前。お前の母親って、どんな人なんだ？ま、まさかとは思うが……」

「……………あー、うん。取り敢えず言えることは……」

和也の問いに対してマユは目を泳がせながらしばらく沈黙した後、意を決したかのよう
うに耳元でこう言った。

——貴方が劍崎真琴のファンだって言うなら、聞かない方が良いわ。

それを言われた瞬間、和也の顔はみるみると青ざめていき、やがてカタカタと震え出す。

「あの……………和也さん？どうしたんで——」

「うわばらっ！」

「ウワー!?かずやんが血を吐いてぶっ倒れたー!!」

心配して駆け寄った幻冬だったが、和也は口から大量の鮮血が流れ出して地面に倒れ伏してしまった。その様子が六花らは慌てふためくが、ぶっ倒れた理由はある程度察しがついてるので、特に驚くことはなかった。

「……………あら？でしたら、何故貴女は龍牙さんにあのような態度をとったのですか？」

血縁的には親である筈の龍牙に対して何故あれほどまでに反抗的だったのか、あります

がそう不思議そうに訊ねると、マユは苦虫を噛み潰したかのような表情になる。

「……この人と、剣崎真琴さんと二人で話しがしたいんだけど。良いかな」

するとマユはそう言って龍牙と真琴を指差す。指差された真琴は少し驚いたような顔をしたが、龍牙は黙って首を縦に振った。

「ええ、わかったわ。じゃあ私達は、先に晴夜君の方へ行こうかしら?」

「そうですね。和也さん!大丈夫ですか?」

「つたく!しつかりしなさいよ!」

六花はマユの提案を受け入れると、ショックで五体投地したまま失神した和也を幻冬とレジーナが引きずって連れて行きながら、ありすや亜久里も一緒に晴夜が居るであろう研究室へと向かっていった。

そして龍牙と真琴の二人がその場に残されると、マユは気まずそうな表情を浮かべる。

「……父さん」

やがてそう口を開いて龍牙らに近づいていった彼女の顔には、どこか気恥ずかしさと申し訳なきが感じられた。

「姉貴!何恥ずかしがってんだよ。さっきの勢いはどこ行っただよ」

「ツ!セイリユン!……余計な事を言うな!」

そんなマユの表情を見たセイリユンはニマニマと笑い、まるで煽る様に彼女の周りを飛んでいた。余計な事を言うなど頬を赤くして叫ぶ彼女の姿を見て、真琴は龍牙と共にクスクスと笑みを浮かべながら、このマユの様子と態度を見て確かに龍牙に似ているなと思った。

「・・・よく聞かされたの。未来の晴夜さんから、父さんの事を」

「…未来の晴夜が？」

真琴がマユの言葉に反応して、思わず聞き返す。

マユは静かに頷いて、未来の母親と晴夜から聞いたという龍牙の話の話を聞かせた。

「昔の父さんは……とにかくバカで計画性のない、どうしようもないほど馬鹿な脳筋だったって、そう言ってた」

「ハアアアアアアツ?! アイツ、未来で俺の事なんて言いやがったんだああ!!」

その話を聞かされると、龍牙は目を見開いて驚愕しながら、未来の晴夜は自分の娘にそんな事を話していたのかと怒り声を上げる。だが一方で、隣に立つ真琴は「確かに」と言わんばかりに口を押さえて笑いを堪えていた。

そんな二人の反応を見たマユは呆れた様な視線を向けつつ、話を続ける。

「——でも。人を守る為に何度も起き上がり、みんなを守ってきた、強い人だとも言っていた」

それを聞いた龍牙は、今度は真琴と顔を合わせて照れ臭そうに苦笑いをする。

「だから、本当かどうか見てみたかった」

すると、彼女は龍牙の顔をジッと見つめた。

その瞳からは、先程までとは違う真剣さが感じられる。

「……………なあ、未来の俺は何してんだ? 元気に、してんのか?」

何かを言いたげなマユの表情を見て、龍牙は恐る恐ると言った様子で彼女に訊ねてみた。その問いに対して、マユは小さくため息をつく。

「馬鹿みたいに元氣だよ。あたしを置いてママと世界中を周るくらいにね」

その言葉を聞いて、もしかして未来の自分は死んでるのではないかと思つた龍牙はホツとしたように胸を撫で下ろす。

だがマユの不機嫌そうな顔を見て、彼はすぐに察してしまふ。

——彼女は、未来の娘は、親が自分から離れて世界中を周っている事に、寂しさを抱いているのだ。

その事に気づいた龍牙は、自分の不甲斐なさを感じてしまふ。

「……………言つとくけど、別にアンタが変に責任感じなくてもいいから。

別に不満を抱いてる訳でも、両親が嫌いなわけでもないし。

何より、もう慣れたから……」

「お前……」

急に下を向いて声から元気がなくなつた彼女に、龍牙は心配そうな眼差しを向けると彼女の肩に手を置き、ゆっくりと語りかける。

「……親でもねえ過去の俺が言つても、仕方ねえかもしれねえ。

だが、これだけは言わせてくれ。

——悪いな。親らしいこと、出来なくて」

彼の謝罪の言葉に対して、マユは静かに首を横に振る。

すると龍牙はフツと優しい笑みを浮かべて彼女を見た。

「ほら、笑えよ。会つてからずっとムスツとした顔ばかりしてよ、せつかくの可愛い顔が台無しだぞ」

「……余計な、お世話だし」

そう言つて、龍牙は彼女の頭を優しく撫でる。

マユは口では憎まれ口を叩くが、その手を振り払う事はせず、ただ黙つて受け入れる。そして、少しだけ口角を上げて笑顔を浮かべる。

そんな彼女の表情を見て、龍牙はこう思つた。

——やっぱりコイツの笑顔、真琴の笑つた顔にそっくりだな。

そんな二人の様子を、真琴とセイリユンは微笑ましそうに見守るのであつた。

「……なあ、マユ。未来の俺がお前をどう思ってるのかは、よくわからねえ……」

けど……お前は、お前のなりたい自分になれよ」

「えっ?」

ふと響いた突然の龍牙の言葉にマユは少し驚くと、龍牙は彼女の肩から手を離し自分の掌を見つめる。

「俺の中にはエボルトの……ブラッドの力がある」

自分の身体に流れるブラッド帝国の、世界を破滅させる力。

最初はその事を聞かされ、自分が人間じゃないと強く痛感し、酷いショックを受けた。

「けど俺は、この力を愛と平和を守る為の力に使う」

それでも、龍牙は戦うと決めた。共に戦う仲間が教えてくれたからだ。

——大切な人達の為に戦えるのなら、それが『人間』の証明だと。

だからこそ、彼は拳を強く握り締めて決意した様に語る。

「なんだって、それが仮面ライダーだからな!」

龍牙は親指を立てて強く叫ぶと、マユも自分の掌を見つめる。

そして彼女は、観念した様な笑みを浮かべて呟く。

——この人は、よくわからないと言っている癖に、あたしの体にも自身と同じ様にエボルト遺伝子がある事を、その呪われた血のせいであたしが辛い想いをした事を、だか

らその事を恨んで反抗的な態度を取っていたのだと察している。その上で、私を励ましているんだ。

馬鹿なりになんとかしようと、頑張つて励ましているんだ。

ならば、自分も覚悟を決めよう。そう思いながら、マユは真つ直ぐに龍牙の目を見て答えた。

「私も・・・やってみる」

龍牙……：父さんが自分の呪われた力を受け入れ、仮面ライダーとして戦う事を決意しているのなら、あたしもそれに倣うしかない。

「私もプリキュアとして、みんなを守れるように戦ってみるよ」

「そうか」

真琴……：ママの言う通り、こんな力でも誰かを救えるかもしれない。

そう思えば、今までは怖くてできなかった事も、今度こそできる気がする。

「ありがとう、父さん」

マユは穏やかな笑みを浮かべると、龍牙と真琴も釣られるようにニツと笑う。

それと同時にマユの身体が光り出し、足元から徐々に粒子となって舞い上がっていく。

「そろそろ時間みたいね……」

「そうだな。また会えたら、その時はもつと話そうな」

「うん。じゃあ、未来で会いましょう」

「——んじゃあ、俺からも最後に一言。」

女子へのプレゼントにプロテインは辞めといった方が良いぜ？親父さん」

二人は別れの言葉を交わすと、マユはたった一言だけ告げ、セイリユンも龍牙へ警告をすると、マユは静かに龍牙と真琴の目の前から姿を消した。

——こうして、龍牙達は未来からの来訪者との邂逅を終えたのだった。



——20XX年。桐ヶ谷家にあるイリアの部屋に置かれた白いパンドラパネルが、突如発光し出す。

「うわあああ——っ!」

「ぐええ——っ!?」

そして光が収まると、そこには二人の少女が地面に転がって倒れていた。

「いったあ……! あ、戻って来たんだ……!」

そのうちの一人であるマユは自分の部屋の床の上で辺りを見渡し、見慣れた光景に元

の時代に戻って来れた事に気付く。

「マユ！大丈夫だった!？」

「うん、大丈夫……だけど。イリア……何その大量の袋?」

マユはそう言つて、隣に倒れていたもう一人の少女・イリアの周りに転がった、ポトルファイギュアやBlu-ray&DVD、ポスター等が入った四・五個の紙袋を見て呆然としていた。

すると彼女は起き上がり、自慢げに語り出した。

「うえっへへっ〜！良いでしょこれ！今の時代じゃ売られていない限定品なんだ〜！

ホラ、コレなんか今じゃあネットオークションで10万以上もするんだけど、あの時代ではたった数千円で購入できるんだよ！コレはもうお買い得すぎて買わないわけにはいかないよね!!」

そう箱に入った美少女のファイギュアを持って興奮気味に話す、何よりもアニメや漫画が好きな彼女の瞳は、まるで宝石の如くキラキラと輝いていた。

「……………イリア……いつもありがとう」

「えっ?なんか言つた?」

「…何でもない!それよりも、もうすぐイリアが見てるアニメが始まる時間だけど、いいの?」

「え?……オ」 アー! ヤバッ!! 忘れてたアアア!?

行くよマユ! 『キラツと☆フューチャー』が私を待っている!」

「はっはっ」

マユはイリアと一緒に急いで部屋を飛び出しながら、いつもいじめっ子達を懲らしめている所為で嫌われている自分の側にいてくれる彼女へ。

そして、大切な事を教えてくれた過去の父と母に。

心の底から感謝を込めて、笑みを浮かべるのだった。



——二度目のキルバス事変から数日経過した頃。晴夜は研究室に籠り、パソコンに向かってホワイトパンドラパネルの解析を続けていた。

「ふう……流石に疲れたな」

晴夜の目の下にはくつきりとした隈ができており、疲労が溜まっている事がわかる。

だが彼は、そんな事は気にせずキーボードを叩く指を止める事はなかった。

(このパネルには、まだ判明していない機能が隠されている筈だ。

今の所判明しているのは、ワームホールの形勢機能を持つ黒いパンドラパネルと合わ

せることで別の世界と融合させて新世界を創造する機能と、未来からのタイムトラベル機能、ブラッド帝国の連中によるパンドラボックスの生成。

……前者二つの事を考えれば、ブラックパンドラパネルが次元に関わる力を持つと仮定して、ホワイトパンドラパネルの方は時空に関わる力を持つてる可能性が大きい。

だがもしかしたら、他にも何か未知の機能があるかもしれない。

新たな機能を解明しようと試みていると、研究室の入口からノックの音が聞こえた。

「晴夜！」

「差し入れよー！」

扉が開かれるとそこからマナとレジーナが現れ、二人はおにぎりが置かれたお皿を手にとって階段を降り、晴夜の元に向かう。

「体の方は大丈夫？」

「ああ、問題ないよ」

「そう言うけど晴夜、パンドラパネルの解明しようとしてずっと寝てないでしょ？そろそろ休んだら？」

「心配してくれるのは嬉しいけど、俺はまだまだ平気だよ」

「もう！いつもそう言って無茶ばかりして！無理しちゃダメだってば！」

「そうよ晴夜。少しぐらい休んでも良いんじゃない？ほれほれ、レジーナ様特製のツナ

マヨむすびぞよ〜!美味しいから食べなさい!」

レジーナはこの前喰らったキルバスの毒の影響はないかと聞くと、晴夜は何も問題ないよと答える。しかし、それでも心配なのかマナは頬を膨らませ、レジーナはおにぎりを差し出して無理やり休憩させようとしている。

「……わかった。それじゃあ、せっかくだし頂くとするかな」

「うん!」

「ええ、そうしなさい」

二人に説得されて渋々休むことにした晴夜は、椅子に座るとマナ達が用意したおにぎりを食べる。

「……そういえば、龍牙君は?」

「ああ。アイツなら今頃、まこぴーと二人で何処かに出掛ける所だろうな」

三人がおにぎりを口に含んで咀嚼する中、マナはいつもならこの部屋にいるはずの龍牙がいないのを見て何処かと思いつながらそう呟いた。

それに対して晴夜は、既に外出したのであろう二人の姿を思い浮かべながらそう答えるのだった。

一方その頃、龍牙と真琴の二人は公園のベンチの上に座っていた。空を見上げて黙り続けていると、しばらくして龍牙が口を開き始めた。

「なあ、真琴。マユの言っていた事、本当だと思うか？」

「……さあね。でも、嘘だとも思えない」

真琴の言葉を聞いて、龍牙は「そうだな」と相槌を打つように返事をする。

「それにしても、まさか未来の娘と出会うなんて……本当にビックリだぜ」

「私もよ。しかもその娘が、まさかプリキュアだったなんて……」

「ハハッ！お前の驚いた顔、久しぶりに見たかもな」

「う、うるさいわよ馬鹿！」

「いてっ!？」

笑いながら言った龍牙に対して、恥ずかしくなったのか真琴は彼の背中を軽く叩いた。

「だけど、もしあの子があんたの娘って言うなら、その母親は誰なのかしら……?」

「……案外、お前かもよ?」

疑問の咄きを漏らす真琴に、龍牙は何気なく冗談交じりに答えてみる。すると、彼女は顔を赤くしながら慌て始める。

「ば、バカ！何言ってるの！じゃあ何!? 将来あんたと私が……その、結婚するって事!？」

「あ?……ああ、そうなるなあ……てか、バカつて何だよバカつて!」

「ツツコミが遅いのよ!それに、あんたが変なこと言うからでしようがこのバカ!」

「あー!バカつつつたー!馬鹿つて言う方が馬鹿なんだよ!友達に教わらなかったか?」

二人の言い争いは次第にヒートアップしていき、公園に来ていた周りの人達はその様子を見て呆れた表情を浮かべていた。

「そもそも!仮にあんたと結婚したとしても、本当に私で良いの!?」

「あ”あ!?? どう言う事だよ!」

「だって私、いつも誰かに護られてばかりで、全然頼りにならないし、あんたの事を困らせてばかりで迷惑かけてるだけじゃない!」

「んなわけでねえだろ!俺が仮面ライダーになるきっかけをくれたのも、晴夜達に会うまでいつも俺の事を気にかけてくれたのも、ずっとお前だ!」

俺は、そんなお前だから好きになったんだ!」

「ツ!」

「それでも!お前がこれから先の未来、不安に思うってなら——」

突然の告白を受けて戸惑っていると、龍牙は真琴の手を握り締めて真剣な眼差しで見つめてくる。

そして、龍牙はこう言葉を続けたのだ。

「俺が！お前を守ってやるッ！」

未来の娘を含めて、全部まとめて守ってやるよッッ!!」

龍牙の純粋な覚悟を聞いた真琴は、戸惑いに満ちていた顔を思わず笑顔にすると、彼の肩を思いつきり引つ張った。

「んっっ!?」

そのまま、彼女は自身の唇と龍牙の唇を重ねた。

キスされた龍牙は驚きのあまり目を見開き、脳がフリーズしてしばらく動けなかった。

「子供の接し方もわからないあなたに出来るの？筋肉バカの上城龍牙君？」

笑顔で少し龍牙を揶揄う真琴。それに対し龍牙はポカーンと惚けるも、やがて彼女の言葉を理解し、口元をニヤけさせる。

「俺は筋肉バカじゃねえ……プロテインの貴公子、上城龍牙だッ!!」

拳を向けながら自信に満ちた顔でそう答えると、真琴はこれから先の未来に期待を寄せながら、己の拳を龍牙の拳へとぶつけた。

R e . ドキドキ&サイエンス！ A f t e r s t o r y

仮面ライダーグリス & キュアアロゼッタ! 不滅の心火!
その1

仮面ライダーグリス&キュアロゼツタ！不滅の心火！

その1

——拝啓。お父さん、お母さん、じいちゃん、ばあちゃん、お元気ですか？

俺は推薦で入った農業専門高校で、新しい友達もできました。

最近キルバスというイカれた異世界人によって平行世界が滅ぼされそうになったりしましたが、仲間が無事に倒してくれたおかげで、再び平穏な日々を取り戻す事が出来ました。そして仲間である亜久里と幻冬は中学生へととなり、晴夜達も高校二年生へと進級したそうです。

それはそうと、もうじき蝉が鳴き始める季節ですが。俺はある日、とんでもないことに気付いてしまったのです。それは……

「——何故、俺には彼女がない」

「「えっ？」」

この俺、『かずやん』こと沢田和也……又の名を仮面ライダーグリスが、この歳にもなつて未だに、彼女いない歴〓今の年齢という状況である事でした。

「どうしたかずやん？」

「いきなりなんですか?」

俺の仲間が住む家の地下室に集まっていた晴夜と幻冬の二人は、突然の俺の発言に対して首を傾げていた。もう一人の仲間である龍牙は、カツプ麺にプロテインをぶっつけたブツを食べている最中だった。

まあ、そんな事はさておき……俺は先程まで読んでいたラノベ（学園ラブコメ）を床に置きながら叫んだ。

——そう、これが叫ばずにはいられなかつたツ!

ここしばらく、俺達四人が一緒に集まることはそうそうなかつた訳だが……問題はコイツらの状況と経緯にあつた。

まず晴夜!コイツはパンドラパネルの研究を一人で続けているが、研究をほっぽり出してマナやレジーナと良く出掛けている。

次に龍牙!コイツは在ろう事か、まこぴーのマネージャーとなるべくして付いていく事が増え始めた。まこぴーの1ファン的には、彼女が幸せならオールオーケーですが、それはそうと筋肉バカは一度馬に蹴られるべきだと思う。

そして幻冬!コイツは亜久里と生徒会の役員として常に一緒にいるらしく、最近じゃ手作り弁当を貰っているとかなんとか……

「アアアアアアアアアアアアアアアアツツ……!!おかしいだろ!!? どうして俺だけこん

なにモテないんだ!? 顔は悪くないはずだろ!?? 運動神経もいいはずだろ!?? 勉強も中の上くらいはあると自負している!

なのに何でなのかなあ!なあ!!? 何がダメなんだよ!教えてくれよ!

こいつら男三人が青春真っ盛りな高校生or中学生ライフを送っているのにも関わらず、何故か俺だけが取り残された状況に陥っているのだ。

何故モテないのかと発狂する俺は、頭を抱え込みながら叫ぶように晴夜達に問い詰める。

すると晴夜と龍牙は互いに見合いながら、呆れ気味に答えてきた。

「なあかずやん。俺が思うに、お前のモテない理由は……」

「ドルオタつぷりがキモいからだと思うぜ?」

「ぐああああー!メチャクチャハッキリ言いやがったなコノヤロー!!」

あまりにも残酷すぎる二人の言葉を聞いた俺は、シヨックのあまり叫び声を上げながら頂垂れてしまう。

「しかし考えてみてくれよ! まこぴーを崇めるのはファンとしては当たり前のことじゃないか!! それをキモイだとお!? ふざけんな!全国のまこぴー推しのファンとアイドル純愛至上主義者どもに謝れ! 泣いて五体投地しろやテメーコノヤロー!!」

「アイドル純愛至上主義者ってどんなパワーワードだよ」

そんな感じで顔を上げて叫び終わると、俺の表情が地面に三段アイスを落とした子供みたいに悲痛なものになっていた。

「ちくしょう……何故なんだ……ドルオタに悪い奴はいねえつてのに……どうしてモテないんだ……」

「ま、まあ……別にドルオタが悪いとまでは言わねえよ。」

ただお前の様な人種は、女子の好感度を上げたとしても。飽くまで友情としての好感度が上がっているだけで、その好感度が恋愛に通じる訳じゃないって事だ」

「なんとというか……かずやんの場合、好感度がラブコメとかで出てくる様な感情へ行くよりも先に、スポ根とかバトル漫画みたいな、強い尊敬とか熱い友情の方に行きがちないメージなんだよな」

「そういう場合って、恋愛感情に繋がりにくいですよねー。」

……まあ、何というか。和也さんもその内いい人が見つかりますよー」

「ありがとよお前から慰めてくれて。おかげで俺のライフはとつくにゼロだよ!!」

何とか宥めてフォローしようとする三人だったが、それが逆に俺のグサグサと心に刺さっていた。ていいうか慰める気あんのかよ teme じゃ。

「ありすはダメなのか?」

すると龍牙が突然そんな事をほざき出し、ムカムカと燃え盛っていた心がすつと鎮火

し、立ち上がりながら後ろの方へとそっぽを向く。

「あいつは……いずれ四葉財閥を背負う女だ。男と関わるほど暇じゃねエし、ただの幼馴染だし、俺とじゃ釣り合うわけねエだろ」

「そんなの分からないじゃないですか。付き合い長いんですから、ワンチャンあるかもしませんよ?」

「何がワンチャンだよ。ませた事言ってんじゃねえよ餓鬼ナスビ、麻婆茄子にすつぞ」
「なんでそこでマーポーナス!?!」

俺は四葉財閥を継ぐありすには恋愛するような暇も興味もないと言うが、幻冬はそれに真正面からズバツと切り捨てて、否定してきた。

確かに俺とありすが幼馴染なのは間違いないが……それでも、四葉財閥を背負う覚悟を決めた女と俺が、一緒になるなんて事は有り得ない話なのだ。

だからこそ俺には、ありすに告白だなんて事をするつもりは、少なくとも今は一切なかった。



「ありがとうございました」

「またのお越しを〜」

ライダー組の雑談会がお開きとなってから、しばらくして大貝町の噴水広場。

そこではありすと、五星財閥の令嬢である麗奈が、ユリの鉢花を売っていた。今年からハイエースを露天販売出来るように改造した様で、鉢花の販売を行っているらしい。

和也はその様子を近くのベンチで見ながら、最初にありすと出会った時の事を思い出していた。

それはまだ和也が小学生だった頃。幼馴染の一人であるマナが大きな屋敷に入り込んでしまった時があった。

屋敷には大きな庭があり、そこには沢山の草木や花々が咲き乱れていた。

その庭園に居たのが、当時のありすであった。

彼女はそこで毎日一人で遊んでいたらしいが、転びそうになった所をマナが助けた事をキツカケに、マナと六花と和也の三人はありすと知り合いとなったのだ。その後も彼らは一緒に遊ぶようになり、ありますが海外へ引っ越そうとするというハプニングはあったものの、一緒に小学校に仲良く通って仲を深めて行った。

しかしそんなある日、和也は家の都合で転校する事になった。マナ達は寂しそうにしていたが、それでも笑顔で彼を見送った。

(んで……戻ると俺は仮面ライダーになって、あいつはプリキュア、か……)

『嬉しい……じゃあ、キスして下さい……♡』

『ああ、良いよ……チュッ』

『んんっ……♡』

それは、レモンの味から始まる、財閥令嬢と田舎農家という身分違いの新たなる恋物語。

果たして彼は、彼女と結ばれる事が出来るのだろうか……

くドルオタ、令嬢と付き合うってよ

近日公開ツツ!

「……あの、もしもーし……」

ありすの声により、現実へと引き戻された。するとそこには、少し心配そうな表情を浮かべた彼女が居た。

「大丈夫ですか?急に大きな声を出して……具合でも悪くなったんですか?」

「え、あ。だつ、大丈夫だ!問題ねエ!!」

「そうですか。それで、お返事の方は……」

「も、もちろん!行きますツ!喜んでツツ!」

「では、一時間後に大貝ショッピングモールでお待ちします」

「おおー！」

和也は浮かれに浮かれまくりながら猛ダッシュで家へ戻りつつ、現状を整理しようとする。

（何ですかアアアこの神展開はアアア!!いや、こんな都合の良い出来事がある訳がないッ！これは夢だー！）

しかしどれだけ頬をつねっても、近くにあつた電柱に頭突きをしても、痛みを感じるだけで一向に目が覚めない。

（夢じゃない〜!!そうか。これは、俺のモテ期の始まり……！さっきまでの不安は何だったんだ！まさか俺にも春が来たというのか……!?）

そうこうしている内に、自宅に到着した。

「アレっ?どうしたんスカ兄貴、額を真っ赤にしながらスキップして……」

ウツキウキで玄関の扉を開けようとすると、スクーターに乗ったリーゼントの青年……土方真直郎が目の前に現れた。

真直郎は、和也が前居た転校先で叔母と一緒に不良に絡まれていた所を救った事をキツカケに、和也を兄貴と呼んで慕うようになり。今では故郷から遙々、和也達が作った野菜を受け取ったり、時折農家の手伝いをしながら、彼らに新作のパンを提供する様になったのだ。

「んあ? ああ、真直郎か。実はさ俺、近いうちに童貞を卒業する予定なんだ……」
「え、ドユコトつすか」

「わかんねーかなあ!俺とありますが!デートする事になったって事だよ!!」

「……おええエエエ!?マジつすか!本気ですか!」

「本気と書いて、マジと読むウツ!!」

「ひよえー!流星は兄貴!そこにシビれる憧れるうッ!」

和也の話を聞いた真直郎はひっくり返りながら、まるで自分の事の様に興奮していた。だがある事に気付くと、首を傾げながら疑問を呟く。

「……でも兄貴、兄貴ってまこぴーのこと好きだったスよね?良いんスカ、ありすさんに浮気しちゃって」

その言葉を聞いた瞬間、和也はスツツと冷静になった。

「あ?何言ってるんだ真直郎。いいか?まこぴーはなあ、みんなのアイドルなんだ。」

例えトイレでう●こ捻り出そうが、男とエツチな事しようが、子どもを産もうが、まこぴーは永遠にみんなの嫁であり続けるんだよ!

それに既婚者にもまこぴーのファンがいて、そこにまこぴーの愛あるならば!まこぴーの嫁である事の証明になるツツ!そして俺に彼女が出来ようが、まこぴーの嫁である事実は依然変わらない。つまり、俺はまこぴーに浮気した事にはならない!

何故なら俺は！新しくできる彼女と同じくらいッ！まこぴーの愛で溢れているからだア!!」

「……………おお！なるほど、そういう理屈なんスね……………！流石は兄貴、そこまで考えて……………！」

和也の無茶苦茶な理論に、思考放棄しながら感心する真直郎。

「さて、俺はありすのデートの準備で忙しいんだ。新作パンの試食は今度に回して、お前も手伝ってくれ」

「わ、分かりましたッ！ガイさん達も呼んでおきますー！」

そう言つて和也は、ガラケーを取り出してメールを打つ真直郎と一緒に家の中へ入つてデートの準備を進めた。

そして30分後――

「ねえ、あのお兄ちゃんの服、なに？」

「……指差さない」

いち早くショッピングモールで待機していた和也は、先までの普段着から黒いタキシード姿の服装へと着替え、体をピシッとさせながら彼女を待っていた。

「……………和也さん?その服は?」

「こんな特別な日に、普通の格好なんて野暮でしょが」

「はあ……………」

そこへありますが、約束した時間通りに到着した。

何で畏まった服装になっているのか疑問に思っていたありすは、特別な日と聞いて頭にクエスチョンマークを浮かべた。はて、そんな日でしたか?と思うが、たまにある幼馴染の奇行だと考えてスルーする。流石財閥令嬢だけあって、図太い精神の持ち主である。

「では、行きましようか」

「おおー!」

ありすが前に出て先へ行くと、和也は鳥のよう舞い上がりながらついて行った。

そんな彼の様子を、看板の影から応援している三人の男共がいた。

「カシラが舞い上がっている…………」

「落ち着いて…………頑張れ!」

「兄貴イイイ!頑張れエエエー!」

「うるせエー!少し静かにしてろコツペパンヘッド!」

興奮して手を振っている真直郎を押しえつけているのは、かつてブラッド帝国でプロ

ス兄弟として晴夜達と戦い合ったガイとライだった。

和也がグリスとなって勝利した時、身寄りのない彼らを引き取って以降、彼らは和也の男心に惚れ込んで改心。今では和也の農家を手伝っており、彼を最も慕う取り巻きのような存在となっていた。

さて、話は戻り。ショッピングモールに入った和也とありすは服屋に入り、そこでありすがネクタイを見ていた。

「やはり、緑でしようか？」

「流石、俺の好きな色知ってるね」

「そうなんですか？」

ありすは緑のネクタイを手に持ち、和也の胸に重ねながら色を見ていた。ガイ達視点では、和也のネクタイを選んでいる普通のデートに見える。

それから二人はショッピングモールを出て、しばらくその場をのんびりと歩いていた。

「あらっ」

ありすは歩きながら、先程買ったネクタイを確認する為に袋の中身を見ると、キーホルダーのようなものがひとつある事に気付く。恐らく先程の買い物の時に、店員さんがオマケとして入れてくれたのだろうとアタリをつける。

これはどうすれば良いのでしょうか?と、手に持ったキーホルダーをどうするか考えていると、横にいた和也にそれを渡す事にした。

「あ? いいのか?」

「ええ、どうぞ」

「おう、サンキューな」

和也は手渡されたキーホルダーを見て、少し嬉しく思いながら早速スマホに付ける。

「今日はありがとうございました」

「いやいや、まだまだこれからだよ。この後——ん?」

何処かへ行こうと言いかけた和也は動く人影に気付くと、そこには建物の陰に隠れて、『カシラー・アタックです!』と書かれた看板を掲げる三人の舎弟の姿があった。

その姿に思わず苦笑いを溢すと、決意を固めた和也は「そろそろ行きましょう」と帰路につこうとするありすに声をかける。

「ありす!」

「はい?」

「あの、ありす……俺と……俺と結婚してください!」

急に呼び止められて首を傾げたありすの前に出た和也は、ガイ達三人が用意してくれた花束を前に出して、思い切り告白の言葉を放った。

舎弟三人組が「ウオオオオ！」と大盛り上がりする中、ありすは少し考えてから、
 “とお辞儀をする。”

「あの……………ごめんなさい」

「……………えっ?」

「私はまだ、マナちゃんや晴夜さんと違い、そこまで考えていません」

ありすのお返事を聞いた和也は自身の耳を疑い、同じ様に二人の会話を大騒ぎしながら聞いていた三人は「アレっ?」と脳内が宇宙猫状態になっていた。

「……………あれ・・・俺達、付き合ってるんじゃない——」

「はい。お父様の誕生日プレゼントを選びを、です」

「…………………………多々?」

「「…………………………多々ツツツツ!!?」」

自身とありすの間に起こったすれ違いの事実を知った和也が、啞然としながら脳の活動をフリーズさせる。同時に三人も、まさかの展開に目を飛び出す勢いでシャウトしていた。

「では、和也さん。また」

「」

ありすが柔かな表情で何もなかったかのように去っていくと、その後ろ姿を見届けな

がら和也は膝から崩れ落ちた。

「カシラ（兄貴）……ツツツツ?!?!?!」

ガイ達は慌てて駆け寄るがしかし、茫然と魂が抜けて某ボクシング選手の如く真っ白に燃え尽きていた。

「大丈夫ですか……」

「い、いてえ……エボルトやジコチューより……いつてえ……」

今まで戦って来た強敵達から受けた攻撃よりも強いダメージを受けたのか、心臓を抑えながた嘆く。そんな和也へ三人は寄り添い、声をかけ続ける。

「旅に出ましょう……」

「心の傷は、旅で癒しましょう」

「兄貴!俺達も付き合いますよ!」

「お前ら……ぐううう!」

涙を振り払い立ち上がった和也は、ある決意を決めた。

そして翌日。

「新たな恋を目指して……出発だ!」

「「「おおおお!」」」

「しゃあ！行くぞおおお！」

心の傷を癒し、新たな恋を見つけ、男を磨くため。和也と舎弟三人組は、ビニールの小舟に乗って大海原へ旅へ立った。

——そしてフラグ通り海が荒れ果て、大波に巻き込まれた彼らは無事に無人島へと漂着したのだった。

それから一週間経った頃……

「なあ晴夜。かずやんの奴、どこ行ったんだろうな？」

「そういえば、マナ達も最近見てないって言ってたな。アイツどうしたんだ？」

「ガイの奴らも見かけねえし、何処かへ出かけて遭難したのか？」

「いやまさか……あり得るなアイツらなら」

何も知らない晴夜と龍牙は、地下室の研究室で行方不明になった和也の安否を心配していた。

「おいビルド！無視してんじゃねえよ!!？」

まあでも和也の事だから普通に生きてるだろうと心配タイムを終わりにした二人へ、一人の少年が怒鳴り声を上げていた。自身の研究室内で騒ぎ立てる訪問者に対し、晴夜はめんどくさそうに顔を向ける。

「うっさいなあ……で、何のようだイーラ?」

「だから!コイツを直せって言ってるんだよ!」

少年の名前はイーラ、三年前に敵であるキングジコチューが率いたジコチュートリオの一人であり、ブラッド帝国の戦いで仮面ライダーマッドローグに変身し、晴夜達に協力した一人である。

そんな彼の前には、マッドローグの変身に使われるエボルドライバーが、机の上で鎮座していた。

「あの戦いから使おうとしても、うんともすんとも言わねえんだよ。お前なら直せんだろ?さっさと直せ。ついでお前らの持っているような強化アイテムも作れ」

「それが人にものを頼む態度かよ。ほんと自己中だなお前」
「生憎俺はジコチューなんだ。で、どうなんだ」

偉そうな口調で頼み事するイーラに、晴夜は呆れた様子を見せながらもエボルドライバーを手を取って分解を始める。

「確かにこれじゃ、まともに使えなさそうだな……」

器具片手にエボルドライバーの状態を見て眩くと、内部にあつた破損したままの部品を手取る。

「……なあ龍牙。俺の記憶が正しければ、このエボルドライバーはエースとレジーナと

の戦いで、一度破損していた筈だ」

「んあ？……ああ、そういやそうだな」

スクワットをしていた龍牙が晴夜の話を聞いて、崩壊したトランプ王国で練り広げられたキュアエースとマッドログになったレジーナとの戦いを思い出しながら答える。

「で、その破損したドライバーをイーラ。あの戦いの後で、お前がどうにかして直したんじゃないか？」

「ああ、何かに使えると思って、お前の父親の研究所にあつた設計図を頼りにな。すごい手こずったが、案外なんとかなるもんだな」

「やっぱりか……」

イーラの言葉を聞きながら、晴夜は破損している部品と別の部品を取り替えながら、ドライバーを着々と修理していく。

「確かにブラッド帝国との戦いを見る限り、案外なんとかなつたかもしれないねえ。だが素人のお前が、父さんの見様見真似で修復なんて出来る訳ないだろ」

「何を言ってるんだ？あの時ちゃんと変身できたんだから、修理も出来てただろうが」

「いいや、出来てないね。例えばこのパーツ。これは変身や必殺技を発動させる際に必要なエネルギーを生み出す発動機なんだが、お前これ破損部分へテクトーに溶接しただろ。これじゃあ作動するどころかまたすぐに破損するぞ。てかもう既に破損してい

る。こんな作りじゃあ、仮に变身できたとしても本来のスペックの十分の一にも満たねえ」

「……」

「あとは、ここの配線とかもぐちやぐちやに絡まってるし……ああ、ここなんかユニット自体が歪んだままじゃないか。これだとエネルギーの逆流が起きて最悪爆発するぞ。」

「……いや、マジでよく变身できたなお前。ある意味俺達がクローズビルドになった時以上の奇跡だぞ」

あまりにもお粗末な修理に呆れて、一度だけとはいえイーラがマッドローグに变身してきた事実を思い出しながら、思わず頭を抱えてしまう。隣で話を聞いていた龍牙は、相棒の難しい話についていけないのでガン無視していた。

「チツ、うるせえな……なら、もつと頑丈なものを作れ。今度こそ壊されないようなヤツをな」

「はいはい、わかったよ。けど今は無理だ。材料がないからな」

「……ていうか思ったんだけどよ、今更必要かよ? 何に使うんだよ?」

イーラの命令に適当な返事をしながら、晴夜はドライバーの修理を続ける。

そんな中スクワット100回三セットを終えた龍牙が、プロテインを飲みながら疑問に思っていたことを口にする。イーラは顔を歪めながら口を開いた。

「……………決まってるんだろ。ダイヤモンドとの決着をつける為だ。その為にもコイツと、強化アイテムが必要だからな」

「だけど六花には、お前と戦う理由も必要性も無いぞ？ それにもし戦うとしても、なんで今なんだ？ 彼女と戦うチャンスや機会だつて、何度もあつた筈だ」

「……………う、うるせえ！ いいから次ここに来るまでに直しとけ！ ついでに強化アイテムも作つとけよ！」

晴夜の反論にそれだけ言い残すと、イーラは瞬間移動で研究室から姿を消した。

「全く、素直じゃない奴だなアイツ」

「まあ、あいつなりに色々と思うところがあるんじゃないかねえのか？ よくわからんが」

二人の会話を黙って聞いていた龍牙は、イーラが何を考えているのかイマイチ理解できなかつた。晴夜はエボルドライバーの修理を行うが、敵も戦う相手もない現状で、ドライバーの修理や強化アイテムの開発を積極的に行う必要があるとは思えなかつた。



——トランプ王国。三年前のキングジコチューとの戦いで人間界と繋がり、トランプ国家となった国。戦いで晴夜達と共に戦い、アン王女の婚約者であつた岡田ジョーこと

ジョナサン・クロコダイルが、今も現大統領として国を勤めている。

そんな彼は現在トランプ王国の大統領として、日本の政府機関へ来日していた。

「今日は、我が国でのライダーシステムについて話があります」

政府官邸にて各国家の首脳陣も何人か出席している中、ジョーはトランプ王国で開発されたライダーシステムについての説明を行う。

「現在、ライダーシステムは有事の際に人々を支援し、防衛のものであると考えています」

そこで彼は、ライダーシステムは決して支配力の為に使用してはならないという話。それと並行して、導入については、今は検討中とされている事を説明していた。

「大統領、ライダーシステムを狙っている組織についてはご存知ですか?」

『『ダウンフォール』、ですか?』

「ええ。彼らは国の覇権を得ようと、ライダーシステムを狙っていると聞いてますが?」
「ご安心を。ライダーシステムは完全な防犯を用意しており……」

その頃、新型ドライバーが用意されている政府所属の国立研究所では……

「これが、新しいドライバーですか?」

念の為に警護として来ていた幻冬が、ケースの中に入ったビルドドライバーについて

尋ねていた。

「ああ。ハザードレベルに関係なく、誰でも使えるように改良を加えたものだ」

ビルドドライバーの開発者である、トランプ 国家所属研究所の所長であり、晴夜の父でもある男性・桐ヶ谷拓人は、新たに改良したビルドドライバーの説明を行う。まあ、その代わりスペックや性能は一律のままだし、まだ量産は難しいという欠点はあるけどね。と付け足しながら。

「そういえば、晴夜は元気にしてるかい？最近あまり会えてないから」

「元氣ですよ。最近ですと、ホワイトパネルについて独自に調べているそうです」

「そうか……ありがとう」

息子が多くの世界で色んな人達と出会い、そこから多くの事学んでいると聞かされ、どんどん自分を追い越していくのだと嬉しく思いながら、息子の成長に笑みを浮かべた。

「それはそうと、ここの防犯はガーディアンがしてましたけど……あれどうしたんですか？」

「ああ、あのガーディアンは各研究機関と合同開発したものでね。防犯対策として各政府機関にいずれは配備する予定だよ」

この政府機関を訪れた際に、幻冬は以前の戦いで見かけた機械兵『ガーディアン』が

どうして配置されていたのかと気になり尋ねる。

対する拓人曰く、ガーディアンは元々トランプ王国の警備ロボットとして彼が開発・設計したのだが、結局エボルト達に良いように利用されてしまったのだと嘆いていた。現在は各研究機関と共同開発し、安全性と量産性を考慮したものを開発し、その実験も兼ねて配置しているらしい。

「なるほど、そういう訳だったんですか……」

「まあ、またいつ何が起こるかわからないし、備えあれば憂いなしだからね」

そんな話をしながらも、二人は研究室の奥へと入って行こうとする。

だがその時。研究所内で突然、物凄い揺れが生じた。

「な、何だ……!」

「一体何があったんだ……!」

地震でも起きたかのような衝撃に慌てる研究員達の声が響く。それはジョー達のいる会議室も同じ様で、慌てて携帯を手に取り何が起こったのかを確認を行う。

「……なに!? か、彼らが来ただと……!?!」

すると電話の奥から報告を受けたジョーは、驚きを隠せなかった。

一方研究所には、顔全体をマスクで隠し、手には武器を持った武装集団・国際テロ組織『ダウンフォール』が、研究者達へ銃を向けながら襲撃しに来ていた。

「テロリスト……ッ」

「バカな……こうも簡単に……!」

「——お久しぶりです。桐ヶ谷博士」

完璧にした筈の防犯対策が破られた事に動揺する拓人に、彼の名を知るフードを被った男が研究室に入ってきた。

「誰だね……」

「ふん。お忘れですか？ 浦賀ですよ……浦賀圭介!」

フードを被っていて誰なのかわからなかったが、男から名を聞いた拓人は一瞬驚きながらも、すぐに目の前にいる男が誰かを察した。その様子を見た幻冬は、拓人へ浦賀とは一体誰なのかを尋ねた。

「私の教え子の一人だ。トランプ王国に飛ばされてからは確か……私とは別件でロストボトルの開発を進めていた……と、エボルトから聞かされていた」

「思い出してくれましたか……」

かつての教え子だと話す拓人を見て、浦賀はフードの下で笑みを浮かべると、フードを上げて素顔を見せる。

その顔を見た二人は驚愕した。何故ならば彼の顔は、左半分は綺麗な顔立ちをしていたが、右半分は火傷をしたのか爛れており、醜く歪んでいたからだ。

「き、君はまさか……!」

「ええ、貴方が今思った通り。俺はエボルト達によって、強制的にロストボトルの実験体となり死んだ。しかし、新世界の創造により俺は蘇った……完全に、とはいかなかったがな」

ロストボトルの実験体としてロストスマッシュになり、最終的に焼却処分させられた時に出来た顔の火傷跡は、エボルトが起こした悲劇を晴夜達の新世界創造でリセットした際に、自身の復活の弊害として起きた現象だと話す。そして彼は端末を取り出し操作すると、政府官邸周辺を警護していた筈のガーディアンが現れた。

「ガーディアンが……ッ!」

「ハッキングされたのか!」

ハッキングされたガーディアンを見た幻冬は、手元にあった固定電話の操作を終えろとスクラッシュドライバーを腰に装着し、クロコダイルクラックボトルを取り出した。

『デンジャー!クロコダイル!』

「変身!」

ドライバーにボトルを装填した幻冬の下からビーカーとワニの顎が出現し、ビーカー内部にて身体がゼリー状の液体とヴァリアブルゼリーで覆われた。

『クロコダイルインローグ!オラア!へキヤー!』

「博士は早く！みなさんと避難を！」

ワニの顎によってビーカーが砕け仮面ライダーローグが現れると、ネビュラスチームガンをガーディアン達へ放って、脱出していく拓人達を守るように奮闘する。

研究室に拓人達研究者達が居なくなったのを見て、ローグはドライバーのレバーを下ろす。

『クラックアップファイニッシュ！』

足からワニの顎型のエネルギーが現れ、ハッキングされたガーディアンの頭部を掴みながら次々と砕いていく。

「これが仮面ライダーの力か……」

仮面ライダーの力を目にした浦賀は、武装した一人にあるものを渡す。それは、黒いキヤップが付いた銀色のエンプティフルボトルだった。

構成員の一人はボトルを数回振り、栓を回して体内に差し込む。

「なっ!？」

すると構成員は、戦闘機や爆撃機といった飛行兵器を人型にしたような姿で、顔面にはコックピットの計器類を再現したようなメーターがついた、ガーディアンとよく似たダークグリーンの怪人へと変わった。

「くう！はああっ！」

ローグはネビュラスチームガンを放つが、何一つ効いている様子が見られない。

怪人が接近するとネビュラスチームガンを手からはたき落とし、そのまま腕を振って装甲の上から攻撃を与え、ローグを吹き飛ばして壁に激突させる。

「何のーこれしきッ!」

吹き飛ばされながらも立ち上がって、反撃に出ようとパンチを繰り出したが簡単にあしらわれてしまい、腹部に蹴りを入れられてしまう。

それにより地面に倒れ伏せたローグの背中を踏みつけ、身動きを取れない様にしてしまう。

「無駄。そいつらはお前達の浴びたネビュラ光線や、ネビュラガスよりも更に濃度が高い『フアントムリキッド』から生み出した『フアントムクラツシャー』さ」

浦賀がそう告げると、フアントムクラツシャーは踏みつけたままの右手を向け、ローグの身体から粒子のようなものを放出させて吸収し始める。やがて粒子の放出が収まると、変身解除されて生身に戻ってしまった幻冬の姿があった。

「どうして、変身が……ぐうッ!」

強制変身解除された幻冬は動揺するも、テロリスト襲撃の混乱によって研究室に取り残された新型ビルドドライバーを守ろうと手を伸ばすが、フアントムクラツシャーはさらに強く踏みつけてきた。

「ライダーシステムは……俺が支配した」

新型ビルドドライバー片手に浦賀がそう言うと、避難していった筈の拓人達が武装したテロリスト達に銃を突きつけられながら戻って来ていた。それを見て時間稼ぎすらできなかった事実を知り、幻冬は悔しさのあまり拳を握りしめた。

こうして彼の奮闘虚しく、政府機関は浦賀の手に落ちてしまったのだった。



——時を同じ頃、大貝町海岸沿いでは。

「あ、ああ………やつと……帰ってこれた………」

「何度、三途の河が……見えたんでしようか………」

「兄貴……次の傷心旅行は、日本列島内で……お願ひします………」

一週間もの間、傷心旅行の旅に出ていた和也達四人組が、ようやく大貝町へと戻って来たのだ。だが四人とも服はボロボロ、髪は潮風と垢でボサボサとなっており、かなり酷い状態となっていた。

「……カシラ、何か変じゃありませんか？」

「しょうがねエだろ……洗濯してねエんだから！」

「いえ、何か街の雰囲気が……」

「あん?」

そんな中、街の雰囲気が違う気がするかと話すライに、和也は何かが違うのかと疑問に思いつながら辺りを見渡す。

「どうしたんですか?お二人とも……早く帰りましょうよ」

「……まあ、いいか。おしお前からア!帰って風呂に入るぞオ!!」

和也達はボロボロになった身体で家に帰るため、急ぎ足で海岸を後にする。

だが彼らが去って行った後、建物の陰に隠れて和也達の姿を見ていた人物が姿を現していた。

「……仮面ライダーグリス、とその舎弟たち。何で海から来たのか知らないけど……なんか面白い事になっているなア」

その人物は、暗い茶髪に赤と青のメッシュを靡かせている美青年であった。

「まあ、ダウンフォールの奴らを政府機関に潜入させ終えたし、ほとぼりが冷めるまでは、ちよつくらバカンスにでも行くかア!良いサンプルも、手に入った所だしねエ」
青年は銀色のボトルを軽く振って、愉快そうに笑いながらそれを懐に入れると、海の中へその身を投じた。

だが波紋広がる海の中に浮かんだ人影は鮫の魚影へと変化し、あつという間に海に向

こう側へと泳ぎ去って行った。

これから起こる惨劇が待ち受ける、この街の行く末を思い嘲笑いながら。

R e . ドキドキ&サイエンス! A f t e r s t o r y

仮面ライダーグリス&キュアロゼッタ! 不滅の心火! その2

仮面ライダーグリス&キュアロゼッタ!不滅の心火!

その2

「平和ボケした、世界各国の代表の方々。今日から我々ダウンフォールが、この世界を管理する」

政府機関を守護する筈の機械兵、ガーディアンがハッキングされ、更には防衛の要とも言える仮面ライダーログがファントムクラッシュャーに敗れた事により、自衛手段を失くした政府機関はダウンフォールに完全制圧されてしまった。

そして現在、政府官邸にある会議室では、ダウンフォールの兵士達が世界各国の代表者達に銃を突きつけて動けないように監視した上で、浦賀が彼らを脅迫するように話をしていた。

「……(晴夜君や、マナ達は無事だろうか……)」

各国の代表達が動揺の色を隠せずにいる中、ジョーだけはこの状況を打破する案を考えながら、晴夜やマナ達の安否を心配していた。

何故なら、例え自分達がテロリストに拘束されようとも、プリキュアと仮面ライダーに変身できる彼らさえ無事ならば、まだ希望はあると考えていたからだ。

「言っておくが、頼みの仮面ライダーとプリキュアは来ないぞ」

この状況でジョーが落ち着いているのを見て、浦賀は彼の耳元でそう囁いた。その言葉を見た瞬間、ジョーの顔色が一気に驚愕と困惑の色に染まる。

それを見た浦賀は不敵な笑みを浮かべると、まるで勝ち誇ったかのように高らかな笑い声を上げていた。



その頃、またしても何も知らない晴夜と龍牙は……

「晴夜ー！龍牙君！」

「二人ともいる!?？」

「マナにまこぴー。どうしたの?」

地下室の研究室へ突如として現れたマナと真琴の姿を見つけるなり、晴夜は椅子から離れながら何事かと尋ねた。

「かずやんが帰ってきたって!」

「かずやんが!あいつ、どこ行ってたんだ——」

和也が帰ってきたと聞き、二人は安堵の表情を浮かべた。龍牙がもつと詳しく聞こう

と近づこうと足を踏み出した時だった。

突然、天井の一部が崩れ落ちる音と共に、上から何かが降ってきたような轟音が鳴り響いた。

『!?!』

その場の全員が驚きながら煙の晴れた先を凝視すると、そこには鋭利な意匠がある剣のような黒い十字架が描かれたタトゥーを顔に刻み込み、戦闘服を着た外国人の男が立っていた。

「BILDD! CROSS!」

その男は晴夜と龍牙の顔を見て、彼らに変身するライダーの名を叫ぶと、銀色のエンペティフルボトル『メタルボトル』を晴夜達に見せつける様に取り出し、数回振って黒い栓を回して身体に差し込んだ。

「あれは……スマッシュユ!」

「いや、違う……何だあれは……?」

飛行兵器を人型にした様な機械の姿と、顔にメーターがついた怪人：フロントムクラッシャーへ変身した男を見て、真琴がスマッシュユになったのかと思いい警戒心を高める。

対する晴夜はフロントムクラッシャーの姿を見て、今までの敵とは何かが違うと違和

感を感じていた。

「まこぴー！」

「ええ！」

「行く（シャル・ビイ）！」

フロントムクラッシュシャーがこちらへ襲い掛かって来ると見たマナと真琴の二人は、シャルルとラビイに合図を出してコミュニケーションになって貰い、取り出したキュアラビーズをコミュニケーションにセットする。

「プリキュア！ラブリンク！」

「龍牙、俺達も行くぞ！」

「…ああ」

プリキュアへと変身した二人がフロントムクラッシュシャーへ立ち向かって行つたのを見て、晴夜と龍牙も加勢する為にビルドドライバーを腰へ装着。晴夜はラビットとタンクのフルボトル、龍牙はドラゴンフルボトルを挿し込んだクローズドラゴンを装填する。

『ラビット！タンク！ベストマッチ！』

『ウエイクアップ！クローズドラゴン！』

『Are you ready?』

フアントムクラッシュヤーはプリキュア2名と戦いながら、二人がレバーを回してアーマーを形成させたのを見て右手を向けると、彼らの身体から粒子のようなものが放出され、それが右手へと吸収されていく。

「変身!!」

そして形成されたアーマーが二人の身体に重なるうとした瞬間、アーマーは仮面ライダーの装甲を創造する事なく霧散してしまった。

「……えっ?」

「は? どういうことだ?」

予想外の事態に困惑しながら、晴夜と龍牙はもう一度フルボトルとガジェットをドライブにセットしようとする。しかしそれでも、ドライブからは何も生成されなかった。

「ツ!? 変身出来ねえ……どうなってんだ!」

「そんな!まさかこれは……」

「力を抑えられた?」

その光景を見て、晴夜は以前あった出来事を思い出していた。

それはかつて、とある敵が作った秘薬によって二人のハザードレベルが抑えられ、仮面ライダーへ変身出来なかった現象に似ていた。

「はああ!」

「ふうッ!」

変身出来ない二人の代わりに、ハートとソードはフアントムクラッシュシャーに挑む。

ハートがパンチの連続ラッシュで動きを止めてる間に、ソードが相手の足を攻撃してバランスを崩し、その隙に二人同時にキックを放つ。

『SHIT!』

だが次の瞬間、フアントムクラッシュシャーはまるでバレルロールを行う戦闘機の如く体を回転させ、二人の追撃を防ぎながら反撃を行った。

「きゃっ!」

「うわあああ!?!」

「ハート! ソード!」

攻撃を喰らった二人は地面を転がるように吹き飛ばされてしまい、晴夜は急いで駆け寄ろうとする。

「このヤロー!」

対するそれを見た龍牙は、ドラゴンフルボトルを振りながら拳をフアントムクラッシュシャーに繰り出す。だが簡単に掴まれて払いのけられてしまい、その際にソードまで巻き込んでしまって壁に叩きつけられてしまう。

「龍牙!ソード!...クソツ!」

『タンク!Ready go!』

晴夜は攻撃を受けて苦しそうにする二人を見て、タンクボトルをドリルクラッシュャーに差し込み。ラビットボトルをスナップするように振りながら加速して、ファントムクラッシュャーへ斬りかかる。

だがそれもまた簡単に掴み取られると、今度は腹部へ強烈な蹴りを入れられてしま
う。

「ぐあああ!?!」

「晴夜!大丈夫!?!」

「あ、ああ……何とか」

それによって、コートからハザードトリガーを落してながら地面を転がった晴夜の安否を心配したハートは、倒れた晴夜の元へすぐに駆け寄る。

ハートに支えられながら立ち上がると、ファントムクラッシュャーは地面に転がったハザードトリガーを拾い上げ、壁に掛けられてあったホワイトパンドラパネルに向かって歩み出す。

「なっ!? 待て!」

晴夜はすぐに追いかけて止めようとしたが、パンドラパネルを奪ったファントムク

ラッシャーは背中のジェットから火を吹かせると、研究室へ不法侵入をした際に破壊した天井目掛けて上昇し、そのまま飛び去って行った。

「みんな！大丈夫!?!」

「ちよつと晴夜！マナ！ 一体何があつたの!?!? 天井に穴が空いてるけど!?!」

晴夜が悔しそうに破壊された天井を見上げていると、そこへ晴夜の家から何かが飛んできたのを見てきてくれた六花とレジーナが、勢いよくドアを開けながら入ってきていた。

「うん、あたし達は大丈夫」

「けど、ホワイトパネルが……」

何とか危機は脱したが、フアントムクラッシャーにライダーの変身能力とホワイトパネルを奪われてしまった晴夜らは、ただ呆然と立ち尽くす事しかできなかった。



無事実家に戻った和也達は、シャワーを浴びてさっぱりした後、いつもの私服に着替えた。そして自分達の農場『沢田ファーム』へ足を運んでいた。

「いや、みんなに迷惑かけちゃったなア〜」

「兎に角これでやつと、いつもの生活に戻れますね!」

「まあ、怒られるのは確実ですがね……」

「まあまあ……あれ? 兄貴っ!」

農場に着いた和也達を迎えたのは、地に伏せた和也の両親、同じく農場で働くパートや社員達だった。

「親父! 母さん!」

「何があつたですか……!」

「ば、化け物がいきなり……」

四人はすぐに駆け寄って介抱を行い、彼らから何があつたのかを聞く。

すると社員の一人が、化け物が突如襲撃して来た事を息絶え絶えながらに語り、それを聞いていた四人はどう言う事かと疑問を浮かべていた。

そんな彼らへ疑問の答えを告げる様に、『ゴオンツ』という重量感のある物質が鉄板の上に落下した様な金属音が、近くで響き渡った。

「So, you're Grease then? I've been waiting for

一体なんだと思ひ振り向くと、トラクターの上にダウンフォールの構成員である外国人の男が立っており、男は外国語で和也に話しかけてきた。

「あん？何言ってるんだ？」

「お前がグリスか？と言ってます」

「……俺を？」

英語で何言っているのかわからなかった和也だったが、ガイの通訳曰く、グリスもとい和也を待っていたと言っていたらしい。

ダウンフォールの構成員は、幻冬にも見せた銀色のエンプティボトル、メタルボトル“を見せると、自らの体にボトルを差し込んでファントムクラッシュャーへと変身した。

「てめえ……」

『ロボットゼリー！』

それを見て敵だと察した和也は、スクラッシュドライバーを取り出して装着し、ロボットスクラッシュゼリーを差し込む。

対するファントムクラッシュャーは和也に右手を向けて、仮面ライダーの変身能力を奪おうとする。

「変身！」

『潰れる！流れる！溢れ出る！ロボットイングリズ！ブラア！』

ファントムクラッシュャーに指を差し向けながらレンチ型レバーを下げると、足元から巨大なビーカーが出現し、黄色の液体が和也の体を覆う。そしてビーカーが割れて黄色

の液体がスーツとなり、頭から噴出した黒いゲル状の液体がアーマーとなつて装着された。

「Why? Transform done!」

和也がグリスへと変身完了したのを見たファントムクラッシュシャーは、驚愕しながら叫び声を上げる。何故なら先ほど変身能力を奪った筈なのに、難なく変身したのだから。

「日本に来たならなあ……日本語話せコラアツ!!」

動転しているファントムクラッシュシャーに、グリスの放った右ストレートが顔面に炸裂した。

「激烈!熱血!爆裂!」

そのままファントムクラッシュシャーを殴り続ける。そして最後に、左アッパーで上空へ吹き飛ばすと、空中で一回転して両足蹴りを喰らわせた。

「先に手エ出したのはそっちなんだからよオ、覚悟しろよなゴラアツ!」

後ずさつたファントムクラッシュシャーに向かってそう叫びながら、左腕に装備したアタックモードのツインブレイカーによる追撃を行う。

「サセネエヨ」

だがそれは、何者かによつて簡単に受け止められてしまう。

「なっ!?? なんだコイツはッ!」

ツインブレイカーを受け止められた 그리스がその張本人を見ると、そこにはホースと氷柱を足し合わせた様な触手と防火帽子を模した形状の頭部を持った黒鉄色の怪人：アイスハザードスマツシユがいた。

「また別の奴かッ!？」

「This の monster 怪人 …… An assassin が sent 送つ by た Rex 客か」

「ヨウ、マイフレンド。タスケニキテヤツタゼ」

アイスハザードスマツシユがファントムクラッシュヤーにそう言うと、左手に持つ冷氣を纏った大型の銃器を 그리스に向けて発砲してきた。

「危ねっ!」

グリスはそれを咄嗟の判断で避けるが、避けた場所には凍り付いた地面があり、その威力に冷や汗を流す。

「こいつアやべえ……いくぞガイ!」

「ああ!」

「え? いくつて何?」

ライとガイは話についていけない真直郎を差し置いて、拓人が改造して安全に使えるようにして貰ったロストフルボトルを取り出す。

『キャッスル!』

『スタツグ!』

そして二人同時に、それぞれキャツスルロストフルボトルとクワガタロストフルボトルを左腕に差し込み、ガイは城壁の様な黒いアーマーと両肩部に装備したウイング型シールドを持ったキャツスルハザードスマツシュ。ライは全身に覆われた黒く分厚い装甲と後頭部方向へ流したハサミ型のツノが特徴のスタツグハザードスマツシュへと変身した。

「うええええええ!!?ちよ、ちよつと待つて!何その姿!!? スマツシュ!!黒いスマツシュ!!?」

「話は後だ!今行くぜカシラア!」

真直郎が驚く中、二人のスマツシュはフアントムクラツシャアの援護を行うアイスハザードスマツシュへ突撃。キャツスルのタックルとスタツグのラプチャーシザースによる同時攻撃が炸裂する。

「ツ!お前ら、その姿は……!」

「へへっ、ブロスになる為のギアは壊れちゃったし、そもそもネビュラスチームガンもないですからねえ……博士に頼んで、ロストボトルを分けてもらったんですよ。予備も含めて3つ程」

「そういう事です」

キャツスルとスタツグはそう語りながらグリスの横に並び立ち、各々の武器を構えてフアントムクラツシャーとアイスハザードスマツシュを睨みつける。

「ちよいちよいちよい！待てよガイ、ライ！お前らだけズルいぞ！俺も戦う！」

するとそこへ真直郎が駆け寄ってきて、彼らと一緒に戦闘に参加すると言い出す。

「あ？何言つてんだ真直郎。お前は下がつてろ」

「そうだぞ真直郎。これは遊びじゃねえんだ」

だがキャツスルとスタツグに軽くあしらわれ、戦いの参加に反対意見を言われる。

「ええー!?そんなーいいじやねーか！俺だつて兄貴の役に立ちたいんだよ……あつ、そーいやガイ！お前さつき、ボトル3本持つてきてるつて言つたよな？」

それでも引き下がらない真直郎が何かを思い出した様に言い、それを不思議そうに見つめ合う三人。襲うタイムミングを失つたフアントムクラツシャーとアイスハザードスマツシュは立ち往生していた。

「おう、コレがどうした？」

そう言つてキャツスルが取り出したフクロウロストフルボトルを見た真直郎は、すぐ様ガシツと肩装甲を掴んでボトルを奪い取る。

「よっしやアアア！コレで俺も兄貴と戦えるぜエ!!」

「は!?おい待てバカ野郎!!」

嬉しさのあまり、思わずボトルを高く掲げてガッツポーズをする真直郎。そしてグリスの怒声が響き渡る。

ガイとライはネビュラガスによる人体実験でエンジンブロス・リモコンブロス（今はハザードスマッシュ）の変身能力を、和也はネビュラ光線による順応でグリスへの変身能力を得ている。

だが真直郎は人体実験も順応も受けていないただの一般人。つまり真直郎には、ライダーの変身能力はおろか、自我を保ったままスマッシュになる事も出来ない筈なのだ。「行くぜ兄貴……いつかのリベンジマッチじゃああアア！」

だが真直郎は止まらず、振ったボトルのキャップを開けて左腕に挿し込む。

三人は慌てて止めようとするがもう遅い。ボトルから溢れ出た成分が真直郎の全身を覆うと、その体はみるみると変わっていった。

「――暴走! 激走! 爆走! いずれも真っ直ぐ!!」

北等工業高校の暴走トラック! 土方真直郎様のくくく覚醒じゃああアア!!」

「……えええエエエ!?!」

そしてそこに立っていたのは、黒くずんぐりむつくりな体型に頭部のギロツとした丸い目ん玉、両腕と身体中に埋め込まれた複数の黒い球体が特徴のスマッシュ『オウルハザードスマッシュ』へと、理性を保ったまま変身した真直郎の姿があった。

「おおオオオ！力が湧いてくるぜイ！」

真直郎は両腕を広げて喜びの声を上げると、そのまま勢いよく走り出し、ハザードアイスマツシユに飛び蹴りを喰らわせた。

「グウツ！」

「まだまだア！」

オウルは休む間もなく、今度はアイスハザードスマツシユに頭突きを繰り返し、怯ませる。

「マジかよアイツ……ホントに人体実験も順応も、受けてないんだよな？」

「アイツの話が正しければ、過去に一度スマツシユになつたと聞いたけど……」

キャツスルとスタツグは真直郎が明確な意思を持ったままスマツシユへと変身した事実を驚きを隠せず、言葉を失う。

「……まあ良いじゃねえか。一緒に戦えんなら、それはそれで。」

さて、仕切り直しと行くかゴラア！」

だがそんな事など気にも留めないグリスは、二人に声をかけてフロントムクラツシャーに向かつていく。

「……それもそうですね！」

「ああ！」

キヤツスルとスタツグもそれに続き、仮面ライダーと三人のスマツシュが並び立つ。
 「Don, t lick!」
紙めるな!

フアントムクラツシャーは苛立ちながらそう叫ぶと、三人のスマツシュに右手を向けて変身能力を奪おうとする。だが彼らの変身は解かれる事なく、アイスハザードスマツシュへと肉弾戦を挑み続ける。

「SHIT! These guys too!」
クソッ! コイツらもか!

「余所見だなんて、随分余裕だなオラア!」

グリスと同じ様に変身能力を奪い取れなかつた事を悔しがるフアントムクラツシャーに対し、その隙を突いて接近したグリスが腹部へヤクザキックを炸裂させる。

「凍ツチマイナ!」

フアントムクラツシャーがグリスと戦う中、アイスハザードスマツシュは手に持った銃から雪氷を発砲。更につらら状の矢『アイシクルチルアロー』を無数に発射する。

「ハッ! そんなもん効くかよ!」

だがキヤツスルは両肩の防壁『グランドランパート』を前へ稼働してつららと雪氷の雨を防ぎつつ、アイスハザードスマツシュに接近して各部に搭載された砲撃ユニットからエネルギー光弾を放つ。

「グッ! ウウッ! ……!」

「流石だぜカシラ！オラツクたばれ！」

アイスハザードスマツシユが怯んだ瞬間、スタツグが素早い動きで懐に潜り込み、ラプチャーシザースで銃もろとも高速切断しながら何度も斬りつける。

「チイツ！調子ニノルナア！」

「うおっ!？」

アイスハザードスマツシユは両手でスタツグを掴むと、地面に叩きつけて冷凍ガスを放って凍結拘束。そのままキャツスルに向けて投げ飛ばすと、体内に内蔵したフローターユニットで高速飛行を行うオウルに受け止められる。

「助かったぜ真直郎！」

「おうよ！ガイ、ライ！一気に決めようぜ！」

オウルはキャツスルとスタツグを下ろすと、キャツスルとスタツグに声をかける。

すると二人も静かに笑い、キャツスルの頭部に搭載された『カタプルタキャノン』から放たれたビームに続いて、スタツグとオウルが同時に突撃した。

「ハアアアッ！」

スタツグとオウルによる同時攻撃がアイスハザードスマツシユに決まり、最後にキャツスルの可動防壁を使ったタツクルが命中した。

三人の攻撃を喰らったアイスハザードスマツシユはファントムクラツシャーに向け

て飛んでいき、衝突と同時に二人仲良く地面を転がって倒れた。

「行くぞオラアアアアーツ!」

『スクラップファイニッシュ!』

そして最後のトドメに、グリスがキャツスルの肩を踏み台として高く飛び上がり、ドライバーのレンチを下ろしながらキックの態勢に入る。

「fuck ing!」

「ナツ!? オイナニヲシテグアアアアアツツ!!」

左右の肩にある『マシンバックシヨルダー』からヴァリアブルゼリーを噴出させて加速するグリスに、フアントムクラッシュャーは近くを転がっていたアイスハザードスマッシュを盾にして身を守る。

スクラップファイニッシュが見事命中したアイスハザードスマッシュは、フアントムクラッシュャーを巻き込んで後方へぶつ飛びながら爆裂霧散。

直撃こそ免れたが、スマッシュの爆破に巻き込まれたフアントムクラッシュャーは後ずさりながら、部が悪いと判断したのか空を飛んで撤退して行った。

「ちっ!逃げやがって!」

グリスは逃げ去ったフアントムクラッシュャーに舌打ちするが、ボトルを外しながら変身解除した。同じく変身を解除したガイとライと真太郎は、すぐに怪我をしている和也

の家族や農家のみんなに駆け寄って介抱を行う。

(どうなつてやがる……なんでウチのファームが襲われてんだ……?)

取り敢えず、晴夜の奴に連絡を——)

一方で和也は、携帯を取り出して仲間の晴夜に連絡を入れようとする。

だがその時電話が鳴り出し、発信者の名前を見るとそこには幻冬の名前があった。

「……もしもし、幻冬か」

『……ええ。一週間ぶり、ですね』

電話に出た和也は、どういうわけか息が整っていないのか少し苦しそうな声で返事をする幻冬に違和感を抱く。

「……お前、どこにいる。俺ん家のファームが襲われたんだ、何か知らないか？」

『……ええ、知ってます……ですけど、今は政府機関でジョーさんの警護をしていて時間が取れないので、こつちに来てください。拓人さんも居るので、そこで話をしましょう』
「わかった。すぐに——」

『後、ついでに卵とプロテインもお願いします……グリスさん』

その言葉を最後に、幻冬からの電話は切れてしまう。

電話中に感じた違和感と、最後に発せられたキーワードの意味に気づいた和也は、携帯をしまつて深刻な表情を浮かべていた。

その顔に気づいたガイは、どうでしたか?と声をかける。

「……幻冬は、敵に捕まった。あいつは俺のことを、グリスと言わねえ」

先の会話の様子からして、幻冬がかなり危険な状態である事。そしてジョーと拓人もまた、敵の手に落ちている可能性が高い事を察する。同時に、彼は自分に此処へ来ていけないと促した事に気づく。

「……兎に角、晴夜と龍牙の所に行くぞ。幻冬もそっちに行くように言つてたからな……」

「ああ……」

「了解だぜ兄貴!」

「分かりました!」

ファームの皆を介抱し終えたガイ達は和也の言葉に同意すると、急いで晴夜らの研究室へと向かった。真直郎の背中に、謎の黒い甲虫が引つ付いている事に気づかないまま。

一方の幻冬は、和也の懸念通り地下の機械室で、拓人と一緒に縄で腕と足を縛られ、身動きの取れない状態で捕まっていた。

「ぐわあッ!」

「幻冬君！」

だがどういうわけか、和也がファントムクラツシャーと対峙してもなお仮面ライダーの変身能力を保持したままである事を知ったダウンフォールのリーダー・浦賀は、携帯を幻冬の耳元に近づけてここへ来るように命じ、ノコノコとやって来たグリス達を拘束しようとしていたのだ。

「下手な芝居を……」

だが先の電話で、和也を此処へ来させない様にしていた事を見破られた幻冬は、浦賀の怒りを買って顔を蹴られていた。

「あぐツ、ゲホツ……あ、あなた達の、狙いはなんだ！」

「狙い？」

苛立ちを募らせる浦賀に蹴りつけられ、鼻血を流しながら後頭部を踏みつけられた幻冬は、苦痛の声を上げながらも敵のリーダーにそう問いかける。

するとそこへ、晴夜達を襲った男の構成員がホワイトパンドラパネルを手に持って現れ、浦賀にそれを手渡した。

「これさ、ホワイトパネル。こいつを使えば、究極の力を……」

ホワイトパンドラパネルを受け取った浦賀は、それを眺めながらパネルの力を求める理由を語り掛けた瞬間。手に持った物を見て何に気付いたのか、パネルを地面へと投げ

つけた。

するとパンドラパネルはまるで陶芸の皿みたいに叩き壊れてしまい、捕賀を除いたその光景を見た者たちは何故パンドラパネルが壊れたのかと啞然とする。

「こいつは偽物だ!」

「What's p?」

偽物のパネルだと聞いて驚きを隠せない構成員だが、挽回のチャンスを掴もうと慌てて口にしようにとした瞬間、銃撃音が数発部屋に鳴り響いた。

「!?」

「役立たずが」

銃口から煙を上げる拳銃を構えた浦賀は、血を流して倒れた仲間の男に向かってそう吐き捨てる。幻冬と拓人は躊躇い無く仲間を殺した浦賀に混乱の眼差しを向けるが、浦賀はそんな二人の視線を無視して、懐から鳴り響いた携帯を取り出して通話に出る。

「俺だ……ああ、既に“Re x”から報告を受けている……すぐにそっちへ向かう」

電話を切った浦賀は携帯をしまい、つい先程生き絶えた男の懐から零れ落ちたハザードトリガーを拾い、幻冬と拓人の前から立ち去った。

「拓人さん。あの人……貴方の教え子、なんですよね……?」

浦賀が居なくなっただのを確認した幻冬は、血が混じった痰を向こうへと吐き捨てなが

ら、あんな簡単に人の命を奪える男が、本当にかつての教え子なのかと拓人に問い掛ける。

「……すまない……私が……」

だがその問いを、拓人は答える事は出来なかった。

何故あんな風になってしまったのかと、もし自分が彼に対して適切な指導が出来ていればこんな事態にはならなかったのではないかと、只々己の罪に後悔していた。



「まさか、偽物のパネルを用意してたなんてな」

卵とプロテインの伝言を聞いた和也達は、晴夜の地下研究室へと到着した。

一度襲撃されてパンドラパネルを強奪されたと知った時は焦ったが、本物のホワイトパネルは晴夜の持つ金庫に保管されていたと聞き、ひとまず安心する。

「それより、なんでお前ら変身出来たんだけ？」

取り敢えずホワイトパネルの件は後にし、晴夜は和也達が何故変身能力を維持出来たのかを聞く。

「わからねエ……ありすにフラれて、傷心旅行に行っていたから……」

「あ……ああ……あ、ありす……」

「晴夜っ！やりすぎだよ！」

その瞬間、今までピクピクしていた和也の顔色が一気に青ざめていき、しまいには今にも泣きそうな様子になりながら白目を向いた。どうやら相当効いたらしい。

流石に見かねたマナが、スリッパで『スパーン！』と頭を叩きながら注意した。

「ごめんなさい……さつて、真面目に考えますか〜」

「お前ホントに反省してんのか？」

流石にやりすぎだと反省する晴夜だが、龍牙は切り替えの早い相棒にツツコミを入れる。

閑話休題。マナ達は放心状態の和也の代わりに、和也の傷心旅行に付き合ったガイ達へ「旅行中に何かあったの？」と聞く。

「ええ……実は船が沈没して、無人島にしばらくいたんです」

そう言いながら、ガイ達は無人島生活中に起きた出来事を話し始めた。

彼ら曰く、和也の傷心旅行に出てすぐに、船が強い波により転覆。和也達はしばらく近くにあった無人島で暮らしていた。

その島の海沿いにはたまたま温泉があり、和也達はその温泉に入ったのだと話す。

「けど突然お湯が溢れて、ガバガバと飲んじやったんすよ」

「それが原因で体の調子が悪くなって、何日も動けなくなってしまったんだ」

「温泉か……」

ガイ達の話を書く限り、その温泉の成分が何らかの影響を及ぼしたのかのと睨んでみると、晴夜のビルドフォンに着信音が聞こえた。

「亜久里ちゃん?どうかしたの?」

電話の相手は、キュアエースである円 亜久里からだった。

『はい。実は先程、私宛に変な電話があつたんです』

亜久里は今から少し前——政府官邸にダウンフォールが現れた時間帯——に電話があつたと話し、その内容について話し出す。

『電話では、幻冬が何者かと戦う音の他に、誰かが『フアントムリキッド』と呼ばれる、ネビュラガスやネビュラ光線よりも高性能な物質を使ったとおっしゃっていました』

「フアントムリキッド……ありがとう。とにかく後で、亜久里ちゃんもこっちに来て」
晴夜はフアントムリキッドと聞き、近くにあつたメモとペンを取って書き始めながら、それが敵の持つ力であると分析する。

「どうしたの?」

「ああ。俺達の変身能力を、元に戻せるかもしれない」

「本当なの!」

「とにかく、ここから離れよう。敵がここを知ってるなら、早く移動しないと」
マナの問いに答えた後、晴夜はメモを書き終わると、そのメモを和也に託す。

「お前はありすを連れて、ここに来い」

「えっ。でも……」

「ありすはまだ、今の状況を知らない可能性がある。頼んだぞ」

「かずやん、お願いね」

晴夜とマナはそれだけを言い残すと、晴夜達は先に此処を出る準備を始め、和也からの同意を得ぬまま地下の研究室から出て行った。

「カシラ。私達も行きましょう。ありすさんを早く『行かねえ』……はっ?」

「俺は行かねえ。今のあいつに、どうやって会えばいいのか、わからねえ……」

ガイは敵の手にかかる前にありすを迎えに行こうとしたが、和也はそれを拒否した。

「そんな!カシラらしくねエよ!」

「そうっすよ兄貴!ありすさんの身に何かあったら、一生後悔しますよ!?!」

三人に説得されるも和也は首を横に振る。

「……わかりました。俺達で、ありすさんを迎えに行きます」

「見損ないましたよ」

今の和也に何を言っても無駄だと察すると、ガイ達は和也を地下室に置いて、三人だ

けでありすの元へ迎えに行く事を決める。

「くそ……ッ!」

ただひとり残された和也は、ふとポケットから取り出したスマホにぶら下がる、ありすに貰ったキーホルダーを見つめながら、俯いて拳を強く握りしめていた。

「今日はお客さんが来ないでランス〜」

「ランスちゃん。もう少し頑張りましょう!」

大貝町の噴水広場にて、ありすは人間態の姿で暇だと呟くランスと、都合の悪い麗奈の代わりとして働くセバスチャンと一緒に鉢花を売っていた。

『速報です!先程政府官邸が、国際テロ組織『ダウンフォール』に占拠されました!』

お花の手入れをしようと車から降りるありすだったが、突然街中に響き渡る臨時ニュースのアナウンスを聞き、思わず立ち止まる。

「占拠……一体何が『四葉ありす。四葉財閥の後継者だな』……っ、あなたは?」

「迎えに来た」

背後から聞こえる声に反応した彼女が振り向いた先には、ダウンフォールのリーダーである浦賀が、ハッキングされたガーディアンを連れて現れた。

「ランスちゃん!行きますよ!」

「わかったでランス！」

ガーディアンに囲まれたありすはラブリーコミュニケーションにラビーズをはめ込み、「プリキュア！ラブリンク！」の掛け声とともに、ラブリーコミュニケーションの画面に指で「L・O・V・E」と描く。

「ひだまりポカポカ！キュアロゼッタ！」

ロゼッタへと変身を完了した彼女は、自身とセバスチャンに襲いかかったガーディアンへパンチを繰り出して吹き飛ばす。

「セバスチャン。周りの皆さんの避難を！」

「かしこまりました」

「はあッ！」

セバスチャンが周囲の人々に声を掛けて避難誘導している間、ロゼッタはガーディアンの銃撃を飛び上がって回避し、後ろへ回り込んでガーディアンを背負い投げでぶつ飛ばしたり地面に叩きつけたりと、襲い掛かってくるガーディアン達を次々と撃退していく。

「ほう、流石はプリキュアか……」

「ありすさん！」

「ライさん！ガイさん！真直郎さん！」

浦賀が彼女の戦闘に感心していたその時、ロゼッタを迎えに来たガイ達三人がロゼッタと合流した。

「ありすさんから離れろテロリスト!」

三人はロストボトルを取り出して数回振って体に差し込み、再びロストスマッシュへと変身を完了する。それを見たロゼッタも、彼らの元へと駆け寄って一緒に構える。

「グリスの取り巻きか、面白い……受けて立とう」

対する浦賀は不適切な笑みと共に、ロゼッタ達に懐から取り出したあるものを見せつける。

「なっ!あれは!?!」

『ハザードオン!』

浦賀は拓人から奪った新型ビルドドライバーを腰に装着し、晴夜が持っていたハザードトリガーのスイッチを押してドライバーへ差し込む。

『タンク!タンク!』

そして二本の黒いフルボトル『メタルタンクフルボトル』を数回振りドライバーに装着すると、二つの戦車のシルエツト出現と一緒に音声流れる。レバーを回すと警戒色の無いハザードライドビルダーが前後に出現した。

『Are you ready?』

「変身……」

漆黒の金型が浦賀の体をプレスし、レンジの音が鳴ると重なっていたフレームを取り込みながら装甲を形成していく。

『アンコントロールスイッチ！ブラックハザード！ヤベーイ！』

「——ハザードを更に進化させた、メタルビルドだ」

「メタルビルド……」

黒一色のボディに加えてタンクの複眼までもが黒い、通常のハザードフォーム以上に異質な姿の仮面ライダービルド……『仮面ライダーメタルビルド』が、ロゼッタとハザードスマッシュユ三人衆を一掃せんと姿を現した。



「オイ晴夜、何処だよ……？」

「地球」

亜久里と合流したライダー&プリキュア御一行は晴夜の案内の元、海岸の景色が見える場所へと到着。そこには白い施設があり、晴夜以外どういう場所なのか知らないマナ達は疑問を抱きながら建物の中へ入っていく。

「そうじゃなくて、此処のことよ」

「此処が何処かは、すぐに分かるさ」

質問の問いを聞いてふざけているのかと怒っていた真琴だったが、しばらく歩いて広い部屋へと到着すると、白のYシャツと黒いズボンに茶色のジャケットを着た男性が椅子に座っていた。

「——珍しい客だな……」

「石動さん……」

その男性は、石動総一郎。晴夜の叔父であり、3年前までエボルトに体に乗っ取られていた元科学者である。

「久しぶりだな。少しは背が伸びたようだなお前ら」

「どうしてここに……」

「まだ、父さんと一緒に研究してないんだ」

「……エボルトに体に乗っ取られていたとはいえ、俺は多くの人間を危険に晒したからな……」

総一郎はまだエボルトに体に乗っ取られ、その結果として数多くの人々を危険な目に合わせた事を悔やんでいた。責任を感じた彼は、ここで一人ひっそりと暮らしているのだという。

「それよりも叔父さん、アンタに調べて欲しいことがあるんだけど……」
「……いいだろう。俺が知る事の出来る範囲内で良いならな」

晴夜に頼まれた総一郎は、自分の知り得る限りの情報を調べるべく準備を進めた。



「うらアツ！」

「ハアアツ！」

メタルビルドを相手に戦っているスタッグとオウルだったが、冷静に攻撃躲す相手を翻弄しきれず、なかなか決定打を与えられないでいた。

「だりアアツツ！」

「タアアツツ！」

そこへキヤツスルの砲撃がメタルビルドに放たれ、今度はロゼッタの正拳突きや回し蹴りといった格闘技を、ビームを頭だけ動かして避けたメタルビルドに繰り出す。

だがロゼッタの攻撃は全て読まれていたかのように簡単に避けられてしまい。それでも彼女はメタルビルドの攻撃を捌きつつ、隙を見てパンチとキックで応酬し合おうと狙うが、相手は一切の隙を見せず難なく防いでしまう。

「くそつたれが!」

「これでも喰らえ!」

スタッグとオウルはロゼッタを援護しようとして、再び斬撃と体当りを繰り出したが、それも軽くあしらわれてしまう。

「この野郎……!」

「強すぎだろ……!」

「……ロゼッタ。私達がアイツに総攻撃して撤退させます。貴女は奴に隙を!」

「わかりました。お願いします」

なかなか事態が好転しない事に苛立つオウルとスタッグに対して、キャツスルはロゼッタへ冷静に作戦を伝える。それを聞いたロゼッタは三人を信じ、メタルビルドへ突撃していったスマッシュ三人衆を援護するように収納状態のラブハートアローを取り出した。

「プリキュア!ロゼッタリフレクション!」

そして彼女はラブハートアローを使いクローバー型の防御障壁を出現させ、二つに分けて扇の形に展開。それを振るって風を起こし、砂埃と共に巻き上がった猛風を受けたメタルビルドは思わず動きを止め、腕で顔を覆って一瞬防御の姿勢を取った。

「今です!」

「行くぞライ！真直郎！」

「ああ！」

「おっシヤア！行くぜ行くぜ行くぜ！！」

その一瞬の隙を突いた三人はメタルビルドの周りを三方に囲み、同時にエネルギー波を放とうと構える。

「無駄だ」

『ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！』

だがメタルビルドは落ち着いた様子でドライバーを回し、脚にエネルギーを蓄積させる。

『Ready go！オーバーフロー！ヤベーイ！』

「ぐわああアアツツ！」

そして必殺技を発動させると、メタルビルドの右足が紫色のオーラで染まり、そのまま回し蹴りに合わせて戦車の履帯状エネルギーを飛ばし、三人を一斉に薙ぎ払う。

「皆さん！」

その一撃で変身解除に追いやられ気を失った三人に意識が行き、ロゼッタに隙が出来たのをメタルビルドは見逃さなかった。

「さあ、来てもらおうぞ」

メタルビルドがそう言いながらロゼッタに拳を振るおうとしたその時、何者かが横から攻撃を繰り出し、メタルビルドは咄嗟に身を屈めて避ける。

「和也さん!」

ロゼッタから距離を取って自身に殴りかかった人物……迷った末にスクラツシユドライダーを装着したまま此処へ来た和也の姿を見たメタルビルドは、少し驚いたような表情を浮かべた。

「グリスか……随分遅かったな。尻尾を巻いて逃げたのかと思っただぞ」

「——俺を置いて、何楽しいことしてんだよ。コラア……」

『ロボットゼリー!』

余裕な笑みを見せるメタルビルドに対し、スクラツシユゼリーをドライバーに装填して仮面ライダーグリスへと変身した和也は、倒れている三人を見ながらツインブレイカーを出現させた。

「ビルドに化けたア……胸糞悪リィ奴だな!」

そう言うツインブレイカーをメタルビルドの胸に向けて直撃させる。だがメタルビルドはビクともせず、傷一つない装甲を見ながら仮面の下でほくそ笑みを浮かべた。

「なっ……!」

「ふッ!」

メタルビルドは動揺するグリスの顔を殴る。振り払われたグリスは地面を転がされながらも直ぐに起き上がり、ロックボトルをツインブレイカーに挿し込む。

『シングル！シングルファイニッシュ！』

ツインブレイカーから放たれた鎖はメタルビルドの体に巻き付いて拘束し、動きを封じた所でグリスは敵を追撃すべく突っ込んでいく。

「お前ごときが、俺を止められると思うか！」

しかしメタルビルドはあつという間に鎖を引き千切ってしまい、ドライバーのレバーを勢いよく回しながらエネルギーを蓄積させる。

『Ready go！オーバーフロー！ヤベー！』

「ぐわああああーッ！」

前蹴りと共に放たれた履帯状エネルギーは前方にいるグリスのいる所まで伸ばされ、それを喰らってしまったグリスは吹き飛ばされて変身が解けてしまう。

「和也さん！」

倒れ伏した和也を見て駆け寄ろうとするロゼッタに、メタルビルドは背後に周り込んで腕を掴んで阻む。

「離してください！」

「あ、あります……」

「こいつを助けたければ、ホワイトパネルを政府官邸まで、お前が持つて来い!」

メタルビルドはロゼッタの腹部を殴って変身解除させながら、人質解放を条件に和也へ要求を突きつける。

和也は気絶させられたありすを担いだメタルビルドを追いかけようと起き上がろうと試みるが、先程の攻撃で負ったダメージが大きく、思うように体が動かなかった。

そして、降り始めた雨水に冷たく叩きつけられながら、和也の到着を心の奥底で信じながら勇敢に立ち向かって無様に地に伏せたガイ達三人衆と、ダウンフオールに連れられたありすを、ただ見ている事しか出来なかつた。

「ガイ、ライ、真直郎……ありす……うわあああああツツツ!!」

自分が早く此処へ来なかつたことへの後悔。

ありすを救えなかつたことへの後悔。

ありとあらゆる不甲斐なさに、自分へ対する怒りや悲しみ。様々な感情が入り乱れて発狂したように叫び、雨の中、地面に何度も頭を打ち付ける。

そんな和也の姿を見て嘲笑うかの様に、雨は一層激しくなっていた。



その頃、石動総一郎の研究ラボにて。

「あゝあ、話がわかんねえ〜！」

「私も〜！」

晴夜と総一郎の話に頭がついて行けなくなった龍牙とレジーナは席を外し、隣のリビングで休憩していた。

「何かわかりました？」

「どうやらファントムリキッドは、三年前の新世界誕生の際に出現したようだ」

真琴の問いに対して総一郎は、画用紙に絵を描いてわかりやすく説明する。

——かつて、エボルトが拓人と争った際にパンドラボックスから偶発的に放出されたネビュラ光線は、光線を浴びた晴夜達の細胞に含まれているDNAを変化させてハザードレベルを半強制的に上昇させ、身体の構造を実質的に怪人と似た体質へと変貌させる力を持っていた。

そして同じ様にパンドラボックスから放出されたネビュラガスは、人体の構造をDNAレベルで書き換えるネビュラ光線と違い、人体が取り込むと特殊な細胞分裂を引き起こす効果を持っており。その細胞変質によつて人間をスマツシユへと変化させる性質を持っている。(また人の体には、個人個人でネビュラガスに対する抵抗値が存在しており、それらの値を『ハザードレベル』として計測することが可能となっている。)

「そしてトランプ王国に渡ってパンドラボックスを取り戻したエボルト達は、崩壊したトランプ王国から遠く離れた大陸で、大量に放出させたネビュラガスを使ってロストボトルの開発を行っていたんだ」

人間界で桐ヶ谷巧に行わせていたトランスチームシステムとフルボトルの成分収集と同時進行で、トランプ王国にてエボルトが真の姿を取り戻すのに使うエボルドライバーの修復とブラックロストボトルの研究を桐ヶ谷拓人にさせていた。

だがロストボトルの研究を行う際にネビュラガスを使用する際、ネビュラガスによる大気汚染と土壌汚染問題が発生する都合上、崩壊したとはいえキングジコチューがいるトランプ王国を実験場として使うわけにもいかず。トランプ王国から遠く離れた所で研究を進める必要があった。

「そしてロストボトルの研究が行われた現地は、案の定というべきか……ネビュラガスによる大気と土壌の汚染が発生していて、その地に住む動植物に大きな影響が出ていたそうだ。」

おそらくその時に放たれたネビュラガスが、人間界とトランプ王国の世界が融合した際にある場所へ密集されて。更に新世界創造時に発生したネビュラ光線を吸収した事で、より成分の濃い液体の状態となったのだろう」

「じゃあ、和也達が入った温泉が、ファントムリキッドだったって事?」

「そういうことだね。ネビュラガスやネビュラ光線の力を、より高めた成分を持つファントムリキッドを浴びていたから、和也君達は力を抜き取られても変身出来たんだ」
「その原理なら、もう一度変身出来るようにするには……ファントムリキッドのデータから抗体薬を作れば……」

「だが、ネビュラ光線を浴びたお前達以上に、ファントムリキッドの力は強い」

「ああ。もう一度変身出来たしても、奴らに対抗するには……ファントムリキッド成分データからなるアイテムが必要だ」

総一郎の説明を聞いた晴夜は、ファントムリキッドに適応した抗体薬に加え、ダウンフォールに対応出来るアイテムの開発も必要だと理解した。

「だったら……俺で試せ」

すると声が聞こえ、振り向いた先にいたドアの前には、メタルビルドの攻撃で傷だらけになりながらも、此処までガイ達三人を連れて此処へ来た和也が立っていた。

「外に、あいつらもいる。頼む……」

「わかった」

「直ぐに行きます」

晴夜達は急いで和也に近づき、真琴と亜久里は外に居るガイ達三人の介抱に向かう。

これでアイツらも大丈夫だ、そう一安心した和也は膝をついて倒れそうになる。

しかしそれをマナと六花に支えられ、なんとか持ち堪える事ができた。

「酷い怪我……」

「かずやん、ありすは……?」

「悪い……連れ去られちゃった……頼む、晴夜!」

それを聞いて驚くマナと六花だったが、それ以上に申し訳無さそうな表情を浮かべながら和也は晴夜の腕を掴み。ありすを助ける為ならば、メタルビルドへのリベンジの為ならばなんでもやってやると覚悟を見せながら、自分に力を貸してくれと懇願する。

晴夜にはそんな和也の頼みを断る選択を、持ち合わせていなかった。

Re・ドキドキ&サイエンス! After story

仮面ライダーグリス&キュアロゼッタ!不滅の心火! その3

仮面ライダーグリス&キュアロゼツタ！不滅の心火！ その3

——今から一年前、沢田ファームにて。

「ガイ君。ライ君。こっちの収穫手伝っておくれ！」

「はい！」

「皆さん！差し入れです！」

ガイとライの二人は、和也の実家の仕事で、一緒に働く農家の人達と上手く接していた。収穫のペースも上がったと評価も良く、よく差し入れを持って来ている真直郎とも打ち解けていた。

「このペースなら、今週のうちに収穫と次のシーズンの栽培も始められそうだな」

「……なア親父。俺、やりたい事を見つけたんだ」

和也の父親が野菜の入った籠を持って喜んでいる中、突然和也がそんな事を言い始めた。父親は、息子が何の話をするのか気になりながらも、笑顔で聞き返す。

他の仕事仲間達も同じだったようで、興味津々といった表情をしている。

「俺、プロのフロアーリストなる」

その一言に、和也の父親や周りの農家達は驚きを隠せなかった。農家の長男である彼が、まさかフラワーデザイナーになるとは思わなかったからだ。

だが真剣な表情を見せつける和也に、父親はどうしてそう思ったのかと疑問を投げかける。

「前から思ってたんだ。野菜を作って届けんのも良いけど、もつと他にも人の心を癒す事が出来ることはねエかって……」

「それで、フローリストか?」

「ああ。花は確かに食えるもんじゃねえが、そこにあるだけで人の心に安らぎを与えて、笑顔することだって出来るってな!」

あの日バザーでありすの夢を聞いた時から、元気をなくしていた人達がふと花を見ていた時に浮かべたあの笑顔を目にした時から、自分がなりたいと思いついていた夢。

だからこそ和也は、家の農家の仕事以上に大切だと思った夢を叶えたいと、反対される事を覚悟に親へ語り続ける。

「カシラ。私は、あなたを応援します」

すると和也の肩に手が置かれ、後ろを見るとガイが笑みを浮かべながらエールを送りだした。

「俺も……このファームは、俺達で守ります!」

「兄貴なら、世界中の人の心を動かす作品を作れる筈です！」

続く様にライや真直郎も、和也の夢を嘲笑うことなく、純粹な気持ちでエールを送る。そして話を聞いていた人達もまた、和也の夢を応援してくれた。

「——和也」

父親だけは、ただ名前を呼んだだけだったが、和也はそれに応えるように真つ直ぐ見つめ返し、返事を待つ。

「やるなら、責任と覚悟がいるぞ」

暫くして嬉しそうな表情をして息子の背中を押してくれた和也の父親に、和也は頷いて感謝の言葉を伝えるのであった。



「もうじき、この世界は変わる。俺が支配する世界へとな」

和也達をいとも簡単に倒した浦賀は、拘束し縛り付けたありすとランスを政府官邸のある部屋へ連れ込むと、その部屋の中央へに伏せさせる。

床に倒れ込んだ衝撃で意識を取り戻した二名は、すぐに立ち上がろうとするが、手足を縛られた状態ではまともに動けず、無様に転んでしまう。

「前の世界では、俺の才能は活かされなかった。

——だが、今は違う。俺がNo. 1だ!

もはや、俺に敵うやつはいない。例えばプリキュアだろうと、仮面ライダーだろうとブラッド帝国の力を持つ者だろとな」

そう言つて高笑いする浦賀は椅子に座りながら、メタルタンクボトルとフアントムクラッシュヤーへの変身に使用するメタルボトルを手に取り、愉悦そうに眺め始める。

「いえ、あなたは私達に敵いません」

「そうでランス!みんなは負けないでランス!」

そんな彼へ水を差すように、ありすとランスが浦賀に向かって叫ぶ。

その言葉にカチンときた浦賀は、二名の諦めの悪い視線と言葉に苛ついたのか、ボトルを握る手に力が込められる。

「例え、あなたがどんなに強くても……私達は負けません。和也さんもきつと立ち上がり、あなた達の前に現れます!愛と平和を守るヒーローなので——」

「図に乗るな小娘が」

ボトルを机に置いた浦賀は、ランスをまるでサッカーボールの様に蹴り上げて、壁に叩きつける。

「ランスちゃんツ!!」

「まだ、自分の立場がわからんようだな……」

蹴り飛ばされたランスをありすが悲痛な声で呼ぶ中、浦賀は倒れた彼女の髪を掴んで無理矢理立たせると、そのまま腹を殴り付ける。

「ぐうつ!?!」

「ありすツ!! やめるでランスつ!!!」

痛みに苦しむ彼女を見て、ランスは必死に声を上げる。

だが浦賀はありすの髪を掴んだまま、床に何度も顔を叩きつけ、それでも飽き足らず、彼女を壁まで投げ飛ばして強く打ち付けてしまう。

「——ツ!? あ…が、げほっ」

「ヒーロー……そんな奴はいない。そしてお前達は、俺には敵わない」

全身を強打しながら倒れ込んだ彼女が鼻から血を流しながら倒れる様を見下ろす浦賀は、自分の強さを誇示するように鼻で笑い、これから己の手に納まるであろう天下に酔い痴れるのだった。

その頃、六花達の処置が済んでベットで横たわるライ達三人を見つめる和也は、未だに目を覚まさない彼らに不安を覚えていた。

彼らの容態を見た総一郎曰く、幸いにも今はまだ息はあるが、いつ目覚めるかわから

ない状態らしい。

「——グリスのパワーアップアイテム。その名も……グリスパーフェクトキングダム！」

そこへ、和也達のいる部屋を訪れた晴夜は、赤い城の左右にそれぞれ黄色いフクロウ、青いクワガタが模されている強化アイテム『グリスパーフェクトキングダム』を見せつける。

「凄いでしょ!最高でしょ!天才で——なんてな……コイツは、まだ完成していない」

テンションを上げながらそう叫ぶ晴夜だったが、和也の様子を見て途中で言うのをやめ、まだこのアイテムは完成してない事を告げる。

「どういうことだ?」と問う和也に対し、彼は少し言い辛そうに答え始めた。

「こいつを完成させるには、ファントムリキッドの成分がまだ足りないんだ」

「だったら、俺の『それでも足りない』……」

言葉を遮る様に切り捨てる晴夜の一言に、和也は思わず表情が強張った。

「少なくとも、あと三人分……」

「ツ! こいつらを、見捨てろって言うのかよツツ!」

そう言ってベットで横たわっている三人を見つめるのを見た和也は、怒りの形相を浮かべて勢い良く立ち上がるとコートの際を掴み、壁に叩きつけながら問い詰める。

何故なら今の負傷した三人からファントムリキッドを強制的に抽出する行為は、彼らの命を危険に晒すだろう事を意味しているからだ。

「こいつらはな………本当に、最高の馬鹿野郎共なんだよ……」

そう語る和也の脳裏に過るのは、傷心旅行で三人と無人島に遭難してしまった時の記憶――

「さ、寒イよ………あ、兄貴……」

「お、お前ら………簡単に、くたばるんじゃ………ねえぞ」

和也達は当時、温泉へ入った際に摂取していたファントムリキッドの副作用によって酷い倦怠感と寒気に襲われており。その所為で何日も体を動かさず、何も口にしていない事もあり、声を出すのがやっと状態だった。

それでも四人は体を寄せて身体を温め合い、和也は舎弟三人に声を掛け続けて、何とか生き長らえようと頑張った。

「もし………俺達が、死んだ時は。俺達の肉を食ってでも、カシラは………生きていて、ください」

そんな中、ライはもし自分達が死んだ場合の事を考えて、首からネックレスの様にぶ

ら下げていた青いドッグタグを取り出して、和也へ見せ付ける。

同じ様にガイと真直郎も、それぞれ赤と黄色のドッグタグを出し、名前が刻まれた金属光沢を輝かせる。

そのドッグタグは、和也という男に惚れた証であり、和也の仲間として共に居たという確かな証明だった。

「ふざけんな……そんなもん、食えるかよ……ッ」

彼らの遺言を聞いた和也は当然、自分が生きる為に彼らを犠牲にする様な選択を取る事など出来る訳もなく、弱々しく返事をして首を横に振る。

「それでもッ。あなたには……生きていて、ほしいです」

だが三人にとって和也は、永遠の憧れであり、命の恩人でもあった。

真太郎はかつて、故郷で祖母と不良に絡まれていたところを和也に助けられた。その時目にした背中に涙を感じ、それ以来ずっと彼に憧れて役に立ちたいと願っていた。

ライとガイはかつて、伊能達ブラッド帝国の為に多くの人々を傷つけてきた。だが今までのツケを払うかの様に無様な完全敗北を晒した二人は、自分達を負かした和也らにトドメを刺す様に懇願したが、和也はそれを拒否。それどころか逆に彼らの為に居場所を作り、償いの機会を貰った。

もし兄貴と出会わなければ、自分は恐らく不良達に搾取されてただろう。

もしカシラと出会わなければ、自分達はきつと後悔したまま地獄へ落ちていただろう。

だからこそ彼らは和也へ感謝し、和也の為なら死ねると思っていた。

「カシラなら、きつと……たくさんの、笑顔を……作れます」

だからこそ、三人とも和也に生きてほしいと思つた。

それは、彼の目指す夢を実現出来る手助けをしたいという、ガイ達の強い想いが込められた、単純明快で純粋な願いだった。

「こいつらのいねえ明日なんて……俺には理解できねエ」

故に和也は、この三人を失いたくないと強く思っている。

例え強大な敵に勝つ為だとしても、例え大切な幼馴染を助ける為だとしても、彼は彼等を失う事が怖かったのだ。

だが同時に、彼らと彼女を助けられてなかつたのは、自分の責任だと強く感じてしまった。

もつと早く駆け付けていれば、こんな事にはならなかつたかもしれない。

だが現実が違う。自分がウダウダと悩んでいた所為で、舎弟達はメタルビルドにやら

れてしまい、ありすも攫われてしまった。

その事実が和也を追い詰め、どうしようもない程に苦しめていた。

「……どこ、行くんだよ」

「帰るんだよ……」

和也はコートを力なく離し、扉のノブに手を伸ばして部屋から出る。

「かずやん……」

すると彼の目の前には、小さい頃からの幼馴染である、いつも元気に周りを和ませてくれるマナと、しつかり者でマナのブレーキ役になってくれる六花が、自身を心配そうに立っていた。

そんな二人の姿を見た和也は一瞬だけ、此処に居ないはずの少女……いつもはおっとりしているが、夢の為にひたむきな努力を続けるありすの姿を幻視してしまい、瞳が潤んでしまう。

「マナ……六花……悪いな」

だがそれを悟られない様に顔を背けながら、大切な幼馴染の一人を助けられなかった事を謝罪。彼女らに背を向けながら、その場を立ち去った。

マナ達はかける言葉が見つからずに黙り込んでしまい、ただ見送るしか出来なかった。

「ホント……不器用、ですよね……」

だがそんな中、さつきまで和也がいた部屋から声が聞こえた。

声の主は、ベットで横になっていた筈のガイだった。彼は負傷部分を手で押さえており、ふらふらとした足取りで立ち上がった。――

「無理するな！まだ寝てないと……」

「俺たちのフアントムリキッドが、必要なだろう……？」

「なら、さつきと準備しようぜ……！」

慌ててベットに戻そうとガイの肩を掴む晴夜だったが、更にそこへ今にも倒れそうなライと真直郎が、互いに支え合いながらそう言つて立ち上がった。

「お前ら……」

それを見て思わず言葉を失ってしまった晴夜に、真直郎は優しく微笑みかける。

「晴夜さん……兄貴は、俺達のいねえ明日なんか理解出来ねエ」なんて言つてたが……俺達だつて、兄貴のいねえ明日なんざ、理解したくもねえよ」

「だから、俺達は……カシラを絶対に助ける」

「あの人の夢は、私達の夢です……カシラに拾われたこの命、カシラの為に使う時が来たらんです」

そう言つて三人は首元を漁るとドッグタグを取り出して、強く握り締める。

三人の名前が彫られたドッグタグは、彼らの決意を表すかの様に、その文字は少しだけ光り輝いていた。

「だから、私達にもしもの時があつたら……これをカシラに、託してください……」

「頼む……ッ」

「お願い、します……ッ」

「……ああ、分かった……だけど、今は休め。ファントムリキッドの抽出は、明日やるから。今日はゆっくりしてろ」

それを聞いた晴夜は、ゆっくりと三人からドッグタグを受け取ると、それをコートのポケットに仕舞い込む。



『平和ボケしている世界中の皆さん!今日より我々、ダウンフォールがこの世界の支配者となる!』

翌日。世界中の電波をジャックしたダウンフォールは、宣戦布告と全世界の支配者となる事を宣言する。

『まずは手始めに、この国を支配する』

同じ頃、兵士達が民間人にメタルボトルを見せつけながら現れ、ファントムクラッシュャーへと変身する。

彼らはガーディアンと一緒に辺り一面へ爆撃と無差別攻撃を行い、街中をパニックに陥らせ始めた。

一方で、新アイテムの開発を進めていた晴夜達にも、トラブルが発生していた。

「晴夜、大変!」

「ホワイトパネルがないの!晴夜君が修理したばかりのブリザードナックルも!?!」

「……和也の奴か」

部屋に駆け付けたレジーナと六花から、ここへ持ってきた本物のホワイトパンドラパネルと、先日のキルバスの戦いで破損した部分を修復したブリザードナックルが無いと聞き、直ぐに和也の仕業だと理解する。

「晴夜、かずやん一人じゃ……!」

「……ファントムリキッドの成分を管領すれば、いつものグリスブリザードよりパワーは上がってる筈だ……けど、一人で乗り込むなんて危険すぎる」

ファントムリキッドの力でいつもよりパワーアップしているとはいえ、今の和也にはいつもの余裕は無いという事も、晴夜には分かっていた。

昨日ありすをダウンフォールに攫われた事で、精神的にかなり追い詰められているはずだ。

「彼らは、助かるのか……」

晴夜の傍にいた総一郎は、ガラス越しに戦いの負傷とファントムリキッドの強制抽出で苦しむガイ達三人組を見て、不安げな表情を浮かべて呟く。

「……正直ギリギリ。けど、あの三人じゃなきや、このアイテムは作れないんだ」

三人の体から伸びるケーブルはグリスパーフェクトキングダムともう一つ、小さなアクセサリーの様な物に繋がれており、それがダウンフォール攻略のカギを握っているだろうと、晴夜はそう考えていた。

所変わって、首相官邸に訪れた和也は建物内部へ入って行った。

中にはガーディアンと二人の外国人兵士が程待ち構えており、その後ろの映像には浦賀の姿が映し出されていた。

『持つてきたか?』

「ああ……でも、お前達に渡せねえ」

和也は約束通りに持つて来たホワイトバンドラパネルを見せるが、すぐにパネルを仕舞うと、代わりに修理が完了したブリザードナックルを取り出す。

「どうしても欲しければ、俺を倒してからにしろ」

『ふん。威勢がいいな』

和也の挑戦状を鼻で笑うと、挑発と言わんばかりに捕まっているありすの映像を見せながら、待ち構えていた二人の兵士に指示を出してファントムクラッシュャーへ変身させる。

「心火を燃やして……お前達をぶっ倒す……LOVE&PEACEの為にツッ！」

『ボトルキーン！グリスブリザード！』

ビルドドライバーを装着した和也は、ノースブリザードフルボトルを一振りしてボトルのキャップを正面に合わせた後、グリスブリザードナツクルに差し込む。

ナツクルをドライバーに装填させてレバーを回し始めると、ナツクル状の坩堝『アイスライドビルダー』から冷気が一面に漂い、和也の足を膝上まで凍結させる。

『Are you ready?』

「……変身！」

ぶち撒けられたヴァリアアブルアイスを頭から被り、氷塊状態になった和也をアイスライドビルダーが押し割る。

『激凍心火！グリスブリザード！ガキガキガキガキーン！』

「かかって来いや！コラッ！」

映像の先でグリスブリザードが、たった一人でダウンフォールへと立ち向かおうとする場面を見ていたありすは、思わず悲痛な声を上げながら、何も出来ない自分への悔しさに歯を食い縛っていた。

視点は変わり、総一郎の研究所ではファントムリキッドに対応した薬が完成していた。

「完成した。これで君達は変身できる筈だ」

総一郎の前に（和也の分を除いた晴夜達が飲む用の）抗体薬が入った瓶が3本用意され、龍牙はその内の一本を手取る。

これでようやくライダーの変身能力を取り戻せる。真琴達がそう安堵していると、薬を飲むうとしていた龍牙がふと何かを思い出した様に口を開く。

「……どうして、協力してくれたんだ。アンタはただの、アイツの被害者だろうが」

龍牙は、気になっていた。エボルトに長い間憑依され続けた被害者である筈の総一郎が、何故ここまで自分に協力して、ファントムリキッドの対抗薬を開発してくれたのかを。

すると総一郎は、少し困った様な笑みを浮かべた後、静かに語り出した。

「どんな形であれ、前の世界で俺は君達に迷惑をかけた。それは紛れも無い事実。だからこそ俺は、どんな事でもいい、ヒーロー達の役に立ちたいんだ」

「……サンキュー」

彼の話聞いた龍牙が抗体薬を飲もうしたその時、沈んだ表情を浮かべた晴夜が、パーフェクトキングダムと三個のドックタグを手にとって現れた。

「足りねえな……全然足りねえな！」

アドレナリンを爆発的に分泌させながら奮闘を続けるグリスは、ガーディアンやファントムクラッシャーの攻撃を捌き、いつも以上の動きで反撃しながら叫ぶ。

「オラア！どうしたツ！こんなもんかツ！」

『シングルアイズ！グレイシャルアタック！バリーーン！』

ガーディアン達の頭上を飛び越えながらレバーを一回転させたグリスは、巨大化した左腕のロボットアームでガーディアン達を捕まえて地面に叩きつける。

「誰がツ！俺を満たすんだコラアツツ！」

『ボトルキーン！ グレイシャル ナックル！』

次にボトルをナックルへ再度差し込み、ナックルにあるボタン『ロボティックイグナ

イター』を押し込む。

吹雪に荒れるブリザードのようなエネルギーを纏った攻撃を繰り出し、ファントムクラッシュャーを殴り飛ばした。

「はあ、ハア……」

周りの敵を戦闘不能にさせたグリス。だが流石に疲れが見え始めたのか、肩で息をしだす程に体力を消耗していた。

しかしこの程度でダウンする訳にはいかないと、己を鼓舞する為に目を閉じて深呼吸をする。

大丈夫……まだ行ける。そう呟き目を見開いて進もうとしたグリスの前に、ビルドドライバーを持った浦賀が現れた。

「よく来たな。俺が相手をしてやる」

『ハザードオン!』

浦賀はそう言つてビルドドライバーを装着し、ハザードトリガーと二本のメタルタンクボトルを差し込むと、レバーを回してハザードライドビルダーを出現させた。

『Are you ready?』

「変身……」

『アンコントロールスイッチ!ブラックハザード!ヤベー!』

漆黒の金型が浦賀の体と重なり、仮面ライダーメタルビルドに変身。フアントムクラッシュヤーとガーディアンとの連戦で体力も限界に近い筈のグリスに向かって歩き出す。

「上等だ！行くぞオオー！」

でもそんなの関係ねえと言わんばかりに雄叫びを上げたグリスが走り出し、二人の拳がぶつかり合った。



「このおー！」

「どうだ、抜けそうかね」

グリスとメタルビルドが戦っている中、幻冬は自分達を拘束する縄を解こうと奮闘していた。

拓人はそんな彼を見ながら、冷静に話しかけると、幻冬の顔に疲労の色が浮かぶ。

「いえ、ダメです……」

結局解くことが出来ずに落ち込んでいると、扉の方から何かが倒れ込んだ音が聞こえ。慌ててその方向を見ると二人の視線には、此処を監視していた筈のガーディアンが

倒れていた。

「幻冬! 拓人さん!」

「えっ、亜久里ちゃん!?」

「レジーナ! なんで…!?!」

更にそこには亜久里とレジーナが、首がもげて火花を散らす別個体のガーディアンの頭を飛び越えながら現れる。

「これを飲んでください!」

「これを飲んだら変身出来るから!」

彼らの元へ駆け寄って縄を解いた二人は、幻冬にファントムリキッド対策用抗体薬が入ったドリンク瓶を渡すと、すぐに飲む様に促す。

しかし瓶の中身にある液体の色を見た幻冬は、顔を露骨に顰めて拒否感を示していた。

「……………え? これを、ですか? ……………いや、僕そういう色の飲み物は飲まない主義でして……………というかどう見ても不味そうだ『いいいから飲む!!』ぐぼッ!」

表で街破壊と大量虐殺を行っているダウンフォールをすぐにでも止めようと、難色を示す幻冬の口を無理矢理こじ開けて抗体薬を流し込む二人。

「おげっ、うつぶ……………やっぱ不味い……………そう言えば、二人はどうやってここに……………?」

「それは、聞かない方がいいわ」

「ええ……」

薬を飲み終えた幻冬が噎せながらも疑問を口にするが、笑顔でそう答えた二人を見て、これ以上聞くのをやめた。

「おいビルド。僕のドライバー、直してくれたのか——」

「おつ、来てくれたか」

同じ頃、晴夜家の地下研究所に戻った晴夜と六花が椅子に座って待っていると、誰も居ない空間から突然人影——イーラが出現する。

「……なんでキュアダイヤモンドも、此処に居るんだよ」

「そんな事より、大変な事が起きてるの。力を貸してくれない?」

「あん?」

晴夜以外に六花までもが居る事に納得していないイーラだが、六花はそんな事気にせず、彼に協力を求める。



「オラアッ!」

「ハア!」

グリスブリザードとメタルビルドによる戦いは、譲ることのない互角の戦いを繰り広げていた。

互いに一步も引かない拳と拳による激しい攻防に、周囲の空気がビリビリと震えているような気さえする。

しかしそんな激戦の中で、グリスのロボットアームから放たれた連続攻撃が決まり、メタルビルドがダウンした隙に、ドライバーのレバーを2回以上回転させる。

『シングルアイス! ツインアイス!』

メタルビルドの足を冷気で凍らせると、高く飛躍しながら脚に吹き荒れる吹雪のオーラを纏う。

『グレイシャルフィニッシュ! バキバキバキバキ! バキーン!』

「はあ、はあ……これで、終わりだ!」

冷気を纏ったライダーキックは、メタルビルドのガードを粉碎する程の勢いを繰り出した。吹き飛ばして壁に激突させると、その衝撃によつて壁には亀裂が入るほどの威力であつた。

しかしグリスは警戒を解くことなくレバーを回し、必殺技を発動させようとした。

「——ふっ、どうかな……」

「はあ？……ぐわあッ！」

その時、背後から気配を感じ後ろを振り返るも、気づいた時には遅く。突撃して来たフロントムクラッシャーの攻撃を喰らった 그리스は、無防備な姿のまま宙に舞い上げられる。

『オーバーフロー！ハザードアタック！』

さらに追い打ちをかけるように、メタルビルドはエネルギーを蓄積させた膝蹴りで隙だらけの 그리스を叩き落とし、履帯状のエネルギーで轢き潰しながら追撃を繰り返して吹き飛ばした。

「デメエ、汚ねエぞ……！」

懐からホワイトパネルを落としながら転がり倒れ込む 그리스は、今まで隠れていたであろうフロントムクラッシャーの不意打ちの救援を批判する。

だがメタルビルドは、本物のホワイトパネルを手にすると、余裕の笑みを浮かべながらこう言った。

「戦いに綺麗も汚いもない。〃勝者こそが正義〃。ジコチュー共やブラッド共から習わなかったか？」

その言葉に、油断と怠慢が生み出した結果だと自覚させられる 그리스。

「遂に、手に入れた……これで俺は、世界の覇者となる」

立ち上がろうとするグリスの前に、フロントムクラッシャーが立ち塞がって行く手を阻み。その間メタルビルドはあろう事か、自らの身体にホワイトパネルを挿入し始めたのだ。

するとメタルビルドを中心に、衝撃波のようなものが発生。居合わせた一人のフロントムクラッシャーが分解され、メタルビルドへと強制的に取り込まれた。

「何だよ、アレ……」

ホワイトパネルを取り込むことにより、苦痛の叫び声を上げながら新たな強化形態へと変貌を遂げたメタルビルド。その姿を見たグリスは思わず目を疑ってしまう。

「これが、俺の最高傑作——『フロントムビルド』だ」

メタルビルド改めてフロントムビルドは、取り込んだフロントムクラッシャーの部品が各所に纏われており。上半身と両腕にフロントムクラッシャーの飛行兵器を模した装甲が被せられ。細かなパーツが重なったマスクには、左目が戦艦で右目が戦闘機を模した左右非対称な複眼が装備されていた。

「くだらねエ……飾りがついただけじゃねえか!」

グリスはそう言い放ちながら立ち上がると、ロボットアームを振り上げながら走り出した。だがフロントムビルドは全く動じることなく、ただその場に立ち尽くすだけ

だった。

そしてグリスのパンチが放たれた瞬間、ファントムビルドは姿を消して攻撃を回避した。

一瞬何処へ行ったのかと周囲を見渡すグリスだったが、背後からファントムビルドの気配を察知。動揺しながらも振り向く前に、背中に強烈な蹴りを喰らい、地面に伏せられると足で踏みつけられる。

「前の世界の記憶が戻った時、興奮したよ。科学の発展がどんどん広がり、多くの災いを生み出した事を！」

新たな力を得た喜びと興奮で感情的になりながら、エボルト達が体現していたトラップ王国による最悪の厄災を知り、自らの心に喜びを感じていたと語り出す。

「だから決めたんだ。今度は俺が、この世界も！平行世界も！火の海にしてやる！」

ファントムビルドの野望を聞いたグリスは、自身を踏む足を掴みながら視線を向けて口を開こうとする。

「悲しい奴だな……お前、ずっと一人だったんだろ？」

「……………悲しい、だと。ふざけるなッ！」

ずっと一人で、自分の事を見てくれる奴がいなかったのだから。

誰かと一緒にいる大切さを、知ることが出来なかったのだろう。

そんなグリスの憐れみの言葉に対して、フアントムビルドは怒りを露わにする。

「仲間だ、友情だ、愛だのほざく、お前達ガキ共とは違う次元に、俺は居るツ！」

フアントムビルドは怒りに任せてグリスを投げ飛ばすと、彼を強く殴りつけることで壁に巨大な亀裂とクレーターを作り出す。

「お前達では到底敵わない強さを、俺は手に入れたんだア……！」

テクノロジーこそ……！全てなんだよオツ!!」

狂った様な高笑いを上げながら更なる攻撃を繰り返し、グリスは壁をぶち抜かれて外へぶつ飛ばされる。

外に投げ出されたグリスは何とか受け身を取るも、フアントムビルドの圧倒的な力の前に、なす術もなく変身解除に追い込まれてしまう。

「これで終わりだ」

和也はもう一度戦う為に立ちあがろうとするが、フアントムビルドが仲間を引き連れて、終わりだと告げながらゆっくりと歩み寄る。

最早これまでか。そう思って、これまでの三人の舎弟達との思い出や、仲間達との戦いの記憶、そして幼馴染達との思い出を振り返ったその時であった。

「勝手に終わらせないでよー！」

「ああ、まだ終わってねえ！」

トドメを刺そうとしたフアントムビルドが声の聞こえた方へと振り向いた先には、二人の男女が並んで立っていた。

「龍牙……まっぴー……」

龍牙がビートクローザーをぶん投げると、フアントムビルドは自身に向けられたそれを避けるために和也から距離を離す。

「……和也。何も言わずに、受け取って」

その間に真琴は和也の元へ駆け寄って手を取り立たせると、懐から取り出したある物を見せつける。

彼女の手には見覚えのある、それぞれ赤と青、黄色のドッグタグが握られていた。

「あの三人が……お前の為に、命をかけて作り上げたもんだ」

それに続くように見せ付けられた龍牙の手には、完成には舎弟達三人組のフアントムリキッドが必要だとされていた「グリスパーフェクトキングダム」があった。

「——あいつらは……」

グリスパーフェクトキングダムと三つのドッグタグを掴むと、ライ達はどうなったのかと聞く。だが二人はそっぽを向き、無言の回答を与える。

「……あいつら、勝手な事を……」

その姿を見て、和也は察した。

三人が自分の為に命を投げ捨てて、このアイテムを作った事を。

そして同時に、自分の命を大切しなかった彼らへの、悩んで迷った所為で彼らを助けられなかった自分自身への怒りが、全身に湧き上がった。

「けどなア……!」

だがそれ以上に、彼らの死が無駄にならない様、ここで死ぬ訳にはいかないと強く思う。

どうしても倒さなければならぬ敵と、助けなきやならない人達がいるから。

「お前らの想い……確かに受け取った……」

パーフェクトキングダムとドッグタグを握り締め、ライとガイ、真直郎の意志を汲み取った和也は、この戦いを終わらせるために再び立ち上がって行く。

「俺に、力を貸してくれ……!」

『ウエルカム!一致団結!グリスパーフェクト!』

前もって晴夜から受け取っていた、グリスのライダーズスクレストのデテイルが刻まれた黄金のボトル『グリスフルボトル』をガジェットに差し込み、起動スイッチを押した。

龍牙もビルドドライバーを腰に装着しながら、取り出したマグマナックルにマグマポ

トルを差し込み。真琴はコミュニケーションと龍牙から預かったクリスタルボトルを、クリスタルラビーズに変えて構える。

『ボトルバーン！クローズマグマ！』

「クリスタルラビーズ！セット！」

和也と共にビルドドライバーへ変身アイテムを装填した龍牙はレバーを回し続け、真琴はクリスタルラビーズをコミュニケーションへセットして『L・O・V・E』と操作する。

「……までよーおとなしくしなさい！」

同じ頃、ダウンフォール構成員達が暴れている街中に、晴夜とマナ、六花、イーラの四人が現れた。

「念のために言っとくが、変な気おこすなよ？」

「……チツ、今回だけだからな」

「二人とも、行くよ！」

晴夜とイーラがビルドドライバーとエボルドライバーを腰に装着。マナと六花はコミュニケーションを取り出し、マナはラビットボトルとロイヤルボトルから生み出されたロイヤルラビーズを手を持って構えた。

『グレイト！オールイエイ！ジーニアス！』

『コウモリ!発動機!エボルマツチ!』

「ロイヤルラビッツトラビーズ!セット!」

晴夜はジーニアスポトルを起動させ、イーラと同時にボトルを差し込み。マナと六花もコミュニケーションヘラビーズをセットする。

「お2人共、行きますわよ」

「はい(うん)」

そして研究所内では亜久里の声の下、ビルドドライバーを装着した幻冬がプライムローグボトルを取り出して二つに分ける。

『プライムローグ!』

ビルドドライバーと二つのラブアイズパレットが、操作される。

「変身!」

「プリキュア!ラブリンク!」

「プリキュア!ドレスアップ!」

そして各地で、仮面ライダーとプリキュアが、自らの姿を変える言葉と名乗り上げが轟いた。

『完全無欠のボトルヤロー！ビルドジーニアス！スゲーイ！モノスゲーイ！』

『バットエンジン！フツハハハハハハハハハハハハハハハ！』

「みなぎる愛！キュアハート！」

「英知の光！キュアダイヤモンド！」

街中では、仮面ライダービルド・ジーニアス。仮面ライダーマッドローグ。キュアハート・ロイヤルモード。キュアダイヤモンド。

『大義晩成！プライムローグ！ドリヤドリヤドリヤドリヤ！ドリヤー！』

「愛の切り札！キュアエース！」

「運命の切り札！キュアジョーカー！」

政府機関国立研究所にて、仮面ライダープライムローグ。キュアエースとキュアジョーカー。

『極熱筋肉！クローズマグマ！アーチャチャチャチャチャ　チャチャチャチャアチャー！』

「勇気の刃！キュアソード！」

政府官邸屋外には、仮面ライダークロースマグマ。キュアソード・クリスタルモード。
「変……身！」

『ファーマーズフェスティバル！グリスパーフェクト！ガキン！ゴキン！ガコン！ドッ

キングー!!』

そして、キヤツスルハードスマツシユとスタツグハードスマツシユとオウルハードスマツシユの姿を形作つたスナツプライドビルダーが、和也に重なる。

金と銀をベースに配色された装甲に加え、肩部にはキヤツスルのグランドランバードと同じような赤い盾、背部にはオウルの様な黄色い翼型ブースターユニット、両腕にはスタツグのラプチャーシザースを模した一対の青い剣を装着した。まるで戦隊モノに出てくる合体ロボの様に、カラフルで豪華な姿をしたグリス……仮面ライダーグリスパーフェクトキングダムへの変身が、完了した。

「これが、最後の……ッ! 祭りだアアアアアア……ッッッ!!」

——信賴出来る仲間と、自分をいつも慕って共にいてくれた三人の想い。

その全てを背負って再び立ち上がり、皆の明日を掴むグリス。

——信賴できる自分自身の思想と、役立たずを切り捨てながら得た暴力。それらを胸に人々を支配し、苦しめようと目論むファントムビルド。

両者の全てを賭けた最終決戦が、再び火蓋を開ける。

R e . ドキドキ&サイエンス! A f t e r s t o r y
仮面ライダーダークリス&キュアロゼッタ! 不滅の心火! その4

仮面ライダーグリス&キュアロゼッタ!不滅の心火!

その4

仮面ライダー&プリキュアとダウンフォールの全面対決が繰り広げられてる頃、一台のリムジンがエンジンを噴かせながらグリス達の元へと向かっていた。

「急がねば!早くこれを!」

運転主であるセバスチャンはアクセルを踏み込み、グリス達に助けられるであろう、或いは既に助けられて彼らと一緒に居るかもしれないありすの姿を思い浮かべながら、隣の座席に置かれているガラスケースに目を向ける。

そのガラスケースには、中央に歯車や雪結晶を模したディテールが刻まれ、中央部分に水色の宝石が付いているラビーズが入っていた。

「皆さん、お嬢様……どうか、間に合ってください……!」

そう呟く彼の脳裏に浮かぶのは、このラビーズを完成させた晴夜と交わした話の内容についてだった。

『晴夜様。これも、完成させられますか?』

ガイ達三人の想いを汲み取り、パーフェクトキングダムを約束した晴夜が作業に取り掛かるうとしていた。

そこへありすの執事であるセバスチャンが現れ、晴夜にジュラルミンケースに入っていたある物を見せた。

『セバスチャンさん。これは、ラビーズ……ですか？』

それはラビーズだったが、マナ達が持つているラビーズと違う事と、それが人の手で作られた物である事は、一目で分かった。

『以前、私がラビーズを研究した際に作り出した、人工生成型ラビーズです』

セバスチャンは以前、ビルドドライバーとフルボトルの開発研究をする際に、同時進行でコミュニケーションを人工的に生み出そうとしており。その際にラビーズの研究もしていた事を語る。

『これを、お嬢様のお力になればと思い、晴夜様に』

最終的に自身の手では完成に至らなかったが、晴夜ならこれを完成させる事が出来ると信じて、未完成状態のラビーズを託した。

『……わかりました』

晴夜は受け取ったラビーズの調整を行う為、パーフェクトキングダムを一旦叔父とセバスチャンさんに任せ、ラビーズの性能を確認した。

ラビーズは8割方完成しており、後はこのラビーズへどのような力を注ぎ込むか検討した。そこで、今まで自分達がボトルの成分から相性の良いものを探した様に、フルボトルからエネルギーを作りだすことを思いつく。

『アイちゃん、お願い』

『アイ〜!きゅぴらっば〜!』

更に晴夜はアイちゃんの力を注ぎ込むことを閃き、人工ラビーズをより本物のラビーズへ近づける事に成功した。

『ありがとうございます。晴夜様』

『ええ……ですがこのラビーズには、問題点があります』

完成した人工ラビーズをセバスチャンに託しながら、人工ラビーズの問題点を説明する。

『そのラビーズはボトルの成分から生まれたもので、ネビュラガスの成分が含まれています。それを使えば、急激なパワーアップに自分の感情が抑えなくなるかもしれない』

晴夜はこのラビーズを使うには、使用者であるありすの精神面がかなり重要だと話す。

感情を抑えられなければ力に飲み込まれ、エボルト遺伝子が暴走した龍牙やギャラク

「オラァー!」

二人を追おうとするフアントムビルドに対し、グリスは背後から攻撃を繰り出して追わせない様に進行を阻止する。

「仮面ライダーとプリキュアを、舐めんなよ!」

「ふんっ! ハアッ!」

「行くぞコラァァァー!」

グリスは両腕に装備されたブレードを、ホワイトパネルを取り込んだフアントムビルドへ振り下ろす。

対するフアントムビルドは左腕で受け止め、火花を散らせながら押し返そうとする。だがグリスも両足を強く踏み込み、右腕に力を入れて応戦する。

「何をしようと無駄だ!」

「うるせえ……!! 俺達は絶対に負けねえーっ!! LOVE & PEACEの為に
なァァァー!」

両者一步も引かない攻防が続いているその隙に、捕まったありすや各国代表を助ける為に政府官邸へ突入したクローズとソード。

だがしかし、敵の拠点が無防備な訳がないだろと言わんばかりに、無数に設置された

ガーディアン達と残った兵士達が、侵入者を殲滅せんと応戦を開始していた。
「オリヤァー！」

クローズは迫り来る兵士達を払い除け、襲い掛かるガーディアンを次々と殴り飛ばして機能停止させてゆく。

「フウー！」

ソードはガーディアンが放った銃撃をバックステップで躲し、高スピードで一気に接近しながら、エネルギーを纏った手刀でガーディアンを斬り伏せていく。

そして二人は、ありすとランスが囚われている部屋の前へと辿り着く。

「ありすー！」

「大丈夫？」

「龍牙さん。ソード」

部屋の中へ入ると、そこには縄で拘束され身動きが取れずにいるありすと、同じく縄でぐるぐる巻きにされたランスの姿があった。

ソードはすぐに彼女を拘束している縄を解いて、自由の身にする。クローズもランスの拘束を解こうと縄を引きちぎった。

「和也さんはー！」

「和也なら今、外で偽ビルドとひとりりで戦ってるわ」

「わかりました。お二人は捕まった方々の救出を!ランスちゃん!」

「わかったでランス〜!」

和也の行方を聞いたあたりすは立ち上がり、ランスと共に部屋を出て、ダウンフォールのライダーと戦っているであろう幼馴染の元へ向かった。

クローズとソードもありす達を追いかけようと部屋を出るも、今度は左右の廊下から二体のファントムクラッシュシャーと数体のガーディアンが現れた。

「龍牙!そつちをお願い!」

ソードは収納状態のラブハートアローから光刃を生み出し、右側からやって来た敵に向かつていく。

「お、おい!……つたく!」

クローズは仕方なく左側から来た敵に向かつてパンチを繰り出し、圧倒的な力の差を見せてつけると、ファントムクラッシュシャーが攻撃を仕掛ける。

だが咄嗟の反射神経と第六感で攻撃を躲し、カウンターを繰り出して膝をつかせた。「力がみなぎる!魂が燃える!俺のマグマが、ほとばしる!」

もう、誰にも止めらねえ!」

そう叫びながら全身のマグマを燃やし、ファントムクラッシュシャーの援護に来たガーディアンへ連撃を繰り出し次々と破壊。トドメとしてレバーを勢い良く回し、体にマグ

マの炎を纏わせる。

『Ready go!ボルケニックファイニッシュ!アチャー!』

「オリヤヤヤヤー……!」

「はあああ!」

クローズのラッシュがフロントムクラッシャーを吹き飛ばした一方。右側からやって来たフロントムクラッシャー達の応戦をしていたソードは、ラブハートアローから出した光の刃で無数のガーディアンに立ち向かっている。

「プリキュア!ドラグニッククリスタルスラッシュ!」

ラブハートアローから繰り出された光の刃により、フロントムクラッシャーとガーディアン達を払い除けたソード。最後にラブハートアローにラビーズをセットしてクリスタルの斬激を放ち、ガーディアン諸共フロントムクラッシャーを撃破した。

政府機関国立研究所の外に出て戦っているエースとローグとジョーカーも、三体のフロントムクラッシャーと数体のガーディアン相手に戦闘を繰り返していた。

「エースミラーフラッシュ!」

エースがマジカルラブリーパードの力で作り出した三つの長方形鏡がガーディアンの周りを囲み、パッドの画面上で三角を描く事で鏡面から放たれる光エネルギーが互い

に連結。エースミラーフラッシュが放たれた。

「プリキュア!ドラゴンズウインド!」

怯んだ隙にジョーカーがミラクルドラゴングレイブに力を溜め、解放された矛先から竜の姿をした竜巻“ドラゴンズウインド”を放ち、ガーディアンを全て撃破した。

残るフロントムクラッシュャー三体が繰り出された攻撃に、ローグは冷静に対応していた。

その内二体が同時に突撃を仕掛けるが、膝を折って下へ潜り込むと腹部にパンチを繰り出して宙へと吹き飛ばし、次に後方から放たれたビームを背中中のマントで防いだ。

「大義のための犠牲となれ!」

『Ready go!』

それを見て突進攻撃を仕掛けるフロントムクラッシュャーに、ローグはそう言いながらレバーを回して高く飛躍し、両脚部から『グランダイルフアング』を展開する。

『プライムスクラップブレイク!』

噛み付くような挟み蹴りを繰り出し、落ちてきた二体も一緒に拘束。三体を同時に噛み付いた足で掘り投げ、纏めて撃破した。

ビルド、ハート、ダイヤモンド、マッドローグの四人は、街の中で襲われている人を

庇いながら戦っていた。

「愛を無くした悲しい皆さん！このキュアハートがあなた達のドキドキ！取り戻して見せる！」

ハートは空気を蹴って宙を高速に、そして自由に飛びながらファントムクラッシュャーのミサイルを躲すと、今度は高い位置から地面へと強烈なるキックをくり出してガーディアンを吹き飛ばす。

『フルフルマツチデース！フルフルマツチブレイク！』

「ハアアアア！」

そこへ待ち構えていたビルドは、バスターブレードモードのフルボトルバスターにフルフルラビットトタンクボトルを差し込みエネルギーを充填させ、武器を持って襲いに来たガーディアンを回転斬りで迎撃する。

「ダイヤモンドスワークル！」

ダイヤモンドはマジカルラブリーパットを手元に出現させ、ラビーズをセットしたマジカルラブリーパットから放たれた水流でガーディアン達の動きを封じる。

「全ては……キングジコト——いや、僕自身の為に……」

『Ready go！エポルテックアタック！チャオ！』

そこへレバーを回したマッドローグが、背中から蝙蝠の羽型飛行ユニット『マッドナ

イトフライヤー』を出現させ、羽をドリルの様に丸めて繰り出したライダーキックで一気にスクラップにしていくな。

「勝利の法則は、決まった!」

『ワンサイド!逆サイド!オールサイド!』

後続く様にレバーを回したビルドは、装甲にある60本のボトルを光らせながら周囲を数式と方式で囲みこむ。

『Ready go! ジーニアスフィニッシュ!』

ドライバーから虹色に輝くグラフの放物線が現れ、敵を一気に拘束。

ビルドが高く飛躍して放物線に乗り、フロントムクラツシャヤーとガーディアンらに向かって勢いよく放たれたライダーキックが全ての敵を倒したのだった。

そしてグリスとフロントムビルドは低空飛行を行いながら、互いの攻撃を高速でぶつけ合っていた。

しかしグリスはこれまで蓄積したダメージによって体をよろめかせて隙を生み出し、フロントムビルドはそれを見逃さず、胸元へ拳を打つける。

「クソ……ッ!」

グリスは飛ばされながらも態勢を整え着地したが、これまでのダメージと新たな

フォーム変身による負荷は、肩で息をし始めた彼の肉体を限界まで酷使し、無駄な体力を使い消耗させてしまっていた。

「やはり、俺は最強なんだ……だが、先生は俺を認めなかったッ！」

グリスを追い詰めていきながら、自分が最強だと自称するファントムビルド。

そんな彼は、突如として先生——恐らく桐ヶ谷拓人の事を言ってるだろう——の名を言いながら怒りの叫びを上げる。

何故突然、拓人博士の名前を叫んでいるのか。グリスの尽きない疑問が浮かび上がる中、ファントムビルドは研究者として拓人の下にいた時の事を思い出していた。

『先生……見てください！』

笑みを浮かべながら浦賀が見せた論文は、先日拓人の義兄弟が発見したパンドラボックスに秘められた謎の力を使い、人間の遺伝子に手を加えれば人間の細胞をより活性化させられ、常人を越えるものだと言う内容が書かれていた。

『……その研究は、本当に人の役に立つのかい？』

だがそれ以上に、パンドラボックスが持つ未知の力の危険性を考慮し、最大限の警戒を払っていた拓人は、無責任に彼の論文を褒め讃えるつもりはなかった。

なにより、パンドラボックスに秘められた力は、今の人類では確実に争いの火種にな

る事が予想されてた。

『……………何ですかそれは?』

『君の研究は、確かに素晴らしい結果を導くかもしれない。けれど、それではダメだ』

そう言って論文を突き返した拓人は、彼の元から去った。

対する浦賀は「人間を超えられる力を与えてやる事の、何が悪いんだよ」と傲慢に思
いながら、拓人に冷たい視線で睨み付け、突き返された論文を強く握り潰した。

——もしもこの光景を暗夜が見ていたら、きつとこう語っていただろう。

「強大な力を得た人間の大半は、過ぎた力に振り回されるか、その力を利用して暴走
を始める。そう考えれば、あの時の父さんの判断は正しかったと思う。」

……………だけど、『言い方が良くなかった』。敢えて何が間違っていたかと言えば、この辺
だと俺は思う」

「——だが、先生の言葉でわかった事もあった。俺以外の奴らは、みんなクズなんだとな
!」

膝について疲労しているグリスに、ドリルクラツシャーを手元へ出現させて叩き込も
うとする。

「和也さん——!」

その瞬間ロゼッタの声と共に、四葉の盾がファントムビルドの攻撃を防ぐ。

なんで此処にロゼッタが!?!と驚くギリスは、ドリルクラツシャーの突きを喰らった衝撃で後ろへ飛ばされたロゼッタをキャッチし支える。

「ロゼッタ……!大丈夫か!?!」

「いえ、私は大丈夫です。ですが……」

「フンっ。愛……仲間……英雄……そんなものは幻想だ。所詮、人間は一人っ!」

龍牙とまこびーに助けられたのだと内心で二人へお礼を言いながら、ギリスは近づいてくるファントムビルドの前で、ロゼッタに手を掴まれながら立ち上がる。

「全てを支配するのも勝者ッ!何もして許されるッ!!」

それこそが、最強の証なんだッツ!

ファントムビルドは雑兵が一人増えた程度で勝てる訳がないと確信しているのか、余裕の表情で既に勝ちを確信しており、ギリスとロゼッタを見下す様に叫ぶ。

「それは違いますッツツ!」

「……………何?」

そして彼の陶醉感をぶち壊す様な声量で、ロゼッタは強い眼差しでファントムビルドの考えを否定する。

「強さというのは、人を支配する為にあるものではなく、誰かを守る為にあるものです。」

それに強さは免罪符ではありませんッ!

そのような思想では、誰もあなたを認めませんッ! 決してツツ!!」

「黙れエエーッツッ!」

自身の思想を否定されて怒り狂うフアントムビルドは、ドリルクラッシュャーをガンモードにしてトリガーを引きながら連射するが、ロゼッタはロゼッタウォールを生成させ攻撃を防ぐ。

「だから、私達は決して負けません! 真の『強さ』を理解出来ないあなたにはッ!」
啖呵を切るロゼッタを見て、グリスは小さく笑みを浮かべた。

そこへブレーキ音が鳴り響き、ロゼッタの方に視線を向けていたフアントムビルドを轢き飛ばしながら出現したピンクの高級車から、ガラスケースを持ったセバスチャンが現れた。

「セバスチャン!」

「お嬢様!これを!」

セバスチャンはそう言ってガラスケースのロックを解除し、中に入っていた水色カラーのキュアラビーズをロゼッタへ投げ渡した。

ラビーズを受け取ったロゼッタが「これは……」と呟き、ランスも彼女の手の中にある物を見て「ラビーズでランス!」と驚いた。

「それはお嬢様に用意された、新しいラビーズ……『オーロラブリザードラビーズ』ですッ！」

「貴様ア……余計な事をオツ！」

ファントムビルドはドリルクラツシャーを持つて起き上がり、自身を車で轢いた上に敵の手助け行為を行ったセバスチャンへ怒りの叫びを上げながら、メタルボトルを装填したドリルクラツシャーから黒い光弾を放つ。

それを見たロゼッタがセバスチャンの名を叫びながら走り出すも、彼の元へ到着する前に光弾は命中し爆発を起こす。

「あ……ああ……ッ、あなた……！」

目から涙を溢れさせるロゼッタの前に、ピンクのバツクミラーが音を立てて転げ落ちる。悪びれた様子も無く、「自業自得だ」と言わんばかりに鼻で笑うファントムビルドへ、怒りの感情を湧き上がらせる。

「許しません……あなたは、絶対に許しませんッ!!」

セバスチャンから託されたラビーズを怒り心頭のままセットしようとするロゼッタに、ランスは彼女の名前を呼んで制止するが、ロゼッタはそれを聞かずにラビーズを嵌めようとする。

「いけません！」

その時、ロゼッタの耳にセバスチャンの声が聞こえ、思わずコミュニケーションにラビーズをセツトしようとしていた手を止めた。彼は生きていたのだ。

銃撃が放たれた事で巻き上がった煙幕が晴れると、セバスチャンの前には肩のシールドを前に出したグリスが立っていた。

「大丈夫ですか?……すみません、車は護り切れませんでした」

「はい、和也様。車に關しては気にしないで下さい」

バックミラーが取れた高級車を見ながら軽口を叩くグリスに、笑顔で答えるセバスチャン。そしてセバスチャンは安堵の表情を浮かべるロゼッタに、真剣な表情を向けて語り始める。

「お嬢様。その力を、怒りに囚われたまま使っていきません!」

「セバスチャン……」

「そのラビーズは……怒りや憎しみ等の為に、あなたへ渡したのでありません。」

人々の明日を掴む者の為に……お嬢様の為に、晴夜様が生み出してくれたものです」
そう言つて、あの日——マナが上級生の子にいじめられ、怒りに身を任せて力を振るつた時と同じ過ちを繰り返さない様に、優しく諭す。

「あります、一人で背負い込むな。お前には俺達が……みんなが……仲間がいるだろ!」
グリスが彼女の隣に並ぶ。

「……セバスチャン、和也さん。ありがとうございます。ごぎいます」

ファントムビルドによって憎しみに囚われそうになったロゼッタは、二人のおかげで落ち着きを取り戻し、涙を拭きながら受け取ったラビーズを優しく手で包み込む。

「行きますわ！ランスちゃん！」

「わかったでランス！」

「オーロラブリザードラビーズ！セット！」

水色に輝くラビーズをコミュニケーションにセットし構えると、ロゼッタの体を白い桜吹雪が包み込み、新たな姿へと導く。

「キュアロゼッタ！オーロラブリザードモードです！」

足元に氷で作られた四つ葉彫刻が出来上がると、彼女の持つオレンジ色の髪には水色のメッシュが入り、コスチュームのメインカラーの一つである緑が青く変色。両頬にはメタリックブルーの三つ並んだハニカム構造が刻まれていた。

「あります」

ロゼッタの新たな姿“オーロラブリザードモード”を見て動揺するファントムビルドに対し、グリスが腕を隣に挙げる。

「和也さん！行きましよう！」

ロゼッタも同じく腕を上げてグータッチし、共にファントムビルドに向かって走り出

していく。

「はぁぁー!」

先陣を切って駆けるロゼッタの冷気を纏った掌底打ちを、フアントムビルドは腕を前へ出して防ぐ。だが彼女の手が触れた箇所から徐々に凍っていき、すぐさま蹴りを放つて突き放す。すると今度はグリスのブレードが振り下ろされるが、フアントムビルドはドリルクラッシュャーで受け止め、罅迫り合いになる。

「お前のように、俺達は最初は一人だったさ!弱くて、何も出来なかつた!」

「でも、弱くて何もできない私達の前に、手を差しべてくれた人達がいました」

二人も幼馴染達と知り合う前では、いつも一人で居ることが当たり前だった、狭い世界に閉じ籠っていた。

だからマナ達や晴夜達と知り合えて、退屈とは無縁の毎日を過ごす事が出来た。

だから『一緒に行こうよ!』と告げられた時は、とても嬉しかった。

「私はその手に、勇気を貰いました」

「俺達は、一人じゃねえ」

二人がかりでフアントムビルドをキックで押し返し、蹴りを貰ったフアントムビルドは後ろによるめきながらも体勢を立て直し、背中からミサイルを放ってきた。

ロゼッタは両手を左右に広げ、強化されたロゼッタリフレクションを展開し防ぐと、

リフレクションを二つに分けて扇状に展開させ、そのまま回転させてファントムビルドへ放つ。

「皆さんと一緒だから！ここまで強くなれたんですっ！」

「みんなと一緒だから！しんどくたって、頑張れるッ！」

「そんな物は所詮、馴れ合いだッ！」

グリスは腕のブレードを向けながら叫び、ロゼッタもリフレクションで作った扇を持った手をクロスさせながら叫ぶ。

だがファントムビルドは否定の言葉をぶつけながら、キックと共に紫色の履帯を模したエネルギーの波状攻撃を放って、ロゼッタのリフレクションを破壊した。

「俺は、最強だああーッッッ！」

「だから！お前はダメなんだよッッ！」

『ブルー！スタッグスラッシュュ！』

雪の結晶の様に降り注ぐリフレクションの欠片の中を抜けながら、怒号を放つグリスはレバーを一回転。両腕のブレードに青いオーラを纏わせ、ドリルクラッシュャーを振り払うと薙ぎ払う様に連続で斬り掛かる。

「プリキュア！オーロラダスト！」

ロゼッタが弓状に展開させたラブハートアローにラビーズをセットし、連続斬りを受

けて怯むファントムビルドに向けると、オーロラのように光り輝く氷の礫が無数に放たれ命中する。

『ブルー!イエロー!オウルアタック!』

その隙にグリスがレバーを二度回し、全身を黄色いオーラで纏って上空に飛翔する。

ファントムビルドは避けようとするも、先程ロゼッタが放った氷の礫により足元を固められていて動けない。身動きが出来ぬまま何度も体当たりを貰い、最後にグリスがドリルの様に回転させて突撃。遂に膝を着いた。

『ブルー!イエロー!レッド!キャッツスルブレイク!』

そして今度は三回レバーを回し、両肩の盾を稼動。肥大化した盾は砲口の役目を果たそうとファントムビルドへ標準を向け、二連の赤いビームを発射する。

「ぐう……ッ!バカな……ハザードレベルは……俺の方が、上だったはずだッ!」

「てめえの匙加減で、俺達のレベルを図るんじゃないやねエよ!」

ビームが被弾し、あれだけのダメージを受けても尚起き上がるファントムビルドに、グリスは残る力の全てをぶつけようとする。

そんな彼の背後から、怪しい黒い甲虫が羽音を立てながら飛んで来て、身体を肥大化させたかと思うと、沢田ファームでグリスとスマッシュ三人衆に襲い掛かったアイスハザードスマッシュへ変身したのだ。

「ウツシヤアア!!」

アイスハザードスマツシュが氷柱を手に構えて、グリスの背に向けて投げようとしたその時、突然スマツシュに向けて壁の様に立ち塞がった白い巨大な何かに激突して吹き飛ばされる。

「どちら様かはご存知ありませんが……和也さんの邪魔はさせませんわ!」

白く巨大な何か……両手に展開したロゼッタリフレクションで、アイスハザードスマツシュを吹き飛ばしたロゼッタが叫ぶ。

「お覚悟を……ロゼッタリフレクション・ダブルクラッシュユー!」

そう言う彼女が二つのリフレクションで、アイスハザードスマツシュを挟み込む様に叩き付け、大ダメージを与えた。

アイスハザードスマツシュは身体中に罅を作りながらも、負けじと無数のアイシクルチルアローを放つが、ロゼッタはロゼッタウォールで全て打ち落とし。その間にマジカルラブリーパッドにストレートフラッシュラビーズを装填させ、パッドにクラブのマークを描いた。

「受けてみなさい!プリキュア・スプリングオーロラストレートフラッシュユー!」

ラビーズをセットされたラブハートアローから七色の光線が発射され、被弾したアイスハザードスマツシュを中心に、氷彫刻が施された桜の木とクローバー畑が現れ、最後

は氷の花吹雪を舞い散らせて爆発した。

「ありす! 助かったぜ!」

グリスはロゼッタが守ってくれたことに感謝すると、彼女はニッコリ笑って親指を立てる。

だがすぐに真剣な表情に戻し、再び目の前にいる敵へ意識を集中させる。

「心火を燃やして……………てめエをぶっ潰すッ!」

『ブルー! イエロー! レッド! ゴールド!』

レバーを4回転させ、三色のドッグタグを掲げて高々と吼えるグリス。

「俺達の前に……………ひれ伏せエエエエエーッ!!」

『パーフェクトキングダムファイニッシュ!』

刹那。三体のハードスマッシュの幻影が重なり合い、赤・青・黄の三色オーラを纏って、ドリルのように回転しながらファントムビルドヘキックを叩き込む。

「ぬわああああッ!」

「まだまだだあああーッッ!」

腕を出して耐え続けるファントムビルドだが、グリスと舎弟達の四位一体による強力なライダーキックは、彼を押し込み続ける。

「な!?——そんな、俺は……………最強なんだあああーッッ!」

遂に必殺技を受け止めきれず、後ろへぶっ飛ばされたファントムビルドは強制変身解除され、体内に埋め込んだホワイトパネルが排出された。

「はあ、ハア……やったぜ……お前ら……」

「和也さん！」

対する和也も力の全てを出し尽くし、変身解除された。ロゼツタは立つのも辛そうな彼へ近づき、肩を貸して支える。

「何故、何故……俺の方が、遥かに高い能力を備えていた筈なのに……何が、俺に足りなかった……！」

グリスの前に完全敗北し、往生際悪くホワイトパンドラパネルに手を伸ばす浦賀だが、その前に和也が拾う。

「——力つてのは、誰かを支配する為や、苦しませる為に使うんじゃないねえ。」

誰かの為に助けられる事を、本当の力つて言うんだよ」

闇に囚われたトランプ王国の王様を救った晴夜とマナ、亜久里。

自身が犯した罪の償いと本当の愛のために戦うと決めたレジーナ。

相棒を救う為に力を振り絞り、エボルトに立ち向かった龍牙。

多くの人達に自分の歌を届け続ける真琴。

自らの力で大切なものを守るといふ信念を貫く幻冬。

そして、一緒に戦ってくれたあります。

和也の知る仲間達は、皆一人一人が自分の持つ力を誰かの為に使っていた。

「俺にも、守るべきものがあつた……が、お前にはそれが無かつた……それだけの事だ」
そんな和也の言葉に、浦賀は最後まで肯定は愚か否定をする事も出来ず、地面を殴りつけながら意識を失つた。

赤く光る夕日に照らされ、自身に力を貸してくれた三人が生み出したパーフェクトキングダムを見つめながら、和也は全てが終わつた事を実感していた。

あの後浦賀は、後から来た警備兵らに拘束され、他のダウンフォームメンバーも無事に全員逮捕された。

「和也さん。ありがとうございます」

助けに来てくれた和也へありますはお礼を言うが、本人は首を横に振る。

「礼なら、あいつらに言つてくれ……」

何故なら今回ありますを救う事ができたのは、パーフェクトキングダムを完成させる為に自らの命かけて生み出し、大切な幼馴染ともう一度向き合う覚悟に気付かせてくれた、あの三人のおかげだからだ。だが……

「あいつらは……」

もうこの世に居ない彼らの顔が思い浮かび、パーフェクトキングダムを強く握り締める和也の瞳からは、涙が一粒溢れていた。

(チクショウ……あいつらはもういねエつてのに、『カシラ』って呼ぶガイとライの声か…… 『兄貴』 っって呼ぶ真直郎の声が——)

「『カシラア (兄貴イ) っーッ！』」

「——ッッッ?!」

黄昏ていた和也の前へ、怪我の影響が無くなった様子の三人が走って現れた。

「やりましたねー！」

「流石ですよカシラ！」

「やっぱり兄貴は最高ですよー！」

「お、おつ、お前ら……なんで……？」

なんで三人がここに居るのか自身の目を疑い始める和也に、ガイが思い出した様に「ああ、桐ヶ谷晴夜が言ってたんですよ」と口を開いた。

「私達が死んだことにしておけば、気持ちの高ぶりでハザードレベルが上がると」

その話を聞いた時、龍牙と真琴が今手にあるガジェットを渡した時、一言たりとも三人が死んだとは言ったなかつた事を思い出した。

「何、だと……あのッ、悪魔の科学バカがアアアアアアアアアアアッッッ?!」

「わかってないな……それだけに、あれを使いこなすのは難しいって事だよ」

赤く光る夕日に向かって放たれた、和也の叫びが辺りに響いたその頃。

桐ヶ谷家の地下研究室では、何故ガイ達が成分の強制抽出で死んだように見せかけたのか龍牙達が問い出していた。

晴夜曰く、感情が高ぶることで力を増す和也なら、いつも以上の力でパーフェクトキングダムを使えると信じていたから敢えて言わなかったようだ。

「晴夜さん。ジョーさんと拓人さんが各国家との話し合いで、ライダーシステムの導入は中止にして、設計データも全て削除するそうです」

今回の一件でライダーシステムの導入を中止したと聞き、晴夜は驚く事なく、ただ寂しそうに「そうか……」と呟いた。

「でも、これでよかったかもしれない」

だが今回の事で晴夜は思っていた。これからの未来において、ライダーシステムは必要な物かもしれない、という事を。

「今回のダウンフォールのように、ライダーシステムを悪用する存在はいる。

だからこそ俺らは、ライダーシステムが必要ない世界にしなきゃいけないかもしれない」

ライダーシステムを扱うには、今の人類では力不足だと感じ取った。ダウンフォールの様に、力で誰かを屈服するのではなく。他者の言葉を聞き、お互いの気持ちを語り、尊重し、相手を理解する。

そんな簡単な事を、もつと大切しなければならぬ…のかもしれない。

「でも、晴夜や龍牙君、かずやん、幻冬君にはきつと必要だよ！」

「だってみんな、愛と平和を守るために戦ってるんだから！」

「ふっ。そうだな」

LOVE & PEACE。世界中の人達がそれを胸に生きていける世界を作る為。そんな世界へ導けるような存在になりたいと、晴夜は心に誓うのだった。



そして今回、大活躍をした和也はというと……

「どうだい」

「ど、どうも……」

セバスチャンに案内され、四葉邸へと招待されていた。

庭園に入ると使用人の多くが囲んでおり、これから何が起こるのかと思いながら、恐

る恐る前へと進む。

屋敷の前に着くとそこにはありすが立っており、その後ろには何故かありすの親もいた。

「ありす……なあ、これから何が?」

和也は一体何が始まるのかと尋ねる。

「はい。和也さん……いえ、和也!私と、結婚を前てバギャツ!

——ザ、ザザザ……

「……………いやはや、なかなか素晴らしいエピソードだったねエ」

とある無人島の砂浜沿い。そこには上着と水着を着たひとりの青年が、サマーベッドの上に寝転がりながら、画面部分が破壊されたブラウン管テレビにトランスチームガンの銃口を向けていた。

「しかし、この俺の遺伝子から作ったスマッシュを、ロゼッタちゃんに木っ端微塵にされるとはねエ……凍らせた事で細胞が壊死して、再生不可能になるなんて想定外だよオ……まあ、おかげで面白いものが見れたけどさア?」

そう言つて彼は、くくく、と口元に笑みを浮かべる。

「それにしても……フアントムリキッド。あれはホントに、予想以上に使える代物みたいだねエ。改良すれば……もつと面白くなりそうだ」

手の平を下にして、そこから黒い液体を滴らせながら、まるで玩具を与えられた子供の様に目を輝かせる。

「さーて、俺も温泉をたつぷり堪能したし、次のフェーズに進みますかア」

青年がトランスチームガンを懐にしまつて立ち上がり、軽く準備運動を行つてから海に向かつて歩き出す。

「もし会う時は、ちゃんと楽しませてよねエ？」

そして、そのまま海中へと入水していった。

無人島には、サマーベッドと破損したブラウン管テレビを残し、誰も居なくなつた。

Re・ドキドキ&サイエンス! After story

仮面ライダーマッドローグ&キュアダイヤモンド! 守りたい夢と笑顔 その1